

1人と1匹

takoyaki

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

仲は良くないけれど、諸々の事情で一緒に旅をする彼ら、1人と1匹の行く先をとてもとくご覧あれ!!

本作はテイルズオブエクシリアの二次創作です。一応原作重視で行くつもりです。

処女作で拙い文ですが読んでもらえると嬉しいです

※遂に百話を超えてしまいました。

時間がかかると思うので、計画的にお読みください m

※百話どころか二百話を超えました。

計画的にそして、体調と相談しながらお読み下さい m

（
）
m

（
）
m

目次

ホームズとヨル

犬も歩けば、猫も喋れば?!

二度ある事は三度ある(仮)

窮鼠猫をフルボッコ!!

逃げれば勝ち!

かわいい子には苦労をさせよ。

63

コーヒー口に苦し

猫の恨みは恐ろしい

働かざるもの喋るべからず

全ての道はホームズに通ず

傷口に塩水を塗る

146

130

108

93

77

43

30

12

1

いつかの敵は今日の友

親しくなくても礼儀あり

綺麗な石には虫がいる。

敵に石を送る

人猫の仲

出る杭折られる

旅は猫連れ、世は情け

情けは人の為になりません

柵から黒猫

ル・ロンドの日常

小噺 スキット

馬鹿も風邪を引く

勝って財布の緒を締めよ

337

321

312

290

270

258

249

236

219

199

179

165

一汁一災

354

出会い

ガールズトーク

目は口以上にものを言う

531

遭い縁奇縁

女の武器は涙じゃない。

544

考える爺

喧嘩する程仲が良い？

561

思い立ったが大吉

飲んだら飲まれる

572

旅の恥はお約束

嘘つきは馬鹿の始まり

586

嘘から出た魔物

笑う門出に福来たる

605

後悔役に立たず

恥の上書き

625

一期一会じゃ終わらない

闘技大会

635

女の顔は三度もない

喧嘩片成敗

656

立てば綽々、座れば牡丹、暴れる姿は赤

嵐の前の台風

677

い薔薇

やられたら倍返し

696

いつかの敵は、今日も敵

一寸先も分からない

696

人の一生は、ハンデを背負うて行くが

如し

719

腹を割いて話す

735

眠れる森の………？

750

出鼻を挫きまくる

768

泣きっ面に駄目押し

786

闘技場で捕まえて

804

人を呪えば、覚悟を決めろ

823

無理も道理も通らない

852

昨日の風は、昨日で終わり

873

一難去らずに、また一難

890

先の事を言えば猫が笑う

912

孝行したい時に限って、親がいない

929

覆水が盆に返るわけがない。

943

カン・バルク

心頭滅脚

963

売り言葉と買い言葉

976

風に流す

991

休憩中

ボーイズトーク

1007

遊びましょー

1028

仲良くなろう

1061

スキット

1090

ガイアス王

目上の者には、礼儀を尽くせ

1099

昨日の友は、今日の敵

情けも容赦もありやしない

乾棍一擲

怒髪天を衝きあげる

氷水を浴びる

飛んで雪に入る冬の虫

既死回生

刀抜いて逃げる

疑信暗鬼

負うた子に教える。

藍は青より青いかも？

三者三様の空模様＋１

ラ・シユガルへ

131713011288127212561233121511961181115011321115

天から下るこの気持ち

天は二物以上与える

開けてびつくり？

温故知人

いつかの敵といつもの友

カラハ・シャルルの誓い

縁は異なるもの通なもの

立つ鳥？跡を濁さず

ナハティガル王

足元から現れる

会うは面倒の始め

手のひらで踊り狂う

殴り込み？

1547151815001475

14581442142514091393137213551337

藪をつついて敵を出す

1563

馬鹿の尻拭い

1578

口は戦いの門

1590

王を射と欲すればまず馬から射よ

1604

幾本もの矢

1628

マナ降って地固まる

1657

一難去つてまた一問

1674

Gift!!

裁判!

1692

クルスニクの槍

一分一時間の思い

1715

身から出た結果

1727

塞翁が猫

1745

善のために急げ

1764

地獄の沙汰も運次第

1782

急がば落ち着け

1804

繰り返してはならない

1826

種明かしをしてはならない

1841

説明してはならない

1854

案中模索

1869

能ある鷹が爪を剥く

1884

女の一念岩をも貫く

1902

減らず口を叩きつける

1921

鎧が削れる

1946

マーロウの舞台から飛び降りる

槍でつついて蛇を出す

1998

パンドラの匣庭が開かれる

1998

逃がせば勝ち

2051

三十六計逃げるに限る

2062

撃つていいのは……？

2078

永く遠い別れ

2101

真実

知に動くと角が立つ

2116

口は災いの元凶

2135

信じぬものは、突き止める

2158

タフでなくては生きていけない。優し

くなくては生きている資格なんてない。

矛と盾

2182

天使は悪魔の顔をしてやってくる

2208

ピーチパイは砂糖と秘密と素敵な何か

で出来ている

2235

スキット

2247

とある夜の話

2253

作戦開始

酸っぱい葡萄

2265

命大事に

2282

馬鹿が騒げば誰かが疲れる

黒いものに蓋をする

2296

2311

小粒でもピリリと辛い

2323

晴れ時々クルスニクの槍。ところによ

りアルクノア

12336

寸陰を惜しめ!!

2351

桃栗三年策三分

2366

ジルニトラ

呉越同艦

2379

灯台下真つ暗

2394

蛙の子はやつぱり蛙

2415

報復絶倒

2440

逆鱗を踏む

2460

借りがモノを言う

2480

ヤバイものの蓋をとる

2497

踏んで躪る

急転特攻

終わりよければ?

全方塞がり

嵐の前の静寂

立つ鳥跡を残さず

晴天の霹靂

残された者たち

いっぱいのスूप

可愛さ余つて憎悪百倍

因果の応酬

心

アオイハナの村

2511

2549

2566

2577

2587

2602

2616

2629

2641

2661

其の拾参
 其の拾弐
 其の拾壹
 其の拾
 其の玖
 其の捌
 其の漆
 其の陸
 其の伍
 其の肆
 其の参
 其の弐
 其の壹

2897287928552834282328032786276027412732270926882675

其の終
 ホームズとヨル
 愚者の耳に念仏
 原価交換
 人と猫
 空中闊歩
 スキット
 再会
 名は猫を表す
 旅は道連れ余は情けない
 捨てる神あればパクる神あり
 船中覚悟
 何かが滴るいい男？

30583047303230173010

30042982296029522935

2913

男心と馬鹿の意地

そこに靈山があるから

千里の道も一歩ずつ

想い

鸚鵡返し

予言耳に逆らう

猫の手はいらない

女は度胸

蹴りをつけよう

雨が降ったその後に

マクスウエル

虎穴に入らずんば何も得ず

ペールが取れる

32543233

321431933164314931393126

311530953085

夜明け

泣きつ面に盾

口八丁劍八丁

無理を通して道理を蹴つ飛ばす

3310

入れ替わり太刀替わり

枕を固くして寝る

胡蝶の悪夢

エレンピオス

合縁血縁

艱難辛苦を踏み越えて

貯金箱

憎さ余つて愛しさ割増

3412340233883374

336033453322

329232813264

窮地の仲

整理整沌

罪と罪

地獄への道は善意で築かれる

無理なんだい？

門を叩く

疾走迅雷

女は度胸

みんなといっぴきはひとりのために

3545

朱に集まる赤色達

決戦前夜

盆に返る覆水

360135813559 35273514350134883472346134443427

サブイベント！

急いでは事を仕損ずる

住めば居場所

いつかの敵も今日の敵

きれいな花には気を付けろ

油断ダメ！ゼツタイ！

愉断大敵

お色直し？

踊れ！踊れ！踊れ！

舌先惨寸

人を呪ったらさようなら

日進月歩でGO！GO！

ネコを被る

378837723755374237263713369136793664364336213612

這えば立て立てば歩めば進めの親心

3800

始まりの日

3813

最終章

三度目の正直は狙うもの

3828

先のことを言えば猫が笑いころげる

3851

進むも地獄負けても地獄

3864

両友並び立ち

3888

能ある猫が爪を剥く

3903

詰みの……？

3924

1人と1匹

3940

猫も喋れば

3972

エピilogue

登場人物紹介&後書き

40013987

番外編！

おいしい？鍋パーティー！

4028

ぶらり湯けむり旅事情……？

4057

温泉でパニック！

4079

入れ替わり大騒動！！

1104

乙女達の疑問

1624

間が遠なりや契りが薄い？

1814

怪談

4225

ホームズとヨル

犬も歩けば、猫も喋れば?!

「ハイ、お茶代と茶菓子代全部で1200ガルド確かに頂きました」

そう言ってフード付きのポンチョを羽織った青年は金を薬箱の様なカバンの引き出しにしまった。垂れた碧い目が人の良さそうな印象を受ける。そして、茶髪の短髪にアホ毛が一本立っている様が幼げな印象を受ける。

「これからもご鼻屑のほど宜しくお願いします。ドロツセル様」

「もちろん。これからも宜しくね、ホームズさん。それとその黒猫ちゃんもね」

ドロツセルと言われた女性はホームズの肩の上に乗っている猫に向かって言った。言われた本人（本猫?）は大層不機嫌そうに尻尾をびしりとホームズの後頭部に当てていた。

ホームズ本人は少し猫の方を透き通るような碧い目で睨んでから、ドロツセルにお願いをする。

「あの……一応ヨルという名前があるので、そちらで呼んでやって下さい」

「あ、そうだったの。いつも、尻尾を振る程喜んでるから、気に入っているのかと思っ

たわ」

ドロツセルは心底驚いたように言った。そして、

「そうだわ！せつかく屋敷に来ていただいたのだから、お詫びも兼ねて、お茶でも飲みませんか？」

と、ホームズ達を誘う。ホームズとしてはせつかくだし、ご馳走になりたいところだ。しかし、ヨルの尻尾振りが、段々激しくなってきたので、断ることにした。

「すみません、尻尾が…じゃなかった、少し急ぎの用事があるので、また今度の機会にぜひ」

慎重に言葉を選びながら、断りのむねを伝え屋敷を逃げるように後にした。

◇◇◇◇

「つたく、少しは愛想良くしておくれよ。黒猫ちゃん」

「次その名前で呼んだら、鼻フックをして穴だか、皮だか分からんようにしてやろう」
そんな風にホームズの嫌味を低くくドスの聞かせた声で爪を光らせながら返した。

「こんな賑やかな広場でそんな物騒なこと言わないでおくれよ。楽しい気分が台無しじゃないか。非常識にもほどがあるよ。まったく…：友達なくすよ」

「こんな賑やかな広場で猫に話しかけている奴に非常識うんぬん言われたくないな、まったく…：友達いないのか」

「クリティカルヒットした今の。君、人を傷付けて楽しい?」

「つまらなかつたらやらない」

そう、お世辞にも仲良しとは言えない会話を繰り返しているこの場所は、カラハ・シャルルのなかでも賑やかな広場である。

ここカラハ・シャルルは、たくさんの商人が集まる。そして、たくさんの商人が集まるということは、たくさん、そして、様々な商品が集まるのである。

行商を生業としているホームズとしてはここいらで、商品を買っておいた方がいいのだが…

「人を傷付けて楽しんでるような奴はこうしてやる、こうしてやる!」

「イテテテ、痛えなオイ、ヒゲを引っ張るんじゃない!」

「ちようどいいお仕置きだよ。いいじゃないか、減るもんじゃないし」

「よーし、お前に引き算というものを教えてやろう」

「商人の俺にそんなものを教えようとはいいい度胸だね」

目下のところ自分を傷付けた、ヨルのヒゲを引っ張ることに忙しい。その光景は、はたから見たら、ただ猫をいじめている様にしか見えない。他の人々の自分を見る視線が

どんどん冷たくなっていることによろやく気付いたホームズはヒゲを引つ張ることをやめた。そして心底恨めしそうに

「猫つて得だな」

とつぶやいた。よろやく開放してもらえたヨルは苛立ったように言った。

「いいから、目ぼしい商品を探すぞ。その為に来たんだろうが」

「いや、届け物があったからだよ」

それに、とホームズは言葉が続けた。

「目ぼしい商品よりも先に、おれはエレンピオスの情報を探したいよ。母さん達の故郷のね」

左手に輝くピンク色の宝石がはめられた指輪を見ながら言った。

そんなホームズを見て、ヨルは先程引つ張られたヒゲを整えながら言った。

「本当にあるのかね、そんな国。2年間探しているけど全く見つからないじゃないか」

「君が知ってれば楽だったんだけどね……」

ホームズは呆れた様に言う。

「無茶を言うなよ。暴れるのに忙しくてそんなことを気にする暇さえなかったんだ。リーゼマクシアなんてのも、お前にあつてから知ったんだぜ」

「暴れるなんて、生易しいものじゃないだろう……」

はあ、とため息を吐く。そして、気を取り直す様に続けた。

「まあ、でも母さんがあると言ったのだから、多分あるよ」

「嘘を付いた可能性は？」

「ないね」

「何故？」

「でないと母さん父さん、そして、おれに靈力野がない理由に説明が付かない。もしこれがエレンピオスの特徴だとしたら……」

「説明が付くということか。なるほど、確かにリーゼマクシア人には見ない特徴だな」

「そういうこと。それに……母さんがつく嘘はもつとたちが悪いからね」

「……心当たりがあるな」

「でしょ」

一人と一匹はハア、とため息を付いて、昔のことを思い出していた。あのいまわしき日々を。その苦労の数々を。どの思い出もあまり、思い出したくないものばかりだ。

そして、ヨルはその思い出に蓋をするように言った。

「まあ、エレンピオスも気になるが、それよりも、なすべきことがあるだろう？」

「臭い物に蓋をする」

「何か言ったか？」

「別になにも。まあ、確かに一理あるね」

その言葉を最後に彼らは広場を周りながら、商品を探し始めることにした。ホームズとしては、エレンピオスという聞いたことはあっても見たことはない国を探したいのはやまやまであるが、先立つ物がなくては何も出来ない。何せ、そこに繋がりそうな手掛かりといえ、母から預かった、ジルニトラというエレンピオスの豪華客船の乗客の名簿しかないのだ。

しかも、たちの悪いことに、

「名簿に乗っている人達のほとんどが、アルクノアとか言う、わけの分からん組織にいるんだよね」

「基本的に、話を聞いてもらえず、襲われているしな」

「君に怯えている様にしか見えないけどね。誰だって、喋る猫を見たら怯えるよ」

結果、収穫ゼロだけでなく、戦いで傷付いたりして、むしろ、マイナスであることの方が多い。その為、治療費などがかさみ、常に金欠状態なのだ。その現状を打破する為にもやるしかないのである。そうこうしているうちに一つの商品が目にとまった。

それは、赤い紋様が不規則に浮き出たティーカップだった。

「どう思うヨル？イフリート紋様が浮き出たティーカップだった。結構良い値で売れそうだよ」

ホームズは、ヨルに小声で話しかける。

「言い値で買われちまうは、そんなパチモン」

「よく分かったね。パチモンだつて」

素直に賞賛するホームズ。しかし、ヨルは得意げになる事なく、面倒くさそうに尻尾を振っている。

「あんな、堅物がそんな模様の物を作る訳ないだろう。」

そんな会話を小声でしていると、その店の店主が不機嫌そうにホームズ達に言う

「買わないんだつたら、商売の邪魔だからどいてくれ」

「フン、詐欺の間違いだろう」

商人のあんまりな言い草にヨルは皮肉を込めて返した。ホームズは、バツカ、と言つてヒゲを引つ張り黙らせ、その場を逃げるように後にした。

「さつきから、逃げるように後にしてばかりいるような気がするんだけど」

「気のせいだな」

「気のせいというか、君のせいだと思ふのだけれども。」

「気のせいだな」

「そつかく、おれの気のせいかく……、なくんて、んな訳あるか!!」

遂にホームズがキレた。

「ノリツツコミか……。まあ、点数でいうなら、赤点レベルの残念クオリティだな」

対するヨルはいたって通常運転である。

「うるさいよ。しかも、点数で言って無いし」

「ノリツツコミとモノマネはよっほどクオリティ高くないと、つまらねーんだよな」

「もういいよ！いつまで、おれのツツコミに文句付けるつもりだよ！」

「だいたい、すべるノリツツコミの原因は自分で、面白いこと言っただと思っただよな」

「もういいつつてんだろー!!君は人を傷付けて楽しいかい?！」

「つまらなかったらやらない」

「さつきもやった、このやりとり」

ホームズは心底疲れたように、両手両膝を地面につけてボヤいた。そして、言葉を繋げた。

「君が喋るとロクなことがない。犬も歩けば、なんてことわざがあるんだから、猫も喋れば、なんてことわざも欲しいよ」

『『犬も歩けば』は別に悪い意味だけではないぞ。というより悪い意味で使っているやつをオレは余り見ないぞ。』

「そりゃあ、犬のほうが利口だからね。悪い意味だけでなく、いい意味だってあるさ」
「猫オレより、馬鹿な奴がなに言ってるやがる」

ぐつ、とホームズは言葉に詰まった。そう、ヨルは最後の一言こそいらなかったが、あの商品が偽物であることを見抜いて、そして喋って、教えたのだ。

「フン、理解したようだな」

「ドヤ顔で言うのもいいけどさ、どうするの。おれ、なにも商品を仕入れてないけど」

未遂とはいえ、喧嘩を売ったところに戻るのには、少し難しい。するとヨルは、後ろの掲示板を尻尾で指しながら言った。

「そんなものより、いいものがあるぞ。見ろ」

そこには、奇妙な絵で描かれた、男の手配書が一枚、女の手配書が一枚あった。

ホームズは不機嫌そうに手配書を見て、言った。

「なんだい、賞金稼ぎでもやれって言うのかい？」

「違う、名前をみて見ろ」

ホームズは、仕方なさそうに、手配書の名前を読んだ。女のほうは名前がなかったが、男のほうには書かれていた。

「えーと、なにに…、ジュード、『マティス』？それって、確か…」

ホームズは、ジルニトラの名簿を探した。そして見つけた。

「あつた…、デイラック・ギタ・『マティス』。ジルニトラに乗っている！」

偶然だろうか？ いや、それよりも…

「マティスの息子と考えたほうが自然だよね」

ヨルは金色の目を光らせ、真つ直ぐにホームズを見据えるて尋ねる。もちろん、尋ねるまでもないことだが。

「どうする、ホームズ」

「このジュードとかいう奴を手掛かりにデイラック・マティスに会いに行こう」

「どうやって？」

「まず、イル・ファンに行つてジュード・マティスの通つていた学校で実家の場所を聞き出す。犯罪者になつていくらいだから、誰か教えてくれるだろうさ」

「また、襲われるかもしれないぞ」

「他人事のように…誰のせいだと思つているんだい……」

「せいじゃない。おかげだろう？ 『猫も喋れば』というやつだ」

「いつも棒よりもたちの悪い物ばかり当ててるくせに、よくいうよ」

とはいえ、今回は価値のある物を当てた。おかげで、行き先がきまつた。

ホームズは碧い瞳で、手配書を見る。

場所は

夜光の王都イル・ファンだ。

二度ある事は三度ある（仮）

「グミは持った、ライフボトルもある。ついでに、さつき気まずいおもいをして、手に入れた商品もある」

ホームズは、口に出しながらカバンの中身を確認し、腰にある袋の中身をみた。
「船の金もある」

荷物の確認を終えると、安全靴の靴紐を左手首につけている、円盤状のもの物ともせずに結んでいく。結び終えると、カバンを背負い、気合いを入れるように言った。

「よし、準備万端！ いくぞ、イル・ファンへ」

「あいよ」

それを合図にヨルはぴよんと、ホームズの肩に飛び乗った。最後にホームズは、カラハ・シャルを向き、挨拶をした。

「いってきます」

こうして、彼らはカラハ・シャルを後にした。いつものように、逃げるようにはなく、前に進むように。



ただいま、サマンガン街道。カラハ・シャールを出た一人と一匹はてくてくと歩いてきた。まあ、一匹の方は歩くというより、乗るといふ感じだが。

空は透き通るように青く、太陽は真つ白に輝く。そんな爽やかな街道を…

「はあ…船旅なんて嫌だなあ、テンション上がんないなあ、下がるなあ」

うつとおしい文句を言いながらホームズは、歩いていった。

「何で海なんてあるんだろう、何で船なんてあるんだろう、何でイル・ファンなんてあるんだろう」

もう、本当にうつとおしい文句を垂れながら歩いていった。それを肩ですつと聞いているヨルは、たまったもんじやない。

「オイ…いい加減にしろよ。何の為に気合いを入れたんだよ」

「母さんの教えの一つ旅立ち編、『いつてきますと気合いをいれることを忘れるな。』だからね」

「だったら、その気合を最後までキープしろよ。ものの三分でテンション下がりがつて、ずつと聞いているこつちはいい迷惑だ」

「船酔いすることが分かっているのに、テンション上がるわけないだろう！君は船酔いし

ないから知らないだろうね、あの気持ち悪さ、そして、自分が苦しんでいるというのに周りの連中は『きゃあ、海だ！』とか言つてテンション上がっている時のあの腹立たしさ。何が『きゃあ、海だ』だよ。こつちとら膿みたいない気持ちの悪いもん口から出して苦しんでいるんだよ」

「後半ただの僻みじゃねーか」

「まあ、腹立たしいから、そういうテンションの奴らの前で吐いてるんだけど」

「最悪だな。毎度毎度どうして人前で吐いてるか不思議だったが、そういうことだったのか。氣い使つて離れたところでやれよ」

「俺と同じ苦しみを味わうがいい。具体的に言うともらいゲ○すればいい」

「ほんと最悪だな。たちの悪いことこの上ないぞ」

「君にだけは言われたくない！」

まあ、ホームズが船酔いで苦しんでいる時ヨルはというと、わざわざホームズの肩の上で飯を食べているのだからこいつも相当たちが悪い。

「はあー、ヤダなー、船でイル・ファンなんて、行きたくないなあ」

「だったら、道でばったりジュード・マティスに出会おうのを祈ることだな」

「そう世の中上手くいったら、苦労しないよ」

ホームズは肩を竦めながらいった。

ヨルは、ピクリと耳を動かして止まった。

「どうしたのき、突然黙って。金の落ちる音でも聞こえたかい？」

「黙って聞いてろ」

すると向かい側から話声が聞こえて来た。

「しっかし、まあ、よくあのタイミングでケムリダケを使おうと思ったね。たいしたもんだよ、優等生」

大柄な男がそういうと、優等生と呼ばれた少年は少し照れたように返した。

「僕も、ここまでに上手くいくとは思わなかったよ」

そして、少し表情を引き締めて、でも、と続けた。

「とりあえず、街に着くまでは油断出来ないね。まあ、街に着いても、安心出来るかといと、微妙だけど……」

この言葉を聞くと、うむ、とうなずき金髪の女性は言った。

「確かにその通りだ、ジュード。我々は追われる身、というやつだからな」

「ああ、うん。まあね……」

少し辛そうにジュードは返した。

ホームズは心底驚いた。なにせ、手掛かりの手掛かりが目の前にいるのだ。

そんなホームズの様子をたのしそうに眺めながら、ヨルは言った。

「なあ、どうやら苦労せずすみそうだぞ」

「本当に今回は君が喋るたびになにか起こるな」

その言葉に、ニヤリと顔を歪ませながら言った。

「だから言ってるだろう。『猫も喋れば』というやつだ。ついでに言えば、『二度あることは三度ある』というやつもある。今度もお前に幸福を届けてやろう」

「きやあ、かつこいい。せいぜい、期待せずにまつてるよ」

「ほらどうする？ 奴らが何処かへ行くの指くわえてみるつもりか？」

「馬鹿言え。すぐに話を聞きに行くよ」

そう言つて、ホームズは隠れていたところからヨルを連れて出て行つた。少し、昔のことを思い出しながら。

ホームズの母は、あつちこつちふらふらしている、行商人の割には成功していた。昔、その理由をホームズはきいたことがあつた。ちやうど、その様な大人の事情というのを理解し始め、そして、それに得意になつていく頃だ。簡単に言えば、背伸びしている生意気なガキ、というやつだ。ホームズとしては、努力とかそんな答えを予想していたのだが、返つて来た答えは少し違うものだった。

「上手く進み過ぎていないか、いい事ばかりおき過ぎていないか、そういうことに気を付けることだね」

その時ホームズは何でと聞いた。いい事ばかり続くならそれに越したことはないだろうと。そんなホームズに母は諭すように言った。

「いいかい、よくお聞き。努力しても上手くいくことのほうが少ないんだ。それなのに、いい事ばかり続くというのは不自然なんだ。……まあ、そうは言っても、努力して上手くいっている場合はいい。もっとたちの悪いのは、努力してないのに上手く行きすぎる、いい事ばかり続くことだよ」

その頃のホームズは疑問に思った。努力という苦しいことをしないで上手くいって、いい事ばかり続くのはどう考えても得じゃないか、何故それを悪いことのようにいうのだろう?と。母は、当然の疑問だね、と言って続けた。

「努力したって上手く行くことのほうが少ない。なのに、努力せずともいいことばかりが続く、上手くいく、これはとつても不自然なことなんだ。そして、不自然なことというのはいつか自然なことに負けてしまうんだよ」

そう言つて最後はホームズの頭を撫でた。

「上手く行きすぎる、ね……」

回想から戻ったホームズは呟いた。

「どうした？」

「ああ、そうか、この時は君腹壊していなかったね」

「どうでもいいことばかり覚えやがって、まったく。」

「まあ、まずは話しかけないと…、ちよつとそこのご一行」

突然話しかけられたジュード達はびっくりして止まった。黒髪でつり目の少年にホームズは言った。

「ジュード・マティスだよね」

全員に緊張が走る。皆各々の武器に手をかけた。

「おっと、待ってね。何も憲兵に突き出そうというわけじゃない。落ち着いて、冷静に」

「なら、何が目的だ」

金髪の女性は警戒しながら言った。

「いくつか、その少年に聞きたいことがあるんだ」

ホームズは、ジュードを指でさした。

すると、大柄な男は少し面白そうに笑って言った。

「おたくも、人の事『少年』なんていえないだろう？」

ホームズは少しムツとして、

「おれは、これでも18だよ。大人に見えないだろうけど、少なくとも、少年って歳でもない」

と言った。

ジュードはアルヴィン、とたしなめてから言葉が続けた。

「それで僕に聞きたいことって？」

ホームズは、ジュードに向き直ると言った。

「『デリラック・ギタ・マティス』と言うのは、君の父親かい？」

「そうだよ」

ビングだ。ホームズは内心大喜びだった。しかし、必要な情報はそれだけではない。今どこにいるか、それも、いや、それを聞かなくてはならない。ジュードに尋ねた。

「僕の実家のル・ロンドにいるよ」

「サンキュー」

そう言つてホームズは、右手をジュードに差し出した。ジュードは、一瞬分からなかったが、握手を求めていると気付くとそれに、こたえるように右手を出し、握手をした。

「今度は、僕の方から聞いていい？」

断わる理由もないので、ホームズはどうぞ言った。

「どうして、父さんのことを聞くの？」

「おれの両親の故郷について知ってほしいからだね」

「ふうーん。なんだか分からないけど頑張つて」

「おう、またね」

そう言つてホームズは港に向かおうとした。しかし、アルヴィンと呼ばれていた男に止められてしまう。

「おたくが憲兵に言わないなんて保障がどこにある？」

「信用してくれないかい？」

「ちよつと難しいな」

なら、とさらさらと紙に何か書いて渡した。

「シャルル家への紹介状だよ。おれの名前が書いてある。君達が、何をやらかして追われているかは知らないが、シャルル家なら話を聞いてくれると思うよ」

「なぜ？」

「今の王様に余り、いい感情を持ってないからね。見たこと全部話してみたら？」

それを隣で聞いたジュードは目を丸くさせて言った。

「知つてるの?!」

「いや、カマかけたただけなんだど……。どうやら当たりみたいだね」

「優等生、少しは気を付けようぜ」

「う、ごめん」

今度はアルヴェインにジュードがたしなめられてしまった。

「さて、これで満足かい？ならそろそろ行きたいんだけど……」

そう言っ行ってこうとした時、ぬいぐるみをもった髪の毛の長い女の子が話しかけてきた。

「あの……ねこ、さわっても、いい……ですか？」

「猫？ああ、こいつの事ね。いいよ。はい、どうぞ」

ホームズはヨルを女の子の前に降ろして言った。ヨルは少し不機嫌そうだったが、もともと、ヨルは可愛がられるのが好きではないのだ。

「あの……名前は？」

「ヨルだよ」

それを聞くと嬉しそうにヨルに話しかけた。

「えっ……と始めまして。エリーゼって言います」

微笑ましいいな、なんて思いながら、ヨルに対しては、ざまみろと思いながら眺めていた。

『僕はティポだよー。ヨロシクねー、ヨル君ー』

ぬいぐるみまで話しかけ始めた。

さすがにこれには驚いた。

滅多なことでは驚かないヨルでさえ驚いたようだ。驚くだけなら良かったのだが、

「うお、ぬいぐるみが喋った!!」

『ぎゃあ、猫が喋った!!』

喋っちゃいました。しつかりと。他の連中も驚いたようだった。

一番最初に口を開いたのは、ジュードだった。

「えっ…と、それ魔物?」

すると心外だとばかりに、ヨルは答えた。

「失礼な奴だな。どちらかというと、俺は精霊に近い」

「…精霊…:…なん…:…ですか」

「あくまで、近いってただけだ。精霊ではない。まあ、そうは言ってもお前ら人間よりは

ずっと有能だ、敬意を払えよ。」

『なんか、偉そう〜。可愛くなく〜い』

「お前にだけは言われたくない」

そんな会話をしていた時だった、

金髪の女性が、

ヨルに対して、剣を振るったのは。

一瞬のことだったので周りの連中は誰も対応できなかった。

唯一ヨルだけは反応し、すぐさま、ホームズの肩に避難し、そして、金髪の女性に言った。

「オイオイ、俺は敬意を払えと言ったんだ。剣を振るえと言った覚えはないぞ」

「ふざけた事を言うな、シャドウもどき」

その言葉にヨルは怒りをあらわにした。

「オイ、その名で呼ぶな女、切り裂かれないのか」

ようやく我に返ったジュードは尋ねた。

「ミラ、どうしたの?!」

「武器を取れジュード、アルヴェインとエリーゼもだ」

そう言って剣を向けて言った。

「こいつは昔、闇の大精霊シャドウと同等の力を持って生まれ、そして、リーゼマクシア人の霊力野からマナを搾り取っていった、化物と言われる奴だ」

ジュードは目を見開きながらヨルを見た。信じられないのだ。目の前にいる、どこにでもいる様な黒猫がそんなこととしていたなんて。

「たくさんの人間達が衰弱し、そして、死んでいった」

「何で、そんなことを……」

ミラの話聞いていた、ジュードはヨルに尋ねた。

ヨルは当然の様に、馬鹿にする様に言った

「エサを食うのに遠慮するやつがどこにいる？」

息を飲んだ。この、人を人として見ていない、しかもそれが、さも当たり前の様に答えるところに皆が寒気を覚えた。まあ、ホームズはそんな事、とつくに知っているのが驚かないが。

「だから、封印したんだマクスウエル率いる大精霊達で。もうそんなことが起きない様に。なのに、なのに、何故ここにいる！」

「封印を解いたからだよ。そのたれ目の男がな」

そう言ってヨルは、尻尾でホームズを指し示した。

皆の注目が集まってしまい、バツが悪そうに頭をかきながらいった。

「えっ……と、まあそいつの言う通りです」

「私達は制約をつけてまで封印をしたのだが、それがアダとなったようだな」

「どういふことだ」

今度はアルヴェインが口を挟んだ。

「制限をつけてある一定条件下で最強と言える封印を施したのだ」

「どんな条件だったの？」

「簡単なことだ、ジユード。要石というものがあつたのだが、そこに触れた人間の願いを叶え、そして、その代価として、その人間の霊力野からマナを奪い続けるといふものだ。もし、願いを叶えられなければ、封印は解けないし、そもそも人が来ないと解けない。そして、人が近づかないように細工を色々したのだ」

嘲るように、ヨルは

「全部、徒労に終わったってことだ。ざまあみろ」

とミラ達に言った。

ジユードはこめかみに、指を当てながらヨルに言った。

「一体、いつから取り憑いていたの？そして、どれだけマナを奪いとつたの？」

「こいつがガキの頃から。マナは、いまましい事にこいつに騙されたせいで、手に入れられてない」

「騙すなんて人間きの悪い…。おれは嘘は言っていないだろう？」

ホームズに霊力野はない。厳密に言えば、マナが作り出せないだけなのだが…。

マクスウェル達が掛けた制限のせいで、ヨルは取り憑いた人間に対しては霊力野から

しか、マナは、奪い取れない。けれども、ホームズはその靈力野は退化している。だから、ホームズは無事だったのだ。

「どうやって、騙したの？」

ジュードは聞いた。

「だから、騙したんじゃないって。ただ、本当の事を言わなかったら、こいつが勝手に勘違いしただけだって」

「本当の事って何？」

「それは、内緒。」

ホームズは人差し指を口元に持って来て言った。

「男は、秘密があつた方が魅力的だからね」

ジュードからも女性陣からも冷たい目でみられた。

そんな中ホームズは涙を我慢して考える。おかしな所はない。ヨルから聞いていた事とまったく同じだった。

だからこそ、疑問に思つた。何故知っているんだ？

ヨルは言っていた。自分は秘密の存在だと。

ホームズの疑問にミラは、答えた。

「私がマクスウェル、ミラ・マクスウェルだからだ」

そして、と続ける、いや、宣言する。

「人と精霊にあだなすものを破壊する。シャドウもどき！ 貴様は私が破壊する」

その凜とした様を見ていたジュード達は、武器を構えてミラの隣に並び立った。

「僕も手伝うよ。その為についてきたんだ」

「ま、俺は雇われの身だからな。雇い主の意向には従うさ」

「人を……エサとしか見てないあなたを許しません」

『くたばれー！ コノヤロウ！』

その様子をホームズは眺めていた。

「自分で蒔いた種だ、自分ですぐにかしなよ」

「随分と釣れない事をいうじゃないか。そんなお前にいい事を教えてやろう」

「何を？」

「お前が殺されると俺は死ぬ。だから、戦いの時は手を貸してきた」

「そうだね、そう言ってたね」

ヨルは、ニヤリと笑い、続けた。

「逆もあると思わないか？」

一瞬、ホームズの思考が止まった。本当にそうだとしたら、ヨルが殺されるとホームズも死ぬことになる。しかし、仮に嘘だったとしても、それを確かめる術がホームズにはないのである。とはいえ、先程ミラの言っていたことを考えると、あながち嘘ではなさそうだ。制限をつけたと言った。それがあるということは、どちらかにだけ都合のいい話というものがあるということとはあり得ないのだ。つまり、ヨルに施された封印はギブアンドテイクが必要なものと考えれば納得がいく。

「…あり得るね」

ホームズの参戦も決まった。

邪魔にならない様カバンを地面におき、彼らの方に向き直った。

「やはり、来るか…」

ミラは言った。

「そりや…ね。おれだつて死にたくないし」

はあ、とため息をついてヨルの方を向いた。

「何が、二度あることは三度あるだよ…三度目がこれじゃ世話ないわ、まったく」

こうして、不本意ながらヨルだけでなく、ホームズの戦いの火蓋も切つて落とされたのだ。

不自然なことが自然なことに負けるとどうなるの？

「不自然に続いてきたいことや、うまい事が終わっちゃうんだよ」

それだけ？

「いいや、手痛いしっぺ返しがかかるんだよ。だから君も、気を付けな」

（しっぺ程度で、済めばいいけどなあ……）

窮鼠猫をフルボッコ!!

「さてさて、どうするか」

相手は4人。マクスウエルに、雇われたと言っているから、護衛あるいは最悪の場合、傭兵なんて事もあるかもしれない男が一人。戦う事に気後れしてない、少女が一人。何らかの武術の構えをする少年が一人。

対するこちらは、商人一人と昔の武勇伝だけがいかつい猫が一匹。

過去に悪行の限りを尽くした化物と言っても、封印のせいで基本的なスペックは猫と変わらない。

ホームズも別に弱いつもりはないが、相手が強すぎる。マクスウエルに、どうやって勝てと言うのだ。

………やっぱ逃げよう。

考えをまとめるのに1分とかからなかった。

先程置いたカバンを取りに行こう とした瞬間、

弾丸が雨の様にホームズに、降り注いだ。

「うお!!」

何とか、左手の円盤状の盾で防ぎながら、弾丸の雨の中から脱出した。

「なるほど。本当に、優等生の言ったとおりだったな」

「ま、僕らに戦う理由があっても、彼等にはないからね。あの人は『死にたくない』と言っていた。だったら、その手段は戦う以外にもあるって考えるほうが自然でしょっ!!」

アルヴィンに応えながら、ジュードはホームズになぐりかかってきた。盾で受け、ホームズは後ろに下がって間合いを取る。

「何が、猫も喋ればだ。棒は棒でも金棒じゃねーか」

しかし、ジュードは直ぐに間合いを詰めると三散華を打ち込んできた。対するホームズも蹴りで拳をいなす。

「過ぎた事をぐちぐち言っても仕方ないだろう。死にたくなかったら気合い入れろ、ホームズ」

「言われなくても……。ほら、お返しだよ」

ホームズは構え直すと連続で蹴りを放った。

「食らいな、三散華アー！」

ジュードは三発の蹴りを受け止めると、攻撃を仕掛けた。

「まだまだあるよ」

そう言ってホームズはそれを向かい撃った。

「三散華・追連!!」

先程と同じように、三発蹴ってそれから、軸足を入れ替えて、四発目を……

「バインドー!」

ミラに捕まってしまう蹴れなかった。

「くそ、共鳴か!」

「ジュード!大丈夫か!」

「何とかね……エリーゼ!!お願い!」

『……ウネウネ』

詠唱はもう後半に来ていた。ジュードは自分を囿にして、その時間稼ぎをしていたのだ。対するホームズは動けない。

「おい、ヨル!」

「言われなくても……」

ホームズの呼びかけにそう、一言応えると肩からぴよんと跳んだ。

『「ネガティブゲイト」』

エリーゼとティポの詠唱がはもり、精霊術が発動した。

誰もが、決まったと思った。

しかし、ミラだけは違った。脳裏によみがえるのは、あの時、ヨルを封じる戦い。

「まずい!!」

ミラは走った。しかし、間に合わない。

精霊術が発動したその時、ヨルの姿が変化した。

「うお! なんじやありや!」

「……!!」

「なんか……」

『怖いよ』

「遅かったか……」

巨大な黒猫の生首に。そして、

「え?!」

「な?!」

「嘘……」

『でしよ?!』

「しまった」

精霊術を……食べた。

「ふうく。ごちそうさま。おかげで、全開時の3%はだせそうだ」

ヨルは元の黒猫の姿に戻ると、ホームズの肩に乗り顔を洗いながら言った。

「ごちそうさま…て。一体…なにをしたの☒」

ジュードは誰もが思う当然の疑問を聞いた。

「見ての通り、精霊術を食べたんだよ」

ヨルは当然の様に応えた。

『嘘つけく。そんな話聞いた事ないぞく！』

テイポは盛んに叫んだ。

「奴は精霊術を食べ、そして、それを自分のエネルギーにする」

ミラは静かに説明する。

「おいおい、そんなこと本当に可能なのかよ、優等生」

アルヴィンはジュードに聞いた。

「普通は、いや、普通でも出来るかどうか…。というより僕はそんな話聞いたこともないよ！それにどうやってるかも分からない」

自分の周囲の反応を馬鹿にする様にヨルは言った。

「ククク、何いつているんだ、お前ら。オレはバケモノだぞ。お前ら人間共の理屈常識が通じるわけないだろ」

口をあけ、白い牙を見せながら言う。

「化け物ってのはそういうもんだ」

そう言ってジュード達を睨む目は、まごうことなき、化け物の目だった。

これはチャンスだ。ジュード達は突然のことで固まっている。そう考えると、逃げようとした。しかし、

「アサルトダンス!!」

ジュード達が固まっているなか、ミラは、一気に手数が多いわざでホームズに切りかかって来た。

ホームズは突然の事でよけきれず、何発かくらってしまった。

「ぐ、痛え」

切れてしまった肩を抑え呟いた。

そんな、ホームズに剣を向けミラは言った。

「だが、私は、いや、私達はそんな化物を倒して見せる。覚悟しろ!!」

その瞬間、皆の瞳から戸惑いの色が消えた。逆に覚悟の色が現れた。

そんな中ホームズは疑問そうに聞いた。

「化物って俺も?」

「当然だ」

ミラはホームズに切りかかって行った。

「あんな化物を騙し、平気で扱っているやつを化物と呼ばずになんと呼ぶ！」

先程の傷が響いているらしく、動きのキレが悪い。

「ホームズと呼んでおくれよ。仲良くしようぜ」

しかしニヤリと不敵に笑い、盾で受けた剣を押し返すと、回し蹴りを叩き込んだ

「回るぜ！ 輪敦旋風！」

「ぐっ」

ミラは思いつきり吹っ飛んだ。

「ミラ?!」

ジュードはすぐにレストアでミラを回復させた。

距離を取ると、ヨルが話かけてきた。

「おい、ホームズ」

「なんだい？ 演説を無視されたことに文句があるの？」

アホ、と一言返すとヨルは続けた。

「あいつ……今、四大精霊がいらないんじゃないのか？」

「どうして？ マクスウェルはそいつらを従えてるもんじゃないの？」

「オレが知るか。ただ、四大精霊達を使えばいいようなどころでやつはまったく使って

「いない」

「手加減してるんじゃないの?」

「化物共に手加減しないだろ」

「ああ、そいや俺も化物なんだっけ……涙が出そうだ」

「女に嫌われるなんていつもの事だろう」

「うるさいな……ぐすん、分かっているよ。勝てるかもしれないと、断言出来ないにしても、チャンスだつてことだろう……ひっく」

「そうだが……、泣くな気持ち悪い」

「泣いてないもん!ただ、あくびしただけだし。昨日寝不足だったからさ。目がうるんでいるとしたらきつとそのせいだよ。ああ、眠いな……ぐすん」

「だったら、永遠にお寝んねさせてやるよ!ジュード!」

「分かった!アルヴィン!」

その掛け声と共にアルヴィンは大剣でジュードを高々と打ち上げた。そして、

「飛天翔星駆!!」

天高くから飛び蹴りをかました。

「うつ、オエ、ゲッゲ」

タイミング合わせて後ろに下がり衝撃を半減したのだが、

「それで、この威力かよ。大したもんだよ、共鳴術技。朝飯全部でちやたよ」
ホームズはふらふらと立ち上がる。そこへ、

「合わせろよ、姫様」

アルヴィンとエリーゼがたたみかける。

「ピコ破斬!!」

でかいピコピコハンマーが、アルヴィンの大剣に刺さり、それで、ホームズをタコ殴りにした。

最初の一発はかわせたが、後は全部食らった。ヨルも一発もらってしまい、吹っ飛んだ。

ホームズはどうかこうにか立っているという感じだ。

そんなホームズにアルヴィンは剣を構える。そして、

「とどめだ、瞬迅剣!」

アルヴィンはホームズに向かって大剣を向け一直線に突き刺しに来た。

「ホームズ!」

ヨルも、先程の一発が効いている為、叫ぶのが精一杯だ。いや、正直叫ぶのもきつい。けれども、ホームズはなんの反応もせず、ただ立っている。

そうこうしてるうちにアルヴィンが近づいてくる、

ヨルはもう一度叫んだ。

「しつかりしろ！ホームズ！」

けれども、やはり、反応は無い。

もう、大剣は目前だった。

「おい、いい加減にしろホームズ！お前ここで死んだら、お前の母親にどんな説教くらうと思っただい！」

次の瞬間、ホームズはふらふらとしていた足をは踏ん張り、大剣をいなし、そして右外側に移動した。

流れるように移動すると、最後は右手でアルヴィンの顔を掴み、

思いつきり地面に叩きつけた。

「想像したくないな、そんな恐ろしい事」

ホームズはそう呟いて伸びているアルヴィンを見た。

すると、ヨルがやってきた。

「危なかったな」

「まあね。危うく母さんに叱られるところだった」

それよりも、と続ける。

「君、回復したの？」

「さつき、手に入れたmanaでな」

ヨルはそう言つてホームズの肩に跳び乗ろうとした。

しかし……

「なら、私からもくれてやろう……『フレアボム』！」

ヨルは空中でミラの魔技を食らつて吹っ飛んだ。

「なるほど。詠唱なしの魔技なら食う準備をされない。ジュードの言った通りだ」

「ヨル!!」

ゴロゴロと地面を転がっているヨルを見てホームズが駆け寄つた。

「人、いや、猫の心配をしている場合ではあるまい」

言われてホームズはふりかえつてエリーゼ達を見た。

「降り注げ」『元気のもと』

「あの詠唱、少し変だけどもさか……」

『「ピクシーサークル」』

エリーゼが杖を振り上げた。

すると、後ろでアルヴィンに暖かな光が円陣のなかに降り注いだ。すると、アルヴィンは目を覚まし、立ち上がった。

「お姫様に起こしてもらえとは光荣だね〜」

ウィンクしながらそう言った

「ア……アルヴィン!!」

『そんなこと言ってるからやられちゃうんだ〜!』

エリーゼが少し照れながらそういうと、ティポが引き継ぐように言った。

「嘘だろ……あの子、回復術も使えるのかい?」

しかし、驚いている場合はなかった。

「魔神拳!」

ジュードが魔神拳を放って来た。

「ゲツ、マジ?!」

ホームズは先程のダメージが残っている為、もろに食らってしまい、また吹っ飛んでしまった。まあ、その拍子に、木陰にヨルを連れて隠れたので結果オーライである。

「くそ、一体何回人を吹っ飛ばせば気が済むんだ、あいつらは……」

どうしようとホームズは思った。ヨルの精霊術を食った所を見たばかりの時のあの心の折れかけた彼等になら、どうにかなった。

しかし、今は違うミラの言葉で皆そこから立ち直り怒濤の勢いで攻撃してきた。

おかげで、こちらはホームズもヨルも満身創痍。

元々優勢だったとは言いづらのにさらに悪化した感じだ。

つまり一言でいうなら

「絶対絶命、というやつだね。どうしたもんか……」

逃げれば勝ち!

『絶対絶命になったら、どうするかって?どうしたんだい突然』

我ながら随分ぶつ飛んだ質問だったと今のホームズなら思えるが当時は、いたって真面目な理由があったのだ。

『あのね、さつききた、おきやくさんのおおきな子どもがね、いっぱいふりようにかこまれて、ぜったいぜつめいだったけど、ぜんぶぶつとばして、ききゆうをだしたんだって。ぼくはどうすればいいかな?』

なるほど、と母は思った。気球をだした、というのは窮地を脱したという事だろう。そして、おおきな子どもというのは思春期真っ盛りの俺強いんだぜアピールをしている痛い奴のことだろう。自分にもそういう経験があるから、それが悪いとは言わないが、自分の子供に変な事を吹き込まないで欲しいな。

じゃなくて、と考えを戻す。確かに、行商人の母として(?!)、ホームズにはいくつか武術を教えたが、まだまだ全然物にできていない。本人もそれが分かっているため、もし自分がそうならどうしようと聞いたのだろう。

『そうだね…まずは、逃げることを考えてご覧。』

『にげること?』

『絶対絶命というものは文字通り、命が絶たれそうなんだ。そんな危険な状況に立ち向かっても得るもなんて何も無いよ』

『にげられるの?』

『難しいよ。何せ、命が掛かっているんだ。そんなところから逃げるには自分の力と運がすごく関わってくるよ』

『どうすればいいの?』

『まずは、自分の今の状況をしっかりと確かめること。』

それと、絶対絶命の状況をしっかりと観察すること』

ホームズは、ん?と首を傾げた。

『さっきの話を例にするなら、不良は何人いるか、ぶきは持っているかとかね。分かった?』

うん、とホームズは頷いた。

『最後は逃走条件を確認すること。ホームズの場合だったら、私のところまで逃げてくるとかね』

わかった、あんしんした、とホームズはニッコリと笑い言った。

それを聞いた母はよし、いい子だとホームズを高い高いした。そろそろ体重的にキツ

イのだが、それでもやった。

そして、ホームズを降ろすと最後にこう言った。

『ただね、得るものなんてなくても、絶対絶命というものに、立ち向かわなきゃならない時というのが人生にはあるんだよ。その時君がどんな手段をとるかとは分からないけど、後悔のしない手段をとりたまえ』

◇◇◇◇

「自分の状況は…最悪だな。ヨルも俺もボロボロだ。おまけに回復アイテムの入ったカバンは、港と反対方向にある」

ホームズは小声でブツブツと喋りながら、ポツンとあるカバンを眺める。

「次は、敵の観察か…。人数は四人。それと、訳の分からんぬいぐるみが一。武器は五個つてところだね。ぬいぐるみと籠手をどう数えるか、悩むところだけど籠手は一組で一個、ぬいぐるみは数えないというところでもいいかな」

後は、と続ける。

「精霊術だな。はつきりと使えると断言出来るのはエリーゼ、そしてミラ。というより、ミラはエリーゼより厄介だね。魔技で確実にヨルを仕留めてくるし、どうしたもんか

…

ホームズは相手の戦力を冷静に分析していた。エリーゼに関して言えば、正直回復術ぐらいしか、怖いものはない。しかし、それもヨルが居ての話である。ヨルを魔技で戦闘不能にされてしまえば、今度はエリーゼの精霊術の餌食となってしまう。

結局、ミラが最大の壁なのだ。そんな事を考えていると、不意に声がした。

「誰が誰を仕留めるって」

「おわあ！びっくりした起きてたの？」

ヨルは不機嫌そうに言った。

「んだけ、独り言言ってるや目も覚める。ここはどこだ？」

「木の影。まだ彼らには見つかっていないけど、それも時間の問題だね」

そう言いながらホームズはジュード達の方を見る。彼らが何処かに行く気配はなさそうだ。

「それで、お前は何をしている」

「状況の確認。絶対絶命の時にはこれをしろって母さんが。君に出会う一年くらい前かな、その時に教えてもらったんだよ」

「フーン、後残っている確認事項は？」

「精霊術の使える人数、そして、目指すべき場所。」

「それで?」

「とりあえず、精霊術が絶対に使えるのは、エリーゼ、ミラ。」

「後の二人は?」

「ジュードは推測するしかないけど、使えない。或いは、使ってもエリーゼやミラほどじゃない。もし、戦力になるほど使えたら、あの時に困役なんてする必要がない。」

「もう一人の方は?」

ヨルは大柄な男、アルヴィンに目を向ける。

「アルヴィンね。あの人はたぶん、エレンピオス人じゃないかな。あの人の使っている銃、あれは母さんが昔持っていた物と一緒にだ」

「俺は使っているところ見たことないぞ」

「なんか、弾が切れてそれつきりだったらしいよ。こけおどしにはなるから、て持ち歩いてたんだって。」

「なるほど、相手の戦力はこれで全部か。目指すべき場所は?」

それを聞くと、ホームズはサマンガン街道の脇道を指差す。

「出来れば港。最悪検問やっている憲兵の所まで行く。」

「そこまで逃げれば追って来ないでしょ」

「追ってきたら?」

「運が悪かったということだね」

最後の問いに肩を竦めて、ホームズは言った。

「よし……！」

状況は整理できた。後は、行動するだけだ！

ミラ達は、エリーゼを守りながら辺りを探していた。

ホームズは、エリーゼが回復術が使えることに気付いた。おそらく、潰しにかかるだろう。

だから、逆にそこを狙う。誰が狙われるか、分かっているなら、いくらでも策の立てようがあるのだ。

ジュードとしては少しこの作戦に抵抗があつた。何しろこれはエリーゼを囮にするような物だ。

しかしエリーゼも頑張ると言ってくれた。この健気な心意気は無駄にする訳にはいかない。

そう決意を新たに、辺りを探していると、いた。

ヨルはを肩に乗せ、そして、

エリーゼに向かって一直線に走ってきた。

「ミラー！」

「了解だ。ジュード！『フレアボム』！」

ミラーはホームズ達に向かってフレアボムを放った。

しかし、手応えがない。

「こつちだ……」

ホームズ達はしやがんでいた。そして、

「転泡……」

下段回し蹴りをミラーの足に放った。

ホームズの要求通りに、ミラーは転んだ。

そして、ホームズは、転んでいるミラーの足を片手で持つと、そのまま、

反対側において、銃を構えているアルヴィンに向かって振り回すように投げた。

「どつ……、せいや!!」

妙なかけ声とともに。

「えっ、ちよっ、ミラー様？待って待って待って……」

待つわけがない。

「うごばあ!!」

アルヴィンの必死の説得も虚しく、無惨にもミラの体当たりを食らいひっくり返った。なんとか二人は体制を立て直すところある事に気付く。

「あれ? ミラ様剣は?」

「ないな、何処だ?」

「(っ)だ」

声のした方を見ると、ヨルがミラの剣をくわえていた。

「お前、いつの間に……」

ミラの問いにヨルは苦々しい顔をした。

「あの、阿保と一緒に投げられたんだよ。……全く、離れられる距離だったからいい様な物を……いや、やっぱ、投げ飛ばした事はよくないな」

そう、実はホームズはミラを片手に持ち、もう片方の手にはヨルを持っていたのだ。ヨルはその事を思い出し、一人で納得するとミラ達をその金色の目で見据えた。

「悪いが返す気はないぞ」

そして、一言そう言うとそのまま剣を噛み砕いた。

「!!」

「ハン、何を驚いている？オレは化け物だぞ。お前らの常識なんて、5秒もあれば超えてみせるさ」

その常識を超えるのに使ったのは、自分の力ではなく先程食ったエリーゼの精霊術のManaである。

「悪いけどこれは没収だよ」

「あ……」

『返せ〜!』

エリーゼ達の文句なんてどこ吹く風。

ミラの投げ飛ばしに呆然としている隙について、ホームズは杖を没収すると、両手でへし折った。これで、精霊術の威力、回復力は格段に落ちるはずだ。

こうして、エリーゼの戦力を削る事ができた。

そして、後は

「You can fly!!」

「きゃあああ!」

『うぎゃあああ、助けてジュード君!!』

ティポとエリーゼをジュードに向かって投げ飛ばした。

「うああああ！」

なんとか、エリーゼ達を受け止める事はできたが、ジュードはそのままひっくり返った。

「後よろしく！」

そのままホームズは、アルヴィン達の方に走っていった。

「どうだい？調子は？」

「あの女の剣は噛み砕いた。そっちは？」

「女の子の杖折って投げ飛ばしておいた」

「それだけか？」

「文句ある？」

「甘いな。俺なら首の骨も一緒に折るぞ」

「鬼畜だね。さすが、化け物」

「お前もな」

彼等は合流すると、現状を報告した。

「後は、その男だけか」

ヨルはアルヴィンを見据える。対するアルヴィンも油断なく構える。

「そゆこと♪テンションアゲアゲで行きましょう」

ホームズもおちゃらけてはいるが目は真剣だ。アルヴィンの一挙一動を見逃すまいとしている。

「リベンジマッチだぜ、アルヴィン」

「覚悟しな」

アルヴィンに向かって宣言すると、ホームズはヨルを肩に乗せ、飛び上がった。そして、その高さから、かかと落としをかました。

「砕けろ、爆砕陣！」

アルヴィンは、ガードして直撃は避けた。

しかし、ホームズの攻撃はまだ続いた。爆砕陣を放った、かかと落としの足を構え直す。膝を高く上げ、

「守護方陣！」

ダン、と思いつき踏み込んで青白く輝く光の円陣をだした。

「グツ！」

流石にこの連続攻撃は防げず、守護方陣の餌食となつてしまい随分とダメージを受けてしまった。

対するホームズ達は少しばかり回復した。

「ふう、やれやれ。やっと使えるチャンスがきたよ。良かった、良かった」
さて、とホームズはヨルに言う。

「力貸しな、ヨル」

「たいしてないぞ。文句は言うなよ」

そう言うと、ヨルは黒い球状の物を吐きだした。

それはホームズの右足に当たると弾けて、黒い煙の様な、影の様な、よくわからない物が右足にまとわりついた。

「結果次第だね」

ホームズはアルヴェインに回し蹴りを放った。当然アルヴェインは大剣で防いだ。

しかし、その大剣はホームズの回し蹴りが当たると粉々に砕け散った。すると、黒い煙は消えてしまった。

「上出来！」

その後すぐに軸足を入れ替え、左足で銃を遥か遠くに蹴り飛ばした。

「よし、今のうち」

ホームズは急いで港の方向に逃げた。

この時ホームズは、二つのミスを犯していた。

ひとつは、ジュードの武器を壊していなかったこと。

もう一つは、

ミラにとって剣が折れたことに対する意味がないと言うことを知らなかったことだ。

「フレアボム！」

「三散華！」

ホームズは、炎と拳、全てを食らってしまい、ゴロゴロと転がった。

「油断したな、くそ」

よろけながら立ち上がるとそう呟いた。先程回復したダメージが元に戻ってまった。しかし、そうは言ってもミラの威力は先程よりも落ちている。これなら、たいして怖くない。

そんなこと本人が一番分かっているだろうに、なのに彼女はホームズに技を放ったのだ。

そして、凜として立っている。その隣のジュードもそれに応える様に、追いつく様に立っている。

「つくづく、恐ろしい連中だね」

でも、とホームズは続ける。

「こつちも命がかかっているんだ。通らせてもらおうよ！」

言うが早いか、ジュードに向かって駆け出した。

そして、その勢いで蹴りをかました。

しかし、ジュードはそれをバックステップでかわすとホームズの目の前から姿を消した。

「後ろだ！」

ジュードの居所をいち早く察知したヨルは叫んだ。

しかし、ホームズは予想していたかの様に両手を地面につけると、逆立ちをする要領でジュードの攻撃を両足で蹴り上げ防いだ。

そして、その状態で両足を広げポンチョが広がるほどの勢いのついた回し蹴りを叩き込んだ。

「グッ！」

蹴りが当たりジュードが怯んだ。それと同時に疑問が浮かんだ。

なんで殴らないんだ、と。

そう、こんな動きをして防ぐくらいなら、裏拳をすればいいのだ。

三散華という技だって、本来は殴ってやる物だ。

別に手を使っていないというわけではない。しかし、一回も殴っていないのだ。なぜ?

そんなことを考えているうちにホームズはポンチョをひるがえし、体制を戻した。

そして、何度も戦ってやわらかくなった地面を蹴り上げ、土を撒き散らした。

!!!

流れる様な動作でやられたので、ジュードもミラも反応できなかつた。辺りは一面土煙に包まれた。

そして、土煙が晴れると、

そこには誰もいなかった。

ジュード達は、まんまと彼等を逃がしてしまったのだ。



「ふう〜やれやれ。ひどいめにあつた」

こちら、ルロンド行き船の上。甲板の上でホームズは呟いた。所々に見え隠れしている包帯がすこし痛々しい。

かもめたちは飛び、海風が吹く。さつきまでの荒んだ戦いが嘘の様に穏やかな時間かながれている。

「よう、元氣そうだな」

ヨルが、尻尾を揺らしながら甲板にやってきた。

「今まで、どこにいたのさ?」

「近くの暗いところで寝てた」

「ああ、そうか。君はそれで多少回復できるんだっけ」

「お前は?」

ん、と包帯を見せながら言った。

「一応、処置はしたって。ただ、念のためルロンドについたら、ちゃんと診てもらえつ

てや」

「ま、妥当だな」

ヨルはホームズの肩に乗った。そして続けた。

「今回、お前はあのぬいぐるみを持ったガキに手加減したな、何故だ」

「別におれたちが逃げるのに、回復術を使われようが使われまいが、関係ないだろう」
表情を変えずにホームズは返す。

「そうじゃない。俺が精霊術を食った時の事だ。あのガキは精霊術を食う俺がいる時点で雑魚になった」

「だから、なんだと言うんだい？」

相変わらず表情を変えない。

「相手の方が人数が多い時、最初に頭数減らす為に、雑魚から叩くのは常套手段だ。別にこれは戦いに限った事じゃない、逃走においても言える事だ。なぜ、それをやらなかった。お前の母親も同じことを言ってたはずだ」

「そのせいでアルヴィンが復活したと言うのかい？おれ、結果論で話しするの嫌いなんだよね」

「やれやれ、と首ホームズはふりながら言った。しかし、ヨルはそんなホームズに構わず、ぴよんと肩から飛び降り、彼に向き直った。」

「何故手加減した。今回の苦戦の理由は間違いない、それが原因だ」
ヨルは真つ直ぐにホームズを見ていた。

それを正面から見ていたホームズは、ハアとため息を一つ吐くと言った。

「まあ、小さい子相手にするのは少しきついんだよ。説明しづらいけどね。これは、人間として普通のことだぜ」

「殺されかけたのに、そんなことを気にするお前は人間として異常だ」

「化け物と言われたり、異常と言われたり、今日は厄日だね、まったく」

えーん、と嘘泣するホームズを無視して続けた。

「ようは、いつもの甘さが出たということか」

「なにを言ってるんだい？おれは、渋い男だぜ」

嘘泣きをやめ、今度はおどけた様に言った。

そんなホームズをヨルはしばらく睨みつけていたが、やがて諦めた。ヨルとしてはなんとなく、手加減した理由はついているのだ。ただの確認作業の為に、これ以上時間を取る事はしたくない。

「お前がそういう態度を取るときはいくら、言っても無駄だな」

だがな、と続ける。

「その甘さはいつかお前の首を絞める事になるぞ」

「へいへい、せいぜい気を付けるよ」

そう言うと、ホームズは手すりに背中を預けのけざる様に海を眺め始めた。

船は汽笛を鳴らして、海を進んで行く。ルロンドに向けて、そして、物語に向けて。今後彼等はリーゼマクシア、そして、エレンピオスを巡る物語に巻き込まれていくのだが、

「ヴ、オロロロロロロ」

絶賛船酔い中のホームズは知る由もない。

「お前……さつきまで平気だったのに。まだ、乗ってから1時間も経ってないぞ」

青い空、白い雲、輝く太陽、あふる吐瀉物……。

頑張れホームズ、船旅はまだまだ始まったばかりだ。

「ヴオボロエエエエエエエエ!!」

かわいい子には苦勞をさせよ。

「やつ…………と、着い…………た」

「ちよつ…………喋んな、ゲロ臭い」

ようやく、ルロンドに到着したホームズとヨル。

病院に行ったり、エレンピオスの情報を探したり、商品を仕入れたりとやることは山ほどあるのだが…………

「……………」

船酔いのせいでぐったりと地面に突っ伏している。

「おい、いい加減にしろ。船からはもう降りただろうが。」

「おれに構わず…………先に駆け…………」

右手をふらふらと動かしている。

「俺がお前から一定以上離れられないと知ってて言ってるな。おら、せめてベンチまで行け。こんなところで寝てたら迷惑だろうが」

「うう…………まさか、君に常識について説教されるなんて…世も末だね…………」

「嘔むぞ」

「分かったよ……動くよ、動きまますよ。毎度毎度その地味にリアルな脅しやめてくれない」

そう言うのとズリスリとベンチまで這って移動した。その様子は、はつきり言つて気持ち悪いの一言に尽きる。

「はあ、地面が揺れないで、いいものだなあ」

ホームズは深く腰をかけながらいった。今なら思える、吹き抜ける潮風が気持ちいいと。

しかし、風下にいるヨルはたまつたもんじやない。潮風が吹くたびに、ホームズの方から酸っぱい匂いが漂つて来るのだ。

「ほんとにゲロ臭い。場所交換しろ」

「やだよ、しばらくは動きたくない」

ホームズはベンチの背に頭を預け、空を見上げた。太陽が眩しい。日光を遮る様に左手にある円盤をかざす。するとその時、左手の中指にある指輪がきらりと光った。

「はあくあ、そろそろ手がかりが欲しいな」

エレンピオスを探してはや2年。ほとんど空振り、だけで終わらず、戦闘になることの方が多くいい加減疲れてきた。ここいらで、一発何か欲しいものだ。

「その為にもまず、病院にいけ」

ヨルは鼻を前足で抑え隣から漂ってくる悪臭に耐えながら言った。尻尾は、ホームズズの包帯の巻かれているところを指している。

それを見て、ホームズズは思い出した様にげんなりとした顔で言った。

「あれは、きつかった。よく生きてたもんだと思うよ」

「ま、ひとえに俺のお陰だな」

ヨルは胸を張った。

「ひとえに君のせいだろう。君が喋らなかつたら、君の正体がバレる事もなく、戦闘にもならなかつただろうね」

対する、ホームズズはジト目を送った。

「お前……ぬいぐるみが喋ったら誰だつて驚くだろう」

「猫が喋りながら言つてもいまいち説得力に欠けるな」

それから、ん、力をいれて伸びをすると立ち上がった。

「さて、船酔いもだいぶ引いたし、そろそろいくか！」

そう言つて、ルロンドの街に向かって歩き始めた。

「肩に乗るかい？」

「はあ、匂いぐらい我慢するか」

ホームズズの問いかけに応えると、いつものようにぴよんと、跳び乗った。

「?」

「どうしたのさ?」

船に乗っている時もそうだった。肩に乗る時いつもと違う感じたのだ。

しかし、まあ深く考えてもしょうがない。ヨルはそう思い直し、ホームズになんでもないと応えた。

この違和感の正体が後々面倒ごとを引き起こすのだが……彼等はまだ、知る由もない。

ルロンドはとても静かでのどかな街だった。

「いいね、おれ老後はここで暮らしたいよ」

港から続く坂道を登りながらそんなことをホームズは言っていた。ちなみに、ただいま18歳。

「老後まで生きてるといいけどな」

「今言わないでよ。笑えないよ」

つい最近、死にかけたばかりである。

「今後もありそうだよな」

「だから笑えないって……」

そんなことを言っていると病院についた。ついたのだが…

「マティス治療院？」

看板にそう書かれていた。

「こんにちはー！」

入ると、元気な女の子が迎えてくれた。歳はジュードと同じくらいだろうか。なんて事を考えていると、

「あれ、見ない人だねどうしたの？わたしはレイア、レイア・ロランド。あなたは？」
凄くフレンドリーに話しかけられた。しかも自己紹介付き。

「おれはホームズ、ホームズ・ヴォルマーノ。そして、この黒猫がヨル」

驚いたが、一応自己紹介をすると、包帯を見せながら、怪我をした事、船で一応処置して貰った事、ルロンドについたら念のため病院に行くよう言われたことを話した。

レイアはそれらなるほど言いながらメモをしていた。

ホームズは怪我した理由を言おうどうしようか迷ったので

「ところで、君はここの家の子かい？」

少し探りを入れてみた。

「違うよ。わたしは看護師だよ」

ならば、ともう一つ聞く。

「ジュード・マティスって知ってる？」

「知ってるも何も、ジュードはわたしの幼馴染みだよ」

満面の笑みで応えた。それはもう嬉しそうに。

怪我した理由をいうのはやめとこう。医師に言わなければならなくても、せめてこの

子にだけは言わないでおこうと、ホームズは決意した。

そんなホームズの決意よそにレイアはそれに、と続けた。

「この治療院の院長のデイラック先生の一人息子だよ。今は医者 of 勉強をする為にイ
ル・ファンにいますんだ」

案の定だった。どおりで、ジュードがどのへんの家にいるか、どんな家かしつかりと
言わないはずだ。行けば絶対分かるもの。

はあ、とため息をついた。ラッキーと喜びたいのだが、不自然な幸運のしつぺ返しを
食らってしまったばかりの身としては素直に喜べない。

(しつぺ返しどころじゃなかったしな……)

そんなことを思っていると、今度はレイアが質問してきた。

「どうしてジュードを知っているの？」

「道端でばったり会ってね、その時々話したんだ」

嘘は言っていない。サマングン街道も道端と言うし、偶然出会ったのも本当だ。イル・フアンではないが。

「色々あって？」

「王様の話とか、シャルル卿のこととかね」

嘘は言っていない。ホームズが話したただけだが。

「どう、元気そうだった？」

「とつても元気だったよ」

それは、ホームズの体で実証済みだ。とりあえず、朝飯を口から出させるほど元気だ。「ふーん、良かった。手紙出してもぜんぜん返って来ないからそう言うのわかんないだね。でも、良かった元気そうで」

「ただいま元気に逃亡犯です。」

レイアは元気そうな幼馴染みの話を嬉しそうに聞いていた。しかし、仕事もちゃんとやっっており問診票の様なものを書きあげていた。

「さて、順番が来たら呼ぶから待っててね」

レイアはそう言って待合室を手で示した。

ホームズがそこに行こうとすると、その前にとレイアが言った。

「猫、預かせてもらうね。もし、猫アレルギーの患者さんがいると大変だからね」

ふむ、とホームズは考える。一定の距離以上離れられないのだが、まあこの中くらいなら大丈夫だろうと、思いヨルをレイアに渡した。

「せいぜい、可愛がられて来いよ」

思いつきり嫌そうな顔して、ヨルはレイアに抱っこされていた。

待合室で座っていると隣の老人に話しかけられた。

「いい子じゃろ、レイアちゃん。笑顔もかわいいし」

「そうですね」

とホームズは同意した。あの時の笑顔は間違いなく輝いていた。ちなみにホームズの笑顔はヨル曰く、胡散臭いらしい。

「とつても、努力家だな。頑張ればどうにかなる、が信条なんじゃよ」

「それはすごいですね」

ホームズは少し驚いた。だいたいあの年頃にもなると頑張ってもどうにもならないことと言うものに出会い、努力することが馬鹿らしくなってしまうものなのに、とホームズは思った。

「さらにも、あの子はジュード一筋。健気じゃろ」

「そうですね」

ミラとジュードが息を合わせて戦っているのを思い出した。……言わないでおこう。

「だから、狙っても、アタックしても無駄じゃよ」

ニヤニヤとしながらその老人は言った。どうやらそれが言いたかった様だ。

「ふふ、分かりました。肝に命じておきます」

ホームズは微笑みながら平然と返した。ある程度予想は出来ていたのでこれぐらいの返しは余裕だ。

「なんだか胡散臭い笑顔じゃのう」

この返しは予想外だった。そんなにおれの笑顔は胡散臭いのだろうか？そんなことを考えていると、ホームズは診察室に呼ばれた。デリラック・ギタ・マティスに。

「怪我は一応、応急手当はされているが、軽くはない。一体何をした」

「命懸けの戦いを少々」

「一応生きているところを確認すると君が勝ったと考えればいいかな？」

「逃げるが勝ちって知ってます？」

「なるほど。それより君は船酔いする方かな？」

「やっぱり、臭いですか？」

という事はレイアにもきつと思われていただろう。

男にとって、女の子に臭いと思われるのは死活問題だ。面と向かって言われたら恐らく一週間は立ち直れない。

そんな風にショックを受けているホームズをよそにディラックは傷を診ていった。

「入院するほどでもないな。しばらく通つて貰えばどうにかなる。とはいえ君はここ人間ではないから、入院させた方が都合がいいのだが……」

そう言つて、なにかの紙を見る。

「あいにく、ベットが空いていない。あるにはあるがそこは急患用なんだ。すまないが、ロランダの所で泊まつてくれないか？ 話は私が通しておこう」

「ロランダ？」

「宿屋だ」

何処かで聞いた様な？ と思つたがまあ、深く考えずにいいですよと言つた。

「他になにか聞きたいことはあるか？」

「一つだけ」

ホームズは人差し指を立てて聞いた。

「エレンピオスへの行き方を知りませんか」

ディラックの手が止まつた。

「君はアルクノアか？いや違うな。アルクノアだったらそんな質問を私なんかにしな
い」

「理解が早くて助かりますよ、マティス先生。危うく第二ラウンドに突入するところ
でしたよ」

ホームズホツと胸を撫でおろす。

「君は何故そんなことを知りたい？」

デリラックは聞いた。

「おれの両親がエレンピオス人なんですよ。だから、両親の生まれ故郷ぐらい見とき
たいなと思いましてね」

「生まれ故郷を見たい？」

「そういうもんじゃないですか？自分を育てた両親が何処でどういう風に生きてきた
か？そんな場所を見て見たいとおもいませんか？少なくともおれは見たいですよ」

そして何より、と続ける。

「見た事のない場所、行った事のない場所に行きたいと思うのは、当たり前じゃないで
すか？」

ホームズの言い分を聞き、デリラックは少し考えた。

「何処まで、知っている？」

「両親がエレンピオス人だということ、ジルニトラという船に乗っていた人の大半がアルクノアに属している事。そして、おれ達エレンピオス人は靈力が退化している事、ぐらいですかね」

「なるほど、黒匣ジツについては？」

「なんか、昔言っていたような、言わなかったようなで、感じです。」

ホームズは余り、エレンピオスについて知らない様だ。恐らく、両親がわざと教えなかったのだろう。とデイラックは考える。エレンピオス人の、やっている事に息子を巻き込まれないために。アルクノアに巻き込まれない様に。

そんな親心を無視していいのか、とも思った。

その時、疑問点が一つ出てきた。

「ジルニトラの乗客なんて、どうやって調べた？」

「ああ、母さんに渡されたんですよ、乗客名簿をね。エレンピオスに行ってみたい、と言ったら、『じゃあ、調べてご覧。』って」

そもそも、そんな親心はなかった。

『はつきり言つて危険しかないけど、』と一応忠告付きで」

「君の母親は何を考えているのだ」

デイラックは額に手を当てながら言つた。

「それ、おれも聞きました……」

ホームズは当時の事を思い出して、遠い目をしている。

「なんて、応えていた」

『我が子の幸せ』と言っていましたよ」

もう、ついていけない。ディラックは頭が痛くなってきた。その様子を察したのかホームズは続けた。

「まあ、要するに、最初の頃はアルクノアに巻き込まれない様に危険を避けていたけれど、知りたいのだったらその危険と向き合いな、という事らしいです」

「君の母親は教えてくれなかったのだな」

「まあ、母さん自身そこまで深く知らなかったというのが一番の理由ですが、それ以上に……」

「それ以上に？」

「『親は子どもを苦勞させるものだ』との事でした」

ディラックは考える。なんとなく彼の母が言いたいことがわかってきたのだ。

苦勞して、死にかけて、手に入れた事は、楽して母を頼って手に入れたものよりも、ずっとずっと価値のある物だ。そういう事を伝えたかったのだろう。

母としては、息子を危険になどさらしたくない。実際、彼が小さい頃は守っていたのだ。けれども今回は心を鬼にして、息子に試練を与えたのだろう。

「それから君はずつと手掛かり探して旅をしている訳か、一体どれくらい？」

「もう、かれこれ2年です」

『かわいい子には旅をさせよ』というやつだな」

デイラックはやつと理解出来た様だった

「？別に、旅なら小さい頃からしていますよ。母親も行商だったので、おれもついでに行きました」

ホームズは、微妙にトンチンカンなことを言っていたが、デイラックは気にせずと言った。

「わかった話そう。君のその2年の努力に免じて」

コーヒー口に苦し

「遙昔、人々は黒匣ジンを創り出した」

ディラックは、そう切り出した。

たぶん、ヨルも聞きたいだろうな、なんてことをホームズは思ったが、まあ、いいかと割り切ることにした。

(いいわけあるか！)

ヨルはそう思っていた。

こちら診察室の隣の資料室である。レイアはただいま休憩中で勉強中。一応預かった手前ほつとくわけにもいかず、とりあえず目の届く所に連れてきた訳である。

そんな中、ヨルは空いている机にレイアに背を向けて乗り、隣の部屋から聞こえてくるエレンピオスの情報に耳をすませていた。

「それは、マナを精霊に与えずに精霊術を発動出来る道具だ」

それは、と続ける。

「いい風に考えると靈力野ゲートに左右されず、誰にでも強力な精靈術を発動させることの出来るものとも言える」

「その言い方は何か致命的な欠陥でもあるんですか？」

「ある。……最も私も最初は知らなかったがね」

そう言うのでテイルラックは立ち上がり、コーヒーでいいかい？とホームズに聞いてきた。た。

お願いします、と返しておいた。ホームズとしても少し喉が渴いてきた頃だ。

ホームズの返事を聞くとコーヒーを淹れながら話し始めた。



(黒匣ジンか…)

ヨルは考える。自分が封じられている間にずいぶん大それたものが発明されたものだ。しかし、世の中はギブアンドテイクだ。恐らく、とんでもないデメリットがあるだろう。

そんなことを考えながらちらりと、レイアを見る。勉強もひと段落したらしく、息抜

きに猫じゃらしを選んでいる。どうやらホームズ達の会話はレイアには聞こえていないらしい。

……ねこじゃらし？

◇◇

「黒^{ツッ}匣は、マナを与えずに精霊術を発動出来る。しかし、無理に力を使わされた代償として……」

「代償として？」

「精霊達は死ぬこととなる」

ホームズは息を呑んだ。自然がある為には精霊が必要だ。そんな物を使われ続けたら自然は消えていく一方だ。

そして、自然の消えた世界は長くは持たない。

どうぞ、とコーヒーを渡した。

ホームズはデリラックに一言礼を言うと、飲んだ。……そして吹いた。噴水のように。

「にがい……」

「そりゃ、コーヒーだからな……。ミルクはないが、砂糖はある、いるかね？」

「……いただきます」

口を拭きながら、そう言うのと砂糖をどぼどぼ入れ始めたた。

その砂糖を入れるさまをデイラックは若干引きながら見ていた。

「コーヒーを飲んだのは初めてかね？」

「いや…」

砂糖をいれ終わると飲み始めた。

「何回か、母親の淹れた物を飲んだことはありますけど……」

デイラックは考える。きつと砂糖とミルクを大量にいれていたのだろう。

さて、とコーヒーを飲みながらデイラックは続けた。

「これに危機感を覚えたマクスウエルは、霊力野のある人間達、つまり、黒匣ジンを使わな

い人間達を黒匣ジンを使う人間から隔離した」

「隔離？どうやって？」

「断界殻シエというものを創り出して、国自体を分けたのだ。」

「断界殻シエ？」

「まあ、見えない巨大な壁だと思ってくれ。そうして、世界は二つに分かれた。黒匣ジンのない、ココリーゼマクシアと黒匣ジンの溢れた国エレンピオスにな」



「ほらほら、こつち向いてく、ヨルちゃん」

(うつとおしい……)

レイアはヨルと遊ぼうと一生懸命だった。先程選んだねこじやらしを使つて。レイアとしては、肩に乗るほど仲のいい飼い主と別れてしまったので、寂しくない様にとという配慮なのだが……

(いつまでやっているつもりだ)

ヨルとしては全く嬉しくない。むしろ、隣の会話を聞くのに邪魔ですらある。最初は無視していたが、あまりにもしつこいので今は尻尾で対応している。

「むー、無愛想だな」

その様子をずつと見ていたレイアはよし決めたと、なにかを決意した様に言った。

「君のご主人が元気になるまでに、君を振り向かせてみせる！覚悟しなよー」
ビシツという効果音が聞こえてきそうなくらいな勢いでヨルを指差してきた。

(勘弁してくれ……)

ヨルはうんざりした様にため息をついた。そして、また応対し始めた。



「へー、そんなことになっていたんですね？」

「私も、ここに來てから知ったのだがね。おかわりいるかね？」

「砂糖もついでにお願いします」

その答えを聞くとデリラックの顔が若干引きつったがホームズは気にしなかった。

コポコポと小気味のいい音を立てながら、コーヒーをカップに注いでいく。

今のところいい調子だとホームズは考える。正直、ここまで話を通じるとは思わなかった。ようやく、今までの苦勞が報われた感じだ。この調子で、エレンピオスへの行き方も教えてもらえるのではないかと。

そんなことを期待していると、デリラックが二杯めのコーヒーを持ってきて、ホームズに渡した。

ホームズが砂糖をいれ終わるのを待っている間デリラックは考えていた。これは、大変言いづらいことだ。しかし、とも思う。ごまかすことは、誰も得をしない、むしろ損だ。そう決意して。

「だから、断界殻シエがある限り、リーゼマクシアからエレンピオスに行くことは出来な
い」

と告げた。

突然、目の前が真っ暗になった。

気が付くとホームズはがしやんと、コーヒーの入ったカップを落としていた。

◇◇

「なに？今の音？」

レイアのねこじやらしをいじる手が止まる。今にも向こうの部屋に行きそうな勢いだ。

(まずい)

今、向こうに行かれてしまえば、エレンピオスのことを知られたくない彼らとしては話す事をやめてしまうだろう。それだけは阻止せねば。

ヨルは覚悟を決めると、すべてのプライドを捨て、ねこじやらしにじやれ始めた。

「にやーにやー」

出来るだけ可愛らしく、いつもの様な低い声ではなく、裏声を使い、少し高めの声で愛嬌を振りまいてねこじやらしにじやれた。

「おお！やつと、私のほうを向いてくれた！これからもどんどん仲良くなっていこう」そのヨルの豹変ぶりにレイアはすっかり気を取られ、隣の診察室に行くことはなかった。

(屈辱だ……この借りは高いぞホームズ)



「嘘……ですよね？」

「事実だ」

「だったら、あなたやアルクノア、それにおれの両親のことは、どう説明するんです！」
ホームズは椅子から立ち上がり、今にもデリラックに掴みかかりそうな勢いだ。

「ジルニトラという船があつてね、」
たいするデリラックは冷静だ。

「その船に乗っていた連中はある実験に巻き込まれてね、たまたま、断界殻シエを破つてこ
ちらに来てしまったんだ」

そして、と続ける。

「エレンピオスには、帰れなかった。それが、私やアルクノアそして、君のご両親だ」
「……断界殻シエをどうにかする方法はないんですか？」

ホームズは俯きながら言った。

「……マクスウエルを倒す事だ」

ホームズは息を呑んだ。あの、凜とした女マクスウエルの事を考える。確かに酷い目にはあつた。しかし、そうは言っても、あの凜とした態度には好感を持つていた。そんな相手を殺さなければならない。それは、あまりやりたくない。けれども考える。そ

れしか、方法がないなら……。いや、だめだとホームズは忌々しい考えを振り払う。

『よかったよ。私の息子がそこまでクズじゃなくて』

不意に母の声がした気がした。

『もし、そんなことを実行したらお仕置きしないとイケなかったよ』

母のお仕置きほど怖い物はない。

『それに、約束しただろう？ 忘れたとは言わせないぜ』

そうだったなとホームズは、決意を固めた。

「ホームズ君？」

放心状態のホームズにデイラックは心配そうに声をかけた。

「おれは、それ以外の方法を探しますよ。でないと、母親に、自慢出来ないですしね」
しかし、しっかりと前を向いていた。

「自慢？」

デイラックは不思議そうに聞いた。

「ええ、母親との約束なんです。エレンピオスに、母親の故郷にたどり着いたら自慢し

てみせろってね。その時は何も考えずに約束してしまったんですが……」

今ならわかる、あの母は深く知らないくせにこうなる事を予想していたのだろう。だからこそ、そんな約束を自分にさせたのだ。

（相変わらず、食えない人だ）

ホームズは、今でもなお自分の一枚も二枚も上をいく母に舌を巻いた。

◇◇

（なるほどな……）

ヨルも納得していた。ヨルもその約束の場にいたのだ。見届け人として。

その時はホームズと一緒に、どうしてそんな約束をさせたのかわからなかった。

しかし、今なら分かる。その時、女マクスウエルを殺すという選択肢を選ばせない為にこんな約束をさせたのだ。

（あの女……）

恐らく、約束を守らせる事だけが目的ではない。目的の達成し方も教えていたのだ。誰かに自慢できる、胸を張ることの出来るそういうやり方をしろと言っているのだから。

言い換えるなら、人様に自慢できないやり方はやめろということなのだ。

(ま、そんな物きれいごとだけどな)

人の倍以上生きているヨルは思う。目的達成の為には汚い手も使わなければならない。清濁合わせのむぐらいの気概が必要なのだ。

そんなこと、あの女が知らない訳がない、とヨルは思う。まあ、でもとも考える。人間のことはよく分からないが、少なくともあの女は自分の為に、息子が手を汚すのが嫌だったのではないかと。

(そう考えるのが一番しつくりくるな)

ねこじやらしをいじりながらヨルはそんなことを考えていた。

「ふむ、ならば君はどうする?」

「とりあえず、マクスウエルを探しますよ。断界殻シエルのこと、一番関わっているのはマクスウエルですからね。当ても多少ありますし」

あの時彼女らは、カラハ・シャルを目指していた、だったら、そこで足取りを探るのがベストだ。ホームズは迷いを振り切った笑みを浮かべながら、そう言った。

「とりあえず、しばらくは通いだ。探すのはそれからしなさい」

デリラックはそう言うのと、待合室で待っているよう指示した。

「分かりました……とそうだ。ありがとうございました」
ホームズはそう言つて診察室を後にした。

◇◇

待合室に付くとヨルと遊んでいるレイアの姿があつた。

辺りを探してみても他の患者さんはもういない。だからこそ、こんなに話していられたんだらうな。ホームズは考えていた。

ホームズに気が付くとレイアは少し誇らしげに言つた。

「みてみて、ヨルちゃんといつてこんなに仲良くなつたんだよ」

そう言つて、目の前でねこじやらしを使つて遊び始めた。

ヨルは何だか仕方なく遊んでいる様には見えぬのだが、レイアは満足そうだ。

(後で散々文句言われるだらうな)

そんなことを考えていると、ジュードに目元がそっくりな受付に名前を呼ばれた。

「とりあえず、こちらが今日の診察料になります」

「はい、分かりました」

そう言つてホームズは薬箱状のカバンから金を出そうとして気付いた。

カバンがない……

「あの時か……」

そう、ジュード達から逃げる時にカバンは港と反対方向にあったので、置いて行ってしまったのだ。つまり、あの時仕入れた商品も金欠ながらもコツコツ貯めた金も……

「全部パーか……」

ホームズはがつくりと膝をついた。

そんな様子をヨルは眺めながらやっとな得がいった。あの、肩に乗る時の違和感について。

いつも、カバンを避けて乗っていたので少し手間取っていたのが、船に乗ってからはすんなりと乗れていたのだ。

（なるほどだから違和感があったのか）

考えてみればおかしな所はいくつかあった。

ホームズがベンチに深く腰掛けた時、荷物を降ろす動作を一つもしていなかった。船に乗っていた時も同様だ、何もせずに船の手すりにゆったともたれかかっていた。ただのカバンならともかく、彼のカバンはどちらかと言うと箱に近い。どう考えたって、ベ

ンチに深く腰掛けるのも、手すりにもたれかかるともそんな物を背負ったままではムリなのだ。なのに、ホームズは深く腰掛けていたし、手すりにもたれかかっていた。

(しっかし、そんな事にも気付かないなんてあいつ、馬鹿だな)

ヨルも人の事は言えないが。

「もしかして、お金ないの？」

レイアが心配そうに聞く。

「その通りです。有り金全部置いてきちゃたみたいで……」

「なら、今回はただという事にしますか？」

受付の女性も心配そうに尋ねる。

「いえ、ちゃんと払います」

ホームズのポリシーとして、金で払うべきものはちゃんと払わなければならないというものがある。それに、今回がただになったとしても、今後何回も通うのだ。きつと何の意味もない。

なので、絶対に払いたいのだが……手段がない。

どうしたものかと悩んでいたら、ポンとレイアが手を叩いた。

「だったら、ウチで働いてみたら。大丈夫！さすがに怪我人にそんなハードな事はや

らせないから、安心して」

成渡りに船とはこの事である。しかし、ホームズは考える。

「君のうちはどこでなに屋だい？」

「ここの、すぐ近くの宿屋だよ」

「……名前は何？」

「ロランド、宿屋ロランドだよ」

自分の泊まる所か……、世間が狭いにも程があるだろう。ホームズは呆れていた。まあでも、悪くはないか。ホームズは暫く考えたがレイアの家に乗らせてもらうことにした。

「よろしくロランドさん」

「レイアでいいよ」

「じゃあ、レイア暫くの間よろしく」

「うん、こちらこそ」

そう言つて2人は爽やかに握手をした。

一方ヨルはどんよりしていた。

（暫くの間あの強引娘と一緒に……ハア）

ねこじやらしの時のしつこさを思い出す。

あんなのが暫く続くかと思うとどうしても……

(ハア、)

ヨルは、今日何度めか分からないため息吐いた。

猫の恨みは恐ろしい

「ここが、あなた達の部屋ですよ」

ホームズ達はレイアの母であるソニアに部屋に案内された。

ベットが一つに、引き出しが一つ。物は多すぎず、少なすぎず、ちょうどいいぐらいだ。

「ありがとうございます。それで…その仕事は…」

「ああ、明日からやってもらいますよ。とりあえず、玄関掃除でも、やってもらいましょうかね」

「分かりました」

「夕食は下で他のお客さんと食べてもらうから」

「了解です」

「猫ちゃんには猫ちゃん用のエサを用意しますよ。それは、部屋に持っていきますからね。流石に食堂に動物持ち込まれたら困りますから」

「……了解です」

ヨルは少し不満そうだった。

「しっかし、今日は色々あつたねえ……」

ベットに腰掛けながらホームズは今日一日のことを思い出していた。

エレンピオスの事を知り、黒匣の事を知り、断界殻の事を知り、そして荷物を無くした。

もう本当に波乱万丈な一日だった。この一日だけで一年を過ごした気分だ。

「俺も疲れた……」

ヨルはヨルで疲れていた。自分のキャラでもない、かわいい猫を演じていたのだ。

「もうあんな屈辱的なこと二度とやりたくない……」

「いいじゃないか、もつと遊んでもらいなよ。ヨルちゃん」

「貴様の茶髪を脳みそで赤く染めてやろう……」

ヨルは牙をむきながらホームズを威嚇した。

「まあでも、近いうちに肉球触ってくるんじゃない？」

「あり得るな……」

牙を納めると自分の肉球を見つめながらヨルはため息をついた。

そんな会話をしていると、コンコンと扉がノックされた。

「はい、どうぞ」

ホームズはヨルを黙らせると返事をした。

「どう、調子は？」

レイアが入って来た、お皿を持って。

「まあ、少し疲れたかな」

「今日船で来たばっかだもんね」

うんうんとレイアは頷いている。そういえば、とレイアはさらに言葉を続けた。

「船代はどうしたの？だって、お金ごとカバンを置いてきたんでしよう？」

「ああ、船代はこっちの袋に入れておいたんだ」

そう言ってホームズは腰の袋を指差した。

「すぐにパツと出せる様に必要な金額しか入れないようにしているんだよ」

ところで、とホームズは続ける

「何の用だい」

「ああ、いけない忘れるところだった。夕飯の用意が出来たって。だから、呼びに来たの」

それと、と今度はヨルに向き直る。

「はい、これヨルちゃん分」

そう言って魚のそぼろの様な物の入った皿を渡した。

「ちゃんとね、お父さんが猫であるヨルちゃんの事を考えて味付けをしない、塩分控えめの物を作ったんだよ」

ヨルは見た目は猫だが、実際猫でも何でもないの、人と同じ料理を食べていた。なので、動物のエサなんて用意されても嬉しくないのだ。

ヨルはじつと今日の自分の夕飯を見つめていた。

「あの……一応この子は……」

猫じゃないからと言おうとした。しかし、だったら、何だと言う話になる。もう面倒ごとはごめんのだ。

「この子は？」

止まってしまったホームズをレイアは不思議そうに首を傾げて聞いた。

「一応男なんだ。」

一応もなにも男だ！というヨルからの無言のツッコミをホームズは感じている。

ホームズ自身もやっちゃったという意識はある。

「なるほど。じゃあ、『ヨルちゃん』じゃなくて『ヨル君』だね」

しかし、レイアは彼等に構う事なく続けた。

「だから、最初の頃はなかなか反応してくれなかったんだね。じゃあ、改めてよろしくねヨル君」

そう言うのとヨルの頭を撫でようとした。しかし、ヨルはふいつとレイアの手をかわした。

レイアは少しショックを受けたようだ。

「そんな、さつきまで一緒に遊んでいたのに……一体何が不満なの？」

全部だろうなああとホームズは思う。

そんなホームズをよそにレイアは続ける。

「でもわたしは、諦めないよ。さつきは振り向かせる事ができたんだ。だから今度は必ずヨル君を抱っこして、撫でてみせる！」

レイアはそう高らかに宣言した。

(誰にとつても不幸な事になりそうだ……)

ホームズは心の中でそんな事を思っていた。

そして、ホームズはレイアの案内で食堂に降りて行った。

その時ヨルは心底恨めしそうにホームズと、そして、自分の今夜の食事を見ていた。



夕飯はマーボーカレーだった。

「いいね、カレーだ」

ホームズは大喜びだ。

「マーボーカレー好きなの？」

レイアが聞いてきた。

「当然！おれは、カレーが嫌いな奴は存在する価値が無いと思っている。そのぐらいカレーが好きだ！いや、むしろ愛していると断言しても過言ではない！」

グツと音が聞こえそうなくらい拳を握り締めてホームズは力説していた。

「ずいぶんと歪んだ愛情だね…。とりあえず食べたら？」

レイアは顔を引きつらせながら言った。

言われるとホームズは握り拳をほどいて、左手首についている盾を外し隣に置き、スプーンを持つて食べ始めた。

「まあ、わたしもホームズ程じゃないけどマーボーカレー、好きだよ」

「いい趣味だね、この世に存在する価値があるよ」

半ば、本気な目でホームズは言った。

「ははは、うん、ありがとう」

対するレイアは苦笑いで返した。そんなレイアに構う事なくホームズは質問をして来た。

「何が好きなの？豆腐？ご飯？ルー？」

「うーん…何がと言うより、マーボーカレー全部が好きなんだ」

ホームズのうざい程ぐいぐい来る質問に対してレイアはそのように応えた。

「全部が？」

「うん、なんかさマーボーカレーってさ、仲良しの食べ物って感じがしない？」

「どういうことだい？」

ホームズは不思議そうに首を傾げる。

「だってさ、まったく違う物同士が集まってこんな美味しい物になるんだよ。なんか、

仲良しくってかんじがしない？」

レイアの言葉にホームズは、自分のカレーを見る。

「なるほどね。言われてみればそう見えるね。仲直りアイテムとしても使えそうだし

感心したようにホームズは言った。

「うん、使えるよ。わたしで、実証済みだから」

「実証済み？」

ホームズは怪訝そうに尋ねる。

「うん。ジュードと喧嘩した時ね、いつもこれを持って仲直りしに行ったんだ」
昔を懐かしむようにレイアは話した。

「毎回、それをやっていたら段々喧嘩しなくなっていくんだよね」

多分、マーボーカレーばかり持つてくるから喧嘩しない様に気を付けたんだろうな、とホームズは考えていた。

勿論、わざわざそんな事を言うほどホームズも野暮では無い。

そんな事を話している内にホームズのカレーが遂に最後の一口になってしまった。

ホームズは皿のカレーをスプーンで、集めると後は全部一口で食べた。

「うん、美味しかった。辛過ぎず甘過ぎずちょうどいいぐらいだね」

ホームズは素直に褒めるとレイアは嬉しそうだった。

「でしよ、お父さんの料理はとっても美味しいんだ。お代わりあるから、たくさん食べてね」

「お父さん？」

そう言つてレイアが指を差すとごっついおっさんがごっちに向かつて、ペこりとお辞儀をした。

ホームズは少し驚いた。

「てつきり、ソニアさんが作ってると思っていたよ」

「お母さんも料理は出来るけどね。うちのお父さん結構料理上手だから、基本的にこの食事はお父さんが作っているんだよ。ホームズはどうだった？」

「どうって?」

ホームズは質問の意味が分からないと言う様に尋ねる返す。

「だから、ホームズのお父さん、料理上手だった?」

ホームズは、その質問に一瞬固まり、スプーンを覗き込んだ。そして、すぐに視線を戻すとレイアに返した

「そうだね、母親は料理上手だったよ。『花嫁修行のお陰だぜ』とか言ってたけど……

あ、おかわり貰える?」

「え、あ、ま、いいけど」

「よろしく」

そう言うのとレイアにいつの間にか空になったお皿を渡した。

レイアはお皿にカレーを盛りながら考える。

今明らかにホームズは話をずらした。

父親の話をしたのに、返って来た返答は母親についてだった。しかも、それ以外にも違和感があった。

でも、それを問いつめるのは失礼だ。レイアはそう思い何食わぬ顔で、カレーをホームズに渡した。

「はい、どうぞぞ」

「ありがとう」

そのお礼が、気遣いに対してなのか、それともカレーのお代わりに対してなのか、レイアには分からなかった。

こうして、初日の食事は過ぎて行った。



「やれやれ、食った食った」

「羨ましい限りだ……くそ」

夕飯から帰るとホームズはそのままベットに倒れこんだ。

「どうだった。魚そぼろは」

「味がしなかった」

「良かったじゃないか、健康的で」

「代わってやろうか、病人はピツタリだと思っぞ」

「遠慮しとくよ。怪我人にとっては、薄味の物よりもがつつりとした物を食べたいからね」

「相変わらず、口の達者な奴だ」

「君にだけは言われたくない」

そんなお世辞にも和やかとは言えない会話をホームズ達は繰り広げていた。

「そつちは何が出たんだ？」

「マーボーカレー」

「本当に羨ましい…恨めしい。呪いたい」

「呪わないでくれよ……」

引きつり笑いでそう言うと、レイアとの会話を思い出した。

「『お父さん』ね……」

「どうした？」

「いや、ここのご飯は、レイアのお父さんが作っているんだってさ」

「あの、挨拶した時にいた、ごつつい人間が？……人間と言うのは見た目によらない物だな」

「君が言うのと説得力が違うね……」

ホームズは苦笑いをしている。

「…ま、一応乗ってやったが、お前また話逸らしたな」

さつきまでとはガラリと調子を変えてヨルはホームズに言った。

「……ばれた？」

「当たり前だ。そのぐらい分かる。何年とお前というと思っっているんだ。」

「10年以上は一緒だよ。まったく随分と長い付き合いだよ」

ホームズは何処か遠くを見つめながら、言った。

今でも覚えている、この猫もどきの化物との出会いを。あの暗闇の洞窟を。

「衝撃的だったよ」

「あの時、お前に騙されなければな…、今頃リーゼマクシアを地獄に変えていたのに」

「物騒だねえ」

「そろそろ、話を戻すか」

ヨルは話を一旦切った。

『『お父さん』とやらがどうした？』

「随分と直球で聞いてくるね」

ホームズは若干面食らった。

「こうでもしないと、お前話さないだろう？まあ、こうしても話さない事もあるが

……」

「よく分かってるね、さすがだよ」

ホームズは、ふふっと笑うとポツリポツリと少し寂しそうに話した。

「レイアにおれのお父さんはどんな人かと聞かれたんだ」

「ざまみろ」

ヨルのそんな返しにホームズは明らかにいやそうな顔をして応える。

「もう少しなんか無いの？」

「俺を差し置いて美味しい飯を食うからだ」

「悪化したー!」

ホームズはうなだれた。こいつにそういう事を期待する方が間違いだと分かってはいても、心の傷は深い。

暫く、喋れない状態のホームズの言葉を引き継ぐようにヨルは続けた。

「なるほど。つまり、アンニュイな気分になったってところか」

「まあね、そんなところ。うまく隠したつもりだったけど多分、レイアに気付かれてるだろうね」

肩を竦ませ、ホームズは少し自嘲する様に言った。

「うまく隠せてねーじゃねーか」

そんなホームズに対して、ヨルは辛辣だった。

「今日は本当にぐいぐい来るね……一体何が不満なの？」

「お前が俺より美味しい飯を食ったこと」

まだ、引きずつてた。

「しつこいな！常識的にそろそろやめてくれない?！」

「お前の常識なんて、5秒で超えてやる」

そんなホームズズの叫びに対してヨルはどこかで聞いた様なセリフを吐いた。

「もういい、分かった！今日はもう寝る!!おやすみ」

言うが早いかホームズはふて寝てしまった。

そんな様子を欠伸を一つしながら眺めると、ヨルもホームズを習う様に寝た。

なにしろ、明日からまた大変なのだ。休息はとっておくに限る。

彼等のル・ロンドー1日目の夜はこうして更けていった。

「ホームズズの部屋から声が2種類聞こえた気がするんだけど……」

ヨルのエサ皿を取りに来たレイアは、ホームズズの部屋の前で考える。ノックのタイミ

ングを完璧に逃してしまった。

「まさか……ね」

とりあえず、もう寝たみたいだし明日にしよう、と考えてレイアは自分の部屋にむかった。

そう本当に……明日から大変なのだ。

働かざるもの喋るべからず

「おつはよー！ さあ、朝だよ、おつきろー！」

「わああアア?! なになににナニ?」

レイアは、大音量でそう言うのとホームズの布団を全部引っぺがした。

「……なに?」

突然、起こされたホームズはまったく状況が把握できてない。ヨルも似たようなものだった。

「『なに?』じゃないよ。今日から仕事でしょ。確か玄関掃除をやるよう言われてるでしよー！」

「……まあね」

「そういうことはね、お客さんが起きる前にやるのが常識なんだよ」

眠そうなホームズにレイアは説教する様に言う

「……いま、何時?」

「朝の5時」

外を見ると、朝日が登って来るのが分かる。こんな時間に、こんな起こし方をする奴

が常識を語っている……

「……ツッコんでいい?」

「ダメ! さあ、朝ごはん食べにいくよ。ハイ、これヨル君の」

そう言うと、ヨルに魚そぼろを渡し、昨日の皿を全部回収した。

「……分かったよ。準備するから出て行っておくれ」

レイアを追い出すとホームズはノロノロと、支度をして朝ごはんを食べに下に降りて行った。

(今日もこれか……)

ヨルは誰に気付かれることなく、ため息を吐いた。



「……起こし方さ、どうにかならない?」

「怒ってる?」

「喜んでると思うのかい?」

不機嫌さを隠すことなく、ホームズはレイアに返す。

「いやーごめん、ごめん。今度からはやんないからさ」

「本当に、お願いね。1日の始まりに命終わりそうになるから」

「あつはつは、大げさだなあ」

「君も味わえばいいよ……」

恨めしそうにそう言うのと、豆腐の味噌汁を飲んだ。相変わらず美味しい。

「だいたいね、常識的に考えてあんな音量じゃ他のお客さんに迷惑だろう」

「大丈夫だよ。ホームズの部屋の隣にはお客さんいないか確かめたから」

「常識人だね……」

非常識な常識人、レイア・ロラント。

「もう、割り切つていくよ……」

「なんの話？」

「こつちの話」

それよりも、と話を続ける。

「あのさ、仕事中ヨル連れてていいかい？」

「どうして？」

あまり、離れられないからとは言えないので、

「えっと、あいっつってさ何やらかすか、分からないからさ」

嘘は言っていない。実際この旅のトラブルの原因の8割はヨルのせいだ。残りの2割

はホームズが余計な事に首を突っ込からなのだが……

「わたしが、見てようか？」

「いや、いいよ。君も看護師の仕事があるだろう。」

本音を言えば余計離れるから勘弁してくれというところなのだが……

「まあ、ホームズが負担じゃなければいいと思うよ。ただね、」

「分かってるよ、食堂や炊事場には連れては行かないよ」

よろしい、という二人は朝ごはんを食べ終えた。



ホームズは自分の部屋に戻り、歯を磨きそして着替えた。

いつものエスニック調のフード付きポンチョに左手首の盾。そして、鏡の前に立ち、寝癖を整え……アホ毛が一本立つ。

「どうやっても直らないよな……」

なのでせめて、かっこよく見えるようアホ毛をセットするのだが、

「上手くないかな……」

そんなホームズを見てヨルは言う。

「毎度見てて、思うのだがそこだけ切れればいいんじゃないか？」

「1回それやってハゲたことあるからやりたく無い」

「ワックスとかはどうだ？」

「いま手元がない……」

カバンごと。

「それに、昔使ったら母さんに死ぬ程バカにされたからな……」

「あつたな、そんなことも」

「もはや、トラウマレベルのからかいだったんだけど……」

今でも思い出すと涙がでる。

そんな辛い過去を思い出しつつ、準備を終えると安全靴の靴紐を結ぶ。そして、ヨルはホームズの肩に乗る。

「よしー」

さあ、1日の始まりだ。

◇◇◇◇◇

「じゃあ、よろしく頼んだよ」

「ハイ、わかりました」

ソニアの言葉にホームズは頷くと玄関掃除を始めた。

箒でゴミを履き、それを集めるそれ程難しい作業ではない。

ザアザアと玄関をはいていると、レイアが裏の方からやって来た。

「なんで、玄関から出てこないんだい？」

「ああ、一応確認作業。たまーに窓からゴミを捨てるお客さんがいるからさ、落ちてないか見てきたの」

「心外だなー。おれがそんなことするわけ無いだろう」

ちよつと、おどけて傷付いたふりしながらホームズは言った。

「そう言えばそうだね。ゴミうんぬんの前に荷物が無いもんね。ごめんね疑ったりして」

悪気がない分たちが悪い。

「……分かってくれればいいさ……」

心底傷付いたように、ホームズは言った。

そんな、ホームズの様子に気付かずレイアは、いつてきます、と元氣良くあいさつをしマテイス医院に向かった。

「……いつてらっしゃい」

ホームズは元気無くあいさつをして、レイアが見えなくなるまで見送っていた。迂闊に下を向いていると涙が落ちそうになるので、遠くを見つめていた。

「朝日が眩しいな……」

「現実逃避してないで、手を動かせ」

「君は厳しいな……」

とほほ、と掃除を再開した。



「どうだ？レイア。ホームズの調子は？」

「いや、まあ、カレーについて熱く語れるぐらい元気ですけど……」

こちら、マティス医院。デイラックの問いにレイアは昨日の夜の事を思い出す。あの2種類の声の事を……。

1種類は明らかにホームズだった。でも、もう1種類は全然聞いた事のない低い声だった。

（なんだったんだろう……）

もし、ホームズと関係なかったら知らないと言うだろうし、逆に知っていても話を逸

らされる気がする。

どうしたもんか、と考えているとデイラックはレイアに言った。

「まあ、余り根を詰め過ぎるなよ」

「大丈夫です。それよりも、ホームズの事について何か知りませんか？」

レイアとしてはあの声について、少しでも何か情報が欲しかった。なので、一番知つていそうなデイラックに尋ねた。

対するデイラックとしては、全部を応える訳にはいかない。なので、慎重に言葉を選びながら、応えた。

「…そうだな、小さい頃から母親に付いて旅をしていたらしいぞ」

「友達とかは？」

「どうだろうな……」

彼の会話から出てきたのはアルクノアと両親、特に母親の話だけだった。

「なるほど…なんか分かりました。ありがとうございます」

「? ああ、別に構わないぞ」

何に納得したのか分からなかったが、とりあえずデイラックはレイアにそう言つておいた。

レイア考える、彼には友達がないのでは無いか？と。何せ小さい頃から旅をしてきたのだ。友達を作るとは難しかったのだろう。それで寂しい思いもしているだろう。だから、声音を変えてまで話相手がいるよう装っているのではないだろうか？

だが、今は違う。自分がいる。向こうがどう思っているかは分からないが、自分としては友達のもり、いや、友達だ。だから、もう寂しい思いはさせないようにしよう。新たな友の為、レイアは見当違いの決意を固くした。



「へつくしよい!!」

「きたねえな、手を抑えろ」

「草で両手がふさがっているんだ無理に決まっているだろう」

ただいま草取り中。玄関掃除を無事終わらせてホームズは草取りに専念していた。輝く太陽眩しい限りだ。

「とういか、君手伝ってくれないかい？」

「猫が草取りしていたら、不気味だろう」

正論を返された。

「働かないくせに口だけは達者だよな」

ぶちぶちと文句を言いながら、ホームズは草取りを続け、時計をみた。

「と、そろそろ診察の時間かな」

そうつぶやくと、ソニアに一言いって、ホームズ達はマテイス医院に向かった。



「ふむ、順調だな。無理はしてないみたいだ」

「しませんよ」

ディラックの言葉にホームズは呆れたように、言った。ちなみに、ヨルはいつものごとくレイアが預かっている。

「今日はもういいぞ。また、明日な」

「ありがとうございます」

そう言うのとホームズは服を着直して出て行った。

待合室に行こうとする途中レイアとすれちがった。

ヨルはヨルで、レイアの後をてくてくと歩いていった。

「ねえ、見て見て。ヨル君、わたしの後ろをててくと付いてくるんだよ。かわいいよね、目標までもう少しかな？」

レイアはホームズに誇らしげに語った。しかし、今はそんな事はどうでもいい。

「今なんて言った？」

「ねえ、見て見て」

「その後」

「わたしの後ろをててくと」

「もつと後」

「目標までもう少しかな？」

「行き過ぎ、少し前」

「かわいいよね」

「ハイ、そこ」

ホームズは考える。こいつ、今なんて言った？

「かわいい？」

「うん！昨日はなんかつれなかったけど、今日はこうしてわたしの後ろについて来てくれたし、」

単純に、ホームズと離れないようにしていただけなのだが……

「しかも、その様子がかわいいのなんので、きつと会話出来たら楽しいだろうな……てどうしたの？ 頭抑えて？ 大丈夫？」

「大丈夫、頭痛が痛いだけだから……」

「本当に大丈夫?! 凄く頭の悪いこと言ってるよ!」

「大丈夫、大丈夫。そろそろ昼ごはんだから帰るね、ヨル。」

ホームズはヨルを呼ぶと肩に乗せ、宿屋ロランドを目指した。

「あのさ、ホームズ」

「なんだい？」

「なんか、困っている事があったら言つてよ。わたし達友達なんだからさ」

「いや、初耳だけど……」

間髪入れずに、ホームズは返した。

『『同じ釜の飯を食う』っていうじゃん。だから、わたし達は友達!』

「まあ、いいけど……」

少しレイアに押されながらホームズは了承した。

「というわけだから何か困っている事や寂しい事があつたらなんでも言つてね」
少し、勘違いしているとはいえ、レイアらしい友達を思う発言だ。

「いや、特にないけど……」

「隠す事なんてないよ！なんでも言って！わたしなんでもするから！」
レイアらしい友達を思う爆弾発言だ。

「とりあえず、黙って！そして、君はもう少し喋る前によく考えてえええ！」
ホームズの心からの叫びがマティス医院にこだました。

◇◇◇◇

「すっごく疲れた……」

ホームズはフルーツ焼きそばを食べながらボヤいた。

基本的に今日の疲労の原因が1番の原因はレイアである。

「ほら、シャキツとしな。次はお客さんの部屋の掃除だよ」

そんな、ホームズにかけるソニアの言葉は容赦ない。

「……はい、がんばります」

ホームズはフルーツ焼きそばを食べ終わると外で食事をしているヨルのところに行った。

「ほれ、行くぞ」

「……お前昼飯なんだった……？」

「フルーツ焼きそば」

「ほんと、一回死ねばいいのに……」

ヨルは昼飯も魚そばろだ。

「物騒な事言うのやめてくんない。……ほんとにどこがかわいいのか理解できないよ……」

「俺に言ってもしょうがないだろ。ほれ、早く掃除に行くぞ」

「くそ、働かないくせに言う事だけは一人前だよ」

「人じゃないけどな」

「本当に、こいつと会話しても楽しくない……」

ホームズはヨルを肩に乗せ、客室の掃除に向かった。



「レイア、今日はもういいぞ」

「はーい。それじゃあ、また明日」

レイアは、そう言うのと荷物をまとめて自分の家に帰った。家につくと、ただいまと言い、食堂の方を見る。すると、

「ヤツホー、ホームズどうだった仕事は？」

ホームズが席に付いていた。

「おかえり。至つて普通に終わったよ」

「本当に、怪我人とは見えない働きだったよ」

ソニアが、料理を持ってきながら言った。今日の料理はチキン南蛮だ。

「少し、疲れたように見えただけど大丈夫かい？」

と付け加えた。

「ええ、別にこれぐらいだったら大丈夫ですよ」

原因は別のことだとホームズ心の中で苦笑いした。

「ふーん、無理しちやダメだよ」

レイアは、そう言うといたきますと、チキン南蛮を食べ始めた。

「……肝に命じておくよ」

釈然としない顔で言うのと、いただきますとレイアに続いた。

「やっぱ美味しいね。こりゃ、評判になるわけだ」

「誰かから聞いたの？」

「さつき、お客さんが来てね、その時間いたんだよ」

うん、美味しいとホームズは食べていた。

「料理といえば、ホームズは料理出来るの？」

「焼くだけ、とか煮るだけとか、そういう単純なものなら、出来るよ」

「……随分と豪快だね」

ひきつり笑いでレイアは返す。

「ま、繊細な料理は出来ないね。そういうレイアは、できそうだね」

チキン南蛮を食べ、ご飯を食べる。甘酸っぱいたれが、ご飯にあう。うん、美味しい。

「まあね！でも、ジュードの方が上手だよ」

「……あの子料理も出来るの？」

ホームズのはしが止まった。

「うん。とっても美味しいよ。機会があつたら食べてみなよ。」

「……考えとくよ」

ホームズは遠い目をしながら応えた。

そうして、最後の一切れを食べ終える。

「ごちそうさま。明日も今日ぐらいに起きればいいんだね？」

「うん、そうだよ」

レイアの方はまだ残っている。ご飯を食べながら応えた。

「だったら、目覚まし時計を貸してくれないかい？」

もう、あんな起こし方をしないとと言われても、毎朝わざわざ自分を起こしに来てもらうのは、悪い気がする。

「いいよ……ちよつと待ってて」

レイアはそういうと、自分の部屋に行つて、時計を持ってきた。黒い猫型の置き時計だった。

「……なに、これ？」

「ヨル君みたいでしょ！」

悪気がないからこそ、たちが悪い。

「……ああ、うんそうだね。ありがとう。ここでの仕事が終わったら必ず返すよ」

「いいんだよ。猫好きなホームズにあげるよ」

「猫好き？」

理解できないという風に聞き返す。

「だって、どこ行く時もヨル君を肩に乗せて移動してるじゃん。」

「……そっか、そう見えるのか……」

今日の疲れが一気にきた気がする。こういう日は早く寝よう。そう決意し、自分の部

屋に向かった。



「なんだそれは？」

「目覚まし時計。さつきレイアに借りた」

「なんで、黒猫？」

「レイアに聞いておくれ。おれはもう疲れた」

そう言うのとベットに倒れ込んだ。

「フン、軟弱だな。その程度で疲れたとか言っているのか」

ヨルは馬鹿にする様に言った。それを聞いたホームズは、ベットから起き上がり、ヨルの方を向いた。

「どうして、君にそんな事を言われなければならないんだい。だいたいね、君のせいでこうなった事を忘れたのかい？」

「知った事か。全部お前の実力不足だろうが」

「だったら、君も自分の正体を隠す事という実力が不足していたんだろう」

「誰だつてぬいぐるみが喋れば驚くだろう」

「はあく、やだね。あんなに『お前らの常識で凶るなよ』とか言つといて、女の子の持つているぬいぐるみが喋つただけであんなに驚いちやてさく。ぷぷ、化物が聞いて呆れるよ」

「お前にだけは言われたくないな。初めて俺とあつた時の慌て様今ここで再現してやろうか?」

「何だい? 洞窟でも再現するつもりかい? 要石でも、用意するつもりかい? やだやだ、実現不可能な事ばかり言つて」

「……相変わらざるへらず口だな。ガキの頃から変わりやしねー。」

「君にだけは言われたくないね。初めておれと会つた時のへらず口を今ここで再現してあげようか?」

「何だ? 洞窟でも再現するつもりか? 要石でも、用意するつもりか? やだやだ、実現不可能な事ばかり言つて。」

「このくそ猫!」

「何だくそ毛!」

2人いや、1人と1匹は睨み合った。そして、また言い合いを始めた。もう、誰にも止められない。

「だいたいな、『疲れた』じゃねーよ。報酬貰つて、美味しい飯食つてんだから、我慢し

ろ阿呆。俺なんて、三食ずつと魚そぼろだぞ、どうしてくれんだ」

「当然だろ！君なんにもしてないじゃないか!!働きもしないで、おれの肩でぶつくさ喋ってるだけじゃないか。そんなんで美味しい飯だけありつこうなんて虫が良過ぎるよ。寧ろ、ご飯が出ただけでも、感謝しなよ!!」

「これが、感謝のしたくなるような飯だったら、いくらでもしてやるよ。お前も食ってみるか？」

「遠慮しとく。前も言ったけど、おれはカロリーのある物を食べたい」

「俺だつて食いたいわ！なんで、お前ばかり！」

「だから、働いてないからだつていつてるだろ!!」

「お前だつてろくな働きしてないくせに、この給料ドロボー！」

「残念でした。さつき『怪我人とは見えない働きだったよ。』とのお言葉を貰いました。君とは違うんだよ、ただ飯食らい！」

「俺が食つてんのは飯じゃなくてエサだ！」

「つままない揚げ足とつてんじゃないよ！猫なんだからそれで我慢しなよ！」

「ふざけんなよ！お前が回復して、そして、借金払い終わるまでエサで我慢出来る訳ねーだろ！だつたらお前やつてみるよ！」

「無理に決まつてるだろ！おれは人間だよ！猫のエサで我慢できるわけないだろ！」

「俺だつて無理だ！何度でも言うが俺は猫じゃねーんだよ！」

「じゃあ、何だつて言うんだい！精霊でもない！魔物でもない！猫でもない！人間でもない！自分の存在が行方不明じゃないか！自分探しの旅（笑）でもするかい？」

「お前にだけは言われたくない！何いい年こいて、母親探しの旅をしてるんだ、気持ち悪い。あれは、小さい子がやるから感動をさそうんだよ！お前みたいな奴がやつたらな、勘当するわ！」

「それで、上手い事言つたつもりかい！何にも上手くないぞ！だいたいね、おれは別に母さんを探してる訳じゃないだろ！母さん達の故郷を探してるんだ！何年一緒に旅してるんだい？君、存在だけで無く、記憶まで行方不明になつてんじゃないの？」

「誰の記憶が行方不明だと？ただの言葉の綾だ！それも分からないのか！この阿呆!! だいたい俺は化物だつてんだろ！お前こそ記憶が行方不明になつてんじゃないのか？」

「このヤロー……人の旅の理由を馬鹿にしといて好き勝手言いやがつて……」

「何だその目はやる気か？」

彼等は立ち上がり構えた。そして、ふつと小さく笑うと

「上等だ！」

飛びかかった。

「……今、ヨル君喋ってなかった…？」

ノックして、入ってきたレイアにも気づかず。

全ての道はホームズに通ず

「やあ、レイア！どうしたの？」

今にもヨルに向かって回し蹴りを放ちそうな状態で爽やかな笑顔を向けながら言った。

「ああ、うん。ヨル君？のお皿を取りに来たんだ」

「なるほど！じゃあ、これからは、おれが持つていくよ」

「よろしく！」

「ああ、任せて！それじゃあ、おやすみ！」

「うん、おやすみ！」

そう言つてレイアはホームズの部屋から出て行つた。

「じゃなくて！今ヨル君喋つてたよね！」

そして、すぐに戻つて来た。

「気のせいだよ。」

「昨日の夜も聞こえたんだけど」

「実はおれ、腹話術が得意なんだ。なあ、ヨル！」

「そうだな、ホームズ」

『『上等だ』つてハモつてたよね』

「……………」

万事休す。もう、言い訳のしようがない。

「諦めたらどうだ」

ヨルは言うが

「レイア、これは夢だ！ さあ、ゆっくり寝るんだ。明日も早いぞ。」

「わたし、明日休みだけど」

ホームズは諦めない。

「なら、余計に休まなくちゃ。夜更かしはお肌の天敵だよ。可愛いレイアがお肌ボロボロになる所なんて、おれは見たくないぜ☆」

「うわあ……………」

キラツと爽やかにウインクをしながら、言うホームズにレイアはドン引きだった。

「いつも言ってるだろ。お前が、そう言う事言っただってギャグにしかならないんだよ」
いつものテンションに戻ったヨルが冷静に言う。

「おれの何がいけないんだー！ー！」

「全部」

「全部だね……」

ホームズの叫びにレイアとヨルは口を揃えて言った。

「全部ってなにさ、具体的に言つてよ！直すから！」

「顔と存在」

「死ねつてか?!あと、レイア、君も何か言つて！」

「ドンマイ？」

「なんで疑問形?!」

もうやだお前ら全員敵だ、とか言つてホームズは膝を抱えてしまった。

「なんか、話進まないな。わざとやつてるのかな？」

「今回はガチだな」

「今回？」

レイアはげんそうに聞いた。

「そいつにとつて話を逸らすのと本当の事を隠すのは専売特許だからな。お前も心当たりがあるだろ？」

レイアはカレーを食べた時の事を思い出す。

「……そうだね……」

だったらと続ける。

「ヨル君教えてよ。あなたは、何者なの」

「精霊に近い化け物つてところだな」

「化け物？」

「そいつはね、かつてリーゼマクシア中を地獄にしたんだつてさ」

いつの間にやら復活したホームズが机に座りながら話に加わってきた。そして、どつか適当に座つてと言つてレイアを座らせた。

「フン、もう傷ついたふりはいいのか？」

「……今回はガチなんだけど、君もさつきそう言つてたよね？」

「さあな」

「このヤロー……ま、話してあげるよ」

そう言つて、ヨルの事を話した。かつてリーゼマクシア人の霊力野^{ゲイ}からマナを絞りとつて殺しまくつた事、封印されていたこと、そして、ヨルがホームズに取り憑いてい

ること。

「なるほど、だからいつも一緒にいたんだね」

「そゆこと」
それにしても、とレイアは言う。

「ヨル君がそんな、大悪党だったなんて……ひとは、いや、猫は見た目によらないね」
「結構見た目で分かったと思うけど……」

真つ黒で怪しき倍増だ。

「でもさ、大丈夫なの？ また、ヨル君がまた周りの人の靈力野ゲイトからマナを絞り取るなんてことしたりするんじゃないの？」

「それはないよ。その封印術は強力でね、彼が取り憑いている人間以外の靈力野ゲイトからマナを取ることとはできないようにされているんだ」

「ま、後は精靈術からマナに変換して吸収することぐらいだな」

「何それ！ そんなことも出来るの?!」

レイアは驚いたようだった。そんな状態の彼女にホームズは言った。

「出来るんだなこれが。そう言えば、その能力は禁止されなかったんだね」

「それを、封じないからこそその強力な封印だったんだらう。俺に掛けた封印は一定条件下でのみ最強の封印だったんだからな」

それらの話を聞いていたレイアは言った。

「よくわかんないけど……つまり、ヨル君にもメリットを与えることで封印を強くしたってこと？ ギブアンドテイク的な？」

その話を聞いたホームズは目を丸くして言った。

「まさにとそれ！よく分かったね。さすが看護師を指すだけのことはあるね！」

「いや…看護師関係ないとおもうけど」

若干呆れながらレイアは言った。それよりも、と続ける。

「ヨル君に与えられた、メリツトって何？ああ、ヨル君応えて。ホームズだと本当の事を話してくれなさそうだから」

「信用ないな……おれ」

「自業自得だろ。まあいい、話してやる。幾つかあるが、ひとつは、さつき言った通り、俺の精霊術を食う能力が封じられなかったことだな」

ヨルは、爪を一本出していった。そして、2本目を出して続ける。

「二つ目は、人間が、要石に触れそしてその人間の願いを叶えてやれば封印が解かれること。まあ、逆に願いを叶えられないと封印は解けないんだがな」

3本めの爪を出す。

「三つ目、取り憑いている奴が事故や病気つまり、殺される以外の方法で死ぬと取り憑いている状態から解放される、晴れて自由の身で奴だな」

4本めを出す。

「四つ目は、さつきも取り憑いている人間の霊力野からはマナを好き放題手に入れる事ができる、てところだな」

レイアはしばらく考え込むと口を開いた。

「さつきも気になったんだけどさ、ホームズ大丈夫なの？ 霊力野からマナを好き放題取られて」

「大丈夫だよ。おれ、^{ゲイト}霊力野ないというか、退化しているからマナを作りだせないんだ。だから、『^{ゲイト}霊力野』からマナを取るなんてことヨルには出来ないんだよ」

「だったら他のところから……てそうか！ 封印のせいで霊力野からしかマナを取れないのか」

「そう言う事」

「最初から分かっていたいればな……10年以上こいつと一緒になんてことなかったのに……」

「ああ、なるほどホームズに騙されちゃったのか……」

レイアは少し同情するように言った。

「騙すなんて人間きの悪い。ただ、おれは本当の事を言わなかったただだよ。勝手にそのバカが勘違いしただけだ」

ホームズは心外そうにそう言うのとヨルをバカにし始めた。

そんな彼らを見てレイアは言った。

「君達仲悪いね……初めて見た時とは全然そうは見えなかったのに」

「……どこをどう見たら仲良く見えるのさ」

「肩に猫乗せて旅してたらそうとしか見ええないよ」

そう言われて彼らはお互いを見た。

「やっぱ肩乗るのやめてくれないかい」

「歩くのたるいからやだな」

「こんの、クソ猫」

予想外の面倒くさがりな返しにホームズは顔を歪めた。

そんな彼らを見ていた、レイアはそう言えばと思いついたように言った。

「ホームズが殺された場合ヨル君はどうなるの？」

「ものっそい、物騒なこと平気っていうのやめてくんない」

げんなりしながら、ホームズは言った。もう、いい加減慣れた方がいいのかな、と

考えていた。

「俺が死ぬ」

そんなホームズを無視して、ヨルは続けた。

「じゃあ、ヨルが殺された場合は？」

「ホームズが死ぬ」

「君達にはデリカシーと言うものがないのかい？」

「だつたらさ……」

ホームズの言うことを無視して続けた。

「もし仮にホームズに靈力野ゲイトがあつたとして、そこからマナを絞り取つて殺しちやつたら、ヨル君も死んじやうじやないの？」

「なぜだ？」

「だつて、ホームズが殺されるちやうとヨル君は死んじやうんでしょ。分かる？」

「……………あ」

彼らはポンとそれぞれ手と肉球を叩いた。

「つまり、ヨル君はどちらにせよ、ホームズが自然に死ぬまで取り憑くはめになつてたんだよ」

「まあ、君の発言はスルーするとして……」

ホームズはヨルの方を見て言った。

「おれに会つたのが運のつき、てコトだね、ヨル」

「お互いにな」

彼らはニヤリと笑つてお互いを見た。

「ま、だいたいレイアの質問には応えられたと思うけど、あと何か聞きたいことある？」

ホームズはレイアに向き直るとそう言った。

「ホームズの願う事は何だったの？」

「昔、魔物達があるところを集団で襲おうとしていてね、それを、倒してくれと頼んだんだ」

レイアは怪訝そうに黒猫ヨルを眺めた。

「おい、ムスメ、お前信じてないな。封印が解けたばかりの俺はな、元の姿だったんだよ。だから、余裕だったんだ」

「元の姿？」

「そう、元の姿。マナさえ、足りてればお前なんか一捻り…ダブシュ」

「物騒なことを言うなっていつてるだろう」

ヨルはホームズのアイアンクローにより最後まで、言うことができなかつた。そんな様子を見てレイアにひとつ疑問が浮かび上がった。

「ヨル君はさ、」

「何だ？」

やっと、解放されたヨルは顔をさすって言った。

「願う事のデメリットは話したの？」

「当然だ。話さないと封印が解けないからな」

今度はホームズの方を向いて言った。

「じゃあ、ホームズは他人の為に自分の人生を犠牲にしたの？」

「別に、その時はその場におれもいたから、自分の為というのもあるけどね」

「フン、阿呆か。だったら何故、お前は自分を助けてくれと頼まなかった」

今度はヨルにも言われた。少し、ニヤリとしている所を見ると、どうやら、思うところがある様だ。

「別にどちらにせよ一緒だろう？自分だけ助かるうが、他の人も助かるうが、残りの自分の人生犠牲になるんだから。だったら、大人数助けた方がいいじゃないか」

それにね、ヨル、と続ける。

「おれが、最初に叶えようとした願いは、もっとバカバカしいものだったろう」
右手の指輪を見ながらそう言う。

「最初の願いつて？」

レイアがそう聞くとホームズはヨルを見て、人差し指を一本立てて口に持っていて言った。

「内緒。ヨルも言うんじゃないよ」

「へいへい」

レイアは、少しむくれた顔をしたが、すぐに直して言った。

「ま、いずれ話してくれるのを待つよ。お金を払い終わったら終わりだなんて、おもわないでね」

「おお、怖！せいぜい覚えておくよ」

ホームズは肩をすくめて言った。

「まあ、声の正体に分かって良かったよ」

レイアはにっこりと笑って言った。

「最初聞いた時は何だと思ったんだい？」

「誰かがいるのかと思ったよ。だから、次の日確かめたんだよ。」

「確かめた？いつ？」

ホームズは訳がわからないと言う顔をしている。

「今朝だよ」

「今朝って……まさか！」

「そのまさかだよ」

そう、レイアは朝ホームズを起こす時レイアは、ホームズの布団を全部引っぱがして
いた。あれは、布団の中に人がいないかどうか確かめていたのだ。

「なるほどね。じゃあ、客室からのゴミを確認したって言うのも？」

「朝確認したら、部屋にいなかったから、窓からにげたのかな？て思って、確認しに

行つたんだよ」

「あの時ゴミが落ちてないか確認したって言つてなかった？嘘付いたのかい？」

「別に嘘は言つてないよ。ちゃんと確認したし。そうだな……ホームズ風に言うなら、」

一旦言葉を区切るとニヤリといたずらっぽいな笑みを浮かべながら、

『『本当の事を言わなかっただけ』と言う奴かな』

やられた、とホームズは顔をしかめた。

「フン、一本取られたなホームズ」

ヨルにまで言われてしまった。

「そうだね。おれ達に気付かれないように調べて、最終的には答えに辿りついた。間違ひなく、今回はおれらの負けだ。大したもんだよ、君は」

「なんか、面と向かつて褒められると照れるね」

照れると同時に少し後ろめたい。何せ、ホームズの事をかわいそうな子だと思つていたので。まあ、この事は隠しておこうと思つたら

「まあ、大方おれの事、友達がいらないから声を変えてまで話し相手がいるように演じている、かわいそうな子だとも思つていたんだらう？」

しつかりばれてた。

「やっぱりばれた？ゴメンね。なんの痕跡もなかったから、そうかなて思ったんだ」
「なるほどね、それがマティス医院でのセリフに繋がる訳だ。…やれやれ、少し考えれば分かりそうなものだね」

そう言つてホームズは伸びをし、さて、と続けた。

「すつかり遅くなつちやつたね。そろそろ部屋に戻りなよ」

「それもそうだね。それじゃ、おやすみ！」

そう言つて、ずつと座つていたベッドから立ち上がり、伸びをした。そんな様子を見てホームズは呆れたように言つた。

「君ね……後学の為と言つておくと、夜遅くに男の部屋に来て、ベッドに座るといふのは、やめた方がいいよ」

レイアは一瞬何を言われたか意味がわからなかつたが、すぐに理解して、顔を赤くしながら言つた。

「だ……だつて、適当なところに座つてていったじゃん！」

「ちゃんと、椅子を空けてあげただろう」

ホームズは机に座りながら椅子を指した。

「……以後気を付けます……」

「よろしい」

そんな雑談(？)をして、レイアは出て行こうとした。しかし、ヨルはそれを引き止めるように言った。

「そう言えば、部屋に誰もいなかったのを確認した時、普通にドアから出て、玄関を通って行ったとは思わなかったのか」

ヨルの問いにレイアは事もなげに言った。

「思わないね。だって、お母さんに気付かれないように、そんな事をやるなんて不可能だからね」

そう言い残すと、レイアは部屋を出て行った。

残されたホームズ達は呆然としていた。

「レイアの母、ソニアさんて何者？」

「人間の母というものは、そんなんばつかか？」

「おれの母さんとソニアさんで考えない方がいいと思うよ」

「お前の母親も化け物みたいだったもんな」

「君がそう言うんだから相当だね……」

さて、彼らは思う。この突然きた疲労を解決しなければと。その為にもするべき事は何かと。

「寝るか」

こうして、ル・ロンドの夜はふけていった。

傷口に塩水を塗る

「フシャー！フシャー！フーゴー！フーゴー！」

「……………どういふセンスしているんだい……………」

「……………なんの音だ？」

むくつとホームズは起きてレイアから借りた時計を探す。

そして見つけると、スイッチを押した。

「……………目覚まし時計の音」

そう言つて、例の黒猫の時計をヨルに見せた。

「……………なんで、猫の威嚇音なんだ？」

「おれに聞かないでおくれよ……………」

そう言つとノロノロと起きて、ホームズは朝飯を食べに下に降りて行こうとした。部屋を出る前に振り返るとヨルに向かって言った。

「後で飯を、持つていつて上げるよ」

「『飯』を頼むぞ」

ヨルは眠そうな目で言った。

「……………いつてくるよ」

「おい、返事はどうした。おい」

ホームズはヨルのそんな言葉を無視して下に降りて行った。

◇◇◇◇

今日はレイアは休みである。だから、こんな朝早くにはいないはずなのだが……

「おつはよー、ホームズ」

元氣一杯に朝食を頬張っていた。

「……………今日休みじゃなかったけ？」

「休みだよ」

「なんで居るんだい？」

「朝の稽古をしていたからね」

「ふーん。あ、今日はミネストローネなんだ。」

そういうと、ホームズの意識はミネストローネの方にいった。野菜たっぷりで美味しそうだ。

「『ふーん』で片付けないですよ。他になんかあるでしょ、どんな稽古してたのとか」

「どんな稽古してたの」

憤慨したレイアに対して、どうでも良さそうにレイアに聞いた。その証拠に、ホームズはミネストローネと一緒に出てきたパンを真剣に千切っている。そんなホームズにこめかみをひくつかせながらレイアは言った。

「走り込みと素振りだよ」

「トマトサイコー」

「聞いている?!」

「聞いている聞いている」

ホームズはミネストローネに千切ってたパンを浸して食べている。

「やっぱり、武道家たるもの鍛錬は欠かせないんだよ。」

「パンうま」

今度はパン単体でも食べていた。ふつくらとした食感と小麦の味が実に素晴らしい。ハーモニーを奏でていた。

「ご飯派かパン派で分かれるよね。おれとしてはどちらでも可という、新たな選択肢が欲しい」

「いや、君の要望は聞いてない…じゃなくて！わたしの朝稽古の話の少しは聞いてよ
！」

「聞いてるよ。走り込みやって素振りしたんでしょもぐもぐとパンを食べながら、そう対応した。」

「そう、でもね、一人じゃ組み手出来ないの」

「……………」

「だからさ……………」

「ぐちそうさまー！」

ホームズは急いで朝食を食べ終わると席を立とうとした。

しかし、レイアに周り込まれてしまった。

「組み手の相手して欲しいなく、なんて」

やっぱりそう来たかとホームズは思った。組み手なんてそんな面倒臭いものゴメンなのだ。それに、

「あのね、おれは怪我人だよ」

「あ、やっぱりある程度戦えるんだ」

しまった、とホームズは顔を歪めた。言葉を明らかに間違えた。

「ということ、怪我が治ったら組み手しない？」

「治ったら、ここを出てくよ」

「お金返さずに？」

「……………治ったらね」

「よおし、約束だからね。今まではジュードとやってたんだけど、今はいないからさ勘が鈍っちゃうなと思ってたんだよ。いやゝありがとう」

「……………お役に立て嬉しいよ」

ハア、とため息を吐くとパンをおかわりしてまた、食べ始めた。

「ああ、そうそう。今日は宿の玄関掃除が終わったらマティス医院の掃除をしてくれって、お母さんが言ってた」

「……………君ね、そういうことは先にいってくれないかい。」

呆れながら、そう言うのとパンを食べ終え、ヨルの飯を持って二階に上がった。



「俺は『飯』を頼んだはずだぞ。『エサ』じゃなくて」

「いいだろ、別に。それに今日のは鳥そぼろ（薄味）だよ」

ホームズは着替えながら返事をする。ポンチョが上手く着れない。

「何が違うんだ。具体的に言ってみろ」

「鳥か魚か」

ようやく、着替え終わったので、今度は寝癖チエツクをする。

「そうじゃなくてだな……」

「いいから、早く食べておくれよ。今日も忙しいんだから」

「……クソ」

不満そうにヨルはエサ、もとい飯を食べ始めた。

ヨルが食事をしているうちに、ホームズは支度を終えた。

相変わらず、アホ毛がびよこんと立っている。

「どうだい？お味の方は」

「分かって聞いているな」

「当然」

ヨルは嫌そうな顔をする。何も答えず、最後の一欠片を食べ終えた。

ホームズはそれを確認するとさして、と気合を入れた。

「今日も一日頑張りますか！」

一丁前に腕まくりもしている。そんなホームズにヨルは聞く。

「この皿どうするんだ？」

「……持つて降りようか」

少し、気合いが抜けたが関係ない。今日も1日頑張るのだ。



「おはようございます」

「おはよう。君達早起きだね」

玄関の掃除をしていると子ども達が挨拶をしてきた。ちなみに、朝6時30分。

「うん！レイアよりも早起きしてやろうと思ったから」

「ふふふ、甘い。私はもうすでに起きているよ」

「わあ！びっくりした。急に後ろに立たないでくれよ」

子どもとそんな会話をしていると、レイアが人知れず後ろに立っていた。

「相手に気取られないように、後ろに立つのは武道家の基本だよ」

「ああ、そう、凄いな」

もう、まともに取り合うと疲れると判断したのか、引きつり笑いをしながら、レイアに返した。

「ねえねえ、レイア、早く遊ぼう」

「待った、朝ごはんは食べてきた？」

「ううん、まだ」

「だったら食べておいで。でないと遊んでる途中で倒れちゃうよ」

「ええ、大丈夫だよ」

「いいえ、大丈夫じゃありません。看護師命令です」

「ぶー。わかった。食べてくる、その代わり…」

「うん、たくさん遊ぼうね」

そう、レイアが言うのと子ども達は、家に帰って行つた。

「レイアって看護師なんだね。ちよつと忘れかけてたよ。」

そんなレイアを見ながら、ホームズはそう呟いた。

「どうゆう意味かな？」

「そういう意味だろ」

「君達、怪我が治つたら覚悟しなよ」

レイアのそんな脅しにも構わず、ホームズはとつと玄関掃除を終わらせた。

「さて、次はマテイス医院かな」

そう言つてホームズは歩き出した。すると、そこに一人の男が話しかけてきた。

「どうだい？レイアと一つ屋根の下は」

「誰だい？君は？」

「ジュードのダチつてところだよ。もちろん、レイアの事も知っている」
「ああそう」

ホームズとしては特に話すことは無いのだが……

「どうだった、お風呂でばったりはもうやったか？」

「おれが泊まっているの宿のほうだからそんなことないんじゃない？」

宿のほうの風呂だって、ちらつと見たら男湯、女湯と時間で分かれていた。うっかりレイアがそつちを使っても時間で分かれてればそんなことないだろう。それに、

「おれ、怪我人だからまだ風呂入ってない」

「え、嘘！言われてみれば少し臭うような……」

「嗅ぐな！」

これ以上傷口をえぐられたくないので、そうそうに黙らせた。

「じゃあ、あれは？」

「どれ？」

「あれだよ。『おはよう、朝だよ、起きて』みたいな奴だよ！起こしにくるアレだよ！」

「……あつたよ」

斜め下を向きながら言う。

「マジで！いいなく男のロマンだよな。で、どうだった。ときめいて心臓バクバク

だったろ」

「……………うん、そのまま死ぬかと思ったよ。」

昨日の朝の騒動はまだ、記憶に新しい。ヨルもホームズも遠い目をしている。

「だがしかし！勘違いしてはいけない！」

男はまた、熱く語った。

「何を？」

「レイアはジュード一筋なのだ。だから間違っても……」

そんなこと、本人見てれば、一発で分かるのだが、それよりも、

「きみきみ」

「なんだ？」

「後ろ」

レイアが仁王立ちでその男の後ろに立っていた。

「何してるの？」

笑顔が逆に怖い。

「いや、男のロマンとレイアについて語り合っていたただけだ、な、ワトソン君」

「ホームズです」

ホームズはそっけなく返す。

「へえー」

「ゴメンなさいー！」

レイアの迫力に押されてそのまま男は駆け出して行ってしまった。

すると、今度はホームズの方に向き直りホームズの肩に手を置いて詰め寄った。

「今、なにも聞いてないよね」

「えーと、ジュードのこと？というより、顔近いんだけど。」

「き・い・て・な・い・よ・ね！」

「もちろん！たとえ聞いてても忘れるさいーな、ヨル！」

「俺に振るな阿保」

ホームズとヨルがそう言うのとレイアはよろしい、と一言言つてどこかへ行つた。

「あれで隠してるつもりなのか？」

「女心は複雑なんだよ」

彼らは素晴らしいながら、マティス医院まで行つた。

◇◇◇◇

「なんだか疲れている様に見えるが……」

「ああ、気にしないでください。色々あるんです」

ホームズは仕事を聞きがてら、診察を受けていた。まだ、患者も他にいないというところで、ヨルも連れてくる。

「とりあえず、この調子でいけば近いうちに包帯も取れるだろう。ああ、包帯を濡らさない様にすれば頭を洗っても大丈夫だぞ」

「ありがとうございます」

ホームズはそう言うのと、服を着直していた。

「ところで、仕事って？」

「ああ、玄関掃除と草取りをお願いしたいのだ。もちろん、その分治療費から差し引いておく」

「了解です」

ホームズはヨルを連れて外に出た。

マティス医院の庭は青々と草が生えていた。

「多いな草。でも、もう少し。」

ホームズはそう言いながらぶちぶちと抜いていた。そして、ヨルは……木の上で寝ていた。

「君、なにしてるの？」

「見ての通りだ」

あくびをしながらそう言うと、また、寝ようとしていた。しかし、ホームズはそれを許さず、ヨルに石をぶつけた。

「いて、なにしゃがる」

「見ての通りだよ」

ホームズはそう言うのとまた、草取りを始めた。ヨルはもう一度寝ようと思ったが、また邪魔されそうなので、諦めて木から降りて、ホームズの肩に乗った。

「それで、調子はどうだ」

「誰かさんと違って寝てないからね、疲れてしょうがないよ」

「ま、猫の特権て奴だ」

ホームズの嫌味にたいして、ヨルは詫びれもせず、むしろ自慢げに言った。

「こんの、クソ猫」

「なんだ、クソ人間」

殺伐とした会話をしながら、草取りをしていた。

「相変わらず、仲悪いね」

「レイア?! どうしたの?」

そこには、今日は休みのはずのレイアが居た。いつもの、リーゼマクシアの民族衣装

を少し着崩したものを着てそこにいた。

「車椅子を借りに来たんだ」

「車椅子？」

訳が分からないという風にホームズとヨルはハモった。

「そ、そのついでに様子をみにきたんだけど……」

レイアは、ホームズの隣にある草の山を見る。

「草取り上手いね……」

「いや、こんなのに上手いも下手もないだろう」

レイアの言葉にヨルは呆れながら言った。

「ふふん、分かる？ おれ、草取り得意なんだ」

「いや、だから……」

ヨルのツツコミは無視してホームズは続ける。

「旅をしていると、食糧が尽きちゃう時があつてね。このままじゃ餓死しちゃう、ということ、食べられる草を出来るだけたくさん手にいれようと何度も引っこ抜いていたんだ。そして、そのうち特技になつちやつたんだよね」

「……命懸けの理由だね」

人の特技にどんな物語があるのか、なかなか分からないものである。

「死ねばよかったのにな……それなら、俺もこいつから解放されたのに……」

「ヨル、聞こえてるよ」

「へいへい」

ホームズとヨルはまた、険悪な雰囲気を出していた。

「仲良くしなね」

レイアはそう言うとマティス医院に入って行った。それを見送ると、ホームズは呟いた。

「しっかし、まあ、車椅子なんて、何に使うんだろうね。誰か怪我でもしたのかな？」

「その割には落ち着いてただろ」

「それもそうだねっ……と。よし終わった。こんなもんでいいだろ」

草取りを終えるとその大量の草を裏のゴミ捨て場に持っていった。

そして、マティス医院の玄関に戻ってきた。途中車椅子を意気揚々と押しながら出て来たレイアを見たが、気にしないことにした。

「玄関掃除の箒ってこれを使えばいいんですか？」

受付にいる女性にホームズは聞いた。

「ええ、ふふふ」

「どうしたんですか？」

突然、微笑んだエレンに不思議そうにホームズは尋ねた。

「いえ、相変わらず仲が良いなと思ってね」

そういうしながら、肩に乗っているヨルを指さした。

「ははは、そうですか……」

ホームズは力無く笑うと外に出て玄関掃除を始めた。

「仲が良いてさ、ヨル君」

「忌々しいな。」

「そうだね……」

そんな会話をしながら玄関を掃いていた。ちゃんと角の方を箒で掃いて、ゴミをかき出していた。

「それにしても、いくら考えてもわからないな。車椅子なんて、何に使うんだろう？」

今度は、玄関から正面門までのスペースを掃いていた。

「お前、まだ考えていたのか？」

「だって、不思議じゃない？」

そのゴミを今度は外に掃き出した。

「考えたって仕方ないだろう」

「そりゃあ、そうだけどさ」

そして、そのゴミと含めて外のゴミを一緒に掃いて、一箇所に集めだした。

「案内乗って遊ぶつもりだったんじゃないのか」

「まさか」

「だよな」

「ワハハハハハハ！」

彼らは顔見合わせて高笑いした。

そんな彼らの前を、

「どいてどいて!!」

ものすごいスピードで車椅子が爆走しながら下ってきた。子供達も一緒にいる。そしてその車椅子はホームズがせっかく集めたゴミを撒き散らして、通り過ぎて行った。

「……………今、レイアが乗ってなかった？」

「乗ってたな。あのひらひらは間違いなくあのムスメだな。」

彼らは呆然としていた。

「ま、とりあえず、散らばったゴミを集めますか」

ホームズは再び箒で掃き始めた。その時ヨルはふと言った。

「……………今思ってたんだが、この緩やかな下りの先って確か港じゃなかったか」

つまり、海があるのだ。

「……………あ」

思わずホームズは海の方を見る。

「……………まずい!!」

気付いた時には、ホームズはもう、駆け出した。

◇◇◇◇

ホームズは可能な限りの全力で走って港まで行ったのだが……

「うーそー!」

時すでに遅し。レイアは海に飛び込んでいた。

「何やってんだ、あの子は」

「!!」

そのホームズをつぶやきに近くにいたつり目の少年とその少年に背負われた金髪長髪
の女性がホームズの方を見た。

しかし、ホームズは、そんなことに気付かず急いでポンチョを脱ぎ捨て、助けに行こ
うと、海に飛び込んだ。

そして、気付いた。

自分が今、怪我人だということに。

「いててててて!!傷口に塩水がしみる。助けに来といてなんだけど助けておくれ!へルプミー!」

「無理!わたしも自分と車椅子を助けるのに精一杯!自分でどうにかして!」

「じゃあ、ヨル!!」

「俺が助けられるわけないだろう」

サイズはただの黒猫だ。ぶかぶかと海に浮かんでいる。

「薄情者共、覚えてろ!」

そんな、カオスと化した海を金髪長髪の女性とつり目の少年、ミラ・マクスウェルとジュード・マティスはそれぞれなんとも言えないような表情を浮かべながら眺めていた。

いつかの敵は今日の友

「ハア、ハア、車椅子に乗って……はしゃいでお……まけに、海に落ちるなんて……き……み……いくつだい？」

「15さいです」

「お前も……後先考えずに飛び込みやがって……いくつだい？」

「……さいです」

なんとか、海から上がった2人と1匹（と車椅子）は息も絶え絶えに会話をした。そして、レイアはなんとか、近くにいる人に声をかけた。

「ごめんなさい、大丈夫でした……か？」

レイアは顔あげながら聞いた。

ちなみに、ホームズは顔をあげる余裕はない。まだ、息切れしている。

「レイア………ただいま」

つり目の少年、ジュード・マテイスは少し戸惑ったようにいった。

「なんで、ジュード？」

「は、ジュード？」

ホームズも顔をあげる。そこには、まごうことなき、自分達を殺しかけたジュード・マ
ティスとミラ・マクスウェルがいた。

対するレイアも戸惑っている。

「え、えー、何してるの!?!」

「あ、それ、おれが言おうと思ってたのに。」

ジュードは呆れたように戸惑ったようにしていた。

「レイアこそ……」

「あ、それおれも聞きたい」

「僕は君にも同じ質問がしたいよ」

ジュードはジト目で、ホームズを見る。

そんな2人に構わず、レイアはジュードの質問に答えた。

「ああ、これは、この子達がかけてここで競争したいっていうから、わたしを押ししてハ
ンデ付けないと勝負にならないって思って」

「レイアが1番楽しんだように見えたけど……」

「それでさ……ジュードはなにしてるの?」

「知り合いか? ジュード?」

今度は背中にいる、ミラが聞いて来た。

「その、幼馴染なんだ」

ジュードの答えにミラは納得すると、今度はホームズ向かって聞く。

「なるほど、それで貴様は何故ここにいる」

「ホームズの知り合い？」

レイアはホームズ聞いた。ホームズはなんとも言えない顔で頷いた。お互いがお互いの事を知っているのだ。知り合いと言っても嘘ではない。

「ミラ、て言うらしいよ。周りの連中がそう呼んでた」

「答えろ」

ミラはホームズに向かってもう一度言った。

聞かれたホームズはいつものように人差し指を一本立てて口に当てて言った。

「内緒。男は秘密があった方がカッコいいからね」

「借金返せなくてうちで働いてるの」

「ちよ、もうちよつとなんか、言い方ないの？」

格好付けたホームズを他所にレイアが血も涙もないバラし方をした。

「借金？何故そんなものをした？」

「君がそれを聞くかい……」

ホームズは恨めしそうに言った。そんな2人を見てレイアは不思議そうにホームズ

に聞いた。

「何かあったの？」

ホームズは再度人差し指を一本立てると口に持って行き言った。

「内緒。男は秘密があった方が……」

「ああ、はいはい。つまり、言う気はないんだね」

レイアはホームズの言葉を遮ると、ミラに向き直っていった。その時、ホームズは悲しそうな顔をしていたが、知ったこつちゃない。いい加減そのセリフにも、うつとおしくなってきたところだ。

「よろしく、ミラ」

レイアはミラにそう、挨拶をした。

その直後、ミラの足がレイアの目にとまった。

ミラの包帯でそれぞれぐるぐるに巻かれた、両足が。

「ちよつと、彼女の足……」

すぐにレイアは子供達の方を向いて指示を出した。

「至急大先生に連絡お願い。急患が来るって」

「ラ、ラジャー」

そう言うとき子供達は走って行った。

今度はジュード達に向かって車椅子を渡し

ながら、言った。

「これ、使つて。家に帰るんでしょ、わたしも行く。ホームズ達はどうする?」

「おれも行くよ。誰かさんのせいで包帯びちやびちやだからね。代えて貰わないと」

「あはは、……ゴメン」

レイアは乾いた笑いをして、すぐに謝った。

「……反省してください。おかげで、寝巻きと合わせて2着しかない服の1枚がびしょ濡れで着れなくなっちゃったんだから」

ホームズはジト目を向けながら言った。その後、ジュード達に近づき彼らにだけ聞こえるように囁いた。

「というわけで、おれは今いろんな意味で満身創痍なんだ。だから攻撃しないでおくれよ」

そう言うのと有無言わず、ミラを車椅子に乗せた。

「ほら、ジュード、あとよろしく！」

ホームズはミラを乗せた車椅子をジュードに押し付けると、てくてくと先に歩いて言った。

「ちよつと、一緒に行かないの？」

「先に包帯を直しておかないと、君達の診察の邪魔になるだろう。」

レイアの問いにホームズはそう答えるとまた、マティス医院まで、歩き出した。彼らが見えない所まで来ると、ヨルが聞いた。

「本音は？」

「これ以上怪我をしたくない」

「ヘタレ」

「言ってる」

ヨルとそんな会話をしながら、ホームズはだんだんと歩くペースを速めていった。



「なるほど、そう言うわけでまたきたのか……」

「ええ、まあ、ごめんなさい」

「レイアは泳げるから、心配ないぞ」

「ええ、みたいですね」

ホームズはマティスの診察と言うよりも、包帯を巻き直してもらっていた。ちなみに診察の順番はホームズの状況に同情してくれた人達が譲ってくれたものだ。

「今日の仕事を今回の診察費として、計算させてもらうぞ」

つまり、プラマイゼロ。

「はい……分かりました」

「よし、終わりだ」

そう、ホームズに言うともティスは包帯を巻き終えた。

「濡れた服の代わりに、この入院服をつかうといい」

そう言つて、ディラックは半そで半ズボンの紐で縛るタイプの入院服を差し出した。

「ありがとうございます」

「替えの下着はあるのか？」

「給料前借りして昨日買ったので、ありますよ」

そう言つて、ホームズは着替え終えた。そして、いつものポンチョを羽織つた。

すると、ちょうどその時エリンが車椅子に乗ったミラを押して入ってきた。相変わら

ず、ホームズに敵意をむきだした。

「あなた、急患よ」

その言葉にディラックは真剣な顔になると、ミラを診た。

「じゃあ、おれはこれで」

あんまり長居してもしょうがない。それに、殺気たつぷりの目を向けられるのも居心地が悪いこと、この上ない。

「うむ。ああ、もう無茶はするんじゃないぞ」

「了解です」

ホームズは、診察室を出た。



ホームズが待合室に行くと、ジュードとレイアがいた。どうやら、何か話しているようだ。ちなみに、ヨルは隣で座っている。

「やつほー」

とりあえず、黙って立っている訳にもいかず、ホームズは挨拶をした。

すると、レイアが怒ったようにホームズを睨みつけながら詰め寄って来て言った。

「『やつほー』じゃない!! どうして、怪我の事を黙ってたの!」

「いや、何を言っているんだい? 怪我した事は知ってるだろう?」

そうじゃなくて、と要領を得ないホームズの返答にレイアは頭を掻きむしっている。

「どうして、怪我の原因がジュード達に襲われたせいだって言わなかったの!」

「誤解を招く言い方だね」

真剣に聞いてくるレイアに少しおどけたようにホームズは返した

「ふざけないで!」

対するレイアはそんなホームズの軽口を取り合わず、有無を言わさない勢いで問い詰めた。

ホームズはそんなレイアにひとつため息をついた。そして、考える。こんな事をペラペラと喋る奴は一人、いや、一匹しかいない。

「……………ヨル」

「俺じゃない。そのガキが喋ったんだ」

ヨルは、ジュードを見ている。

「俺がどんな存在で、そして、お前がそんな俺を平気で連れてくる事。さらに、お前が、俺の命を守る為に、自分の命を守る為に、こいつらと戦った事をな」

ホームズはその話を聞くと呆れるようにジュードに言った。

「君ね……人がせっかく黙っていたのに、自分で、喋っちゃうんなんて。全く、まあ、気持ちには分かんなくてもないけどね……」

そう言つてホームズはレイアを見る。幼馴染みの側にかつて、リーゼマクシア中で脅威を振るい、マクスウエルを筆頭とした精霊たちを敵に回した、化け物とそれを平気で連れている奴がそばにいる。なのに当の本人は、全く危機感を持つていないのだ。だから、自分達が、やった事を喋ったのだろ。結果全部バレしまったのだが。ホームズはジュード見て言う。

「君はお人好しだね……」

「さあ、答えて！」

レイアは詰め寄る。ホームズはハア、ため息を吐くとと諦めたようにそして、小馬鹿にするようにレイアに言った。

「あのね……『あなたの幼馴染みに殺されかけました』なんて、言えるわけないだろう」
もう少し正確に言うなら幼馴染みの、ジュードの話をとても楽しそうに話すレイアにそんな事は言えなかった、と言うのが本当のところなのだが…、本人がそばにいるので言わないでおいた。

「まあ、それもそうだね」

レイアはジュードを見て、それからホームズを見た。

「ホームズも他人ひとの事『お人好し』なんて言えないよ。というより……」

「自分を殺しかけた奴らを庇うなんて異常、いや、化け物とでも言うべきか」
レイアとヨルの口撃をホームズは食らった。

「君達ね、人の事を傷付けるのも大概にしなよ」

ホームズは胸を抑えながら恨めしそうに言った。

そんなホームズにジュードは言った。

「今は、ヨル君だっけ？その子が……」

「『君』はやめろ」

ヨルは嫌そうに口を挟んだ。

「あれ、レイアにはそう言われてるじゃないか」

ホームズがそう言うのとヨルは遠い目をしながら言った。

「あの娘に何を言っても無駄な気がする……」

「ああ、それ、当たり前だよ」

ヨルの言葉を瞬時にジュードは肯定した。

「……それ、どういう意味？」

「そういう意味だ」

ヨルはそう言うのとホームズの肩に飛び乗った。レイアはまだ、言いたい事があつたの

だが、それよりも先にジュードが、ホームズに言った

「ヨルが、今は危険じゃないという事をレイアから聞いたよ。ゴメンね、いきなり攻撃したりして」

「……本当に死ぬかと思ったよ」

ホームズは苦虫を噛み潰したような顔をしながらいった。

それと、と続けた。

「レイアを助けようとしてくれてありがとう。結果はどうあれ」

「最後の一言いらない」

ホームズは苦虫を5、6匹噛み潰したような顔をしながら言った。

「わたしからも、ありがとう。結局、自力でどうにかなったけど……」

「……………どういたしまして」

ホームズは苦虫を5、6匹噛み潰して渋柿を食べたような顔をしている。

対するヨルは笑い転げている。

ホームズは、そんなヨルの耳を有無言わさず引つ張った。

「いてえな。耳を引つ張るのやめろ」

「君も人の事笑うのやめろ」

そう言うと彼らは睨み合った。

そんな彼らをジュードは眺めながらレイアに言った。

「僕は彼らの事を少し誤解していたかも知れないな」

レイアは少し微笑むとジュードに言った。

「今なら仲良くできそう?」

レイアとしては、大切な友人たちとそして、特別な幼馴染みには仲良くして欲しいのだ。

「それは、試して見ないと分からないよ」

ジュードも微笑みながら言う。

ちようどその時、デリラックが診察室から出て来た。

「父さん……」

ジュードは、何とも言えない顔をしながら言った。そんなジュードに一瞥をくると口を開いた。

「来なさい。それと、ホームズ」

「はい?」

突然話を振られてホームズはマヌケな返事をした。

「患者が呼んでいる」

「……ミラがですか?」

「他に誰がいる」

「デスよね」

もう、悪い予感しかしない。

「第二治療室だ」

「……了解です」

そう言うと、ホームズはジュード達に手を振り、ヨルを連れて向かった。

親しくなくても礼儀あり

「気が重いぜ」

「ろくな要件じゃないだろうからな」

ホームズ達は第二治療室の前まで来た。ノックをするのも嫌なのだが、まあ、仕方ない。そう決意して、ホームズはノックをした。

しかし、返事がない。

このまま帰ろうかと思つたが、呼ばれた手前無言で帰る訳にもいかない。

「お邪魔しまゝす」

控えめにホームズは扉を開けて入った。周りを見るとベッドで目を閉じているミラが目に入った。

「寝てるのかねえ？」

「みたいだな。人を呼び出しておいて、いい度胸だな」

「君は、人じゃないだろう」

「言葉の綾だ、阿保」

そんな事を言いながらミラに近寄ると、ミラのベッドからナイフが飛んできた。

何の前振りもない、突然の攻撃だった。

そんな状況だというのにホームズは眼前に迫るナイフを当たり前の様に指で挟んで止めた。

「!!」

ミラは、完全な不意打ちの攻撃をあつさり止められて息を呑んだ。

そんなミラに構わずホームズはナイフを掴み直して刃をミラに向けて言った。

「随分と斬新なノックの返事だね。大精霊様は知らないようだから教えてあげるけど、ノックの返事でナイフを投げる必要はないよ」

「それは、知らなかったな。ありがとう、教えてくれて。」

ミラはホームズの話の聞きながら、気付かれないようにもう一刀投げる準備をした。

しかし、ホームズはすぐさまミラとの距離を詰めミラの喉にナイフの切っ先を当てた。

「『ナイフを投げる必要はない』と言ったのが聞こえなかったのかい？ ついでに言うなら、魔技をする必要もないよ」

ホームズは無表情に言った。

「ヨル」

「任せろ」

ホームズは、短かくヨルに指示を出した。それにヨルは応えるとベットに隠している、ナイフを取り上げた。

「さてと、一応聞いておくよ。何の為に呼びだしたんだい？」

ナイフを全部取り上げた事を確認すると、ホームズはミラの喉からナイフを外し、近くにあつた椅子に座つた。

「今ここで、シャドウもどきを殺す為だ。」

ミラの返答にホームズはやつぱりと言う顔をするとヨルと顔を見合わせてから言つた。

「それをされると、おれも死ぬんだけど」

「知っている。それは私も覚悟の上だ。そして、それは、お前も同じだろう？」

その言葉にホームズは顔を歪めた。

「やつぱり本当なんだね。クソ猫の嘘だと信じたかつたな あ」

ミラが、ヨルを殺してもホームズは死なないと嘘をつく事はあるかもしれない。なぜなら上手くいけば、ホームズの協力を得られるからだ。

しかし、ヨルが殺されたらホームズが死ぬと言う嘘はヨルがつく事はあつても、ミラがつく事はない。なぜなら、今の様にホームズに妨害されてしまうからだ。

「やれやれ、真実というのはいつでもつらいものだね」

ホームズは肩を落としながら言った。

「なんだ、俺の嘘だと思つたのか？」

「嘘じゃない可能性の方が高いと思つたけど、嘘だという僅かな可能性を信じてたんだよ」

ヨルが馬鹿にしたように言うのとホームズはそう返した。そんな彼らにミラは少し戸惑つた。

「ちよつと待て、お前はそれを知らずに契約したのか？ デメリットも説明しないと、封印は解けないはずだぞ」

「君の目の前にいるのはなんだい？」

ホームズは肩に乗っているヨルを指差す。

「どういう事だ？」

「さてね。君が少し間違えたんじゃないのかい」

「まさか！ いや……」

ミラにある考えが浮かんだ。しかし、それはあり得ない。いや、あり得てはいけけないのだ。

「どうかしたのかい？」

突然止まってしまったミラにホームズは心配そうに聞いた。

「いや、何でもない。お前の言った通り私が少し間違えたのかもしれない。とはいえ、こいつは倒さねばならない。お前には済まないが」

「相変わず凜としているね。恐ろしいくらいに」

「私から見ればそんな化け物を平気で連れてくるお前のほうが恐ろしい。どうして、平気なんだ？」

「いや、こんな奴どうやって怖がればいいんだい？」

制約のせいでホームズ自身を攻撃出来ない。おまけにどこにでもいる黒猫の風貌のような化け物ヨル。

それにね、とホームズは続ける。

「わかりやすい化け物なんかより、人間のほうが恐ろしいよ。おれはこの18年間でそれを学んだ」

うつむきながら言った為ミラからは表情は見えなかった。いつものような調子で

放った言葉だった。しかし、有無を言わせない迫力がその時のホームズにはあった。

「何があった？」

「色々……ね」

ホームズは微笑みながら言う。ミラはもう少し何があったのか問い詰めようとした。しかし、ホームズはかぶせる様続ける。

「そうそう、ヨルは今おれ以外のマナは絞り取れないよ」

「は？」

「制約のせいだね。だから、おれが生きてる限り、あるいは殺された場合は安全だよ」

「初耳だが……」

「まあ、オリジンの馬鹿が秘密裏にかけた物だからな」

ヨルは事もなげに言った。

ミラは考える。彼らが嘘を言っている可能性はないだろうか？ 答えはNOだ。自分達と戦っている時に自分達からマナを絞り取ればもつと楽に彼らは事なきを得ただろう。しかし、ヨルはそれをしなかった。

そんなミラにホームズは続ける。

「だからさ、おれをと言うか、こいつを殺すのは少し待ってくれないかい。精霊なんだから、60年や80年ぐらい大した時間じゃないだろう？ 我慢出来るだろう？」

ニヤツと笑いながらホームズは言った。

ミラは少し困惑したがすぐに面白そうにふふつと笑って言った。

「随分と大胆な交渉だな」

「これでも、商人なんですね」

ホームズは肩を竦めながら言った。

「ふふ、いいよ。待つてあげよう。そこまで、条件を出されて、飲まない訳にもいくまい」

「話がわかるね。さすがだよ、マクスウエル殿」

「シヤドウもどきもそれでいいな」

ヨルは嫌そうな顔をした。

「いいわけないだろう。その時がきたら、思い切り抵抗するぞ。死にかけのホームズが殺されないように、俺が殺されないように」

「往生際の悪い……」

ホームズは呆れて言った。

「当たり前だ。生きてなんぼなんだよ、この世界はな」

ヨルはまっすぐホームズの方を向きながら言った。そして、今度はミラの方に向き直ると言った。

「それと、俺をその名で呼ぶな」

「分かった。その時がきたら、しっかりと引導をわたしてやろう、『ヨル』」

「フン、やれるもんなら、やってみな」

ヨルは鼻で笑うとそう挑発した。

ちょうど、話に一区切りついたその時扉がそーっと開いた。2人が怪訝そうに見ているとジュードとレイアが入ってきた。ジュードは、何か箱を抱えている。ホームズはそんな様子を見ていると、ミラに耳打ちした。

「ナイフ投げなくていいのかい？」

「安心しろ。お前に礼儀を教わったから大丈夫だ。それより、君は一体何をしている？」

ミラは、何やら箱から取り出して作業をしているジュードに尋ねた。
するとジュードとレイアの2人から、静かにするよう指示が来た。

「なぜだ」

ミラは小声で尋ねた。

「父さんに見つかりたくないんだ」

ジュードはそう、力強く小声でいった。その様子を見ていたホームズはレイアに尋ね

た。

「なにかあつたの？」

「色々……ね」

「……何処かで聞いたセリフだね」

そんな会話を他所にジュードは着々と準備をしている。

「今からミラに医療ジントクスの施術をするから」

「だが、さつき無理だと言われたぞ」

「ねえ、おれ達さつきから全く話についていけないんだけど……」

ホームズがそうレイアに言うと、レイアが掻い摘んで教えた。ジュードはミラの怪我で動かなくなった足を直しに来た事。その為には、医療ジントクスという物が必要なこと。そして、その施術は無理だとテイラックに言われた事。その時の言い方が少し理不尽だった事。

「だから、ジュードがやろうとしているというわけか、そういえば彼は医学生だったね」

ホームズは納得しているなか、ヨルは、嬉しそうだつた。

「じゃあ、何か。あいつ今歩けないのか、ふふふそうかそうか、俺をフルボッコにした罰だ。ククク、ハーハツハハざまみロブシゆ！」

余計な事を言ったのですぐにホームズにアイアンクローを決められていたが。

「だから、さつき無理だと言われたぞ」

ミラはジュードに言う。しかし、ジュードはそれに応えず、レイアに指示を出す。

「手伝ってよ、レイア」

「ああ、うん。ミラ、静かにね。さ、横になつて」

ジュードに指示されたレイアは戸惑う様に返事をする。ミラに近づき横に寝かせた。

ミラが横になると、ジュードは先ほど箱から出した手のひらサイズの器具をミラの足に装着した。

「へえ、それが医療ジンテクスという奴かい？」

「うん、まあね。どうミラ？痛くない？」

物珍しそうにしているホームズにジュードはそう言い、ミラに聞いた。

「痛みどころか、何も感じないな。足もぴくりともしないぞ」

ミラは足から何も感じない状態に戸惑う様に言った。

「どうして、機能しないんだろう」

ジュードは無力感となぜという気持ちで混ざった様に言った。

ミラはジンテクスにはまっている石を取り出し、観察した。

「この石からマナを感じないな。君の父親はジンテクスには精霊の化石を使うと言っ

ていたぞ」

「精霊の化石って?! 本当にあるの?!」

ミラの言葉にジュードは驚いている。

『精霊の化石』ね……」

ホームズはつぶやいた。

「どうした?」

ヨルは、握られた場所を痛そうにさすりながら言った。

「いや、昔どこかで聞いたなと思ってね」

ホームズはあごに手を当てながら考えた。

レイアはレイアで、何かに納得したように口を開いた。

「そっか、カルテにあった特殊な石って精霊の化石だったんだ……」

「それに、採掘してすぐに施術しないとマナを失うとも言っていた」

ミラはジュードの方を向きながらそう言った。

「……それじゃあなおさら、治療するなんて」

ジュードは悔しそうに下を見ながら言う。

「諦めたらどうだ」

ヨルは興味もなさそうに言う。むしろ、ヨルとしてはミラには歩けないでいてもらえ

た方が好都合なのだ。そんな、ヨルをジュードとレイアとミラは睨む。ホームズはヨルにアイアンクローを決めて床に叩きつけた。突然のとつぴな行動にジュード達は状況が飲み込めなかった。ホームズはジュードに向いて言った

「どこで聞いたか思い出したよ」

「いや、それよりヨル君大丈夫？」

レイアは心配そうに聞いた。ヨルが殺されない限りホームズは大丈夫とは聞いていたが、ヨルは先ほどからびくりとも動かないのだ。しかし、ホームズはそれを無視して続けた。

「母さんが昔言っていたよ。フェルガナ鉱山で昔精霊の化石が取れたってさ」

「本当？」

「ねえ、本当に大丈夫？」

突然の事に、ジュードは少しぼかんとしながら言った。

「さてね、昔の話だし何より母さんの話だから……」

ホームズは少し自信なさそうに言う。

「それでも、探す価値はあると思う」

ジュードは落ち着くとそう言った。そして、ミラの方を見て言う。

「ミラ、鉱山と一緒に行く事になるけど……」

「世話をかけるが、頼めるか？」

そんなジュードの問いにミラはノータイムで返した。

それを聞くとレイアは車椅子を持ってきた。とりあえず、ヨルの事は後回しだ。

「悪いけど、ジュードが乗せてくれる。私も準備があるから」

「レイアも行くの？」

「当たり前でしょ。じゃあ、街の出口で」

「じゃあ、おれもいや、おれ達も行くよ。」

ホームズはそう言って伸びているヨルをつまみあげた。そして、ニヤツと笑った。

「人手は多い方がいいだろう？」

ホームズはジュード達に言う。

「今持ち合わせは特にないぞ」

ミラがそう言うと、ホームズは人差し指を立てて言った。

「別に金はいらぬよ。ただね、ミラに、いや……」

その言葉を切るとミラの近くにより、ミラにだけ聞こえるよう耳元で囁いた。

マクスウエルに聞きたい事があるんだ、と。

「……すべてに答えられるかは分からないぞ」

ミラは少し考えるところだった。ホームズは意地悪そうに笑った。

「答えてもらうよ、意地でもね。……じゃあ、後でね」

最後にウイंकをして、部屋を出て行った。

「ちよ、待ってよ」

レイアは後を追うように出て行った。

2人と1匹がいなくなった部屋でジュードはミラに聞いた。

「大丈夫？」

「まあ、おそらく。向こうも怪我人だしな。手荒な真似をしても大丈夫だろう」
そう言つてミラは笑つてみせた。



「ちよつとホームズ！聞きたい事って何？後ヨル君はいつ復活したの？」

「さつきだ」

ヨルは前足で器用に自分の顔を撫でながら言った。

「なるほど……じゃあ、次はホームズ！」

ホームズは又給料を前借りし、港でレイアと服を選んでいた。マテイス医院から支給された入院服で鉾山に入る訳にもいかない。

おまけに、入院服の上にポンチョを被り、靴は安全靴と言うスタイル。一言で言うなら、

「ダサいんだよね」

「まあね、じゃなくて！聞きたい事って……」

「うん、これにしよう。どう思うレイア」

「ああ、それよりもその隣にある奴の方がいいよ」

「なるほど……あ、本当だ。ありがどうレイア」

「どういたしまして、じゃなくて!!何を聞きたいの？」

ホームズは服を選び終えた。長袖長ズボンこれなら、山に入っても大丈夫そうだ。

「聞いてる？」

「ああ、聞いてる聞いてる」

どうでも良さそうに、ホームズは返した。ホームズとしては、今は着替える事の方が先決なのだ。

「ほら、あれだよ。ちよつとミラの好きなタイプでも聞こうと思つてね」

「多分、ホームズみたいじゃない人の一言ですむよ」

「君……段々おれに対して容赦無くなつてきてるんだけど」

レイアの辛辣な一言でホームズは傷付きながら言つた。

「それで、何を聞くつもりなの？」

「内緒……」

「は禁止!!」

ホームズは持つてきた、人差し指を途中でおろしてため息を吐いた。

「なんで、そんなに食い下がらんだい？」

「あんな言い方したら、誰だつて気になる」

ホームズは着替える場所を見つけるとそこに入った。レイアは外で待つている。

「ああ。まあ、手荒な真似はしないから大丈夫だよ」

「……じゃあ、意地でも聞きたい事つて何？」

ホームズは着替え終えて、最後にいつものポンチョを羽織つた。逆立ちした時邪魔に

ならない工夫をして、完成だ。

「……おれの両親の故郷への行き方だよ」

ホームズは着替え場所から出てくると、街の出口に向かって歩きだした。

「ミラが多分知っているとと思うんだ」

「……根拠は？」

「おれの調査結果。それよりもおれに付き合つてないで、君の準備したらどうだい？」

「ああ、わたしの家にちよとよれば済むからね。大丈夫だよ」

そうこうしているうちに、レイアの家宿屋ロランドについた。入る前に後ろを振り返つてレイアはホームズに尋ねる。

「どうして、両親の故郷を探してるの？」

「自分の親がどこでどう育つてきたかを知りたいとは思わないのかい？それに、行つた事のない土地つてのは、行つてみたいと思うもんだらう？」

「旅をして何年？」

ホームズの言葉を聞きレイアは唐突に変な質問をした。

「物心ついた時から母親について行つて旅をしてたよ」

ホームズのその答えにレイアはさらに聞く。

「どうしてそんな時から旅をしていて両親の故郷が見つからないの？」

ホームズは一瞬止まった。

「……………鋭いね。でも、答えられないよ」

ホームズはそう人差し指を一本立てて口に持っていていき言った。エレンピオスには、アルクノアが深く関わっている。余計な事を言つてレイアを巻き込む訳にはいかない。

レイアは、ため息を一つ吐いてから笑つて言った。

「……………秘密があつたほうがかつこいいもんね」

「そゆこと。分かつてるじゃないか」

ホームズがそう言つてレイアは手を後ろに組んで言った。

「でもね、格好悪くてもいいから、いつか、ホームズの本当の事を知りたいな、友達なんだからさ」

そんなレイアの言葉にホームズは少し驚いた様に目を丸くした。それから、いつもの胡散臭い笑みではなく、本当に嬉しそうに微笑んだ。

「ふふ。嬉しい事言つてくれるね。ありがとう、肝に命じておくよ。さあ、早く準備しておいで」

ホームズは、そう言つてレイアを宿屋へと急かした。

「分かつた。ちよつと待てて」

そう言つてレイアは宿屋へと入つて、直ぐに棍とつるはしを持ってやつてきた。そし

て、そのまま街の出口まで行き、ジュード達を待った。すると、一人と車椅子の人影、ジュードとミラがやってきた。

レイアはウキウキしている。

「準備は万端。閉山した山だから気合いれてGO！」

そう言うのとレイアはジュード達を先導して、進んで行った。そんなレイアをホームズはなんとなく見ていた。

「どうした？あのムスメをじつと見て？」

「いや、思い出していただけだよ」

「母親の言葉か？」

「鋭いね。その通りだよ」

ヨルの質問にそう答えるとホームズは少し遅れて歩き始めた。

『君の性格は敵を作る事は容易くても、友を作る事は難しいだろうね』
ホームズの母は、ホームズの事をそう評価した。

『だって、そうだろう。秘密主義で、自分の事を話そうとしない。おまけに、話を平気

でそらす。これをされて、気持ちのいい人間なんて、まず居ない』
でもね、と続ける。

『そんな君とも友達でいてくれる奴がいるかもしれない』

『そしたら、君はそいつの力になってやるといい。商人の息子として、借りは返してお
かなくちゃね』

最後にウイंकをして言った。

「……頑張るとしますか」

母の言葉を胸にホームズはつぶやいた。

目指すはフェルガナ鉱山、目的は精霊の化石だ。

綺麗な石には虫がいる。

「ねえねえ、イル・ファンでどんな感じだった？ やっぱり都会くて感じ？」
ボルテナ街道で、レイアはジュードに話しかけていた。

ホームズはミラの車椅子を押しながら2人の会話に耳を傾けた。

仮にも怪我人のホームズは戦闘は出来ないので、魔物との戦いはジュード達任せて、ミラの車椅子を押し役を買ってでたのだ。

「別に普通だったよ」

興味しんしんで聞いてきたレイアに対してジュードの返事はそっけない。

「何その素っ気なさ。ジュードで解説しいのくせに、わたしにだけすつごく冷たいよね」

レイアはむくれながら言った。

「まあ、あのムスメのテンションに付き合うのは疲れるからな」

「正直過ぎるよ、ヨル」

ホームズはヨルのつぶやきをたしなめる。幸い、レイアには聞こえていないようだ。

「被害妄想じゃない？」

そんなレイアにジュードはどこまでもドライだ。

「いいからはなす！10秒以内。いっち、にっい！」

レイアは強引にカウントを始める。これには、ジュードも驚き話し始めた。

「えつと…：医学校では、看護師のプランさんが良くしてくれたよ。でも、教授を迎えに行ったら、赤い服の女の子に襲われて医学校に戻れなくなっちゃった、おかげで、ミラと出会えたんだけど、あ、友達と言えばエリーゼと言う女の子と友達に…」

「あーもう！分かりました！」

次々と出てくる女の子の存在にレイアは爆発した。

「たらくさん、女の子の友達が出来て良かったね！」

レイアはそう言う。ぷりぷりと怒りながら先に歩いて行ってしまった。

「レイアも相変わらずだね…」

そんなレイアの後を呆れたようにジュードはついて行った。

「今、何人の女の子が出てきた？」

「4人だな。ついでに、あのムスメを入れると、この短期間で5人の女と会っている事になるな」

ホームズとヨルはジュードの方を見ながら言う。

「感想は？」

「羨ましい限りです」

ヨルの問いにホームズは正直に答えた。するとミラが口を挟んだ。

「だが、お前もわたしと、レイア、ついでにエリーゼにも出会えただろう、この短期間で」

「……だよね！」

ホームズは少し元気になった。自分もまだまだ捨てたもんじやない、と。

「まあ、ジュードの半分程度だがな」

「……だよね……」

ミラの一言で、ホームズは元気をなくした。

「悪気がない分、たちが悪いね……」

ホームズはそうつぶやくと前を見た、

すると、魔物がホームズ達に襲いかかってきていた。

「え、嘘うそ！」

ホームズ慌てて、左の盾を構えた。しかし、

「六散華!!」

ジュードとレイアの共鳴術技で、ホームズの出番なく、あっさりと倒した。

目の前の光景に口をパクパクさせると、ホームズは言った。

「大したもんだね。しばらく会っていなかったのにこんなに息ピッタリなんて」

ジュードは、満足そうに頷いている。

「共鳴リゾナンスの力だね」

「幼馴染みの力だよ」

ジュードの言葉にレイアは不満そうだ。ホームズはそんな2人を見てやれやれと肩をすくめた。

「それよりホームズ」

ジュードは、ホームズを睨んでいる。

「君、今戦おうとしたでしょ」

「いや、魔物が襲いかかってきたから……」

言い訳がましくホームズは言う。

「僕が言うのも変だけど、その怪我は決して軽い物じゃないから、無理しないで」

「……ワカリマシタ。イゴキヲツケマス」

ホームズは目をそらしながら言った。

「凄く信用出来ないけど……いい？ホームズは精霊の化石探しの人手としてついて来てるんだから、戦闘は僕達に任せて……」

「分かった！分かったから！気を付けるから！」

ホームズはそう言うとき、くどくどと説教をしているジュードを無理やり黙らせた。

「ほら、ジュード。ホームズも分かった言ってるからさ」

レイアはそう助け船を出して、今度こそジュードのお説教を終わらせた。

「分かったよ、信用するよ……」

ジュードはそう言っただけでしぶしぶ納得した。レイアはやれやれと言うふうに肩をすくめた。

「ジュードは心配しすぎなんだよ」

レイアの言葉にジュードは諭すように言う。

「怪我人2人も連れておまけに、レイアもいれば、心配もするよ……」

「それ、どういう意味？」

聞き捨てならない、言葉にレイアは棍を構えてジュードに尋ねる。

そんな2人の様子を見て、ミラはつぶやく。

「ふむ、これが『喧嘩するほど仲がいい』と言うやつか。」

「その通りだよ。よく知ってるね」

ホームズはそう返す。その言葉に2人は少し照れると、目をそらして黙ってしまっ

た。

「それなら、ホームズ達もそうでしょ！僕が会う度に喧嘩してるじゃん！」

ジュードはその場をごまかす様に言った。その言葉を聞いたホームズとヨルは一瞬きよんとすると、ニヤリと笑った。

その笑顔を見た瞬間、ジュードは自分の言った言葉を後悔した。これはもう、理屈ではなく、本能だ。

「そうとも！おれ達仲良しコンビだもんね。な、ヨル君」

「その通りさ！俺たちは文字通り一蓮托生のコンビさ、なアホ毛君」

うすら寒い、どう考えても普段の彼らがしない会話にレイアを始めとした面々は引いていた。

「ジュード……」

「ごめん……」

レイアの言葉にジュードは耐えきれずそう言った。

そんな空気に構わず、ホームズとヨルは、やり切った様にフツと笑うと、

『ヨル君』と言うのをやめると言ったはずだぞ、アホ毛」

普段見せない笑顔で、ヨル言った。

『アホ毛』と言うのもやめてくれないかな、『ヨル君』

対するホームズは普段見せる胡散臭い笑みで言った。彼らの間に流れる空気は絶対零度。もう、アブゾリユートなんて、目じゃないくらいのものだ。

「……ジュード」

「……本当にごめん」

2人は完全に縮こまっている。

「あれじゃないのか？フェルガナ鉱山」

そんな様子に構わずミラは指を差した。そこには洞窟のようなものがあつた。

「そう！それだよミラ！だよね？レイア!？」

「うん、間違いないよ！あれが、フェルガナ鉱山の入口だよ！」

2人は、今までの空気を全力で壊すように言うとその入口を目指して、走って行った。

「いやいや、速いって。もう少しゆっくりでお願いしたいんだけど」

対するホームズは文句を言いつつ彼らを追うように車椅子を押して走った。とりあえず、ヨルとは休戦だ。



「へえー、ここが採掘場か」

妙に間伸びした声を出しながら、ホームズは当たりを見回した。周りを見ても石ばかりだ。

「ところで、精霊の化石でどんな物なんだろうね？」

「え、ホームズ知らないの？」

突然の発言に、ジュードは驚いて言った。そんなジュードにホームズは申し訳なさそうに言った。

「うん、まあ、その、母さんから話を聞いた事があるだけ、言う程度なんだ、だから、その……現物を見たことはないんだよね……ごめん」

ここに来て、手がかりが消えてしまった。精霊の化石がどんなものか分からなければ探し様がない。

「えーとね、聞いた話によると……」

レイアは思い出した様に話し出した。

「精霊の化石で色が付いてて音がするんだって」

「ふむ、よく知ってるな、私の情報とも一致する。ホームズとは大違いだ」

「……ごめんさい」

真実なだけに、ミラの言葉にホームズは言い返せなかった。

「えっと、ホームズ氣にしないでミラも悪氣があつて言つたわけじゃないんだ」
ジュードはそうホームズを慰めた。しかし、当の本人は相変わらず斜め下を向いてい
る。

「ふむ、妙だな、作業途中で打ち捨てられたように見える」
そんなホームズにミラはお構いなしで続ける。

「レイア何か知ってる？」

「ううん、もしかして、事故とかで危険だから、封鎖したのかな？」

「何にしても氣を付けていくかね。ほれ、ジュード。」

いつの間にやら、復活したホームズがレイアから、つるはしを借りて、ジュードに渡
した。それを上手にキャッチすると心配そうな顔でホームズとレイアに言った。

「そうそう。やるしかないんだよ。どっちが先に見つけるか、勝負だよ」

「2人とも、無理しないでね、何かあつたら……」

「そんな事より今はミラの心配でしょ」

レイアは微笑みながらつるはしを指で差して言う。それに乗つかる様にホームズは
続ける。

「そんなに心配だったら、何も無いようにしておくれよ」

ホームズはその言葉を合図に3人（と一匹）は精霊の化石探しを始めた。

しかし……

「見つからないね……」

そう、あつちこつちの石をつるはしで割ったというのに全く見つからないのだ。代わりに出てくるのは石英や、岩塩などばかり。

そんな彼らの様子を肩からヨルは耳をピクピクと動かしながら見ていた。

「おい、つり目のガキ」

「えっと、それ僕の事？」

突然のヨルからの呼びかけにジュードは戸惑ったように返事をした。

「お前以外に誰がいる。いいから、その色の変わっている壁をつるはしで壊せ」

ヨルはその場所を尻尾で示した。ジュードは言われるがままそこをつるはしで壊した。すると、そこになんらかの空洞が現れ、そして、地面には青い砂か散らばっていた。

「ビンゴ、てやつだな」

ヨルは得意そうに言うのと、ホームズの肩から降りてその青い砂を舐めた。そして、舌でそれを味わうように口を動かし、言った。

「やはり、精霊の化石の欠片だ。僅かだが、エネルギーを感じる」

ヨルの言葉ジュードは疑わしそうにミラを見た。

「間違いない。私の記憶とも一致する」

ミラはその疑念を払うように太鼓判を押した。

「それにしてもヨル君、よく分かったね。この欠片の事もこの洞窟の事も」

レイアは賞賛するように感心するように言った。

「僅かだが、そこから音が聞こえからな」

「へえー、君仕事してただね、意外だよ」

なんて事なさそうに言うヨルをホームズが茶化す。そんなホームズを睨むと爪を出して構える。ホームズもそれに応じる。

そして、レイアに一人と一匹は頭を叩かれる。

「~~~~~」

痛そうに頭を抱えるヨルとホームズ。

「喧嘩しないの!」

レイアは腰に手を当てながらそう言った。

「君ね……おれ、一応怪我人なんだけど」

「頭は特に異常なしだ、て大先生が言ってたよ」

「いや、そうじゃなくて……ま、いや」

ホームズは頭をさすりながら言う。ヨルは恨めしそうにレイアを見ている。

ジュードはため息を吐くとレイアに言った。

「ほら、レイアその辺にしときなつて。それより、音が聞こえたつてことは……」
ジュードは洞窟の中を伺う。空気が流れているのを感じる。

「行き止まりじゃないつてことか……」

ジュードはそう呟くとレイアたちの方を向いて言った。

「ミラとレイア、それにホームズ達も、ここからは、僕一人で……」

ジュードは一人でその洞窟に行こうとした。しかし、レイアがジュードの前に回り込んで来た。

「むふふ、ジュードには負けないよ」

ジュードはため息を吐くとレイアを見た。

「本当に危険なんだつてば」

「だからこそ、皆で行くのだから」

そんなジュードの説得もミラの一言で、潰されてしまった。ジュードは困ったようにホームズを見た。

「ま、おれも行くよ。でないと、報酬貰えないから」

ホームズはニヤリと意地の悪い笑みを浮かべて言った。そんな彼らを見てジュードは諦めたように言った。

「……もう、本当に気を付けてよ。特にレイア」

「ふふ、ありがとう」

レイアはジュードにそう、優しく笑って返した。そこには、確かに優しい空気が流れていた。

そんな、優しい空気をぶち壊すように、

「おい、とつと来い、バカ共。」

いつの間にやら、奥に進んでいたヨルの声が洞窟から聞こえた。そんな、エアークラッシュャーの猫にホームズはため息を吐いた。そして、

「なんで君にそんな事を言われなけれや、ならんのだ。」

あまりヨルと離れられないホームズはぶつくさ言いながら、ミラの車椅子を押して洞窟の中に入って行った。そして、それに続くようにレイアとジュードも入って行った。



「そう言えばさ、ヨル」

暗い洞窟の中、ジュードはヨルのに話し掛けた。ちなみにヨルは、ホームズの肩にいる。歩くのがタルイとの事。

「なんだ？」

「どうして、精霊の化石探しに協力してくれるの？ だってさ、ミラは君の…その…敵でしょ。歩けないままの方が、都合がいいんじゃないの？」

「ちよつとジユ……」

「当然だ」

フオローしようとしたレイアに構わず、ヨルはノータイムで返した。

「だつたらなんで？」

ヨルは、ホームズの方を見てジユードの問いに答えた。

「こいつの望む報酬は、『両親の故郷へ行く方法』だ」

「なんでそうペラペラ喋っちゃうのかねえ」

ホームズは呆れた様にヨルを見る。そんな彼らの様子を見て、ジユードは思い出した様にホームズに言う。

「そう言えば、ル・ロンドに來た本来の目的も父さんに故郷の話を書く事だったね。どう聞けた？」

「聞けたけど、充分ではないね。だから、その補完の為にミラに話を聞きたいんだ」
ホームズはミラの方に顔を向けながら話す。対するミラは何か気付いたように、ホームズを見る。

「お前……まさか」

「多分その予想は当たっているよ。そして、外れてもいる。とりあえず、手荒な真似はしないし、と言うより出来ないから安心しておくれ」

ホームズはミラに包帯を見せながら言う。そう、ホームズは一応怪我人なのだ。

「でも、やっぱり分からないな。なんでヨルはホームズの望む報酬の為に協力してるの？別に仲がいい訳じゃないんでしょ」

ジュードはそう尋ねた。さっきのやり取りを見ればそうみえる、いや、そうとしか見えぬ。

「決まってる、それは俺の望む報酬でもあるからだ。俺はこいつの両親の故郷とやらへ行ってみたい、見てみたいんだ」

「なんで？」

ジュードの問いに対し、ヨルは馬鹿にした様に応える。

「フン、理由なんているものか。見た事のないものを見たいと思い、行った事のない場所に行きたいと思う、ただそれだけのことだ。こいつは、いわゆる人間でいうところの好奇心とか、欲望とかってやつだ」

「君は医学生だったね、ジュード。だったら、少し分かるだろう？なんで勉強してた？色々理由はあったかもしれない。でも、わざわざ学校に通ったんだ。根源にあったの

は、知りたいと言う欲望や、知らないものへの好奇心じゃないのかい？」

ホームズはイマイチ納得できてないジュードに助け船を出す。

しかし、ジュードは納得出来ない様だ。

「でも、だからって、リスクが大きいよ。『何処かに行きたい』という程度で命を賭ける必要はないんじゃない？」

「阿保か。全ての事柄に、全ての行動にリスクは付きものだ。そこに大きいも小さいも関係ない。あるのは、その欲望を満たしたいか、満たしたくないか、だ」

ヨルは、ジュードをその、金色の瞳で見据える。対するジュードはこめかみに人差し指をあてながら言う。

「なんとなく、ヨルの言いたい事は分かったよ。協力してる訳もね」

「ならいい……見ろ、抜けたようだ」

ヨルは興味なさそうに言う。尻尾で指し示した。そこには出口があった。

まず、ジュードが出る。続いてミラとホームズ達、最後にレイア。しかし、レイアは息切れしている。

「レイア……やっぱり……」

「精霊の化石でなんなの？」

レイアは、ジュードの言葉にかぶせる様に言う。それにミラは答える。

「精霊がマナを失ってこちらの世界に定着した物だ」

その答えにレイアは腕を組んで考える。

「マナを失うって、死んじゃうって事でしょ。都会ではよくあるの?」

「さあ、ないと思うけど」

ジュードはそう答える。それにミラは補足するように続ける。

「大半は私が生まれる前の話だ」

「どういう事?」

レイアは怪訝そうにジュードに尋ねる。しかし、ジュードは目を逸らし続けた。

「……また、今度話すよ」

そう言うともえを向いてしまった。それを言い事にレイアはあつかんべーをジュードにしている。

ジュードはすぐに険しい顔になって辺りを見回した。

「ちよ、ちよつとこのぐらいで怒らないでよ」

「今、音が聞こえなかった?」

「え?!」

ジュードにそう言われて3人(と1匹)は耳をすます。

「音が近づいたり、離れたたりしている…」

「精霊の化石が動いてる、そんな事ある？」

レイアは不思議そうに尋ねる。

「どんなにあり得ない事でも他に可能性がないなら、真実となりえる」

「驚いた……おれの母親も似た様な事を言ってたよ。」

ホームズはジュードの言葉にそう言った。

「へえー、これはね『ハオの卵理論』て言うんだ。ちなみに、ホームズのお母さんは何て言ったの？」

「『不可能を消去して、残ったものが如何に奇妙な物であっても、それが真実となりえる。』だってさ」

「そっくりだね。君のお母さんは学者か何かなの？」

「別に、しがない普通の行商人だったと思うけど……」

そう言いながら回想する。母の姿を。

「いや、やっぱ普通じゃなかったかも……」

「ああ……あれを普通と呼ぶには無理があるな」

ヨルとホームズは深いため息を吐く。

「と……とりあえず、音のする方に行こうよ」

ジュードの言葉にホームズ達は頷く。

「ヨル、案内よろしく」

「任せろ。」

そう答えると、耳をピクピクさせながら一行を、案内した。

そして、

「うわあ、何ここ？」

広い空間に出た。そこは、青く輝く石が天井などに大量に貼りついていた。レイアとジュードは先に歩いて行く。あとに続く様にホームズはミラの車椅子を押しながらいって行く。

「綺麗だね、大したもんだよ、全く」

ホームズはただただその輝きに目を奪われていた。

しかし、ヨルとミラは違った。警戒するように辺りを見回している。

石であるものが本来一人で動くわけがない。ヨルは思い出していた。ホームズの母の言葉を、あの消去法の奥義の様な言葉の後に続いた、あの言葉を。

『ま、奇妙な真実なんて大抵ろくなもんじやないけどね』

「レイア!!」

ジュードより、先に進んでいたレイアにミラは何か気付いたように叫んだ。
すると、

巨大な芋虫の様な魔物、ハンマーズファームが地中から出て来た。額には青い石、精霊の化石があった。そう、この魔物の額に精霊の化石があったのだ。だから精霊の化石が動いていたのだ。レイアとジュードは臨戦体制に入っている。その額の精霊の化石を手に入れる為に。

「わたしがとるからね、ジュード。ホームズ達は下がって」

レイアの決意にホームズはミラの護衛につく。ヨルは忌々しそうな顔で石が動いていた理由、ハンマーズファームを睨む。

「本当にろくなもんじゃないな」

敵に石を送る

「転泡!!」

ジュードの技が、ハンマーズファームに炸裂する。元々、水属性の攻撃に弱いこの魔物には、まさに的確な攻撃といえよう。そして、レイアも後方支援に徹するかと思いきや、

「瞬迅爪!」

思いっきり前衛の技も繰り出す。

「いいコンビネーションだね、彼ら」

「ああ、そうだな」

ホームズの言葉をミラは、うわの空で返す。何か考え事をしているようだ。

そして、ふと顔をホームズ達に向けて口を開いた。

「今なら、ジュード達には聞こえないだろう」

ジュード達は今ハンマーズファームと激しい戦闘を繰り広げている。

「答えるホームズ、お前はエレンピオス人か？」

「そうだよ」

「なら、お前はアルクノアか？」

「違うよ」

ホームズは、問いに答えると納得のいかなそうな顔をしているミラに向かって、やれやれと言った風に肩を竦めた。

「何だか、納得できてないようだから説明してあげるよ。別にね、全てのエレンピオス人がアルクノア入っている訳じゃないんだよ。おれや、おれの両親がいい例だね」

「なぜ、入ってない？」

「特に入りたいたいと思わないし、そもそも、アルクノアなんて組織を知ったのはここ最近だもの」

「お前の両親は？」

「さてね、入りたくなかったんじゃないの？」

ホームズののりりくらりとした返しに、ミラは少し考え、もう一度尋ねた。

「なら、質問を変えよう。なぜ、入りたくなかったのだ？」

「予想だけど、おれの両親は多分黒匣ジンの、精霊が死ぬ、という副作用を知っていたと思うんだよね。だから、それを使う連中と一緒に居たくなかったんじゃないかな」

ああ、後、と言葉を続ける。

「おれのお陰とも言ってたね」

「お前の？」

「そ、おれの」

ホームズは返す。

「何かね、本当は何回も入ろうと思ったんだってさ。リーゼマクシアに取り残されて、友達もいない、両親もいない常に一人ぼっち、おまけにリーゼマクシア人は訳の分からない術を使う、心がもう、折れそうだったんだって。でも、その度におれの事を思い出して、やっぱりそんな所に入らなくてもいいなと思ったんだってさ」

今でも、思い出す母の言葉だ。

『私はね、君を産んで、君に会えて、本当に良かったと思うよ。∴私にとっての一番の幸運はホームズと旦那に出会えた事だね』

そう言つて母親はホームズの頭を撫でた。ホームズ本人はその言葉を言われる度に照れ臭そうに笑っていた。

今なら分かる。ホームズは考える。自分を一人ぼっちにしなかったホームズへの感謝の意味を込めて言っていたのだろう。

ホームズは頭を触りながらそんな事を考えていた。

「……なるほど。息子の力というのは、偉大だな……」

ミラはそう言つて、ふと止まった。

今何か矛盾が、あつたような気がする。

何か、辻褃の合わない何かが。

ミラが思考の渦に巻き込まれていると、突然大きな音がした。なんと、ジュード達はハンマーズファームを倒したのだ。カラン、と倒れた衝撃で、頭についていた精霊の化石が、欠けて落ちた。

その音でミラは、はっと我に返つた。そして、気付いた。

ハンマーズファームがまだ、完全倒されていない事に。

ハンマーズファームは自分を痛めつけたレイアとジュードに襲いかかる。2人は吹っ飛ばされてしまい、立ち上がるのに時間がかかる。そこを追撃するように再度ハンマーズファームは襲いかかる。

そして、それを阻止するかのようにつつの人影がジュードとレイアの前に立つ。見覚えのあるポンチヨをはためかせて、その人影は思い切り、その場で踏み込んだ。

「守護方陣!!」

「グギャアアアア」

青白い光が輝くハンマーズファームを捉える陣。そこに浮かび上がる顔は、これまた見覚えのある、碧い瞳のたれ目のあの顔だ。

「ホームズ！」

「やつほー」

ホームズは驚く2人に、なんて事なさそうに挨拶をする。

「ちよつと怪我は？」

レイアが心配そうに聞く。

ホームズは答えようとするが、すぐに又攻撃がくる。

「後で教えてあげるよ」

そう言い残し、ぴよんと高々とジャンプした。そして、そのまま、

「爆砕陣!!」

破裂するかのようなかかと落としを決めた。ハンマーズファームは少し怯んだ。しかし、すぐに体制を立て直すと地中に潜って姿を消した。

「逃げたって訳じゃなさそうだ」

ホームズは油断なく周りを警戒していた。地下を移動する衝撃で地上に土煙が舞う。

そして……

足元から飛び出てホームズを天井近くまで突き上げた。

成す術なく落下し、地面に叩き付けられるホームズ。激突の衝撃に周りの時間が止まったように感じられた。そして、その時間が動き出すと同時に、痛みがホームズの全身を襲う。

「~~~~~！」

一声に鳴らない声を上げると再び立ち上がる。腕からは血が流れている。右腕に至っては激痛しかない、恐らく、いや、絶対に折れている。

「やれやれ、避けきれれると思っただけどねえ……！」

ホームズはそう言いながらため息を吐く。結局、怪我は治った訳ではない。そのせいでホームズは、ワンテンポ逃げるタイミングが遅れたのだ。

ハンマーズファームは雄叫びをあげ、ホームズに狙いを定める。自分を攻撃した連中は全て潰す気なのだろう。

ハンマーズファームは、まず、ホームズ目がけて襲いかかった。

しかし、その攻撃が届く事はなかった。

なぜなら、

「アサルトダンス！」

ミラが復活したからだ。

◇◇◇◇

ホームズがジュード達を助けに行った時にミラが何もしていなかった訳がない。ミラは何とか彼らを助けようと車椅子を乗り捨て、這いつくばって精霊の化石の所まで進もうとしていたのだ。しかし、届かない。

そんな時、ヨルがミラの前に現れた。

「よう、いいザマだな」

いつもホームズの側にいるヨルが、目の前にいるのを見て、ミラは目を見開いた。

「何故、ホームズの側にいない?! あいつは今……」

『怪我人』だ、と言いたいんだろ。そんな事、俺の知ったこつちやないからな」

ヨルは当たり前前の様に言った。自分から、進んで行ったのだ。どうでもいいと言えばどうでもいい。

「死ぬかもしれないんだぞ！」

「阿保。そうならない為に俺がここにいるんだ」
にべも無く返すヨルにミラは、最後に尋ねる。

「……離れられないのではないのか？」

「別にこれくらいだったら大丈夫だ」

ヨルはそう言うのと、てくてくと精霊の化石の所へ歩いて行った。

「さてと、最初の質問に答えてやる」

ヨルは尻尾で青く輝く精霊の化石を器用に巻き付ける様に掴み、ミラに向かって投げた。

「こうする為だ、受け取れ！」

突然飛んで来た精霊の化石にミラは驚いたが、それをキャッチする。そして、それを何の迷いもなく医療ジンテクスに嵌めた。

「ぐっ……アアアアああああアアアア！」

信じられない激痛が足にはしり、思わず叫ぶ。そして、叫び終わると、いつもの様に、つい先ほどまで歩けなかったのが嘘の様に、凜と立ち上がった。

「礼を言うぞ、ヨル」

「あの阿保にも言っておけ、俺をここに残したのは奴だからな」

そういわれてミラは戦っているジュード、レイア、ホームズを見る。

「つくづく私は幸せ者だよ」

ミラは剣を構える。今にもハンマーズファームはホームズに襲いかかりそうだ。

「よくも、今まで好き勝手やってくれたな」

そして、ミラはハンマーズファームに駆け出して行った。

彼らを助ける為に。

◇◇◇◇

「ミラ！」

ジュードとレイアは驚いた様にそして、嬉しそうに声を出した。

ミラは少し微笑むと、2人に指示を飛ばした。

「ジュード、ホームズの治療を。レイアは私と共鳴して戦うぞ」

「分かった」

「任せて」

2人はそう言うのとそれぞれ、指示に従った。

「全く、無茶するよ」

ジュードはそう言うのとホームズの治療を始めた。

「痛ててて、もうちよつと優しく……いえ、何でもないです」

ホームズはジュードに睨まれそう言うのと、大人しくなった。

すると、何処からともなくヨルもやってきた。

「やあ、ヨル。ちゃんとやってくれたみたいだね」

「当然」

ヨルはそう言うのと、ホームズの近くによつた。

「おい、つり目のガキ、まだか」

「もう少し、というか、ヨル。君からもよく言っておいてよ」

ジュードは、ヨルに言った。

「無駄な事をするのは疲れるからな……というより、お前、助けられたんだから、文句をいうのはどうかと思うぞ」

「助けた事にはお礼を言いたいけど……こんな怪我したら、文句も言いたくなるよ」
ジュードとヨルはそんな風に会話をしていた。

傷はどんどん治つていき、折れた腕からも大分腫れが引いた。

「とりあえず、さっきの攻撃で受けた傷には、治療しといたけど、応急処置程度治だよ。
だから、骨も治つてはいない。それに、僕らが負わせた怪我まではちよつと……」

「充分！」

しかし、ホームズは立ち上がった。ミラのように凜としてではないが、それでも堂々と立ち上がった。

すると、ホームズのリリアルオーブが輝き出した。ジュードのも同様だ。

「なるほど、今なら共鳴術技が出来そうだね……、ジュード!!」

「分かった」

その声を掛け合うと、ジュードはホームズの蹴り上げる足を踏み台にして高々と飛び上がり、そして、

「飛天翔星駆!!」

飛び蹴りをかました。その飛び蹴りを喰らい、ハンマーズファームは大きく仰け反った。

その隙をミラが逃す訳がない。手を胸の前で構えてすぐに詠唱を始める。

「天杯溢れよ、スプラッシュ!!」

何処からともなく水亀が現れ、ハンマーズファームに水を注ぐ。

水が弱点の身としてはたまったものではないだろう。大分応えたようだ。その証拠にグツタリとしている。

しかし…

「これで終わりのないだろう」

ホームズがヨルを肩に乗せ不敵に笑っている。

「せっかく暗い所にいるんだ、調子はどうだい？」

「まずまずだな、それにこの所大人しくしていたし、力なら充分、とまではいかないが、そこそこある」

そう言うと、ヨルは黒い球体を口から出し、ホームズの足に落とした。例の如くその球体は砕け、ホームズの右足は黒い煙に包まれた。そしてそのまま足を構えて

「輪敦旋風・改!!」

思い切り回し蹴りを叩き込んだ。

「グギヤアアア!!」

ハンマーズファームは大きな悲鳴をあげ、そのまま逃げる様に地面の中に潜り混んで

逃げてしまい、それっきり出てこなかった。

勝負がつくと、ジュードとレイアはミラの所に駆けつけた。ホームズは、というと、息を大きく吐き、その場に座り込んでしまった。ホームズとしてもミラに駆け寄りたいたいが、残念ながら、そんな元気はないのだ。要するに無理をしたツケを今払っている状態だ。

「颯爽とピンチを助けるなら、最後までやるべきだな」

「うるさいなあ、君は本当に」

ヨルの言葉にホームズは顔をしかめながら言う。

ヨルはふふんと、馬鹿にする様に笑っている。

「にしても、あの魔物を真つ二つにするつもりだったんだけどな……」

「仕方ないだろ……むしろ、精霊術を食った訳でもないのにあの黒い球が出せただけ上出来なんだ」

ホームズはヨルに不満をこぼすとヨルは呆れた様に言った。そんな会話をしているとジュードがやって来た。

「ミラはいいのかい？」

「もう、車椅子も置いて来たし、眠ったみたいだから大丈夫だよ」
「そりや良かった」

ジュードはホームズの怪我を診る。お世辞にも無事とは言えない。

「無理はしないでって、言ったつもりなだけだね」

「無理したつもりはないけどね」

「怪我人がさらに怪我してる、これを無理してないと言うには無理があるんじゃないの？」

「……おっしやる通りです」

ホールドアップという具合に両手を上げようとしたが、右腕が折れていたので途中でやめた。

「とりあえず怪我を治療するよ」

そう言うのと、ホームズの右腕を精霊術で治療し始めた。

「よし、おわった。後は固定して、2、3日大人しくしとけば大丈夫だよ」

「へえー、やっぱり大したものだね、精霊術」

あり合わせの布でホームズの腕を吊り下げる。

「そう言えばホームズは霊力野がないって言ってたね。やっぱり使った事ないの？」
「ないよ」

ジュードは他の傷の治療もする。

「苦勞しなかった？」

「……うーん、生活では、そこまで苦勞しなかったかな。母さんが、精靈術なしでも火を起こせたからね。お陰で、おれも火を起こせるよ。それに行商での稼ぎもあつたし、どうつてことなかつたかな。」

ジュードは、ホームズの治療を終えたようで、こめかみに人差し指を当てて考えている。

『生活では』て言つたね。だったら、人間関係では？」

リーゼマクシアでは靈力野の大ききで全てが決まると言つてもがではない。その靈力野をホームズは持つていないのだ。

人は、自分より下の者を踏みにじる事で、優越感に浸る。全てがそうでないにしても、その様な類いの人間は、いくらでもいる。ジュードが危惧したのはそこだ。

ホームズは一瞬動きを止める。その後いつもの様に人差し指を口まで、持つていき、いつものセリフを言おうとした。

「内緒。男は……」

「隠すということは、肯定として、受け取るよ」

ジュードはピシリと言つた。

ホームズは観念した様に言う。

「……あんまりこういう不幸自慢みたいな事はしたくないんだけど……」

「ほとんどばれてるし、それに僕が問い詰めただけだから、不幸自慢ではないよ」

「話しても、話さなくても一緒だね。……君達も聞きたいのかい、レイア、ミラ」

ジュードが驚いて後ろを振り向くと、そこには車椅子に乗ったミラとそれを押しているレイアが居た。レイアは少し戸惑ったが、力強く頷いた。しかし、ミラは頷かず口を開いた。

「私が、聞きたい事は別にある。お前は先程、お前の母親の話をしている時こう言ったな。『独りぼっちで心か折れそうな時にお前の顔を思い出していた』と」

「大分まとめてあるけど、ま、確かに言ったね。」

ホームズがそう言うのとミラはまっすぐホームズを見据えている。いや、もうむしろ睨んでいると言つても過言ではない。

「だったら聞かせろ、何故思い出したのがお前の顔だけなんだ？何故そこで、お前の父親、つまり夫の顔が出てこない？」

ミラの言葉にホームズは上目遣いというより、睨みつける様にミラを見る。そして、すぐに目を伏せるとまた、顔を上げて口を開いた。

「あんまり、話したくないなあ。でも、話さなきゃいけないだろうね。とりあえず、こ

ここを出ようか。いつまた何時あの魔物が来るか、分からないしね」

そう言うと、ホームズは立ち上がりジュード達にここを出るよう促した。

それから、しばらくホームズが口を開く事はなかった。

人猫の仲

「ジュード!!」

ル・ロンドに着くと受付の女性もとい、ジュードの母が迎えてくれた。

話を聞く限りどうやら、とても心配した様だ。そんな事を言っていると今度は男の声でジュードを呼ぶ声が聞こえた。デイラックだ。

デイラックはそのままジュードに近づくと思い切りジュードの頬を叩いた。

「どうして、こんな危険な事をした!彼らに何かあつたらどうするつもりだったのだ!」

その言葉を聞いて、腕を折ったホームズはこっそりとレイアの後ろに隠れた。

「……ホームズ」

呆れた様にホームズを見るレイア。

「いや、だって、ばれたらジュードもおれも怒られるし…」

「やっと喋ったと思ったら、これだよ…」

「そんな目でおれを見ないで!!」

2人がコソコソと喋っていると、ジュードが言い返していた。

「できる事をしないなんて…僕は父さんとは違うから。」

「この……」

デリラックは、再度ジュードを叩こうとした。しかし、ミラが車椅子から立ち上がり間に入り止めた。

「もう、許してやって欲しい。ジュードはやり遂げたのだから」

その立ち上がったミラをデリラックは驚いた様に見る。

「立てるのか……？」

しばらく見るとすぐに後ろを向いて、後で治療院に来なさいとだけ言って、戻って行った。しかし、すぐに立ち止まり振り返って言った。

「ホームズ、君もだ」

「……ばれてました？」

「ばれてないと思っていたのか」

「……後で行きます」

ホームズはそう言うため息を吐いた。

レイアはミラの方を見ながら言う。

「さてと、しばらくはリハビリだねえ」

「世話をかけるが頼めるか？」

「任せて……と、ホームズ」

「なんだい？」

突然話しかけられてびっくりしながらも答える。

『両親の故郷への行き方』、聞かなくていいの？」

「……じゃ人目につくからなあ、ミラとしてもつかない方がいいだろう？」

ホームズはミラにそう尋ねる。ミラは頷きながら返す。

「確かにな」

2人の会話にレイアとジュードは不服そうにしている。

そんな2人を察してミラが口を開く。

「すまないが、こればかりは私から喋る訳にはいかない」

そう言うと、ミラは変わりに、と言葉を続けた。

「ホームズが黙ってたことを喋ってくれるだろう」

「とんでもない無茶振りぶつこんできたね?!」

突然の無茶振りに、ホームズは白目を剥く。しかし、ミラは逆に不思議そうにホームズに言う。

ズに言う。

「先程、鉱山で後で話すと言っていただろう？」

「……………そんなにはつきり言ったっけ？」

「どちらにせよ一緒だろう。…さあ、話せ」

「ここまで、デリカシーがないと逆に清々しいね……」

ホームズは呆れている。ジュードの方を見ると申し訳なさそうにしている。

「…それに、今回精霊の化石を見つけたのはジュード、レイア、そして、ヨルと言ったところだろう」

「……そだね」

もう、何が言いたいかなんとなく分かっているホームズはそう返した。

「そんな状態で、報酬だけ渡すと言うのは……な？」

「つまり、足りない分として、おれの父親の話をしろと」

「いや、それだけではないぞ、ジュードの質問にも答えてもらうぞ」

「ミ、ミ、ミ、ミラ?!」

突然話題を振られて、あたふたするジュード。そんな様子を眺めて、ヨルはつまらなさそうに欠伸をすると、ホームズに言った。

「いいんじゃないか、答えてやれば。だってその女の言ってる通りだろう？ お前今回の精霊の化石探しじやなんの役にも立っていない」

悪意のない暴言と悪意しかない暴言を受けて、ホームズは涙目になっている。

さすがに見兼ねたレイアがフォローを出す。

「いや、でも、ほら、ミラの車椅子を押ししてくれたじゃん！」

「帰りはお前が押して帰って来て平気だったんだから、別にホームズがいる意味なかっただろう？」

ヨルに、にべもなく言われてしまい言葉のないレイアに代り、今度はジュードがフオローをする。

「でも、僕達を助けてくれたよ」

「ほとんど、俺とこの女のお陰だろう」

その通り。ホームズ単体での攻撃は、爆砕陣と守護方陣だけで、後の攻撃は共鳴術技だったり、ヨルの力を借りたりとホームズの活躍、というには、少し無理がある。

「こいつの功績は俺をその女の側に残した事と、怪我を悪化させた事だ。まあ、報酬に見合った働きをしたかと言われれば、ノーとしか答えられないな」

「……君はどつちの味方だい？」

「お前の敵だ」

ホームズはとりあえず、ヨルにアイアンクローを決めると涙を拭いてミラに喋る。

「分かったよ、おれの話が報酬に見合うのだったら、話してあげるよ……今夜でいいかい？」

「構わないぞ」

「場所は、おれの泊まってる部屋というわけにもいかないな……」

ホームズの泊まってる部屋に行くには階段を登らなければならぬ。ジュードやレイアだけなら問題無いが、足を怪我したミラを呼ぶには無理がある。

「んー……そうだ、港にしないかい？あそこなら別に気兼ねなく話せるだろう？」

ホームズの提案にミラ達は頷いた。

「それと、最後に聞いていいかい？」

「なんだ？」

「なんで、おれの話をもそんなに聞きたいんだい？」

「理由なんているものか、知らない物を知りたいと思ひ聞いた事のない物を聞きたいと思う、ただそれだけの事だ、だったか？」

何処かで聞いた様な言い回しにホームズはため息を吐いた。

「『あるのは……』以降が抜けてるよ……とりあえず、レイアもその時はおいで、君にも聞く権利があるからね」

「……うん、わかった。……えっと、そろそろヨル君を解放してあげたら？」

ヨルは未だにホームズのアイアンクローを受けている。

「レイアの優しさに感謝しな」

ホームズはヨルをアイアンクローから解放してやった。ヨルはホームズを恨め

しそうに、いや、殺したそうに睨んでいた。

そんなヨルには見向きもせず、ホームズはマティス医院の中へ入っていった。それによく様にヨル、ミラ、レイア、ジュードと続いた。

「あの人から、無理はしない様に、と言われてるはずなんだけど……」
「すいません……」

今回の治療はいつも受付にいる女性だ。どことなくジュードに似ている。いつもと違い、今回は精霊術メインで治療している。

ホームズはふと思いついた疑問をぶつける。

「もしかして、ジュードのお母さん？」

「ええ、もしかしなくてもそうよ」

道理で似てる訳だ。ホームズは一人納得していた。まあ、本来なら、デイラックの事を『あなた』と呼んでいる時点で気付くべきなのだが……。

「でも、ついて行ってくれて良かったわ。お陰でみんな無事、とまではいかなかったけど、帰ってきてくれたんだから……て、どうしたの突然上なんか向いて？」

「いえ、何か、まともな反応を聞けて、胸いっぱいになっただけです」

「そう?……よしと、とりあえずこんなものね。腕の骨折は、ジュードが言った様に

2、3日保定しておけば大丈夫よ。他の怪我も今のでだいたい治ったわ」

「どうもありがとうございます。というより、最初からこうした方が早かったんじゃない……」

「あなたの場合、応急措置がいくつかしてあったから、それを生かすように治した方が体に負担が少なかったのよ。今回のは仕上げよ」

そう、ホームズの怪我を1番始めに治療したのは精霊術でも何でもなく包帯だったのだ。

「なるほど、骨折の方はジュードの応急措置だったからそれを生かして、精霊術でやったと」

「ええ、そうよ」

「ふむ……だったら、大怪我しても下手な治療はせずに精霊術士を探せば、」

「探しているうちに死ぬかもしれないわよ」

「やめておきます」

ホームズの野望(?)が潰されたところで今回の診察は終了となった。

「一応念の為、後1週間は通って頂戴ね」

ジュード母からそう聞くとホームズは挨拶をしてマティス治療院を後にした。勿論ヨルも連れて。



その夜、ル・ロンドの港。ホームズとヨルは、そこに居た。本当なら、仕事をし
て、疲れているはずだが、腕が2、3日使えない為、特別に休みを貰ったので割と余裕
だった。

ホームズはベンチに腰掛けながら、皆を待っていた。その隣にはヨルと、そして、
肉まんが2つあった。1つはホームズの物、もう1つは……

「おい、そっちのもよこせ」

「やだよ、何の為に2つ買ったと思ってるんだい」

「俺が2つ共食う為」

「いい性格してるよ」

「だろう？」

ヨルの分なのだが、食欲の固まりのヨルはどちらとも食べようとしていた。

ホームズとヨルは、お互い目を合わせるとすぐにベンチから立ち上がって、戦い
の準備をした。ホームズは自分の肉まんを守る為、ヨルは肉まんを奪う為に。

右腕が使えないホームズは不利に見える。しかし、ホームズはそれを補うだけの

威圧感を出していた。今は夜なのでいないが、もし、鳩が居たならいつせいに飛んで逃げる様な、そんな威圧感だった。まあ、黒猫相手に不利もくそもないのだが。

対するヨルも尋常ではない殺気を放っていた。ホームズを殺せば自分も死んでしまうが、そのぐらいでないと、このあつたかほかの肉まんは、奪えないのだ。

そんな威圧感を、殺気を出しながら彼らは相手の出方を伺っていた。

ホームズは怪我人、そんなに激しく俊敏な動きは出来ない。対するヨルも、全盛期ならいざ知らず、現在の体格差では圧倒的に負けている。下手に先制攻撃をすれば、あつという間にねじ伏せられてしまうだろう。

(この勝負、先に動いた方が負ける!!)

絶対に負けられない戦いが、今始まろうとしていた!

「……………何してるの?」

「!!、ジュード?!」

「スキあり!」

しかし、一瞬で終わった。

勝者はヨル。戦利品の肉まん2つはヨルのものとなった。ジュード、レイア、2人は何とも言えない表情で見ている。ちなみに、ミラは羨ましそうに見ている。そんな彼らの様子などお構い無しでヨルはもぐもぐと食べていた。何せ、これが久々のエサではなく、飯なのだ。ヨルはとても幸せそうだ。

「ああ、おれの肉まん……」

対するホームズは絶望に打ち拉がれている。しかし、すぐに復活するとヨルに掴み掛かった。

「返せ！吐き出せ！おれが買ってきたんだぞ……て、うわあ、本当に吐き出す奴があるかあああ!!」

肉まん（ゲル状）が少しだけ、返ってきたがホームズにあるのは、敗北感だけである。

対するヨルは素知らぬ顔で食べ続ける。その堂々とした食べっぷりは勝者そのものだった。

「ねえ、本当に何やってるの?」

ジュードの疑問がもう一度ぶつけられる。

「肉まん争奪戦。さつきまでそこでやってた屋台で買ったんだ。おれ、一口も食って無いのに……」

「ええつと、ドンマイ？」

「それ、レイアにも言われた。何なのみんなして……」

このまま行くと、肉まんの恨みつらみで、夜が開けそうなので、ジュードは本題に入った。

「で、話って？」

「ん、ああ、そうだったね」

どうやら、素で忘れていたらしいホームズの返しに、ジュードはため息を吐いた。ヨル程では無いがホームズも中々食い意地が張っている。

「うーん、どうやって話そうかな」

ホームズは顎に手を当てながら考える。正直なところ、ホームズがこれから話そうとする事はジュード達の予想通りなのだ。正直な話、二言程度で終わってしまうのだが……

(多分それじゃあ納得しないよな……)

ミラはホームズに話せと言った。二言程度で終わってしまうのものは話とは言わない。

一通り考え終わるとホームズは顎から手を離し、ジュードとレイアを適当な所に座らせた。すると、ホームズは彼らの方に向き直った。ヨルもそれに続くように肩に乗る。

ホームズは不幸自慢の様な話をするのが好きではない。だから、余り話したくない。

しかし、彼らはホームズを良い悪いはともかく知ろうとした。理解しようとして誠意を尽くした。

だったら、それに応えなければならぬ。

誠意に返すものは誠意でなければならぬ。

ホームズは、月を背にいつもの少し胡散臭い笑顔で話し始めた。

「さてと、それじゃあ、話すとするかね。ただ、過度な期待はしないでおくれよ。何せ、幸せいっぱいの話じゃない。予想外のどんでん返しもない。そんな不幸でいっぱいの話だからね」

出る杭折られる

「みんなの一番古い記憶ってなんだい？ 何々、レイアは膝を擦りむいた事、ジュードはレイアにボコされた事か…いやー、ジュードには同情するよ。レイア、君は反省しなさい。それとその棍を今すぐしまいなさい。全くどうしてそんなかさばる物をもってきたんだい？ なに？ 早く自分の事を話せ？ わかったわかった、すぐに話すよ。おれの一番古い記憶は母さんが泣いてる姿だね……」

おれはいや、ここではホームズ少年と呼ぼうか、なんかそっちの方がしっくりくるしね。ホームズ少年は母親が行商なんて事をやっていたから、ここって言う故郷がなかったんだよ。まあ、ある程度のルートと本拠地が幾つかぐらいは決まってたけどね。そんな訳でね、友達づくりには苦労した。仲良くなってもすぐに何処かに移動、そして、そこには何ヶ月いや、下手したら、何節も帰らない、そんな事ばかり続いてね。ただ、子供心に分かってたんだ、そんな自分が友達を作るためには靈力野がない事を隠さなくちゃいけない。もし、ばれたら友達づくりどころではなくなる、てね。

君達だってわかるだろう？ 子供社会で一番大切な事は『みんなと一緒に』と言う事だ。

ホームズ少年はどこから来たかよく分からない流れ者、瞳の色も違う。そんなある意味異端児のおれに靈力野ゲイトが無いなんてばれたらどうなるか……。

まあ、結局そんだけ分かったのにすっかりばれちゃってね……

原因？些細なことだよ。いつもの様に精靈術の話に適当に合わせてたら、的外れな事を言っちゃったんだよ。

子供達だけならまだ、ばれなかったかもしれないけど近くにたまたま大人が居てね、ベラベラと喋っちゃったんだよ。

なかなかの推理力だったね。彼には探偵の称号をプレゼントしたいよ。

それはさておき、結果どうなったかというところ、ジュードの予想通り、靈力野ゲイトがないと言う事で、そこでのヒエラルキーは1番下。

そして、自分より下の存在に気付いた彼らはホームズ少年に徹底的に、執拗にいじめをおこなってきた。

殴る蹴るは当たり前だよ。しかも達の悪い事に誰が入れ知恵したか知らないけど、いや、何と無く予想は付いてるけどね、まあ、ともかく目に付かない所を集中的に殴る蹴るをするようになったね。

誰が入れ知恵したかって？

多分そこにいた、夢敗れた若者達だろうね。

リーゼマクシアは生まれついた靈力野の大きさで、将来が決まるんだろう？自分の靈力野が、シヨボいばかりに自分の望む道に進む事が出来なかった。そんな連中の、ま、言ってみれば憂き晴らしだったわけだよ。ただし、年齢一桁のホームズ少年に暴力を振るつたなんて、言うのは世間体にもよろしくない。だから、ホームズ少年と同年代の連中に入れ知恵したんだろうね。

自分は手を汚さず、しかし、自分のアイディアでのいじめがどんどんされる。実にいい気分だったんだろうね。

策士をするのは、きつと楽しかったろうき。

やり返さなかったのかだって？無理に決まってるだろう。もう一度言うけれど、ホームズ少年の母は、行商人、つまり、よそ者の商人なんだ。そんな人が商売をしようと思つたら、一番大切になってくるのは『信用』だ。……なんだかジュード以外ピンと来ない様だから、説明してあげるよ。

自分の子供に暴力を振るつた子供の母親がやっている商品なんて、買いたいと思ukai?なに?ジュードをボコしたけど、ジュードの母さんは普通に料理を買いに来たって?レイア、それはね、ある程度積み重ねた物があるから成せる事なんだよ。何度も言うけれど、ホームズ少年の母親は行商人だ。流れ者で、はつきり言つて余所者だ。積み重ねた物なんて、せいぜい質のいい商品を扱っている程度の信頼だ。

ホームズ少年がやり返せば、多分それは歪んでいじめている子供の親達、つまり、ホームズ少年の母親のお客に伝わるだろう。自分の子供と、流れ者の子供、どちらが正しいと判断するかなんて想像するまでもないだろう？

そして、商品の売れなくなった商人に待つのは死あるのみ、というわけだ。理解出来たかい？

まあ、ホームズ少年はそんなわけでひたすら我慢していた。しつかし、まあ、母親つてのは偉大でね、いじめられた初日に見抜いたんだ、ホームズ少年がいじめられている事にね。

その時、やり返さなかった訳もすぐに察した。そして、

泣きながら小さな我が子を抱きしめた。そのままずっと謝り続けた。

『すまないね、本来なら命を賭けてでも守らなくてはいけないんだけど、今の私には、行商人の私には、それが出来ない。そして、……、本当はこんな事言いたくない。けれど言わなければ、ならないんだろうね。……君もきつと我慢する事か逃げる事しか出来ないだろう。そのいじめには、きつと立ち向かう事すら出来ないだろうね。……本当にごめんね』

あんなに涙でぐちゃぐちゃの母さん、じゃなかった、ホームズ少年の母を見たのは……分かったよ、母さんと言うよ、これでいいんだろ？なに？ついでにホームズ少年

と言うのもやめろ？なんでさ？……自分の事を他人事みたいに言っていて、しつくり来ない？……分かったよ、じゃあ、おれと呼ばせてもらおうよ。

おれの母さんがあんなに涙でぐちゃぐちゃの顔をしたのは後にも先にもこの時ぐらいだね……いや、もう一回あつたね。

結局、母さんの言つたとおり、やり返せず、ただただ、耐えていた。けれども、立ち向かう事は諦めていなかったよ。どうやっていたかつて？殴られた時、蹴られた時、おれは出来るだけ笑顔でいた。自分が耐えている事を、辛いと思つている事を、自分が辛い思いをする事を喜ぶ連中に悟らせない、それがその時のおれに唯一できた事だ。痛みは、耐える事が出来たんだ。けれど、目の色を馬鹿にされる事は我慢出来なかった。どうしても、ね。その時ばかりは笑顔を造つていられなかったね。

別にコンプレックスと云う訳じゃない。むしろ、逆と言つてもいい。

……そう言えばジュードの目は母親譲りだよね。目つきも、瞳の色も。

おれの目はね、母さんに言わせると目つきはともかく、瞳の色は父親譲りなんだつてさ。死んだ父親の……ね。

ある時、母さんがおれの顔を見て言つていたんだ。

『髪の色は私譲りだけど、目の色は父さん譲りだね……、これで、わたしのたれ目さえ遺伝しなければ、渋い男には成れただろうに、くつくつく』

……真実なだけに、腹立たしいたらないね、今でも18に見られないもの……レイア、その驚いた顔を今すぐ引つ込めたまえ。……後で覚えてなよ。

ゴホン、取り敢えず話を戻すかね。

何処まで話したっけ……そう、おれの父親はもう死んでいるんだ。物心つく前にね。母さんの話によると、おれが赤ん坊の頃に事故で死んじやったらしい。

だから、どんな顔をしていたか、どんな風に笑うのか、どんな人だったか、それらの事が全く分からない。いや、知らないと言った方が正しいね。

でも、それはとても悲しい事だ。母さんの話によればおれが生まれた時、父さんはとても喜んでくれたらしい。その場でバク宙する程に。

それなのに、おれはその人の事を何一つ知らない。

そんなにも、おれとの出会いを喜んでくれた人の事が、おれには何一つ分からない。その人がおれの父親だと言う、

繋がりが、

証拠が、

おれにはない。

だって、その人に会ったと言う記憶が無いんだもの。

ずうーっとそう思ってた。でも、違った。記憶はなくても、証拠はあった。繋がりもあった。自分の顔に二つも、碧色の物があつた。母さんお墨付きの、自分が父さんの息子だという証拠だ。そして、繋がりが。

これがかつた時おれは本当に嬉しかつた。バク宙は出来なかつたけど、泣いて喜んだ。多分あれが最初の嬉し泣きだろうね。

だからね、目の色を馬鹿にされる事だけは我慢出来なかつたんだ。

なにせ、おれの目は記憶にない、父さんとの唯一の繋がりなんだ。それを馬鹿にされた時の気持ち、想像ぐらいはできるだろう？

けれど、だからと言って、我慢出来ないからと言って、やり返す訳にはいかない。なんせ、自分達の生活が、かかっているからね。

そう思ったらさ、なんだか涙が出てきちゃって。奴らにばれちゃったのさ。

おれの、いつも殴られても、蹴られても、笑顔でいる弱味を決して見せなかつた、最底辺の人間の弱味が。

今でも覚えてる。殴る蹴るじゃあ泣かなかつたおれが、目の色を馬鹿にされて泣い

た時、奴らは笑ったんだ。本当に嬉しそうに。あの顔は忘れられそうにないね。

それからは、とにかくひどかった。顔を合わせる度におれの目の事を馬鹿にする、いや、蔑むと言った方が正しいかもね。

さらにね、達の悪い事にその事がいつの間にか、その街の子供達みんなに広まっていてね、今まで参加しなかつた奴らも含めて、その街のほとんどの子供達が指差して、おれの目の事を馬鹿にするんだ。暴力で自分の手は汚したく無い、そんな連中がごぞつて参加してきたね。凄く悔しかったし、悲しかった。でも、やり返せない、言い返せない。

だって、言い返したら、生意気とか言つて殴られちゃうからね。

泣かない様に気を付けた。でも、やっぱり泣いちやうんだよね。それを見て周りの連中は面白がつてもつとやる。

もう、無理だったよ。八方塞がりだ。完全におれの負けが確定しちゃったよ。

その頃から、おれは立ち向かう事もやめた。

というより、出来なくなつた。我慢もしたてたけど、段々それすらも出来なくなつて、ただただ、奴らから逃げる様になつた。

逃げて、逃げて、逃げて、何度も逃げる。そんな事をその街から出るまで、ずうーつと続けた。

結局、母さんの言った通りになっちゃったというわけさ。

多分こうなる事を予想していたんだらうね……予想出来ていたけど止められなかった、いや、どうすることも出来なかったんだらうね。

今そいつらがどうしているかは知らない。

まあ、別に知りたいとも思わないけどね。

さて、おれの不幸でいっばいの話はこれで終わりだ。

『生ぬるい！』なんて言われちゃえばそれまでだけだね。

まあ、当時のおれにとっては辛かったのさ。

ま、みんなが、これで満足してくれたらなによりだよ。

とはいえ、やつぱり自分の不幸話するのは性に合わないね。なんだか、不幸自慢しているみたいでさ。

旅は猫連れ、世は情け

「……話してくれてありがとう、ホームズ」

レイアは素直にそう言った。恐らく、この話をするのを渋ったのは、不幸自慢をしたくない、と言うのもあったのかもしれないが、それ以上に父親の事を知らないという事を口にしたくなかったのではないか、しかし、それでもホームズは自分達に話してくれてたのだ。多少強引な手を使ったにしても……

そんな事を考えたら自然とレイアは感謝の言葉を述べていた。

ホームズはレイアの言葉に目を丸くすると口を開いた。

「驚いたね……まさか、お礼を言われるとは思わなかったよ」

「何を言われると思ったの？」

「てつきり、同情されるかと思つたよ」

「されたかった？」

「同情するなら、金をくれ」

レイアの返しにホームズはおどけて言った。それを聞いていたミラは口を開いた。

「ふむ、借金のある奴が言うと言得力が違うな、ホームズ」

「……………」

「ごめんね、ホームズ。悪気は無いんだよ」

ミラの言葉に傷付いたホームズにジュードが代わりに謝っている。

ヨルはそんな彼らに構わず口を開いた。

「おい、そんな事より、女。お前の質問には答えただろう。そろそろ、報酬を払う時間だ」

「答えたのおれだけどね……………」

ホームズは少し不服そうだ。

「まあでも、そろそろ答えてもらうかね。取り敢えずジュードとレイアは席を外してもらえるかい?」

「本当に手荒な事はしない?」

心配そう、疑う様にジュードはホームズに尋ねる。すると、ホームズは笑顔で返す。

「しないよ、今までおれが嘘を言った事があったかい?」

「……………出会ってからまだ、1日も経ってないんだど」

「でも、嘘はついてないだろ、ね、レイア」

「うん、本当の事も言わないけどね」

レイアのフォローにジュードはさらに疑惑の目を向ける。

そんな様子を見兼ねてミラはジュードに言った。

「安心しろ、ジュード。いざとなったら私の方が強い」

「……分かったよ。じゃあ、僕とレイアは先に帰ってるから、ホームズが責任持つてミラを送ってきてね」

ジュードは渋々納得したようにそう言うのとレイアを連れて港を後にした。

そんなジュード達に手を振って返事をする。彼らが見えなくなると、ホームズは、ぼつりと呟いた。

「どんだけ信用無いのおれ？」

「そんだけ信用無いんだろうな」

ホームズの言葉にヨルは無慈悲に返す。

「それで、私に聞きたい事と言うのはなんだ？まあ、ある程度予想はつくが……」

「なら、話は早いね。じゃあ、教えておくれ、エレンピオスへの行き方を、ね」

ミラの質問にホームズは答える。ミラは少し、顔を険しくする。そんなミラの様子に構わずホームズはミラに顔をづいと近づけて続ける。

「ただし！君を殺さないで済む方法に限るよ」

ミラはさらに顔を険しくする。

「お前、それを何処で聞いた？……まさか、」

ミラの頭によぎるのは鉾山での会話だ。

そう言えば、ル・ロンドに來た本来の目的も父さんに故郷の話^{……}を聞く事だったね。どう聞けた？

聞けたけど、充分ではないね。だから、その補完の為にもミラに話を聞きたいんだ。

「デイルラックか……！」

ホームズはミラから、顔を離すと肩を竦める。

「まあ、一応言っておくけど、あの人はもう、アルクノアを抜けてるよ。ついでに言うなら黒^{ジン}匣も、もう使っていない」

誤魔化しても無駄だと判断したホームズはミラにそう言った。ミラはホツとしたように肩を落とした。

「そうか、そういう奴もいるのだな」

「そゆこと。さて、話を戻すけど……」

「私を殺さずにエレンピオスに行く方法か……」

ミラは考えて、ふとある考えが浮かんだ。

「ヨルは精霊術を食えるのだろうか？」

突然話を振られてヨルは片眉をあげる様にミラは見る。

「断界殻シエも一種の精霊術だ、それを食べてしまえばいいのではないか？恐らく全ては無理だろうが、少なくともお前達が通れるだけの穴は作り出せるだろう」

「断界殻シエって何処にあるだい？」

ミラはホームズの質問に指を上に向かつて指す。

「上空、そして、海の方こう」

最後に海の方を指差す。

「どうやってそんなところまで行けばいいのさ？おれもヨルも空は自由に飛べないんだよ……飛べないよね？」

少し、不安になって尋ねるホームズ。

「まあ、シルフ程は無理だな。精霊術を食う時の生首状態なら空中移動も出来るが、それでも限度がある。流石にそんな天高くまでは無理だ。それに何よりこの姿だからな……」

ヨルは忌々しそうに黒猫の自分の姿を見る。

それを聞くとミラは少し気の毒そうな顔をする。

「そうか、空は無理か……すまないが、正直海の方はあまり勧められないんだ」

「いや、だから、そこまで行く事が無理だつて。普通の船じゃそこまで行かないからね」

ホームズは呆れている。しかし、そんなホームズに構わず、ミラは続ける。

「昔、海の方にある断界殻シエを破られた事があるのだが、その時大津波が起こったんだ。恐らく、また破れば津波が起こる。お前らはそのまま死ぬだろう」

「……(忠告どうも)」

ホームズは頬を引きつらせながら言う。

対するミラは顎に指を当てながら色々と思いつ返すのだが、どうしても他の方法が見つからない。

「……すまないが、私にはこれ以上は無理だ」

「ふむ、だったらすぐにでも、殺した方が良さそうだ。取り敢えずホームズ、こいつを車椅子ごと海に落としてしまえ……て、あれ、おい、どうして俺を掴んでいるんだ……ち、ちよつと、待て、何で海の方に歩いて行くんだ、そつちに行く理由ないだろ！おい！聞いているのか！おい、待てまでマテ待てまでマテ……おわああああ!!?!」

ドボンとヨルを夜の冷たい海に放り投げると、ホームズはミラの方に戻ってきた。

「ちよ、思つたより冷たい！」

ヨルは何とか溺れないように必死に泳いでいる。いや、もがいている。

「何か心当たりとかない?」

「おい!早く助ける」

ホームズは真剣にミラに聞く。ホームズとしてはどうしても知りたい情報なのだ。

ミラは顎に手を当てて考えると、何か思いついた様に顔を上げた。

「もしかしたら…四大なら何か知っているかもしれない」

「四大つて、四大精霊の事?」

「その話、俺にも聞かせろ!」

「今は、君の近くにはいない様だけど……」

「それを見抜いたの俺!何自分の手柄みたいに話してんだ!」

「今は、捕まってイル・ファンにいる」

そんな事があり得るのか、とホームズは考えた。四大精霊とは、その名の通り地水火風をそれぞれ司る精霊達四体の総称だ。そんな連中を捉えるなんてはつきり言ってる得ない。しかし、そこまで考えてふと、母の言葉が、頭をよぎる。

『不可能を消去して、残ったものが如何に奇妙な物であつても、それが真実となりえる』

「あり得るって事か……それにしても四大精霊なんてどうやったら捕まえられるんだい?」

ホームズの質問にミラは顔色を変えず言う。

『クルスニクの槍』と言う巨大な黒匣の兵器によって捕まえられてしまった」

しかし、声色からは悔しさが滲み出ていた。

「巨大な、黒匣の兵器……」

ミラの話聞いてホームズは戦慄していた。精霊を殺す様な道具が兵器として開発されている。そんな事を思っていると海の方から声が聞こえた。

「しかも、名前がクルスニク、か……」

「ヨル、もう帰ってきたのかい？」

海の水でびちゃびちゃになったヨルが殺気のコもった目でホームズを睨む。

「お前、本当に覚えてろよ……」

そう言うと、体を黒く光らせ体表の水を全て飛ばし、ホームズの肩に飛び乗った。

「ところでヨル、なんだい？ 『クルスニク』て？」

『クルスニク』と言うのは創世の賢者の名前だ」

「君……答える気あるの？ 理解出来ない単語を理解出来ない単語で説明しないでおくれよ」

額に青筋が浮かぶのを感じながらヨルは続ける。

「ようは、マクスウェルと盟約を交わした人間だ」

ホームズはヨルの説明を聞いてようやく納得がいった様だった。

「そんな人間の名前のついた物がまさか、精霊達にとつての脅威になるなんてね」
「ま、これが所謂皮肉ってやつだな」

ニヤリと、牙を見せながらヨルは笑った。

そんな身の毛もよだつ笑みを見ながら、ミラは別の事を思案していた。
そして、ミラにある考えが浮かんだ。

「お前はリーゼマクシアがどうなってもいいと思うか？」

「どうしたんだい？突然？」

「答えろ」

真剣なミラの物いいに

「どうなってもいいとは思わないよ。おれの両親は確かにエレンピオス人だけど、おれの故郷はリーゼマクシアだもの」

「…そのリーゼマクシアが、今危機に瀕している。先程話した『クルスニクの槍』によつて」

ホームズは目を細くすると、ミラを観察するように眺めた。そんなホームズに構わず、ミラは続ける。

「私達は、それを破壊する為に旅をしていた、いや、旅をしている」

「何が言いたいんだい？」

ホームズは夜の海の様に静かに問う。

そんなホームズにミラは凜として言う。

「私達と共に来ないかホームズ、『クルスニクの槍』を破壊する為に」

「……そうすれば四大精霊達を解放できると、話を聞けると言うんだね」

「そうだ、それがそのままお前への報酬となる」

「どうする？今ここでその女を殺した方がリスクは小さいぞ。」

ヨルは意地悪くホームズに言う。そんなヨルにホームズはニヤリと笑う。

「『全ての事柄に、全ての行動にリスクは付きものだ。そこに大きいも小さいも関係ない。あるのは、その欲望を満たしたいか、満たしたくないか、だ』だっけ？おれが満たしたい欲望は取り敢えず、ミラを犠牲にせずエレンピオスに行く事だよ」

ヨルにそう言うとうちホームズはミラの方に向き直り、折れていない左手を胸に当てて言う。

「いいぜ、ミラ。そのお誘い、受けてあげるよ」

「恩に着る」

ミラは安堵した様にホームズに感謝の旨を伝えた。そんなミラに笑顔で返すと今度は肩にいるヨルに言う。

「ヨル、君もそれでいいだろうか？」

「俺に拒否権なんて、あつて無いようなものだろうか？」

どんなに嫌だと言つても、一定の距離以上離れられないヨルはついて行くしかないのだ。

「……ハア、やってやるよ、付き合つてやるよ」

ヨルはため息をつきながら了承した。

ホームズは満足そうにニヤリとすると今度はミラの方を向いた。

「取り敢えず、君はリハビリをしてから、つて事でいいのかい？」

「そうだ。それまでには、お前の借金も払い終わるだろう」

「……気を遣つてくれて嬉しいよ」

借金の原因に言われてホームズは満足そうな笑みを引つ込め、力無く笑いながらそう言った。

「とにかく、マティス治療院まで送つてかないとね」

ホームズは気を取り直してそう言うと、ミラの車椅子に手をかけた。

「ああ、よろしく頼む」

「任せておくれ」

彼らはそう言うのと、夜の港を後にした。

不安がないと言えば嘘になる。しかし、それは……

「いつもの事だしね。頑張るとしますか」

情けは人の為になりません

「さてさて、面倒な事に首を突っ込む羽目になりそうだね」

「自分のせいだろ」

「おっしやる通り」

ホームズとヨルはミラを治療院に送り届けるとそのまま、宿屋ロランドまで暗い夜道にコツコツと足音、そして話し声を響かせて歩いていった。遠めから見るとヨルの金色の目がホームズの肩の上に浮いている様に見える。

そんな会話をしているとロランドに辿り着いた。よく見ると真つ暗ではない。

「あれ？食堂の方、灯りが付いてる」

「ん、ああ、そうだな。誰かいるんじゃないのか？」

「かもね……」

そういいながらホームズは玄関の扉開け、食堂の方を見る。

するとそこには、一人の女の子、レイア・ロランドが……

「勉強してたんだろうね……」

「……見る影も無いな」

何やらノートの様な物を広げながら、四人掛けの机に頭を置いて寝ていた。

必死に眠気と戦った証拠に筆記用具を手を持って寝ている。

「起こしてあげた方がいいかねえ？こんなところで寝てたら風邪を引いちゃうよ」

「お好きにどうぞ」

ヨルのやる気のない返事にホームズは取り敢えず、手近なノートを丸めると……

スパン！とそのまま強めに叩いた。

「……あ、おかえりホームズ、ヨル君」

「ただいま。いや、おはよう、かな？」

ホームズと寝起きのレイアと目が合う。レイアは少し痛そうに頭をなでると、ホームズに言う。

「贅沢は言わないけど、もう少し優しく起こして欲しかったな。」

「君にだけは言われたくないね」

ホームズが思い出すのは、ル・ロンドに來た翌朝の出来事だ。色々と考えがあったにせよ、危うく1日の始まりが、一生の終わりになりかけた、あの、レイアの起こし方。思いうすだけでも、心拍数が全力疾走後みたいになる。

苦虫を噛み潰した様な顔をしていると、レイアが向かいに座る様に促した。

ホームズは大人しく従い、レイアと向かい合わせに座る。

「ところで、ヨルが食堂に入っちゃつてるけど、いいのかい？」

「別に大丈夫でしょ、ヨル君、猫じゃないわけだし。ただし、説明するのが大変だから、お母さん達の前ではやらないでね」

「りよーかい。肝に命じておくよ。それで、おれを座らせて何がしたいんだい？ 勉強は？」

「大丈夫、後でやるよ」

レイアはそう言うと、ふう、と息を吐くと唐突に話始めた。

「わたしね、昔大怪我をした事があるんだ。ジュードの家、マティス治療院にね、見たことない機械があつたんだ」

マティスの家、見た事のない機械、それから導き出されるのは

(黒匣^{ジン}か……)

ホームズはレイアの話から推測していた。まあ、所詮推測の域をでない物なので、そうそうにその推測から離れた。

そんな、ホームズに構わずレイアは自分の幼い頃の話が続ける。

「子どもだったからね、それで遊んでいたんだ。そしたらさ、それが暴発しちゃつて……今のミラみたいだね、足が…動かなくなっちゃつたんだ」

ホームズは息を呑む。目の前の少女が過去にそんな大怪我を負っていたとは思ひもしなかったのだ。

なにせ、今では普通に歩けているし、戦えてもいる。こんな状態の彼女を見て、過去にそんな大怪我を負っていたと想像する方が無理だ。

そう考えてホームズは一つの考えに辿り着いた。そんなホームズにレイアは察した様に頷いた。

「ホームズの想像通り、わたしはね医療ジンテクスを使ったんだ。今でこそ、こんな風に話せるけど、当時大変だったよ。矛盾してる様だけどね、痛いなんてもんじゃない痛みが常にあるんだよ。リハビリもとにかくキツくてね……本当に大変だった」

「君はそれを乗り越えたんだね」

ホームズが感心した様に言うレイアは少し困った顔をし、そしてそれから首を横に振った。

「わたし一人じゃ絶対に無理だったよ」

一旦そう言葉を切る。そして、その当時の事を思い出すように語る。

「いつもね、リハビリなんてもうやめたい！って思ってたんだ。でもね、その度にジュードがね、根気強く励ましてくれたんだ。どんな言葉だったかな……とにかくおかげでさ、リハビリを諦める事なく、ご覧の通り今ではこんなに元気に歩けるようになったん

だ」

そうやって最後には満面の笑みを見せた。

「終わりがいい？」

「うん。」

「どうして、そんな話をおれにしたんだい？」

ホームズは折れていない左手で頬杖をつきながら、とても不思議そうに聞いた。すると、レイアはホームズの目を真つ直ぐ見据えて口を開いた。

「ホームズの話聞いたからね、今度はわたしがホームズに話さなきゃと思ったんだ。……自分の辛かった話を。それぐらいしなきゃだめだと思ったんだよ」

そう言うレイアは目も口調も全て、真剣だった。

ホームズは頬杖をやめると椅子に深く腰掛けて小さく、けれどもとても嬉しそうに笑った。

「君は本当にいい奴だね……」

「そうかな？」

レイアは少し照れた様に言う。

ホームズは何かに納得した様に、口を開く。

「そうか、その頃からジュードに惚れてた訳か……」

「まあね、……て、ん？ちよ、ちよ、ちよっと待つて」

今度は顔を真つ赤にしている。段々ボリユームが上がっている事に気付いていない。

「え、え、えー、いつから！いつから！知ってたの?!」

ホームズはさつきまでの嬉しそうな笑みを引つ込めて、今度は完璧に呆れた様な顔を
している。

「いや、最初から…」

「隠してるつもりだったのか……」

「ヨル君まで!!」

ヨルはヨルで呆れていた。

「というより、出会って数日のおれらでも気付いたのに…ジュードはあれ、気付いてないよね」

すると、今度は別の意味で顔を赤くしながらレイアは机を拳で叩く。

「そうなんだよ！全く気付いてないんだよ！見たでしょ、あの素っ気なさ！小さい頃からずつつつとそうなんだよ！」

思い返すのは、あのボルテナ街道での会話だ。

ホームズはレイアを可哀想な子を見る目をしている。

「そんな目で見ないで!!」

再度机をダンツと叩く。

「うるさいよ!!レイア!今何時だと思ってるの!!」

いつの間にかレイアの母、ソニアがそこに居た。レイアはギギギつと首をソニアの方に向けた。顔は真つ青だ。

ホームズはホームズで焦った様に肩を見る。しかし、ヨルはいなかった。どうやら、いち早く気配を察知して逃げたようだ。

「(ぎ) (ぎ) (ぎ) めんなさい」

レイアは急いで謝った。傍目から見ても可哀想なくらい怯えていた。哀れに思ったホームズは、助け船を出す事にした。

まあ、話題を振った張本人なのだが。

「まあまあ、ソニアさん。レイアも年頃何だから、想い人の話じゃ声を荒げますよ。だから、それぐらいで……」

「想い人? ああ、ジュードの事」

一瞬怪訝そうな顔をしたが、直ぐに納得した様に言った。

「いや、何でお母さんまで知ってるの!!」

「……気付かれてないと思ったてのかい? 因みに言うとお父さんも知ってますよ」

さつきまでの迫力は何処へやら。今では完璧に脱力している。逆にレイアはどんどんヒートアップしていく。

「嘘！本当に!?何で?!」

「だから、うるさいっ言ってるでしょう!!それとホームズ!!」
だが、すぐに復活したようだ。

「ハイ?!」

突然矛先がこちらに向いてホームズはビクツと肩を竦める。

「あまり、この子を甘やかさないでちょうだい。直ぐに調子に乗るんだから」
「き、肝に命じておきます」

ホームズは余りの迫力に気圧されながら何とか言葉を紡ぐ。

その言葉に満足そうに頷くと、ソニアは……

「さて、それじゃ2人はコッチに来なさい」

ホームズとレイアの襟首を掴んでズルズルと外に向かって歩き出した。

「え、待って待って何でおれも?」

「レイアを甘やかした罰です。」

「おれ、怪我人なんですけど……いや、何でもないです」

ソニアのいつの間にもやら取り戻していた迫力に気圧され、ホームズは口をつぐんだ。

そして、2人は外に連れ出され、そのまま2時間正座で説教を聞くハメになった。そして……

「今日は2人とも反省しなさい」

そう言つてガチャリと玄関に鍵を掛けて2人を締め出した。

「……嘘でしょ?」

ホームズは信じられないとばかりに言葉をこぼす。

対するレイアは慣れっこの様で引きつり笑いをしている。

「多分今夜は帰れないよ」

「本当に言つてるの? だって、仮にも年頃の男女だよ。そんな2人を夜の街にほっぽ

り出す、普通?」

「まあ、ホームズなら何も起こらないでしょ」

ホームズは何とも言えない微妙な表情をする。

「あのね、そうやって無条件に信用するのはどうかと思うよ。おれは君が、将来何も考えずに男の家に泊まりそうで怖いよ」

「だって、ホームズ怪我人じゃん」

ホームズの説教などどこ吹く風とばかりにレイアは言う。

ホームズは左手を顎に手を当てて、しばらく考えると、ジト目になり、口を開く。

「いざとなったら、自分の方が強いと……」

「うん！」

ホームズは右腕の包帯を見ると引きつり笑いをする。

「取り敢えず、ここに居てもしょうがないし、港の方に行かない？ つてヨル君が中か……」

「いや、そつちは心配ないけど……勝手に何処かに行つていいの？」

「大丈夫だよ。わたしもいつもそうしてたし」

「反省する気ある？」

ホームズのツツコミが静かに夜のル・ロンドに響いた。

◇◇◇◇◇

「まさか、今日だけで3回もここに来るとはね……」

「わたしだつて予想しなかつたよ」

2人はベンチに座つて海を眺めながら今日の出来事を振り返る。

レイアの飛び込み、ホームズの過去話、そして、今度はいい年こいて、説教をくらい締め出されるというザマ。

「……1日と経っていないのにロクでもない思い出しかないんだけど」
ホームズのため息の音が響く。レイアは苦笑いするしかない。すると……

「まるで、お前の人生の様だな」

ホームズの隣からやたら低い声が聞こえた。

「わあああ!!びっくりした。おどかさないでおくれよ。ヨル」

ホームズの文句なんてどこ吹く風。いつの間にかやら、ホームズの肩に乗っていたヨルは夜の海を眺めていた。尻尾を揺らし、金色の目を光らせながら。

レイアも驚いた様でヨルを指差しながら、口をパクパクさせている。

「どうして!!だって、確かにここに着くまでヨル君いなかったよね!!」

「ああ、いないぞ」

「だつたらなんで?」

レイアの質問にヨルは尻尾をゆらゆらと揺らしながら答える。

「ホームズとの距離が一定以上離れると、俺はこいつの所まで、俺の意思と関係なく勝手に、瞬間移動するんだ。まあ、これも封印の時に掛けられた制約の一つだな」

ヨルの説明でレイアはようやく納得が言ったように手をポンと叩いた。

「成る程ね、文字通り『一定の距離以上離れられない』というわけなんだね」

ホームズは人差し指と親指で拳銃のようにし、レイアを指差して、少しおどけたように言う。

「そゆこと。ま、こんな風に突然現れるからさ、出来るだけこんな事が無いように、いつも一緒にいるわけなんだよ」

突然黒猫が現れたら大騒ぎだ。

ホームズもそれが分かっているからそういう事が無いように気を付けているのだ。

そんなホームズの説明を聞くと、レイアは何かを思い出した様にハアとため息をつく。

そんなレイアにホームズはいかぶしげに尋ねる。

「どうしたんだい？」

「まさか、お母さんやお父さんにばれてた事もショックだけど、まさか、ホームズにまで、ばれてるとはね……」

その言葉にホームズは得心がいったように手をポンと叩く。

「ああ、ジュードの事……」

「というより、ホームズに気付かれるってお前……相当だぞ」

ヨルは呆れたように見下している。猫に眉はない。しかし、もしあったなら、『片眉を挙げて』なんて表現がピッタリの顔だ。

対するホームズの顔は納得のいかないと言った感じで眉間にシワを寄せている。

「おれって恋愛^ごことに対して鈍い？」

「自覚なかったのか？」

ヨルはレイアに対しての目よりさらに冷たくなっている。

しかし、ホームズの目は段々輝いていく。

「ということはおれが気付いていないだけで、おれの事が好きな女の子がいる?!」

「は？」

突然の頭の悪いホームズの発言に思わずヨルとレイアの声がハモった。そんな彼らに構わずホームズはベンチから立ち上がり演説は続ける。

「やったね、ついに、ついに、ついに！おれに春がやって来たよ、来ましたよ。正直、自分より年下の奴が短期間にあれだけ女の子と交流を深めてたなんて羨まし事この上なかつたけど!!どんだけ、ジゴロ何だと思つたけども!!」

「えらい言われようだぞお前の幼馴染み」

「いや、本当の事だし……というか本当に年上だったんだね。てつきり、同い年かと思つてたよ」

「たれ目とアホ毛とあの服装でー3歳で感じだな」

ヨルとレイアはホームズズに聞こえないように小声で内緒ばなしをしている。

しかし、ホームズズはそんな事にお構い無しで、折れていない左腕をさながら演劇のよ
うに広げレイアと、そして、ホームズズから逃げるようにベンチにいるヨルの方を振り返
る。

「おれにもその可能性がある!!そう、おれが気付いていないだけで!気付いていない
だけで!!」

「……何で2回言ったんだろう?」

「……大事な事だからだろう」

「そうなんだろう!!ヨル!!」

「ああ、そうなんじゃないか(笑)」

もう、どうでも良さそうに返事をするヨル。

「何だその目は!!」

ホームズズは思わずヨルに掴みかかる。いや、もうすでにヒゲを引っ張っている。

レイアは完全に呆れている。しかし、ふと思いついたように言う。

「もしかして、ホームズズってき、誰が誰の事を好きって事に気付かないの?」

「正解。……そういう事だ、ホームズ。お前の事が好きな女の存在に気付いていない

訳じゃない」

ヨルのその言葉にホームズは信じられないと言うように目をひらくとガツクリと肩を落とす。

「そんな……」

その悲壮感は目も当てられない。ヨルは見下しているし、レイアは苦笑いしている。

「どうか、そんなホームズに気付かれたわたしつて一体……」

「よっぼどだな。そして、それに気付かないつり目のガキも相当だな」

「だよね……」

うなだれているホームズを余所にレイアとヨルは話を続ける。

「こいつの鈍さは母親お墨付きだったから……『君はもう少し、いや、かなり人間関係に注目しなさい。でない、馬鹿まっしぐらだよ。』って」

「随分と厳しいね……」

レイアは思わず腕を抱える。

「こいつ見ると、本当にその通りだと思ふな」

さつきまでの醜態とそして、今のザマを見てヨルは言う。

レイアはそんなホームズを見てさつきから気になつていた事をヨルに聞く。

「そう言えば、ホームズにはさ、浮ついた話とかないの？」

ヨルはゆらゆらと尻尾を揺らしながら、考える。何かあったつけど。そして、1人の少女を思い出す。

「あつたな、そう言えば。こいつの……」

「わああ！言うなよ君!!」

いつの間にやら復活したホームズがヨルの口を抑える。

しかし、もう遅かった。レイアの目が期待で輝いている。

「で、どうなのホームズ?!」

「内緒。男は……」

「ホームズの場合、秘密があってもなくても大して変わらないよ」

ホームズの言葉を遮ってレイアは言う。対するホームズは少し、フリーズすると笑顔になる。

「わあい、嬉しいな」

「悪い意味でな」

「分かってるよ!!」

ヨルは容赦無くホームズに言う。ホームズはそんなヨルをキツと睨むとレイアの方を向く。

そして、観念したように話始めた。

「別に君が期待してる様な話じゃないよ」

そう言葉を一旦切ると左手で自分の碧い目を指差す。

「この目の事を散々馬鹿にされたって話しただろう。実はね、1人だけ、褒めてくれた女の子がいたんだ。」

いつものように泣いてる所を見られない様に隠れていたらさ、人が通りかかる様な気配を感じたんだ。だから、ふと、顔を上げたんだ。だって、いじめてくる奴らからは逃げなくちやいけなからね」

ホームズはベンチに深く腰掛けた。

「そしたらさ、目が合っちゃったんだよね。びっくりだったよ。まさか、女の子とは思わなかったね」

ホームズは喋るの渋っていた割にはとても懐かしそうに、楽しそうに話している。

「まあ、同時にしまったと思ったけどね。思わず『あっ』て言いそうになったよ。いつものように馬鹿にされるんじゃないのか、て怖かった。そしたらさ、その女の子ったらさ、開口一番におれの目の色を褒めたんだよ。『綺麗な目の色だね』て。あれは嬉しかったね。人生で Best 3 に入る嬉しい出来事だったよ。」

それから、しばらくその街を出るまでその女の子と遊んだ、と言うより話した、て感じかな。色々な話をしたよ。好きな動物、好きな食べ物、それから、母親の事。今考え

るとなんて事ない話だけだね。

まあ、仲良かったて訳さ。だから、お別れの時は悲しかったし、寂しかったなあ」
ホームズはそう言うのと夜空を見上げる。三日月が輝き、そして、星もちらほらと輝いている。

「今その子がどうしてるかは知らない。何せ、10年近くその街には行っていないからね。行商人の運命さだめて奴さ。ただ、ね、元気に暮らしているといいなと思うよ」

ホームズは最後にそう言って締めた。

レイアはその話を聞いて思わず笑顔になった。しかし、少し気になる事があった。

「素敵な話だね。でも、どうして、ジュード達にはその話をしなかったの？」

ホームズは一瞬、きよとんとすると当然のように答えた。

「だって、聞かれなかったから……」

「……ああ、そう」

レイアは少し面食らったが、こういう奴だという事を改めて思い直した。

「なるほど、つまりそれがホームズの初恋で訳だね」

レイアは得心のいったように言う。対するホームズはよく分からないと言う顔をしている。

「どうだろうね……うーん、もしかしたら、そうかもしれないし、違うかも知れないし

……」

「はつきりしないねー。ヨル君が話そうとした時、あんなに慌てたから、てつきりそうかと思つたよ」

「何か恥ずかしいんだよ、その話」

ホームズはレイアの方を向かず空も見上げず、そつぽを向いている。

そんなホームズを見て、レイアは何となく察した。しかし、それを本人にいう程野暮ではない。

「お前の母親が言うには、それは『初恋』だそうだ」

正真正銘の野暮がいた。レイアの気遣いを全部ぶち壊した黒猫ヨル。レイアはジト目をヨルに送る。しかし、ヨルはどうってことないようだ。

そこで、レイアはふと思つた事を聞いた。

「あのさ、もしかして、ヨル君、その場にいた？」

「居たぞ。ついでに言うならそのガキの前で喋つた。」

可哀想にと少し同情する。何せこの可愛らしい外見から出てくるのは想像も出来ないような低い声。小さい子の夢を一瞬で破壊したのだろう。

レイアはその考えを終わらせるとホームズに言う。

「あのさ、そう言えばヨル君との出会いってどんな感じだったの？」

これは、レイアがずっと聞きたかった質問だ。

この奇妙な関係はいつから始まったのだろう、と。どんな始まりだったのだろう、と。レイアの質問にホームズとヨルは顔を見合わせる。彼らは少し考えているようだ。

そして、ホームズが口を開く。

「うーん、まあ、夜も長いし話して上げるよ。」

出会ったのはそうだねえ、さつき話した女の子に出会う少し前かな……」

棚から黒猫

「実を言うとおれは最初に話した街に3回行っている。1回目は靈力野ゲートがないとばれて散々な目にあつたねえ。……これから話すのは2回目に訪れた時の話。女の子に出会い、ヨルに出会った、まさに、人生の転機とも言うべき2回目の話だよ」

母さんとしても、何度もこんな場所来たく無かつたようだけど、やつぱりそうは言つてられないのが行商人の悲しいところだよね。

おれは確か……7歳だつたかな？そう、もう1年経つたんだね、なんて会話をしたから確かに7歳だ。

おれとしては、もう1年経つたんだから、おれの事は忘れててくれないかな、なんて思つてただけど……甘かつたね。むしろ、1年と言う歳月を経て小賢しい知恵がついた分、もつとタチが悪くなつたね。

取り敢えず、石とか、物を投げる事を覚えてたね。そして、体も鍛えられていて、逃げる事さえ難しくなつた。

まあ、当たり前と言えば当たり前なだけど……だつてさ、地元の連中の方がさ、その土地の地理に詳しいんだもん。いわゆる、『地の利がある』てやつさ。だからね、隠れてもすぐ見つかつちゃう。

逃げる事も出来ず、隠れる事も出来ず……大変だった。

そんな時だよ、ヨルと出会ったのはね。

その時はね、いつもの様に追われていたから、今度は街の外に出たんだ街の中に居ればすぐに捕まっちゃうもの。でもね、奴らはしつこく追いかけてきた。

だから、隠れたんだよ。近くの洞窟にね。その洞窟は一本道でね、出来るだけ奥に隠れたんだ。

そしたらさ、奥にいたんだよ。真っ黒のくせに目の色だけは、らんらんと金色に輝いている黒猫がね。

その黒猫の周りには柱が五本あってね、そこからそれぞれ鎖が伸びてきていて、ヨルを縛っていたよ。そして、地面には、当時は星つて事しか分からなかったけど今なら分

かる。あれは、五芒星だね。さっきの五本柱は、それぞれの頂点から伸びていたんだよ。ちよつとだけ驚いた。でもね、そんな事を気にしている場合じゃなかった。だから、奴らに見つからない様にひたすら息を潜めていた。でも、悪口だけは聞こえるんだよね……大声で言つてた、おれの目の色の事を特にね……

あんまりにも言うもんだから、ついに我慢出来なくなつて、奴らに言い返しちやつた。

そしたら……思いのほか、連中激怒しててさ、言つた後に後悔したね。結構大声で言つたからさ、居場所がばれたと思つたね。こんな人目につかない場所でのいじめなんて、想像したくもない。

でもね、驚いた事に奴らはおれの声は聞こえたみたいだけど、洞窟の中には入つて来なかつた。いや、もつと正確に言うなら、洞窟そのものを見つけれないなかつたみたいだつたんだよ。とても不思議だつた。

まあ、その後すぐに説明してくれたけどね、ヨルが。

『ダクト靈力野に作用して、ここは幻覚を見せる。そういう術式が組んである。これを突破出来るのはそれを物ともしない術者じゃないと無理だ。恐らく奴らはこの洞窟そのものを発見出来ていないだろうな』

そう言うとおれの顔をまじまじと見た。

『……なるほど、相変わらず、人間と言うのは見た目によらないものだな』

… 死ぬ程驚いたね。何たって猫が喋ってんだもん。しかもよく聞く可愛らしい声じゃなくて、おもくそ低い声なんだもん、なにこれ、て奴だよ。……まあ、多分相当うるさかったんだろね。あ、頷いてる、やつぱり？ゴホンツ、とにかく、ヨルはウンザリした様に話してくれたよ。

『ああ、もう、やかましいな。だから、ガキは嫌いなんだよ。まあ、仕方ないか、これも何かの縁だ。おい、ガキ。その要石に触りな、そして、願いを言え。そしたら、俺の力の及ぶ範囲で叶えてやろう。代償は、お前の靈力野から生み出されるマナ、そして、お前の自由だ。願いを叶えたその瞬間から俺はお前に四六時中ずつと取り付き、マナを奪い取ろう』

ヨルはそう告げたよ。おれの目をその金色の目で見据えながらね。

その時、おれは最初、言ってる意味がよく分からなかった。なんてったって、いっぺんに色々な事が起きたからね。混乱しちやっってたんだよ。

そして、それ以上に……認めたくはないけど、あの時のおれはヨルの迫力に呑まれていた。

今じゃ、どうってことないけどね。

しばらくすると、頭も冷えてきて段々働くようになってきた。ヨルの言った事を理解

できるまでにね。

おれにとつては、いや、誰にとつても振って湧いた様なチャンスだ。だって、願い事が叶うんだもの。おれは一生懸命どんな願い事をしようか考えた。いじめっ子の撃退？ 商売繁盛？ どれがいいかってね、

そして、自分にとつての一番の願いに気付いた。これしかない、思った。

いじめっ子も、商売繁盛よりも、おれは、それよりもっとどうしようもないものを選んだ。

おれはゆっくりと、要石に触れて、願いを言った。

おれの父さんを生き返らせてくれ、てね——

死んだ人間には、どうやっただって、会うことは出来ない、普通の方法ではね。でも、目の前に有るのは普通の方法じゃない。

……またと無い機会だった。

霊力野^{ゲート}なんて、そもそもない。犠牲になるのはおれの自由のみ。それで母さんの泣き顔を見ずにすむ、そして、おれも父さんと一緒に居られる。だったら、それぐらい我慢

しようと、おれの自由ぐらい我慢しようと。

そう覚悟を決めた。幼い、でも、精一杯のね。決めただけど………

『阿保、そんなの無理に決まってるだろ。話聞いてたか、ガキ。俺の力の及ぶ範囲でつて言っただろうが』

あつさり、無理だと言われました。

即答だったよ。おれの葛藤も覚悟も全て吹き飛ばす様に言い放ったからね。

『んな、無理な願い事よりも、今騒がしい連中を殺してくれ、に変更しろそれならでき
る』

まあ、一瞬迷ったけど首を横に振ったよ。その場のテンションに身を任せると後でひどい目を見ると母さんに教えてもらっからね。

それを見るとヨルは何となく諦めきれないような顔して、おれに要石から離れる様に言った。

洞窟から出ようかと思っただけけど、外の連中の声が聞こえてね……出るに出来ないかった。

だから、奴らが何処かに行くまでしばらくその洞窟にいた。

まあ、その間ずっと、連中を殺すよう願えってヨルは言ってたけど……

それ以降、何かある度にその洞窟に行くようになった。だって、そこに居れば奴らはおれを追って来れないからね。

最初のうちは特に会話はなかつたけど、段々と話す様になっていったね。

ヨルは幾つか話してくれた。自分の存在を知っているのは大精霊ぐらいだという事。そして、かつて、此処ら一帯を地獄にした事。そのせいで、人間と大精霊の両方と戦う羽目になった事。結果、負けて封印された事などなど、と言った所かな。

そして、最後にはこう言った。

『俺は、化け物だ。願いを言うならそれぐらいの覚悟を決めるんだな』

馬鹿にしたようにニヤリと笑ってね。

◇◇◇◇

『何だかあいつら、やたらお前の目の色の事を言ってるな』

そんな風に会話をする様になったある日の事。ヨルはそう言ったんだ。隠れてはいても悪口は常に言われていたからね。ヨルの洞窟の前で。

さすがにヨルも気になったみたいでおれの目を覗き込む。

『なるほど、確かに碧いな』

まあ、特に感想はなかったけどね。その後すぐにこいつはとんでもない事を言ってきた。

『そうだ。お前の目の色を黒くしてやろう。そんなに目の色をからかわれるのが嫌なら、変えた方がいいだろう。』

よし、それをお前の願いにしろ。それぐらいの整形なら俺にも出来る』

一瞬フリーズしたけどすぐに何を言われたか理解したよ。

勿論おれは猛反対したさ。この目の色がどれだけ大切かをとにかく力説した。

そんな俺に対してヨルは何だか冷めていたね。

『ふうん、顔も覚えていない人間との繋がりがそんなに大切か……相変わらず、人間としてののはよくわからないな。』

ま、どうでもいいが早く願い事を決めてくれ。この先お前以外の奴がここを発見するのを待つのも面倒だからな』

ふあつと欠伸をしながら、伸びていたね。何だかその言い草に凄く腹が立ったからさ、今度はおれが聞いたんだ。

だったら、君は何が大切だい？てね。

そしたら、これがまた腹立つ様にいうわけだよ。

『お前、阿保か？こんな穴ぐらの中にいて、そんな物ある訳ないだろ。しいて言うな』

ら、命と言ったところか』

とね。もう、本当にどうでも良さそうに言うんだよ。

余りの言い草にポカンとしてたら、ヨルはふと思いついた様に言葉を付け加えたんだ。

『ああ、そうだ別に大切な事ってわけでもないが、封印が解けて、晴れて自由の身になつたらあつちこつちを巡つてみたいな……勿論、ここ、えーつと……リーゼマクシアだっけ？を地獄にする道中だな』

……気付いた？そ、今のヨルの欲はこの頃から出来てきていたんだ。……最後にとんでもない一言が付いてきたけどね。

まあ、楽しい会話をしてた訳じゃないけど、それでもおれ達はよく話をした。まあ、そうでもしないと、いじめてる連中が帰るまで暇でしようがなかったから、と言うのが理由の一つなんだけど……

そんなある日の事だよ。

いつものように、ヨルの洞窟に行こうとしたら、何だか街が騒がしかったんだ。

何だろう？と思つて辺りを見回して見ると人だかりが出来てた。

あんまり、ここの街の住人には関わりたくなかったんだけど、それでも……なんて言うのかな？物凄く街の雰囲気ガピリガピリしていたんだよ。

だから、気になってその人だかりの所に行つたんだよ。そしたら、そこには、命辛々逃げてきた……いつもおれを馬鹿にして、追いかけていた連中がいた。

何があつたのか気になつたから、その辺にいたキセルを啜えた、大人に聞いたんだ。どうしたのか? てね。そしたら、優しく答えてくれたよ。全然優しくない事をね。

『この馬鹿ガキどもが、魔物の巢にちよつかい出したんだ。そのせいで、怒つた魔物どもが今この街を目指して進行中で訳だ。一体何体いるのかなんて考えたくもないけどな……まあ、そう言うわけだ小僧。俺たち大人がそれはどうにかする、一応ガイアス王にも救援を頼んではあるだから、お前もとつと、避難しろ……て、おい、何処行くんだ?! そつちは……』

最後まで、聞いて居られなかつたね。母さんを探そうかと思つたけど、それよりもっと確実な方法をおれは、知つていた。

もう、言うまでもないだろう?

そう、おれが向かつたのは、

ヨルの洞窟さ。

息を切らして入ってきたおれを見てヨルは少し馬鹿にする様に言った。

『どうした？どつかの馬鹿ガキどもが、魔物の巣にちよっかい出して今ピンチか？』
驚いたね。何せ、見てきた様に言うんだもん。

その疑問にヨル応えてくれたよ。

『お前が、いつもこの辺りで姿を消すから待ち伏せしてやろう、て。とても楽しそうに話していたぞ。そしたら、まあ、運悪く、そこが魔物の巣だった訳だ。取り敢えず、ここに居れば、魔物の群れはしのげるぞ』

おれは聞いた、ヨルに。この魔物の群れから街を守るか、どうかを。そしたら、事もなげに言ったよ。

『守るなんて生温い。殲滅出来るぞ、俺なら』

それなら、とおれは、要石に手を触れて願いを言おうとした。
けれど、その前にヨルが口を挟んだ。

『まさか、街の連中を守る為に魔物を倒せ何て言うつもりじゃないだろうな。』

はつきり言うがお前にそんな義理はないだろう。お前の誇りを侮辱し、辱め、痛めつけて喜んでるような連中だぞ。殺せと願う事はあっても助けろと願う道理はない。聖人君子にでもなるつもりか？』

その時、おれは何て応えたか覚えていない。でも、迷わずに即答した事は覚えてる。それと、もう一つ、おれの言葉を聞いたヨルが大笑いした事も。

『フフフ、ハハハ、ハーッハハハハ!!……良いだろう、気に入ったよ。実に人間らしい理由だ。やはり、人間はそうでなくちやあ……な。お前の人生を俺に捧げる覚悟あるなら、その要石に手を当てて願え、ホームズ。俺がその願いを叶えてやろう……』

不敵な笑みを浮かべてヨルは言ったよ。

おれは、迷わずに願いを言った。

その瞬間、ヨルを縛っていた鎖は全て千切れさつて、柱も消え去った。

そして、ヨルは今までずっと見て来た黒猫の姿じや無くなっていた。

何と言うか、虎みたいだった。白虎ていうのがあるなら、黒虎て感じかな。

『さて、殲滅に向かうとするか。おい、ホームズ、お前も背中に乗れ!封印が解かれた以上俺はお前から一定の距離以上離れられん』

そう言うとおれを背中に乗せてそのまま一気に、魔物の群れまで駆け出した。

『しつかり掴まってるよ、そして、喋るな。舌噛み切つて死ぬ事になるぞ。』

……いや、本当にその通りだったね。何と言うか、命の危険を感じたよ。

現場に到着すると、何て言うか……酷い様だったね。こんなに魔物っているんだと思つたよ。

同時にあいつら何をやらかせば、こんな事になるんだとも思つた。

おれは、恐怖を堪えるのに必死だった。でも、ヨルは、どうやら笑いを堪えるのに必死だったようだね。

『いいねえ、これは、暴れがいのあるつてもものだ……』

舌舐めずりしてそう言うのと、ヨルは背中におれを乗せて魔物の群れに突っ込んで行った。

尻尾を振れば5、6匹は吹き飛ぶ。

ひとたび、吠えれば魔物は動きを止める。

そこを問答無用で爪で裂き、牙で食らう。

魔物が精霊術を使えば、それを食らい、倍にして黒い球を吐き出し魔物達に返す。戦闘何て言葉はヨルの戦いには足りない。

無双、蹂躪、駆逐、駆除、殲滅……そんな言葉達がピッタリだった。

その様子を見ながら、おれは、ヨルが言っていた事を思い出していたよ。

俺は、化け物だ——

なるほどその通りだと思っただね。

あの行動は……化け物そのものだったよ。

大人達が到着する前には、全てのカタが付いていたね。

カタが付くとヨルは見覚えのある黒猫の姿に戻っていたよ。

そして、要求してきた。

『さて、制約通り、お前の靈力野ゲートから、マナを絞り取るとしよう。忘れたとは言わせない。』

……結果はご存知の通り。おれに靈力野ゲートはない。だから、ヨルの要求は叶えられない事
がなかった。

物凄く怒ってたね。話が違う、騙したな、て爪で引つ掻いてきた。

まあ、でも、おれは、何一つ嘘は付いていない。本当の事を言わなかったら、勝手に

ヨルが騙された、いや、勘違いしただけだ。

今度はおれが説明してやったよ、出来るだけ丁寧だね。

すると、本当におれの事を忌々しそうに睨んでいたけど、諦めた様に舌打ちをして、おれの肩に乗って言った。

『くそ！まあ、いい。今さら、グダグダ言つてもしょうがない。念の為説明しておく。

これからは、お前が殺されると俺も死ぬ事になる。せいぜい、気を付けろ。』

おれは適当に返事をする、そのまま街に帰って行つたよ。

因みに、おれのいや、ヨルの勇姿（？）は村人達に見られる事は無く、いじめは消えず、ヨルの封印を解放した事により、もう、その術式は消えてしまい、そのせいで隠れる場所もない。

結局いつもの生活に元通りで訳さ。少しばかり、非日常を過ごしたつてそうは変わらないのさ。

いや、少しだけ変わったかな。おれに石が当たらなくなつたんだ。

おれに、石を投げると肩にいるヨルに当たるんだよね。それがやだから、ヨルは尻尾で全部弾き飛ばしてた。

みんな、気味悪がっていたよ……一部を除いてね。

1人はさつき話した女の子。俺の目の色を褒めた時に、喋ったんだよ、石を弾くだけじゃなくて。

『珍しい人間もいる物だ。』

てね。

女の子は凄く驚いた様だったけど、直ぐに気を取り直して色々話してきたよ。

まあ、そんな女の子だからこそ、仲良くなれたんだろうけどね。

もう、1人は……おれの母親。

『何で猫が喋ってるんだい?』

そう言ったかと思うとそのままヨルにアイアンクロー決め始めたんだよ。

何かこう、ためらいとか、そんな物なしにいきなり驚掴みだよ、驚掴み。

びつくりしたよ。何でそんな事をしたかもちゃんと聞いたよ、勿論訳も聞いた。どう

してこんな事をするの?て。そしたらさ、あの母親、しれつとこう言うんだよ。

『それは君が先に説明すべきだよ。どうしてこんな喋る猫を連れているのか、あの魔物が襲ってくる時お前は何処にいたのか、そして、わたしのピーチパイを食べたのは誰なのか、』

最後に関係ない物があつたて?まあ、いいんだよ、そこは。

結果おれは、全部話した。ヨルの事、封印の事、魔物騒動の事、全部ね。

おれの必死の説明に、なるほどと言うとそのまま、ヨルを空中に放り投げて腹にパンチを一発食らわせて吹き飛ばした。

『まあ、安心しておくれ。死にはしない。ただ、数日間腹が痛いだけだよ。息子を助けてくれた恩に報いて、殺そうとした事はそれでチャラにしてあげるよ……て、聞いてないねえ。』

滅多に剥かない白目を剥いてヨルは倒れていたね。

そんなヨルを母さんは摘み上げるとおれに渡した。

『ほれ、まあ、これから文字通り、死が2人を分かつまでの間柄だ。せいぜい、頑張る事だね。』

……昔は何とも思わなかったけど、今考えると、悪ふざけの塊みたいな言葉だね。何か腹立ってきた。

ゴホン、とまあ、こうしておれとヨルついでに母さんは出会い、今に至る訳さ。以上がおれとヨルの出会いの物語、満足してもらえたかな？



「……何か、色々衝撃的だね」

レイアの第一声はそれだった。

そんなレイアにホームズは肩を竦める。

「まあ、喋る猫との出会いだもの。普通な訳がないよ」

「いや、ホームズのお母さんにも衝撃を受けたんだけど」

出会って、突然喋る猫に腹パン一発を冷静に喰らわせるホームズ母。

「……そう言う人間もいるって事だ」

ヨルは腹を抑えている。

「『死が2人を別かつまで』ね……女の子なら、一度は憧れるセリフ何だけど……それをホームズ達に言うって……」

「達悪いでしょ……いつ思い出しても嫌になるよ」

ホームズもヨルも暗い顔をする。

レイアはそんな彼らを見て考える。

「ヨル君を大笑いさせた言葉って何なの？」

レイアの言葉にホームズは肩を竦める。

「さてね、おれは、覚えていないんだ。ヨルはどうだい？」

話を振られたヨルは耳をピクと動かすと応えた。

「覚えてるぞ。まあ、忘れてるなら思い出さなくていいんじゃないのか？別に死ぬわけじゃないだろ」

ヨルの言い草にホームズは顔を引きつらせている。

「ま、まあ、そうだけどさ。ところで、レイア。締め出された時いつも何処で寝たの？」
「……、港のベンチ」

事もなげに言うレイアにため息を一つ吐くとホームズは寝る準備を始める。ポンチヨを脱いでいる所を見るとポンチヨを掛け布団の変わりにしようとしているのだから。準備が出来るかと2つある内の1つを占領して横になった。

そして、1分と経たない内に寝息が聞こえてきた。

「早いね……」

「昔から寝付きだけはいいいからな」

「何が悪いの？」

「寝相」

その言葉にレイアは不安そうにベンチで寝ているホームズを見る。

「大丈夫かな……」

「いや」

ヨルは淡々と言う。

レイアは顔を引きつらせながら自分も寝る準備を始めた。

そして、どこか遠くを見つめるヨルが気になったので、レイアは尋ねた。

「昔の事、思い出してるの？」

「まあな」

ヨルはレイア方を向かずに応える。

「ホームズはさ、何て言ったの？ 願い事を言う時」

レイアはもう一度尋ねた。

そんなレイアにヨルは躊躇わずに教える。

「——と言った」

「それは……確かに聖人君子じゃ言えない言葉だね」

レイアは少し考え込む様に言った。

「昔はこいつも結構、と言っても今と比べれば程度だが、」

『自分の為』と言うのがあった。別にそれは悪い事ではないと俺は思うが」

「今は？」

空を見上げる。

「殺されかけた相手を庇う、自分を殺しかけた相手に手加減する、何かこう、気味が悪い。俺とはまた、種類が違うがこいつはこいつで……………化け物だ」

ヨルはそう吐き捨てる。レイアは少しだけ、首を傾げるとヨルに聞く。

「原因に心当たりは？」

「ある。ついでに言うなら、秘密主義に拍車がかかったものな」

そう言うヨルは大欠伸をすると考え込む様に言う。

「まあ、若干7歳で自分の人生捨てるような覚悟をするんだ……………まともな訳もないよな」

ヨルは面白そうに笑う。暗い夜に白い牙が光。対象的にレイアは暗い顔をする。

「結局、化け物つてのは、化け物を引き寄せるんだろな」

そう言うヨルは丸くなり寝てしまった。

彼らが静かになると、レイアは横になりながら考える。

ホームズの旅の目的は両親の故郷に行く事。理由は、両親がどんな所で、育ったか見たいから、そして、未知の土地に行って見たいから。それ自体には嘘はないだろう。

しかし、

「それだけじゃないよね……」

なにせ、ホームズの十八番^{オハコ}は本当の事を言わない事だ。
そこまでが限界だった。レイアはそのまま眠りへと落ちて行った。

そして、季節は移り変わる……

三週間後の変節風の吹く頃に……

ル・ロンドの日常

小晰 スキツト

《どんな人？》

レイア（以下『レ』）「ホームズのお母さんってどんな人なの？」

ホームズ（以下『ホ』）「どんなって言われても……」

ヨル（以下『ヨ』）「まあ、化け物て感じだな」

ホ「ああ、やっぱり、その一言で済むよね」

レ「君の周り化け物ばっかだね……」

《続・どんな人？》

レ「化け物以外に、何かこう、説明してよ。外見とかさ、性格とか」

ホ「外見ね……前も話したけど髪は茶髪で、目はたれ目だよ。ああ、ついでに言うともいつも眠そうな目をしていたね。」

レ「睡眠不足だったの？」

ホ「それ、昔俺聞いたけど、『違う』て殴られた」

レ「……何で？」

ホ「地味にコンプレックスだったんだよ……」

レ「……そんな事で殴るの？」

ホ「まあね……」

《どんな人？・終》

レ「ちよろつと、性格も分かったけど……もう少し詳しく何かない？」

ヨ「ホームズの数倍達の悪い性格」

ホ「それ、どういう意味だい？」

レ「それは……」

ホ「何で納得して引いてるの、レイア？」

レ「いや、だってお世辞にもホームズ、いい性格とは言えないじゃん。むしろ、達が

悪い部類に入るし……」

ホ「自覚してても、人に言われると応えるね……」

レ「その数倍って……ちよつと、想像出来ないんだけど……」

ヨ「まあ、人間の想像と限界をやすやすと超えていく奴なんだよ」

ホ「……本当にね」

《ホームズつて》

ジュード（以下『ジ』）「ホームズつて別に性格が悪い訳じゃないよね」

ホ「どうしたんだい、突然？」

レ「まあ、そうだよね」

ホ「どうしたの、レイアまで。この前と言っている事が違うじゃないか」

ジ「性格が悪いって言うか……」

レ「達が悪い！」

ホ「この前と一緒にだ……」

ヨ「クククク」

《ヨルつて》

レ「ヨル君は性格良くないよね」

ホ「何を今更……」

ジ「一緒に居て疲れない？」

ホ「何を今更……」

ヨ「それはこっちのセリフだ。モグモグ」

ホ「何を食べてるんだい……て、あー！それ、俺のプリン！夕飯の後で食べようと思いにしたのに！」

ヨ「やかましい奴だな。そんなに食われるのが、嫌なら名前でも書いときやいいだろ。」

ホ「書いといたよ！ちゃんと!!」

ヨ「ああ、ゴメン、ワカラナカッタ」

ホ「このクソ猫！」

ヨ「やるか、アホ毛!!」

レ「達も悪いね……て、ジュード、どうしてこつち見てるの？」

ジ「いや、僕も昔レイアに同じ事やられたなと思つて……」

《ホームズの格好》

ミラ（以下ミ）「ふむ、ホームズその頭にあるそれは……」

ホ「ああ、これ？アホ毛だよ。どうやっても直らないから放置しているんだ」

ミ「なるほど、私と一緒に結っているのかと思つたぞ。」

ホ「君のそれって……」

ミ「うむ、シルフが結ってくれたのだ」

ホ「予想の斜め上に行く返答どうも……」

《続・ホームズの格好》

レ「ホームズのポンチョでさ、何処で買ったの？」

ホ「これかい？これは、母さんが酔っ払った勢いで買って来た奴だよ。だから、何処で買ったか分からないねえ……」

レ「……何かよく分からない所で、ホームズのお母さんが関わってくるね……」

ホ『はつぴばーすでえー、私から君にぶれぜんとを恵んでやろう！サイズは合っていないが気にするな！』って……」

レ「……………」

ホ「誕生日でもない日に」

レ「……………えーつと、何処から突っ込もう……」

《謎の人物》

レ「ちよくちよく、ホームズの話に出てくるホームズのお母さんて、結局、何者なんだろうね」

ジ「この前、『今度こそ確かめてやる』て息巻いてたじゃない。」

レ「いや、ホームズ達の言う事をまとめると、『達の悪い化け物』て事になっちゃうん

だけど……」

ジ「自分の親の事をそんな風に言うのって、どうなんだろう……」

レ「ミラは何か知らない？」

ミ「ふむ、少し話していたな。確か……アブソリユート・コアを剛照来で溶かしたとか言っていたな」

レ・ジ「……………」

ミ「後は、気絶している人間を武器にして、戦った事もあるらしい」

レ・ジ「……………」

ミ「デイベイン・ストリークを掌底破で、防いだ事もあると言っていたな。いや、防ぐだけでなく、そのまま突っ込んで行って攻撃したと言っていた」

レ・ジ「……………」

ミ「それと、よく自分が食べる為にピーチパイと言う菓子を作っていた、とも言っていたな」

レ「あ、なんかお母さんっぽい」

ジ「いや、何か気になるフレーズがあったけど……」

ミ「無断で食べると半殺しにされると言っていたな」

レ「……………」

ジ「やっぱり……」

ミ「カン・バルクで別れて来たと言っていた。もしかしたら、旅の途中で会えるかもしれないな」

ジ「……そうだね」

レ「……呑気なこと言ってるけど、ホームズ達の事を襲ったこと覚えてる、ジュード？ホームズのお母さん、ヨルに何のためらいもなく、お腹にパンチ打つ人なんだよ」

ジ「……ミラ、会わない様に気を付けようか」

《ホームズの友達》

ミ「お前に友達はいないのか？」

ジ「ミ、ミラ!？」

ホ「随分とストレートに聞いてくるね……」

ヨ「実際問題、そう言う奴見た事ないな」

レ「大丈夫。今はわたしがホームズの友達だよ」

ホ「そゆこと。分かってくれたかい？」

ミ「……フツ、まっすぐにそう言ってくれる者がいて、お前は幸せ者だな。」

ホ「フフ、否定はしないよ。どうもね、レイア」

レ「どういたしまして」

《ヨルの友達》

レ「因みに、ヨル君と友達になるのも密かなわたしの目標なの」

ヨ「……………は？」

ホ「ちよつと、ジュード君。君の幼馴染み、どうにかならないのかい？」

ジ「……………無理だよ。ホームズも友達なら分かるでしょ……………」

ホ「……………」

ミ「……………ヨルがうんざりした目でこちらを見ているぞ……………」

ホ「知らない。たまには、痛い目を見ればいいさ」

《欲しい物》

レ「突然だけど、みんなは今、何が一番欲しい？」

ジ「本当に突然だね。……………そうだね、僕は本かな。医学書の新刊がまだ買えてないんだ。そう言うレイアは？」

レ「わたしは、新しい棍が欲しいな。今使ってる奴も大分ガタがきてるし……………ミラは？」

ミ「私か？ 私は、やはり自由に動く足だろう。それが欲しいから、こうしてリハビリ

に励んでいるのだ」

レ「ミラは、やっぱりそうだよね」

ジ「だね。まあ、ミラはそうでなくちやね」

レ「ホームズとヨルは？」

ヨ「飯」

ホ「金」

レ「……絵に描いたような……」

ミ「流石、欲望の塊共おまえたちだな」

ジ「………ハハ、ハハハ」

馬鹿も風邪を引く

「ジュード、ちよつと頼みたい事がある」

ミラのリハビリメニューがひと段落すると、デイラックから声がかかった。

「……なに？」

快いとまではいかない返事をジュードはする。

デイラックはそれを気にせず続ける。

「患者がいるので来てくれとの事だ。生憎、母さんは今、出ていてな……」

「父さんが行けばいいでしょ……」

「私がお前を離れる訳にはいかないだろう」

確かに院長が離れる訳にはいかない。もつともな事を言われ、ジュードは何にも言えなくなり、ミラに謝るとその現場に向かう事にした。

「場所はどこ？」

「お前もよく知っている場所だ」



「何してるの?」

こちら宿屋ロランダのとある部屋。ついてびつくり、見てびつくりと言う所だ。

ジュードの視線の先には、床にそれぞれ、突っ伏して倒れているホームズとレイアの姿があつた。

「……見ての通り」

少し、しゃがれた声で顔を上げず、ホームズが応える。

「いや、見ても分からないんだけど……」

引いてる半分、呆れ半分の声で聞く。

そんなジュードの問いにホームズは顔を上げずレイアに言う。

「……レイア……君の幼馴染みの反応が冷たいんだけど……」

そんなホームズの言葉にレイアも顔を上げずに言う。

「しようがないよ……ジュードだもの」

わざわざ来て、わけの分からないものを見せられて、その結果がこれだ。こめかみを少しヒクツかせながら、ジュードは再度尋ねた。

ヨルはくあつ、と欠伸をしている。

「少し、質問を変えよ、どうしたの？」

その問いにホームズとレイア相変わらず床に顔をつけたまま言う。

「風邪引いた……………」

2人はは声を揃えて言った。ジュードは深いため息を吐く。そして、診断と、どうしてこうなったかを聞き出す羽目になった。

話は明朝に遡る。

「ヘックシヨイ!!」

「随分とおっさんくさいクシヤミだね、ホームズ。」

ホームズはこうして、レイアと一緒に朝ごはんを食べるのがすっかり習慣になっていた。た。

因みに、今日は鼻水を垂らしながら朝ごはんを食べていた。つまり、風邪を引いたのだ。

昨晩は結局、外で眠った。普段はそこそこの野宿の準備があるので、こんな事は滅多に

無いのだが……如何せん、荷物が全て無いので、どうしようもない。おまけに、
「昨日海にも飛び込んだからね……」

レイア助けようとして、海に飛び込んだのだ。ここまででは良かったのだが、怪我に塩水
がしみて、それどころではなくなってしまった。

「今日は一日寝てた方がいいよ、せつかく休みなんだし……」

「……………そうする」

そう、元気なく言うところヨロヨロと立ち上がって階段を……………登る前に倒れた。

「ホームズ!!」

突っ伏したまま、動かないホームズ。気のせいかな、頭から湯気が出ている気がする。

レイアは急いで駆け寄ると、ホームズを背負う。とはいえ、二階まで運ぶのは難しい
し、この状態では、ホームズは下に降りる事が出来ない。

仕方ないので、そもそもの原因に助けを求めた。

「お母さん……何か、1階に空き部屋ない?」

「ありますよ、そのの、廊下の右にね」

そう言った後、ソニアはホームズを申し訳なきそうに見る。

「レイアはともかく、ホームズには悪い事したね。後で謝っておかなきゃ」

レイアは恐る恐る、母に尋ねる。

「あのおくわたしは……いえ、何でもありません」

ソニアの睨みに押し黙るとレイアはホームズを背負ってその部屋に入る。部屋にはベツトが二つあり、それぞれ壁の両端に一つずつあった。

一先ず、ホームズをベツトに寝かせるとレイアはホームズのでこに手を当てて熱を測る。見るからに苦しそうだ。しかし、

(あれ? 思ったより熱く無い……まさか……)

取り敢えず、誤魔化す様にレイアはホームズに言う。

「け、結構熱あると思うから今日一日おとなしくしててね、わたしは、ジュード呼んでくるから。」

出て行こうもしたレイアの腕をホームズが掴む。そして、ムクツと起き上がると、

「……ヨル、おいで」

二階にいるヨルを呼んだ。

すると、その直後、ヨルがホームズの肩に現れた。

「何の用だ……て、お前、風邪引いたのか。バカのくせに」

「……普段なら、アイアンクローを決めたい所だけど、両手がふさがっているからねえ」

ホームズは片手は折れているし、もう片方はレイアを掴んでいる。

「……取り敢えず、レイアのおでこをその、可愛らしい肉球でさわってくれないかい？」

「病気になつても忌々しい奴だ」

そう悪態を吐くと前足をぐねぐねと伸ばし、レイアのおでこを触る。

「何それ?!」

「前足」

突然の事に目を剥くレイア。しかし、ヨルは通常運転だ。

「いや、それは、知ってる。じゃなくて!!」

「だったら、いいだろう。それより、ムスメ、お前熱いぞ。……なるほど、2人そろつて風邪引いたのか、バカのくせに」

「……それは、もういい。やっぱり君も風邪引いた見たいだね……。通りで、おれでも熱いと思つたわけだよ。……君も休めば?」

文字通り、力なくそういうホームズ。

しかし、レイアは首を横に振る。

「だめだよ、だったら、ホームズの看病は誰がするの?」

「……君以外の誰かだろう? ジュード辺りが適当じゃないかい?」

さらに、レイアは首を横に強く振る。レイアはミラのリハビリの手伝いをする、

言った。それは何も付きっ切りで世話をする事だけではない。ミラがりハビリに集中できる様に、ジュードが適切に手伝える様に場を整える意味も込められている。

だからこそ、レイアは力強く拳を握りしめて力説する。

「ジュードは、ミラのリハビリがあるんだよ。そっちに集中して、貫わなくちゃ。……
こう言う時の為の看護師な……んだから？」

そこまで、言うレイアは床にへたり込んでしまった。レイアは一瞬自分に何が起こったか分かっていないようだった。そんなレイアの様子を見て、ため息を一つ吐く。

「……ほれ見た事か。今日はゆっくり休み……まし……」

ホームズはホームズで、起き上がっていた身体がそのままパタンと倒れた。

その後、様子を見に来たソニアに2人ともベットに放り込まれた。

そこまでは良かった。そこまでは……

「……ホームズ、食べたい物ある？タオル変えようか？」

レイアはしごとくホームズの看病を続けようとしたのだ。もう、ソニアにばれた時点でジュード辺りが来る確率はグンとたかくなっているのだが、頭がボオつとして働いていないのでそんな事にも気付かない。

「……いいって言ってるだろう。君も病人なんだから」

対するホームズもそこに突っ込める程回復していない。

「……その前にわたしは看護師だから……」

そう言つて、ふらふらと部屋からレイアは出て行くとする。そんなレイアを止めようとホームズもふらふらと立ち上がる。

止めようとするホームズにレイアは言う。

「……大丈夫だつて。偶には人を頼りなよ」

「……今の君以外だつたら、誰にだつて頼れるよ」

ホームズはそう、焦点のあつていない目でレイアを睨む。あんまりな物いいにレイアはレイアでホームズを睨む。少し、位置はズレているが……恐らく、ホームズと一緒に目の焦点があつていないのだろう。

「……わたしじゃ頼りにならないっていうの……!」

「……最初からそう言つてるだろう」

その言葉を皮切りにレイアは部屋にあつた箒を手に取り、棍の様に構える。対するホームズもそれに、応じる様にふらふらと構える。

「……頼りになるか、ならないか、その体にゆ教えてあげるよ」

「……その言葉、そつくり、そによま返して上げるよ」

2人して、舌が回っていなかった

しかし、その言葉を皮切りにレイアとホームズは2人同時に力強く踏み込む。ところが2人して膝から崩れ落ち、そして床にうつ伏せに倒れた。

「阿保くさ」

ヨルはそう呟くと大きな欠伸を一つした。



「それで、さっきの状態に繋がると……」

ジュードは呆れ顔だ。ホームズとレイアは強制的にベットに入れられていた。

「……はい、その通りです」

「2人とも、子供じゃないんだから……」

「……………」

ジュードのもつともな言葉に2人はグウの音も出ない。

ため息を一つ吐くとジュードはヨルを見る。

「ヨルも止めてよ。その場にいたんでしょ?」

ヨルは心底嫌そうな顔を見ると、面倒臭そうに言う。

「何で俺が、んな面倒臭い事しなきゃならんのだ、バカバカしい」

そして、ベットでうんうん言っている2人をその金色の目で馬鹿を見る様な目を向ける。

ジュードはため息をもう一つ吐くと、レイアとホームズに言う。

「取り敢えず、薬を出しておくから食後に飲んでね。……………それと、2人はもう馬鹿な事しないで大人しく寝てなね。」

最後にそう、2人に強く釘を刺す。

「全く、レイアは相変わらずだし、ホームズは年上何だから、もう少し落ち着いて欲しいよ、いい?……………」

そして、お説教が始まった。

2人は朦朧とした頭でテキトーに聞いているし、ヨルはつまらなさそうに尻尾を振っている。

ホームズは助けを求める様にレイアを見るが、レイアは無理だと言う風に何とか首を振る。

そんな事をしていると、ミラが車椅子に乗って入って来た。

「ミラ?! どうしたの?」

ジュードは少し驚いている。その言葉にレイアとホームズはのろろと起き上がり、ミラの方を見る。

「いや、何、『お見舞い』と言うものしてみようかと思つてな。大丈夫か2人共?」

大丈夫じゃないから寝ているんだろう、とホームズは思ったが、熱でそれを突つ込む気力がない。

「ふむ、しかし、風邪を引いたなら大丈夫だろ」

「……何が?」

ミラの言葉にホームズは尋ねる。

「本で読んだんだが……確か、『馬鹿は風邪を引かない』のだろうか? つまり、喜べ2人共、お前達は馬鹿では無いぞ!」

「……………」

ミラは励ます様にレイアとホームズに言う。ホームズとレイアはもう、突つ込む気力も無い。

そんな2人に構わず、ジュードはこめかみに人差し指を当てて考える。

「それ、医学校でも議論したけどね、違う結論が出たよ」

「本当か、ジュード」

「うん、あのね、馬鹿は風邪を引かないんじゃないって、引いた事に気付かないんじゃないのかと言う結論が出たよ」

「……………」

「なるほど、それは道理だな。しかし、と言う事は…………」

「うん。2人が馬鹿じゃないと言う証拠にはならないかな」

「……………」

「そう、気を落とすな、2人共。これから証明していけばいいだけの話だ」

「……………黙って聞いてればー!!」

ミラの哀れむ様な言葉に　レイアとホームズは布団をめぐって立ち上がった。

「……………何なんだい2人して……………だいたい、レイアはともかく、おれは馬鹿じゃない！」

「……………それは、ホームズにだけは言われたくない！」

「……………よく言うよ……………おれの熱を測るまで、君、自分が熱を出してる事に気づかなかっただろう」

ホームズの言葉にレイアはグウの音も出ない。

そんなレイアにジュードは呆れた様な視線を向ける。

その視線がレイアの神経を逆撫でしたようで、顔を真っ赤にして（元々風邪の所為で赤いが）

「……ちよつとその目やめてよ！ ナニサ、ジュード何て、昔は風邪引いても遊ぼうとした癖に……」

「か……関係ないだろう！ その事は！ だいたい、それだつてレイアが僕の話を、よく聞かないで連れ出したんじゃないか！」

「……何よ！ わたしが……悪いって言うの！」

「そこまで、言つてないだろう！」

「……いや、それはレイアが悪い」

「馬鹿ホームズは黙つてて」

「……随分と失礼な事を……言つてくれるじゃないか……」

「当然の事を言つたままでだよ」

「そうそう」

「……小さい頃の喧嘩の続きをやつてるような、馬鹿共にだけはそんな事を言われたくない………と言うよりミラ？ 君は何我関せずみたいな姿勢をとつてるんだい？」

ホームズはレイアとジュードに啖呵を切ったあとミラに言葉を投げつける。対するミラはいつも通りに言う。

「実際、関係ないからな」

ビキツと額に青筋が立つのをホームズは感じた。

「……君だつて原因の一部だろうが。病人の前でどうしてその話題を振ってくるんだい。そのデリカシーのなさもある意味馬鹿である証拠だよ」

熱気が立っているのか、ホームズはミラにメチャクチャな事を言っている。

「ム、お前に言われるとなんだか、腹が立つな」

「……それ、……どういう意味だい？」

「……そう言う意味だ。ジュードとレイアの喧嘩は微笑ましものがあるが、お前のは……ないな」

「ミ、ミラ?! それどう言う意味?!」

「……そうだよ!」

「……上等だよ……!」

ジュードとレイアはミラの言葉に照れた様に食つてかかり、ホームズはミラの言い様

に腹を立てて食ってかかる。

ジュードは昔の事を持ち出すレイアに苛立ち、余計な事を言うホームズに苛立っている。そして、ミラの言葉に照れて声を荒げる。

レイアは、自分を馬鹿扱いするジュードに怒り、ホームズにも怒っている。そして、ジュードと同様にミラの言葉に動揺して、ミラにも食ってかかっている。

そして、ホームズはレイアと同等扱いにしたジュードに怒り、自分の事を馬鹿扱いした、レイアに怒り、失礼な事を言ったミラに怒っている。

ミラはミラで、ホームズにはイラついているし、ジュードとレイア達にはどうして自分にそんなに食ってかかって来るのか分からないと言う状態だ。

つまり、今の状態を一言で言うなら、

自分以外全て敵状態だ。

この混沌と化した状態は、様子に気付いたソニアが来るまで続いた。

(馬鹿ばっかだな……)

ヨルは大きな欠伸を一つして、この騒音のなか眠りに落ちた。

勝って財布の緒を締めよ

「手加減抜きでいくよ！だから、ホームズも全力できてね」
レイアは肘を伸ばしながら言う。

しつかり準備運動し、元気がいい。

「ああ、はいはい」

逆にホームズは、やる気のなさそうに返事をしている。

「おい、テンション上げていけ。報酬忘れたのか？」

「そうだったね」

ヨルの言葉にホームズはさつきまでまどとは、打って変わって、やる気に満ち溢れた顔をしている。

しかし、

「はあ……せつかくの休日だから、海でも見て静かに過ごそうと思ったのに……」

休日への未練も捨てられない様だ。

「もう少し、年齢にあった休日の過ごし方をしようよ……」

ホームズの年寄り臭い休日の過ごし方に、ジュードは呆れている。

ちなみにジュードは、今回の勝負の審判を務める事になった。

「ふむ。ホームズ対レイアか……なかなか面白い催しだな」

ミラは車椅子に乗って事の成り行きを見守っている。

準備運動を一通りやったレイアは棍を構える。

ホームズも軽く屈伸と、ジャンプをすると、左手の盾を確認し、構える。

2人の様子を確認するとジュードは、右手を上げる。

「それでは、レイア対ホームズ&ヨルの勝負を始めるよ。勝敗は、僕の判断か、どちらかが負けを認めるか、で決まる。異存はないね」

ホームズとレイアはコクリと頷く。

「それでは、一本勝負、始め！」

右手が振り下ろされる。

レイアとホームズは同時に地面を踏み込んだ。



「勝負しようよ。ホームズ」

全てはレイアのこの一言から始まった。

「は?」

突然の言葉に随分とマヌケな声を出して、ホームズは聞き返す。両手には、ぶちぶちと引っこ抜いた草がある。

「ほら、前に言っただじゃん。怪我が治ったら、いつか相手になってって」

「……言っただね。でもさ、『相手になって』じゃなかった? 勝負しようじゃなかったよね?」

ホームズは、嫌そうに言う。

「別に一緒の事でしょ」

微妙にニュアンスは違うが、そこをわざわざ言ってもしょうがない。

「というわけで、明日勝負しよう! 病み上がりのハンデとして、ヨル君と一緒にいいから」

「あ、明日?!」

「随分と急な話だな……」

肩で聞いていたヨルも面食らっている。

「明日、せつかくの休みなんだけど……」

「じゃあ、ちょうどいいじゃん」

ホームズは、嫌そうな顔をしている。

「マジ?」

レイアは、ホームズが余り乗り気でない事を察し、新たなる切り札を切る。

「わたしと勝負したら、宿代を一泊分タダにするよ」

ピクとホームズの耳が動く。

さらにレイアはたたみかける。

「さらに、ホームズが、わたしに勝ったら……」

「勝つたら?」

「治療費の一割を宿屋ロランドが、負担する」

「何時からやるんだい?」

さっきまでのやる気のなさが嘘のように間髪いれずにレイアに聞き返す。

レイアの言葉にホームズは、清々しい程のテンションの切り替えをしてきた。

ホームズの顔は、かつてない程真面目だ。

もしかしたら、上手くいくかも程度で考えていたレイアは、あまりにも上手く行き過

ぎて、逆に引いた。

「明日の午後からとか、どう?」

「いいよ。受けて立つよ」



「フーン！」

ホームズの上段回し蹴りが、レイアに向かっていく。

その蹴りをレイアは、棍で防ぐ。

「躊躇無く顔を狙ってきたね……さすがホームズ」

「お褒めに預かり光栄だね」

蹴りが不発に終わったホームズは、後ろに下がり距離をとろうとする。

しかし、

「甘いよ」

そうは問屋が降ろさなかった。

レイアは後ろに下がったホームズを追撃する。

「三散華！」

棍の三連撃が、ホームズを襲う。

避けきれない、と判断したホームズは、左手にある盾を構える。

カンカンと乾いた音が、二発響く。

「グウッ！」

しかし、三発目は防げなかった。

三撃目を腹に食らうと声にならない、声をあげる。ホームズは体制を崩すと、そのまま後ろに転がった。

腹の痛みに耐えながら、ホームズは立ち上がろうとする。

「二気にいくよ。悲壮靈活・クイックネス」

しかし、その隙にレイアは自分の素早さをあげる。そして、勝ち誇った様に笑う。

「やっぱり、サポート系の精霊術は、食べれないんだね。ヨル君」

ホームズとヨルは苦虫を噛み潰した様な顔をしている。

そう、ヨルは攻撃系の精霊術に対しては、無敵もいい所だが、今回の様な場合は、どうしようもないのだ。

レイアはそんなホームズ達を見て考える。

（追撃したい所だったけど……）

ホームズの性格からして、何か企んでいる事は明白だ。

だからこそ、レイアは身体強化に徹したのだ。

「よりもよって、スピード強化か……」

レイアのクイックネスを唱え終えるのを見るとホームズは、困った様に呟いた。

攻撃力強化の技なら、ホームズも持っているので、競り合えるのだが、スピード強化の技はない。

つまり、スピードを強化したレイアにホームズはついて行く事が出来ないのだ。

「神様つてのがいるとしたら、随分と意地悪だね」

またしても、苦戦しそうなホームズはため息を一つ吐く。

「来るぞ」

肩に乗っているヨルは、レイアの踏み込みを見る。

レイアはそのまま突っ込んで来る。

さっきのお返し、とばかりにホームズの顔面に向かって棍を横薙ぎにふる。

(速い……！)

ギリギリで、棍を左の盾で防ぐ。

「こんのおー！」

盾で棍を押し返し、少し隙間をあける。

「ツラァー！」

さらに、腹に蹴りを叩き込む。

「ツツー！」

レイアは後ろに跳ぶ。

何とかタイミングを合わせて後ろに跳び、ダメージを半減させたが、
(それで、この威力……)

レイアは蹴られた腹を触りながら、ホームズの實力に感嘆する。

「油断するなよ、ホームズ。あのムスメ……」

「分かつてるさ。あのこ、やっぱりたいした子だよ」

思ったより手応えがなく、ホームズは、釈然としていなかった。

「今ので仕留められなかったのは、痛かったなあ」

ホームズを上回るスピードで攻撃するレイアに勝つには、一撃一撃を確実に決めていくしかない。

ホームズは今、その貴重な機会チャンスを一つ無駄にしたのだ。

「いっちょよ、行きますか」

ホームズは両手を握りしめ、腰を落とす。

「剛照来！」

一先ず攻撃力を強化する事にした。

そして、今度はホームズから仕掛けていく。

「瞬迅脚！」

飛び蹴りを放ち、一気に距離を詰める。

レイアはそれをバックステップで躲す。

もちろん、ホームズにとって、躲される事は予想通りだった。

むしろ、これをさせる為に放った様なものである。

しかし……

「伸びろ！」

棍が伸びるのは、予想外だった。

「んなあ！」

ホームズは目を向いて驚いている。そのせいで、ワンテンポ反応が遅れる。

「兎迅衝！」

盾が間に合わずモロに食らって吹っ飛ぶホームズ。

起き上がろうとするホームズをよそに、レイアは更に精霊術を重ねる。

「これ以上、強化されてたまるか！」

ホームズはそう言うところを掴む。

「おい……まさか……」

「察しが良くて助かる……よオラア!!」

そして、そのまま詠唱をしているレイアに投げた。

「力を鎧え……バアアアアあ！」

モロにヨルを顔に食らったレイアは最後まで詠唱をする事が出来なかった。

ホームズは、チャンス機会とばかりにレイアへと、距離を詰める。

レイアが気付いた時は、ホームズは、目の前にいた。

「お返しだ、三散華!!」

ホームズの蹴りが、一発入る、二発入る、三発目は棍で防ぐ。しかし、最後の三発目でレイアは吹っ飛んだ。

レイアは、ホームズに蹴られた場所を触る。剛照来の効果で、威力はさつきとは段違いだ。

とはいえ、耐えられない程ではない。

(手加減してるな……)

レイアは察すると同時に、少しむかつてきた。

彼女がしたいのは、真剣勝負だ。

手加減している相手に勝つても、負けても、嬉しくない。

全力の相手に勝つか、負けるか、それをしたいのだ。

しかし、それを指摘しても恐らく、ホームズはのりくらりと躲すだろう。

(だったら……)

レイアは、棍を構え直すと、ホームズを棍の先で捉える。

(実力ちからで示すしかない！)

「瞬迅爪！」

棍と身体がまるで一つになった様に、真っ直ぐ、ホームズに突っ込んできた。

スピード強化されている彼女の瞬迅爪を躲す事は、不可能だ。

そして、食らえば、問答無用で負けが確定する一撃だ。

しかし、そんなピンチにホームズは不敵に笑っている。

そして、右足を上げ、力強く踏み込み、技の名を高らかに告げる。

「守護方陣！」

「!?」

青白い円陣がホームズの周りに展開される。

真っ直ぐに突きに来たレイアは、見事にその陣に引つ掛かり、ダメージを受ける。突きの勢いもどんどん減っていく。

その時、ホームズのにやけ面が思い出された。

(最初から、これが狙いか……)

そう、ホームズとしては、レイアのスピードをどうにかしたかったのだ。足止めをす

るには、守護方陣程適したものはない。

しかし、それはタイミング良く守護方陣に捉えられた場合である。普通にやっつけていけば、まず、捕まえる事は出来ない。

そこで、ホームズは挑発をする事にした。挑発で逆上した相手を誘い込む寸法だ。

挑発は何も言葉を投げかけるだけではない。

今回、ホームズの取った手段はまさにそれだ。全力勝負と言っているレイアに、手加減をするという挑発を行ったのだ。

挑発に乗るかどうかは、正直運だった。

レイアの性格上、乗って来る確率が高いが、所詮は確率であって、確実ではない。

しかし、どうやら運はホームズに向いていた様だ。レイアは見事に守護方陣にかかった。

しかし、

「まさか、当たるとは思わなかったよ……」

ホームズの腹にレイアの棍が当たっていた。

守護方陣で、幾らか威力は削いであるが、そうは言ってもノーダメージとはいかない。

ホームズはそれに耐え、レイアの棍を持ち、腰より下におろす。

「剛照来はこの為さ」

そう言うと、ホームズはレイアの棍に踵落としを決める。

乾いた音が鳴り響き、レイアの棍は真つ二つに折れた。

「そういうえば、レイアの棍……大分ガタがきてるって言ってたね……」

一部始終見守るっていたジュードは、そう呟いた。

そして、判定を下す。

「武器損失により、勝者ホームズ」

ジュードの手がホームズを指す。

ホームズは、一息吐くと腹を抑える。

「……………負けた」

レイアは悔しそうだ。間違いなく、始め、いや、終始ホームズを押ししていた。しかし、最後の最後で油断してしまった。いや、ホームズの策にまんまとはまったのだ。

知らず知らずのうちに挑発に乗ってしまった。これが今回の敗因だ。今後と気を付けていかねばなるまい。

しかし、今はそれよりも……

「棍が折れた」

棍の方が先だ。

そろそろ買い換え時とはいえ、自分が今まで使っていたものが、見るも無残な姿になっっているのだ。

正直悲しくなってくる。

「おい、ムスメ。約束覚えてるだろうな」

ヨルはそうレイアに話しかける。

「分かってるよ。宿屋の一泊分の料金は無料にするし、治療費の一割はロランドが負担するよ……」

「何を勝手な事を言ってるんですか、レイア」

いつの間にやら、ジュードの隣りにソニアがいた。

「お、お母さん。どうして?」

「僕が呼んだんだよ。随分と勝手な事を言ってたから、本当に大丈夫か聞いてみたんだよ」

見届け人でもあったジュードは呆れながら、言う。

「助かりましたよ。ジュード。おかげで、思わぬ出費をせずに済みそうです」

そう言うのと、鬼の様な形相で、レイアを見る。

レイアは既に正座をしている。

「さて、色々言いたい事はありますが、その前に約束の件です」

ソニアは、一旦言葉を区切りホームズの方を見る。そして、もう一度レイアを見る。

「あなたのお金から出しなさい」

「え、え、嘘?!」

「嘘についてどうなりますか!」

勿論、ホームズの宿泊代も治療費も決して安くはない。

それを全部ではないが自分で払うのだ。

「さて、ここからは、お説教です。しっかり聞きなさいよ」

そう言つてソニアは、レイアに説教を始めた。

「帰るとしますか」

「だな」

「あれは、長くなるよ……」

「その前にホームズ」

「なんだい?」

呼び止められたホームズはミラを見る。

「お前は、レイアの棍を弁償するべきだろう」

「……………」

「勝負の約束にそれは含まれていなかったが、物を壊したら弁償するのが道理だろう」
「……………忌々しい事に一理あるね」

ホームズは嫌そうに、その言葉を口に出す。

命を懸けた戦いならともかく、今回は、試合。しかも故意に、壊したのだ。

まあ、知らぬ存じぬを貫く手もあるが、宿に止めてもらっている手前、それをやるのも気が引ける。

ホームズは、ちらりと説教を食らっているレイアを一瞥する。

「明日にでも弁償するよ」

後日ホームズは、レイアに宿一泊分と同じ値段の棍を買わされた。

「怒ってる？」

「割と」

ホームズの恐る恐るという問いにレイアは、表情を変えずに言う。

「……………割に合わない」

休日が無駄にしたホームズは、財布覗いてポツリと呟いた。

一汁一炊

「ホームズの料理が食べてみたい」

レイアはある日突然そんな事を言い出した。

ホームズはその時レイア特製のクリーム牛丼を食べていた。取り敢えず、箸を置いた。

「どうしたの突然？」

「ジュードのご飯は食べたよね」

「食べたね。美味しかった」

「わたしのご飯も食べたよね」

「まあ、今食べてるね。朝からクリーム牛丼を作る君のセンスに驚きだよ、おれは」

ホームズは、器にある料理を見つめる。朝食には、あまり適していないのがよく分かる。

しかし、レイアは、そんなホームズに構わず続ける。

「次は、ホームズの番だと思うの。腕の包帯もとれたし」

ホームズは両目の付け根を揉む様になっている。

「……料理当番なんてあったけ？」

「ないよ」

「……別に別におれが作らなくてもいいんじゃない？」

「いいじゃん、別に。それに、旅をしてたんなら、食事の用意とかもしてたでしょ？」

「まあ、一応」

「だったら、料理出来るでしょ！」

「まあ、一応」

「なら、決定！明日のお昼ご飯はホームズの料理を食べよう！ジュードにも言っとくね」



「で、僕のうちに来たと……」

こちら、ジュード宅。ホームズはレイアに言われてやって来た。勿論ヨルもいる。

仕事中のレイアの宿のキッチンを使うわけにもいかず、ホームズは、ジュードの家で

料理をしている真つ最中。

食卓にはレイアと、そして、何処で聞きつけたのかミラまで居る。

ジュードはお皿を出したりと、食事の準備をしている。

ホームズはフライパンを扱いながらジュードに話し掛ける。

「君の幼馴染み、どうにかならないのかい？」

「昔から、ああだからね。どうにも……とところでご飯は？」

「出来たよ、はい、どうぞ」

そう言って、出来た物を渡し、食卓に運ばせた。

お皿に乗った料理を見てレイアは呟く。

「……………えーつとこれは……」

その言葉にホームズは恭しくお辞儀をする。

「く『肉と野菜の油によるハーモニ―、燃えるような情熱を貴方に』くです」

「ただの肉野菜炒めじゃん!!」

レイアの今日一番の突っ込みが炸裂する。

しかし、ホームズは不敵に笑っている。

「ただの肉野菜炒めと侮るなかれ！」

「やっぱり肉野菜炒めだったんだね。何処からそんな名前だしたんだろう」
レイアの冷めた言葉がポロリと零れる。しかし、そんな言葉に構わずホームズは続ける。

「絶妙な火加減、野菜、肉などの具材を入れるタイミング。全てが、影響する、まさに至高の料理なのだ！」

「それ、全部の料理に使えるんじゃないや……」

「いいから、いいから、ほれほれ」

そうホームズに進められてレイア、ジュード、ミラは肉野菜炒めを食べる。

「「ハハ、これは……」」

思わず、全員が絶句した。そして、感想を漏らす。

「「普通だ……」」

至って普通の味だった。

「何これ！不味くもなく、美味くもなく、至って普通。

普通過ぎて逆にコメントしづらいんだけど！」

「本当に、普通だね。僕もここまで普通だとは思わなかったよ」

「ふむ、ジュードやレイアに比べればまだまだだな」

三者三様の感想が飛び出した。

「何か、これはこれで腹立つな……」

少し、苛立ちを覚えるホームズ。ヨルは肩で尻尾を振っている。数少ない得意料理がこの評価なのだから、仕方ないといえよう。

結局、みんなぶつくさ言いながらも一応全部完食した。

そして、レイアから一言。

「今晚、テイク2やるよ」

「……え、何で？」

「お題は……」

「ち、ちよつと待って……」

「ミネストローネ！」

「いや、あの……」

「ホームズ……諦めた方がいいよ。こうなったレイアは止まらないから……」
「レシピを渡しとくね。それじゃ」

シユタ、何て音が聞こえるように手を上げると仕事に戻って行った。

ジユードは苦笑いをする、ミラを連れて、リハビリに向かった。

残されたホームズはポカンとしている。

「ハア……」

ホームズはため息を吐き、ヨルはヨルで欠伸をする。

「おれも仕事しよう」

ホームズはヨルを連れて宿屋ロランドに戻った。

時は流れて夜……

「ほい、ミネストローネだよ」

赤いトマトのミネストローネをホームズはそれぞれの前に置いた。出来栄は、なかなかのものだ。

ジユードは感心している。

「ミネストローネ作った事あるの？」

「ないよ」

「いくら、レシピが有るからってこんなに上手に出来るとは思わなかったよ」

ジュードの言葉にレイアはチツチツチツと指を振る。

「ジュード、料理は見た目じゃなくて、味だよ。そう言う感想は食べてから言わなくちゃ」

レイアのドヤ顔で言った言葉にジュードは苦笑いしながらもミネストローネを飲む。レイアとミラもそれに続く。

そして、一言………

「薄い………」

「薄いよ！このミネストローネ！本当にレシピ見て、作ったの？」

レイアは今日で最後の突っ込みを発動させる。

「素材の味をお楽しみ下さい」

そんなレイアにホームズはしれつと言う。そんな事を言っているとジュードにホームズの分のミネストローネを盛られた。因みにミラはぐびぐび飲んでる。

ホームズは普通にすくって飲むが……

「うつつす！何これ！」

「ホームズの作ったミネストローネ」

「ジュードはさらつと言う。」

「え、何で……………あ」

レシピを読み直し、ホームズは発見した。衝撃の真実を。

「塩少々じゃない。少々なのは胡椒だけだ……………」

「いや、胡椒の味もしないんだけど……………」

「ジュードはボソツと言う。しかし、ホームズは気にしない。」

台所から、塩を持ってくると机に置いた。

「後は各自お好みで」

そう言うとうちホームズは自分で作ったミネストローネを食べ始める。その言い草に若干イラツと来ながらレイアとジュードはそれぞれ、塩を振って食べた。



「テイク3いくよ」

「……………まだ、やるの？」

「ホームズ、今回は僕もレイアに賛成だよ」

「私は食事が出来れば何だつていいぞ」

「以下同文」

「あ、ヨルもちやつかり食べてたんだ」

そんな三者三様（＋一匹）の一言の後、レイアからお題が出る。

「もう一度、ミネストローネを作る事。時間は明日の昼。以上。解散！」
ホームズはため息を一つ吐くと宿屋ロランドに戻って行った。

◇◇◇◇◇

そんなこんなで、翌日の昼……

「出来たよ」

ホームズはミネストローネver2を皆の前に置く。

まあ、二回目だ。だから、大丈夫。そう思うと皆で一口飲む。そして、感想を一言。

「[[[[甘い……]]]]」

とても、ミネストローネからは聞けない感想が聞こえた。

「何、砂糖と塩間違えるなんてベタな事してるのー!」

「ホームズ、これは流石に……」

「……これは、私でも食べるのが少しキツイな……」

「素直に不味いな」

3人と1匹にボロクソに言われるホームズ。試しにホームズも食べてみる。

「づ……」

碧い瞳は少し、潤んでいる。しかし、強がつて声を張り上げる。

「うっかり、間違えただけじゃないか! だいたい、ジュードの言ったとおり、ちゃんと

上から3番目の引き出しにあった奴を使ったんだよ」

「3番目なんて、言っていないよ……4番目にある奴だよ」

恐らく、『…ん番目』しか聞こえなかったのだろう。

「……」

「ドジだね、ホームズ」

「君にだけは言われたくないね、レイア」

ホームズはレイアをジロリと睨む。

「というか、昨日は間違えなかったじゃん。どうして今日はこんな事になってるの?」

「昨日は出しっ放しだったからね、間違えようがなかったんだよ」
そんなうっかりホームズにヨルは容赦無く死の宣告をする。

「取り敢えず、お前がこれを責任取って食え」

「マジで言ってるのかい？お代わりする分も合わせて8人前あるんだけど……」
「知った事か」

ホームズは助けると言う目をジュード達に送るが全員から目を逸らされてしまった。
結局、ホームズはこの甘ったるいミネストローネを全部食べる羽目になった。

ジュード達はジュード達で新たにご飯を作り直してそれを食べていた。

「テイク4いききたいと思います」

「……ウエツプ」

「ちよつと、ホームズ大丈夫？」

「なるほど、これが所謂、『自業自得』と言う奴か」

「ほう、よく知ってるじゃないか、オンナ」

「当然だ」

ホームズは白目をむいて机に突っ伏している。

そんな中レイアはお題を発表する。

「えーっと、いい加減、ミネストローネ以外のものも食べたいんだけど、その前に、ホームズにはミネストローネをちゃんと作ってもらいたいと思います」

「異論はないな」

「だね……」

「そんな訳で、次のお題もミネストローネで決定です！それでは、また、夜に。解散！」
レイアはそう言つて席を立った。

「……ジュード、トイレ借りていいかい？」

「どうしたの？」

「吐きそう……ヴェ。」

「わああああ、待って待って！」



時は流れて夜……

「出来たよ」

ホームズはいつものように皆の前に並べる。

「いつもいつも、見た目はまともなんだよね……」

「確かに……」

「ふむ、何だか今度はどんな味なのか、1周回って楽しみになってきてしまったのだが……」

「重症だな」

それぞれ感想を漏らすと一口目をスプーンですくって食べた。そして、感想を一言。

「「「……濃!!!」」」

尋常じゃない程味が濃かった、そして、

「「「……辛!!!」」」

「今度は一体何をしたの!どうやったらこんな物が毎度毎度毎回毎回出来るの!」

「凄い体に悪そう……」

「さつきまで、呑気な事を言っていた自分に腹が立つな。これは、ある意味兵器だぞ」

「不思議だ……魚そぼろがこんなに恋しくなるなんて」

ホームズも一応食べる。

そして、吹く。そのミネストローネは全てヨルにかかった。

「なにこれ……?」

「ホームズの作った、ミネストローネ」

「おい、俺の事を忘れてないか……」

ヨルは忌々しそうに言う。体を黒く光らせてミネストローネを体表から消した。

そんな中、ジュードは兼ねてからの疑問をホームズにぶつける。

「あのさ、味見してる?」

「する訳ないじゃん、そんなの」

「!!」

ヨル以外の全員が驚いている。ヨルは別に慣れっこなのでそんな事を気にしない。

「何で……?」

「だって、どうせ食べるんだったら途中で食べる意味ないじゃないか。それに、最後まで味が分からないほうが、なんか、楽しみじゃないか!」

「こっちは全然楽しくない!!」

レイアとジュードが声を揃えて言う。

「味見してよ!頼むから!」

「というかヨル君!こうなる事知ってたでしょう!!」

「当然だ。何年こいつと一緒にいると思ってるんだ」

しれっとヨルはレイアに返す。

「言つてよ!もつと早く!」

「10回に1回は極上の物が出てくるぞ」

「何で食事で、そんな大博打しなくちゃいけないの!」

「ふむ、その極上の物に興味があるな。10回に1回なら、後7回ミネストローネを作らせれば極上のミネストローネを食べる可能性があるわけだな」

「余計な事は考えないでミラ!!そのうち6回は兵器を食べる羽目になるんだから」

「それもそうか……しかし、何事にもリスクは付きものではないか」

「こんな馬鹿馬鹿しい事に命をかけたくないよ!」

「それもそうだな。私にはなすべき事がある」

混沌カオスと化した食卓にレイアとヨルが一つの審判を下す。

「ホームズ、これから料理する時は味見をする事」

「分かりました……」

ホームズは素直に従う。そして、ヨルから一言。

「今回の兵器もお前が食べ」

「マジで言ってる？ 自分でも引くほど、塩と胡椒が入ってるんだけど、このミネストローネ」

「知るか、食べ」

「どうか、よくそんな物を僕らに食べさせようしたね……」

ホームズはミネストローネ（兵器）の入った鍋を見つめる。

「……皆は手伝ってくれないのかい？」

レイア達に助けを求める。

「ごめん、やだ」

「頑張つてホームズ」

「お前の勇姿は忘れない」

「断罪の時間だ」

迫り来る鍋にホームズは、冷や汗がとまらない。

自業自得、そんな言葉が、ホームズの頭の中に浮かび上がった。

その後、ホームズは3日寝込んだ。

「……逆に、よく3日で済んだね。」

出会い

遭い縁奇縁

「はあー、今日もいい天気だなあー」

青空の下、ホームズはそんな事を呟きながら、宿屋ロランドの玄関掃除をしている。ミラが来てから早いもので、3週間が過ぎた。ミラもリハビリの成果が着実に出て来ており、大分歩ける様になっている。

そして、ホームズも……

「やっと、怪我治ったよ……」

怪我が完治していた。3週間の労働により、治療費は全て払い終えたのだ。

では、何故働いているかというと、答えは簡単、宿泊費分の金がないのだ。そのため、労働により、払っているのだ。

爽やかな日差しの下、ホームズは掃き掃除に勤め、そして、ヨルはホームズの肩で欠伸をする。彼らは地味にル・ロンドの名物となっているようで、近所の人にもよく声を掛けられている。

「ホームズ」

突然の呼び声にホームズは掃き掃除の手を止め、その声の主に尋ねる。

「どうしたんです？ デイラック先生？」

「こんな物が届いた」

声を潜めて見せた物はジュードの手配書だった。ホームズは、思わず顔をしかめる。

「君、知っていたな？」

「ええ、まあ、知ってましたよ」

「何故黙ってた？」

静かに、しかし、怒りを押し殺しているようだった。

「言えるわけではないでしょう？ あなたの息子、指名手配犯になってますよ、なんて」

何処かで言ったようなセリフをデイラックにも言う。デイラックは少し、ため息を吐く。

「少し、動揺していたようだ。すまない」

「別に構いませんよ」

ホームズの言葉にデイラックは、少し落ち着いたように、もう一度尋ねる。

「君は、私の事を、この手配書で知ったな」

そう言って、デイラックはジュード・『マティス』の部分を指差す。

「そうですよ」

「ジュード達は何をしたんだ？文面を読む限りは、何かを盗んだようだが……」

ホームズはデイラックの言葉にホームズは肩を竦める。

「そんな事をおれに聞かれたって困りますよ」

ホームズの言葉に、デイラックは固まる。それもそうだ、自分は一体何をしているのだろうと。いくら、彼がエレンピオス人とは言え、彼自身はエレンピオスの手掛かりを探している、ただの青年だ。そんな、彼が国の話など知っている訳がない。

「……それもそうだな。すまなかつた、作事中に。」

「イイですよ、別に。」

デイラックはその言葉を聞くと、治療院に戻って行つた。

その後ろ姿が完全に治療院に消えるとヨルは少し、小馬鹿にした様に鼻を鳴らす。

「何が『そんな事をおれに聞かれたって困りますよ』だ。少しも困っていないだろう、お前」

ホームズはミラからクルスニクの槍の事を聞いている。これで、何も分からない訳がない。どう考えてもそれに関する何か以外考えられない。

そんな、ヨルの思惑を知つてか知らずか、ホームズはヨルの言葉に流し目で、ニヤリと、底冷えのする様な笑みを浮かべる。

「困るさ。だって、嘘をつかなくやいけなくなるだろう？俺は出来るだけ、嘘はつきた

く無いんだ」

そんな、ホームズを見るとヨルは呆れた様に言う。

「いい性格してるよ、お前」

「そりやどうも……と玄関掃除はこれぐらいかな。後は中の掃除だね」

ヨルの皮肉をどうでも良さそうに返事をする、ホームズは宿屋ロラランドに入って行った。

◇◇◇◇

ホームズはロビーを拭き掃除をしていた。3週間も経っている、大分上手くなっている。

すつかり、床も机も綺麗になり満足そうに一息付く。

すると、ガラガラと玄関の扉が開く。

「いらつしやいま……せ。」

レイアと入って来たお客を見て、ホームズは固まる。

「どうしたの？ホームズ？固まっちゃって」

顔面蒼白になって、ホームズは口をパクパクさせて何とか言葉を絞り出す。

「……………えーつと」

「ああ、今日一日泊まることになった、ローエンとエリーゼだよ」

「いや、知ってる」

片や得意先の老執事、片や自分を殺しかけた女の子。知らない訳がない。

「しばらく、ジュード達と一緒に旅をしていたんだって」

「お久しぶりですね、ホームズさん」

「え、ええ、お久しぶりです」

『何でお前らがここにいるんだー！』

ローエンの穏やかな挨拶に対して、やたら喧しく叫ぶ、紫のヌイグルミ。

「本当に……………何でいる……………ですか？」

そして、控え目にエリーゼが聞く。

ホームズは頬を引きつらせながら質問に応える。

「何で、君達は人の話を聞かないし、自分のやった事を忘れてるんだい？」

ジュードの父親に話を聞きに行こうとして、殺されかけ、治療費の借金を背負ったのだ。

その借金をやっと返し終わったところなのだ。

「話が見えないのですが……」

「わたしは、何となく分かったけど……」

不思議そうな顔をしたローエンと察して苦笑いしているレイア。

恐らく、ホームズはいつもの如く誤魔化すので、レイアは先回りして説明する事にした。ヨルの事、ホームズが何故旅をするのか、等々。

「なるほど、ヨルさんにそんな秘密が……いや、お陰で謎が一つ解きましたよ」

「謎?」

「稀に、ホームズさんが1人で喋っている所を見かけることがあったので、一体、誰と喋っているのだろうか?と思っていたのですよ」

ローエンの言葉にヨルは馬鹿にする様にホームズに言う。

「どうやら、変質者の仲間入りを果たさずに済んだようだな」

「お陰様でね」

額に青筋を浮かべながらホームズはヨルに返す。

「あの……ヨルは、今は危なく無い……ですか?」

エリーゼの言葉にホームズは苦笑いを浮かべる。

「ああ、まあ、直接的にマナを搾り取るなんて事は出来ないよ」

「どうして……それを…先に言ってくれなかったんですか？」

「言う前に君達が高らかに、討伐宣言して襲ってきたからに決まってるだろう」
ホームズは苛立ちを押し殺す様にエリーゼに即答する。

「で、お前らは何しに来たんだ？」

ヨルは2人に聞く。その言葉を聞いて、ローエンは苦笑いをする。

「……猫が喋るといふのは少し、慣れませんか」

ローエンのその言葉にヨルは半眼になる。

「近くでヌイグルミがベラベラ喋ってる癖に何を言ってるやがる、ジジイ」

ホームズはヨルの最後の言葉にキツと睨み、アイアंकローを決める。

「すいません、躰がなくなって……」

ホームズは平謝りする。

「いえいえ、別にイイですよ」

ローエンは穏やかな笑みを浮かべている。ホームズとしては、得意先の執事にそんな口をきかれると冷や汗ものなのだ。

「ここに来た目的はですね、ミラさんのお見舞いに来たのですよ」

『でも、もう歩ける様になってビックリした』

「もう、明日には出発なんだって。もっとゆっくりしてけばいいのにね」
レイアは少し、残念そうに言う。

瞬間、ホームズの時間が止まった。

「いつ出発だったって？」

「明日」

「誰が？」

「ジュードとミラ」

ホームズは現実に戻るまで少し時間がかかった。

「何であの子はそういう大事な事を言わないんだあー！ー！」

現実に戻るとホームズは頭を抱えて、そう叫んだ。

「え、え、え？どうしたのホームズ？」

訳の分からないレイアはホームズに聞く。

ホームズは顔を挙げると困ったような顔をしている。

「おれもミラ達と一緒に旅に行く事になったんだよ！」

「聞いてないよ！わたし！」

ホームズの叫びに負けないぐらいの音量で、レイアは言う。

その言葉にホームズとヨルは顔を見合わせる。

「あれ？言つてなかったけ？」

「こいつの母親には言つてたな」

腕を組んで少し考える、ホームズ。

そして、爽やかな笑みを浮かべると、レイアに言う。

「そゆことだから！」

「誤魔化したね！」

「ごめんなさい！今回はガチで忘れてましたあ、許して下さい！」

そう言う頭を抱えて次の小言に耐える準備をする。

しかし、いつまでたっても次の小言は来なかった。

ホームズは恐る恐る顔を上げるとそこには、何かを考えるレイアがいた。

「レイア？」

ホームズが怪訝そうに聞いたが、レイアは気付かず、あさつての方向を見て、ヨシ、と気合いを入れる。そのまま自分の部屋に戻って行ってしまった。

「どうしたんだろう？」

ホームズは不思議そうにレイアの歩いて行った方角を見ている。

そんなホームズにヨルは欠伸を一つすると、口を開いた。

「さてな。まあ、ろくな事は考えていないだろうな」

「だろうね」

ホームズはため息を一つ吐く。そして、ローエン達の方を振り返る。

「じゃあ、部屋に案内しますね」

「お願いします」

ローエンはそう返事をし、エリーゼはそれに続いてお辞儀をした。

そして、部屋まで案内し終わると、マティス治療院までダッシュで向かった。

◇◇◇◇

「ミ————ラ———!!」

地の底から響き渡る様な声で、ホームズは最後の調整を終えたミラに詰め寄った。

「ホームズ? どうした?」

「『どうした?』じゃない!! どうして、明日出発だっておれに教えてくれないの?」

ミラはその言葉にハツとすると、まっすぐにホームズをみて言う。

「すまない。忘れていた」

そのとても謝っているとは思えない余りの堂々とした様子に、ホームズは、こめかみ

をひくつかせる。

まあ、見えないだけで、ミラは誠心誠意、謝っているのだが……

「そう言う事はちゃんとやってね。おれだって出発の用意をしなくちゃいけないし

……」

「ちよつと待って……」

ホームズの言葉を手で遮ってジュードは尋ねる。

「何で、ホームズの旅支度に僕らの出発日が関係するの？」

「え……いや、何言ってるんだい？おれたちも一緒に行くからに決まってるだろう」

ホームズは首を傾げながらジュードに言う。

「僕、何も聞いてないよ!!」

そんなホームズにジュードは声を荒げる。

「……ミラ」

「何でも私のせいにするな。お前の責任でもあるだろう。ジュードにちゃんと伝えて

ない、お前が悪い」

「その言葉、そっくりそのまま返してあげるよ」

睨み合う2人。ジュードはため息を一つ吐く。

「……ホームズもミラもこれからは、ちゃんと報告してね」

「はい……」

「分かった」

ジュードは彼らの口論をそう止めた。

ホームズはその言葉を合図に元来た道を歩いて行く。

「じゃあ、おれは帰るけど、く・れ・ぐ・れ・も、おれを置いて出発、なんて事はしないでね。分かった？」

そう、ジュード達に念を押して。

考える爺

その日の夜、ホームズは珍しく、一人で静かに夕飯を食べていた。レイアはいつもより早めに食事を終えた様だ。

この静けさが逆に怖い。

「ご一緒させて頂いてもよろしいですか？」

不意にそんな声を聞き、ホームズは現実に戻った。

顔を上げるとそこには、ローエンとエリーゼの姿があつた。

「どうぞ」

ホームズはそう言うのと席を空けた。

ローエンとエリーゼはそれぞれの席に腰を下ろした。

「ヨルさんはご一緒では無いのですか？」

「ええ、まあ。化け物とは言え、見た目は猫なんですね、食堂に持ち込む訳にはいかないんです」

「それはそうですね」

ホームズは一旦マーボーカレーを食べるのをやめる。

「それで？まさか、それが聞きたい訳ではないでしょう？」

「鋭いですね……………貴方は、ミラさんのなすべき事に付き合うのですか？」

「ええ。でないとおれの両親の故郷への行き方の情報が、貰えないんです」

「両親の故郷……………ですか」

エリーゼが少し戸惑った様に言う。

ホームズはエリーゼに少し頷く。

ローエンはさらに聞く。

「はつきり言つて、ミラさんのやろうとしている事は、命懸けです。ミラさんの足があるな風になつたのも、そのなすべき事が原因です」

ローエンはホームズの深い心の底に問いかける様に声をだす。

「あなたに、その覚悟はあるのですか？」

ホームズはローエンの目を真つ直ぐに見据えて口を開く。

「ローエンさんは……………」

「ローエンでいいですよ」

「ローエンは、賭け事つてやった事ありますか？」

「ありますよ。こう見えて若い頃は結構ぶいぶい言わせてましたよ。」

ホツホツホ、と得意げに微笑む。そんなローエンにホームズは言葉を重ねる。

「賭け事って、賭ける物の価値が高ければ高い程、得られる物の価値は高くなるでしょう?」

ホームズは言葉を続ける。その碧い目には確かな決意の色が浮かんでいる。

「おれにとつて、最も価値のある物は、両親の故郷への行き方。それに見合う賭け金^{ピット}が欲しいなら命だつて賭けてやりますよ」

そう、力強く言い切ると、最後に悪戯っぽく笑う。

「ま、だからと言って、死ぬつもりはないですけどね。死んだら両親の故郷に行くもクソもないですから」

ホームズはスプーンを覗き込む。自分の碧い両目を見る様に。

「最後に一つ、どうして、そこまで……」

「『ご両親の故郷に行きたいのですか?』でしょう? 耳タコですよ、何度同じ質問をされた事か……」

ため息を吐くとホームズはいつもの様に言う。

「両親が何処でどう育ったのかを見てみたい。そう思うのは当たり前じゃないですか」

それに、と言葉を続ける。

「行った事のない場所に行きたいと思うのも当たり前だと思いますよ」

ホームズの言葉にローエンは満足そうに笑う。

「迷いのない答えですね。なすべき事と言うより、なしたい事、と言う感じですね」
ローエンはヒゲを手で触る。

「欲望に忠実と、卑下する人もいるかも知れませんが、私はそう言う生き方は割と好きですよ」

「嬉しいですけど、どうせなら男に言われるより、女の子に言われたいセリフですね」
ホームズはおどける様に肩を竦めると、ローエンはニヤリと笑って

「なら、エリーゼさんに言ってもらいましょうか？」

「……おれを犯罪者にするつもりです？」

思わず、頬が引きつるホームズ。

対するローエンは面白そうに笑っている。

因みにエリーゼは、？と首を傾げている。

「分かりましたか？褒め言葉は素直に受け取っておくべきですよ」

「……よくわかりました。」

亀の甲より年の功と言う言葉をホームズは身に染みて感じていた。

げんなりしていると今度はエリーゼが口を開いた。

「あの……ホームズの気持ち分かります。私……お父さんとお母さんの事を覚えてな

くて、自分が……何処で育ったかも……お母さんとお父さんが何処で育ったかも……分らないんです。だから、ホームズの気持ち……少し、分かります」

ホームズはエリーゼの話聞き、少し考える。

どう答えようか、と。

まあ、ここは普通におしえてくれてありがとうで別にいいだろう。わざわざ、自分の事を話す必要はない。しかし、そう考えるとレイアの言葉が脳裏に蘇る。

『ホームズの話聞いたからね、今度はわたしがホームズに話さなきゃと思ったんだ。……自分の辛かった話を。それぐらいしなきゃだめだと思ったんだよ』

「……おれもね、父さんが物心つく前に死んでいてね、全然記憶に無いんだ」

ホームズはそう言った。その言葉にエリーゼは息を呑む。ローエンは少し悲しそうに目を伏せる。

『どうして、そんな事をエリーゼに教えるのさ』

ティポが不思議そうにホームズに尋ねる。

「……ん、いや、まあね、エリーゼが教えてくれたからさ、おれもこれぐらいはしなきゃいけないと思ったんだ」

完全にレイアの受け売りである。恐らく、以前のホームズなら、適当に誤魔化していただろうが、少し、変わったようだ。

「なるほど、だからこそ、見てみたいし、行ってみたいのですね」

ローエンの言葉にホームズは、笑みを浮かべて頷く。

「まあ、そう言う事です。……あなたは、ミラ達と一緒に行かないんですか？ ローエン、いや、指揮者コンダクターイルベルト」

「なんで……それを……」

『知ってるのさー！』

エリーゼとティポは驚いている。

対するローエンは落ち着いている。そして、少し目を伏せた後言葉を繋ぐ。

「……やはり、知っていましたか」

「当然。おれは商人ですよ。情報は持つておくに越した事はないですからね」

ホームズは自慢する訳でもなく、淡々と言う。そして、最後の一口をペロリと食べ終えた。

ローエンは少し辛そうにホームズに答える。

「……………少し悩んでいます。なすべき事も、分かつてはいるんです」

一旦ローエンは言葉を切る。一つ息を吐くともう一度話し始める。

「……今回の原因の一つは、私が逃げ出した事です」

ホームズは頬杖をついて、聞いている。

「そんな私に、クレイン様に国を託されました。」

「……その言い方だと、クレイン様が死んでしまったみたいですよ」
仮にも、ホームズのお得意様なのだ。顔見知りではある。

ホームズという言葉にローエンは少し苦しそうに俯く。

「亡くなられてしまいました。ナハティガルの手の者によつて」

一瞬、ホームズは何を言われているか分からなかった。

「……亡く……なった？クレイン様が？」

『本当だよ。でも、ローエン君をあまり責めないで』

テイポがホームズに言う。ホームズは固くなった表情を戻すといつもの胡散臭い笑みを浮かべる。

「別に、責めても無いし、怒ってもないよ。ただ、驚いただけだよ」

ホームズは背もたれに深くもたれかかる。

クレインは妹思いで、自分の様な行商人にもキチンと正当な評価を下してくれる、そんな正しく、そして、優しい領主だった。

「亡くなる間に託されたのです。しかし、私は迷ってしまった……」

ローエンは俯いている。エリーゼとティポはそんなローエンを心配そうに見ている。そんな中ホームズは口を開く。

『迷うのも、悩むのも、成長するのも、別に子供だけの特権じゃないぜ』

「……それは？」

「おれの母親の受け売りです。まあ、おれは悩む事も、迷う事も否定はしません。そうでもしないと、答えを出せない人もいます」

行商人と言う職業柄、よく悩む人や、迷う人をホームズは見ている。こちらとしては、早く決めろと、イライラするのだが、そうやって悩んで商品を買った客の方が、物持ちが良かったりするのだ。

「……でも……ミラは明日出発……してしまっんですよ」

『一晩しかないよ〜』

エリーゼは焦ったようにホームズに言う。

ホームズはエリーゼの言葉を聞くと、おもむろにコップに水を半分程注いだ。

「……コップに水はたくさんあるかい？」

「いいえ、半分しかない……です」

「ローエンは？」

ホームズはエリーゼの答えに頷くと、今度はローエンに問いかけた。

ローエンは、ふふふ、と少し笑うと答えた。

「なるほど……半分もありますね」

ローエンの答えに満足そうに笑うとホームズは水を飲みほした。

「わかりました。今夜はじっくり悩むとします。……因みにホームズさん」

「なんです？」

今度はローエンが、コップに水を半分程注ぐ。そして、それをホームズの前に出す。

「コップに水はどれくらいありますか？」

ホームズはニヤリと笑ってこたえる。

「半分くらいありますね」

「なっ……」

『ズルいぞろ、そんなの！』

エリーゼとティポは不満げにそれぞれ、文句を言う。

ホームズはそんな文句はどこ吹く風と言う様にしれつと返す。

「聞き方が良くないんだよ。おれがエリーゼに聞いた様に上手に聞かなくちゃ、ね、

ローエン」

「ホッホッホ、何と無くそう答えるだろうと、予想はしていました。だから、敢えて『どのくらい』と言ったんですよ」

結局ホームズは、ローエンの裏をかいたつもりだったが、それもローエンには、予想通りだったと言う事のようにだ。

「はあく、言い負かしたと思つたのになあ〜」

「ジジイに勝とうなど10年早いですよ」

顎に手を当てニヒルに微笑む。

ホームズは少し悔しそうにしていたが、切り替えると部屋に戻る準備を始めた。明日出発なのだから、その用意が必要だ。

「まあ、くらいだろうと、もだろうと、しかだろうと、コップにある水は半分ですからね」

ホームズはそう、言い残し自分の部屋に戻つて行つた。

取り残された、エリーゼはローエンに聞く。

「今のどう言う意味……ですか？」

「時間は限られている、と言う事です。コップに半分ある水を多いと感じるか、少ないと感じるか、自由です。しかし、それでも、水が無限にある訳ではないのです」

「……なるほど」

『どうして、わざわざそんな風に言うのさー？』

「恐らく、あの方なりのエールなのでしょう。少し、意地悪を込めた、ね」

ローエンはそう言うと、いつの間にやら食べ終えた食器をまとめ始めた。

「さあ、エリーゼさん、今日は早く寝てしましましょう。私は、もう少し考えてみます。」

「は」

『りよーかーい』

思い立ったが大吉

「ついに今日か……あんまり実感ないねえ」

ホームズは支度をしながら、そうつぶやいた。

「長かった……本当に長かった。これでようやく、そぼろ（薄味）ともお別れだ」

「……感慨深そうに何どうでもいい事を呟いてるんだい？」

ホームズのシラけた視線がヨルに突き刺さる。

そんなホームズをヨルは、キツと睨む。

「お前と違つて俺は、3週間ずつつつとそぼろ（薄味）だったんだよ！ どうせお前は、今日も上手い飯を食つてたんだろ！」

「ああ。豆腐の味噌汁……最高だったぜ」

ホームズは思い出すようにいい声で言う。

「……本当に忌々しい」

ホームズはヨルの悪態を無視して、準備を進める。

いつものポンチヨを羽織り、そして、ぴよこんと立ったアホ毛を何とか格好だけ取り繕う。

「よし・何とかなった。さて、ヨル、悪態はその辺にして、そろそろ行くよ」
最後に左手首に円盤状の盾を確認し、靴紐を結ぶと、ホームズはヨルを肩に乗せて下に降りて行った。

◇◇◇◇

下に降りるとレイア以外の全員がロビーにいた。ミラは椅子に腰掛けている。

「おはよー。良かった、おれの事忘れてなかったんだね」

「ああ、うん。まあね」

ジュードは少し目を逸らして、答える。本当はレイア達に挨拶をしようとして此処にきたのだ。そして、今さっき昨日言われた事を思い出した。ホームズの事は言わば、ついである。

「……何か凄く気になる言い方だね」

ホームズはそうつぶやくと、ローエンの方を向く。ローエンはまだ、答えを出していないようだった。

「ミラさん。本当に行くのですか？」

ホームズの知らないところでミラは、足を失いかける怪我を負っている。そして、そ

れは完治したとは言いつらいのだ。その証拠にさつき倒れかけていた。

「私には使命を果たす責任がある」

しかし、そんな事を物ともせず、ミラははつきりと言う。

「あなたは、強く気高い。しかし、それが私の傷をえぐるようです」

ローエンは静かに、しかし、辛そうに言う。

「ローエン？」

ジュードは心配そうに聞く。

ローエンはそれに答えるように言葉が続ける

「クレイン様にこの国を救って欲しいと言われた時、私は悩んでしまった………今の私にできる事があるのだろうか、ナハティガルを止める事が出来るのだろうかと」

「ガンダラ要塞での様子だと2人は知り合ひみたいだったけど……」

「そりや、指揮者コンダクターだからだろ」

ヨルが口を挟む。しかし、ローエンは首を横に振る。

「いいえ、それだけではないんですよ、ヨルさん。ナハティガルは私の友人なのです。とても古くからの」

ヨルはピクリと耳を動かす。

ミラは少し考えながら、口を開く。

「友と戦えるのか……それがお前の悩みか」

ホームズは眉をひそめる。

『ええー！友達とケンカしなきゃいけないのー？』

ティポは口をデカデカと開けながら喋る。

ローエンは顔を伏せたままだ。

そんなローエンにミラは言葉をかける。

「決断に必要なのは、状況や時間ではない、お前の意志だ」

ミラはさらに続ける。

「私達と共に行かないか、ローエン？」

「ミラさん？」

ローエンは顔を上げながら言う。

「悩むのもいい。だが、人間の一生は短い。だったら、悩みながらも進んでみてはどうだ？人とは、そう言うものなのだろう」

最後はジュードの方を少し向いていた。ジュードはミラと目を合わせると、ローエンに言う。

「そうしてみたら、ローエン？僕も心強いし」

ローエンは少し迷ったがすぐに笑顔になった。

「ふふふ。確かに、ジジイの時間はとても貴重。立ち止まっただけでは勿体無いですね」
『コップにある水は半分だもんねー』

ローエンの言葉にティポが乗つかるように喋る。エリーゼは昨日のホームズのことを思い出して、ホームズの方を見た。

ホームズはエリーゼの視線に気付くとウインクをする。

「それ、どう言う意味？」

ジュードが不思議そうに聞く。

「時間には、限りがある、と言う事ですよ。ホームズさんが昨日教えてくれました」

「ホームズが？」

ミラとジュードが驚いたようにホームズを見ている。

「……なんだい？」

2人の視線を受けてホームズはやや不機嫌そうに言う。

「口を開けば、胡散臭い事と馬鹿な事しか言わないのには？」

ミラが心底驚いている。悪意がないからこそ達が悪い。

「……君達が、おれの事をどう思ってるか、よく分かったよ」

「ちよ、ちよつと、僕なにも言っただけだよ」

「目は口程に物を言うんだよ」

ホームズは額に青筋をピキピキと浮かべながら返す。

「ホツホツホ、とりあえず、ご同行させて下さい」

ローエンはホームズ達のやり取りを少し笑って、から、そう言った。

すると、エリーゼは意を決したようにジュード達に言う。

「私も一緒に行く………です」

「だめだよ。エリーゼはドロツセルさんの所に帰るんだ」

ジュードは優しく、しかし、にべもなく言う。それを聞いてエリーゼよりもホームズが驚いた。

「あれ？連れて行かないのかい？」

「当たり前でしょ!!エリーゼはまだ、子供なんだよ!」

ジュードはそんなホームズを叱る。

そう言われてホームズはエリーゼをまじまじと見る。

子供のくせに、使う精霊術の威力はハンパじゃない。戦力になる事は間違いないが

……

「まあ、確かにその通りだね」

「そうか？お前なんか、こいつよりチビの頃から旅をしていたし、俺と契約したのだから、こいつよりチビだったぞ」

「……………だそうだけど」

「君達を基準に考えないで!!」

ジュードの突っ込みが、化け物共に炸裂する。ホームズはシユンと肩をすぼめてしまった。

ローエンは身をかがめ、エリーゼの目線に合わせて言う。

「ドロツセルお嬢様にお伝え下さい。ローエンはミラさん達と、イル・ファンに行く」と

「……………でも」

ローエンは伝えるとミラ達の方に向き直る。

そんな、ローエンにジュードは不思議そうに聞く。

「カラハ・シャルルでしょ？一緒に行かないの？」

「私に考えがあります。任せてもらえないでしょうか」

ローエンはそう自信に満ちた様子でジュード達にいう。

「分かった。ローエンに任せるよ」

ホームズ達は知らないが、ローエンは元軍師と言うだけあって、考えがある。と言う時はとても頼りになるのだ。

ジュードはエリーゼの方にも話し掛ける。

「それじゃ、エリーゼ。船が出るまでだけど一緒にいようね」

「……………」

『ひどいぞー、ジュード君!』

押し黙ってしまったエリーゼとは対照的に、ティポは叫んで、ジュードに頭をグリグリとなすり付けた。

そんな様子を見てから、ミラは辺りを少し見回しホームズに聞く。

「ところでレイアは何処だ?」

「さてね。おれも昨日の夕飯前から見ていないんだ」

お手上げと言うようにホームズは肩を竦める。

ホームズも挨拶ぐらいしたかったのだが、全くレイアに会わなかったのだ。

「そうか、とりあえず、港に行こう。もしかしたらいるかもしれないしな」

◇◇◇◇

港には来たが、結局レイアの姿はなかった。ミラとしてはお礼をしたかったのだが、どこを辺りを見回しても、レイアの姿はない。

少し落ち込んでいると隣からジュードの声がした。

「この船って、アジュール行きだけど……これがローエンの言っていた考え？」
「はい」

厳かなに、そして、自信ありげに答える。

「ローエンが言うなら大丈夫だろう」

そんな事を話しているとジュードの母、エリンがやって来た。

ホームズは頭を下げる

「お世話になりました。デイラック先生にもそうお伝え下さい」

「ええ、分かったわ、伝えておきます。それよりもジュード、お父さんと仲直りしなくていいの?」

「必要ないよ」

少し言葉を濁しながらジュードは言う。

「……………何があつたんだい?」

ホームズは隣にいるミラに小声で聞く。

「……………少し喧嘩をしたらしい」

「ふーん」

そんな会話をボソボソとしていた。まあ、突然、明日出発なんて言われたら、どの親だつて怒るだろう。

ヨルは潮風を感じながら、そんな事を考えていた。

エリンは最後にジュードに告げる。

「お父さんは、あなたのこと、が心配なの。わかってあげて」
母のその言葉にジュードは力強く頷く。

一通り、親子の挨拶が済むと、ローエンがエリンに頼む。

「お願いがあります」

ローエンは、後ろに隠れているエリーゼを見ながら言う。

「しばらくの間、この子を預かってもらえないでしょうか？」

「サマンガン海停から、迎えの人が来るんだそれまで、お願い」

ローエンの言葉をジュードが引き継ぐ。

エリンは手を組む。

「かわいい子ね。分かりました大切にお願いします。」

エリーゼは、不満そうに下を向いて体をゆらゆら揺らしている。

『うさぎは寂しいと死んじゃうのに、ヒドクイ』

「ぬいぐるみは何を言ってやがる」

ヨルがティポを馬鹿にする。

すると、ティポはムツと睨むとそのままヨルに噛み付いた。

「てめーなふえめーふあみふえやふある！にしゃがる！」

前足で一生懸命取ろうとしている。

しかし、ヨルの努力も虚しくティポはビョンビョンと伸びるだけで、離れる気配が全くない。

もちろん、それを助けるホームズではない。それどころか、指を差して笑っている。いや、あざ笑っている。

そんな様子を眺めていたジュードは、少しため息をつく。

「ジュード!!」

すると、突然、ディラックがジュードの名前を語気を強めながら呼んだ。

ジュードは、船に向けていた体をディラックに戻し言う。

「ゴメン、父さん。僕、ミラと行きたいんだ」

「ダメだ！行かせるわけにはいかない。お前が、彼女が、関わろうとしている事は………」

「おいおい、俺たちどんな縁なんだよ」

鬼気迫る勢いのディラックの言葉とは正反対のお気楽な調子の声が聞こえる。

ホームズがそちらを振り向くと、そこには……

「あ……………」

「アルヴィン!？」

突然の見た事のある来訪者にポカンとしているホームズと、驚いて、声を上げるジュード。

アルヴィンはアルヴィンで、ホームズの姿を見て驚いている。

「おたく、何でこんな所にいるだ?」

「ジュード……………君達はおれを見た時、どうして同じ事しか言わないんだい?」

「ハハハ……………いや、結構不思議なんだよ、知り合いと元敵が一緒にいるのって」

ジュードはホームズの質問に引きつり笑いで、申し訳なさそうに返す。

ホームズはため息を吐くとアルヴィンに説明した。ヨルの事は、デイラック達がいるので省いた。

「なるほどね。それで、おたくはジュード達と旅をする訳か」

「そう言うこと。今度はおれがこの台詞を言うけど……………」

『『なんで、此処にいるの?』だろう?』

「言わせておくれよ……………」

今まで散々言われた台詞を今度自分が言つてやろうと意気込んだが、結局アルヴィ

ンに先に言われてしまった。

ホームズは少し悲しそうにため息と一緒に言葉を漏らす。

そんなホームズをアルヴィンは面白そうに見ている。そして、彼らに肩を竦めて説明する。

「新しい仕事、クビになっちまってね。ホームズの話によるとまた行くんだろ？俺、まだ、報酬分の働きしてないぜ」

「君、用心棒なのかい？」

そんなホームズの質問にアルヴィンは涼し気な顔で応える

「俺は傭兵。金は貰うが、人を助ける素晴らしい仕事だ」

ホームズはそんな事をぬかしているアルヴィンを半眼で見ている。

「胡散臭い人だなあ……」

「ホームズが言うんだ……」

ジュードは呆れている。ここ三週間、一緒に過ごしたが、ホームズの言動は逐一、胡散臭かった。

「知り合いなのか？」

デイラックがそんなホームズ達に構わず、怪訝そうにジュードに聞く。

「うん。前にずっと一緒だったんだ」

ジュードがそう答えるとティポがアルヴェインに一直線に飛んで行く。それに続くようにエリーゼがアルヴェインにしがみ付く。

「やつととれた……………」

ティポからようや、解放されたヨルは、ぐったりしている。

『アルヴェインくん、僕達置き去りにされるー』

「かわいそうだなあー。せつかく、こんなに戦えるのにな」

エリーゼの頭をポンポンと優しく叩きながら、アルヴェインはそう言うのと、ジュードを見る。

「連れて行ってやろうぜ」

「おーやつぱりそう思う？」

ホームズは同志を見つけた様にアルヴェインに言う。

「やつぱ、おたくもそう思うだろ？」

「そうだね。なんとたつて殺されかけたからね。ヨルがいなかったらどうなっていた事か」

ホームズは思い出すように嫌味つたらしく言う。

「……………おたく、結構根に持つタイプだろ」

「純粹に評価しているんだけどねえ」

ホームズはニヤリと笑つて、呆れているアルヴィンを見る。

そんな彼らにジュードは目を伏せて背を向ける。すると、アルヴィンはジュードと肩を組んで親し気に言う。

「な？」

しかし、ジュードと肩を組んでいる割には、アルヴィンはジュードだけでなく、ディラックにも目を向けていた。

ディラックは眉を潜めて視線を下に向ける。

「しかし、アルヴィンさん……」

ローエンはアルヴィンの言い分に納得していない様だ。

そんなローエンにアルヴィンがまた、説得する。

「いざとなつたら、俺が守るからさ」

少し、いたずらっぽくそう言うのと、手を上げて今度は、おちやらけて言う。

「頼むよ、ローエン！」

『頼むよー、ローエン君！』

ティポは乗つかる様にそう言うと、そのまま、ローエンの顔に噛み付いた。

ローエンは一生懸命とろうとしている。しかし、ヨルと同じ様に虚しく伸びるだけである。

そんな事をしていると、早く乗船する様に船乗りにも声をかけられた。ミラは即決断をだした。

「ティポがとれない以上仕方あるまい」

その言葉には少し諦めが混ざっていた事は言うまでもない。

「OKだとさ」

『やったー!』

ティポとエリーゼは船に向かって走りだした。

「一本取られましたね」

ローエンはそう言うのと船に向かって歩きだした。

「船か……嫌だけど仕方ないね……」

ホームズはため息を吐くが、直ぐに母の言葉を思い出して、ル・ロンドの方に向き直る。

「それでは、いつてきます!」

そう挨拶をしてホームズとヨルは船に乗る。

「ほら、2人も」

「ああ」

「うん」

アルヴェインに言われ2人は返事をする。

「……父さん、母さん」

ジュードは何かを言おとしたが、やめて船に向かって歩き出した。

「ジュード！」

デイルラックはジュードを呼び止めた。ジュードは歩みを止める。

「ジュード、言う事があるだろう？」

ジュードにミラは優しく言う。

「………いってきます」

ホームズとは、また、向ける人が違うが、その分その言葉の重みも違ってくる。

「忘れるな。大人になると言う事は自分の行動に責任を持つということだぞ」

デイルラックは厳しい言葉を餞別としてジュードに言う。

「分かった」

ジュードはそう言うのと、船に向かって走りだした。

ミラは少し残って話をした後、船に乗り込んだ。

ホームズはそんなマティス親子を甲板からボンヤリと見ている。

「うらやましいですか？」

「まあね」

ローエンの言葉にホームズは少し寂しいそうに笑いながら言う。

「誤魔化さないとは珍しいな」

ヨルはホームズの肩で少し驚いた様に言う。

ホームズは肩を竦める。

「たまには、そう言う事もあるさ。」

それに、ローエンには、……ばれてるみたいだからね」

ローエンは微笑みながらホームズに答える。

「そう言う事です。何でしたら、私を父親と思ってくれてもいいですよ」

「冗談でしょ」

「もちろん」

ホームズはニヤリと笑ってローエンに返す。ローエンも同じ様にいたずらっぽく

笑っている。

「……ふふふ、少し元気が出たよ、どうも」

「いえいえ。代わりと言ってはなんです。ホームズさん。私に対してもその言葉使
いでお願います。」

ホームズは目をぱちくりしている。そう、ポロつとホームズは敬語以外の言葉を話して
いたのだ。

しかし、ローエンはそれが続けてくれと言う。

「今、私はあなたの商売相手ではありません。共に旅をする仲間ですからね」
「敬語を使いながら言われてもな」

ヨルは横から口を挟む。

「ふふふ、ジジイは特別なんですよ」

何と無く言いたい事がわかったので、ホームズは頷いた。

「分かりま………分かった、ローエン」

イマイチ締まらないのがホームズらしいと言えよう。

そんな事をしていると、アルヴェイン、ジュード、ミラが甲板に出てきた。

この様にして一同は船に乗った

全員が乗った事を確認すると、船は汽笛を鳴らし、ル・ロンドの港を旅立った。
様々人間と、それぞれの思惑を乗せて。

旅の恥はお約束

「なるほどねえ。あの黒猫は今そう言う事になつてるのか」

「まあね。だから、一応今のところ危険はない。寧ろ、僕達にとっては強い味方だよ」
港ではディラック達が居た為出来なかつた、ヨルの事をジュードはアルヴィンに説明していた。

「所で、ローエン。この船つて、ラコムル海停行きだよな？イル・ファンに行くんじやないの？」

アルヴィンは不思議そうにローエンに尋ねる。

そんなアルヴィンにジュードはため息を吐く。

「乗つてから聞く？ホント、アルヴィンつて、そう言うことこだわらないね」
ジュードの言葉を聞くとアルヴィンは、下を向いているエリーゼを見る。

「俺が来たのは、エリーゼ姫の為だからな。どこに行こうが関係ねーんだよ」

その言葉にエリーゼとティポは顔を上げる。

『いやーん、嬉しー。アルヴィン君は友だちだね』

「お前じゃねーよ」

テイポのテンションの高い言葉をアルヴィンはバツサリと切り捨てる。容赦の無い言葉にテイポはうなだれる。

エリーゼはそれを見て、くすくすと笑っている。

「それで、どうしてこんな七面倒くさい回り道をしてるんだ？」

ヨルはアルヴィン達のやり取りには目も向けずにローエンに尋ねる。

「はい。端的に言つて、今のガンダラ要塞を突破するのは不可能だと思われるからです」

「馬鹿言え。あんな場所商人だったら、正規の手続きを踏めば普通に通れるぞ。お前らだけじゃ無理かもしれないが、ホームズと一緒にならどうにかなるぞ」

ローエンの答えにヨルは間髪いれずに答える。その言い方には、少し呆れている様子が伺える。

「……えつとね、実を言うと僕達そこに前、侵入したんだ。ヨルも知ってるミラの怪我はその時のものなんだ。」

よく分かっていないヨルにジュードが少し躊躇いながら説明する。

つまり、ホームズの知り合いのふりをして通過する事は不可能である。

「その、ミラさんが負傷して、私達が逃走した時ゴーレムの起動を確認しました」

「また、厄介な……」

「知っているのか、ヨル」

ミラがヨルに尋ねる。

「何回か、ガンダラ要塞は通ってるからな。その時にどう言うものか聞いた」

「国家機密をベラベラ喋る不届き者がいるようですね……」

ヨルの答えにローエンは自国の兵士の口の軽さに呆れている。一度逃げたとはいえ、自国の兵士達の教育に不安を感じる元軍師、指揮者コンダクターイルベルト。

「それで、ゴレムと言うのは？」

「ち、ち、地の精霊を使った人間の兵器……何ですよ」

ミラの問いにエリーゼはつかえながら答える。

ミラは少し不思議そうにエリーゼを見る。

説明がされた所でローエンがさらに補足する。

「アレと戦うには、師団規模の戦力と戦術が必要になります」

「けど、海路も無理なのにア・ジュールへて事は……」

「ア・ジュール側への陸路を経由してイル・ファンに向かうということか？」

不思議そうに戸惑いながら、ジュールは言うの後を引き継ぐ様にミラが言う。

「ほう、そりやまた。でもよ、ファイザバード沼野はどうすんだよ？」

「そうだよね」

アルヴィンは少し声を低めて面白そうにローエンに言う。

ジュードはアルヴィンの意見と同じ様な疑問を持っていたようだ。

ミラは何と無く、首を傾げているエリーゼを見ている。

イマイチ分かっていない連中の為にジュードは説明をする。

「イル・ファンの北にある広大な沼地でね、ガンダラ要塞と対をなす、ラシユガル最大の自然要害って言われてるんだ」

「あそこ、靈勢がめちゃくちゃで、通り抜けられないって話じゃなかったけ？」

アルヴィンがジュードの言葉を少し補足する。

「実際問題無理だ。前に一度行つたが、正直生きていたのが不思議なくらいだ」

「……おたく、行つたの？」

ヨルの突然の言葉にアルヴィンは驚きを隠せない。ジュード、ローエンも同じ様な調子だ。

「ホームズとホームズの母親と一緒に。無傷だったのはこいつの母親ぐらいだった」

「何者だよ……」

「本人曰く『母親』だとき」

「ま、まあ、ヨルさん達の時はともかく、今は変節風が吹きましたので、現在は地霊小節

に入りました。つまり……」

一旦言葉を切る。

「靈勢が火場から地場イフリタに入った今なら、ファイザバード沼野も落ち着いているはずで
す」

ローエンは淀みなく説明をする。

しかし、エリーゼには難しかったようで下を向いている。

「全然分かりません……」

「安心しろ、私も分からん」

どうやら、ミラにも難しかったようだ。

ヨルは顔を引きつらせている。

「えっと、つまり……」

ジュードは頑張つて説明しようとする。

「まあ、取り敢えず問題なさそうって事でいいんじゃないの？」

アルヴィンはジュードの努力を適当にまとめる。

「はい。いいつてことです。あまり、時間も残されてないようですし」

髭を触りながら最後はローエンがまとめた。

『何がー？なんでー？』

話についていけないティポは緊張感の無い声で尋ねる。

「皆さんがカラハ・シヤールを去った後もゴーレムは起動したままとの情報を得ました。

これは、ラシユガルが、開戦準備を始めた証と捉えてよいでしょう」

ローエンの静かな調子で、放たれた言葉に一同は息を飲む。

「開戦ってア・ジュールと?!」

ジュードは驚きを隠せない。

当たり前と言えば当たり前である。自分の国がそんな事をしようとしているのに、驚かない訳が無い。

「戦争ですか……怖い」

エリーゼは幼心に理解したようだ。

皆が表情を硬くする中、ヨルは小馬鹿にした笑みを浮かべている

「戦争か……昔から好きだねー、人間は。よく、飽きないもんだ」

ヨルは馬鹿にする様に言う。

ヨルにとって人間同士の戦争は、蟻が戦っているのを見る様な物なのだ。

しかし、人間は蟻よりも感情がある癖に、そんな事を飽きもせず繰り返している。

ヨルは人間の戦争に対する感想はそれだ。

まあ、でも、その言葉を聞いて愉快的な思いをする様な奴などいない。

『なんだとー!』

事実、ティポは食ってかかった。

「貴方に言われたくない……です。たくさんの人達を殺したあなたには……」

エリーゼも食ってかかるが、ヨルはまともに取り合うつもりも無い様だ。

エリーゼ達を、少し見ると、フン、と馬鹿にした様に鼻で笑い、ミラの方を向いた。

「それよりも、マズインじゃないのか。その戦争で、クルスニクの槍が使われるのは、明白だぞ」

言葉こそ危惧している様だが、実際は薄笑いを浮かべながら喋っている。

ミラはヨルをギロリと睨んでから続ける。

「決まっている。戦争なんかに使われるより先に破壊する」

ミラの炎の様に燃える決意が甲板に静かに響いた。

その沈黙をアルヴィンが破る。

「……………て事になってるけど、聞いている? ホームズ?」

「聞……………いてヴオロロエええ!!」

アルヴェインの問いに答えようと努力したが、その努力は虚しくバケツの吐瀉物へと消えた。

そう、ホームズは絶賛船酔い中なのだ。何とか話だけは聞いていたが、それに参加するだけの余裕はなかった。

実際、ヨルの言った、あの場を凍り付かせた一言も普段ならアイアンクローで止めている所なのだが、正直動く余裕がない。

本来なら、甲板になって、いない方がいいのだが、何せ先程述べた様に動けないのだ。なので、ずっと横になって話を聞いていた。

『うえ、酸っぱい匂いがするー』

「ティポ……君……ね……!!」

吐き気に押されて最後まで話せない。

「ホームズ、大丈夫？」

「ほっとけ、ほっとけ。いつもの事だ」

心配そうに聞くジュードにヨルは面倒くさそうに言う。ホームズの耳元で肉を食べ始めた。

「・\$#○÷〒タメ♪☆↓もも!!」

ホームズはそのまま、また、バケツと対面している。

「ヨル！やめなよ！」

ホームズに余りにも酷い仕打ちをヨルをジュードは止める。

「とうか、よくこの状況でものが食えるな……」

アルヴィンはヨルの嫌がらせ根性に呆れ顔だ。

普段の体格差で、酷い目に合っているが、今回ばかりは、ヨルの方が優勢なのだ。こ

こぞとばかりにヨルは嫌がらせをしている。

「ホームズさん。水をもらってきました。あ、お礼はいいです。黙って飲んで下さい」

ローエンはホームズに水を持って来た。

ホームズは何とかお礼の言葉を言おうとするが、ローエンに遮られた。

さっきの様に言葉と一緒に別のものまで吐き出すからだ。

ミラはホームズを不思議そうに見ている。

「ほう。これが、船酔いという奴か。実際に目にするのは初めてだ」

ホームズはキツとミラを睨むが、長くは続かず、言葉も続かず、そのまま、再度、バ

ケツと睨みつこを始めた。

「普段からは、想像出来ないほど静かだな……」

さらに言葉を続けるが、もう、ホームズにはミラの方を向く余裕もない。

「悪気がない分、達が悪いねえ」

「それ、多分ホームズがミラに言いたかったんだらうね」

ジュードとアルヴェインは半眼に成りながら言う。

実際、ここ三週間ホームズのミラに対する感想は、ほぼそれだ。

本来なら面と向かって文句を言いたいだらうホームズに2人は同情した、目線に向けている。

「うあああああー！」

そんな事をしてしていると、船乗りの叫び声が甲板に響き渡った。

「何?」

ジュードとアルヴェインはその船乗りに駆け寄る。

「樽の中に、ひ……人が!」

ジュードとアルヴェインは言われた通り樽の中を覗き込む。

そこには、

「すーぴー……すーぴー……」

あどけない顔で、爆睡しているレイア・ロランドがいた。

アルヴィンは顔を動かさず目だけジュードの方を向き尋ねる。

「なにこれ」

「はは……僕の幼馴染み」

アルヴィンの淡々とした問いにジュードは頬を引きつらせながら答えた。面倒ごとが増えた瞬間だった。

◇◇◇◇

「あはは…待ちくたびれちゃって、つい寝ちゃった……」

ラコルム海停に着くとレイアは頭を掻きながら、面目なさそうに言う。

「そんな問題？直ぐに帰りなよ！」

突拍子もない事をした幼馴染みをジュードは強い口調で叱る。

「やだよ。帰らない」

レイアは腰に両手を当て力強く言い返す。

「遊びじゃないんだって！」

ジュードは聞き分けの悪いレイアに強い口調で言う。

「知ってる。ね！」

レイアはジュードに負けない程力強く言う。そして、同意を求める様に隣、アルヴィンの方を見る。

「誰？」

一瞬空気が凍り付いた。

『アルヴィン君だよー』

それを真つ先に壊したのはティポだった。

「よろしく、嬢ちゃん」

少しキザに手を上げるとアルヴィンは名乗った。

レイアはアルヴィンの手を直ぐに取ると握手をした。

「わたしレイア。こちらこそよろしくね、アルヴィン君」

「君って……」

微妙に引つかかる事を言いながら。

そんな時後ろで魂の抜けた様なホームズを見つける。

「どうしたの？」

「船酔い。やっと楽になったんだよ」

ホームズは普段とは違い、ヨルを頭に乘せ、地べたに座って、手をひらひらさせている。

何とか口もゆすぎ、ジュードとローエンのお陰で座れるぐらいに回復していた。

「ホームズ……やっぱり船酔いするんだね……」

レイアは憐れみの目でホームズを見る。

『「やっぱり」て事は……」

「そういう事だろうな」

頭からヨルの声が、容赦無くホームズに降りかかる。

つまり、どういう事かというと、出会った当初から、予想していたという事だ。

では、何故予想できたのか？

答えは簡単、ゲロ臭かったのだ。

デイラックに言われて気付かれない事を祈っていたのだが、そんな祈りは跡形も無く、碎け散った。

「ハアア……シヨックだ……」

女子に臭いと思われるのは男子にとってシヨックな事、この上ないのだ。

女勢は何で落ち込んでいるか、理解していないようだが、男勢、とりわけローエンとアルヴィンは理解した様で2人は無言でホームズの肩に手をポンと、優しく置いた。

2人のさりげない優しさにホームズは涙を堪える。

そんな彼らに構わず、レイアはミラにお願いをする。

「ね、いいでしょミラ。わたしも一緒に」

レイアの言葉にはふざけている様子はない。

ミラは顎に手を当てる。

「そうだな……理由を聞かせてくれ？」

ミラは少し考えた後レイアにそう訪ねた。

「ミラ……?!」

ジュードは怪訝そうだ。

レイアは胸の前で手を組み、ミラを真っ直ぐ見ながら自分の旅の理由を言う。

「鉱山で思ったの。わたしもミラみたいに強くなりたいって。それでね、ホームズが

ミラについて行くなって聞いてき……」

レイアは一旦言葉を切ってホームズの方を見る。ホームズは相変わらず、涙がこぼれ

ないよう、上を向いている。

「ホームズは自分のやるべき事を見つけてるし、その為の努力もやろうとしている。

だったら、わたしも自分のやりたい事の為に努力をしようと思ったの」

ミラもレイアの目力に答えるようにレイアの目をじつと見る。

レイアは腕を組んでさらにミラを見据える。

「ムムム……」

「それだけか？」

ミラの問いかけにがつくりとレイアは肩を落として答える。

「そう言うと思ったー!」

そう言うって何処からともなく、小さなメモ用紙をミラに渡した。

「なんですか……あれ？」

少し離れていた所から見ていたエリーゼはローエンに尋ねる。

ローエンはお手上げというように肩を竦める。

「ホームズ……は？」

「おれが知るわけないだろう」

『友達なのにー?』

「……あの子は、いつもおれの予想斜め上を行くんだもん」

ホームズはおれは悪くないとでも言いたそうだ。

「細かい事はそれに書いてあるから読んでみて」

「僕達について行く理由を？」

ジュードが聞く。

「うん。100個ぐらいある」

ジュードにウインクしながら、レイアは言う。

ミラは言われた通りに、レイアから渡されたメモ用紙を読み始めた。

すると、少し微笑んだ。

「ふふふ、分かった。一緒に行こう。気に入ったよ、実に人間らしい理由だ。ふふふ」

「もう……」

ジュードはやれやれと言った風に肩を落とす。

「君と同じ様な台詞セリフだけど、随分と印象が違うね、ヨル」

ヨルの場合は微笑みではなく、高笑いだ。

レイアも何と無く気付いた様で、ヨルの方を見ている。

「さて、お許しが出た所で……」

レイアはジュード達一行の前に出る。

「みんな、よろしくね！」

そう高らかに挨拶をした。

そして、

「さあ、次はホームズの番だよ」

「……は？」

「大方、まだ、まともに自己紹介していないでしょ」

凶星だった。基本的にホームズの事は周りの連中が掻い摘んで紹介していたのだ。ホームズは地べたに座ったままで自己紹介しようと思っただが……

「……いいのか？」

ヨルがにやりと口角を上げながら、ホームズに聞く。

「分かったよ……」

ホームズはため息を吐くと立ち上がる。

『君の名前は、私と旦那が、三日三晩考えて付けた名前だ。』

『だから、自己紹介する時は高らかに、胸を張って言いたまえよ』

『でないと、どうなるか、分かっているだろうね』

「おれの名前は、ホームズ。ホームズ・ヴォルマーノ。そして、この肩にいるのが元化け物、で、今も化け物のヨル」

ホームズは胸に右手を当て高らかに言う。

「みんな、しばらくの間よろしく頼むよ」

そして、そのまま、ホームズは後ろに倒れた。

「ホームズ！」

ジュードは心配して駆け寄る。幸い頭は打っていない様だ。

「うえ、気持ち悪い……………」

「船酔いから、完全に覚めてないのにあんなに勢いよく立つからだよ」

ジュードは呆れている。

ホームズとしては、とても珍しいくらい凜とした、自己紹介だった為、この直後の醜態が、余計際だってしまった。

「まあ、ホームズらしいね」

レイアは頬を引きつらせながら、そうこぼした。

嘘から出た魔物

「で、つまり、まとめると……ラシユガル行きに乗ろうとしたけど、間違えて、ア・ジュール行きに乗ったと……」

こちらラコルム街道。

ホームズは両目の付け根を揉みながら、レイアの言い分をまとめる。

「うん。いや〜びつくりだよね」

レイアはハハと笑いながら、頭を掻く。

ホームズは自分の顔が引きつってるのを感じながら、ジュールを見る。

「君の幼馴染み、どうなっているんだい？」

「ごめん。今回は僕もびつくりだよ」

ホームズとジュールがそんな会話をしている時、ティポとエリーゼはヨルを睨んでいた。

どう考えても、善人（善猫）とは見えないヨルに警戒している様だ。

「何の様だ、ヌイグルミとジャリ」

「ジャ、ジャリ!？」

『エリーになんて事言うんだー!』

ヨルのあんまりな言い草に、エリーゼとティポは大層ご立腹だ。しかし、ヨルはエリーゼ達の文句なんて、どこ吹く風だ。つまらなそうに、あくびをしている。

「ローエン……俺がいない間に随分と混沌カオスなことになってるんだけど……」
好き勝手やっているホームズ達を見ながら、アルヴィンは呟く。

「ええ、まあ。ジジイも負けてられないですね」
「張り合うなよ……」

アルヴィンは更に疲れた様に言う。

「まあ、冗談はさておき。仲間が増える事はとても心強いですよ」

「……否定はしないけどな」

ローエンの言葉にアルヴィンは肩を竦めて、答えて、ホームズ達を見る。

「ホームズ……取り分け、ヨルの能力は、敵に回すと厄介な事の上無いけど、味方なら相当頼もしいからな」

「ええ、レイアさんから話を聞いて驚きました」

ローエンは少し真面目な調子で言う。

レイアから聞いた、ヨルの精霊術を食べる能力。

軍隊には、精霊術部隊が絶対にある。ヨルは、実質それらの部隊を機能停止にしてしまおう。

ナハティガルのところに乗り込むのに、これ以上心強いものはない。

そんな事を考えていると、空からミラを呼ぶ声が聞こえた。

「何だあ?」

ホームズはレイアに呆れるのを中断すると、声のした方、つまり、空を見上げる。

正体は、あつさりと分かった。

何故なら、空から、銀色長髪の男がダイブしてきたからだ。

「うわあー危ないなあ、君ー」

ホームズは思わず、その男に文句を言う。

「ミラ様。……そのお姿、再び立ち上がる事が出来たのですね」

「お、無視かい?」

しかし、その男はホームズの文句を無視してミラに話し掛ける。

危うく踏まれかけたホームズは、額に青筋を浮かべながら、文句を言う。

しかし、男は手を恭しく、自分の前で重ねていてホームズの顔を見ていない為、ホームズの苛立ちに気付かない。

しかし、そんなホームズに構わず、ジュードは男に尋ねる。

「イバル……どうして？」

ジュードはその男、イバルを見て不思議そうだ。

「誰なの？」

「ミラの巫女なんだ」

レイアの質問にジュードは答える。

「この子なにしているんだい？」

「僕に聞かれても……」

ホームズの質問には答えられない。

そんな彼らに構わずイバルはミラに言葉を投げかける。

「ミラ様。足が治ったのであれば、村へお戻り下さい。ミラ様に何かあれば俺は……」

「私はイル・ファンに向かわねばならん。今は戻る気はない」

イバルの言葉をミラは間髪いれずに断る。

しかし、それで食い下がるイバルではない。

「では、俺もお供を」

「必要ない。皆がいる」

ミラは静かに言う。けれどもイバルは不満そうだ。

「しかし、こんな奴らなど……」

「随分な挨拶だなあ、ニンゲン」

イバルの言葉にヨルは挑発する様に言う。

ヨルの言葉を聞き、イバルは目を丸くする。

その目に映るのは恐怖の色。

ミラの巫女である、イバルはもちろん、ヨルに関する言い伝えを知っている。

普通なら、逃げてしまいたいところだ。しかし、そんな事はミラの巫女の誇りに賭け

てイバル本人が許さない。

「そうか……お前が……」

恐怖の色を決意の色に変えるとイバルは双剣を構える。

『お前、何故ここにいる』とは聞かない。聞くだけ無駄だからな。……何故、ミラ様

という？」

ミラだってヨルが何者なのか知っているはずだ。

それなのに、ヨルはミラの側にいる。

ヨルは、そんなイバルを馬鹿にする様にため息を一つ吐く。

「お前らは揃いも揃って、礼儀と言うものを知らないらしいな」

ヨルがそう言うと、突然ヨルの尻尾が二つに裂け、蛇のように伸びていき、イバルの

双剣を絡みとってしまった。

「な……………」

「最初からやり直せ、ニンゲン。気分次第じゃ、答えてやる」

突然の事に驚いているイバルに、ヨルは、見下す様に命令する。

その言い草が更に腹立たしかつたのだろう。イバルは更に敵意を込めた目で見ていく。

そして、その敵意はホームズにも、伝染した。

「お前が、この化け物の封印を解いたのか？」

「ん？ああ、まあね。そうだよ」

ヨルとイバルの争いをそろそろ止めようとした、矢先、突然話題を振られてホームズは驚いた。

「お前、分かっているのか！お前一人の下らない欲望のせいで、リーゼマクシアが、再び危機に瀕しているのだぞ！」

イバルの剣幕に、エリーゼは少し、ビクツとする。ホームズの願い事を知っているレイアは、逆に少し眉を顰める。

ホームズはドウドウとイバルを手で制して言う。

「まあ、ほら、リーゼマクシアの危機を救う為にも、おれは今ミラと旅をしてる訳だし

……それで、手打ちって事で……ね？」

嘘は言っていない。確かに両親の故郷への行き方を知りたい、というのが主だが、リーゼマクシアを憂う心も、もちろんあるのだ。

「そんな胡散臭い笑顔で言われて、納得行くか！今この場で引導を渡してやる！」
ホームズにビシッと指を突きつける。

イバルに思わずたじろぎながら、ヨルの方を見る。

「ヨル、その剣を返さないでくれよ」

「それは、フリか？」

「……随分と下らない事を言ってくるじゃないか」

目の前にいる男によりも肩にいる猫にホームズは殺意を覚える。

一瞬、ホームズはイバルから、注意を外した。

その瞬間を逃す、イバルではない。マクスウエルの巫女がその程度な訳がない。

更に言うなら、ホームズの言い分を聞くほど、落ち着きはない。

イバルは拳を固めるとそのままホームズの顔面に向かって放つ。

ホームズもまさか、攻撃をされるとは思っていなかった。何せ、イバルの武器はヨルが持っているのだ。ヨルに攻撃がいく事はあってもホームズにいく訳がない。

完全に不意をつかれたホームズは派手に吹き飛ばす。そのまま仰向けに倒れた。

『「ホームズ！」』

エリーゼとティポは思わずそう叫んでいた。

傍目から見ても、無事ではすまないような威力だ。

「エリーゼさん！治療を！」

「おいおい、大丈夫かよ……」

ローエンはエリーゼに指示を飛ばす。アルヴィンも柄にもなく、驚いているようだ。

「イバル！」

ミラは語気を強くして、イバルを叱りつける。

イバルとしては褒められこそすれ、まさか、叱られるとは思っていなかったのだろう。

イバルは突き出した拳を仕舞うとそのまま、気まずそうにしている。

ミラがイバルを叱りつけ、エリーゼが治療をし、アルヴィンとローエンが心配している。

そんな中、ジュードとレイアは、微妙な顔をしている。

ホームズは確かに派手に飛んだ。

イバルの拳は文句無く、ホームズの顔面を捉えていた。

しかし、飛び過ぎだ。どう考えても。

つまり……

「タイミング合わせて後ろに飛んだね、ホームズ」
レイアとジュードは声を揃えて、倒れているホームズを見る。

「簡単に種明かしをしないでおくれよ、2人共」

ホームズは空に向かって両足を上げるとその勢いで、ぴよんと立ち上がる。
立ち上がったホームズの姿は、薄汚れてこそいるが、無傷だった。

「なん………で?」

『どゆことー!』

エリーゼとティポは目をパチクリしている。

ローエンとアルヴィンは納得したようで、少し苦笑いをしている。

「つまりね、攻撃のタイミングに合わせて後ろに下がるとね、ダメージが半減されるんだよ」

理解の出来ていないエリーゼにジュードは解説をする。

レイアは隣で頷いている。武術を習っていた2人にとっては割と当たり前の事だ。
なのだが……

「全くダメージを受けてないって、どういう事？」

レイアは、引きつりながら尋ねる。

「失礼だなあ、そんな化け物を見るみたいな目をして……こう見えてもハエがとまつたぐらいのダメージあるんだよ」

ホームズはお約束の胡散臭い笑顔をしながら言う。

確かにイバルの攻撃は予想していなかった。

しかし、だからと言って、攻撃が避けられないかと言えばそうではない。

なにせ、

「もつと、酷い不意打ちを何発もらったからねえ？」

そう言って、アルヴィンをジロリと見る。まさか、上から弾丸が降ってくるとは思わなかった。

当の本人は素知らぬ顔をして、口笛を吹いている。

「お前が余計なことをするから、俺まで飛ぶ羽目になっただろうが」

ヨルは白い歯を見せながら爪を出し威嚇をする。

戦闘開始となれば、迷わずに突っ込んでいくだろう。

ヨルの言葉を聞き、イバルはもう一度構え直す。

そんなイバルをミラは静かにたしなめる。

「イバル、よせ。昔はともかく、ヨルは今、心強い仲間だ。それに、私が再び歩けるようになったのも、レイアとジュードのお陰だ」

「……おれは？ 精霊の化石の発掘されるところを教えてあげたけど……」
尋ねるホームズ。

「ああ、そう言えばそうだったな」

そう、フェルガナ鉱山での活躍が特に無いから、忘れがちだが、そもそも、情報を持ってきたのは、ホームズである。

すっかり忘れられていたホームズは、空を見上げている。涙が零れないように注意しながら。

「だからな、彼らは信頼出来る者たちだ」

ミラは、そうまとめる。

「なっ……ジュード……」

そう言うのと、イバルはワナワナと震えている。そんなイバルから、ジュードは後ずさりをする。

「あ、あの、レイアです。ど、どうも」

紹介されたレイアはイバルに恐る恐る挨拶をする。さつき、ためらいもなく、ホームズを殴ったことを忘れるレイアではない。しかし、そんなレイアの挨拶も虚しく、イバルは何の反応も示さず、まだワナワナと震えている。

レイアはジュードの両脇に行く。

「な、なんか、怖い人だね」

ジュードは少し苦笑いをする。

イバルは自分を落ち着ける様に目を閉じて上を向く。

「ミラ様を治すという約束は守ったようだな」

ジュードの方を向き直ると、イバルはそう言った。

「うん、約束通り、ミラを歩けるようにしたよ」

しかし、その言葉が気に入らなかつたようで、イバルはジュードに指を突きつけて言う。

「貴様の成果のように語るなっ！クツソッ。俺が治すはずだったのにいい！」

イバルの心からの叫びが響き渡る。本当に凄く悔しそうだ。しかし、やかましい事この上ない。

ヨルとホームズは半眼になって、そんなイバルを眺めている。

「い、い、いめん」

ジュードも引きながら謝る。

それに気を良くしたのか、更にイバルは身振り手振りで、言葉が続ける。

「そうだ。謝れ偽物。誤って死んでしまえ！」

「に、偽物ですか？」

エリーゼはジュードに尋ねる。ジュードは何と無く目を逸らす。何てつたて説明するの疲れなのだ。

「ジュードさんのお知り合いの方は、あらゆる意味で個性的ですね」

その言葉に、ホームズはレイアを、レイアはホームズとヨルを見る。

「おたくら、2人もだからな……て、何だその驚いた顔は！どう考えたってそうだろう！」

信じられないと言う顔をアルヴェインに向ける、レイアとホームズにアルヴェインが突っ込む。

「イバル。お前には大事な命を与えた筈だ。何故ここにいる」

ミラはイバルに背を向けると腕を組んで、怒った様子にいう。

すると、すぐさまミラの目の前に跳躍し、そのまま土下座した。

「ジャンピング土下座……」

ホームズは思わずこぼす。

「わたし、始めて見たよ……」

「そう？おれは、割と見たよ。母さんに『許してくれ』て。死ぬ気でやっているのを」
「なにをしたの？」

「泥棒。母さんの商品に盗みを働いた連中は、皆一樣にそれで許しを請うていたよ」
「……………突っ込まないでよくよ」

ボソボソとホームズとレイアは口に手を当てながら話している。

「む、村の守りは忘れておりません。お預かりした物も、誰も知らぬ場所に隠し、無事です」

アルヴェインの目が少し、鋭くなる。

それを見逃すヨルではない。

（ほう……腹に一物と言う奴か）

残念ながら、ホームズはイバルの方を見ていて気付かない。

「しかし、この度はことのような物が届いたのです」

そう言つて顔を上げず、イバルは、手紙をミラに渡す。

ミラは手紙を読み上げる。

『『マクスウェルが危機。助けが必要。急がれたし』』

「突然、俺の元にこれだけが届けられ、ようやくミラ様を見つけ出したのです」
そして、顔を上げ、ホームズとヨルを睨む。

「そしたら、案の定伝説の化け物を連れた愚か者がいる……」

突然話を振られたホームズはヨルの方を見る。

「伝説の化け物だつてさ」

「愚か者だつてな」

お互いがお互いを馬鹿にする様に言うとそのまま、掴み合いが始まった。

「やめなよ……」

レイアは呆れながら止める。

ジュードは頬が引きつるのを感じながら考える。

「誰だろう？こんな事をしたの？」

「さてな……」

ミラは、顎に手を当てて少し考えた後そう答える。

「どちらにせよ、間違いだ。危機など訪れていな……」

ミラは、イバルの後ろを見て固まる。

ミラの視線の先には、イバルの後ろから土煙を上げ、猪の様な魔物が真つ直ぐに突進して来ていた。

「逃げろ、イバル！」

そう叫ぶとミラは横によけた。

しかし、ミラの突然の言葉に何とか立てたイバルは、そのまま無様に引かれていた。

その魔物は、イバルだけでは満足せずに、ミラ達一行にも襲う腹づもりの様だ。

ミラ達の方に向き直ると、そのまま直進してきた。

「バツチリ訪れてるじゃないか、ミラ様」

ホームズは顔の引きつりを感じながら、言う。その魔物はデカイことこの上なかつた。

「ふむ。これが『嘘から出た真』と言う奴だな」

「賢くなったようで嬉しいよ」

そう言つて、再び突進を始めている魔物を見る。

「お前の旅立ちは、いつも幸先が悪いな」

「基本的に、その八割は君のせいだよ。ヨル。」

イバルに殴られたのも、ジュード達に殺されかけたのも、全部ヨルが喋った事が原因

だ。

船酔いをし、イバルに殴られ、拳匂、魔物に襲われる……

「神様つてのにおれは、どうも嫌われてるみたいだね……」

戦いのゴングが高らかに鳴り響いた。

後悔役に立たず

「ジュード、このコの弱点は？」

「水属性だよ」

「一応聞くけど……」

イノシシの様な敵つい魔物、ブルータルをホームズは見る。

「精霊術は使うかい？」

「使う様に見える？」

ホームズは、ヨルの方を見る。

「何だその役立たずを見る様な目は？俺の技は、精霊術を食うだけじゃないぞ」

「あの黒い球だせる？」

「……無理だな」

ヨルは悔しそうに言う。

今空には、お天道様が輝いている。ヨルの得意な暗い場所ではない。精霊術が、食えない以上マナを補給する事も出来ない。

「今回は、正真正銘の役立たずだねえ」

ホームズはため息を一つ吐く。

すると、それを合図に魔物が襲いかかってきた。

「ホームズ！」

ジュードが、ホームズに叫ぶ。

魔物は、ホームズの目前に迫ろうとしていた。

しかし、彼に迫り着く事は無かった。

無言で、一旦後ろを向きそこから、ポンチョを広げる様に振り向く。そして、その勢

いを利用して、回し踵蹴りを魔物の顔面に決める。

魔物は、蹴飛ばされた方向に仰け反る。

どうやら、耐えきれなかった様だ。

しかし、すぐに持ち直すと、ホームズを睨みつける。

「……なんだかエラく怒ってるよ」

「顔が命だったんだろ」

「この顔で？」

「んな事言ってる場合じゃねーだろ！前見ろ、前！」

魔物を指でさししながらヨルに顔を向けて、聞いているホームズに、アルヴィンの突っ

込みが冴える。

アルヴェインのいう通り、魔物はホームズ目掛けて一直線に走ってきた。

「悲壮靈活！クイツクネス！」

ホームズの身体が身軽になる。

「レイア!?!」

突然の事に驚いたホームズは、思わず原因^{レイア}を見る。

しかし、気を取られているのもそれまでだ。

ホームズは、目前に迫った魔物に目線を戻すと、ポンチョを翻し、紙一重で右に避ける。

「サンキュー。助かったよ、レイア」

「どういたしまして」

一言レイアに礼を言うとホームズは、輝き始めた、リリアルオーブを見る。

「やっぱりおたくも持ってたのか……」

アルヴェインは納得する様にホームズを見ている。

そういうアルヴェインのリリアルオーブも輝き始めた。

それを確認すると、ホームズはニヤリと笑い、アルヴェインに向かって駆け出した。

「頼むよ」

「人使いの荒いこった」

ホームズからの要求にアルヴィンは、ため息を一つ吐くとホームズを大剣で、高々と打ち上げた。

「飛天衝星駆!!」

そして、天高くからの飛び蹴りを又してもブルータルの顔面にきめた。

今回の攻撃は、さつきと比べ、かなり聞いていようだ。頭をフラフラとしている。

「まさか、ここまで綺麗に共鳴術技リソナンスアーツが決まるとは思わなかったよ」

「……ぶつつけ本番とか、達が悪いにも程があんだろ」

呑気な事を言っているホームズに、アルヴィンはため息を吐いている。

なにせ、2人は実質会ってまだ二日経った言っているのかどうかさえ、微妙なのだ。

息が合わない事の方が珍しくない。

「ちつつち。甘いぜ、アルヴィン。常に本番と言う心意気でいかなくちや」

「まあ、一理あるな」

ホームズの指を振りながらの動作に若干イラツとしながらもアルヴィンは、同意する。

「それに」

「それに?」

ホームズは、なおも言葉を続ける。

「おれの辞書にリハーサルの文字はないんだ」

「今すぐ買い換えて来い、そんな不良品」

ホームズのドヤ顔にアルヴィンは間髪入れずに突っ込む。

「……オイ、ジジイ！何か策はあるのか！」

2人の会話に構わずヨルはローエンに怒鳴り散らす。

エリーゼとティポは、その言い草に少しむっとした顔をしたが、ローエンは気にする事なく、指示をだす。

「ミラさんと私で水属性の精霊術を食らわします。

他の皆さんは、あの右手に見える大きな岩に誘導して下さい。

エリーゼさんとレイアさんは、誘導しつつ、状況見ながら、皆さんを回復してあげて下さい」

「了解」

ローエンの指示にそれぞれがそれぞれの返事をする、ブルータルに向かって言った。

まず、攻撃を仕掛けたのはアルヴィンだ。銃口を魔物に合わせると、引き金を引く。

「ヴァリアブルトリガー！」

ただの弾丸より遥かに威力のある物を魔物は、モロに食らい少し後ろに下がる。そし

て、そこに、

「瞬迅脚！」

追撃をかけるようにホームズの飛び蹴りが、炸裂する。

ホームズは、蹴りを当てた箇所から、バク転をし、地面に降りる。そして、足を踏み替え、

「輪舞旋風！」

回し蹴りを放つ。連続の攻撃で、身体のバランスの崩れていた、ブルータルは、今の回し蹴りで、転がった。

その転がった先はローエンの指示した、岩の所だった。

しかし、精霊術の詠唱はまだ終わっていない。おまけにまた直ぐに移動しそうだ。

ホームズは体制を立て直している最中なので、間に合わない。

「転泡！」

そんな状況を救ったのはジュードだ。ジュードの下段蹴りが、ブルータルの足を捉える。

それに足を取られたブルータルは、そのまま再び転けた。

それが合図だった。

ミラとローエンの詠唱が完成した。

「スプラッシュユ！」

「ブルースファイア！」

水瓶の水と水泡が、ブルータルに全て降り注ぐ。

「ブモオオオオオ!?!」

頭から苦手な水をかぶったブルータルは、そのまま一目散に逃げて行った。

「あが……………」

なんの役にも立たなかったイバルは、空いた口がふさがらない。

去りゆくブルータルの後ろ姿を見送ると、ホームズはドカッと地べたに座った。

「ふう、やれやれ」

安心しているホームズとは対象的に、アルヴィンとローエンの顔は険しい。

「地霊プララン小節に入って地場ラノームになったから、大人しくなったんじゃないのか？」

「そのはずですが、まさか……!」

心当たりがある様で、ローエンは空を見上げる。

「四大様が、お姿を消した所為で靈勢がほとんど変化しなくなっているんだ」
イバルが今の状況を説明する。

「それじゃあ、ファイザバード沼野を抜けてイル・ファンに行くなんて……」

「不可能だよ。アレを抜けるなんて、無理とか無茶とか、それどころの騒ぎじゃない
ぜ」

ジュードの呟く様な言葉にホームズは、立ち上がりながら渋い顔をする。昔、通った事のある身としては、そう言わざるをえない。

今でも、なんで生きているのか、よくわからないレベルなのだ。

完全に手詰まりになってしまった。

皆がそれぞれ、渋い表情をしている中、イバルは、バカにした様に言葉を発する。

「ファイザバード沼野を超える? くくく……ハハハッハッハ、これは笑える。こうなつては、ワイバーンでもない限り、イル・ファンには、行けないな」

「……ワイバーン?」

「……ヨル?」

ワイバーンという単語にヨルは反応する。

「昔、俺を攻撃する時に人間共が乗っていた」

さらりと、出てくる人間との争いの歴史にジュード達はなんとも言えない顔をする。ホームズは、慣れっこなのでなんの反応もしない。

「乗り物なのかい？」

「まあ、そんなところだ。ところで、オイ、クソ巫女」

「ク……クソ！」

今にも殴りかかりそうなイバルに、ヨルは冷めた目で一瞥をくれると、質問をする。

「ワイバーンは、今どこにいる」

その言葉を聞いた瞬間イバルは、さつきまでとは、打って変わって大威張りに胸をそらした。

「俺にだけ、使えるワイバーンが一頭だけいる。

ミラ様と2人だけなら、イル・ファンに行けるぞ！」

「阿呆のデートプランなんざどうでもいい。他の方法を教えろ」

得意満面のイバルの言葉を切り捨てると、ヨルはさらに聞く。

しかし、その言葉は、巫女という仕事を誇りに思っている、イバルの琴線に触れたようだ。顔を真っ赤にして、ぶるぶると震えながら、ヨルに向かって口を開く

「貴様侮辱するつもりか!」

「むしろ、褒めるところを教えて欲しい物だ」

そんなイバルをヨルは、鼻を鳴らして小馬鹿にする。

「その辺にしときなよ、ヨル」

いい加減、そろそろ殴ってきそうなのでヨルを止める。

「お前はそうは思わないのか、ホームズ?」

「……おれにふらないでくれよ」

ホームズは、答えづらい問いに、頬を引きつらせる。

「まあ、でもさ、イバルだっけ?他に方法はないのかい?」

ホームズの言葉にイバルは、答えなかった。

しかし、逸らした目が、何よりも雄弁に語っていた。

そして、それを見逃すミラではない。

「あるのだな。話せ」

ミラに問い詰められて、イバルは、目どころか顔を逸らす。

そして、悔しそうに答える。

「シヤン・ドウの魔物を操る種族が、数頭管理していると聞きます!」

「シヤン……ドウ?」

ホームズは、目を丸くする。

そんなホームズに気づかずアルヴィンは口を開く。

「次の行き先が決まったな」

「ええ、このままシャン・ドウに向かいましょう」

アルヴィンの言葉にローエンは賛同する。

「助かった、イバル。……………イバル？」

ミラの感謝の言葉にもイバルは答えない。

ミラの巫女は、イバル一人。

しかし、今、その役目を果たすのは、自分ではなく、ジュード達なのだ。

イバルは、その悔しさを押し殺す様に震えている。

「……………行こっか」

「そうだね……………」

レイアとジュードは、なんとなく察し、他のメンバーもそれに習う様に歩きだした。

「ところで、ホームズ」

「なんだい？」

歩き始めると、レイアは最後尾にいたホームズに尋ねる。

「シヤン・ドウに何かあるの？ さつき、明らかに反応が違ったよね」
言った瞬間レイアは後悔した。

ホームズのピンと立った人差し指がその証拠だ。

「内緒。男は秘密があった方が恰好いいからね」

久しぶりに聞いたそのセリフに、レイアは大きなため息を吐く。

無駄な事をした後の徒労感に勝てるものがあるだろうか？ いや、ない。

レイアは、今まさにそれを感じていた。

「いつか、話してくれるよね」

「……気が向いたらね」

ホームズはウインクを一つすると、そう返した。

レイアは、またため息を大きく一つ吐くと前の方に戻って行った。

「……逃げ切れないもんだね、過去からは」

ホームズは、進行方向を向きながら呟く。

「起きた事は、記憶であれ、傷跡であれ、記録であれ、歴史であれ、残っていくものだ。

それが、過ぎ去った時間、過去ってものだ」

「……つまり？」

「起きた事は変えられない。そんな物との接し方なんて、背負うか向き合うか、ぐらい

しかないんだよ」

「忘れるって選択肢は？」

「過去を忘れても、過去に起こった事はなかった事にはならない。そんな事、お前が一番知ってるだろ」

「まあね」

ホームズは肩を竦めながら答える。

ヨルは気だるそうにそう答える。

「分かっているさ、百も承知だよ。なんとなく、いい機会だから君の意見を聞いてみたかったんだよ」

ホームズは、ふふふと笑って空を見上げた。ヨルは後ろにいる、イバルを見つめる。

どうやら、手紙を読んでいる様だ。

(さてさて、あの阿呆はどうなるかねえ)

イバルを眺めていたヨルは心の中で呟いた。

『過去から、逃げ切るなんて不可能だよ』

『それが、巨大であればある程ね』

『まあ、だから、前を向いていくしかないんだよ』

ヨルは、ホームズ母の言葉を頭の中に思い浮かべながら、ホームズの横顔を見据えた。

一期一会じゃ終わらない

「ここが、シャン・ドウ？」

ジュードは、物珍しそうに街を眺めている。

「はい。ア・ジュールは古くから部族間の戦乱が耐えなかつた為、この様な場所に街を作つたそうです」

ローエンは、丁寧に説明する。

ミラはその説明を聞きあたりを眺める。

「人間が、生き生きしているな。祭りでもあるのか？」

「さあ？ 気になるなら聞いてみれば？」

ホームズは、ミラの質問にそう返す。

そんなホームズをからかう様にアルヴィンは、口を開く

「随分とそつけない返事だな。そんなんじや、女の子にモテないぜ」

「祭りがあるんじゃないかな」

「ここまで来るといつそ清々しいね……」

ホームズの対応の違いにレイアは、呆れている。

「まあでも、ロクな情報をくれないところが、ホームズらしいね」
精霊の化石の件をふと思ひ出し、ジュードは、ポロツとこぼす。

ホームズは、見事に心をえぐられ暗い顔をしている。

「……後で覚えてなよ」

「お前こそ、忘れてるんじゃないだろうな、ホームズ」

突然、ジュード達ではない腹の底から、響く様な声がホームズの後ろから聞こえる。
ホームズは、さつきまで顔にあつた黒い影と血の気が、一気に引く。

まるで、錆びた歯車の様な音が聞こえてきそうな程ゆつくりとホームズは、顔を後ろに向ける。

そして、予想通りの顔を確認する。

「お、お久しぶりです。マーロウさん……」

「オウ！久しぶりだ……な！」

ホームズの挨拶に返しながら、ホームズの頭にゲンコツを落とす。

「~~~~~！」

ホームズは、声にならない声をあげながらゴロゴロと地面を転がる。

ヨルは避難した様で地面に降り立っている。

そんなヨルにレイアは、身を屈めて、尋ねる。

「だれ？」

「こいつが、世話になった人間だ」

そう言われて改めて、レイアは、改めてその人物を見る。

年齢は、50代前後だろうか、体があつしりとしていて判別しづらい。浅黒い肌と後ろに束ねた、白髪が印象的だ。

黒い瞳をホームズに一旦向けると、ジュード達の方を向く。口に加えていたキセルを大きく吸って、煙を吐き出す。

「と、驚かせて悪かったな。こうでもしねえと、このガキなんの挨拶もせずに出て行きそうなんだな」

そう言うのとホームズの首根っこを掴む。

「つーわけだ、こいつを少し借りてくぜ。おい、ヨル。お前も来い」

「どういう訳なんだよ……」

ヨルは、そう、もらすと後をついて行った。

ジュード達は、マールロウと呼ばれた男がホームズを連れ去るのを呆然としながら見ていた。

「嵐の様な人だね」

ジュードは、皆の感想を代表して、言った。



「ほれ、好きなどころに座れ」

「……そりやどうも」

ホームズは、先程殴られた頭をなでながら、適当に椅子を見つけて座る。

マールウは、顔に似合わない綺麗なティーカップを二つ用意する。

「で、なんのようす？ おれだって、暇じゃないんです。用件をさつさと言って下さい」

マールウは、ティーカップにお茶を注ぐ手を止め、怪訝そうな顔を浮かべる。

「……かわいげのねえガキだな、もう少し愛想良くしろ」

「お小遣いちょうだい、おじいちゃん」

酒瓶が、ホームズの頭をかすめる。

「次は当てるぞ」

半端ない凄みにホームズは、ホールドアップをする。

マールウは、キセルの灰を落とす。

「いくつか、言いたい事と聞きたい事がある」

ホームズは、目を鋭くする。

「どうも、ここ最近アルクノアの動きが激しい」

「……相変わらず、何処でそんな情報仕入れてるんです？」

ホームズは、やれやれという風に言う。

普通アルクノアの存在自体をあまり知らない。

まあ、ホームズの母がバラしたのだが、

「企業秘密だ」

「いつから、情報屋になったんだ」

ヨルが突っ込む。この男は、ただのまとめ役だ。

「まあ、冗談はともかく。それが、どうも気になってな。警戒してたのよ。で……」

マールロウは、ホームズにキセルを向ける。

「そんな矢先にお前らが来た。無関係と言うには、少し無理があるだろ」

「なぜ来たか答えると？」

ホームズは、口を開く。

「察しがいいじゃねーか。言つとくが、隠し事するんじゃねーぞ」

そう言うのと酒瓶を手取る。

「ワイバーンを借りに来たんですよ」

次の瞬間、再び酒瓶が飛んで来た。

ホームズは、首を振ってかわす。

そのせいでヨルに当たりそうになったが、尻尾でそらす。

「隠し事するなつつたよな」

「嘘は言っていないですよ」

「本当の事もな。そういうところ、母親にそっくりだ」

マールロウは、キセルを口にくわえる。

ホームズは、顎に手を当てると話始めた。

イル・フアンの事、クルスニクの槍の事、霊勢が変化しなくなった為、ファイザバード沼野を越えられなくなった事、そして、ミラの事、報酬の事。

「なるほど、だから、ワイバーンが必要な訳か……しかし、まあ、驚いたな。あの金髪
のねーちゃんが、マクスウエルだったとは」

ふう、とマールロウは口から煙を吐き出す。

「とりあえず、合点がいった。アルクノアが活発になったのはそういう訳か……」
「多分」

ホームズは、頷いて、紅茶を飲む。

アルクノアにとって、マクスウエルは、憎むべき敵であり、倒す事が目的だ。

「しっかし、ラシユガルの王様がそんな物を作つてたとは……お前もまた、メンドクさい事に首を突っ込んだな……」

「いつもの事です」

ホームズは、肩を竦めて返す。

そして、今度はホームズの方から質問をする。

「話は、それで全部です?」

マーロウは、眉を少し上げる。

「ん、まあ、後は報告みたいなものだ。とりあえず、頼まれた事は何とかこなしている。心配するな」

「さすが」

ホームズは、素直に褒める。

そんなホームズにマーロウは、少し渋い顔をする。

「会つてかなくていいのか?」

「……この街には、一応立ち入り禁止の身ですよ、おれは」

ホームズは、少し寂しそうに言う。

「それに、向こうも、おれも10年も経つてれば分かりませんよ」

ホームズの言葉を黙って聞いていたマーロウは、煙を一つ吐くと口を開いた。

「まあ、お前に任せるがね……ワイバーンの件だが、俺の部族のものじゃない。キタル族のものだ。」

だから、交渉ならそつちとしな」

「りよーかいです」

ホームズは、そういうと席を立ち、ヨルを肩に乗せて扉の所まで歩いて行つた。

「ホームズ」

出ようとすると、マーロウから、声がかかる。

「また来い」

「立ち入り禁止は？」

「誰もお前の事なんて分からんさ。年寄りの茶飲み相手にでもなつてくれ」

ホームズは、微笑む。

「考えて起きます」

そう言つて、ホームズはマーロウの部屋から出て行つた。

「向こうだつて覚えていないか……はてさて、どうだろうな」

マーロウは、すっかり冷えた紅茶を飲んでつぶやいた。



「アルクノアが活発化ねえ……」

「お前も他人事じゃないだろ」

そう、ホームズは不可抗力とはいえ、いくつかアルクノアの拠点を潰している。

「前にも言っただろう？ エレンピオスの話を聞きに行くと彼らが、君に驚いて襲って来るんだもの。死にたくないから、抵抗するしかないだろう？」

ホームズとしては、正当防衛を主張するそうだ。

しかし、潰す事は正当防衛とは、言えない。過剰防衛だ。

そんな事を話していると、向こうから、ジュード達が歩いてくるのが見えた。

向こうも、ホームズ達を発見した様だ。

ホームズ目掛けて、真っ直ぐにティポが飛んで来た。

『どこ言つてたのさ。こつちはとても大変だったんだぞ！ ジュード君達がいたから良かったようなものを！』

余りの剣幕にホームズは、少したじろぐ。

「何があつたんだい、ジュード？」

「……ホームズが、連れていかれた後ね、岩が僕らに落ちて来たんだ」

ホームズの脳裏に蘇るのは、先程のマーロウの言葉だ。

『ここ最近アルクノアの動きが激しい』

「穏やかじゃないね」

ホームズは、少し顔を険しくして言う。

ヨルはヨルで何かを探す様に、当たりを見回している。

「おい、あのチャラ男はどうした？」

「チャラ男って……アルヴィンの事？」

相変わらずな人の呼び名に、ジュードは、引きつり笑いをしている。

「アルヴィンなら、ホームズ達が連れてかれて、すぐに何処か行ったよ」

「……ほう」

ヨルは、何か考えがある様に、目を細める。

「ま、アルヴィンはともかく、君たちは、何をしているんだい？」

ホームズは、ヨルの様子を少し気にしながら、ジュードに尋ねる。

「この先にワイバーンがいるらしいからね、見に行こうと思って」

その話を聞いて、ホームズは思い出した様に言う。

「そう言えば、マールロウさんが言っていたけど、ワイバーンは、キタル族の持ち物だつ

てさ」

「なるほど、何処かでキタル族を見つけたら交渉してみましよう」

ローエンは、顎の髭を触りながら言う。

出来れば、族長、いや、それに相当する地位の人間に話を通したいところだ。

「ここで、話をしていても仕方ないし……とりあえず、現物だけでも見に行こうよ」

「それもそうだね」

レイアの提案に賛成して、ホームズが、歩き出そうとしたその時、

「みくつくけくたく！」

長い黒い髪を後ろに束ねた女に、ホームズは飛び蹴りを食らった。

「くくくつ！何？」

ホームズは、自分に飛び蹴りをかました女を見る。

黒い長い髪に、黒い瞳。分かりづらいが、少しつり上がっている。

羽織の様なデザインのを羽織っており、袴を動きやすい様に足の方で縛っている。

『また来るよ』なんて言つといて、よくもまあ、これだけ待たせたもんね。一体どの

ツラ下げて来たの？」

「知り合い?」

レイアがホームズにボソボソと聞く。

「知らない」

ホームズは、蹴られた腹をなでながら、答える。

そして、飛び蹴り女の方に向き直る。

「あの、誰かと勘違いしていいない。例えば、元彼とか」

「は?」

ホームズの言葉にギロリと目で返す。

その迫力にビビりながらも、ホームズは、何とか続ける。

「いや、だっておれ達初対面だもん。絶対勘違いしてるって。

その、なんだ、君が過去に何があったかは知らないけどさ、とりあえず、見ず知らず

の他人に蹴りをかました事は、謝ろうか」

ホームズとしては、出来るだけ穏やかに言うが、言葉を言えばいう程彼女の顔は、赤

くなっていく。

「いや、そんなに顔を真っ赤にして、恥ずかしがらなくても……」

いいよ、と言うホームズのセリフを女は鉄拳で遮る。

「怒りで顔が赤くなる事もあるのよ」

地の底から、響き渡る様な声で言う。

そして、ビシツとホームズを指差す。

「茶髪！アホ毛！たれ目！さらに喋る猫！そして……」

女はホームズの碧い目に指先を向ける。

「見間違う事なき、綺麗な碧い目！ゴッゴッどう考えても貴方でしょう、ホームズ」

ホームズは、目を丸くしてその女をまじまじと見る。

そして、震える指を彼女に向けながら、信じられないという風に言う。

「ローズ……？？」

「久しぶり、ホームズ」

ローズは、しかめっ面をしながら、手をあげる。

また、一波乱ありそうだ

ジュード達は心の中でため息を吐いた。

女の顔は三度もない

「えーつと、この子は……」

「いい。自分の名前ぐらい自分で名乗れるわ」

そう言つてホームズを遮ると、ローズは、ジュード達に名乗る。

「私の名前は、ローズ。ローズ・クリステイ。生まれも育ちもこの街よ。ホームズとは、昔一緒に遊んだ仲よ」

「ホームズの幼馴染み？」

「まあ、そんなところね」

それに反応する様にそれぞれが、自己紹介を始める。

そんな中ホームズは、ため息を吐く。

「ヨル……君、気づいていただろう。彼女が、ローズだつて」

「当然だ」

ニヤリと笑いながらヨルは、ホームズにそう返す。

この騒動に発展する事を楽しんでいたのである。

「さて、私の存在をすっかり忘れていた、馬鹿はどこどのどいつかな？」

自己紹介を終えたローズは、ホームズの方をジロリと睨む。

ホームズは、目の前で手を降りなが、弁明する。

「いや、別に忘れてた訳じゃないよ。ただ、10年も会ってなかったら、誰だか分からなかっただけだよ」

「ローズさんは、気付いていたようですよ」

ローエンの言葉にホームズは、押し黙る。

レイアは、それらの会話を聞きながら、考えていた。

「もしかして、ホームズの目の色を褒めた女の子って……ローズ？」

「ん、まあね」

ホームズは、軽めに答える。

ローズは、その言葉を聞いて、眉をピクリと動かす。

「ふむ。思い出話に花が咲いているところ悪いが、そろそろ行かないか」

ミラは組んでいた腕をほどいて言う。

「どこへ行くこうとしているの？」

「ワイバーンのところだ」

「だったら私も付いて行くわ、どうせ暇だし」

ローズは、そう言うと、歩き始めた。

「いや、来なくていいよ。だいたい、なにしに行くんだい？」

「観光客を案内するのに理由がある？」

ホームズは、思わず苦笑いする。

そう、傍から見ればホームズは、ともかく、ジュード達は、ただの観光客なのだ。

「ほら、ついて来て」

彼女に言われるがままに、彼らは付いて行つた。



「それにしてもさ、『また来るよ』とか言つといて、全然来なかつたよね」

「いいじゃないか別に……また、来ただろう？」

「10年も経つてるけどね」

ホームズの弁明に、にべもなく返す、ローズ。

「……もしかして、怒ってる？」

「笑っているように見える？」

とてもいい笑顔で、ホームズを見る。

(やばい、目が笑ってない……)

ホームズは、顔を青くする。

「(ヘルプー……)」

ホームズは、目でジュード達に助けを求める。

しかし、ことごとく目を逸らされてしまう。

「おい、ヨルどうにかしておくれよ」

「(阿呆！お前のせいだろうが！俺の方こそ、巻き込まれていい迷惑だ)」

誰にも助けて貰えないホームズは、肩にいるヨルに助けを求める。

しかし、ヨルとしてもこんな面倒臭い事はごめんなのだ。

「(なに、他人事の様に見えるんだい！4割程君のせいだろう！何で、分かった癖

に彼女が、ローズだって言わなかったんだ！)」

「(面白そうだから)」

「(このクソ猫！)」

小声で醜い言い争いをする、ヨルとホームズ。

その様子をジュード達は、眺めている。

「ちよつと、レイア、いい加減ホームズを助けてあげたら」

「いや、あれは無理でしょ……」

絶対零度を醸し出しているローズを見て、レイアは言う。

『でもさく、友達だつて気づかなかつたんだから、当たり前と言えば当たり前だよ
ねー』

「ティポ！」

ティポの無遠慮な一言をエリーゼが、たしなめる。

「ま、ここがホームズさんの正念場ですね」

「楽しそうに見えるのは、気のせいか？ ローエン」

ミラの言葉にローエンは、なにも言わない代わりに、とても楽しそうに笑っている。

「だいたい、なんで顔を出さなかつたのよ」

「いや、そのね、母さんが、商売のルート変更しちやつたからさあ。しょうがなかつたんだよ」

「どう思う、レイア？」

ジュードは、小声でレイアに尋ねる。

「嘘じゃないと思うよ。何てつたつて、ホームズのいい所は、嘘をつかない所だもん」

「悪い所は？」

「本当の事を言わない所」

「……………てことは、今回も……………」

そう、今回も嘘は、言っていない。

もつとも、ルート変更した理由は、シャン・ドウに親子揃って立ち入り禁止になったからなのだが……………

「ふうん……………まあ、いいけど」

少し胡散臭そうに、ホームズをローズは見る。

「……………と、着いたわ。コレがワイバーンよ」

そこには、翼の生えた生物がいた。

「なるほど。空を飛んで行くのか……………」

ホームズは、ポツリと呟く。

そんな中、ティポが調子に乗って檻のそばまで近づき、見事に威嚇されている。

驚いた、ティポは、そのまま、ジュードにかぶり付く。

そんなコントをローズは、笑いながら見ている。

「やっとなめてくれた……………」

「良かったね、ホームズ」

げんなりしながら言うホームズをレイアは、ねぎらう。

待つてる事の多かったレイアとしては、自業自得の様な気もするが、それでもホームズの様子を見ればそう言わざるを得なかった。

「君達、ワイバーンの檻の前で何をしている。それは、我らキタル族のものだ」
そんなホームズ達に、キタル族の民族衣装と思われる衣装に身を包んだ三人組が、近づいて来る。

(ラツキー♪)

ホームズは、内心でほくそ笑んだ。

いきなり交渉の機会が、チャンスやってきたのだ。これを逃す手はない。

ワイバーンを見に行ったら、キタル族も来た。まさにカモがねぎを背負って来たというやつだ。

「このワイバーンを手に入れたい。どうやって檻を破壊しようか考えている」

しかし、ミラのこの一言により、カモがねぎをを背負って逃げていきそうになる。

「な……………?!」

思わず、身構えるキタル族達。ローズも腰に有る二刀に手をかける。

「ち、ちよつと、ミラ……」

レイアは慌てる。

「ローズ、君も落ち着いて……彼女、別に悪気があつて言つてる訳じゃないんだよ」
ホームズも、どうにかこうにかローズを宥めようとする。

「ホームズ、あなた達は、一体何しにきたの？」

ギロリと今にも刀を抜きそうな勢いで、ホームズを睨むローズ。

「ワイバーンを借りに来たんだよ。ね、ジュード」

結局、ジュードに丸投げしたホームズのため息を一つ吐いて、ジュードが説明する。

「あの……ワイバーンを貸してもらつてできませんか？」

ジュードの説明に一人のキタル族の男が、食つてかかる。

「いきなり何を言い出すんだ。……こんな事をしている場合じゃない。早く代表者を

見つけないと」

その様を一通り眺めたミラは、ワイバーンの方に向き直り、ひと睨みする。

すると、ワイバーンは、今まで上げていた首を下げ、服従の様子を示す。

キタル族とローズは、目を見張る。

「嘘でしょ……獣隷術を使わずにワイバーンを服従させるなんて……」

ローズがただ、驚いている中、キタル族のもう一人の男は何か思索している。

「この人達ならひよつとして……」

「まさか、この人達を？本気なの？」

対する女性は、信じられないという風に聞き返す。

その男は、頷くとミラ達に顔を向ける。

「私は、キタル族のユルゲンス。街が賑わっているのには、気付いたか？」

「ええ、まあ」

ユルゲンスの言葉にホームズは、返事をする。

「実は、十年に一度、部族間で行われる闘技大会が、明日開催される」

（そりゃあ、賑やかになるわけだ……）

ホームズは、一人納得していた。

一応、ホームズは、ここに来た事がある。なので、この大会がどれ程重要なものかという事も知っている。

「だが、我がキタル族は、唯一の武闘派である族長が、王に使えているため、参加出来ないのだ。伝統ある我が部族が、戦わずして負けてしまう」

「そりゃあ、災難ですね……」

ホームズの相づちに、ユルゲンスは少し微笑んで頷く。そして、ミラを見る。

「君には何か特別な力を感じる。どうだ、我々の一員として、大会に参加してみないか

？」

「はいはい！参加します」

ユルゲンスの提案に、レイアは迷わず、そして、間髪いれずに手を上げた。

「レイア……」

ジュードは、呆れ顔だ。

「君はもう少し先の事を考えて行動した方がいいね……」

ホームズからも釘を刺され、レイアは気まずそうに笑いながら頭をかく。

「参加するれば、この者たちを貸して貰えるのか？」

ミラは、そこが重要だとばかりに尋ねる。

「もちろん、そのつもりだ」

ユルゲンスは、ミラの質問にそう答える。

「ただし、優勝が条件だ」

その一言を加えて。

「足元見やがって……」

「聞こえるよ、ヨル。もう少し気を遣っておくれ」

ヨルの悪態をホームズは、宥める。

ユルゲンスは、ヨルの悪態に気付かず、そのまま続ける。

「それと、事前に君達の実力を見せて貰おう」

その言葉を聞き、レイアは、段々とテンションがあがってきている。

「ミラ、いいよね？」

「うむ、ワイバーンを手に入れる為だ」

レイアは、ミラのその一言で、押し殺していたテンションが、表に出てきた。

「やった〜！闘技大会なんてもえるな〜」

レイアの上がつているテンションとは、対象的にジュードは首を傾げている。

「でも、部族の大会に僕達が出ちやつて大丈夫なんですか？」

ジュードの問いに、もう一人のキタル族の男が答える。

「問題ない。優秀な戦士を連れて来る事は、部族の地位を高める行為として、過去にも会ったことだ」

「ははっ。また、随分とテキトーだねえ」

アルヴィンが、ひよっこりやって来て、なかなか失礼な事を言う。

そんな彼にホームズは、肩を竦める。

「別に、そうでもないんじゃない？強い戦士とやらを連れてくるのもある意味、実力つ

て奴だよ」

「モノは言いようだな」

「まあね」

「2人とも……」

ホームズもホームズでなかなか、失礼なことを言っているので、今度はジュードが注意する。

「しつかし、まあ、少し目を離れた隙に面白そうな事に首突っ込んでえ……おまけに美人まで増えてるし」

そう言つて、アルヴィンは、ローズを見る。

ローズは、にっこりと笑つて胸の前に手を当てる。

「お褒めの言葉どうも。私は、ローズ・クリステイ。ホームズとは、昔馴染みというか、幼馴染みというか……まあ、そんな関係。貴方は？」

突然の自己紹介に少し、面食らいながらも、アルヴィンも自己紹介をする。

「俺の名前は、アルヴィン。ホームズとは、同じ旅をする仲間つてところかな。な、

ホームズ？」

「そうだねえ……ま、そんなところかな」

ホームズは、何とも言えない表情で、アルヴィンに言う。

アルヴィンには、前の戦闘で、殺されなかったのだ。まだ、過ぎた日が浅いので、自信をもって言い切れない。

「つれない返事の仕方だねえ……一緒に繋がった仲じゃないか」

「また、随分と誤解を招く言い方だねえ……ただの、共鳴術技リンクアーツだろうに」

ホームズは、引きつりながら、アルヴィンを見る。

アルヴィンは、肩を竦めている。

「ま、それはともかく……俺も混ぜてくれないのかあ？」

そんな軽い調子のアルヴィンにティポが、声を荒げる。

『どこ行つてたんだよ……こちとら、恐怖体験してたんだぞー！』

「わりーわりー」

でも、こうして何かあったと思ってすぐ駆けつけた訳だし、勘弁してくれよ、な」

顔の近くで、チョイツと手を振るとアルヴィンは、そう言った。

そんなアルヴィンを見て、ユルゲンスがジュード達に聞く。

「で、結局彼は仲間か？」

「そうだけ。これで全員集合」

ユルゲンスは、アルヴィンの返答に納得すると、言葉が続けた。

「では、力を見せてもらおう。空中闘技場に来てくれ」

「分かりました」

ジュードは、返事をする。

ユルゲンス達は、ジュードの返事をきき、恐らく準備のためだろう、早々にその場から去った。

完全に姿が、見えなくなると、ローズが、ホームズに掴みかかった。

「?!どうしたのさ?」

「……普通の人間は、ワイバーンなんて欲しがらない。おまけに獣隷術なしで従わせるなんて、まず無理」

一つずつ確認する様に喋るローズ。口調が荒い。恐らくホームズが迂闊な返答をすれば、鉄拳制裁が飛んでくるだろう。

ローズは、胸ぐらを一層力強く掴み上げる。

「そんな人達と、貴方は今一緒にいる……答えて、ホームズ! 貴方は、何に関わろうとしているの!」

口調は確かに荒い。しかし、ホームズを心配しての事なのだろう。

その気持ちは嬉しいが、あまり、クルスニクの槍の事をべらべらと喋るわけには、いかない。

「……つつ、とりあえず、離しておくれよ」

「貴方が、話してくれたらね」

「それは、難しいねえ」

つまり、話す気はない、という事だ。

「……！」

ローズからの鉄拳制裁が飛んでくる。

ホームズは、顔面にモロに食らい、地面に落とされる。

「痛いなあ……」

唇を切ったようでホームズは、ポンチョで拭っている。

そんな事をしていると、再び胸ぐらを掴まれて、立たされる。

「もう一度聞いわ、貴方は何に関わろうとしているの？」

「内緒。男は秘密があつた方が恰好いいからね」

ホームズは、あくまで言う気はない。

ある程度事情を知っているマールロウならともかく、何も知らないローズに話すのは、得策ではない。

「——！」

「もうよせ。私が話す」

再び拳を固めるローズをミラが止める。

「ミラ、やめたほうがいいんじゃない？」

ホームズは、不安そうに聞く。

「危機を知らせるのに洩る理由はない。お前が話しづらいなら、マクスウェルである私が話そう」

そう言つて、ミラはローズに説明をした。

◇◇◇◇

「なるほど、理解したわ」

ミラから簡単な説明（アルクノアとエレンピオス抜き）を聞いたローズは、そう頷いた。

「で、そんな大事な事を貴方は私に黙ってたわけね」

「言う訳にいかないだろう。国家レベルの話だよ……マールロウさんならともかく、君みたいな無関係の一般人に言えるもんか」

ホームズの言い分をローズは、刀の柄をコンコンと指で二回程叩きながら、聞く。

その後しばらく思索する。

そして、おもむろに口を開く

「……そうね………だったら、私もその旅に着いて行くわ」

「……………は？」

ローズの思いもよらない答えに、ホームズは、聞き返す。

「それで、私も無関係の一般人ではなくなる。いくらでも、話ができる。これで文句ないでしょう、ホームズ」

「……………いや、何を言ってるんだい？」

ローズのむちやくちやな言い分にホームズは、ドン引きしている。

「ラシユガルの王様が、そんな兵器を作ってる、なんて、ア・ジュールにしてみれば、脅威。付いて行かない理由の方が無いわ」

「ふむ。ならば、お前も私達と来るか、ローズ」

「さつきから、そう言ってるでしょう、マクスウエル様」

ローズは、イタズラっぽくウインクして答える。

その後、ジュード達の方にくるつと振り返る。

「そゆわけだから、みんな、これからよろしく」

突然の仲間入りにミラ以外は、言葉を失っている。

「ホームズ……」

ジュードは、いつも言われているセリフをホームズに言う。

「君の幼馴染みどうにかならない？」

「出来たら苦労しないよ……」

ホームズは、痛む頭を押さえながら言った。

立てば綽々、座れば牡丹、暴れる姿は赤い薔薇

「つまり、マールロウさんから、俺が来ている事を聞いた、と」

「そよ」

「だから、どこにいるのか、さがしていた、と」

「そよ」

ホームズは、襲ってくる頭痛を押さえる。

道理で、タイミング良くローズに会うはずである。

「あの野郎……」

ホームズは、ため息を吐く。

とりあえず、文句を言わねば気が済まない。

具体的な方法は、腹に飛び蹴りで、いいだろう。

ホームズは、そう考えるとミラ達に言う。

「とりあえず、マールロウさんのところに行つてくるよ。ミラ達は先に行つておくれ。用事を済ませたらすぐに行くから」

言い終えるとホームズは、ミラ達の返事も聞かず、ヨルを肩に寄せ走り出した。

「分かったと言ってないのだが……」

ミラはポツリと言う。

「とうか、何しに言ったのでしょうか？まあ、予想はつきませんが……」

ローエンは、髭を触っている。

「大方、マールロウさんに、飛び蹴りでもかまそうとしてるんでしょ。どうせ、返り討ちに合うのが関の山だろうけどね」

ローズは、ひらひらと手を振りながら答える。

「ま、馬鹿はほつといて、とつと闘技場に行きましょう」

「………ローズも出るの？」

「当たり前でしょ。そうしないとワイバーンには乗れない。乗れないと旅についていけない」

レイアの質問にローズは、答えながら、屋台で売っている串焼きを2本買う。

「なら、どうすればいいか」

そう言つて、一本をレイアに投げて寄越す。

多少危なっかつしかつたが、どうにかキャッチする。

「考えるまでもないでしょう？」

言いながら串焼きにかぶりつくローズ。

『エリー達にはくれないの?』

「勘弁してね。そこまで、私にお金の余裕はないの」

「だったら、何でわたしだけ?」

レイアの疑問に、ローズは少しためらって話す。

「んー……お礼と、前払いつてところかな」

「お礼と……前払い?」

「そ」

ローズは、そう言うのとパクパクと串焼きを一気に食べる。

「ホームズにとつてこの街は、余りいい思い出のある街じゃない」

「……もしかして、ホームズの言っていた街って、ここ?」

いい思い出がないという事から、ジュードは、予想する。

「そ。大正解。ここは、幼いホームズを死ぬほどいじめ抜いた街よ」

レイアは、やっぱりと言う顔をする。

そもそも、ホームズの瞳の色を褒めた女の子に、出会ったのは、2回目に訪れた時だと言っていた。

つまり、ホームズの瞳の色を褒めた女の子、ローズ・クリステイがいる時点で、それは、わかりきっていた事なのだ。

「……レイア、もしかして気付いてた？」

ジュードは、鋭く察知する。さすが、幼馴染みと言ったところだ。

「うん、ホームズの目の色を褒めたローズがいるんだもん。そうかな、と思うには、充分だよ」

ローズは、レイアの言葉に笑みを浮かべる。

「そこまで、知っているなら、話は早いね」

「話が見えないのですが……」

ローエンが、エリーゼ達を代表して、言う。

「まあ、あれよ。ホームズは、昔靈力野がない事^{ゲイト}で散々いじめられていたんだよ」

「とはいえ、行商人の母親の面子もあるから、やり返す訳にもいかない。そんな訳で、この街にいる間は、ずっとそれに耐える事しか出来なかつたのさ」

ホームズが話してくれた内容をローズは、簡潔にまとめる。

「そんな過去があるからさ、この街から、離れた後どうしてるか気になっていただけど……」

ローズは、レイアを見る。

「？」

「友達と仲良くやっているようで安心したよ」

「わたし?」

レイアは、突然話を振られて驚いている。

「そうでしょう? だって、目の色を褒められた事を話す程だもん仲がいいんじゃないの?」

そう、ホームズはいじめられた事は、ジュード達にも話したが、瞳の色を褒められた事を話したのは、レイアだけなのだ。

まあ、レイアしか聞かなかったのだが……

「じゃあ、お礼って……」

「そ。あんな性格がお世辞にもいいとは言えない奴と、友達になってくれた事に対してよ」

ローズはにっこりと笑っている。

「本当に心配だったんだよ。あんな性格だし、喋る猫を連れてるし、^{ゲート}靈力野はないし、正直また、ロクな目にあつてないんじゃないかと思つていたのよ」

ジュード、アルヴィン、エリーゼのホームズを殺しかけた、連中は、気まずそうに目をそらす。

ミラはそんな事お構いなしに、ローズをまつすぐ見ている。

「そんなホームズが、友達を連れて来た。こんなに嬉しい事はないわ。ま、一番仲が良

いのが、女の子って言うのが、気に食わないけど……」

ローズは、とても嬉しそうにそう、はなした。

レイアは、その様子を見ていてこっちまで笑顔になってきた。

「ホームズの事心配してたんだね」

「まあね」

そんな微笑ましい光景の中、ミラが一つ爆弾を放り込む。

「今、『一番仲が良いのが、女の子って言うのが、気に食わない』と言っていたが……あれはどういう事だ？」

ローズは、ミラの言葉に笑顔が凍り付く。

そして、皆から目を逸らす。

「……………言つてない」

さつきまでの、滑らかな喋りからは、想像も出来ないボソツとした、テンションだった。

それを聞いて、ジュードとミラ以外は、みんなは何と無く理解した。

(10年も待ってたんだもん。その結果の再会が、あれじゃあ怒るのも無理はないよ)

レイアは、心の中でため息を吐いた。

「いやー確かに言ったよねえ、だって、俺聞いたもん。な、優等生、お前もそうだろう？」

しかし、すべて、察しているアルヴィンは、心の中だけでなく、ニヤニヤしながら、ローズをからかっている。

ローズの顔はどんどん赤くなっていく。

「えっ？ん、まあ、いったたと思うけど……」

まだ、イマイチ、ピンときていないジュードは、アルヴィンの問いに戸惑いながらもそう答える。

「……言っていない」

顔を真っ赤にしながら、説得力ゼロの言葉を言う。

しかし、アルヴィンは畳み掛ける。

「いやいや、ジュードだって、ミラだって聞いてるんだぜ。言っていない、なんて事はないだろう。」

というわけで、ミラ様の質問にそろそろ答えてあげたら」

「アルヴィン……その辺にしとかないと……」

「言っていないったら、言っていない！」

「ぶふおおー！」

「鉄拳制裁を受けるよつて……遅かったか……」

身長差があつた為顔に手が届かなかつたので、腹にパンチを食らわしていた。アルヴィンは、辛そうに腹を押さえている。

『ザマミロー』

「自業自得です」

ローエンと、タイプに冷たい言葉を投げられる。

肩で息をしながら、ローズは続ける。

「そんな事一言も言つてない！」

「分かつたから、落ち着いて……」

レイアが、必死になだめる。

「結局どういう事なのだ？」

ミラは、近くに漂っていたタイプに聞く。

『ヤキモチ焼いちやつ……ふぐうー！』

すぐさま、タイプを締め上げるローズ。

「ああ、タイプー！」

エリーゼが、びっくりしている。

「わー、ローズ！ストップストップ！」

レイアは、必死にローズを止めるが、後ろでまた不吉な声が聞こえる。

「ふむ、もしかして、じえらしいという奴か？」

「ああ、そうか、レイアと仲が良いってのが、少し気に食わなかったんだ」

「——！」

「落ち着いて！」

デリカシーのない、ジユードとミラに掴みかかりそうなローズをレイアは、羽交い締めにして止める。

「だって、だって……」

「わかったから……」

顔を真っ赤にしているローズを何とかなだめる。

そして、レイアは言葉を続ける。

「とりあえず、ホームズとわたしは、友達。それに変わりはないよ」

ローズは、一瞬太陽のような笑顔をするが、直ぐに元に戻る。

「……別にそれを私に言わなくてもいいんじゃない？」

どうでもいい様に言うローズ。

声は弾んでいるのだが……

(メンドくさい子だなあ……)

レイアは、少し頭痛がしてきた。

しかし、ローズも大分落ち着いてきた。このまま何事もなくていいのだが……

「もしや、ローズが付いて行きたい理由とは、ホームズか？」

ミラが再びぶっこんできた。

ローズは、再度顔を赤くするが、さつきとは、打って変わって冷静に言う。

「……それが全部で訳じゃないわ」

(((認めたな……)))

ジュード達は心の中で突っ込んだ。

しかし、ローズの口調は、真剣そのものだ。

「クルスニクの槍は、兵器。だから、その使い道なんてア・ジュールとの戦争以外に

ないわ」

顔の赤みも大分引いて来て、まっすぐと、ミラをみている。

「マクスウェルが、危ないと思うものを私達に向かって使わせる訳にはいかない」

拳をさらに強く握る。

「だから、ついてく。文句は、言わせない」

さつきまでの色恋沙汰で、大慌てしていた彼女とは、比べものにならない程の顔つき

になった。

「分かった。頼りにしているよ、ローズ」

「任せて」

にっこりと笑うローズ。

「まあ、でも、ついて来た理由の何割かは、ホームズなんだろう」

アルヴィンの余計な一言で、ローズの笑顔が凍り付く。

今にもアルヴィンに掴みかかりそうなローズをレイアは、止める。

「落ち着いて！大丈夫！大丈夫だから」

「ふむ、そうだな。レイアも似たようなもふぐう」

今度はレイアが、慌てる番だ。

レイアは、ミラの口を慌てて押さえる。

「ちよつ、レイア！ローズを離すなああああ！」

レイアの拘束から、解放されたローズは、そのままアルヴィンに飛び蹴りをかます。

「……………関係なくはないかもしれない」

飛び蹴りをかました後、肩で息をしながら言うローズ。

「えーつと…………どつち？」

顔赤くしたまま、ジュードから、顔を逸らすローズ。

一方レイアは、

「別にいいだろう。ホームズが、理由な訳ではないのだから……」

「わかった！わかったから！ストップ！」

顔を赤くしながら、ミラを止めていた。

エリーゼは、巻き込まれない様にするので、精一杯だ。

「みなさん、お若いですね」

ローエンは、微笑みながら、ポツリと言った。

◇◇◇◇

「遅かったかじゃないか……」

疲れ切った顔をした面々を見ながらホームズは聞く。

ホームズは、ジュード達より先に闘技場についていた。

「こつちにも色々事情があるんだよ……ていうか、どうしたの、ほっぺ？」

レイアの指差す、ホームズの頬には、湿布が貼ってある。

「マーロウさんに飛び蹴りをしようとしたら、返り討ちに合った」

「ね。私の言った通りだったでしょ」

ローズは、得意満面に言う。

「君は、そのドヤ顔を今直ぐ引つ込めたまえ。それよりも、何かあったのかい、レイア？みんな随分疲れてるけど……」

「ああ、気にしないで。年頃の女の子に悩みは尽きないんだよ」

「ふーん？ミラは、何か知ってるかい？」

話を振られたミラは、苦笑いをする。

「まあ、色々だ」

「おたく、何でローズには聞かないんだ？」

「……………あ」

ついさつき思いついた様に手をポンと叩くとローズに聞く。

「何があつたんだい？」

「……………私これでも17歳で、年頃なんだけど、忘れてたね？」

ローズは、ギロリと睨む。

「（17歳だったんだ。てつきり同い年かと…………）」

「（ホームズといい、ローズといいどうして年上に見えないんだろ？）」

「（見える様な振る舞いをしてないからじゃねーの）」

「(それだ!)」

レイア、ジユード、アルヴィンは、小声でボソボソと話し合っていた。

「デリカシーがないにも程があるわね。そんなだからモテないのよ」

「……何か言い返したらどうだホームズ」

「グウの音もでないよ。ていうか、ピンポイントで、人の心抉ってきたんだけど……」
ヨルの言葉に涙声で返すホームズ。

「まあ、ホームズがモテないのはいつもの事だ。そんな事より、とつと力試しとやらをやつてしまおう。ユルゲンス、頼む」

ミラは、さらに傷付いたホームズを放置して、ユルゲンスに言う。

「いいのか?」一応獣隷術で、魔物を制御し、危険のない様にするが、それでも何が起るか分からないんだぞ。何だかみんな疲れてる様だし、もう少し休んでから……」

「疲れたからこそ、早く終わらせたい。頼む」

ミラが間髪居れずに、言うところユルゲンスは、ため息を吐いて闘技場へと通した。



「わあ！立派な舞台だね」

舞台上立つとレイアは、感嘆の声を上げる。

円の床。そして、それを取り囲む様に掘りがあり、そして、そこでの戦いを全ての方
向から、見える様に客席がぐるっと取り囲んでいる。

「あんまりはしやがないでよ」

ジュードが、レイアに注意する。さっきの落石で、重くはないにしろ、レイアは怪我
を負ったのだ。

レイアは、ジュードのその物言い、げんなりする。

「男なんだからさ、もつとこう、燃え来たぜー！みたいなのないの？」

「ないよそんなの」

レイアの力説は、ジュードの『そんなの』の一言で、済ませれてしまった。

「ホームズ、貴方もよ」

ローズは、キョロキョロしているホームズに注意する。

「そわそわしてる君に言われたくないね」

しかし、半眼でローズに返す。

ローズは、気まずそうに目を逸らす。

「それより、怪我は大丈夫？」

「え……うん」

そんなホームズ達に構わずジュードは、レイアに尋ねる。

レイアは、唐突に聞かれて少し戸惑ったようだ。

そして、ニコツと笑って腰に手を当てて朗らかに言う。

「それに、こんな状況になったら治らざるを得ないでしょ」

そんな会話をしていると、ユルゲンスが、ミラに尋ねる。

「そろそろ始めてもいいか？」

「ああ。始めてくれ」

「それじゃあ、私達は、客席で見させてもらうよ」

ミラの言葉にっこりとするとユルゲンスは、客席に登って行った。

彼らが、客席に上がるとホームズ達が逃げられない様に、跳ね橋が上がり、向こうか

ら魔物、ランドーゴブリンが4匹やって来た。

それらを確認すると、各々が、それぞれの武器を構える。

「へえー二刀流かい？ ローズ」

「見ての通りよ」

ホームズの問いにローズは、当たり前のように言う。

「足を引っ張るなよ、小娘」

ヨルの言葉に皮肉っぽい笑みを浮かべると、

「貴方の相棒に言つといて頂戴」

さりげなく、ホームズを口撃した。

「別に相棒じゃない」

心底嫌そうにヨルは、否定する。

「出来ればもう一つの方も否定して欲しかったなあ……………」

ホームズは、ため息を一つ吐くと、魔物に向かって駆け出した。

いつかの敵は、今日も敵

「ちやつちやつと片付けれるわ」

ローズは、ニヤリと笑い、二刀を構える。

「魔人剣・双牙！」

二つの刀から、斬撃が二つ発生し、ランドーゴブリンを捉える。

ローズの攻撃を食らったランドーゴブリンは、動きを止める。

ローズは、一気に間合いを詰めると、右の刀で薙ぎ払い、魔物に一旦背を向ける。そして、振り返りざまに左のもう一刀で、斬りつける。

「おお、おお。おたくの幼馴染みエラク張り切ってるじゃないの」
アルヴィンは感心する様にホームズに言う。

「そうだねえ。……まあ、彼女だけじゃないけど……」

そう言って他の連中に目を向けるホームズ。
皆各々の技をぶつけている。

特に、

『ネガティブゲート!』

エリーゼとティポのコンビの精霊術は、圧巻だ。

「……やつば連れて来て正解だよね」

ホームズは、ボソツと言う。

「そりゃあ、なあ。我らのお姫様を甘く見てもらっちゃあ困るぜ」

アルヴィンのセリフにホームズは、肩を竦めて答える。

アルヴィンは、それを見てホームズに言う。

「さてと、俺らも行きますか。仕事するのは、信用が第一だからな」

アルヴィンが、いたずらっぽい笑みを浮かべるとホームズも同じ様な笑みを浮かべ

る。

「……報酬分は働くのが、プロってもんだねえ」

「そうゆうこと。話が早くて助かるよ」

そう言うのと、ホームズとアルヴィンは駆け出した。

「ジュード!この子弱点は?」

「火だよ。ついでに言うなら、精霊術も使うよ」

「なるほどね」

ホームズは、走りながら呟く。

ランドーゴブリンは、今まさに精霊術を発動させようとしていた。

「ヨル、君の出番だよ」

「言われなくても……な」

一言そう言うと、ヨルは巨大な生首になり、精霊術を丸呑みした。

「倍にして返す！ヨル！」

「やかましい！命令するな！」

悪態を尽きながらもヨルは、黒い球を吐き出す。

それは、ホームズは、蹴り飛ばし黒い煙のような、影のようなものを靴に纏う。

そのまま勢いを殺さずに、ランドーゴブリンの顔面に回し蹴りを叩き込む。

「グゲー！」

大きく吹き飛んだランドーゴブリンは、そのまま数頭を巻き込んで倒れる。

ふうつと一息吐いたホームズの後ろから、もう一頭が近づいて来る。

「ヴァリアブルトリガー！」

アルヴェインは、その魔物を察知すると、ホームズに向かって弾丸を放った。

ホームズは、それを首をふってよける。ホームズに当たらなかった弾丸は、今にも飛

びかかろうとした、ランドーゴブリンの顔面のど真ん中に当たる。

突然の死角からの攻撃にランドーゴブリンは、大きく後ろに吹き飛ぶ。

「……随分と危ない攻撃をするじゃないか、アルヴィン」

「よく言うぜ。余裕綽々でかわしやがって」

「髪的先焦げたんだけど……」

ホームズは、耳の横の髪の毛を見る。いつもの茶髪が少し黒ずんでいる。

「まあ、無事だったんだから、いいだろ」

「まあね……」

ホームズは、ため息混じりに言う。とジュードとミラを見る。

「後は頼んだよ、お二人さん」

ジュードとミラが共鳴リソクしている。

「任せろ！行くぞジュード！」

「分かった」

みんなが一箇所に集めたランドーゴブリンの中で、2人は背中合わせで構える。

2人を中心として、段々と温度が上がっていく。

「炎穿陣！」

そして、巨大な炎の円陣が、現れる。

炎が弱点のランドーゴブリン達は堪らずに倒れていった。

円陣が、消える頃立っている魔物は一匹もいなかった。

「お疲れ様」

ホームズは、微笑みながら2人に言う。

「いやあ、危なくなったら出て行こうかと思っていたが、そんな心配なかったな」
ユルゲンス達もやって来た。

ティポは、ふわふわとユルゲンスの前にやって来る。

『あつたりまえだよー。えっへん』

ティポは、大威張りだ。

「ははは、すまない。君を見くびっていたようだ」

ユルゲンスのこの一言にティポは、不服そうだ。

『僕だけー?』

「ハハハ。誰が見たってそうだよなあ」

よせば良いのに余計なことを言うアルヴェイン。

そんなアルヴィンにエリーゼは、ご立腹だ。

「むー。私の友達バカにしないでください」

「ごめんごめん」

アルヴィンは、ニヤニヤ笑いながら謝る。誠意と言うものが全く感じられない。

「だが、それだけ厳しい戦いなんだ」

一旦間を置くとさらに続ける。

「かつては、部族間の優劣を決めるために殺し合うまで戦っていた大会だ」

「え〜!？」

レイアが、驚きの声を上げる。

「今は大丈夫。現ア・ジュール王が、その制度を禁止したからね」

「ア・ジュール王いいひと」

ティポが、見た事もないア・ジュール王を褒める。

「それじゃあ、本戦は明日だ。宿の手配をしたから、ゆっくり休んでくれ」

そう言われ、ジュール達一行は、宿を指す。

「ミラ、ちよつと……」

ホームズは、列から外れてミラを小声で呼ぶ。

「何だ？」

「アルクノアが動いているらしい」

「アルクノアが？」

「うん、だから、気を付けておくれ」

ミラは、無言で頷く

◇◇◇◇

「ぶふあ、いいお湯だった。そして、疲れた〜」

ホームズは、風呂から上がり、部屋に着くとベッドに倒れこんだ。

「ホームズ、大変だったね……」

ジュードは、同情した様に言う。

ローズには、出会い頭に蹴り飛ばされ、マールウとやらには拳骨を落とされ、そして、最終的には、返り討ちに合う。

今日は災難としか言い様がない。

まあ、八割方自業自得なのだが……

「このまま寝れそう」

「ちよつと、まだ寝ないで」

ジュードの言葉に不服そうに目を開けるホームズ。

「なんでさ？」

「アルヴィンが、居ないんだ」

「別にいいだろう。ガキじゃあるまいし」

ホームズは、布団にしがみ付く。

「明日の打ち合わせとかもしないといけません。なので……」

「なので？」

ホームズは、ジュードの言葉を引き継いだローエンに聞く。

「探してくれると助かるのですが……」

「……やだなあ。というか、迷っちゃうかもよ。おれ、ここ十年この街に来てないんだもの」

「そのところは心配いらなんでしょう。貴方は迷わずに私達と合流したのですから。記憶には残っていると思いますよ」

ローエンのもつともな言い分に、屁理屈を封じられたホームズは、ため息を一つ吐くとベッドから立ち上がった。

「行くよ、ヨル」

「雇われの身は辛いな」

馬鹿にする様に鼻で笑ってヨルは言う。

「うるさい」

髭を髭を引っ張るとホームズは、部屋を出て行った。

◇◇◇◇◇

「ホームズ。ローズと買い出しに行つて来て……て、ホームズどこ行ったの？」
ちようど入れ違いで、レイアが入つて来た。

「ホームズなら、アルヴィンを探しに行つたよ。ていうか、レイア、また、変な事考えてるでしょ」

「……………」

「…………目をそらさないの」

ジュードは、呆れている。

◇◇◇◇◇

「さてと、アルヴィンはどこかな。ヨル、なんか気配とかで探せない？」

「奴に靈力野があれば、出来なくもないが……」

アルヴィンには、恐らくないだろうと言うのがホームズの結論だ。

「地道に探すしかないか……」

一体何度吐いたか、分からないため息を吐くと歩き始めた。

すると、橋の上でキセルを吹かしている、マーロウを見つけた。

「マーロウさんじゃないですか、何してるんです？こんなところで？」

「見ての通りだ」

そう言つて煙を吐く。

「お前からこそ、なにしにきた。リベンジか？」

「してもいいですけど、今回はその為に来たわけじゃないです」

ホームズの言葉にマーロウは、くくくつと面白そうに笑う。

「相変わらず、可愛げのねーガキだな」

「ガキじゃないつて言ってるでしょう」

ホームズは、不機嫌そうだ。

一旦深呼吸すると、ホームズはマーロウに尋ねる。

「人を捜してるです。コートを来た大男で、髪の毛が、こんな感じになつてる奴見ませんでした」

身振り手振りで、アルヴィンの髪型を再現するホームズ。

マーロウはキセルを啜えている。そして、

「見たぞ。そいつなら、さっきあの家に入って行ったぞ」

有力な情報をくれた。

「サンキュー。助かりました」

そう言つてホームズは、マーロウのキセルの指した方向に歩き出した。

途中まで、行くところりと振り返る。

「これで、ローズにおれの事を喋った分は、ちゃらにしてあげますよ」

「へいへい。わーつたから、とつと行つて来い」

手でシツシツとやるとマーロウは、再びキセルを啜えた。

◇◇◇

「いいかな?」

ホームズは、恐る恐ると言う感じでノックをする。

「どちらさん?」

アルヴィンの声が聞こえる。

「……えーと、ホームズだけど」

「……ま、入れ」

少しの間が有ったが、アルヴィンが招き入れてくれた。

「失礼しまーす」

ホームズは、恐る恐る部屋に入る。

「あら、ユリウス君。お久しぶり」

ベッドで寝ている女性がホームズに話しかけてきた。

「いや、おれ、ホームズ……」

「待っててね、今ピーチパイを焼くから」

そのくせ、ベッドから起き上がる気配がない。

ホームズは、気付いた。

この女性が普通の状態では、ない事に。

「アルヴィン。この人は……」

「俺のお袋。今日はまだ安定してる方だ」

ホームズは、促させれて椅子に腰掛ける。

ヨルは、その女性を眺めている。

「治る見込みは……なさそうだな」

「さすが、ヨル。言いづらい事をはつきり言うねえ」

アルヴィンは、力無く笑う。

「もう、俺の顔も分かりやしない」

アルヴィンのその言葉にホームズは、やっと口を開く。

「……原因は、やつぱりリーゼ・マクシアに閉じ込められた事かい？」

アルヴィンは、ホームズの言葉に少し笑みを浮かべる。

「やつぱり気付いてたか。……いつからだ？」

「一番最初に君と戦った時だよ。あの時、君が使っていたのは、エレンピオスにある武器だよね」

「正解」

「それと、今言っていた、ピーチパイ。あれは、エレンピオスじゃ、割とポピュラーな家庭のお菓子だ。そうだよね」

「正解」

「証拠と言うには不十分だけど、確信を得るには十分だよ」

ホームズは、そう告げる。その口調には、誇らし気なものなどなにか一つない。

一歩間違えれば、自分の母親もこうなっていたのだ。

他人事ではない。

「さすが。ジュード君程じゃないけど、なかなかの名探偵っぷりだ」
アルヴィンは、からかう様に言う。

「ホームズの名前は伊達じゃないさ」

ホームズもいつもの様に軽口を返すが、いつもの覇気がない。

アルヴィンは、ポツリポツリと話し始める。

「俺達はジルニトラに乗っていた。そして、まあ、知ってるとは思いますが、事故に巻き込まれ、リーゼ・マクシアに閉じ込められた」

ホームズとヨルは黙って聞いている。

「お袋は、帰りたいと願っていた。詳しい事は省くが、段々と心を病んで行って今はこのざまだ」

アルヴィンの話を聞いてホームズは、一つ尋ねる。

これは、絶対に尋ねなければならぬ事だ。

「エレンピオスへの帰り方、君は知ってるよね」

現在分かっているのは、ミラを殺す事だ。

「……………まあな」

アルヴィンは、何の感情も出さずに言う。

ホームズは、そんなアルヴィンを真っ直ぐに見据える。

「おれは、君の事を重要な戦力だとおもってるし、仲間だと思ってる。前はともかく、ね」

「嬉しいこと言ってくれるじゃないか」

笑いながら、言うアルヴィン。しかし、目は笑っていない。

どうやら、アルヴィンは次にホームズが、何を言いたいか、予想できてるようだ。

ホームズもその事は、察している。

「……」

「続きは？」

アルヴィンから、感じる威圧感は、いつもの比ではない。

恐らくこのセリフは、ホームズ自身にも覚悟の必要なセリフだ。

だからこそ、彼にも言わねばならない。

薄暗い部屋の中で、ホームズの目には強い覚悟の炎が宿る。

「君はおれの、いや、おれ達の敵だ。そのぐらいの覚悟を決める事だね」

その時ホームズの威圧感は、普段からは、想像も出来ないものだった。

しかし、アルヴィンは、涼しい顔をしている。

コートの懐に手を入れる。

銃を警戒し、身構えるホームズ。

「そう、身構えるなよ。ただ、届けものを渡すだけだ」

そう言つて、手紙を一通だす。

その手紙をホームズに投げてよこす。

ホームズは、宛名を見ると。渋い顔をする。

ヨルも目を見開いている。

「はいっ……」

「マジかい……」

そして、手紙を読む。顔が強張つていく。

アルヴィンは、少し笑い、ホームズに言う。

「お前も覚悟を決めといった方がいいんじゃないのか」

ホームズは、手紙を読み終えると丁寧に引き裂いてバラバラにする。

「……考えて置くよ」

そう言つて、ホームズは立ち上がる。ドアのノブに手をかけ少し止まる。

「……と、そうだ。明日の打ち合わせをするから、宿に早く来ておくれ、アルヴィン」

さつきまでの調子とは、打つて変わつて軽い調子で言う。

「了解。俺もそろそろ出るから、家の前で待っていてくれ」

アルヴィンは、家というとき少し自嘲気味に笑っていた。
なにせ、ここは、本当の家ではないのだ。

ホームズは、それにはあえて気付かないフリをする。

「分かった。それと、今日の事はなかった事にするよ。まだ、君は行動を起こしていないし、それに………」

「それに？」

「それがお互いの為だろうからね」

そう言ってホームズとヨルはアルヴィンの家を後にした。

ホームズ達が部屋から出ると、アルヴィンは、荷物を纏め、振り返る。

「じゃあ、行って来るよ。母さん」

返事は、もちろん返ってこない。

アルヴィンは、家を後にした。

ガールズトーク

目は口以上にものを言う

「ちえ、ホームズいなかった」

レイアは、口を尖らせながら女子部屋に帰ってきた。

ローズは、そんなレイアを不思議そうに見る。

「レイア、ホームズに何か用でもあったの？」

「んー、私がつていうより、ローズかな？」

「私？」

ローズは、ますます意味がわからないと言う顔をする。

「うん。ローズとホームズで買い出しに行ってもらおうと思ってただけど……」

『わーお、デート？』

ティポは、ニヤリと笑いながら言う。

「デ、デ、デ、デ……」

顔を真っ赤にして、手をブンブン振りまわす。

「落ち着いてローズ！別にそこまで深い事は考えてないから！」

レイアは、ローズに深呼吸をさせる。

「どうやら落ち着いた様だ。」

レイアは、咳払いをすると話始める。

「なんかさあ、ローズ……ホームズとろくな会話してないでしょ」

「づつ……」

殴って、蹴って、悪態ついての大騒ぎだ。

「ふむ、久々に会えて嬉しいのだが、それと同じくらいに怒りと照れが来て、嬉しい気持ちを出せないのか」

「……………いつにない確だね、ミラ……」

余りにも的を得た答えにレイアは、驚いている。というかそれをペラペラと喋るミラに引いている。

「……………」

凶星の様だ。

その証拠にローズの顔は、ゆでダコのように真っ赤になっている。

「だからね、二人で買い出しに行ってもらって、少しは、わだかまりを溶いてもらおうと思っただけだ」

「肝心のホームズがいないと」

「そうなんだよねえ」

レイアは、ため息を吐く。

「き、気持ちちは、有難いんだけど……その、レイアは、自分の事をどうにかしたら、例えばジュードとか」

「別にローズと違って、殴ってもないし、蹴ってもないし、悪態もついてないもん」
心を的確に抉られるローズ。

「言い返す余地がない……」

本当はローズだって、出来れば仲良く話したいのだが、

「何で上手くいかないんだろ……」

「まあ、どっちもどっちだと思うけどね」

どう考えても二人のせいだ。

そんな事を考えているとエリーゼがおずおずとローズに尋ねる。

「あの……ホームズとローズはどんな出会い方をした……んですか？」

「え？」

ローズは、明らかに困った顔をする。

「えーっと、気になる？」

「とても!!」

「何でレイアが即答するの………というか知ってるでしょ」

レイアは、ホームズから話を聞いている。

けれども、

「ローズからも話を聞きたいな」

ローズは、ますます困った顔をする。

そして、ミラの方を見る。

「私も是非知りたいのだが……」

誰も止める人はいない。

もう、ローズは諦めた。

「………分かったわ。それじゃあ、話すわね。出逢ったのは、もう、十年は前の話よ」

ローズは、ため息を吐きながら話し始めた。



樽は、まあ、聞いていたわ。

霊力野がない落ちこぼれ、何をしたってやり返さない言い返さない、まさにストレス

発散の道具って。

私はさ、何か気に食わなかったのよ。

自分よりも下の奴を見て安心しようとする奴も、それに何の反抗もしようとしない奴も。

だから、一言言つてやろうと思つてあつちこつち探し回つたの。

そうこうしてゐるうちに、だんだん情報が集まつてきてね、何とそいつが男で年上だつて事を知つたの。

子供にとつて、年上の存在つて大きいでしょ。

私はますます気に食わなかつたわ。

だつて、自分より年上の男がメソメソしてゐるだなんて、ね。

でもね、いくら探しても見つからないの。

地の利は、こつちにある筈なのにね。

本当に不思議なくらい見つからないのよ。

………て、レイア何か知つてゐみたいね………後で教えて。

ゴホン、話を戻すわ。

まあ、そんな日々が続いたある日よ。

魔物の大群が街に押し寄せると大騒ぎが起つたの。

原因は、ホームズをいじめようと街の外を探していたら、うっかり魔物の巣をつつ

たらしくてね、怒った魔物はそのままこの街に狙いを定めたらしいわ。

その話を聞いた、一人の子供は、直ぐに駆け出した。

街の外に出ようとしてたみたいだから止めようとしたんだけど……直ぐにみえなくなっちゃった。

あの時は、本当に怖かったわ。

それと同時に罰だと思った。

だって、そうでしょう。

この一件は、ホームズをいじめてさえいなかったら、何も起こらなかったのよ。

ホームズをいじめ続け、そして、それを黙認し続けたから、こんな事になったの。

それをやらかした馬鹿どもは、最後まで往生際が悪かったわ。

ホームズが、外に逃げたからこんな事になった。

ホームズが、いじめられてる時に抵抗すれば俺たちはいじめをやめたってね。

流石に大人達も馬鹿じゃないから、全部無視していたけどね

それから、いつまで経っても魔物が来る様子がない。

これは、おかしいってことで大人が一人様子を見に行ったの。

そして、直ぐに戻ってきた。

『魔物が全滅してる！』

みんな耳を疑ったわ。

嘘を言っているんだとみんな思つて外に出て見に行つたの。

私ももちろん見に行つたわ。

そしたら、そこには、ありとあらゆる魔物の死体が山の様にあつた。

何が起こつたのか、それを説明できる奴は、一人もその場には、いなかった。

何だか、とても信じられなくてね、大人達も一生懸命まだ生き残りがいないか探して
いたんだけど、結局見つからなかった。

そこでようやく私達は助かつたんだ、て自覚できた。

みんな安堵して、そして、嬉しそうに帰つていったわ。

その次の日からまた、懲りずに奴らは、ホームズいじめを再開したわ。

でも、そのすぐ後に変な噂が流れ始めたの。

石をホームズに投げただけで、一個も当たらない。いや、正確に言うとな肩にいる黒
猫が全部弾いている、て噂。

馬鹿馬鹿しいと思ったわ、色んな意味で。

そんなある日ね、街の裏通りを歩いていると、膝を抱えて地面に顔を向けている男の子がいたの。

子供用のポンチョを広げて微動だにしなかったわ。

心配になった私は声をかけようとしたの。

すると、多分向こうも気配を感じたんだろうね。

突然頭を上げたわ。

その時、今にも泣きそうな顔で、私を見ていたわ。

一発で分かっていたわ。こいつがホームズだって。でなかったら、あんなに街の人間に怯えないもの。

でね、その時ホームズと目があつたんだけど、なんて言うか、こう、びっくりしたのよ。

なんて、綺麗な碧い目だろう、って。

今まで言うつもりだった文句も、

説教も全然出て来なかった。

そんなでもって、ポロっといっちゃったんだ。

綺麗な碧い目だね、って。

そしたら、ホームズ、すっごい嬉しそうな顔をして言うんだよ。

『本当!』

頷くととても嬉しそうに笑ってね。

ほんと、今じゃ考えられないくらいとても綺麗な笑顔なの。

『嬉しいなあ、君が初めてだよ。ぼくの目の色を褒めてくれたのは。みんな、殆どぼくの目を馬鹿にすることしかないからねえ』

そこで、ようやく、こいつに言つてやろうと思つていた言葉を思い出して、口を開こうとしたら、

『珍しい人間もいるものだな』

肩に乗つていた黒猫、そう、ヨルが口を開いたのよ。

驚いて口をパクパクさせたのを覚えてるわ。

みんなも経験あると思うけど、あの可愛らしい外見から出て来るのは、信じられなくらい低い声なんだもの、そりゃあ、驚くつてもんよ。

『ヨル、人前で喋るなつて言つてるだろう』

『言ってたな、そういえば』

しれつと言うヨルに、ハア、とため息を吐くとホームズは、全部説明してくれたわ。

『じゃあ、あの魔物は、ヨルが全部倒したって事？』

『うん』

『その代わりにヨルに取り憑かれたって事？』

『うん』

『あなたが、ころされると、ヨルが死んで、ヨルがころされると、あなたが死ぬと？』

『うん』

『……………バカじゃないの』

『ひどいなあ。少しは、年上をうやまう気持ちを持ちなよ』

ホームズは、ヘラヘラと喋っていたわ。

友達なんて、一人もない。

味方だって、一人もない。

そんな所を自分の人生を犠牲にしてまで守ったなんて、理解できなかった。

私がそれをやるならまだ分かるのよ。

だって、ここは故郷だもの。

友達もいる、家族もいる。

それを守るってならまだ、分かるでしょ？

だから、ホームズの行動がとも不思議だった。

だから、問い質したんだけど、ホームズは、答えてくれなかったわ…………

『まあ、別にいいじゃないか、そんなことは』
て、感じだね。

余裕で想像がつくでしょ。

幼心に多分答えてくれない事が分かったんだろうね。

だから、別の事を言ったわ。

何で奴らにやり返さないのって…………

ホームズは、一瞬止まったわ。

『ふふふ、はは、ハハハハ!!』

その後は、すぐに大笑いしました。

それは、本当に面白そうに、

そして、耳障りに。

『ふふふ……………何故やり返さないかだって？決まってるだろう、やり返せないからだよ！君、確かあの大通りの所に店を構えている所の娘だろ』

ホームズは、指を向ける。

『ぼくは、商人の息子だ。商人つてのは、お客様第一なんだ。君、まさか、商人の娘のくせにそんな事も知らないのかい？』

立場を自覚しないバカほどたちの悪いものはないね』
カチンと来たね。

どうして、自分がここまで言われなくちやいけないのか、納得が出来なかった。そう思った時には、もう遅かった。

ホームズの顔面を渾身の力を込めて殴っていたわ。

ホームズは、顔面を殴られたつてのに、顔色一つ変えやしなかった。

逆にあの碧い目からは、先ほどまでのキラキラとした輝きが消えていたわ。

あの、人の事を諦めきつたあの顔。今でも、思い出したくないわね。

あれが、初めて、心底、人の事を怖いと思った瞬間だったわ。

『……………ま、いいや』

ホームズは、そんな私をバカにする様に見るとそう呟いて歩き始めたわ。怖かった。でも、気付いたら、ホームズに掴みかかっていたわ。

『どうしてやり返さないの！殴ったんだよ！痛いでしょ？だったら、それ以上に痛い
思いをさせれば、もう、殴られる事もない！』

目の色をバカにされたなら、殴ってしまえばいい！

そうすれば、目の色をバカにされることだってないでしょ！』

ホームズは、つまんなそうに私のの事を見ていたわ。

『きみは、本当に女の子かい？言ってることも、やってることもめちやくちやだ』

的外れな事ばかり、言ってるからもう一発殴ってやっただわ。

ホームズは、拳を受けたまま冷めた様な目を私に向けて口を開いたわ

『……………ま、好きにやっついていておくれよ。きみの気の済むまで…………』

最後の最後まで、本当に腹が立ったわ。

お望み通り、ホームズを思い切り殴り飛ばした。

やるべき事をやった私はそのまま路地裏を後にしたわ。

これが、ホームズとの出会いの話。

どう、満足出来た？

女の武器は涙じゃない。

「え、それが、ホームズとの出会い？」

「うん」

ローズは、さも当然の様に頷く。

「わたし、そんな話聞いてないんだけど……………」

「聞かれなかったら、いわないわよ、あの馬鹿」

間髪入れずに当たり前の様に言う。

「あ、そう……………」

目の色を褒められた話をする時ホームズは、とても嬉しそうに話していた。

だから、レイアは、もう少し甘酸っぱい話が聞けるものと考えていた。

その結果がこれだ。何だか、落胆通り越して疲れが出てきた。

とはいえ、ホームズの言葉だけを聞けばどう考えてもそれ以外考えようがない。

「まあ、ファーストコンタクトはそんな感じだったのよ……………」

ローズ自身は、改めて思い出して引いている。

「ふむ、今と余り変わらない気がするが……………」

「いや、今より大分険悪だよ」

ミラの言葉にレイアが否定する。

何せ、過去の二人は、明らかに両方が毛嫌いしている。

「というより、話盛ってない？ ホームズの話し方、小さい頃からそんな話し方してたの？」

「ええ。ホームズは、昔からずつとこんな感じよ」

レイアは考える。

今でも偶に、ホームズの言い回しにイラつと来る事があるのだ。

その言い回しを子供が使っている。

「仲良くできそうに……ない……です」

エリーゼがポツリと言う。

「しかし、ローズ、お前の言い分は、正しいが、賛成は出来ないな」

ミラは、ローズのホームズに言った言葉を否定する。

「まあね、これを繰り返してれば争いが永遠に消えないもんね」

ローズは肩をすくめる。

「……………それだけじゃなくて、気に食わない事があつたら殴るっていう、思考回路をやめたら？」

レイアの言葉にローズは、気まずそうに目を逸らす。

『でもさあーそんなに仲悪かったのに、どうして仲よくなったのさ?』

ローズは、ぎくりと身体の動きを止める。

「まあ、そのうち言うから………」

ローズは、顔を赤くし出す。そう、ローズは、こつから先の話をしたくなかったのだ。

「何かそういうところ、ホームズそつくりだね」

「このこのはなしには、続きがあつてね………」

ローズは再び話し始めた



私はとても不機嫌だったわ。

良かれと思いやつた事が全て否定されたんだもの。

そんな風にイライラしながら、歩いていたら

『へーい、カノジヨ、どうしたんだい。随分とご機嫌斜めじゃないか』

誰かつて?

私の姉さんよ。

『姉さん……仕事は？』

『今ちようど休みなのだ』

『そうなんだ』

『そうなんだよ。そしたら、ローズちゃんかチンピラの如く肩をいからせ、ものを蹴り飛ばし、舌を打ち鳴らし、痰を吐きながら歩いてきたから、気になって声をかけたのだよ』

『やってないよ、そんな事』

話を盛るにも程があるわ。

『まあ、でも、機嫌が悪いんでしょ？』

にかつと笑うと姉さんは、そう言ったわ。

『うん、結構』

隠してもしようがないので正直に自分の気持ちを言うつと姉さんは、満足そうに私の手を引いて喫茶店に向かった。



『ふーん、つまり、あれでしょ、反省はしている後悔はしていないって奴だよね』

私の話を聞くと姉さんは、そう言ったわ。

『ま、まあ、そうなんだけど……』

何だか言い方に引っかかるの物を感じながら私は答えた。

『私の妹が暴力に目覚めてしまった！何と言う事だ！これは、早く誰かに報告を……』

『しなくていい』

私はこめかみが、ヒクつくのを感じながら、返したわ。

姉さんは、少し残念そうな顔を見ると、頬杖をつきながら口を開いたわ。

『綺麗な碧い瞳の男の子、か……見てみたいわね。我が妹にそこまで言わせるんだから』

姉さんのニヤニヤ顔が凄く腹立たしかったのを覚えているわ。

『ねえ、その子かっこいい？』

『本気で言ってる？』

いじめられて膝を抱えている姿をかっこいいとは、言わない。

顔つきだつて、かっこいいからは、程遠い所にある。寧ろ、可愛らしいと言った方が正しいだろう。

怪訝そうな顔をしている、私に姉さんは、カラカラと笑う。

『まあ、悪い子じゃないと思うけどね』

姉さんは、さらに笑みを深くしていく。

『仲良くしてみたなら？きつとその子は、友達思いだよ。断言してもいい』

『冗談でしょ……あんな訳の分からない奴と仲良くなんて出来ないわよ』

吐き捨てる様に言う姉さんは、笑みを引つ込める。

『まあ、この話はこの辺にして、最初の話に戻そうか……ローズはやり返さないホー
ムズに納得がいけない訳だね』

『うん』

私の返事に姉さんは、話し始めたわ。

『いい事教えてあげる。いじめつてのはね、やり返せない奴をターゲットにするの。
或いは、やり返せないようにいじめるの。』

だからね、ローズの主張は、最初から成り立たないんだよ』

『そう言うもん？』

でも、私はまだ、納得していなかった。

だったら、何故やり返せないんだろう……て、思ってたのよ。

『何故やり返せないのか不思議でしょう？』

姉さんは、心を見透かした様に言って来たわ。

『うん』

『素直でよろしい。では、説明してあげよう』

姉さんは、咳払いをすると話し始めたわ。

『あの子は、行商人の息子。つまり、この街の人間ではない。あっちこつちに旅をしながら、物を売っている、ここまで大丈夫？』

『うん』

『さて、商人にとって、大事な事は、お客様。正確に言うなら、お客様との信頼関係。行商人なら、特にそうだよね。』

身も知らずの信用も出来ない人の物なんて買いたくない。

『そうでしょ？』

『うん』

『さて、では、こうしよう。その例のホームズ君が私の腕を切り落としたしよう』

『例えば、エグいんだけど……』

しかし、姉さんは、どんどん説明を続ける。

『ローズは、その人の母親が売っているものを買いたいと思う？』

ようやく、私は合点が言ったの、その時。

けれど、まだ全部は、納得できていなかった。

『でも、ホームズがいじめられてるんだから……』

『それをいじめっ子の親が信じると思う？どうして、自分の子供よりも、身も知らない、おまけに靈力野ゲイトもない子供を信じるって言うの？』

姉さんの言葉を聞いて、私、目の前が真っ暗になったわ。

自分が如何に考えなしの大馬鹿野郎なのか、その時によく分かった。

『姉さん……』

『なあに？』

『私、酷い事を言った』

『そうだね』

『酷い事でした』

『そうだね……もうすぐ、紅茶が来るけど、どうする？』

『あげる。お礼よ』

『ふふふ、いつてらっしゃい』

私はそのまま後ろを振り返らず走り続けた。

『ま、私のお金だけどね』

姉さんのそんな呟きが聞こえたような気がしたけど取り敢えず無視したわ。さつきの路地裏まで、行ってみたけどいかなかった。

大通りはどう考えたって、いる訳がない。

そう思ってたあっちこっち探したの。

『しっかし、あいつ、さいこーだったよな。いつもの如く、目の色の事、馬鹿にしたら、泣きそうな目になりやがってさ』

突然ね、すれちがった時にそいつの言葉が聞こえたの。

私の脳裏にホームズの言葉が蘇ったわ。

——みんな、殆どぼくの目を馬鹿にすることしかしないからねえ

『あの顔！泣かないように耐えようとしている顔！ほんとにさいこー』

『それは、言える！にしてもよ、金が手に入らなかったのは惜しいよな』

『あ？バカじゃねーの？ちゃんと手に入ったじゃねーか？』

『いや、あいつの持つてるはした金じゃなくて……』

『ああ、母親から金を盗ませる奴か……でも、代わりに土下座つてのが見れたから、いいじゃねーか。おれ、初めて見た』

『おれも！』

『おれも！』

『確かに！』

『まあ、だからって許さねーけどな』

『あれは、なかなかだったな』

『しっかし、あそこは穴場だな。タイミング見計らえば、大人は、いないし、パツと見ただけじゃ、気づきずらいし』

余りにも下衆な会話をしていて、思わず立ち尽くしたわ。

こんな事を平気という奴がいるんだって、信じられなかった。

でも、それよりもあいつらの会話に引つかかる物が合った。

だから、もしかして、と思つて船着き場にいつてみたわ。

何故かつて？

まず、見つかりづらい所。

そして、タイミングを見計らえば、大人が居ない。

多分これは、誰かを船に乗せて運んでいる間の事。

まあ、これぐらいしか手がかりしかないから、そこに賭けてみたの。

そしたら、案の定ホームズは、そこにいたわ。

びしょ濡れで。

『あなた、それ………』

余りにも無様な姿を見て声を失ったわ。

『ん、ああ、これ？母さんの金を持って来いていわれて、断つたらここに落とされた』
ここまでされても、ホームズは、やり返せないのだ。

だって、商品が売れなかったら生きていけないのだから。

彼はずっと耐えてたのだ。それに、何にも気付かずに好き勝手な事を言つて、好き勝手な事をやってきた私。

何だか突然視界が歪んできた。

『ど、どうしたんだい？君、泣いてるよ』

さっきまでの死んだ様な目が嘘の様に動揺していたわ。

『ごめん……………』

ホームズは、私の絞り出すような言葉を聞いて目を丸くしていたわ。

『あなたの事……………何も知らないくせに……………あんな勝手な事を言つて……………あんな、酷い事もして……………』

思つたように言葉は出て来ない。

もつと別の事を言わなくちやいけない。

でも、全然うまくいかなかった。

代わりに涙がポロポロと、止まらなかつたわ。

泣いて許しを請うなんて、そんな最低な事絶対にしたくなかつた。

だから、我慢しようとしたんだけど涙は、余計に出てきて止まらなかつた。

『え、え、えつと……………ハンカチは、びしょ濡れだ……………えつと……………』

『気の利いた言葉ぐらい言つたらどうだ？』

『うるさいよ、ヨル』

——悪い子じゃないと思うよ——

姉さんの言葉が蘇る。

ああ、本当にその通りだな、て思った。

自分を傷付けた奴が泣いて謝っているのだ。

なのに、ホームズは、馬鹿にするわけでもなく、一生懸命どうにかしようとしたふたしている。

明らかにホームズは、私のせいで困っていた。

でも、私はホームズを困らせる為にきた訳じゃない。

そう決意すると、涙を思いつきり拭いた。

これからいうセリフには、不要なものだからね。

『私の名前は、ローズ。ローズ・クリステイ。貴方は？』
ホームズは、ポカンとしていたけど、ドルに小突かれて名乗りだしたわ。
『えっと、ぼくは、ホームズ。ホームズ・ヴォルマーノ』

——仲良くしてみたら？——

姉さんの言葉に私は無意識に頷いわ。

『ね、ねえ、私と……友達になつてくれない、ホームズ？』
唐突でしょ？今でも思わず笑つてしまふぐらい突然よ。
案の定ホームズは、何が何だかよく分かつていなかった。
でも、あの時は、確かにあいつと友達になりたかった。

いじめられてるのに頑張るあいつと。

目の色を褒められて、とても嬉しそうに笑つたあいつと。

そんなあいつと、私は仲良くしたいと、
友達になりたいと思つた。

そして、あいつの事をよく知りたいと思つた。

初対面の人間が訳が分からないなんて当たり前だもの。

いっぱいいっぱいだったわ。こんなベタな台詞を言うのに何回つつかかりそうになったか分からないわ……………

だっていうのに……………

『は？ぼく、今日はもうお金ないけど……………』

そんな私の苦勞を随分と、すつとぼけた解釈をホームズは、していて何だかイライラしたわ。

『ちつがーう！そんなものはいらないわ。私は、お金と友達に成りたいんじゃないの！貴方と友達に成りたいの！』

気付いたら、思いつきり叫んでいたわ。

ホームズは、最初何を言われてるか分からなかったんでしようね。一瞬フリーズすると、少し、照れた様に顔を赤くして、笑ったわ。

『えへへ、嬉しいね。ぼくも君と友達になりたいなあ』

そう言うとホームズは、手を差し出してきた。

私もそれに応じる様に手を出して、ホームズの手を握り返したわ。

以上が事の顛末なんだけど……………

もういい？

何か凄く恥ずかしくて……………

喧嘩する程仲が良い？

「へえー、そんな事が……」

レイアは微笑みながら、ローズを見る。

ローズは、顔を赤くして、そっぽを向いている。

『んー微笑ましいー！』

ニタアと、ティポが笑いながら言う。

「落ち着いて、ローズ！」

ティポに掴みかかろうとするローズを、レイアが羽交い締めにする。

「友達になるのって大変なんです……ね」

「まあ、そういう事も無くはないって感じかな」

レイアは、落ち着いた様子のローズを離してそう答えた。

「ふむ、人間と言うのは中々難儀なものだな。だからこそ、私はそんなお前達が好きなのだな」

ミラは少し微笑みながら言う。

エリーゼもつられて笑う。

しかし、話題にされた当の本人は、違うようだ。

「もう、いいでしょ!!この話すつ!!いい恥ずかしいんだよ!何、『私と……友達になつてくれない』つて!過去に戻るのなら、幼い私を殴り飛ばしてやる!!!」

顔を真っ赤にして叫んでいる。

誰に向かつて怒っているのか、もはや分かったものではないが……

その時、コンコンとドアがノックされる。

「ホームズだけど、入るよ……」

「今来んな、バーカ!!」

「ぶっ!!」

ローズは入ってきたホームズに枕を投げつける。

まさか、枕が飛んで来るとは思わなかったホームズは、もろに食らってしまった。

「ホームズ、大丈夫?!」

一緒に入ってきたジュードが心配そうに見ている。

後ろにいた、ローエンとアルヴェインは、ポカンとしている。

レイアは、ああ、と顔を手で覆う。

(タイミング悪いなあ……まあ、ある意味いいのか……)

「なにするんだい……ローズ……！」

しかし、そんな事はホームズには、関係ない。

ホームズは、こめかみをひくつかせている。

怒りを抑えるのに必死な様だ。

「枕投げ」

ホームズに背を向けてしれつと答える。

その言い草にホームズの堪忍袋の尾がきれる音がする。

投げつけられた枕を持つと、そのまま、後ろを向いているローズに投げる。

顔が赤いのを抑える為に心を鎮めようしていた。

しかし、怒りで再び顔が赤くなる。

「貴方はどうしてそう、タイミングが悪いの!!」

「わけの分からん事しといて、言う事がそれかい?!」

ローズの剣幕にホームズも負けじと言い返す。

「ああ、もうやめなよ」

ジュードとレイアがそれぞれ止めに入る。

2人はどうにかこうにか気を落ち着ける。

「で、ホームズ、何の用？」

「何の用って……明日の打ち合わせだけど……」

レイアの質問に、ホームズは戸惑いながら応える。

『そんな事の為にガールズトークを邪魔したのかー!』

「ガールズトーク？」

ホームズは、テイポの言葉に首を傾げている。

『そだよー。ローズから、ホームズとの出会いから友達までのエピソードを聞いてたんだよー』

その言葉を聞いて、今度はローズではなく、ホームズが顔を赤くする。

「き、聞いた……の？」

ホームズの問いにレイア達、女性陣は頷く。

ホームズは、顔を赤くしたまま、ローズの方を見る。

「どうして、言っちゃうのさー!ものすつーい恥ずかしいんだけど!!」

「私は貴方と違って秘密主義者じゃないの!そ、それに、昔の話だもの、私は何とも無いわ」

目を逸らしながら言葉をつつかえつつかえ、絞り出す。

そんなローズに構わず、ジュードは、レイアに尋ねる。

「どうな話だったの？」

「えつとね……………」

レイアは、ジュード達に今の話を教える。

「……………」

レイアやジュード達を他所に、下らない事を言ったローズをホームズは、半眼で見ている。

「何よ！その目は！」

「『私と……………友達になってくれない』だっけ？」

「……………！」

ローズの顔がかつてないほど赤くなる。

反対にホームズは、だんだん勝ち誇った顔になる。

「ざまあないね、ローズ。さっきのセリフをもう一度言っておくれよ」

「……………だっただけ？」

「ん？」

ローズの言葉聞き取れなかったホームズは、聞き返す。その様子を察したローズは、もう一度言う。

「『えへへ、嬉しいね。ぼくも君と友達になりたいなあ』だっけ？」

今度はホームズが顔を赤くする番だ。

ローズは、意地の悪い笑みを浮かべている。

「男が『えへへ』て……ないわー。いや、ほんとにないわー」

ホームズの顔がどんどん赤くなっていく。

「き、君ねえ、人の心を抉るのやめてくれないかい……」

しかし、そんなホームズの願いも虚しく、ローズは、さっきのお返しとばかりにさらに叩き込んで来る。

「『えへへ』なんて、笑いが許されるのは、かわいい女の子だけよね」
ホームズの顔は赤いままだ。いや、更に酷くなっている。

「じゃあ、君も無理だね」

しかし、しつかりと言い返す。

気のせいでなければ、ローズの方からブチっという音が聞こえてくる。

「ええ、どうせ、私には似合わないわよ。寧ろ貴方が女装すれば、許されるかもしれないわよ。貴方、かつこいいというより可愛いタイプの顔つきだもの。特にたれ目が」

「いいやがったね……………気にしてたのに」

ホームズからも、ブチつという音が聞こえてくる。

『えへへ』つて……………ぷつ、可愛い、可愛い」

ローズの馬鹿にした様な言い草に、ホームズは、更に顔を赤くしていく。

そんな様子を見ていたレイアとジュードとアルヴィンは、ボソボソと話す。

「ホームズが、あんなに恥ずかしがってるの初めて見るよ」

前に港で見た時とは、比べものにならない程ホームズは、顔を赤くして、動揺している。

「僕も」

「というか、もう少しかわいげのあるケンカをして欲しいもんだね。あんな、全力で人の傷を扶けるような真似しなくてもいいのに……………」

ホームズは、ホームズでローズにとんでもない事を言っているし、ローズはローズで誰もが何と無く思っていたが口に出さなかつた事を言っている。

「お互いしてやってるのが始末が悪いよね……………」

会話のキャッチボールぐらい成立させて欲しい所だ。

しかし、レイアは、ふと思いつく。

「でもさ、お互いがお互いして、相手のセリフを覚えてるって事は……」
レイアの言葉にジュードが頷く。

「うん、きつとお互いにとって忘れられない事だったんだよ。もちろん、いい意味で」
友達のいなかった、ホームズにローズが言った言葉。

自分の事を受け入れてくれた、ホームズの心からの言葉。

お互い、その時言ってもらったセリフが、とても印象に残っているのだろう。

「けどまあ、あいつらは、認めないと思うけどな」

アルヴィンは、やれやれと言った風に今だケンカしているホームズとローズを見る。

「だいたい、君も何で宿にいるんだい？自分の家に帰りなよ」

「いいでしょ、別に！ユルゲンスさんにどうぞって言われたんだから！」

しかし、レイアは、知っている。

わざわざ、自分の宿代を払っていた事を。

(理由は……まあ、後で聞こう)

レイアは、何となく予想出来ているので、取り敢えず、突っ込まない。

「まあ、精々可愛く『えへへ』て笑えるよう、練習する事ね、ホームズちゃん
ブチつとホームズから、何かがきれる音がした。

「君！いい加減にしたまえよ！人の恥ずかしい過去を的確に狙ってきやがつて！
「貴方に言われたくないわよ！今の騒ぎは、貴方が悪いんじゃない！」

「おれが？どこが？」

「全部」

「よーし、勝負だそこになおれ」

ホームズは、今にも蹴りをかましそうな構えだ。

そんな二人を無視して、ヨルはティポに話しかける。

「おい、ヌイグルミ。何処まで聞いた？」

『えとねー、ホームズとヨルが友達になつた所までだよ』

ヨルは、ティポの話聞いて、ふむ、と考える。

「なら、あの話は、聞いていないのか……」

『あのはなしー？』

ティポは、訳が分からず頭をかしげる。

その様子にヨルは、満足した様にニヤリと笑う。

「知らない様だな。なら、話してやろう。聞きたいだろ、人間ども」

「ヨル!!」

ホームズとローズは、ヨルの怪しげな行動を察し、協力してヨルに攻撃を仕掛ける。

ヨルは、華麗にそれを躲すと筆筒の上に着地した。

「ホームズには、いつもろくでもないめにしか合わせられていないし、その小ムスメには、今日散々な目に合わされたからな」

今日、ヨルはローズの不機嫌に完全に巻き込まれ、気まずい思いをしていた。

「貴様らの幼少期の話をしてやろう」

「ヨル、そんな事おれ達のがさせると思ukai?」

ホームズとローズは、完全にヨルを敵として、ロックオンしている。

しかし、ヨルは不敵に口角を吊り上げて笑う。

「俺じゃ無理だろうな……俺じゃあ、な?」

『『コハン』』

エリーゼとティポの精霊術が発動し、オモチャの用なハンマーが、ホームズとローズの頭に落ちる。

ホームズとローズは、そのまま気を失った。

「分かってるじゃないか、ジャリ」

ヨルは、満足そうに言う。

エリーゼは、ジャリという言葉に少し不服そうだ。

「え、エリーゼ、容赦ないね……」

レイアは、少し頬が引きつっている。

エリーゼは、そんな言葉を聞いて申し訳なさそうな顔をしている。

「そう、気にするなエリーゼ。お前がやらなかったら私が水をかけていた」

ミラの言葉に全員言葉を無くし、ため息を吐く。

ヨルはそんな一行を見渡すと、口を開いた。

「さて、話してやろう。こころして聞けよ」

飲んだら飲まれる

『全身ずぶ濡れのくせに何だか嬉しそうだね。何か良い事あったのかい？』

ローズがこいつの友達になった日、母親の元に帰るとあいつは、そう言った。

因みに、基本的に宿屋だ。

まあ、あの母親は、こいつがいじめられてる、いや、虐められていると言ったほうが正しいか……とにかく、その事は知っていた。だから、ずぶ濡れの理由が水遊びじゃない事ぐらい察しがついていたのさ。

ホームズは、嬉しそうに頷いていた。

『うん！僕ね、友達が出来たんだ。この街で初めての友達だよ！』

『へえー、それは是非とも詳しく聞きたいね。もうすぐ夕飯だから、着替えておいで。その時じっくり聞こうじゃないか』

ホームズは、満足そうに頷くと部屋を出て行った。

それを確認すると、部屋に取り残された俺にホームズの母親は、尋ねた。

『さて、君にこんな事を聞くのもどうかと思うけど、本当にそいつはホームズの友達か

い?』

俺たち友達だろ、というセリフで、ホームズがどんだけろくな目に会わなかったか、ホームズの母親はよく知っていたからな。

『本当に俺に聞いてもしようがないな……あの小ムスメの言葉を借りるなら、金と友達になりたい訳ではないそうだ』

俺の言葉を聞くとあの母親は、とても満足そうに笑っていた。

『なるほど。その子は、確実にホームズの友達だねえ……って、ヨル、君今何て言っただ?』

『本当に俺に聞いてもしようがないな』

『その後』

『友達になりたい訳ではないそうだ』

『行き過ぎ。というか、そこだけ聞くと、えらい騒ぎだねえ……じゃなくて!その前』

『小ムスメの言葉を借りるなら』

『そこ!』

『何だ突然デカイ声を出して』

『小ムスメって……相手は女の子かい?』

『ああ』

俺の言葉を聞くと、あの母親は、ニヤニヤ笑い出したんだよ。

『これは、是非とも聞かないといけないね………フッフ、楽しみだねえ、夕飯』

そのムスメは、知ってるだろうが、ホームズの母親は常に眠そうな目をしている。その目をかかつてないほど輝かせているんだ。達が悪い事この上ない。

『かあさん？着替えたよ』

俺が人間に恐怖を覚えていると、ホームズが、ずぶ濡れになった服を着替えてやって来た。

『よく来た。我が息子よ！さあさあ、席に着いてゆつくり、そして、じっくり話を聞こうじゃないか』

『どうしたの、かあさん、いつになくテンションが高いんだけど……』
ホームズは、少し引いていたな。

『さあさあ！』

『わ、分かったけど……』

そう言ってホームズは、その日の出来事を話し始めた。

『なるほど。聞けば聞く程、いい子じゃないか。是非とも仲良くしたまえよ』

ホームズの話の聞いて、あの母親は、まずそう言った。

『当たり前だよ』

対するホームズもノータイムで返していたな。

『さて、友達が出来てテンションの高いホームズ君に幾つか、言っておこう』

そう言つてホームズ母は、話し始めた。

『君、いじめられた時やり返さない理由をはつきりと言わなかったね、何故だい？』

『何だか母さんのせいにしてるみたいで、やだったから』

『どうして、目の色を褒められると嬉しいのか、理由は、言つたかい？』

『ううん』

ホームズは、首を横に振つていた。

『何故だい？』

『だって、向こうが多分気を使う事になつちやうもん』

ホームズの父は、死んでいる。その事から説明せにやららんからな。

ホームズ母は、食事の手を止めホームズを見ていた。

『君はそう言つて、色々な事を秘密にする癖がある。前にも言つたらう、その性格は、

敵を作ることは容易くとも友を作る事は難しいって』

『うん………』

ホームズは、少し俯いている。

そう、もしかしたら、自分の勘違いかもしれないのだ。自分の母親は、その事を言ううとしているのではないか、と不安になっていたのだろう。

『でも、もしかしたら、そんな君と友達になつてくれる人がいるかもしれない。今回みたいだね』

ホームズ母は、ニヤリではなく、にっこりと微笑んだ。

『だから、君はそいつの力になつてやるといい。商人の息子として、借りは返しておかないと、ね』

ホームズは、顔を輝かせて俯いていた顔を上げた。

『うん！』

あの母親は、満足そうに微笑むとホームズの頭を撫でた。

ホームズは、少しくすぐったそうにしていたな。

『いい返事だ。さ、冷めないうちにとつと食べちゃおう』

そう言ううちと中断した食事を再び始めた。

その日は、そのまま風呂に入ってホームズはすぐに寝た。

まあ、お子様だからな。俺とあの母親は、起きていた。

『いやあ、嬉しい話だ。まさか、実の母親から見ても、お世辞にも性格がいいとは言えない息子に友達が出来るなんてね。これは、飲まなきや』

そう言うのと、カバンの中からワインを引っ張り出してきた。

『君も飲むだろ、ヨル』

『くれるなら、貰おう』

ワイングラス二つに、均等に酒を注いだ。

俺は、それを尻尾で絡め取ると、口元に持って行つた。

『いつ見ても器用な尻尾だね。私も欲しいくらいだ』

『これ以上化け物になつてどうする』

俺は未だに痛い腹を見る。そこにいるムスメには話したが、あいつは、俺の存在を知ると躊躇いも驚きもせず、アイアンクローを決めて、腹パン決めてきたんだ

『フフフ、手加減して上げたんだから感謝しなよ』

『そりやどうも』

俺の適当な返事に奴は少し笑うと、グラスに口をつけた。

一口程口に含むとそのまま飲み下す。

『しっかし、ここで友達が出来るとはね……………まあ、長くは持たないだろうけどね』
『……………随分と悲観的じゃないか』

『私達を誰だと思ってるんだい？行商人だよ。別れが常の、ね。
それに、このまま二人が仲良くなればろくな事は起きないだろうね』

『……………？』

『よく、分かってないようだね。彼らは、ホームズが絶望している所を見たいんだ。それで、溜飲を下げている。そんな奴に心強い味方が出来た……………彼らがそれをヨシとするとと思うかい？』

奴の説明で、ようやく納得が言った。

『……………そういう事か。人間ってのは、相変わらずだな』

俺の言葉に奴は少し笑うとグラスのワインを飲み干して、再度注いだ。

『例によつて私は、手だし出来ない。だから、後の事は君に任せたま、ヨル』

『俺だつて手だしは出来ない。というか、する気もない』

『つれない返事だねえ……………まあ、わかりきっていたけど』

『なら言うな』

『ものは、試しつてやつさ。やりもせずに無理だ、なんて決めつける事程愚かな事はないからね』

そう言うのと、グラスの中を一気に空にした。

そして、再び注ぐ。

『よく飲むな、明日どうなっても知らんぞ』

俺の言葉にグラスを煽る手を止めると、肩を竦めた。

『別に明日は仕事ないし。というか、君が人の心配するなんて、珍しいねえ』

『心配じゃない、宣言だ。後でどうして何もしなかったとか言われても、俺は何も知らないという事だ』

俺の言葉に奴は不服そうに口を尖らせる。

『冷たいねえ……ま、それはともかく、君も飲みなよ』

そう言うのと俺のグラスになみなみと注ぎ込んだ。

『おい、まさか、もう酔ってんのか』

『まさか！わたしがこのていどでようわけないだろ！』

普段以上に陽気になっていた、明らかに。

『のめのめ！そうすればどうにでもなるのさ、人生は！』

そのまま、俺はそれから、しばらく酒に付き合わされた。



『つ頭痛え』

翌朝、俺の目覚めは頭痛と共にやって来た。

『……酒臭い。何、君のんでたの?』

眠い目を擦りながら起きて来たホームズは、俺を見るなりそう言った。

『そのオンナに付き合わされてな』

ホームズは、そんな風に言う俺と酔い潰れてグーすか呑気に寝ている母親を馬鹿にした様に見ると、昨日の晩の残りを食べ出した。

『今日は、どうするんだ?』

『うーん……ここにずっといてもなあ……奴らが引つ切り無しにきて、宿屋さんに迷惑がかかるし……取り敢えず、これを食べたらどっか行くよ』

そんな会話をして、宿を出るとそこには……

『やつほー、遊びにきたわ』

虫取り網を持った小ムスメがいた。

『何してるんだい?』

『決まってるじゃない。虫取りに誘いにきたのよ』

まあ、ホームズは、呆然としていたな。

友達に遊びに誘われるなんて事は今まで一度もなかったのだから。

『いつまでぼーっとしてるの?』

『ま、ま、まって!今すぐ、虫取り網をとって来るから』

ホームズは、そのまま俺を放置して、虫取り網を探しに行った。

ホームズが来るのを待っていると、二日酔いのバカ女がやってきた。

『ぶー、あつたまいたい。何かホームズが騒がしいみたいだけど、何かあつたのかい?』

『虫取り網を探しに行った。こいつと遊ぶ為に』

俺が尻尾で小ムスメを示すと、さつきまでの眠そうな目が嘘の様に、輝いた。まあ、それでも眠そうな事には、変わりないのだが。

『そうか、君がローズちゃんか!いやあ、嬉しいよ。あんな性格の悪い息子と仲良くしてるなんて。君が天使に見えてしようがないよ』

そのまま小ムスメに抱きつくとき高く抱き上げた。

『いや、あの下ろしてください』

『いいじゃないか！かわいい女の子を抱き上げる事が出来るのは母親の特権だぜ！』

『いや、貴方は、別に私の母親じゃないでしょ』

『もちろんホームズの母親よ』

会話が成り立たないホームズ母にげんなりした目で俺の方を見たが、取り敢えず無視しといた。

そんな事をしてしていると、どこから引つ張り出してきたのか分からない虫取り網を出してきた。

『準備出来たよ！さあ、行こう』

『……………そう言うわけです。下ろしてください』

『はいはい』

ローズを降ろすとホームズの方を振り返る。

『ほら、遊んでおいで。魔物の出ない範囲でね』

最後までにこやかなまま、ホームズ母は、二人を送り出した。



『ホームズのお母さんさあ、二日酔いだった?』

『うん。昨日ヨルとおさけを飲んでたみたいだから』

ホームズは、飛んでいる蝶を捕まえながら答えた。

『それで、あのテンションか……恐ろしいわね』

適当に虫取り網を振つてる為虫に逃げられていたな小ムスメは。

気を取り直してもう一度網を構える。

『そういえば、貴方は普段何をして過ごしてるの?』

『基本的に、本を読んで過ごしてるよ』

ホームズは、再び蝶を捕まえる。

小ムスメも対抗するが、再びすかし、そのままんどり打つてこけた。

ホームズがその様子を笑うとおもむろに地面に網を投げ捨てて、花をむしり出した。

『なにしてるんだい?』

『見てればわかるわ』

そう言うのと、実に手際良く花をどんどん編んでいった。

『出来たわ。花の王冠』

『わー………凄いな』

そこには花で編まれた丸い輪っかがあった。

なるほど王冠とは、よく言ったものだと思つたのを覚えている。

ホームズズの素直な賞賛に気を良くしたのか鼻を自慢そうに鳴らした。

『でしょ？ 私は女の子だもの。虫取りなんて、出来なくたっていいのよ』

じゃあ、何で虫取りにきそつたんだ、と聞いたかったが、そんな体力が無かつたので黙つて聞いていた。

まあ、今なら分かるが、大方虫取りで勝てると思つていたのだろう。

『ま、それはともかく……それはあげるわ』

『いいのかい？』

『その為に作つたんだもの。友達だし、ね』

『……？、友達には、お金をあげるもんじゃないの？』

『……：貴方が、普段どんな目に合っているのが分かる言葉ね』

小ムスメは深々とため息を吐く。そんな様子をホームズズは、不思議そうに見ていた。

『私からのプレゼント、嬉しくなかつた？』

『ううん、嬉しかったよ』

『そう言う事。プレゼントって言うのは、友達って言うのは、そう言う事なの』

ホームズズは、ローズの話にすこし首を傾げてから頷いた。

『……何となく分かつたよ。ねえ、ローズ。そのやり方教えてよ』

『いいけど………どうして?』

『僕も友達にプレゼントをあげたいからね』

ホームズの言葉に小ムスメは嬉しそうに笑うと、

『………わかったわ』

と返事をした。

ホームズはそれから、興味深そうにローズの手順を見ていた。その間もの影から見ている奴らに気づきもせず。

嘘つきは馬鹿の始まり

『ただいま!』

真つ直ぐ帰ると、ホームズは元気良くドアを開けた。

『おかえり……………フフフ、随分といいものを頭につけてるじゃないか』

ホームズの母親は、花の王冠を見ながらそう言った。

『うん。ローズが作ってくれたんだ。友達へのプレゼントだつて。僕も作つてあげた
いんだけど全然上手くいかないだよね……………』

そう言つて何の形にもなつていない、ゴミ見たいな物を見せる。

ホームズ母は、やれやれと言う顔を見るとホームズの肩に手を置いた。

『……………練習しようか。私も作れるから、教えてあげられるよ』

『本当?!』

目を輝かせているホームズに満足そうに頷く。

『もちろん。私が嘘を言った事があつたかい?』

『雪が実は砂糖で出来てる。ジャンプし過ぎてるとそのうち羽が生えて遠い所に行つて帰つて来れなくなる。塩を焼くと砂糖になる。後は……………』

『OK、ご飯を先に食べようか。明日も遊ぶんだろう?』

つらつらと、自分が母親につかれた嘘を述べるホームズを手で制する。

『うん、そう約束したよ』

ホームズは、こくりと頷く。

『だったら、ほら、早く手を洗ってきたまえ。食事にするよ』

何がだったら、なのかは分からなかったが、ホームズは、それに従った。

姿が見えなくなると、ポツリと呟く。

『なんて、恐ろしい記憶力の持ち主なんだろう……』

こいつ馬鹿じゃないのかと思った瞬間だった。



『へえー、昨日言った事ちゃんと守ったんだ』

昨日と同じ野原に行く、そこには既に小ムスメがいた。

『当然。女の子の約束を忘れると、母さんに吊るされるからね』

『……………つつこまないでおくわ』

少し頬を引きつらせると昨日と同じ様に花の冠の作り方を教えていた。

『そう言えばさ、貴方のお父さんは？まだ見てないんだけど……』

おもむろに小ムスメは、口を開いた。

そりゃあ不思議だろう。

女一人で商人と言うのも妙な話だ。

『……………えーつと……………』

口ごもるホームズ。

ホームズの父は、既に死んでいる。

ホームズの記憶にすら残らない頃に。

しかし、下手に喋ってしまえば相手が気まずい思いをしてしまう。

どう答えればいいのか、完全に困ってしまった。

『死んでる。こいつが物心つく前にな』

まあ、だから、俺が代わりに喋ってやったがね。

酷いだって？

馬鹿馬鹿しい！何で俺がそんな気を使わにやならんのだ。

とつと喋るなり、騙すなりしときやいいものを奴はしなかった。

自己責任って奴だ。

予想通り、空気が凍った。

『……………本当？』

『うん、まあ……………全く記憶にないんだけどね』

ホームズは、渋々頷く。

そして、すぐに俺のヒゲを引っ張り始めた。

小ムスメは、しばらく手を止めていた。

『……………ごめんなさい。少し軽率だったわ』

『いいよ。別に謝られると逆にどう答えればいいのか困っちゃうよ』

『でしようね……………』

小ムスメは、そう言うのと再び花の冠を作り始めた。

『言い訳になるかもだけど、誰も貴方の気持ちは分からないわ。だから、これからもその話題が出れば私みたいな受け答えをする人がいくらでもいるわ』

『つまり、取り敢えず、謝っておこうって奴か？ 社交辞令の様に』
俺の言葉に、小ムスメは、少し動きを止める。

『……………否定は、仕切れないわ。でも……………』

『謝らずには、いられないよね。ヨル、化け物には、分かりづらいかもだけど、人の生き死にについては、そういうもんなんだよ』

ホームズは、小ムスメの言葉を引き継ぐと俺へ向かってそう言った。

『んな事言ったって、随分昔の話だろ？ 昨日今日なら、分からなくもないが……………そういうのは、過去の話って奴になるんじゃないのか？』

俺の言葉に、ホームズは首を振る。

『残念だけどねえ、そうそう割り切れるもんじゃないんだよ。僕は一人そう言う人を知っている』

俺は、全く分ならず首を傾げる。

『人間はよく分からんな』

『いつか理解できる日が来るといいね』

俺の答えにホームズは、少し寂しそうに微笑んで答えた。

『けつ、忌々しい。俺は御免こうむるね』

俺は吐き捨てる様に言った。

小ムスメは、そんな俺たちの会話を眺めていると、話題を代えるように再び口を開いた。

『……………貴方のお母さん、どんな人なの？』

『……………？昨日会わなかったけ？』

『いや、アレだけじゃ、どんな人か分からないわよ』

小ムスメは、少し疲れた様に言う。

『どんな人に見えた？』

『変な人』

昨日の出来事を思い出しノータイムで返した。

突然、人の子どもを抱き上げて喜ぶ様な人間を『普通』の人とは言わない。

『それであつてるよ。大抵、第一印象で分かるんだよね、あの人がどんな人か…………』

ホームズは、遠くを見つめていたが、怪訝な顔をしているローズを見ると慌てて手を振る。

『あ、で、でも、いい所あるんだよ。僕用にお菓子を作ってくれたりするんだよ。それなら自由に食べていいよって』

『……………何なら食べちゃいけないの?』

小ムスメの鋭い突っ込みにホームズは、目を逸らす。

『じ……………自分用に作ったお菓子……………黙って食べると……………蹴りが飛んでくる』

ホームズは、肩を抱えて震えだす。

後で聞いたんだが、昔ホームズは、母親の焼いた菓子を無許可で食べて酷い目にあつたそうだ。

『……………変な人どころの騒ぎじゃないんだけど……………まあ、でも、多分私の姉さん
といい勝負ね』

小ムスメの言葉にホームズは、不思議そうに首を傾げる。

『どんな人なの?』

『変な人よ。貴方のお母さんに負けず劣らずの、ね』

小ムスメは、ため息を吐く。

『でも、誰よりも頭が回る。貴方が仕返ししない理由を聞いただけで、見抜いたわ

……』

『それは、お前の考えがただ単に足りなかっただけだ』

俺のその言葉に、小ムスメは、うつと言葉を詰まらせた。

『会ってみたい気もするけど……』

『オススメはしないわ』

そう言うとう見事な花の冠を作り上げる。

『はあ、また出来なかった……』

ホームズは、深々とため息を吐く。ホームズの作り上げたものは奇妙な形をしている。

『……要練習ってところね』

ふふんと勝ち誇った笑みを浮かべる小ムスメ。

『言われなくても分かってるさ……』

ホームズは、少し悔しそうに口を尖らせるとそう言った。



『てことが、今日あったんだ……』

ホームズが、夕食時に今日の出来事を話す。

その話をホームズの母は、頬を引きつらせながら聞いている。

『あのねえ、もう少し子どもらしい事を話しなよ……何で年齢一桁の奴らが人の生死について話してるんだよ……』

完全に呆れている。

ただ、達の悪い所は彼らの話は、中々反論のしようが無いのだ。

別に、人の生死について考える事は悪くないと思うのだが……

『十年も生きてないガキ共が、それが全てみたいに語るのが納得いかないよ』

『どういう事?』

『結論を出すのが早すぎる、って言ってるんだよ』

そう言うのとホームズに軽くデコピンをする。

『痛てっ!』

『全く、誰に似たんだか……』

そうつぶやくと、優雅に紅茶を飲む。

まあ、誰がどう考えても、ホームズの母なのだが……

『それで、他は何を話したんだい？』

『えーつと、家族の話……』

『お、いいねえ！何、私の事なんて紹介したの？』

ホームズの母親は、ノリノリだった。

『変な人』

『……………』

箸を投げる準備をする。

『待って！待って！』

ホームズの必死の懇願により、箸を収める。

しかし、机をどんつ！と叩く。

『君は失礼な奴だなあ！私みたいな典型的な一般人をつかまえて何を言うか!!』

突っ込むのもめんどくさい……………

ホームズと俺は半眼で見ている。

『なんだい、その目は!!』

そんなホームズに我慢出来ず、遂にホームズ母は実力行使に出た。

具体的には、頬をつねる。

ホームズが楽しみにとっておいた飯を食うなどだ。

身体的にも、精神的にも、効果絶大だ。

『ああ、もう！そういう所が普通じゃ無いんだよ!!』

この親子ゲンカは、宿の主人が来るまで続いた。



『……………貴方ねえ』

今日も二人仲良く花の冠作りだ。

昨晚の話を聞いた小ムスメは、呆れ顔だ。

『誰だって、変、なんて言われたら怒るに決まってるじゃない』

『君も?』

『試してみる?』

『遠慮しとく』

うすら寒い笑顔にホームズは、身の危険を感じて直ぐにやめる。

小ムスメは、可笑しそうに笑う。

ホームズは、キョトンとしながらも花の冠を作り上げる。

しかし、残念な形の完成だ。

ある意味芸術と言えるかもしれない。

『いる?』

『正直に言うといらない』

無理矢理渡そうとしたが、断わられた。

『いつか、完成させて君にプレゼントとするよ』

ホームズの言葉に小ムスメは、優しく微笑む。

『ふふふ、ありがと。楽しみにしてるわ……てどうしたの? 顔赤いけど』

『……別に』

ホームズは、ふいつと顔を逸らす。

あんまり見せない優しい微笑みに少し見惚れていたんだろうな。

あ、本人に言うなよ、絶対に認めないからな。時間の無駄だ。

友と過ごす。

このなんて事ない時間は、今まで虐められてきたホームズにとって、とても大切な宝物のような時間だ。

つまるところ、この時間は、間違いなく、ホームズにとって心休まる時だった。本人もそこは認めている。

だが、当時のホームズは忘れていた。

確かに友達は出来た。

しかし、いじめ自体がなくなった訳ではないのだ。

それをホームズは、思い出す。

何処からともなく飛んできた石によって。

それは、真つ直ぐに飛んできて、物の見事にホームズの顔面に当たった。

何故俺が弾かなかったかって？

まあ、俺に当たりそうになかったし。

『……………ホームズ！』

突然の事に思わず声を上げ、駆け寄る小ムスメ。

ホームズは、痛そうに顔をおさえている。

俺は石の飛んできた方向を見た。

そこには、やっぱりと言うか、なんとと言うか、いつもホームズをいじめてる奴らがい

た。

『こんな所にいたのか……そんな奴なんかほつといて、俺たちと遊ぼうぜ』
奴らの中でも頭つぽい奴が、ニヤニヤしながら、ホームズに言った。

ホームズが口を開こうとすると、小ムスメがすつと前に出る。

『残念ね。私の方が先に遊びに誘ったの。だから、後にしてくれないかしら、永遠に』
そして、小ムスメの方が先に口を開いた。

次の瞬間、奴らの握り拳に力が入る。

いつもホームズを下に見て、人を踏み付ける事により自分の存在価値を認識してきた様な奴らだ。

そのものいいが気に食わなかったのだろうな。

奴らは今度は、小ムスメに向けて石を投げた。

とつさの事に何の対処も出来ていなかったな、あの小ムスメは。

『ヨル！』

『……………！』

俺に命令した馬鹿に文句の一つでも言いたかったが、喋ると余計にめんどくさい事になりそうだったので、おとなしく、尻尾で全ての石を叩き落とした。

俺のその常識外の行動に奴らはビビっていたな。

そして、頭の奴が取り巻きに向かって言う。

『バカ！あいつは狙っちゃいけないんだ。狙うんだったら、あの気味の悪い碧い目の奴を狙わないとだろ！』

ホームズは、その言葉にビクツと肩を震わせた。

小ムスメは、それを見逃さなかった。

友を傷つける奴を許すわけにはいかない。

『貴方達、いい加減にしなさいよ……それ以上は、私が許さない』

その時は、なかなかドスが聞いていたな、ガキの割には。

『大丈夫、ホームズ？』

小ムスメは、何も言えないでいる、連中を一瞥すると、倒れているホームズに手を差し出した。

しかし、ホームズは、友からのそれを冷たく払いのけた。

『……………満足かい、ローズ』

震える様に悔しそうに、ホームズは、口を重々しく開いた。

『……………え？』

訳が分からないのは、小ムスメだ。

『満足かつて、聞いているんだ、ローズ』

ホームズは、無理矢理立ち上がる。

小ムスメの手を借りず。

『分かつていないのかい？君は、今いい事をしたと思っただろう。いじめられている人を助けて、私は、なんてかっこいいんだろう、って』

『何……………を言っているの』

突然のホームズの変貌にローズもイジメの連中も呆気に取られている。

『白々しいにも程があるよ！僕が何も気づいていないと思っただのかい！君は、自分の存在価値が確実に僕よりも上だと思っただんだよ、常に！僕は、いじめられている人間、そして、君はそれを助けた人間だ』

ホームズは、顔を伏せたまま、言う。

『その事に君は満足したんだ。いや、満足したかったんだよ！いじめられっ子を助けたという、まるで正義の味方の様な人間に、自分が成れた事に満足したかったんだよ！』

小ムスメは、酷く怯えた顔をしていた。

そりゃあ、そうだろう。

よかれと思つてやった事は全てホームズの心をえぐつていたのだから。

今までの自分の行動が全て否定されていたのだから。

『君は、最初からそのつもりで近づいてきたんだ!! いじめられっ子と友達になるという目指すべき、かつこいひ自分になる為に! 君はずっと僕の事を馬鹿にしていたんだよ! その奴らと何にも変わりやしな!』

ホームズの血の吐く様な叫びに小ムスメは何も言えずに、ただ呆然と立つしかなかつた。

『君は最低だ』

そう言つて、作りかけの花の王冠を投げ捨てると呆然としている小ムスメを放置して

家に向かって走り出した。

俺は小ムスメが膝から崩れ落ちるのを最後に見た。

笑う門出に福来たる

『女の子と遊んだにしては、随分と浮かない顔をしてるじゃないか』

ホームズが帰るとあの母親は、開口一番にそう言った。

ホームズは、それに曖昧に返事をするそのまま寝室へと消えた。

俺がその場に残っているとホームズ母は、尋ねてきた。

『何があつたんだい?』

隠す事でもないので、全部話した。

『なるほど、ホームズがそんな事をね……』

飯を食べながらあの母親はポツリとこぼした。

『我が息子ながら、難儀な性格してるよ、まったく……差し出された手なんだから感謝してうけとつときゃいいのに』

『それは、あいつ自身が許さなかつたんだろ』

『だろうね』

空席の奴の所を見ながら、ホームズ母は、言っていた。

『さて、夕飯を持って行ってやろうかね。ヨル、君も来な』

『やだと言ったら？』

『君には、前足と後ろ足があつた方が素敵だと思うけど？』

『へいへい』

ぴよんと肩に飛び乗ってホームズの部屋に行った。

返事がないので気になって入ってみると、そこには泣き寝入りしているホームズがいた。

『辛いだらうね』

『だったら、しなきやいいだろうに……馬鹿な奴』

俺の言葉にホームズ母は、やれやれという風に肩をすくめる。

『君ぐらい割り切れたら楽だらうね』

ホームズの母親は、そう言うつと扉を静かに閉めた。

それからの毎日は、いつにもまして、ホームズへのイジメは酷くなつて行つた。

当然といえば、当然だろう。自分の味方にあんな酷い暴言を吐いたのだから。

もう完全にこの街には、味方と言う味方は誰もいなくなつたのだ。

そして、ホームズは、毎日の様にあの野原に行っていた。野原に行くとはホームズは、いつも花の王冠を編んでいた。

『……………まだ、やるのか?』

ホームズは、黙って頷く。

恐らく、ホームズは花の王冠を作ること、ほんの一瞬の楽しい、友達との記憶を思い出していたのだろう。

その証拠に奴は、花の王冠を編む時はいつも楽しそうに笑っていた。

それが、心の支えだったのだろう。

そんな日々が、一週間程続いたある日、いつもの様にホームズが、花を編んでいると、一人の女がやってきた。

余程ホームズは、驚いたのだろう。目を丸くして、肩を強張らせていた。

『そんな怯えなくても……………』

女は呆れている。

『ゲート靈力野があの小ムスメと似ているな……………お前が例のあいつの変な姉か何かか?』

『正解と言いたくないよ……………』というか、本当に喋るんだね』

俺の質問にそう答えると、奴は、ホームズの向かい側に座った。

ホームズは、不思議そうな顔をしながらも、花を編んでいる。

『…………へえー、上手いものだね』

その女の賞賛に少し嬉しそうにすると、再び編みはじめる。

『さつき、貴方のお母さんから聞いたけど、明後日出発するんだって?』

ホームズは、頷く。

女も一緒になつて花を編む。

『…………ローズはね、あれからずつとふさぎこんでるよ』

一輪花を筆る。そして、編む。

『このまま、さよならしちやつていいの?』

ホームズは、ほんの一瞬手を止める。しかし、直ぐに頷く。

『…………そう。それは、少し寂しいな』

ホームズは、黙々と花の王冠を作り上げていく。

小ムスメの姉もそれに習う様に、作り上げる。

そして、完成させると、ホームズの頭に乗せる。

『さて、仕事があるから、そろそろ行くね。話せてよかったよ、ホームズ君』

そう言い残すと、その女は歩き出した。

『と、そうだ…………ローズから、聞いたんだけど、貴方は本をよく読むの?』

ホームズは、黙って頷く。

『なるほど……じゃね』

その女は一人で納得すると、今度こそ、野原から去って行った。

『何だったんだ?』

俺の言葉にホームズは、首を傾げるだけだった。

翌日、つまり旅立ちの前日。

ホームズは、いつものようにいじめられた後、再びいつもの野原に来ていた。

『よう』

そこには、前日と違い厳つい男がキセルを啜っていた。

『……ヒマだなお前ら』

俺の悪態に、男はニヤリと笑う。

『驚いた。奴らの言ったとおりだ。お前らが、街を救った英雄達か』

一人で納得する様に男は頷いていた。

ホームズの怪訝そうな顔をしている。

『おいおい、忘れちゃったのか? あの時、街の現状を説明してやっただろう?』

その時、ホームズは、何か思い出した様だ。

その様子に満足すると、男は自己紹介をする。

『改めて、俺はマローウ。街じゃ一応、幾つかの事を仕切っている。例えば、お前の母親の商売とかな』

そう言うのと、ホームズの隣りに腰を下ろす。

『お前の今の立ち位置も聞いている。すまん、何も出来なくて』

神妙な面持ちで、ホームズに謝罪する。

ホームズは、目を伏せて首を振る。

そんなホームズにマローウは、一瞥をくれると口を開く。

『あのよ、ホームズ』

ホームズは、不思議そうな顔をする。

『後悔のないようにしろよ。お前らは行商人だ。今度は、いつこの街に来られるか分からない。下手をすればもう二度とこの街には、来られないかもしれない。だから、心残りのないように、後悔のないように、な』

そう言うのと、頭をポンと軽く叩いて立ち上がる。

『……じゃあな』

そう言うって、ホームズは野原に再び取り残された。

『……………後来てないのは』

『私だろ』

俺の言葉を先読みしたかの様にホームズの母親がそこいた。

『こんな所で油売ってないで、とっと明日の用意したまえよ』

『お前こそ、仕事はどうした?』

『この私が、前日のギリギリまで、んなもんやるわけ無いだろう』

そう言うのと、どつかりと腰を下ろす。

そして、花を雀り段々と編んでいく。

『……………辛いかい?』

ホームズは、その質問にゆっくりと首を横に振る。

ホームズ母は、やれやれという風にため息を吐く。

『君は本当に嘘が下手だねえ。隠し事は、よくやる癖に』

ホームズ母は、王冠にしてはやけに大きめに輪を作っていた。

『辛いときは、辛いと言いたまえよ。そのために母親わたしがいるんだから』

そう言うのと、花で作った輪をホームズの首にかけ、頭を撫でる。

それが、スイッチだったようだ。

ホームズは、堰を切ったように泣き出した。

大泣きも大泣きだ。

恐らく、ために貯めた感情が一気に溢れ出たのだろう。

ホームズは、ずっとこの街にいる間暴力に耐え、暴言に耐えてきたのだ。

そんな中、ようやく出来た友達を手放してしまった。

感情を中々表に出さないので、気づきづらいが、所詮は七歳のガキだ。

少し歪んでいても、それは変わりやしない。

ホームズ母は、ホームズをずっと優しく抱きしめていた。

人間の事はよく分かんが、あれが母親という奴なんだろう。

この時初めて、俺はホームズが大泣きしているのを見た。

限界まで泣いた為、泣き疲れたようだ。

そのまま、泣き止むとホームズは、草むらの中で寝息を立て始めた。

『やれやれ、世話の焼ける息子だねえ』

ホームズの母親はそのまま寝ているホームズを背負うと街へと歩き出した。

『ほら、ヨル、君も帰るよ』

俺は黙ってそれにしがった。

もう、しばらく、来る事は無いであろう野原を一度だけ振り返って。



『さて、忘れ物は無いかい？』

翌朝、ホームズ達は荷物の点検をしていた。

母親の言葉にホームズは、コクリと頷いた。

『よし……………』

カバンを背負い宿を出る。

そこには、キセルを唾えた男と、小ムスメの姉の姿があつた。

『よう』

『どうしたんだい？』

ホームズ母の言葉に小ムスメの姉方が言う。

『お出迎えだよ。旅立ちには、賑やかな方がいいでしょ』

『そりゃあ、嬉しいね。ほら、ホームズも挨拶ぐらいたまえ』

母親に促されて、ホームズはぺこりと頭を下げる。

ホームズの母親は、そんなホームズに少し苦笑いをする。

『まあ、頻繁には来ないけど、また、来るよ。その時はまたよろしく』
そう言うのと、辺りを見回す。

『あれ、ローズちゃんは？』

『さあ？朝から見てないけど』

小ムスメの姉は、そう答える。

その言葉を聞いて、ホームズの母親は、意味深に笑う。

『ふーん……それじゃあ、またね！』

そう言っで見送りの二人に手を振ると、最後に

『いつてきます！』

と大声で、そして、笑顔で、出発の挨拶をした。

街を出ると、いつもの野原に辿り着いた。

『このルートで行くのか？』

俺の言葉に、あの女は、俺の方を向く。

『まあね、このルートで無いと雪山を超えたり、魔物と戦わなきゃいけなかったり、と

結構厄介なんだよ』

俺の質問にホームズの母親は、そう説明した。

そして、再び正面の野原に視線を戻すと、少し目を丸くした後微笑んだ。

『……ホームズ、君のお客さんだ』

そこには、元ホームズの友人、あの小ムスメがいた。

ホームズが驚いて目をパチクリしている間に小ムスメは、そのままツカツカとホームズへと歩いて来た。

そして、

ホームズの唇に自分の唇を重ねた。

何をされているのか、最初の方ホームズは、全く理解出来ていなかった。

しかし、段々と理解して行くに連れて顔を真っ赤にしていった。

小ムスメは、自分からしてきといたくせに、しばらくするとホームズを突き飛ばし、そのまま街の方向に歩いて行った。

ホームズは、そのままへなへたと座り込んだ。

『ふふふ、いいものを見せて貰ったよホームズ』

ホームズの母は、にやにやししながら、ホームズの側に落ちていた手紙を渡す。恐らく突き飛ばす時に押し付けたのだろう。

ホームズは、渡された手紙を広げる。

《ホームズへ》

昨日の夜、姉さんから、今回の件について話を聞きました。

あの野原での日の事です。

あの時、私は奴らから貴方を守りました。

この時、姉さんに言わせるとイジメのターゲットに私まで含まれる所だった、らしいです。

何故なら、ホームズをいじめるといふ、みんなの楽しみを私が奪う、空気の読めない奴になってしまったからです。

一回程度ならともかく、二回、三回と続けば、確実にあのクズ共の逆鱗に触れてしまふ。

また、イジメられてる貴方をかばえば、奴らの中では底辺の貴方と同じ奴という風にも見られてしまう……そうです。

だから、貴方はあの場面で、ワザとああいう言葉を私に言った。

そうする事で、貴方と私が敵対関係にあると思ひ、また、ホームズを『折角の友達からの助けを訳の分からん理由で振り払い、そして、挙げ句の果てに傷付けたひどい奴』という評価することになります。

こうなる事により、ホームズをいじめる為の大義名分を奴らはさらに得る事が出来ま
す。

これらの結果、ホームズを庇つたという私の罪は奴らには、忘れ去られ、ホームズに
だけ、イジメが集中する事になります。

そして、次いでに言えば、そこまで言われれば私は、貴方のことを傷付けたと思ひ近
づきやしない。

これにより、私の日常は守られたのだ、と言われました。

しかし、貴方のセリフは少しでも心当たりが無いと出て来ない台詞だったと私は姉に
言いました。

すると、姉は、どこからともなく本を出して来ました。

姉に進められるがままに読み進めると、貴方の言葉と全くおなじセリフが出てきたま
した。

それが、昨日の夜の話です。

姉さんもホームズと私の事を考えて、この日に種明かしをしたと言っていました。

……正直貴方には、言つてやりたいことが山ほどありますが、それをするには少し時
間がたりません。

何せ、これを書いている時、日付けが変わっていますから。

では、この辺で。

P. S

友達との仲直りの方法を姉さんから、教えて貰いました。
姉さんのにやけ面が気になりますが、取り敢えず、実行する事にします》

『……物の見事に騙されてるな』

先程の小ムスメの暴挙を思い出した。

どう考えたって、友人との仲直りの為の行動ではない。

因みに、小ムスメの姉の推理は、全て正解だ。

俺もあの母親も気づいていた。

だからこそ、俺は呆れたし、母親の方はホームズの行動を責めなかった。

そして、次いでに言うなら、ホームズがあのような行動を取ることも予想済みだったそ
うだ。

どうすれば友達を守ることが出来るか、その答えに真つ先に辿り着くだろうと。

だから、酒を飲んでいる時、あのような発言をしたのだ。

さすが、と思つたな。ま、言わないが。

後で聞いたのだが、キセル野郎もその事に気づいていたらしい。

『ま、所詮は6歳の女の子だからね。あれだけ頭が回れば、騙すことぐらい訳ないさ』
俺の事にそう返す。

そんな会話をしてる中、ホームズは、手紙をカバンにしまうと野原にあつた物を掴み、あの小ムスメが歩いていった方向に走り出した。

当然、ホームズから離れられない俺もついていく。

『いっついで待つてるよ』

ホームズ母は、カバンを置くと優しく手を振った。

ホームズは、振り返らず一直線に向かう。

『頑張れ、男の子』

そんな言葉が、ホームズには聞こえなかつたようだが、俺には聞こえた。

しばらく走るとそこに小ムスメが一人でとぼとぼ歩いてきた。
ホームズは、息を大きく吸い込んだ。

『ロ——ズ——!!』

隣りにいる俺の鼓膜が、破れるんじゃないかと思うぐらいの大声で小ムスメの名前を呼んだ。

呼ばれた本人も驚いたようだ。肩をビクつとさせ、それから勢いよく振り返った。

小ムスメが振り返ると、ホームズは、手に持っていた物、花の王冠を奴に向かって投げた。

ホームズは、ここしばらく、ずっとそれを作っていたのだ。

宿に持って帰る訳にもいかなかったので、野原に放置していた。

その中でも一番出来が良いのをホームズは、奴に投げた。

小ムスメは、少し危なっかしかったが、どうにかこうにかキャッチした。何でそれを渡したのか、俺は一瞬分からなかった。

しかし、ある場面を思い出した。

—— 『その為に作ったんだもの。友達だし、ね』

『……………？、友達には、お金をあげるもんじゃないの？』

『……………貴方が、普段どんな目に合っているのかが分かる言葉ね』

『私からのプレゼント、嬉しくなかった？』

『ううん、嬉しかったよ』

『そう言う事。プレゼントってのは、友達ってのは、そう言う事なの』

『……何となく分かったよ。ねえ、ローズ。その、花の王冠の作り方教えてよ』

『いいけど………どうして?』

『僕も友達にプレゼントをあげたいからね』

『なるほど』

俺はようやく、ホームズの行動の意味が分かった。

小ムスメもホームズの意図を理解したようだ。

満面の笑みを浮かべている。

『また来るよ、ローズ』

ホームズは、そう言うも母親の元へと歩いて行った。
奴にしてみれば、後ろ髪を引かれる思いだったろう。

『まあ、寂しくないと言えば嘘になるけどね……僕は本当にいい友達を持ったよ』
ホームズは、そう微笑むと待っている母親に手を振った。

『別れは済んだかい？』

ホームズは、笑顔で頷く。

『それじゃあ、出発だ。君、いつきますは？』

『いつてきます！』

『よし！』

こうして、俺たちは次の街へと歩き出した。

小ムスメにホームズなりの別れを告げて。

恥の上書き

「てな感じだ」

ヨルは、全ての話を終えた。

『つまり、ホームズとローズは、キスしてたんだ。わーお』
テイポは、にやにや笑いながら床でのびている二人を見る。

「そりゃあ、二人とも必死に隠すよね」

レイアは、呆れている。

しかし、今回の話のメインは、それだけではない。

ホームズの無茶がかなり目に付く話だ。

友達を遠ざけ、自分にだけ被害を被るようにし向ける。

ホームズは、馬鹿な行動が目立つため、忘れがちだが、決して頭が悪い訳ではない。

しかし、今回とつた行動は、馬鹿そのものだ。

自分よりも人を優先させた、と言えば聞こえはいい。

しかし、そんな程度のものではない。

今回は、偶々、ローズの姉と言う存在がタイミングを見計らって真相をぶちまけたか

ら良かったが、下手を打てばローズとの友情を全てぶち壊していたのだ。

人との繋がりを断つというのは、生半可な覚悟ではやってはいけない。

そんな覚悟をホームズは、たった七歳で決めたのだ。

レイアは、そんな事を考えながら気絶しているホームズを見る。

ジュードは、そんなホームズをおぶる。

「僕は、ホームズを寝かせてくるよ。ヨルも来るでしょ？」

「まあな」

そう言うジュードは、ホームズを背負い、ヨルはてくてくと後をついて部屋を出て行った。

「んじゃあ、俺たちも……」

「そうですね、本当は、今日打ち合わせをしときたかったのですが……まあ、明日の朝にしましょう」

アルヴィンとローエンは、ジュード達の後を追って出て行った。

「さて、ローズをベットに運ばないと」

「自分で出来るわ」

ローズは、むくりと頭を抑えながら起き上がる。

「……………」

痛みに耐えるその表情は、若干ではあるものの、つり目であるローズの顔つきを凶悪な物に変える。

「ひっ……………」

『に、睨んだって怖くないぞー!』

エリーゼとティポに、ローズは何も言わず、ふらふらとベットに腰掛ける。

「で、何処まで聞いたの?」

ローズは、レイアに尋ねる。

「えーつと……………」

どう答えればいいのか、レイアは必死に考えている。

何せ、下手なすればローズに多大なダメージを与えて仕舞うのだ。

「ホームズとの別れまで聞いた」

しかし、レイアの考えとはお構いなしにミラが答える。

案の定、ローズは顔を真っ赤にする。

「だから言いたくなかったのにー!」

ローズは、雄叫びを上げる。

「どうどう………」

「そりゃあ、私だつてき、き、き、キスの意味ぐらい知ってたわよ!でも、姉さんが、『いい、同性同士ならあり得ないけど、男女の友人相手の仲直りなら、これが一番手っ取り早いんだよ。貴方だつて仲直りしたいでしょ?』つて言うのよ!………そんな言い方されたら、やらないなんて言えるわけないじゃない!!『いいから、騙されたと思つて』つて、本当に騙す奴がいるかー!」

「いたんだろ」

ローズの心の叫びにミラが当たり前のように眩く。

ミラに向かっていきそうなローズをレイアが後ろから羽交い締めにして止める。

因みに誰も口に出さなかったが、騙される奴も騙される奴である。

しばらくすると、ローズも大分落ち着いて来た。

どっかりと腰をベットに落とす。

それを見ると、レイアは、ローズに聞く。

「あのさ、ローズ。やっぱり、辛かった？ホームズにあんな事言われて……」
「当然ね」

ローズは、苦虫を噛み潰した顔になり、ノータイムで返す。

「もしかして、自分が優越感に浸りたかっただけなのか、弱い者を助けるといふ行動に酔いたかっただけなのか……自信が持てなかった。あの時の私の言葉が実は嘘なんじゃないのかと、建前だったんじゃないかと思わざるを得なかった」

ローズは手を組む。そして、指に力が入る。

「自分が信じられなくなった。

……怖いものよ、自分を信じられなくなるって。何より、もうホームズと遊ぶ事が出来なくなった。当然と言えば当然よね。あんな事を言われて、一緒に遊ぼうなんて思えないもの」

ローズは、ポツリポツリとその時の気持ち語る。

「姉さんは随分前から気づいていたみたいだね、前日の夜に教えてくれたの。全部の種明かしを聞いた時、ホツとするよりも先に、とても悔しくなった。

だって、そうでしょ？

私がイジメのターゲットにならないくらい力があれば、ホームズは、あんな事を言わなくて済んだ……あんな自分から味方を減らすような最悪な一手を打たなくて済んだのよ。

自分の無力さが憎かった。本当に……」

「だから、ローズは……」

「そう、剣を習ったの。マールウさんにね」

そう、ローズは、ホームズと別れてから剣を習ったのだ。

ホームズがローズの戦闘スタイルを知らなかったのも無理はない。

「まあ、リアルオーブを手にいれたのは、もう少しあとなんだけどね」

そう言ってチラリと自分のリアルオーブを見せる。

「………というか、マールウさん剣使えるの？ 剣を持つてる所見た事ないんだけど

……」

何度思い返しても、キセルをふかしているところしか出てこない。

「あの人、大抵の武器ならなんでも使えるわよ。もちろん、格闘技も」

「恐ろしい人だね……」

レイアは、思わず頬が引きつるのを感じた。

「まあ、ね」

ローズは肩をすくめる。

「ふむ、ではお前はホームズのために剣術を習ったのか……」

その言葉にローズは、珍しく顔を赤くしない。

「んー、ちよつと違うわね。……私ハね、もう自分に力がないばかりに自分の傷を人に押し付ける様な事をしたくなかったのよ」

ローズは、ベツト脇にある刀を掴む。

「姉さんに言われたの。これから先、こんな事は、自分の無力を嘆く事は山程あるつて。だったら、減らせるだけ減らそうつてそう思ったの」

鞘から刀を抜き光にかざす。

白く光る刀身を見ながらローズは、それからの日々を思い出す。

「まあ、そうそう、上手くは行かなかつたけどね」

辛そうにローズは微笑む。

ミラは何と無く見ていた。

結局、力をつけたからと言って全てが思い通りには、ならない。幸せになるとも限らない。

むしろ、力をつけた事により、更に自分の力の無さを自覚する羽目になったりする。

また、力を本来の目的とかけ離れた理由でふるってしまふ事もある。

結果として不幸になってしまふ事なんてよくある事なのだ。

「ローズ……その選択に後悔はなかったか？」

ローズは首を横にふる。

「ないわ。お陰で貴方達に会えたもの」

ローズはにっこりと微笑む。

そんな事ばかり考えていたミラはローズの笑みで少し毒気をぬかれる。

「そうか」

「ええ。ピコハンを食らったけれど、なかなか楽しい時間を過ごせたわ」

レイアは、少し考える。

「もしかして、ローズがわざわざ自腹切ってまで泊まった理由って……」

ホームズが目的ではない。

ローズは、ミラやエリーゼ、そして、レイア達とワイワイガヤガヤするためだったのではないのだろうか？

レイアのそんな疑問を察した様にローズは、ウインクをし唇に一本立てた指を持って行く。

「言わずが花つてね」

そう言うのとローズは刀を鞘にしまい布団に潜り込んだ。そして、暫くすると、可愛らしい寝息が聞こえ始めた。

レイア達は、ポカンとしていた。

「……………何処かの誰かを思い出すな」

ミラの言葉にポンチョを羽織ったアホ毛男が頭に浮かぶ。

「結局、似たもの同士なんだろうね」

レイアは、ため息を吐く。

「年上って、やっぱりすごいなあ」

最後の最後でローズは、レイアに年上の実力をまざまざと見せつけて来たのだ。

たかだか、二年の違いなのだが、なるほど、これが年上かと納得するには十分の事だった。

「なんか……………初めてローズの恰好良い姿を見た気がする……………です」

『ほんとにー。普段は恋する乙女なのになー』

エリーゼとティポの言葉にレイアは苦笑いする。

そんなローズの寝顔見るとレイアは、ヨシと握り拳を作る。

「ミラ、明日頑張ろうね」

「ああ」

ミラは、力強い笑顔で頷く。

こうして、女の子達の夜は更けて行った。

覚悟とそして、ちよびり苦く、ちよびり甘い話と共に。

闘技大会

喧嘩片成敗

「よく休めたようだな」

「……お陰様で」

ユルゲンスの言葉にホームズは、不機嫌そうにエリーゼを睨みながら返す。

「何かあったのか？」

「……色々」

ユルゲンスの言葉にもホームズは、ふくれっ面で返す。

ユルゲンスは、そんなホームズに顔を引きつらせると、一行に告げる。

「さ、さっそく本日の予定だが、参加数の関係で本戦は、今日一日で全て行うことになりそうだ」

その言葉にジュードは少し面食らう。

「今日だけですか。ずいぶんハードなんですね」

ユルゲンスの後を引き継ぐ様に近くにいた男が口を開く。

「何戦あるかは、今日の組み合わせ次第だ」

「鐘がなったら、闘技場にあつまってくれ。開始の合図だ。私達は、闘技場で待ってるよ」

ユルゲンス達はそう言つて、宿屋を出て行つた。

アルヴィンは、それを見送ると口を開く。

「さて、時間ができたみたいだけど、どーするよ」

ミラが真つ先に言う。

「私は広場を見て来る。少し、気になるのでな」

「あ、わたしも行く！じつとしても緊張するだけだし」

レイアの言葉にアルヴィンは、少し考える。

「んー。じゃあ、おれも行くか」

レイアは、少し驚いてアルヴィンを見る。

ジュードは腕を組んで考える。

「僕は……」

『ジュード君！観光しよーよー！』

ジュードが悩んでいると、ティポから、声がかかった。

「私も……色々……見たい……です」

「エリーゼは、街に見覚えがあるんだっけ」

ジュードの言葉に、ホームズは首を傾げる。

「そうなのかい？おれ、知らないんだけど……」

『ホームズがいない時に、そういう話をしたんだよ』

ティポが、少し意地悪く言う。

ホームズは、みんなが危なかった時にそばにいなかったのだ。

ホームズは、ティポの言い草に肩を竦める。

「へいへい、悪かったよ」

『埋め合わせぐらいして欲しいな』

「昨日の仕打ちを棚に上げて何を言ってるんだい……」

しかし、ティポとエリーゼは、そんなホームズの悪態に構わず、曇りなき眼で、ホームズを見ている。

「……………」

ホームズは、しばらく目を離さないで睨む。

しばらくすると、ホームズは、大きくため息をつく。

「……………わかったよ。ついて行くよ……」

結局、ホームズが折れるハメになった。

『やったー。これで、ホームズ君も友達だねー』

テイポは、大喜びでホームズの周りを飛び回る。しかし、ホームズは、イマイチ釈然としていない。

『『これで』って、今までは何だったんだい？』

「胡散臭い人……です」

「甘いな、ジャリ。正解は、雑魚だ」

エリーゼの言葉にヨルは至って真面目な口調で言う。

「……君達、おれになら何を言っても許されると思ってるだろう」

ホームズは、半眼で言う。

「悔しかったら否定してみるんだな」

ヨルのその人を蔑んだ物言いにホームズは、こめかみをヒクつかせると、ヨルに向かって攻撃態勢をとる。

そんな彼らを見て、エリーゼは、オドオドしている。

ローズは、ため息を吐くとどうしようかと考え始める。

レイアの方を見ると、何だかよく分からないが、応援しているように見える。

(ホームズと一緒に周りなよ！)

よく、口の動きを見てみると、レイアはローズにそう言っていた。

ローズは、さらに考えると、

「……じゃあ、私はレイアと一緒に周るわ」

レイア達の方を見てそう言った。

レイアは、落胆しているし、アルヴィンは、含み笑いをしている。

すると、ローエンが、ずっと前に出る。

「では、私はエリーゼさん達と行きましょう。ジュードさんも一緒にどうですか？」

ジュードはローエンの誘いに頷く。

「うん、そうするよ」

アルヴィンは、それを見届けると口を開いた。

「それじゃ、鐘がなったら、闘技場直行って事で」

ホームズは、アルヴィンに手を振るとローエン達と街に繰り出した。

◇◇◇

「なるほど、ジュードさん達と、ホームズさんはそんな出会いをしていたのですか……」

「うん、まあ……」

「俺もな」

横から口を挟むヨル。

道すがらローエンら、ジュードから、ホームズ達との出会いについて聞いていた。ホームズは、ため息を吐いている。

「本当に死ぬかと思ったよ……それもこれも、このちんちくりんが悪いんだ！」
そう言うのとエリーゼのほっぺたをつねる。

「ホームズ?!」

ジュードの声が裏返る。

「さっきの、暴言と昨日のピコハンを含めてこうしてやる、こうしてやる！」
すると、ティポが飛んできてホームズに噛み付く。

「んぼほお!!」

ホームズは、一生懸命引き剥がそうとする。
しかし、健闘虚しく伸びるだけだ。

「取れないんだよな、これ」

ヨルは肩からホームズの惨状をみている。

「いい気味……です」

エリーゼは、ほっぺたを痛そうに抑えながら、ホームズを見る。

ホームズは、スポンとティポを外す。

「死ぬかと思った……」

ホームズは、肩で息をしている。

『エリーゼをいじめるからだー、このロクデナシー!』

「んだと、このムラサキダルマー!」

ホームズは、ティポに掴みかかろうとする。

そんなホームズをジュードは後ろから羽交い締めにして止める。

「あーもう! やめなよホームズ」

そんな中ティポを助け出した、エリーゼは、ホームズに向かって舌を突き出している。

「本当にいたよ、まあ、あの元気な嬢ちゃん予想とは少し違うようだが……」

すると、突然キセルを持った男が煙を吐きながら近づいてきた。

「……………で、お前は何してんだ?」

キセルを持った男、マールロウはキセルを啜えて、ふらふらと近づいて来た。そして、ホームズにデコピンを放つ。

「……いってえ……何をするんです?!」

マールロウは、やれやれと言う風に煙を吐く。

「お前こそ、何、大人気ない事やってやがる」

そう言うのと、マールロウは、エリーゼの頭にポンと手を置く。

「大丈夫だったか、嬢ちゃん？」

「はい」

『お陰様でねー』

エリーゼとティポが話す。

そんなティポに、マールロウは、目を丸くする。

「おつどろいた……本当に喋りやがる。ナニもんだ、お前？」

『ティポだよー。そして、こつちがエリーゼ。僕はエリーゼって呼ぶけどね』

そう言つて、ティポはマールロウに自分とエリーゼの紹介をした。

マールロウは、少し困った顔をしている。

「そういうわけじゃねーんだが……ま、いっか。俺はマールロウ。よろしくな、ティポ、

エリーゼ。ついでにその奥の2人もな」

マールロウの言葉にジュードとローエンは、それぞれ名乗る。

「ジュード・マティスです」

「ローエンと言います。こちらこそ、よろしお願いします」

「よろしく……です」

『よろしくー！これで、マールロウも友達だねー』

「友達？」

マールロウは、思わず聞き返す。

『だって、ホームズの魔の手から救ってくれたんだもん。ホームズよりもずっといい

よー』

「……なんだろう、たかが、ぬいぐるみごときの戯言なんだけど、凄く心にくる………」

ホームズは、顔に暗い影を落としながら、エリーゼを見る。

「ティポの言うとおり……です」

ホームズの心は完全に折られた。

その様子をマールロウは、笑いながら見ている。

「くくく。フラれたな、ホームズ」

「うるさいー！」

掴みかかるが、簡単に頭を押さえられる。

そんな様子を見て、ヨルは言う。

「で、お前は何しにきた?」

マールロウは、ホームズへの手を緩めずに返す。

「エールを送りに、な。さつき、そこでローズ達と会ってな、ホームズ達も出るって聞いたものだから、一言激励してやろうとしていたら……」

「さつきの騒ぎが、目に入った、と?」

「そう言う事だ。さて、お前はどうする?」

「何がです?」

ホームズは、聞き返す。

そんなホームズに、マールロウは、やれやれといった風に肩を竦める。

「お前は、仮にも立ち入り禁止の身だ。こうやって、俺と会う程度なら問題ないが、闘技大会なんて、公の舞台に立つんなら話は、別だ」

その言葉にローエン達は驚く。

「ホームズ、立ち入り禁止って……」

『どうして、そんな大事な事を黙ってたんだよー! バホー!』

ジュードとティポは、口々に言う。

ホームズは、そんな文句は、どこ吹く風と言ったように、

「だって、聞かれなかったからね」

しれつと言った。

マーロウは、ため息を吐く。

「つとに相変わらずだな。そういうところ。ローズには、言えないだろうが、こいつらには、言つとけや……まあ、いいや。小言は、後にしてやる」

マーロウは、キセルをホームズに向ける。

「適当な偽名を今考えろ。俺がそつちで、提出させる」

「貴方にそんな力があるとは知りませんでしたよ」

ホームズは、要らない茶々を入れると少し考える。

どうせなら、少し意味深でかっこいいものがいい。

そんな事をくだらない事を真剣にやっていた。

しかし、なかなか、いい案が出てこない。

「めんどくせー。ワトソンでいいだろ」

ヨルが、横から適当に言う。

「いや、もう少し別の……」

「残念だが、時間切れだ。手続きには、時間がかかるんでな」

ホームズの反論虚しく、マールウは、ヨルの案である、ワトソンを採用してしまった。

「んじゃあ、そういう事で手を打つとくから、それとホームズ」

最後にホームズの方を向く。

「お前、その生き方どうにかしろよ。でない、いつか取り返しをつかない事になるぞ」

マールウの言葉に、ホームズは、肩を竦める。

「小言じゃなくて、エールがほしいですね」

いつものように軽口を叩くが、マールウの真剣な顔を見て、ホームズは、ため息を吐く。

「……………一応、注意しておきますよ」

「……………ま、今のお前じゃ、そう言うのが精一杯だろうな」

マールウは、そう言うのとホームズの横を通り過ぎる。

「頑張れよ、色々とな」

最後に頭をポンと叩いて闘技場の方に消えて行った。

ホームズは、マールウに叩かれた場所を仏頂面しながら、触っている。

どうやら、子ども扱いされた事が不満だったようだ。

「へいへい、頑張りますよ」

歩き出そうとすると、ローエンに呼び止められる。

「ホームズさん、聞いてもよろしいですか」

「何をだい？」

「貴方が、この街に立ち入り禁止になった理由です」

この言葉は、ホームズにとって予想通りだ。

だからこそ、このセリフがでる。

「内緒。男は、秘密があつた方がカッコいいからね」

人差し指を口に持つてくる、ホームズ。

ジュードは、またか、と言う顔をしている。

「言うつもりはないんだね」

「まあね、こればかりは……」

ホームズは、大きくため息を吐く。

そして、ホームズは、手を一つ叩くとエリーゼを見る。

「そんな事より、今はエリーゼだろうか？何か思い出したかい？」

強引にホームズは、話を変えた。ローエンは、少し納得していない。

そんなローエンにホームズが、耳打ちする。

「あーなつたら、ホームズ、喋ってくれないよ」

「なるほど。訳ありと言うわけですか……」

「というか、訳しかないよ……」

「君達、聞こえてるよ」

ホームズは、半眼で2人に言う。

「で、ジャリ、思い出したか？」

ヨルは彼らに構わずに言う。

『ジャリ』と言う言葉にエリーゼは、顔を顰めるが答える。

「いいえ……」

『僕も覚えてないなー。というか、ヨルが心配するなんて、どういう風の吹きまわしー？』

ティポの質問にヨルは顔を邪悪に歪める。

「ククク、心配だど？馬鹿言え。どうして俺が、んな事をせにやなんのだ」

ヨルは尻尾の先をエリーゼの顔に向ける。

「単純に興味があるんだ、俺はお前にな」

「私……にですか？」

エリーゼは戸惑う。

ヨルは白い歯を見せる。

「どう考えても不自然だろ。お前の精霊術の実力。

才能とか、努力とかで片付けるには、無理がある。まさに、謎だ」

ヨルはそこで一旦言葉を切ると再び話す。

「謎を解きたいのは、知らないことを知りたいと思うのは、知性のある生物の本能、いや、欲望と言っても間違いじゃないな。お前もそうだろう、ホームズ？」

「……おれに振らないでおくれよ」

突然の事にホームズは、ため息を吐く。しかし、否定はしない。

ホームズの行動原理でもあるのだ。

ポカンとしているエリーゼの方にホームズは、顔を向ける。

「ま、つまり、ヨルに心配そんなものを期待するのは間違いって事さ」

ホームズは、ヨルの言葉をそうまとめた。ジュードは納得すると、兼ねてからの疑問をタイプに尋ねる。

「そう言えば、タイプはいつからエリーゼと一緒にいるの？」

『わすれちゃったー。でも、エリーとは、研究所にいた時から一緒だよ』
さらりと、とんでもない事を言うタイプ。

「え、研究所……」

「……………」

ジュードは、驚いているし、ヨルは興味深そうにしている。ジュードの言葉に今度はエリーゼが、答える。

「ティポは……研究所の人が連れて来てくれたんですよ、ね」

「ローエン、ホームズ、研究所って……」

ホームズは顎に手を当てる。

「十中八九、エリーゼの精霊術に関係していると思うけど……所詮は、推測だからなあ……」

「証拠がない、という訳か……」

ヨルは納得する様に言う。

「そゆこと。ローエンはどう思う?」

ホームズは、ローエンに振る。

「うーむ……」

ローエンは、あご髭をなぞりながら考えている。

その様子をティポが興味深そうに見ている。

『ローエン君は、そうやってよくヒゲを触ってるよねー?』

その問いにローエンは、静かに返す。

「こうしていると、落ち着いて考えがまとまるもので」

そう言うのと少し、いたずらっぽいな笑みを浮かべる。

「どうですか、ティポさん？ほらジュードさん達も……」

「え……僕は……」

「おれだって……」

ジュードとホームズは、引いている。

「ほら、遠慮なさらずに、ジジイのヒゲは嫌いですか？」

しかし、ずいっと顔を前に出すローエン。それに押し負けたジュード達は大人しくローエンのヒゲを触った。

触り終わると、エリーゼは、うかない顔をする。

心配になったジュードは、エリーゼに尋ねる。

「エリーゼ、どうしたの？ヒゲが気持ち悪かった？」

「すごいね、ジュード君……」

ローエンは、ジュードの言葉に少しショックを受けると、ヒゲを再び触る。

「おかしいですね。手入れは怠っていませんが……」

そんな事をしているとエリーゼは泣き始めた。

ホームズは、思わず顔を顰める。

「……………」

「え、え、え？どうしたのエリーゼ？」

ジュードは突然の事にあたふたとして、尋ねる。

「……………お父さん……………」

涙なからに絞り出した言葉は、自分の父親のことだった。

「お父さん？エリーゼのお父さんにもヒゲがあつたの？」

ジュードからの問いにエリーゼは、しばらくしてから頷いた。

「お父さん……………お母さんに会いたい……………うっ……………ひつく……………」

その時、闘技大会の開始を知らせる鐘が鳴り響く。

「鐘が……………！」

「始まりだねえ……………でも……………」

ホームズは、そうこぼすと、エリーゼを見る。

ローエンは、泣き止む気配のない、エリーゼに静か尋ねる。

「エリーゼさん。ご家族がどこにいるか思い出したのですか？」

エリーゼは、涙を拭きながら首を横に振る。

「なんだ、使えないな」

すぐさまヨルにアイアンクローをかけるホームズ。

そんな彼らに構わず、ローエンはエリーゼに尋ねる。

「この街なら、エリーゼさんを知っている人がいるかもしれません。ミラさん達とお別れして、探してみますか？」

あやすように、しかし、厳しい言葉をローエンは投げかける。

そんなローエンの問いに直ぐに涙を拭いて顔をあげる。

「み、みんなと一緒がいい。と、友達だもん」

『僕もエリーの友達だから、一緒だよ』

テイポもエリーゼを励ます。

「テイポ、ありがとう」

元気になったエリーゼを見て、ジュードは、身を屈めて声をかける。

「じゃあ、闘技場に行こっか。歩ける、エリーゼ？」

エリーゼは、必死に涙を堪える。

ホームズは、ため息を一つ吐くとポケットから、ハンカチを出して渡す。

「ほら、どうぞ」

エリーゼは、おずおずとハンカチを受け取ると、涙を拭く。

「はい……頑張ります」

エリーゼの決意が固まると一行は、闘技場へ歩き出した。

「あの……これ……」

エリーゼは、先程のハンカチを返そうとする。

「いいよ、別に返さなくても。そんなもの、たくさんあるしね」

「でも……」

まだ引き下がるエリーゼにホームズは、ため息を吐く。

「じゃあ、こうしよう。これは、お詫び」

「お詫び？」

「そ。さつきは、まあ、おれもやり過ぎたし、そのお詫び。これなら、文句ないだろう」

「……分かり……ました。これは、もらっておきます」

うんうんと、ホームズは満足そうに頷く。

「仲直りの証……です」

そう言ってハンカチをティポの中にしまった。

「……………なに、あれ？」

「さあ？」

「私に聞かれても……………」

「良かったじゃないか、大切にしてもらえて」

ホームズは、最後にため息をもう一つ吐く。

「んじゃあ、闘技場に行きますか……………」

こうして、ジュード組は、闘技場へ向かった。

嵐の前の台風

「それにしても賑やかだね」

レイアは、街を見渡しながら言う。

「当然。十年に一度のお祭りだからね」

ローズは、そう答える。

そんなローズにレイアは言う。

「ローズ、どうして、ホームズ達と回らなかったの？」

その質問にローズは、答える。

「ん、まあ、私の知らない時間のホームズが、どう過ごしていたのか知りたいのよ」

「……なるほど。この中じゃ、ホームズと一番仲が良いのは、レイアだもんね」

アルヴィンは、納得する様に言う。

「それなら、ローエンの方が付き合いは長いのではないか？」

ミラが理解出来ないと言うように聞く。

そう、ローエンは、ホームズのお得意様の執事なのだ。

一行の中で一番付き合いが長いと言える。

「まあ、そうなんだけど……あの馬鹿と一緒に引っっちゃったからね……できれば、こう言う話は本人のいない所でしたいし……」

ローズは、ため息を吐く。

同じ幼馴染みで苦労している身としては、放って置けない。

レイアは、そう思い口を開く。

「分かった、教えてあげるよ。前払いももらってあるしね」

レイアは、ウインクをする。

「貴方は、本当に良い人ね。さすが、あんな奴と友達になるだけの事はあるわ」
ローズの微妙な褒め言葉にレイアは、苦笑しながら話し始めた。



「と、まあ、こんなところかな」

レイアは、一通り話し終えた。

勿論、ホームズの過去については話していない。

勝手に人の過去をべらべらと喋るような人間ではない。

「へえー。というか、貴方達ホームズと戦ったんだ……」

ローズは、額に手を当てながら、やれやれと言った風にため息を吐く。ミラは詫げれもせずに言葉を繋げる。

「ああ。レイアは純粋な勝負だったが、私達の場合は違うぞ。レイア達の勝負が、プライドを賭けた戦いなら、私達の場合は、命を賭けた闘いと言ったところだ」

「……ミラ様、そう言う事を幼馴染みの前で言うのはどうかと思うぜ」
アルヴィンは、頬を引きつらせながら、突っ込む。

うまい事を言ったつもりミラは、不思議そうに首を傾げている。

「……なんかこう言う気遣いの出来ないところを見ると、本当にマクスウエルなんだな、て思うわ」

ローズも頬を引きつらせている。

「それで、怪我を治すのを手助けするうちに仲良くなったと……」

ローズは、少し唇を尖らせる。ちよつと不満そうだ。

「ううん、違うよ。ホームズは、治療を受けて普通に治したよ」

「……………看護師だよね、レイア?」

「うん。でも、その時わたしは、ミラの世話で忙しかったし……」

ローズは、ホームズの事を思うと、なんだか切なくなってきた。

「あのさ……もう少し優しくしてやったら? あいつ、ああ見えて良いところもあるの

よ」

自分が、出会い頭に飛び蹴りかました事は、遥か彼方に蹴り飛ばして言う。

「例えば？」

アルヴィンが尋ねる。

その言葉に、思わず口ごもる、ローズ。

「え…………つと…………」

そう、いざ探すと全く良いところが出てこないのだ。

まあ、ほんのひと時しかないのだから、当たり前と言えば当たり前なのだが……

「…………おい」

アルヴィンが、痺れを切らす。

「待って」

ローズは、必死に記憶を辿る。

「顔は…………別に特別かつこいい訳じゃない…………性格は…………泣いてた記憶の方が強いわ

…………」

しかし、出てくるのはロクなものじゃない。

アルヴィンとレイアは、こそこそと話す。

「(おい、ホームズの良いところなんかねーのかよ)」

「(仕事熱心だったよ)」

「(……何かパンチが弱いな……他にないの?)」

「(えーっと……やりたい事がはつきりしている事かな?)」

「(お、それいいんじゃない。というか、ローズ差し置いて、どしどし出してきたねえ……)」

「(だから、言いたくなかったんだよ)」

レイアは、ため息を吐く。

恐らく、ローズが自覚していないだけか、あるいは、あるにはあるが恥ずかしくて言えないだけかのどちらかである。

アルヴィンは、後者の可能性に賭けて少し探りをいれようとする。

しかし、ミラが口を開く。

「ふむ、やはりホームズのいいところは、やりたい事がはつきりしている事だろう。そのためには、迷わないし、止まらない、そして、諦めない。これは、いいところはだろう」

ローズは、ミラの言葉を聞いて、嬉しい様な、悔しい様な、微妙な顔をする。

レイアとアルヴィンは、ため息を吐く。

「ほら、想い人の良いところぐらい、とっと出しな」

アルヴェインの言葉に一度頷きかけて、やめる。

「……………想い人じゃない！」

絞り出すようにいう言葉に説得力は、微塵もない。

何かを言おうとするが、顔がどんどん赤くなっていく。

「……………えがお」

「は？」

つぶやくように言った言葉に、アルヴェインとミラは怪訝そうに聞き返す。

「おい、嘘だろ。あんな胡散臭い笑顔の何がいいんだ？」

「う、うるさい！ 違う！ 本当に嬉しい時に笑った時の顔よ！ 誰があんな胡散臭い笑顔を褒めるのよ！」

「ひつでえ、言い草」

アルヴェインは、バツサリ言い切ったローズに頬を引きつらせる。

ミラは顎に手を当てて考える。

「ふむ、私は胡散臭い笑顔しか見た事がないな。昨日の晩のヨルとローズの話を聞く限りでは、ある様だが……………アルヴェインはどうだ？」

「ミラ様も見た事のないものを俺が見た事あるわけないだろ」

アルヴェインは、肩を竦める。

ミラはそれを聞くと納得する。

「という事は、それを知っているのはローズだけか。ある意味見てみたいな」その言葉を聞くとローズは、少しだけ嬉しそうな顔をする。

『ローズだけ』というところが気に入ったのだろう。

「まあ、滅多に見せないしね。私が見た時も目の色を褒めた時と別れの時の二回だけだし」

完全に嬉しそうな顔になると、とても楽しそうに話す。

もう、ここまで露骨に色々表にだしているのだから隠そうとしなくていいような物なのだが……

「……で、レイア。さつきから無言だけど、もしかして……」

アルヴィンの言葉にレイアは、申し訳なきように頷く。

「……………あるよ、見た事……」

そう、レイアは見た事があるのだ。ホームズの事を『友達』と言った時と、レイアが身の上話をした時の合わせて二回。

つまり、ローズと同じだ。

「え……と、き、気を落とさないで？」

どうにか慰めようとするレイア。

「……別にどうって事ないわ」

ローズは、斜め下を見てレイア達と顔を合わせない。明らかに落ち込んでいる。

余計な話を振ったアルヴィンをレイアは、睨む。

完全に気まずい空気になってしまった。

「お前ら、何してんだ」

声に振り返ると、マーロウが近づいてきた。

「えっ……と」

「マーロウだ」

一生懸命思い出そうとしているレイアにニツと笑いながら言う。

「えっと、レイアです」

「ミラ・マクスウェルだ」

「アルヴィンだ」

マーロウからの自己紹介にそれぞれが返す。

「なるほど。覚えた覚えた。で、お前達はこんな所に何しに来たんだ？」

「……この石像を見に来たんたよな？」

アルヴィンは、ミラに尋ねる。

「気にしないでくれ」

ミラはアルヴィンの問いにそう答える。

マーロウは、少し不思議そうな顔を見ると、今度はローズに尋ねる。

「で、お前は何してる」

「……色々あるんです」

ローズは、顔に暗い影を落しながら言う。

そんなローズに大きく息を吐く。

「別にホームズの笑顔を見た奴が何人いようと、どうでもいいじゃねーか」

「そんな事思っていないです！」

しつかり、全部聞いていたマールロウにローズが顔を真っ赤にして怒る。

パンチをしようとするローズの頭を軽々と抑えて、マールロウは、キセルをふかす。

「相変わらず素直じゃねーな。大方、お前ホームズにまだ、悪態しかついてないだろ」
凶星を突かれローズは黙る。

そう、ホームズと再会してから、ローズのやった事と言えば、暴力と悪態のみなのだ。
「つとに……うかうかしていると、誰かに取られるぞ」

マールロウのそんな忠告にローズは、さつきとは打って変わって冷静になる。

ローズは、マールロウに冷ややかな視線を送る

「何処にあんな奴を好きになる馬鹿がいるんですか」

全員の視線が、頭を抑えられているローズに注がれる。

ローズは、ずっと視線を逸らす。

「あ、あんなとかろにイスラさんだ」

動揺したのだろう。囁んでいる上に、微妙に文章になっていない。

マールロウは、イスラと呼ばれた女性を見ると眉を顰める。

「怪我は良さそうね」

イスラは、近づきながらレイアにそう言った。

「はい。イスラさんのおかげです」

「そう」

不思議に思ったローズは、レイアに尋ねる。

「何があつたの？」

レイアは、少し声をひそめると、話しだした。

「この街に来た時にね、落石事故に巻き込まれちゃつて……」

「……それって、出かけがけにティポが言つていた？」

「そ。まあ、なんて事なかつただけど」

イスラは、アルヴィンとマーロウに視線を向ける。

それに、レイアが気付く。

「アルヴィン君と、マーロウさんが、どうかしました？」

「い、いえ」

イスラは、気まずそうに目を逸らす。

「かまわないよ、イスラ先生」

アルヴィンは、ミラに近づきながら、言葉を続ける。

「先生には、母親を診てもらってるんだ」

「お前の母親が？この街にいるのか？」

ミラは少し驚いている。

「ああ。だからアルヴェイン君この街について詳しくあったんだね」

レイアは、ようやく合点が言ったようだ。

アルヴェインは、少し目を伏せて頭の後ろを搔く。

「ちよつと具合が悪くてね。父親も兄弟もないから、俺がない間は、先生に見てもらってるんだ」

そんなアルヴェインにミラは珍しそうに言う。

「今日はやけに自分の事を話すじゃないか。珍しいな、普段は何処か誰かさんの様にはぐらかすくせに」

ミラの言葉にアルヴェインは、肩をすくめる。

「別に気のせいだろう？」

アルヴェインは、そう流す。

そして、さらに言葉を続ける。

「ただ……治してやりたいだけだよ。それで、故郷に連れて帰ってやりたいんだ」
故郷という言葉にレイアは、誰かさんを思い出す。

「お母さんの故郷遠いの？」

アルヴィンは、シャン・ドウの青い空を見上げる。

「めちやくちやな」

そんなアルヴィンをマールウは、眉を顰めて見ている。

「そうか。何か手伝える事があれば言ってくれて構わないぞ？」

『おれは、それ以外の方法を探している。もし、君が例の方法を取ろうと言うなら……』

「ああ、あればな」

昨夜の事を思い出し、アルヴィンは下を向いて言う。

アルヴィンの後、レイアは、イスラに尋ねる。

「マールウさんは？」

「俺はこれでも街の重役なんだ。だから、少し緊張したんだろ。な、イスラ？」

「え、え、ええ。そうよ」

マールウは、肩をすくめるとイスラに返す。

「つたく、何度も顔を合わせてるんだから、そろそろ慣れて欲しいもんだぜ、イスラ」

「き、気を付けるわ」

少し、その会話に不自然な物をミラは感じた。しかし、それを尋ねる前に、マールロウは、ローズ達に話す。

「つーか、お前らもとつとと、闘技場の方に行っておいた方がいいぞ。いい場所とられちまうからな」

「……なにいつてるんですか?」

ローズは、ポカンとしている。

「なにつて……闘技大会に決まってるだろ。こんな祭り、十年に一度しかないんだ。見なきゃ損だけ。つーか、お前が1番分かってるだろ」

ローズは、頭をおさえる。

「もしかして、聞いて無いんですか? 私達出場するんですよ」

今度はマールロウがポカンとする番だ。

「……何に?」

「闘技大会に」

「何で?」

「大会で優勝する事がワイバーンを貸してもらおう条件だから」

「誰が出る?」

「ここにいるミラとアルヴィンとレイア、それに私。後はホームズを含めた三人」

マールウは、それを聞くと大きくため息を吐く。

「ンの馬鹿……どうして、そういう大事な事を言わないかね」

これは、由々しき問題だ。

十年という歲月のおかげで成長している為、一部の人間以外には、彼が立ち入り禁止のホームズだとは、気付かない。

しかし、名前が出てしまえば隠しようがない。

マールウは白いケムリをモクモクと吐き出す。

「取りあえず、奴らを探してくるかね。場所とかわかるか？」
聞かれるが皆顔を横に振る。

しかし、レイアが途中で止める。

「多分、何かケンカしている気配があれば、間違いなくそこにいますよ」
ホームズとヨルの仲の悪さは折り紙付きだ。

マールウは、にやりと笑う。

「ありがとよ、嬢ちゃん。おら、ローズ、てめーも負けんなよ」

「べ、別に勝つても負けても関係ないです、私には」

「いやいや。負けたらワイバーンを貸してもらえないだろ。何言ってるんだ？」

「……………あ、そっち」

ローズの言葉にマーロウのニヤニヤが、さらに強くなる。

「そつちねえ……何だと思ったんだ？」

ローズは、迂闊な事を言った自分を絞め殺したくなった。

顔が熱くなってくるのが良く分かる。

「う、うるさい！とつとと行って来い、ジジイ！」

敬語も礼儀も全て吹っ飛ばして、ローズは、マーロウに言う。

マーロウは、その言葉を聞くと大笑いして人混みに消えて行った。

「えっ……と……大丈夫ローズ？」

レイアに尋ねられたローズは肩で息をしている。

「問題ないわ……」

アルヴィンは、ため息を吐くと、年長者として、アドバイスをする。

「ま、アレだ。これから、お前は一緒に旅をするわけだから、それで、色々知っていけばいいだろう」

アルヴィンからの慰めの言葉に少し元気が出たようだ。

花が咲いた様に笑うといつももの様に言う。

「別に私には関係ないわ」

レイアは、そんなローズを見てクスリと笑う。

「言うと思った」

そんな会話をしていると、ユルゲンスがローズ達に近づいて来た。

「ユルゲンス？あなた今日は闘技場じゃなかったの？」

イスラは、驚いた様だ。

ユルゲンスに、イスラは、思わず歩み寄る。

「こっちに少し用事があったんだ。……それより君達イスラと知り合いだったのか？」

「うん！あ、でも、ローズは分からないな……」

レイアは、元気良く答えたはいいが、心配そうにローズを見る。

すると、ローズは微笑んで答える。

「知り合いよ。昔、よく遊んでもらったわ」

「へえー」

「私の父と母は、商売をやっていて忙しくてね。年の離れた姉さんもいたんだけど、やっぱり店の手伝いで忙しくて、私にかまってるヒマがなかったの」

そう言って、イスラを見る。

「そりゃあ、寂しくてね。そんな時、いつも相手をしてくれたのがイスラだったのよ」

ローズは、昔を懐かしむ様に流暢に喋る。

恐らく、ローズにとつて、とても幸せな記憶なのだろう。

レイアは、ローズの横顔を見ながらそんな事を考えていた。

「なるほど、そんなことが……それにしても、イスラさんとユルゲンスさんって知り合いだったんだ」

ユルゲンスとイスラは、面白そうに微笑む。

「知り合いも何も、イスラは、私の婚約者だよ」

「婚約……?」

ミラは首を傾げている。

「わあ、素敵ですね!」

レイアは、心の底からそう思っているのだろう。

「ははっ、ありがとう」

ユルゲンスはお礼を言う。

「イスラも、おめでとう」

ローズもイスラに祝福の言葉を掛ける。

「ええ、ありがとう」

イスラは、微笑みながら返す。

「イスラ、この人達が我が部族の代表になってくれた人達だ」

「ええ、そうらしいわね。私もさつきローズから聞いたわ」

そして、そんな中傾げていた首をミラは、戻す。

「おお、あれか。結婚という奴だな。お前達もネズミの様にたくさん子供をつくるのだぞ」

突然の爆弾発言にその場にいた面子は、空いた口がふさがらない。

どんな事も涼しく顔してのらりくらりと、やり過ごすアルヴィンですら、そんな感じだ。

「ミラ……」

レイアは、肩を落としながら言う。

ローズはアルヴィンによって尋ねる。

「いつもこんな感じ?」

「だいたいな」

アルヴィンの答えにローズは、自分が旅について行く事を少し、後悔した。

その時、鐘が街に鳴り響く。

「闘技大会の鐘だ」

ユルゲンスは、つぶやく。

「ユルゲンス、ごめんなさい。私今日仕事なの」

「そうか……仕方ない。勝利を祈っててくれ」

そういうとユルゲンスは歩きだした。

「さて、俺たちも行くか」

「そうだね」

「うむ」

「よしー！」

ローズは頬をパンと叩く。

「んじゃ、ととつと闘技場に行きますか」
こうしてミラ達は、闘技場に出発した。

やられたら倍返し

「待っていたよ。お仲間は先についているよ」

ホームズ達が着くとそこには、すでにローズ達が来ていた。

レイアは、ジュードの方に歩いて行った。

恐らく、先程の観光で、手に入れた情報を交換するのだろう。

ホームズは、それには参加せず、一人でポツンと立っているローズに声を掛ける。

「やっほー」

ホームズは、緊張感無く手振る。

ローズは、ため息を吐く。

これから、試合だというのにホームズからは、全く緊張感というものを感しない。

「余裕そうね、随分と」

「いやいや、これでも緊張しているだよ」

そう言っただあくびをする。

「気楽ね、貴方は」

ローズは、馬鹿にする様に言う。

「いいだろう、別に……」

その時ホームズは、気付いた。

ローズの手が震えている事に。

「……君、もしかして緊張してるのかい？」

「………悪い？」

キツと凄い勢いで睨まれる。

ホームズは、何と無く猛獣を目の前で相手にしてる気分だ。

「そういう時は深呼吸をすれば……」

「もう、何度やったか分からないわ」

唇は、白く乾いている。

「ヨルの肉球でも触る？」

「……冗談は、顔だけにしなさい」

「……傷付くから、やめて」

ホームズは、泣きそうだ。

ヨルはクスクスと笑っている。

ホームズは、目元を拭くと、ローズに言う。

「目をつぶっておくれ」

「は？」

ローズは、突然の事に訳が分からないという顔をする。

「いいから、いいから」

ローズは、言われるがままに目を閉じる。

何をされるのか、ローズには全く見当がつかない。そう思い、目を薄く開ける。

しかし、それに気付かないホームズでは、ない。

「目を閉じてと言ったはずだよ」

そういうと、ヨルに指示をだし、目を閉じさせる。

ローズは、肉球の感触を感じながら、動揺していた。

目を薄つすら開けたあの一瞬、ホームズが、両手をローズの両頬に伸ばしているのが見えた。

何をされるのか、考えだすと止まらない。

ローズは、自分の顔が熱くなっていくのを感じる。

次の瞬間、その熱が最高潮に達する。

思わず目を開けると、そこにはローズの両頬をつねっている、ホームズがいた。

「……何してるの?」

ローズの質問には、答えない。

「たてたて♪」

代わりにローズの両頬をつねったまま、上下に動かす。

もちろん、痛い。

「よんよん♪」

次は、横に引っ張る。

もちろん痛い。

「まーるかいて、チョンツ!」

最後に、頬をぐるっと回して強く引っ張る。

もちろん……

「!」

痛い。

ローズは、両頬を抑えている。

対するホームズは、誇らしげだ。

「どうだい、緊張は？ 母さん直伝なんだけど」

ローズは、返事をしない。

代わりに、右ストレートで答える。

「っうお！」

ホームズは、ギリギリでバックステップして、躲す。

「……躲したか」

「危ないじゃないか！」

ホームズは、冷や汗をかきながら、叫ぶ。

試合前に怪我なんてするわけにはいかない。

「なんだか、よく分からんが、地雷を踏んだ様だな」

「分かりきつてる解説をありがとう。君が居てくれて、おれは、幸せだよ」

ヨルの呑気な物いいに青筋を浮かべながら、ホームズは、返す。

そうこうしてらうちに、今度は飛び蹴りが、飛んで来る。

ホームズは、全力ダッシュで、ローズから、逃げる。

そんな、ホームズをローズは、全力で追う。乙女心を無自覚とはいえ、弄んだ罪は重いのだ。

「……誰か止めたら」

一部始終見ていたジュードは、ポツリと呟く。

もうそろそろ、試合が始まるのだ。

いい加減にして欲しいのだが、2人は、こちらに気付かない。

「任せろ、ジュード」

ミラはそう言うと、胸に手を当てる。

「天杯溢れよ……」

「み、ミラ？」

「スプラッシュ!!」

突如現れた水亀から、ローズとホームズに大量の水が降り注ぐ。

しかし、

「完全にとばっちりじゃねえか」

ヨルは巨大な生首状態になってその精霊術を丸呑みにした。

その後すぐにその生首は、揺らぎ始め、いつものヨルの姿に戻った。

ホームズとローズは、げんなりとした様子で、ミラを見る。

どこの世界に、喧嘩を止めるのに精霊術を使う奴がいるのだ。

しかし、ミラは詫びれもせず、しれっと言う。

「そこまでだ、2人とも」

「……ミラ、もう少し別の止め方はなかったのかい？」

「1番、手っ取り早かったので、この方法を取らせてもらった」

「……ああ、そう」

ホームズは、ため息を吐く。

ローズも同じ様な顔をしている。

「さあ、行くぞ」

ホームズ一行は、会場へと、歩きだした。

ローズだけ止まり、自分の手を再び見てみる。

「……感謝しないと、ね」

不服そうに、そして、ほんの少し嬉しそうに呟く。

「ローズ、早く行くよー！」

「了解」

ホームズの言葉に手から視線を逸らす。

今なら負けそうに無い。

ローズは、すっかり震えの収まった手を刀に掛けながら、心に思った。

◇◇◇◇

【続いての登場は、キタル族代表だ】

一行が、辿り着くと会場の扉が、重々しく開いた。

扉の開かれた先にはこの前見た円状の会場が広がっていた。

ただし、前と違い、客席にお客がたくさんいた。

恐らく、ありとあらゆる部族が居るのだろう。

「こんなに大勢……」

ジュードは、息を飲む。

「過度な緊張は、本来の能力を低下させると言う」

ミラは微笑む。

「気楽にだ、ジュード」

「う、うん」

戸惑いながら、それでも力強く頷く。

その様子を見ていたホームズは、ローズの方を向く。

「大丈夫そうかい？」

「おかげさまで」

ローズは、おどけて言う。

そう言葉を掛け合い、それぞれが、入場する。

【今回の登録選手の中で魔物を操らないのは、彼らだけです。その実力は、未知数。いかほどのものなのか】

「え、魔物？」

場内アナウンスにレイアは、おののく。

自分達には無いもので攻め来るのだ。

ローエンもヒゲを触っている。

「おいおい、何を言ってるんだい、レイア？こつちには、化け物があるんぜ」

そう言つてホームズは、ヨルを指差す。

ヨルは、フンと鼻を鳴らす。

【おーっと、ここで相手選手の入場だ】

相手選手が蟹の様な魔物を引き連れてやって来た。

その瞬間、ヨルのヒゲがピクリと動く。

「どうしたんだい？」

ホームズが、それに気付きヨルに尋ねる。

「あの鎧を着込んだ人間が見えるか？」

「ん、まあ、当然。おれ、別に目は、悪くないもの」

ホームズの言葉を聞くとニヤリといたずらっぽくヨルは笑う。

「あの人間、お前を昔いじめていた奴だ。靈力野ゲートが同じだ」

「へえー……」

ホームズも、ヨルと同じ様な笑みを浮かべる。

レイアは、そんな彼らを見て、何だか、やな予感がして来た。

「さあ、行くぞー！」

ミラの掛け声と共に一行は、走り出した。

「レイアちゃん」

今まで体験した事も無い様な寒気をレイアは、感じた。

ホームズが、ちゃん付けで呼んだのも大きな要因だが、それだけではない。

顔だ。

ホームズは、見た事も無い様な邪悪な笑みを浮かべている。

「クイツクネス、お願いしてもいいかな？」

レイアとしては、そんな顔をしてる奴に絶対にかけたくないのだが……

「待てホームズ」

そんなホームズをヨルが止める。

ヨルの行動にレイアは、涙を禁じ得ない。

ヨルのおかげで対した事にはなりそうもない。

「スピードを強化してどうする。ここは、剛照来で、攻撃力の強化だろ」

「……………」

レイアの顔から血の気が消える。

ヨルのせいで、とんでもない事になりそうだ。

「あいつには、石を投げられた恨みがあるからな」

「奇遇だね、おれもだよ」

「いざとなれば、さつき喰った精霊術の分がある。黒い球なら、出せるぞ」

「心強いね」

ホームズは、拳を握り腰を落とす。

「剛、照、来！」

ホームズから、碧い目は、爛々と輝き、身体からは、赤い湯気が出る。

「程々に、と言っても聞きそうにないね……………」

「よく分かっているじゃないか、ムスメ」

レイアの言葉にヨルは、満足そうに微笑む。

何を言っても無駄だと判断したレイアは、ため息を一つ吐く。そして、胸を張ると、ホームズに、友人にエールを送る。

「思いつきりやっておいでよ、ホームズ」

ホームズは、レイアのエールに目を丸くする。

「……………嬉しい事をいってくれるね」

そういうと、ホームズは、相手に向かって構えをとる。

「いくぜー!」

言うが早いか、ホームズは、元^{ター}いじめ^{ゲツ}つ子^トの元へとダツシユした。

そのホームズから主人を守る為に巨大な蟹の様な魔物達が、ワラワラと、前に出てくる。

「邪魔だアアアアアア——、ボケエエエエ!!」

ホームズは、何のためらいも無く、その魔物を蹴り飛ばす。

剛照来の恩恵だろう。魔物の甲羅には、ヒビが入っている。

一息吐く間もなく、次の魔物が、ホームズの背後から、巨大な鋏を振り下ろしにかか
る。

「ホームズ!!」

ローズは、思わず叫ぶ。

助けに行きたいのだが、自分達の魔物を倒すのに精一杯だ。

何より距離がある。

ローズが歯噛みしている中、ホームズは、振り下ろされた鋏を後ろを向いたまま蹴り
上げる。

「まさか、勝ったつもりだったのかい?」

ホームズは、ニヤリと笑うと、その後蟹の魔物と向き直ると、右脚に黒い気配ではな
く、闘気を纏う。

そして、その脚を思いつきり、蟹の魔物に蹴りつける。

「獅子戦哮!!」

その瞬間、ホームズの脚に纏っていた闘気は、獅子の形を成して魔物に襲いかかる。

魔物は、そのまま二、三頭巻き込みごちやごちやと倒れた。
おかげで、

「ご主人様、はっけくん」

鎧の人間を守る壁がなくなった。

他の魔物を呼ぼうにも、他の連中は、皆、ジュード達と戦っている。

つまり、ホームズとは自分が戦わなければならないのだ。

しかし、あんな化け物の様な戦いをした、ホームズ相手に鎧の人間は、冷静だ。

その理由は、時間だ。

剛照来には、制限時間がある。

ホームズの今回の戦いは、それのおかげというのが大きな要因だ。

しかし、今剛照来の効果時間は過ぎた。

(つまり、恐れる必要はない)

「と、思うだろうか？」

ホームズは、余裕の笑みを浮かべる。

そして、そのまま顔面に蹴りを入れる。

「グオッ!!」

衝撃が頭の中で響き渡る。

ホームズの脚には何も纏っていない。

「悪いね、ヨル。やっぱり、こいつにはおれが、文字通り蹴りをつけたいんだ。だから、黒い球は、無しだよ」

「……………ま、いいだろ」

ホームズからのお願いにヨルは、不服そうだ。しかし、了承する。

「助かるよ」

「ただし！」

「はいはい、分かってるよ。言われなくても……………」

ホームズは、ニヤリと笑う。

「勝つや」

言うが早いか、ホームズはふたたび仕掛ける。

相手もそれに答える様に盾と槍を構えて突撃してくる。

槍も盾も、破壊できそうにない。

「だったら、破壊しなきゃいいのさ」

ホームズは、右脚を高々と上げ、かかと落としを槍に決め、踏みつける。

そして、その槍を踏みつけた右脚を軸にして、盾に回し蹴りを放つ。

「輪舞旋風！」

盾ごと、ホームズは、彼を吹き飛ばす。

鎧の人間は、飛ばされた拍子に盾を手放してしまった。

そこを逃すホームズではない。

追撃をかけると、もう一度兜に攻撃をする。

今度は兜を思いつき蹴り上げる。

兜は、天高く舞い、顔が露わになった。

「久々に見るねえ、その顔。」

なるほど、成長しても気付くもんだ……」

ホームズは、そう言う顔にアイアンクローを決める。

「ま、待て、お前おれの知り合いか？」

どうやら、向こうは、ホームズだと気付かなかつたようだ。名前も変えたので当たり前と言えば当たり前なのだが。

いや、それだけではないのだろう。何しろホームズは、その顔に見覚えがあつたのだから。

子供の頃どんな遊びをしたか、全て覚えている人間は、いない。

結局、ホームズにとっての辛い記憶は、彼らにとってはその程度のもの、つまり、遊びだったのだ。

ホームズは、彼の質問を無視して、薄っすらと笑みを浮かべ、逆に尋ねる。

「ねえ、何で戦争がなくならないか知ってるかい？」

顔を握る力をさらに強める。

「それはね、やられたらやり返す奴おれみがいるからさ」

ニヤリと笑ってホームズはそのまま、その人間を地面に叩きつける。

鎧の人間は、そのまま白眼を向いて気絶した。

【勝者キタル族代表！】

アナウンスが、闘技場にこだまする。

「結局、こいつは最後まで気付かなかったな」

ヨルは馬鹿にする様に見える。自分のした事に気付かない愚か者には、相応しい残念な顔をして気絶している。

よく見ると歯が二、三本折れている。

「いいさ、別に。誤って欲しい訳じゃないもの」

ホームズは、肩をすくめる。

「単純に、あの時出来なかつた事をやりたかつただけなんだからさ」

最後にホームズは、頭をうつつかり踏んでジュード達の元に戻って行った。

大会は、まだ始まったばかりだ。

一寸先も分らない

「さあ、次の試合だ。熱い闘いを見せてくれ！」

二本脚で歩く鳥の魔物がやって来た。

後ろに、丸い輪の武器をもつていわ

「見覚えは？」

レイアは、恐る恐る聞く。

「ないね。まあ、倒す事には代わりはないけど」

おどけながら、ホームズは返す。

レイアは、ホッと胸を撫で下ろす。

そんな会話をしていると、魔物が空中からの連続蹴りをホームズに放つ。

しかし、

「おれに、蹴りを入れようなんて、いい度胸じゃないか」

片足を左手で掴んでいた。

ミラは、その様子を見て頬を引きつらせる。

「アレは……」

「なんか思い出すな……」

アルヴィンも遠くを見つめている。

そんな二人のつぶやきなどホームズの耳には届かない。

歯を食いしばり、脚を強く踏み込む。

「どっせいや——！」

そして、魔物を片手で振り回す。

振り回された魔物は、他の魔物達を巻き込んでいく。

巻き込まれた魔物達は、再び立ち上がろうとする。

しかし、その一瞬、輪っか状の武器を持った、女性が無防備になる。

「任せなさい！」

「グゲエー！」

ローズは、ホームズの頭を踏み台にして、飛び上がる。

ホームズが、潰れたカエルの様な鳴き声を上げるが知ったことではない。

そして、縦回転をする。

「烈空斬！」

その女性は、思わず武器で防ぐ。

ローズは、烈空斬で、ダメージを与える事を早々に諦めると、着地する。

相手はそれを待っていた様だ。

そのまま、ローズに襲いかかる。

ローズは、それを冷静に観察すると、刀をそれぞれの輪っかの中心に通し、引っ掛け
る。

そして、腕を横いっぱい広げる。

輪っかの女性も同じ様に腕を横に広げる羽目になる。

そんな、ローズに魔物達が襲いかかろうとする。

しかし、

「六散華！」

レイアとジュードの共鳴術技で、奴らを蹴散らす。

相手の動きを封じ込める事に成功したローズは、おもむろに口を開く。

「裂け裂け切り裂け出て来い刃……」

ローズと女性の間に風が渦を巻く。

「ウインドカッター！」

鋭い風の刃が、敵に襲いかかる。

相手はガード出来ず、モロにそれを食らう。

大きく後ろに仰け反ると、相手はそのまま起き上がらなかつた。

「……………生きてる……………よね？」

「当たり前でしょ。詠唱の構えも取れてなかつたのよ、私。それに、ちゃんと手加減したわよ」

ローズは、なんて事なさそうに言う。

ホームズは、恐る恐る様子を伺う。どうやら、本当に生きている様だ。

会場係に運ばれると、新たな対戦相手が現れた。

「また、鳥かい……………」

「……………どうも、俺達は、鳥に縁がある様だ」

ホームズは、そうこぼし、ヨルは、何かを思い出す様に呟く。鳥の様な魔物が三頭、そして、槍を構えた、人間が一人。しかも、今回は達の悪い事に奴らは、空を飛んでいるのだ。

「さあ、選り抜かれた戦士達よ、いざ、さらなる高みを目指せ！」

「先手必勝！レインバレット!!」

アルヴィンの銃弾が、雨の様に魔物達に降り注ぐ。

魔物達は、叫び声を上げ、高度を少し落す。

「出番だぜ、ローズ！」

「了解！いくわよ」

アルヴィンとローズは、それぞれ螺旋を描きながら宙に浮く。

地面には、円陣が浮かび上がる。

「竜虎滅牙陣!!」

物の見事に二頭（二羽？）が食らい、倒れた。

残り一頭は、空にいる。

魔物は空から攻撃をローエンとエリーゼに仕掛ける。

術士を狙いに来ている。

「ま、に、あ、え——！」

ホームズは、空中にいた。

そして、身体を回す。

「飛燕連脚!!」

段々と上空に上がりながら、蹴りを一発、二発、と、どんどん打ち込んでいく。

そして、最後の一発で、ホームズは、魔物を地面に叩きつける。

「ホームズ！」

『気張れー!』

ホームズは、着地をすると、エリーゼ達の声が聞こえ、ホームズとエリーゼのリリアルオーブが輝く。

「任せたまえよ」

ホームズは、ニヤリと笑い足に闘気を溜める

「ティポ・ザ・ビースト!!」

ホームズと、エリーゼのティポの形をかたどった闘気の共鳴術技が、地面に今まさに飛び立とうとしている魔物に当たり動かなくなる。

ミラとローエンは、魔物を操る人間の前に立つ。

リリアルオーブの輝きが二人を繋ぐ。

「ミラさん! いざ!」

「ああ!」

ミラは頷くとローエンと共に狙いを定める。

「ロックヘキサ!!」

地中から、六本の柱が出現し、槍を持った人間を襲う。攻撃を食らった人間は、そのまま意識を手放した。

これで、ホームズ達は全ての試合が終わった。

【キタルブロック、優勝はキタル族代表だ！】

「やっと………終わった………」

ホームズは、疲れ切っている。

他のメンツも似たようなものだ。

レイアに至っては地面に寝転んでいる。

「で、何で君達は平気そうなんだい？」

ホームズは、恨めしそうに、ローエンとアルヴィンを見ている。

「鍛え方が違うのですよ」

「そうゆうこと」

アルヴィンは、自慢気にウイंकをする。

「ああ、そう……」

ホームズは、げんなりする。

「ま、取り敢えず、後は決勝を残すのみだろ。おら、立て馬鹿共、戻るぞ」

ヨルは既に次の試合の事を考えている。

皆言い返したいが、そんな気力も無い。

しかし、ティポが皆を代弁して、ヨルに噛み付く。

「どう思うよ、ローエン」

「何がです？」

「決まってるだろ、新人達の実力の事だよ」

ローエンとアルヴィンは、彼らの後ろ姿を見ながらそんな会話をする。

「はい。皆さん、充分な実力を持っています」

「特に、ホームズ？」

「……あの人をよく殺しかける所まで追い詰めましたね」

ローエンは、顎髭を触りながら言う。

どう考えても、今回の様子を見てホームズを一方的に追い詰めるなんて事は、まずあ

り得ない。

おまけに、ヨルと言う精霊術を無効化する奴もいる。

少なくとも怪我ぐらい負っていないとおかしい。

しかし、ローエン達と出会った時、アルヴィンたちは、武器が壊れていただけだ。怪我なんて、そんなものは何も負っていなかった。

「……ミラがいたというのもデカイが、それ以上に多分あの馬鹿、手加減してたな」
アルヴィンは、空を見上げる。

「俺らと闘った時、あいつはエリーゼから先に倒すべきだった」
何故なら精霊術がヨルには無効だからだ。

精霊術がメインのエリーゼを残しておく理由は、ない。
戦力には、確かに差があった。

しかし、そうは言ってもあそこまでボコボコになった理由は、明らかに、エリーゼから片付けなかったことだ。

「でも、あいつはそれをしなかった。奴ぐらい頭が回ればそれぐらい分かりそうなものだが……ローエン、何か心当たりあるか？」

ローエンはまだ、顎髭を触っている。

そして、おもむろに口を開く。

「今日、エリーゼさんが両親の事をすこしだけ思い出して泣いてしまったのです」
「エリーゼが？」

「はい。その時、ホームズさんは、凄く嫌そうな顔をしました」

「単純にメソメソしてるガキがきらいなんじゃねーの？」

「恐らく、そうでしょう。彼は子供が泣いているのが我慢出来ないタイプのように思います」

「ふーん」

ローエンの考えにアルヴィンは、返す。

ローエンは、更に続ける。

「……………その時、ホームズさんは、エリーゼさんにハンカチを渡して涙を拭くように言っただけです」

「優しいじゃねーか」

アルヴィンは、ふつと笑いながら、言う。

「ええ、その少し前まで喧嘩していたとは思えないほどです」

ローエンの言葉にアルヴィンは、少し考える。

「二応、あいつは十八だろ？そのぐらい水に流して……………」

アルヴィンは、段々と声が小さくなっていった。

ホームズは、思いのほか根に持つタイプだ。

出会ったばかりに、殺されかけ、昨晩は、ピコハンで気絶させられ、聞かれたくない過去話を聞かれた。

あのホームズがそれらの出来事を水に流すとは考えにくい。

しかし、ホームズは、エリーゼにハンカチを渡し涙を拭くように進めたのだ。

「……あの人は、自分の事を話しません。この旅について行く理由も……」

ローエンの言葉にアルヴィンは、少し物思いにふける。

「両親の故郷に行きたいって言って言っただけだったか？」

「何故か知っていますか？」

「そう言えば……」

アルヴィンは、思わず面食らう。

「何故かは、私達には、話してくれました。両親がどんな所で育ったか、そして、見た事のない場所にも行ってみたいと……しかし、本当にそれだけでしょうか？」

「というところ？」

「恐らく、ホームズさんが口にしていないだけで、まだ理由がある様な気がします」

ローエンは、まだ賑やかにジャレているホームズ達を見る。

「エリーゼさんの件も恐らく理由があるはずですよ」

「……ロリコンとか？」

「つまらないですよ」

ローエンに釘を刺され、アルヴィンは、肩を竦める。彼らは、それを最後に闘技場を後にした。

◇◇◇◇

「やったー。私達勝ったんだね」レイアは、大喜びだ。

一行は、今闘技場からの階段を降りている。

「何とかって、感じだけどね」

「なっさけないなあ、優等生は。楽勝だったろ？」

「いえいえ、なかなか厳しいものがありましたよ」

「何処かの誰かさんのせいだね」

ローズは意地悪そうにホームズを見る。

ホームズは、少したじろぎながら弁明する。

「べ、別にいいだろう。最初の試合の相手はちゃんと倒したんだから」

「やられかけた癖に……」

「いや、やられかけた訳じゃ無くて……いや、何でもないです」

ローズは、ギロリとホームズを睨んで黙らせる。

「ジュードく、ローズが冷たい」

思わずジュードに泣きつくホームズ。

「ハハハ、反省すれば」

ジュードからも手痛い忠告が飛んで来た。

「みんな、冷たい……」

ホームズは、うな垂れる。

『そう言うわけだ！アルヴィン君の嘘つきー。ね、エリー』

「はい、アルヴィンは嘘つきです……」

エリーゼとティポのダブルコンボをアルヴィンは、食らう。

「お前らまで……」

アルヴィンは、拗ねるように言う。

「元氣だしたまえよ」

何故か上から目線のホームズが、アルヴィンの肩にポンと手を置く。

「お前と一緒にしてのものな……」

ホームズとアルヴィンは、横目で睨み合いながら喧嘩する。

「やったな。見事な闘いだったよ」

ユルゲンスは、戦いを終えた一同にそう言葉をかけた。

ホームズは、少し胸を張る。

対照的にヨルは、欠伸をしている。

「決勝は、食事休憩を挟んでから始まるわ」

ユルゲンスの隣にいるキタル族の女性が説明する。

「メシだと」

ヨルは、目を輝かせる。

「他の選手も一緒だから、落ち着かないかもしれないけど。取り敢えず、食事にしてお

きましょ」

ホームズとヨルはその台詞を終えると同時に駆け出す。

「どけ、クズ！」

「うるさい、君こそ、どいておくれよ！踏んじやうじやないか」

我先にと食堂を目指して走る。

大人気ない戦いを繰り広げながら……

ローズは、それを呆れて見ている。

「ガキ……」

「……………ローズ、好きな食べ物は？」

レイアは、ホームズから視線を逸らさずにローズに尋ねる。

「ハンバーグ、餃子、ステーキ、クリーム牛丼、オレンジスープ、ミネストローネ、チキン南蛮、サンドイッチ、カツサンド、クリームシチュー、カレー、マーボーカレー、寿司、唐揚げ、後は……………」

「早く行って来たら？ホームズが何かやらかすかもしれないし」

レイアに言われ、ローズは少し考える。

「それもそうね」

そう言うと、ローズも全力ダツシユをして、ホームズを追いかけた。

「随分と扱いが上手くなりましたね、レイアさん」

ローエンが、すうっとレイアの隣に立つ。

レイアは、一つため息を吐く。

「あれだけ隣でそわそわさらられてれば、ね」

「……………私達も行きますか」

「そうだね」

何だか、試合の時より疲れた気がする。

「確実に力がついて来ている……これなら」

「……どうしたんだろミラ？」

階段で、物思いにふけっているミラをジュードは不思議そうに見ている。そんなジュードに気付くとミラは、再び歩き出し、食堂に向かった。



「ホームズ、少し落ち着きなさい」

「いいだろう、別に。久々に食べるんだから、シャン・ドウの料理」

ローズの注意も聞かず、料理が運ばれてくるのを今か今かと待っている。ローズも楽しみではあるが、そこまで恥を捨てる程ではない。

ヨルに嫌味でも言ってもらおうと思っただけだが、

「おい、俺にもよこせよ」

ヨルもそれどころではない。

ジュードは、周りをキョロキョロと落ち着き無く見ている。

「決勝相手、気になっちゃう？」

アルヴィンは、それを鋭く察知すると、ジュードに尋ねる。

「うん、それはね」

ジュードは、頷く。

そんなジュードにアルヴィンは、意地悪く尋ねる。

「ジュード君好みの、めっちゃかわいい子だったらどうする？」

「なっ……！」

ジュードは、動揺して立ち上がる。

「相手がどんなだって関係ないよ、そんなの！」

アルヴィンは、期待通りの反応をしてくれたジュードを笑う。

そんな中ホームズは、考えている。

「そっかあ……おれなら、どうするかな……」

「ホームズ……ぶれないね」

真剣に考え出したホームズにレイアは、呆れている。ローズは、仏頂面になる。

「手加減してもな……報酬もらえないし……うーん」

「……………ホームズがモテない理由がよくわかった」

割りと真剣に悩んでいるホームズを見て、レイアは、ため息を吐く。そうこうしている内に、料理が運ばれてきた。

ホームズは、早く食べたそうだ。

ユルも嬉しそうにしたが、動きを止める。

「まあまあ」

ユルゲンスが下らない会話を止める。

そして、感慨深そうに言葉が続ける。

「それにしても決勝か……まさか、ここまでこれるとはな」

「優勝するって言ったでしょ」

レイアは、胸を張るように言う。

「ははは、すまない。取り敢えず食べよう。決勝にむけて力を付けてもらわければな」

そうユルゲンスが楽しそうに言う。

そんなことを言っていると、ミラの元に最後の料理が運ばれて来た。

ミラは、運んで来た人間に首を傾げる。

「ユルゲンス大変だ!!」

皆が料理を食べようとした丁度その時、男が走って来た。

「なあに、どうしたの?」

ユルゲンスの隣にいた女性が呑気に言う。

「この前の落石、事故じゃなくて、事件だったらしい。人為的な後が見つかったて」その言葉に、ホームズ、ミラ、ヨルは、目を険しくする。

「おい、ホームズ、料理には口をつけるな」

「食事には、手を付けるな!!」

ミラとヨルの言葉は、ほぼ同時だった。

「え……なに？」

ミラの余りに鬼気迫るものいいに、エリーゼは、驚く。

ジュード達も食事に運ぶ手を止める。

すると、周りから食器の落ちる音と、苦しそうな呻き声があちらこちらから、聞こえ出す。

先程までの和やかな食事風景が嘘のようだ。

今では、阿鼻叫喚の地獄が広がっている。

「なんなんだ……これは……」

ユルゲンスは、驚きを隠せない。
当然と言えば当然だ。

普通の人間は、この状況に驚く。

「こいつは……………」

ホームズは、顔を険しくして、周りの様子を見回す。
何処を見ても胸を押さえて苦しんでいる人ばかりだ。
中にはもう、動かなくなっている人もいる。

立ち尽くしている一行をローズは、駆け抜ける。

「大丈夫ですか?!」

倒れている男に駆け寄り、しゃがみこんで様子を診る。
もちろん、大丈夫なわけがない。

しかし、ローズはこれで状態を探っているのだ。

(これは……………毒?)

ローズは、ホームズに呼びかける。

「ポイズンボトルは?!」

切羽詰まった様子にホームズは、首を横に振る。

「荷物は、向こうに置いて来た。何より量が圧倒的に足りない」

ホームズは、冷静にローズに返す。

ローズは、あんまりにも冷静なので食ってかかろうとしたが、唇を噛み締めている。ホームズを見て頭を冷す。

「精霊術は?!」

「手遅れだな。見ろ」

ヨルは、尻尾でその男を指す。

その瞬間、ローズの腕の中から、呻き声も聞こえなくなった。

命が、今完全に終わったのだ。

「……………そんな」

いとも簡単に人の命が消える。その事実にはローズは、茫然とする。

ローズは、そのまま地面にへたり込んでしまった。

ホームズは、そんなローズを無理矢理どける。

そして、死体となった人間の目に手を持っていき、開いたままになっている瞼を静かに降ろす。

先程までの苦悶に満ちた表情が少し、和らいだ。

ホームズは、両手を合わせ、目を閉じる。

その周りで、1人、また1人と倒れて行く。

ドサリと人の倒れる音でホームズは、目を開く。

その苦しそうに呻いている人と目が合う。

『最近アルクノアの動きが活発化し始めている……………』

マーロウの言葉が頭に蘇る。

「やられた……………」

ホームズは、悔しそうにポツリと吐いた。

人の一生は、ハンデを背負うて行くが如し

「僅かですが、この木の実の様な独特の匂いは、メデイニシア。ローズさんの見たて通り毒です、水溶性の」

ローエンは、しゃがみこんで患者を観察する。

「なるほど、だから木の実の匂いがしてた訳か……」

ヨルは、納得している。

料理が運ばれて来た時、ヨルは本来なら、そのままミラを待たずに食事をするつもりだった。

しかし、木の実も使われていないのに、木の実の様な匂いがしたため食べるのを躊躇ったのだ。

ジュードは、ローエンの台詞を聞き驚愕する。

「みんなの食事に盛られてたってこと?!」

ローエンは、静かに頷く。

アルヴィンは、顔を歪ませて、自分の食事を睨む。

ユルゲンスは、恐る恐る口を開く。

「まさか、決勝の相手が勝とうとして……」

「いや、違う」

ミラが途中で口を挟んだ。

ミラのその力強いものいいに、その場にいた全員がミラに注目する。

「この様な卑劣な手段を使う連中に、私は、思い当たる節がある」

その時、アルヴィンは走り出した。

「待て、アル……」

ミラの制止も聞かずにアルヴィンは、走り去ってしまった。

「一体、何が起こってるん……ですか？」

エリーゼは、ミラに。

「……どういうこと。何でこんな……ねえ、ジュード！」

レイアは、ジュードにそれぞれ声を震わせながら尋ねた。

「おい、ホームズ」

「なんだい？」

「さつきからずっと気になっていたんだが……」

ヨルは、鼻をひくつかせる。

「血の匂いがする」

ホームズは、目を大きく開く。

「まさか……………」

ホームズも走り出す。

「待て、ホームズ！お前までどうした？」

「いいかい、みんな絶対に一人で行動するんじゃないよ！特にミラー！分かったね！」

ミラの質問には一切答えず、そういうとホームズは、そのまま走り去った。

「そう言った張本人が、一人で行動してどうする！」

ミラは思わず叫ぶが、その時には、ホームズはその場にいなかった。

「大丈夫だよ。ホームズには、ヨル君もいるし、ローズもついて行ったから」

レイアは、何とかその言葉を口にする。

「ミラさん。取り敢えず宿に戻りましょう」



「まったく、どうしてついて来たんだい？」

「自分がさっき何を言ったか考える事ね」

ホームズの言葉にローズは、そう返す。

「それで、何処に向かっているの？」

「炊事場。多分ロクな事になってないだろうけどね」

そんな事を喋っていると炊事場に着いた。

しかし、扉にはカギがかかっている。

「フーン！」

ドアを蹴り飛ばし無理矢理開ける。

ドアがなくなると、ホームズは、炊事場に入っっていった。

グツグツと、火にかけてっぱなしの鍋が煮立っている。

ローズは、慌ててホームズの後を追う。

「ちよつと、扉のそばに人がいたらどうするの！」

「居ない。俺が確かめた」

ヨルは、事もなげに言う。

「いないって……………」

「これは……………」

ホームズは、何かを発見した様だ。息を飲んでいる。

「何があつたのよ？」

「君は見ない方がいい」

ホームズが、真剣なのはよくわかる。しかし、目を背けているわけにもいかない。

ホームズの後ろから、炊事場の奥を見る、

そこにあるのは積み重ねられた四、五人の死体だった。

「——！」

ローズは、思わず口を覆う。

「料理を作るのに邪魔だったから奥によせたんだろうねえ」

ホームズは、死体に近づきながら、手掛かりを探す。

「毒を盛る為に本来の調理人を殺したって所だろうね。その死体がこれなんだろうね」

ホームズは、分かりきっていることを口に出しながら整理していく。

「ローズ、君はこれ以上来ない方がいいよ。結構酷いから」

ホームズは、そう言つてローズを遠ざける。

ローズは、そう言われて初めて自分の足元を見る。

血だまりが、一面に広がっている。

「……………」

そこがローズの限界だった。

一気に過去の映像がフラッシュバックする。

男の死体、女の死体、そして、ジュードぐらいの年齢の女性の死体。

この怒涛の記憶の流れにローズは、叫んでしまいたい衝動にかられる。

叫べば少しは、気が楽になるかもしれない。けれども、それをするわけには、いかな

い。必死に叫ばない様口を押さえる。

しかし、耐えられるものではない。

そのまま、膝から崩れ落ち、血だまりの中には倒れる。

「ローズ!!」

ホームズは、ようやくローズ異変に気付き駆け寄る。

慌てて血だまりの中から抱き起こす。

ローズの目は固く閉じられている。

「ちよ、ローズ?」

「安心しろ、気絶してるだけだ」

ヨルの言葉にホッと胸をなで下ろす。

見たところ、死体しかない。

これ以上の成果は、なさそうだ。

「取り敢えず、戻るかね」

「そうだな。めぼしい手掛かりは、特にないな」

ホームズは、ローズをおぶると炊事場を後にする。

ミラとマールロウに報告、それから、何を奴らが企んでいるのか調べなくてはならない。

先の事を整理しながらホームズは、歩みを進める。

炊事場を出ると足を止めて前を見つめる。

「……………そうは問屋が卸さないって奴かねえ」

「こうならない為に、この小娘は叫ばないようにしていた様だが…………」

ヨルとホームズは、前をもう一度見る。

「どうやら、無駄だったみたいだな」

目の前には、それぞれ武器を構えた人間が殺気丸出しで、立っていた。

「アルクノア………4人つてところか……」

「5人だ、阿呆」

「訂正どうも」

ホームズに突っ込むヨル。

連続の試合での疲れ、そして、背負ったローズ。

戦闘になればどう考えても不利だ。

ホームズは、現状を把握する。

(逃げるのが一番だけど……)

後ろは炊事場で行き止まり。

前はアルクノアで塞がれている。

「困ったことだ………」

ホームズは、そう言う行き止まりの炊事場の扉のすぐ奥まで、一気に後退する。

それが合図だった。アルクノアの1人がホームズにナイフを持って突撃する。ホームズは、ナイフを蹴り上げる。続いて無防備になった腹に思い切り蹴りを叩き込む。

「カツ……………ハ……………」

まず1人目が気絶する。

続いて2人目。

こちらは、鉤爪の様な武器を両手に装備している。

右手を横薙ぎにふる。

思わずホームズは、一歩後ろ身を反らし紙一重で躲す。切り裂く相手を失った鉤爪

は、棚に当たり、調理器具が崩れ落ちる。

ホームズは、落ちて来た、鍋を顔面に蹴りつける。

しかし、相手はいとも簡単に切り裂く。

「冗談キツイゼ……………」

引きつり笑いを浮かべる。

あの鉤爪だけは、食らうわけにはいかない。

しかし、ホームズの考えも虚しく、相手の猛攻が始まる。

避けるのに手いっぱい、蹴りを入れる暇がない。

(だったら……！)

ホームズは、鉤爪を掻い潜って懐に入ると、そのまま、顔面に頭突きを食らわす。鉤爪のアルクノアは、僅かに怯む。

そのスキを狙ってホームズは、足をかける。

足をかけられた、アルクノアは、そのまま後ろに倒れる。ホームズは、立ち上がろうとする前に、かかと落としを鳩尾に喰らわせる。

「グエ……」

それつきり動かなくなった。

次は、徒手空拳のアルクノアがくる。両手には、ジュードの様に籠手を装備している。相手の拳とホームズの蹴りがぶつかり合う。

体制を崩したのは、ホームズの方だった。

ギリギリで踏ん張り、幸い後ろからは、倒れなかった。しかし、その隙が失態だった。

追撃の拳が、ホームズの顔を捉える。

骨と鉄がぶつかる鈍い音が脳に響きわたる。

何とか上体を後ろに反らし、ダメージを減らしたが、焼け石に水程度効果しかない。意識が飛びそうになるのを何とか、足を強く踏み込みたえる。

ホームズは、そのまま血だまりを蹴り上げる。

狙いは、目潰しだ。

ホームズの狙い通り、相手は目を閉じる。

その隙に足を高々と上げ、脳天にかかと落としを決める。

安全靴のかかと落としを食らった徒手空拳のアルクノアは、そのまま、気を失う。

崩れ落ちる前にホームズは、蹴り飛ばし、次の相手に先制攻撃を仕掛ける。

成人男性の体重は、どんなに軽くても、50kgは優に超える。

それが、轟音を立てながら飛んでくるのだ。それを食らって無事なわけがない。

4人目は武器を披露することなく気絶した。

最後の男は、ナイフより長く、刀より短い刃物、小太刀を構えていた。

観察をしているのもそれまでだ。

彼は距離を詰めると小太刀をホームズの首を目掛けて横薙ぎに振るう。

何とか後ろに下がる。

しかし、相手はそれを見越していた様だ。

直ぐに突きに切り替え、腹を狙って来た。

何とか横に逃げたので真ん中には、喰らわなかったが、脇腹に刺さる。

「グツ……………」

歯を食いしばって耐える。

そして、相手をキツと強く睨む。

ここで意識を飛ばす訳にはいかない。

ホームズへの攻撃が不発なのを悟ると直ぐに小太刀を引き抜きもう一撃仕掛ける。

しかし、その攻撃に対しヨルは、煮立った鍋を尻尾で掴み放り投げる。

「ガアアアアア!!」

頭から煮立った、スープをかぶったアルクノアは、堪らず叫ぶ。

ホームズは、その隙を逃さない。

アルクノアの顎を思い切り蹴り上げる。

顎の揺れは、頭まで届く。

脳を揺らしまくったアルクノアは、そのまま気を失った。

これで、全ての刺客は倒した。

「よっいせ……」

ホームズは、ローズを背負い直す。そして、火を無理矢理布巾で消す。やる事をやると、ローズを背負ってえっちらおっちら炊事場から、出てくる。

途中で、一瞬痛みで顔をしかめる。

口の中に血の味が広がる。

頭の怪我也、腹の傷も軽いものではない。

「守護方陣」

ホームズは、踏み込んで応急手当をする。

そして、アルクノアを跨ぎながら進む。

ローズをおぶっている為、肩に居れないヨルは、今頭にいる。

「……………相変わらず、頭をよく回る奴だな。この出入り口を利用して五対一から、一対一に持ち込むとはな」

そう、ホームズとローズでさえも順番に入らなければならなかったのだ。

つまり、ホームズが炊事場に入ってしまえば、どうしたって相手は一对一でやらねばならなかったのだ。

「……………食べ物も粗末にしたなあ…」

ホームズは、呟く。

鍋の作戦も勿論ホームズの指示だ。

「生きる為に食べ物を使うのは当たり前前の事だ」

ヨルは、いつもの調子で言う。

「ふふふ、その通りだねえ」

ホームズは、少し元気を出す。

しかし、直ぐに再び顔を顰める。

脇腹の痛みが思ったよりきつい。

思わず、付きそうになる膝を意地で我慢する。

たださえ、人を背負っているというのにだ、怪我まで負ってしまえば、ただでは済まない。

「こりゃあ、早くジュードに治療をお願いしないとね。ところで、ヨル、つけられていないよね？」

「ああ、5人でどうにでもなると思っていた様だ。誰もいない」

「了解。このまま宿に戻ろう。流星にいつまでもあんな場所には、いないだろう」

「だろうな」

ホームズは、もう一度ローズを背負い直すと、ふらふらと宿へ向かって歩き出した。

腹を割いて話す

「ローズ！それにホームズもどうしたの?!」

レイアは、血だらけのローズと目を腫らしているホームズを見て声を上げる。

ジュード達も同じ様な顔をしている。

ホームズは、ローズをベッドに降ろす。

「安心しておくれ。全部ローズの血ではないから。ローズは、怪我一つ負っちゃいな

いよ」

「じゃあ、誰のだ?」

ミラが問う。

ジュードは、ホームズに駆け寄り、両手を出す。

「手、握って。出来るだけ強く。」

ホームズは、言われたジュードの両手を握る。

「大丈夫そうだね」

ジュードは、両手を確かめると治療を開始する。

ホームズは、ジュードに治療されながら、ミラの質問に答える。

「本来の調理人の血だよ」

ホームズの目から腫れが引いていく。

「本来、おれたちの料理を作る人は別にいたんだ。でも、毒を盛るのに、そいつらは邪魔だった」

レイアは、息を飲む。

「そんな事の為に……………」

ホームズは、頷く。

「というか、ホームズ、君も重症だよ。後、何処怪我したの？」

「わき腹。刃物で刺された。一応応急手当てをしたけど」

そう言つてホームズは、赤くなつてゐるわき腹を指す。

ジュードは、急いで治療する。

「死体はまだ、炊事場にある。早く回収してもらつておくれ」

ホームズは、ジュードの治療のおかげでだいぶ楽になつてきた。

「誰に…………刺された…………んですか？」

エリーゼの質問にホームズは、エリーゼではなく、ミラを見る。

「物事には、順序がある。ミラ、君から、先に話しておくべき事があるだろう？」

ホームズの言葉にミラは頷く。

「そうだな」

ミラは腕を組む。

「恐らく、今回の事件の首謀者は、アルクノア」

「アルクノア？」

ジュードは、ホームズの治療を終える。

「私の命を狙い続けている連中だ」

ミラの言葉にジュードは、息を飲む。

「おれに襲いかかってきたのもそいつらだよ」

ホームズは、脇腹を指す。

「え……………それじゃあ、さっきの毒は……………」

ミラは頷く。

「死んだものには済まないが、十中八九、狙われたのは私だろう」

ミラの言葉にヨルは尻尾でホームズを示す。

「こここの、目を腫らしたバカもだぞ」

「もう、腫れてないよ」

「悪い、目、垂れたバカだ」

「……………ケンカ売ってる？」

ホームズは、ヨルをギロリと睨む。

「ホームズ？　なんで？」

そんな、ホームズに構わず、ジュードが不思議そうに尋ねる。

ヨルは鼻で笑うとジュードの質問に答える。

「こいつが、幾つ奴らの拠点を潰してきたと思ってるんだ。恨まれない方がおかしい」

「……一応、弁明しておくけど、彼らがヨルに驚いて襲いかかってくるから、返り討ちにしたただけだよ」

ホームズは、不満そうに口を尖らせる。

「災難だね……でも、叩き潰すのは、やり過ぎだと思うよ」

レイアは、頬を引きつらせる。

「しかし、そんな事のために……無関係の人を巻き込んでおいて……それは……」

ローエンは、驚きを隠せない。

ミラは、ローエンの言葉に頷く。

「うむ……元より何でもありの連中だったが……今回は、特に酷い」

レイアは、先程ホームズがされた質問をミラにもする。

「どうして……何故狙われてるの、ミラ？」

ミラは後ろを向いて腕を組む。

考えているのだ。

話しているものかどうかを。

しかし、共に旅をする以上避けては通れない事だ。決意をすると、ミラは話し始める。「私がやつらの黒^{ジン}匣を破壊し続けているからだ。奴らが二十年前黒^{ジン}匣と共に突如出現して以来な」

「二十年前……」

ローエンは、顎髭を撫でる。

「黒^{ジン}匣と共に……」

それじゃあ、クルスニクの槍にも……黒^{ジン}匣を使っているアレにもアルクノアが関係しているの？」

ミラはジュードの方を向き頷く。

「確証はない。が、アレの出処は、アルクノアだと考えている」

「二国の王と、アルクノア、か………胡散臭いねえ」

ミラの言葉にホームズは、考える。

もし、それが当たっていれば根は深い問題だ。

ミラは更に言葉を続ける。

「奴らは見た目では、判断出来ない。常に町の人間に溶け込んでいる。私も黒^{ジン}匣を使

われた時の精霊の死を感じる事でしたか、奴らへの対処が出来なかった」

黒匣^{ジン}を使うと精霊が死ぬ。この事実^{ジン}にジュード達は驚く。

ジュードは思わず聞き返した。

「え……精霊の死って？……黒匣^{ジン}を使うと精霊が死ぬの？」

ミラは肯定する。

「術を発生させる度、精霊を死に追いやる。

人間は精霊の力を借りて生き、精霊は、人間の霊力野^{ゲート}から生み出されるマナで生きる」

レイアは、ホームズの方を見る。ホームズは、ひらひらと手を振っている。

「黒匣^{ジン}は、一見夢の様な道具だ。しかし、世の中の循環を確実に崩す。黒匣^{ジン}が存在する限り、人も精霊も安心して暮らしてなどいけない」

ミラの目は、使命の炎で燃えている。

ローエンは、深く息を吐く。

「私もまだまだですね。そのような大事を全く知らなかったとは」

そんなローエンにミラは優しく言う。

「知らなくて当然だ。人間に知られぬよう、私が一人で処理してきたのだから……」

まあ、例外もいるが」

例外は肩をすくめる。

「じゃあ、ミラは今までずっと……………」

エリーゼは、ティポを強く抱き締める。

エリーゼの言葉にジュードは頷く。

「ずっと一人で戦っていたんだ……………世界の、僕達の為に」

レイアは、ホームズの方を見る。

「ホームズが隠してた事ってこれ？」

「そうだよ。危ないから、関わらせない為にも黙ってたんだけどねえ」

ヨルは、そんなホームズをまたか、という目で見る。

何せホームズの隠し事は、それだけではないのだ。

「だが、四大の力を失ったせいで、お前達人間も巻き込んでしまった、すまない」

そんなホームズに構わず、ミラは、そう締めた。

すると、扉の開く音がする。

「あ、ユルゲンスさん。どんな様子だった？」

レイアが、入ってきたユルゲンスに尋ねる。

「あの場で助かったのは、私達だけみたいだ。……………大会の事はそろそろ報告が

……………」

ユルゲンスの言葉の途中で再び扉が開く。
今度は、少し乱暴に開いた。

「よう、無事で何よりだ」

入ってきたのは、マールロウだ。

「目腐ってるんです？」

ホームズは、肩をすくめる。

ホームズは、怪我をしているし、ローズに至っては気絶している。

マールロウは、ため息を吐く。

「人の揚げ足ばかり取りやがって………んなだから、モテねーんだよ」

「ホームズ落ち着いて！」

今にも飛びかかりそうなホームズをジュードが羽交い締めにする。

マールロウは、その様子を小馬鹿にすると、直ぐに真面目な顔になる。

「決勝は、明後日以降に持ち越しになった」

「中止じゃないんですか!?!」

ジュードは、驚いてホームズの拘束を緩める。

あんな事があつたと言うのに、まだ闘技大会をやると言うのだ。

ホームズも渋い顔をする。

「大会は、十年に一度。折角なのだから、やろうとさ」

マールウは、ふうと煙を吐く。

「禁煙」

ホームズは、不機嫌さを隠す事もなく枕を投げる。

マールウは、軽々と片手で掴む。

「貴様ともあろうものが、それを止められなかったのか？」

ヨルがホームズを代弁する様に言う。

「『こんな卑劣な手段に屈してはならない。我々の誇りにかけて必ずやり遂げるべきだ』
だ」とさ」

もつともなお題目の前には、なす術もない。

「ついでにいうとだ、俺は今回の大会運営から外された」

「外された？」

ホームズは、不思議そうに尋ねる。

『中止を訴えるとは！お前には誇りはないと見えるな』 って」

マールウは、忌々しそうに言う。

「無茶苦茶です……」

ホームズは、完全に大会運営の言い分に引いている。

「これで、俺は大会に関する全ての事に関われない」

「……………まさか」

嫌な予感がする。

「そう。つまり、この集団毒殺の件に俺は関わる事が出来ない」

「……………マジかい」

八方塞がりだ。

集団毒殺の件も闘技大会に関係している。

つまり、それをマーロウに調べる事は出来ないのだ。

毒殺を図った連中が捕まればいいのだが、マーロウにはそれをやるのは、不可能なのだ。

「裏でここそこやる程度なら、幾らでもやり様があるが、それだとはつきりいつて限界がある」

マーロウも恐らく、悔しいのだろう。

しかし、上層部の決定に刃向かう事は出来ない。

マーロウの事を慕う人々にまで、被害が及ぶからだ。

「そーいやあ、アルヴィンとか言う男はどうした？」

「さあ？」

ホームズは、肩を竦める。皆も同じだ。

「まあ、そいつにもそう言っておけ」

マールロウは、そう言って出て行こうとする。

「待つてください」

ホームズは、今にも出て行きそうなマールロウを止める。

「…………おれらに襲いかかってくる連中が炊事場の方で気絶してるんです。身柄を拘束しておいてくれませんか？理由は、一般人への暴行つてとところで」

「起死回生の策でも思いついたか？」

「まさか」

ホームズは、つまらなそうに否定する。

「唯の現状確認の策です」

マールロウは、ホームズの意図に気付いた様だ。

煙をモクモクと吐き出してニヤリと不適に笑う。

「なるほど、一般人が襲われるつてのは、闘技大会と無関係な事件だもんなあ」
ホームズも同じ様に意地の悪い笑みを浮かべている。

出て行こうとするのを見送るとレイアは、神妙な面持ちでミラ達を見る。

「辞退した方が良くない？」

毒を盛り、ホームズに闇討ちをかけるような連中だ。

この先何があるのかわからない。

ミラは腕を組んで悩む。

ここで辞退してしまえば、ワイバーンが手に入らない。

「とりあえず、今日は休みませんか？みなさん色々あつて疲れたでしょう」

ローエンの提案にジュード達は頷く。

「ローズは、まだ目を覚まさないみたいだね……………」

ホームズは、ベッドで寝ているローズを見る。

「そんなに……………酷い様だったの？」

レイアは、恐る恐るホームズに尋ねる。

「ん、まあ、楽しい場所ではなかったよ」

当たり前だ、人が死んでいるのだから。

少し、黙るとホームズは、再び口を開く。

「彼女にはね、辛い記憶があるんだよ。トラウマっていうのがピタリなくらいの奴が

ね」

「それって一体……………」

「言うわけないだろう、ジュード。今回ののはおれの話じゃないんだ。どうしても知りた

かったら、本人に聞く事だね」

ホームズは、そう言つてローズのベッドの側に椅子を持つてきて座る。その様子をレイアは、不思議そうに見る。

「ホームズは、部屋にもどらないの？」

ホームズは、小さく笑う。

「んー……この子が起きるまではね」

椅子に深く腰掛ける。

レイアは、少し驚いてから、微笑む。

「優しいね、ホームズ」

そんなレイアにホームズは、ゆっくりと頭を横に振る。

「そんな事ないさ」

ホームズは、手を組んで下を見る。

表情が影になつて見えづらい。

「本当はね、もつと側にいてあげなきゃいけない時があつたんだ。だから……ね」

「負い目を感じてるだけって事？」

レイアは、ホームズが濁した言葉を引き継ぐ。

ホームズは、ローズの顔を濡らしたタオルで拭いて、顔についた血を取っていく。

「まあね。だから、そんなに優しい理由でもないんだ」

ホームズは、静かにそう答えると、顔を上げてローエン達に言う。

「とりあえず、ローエン達は部屋に戻りなよ。おれもこの子が起きたら戻るし」

「分かりました。ホームズさんも程々に」

ホームズは、ローエンの顔を見ずに頷く。

ローエンが出ていくとジュードもそれに従った。

「じゃあ、わたし、タオルと洗面器の水を変えてくるね」

「悪いね、よろしく頼むよ」

レイアは、そう言って、洗面器とタオルを持って部屋を出る。

その前にホームズの方を振り返る。

(大事なんだろうなあ)

でなければ、負い目などそもそも感じはしない。

レイアは、微笑んで部屋の扉を閉めた。

眠れる森の……………？

「ん……………こは？」

まだ、辺りが暗い中ローズは、目を覚ました。

さっきまで、炊事場にいたのにいつの間にか、こんな暗いところでベッドの上に寝ていれば誰だつて混乱する。

「あ、ローズ起きた？」

「レイア？」

レイアは、声を潜めながら、部屋に入る。

「びつくりしたよ。ホームズ共々血だらけで帰ってきたんだもん」

そう言つて、レイアは綺麗に洗濯した服を渡す。

「ありがとう」

ローズは、お礼を言つて服を受け取る。よく見ると、ローズの服は寝間着の様なものになっている。

とりあえず、着替えるため布団をどかそうとする。

「ん……………うわぁ！」

「ローズ、静かに」

布団の妙な動かしづらさを感じて見てみると、そこには、ローズの布団に頭を乗せて寝ているホームズの姿があった。

ヨルもその近くで丸くなっている。

思わず驚いた声を上げたローズにレイアが注意する。

「ホームズ、ローズが起きるまでは側にいるって言うてね……………」

「ずつと?」

「うん。ついさつきまでおきてたんだけどね」

「……………なんで?」

「『もつと側においてあげなきゃいけない時にいられなかった』だって」

ホームズは、グースカピースカ寝ている。

そう言うってレイアは、鏡を渡す。

ローズは、首を傾げる。

「え、何?」

レイアは、少し間を置いてから話す。

「あのね、血だらけで帰ってきたって言ったでしょ」

「うん」

「ホームズがね、全部、と言っても顔だけだけど、拭いたんだよ」
ローズは、布団で眠りこけている、ホームズを見る。

そして、再び顔を確認する。

確かに血の痕は、何もない。

「結構、心配そうにしてたよ。何回、『大丈夫かなあ』って言葉を聞いたか分からない
もん」

「……………どういふ反応すればいいのよ」

ローズは、顔を赤らめそっぽを向いて、鏡をレイアに渡す。

レイアは、鏡を受け取ってローズに言う。

「ありがとうって言ってあげれば？」

「『君がお礼をいうなんて、明日は雷でも降るのかな』って言われそうだけど」
簡単に想像できるホームズにレイアは、言葉に詰まる。

「じ、じゃあ、心配かけて、ごめんねってのは？」

「『その通りだから、反省したまえ』」

容易に想像できる。というより、ホームズは、謝られても決して、「いいよ」とは、言
わない。

レイアも言われた事があるので、ローズの言わんとしてる事がよく分かる。

レイアは、ローズの事をメンドくさい子だなあと思った。しかし、今その認識を少し改めなければならぬ。

(ホームズも、すつこいメンドくさい！)

二人の顔に暗い影が差す。

レイアは、無理やりそれを振り払う。

「そ、そ、そこで、ぐっと我慢して、大人の余裕を見せれば………」

レイアは、拳を握り引きつった笑顔を見せながら力説する。

ローズは、クスクスと笑いながらホームズのアホ毛を触る。

「まあ、アドバイスとして聞いておくわ。活かせるかどうかは保障できないけど」

「……容易に想像出来るね」

ローズが、それを出来るなら、ローズの大暴れは起こっていない。

レイアは、ふうつとため息を吐く。

「………というか、ずっと思ってたんだけど………」

ローズは、呆れながら呑気に寝ているホームズを見る。

「……………普通逆じゃない。女の方が待つべきでしょ」

レイアは、頬を引きつらせる。

「いや、でも、眠ってるお姫様を起こすのは、王子様の役目だよ？」

「……………王子様、寝てるんだけど」

ホームズの寝息と共にアホ毛が動く。

「決まらないなあ……………ホームズは、本当に」

レイアは、やれやれという風に頭を抑える。

ローズは、そんなレイアを見て少し笑いながら肩をすくめる。

「まあ、今まで散々待たされたから、これでちょうどいいのかもしれないわね」

ローズは、ホームズの寝顔を見て優しく微笑むと真剣な顔を向ける。

「それで、私が気絶してる間に進展は？」

「えつとね……………」

レイアは、そう前置きをするとミラの話の話を始めた。



「アルクノア……ね……」

「知ってるのローズ？」

「ええ」

ローズの顔から表情が消える。

「私の家族を皆殺しにした連中よ」

レイアは、突然のローズの告白に息を飲む。

しかし、思い当たる節は、いくつもある。

ローズの過去の話で、実家が、商売をやっているのが分かった。

しかし、レイア達は何回か街を周ったというのに、そんな場所は、全く見当たらなかった。

た。

また、ここが、ローズの故郷だというのに、ローズの家族には、一度も会っていない。上げだせば、キリが無い。

そんな思考の渦に沈んでいると、ローズから声をかけられる。

「……ホームズから、何も聞いてなかったの?」

「へっ? あ、うん過去に辛いことがあった、程度だけど……」

それ以上は、ホームズは語らなかつた。どうしても知りたかつたら、本人に直接聞けと言われたのだ。

「相変わらず妙な筋を通すわね……というか、なんでホームズがこの事知ってるのか、謎なのよね……」

「まあ、ホームズだから」

「その一言で説明出来るわね」

レイアと話すときローズは、少しため息を吐く。

「知つての通り、私には父、母、年の離れた姉、がいたわ。

前も話したけど、家族全員忙しくてね。両親だけでなく、姉さんも手伝っていたから、本当にいつも一人だった。よく、イスラが相手をしてくれたといつても、毎日つて訳でもなかつた……だから、よく寂しい思いもしていたのよ」

レイアは、ある幼なじみの事を思い出した。

彼も両親が忙しく、同じ思いをしていたのだ。

「ああ、勘違いしないで。私は別に両親達が嫌いだった訳ではないわ。確かに一緒にいる方が少なかったけど、それでも両親が休みをとった時はそれこそ一日中遊んでもらったり、食事をしたり、楽しい時間を共有してきたから」

ローズは、とても楽しそうに話す。

「だからこそ、寂しかったともいうべきね。嫌いだったら、そんな思いもせずに済んだんでしょうけどね……大好きだったから、とても寂しかったわ……」

レイアは黙って聞いている。

「そんなある日よ。」

その日は姉さんの誕生日だった。

姉さんはね、何と無く、察しはついてると思うけど、なんていうか、こう、愉快的な人だったわ。いつも、あの手この手で人を驚かそうとするの。ま、要はいたずら好きなの。おまけに、頭もまわる。

私も何回もやられたわ……ほら、私がホームズに色々言われて落ち込んだ時があったでしょ？あの時、私を元気づけようとして、一度ホームズのお母さんとタッグを組んだ事があつんだけど……聞きたい？」

「遠慮しとくよ……………」

レイアは、ホームズから、ホームズの母親がどんな奴なのか断片的とはいえ、聞いている。

そんな奴と、いたずら好きな奴がタッグを組んだなんて話聞きたくもない。

「……………妥当な判断ね……………話を戻すわ。」

そんな姉だからね、今日はサプライズパーティを仕掛けて逆に驚かしてやろうと家族全員息を巻いていたの。

私の役目は、合図が来たらプレゼントを持つて華々しく登場する、それまでは、マーロウさんの所で隠れている、そんな手はずだったわ」

ローズの顔から表情と言う表情が全て消える。

目も何処を見ているのかよくわからない。

レイアは、そんなローズに少し背筋を寒くする。

「でも、いつまで経つても合図が来ない。もう、いい加減待ちくたびれちゃってね、マーロウさんを連れて家に戻ったの。そしたら……………」

ローズの歯がカチカチとなり始める。それに気付いたローズは、何とか歯を食いしばろうとする。

辛い記憶も、悲しい記憶も思い出せばそれだけで、心を蝕む。

「ローズ、辛かったら………」

「私の家族が血の海に沈んでた」

心配そうに言ったレイアの言葉に被せる様にローズは言う。

「優しかった母さんも、厳しく、でも、少しぬけてた父さんも見た事のない表情をして、血だらけになってピクリとも動かなかった。

怖かった。悲しいとか、それよりも怖いという気持ちだが、真っ先に出て来た。部屋は至るところに、

全てのところに、

目に付くところに、

全部に血があつた。

何度吐いたか、わからないわ。

そして、ようやく、胃の中のものになくなって、吐く物が消え失せた時、姉さんの手が目に入った。

姉さんの手は少しだけ動いた。

それを確認すると、マーロウさんの制止を振り切っておぼつかない足取りで、必死に駆け寄たわ。姉さんをどうにか、抱えらとうつすらと目を開けて、精一杯の笑みを作っ

てた。

『…………ふふ…………サ…………プラ…………イズは失敗…………だね…………ザマ……………………ミロ…………私を…………驚か…………そうなん…………て100年早いん…………だよ』

姉さんは、弱々しく笑いながら勝ち誇ってたわ。

涙が止まらなかった、本当に。

私は、泣く事が好きじゃない。

だというのに、本当にずっと泣いてた。ホームズの時なんて比べものにならない程に。

姉さんは、笑った後すぐに辛そうな顔をした。

『ああ…………ヤダなあ…………死にたくないな…………貴方とホームズ……………………の関係をもつと見…………てたかった…………もつと、ニヤニヤして…………たかった…………』

そう言って、私の顔に手を伸ばす。

『趣味が悪いにも程があるわ……………』

震える声で精一杯の言い返しをしたわ。

姉さんは、私の言葉を聞くと、薄っすらと笑みを浮かべた。

『わがまま……………言わせてもらおうね』

姉さんは、私の頬を撫でる。

『笑って……ちようだい……最後に見るのは……大好きな妹……の笑顔が……いなあ』

本当にわがまま以外の何物でもなかったわ。

こんなに涙が出て、こんなに悲しいのに、寂しいのに、辛いのに、笑えるわけがない。でもね、上のわがままに付き合うのが、下の役目なのよ。

だから、その時私はグチャグチャの顔のまま、精一杯の笑顔をしたつもりだった。

私の答えに姉さんは、それを見ると満足そうに笑ったわ。

姉さんは、消え入りそうな声で最後の言葉を繋ぐ。

『バイバイ』

それっきり姉さんは、何も喋らなかった。

体温もどんだん下がっているのが分かった。

この時に私は家族全員を失った。

今でも思い出すわ。人の命が腕の中で終わる、あの、感覚。

もう二度と体験したくなかったのにな」

ローズは、ついさっきの出来事を思い出す。

思い出したくない、味わいたくないものだ。

話を聞いていたレイアは、ローズに尋ねる。

「……………アルクノアが犯人だっていつ知ったの?」

「マーロウさんが教えてくれたわ。その後には、リアルオーブをもらったの。そう言つて、リアルオーブを見せる。」

「ほう、なるほど」

ヨルが金色の目を光らせる。

「わあ!!ヨル君いつから起きてたの?!」

レイアは、思わず声をあげる。

「『ん……………こは?』ぐらいから」

「最初っからじゃん!!」

レイアのツツコミがヨルに炸裂する。

「やかましい、ムスメだな」

ヨルはウンザリした様に言う。扉の方に視線を向ける。

「そんな所に居ないで出て来い」

その言葉を合図にジュード、ローエン、が入ってきた。

「ばれてた?」

ジュードは、申し訳なさそうに言う。

その後、近くのベッドで寝ているエリーゼ達に目を向ける。

「狸寝入りもその辺にしとけ」

エリーゼとミラは、気まずそうに起き上がる。

『ごめんねー、聞くつもりはなかったんだよー』

ティポは、シユンとしながら、謝る。

そんなティポにローズは、優しく言う。

「いいわ、別に。いざれ話さなくちやいけない事だから……」

『らぶしーんが見れると思ったんだけど……』

「……………」

ローズは、無言でティポを締め上げる。

「ああ……ティポ!!」

「ティポも懲りないねえ……」

ジユードは、呆れている。

エリーゼは、ティポを取り返そうと必死だ。

「ん……………」

そんな大騒ぎをしているとホームズが目を覚ます。

そして、ティポを締め上げるローズをボンヤリした目で見つめる。

「……ローズ、起きたんだね」

「ん、あ、あ、うん、まあ」

ローズは、ティポから手を離してホームズの方を向く。

ホームズは、結局（寝落ちしたとはいえ）ローズが起きるまで側にいたのだ。

『ありがとうって言ってあげれば？』

レイアの言葉を思い出す。

『相変わらず、素直じゃねーな』

マールロウの言葉を思い出す。

(よし……)

顔を赤くして、どうにかこうにか口を開こうとした瞬間、

「何か元気そうだね、おやすみ……ほら、ヨル、行くよ」

ホームズは、そう告げると眠い目を擦りながら、部屋を後にした。

「……………」

後に残されたローズは、間抜けに口を開けている。

レイアは、何と無くローズの気持ちを探し、ポンと肩に手をおく。

ローズは、捨てられた子犬の様な目を向ける。

「レイア……………」

「ローズ……………次がんばろっか」

「うん」

夜はいつだって更けていく。

出鼻を挫きまくる

「ん……………」

ローズは、むくりと起きる。

昨日の事を思い出す。

昨日は、闘技大会があり、毒殺騒ぎがあり、過去の話をし、最後に残念な目にあつた。要約すると、色々あり過ぎて疲れたのだ。

そして、更に、今いる状況もあまり、愉快なものではない。

両親を殺したアルクノアが、今度はミラを狙っている。(ついでにホームズも)

そんな事を思い出しながら、ローズは、頭をボリボリと搔く。

まだ、眠い。

そんな眠くてドロンとした目で辺りを見回すと、

「……………あれ？」

ローズは、違和感を覚える。

「なんか、おかしいわね……………」

試しに人数を数えてみる。

「いち、に、さ……………ん？」

三人目がない。

ミラだ。

「……………ちよ、レイア！エリーゼ！」

ローズは、急いで二人を叩き起こした。

◇
◇
◇

「いた？」

レイアの質問にジュードは、首を横に振る。

ローエンは、髭を触りながら考える。

「従業員の話によると朝早くに一人で出て行ったそうなのですが……」

「昨日の様子じゃあ、一人で無茶はしないとと思うけど……」

「そう口にするレイアも自身は無い。」

「なぜなら……」

「でも、ミラだから……」

「エリーゼの言ったこの一言に尽きる。」

「とりあえず、探しにいきましょう」

ローズの提案にジュードは、頷き、部屋に向かって走り出す。

「じゃあ、僕はホームズを起こしてくるよ。みんなは、先に出てて」

「分かったわ。外で待ってるわね」

「そう言つて、ローズは、扉に手をかけようとしたが、扉の方が先に開いた。」

「ん？ローズじゃねーか」

扉から出て来たのは、マーロウだった。

「相変わらず、朝からキセルをもくもくとさせている。」

「どうしたんですか？こんな朝早くから？」

「マーロウは、ローズの質問に答える。」

「昨日の件の報告にな」

そうやって、煙を吐く。

そんなマールロウの顔を見る限り、あまりいい報告は、期待出来そうにない。

「それで、ホームズの馬鹿は、今何処にいる？」

「上で寝てますよ」

「じゃあ、丁度いい。お前らもついでに聞いて貰おう。後で、俺のウチへ……………」
来いと言おうとマールロウをローズは、手で制する。

「……………これから、いなくなつたミラを捜しに行くんです。だから……………」

「あの姉ちゃん一人で出歩いてるのか!？」

昨日の今日だというのに、不用心な行動を取るミラにマールロウは、驚きを隠せない。

マールロウは、ガシガシと頭を搔く。

「……………わーつた……………とりあえず、ホームズにだけ報告しとくから、後は奴から聞いてくれや」

「分かりました。それじゃあ、いつてきます」

マールロウは、軽く手を振って答える。

ローズ達は宿を出て行った。

「大変だな、アンタも」

通り過ぎざまに、マールロウは、ローエンに声をかける。

「フフフ。若者達を見守るのもジジイの役目ですよ」
ローエンは、笑顔で振り返るとマールロウに言った。

「……………だな。んじゃあ、俺もその勤めを果たしにいきますか」
マールロウは、そう返事をする。階段を登っていった。
ローエンは、それを見送ると扉をゆっくりと閉めた。



ローズ達は宿を出て歩いていった。

しかし、見つからない。

「困ったわね……………」

ローズは、腕を組んでいる。

何処か他に行きそうな所と言えば…………

(ワイバーンのところ?)

いずれ、自分が乗るものをみてみたくなったのだろうか?

(……………ないわね)

すぐさまその答えをかき消す。

すっかり思考の渦に沈んでしまった、ローズ。時折頭を振るのが少し不気味だ…………。

レイア達はそんなローズに触れないようにしている。

「あら、あなた達…………」

その声で、ようやくローズは現実世界に帰ってきた。

「…………イスラ！驚いたわ…………」

「今の声には私は驚いたわ…………」

イスラは、うんざりとしながら耳を抑えている。

「それよりも、昨日は、大変だったわね…………あなた達は、運がいいわ」

イスラの言葉にジュードは、顔を顰める。

「は、はあ…………でも、たくさんの人が亡くなったから…………」

この言葉でイスラは、自分の発言の迂闊さに気付いたようだ。

「そ、そうだったね…………失言だったわ…………ごめんなさい」

慌てて謝るイスラをローズはため息を吐きながら見ている。

「もう少し気を付けて。あなた年上でしょ？」

「…………ええ。そうね」

少し気まずそうに、イスラは、頷く。

そんなイスラに、レイアが訪ねる。

「……あ、あの……ミラ見ませんでしたか？」

イスラは、少し驚くと、エリーゼに向かって微笑む。

「あら。あなたとちゃんとお話をするのは、初めてね」

そう言つて、イスラは、少し屈んで、エリーゼの視線に合わせる。

「ミラさん、一緒じゃないの？」

エリーゼは、小さく頷く。

「一人で出て行つちやつたみたいで……」

レイアは補足する様に説明した。

そんなレイアに構わず、イスラは怪訝そうな顔をして、エリーゼを見る。

「あなた……前にどこかで？」

イスラの言葉にエリーゼは、何が何だか分からず首をかしげる。

「イスラさん。ひよつとして、エリーゼさんの事を知っているのですか？」

ローエンは、思わずそう尋ねた。

「エリーゼ……？」

イスラは、眩きながら、何かを思い出している様だ。

そして、目を丸くし、突然エリーゼか、飛びのいた。

「イスラ? どうしたの、そんなに慌てて?」

今度はローズが首を傾げる番だ。

「い、いいえ、違うのよ」

「いや、何が?」

ますます訳が分からないローズは、更に首を傾げる。

「そ、その、私はこれから、ちよつと用事があるから、これで失礼するわね」

イスラは、そう一方的に告げるとそのまま走り出した。

「何なのかしら?」

ローズの首は、もうこれ以上なくらい傾いている。

「考えても仕方ないよ。それより、ミラを探そう。アルクノアに不意でも付かれてた

ら、大変だからね」

レイアの言葉にティポが口を開く。

『そこは、レイアじゃないから大丈夫だよ。ミラ君は、レイアと違って足を引つ張らな

いもんねー』

突然の毒舌にレイアは、腰に手を当て、声を荒げる。

「ちよ、ちよつと何を言うのよティポー!」

「ああ、もう、行くよ」

ジュードの言葉を聞き、レイアは、我に返る。

「ああ、うん、そうだね」

一行は、再び歩き出した。



「あ、あれ……」

橋を渡っているとローズが突然、前方を指差した。

ローズの指の先を見るとそこにはアルヴェインとミラがいた。

「ミラー！」

「ジュードか……」

ミラはそう返事をした。

しかし、ジュードは、少し怒っている。

「どこ行ってたの?!心配したんだよ！」

「あ、ああ、すまない」

「ミラが押されてれるよ……………」

ローズは、横にいるローエンに話す。

「ええ、なかなか見れるものではありませんね」

「ジュード、怒ると怖いから」

レイアも会話に参加する。

「アルヴィンも。今度からは、行き先を伝えてよね」

しかし、アルヴィンは、ジュードの小言など、どこ吹く風と言わんばかりに腕を組んでいる。

「そんなに怒るなよ、優等生。」

それより、エリーゼが何か言いたそうにしてるぜ」

ジュードは、アルヴィンの言葉を受けて振り返る。

エリーゼは、ジュードの方を向くとティポを強く抱きしめて話す。

「あのね……………イスラさんが私の事を知ってるのかも……………」

「イスラガ？」

ミラは驚いて、エリーゼに一步近づく。

ジュードは、頷いて答える。

「うん……さつき、エリーゼの顔をまじまじと見て顔色を変えたから……」

『でも、逃げるみたいにして、どこか行っちゃったんだ』

テイポが更に説明する。

「そうか……」

ミラは何と無く釈然としない様だ。

「今度、イスラさんに会ったらちゃんと聞いてみようね」

「そうね」

ローズは、微笑んで頷く。

きつと次会ったら話してくれるだろう。

『誤魔化された質問に答えてもらうのは、無理とは、言わないけどなかなか大変だよ』

そんな、ローズの脳裏に不吉な言葉が過る。

幸先が悪いにも程がある言葉がある。ローズは、振り払う。

そして、同時に考える。

(誰が言ったんだっけ?)

とりあえず、マールロウでは、ない事は確かだ。

マールロウだったら、もつとこう、豪胆な感じに言いそうだ。

ついでに言うならホームズでもない。

ホームズとした、会話らしい会話は少な過ぎて、覚えるのが楽すぎるのだが、その少ない会話の中にもない。

姉かと思つたが、それも少し怪しい。

もう少し、年上だった気がするのだ。

(本当に誰だったんだらう……)

「……………ズ、ローズ!!」

「……………へ?! な、何?」

レイアの声にローズは、ハツとする。

「何じゃないよ。どうしたの？えらく考え込んでたけど……」

「ああ、それね」

ローズは、一旦言葉を切る。

「昔言われたの、『誤魔化された質問に答えてもらうのは、無理とは、言わないけどなかなか大変だよ』って……誰に言われたのかなあ……って考えてたのよ」

「意味深なセリフだね……誰だろう？」

レイアは、悩んだが直ぐに答えに辿り着いた。

ポンと手を叩き、人差し指を立てる。

「分かった。多分、ホームズのお母さんだよ。よくホームズが、使う言葉にそっくりだもん」

ローズは、ようやく、合点がいった。

ホームズの母は、この街にいる時はローズの家によく来ていた。なので、話す機会もたくさんあったのだ。

「うーん……幸先の悪い言葉だね」

ジュードは、引きつり笑いをしている。

「あ、ごめん……」

ローズは、引きつり笑いをしながら、直ぐに謝った。

その時、空中闘技場から、鐘の音がシャン・ドウいつぱいに響き渡った。ローズは、目を丸くする。

「時間か……」

「どうしたの、ローズ？」

驚いているローズにレイアが尋ねる。

「あんた達、闘技場に急いだ方がいいんじゃない？」

しかし、ローズの代わりに年配の女性が忠告する。

ジュードが驚いてローズを見ると

ローズは、コクリと頷いて答えた。

『え?! 大会始まつちやうのー!?!』

「もしかして、早く行かないと失格なつちやつたり?!」

レイアとティポは、大慌てだ。

対照的にミラは静かだ。

「いいのか？ 大会は、辞退を考えていただろうか？」

そんなミラの疑問に一同は、笑っている。

「迷いながらも行動をするのが人間。そう言ってくれたのは、あなたじゃないですか」

ローエンは、微笑みながらそう答える。

ローズは、腕を組んで感心している。

「へえー、いいこというじゃない。マクスウエル様」

ローズの褒め言葉にミラは微笑む。

「うむ、そうだったな。助かるよ、みんな」

ミラの言葉にジュードは、頷くと、先程の年配の女性の方を向く。

「あの、どうして、僕達が参加者だつて分かつたんですか？」

「この時期に、この街によその街の人がいたら、それは、闘技場を見に来たか、参加者

のどちらかよ」

「ここじゃ、ジューシキだよ」

隣りにいた女の子も言葉を続ける。

「そうなの？」

ジュードは、振り返ってローズに尋ねる。

「そうよ。まあ、例外もいるけど」

ローズがやれやれと言った風にジュード達を見る。

ローズ達の答えに、ジュードは、目を閉じて物思いに更ける。

「……………ジュード？」

そんなジュードをエリーゼは、不思議そうに見ている。

ジュードは、そんなエリーゼに少し微笑む。

「ごめん。なんか、頭の中で引つかかっただけで……………闘技場に急ごう！」

一同は、闘技場に歩みを進めた。

『物事には、必ず、前兆というものがある。見逃すと、後でとんでもない事が起きるよ』

ローズは、再びホームズの母の言葉を思い出し、歩みを止める。

「前兆、ね……………」

もう、前兆はあちらこちらに出ている。

ローズは、考えるが、どうも正解は、出て来そうにない。

「諦めたほうがよさそうね」

ローズは、羽織をはためかせ、仲間達と空いてしまった距離を走って埋める。

(考えても答えが出ない時は、目の前の事を片付けるしかないわ)

ローズは、そう決意を固め強く足を踏み出した。

『まあ、見逃さなくても、とんでもない事が起きるなんて、よくある事だけどね』

「はあ………」

そんな、気合いを入れた矢先、ローズは、続きの言葉を思い出し、思わずため息を吐く。

「……?どうしたの、ローズ?」

レイアの言葉にローズは、顔に影を作る。

「……後で話すわ」

ローズは、もう一度ため息を吐いて歩みを進めた。

泣きつ面に駄目押し

「はあ?!ミラがない!?!」

朝一発目の驚きがそれだった。

ジュードからの報告にホームズは、思わず耳を疑った。

「あの子は、仮にも狙われてる身なんだよ」

「そうなんだよ……………」

ジュードも心配そうだ。

ホームズは、頭をガシガシと書く。アホ毛が一本、ぴよこんと立つとホームズは、急いで着替える。

「取り敢えず、おれも行く……………」

「よう、ホームズ。元気か?」

今にも出かけようとした矢先、マーロウが入ってきた。

「つとに、タイミングの悪い……………」

「まあ、そういうな。取り敢えず、例の報告がある」

声を潜めてマーロウは真剣にいう。

「場所を変えたい、俺の所で話をしたいのだが……」

ホームズは、完全に困ってしまった。緊急を要するものが、二つも重なってしまったのだ。

「……取り敢えず、あのオンナの事はつり目のガキ共に任せて、おれ達で情報だけでも貰ってくるつてのが妥当じゃないか」

「……………そうするかねえ。任せてもいいかい、ジュード」

「うん。そつちも任せるよ」

ジュードにそう言うと、ホームズは、マーロウの後をついて行った。

◇◇◇◇

「まずは、報告だ」

マーロウは、キセルを吹かす。

「とつ捕まえた、アルクノアどもだが、上から解放しろとのお達しが出た」

「やつぱり……………」

ホームズは、唇を噛む。

「お前の策的には、どうなんだ？現状確認は出来たか？」

ホームズは、下を向く。

「アルクノアを手放せというお達し……………誰がどう考えても、上の連中とアルクノアは繋がってる。

いや、もつと正確に言うなら圧力がかかっていると考えたほうが妥当かもしれませぬ」

「ま、だろうな」

マーロウは、ケムリを吐き出す。

自分達の情報が漏れば、アルクノアは、困ってしまう。

それを奴らは、強奪や暗殺という力技ではなく、上から指示を出させている。

「随分とアルクノアが根を下ろしているみたいだな」

ヨルは、忌々しそうにこぼす。

マーロウは、苦い顔をする。

「油断してたつもりはなかったが……………お前からの依頼は、かなりギリギリだったやうだ」

「ですね……………とりあえず、おれはこの事を報告しに行きます。他は何かありますか？」

マーロウは、首を振る。

出て行こうとすると、突然、鐘が鳴り響いた。

「コレは……?」

マールロウは、苦々しい顔をする。

「まあ、ろくでもないことが進行してるんだろうな。取り敢えず、ホームズ。お前は闘技場へ行け」

「……まあ、そうするしかなさそうですね」

靴紐をしつかりと結ぶ。

ホームズが靴紐を結び終わると、マールロウが何かを投げつける。

慌ててキャッチし、何を投げつけたか、確認する。

そこにあつたのは、包帯だった。

「昨日の傷口が開いたら使え」

ホームズは、しばらく包帯を見る。

「ありがとうございます」

ホームズは、そう素直に手をあげて礼をいう。

マールロウは、キセルを啜える。

「……ホームズ、気をつけろよ」

マールウは、心配そうに声をかける。

「言われなくても、です」

ホームズは、いつもの胡散臭い笑顔でそう言う。と部屋を出ていった。

◇◇◇◇

「ミラー！」

闘技場についたホームズは、ミラの姿を見つけるとツカツカと歩いて行き、ミラの頬をつねった。

「ふえにを何をすふる！」

「あれ程一人で、出歩くなと言っただろう！」

珍しく声を荒げるホームズにミラも少し息を飲む。

「落ち着きなさい、ホームズ。ミラは、一人ではなかったわ。アルヴィンと一緒にだった」

ローズの言葉にホームズは、ミラの頬から、手を離す。

「……………そう良かった」

アルヴィンとあの会話をした以上素直に、喜べないのだが、何も無かったので、とり

あえずホームズは、胸を撫で下ろした。

「ホームズさんの策は、どうなりました？」

ローエンの言葉にホームズは、顔を顰める。

何せ余りいい知らせでは無いのだ。

「二応の成果はあつたよ」

ホームズは、一旦区切ると再び話を始める。

「昨日捕まえといた、アルクノア、上の連中から解放しろとのお達しがでた」

「つまり、上の連中とアルクノアは、べつたりつて訳だ」

ヨルが、ホームズの言葉を引き継ぐ様に言う。

ローエンは、あご髭を触る。

「アルヴェインさんの情報と被りますね」

ローエンの様子から察して、嫌そうな顔をする。

「さっきの鐘といい、今のこの雰囲気といい、今何がどうなっているんだい」

「実はですね……………」

何も状況がつかめていないホームズにローエンは説明をする。

「今から決勝戦をやる?!」

「はい」

「しかも、前王時代のルールにのって、一対一で相手が死ぬまでやる?!」

「はい。その話が出た時、ミラさん狙いの策だと、アルヴィンさんが教えてくれました」

ホームズは、思わず爪を噛む。

事態は、ホームズが思っている以上に最悪な事になっている。

ヨルは、話題に登ったアルヴィンを目を細くして見る。

「……………何故こいつが、んな事を知っている」

「アルヴィン、昔アルクノアに雇われていたんだって」

ヨルの質問にジュードが答える。

「……………ほう」

「で、これからは、アルクノアからの仕事は引き受けない様にするって」
ジュードの言葉にヨルは、アルヴィンの方を見る。

「ま、優等生に頼まれたからな」

まだ、疑いの目を向けているヨルをホームズは、目で制すると、ミラに話す。

「……………狙いは、多分ミラだけじゃないよね」

恨みを買っているのは、ホームズも同じだ。

「だが、奴らが優先して倒したいのは、私だろう」

ホームズが言うつもりセリフをミラは先回りする。

「だから、今回は私が出よう。ホームズ、お前はジュード達と共に観客席から、私を狙おうとしているアルクノアを見つけてくれ」

ホームズは、渋々頷く。

「……………わかった。君も気を付けなよ」

ホームズのセリフを聞くとミラは、思い出した様に手を叩く。

「ホームズ」

「ん?」

「心配かけて済まなかった」

ミラは先程抓られた頬を撫でながら言う。

ミラから、面と向かって謝られるのは、初めてだったため、目を丸くする。

「……………その通りだから、よく反省したまえ」

ホームズはそう言った。

「人のこと、言えませんが、ホームズさん」

ローエンは、そう言ってホームズを見る。ホームズは、気まずそうにしている。

ローズを背負って血だらけで帰ってきたり、いじめられても助けを求めなかったり

とホームズもなかなかのものだ。

「さあ、行こう」

ミラは皆を先導する。

一同は、ミラについていく。

そんな中、ローズは、列の後ろで髪を縛り直す。

「どうしたの、ローズ？髪緩んでたの？」

ローズは、首を横に振る。

「別に、ただ、気合いを入れようと思って」

口に髪留めの輪っかを口に咥える。

そして、歩きながら髪を後ろで一つにまとめると、口にあった紐を髪に持っていき、綺麗に縛り、後ろに垂らす。

いつもの、ローズのお約束のスタイルになった。

レイアは、その手際に驚いている。

「凄いね、ローズ。鏡を使わずにこんなに綺麗に……………」

「慣れれば誰だってできるわ」

謙遜する訳でも、照れる訳でもなく、ただ、当たり前前のように言う。

レイアは、引きつり笑いをしている。

「そういえばさ、その髪留めってローズが買ったの？」

「いいえ」

ローズは、少し間を置く。

「私の誕生日にイスラが買ってくれたの、家族が殺された次の年の、ね」
そう言っつてローズは、レイアに微笑みかける。

「だから、私の宝物なの」

「そう」

同時にレイアも笑顔になる。

その後、頬をパンと両手で叩いて気合いを入れる。

「よし、頑張ろう！」

「ええ！」

ローズもそう答え、二人は、前を歩いている一行に追いついた。

一行は、辿り着く。

文字通り死闘を繰り広げるであろう、舞台へと。

◇◇◇◇

【最初に登場したのは、キタル族代表だ！】

場内のアナウンスと共にミラは堂々と歩いてくる。

【先日不幸な出来事がありました、大会執行部の努力により、無事、開催される事になりました】

ホームズは、観客席で辺りを見回している。
皆それぞれが持ち場について警戒している。

【それに伴い、今回は公平に行う為、過去の慣例にならない、前王時代のルールでしたいと思えます】

「……………人間というのは、随分と頭の悪い事をいう様になったな」

「螺子が飛んでいるだろうさ」

ヨルとホームズは、呆れている。

そんな事をしながら、ミラの対戦相手を見る。

対戦相手はやけにでかい機械の様な物をもっている。

「……………アレはー」

ホームズは、見覚えのある機械に思わず目を剥く。

一瞬の出来事だった。

機械の切っ先に電気がチャージされたかと思つたら、次の瞬間には、電撃が真つ直ぐにミラに向かつて走つていた。

「今、詠唱をしなかつた！」

ホームズとは、離れた所にいたジュードも驚いている。

「アレが黒匣だったのかい……」

ホームズは、舌打ちをする。

詠唱なしで、あの威力、最早兵器の域だ。

あの大きさであの威力なのだから、クルスニクの槍なんて正直考えたくも無い。

黒匣一つでも厄介なのに、一人の筈の対戦相手が次々とそれぞれ、黒匣をもつてやつてくる。

「こりゃあ、マズイかも……」

ホームズは、苦々しい顔になる。

「いや、離してー！」

ホームズが呟いたと同時に、エリーゼの声が聞こえた。

ホームズが思わず声のした方、つまり、右斜め前の席に顔を向けると、そこには、ティポを取り返そうとするエリーゼがいた。

ミラが狙いの筈なのに、襲われているのは、エリーゼとティポだ。

「おい、さつきから、奴らの行動がめちやくちやでちぐはぐだ。

どうなってやがる、ホームズ」

ヨルは何が何だかわけが分からないという、感じた。

しかし、ホームズから返事はない。

「ホームズ？」

怪訝そうにヨルはホームズの顔を覗き込む。

「………つたく奴らは、おれのわき腹に恨みでもあるのかねえ……」

次の瞬間、ホームズの口から血が吐き出される。

ホームズの口の中は鉄の味でいっぱいだ。

「ホームズ！」

ヨルの声を聞きながら、ホームズは膝から崩れ落ちる。

わき腹を見るとナイフが、深々と刺さっている。

「クソ！取り敢えず、あのムスメか、つり目のガキ、呼んでこないと………」

ヨルは、辺りを見回す。

一番近くにいた、レイアをヨルが呼ぼうとするが、ホームズは、口に指を当てる。

「コレは………おれ達で対処しよう」

ホームズは、無理矢理立ち上がり、ナイフを引き抜く。

案の定血が溢れ出てくる。

「やっぱりねえ………ま、ナイフなんて、どうせ、取れるし」

ホームズは、そうつぶやく。

そして、ハンカチを傷口にあて、出発前にマーロウにもらった包帯で縛る。

マーロウが意図した用途とは、少し違うがホームズは、何とか、形だけでも、止血する。

止血を終えると、再びヨルに向き直る。

「流石に、こんな事をする奴を野放しにしておくわけにもいかないだろう?」

ホームズの言葉にヨルは、思わず耳を疑った。

「正気か?!こんな人間がいる中から、お前を刺した奴を見つけていうのか?!」

「まあね。考えがないわけじゃない」

ホームズは、ヨルの言葉に答える。

しかし、ヨルの心配事は、それだけではない。

寧ろ、傷の方が重要だ。

「……………分かってるのか?ここじゃ、人が多すぎて、お前の唯一の回復手段の守護方陣が使えないんだぞ。急所を外れているとは言え、軽い怪我じゃない。治療を優先した方がいいと思うが……………」

ホームズは、額に油汗を浮かべるとポケットから、アップルグミを出して、食べる。少しだけ、顔に生気が戻る。

「ミラにエリーゼにティポ……………これ以上みんなにトラブルを与えてもしょうがない」
ホームズの目には、決意の色が現れていた。

自分の事を後回しにするこのクセ。

ホームズの達が悪い所は、その誰もが尻込みするような選択肢を強い決意をもって選ぶのだ。

こうなつてしまうと、誰にも止められない。

何を言つても無駄だと思つたヨルは、忌々しそうに顔を歪め、それから、ため息を吐く。

「……………死ぬなよ。俺まで死ぬ事になるんだからな」

ヨルとホームズの関係は、そう言うものなのだ。

「そうならないように、君がいるんだろう？」

ホームズのいたずらっぽい笑みを見てヨルは、嫌そうに顔を歪める。

「いい性格してるな、本当に」

「だろう？」

闘技場で捕まえて

「で、どうやって、こんなうじゃうじゃいる人間の中から特定の人物を探し出すんだ」
ヨルの質問に、ホームズはむくりと立ち上がりながら答える。

「おれの血の匂いを目印に探してくれないかい？」

ヨルは、ホームズに言われた通り鼻をひくつかせ、探す。

コレで見つかればいいのだが……………

「…………お前の血の匂い、あちらこちらかするぞ。恐らく、血のついたものを捨て…………
いや、拭いているな。俺の鼻をごまかす為に……………お前の血の匂いは役に立たん
ぞ」

そうは問屋が降ろさなかつた。

「…………面倒だね」

ホームズは、歯噛みする。

「まあ、やるしかないけど…………」

ホームズは、後ろ向きに気合いを入れた。



上手くいった、と男、アルクノアの男は考えていた。

どうやら、奴らは完全に勘違いしていたようだ。

最初から、狙いはマクススウェルでもホームズでもない。

あの、ティポとか呼ばれている人形なのだ。

そのサポートを自分は、ボスから任されていた。

仲間の一人が少女から、人形を無事取り上げた時、コレで作戦は終わりだと思った。

しかし、それだけでは終わらなかった。

自分の目の前に猫を肩に乗せた、男が通り過ぎたのだ。

この騒ぎのなから、普通、見過ごしただろう。

しかし、自分は、見過ごせなかった。

あの出で立ち、そして、喋り方。

どう考えても、あの時自分達のいた拠点を潰して暴れまわった奴だ。

奴のせいで、自分は、居場所を完全に失ってしまったのだ。

それからの日々は決して楽しい日々ではなかった。

それを思い出した時には、手にはナイフが握られていた。

怒りで頭に血が登ったという所だ。

しかし、不思議と出来るだけ気付かれない様に奴に近づき、腹を刺す、これをやるだけの冷静さも保っていた。

急所を外してしまったのは痛かったが、あの傷なら動けないだろう。

もし、治療してもらうなら、誰かを呼ばねばならない。

別にそれは、それでいい。

そうすればマクスウエルへの応援が減るだけだ。

逆に、それをしなければ奴の怪我は悪化する。急所を外されているとは言え、軽い怪我では無いのだ。行動不能ぐらいになら出来るだろう。

ティポを手にいれ、上手くいけばマクスウエルかホームズのどちらが消える事になる。

まさか、自分でも、ここまで上手くいくとは思っても見なかった。

正直笑いが止まらないという奴だ。

口は醜く歪み、気を抜くとヨダレがこぼれてしまいそうだ。

「ふふふふ、ははははは………」

今、自分達を散々苦しめた奴、ミラ・マクスウエルは、黒匣^{ジン}を前に避ける事しかできない。

今までの自分達が受けてきた屈辱を奴はもろに受けているのだ。

「せいぜい苦しめ、ふふ、はははは!!」

観客席から、声援を送る事にする。

すると、客席から、悲鳴が聞こえる。目の前で観戦していた連中は、席を空ける。

自分としては、ちようどいい限りだ。

何せ、見つらくて困っていたのだから。

ラッキーと思っていると、頭に違和感を覚える。

不思議に思っていると、観客席の手すりが自分に近づいてきた。

そして、そのまま自分の顔面に衝撃を与えた。

「……………?!」

この時になってようやく分かった。

手すりが近づいたのでは無い。

自分が手すりまで吹っ飛ばされたのだ。

「やあ」

挨拶に振り返ると、そこには、アホ毛を立て、ポンチヨをはためかせた、碧い瞳のがチャームポイントのホームズが肩にヨルを乗せ佇んでいた。



「な、何で俺だつて分かった!」

ホームズが投げ飛ばしたアルクノアは、鼻血を垂らしながら叫ぶ。

ホームズは、呆れている。

「もう少し、シラぐらい切りたまえよ……」

「いいから答えろ!!俺達には靈力野^{ゲイト}がない、だから、その猫を使って、それを頼りに探す事は不可能の筈だ。おまけに、お前の血の匂いはあちらこちらでするようにしてある。どう考えても、俺だけに標的を絞る事はできないんだよ!」

ホームズは、左手にある円盤の盾をいじる。

「解説ごーも。ところで、何処でそれを聞いたんだい?」

「黙れ!質問してるのはこっちだ!質問に質問で返すなど言われなかったのか!」
懐から取り出したナイフをホームズに向けている。

ホームズは、ため息を吐くとゆっくりと奴に近づく。

「簡単さ。おれの血の匂いがして……そして、靈力野^{ゲイト}の気配を感じない人間を探したんだよ。それが君だった。ただそれだけだよ」

そもそもヨルがホームズが刺されるまで気付かなかつたのは、靈力野^{ゲイト}の気配を感じなかつたからだ。

この時点で、容疑者は靈力野を持たないアルクノアに絞られる。だが、それだけでは、まだ足りない。

だから、ホームズが次に選んだのは、ヨルが役に立たないと切り捨てた、ホームズの血の匂いだ。

あつちこつちで拭いているとヨルは、言った。つまり、本人にも血の匂いがついてい
る可能性があるのだ。

ホームズは、それにかけて条件を絞ってヨルに探させた。

一つでは、足りない、しかし、二つ揃えば相手を絞り込む絶好の条件なのだ。

「くつくつく、こういう時は、お前を褒めたくなるなあ」

「そりゃあ、どうも。涙が出るほど嬉しいね」

ヨルは、満足気に目を細める。

ホームズは、頬を引きつらせながら返す。

ヨルとは対照的に男は目を限界まで開く。

「クッソ！」

己の計画が破綻したことに男は、気付くとナイフを構えるとホームズに向かって突き
出してくる。

ホームズは、空中まで、ジャンプをすると、観客席の手すりに着地する。

あんな不安定な足場に着地した癖に本人は、至って普通の顔をしている。

アルクノアの男も同様に手すりに乗る。

そして、ナイフを捨てると細身の剣を懐から抜く。

「へえ……………」

ホームズは、にやりと笑うと力強く踏み込んだ。

観客達の騒音をゴングとして。



「あれ、アルヴィンとホームズは？」

ミラに助太刀する為に、ジュード達は闘技場の方に降りた。

「アルヴィンは、攫われたティポをエリーゼと共に追った。ホームズは……………」
知らんと言おうとして、ミラは、言葉を無くす。

「あれじゃないか？」

ミラの指差す先に、手すりの上で恐らくアルクノアであろう男に蹴りを放っている

ホームズがいる。

「ホームズ!!」

レイアは、予想外の事に驚いて声をあげる。

一歩間違えば、そのまま転落コースの場所で、ジャンプ、回し蹴り、とヒヤヒヤするような技の連続を行っている。

「ホームズ………わき腹が赤いんだけど……」

ローズは、どう考えても普通ではない赤みに息を呑む。

ローエンは、相手から視線を外さずに口を開く。

「恐らく、ホームズさんは、ミラさんを助ける戦力を減らしたくなかったのでしょう。ホームズさんの傷を治す為にジュードさんかレイアさんと呼ばば、それだけで、ミラさんへの助けが減ってしまいます」

エリーゼがいけない今、貴重な回復役を分割する訳にはいかない。

そして、口にごそ出していないが、ローエンは気づいていた。

今回は、予想外の出来事が多すぎた。

ここでホームズが襲われるなんて事態まで起こってしまったえば、ジュード達では対処しきれない。

だからこそ、ホームズは、自分で対処しようとしたのだ。

「みなさん、ホームズさんも気になりますが、今は目の前の相手に集中しましょう」
「ローエンの言う通りだ。いくぞ！」

ジュード達はローエンとミラの言葉で目の前のアルクノアに各々武器を構え直す。

「ホームズ………帰ってきなさいよ………」

ローズは、悔しそうに歯噛みをしながら、小さくこぼした。



アルクノアは、切っ先をホームズに狙いを定めると突き出す。

ホームズは、飛んでそれを躲すと相手の後ろに着地し、蹴りを放つ。

しかし、相手もそれぐらい予想していたようだ。屈んでかわす。

蹴りを躲されたホームズは、バランスを崩さないように、両足をまた、手すりの上に着地する。相手は、振り向きざまに剣を振るう。

ホームズは、一步後ろに下がる。

さつきから、ホームズは、攻めあぐねている。

相手の細身の剣。これのせいで、ホームズの間合いで勝負出来ないのだ。観客席に降りてもいいのだが、下手すれば巻き込んでしまう。

文字通り崖っぷちという奴だ。

そんな事を考えていると、相手からの連続の突きがやってくる。

ホームズは、何とか紙一重で躲す。

最後の一撃をホームズは、盾でいなす。

そして、相手の懐に潜り込む。

ようやくホームズの間合いで勝負が出来る。

ホームズは、そのまま、顎を蹴り上げようと右足を僅かに上げる。

その時、相手は、避けるでも、防ぐでもなく、自分の懐に手をいれる。懐から出てきた手にはナイフが握られている。

「——ッ!!!」

完全に油断した。

戦闘が始まる前に、相手は、ナイフを捨てた。

これで、相手の武器は剣のみとホームズは、判断してしまった。

攻撃体制に入っている今のホームズに紙一重で躲すという芸当は、無理だ。

ホームズは、バク宙をしながらナイフを蹴り上げる。

そして、手すりから踏み外す事なく着地する。

予想外の行動に相手が驚いているうちに、後ろに下がり距離を取る。

無事だったのはいいのだが、相手の手にはまだナイフが握られている。

ホームズは、ため息を吐く。

「剣にナイフって………卑怯でしょ。おれの間合いで勝負出来ないじゃないか」

「バーカ。勝負つてのは、そういうもんだ」

アルクノアは、ホームズの文句にそう返すとホームズに向かって駆け出した。

「おれがいうのも妙だけど、よく、こんな場所で戦えるね」

「ああ、同感だ」

ホームズとヨルの会話が終わる頃には相手の剣がホームズに迫る。

その剣をいなす。

しかし、相手は、次にナイフで追撃してくる。

突っ込めば確実にナイフの餌食だ。

何とか後ろに下がると、今度は剣が襲ってくる。

(隙がないっーか……)

剣先がホームズの頬を掠める。

「打つ手がない、だろう?」

剣が真っ直ぐホームズに迫る。

剣を盾で受け止める。

レイピアというわけではないので、押される。

(くっそー!こっちとら、出血が多くてフラフラしてんのに!)

ホームズは、歯ぎしりをしながら、足を踏み外すギリギリのラインで踏ん張る。

押し切るかと思いきや、相手の方が距離を置く。

突然力を緩められたホームズは、前のめりに体制を崩す。

相手の狙いはそれだったようだ。

剣は、真つ直ぐホームズに狙いを定める。

そして、一気に距離を詰める……………

筈だった。

「なっ……………！」

アルクノアの男は足をもつれさせ、体制を崩す。

ギリギリのところで身体を捻り観客席の方に落ちる。

今の自分の状況を振り返ってみるが、どう考えても、そんな事は起こる筈がない。

気になって、違和感のある自分の足を見る。

そこには、右足に巻きついている黒い紐、ヨルの尻尾が目に入った。

よく目を凝らしてみると、ホームズの肩からだらりとヨルの尻尾が観客席の床を這つ

ている。

ご丁寧に分かりづらいように、手すりのすぐそばを這っている。

「ふうー……やれやれ間に合った」

ホームズは、そう微笑むと観客席に降る。

そして、胸ぐらをつかみ上げる。

「手は無いけど、尻尾ならあるさ」

そう言つて男の足に巻きついている尻尾を見る。

ホームズは、その男の言葉を聞くと闘技場の方へ力任せに投げる。そして、ホームズもそれを追撃するように観客席から飛び降りる。

ヨルが尻尾を縮め、男を引き上げる。

「おら、しつかり、決めろ」

「言われなくても」

上がってきた男の腹にホームズの蹴りが炸裂する。

男は頭に響き渡る、鈍い音と共に、胃の中にあるものを吐き出す。

「卑怯………だ」

苦しそうな声でかすれながら、男はホームズに言う。

ニヤリとホームズは、笑みを浮かべる。

『バーカ。勝負つてのは、そういうもんだ』

ホームズは、足を腹に当てたまま、闘技場へと落ちていった。



「く…………やはり、厄介ですね。詠唱が無いというのは」

ローエンは、攻めあぐねている。

相手の実力は大したものではない。

しかし、持っている兵器が厄介なのだ。

皆も似たような感じだ。

相手の隙を何とか伺っている。

そんな時、アルクノアとジュード達の間影出来る。

ミラはそれが何なのか察知したようだ。

「下がれ!!!」

ジュード達は驚いて下がる。

ミラの忠告の直後にアルクノアが、降ってきた。

辺りを響かせる轟音と共に砂埃が巻き上がる。

そんな中、ゆらりと一人の人影がゆっくりと立ち上がる。

はつきりと姿を見たわけではない。

しかし、見覚えのある、シルエツトにローズは、驚いた。そして安堵した。

砂埃が晴れるに連れて、姿が露わになる。

アホ毛を立て、ポンチヨをはためかせた、

ホームズ・ヴォルマーノの姿が。

今、ようやく、ホームズは、闘技場へと降り立ったのだ。

人を呪あば、覚悟を決めろ

「……………っ!!」

アルクノアは、一瞬動揺したが、すぐに全員で、ホームズに狙いを定める。

「バカだねえ」

「……………ソリッドコントラクション!!」

ホームズに気を取られている間にローエンの詠唱が完成する。

光の鎖が、現れ三人のアルクノアをまとめて、攻撃する。

油断していた事もあり、殆どの面子の意識は、飛んでしまっている。

「くそ!!」

しぶとく、耐えたアルクノアの一人が黒匣ジンをホームズに向かって構える。

「アリーヴェデルチ！」

またしても、隙を突かれたアルクノアは、ミラの精霊術で空高く舞い上がる。

「ヨル」

ホームズはヨルに指示を出すとジャンプする。

詳しい指示はなかったが、ホームズの意図を察するとヨルは巨大な生首になる。

ホームズを押し上げる様に。

ホームズは、空中で一回転しながら、相手の上空をとる。

そして、勢いをそのまま、空中一回転踵落としを顔面に叩き込む。

「断空打！」

空中にいる事を断られた相手は、ホームズ程でないにせよ、砂埃を巻き上げて落下した。

落とされた相手は、ピクリとも動かない。

時間差でホームズも着地する。

アルクノアで動いているものは、誰もいなかった。

「これは、キタル族代表の勝ちなのか？」

余りにたくさんの事が起こりすぎて、司会も混乱気味だ。

「ホームズ!!」

ローズが心配そうに駆け寄る。

今まで背を向けていたので気づかなかつたが、ホームズは、酷い脂汗をかいている。

「ジュード！治療を！」

「うん！」

ジュードは、急いで治療術をかける。

傷は塞がり、ホームズの顔に少し生気が戻る。

「ありがとう、ジュード。大分楽になったよ」

ホームズは、表情を柔らかくする。

「エリーゼは？」

「アルヴィンが追っている」

ホームズの質問にミラが黒匣ジンを壊しながら答える。

「あのチャラ男がねえ」

ヨルは、全く信用していない。

ホームズは、そんなヨルを目で諫めると立ち上がる。しかし、すぐにふらつく。

偶々近くにいた、ローズに寄りかかる。

「……………随分と無茶したわね」

ローズは、少し怒っている。

「安心したまえ。このぐらいい無茶でも何でもないよ」

そう言ってローズから、離れようとするが、フラフラと危なっかしい。

ローズは、痺れを切らすとホームズをおぶる。

何かホームズは、言いたそうだが、

「今やらなければならぬ事はエリーゼを追う事よ。貴方のプライドなんてゴミよりも役に立たないわ」

そう言って、闘技場を後にした。

「私達も」

ミラの言葉に、皆がローズの後を追った。



「アルヴィンとエリーゼは?!」

空中闘技場からでるとミラは、受付付近にいたユルゲンスに尋ねる。

「仲間が今行方を追っているがまだ連絡がない」

「私達も探そう!」

レイアは、ミラ達に提案する。

しかし、すぐにユルゲンスに断られる。

「待って、二人は、街の外へ出た。土地勘の無いものが捜しても無駄足になるだけだ」

ユルゲンスの言葉にミラは腕を組む。

「道理だな」

「わかりました……………」

ミラとジュードは、渋々頷く。

悔しいが、ユルゲンスの言う通りなのだ。

だが、ローズは、違う。

「だったら、地元の私が……………」

「よしたまえよ、ローズ。入れ違いになる可能性がある。ここは、ユルゲンスさんの事

を聞いておこう」

背負われたままのホームズは、ローズにそう言う。

仲間がピンチだと言うのに自分に出来る事が無い。

ローズは、悔しそうに頷く。

「ここにいても、はじまらん。一旦宿に戻りたいんだが」

ヨルの言葉にローエンは頷く。

「そうですね………ユルゲンスさん、我々は一旦宿に戻ります」

「分かった、報告を後で持って行こう」

◇◇◇◇

「ホームズ、降ろすわよ」

「ん、どうも」

部屋に着くとローズは、ホームズをベットに下ろす。

「エリーゼ……心配だねえ」

「貴方は、まず、自分の心配をしなさい」

ローズは、少し強い口調で、ホームズに言う。

「……………怒ってる?」

「……………その質問に怒りたいわ」

ローズは、額に青筋を浮かべる。

「ローズは、ホームズの事を心配してたんだよ」

訳がわからないという顔をしているホームズの為に、レイアが助け船をだす。

治ったとはいえ、ホームズのポンチヨを染め上げた赤は、尋常なものではなかったのだ。

遠目から見ても一発で分かる代物だった。

という訳で凄く心配しているのに、そんな質問をされてしまえば、誰だってこの様な顔になってしまう。

「えつと……………ローズ、もう大丈夫だよ」

ホームズは、ようやく分かったみたいで、少し慌てながら言う。

「みたいね」

ローズは、言うどホームズの鼻を摘まむ。

「ふっおー!」

突然の事にホームズは、奇妙な声を出す。

ローズはぎゅつと力を指にしばらく込める。

「このぐらいで勘弁しておくわ」

そう言うのと乱暴に離す。

ホームズは、ヒリヒリする鼻を撫でる。

「それで、ホームズさん。正直に言ってください。結局のところ具合は、どう何ですか

？」

「ん、まあ、最高とは、言えないかな……………」

ローエンの言葉にホームズは、治った傷を見る。

ローズは、壁に背を預けながらホームズを見る。

「連絡がくるまで寝てたら？ 少しでも体力を回復しておいた方がいいと思うわ」

ローズの言う事も最もだ。

今の状態のホームズは、はつきり言って足手まといだ。

「そうだね……………連絡が来たら起こしてよ」

ホームズは、ローズの提案を受けライフボトルを飲み、パイングミを食べ布団に入る。

しかし、すぐに顔を出す。

「いい、連絡来たら起こしてよ」

「はいはい」

「絶対だよ」

「分かったって」

「この前みたいに危うく取り残されたくないから」

「分かっているって」

「いい？絶対だよ。もし置いていったら……」

「やかましい！とつと寝なさい!!」

取り敢えずローズは手元にあつた枕をホームズに投げつける。

ホームズは、心配だなあとブツブツ文句をしばらく言っていたが、すぐに文句ではなく寝息だけが聞こえてくる様になった。

ローズは、ようやく一息つき、真剣な顔をする。

「あとは、エリーゼとアルヴェインね」

自分が何もできないというのはなかなか、ストレスがたまる。

(無事でいて、二人とも……)

祈るしかない。

悔しい事だが。



「よう、ユルゲンス、調子はどうだ？」

マーロウは、街中で、ユルゲンスを見かけると声を掛けた。

闘技場での一件は、マーロウも知っている。

しかし、闘技大会に係わる事なので、何もできない。

「芳しくないですね。執行部の方が渋ってしまい、なかなか捜しにいけませんよ。今、必死に説得中です」

「……………」

マーロウは、顎に手を当てる。

アルクノアとの繋がっている大会執行部が恐らく、押さえつけているのだろう。事は一刻を争うと言うのだ。

(ふむ、けれども、今なら……………)

「マーロウさん？」

不審に思ったユルゲンスが、マーロウに尋ねる。

マーロウは、キセルを啜えながら話す。

「奴ら、今どこにいる？」

「闘技場の運営室ですけど……」

マールロウは、煙をふうつと吐く。

「分かった。お前も来い」

「は？」

マールロウは、訳が分かっていないユルゲンスを引っ張って闘技場を目指した。

◇◇◇◇

「よう、ジジイ共」

ドアを派手に開けて、マールロウは、中に入る。

中では、机を囲んで会議中の様だ。

「な、お前誰の許可を得て……」

突然の礼儀知らずな登場に一人が口を開く。

しかし、当のマールロウは、どうしても良さそうに キセルの煙を吹きかける。

「ツゲッホー！」

相手は、モロに副流煙を吸ってしまい、むせる。

「あーそういうのは、いいや。俺は、話し合いに来たんだ」

「話し合いたと?」

一人のリーダー格の老人が尋ねる。

マーロウは、再びキセルを啜える。

「そう、俺を大会の役員に戻してくれや。あ、ついでに、てめーら、全員クビな」

マーロウの発言で、運営室がざわめく。

そんな運営室の空気など構わずマーロウは、続ける。

「大会を失敗にしまったんだ。だから、そんな奴らを首にするのは当たり前だと
思うがな」

「失敗だと?」

訳が分からないと言う顔をしている役員共にマーロウは、やれやれと言った風に口か
らキセルを外し煙を吐く。

「そう、失敗だ。あれを失敗と呼ばずして、何と呼ぶんだ」

目が鋭くなりなが、静かに老人に尋ねる。

「何の話をしている?」

鼻で笑いながら言う。

周りの老人共もクスクスと笑っている。

「とぼけるな! 決勝の話だ!」

マールロウは、さつきとは打って変わって、怒鳴りつける。

突然の変化と、そして、地響きのように轟く声に、一瞬その場にいた全員がビビる。

「部族同士の試合だろーが! あれじゃ、ただの殺し合いだ!」

「……け、決勝は、こ、公正を期す為に前王時代のルールにしたと言っただろう」

言い訳がましく言う老人。

マールロウの怒りは、ますばかりだ。

「ふざけるな! そんな理屈が通ると思ってるのか! そのルールは、ガイアス王が否定して、今の形になったんだろうが! 何故それに乗っ取って行わない!」

「だ、だから、公正を期す為に……」

「あのルールの何処が公正なんだ!」

マールロウは、遠目から見ていた。ホームズが、大切な茶飲み相手が、痛みに耐えながらアルクノアと戦っていた事を。

成長を見守って来た、ローズがそんなホームズを死ぬほど心配しながら、戦っていた事を。

自分の大切な友人達を追い込んだものが訳のわからない理屈だというのだ。

いや、正確に言えば分かってはいる。

全てアルクノアの為だ。

奴らは、それを認めようとしなない。

マーロウは、奥歯を噛みしめる。

「もう一度聞いてやる！あのルールの何処が公正なんだ！」

「公正だ！あのルールは、一対一で死ぬまでどちらが死ぬまで戦うというものだ。公

正そのものだろう！」

マーロウは、押し黙る。

それに気を良くした老人達はそうだそうだと、囁し立てる。

「言ったな。俺は確かに聞いたぞ」

マーロウは、さつき迄の怒気に満ちた顔を崩しにやりと笑う。

「そう、あのルールで重要なのは『死ぬまで』でだけじゃあない。

『一対一』ってところも重要なんだ」

大会執行部の何人かは、しまったという顔をしている。

「今回の決勝、あれ、一対一だったか？」

ようやく全員理解したようだ。

さつきとは別の意味で静かになる。

マーロウは、後ろ向く。そして、指を一本出す。

「違うよなあ。最初こそ、キタル族代表は、一人だった。でも、相手は、三人できやがった」

指を三本に切り替える。

「で、次はキタル族の方も四人出てきやがった」

今度は四本だ。

「さらに、客席では乱闘が起こっていた。おまけに、その本人達はそのまま、試合会場に飛び降りて参加。そして、そのまま乱闘は、大乱闘へ……なあ……」

マーロウは、キセルを片手でクルクルと回している。

そして、回しながら振り返る。

「これが、成功と言えるのか？」

言い返せずに黙る老人達。

「こんな大失敗をした連中は、取り敢えず、大会執行部を降りるのが妥当だと思いがなあ？」

わざとらしくいうマーロウ。

しかし、老人の一人がそのマーロウを鼻であしらう。

「ふん。話にならん。仮にお前の言ったとおり闘技大会は失敗したとしよう。しかし、だからと言って、我々がこの役を降りる理由はない。もつと言うなら、お前ごときをこの場に復活させるいわれもない。立場をわきまえろ、腰抜けが！」

そう、マーロウは、そう理由をつけられ役員を降ろされたのだ。

しかし、マーロウは、顔を顰めるどころかセリフを聞いてクスクスと笑っている。

「まだ、分からねーのか？ そういう事にしといてやるって言うてんだよ」

そう言つて、マーロウは、一人の男、アルクノアの格好をしている男をドアから連れてくる。

手は紐で縛られ、顔はあの独特のマスクをつけている。

体型は、少し大柄だ。

その男の出で立ちを見て、老人達は全員顔色を変える。

「どーした？随分と顔色がわりーじゃねーか。ウンコでも我慢してのか？トイレなら部屋を出てすぐだぜ」

マールロウは、さっきまで回していたキセルを口に咥える。

老人の一人がようやく口を開く。

「どうして、ここに？」

「俺の部族が捕まえた。折角だからお披露目してやろうかと思つて」

マールロウは、煙を吐くとその男の肩に手を置く。

「どうだろう、俺の条件を飲んでもらえるか？」

つまり、マールロウは、全てを知っていて、証拠も掴んでいる。

これをバラされたくなかったら、マールロウの提示した条件を飲めと言っているのだ。

「く……………分かった」

「お！立場をわきまえるのはどちらなのか、分かったようだな」

満足気に笑うと懐から紙を取り出し、投げる。

内容を確認すると、どうやら、制約書のようなものだ。

制約の内容は、先程言ったマーロウの言った通り今の執行部の退任と、そして、マーロウの復帰だ。

「取り敢えず、サインよろしく」

老人達は忌々しそうだが、素直にしたがった。

全員のサインが書き終わるとマーロウは、制約書を回収した。

これで、闘技大会における全ての権限は、マーロウに渡った。

「さて、それじゃあ、早速だが、エリーゼって女の子とアルヴィンっていう男を探してくれ。あのださくさに紛れて連れ去られたらしい。頼んだぜ……」

そう言って、マーロウは、アルクノアの仮面を剥ぐ。

仮面の下の顔に老人達は、空いた口が塞がらない。

「ユルゲンス」

仮面の下から、現れた顔はユルゲンスだった。

勿論、ユルゲンスがアルクノアというオチではない。

マールロウが、ユルゲンスにアルクノアの格好をさせていたのだ。

マールロウは、一度アルクノアを拘束している。

その時に、服を一式パクったのだ。

「だ……騙したな!! せっつは、アルクノアでも何でもないではないか!!」

怒りにブルブルと唇を震わせる老人共。

マールロウは、どうでも良さそうにキセルを啜えている。

「何で、アルクノアを知ってるんだ?」

「……………!」

そう、アルクノアの事を知っているのは、マールロウ、そして、度々名前だけ聞いていたユルゲンスだけのはずなのだ。

なにしろ、ミラが秘密裏にたおしてきたのだから。

普通のリーゼ・マクシア人は、知らないはずなのだ。

「今はやりのドジっ子で奴かねえ……くくく」

「貴様……よくも、よくも」

怒り心頭という奴だろう。顔の色が赤を通り越してドス黒くなっている。

マールロウは、煙を一つ吐く。

「おいおい、人のせいにするのは良くないぜ。俺はこいつがアルクノアだなんて一言も言っていないだろう」

そう、マールロウは、そんな事一言も言っていないのだ。

ただ、俺の部族が拘束したとしか言っていない。

マールロウだって、当然『俺の部族』の中に入る。

嘘は何一つついていないのだ。

しかし、なりふり構っていられないのか、老人の一人が唾を撒き散らして叫ぶ。

「そんな事は、どうだっていい！そいつが、アルクノアではないんなら、この取引は、無しだ！」

マールロウは、気だるげにキセルを啜える。

「残念だが、それは出来ない」

そう言っただけに見えるのは、先程の制約書だ。

マールロウの大会執行部復帰と、自分達の辞退認め、直筆のサインまで入れている。

出るところに持って行けば、証拠品として、十分に機能する。

本当に老人達はグウの音もでない。

(あー………どっかで見たことあるな、この光景)

マールウは、策に追い詰められた人々を見て、とある女との賭けを思い出す。

『ふっふっふ、私にポーカーで、しかもイカサマで勝とうなんて、脳みそがもう一個ないと無理な話だよ』

『誇大表現じゃねーところが、恐ろしいな』

眠そうな目をした女は、どう見ても利発そうには、見えない。しかし、物の見事に女

は、マーロウの裏をかき、そして、問答無用で上をいったのだ。

その女は、テーブルの上にある金を全て手元に寄せると嬉しそうに勘定し始めた。マーロウは、悔しい思いをしながら、見ていたのを覚えている。

女は、そんなマーロウを見るとニヤリと笑う。

『人に悪さをするなら、悪さをされる覚悟をしなきや』

金を数え終え懐にしまうと女は深く腰掛ける。

『何だそれは？』

『私が、まだ十代の時に読んだ小説のセリフのアレンジ』

それから、女はふと思いついた様にマーロウの顔をまじまじと見つめる。

『そう言えば、君の名前は、マーロウだったね』

いたずらっぽく女はニヤリと笑う。

マーロウは、心底嫌そうに顔を歪める。

『貰ってばかりも悪いから、君にも一つプレゼントをしよう』

『いらん。そんなお情けみたいなプレゼント』

『まあ、そう言わないで。勝者から君にこの言葉をプレゼントだ。いつか、必ず使いた

まえよ』

—— マーロウ^きには、これぐらいの事を言ってもらわなくちゃね ——

マーロウは、ゆっくりと、煙を一つ吐き出す。

吐き出された煙は、ゆらゆらと天井に登って行く。

「『撃つていいのは撃たれる覚悟のある奴だけだ』……よく、肝に命じておくんだな、
ジジイ共」

マーロウはそう言ってキセルを啜え直す。

「ま、取り敢えず、この件を理由に、ユルゲンスと俺を村八分になんてするじゃねーぞ。そんな事してみろ、今回の事を丸々、ガイアス王に報告してやる」

獲物を狩る目で老人達を一睨みすると、マールロウは、ユルゲンスを連れて部屋から出た。



「マールロウさん!!」

ユルゲンスは、怒っている。

「なんだ?」

「あんな所でバラさなくてもいいでしょ!というか、何でバラしたんですか?!」

ユルゲンスは、ご立腹だ。

当然と言えば当然だ。

あんな真似をすれば、危うく、というか、もう手遅れだが、完全に執行部に目を付けられてしまったのだ。

マールロウは、そんなユルゲンスに背を向けたまま、キセルをクルクルと回している。

「……………ただの憂さ晴らしだ。おら、てめーは、とつと嬢ちゃんと大男捜して来い」

ユルゲンスは、その静かな物言いから、察して詰め寄る事をやめる。
「……………こういう事をする時、次からは、ちゃんとやってください」

ユルゲンスの言葉にマーロウは、キセルを持っていない手を振って答える。

そして、そのままユルゲンスに顔を向ける事なく歩いて行つた。

歩みを進めながらマーロウは、静かにキセルを啜え直し、物思いにふける。

マーロウは、やられたらやり返すタチだ。

今回、わざわざ、ユルゲンスの顔をさらしたのも、その性格に起因する。

自分をわざわざ追放し、アルクノアの為にお膳立てをし、仲間を傷付けた。そんな奴をマーロウが、放つて置くわけがない。

では、どの様に仕返しをするのが一番か？

決まっている、やられて欲しくない事をやればいい。

彼らにとつて一番嫌な事とは？

答えは一つ。

見下している相手に、負ける事だ。

だからこそ、マーロウは、あの様な形、彼らに勝利するという形で終わらせた。結果彼らは、拭い去ることのできない敗北感を永らく味わう事になるのだ。こうして、マーロウの報復は、彼らをいっぱい食わす事により成功した。しかし、一つだけ、釈然としないことがある。

(……………あいつから、贈られた言葉を使う時がくるとはなあ……………絶対使わねーと心に決めてたのに)

『撃つていいのは…………』と言うやつだ。

あんな顔で言われた言葉なんぞ使いたくない、というのが、マーロウの本心である。しかし、マーロウは、使ってしまった。

理由は、勿論ある。

タイミングよく、その時の事を思い出したからだ。

しかし、それにしたって、何だか釈然としない。

手のひらで転がしていたつもりが、逆に手のひらで転がされているような気分だ。

これこそが、マールウに、勝利は勝利でも、完全勝利という、気分を与えない最大の理由だ。

(人に悪さをするなら、悪さをされる覚悟しなきや、か……………やれやれ……………)

マールウは、ふうつと煙を吐き出す。

「あーあ……………今回も俺の負けか……………たまには、勝たせてくれよ……………」

『ヴォルマーノ』

吐き出した煙と共にマーロウの言葉は、空へと消えていった。

無理も道理も通らない

「随分経ちますね……」

ローエンは、ポツリとこぼす。

かれこれ大分時間が経った。

しかし、何の報告もないのだ。

この何もしない時間というものは、人を不安にさせる。

「アルヴェイン、もしかして……」

「……」

不安というものは、人によからなぬ思考を働かせる。

ジュードの言葉にミラは否定しない。

レイアは、先程から、下を向いてる。

「わたし、どうして、エリーゼが席を離れちゃったのに気付かなかったんだろ……そうす

れば……」

レイアは、俯いて声も震えている。

「レイアのせいじゃないよ」

「でも……………」

自分を責めるレイアをジュードは、慰めるがレイアは、なかなか元気にならない。ローズは、この雰囲気振り払うかの様に手をパンと叩く。

「……………その辺にしときましよ。今回の件は、言い出せばキリがないわ」
そう言つて、ローズは、静かに寝息をたてているホームズを見る。

「……………だけど……………」

自分の落ち度を責めてしまう事は中々やめれない。

「二人の足取りが分かったぞ!!」

ユルゲンスがドアを勢いよく開け、入ってきた。

「何処へ行った!?!」

「王の狩り場だ」

ミラの質問に後からのっそりと入ってきた男がキセルを啜えながら答える。

「マールロウさん?!」

ローズは、少し驚く。

マーロウは、そんなローズにひらひらと手を振って返す。

「王の狩り場？」

ジュードは、不思議そうに聞き返す。

「キタル族の所有する土地だ。街のそばに広がる原生林帯で、代々ア・ジュール王が狩りをするんだ」

今度はユルゲンスが答える。

マーロウは、煙をゆつくりと吐き出すと後を引き継ぐ様に口を開く。

「んで、ついでに言うると危険な魔物がわんさかいる。街のすぐ近くの野原以外な」
「分かりました……………ホームズ、起きなさい」

「ん……………」

ローズがホームズを揺すって起こす。

ホームズは、ゆつくりと起き上がるとベットからでる。

「あれ？マーロウさん、どうしたんです？」

「どうやら、ようやく気付いた様だ。」

マーロウは、呆れている。

「情報を届けに来たんだよ、奴ら、王の狩り場に向かったらしい」

「……………了解です」

ホームズは、そう言うのと近くにかけてあつたポンチヨを羽織る。
そして、靴紐を結ぶ。

「ヨル、君も起きたまえよ」

ヨルは、ホームズの言葉に不機嫌そうに起きるとホームズの肩に乗る。
準備の出来たホームズを見るとジュードは立ち上がる。

「ありがとう、ユルゲンスさん、マーロウさん」

ジュードは、お礼を二人に言う。

しかし、ユルゲンスは首をゆっくりと横に振る。

「お礼なら、マーロウさんに言ってくれ。マーロウさんがいなかったら、未だに搜索が出来なかつた」

ユルゲンスは、親指でマーロウを指す。

「どんな手を使ったんです?」

ホームズの問いにマーロウは、にやりと笑う。

あまり、いい予感はない。

「さてな………さ、早いところ捜しに行つて来い。それから、ジュード、」

「はい?」

突然呼ばれるジュードは、戸惑う。

「見つけたのは、ユルゲンス達だ。だから、礼ならそつちな」
キセルを啜えていつもの調子で言うマールウ。

ジュードは、少し動きを止めるがすぐに笑顔になる。

「二人ともありがとうございました」

そう言うときジュード達は部屋を後にした。

部屋から出るのを見送ると、マールウは、キセルを啜え直す。

ジュードの言葉に少し面食らいとマールウは、ふうつと静かに息を吐き出す。

「やれやれ、年をとったなあ、俺も……………ま、後は若い奴らに任せるか」



街を出て、すぐの所に花一面の野原が広がっていた。

「これって……………」

レイアは、ホームズとローズの話を思い浮かべる。

ホームズは、手をヒラヒラと振る。

「そ、おれとローズの思い出の場所。ここは、まだ魔物達がいらないだよ」

そう言って、ホームズは、地面を見る。

「足跡は、ない。消した形跡も、ない。……………ヨル」

「へいへい、本当は、こんな犬みたいな事したくないんだが……………」

ヨルは、ホームズの肩から降りると野原の匂いを嗅ぐ。

「ふむ、ジャリとチャラ男の匂いがしない。こっちは通っていない様だ」

「なら、こちらか」

ミラは別の方向を指差す。

「多分、ね」

ホームズは、頷く。

ローズは、腕を組んで考える。

「そっちの方角は、確か……………リーベリー岩孔……………なるほど、おあつつら向きの場所
ね」

「場所も分かったし、急ごう！」

ジュードの言葉に皆頷く。

そして、直ぐに野原に背を向け、一行は、走り出す。

しかし、野原を離れると直ぐに魔物に囲まれてしまった。

「ああ、もう邪魔!!食らえ、瞬迅脚!!」

ホームズは、声を上げると、そのまま構え飛び蹴りを魔物にお見舞いする。

魔物はダウンするのだが、直ぐに別の魔物が来る。

「くそ！輪舞旋風！」

次の魔物をホームズは、回し蹴りを当てる。

しかし、今度は当たりが弱かった様だ。中途半端に攻撃した為、相手を怒らせてしまった。

「げっ!!」

回し蹴りを放った直後であるホームズは、隙だらけだ。

回避もガードも出来ない。

「集え！輝け……!!」

ホームズの目の前で光が収束する。

「んで、弾けろ！フォトン！」

ローズの詠唱が完成し、収束した光が弾け、魔物を吹き飛ばす。

「助かったよ、ローズー！」

ホームズは、ローズに感謝する。

当の本人は、ホームズの方を見ずに魔物を見ている。

「ホームズ、魔物は倒さなくてもいいわ、キリがないもの。代わりに時間を稼いで」
「……………りよーかい」

ホームズは、返事と共に走り出す。

ローズは、刀を構えバツ印を作る。

「豪雨でこい！聖なる光！」

詠唱を始めたローズを潰そうと魔物が群がってくる。

しかし、

「爆砕陣」

ホームズの空中から、かかと落とし。

地面が爆発し、魔物達を吹き飛ばす。

「もういっちょお！守護方陣！」

ホームズは、力強く踏み込む。青白い光の円がホームズとローズを囲む。

魔物達は動けない。

次の瞬間ローズは、閉じていた目を開く。

詠唱は完成した、
守護方陣の青白い光を浴びながら、ローズは高らかに告げる。

「レイ!!」

周りにいた魔物に光が雨となって降り注ぐ。

それで倒れた魔物もいるが、普通に立っている魔物もいる。

「今のうちー!」

ローズの言葉と共に一行は、ダツシユで逃げる。

幸い追ってくる魔物はいなかった。

魔物から逃げきると一同は、一息つく。

「で、ヨル、エリーゼの靈力野ゲの気配は?」

「小ムスメの読み通りだ。リーベリー岩孔に気配がある」

ヨルは、耳と髭を緊張させ、答えた。

「急ぎこう」

「そうだね」

ジュードの言葉に一行は、頷くとそのまま走り出した。

暗く広がるリーベリー岩孔へ。



「本当にここで間違いないんだね、ヨル？」

ジュード達はリーベリー岩孔に辿り着いた。

そこは、薄暗く何も分からない。

ある意味アジトにするには、ここ程ピッタリな場所は、ないかもしれない。

「ああ、見ろ」

ヨルは、そう言つて地面にある、小さな足跡を示す。

「まだ、新しいですね」

ローエンは、屈んで観察する。

「ほんとだ。きつとエリーゼのだよ」

レイアは、喜んでミラを見る。

ミラは静かに頷く。

「探してみよう。ただし、慎重にな」

「それが出来れば苦労はないねえ」

ホームズは、そう言つて足元にある石を拾つて振り向き様に、後ろ後方に投げる。

ホームズの投げた石はアルクノアの手に当たる。

石の痛みには思わず、持っていた黒匣ジョンを落とす。

ホームズは、それと同時に駆け出し、アルクノアの顔面に回し蹴りを叩き込む。

しかし、当たりが弱い。

ホームズは、まだ、本調子ではない。

だから、先程から、後もう一押し of 威力が出ない。

ホームズは、相手への攻撃が不発な事にいち早く気付くとそのまま顔を掴み、地面に叩きつけた。

叩きつけられたアルクノアは、かろうじて、意識を保っていた。

ホームズは、相手の背中の上に乗ると、腕を締め上げ、拘束する。

「グッ！」

「二度も三度も不意打ちを食らうわけないだろう」

ホームズは、ギリギリと腕の締め上げを強くして行く。

「さて、答えて貰おうか、あの大男と、ぬいぐるみ連れた女の子は、どこだい？」

「……………向こうの奥だ」

ホームズは、少し拍子抜けした。もう少し、抵抗をするなり沈黙をするなり、何かすると思つたのだ。

しかし、ホームズの思惑とは逆にあつさりと答えた。

「……………ヨル、少し集中してその方角を探ってくれないかい？」

ヨルは頷くと、集中的にその方角のエリーゼの靈力野の氣配を探る。

「いるな。嘘はついてない様だ」

ヨルの言葉にレイアとローズは走り出した。

残されたジュード、ローエン、ミラ、ホームズ、そして、ヨルは首を傾げる。

「えらく、素直じゃないか。どういうつもりだい？」

「行けば分かる」

ホームズは、拘束を強くしようとするが、ミラに止められる。

「後にしよう、ホームズ。まずは、エリーゼとアルヴィンが先だ」

「……………そうだねえ」

ホームズは、アルクノアを無理矢理立ち上がらせ鳩尾に、膝蹴りを叩き込んだ。アルクノアは、変な声を出して倒れる。

完全に意識が飛んだ様だ。

それを見届けると、ミラ達もレイア達の後を追った。

◇◇◇◇

一行が辿り着くと、そこには、ぐったりしているアルヴィンと、下を向いているエリーゼがいた。

ジュードは、怪我をしているアルヴィンに駆け寄り治療を始める。

「んだよ……俺に任せるんじゃないのかよ」

弱々しく言う不満を言うアルヴィン。

「拗ねないでくれよ。心配したんだよ」

ホームズは、アルヴィンに苦笑いする。

「エリーゼ……」

レイアが心配して名前を呼ぶとエリーゼは、レイアを通り過ぎて、ミラに泣いて駆け寄った。

ミラは突然の事に戸惑っている。

「どうした？ 怪我はしてないようだが？」

「ティポが、ティポが……」

レイアは、ティポに目を向ける。

離れたかれたかと思っただら地面に放置してある。

「良かった、ティポも無事で……」

『はじめまして、まずは僕に名前をつけてね』

「え………？」

突然の事に、レイアは、硬直する。

『はじめまして、まずは僕に名前をつけてね』

そんなレイアに構わず、ティポは、壊れた様に繰り返す。

「……………これは？」

ローズの理解が全く追いつかない。

「アルクノアの一人が、ティポから何かを抜いた途端そうなっちまった」

アルヴィンが、みんなの疑問に答える。

ホームズは、腕を組んで考える。

「そうか……………だから、あのアルクノアは、アルヴィン達と居場所を教えたのか

……………」

もう、既に目的は、果たされているのだ。

隠す理由は、何処にもない。

「ティポ……………やつぱり、仕掛けで動いてたんだ……………」

ジュードは、言いづらそうに口を開く。

「仕掛け……………」

エリーゼは、涙声で聞き返す。

「うん。自分で喋ったり、動いたりする様に作られたって事」

あまり言ってて愉快な事ではない。しかし、ジュードは、エリーゼに告げた。それ

が年上の役目と言わすべきものなのだろう。

「でも……………それでも……………お友達だったんです……………」

エリーゼは、訴える様に泣き崩れてしまった。

「で、そのアルクノアはどうしたんだい？」

ホームズは、疑問をアルヴィンにぶつける。

「二人はやったけど、もう一人には逃げられた」

「感謝する。アルヴィン」

アルヴィンの言葉を聞いたミラは、そう言うのとエリーゼを引き剥がす。

エリーゼは、そんなミラを信じられないものを見るような目をする。

ミラは、エリーゼの事を気にせず、黒匣ジンを壊す。

ホームズは、その姿を複雑な面持ちで見ている。

「ミラ、ティポは？」

それでもエリーゼは、ミラに尋ねる。ホームズとヨル、そして、ローズの面々は、知らないが、ミラはティポを助け出した事がある。

「抜き取られたものを取り戻せば、元に戻るんじゃないかな」

ジュードは、レイアからティポを受け取りながら言う。

「アルヴィン、アルクノアがにげたのは？」

「とつくの前だよ」

ジュードの言葉を聞くと、ミラはアルヴィンに尋ねる。しかし、返って来たのは一番聞きたくない言葉だった。

何故なら、ミラが次に何を言うのか、簡単に想像ができるのだ。

「なら、取り戻すのは難しいだろ。ここには、もう用はないな」

「え…………でも、ミラなら……………」

継る様なエリーゼの言葉にミラは容赦無く次の言葉を告げる。

「お前が、奴らを捜したいと言うなら止めはしない。だが、その時は、お前とはそこで、お別れだ」

「……………」

エリーゼは、不満そうに言葉を飲み込む。

「貴様のオモチャの為に割く時間はないってことだ」

納得できていないエリーゼに、ヨルはとどめの一撃を刺す。

「オ…………オモチャ?」

「ヨル!」

ローズが食ってかかる。

ヨルの言葉にエリーゼは、バットで殴られたな衝撃をうける。

ヨルは、激昂したローズを馬鹿にした様に見る。

「じゃあ、お前が捜しに行つてくるか？俺は止めんど。貴様の知り合いが何人死のうが知つたことではないからな」

ウツと固めた拳をローズは解く。そう、ミラの目的は、クルスニクの槍を破壊する事だ。

ローズは、それに協力する為にここに居るのだ。

自分の故郷を守る為に。

ヨルの言葉から、我に返つたエリーゼは、何かを思いついた様にホームズの方をみる。

「マーロウさんに……頼んで、貰えませんか……？」

エリーゼの精一杯のお願いだが、ホームズは、渋い顔をして首を横に振る。

「マーロウさんは、君達を捜す為にかなり無茶な手を使ったみたいなんだ。……正直、

あの人をこれ以上アルクノアに関わらせたくない」

「そんな……」

誰もアルクノアを追う事はない。

もう、ティポを元に戻す手は完全になくなつた。

エリーゼは、肩を落とすしかなかった。

「取り敢えず、街に戻りませんか？」

ローエンが流れを変える様に静かに提案する。

「そうだねえ」

ホームズが返事をし、皆もそれに続いた。

エリーゼは、いつもの様にティポを抱えているが、背中が、いつもより小さく見える。ホームズは、そんなエリーゼを後ろから見、ため息を吐く。

「何とかしてやりたいのは、やまやまなんだけどねえ……」

「じゃあ、お前が捜しに行くか？」

ヨルがニヤリと笑う。

ホームズは、嫌そうな目をヨルに向ける。

「君は、そういう奴だよな」

ホームズもティポのデータを抜き取ったアルクノアを追う事は出来ない。

ホームズにも優先順位というものがある。

い。
はつきり言つてエリーゼ達の問題は、ホームズにとつても優先されるものではない。

い。
とはいえ、肩を落としているエリーゼを見て割り切れる程、ホームズは、大人ではな

い。
要は、甘いのだ。

「頭では分かかっていてもって奴か……」

ヨルは、息を吐くようにこぼすと、ホームズの方を見る。

「いつもいつも、下らん事で悩みやがって……」

ヨルは、歩いているホームズの肩で暗闇に浮かぶ三日月の様な笑みを浮かべる。

「その悩みで、何が救われるんだ？」

ホームズは、不気味な笑みを浮かべているヨルを見る。

「……………君には関係ない事だ」

ホームズは、ヨルの方を見ずに返す。

思い当たる節があるのだろう。

ホームズは、少し表情を固くする。

対照的に、ヨルはクツクツクと、おかしそうに笑う。

「そりゃあ、そうだ」

化け物のヨルにとって、誰が救われようと知った事では、ない。

ヨルはそこで、一旦言葉を切り、物思いに更けながらう呟く。

「ま、でも、人間の特権だよな、そういうの」

ホームズは、ヨルの言葉を聞き、片眉を上げる。

「羨ましいかい？」

「どっちだと思おう？」

ニヤリと笑いながら尋ねるヨルに、ホームズは、肩をすくめる。

「おれには、関係ない事だ」

「そりゃあ、そうだ」

ヨルは、もう一度面白そうに笑った。

昨日の風は、昨日で終わり

「……………ぜ、エリーゼ！」

ジュードの声でエリーゼは、ようやく我に返る。

ボーツとしている間に、いつの間にか、出口まで来ていたのだ。

「構えておくれ、エリーゼ」

ホームズが、エリーゼに注意を促す。

その言葉にエリーゼは、やっと自分の周りに魔物達がいることに気付く。

魔物達は、いつ飛びかかってきてもおかしくない。

一瞬たりとも気が抜けない。

一同が警戒を強める。

「おい、お前達やめんか！」

そんな時、野太い男の声が聞こえてくる。

しばらくすると、地響きと共にガタイのいい、ヒゲの生えた大男が飛び降りてきた。アルヴィンは、思わず体制を崩す。

「すまん。密猟者を追っていたんだ」

「ジャオ……！」

ミラは、少し驚いた様に言う。

「ん？お前さん達どうして……」

ジャオは、そこで、ホームズが目に入る。

「ホームズ?! 本当にどうしてこんなところに?」

ホームズは、少しの間観察する様に見える。

「…………お久しぶりです、ジャオさん」

少し間をあけてホームズは、頭を下げる。

「知り合いだったのか、ホームズ?」

「まあね」

ミラの言葉にホームズは肩を竦めて返す。

「どうして、ジャオさんと？」

ジュードの言葉にホームズは、ため息を一つ吐く。

「……一応、覚えてるとは思うけど、おれ、行商人だよ」

レイアは、ホームズの言葉にポンと手を叩く。

「そっか、お得意様って奴だね」

「そゆこと。ま、他にも商売する時の手続きとか、色々やつてもらったんだよ、ね、ジャオさん」

「あ、ああ、そうだ」

ホームズの確認するかのような言葉にジャオは、少し戸惑いながら、頷く。

その後直ぐに、ジャオは、沈鬱な面持ちになる。

「それよりも、娘っ子……とうとうこの場所に来てしまったのじゃな……」

エリーゼには、何がなんだか分からない。

ジャオは、そんなエリーゼに気付かず、さらに言葉を繋げる。

「覚えておるのだろうか？」

しかし、エリーゼは、俯いてしまう。どうやら、記憶に無いようだ。

「エリーゼ、どういう事？」

エリーゼは、無言のままだ。

「ここは、お嬢ちゃんが育った研究所なんだよ」

そんなエリーゼに代わり、アルヴィンが答える。

アルヴィンの答えを聞きジャオが続ける。

「以前侵入者を許してしまつての、その時この場所は、打ち捨てられてしまつたのだ」

「侵入者、ねえ」

ホームズは、意味深に呟きなが、アルヴィンを見る。

アルヴィンは、ため息を吐いて、答える。

「いい勘してんなあ……そうだよ。増霊極ブリスターについての調査だつたんだ」

アルヴィンの言葉にジャオは、思わずたじろぐ。

「なんと……お前さんじゃつたのか」

ジュードは、アルヴィンの言葉に首を傾げる。

「増霊極ブリスターつて何なの？」

「ア・ジュールが開発した、霊力野ゲートから、分泌されるマナを増幅させる装置だよ」

そう言つて、アルヴィンは、ティポを顎で示す。

「ティポがそうだ。第三世代型だそうだ」

エリーゼは、驚いてティポを見る。

「なるほど、ジャリの精霊術は、そう言うカラクリになっていたのか……」
ヨルは一人で納得している。

分泌されるManaが、増幅されれば、精霊術の威力が、上がるのも頷ける。

「そうなんですか、ティポ……？」

エリーゼの質問にティポは、クルリと一回転してエリーゼに向き直り、口を開く。

『ぼくの名前はティポだねー。よろしくー』

会話が合わず奇妙な感じだ。

そんな一同の気持ちに答える様にジャオが口を開く。

「ティポは、エリーゼの心に反応し、持ち主の考えを言葉にするんじゃない
ジュードは息を飲む。

「それじゃあ、ティポは、エリーゼの考えを喋つてたつてこと?!」

つまり、エリーゼは、ティポと喋っていたよう見えていたが、実際は、独り言を喋つていた様なものなのだ。

「……随分とエグい話だねえ……」

ホームズは、渋い顔をしている。

自分の考えた言葉しか喋らない実験器具をエリーゼは、友達と思っていたのだ。

(……道化師^{ヒエロ}もいい所だよ……)

ホームズは、心の内で呟く。

「嘘です！ テイポは、テイポが喋っていたんです」

エリーゼは、力の限り否定する。しかし、本人も分かっているのだろう。だからこそ、不安だからこそ、次の言葉を投げかける。

「テイポは、仕掛けがあっても私の友達です……よね」

藁にも縋る思いなのだろう。声が震えている。

『ちがうよー。ぼくはエリーゼの友達なんかじゃないよー』

しかし、返答は、無情なものだった。

「ち、違います！」

『違わないよー。ぼくは、エリーゼの考えている事を喋ってるだけだからー』

エリーゼの否定は、更にテイポによって否定される。

『全部、エリーゼの勘違いだったんだよー』

「エリーゼ……………」

ジュードは、そう言うのが精一杯だった。

肩を落すエリーゼは、憐れそのものだった。

「ヨル、君は気づいていただろう?」

ホームズは、肩に乗っているヨルに問う。

ヨルは一度鼻で笑うと次の言葉が続ける。

「ヌイグルミが喋るなんて、普通では考えられないだろう」

「喋る猫が何を言ってるんだか……………」

正確に言えば、猫では無いのだが。

そんなお喋りに構わず、ティポは、ふよふよと浮いてエリーゼの手から離れる。

『教えてよ、おつきなおじさん。ひとりぼっちのエリーゼのお父さんとお母さんはど

こにいるの?』

その質問、エリーゼの最も聞きたかった質問に、ジャオは言いづらそうに顔を顰める。

「それはのう……………もう、この世にはおらぬ」

「え……」

折角聞けた答えだが、それは最も聞きたくない答えだった。

「お前が四つの時に、野盗に遭いころされたのじゃ」

ジュード達は、突然の事に言葉が出てこない。

ホームズは、闘技大会の日、エリーゼが両親に会いたいと泣いていた事を思い出していた。

「もう、会えないんですね……お父さんにもお母さんにも、ティポにも……」

エリーゼは、俯きながら言葉を口にする。

「エリーゼ……」

ジュードは、何とか慰めようとする。

レイアはエリーゼに近づく。

「気を落とさないで、エリーゼ」

しかし、その慰めは、直ぐに振り払われる。

「ジュードやレイアには、ちゃんといえるじゃ無いですか！みんな……」

『そんな人達にエリーゼの気持ちがわかるもんかー』

最後のティポの言葉、エリーゼの心の声だろう。

ジュードとレイアは何も言えなくなってしまう。

エリーゼは、叫ぶだけ叫ぶとそのまま走り去ってしまった。

「エリーゼ！」

レイアは、急いで追い掛ける。

ホームズは、隣りにいるローズに声を掛ける。

「ローズ、君も頼むよ……多分レイアが今何を言っても、ね」

ローズは一瞬理解できなかったが、何と無くホームズの言わんとしている事を理解する。

「……………分かった」

両親のいるレイアよりも両親のいないローズの方が側にいた方がエリーゼも何かといいのだ。

エリーゼが走り去るのを見届けるとジャオも走り去ろうとする。

「待て、ジャオ。どうして、エリーゼは、研究所などにいた？」

ミラの言葉にジャオは足を止めて振り返る。

「うむ……連れてこられた……売られた様なものだ」

「売られた？」

ホームズは、眉を顰める。

「うむ。娘っ子の様な孤児を見つけは、研究所に連れてきていた女に……名は

……」

ジュードは、頭に人差し指を当てる。

「まさか……イスラ？」

ホームズは、ジュードの言葉に目を丸くする。

「おお、そんな名じゃった」

ジャオは、得心が言った様に頷く。

二人の会話を黙って聞いていたホームズは、思わず目を向く。

「イ………イスラ？」

掠れた声を喉から絞り出すように、ホームズは呟く。

「ああ、そう言えば、ホームズは、会ってなかったね、えっと、イスラさんってのはね

……」

「知ってるよ」

ホームズは、説明など不要と言うように感情を込めずに言う。

突然の予想外の言葉にジュードを含めた全員が首を傾げる。

「え……う？だつて、ホームズ……」

そう、シャン・ドウに来てから一回もイスラに会っていないし、ホームズの前では話題にも登っていない。

マールロウの所に行つていたり、二手に別れた時、毎度いなかったりとしていたからだ。だから、ホームズは、イスラの事をはつきりとは、知らない筈なのだ。

「知ってるって言ってるだろう！」

尚も説明を続けようとする、ジュードにホームズは強く言い切った。

ホームズは、手のひらを関節が白くなる程握り締めている。

「ホームズ……う？」

ジュードは、ホームズの豹変に驚く。

いや、ジュードだけではない。ミラもアルヴィンもローエンも驚いている。

そんな中、ホームズは、ようやく周りが自分の事を見ているのに気づく。一瞬だけ、しまったという顔をしたが、直ぐにいつもの表情に戻る。

「あ、いや、ほら、おれって人脈が広いから……」

「ホームズ」

ミラは胡散臭い笑顔で見苦しい弁明をしているホームズに言葉を遮る。

「話せ。全部とは言わない、少しでいい」

ホームズは、ミラの言葉に対していつもの様に誤魔化そうとする。

しかし、ミラのその力強い目に、ホームズは観念したように目を伏せる。

「……………おれ、他にもそういう女の子に会ったことがあるんだ、行商の途中でね。いつも寂しいって泣いてた……………まあ、施設に引き取られていたけどね。それが本当に辛そうでさあ……………」

「もしかして、エリーゼさんとその子を重ねていますか？」

ローエンは闘技大会の前での出来事を思い出す。

「かもね……………あの子に会って以来、どうもガキのメソメソが苦手なんだよね」

ホームズは、そう言うと言葉を区切る。

「その時、色々と合ってさ……………売ってる奴がイスラって名前の女だってことを突き止めたんだよ」

そして、言葉を区切り、伏せていた目をジュード達に向ける。

「そっか、君達、彼女に会ってたのか……」

ホームズは、息を吐く様に言う。

「………わしが言えた義理では無いが……頼む、あの娘つ子をこれ以上、一人にせんでやってくれ」

ジャオは、そう言うのと密猟者を追って再び姿を消した。

「………ホームズ」

ミラはホームズを呼ぶ。

「きつと、全部ではないだろうが、話してくれて感謝する。辛い思いをさせてしまったか？」

「ま、楽しくはなかったさ」

ホームズは、肩をすくめる。

その返しにミラは何とも言えない顔をする。

そんなミラにホームズは苦笑いをする。

「そんな顔をしないでくれよ。別に怒ってる訳じゃないんだから」

そういいながら、ホームズは、アホ毛を触る。

「ちよつと、思い出して、情けなくなっただけだから……」

「ホームズ……」

ジュードは、なんて声をかけていいのか分からないようだ。

そんな、ジュードの様子を察して、ホームズはポンチョを翻し、背を向ける。

「さ、エリーゼ達の所に行こう」

「……そうだな」

こうして、一行は歩き出した。

「ねえ、ヨル」

「……なんだ」

ホームズは、少し間を空ける。

自分の知らない所でこんな風に繋がっている事にホームズは、戸惑いを隠せないでいた。

だからこそ、考えてしまおう。

こうしていれば、と。

「あの時さ………つて、聞いてないね！」

ヨルは、どうでも良さそうに欠伸をしている。

「俺は無駄な事は嫌いなんだ」

「無駄なこと？」

ホームズは、首を傾げる。

「過去の可能性を探すことだ。お前は今まさにそれをしようとしただろう？」

ホームズは、言葉を詰まらせる。

「前にも言ったが、過去の出来事に、もしも何て求めてどうする？何も変わらないだろ」

ヨルは、真っ直ぐに前を見つめる。

「幸せな過去は、希望に、

辛い過去は、力に、

過去の過ちは、経験に、

それぐらいの心づもりで行けばいいんだよ。

どんなに嫌がったって、無かった事にはならないんだから」

「……………そうだねえ……………」

ホームズは、少し暗い顔をし、無かった事にならない、いや、無かった事にしたい過去の事を考える。

しばらく、思考の中に沈むが、頭を振って切り替える。

「今はエリーゼだ」

ホームズは、前を向いて力強く踏み出す。

『背負った過去荷物を確認するのは、いいけど、後ろばかり振り返るのは、やめた方がいいよ。

そんな暇があるなら、前を向きたまえ。

でないと、後悔は、増えるばかりだ』

母の言葉を思い出し、ホームズは更に歩みを進めた。

一難去らずに、また一難

「アルクノアはティポから、何を奪ったんだろ？」

ジュードは歩きながら考える。

「アルヴィン」

ミラは先回りしてアルヴィンに言葉をかける。

「工作上、守秘義務があるんだけど……」

アルヴィンは渋る。

「何を今更……」

ホームズは、アルヴィンに返す。

「ま、それもそうだな。恐らく、アルクノアは、ティポからデータメモリーを抜き取ったんだ。本来、^{ブースター}増霊極は適合者を選ぶもんだ」

「つてことは、エリーゼとティポが？」

ホームズの質問にアルヴィンは頷く。

「そ。因みに言うところエリーゼとティポ程適合した例は今までになかったそうだ」

「……成る程、^{ブースター}増霊極の実用化には、是非とも欲しいデータだな」

ヨルは納得するように相槌をうつ。

「そうゆうこと」

ジュードは、不思議そうに頭を傾げる。

「でも、何で黒匣ジンを使うアルクノアが増霊極ブラスターを必要としてるんだろ？」

「悪い、それは、マジでわかんね。だが……」

そう言つて言葉を切つたアルヴィンにミラは頷く。

「ああ。悪い予感しかしないな」

「だね……」

ホームズはミラに賛同する。

「ところで、ホームズさんは先程話した女の子とはまた、お会いしたんですか？」

ローエンの問いにホームズは、首を横に振る。

「会つてないよ。ま、行商人には、よくある事さ。一期一会つて奴だね」

「お前らの為に存在してる様な言葉だな」

ヨルの言葉にホームズは肩をすくめる。

「そうですね……エリーゼさんの故郷について、何か手掛かりでも掴めるかと思つた

のですが……」

「ちよつと、無理だねえ……と、エリーゼ達だ」

そういうとホームズは目の前を指差す。

ホームズの指の先には、エリーゼ達がいる。

「どうだい調子は？」

ホームズの質問にエリーゼではなく、レイアが答える。

「まあ、まだ元気ではないけど……」

ローズも心配そうにエリーゼを見る。

「みんな来たし、そろそろ街に帰らない？こんな所にいつまでものいても仕方ないし

……」

「そうだな」

ミラはローズの提案に乗る。

一行も同意し、歩き始める。

ホームズは、エリーゼの後ろ姿を見ながら物思いにふける。

(………増^{ブースター}霊極、研究所、イスラ、アルクノア、孤児、えらい勢いでとんでもないキー

ワードが揃って来たねえ……)

「………ホームズ？」

様子が少しおかしいホームズに気付いたレイアが尋ねる。

しかし、ホームズは、返事をしない。

「ホームズ！」

「へ？ああ、何？」

大声を出されてホームズは驚く。

「どうしたの？さつきからボオーツとして？」

「ん、ああ、さつきジャオさんから色々聞いてね……………」

いつものホームズの物言いにレイアは、答えてくれないと思い今度はジュードに尋ねる。

「ジュード、何があったの？」

しかし、ジュードも何かを考え込んでいる様で、レイアの返事に答えない。

「ジュードってば！」

「うわあ……………何？」

「何じゃないよ！どうしたの、ホームズもジュードも！」

ホームズは苦笑いをする。

「ちよつと、色々思い出してね……………まあ、ミラにでも話を聞いておくれ」

「ふーん……………で、ジュードは？」

ジュードはこめかみに指を当てる。

「引つかかっている事があるんだ……………街にいたら、確認するよ」

ジュードの静かな物言いにレイアは戸惑いながらも頷く。

「うん……分かった。それじゃあ、先を急ごつか」

こうして一行は、リーベリー岩孔を後にした。



「それで、ジュード、気になる事とは？」

街に着くと今度はミラがジュードに尋ねる。

「うん、あのね……」

ジュードが喋ろうとすると、イスラが駆け寄ってくる。

「犯人を追って、王の狩場へ行つたと聞いて、心配したのよ」

レイアは後ろで手を組む。

「色々あったけど、取り敢えずは無事かな……」

イスラは、申し訳なさそうに俯く。

「偶然とはいえ、あなた達を巻き込んでしまって、ゴメンなさいね……」

「イスラさん……それ、嘘ですよね」

こめかみから、指を外しジュードは、イスラをしつかりと見据えて口を開く。

「な、何、私が心配しちやおかしいの？」

「ジュード、どうしちやったの？」

レイアは、震える声で尋ねる。

「イスラさんが、僕達と知り合つたのは偶然じゃないんだよ。決勝の鐘がなつた時言われたでしょ『この時期にこの街に来るのは、闘技大会の観客か、出場者しかないって』」

「言つてたわね……でも、それがどうしたの？」

ローズは、不思議そうにジュードに尋ねる。

「僕達ね、この街に来た時、イスラさんに言われたんだ、『貴方達この街の人間じゃない

ようだけど、街には何をしに?』って」

ローズは、言葉を無くす。

「イスラ、どういう事?」

問い詰められたイスラは、拳を握る。

「待って!そんなのただの言い間違えよ!そんな揚げ足をとった様な推理で私を貶めないで!」

「フフフ、随分と往生際が悪いじゃないか……」

ホームズは、素晴らしいながらアルヴィンの後ろから姿を表す。

「ねえ、イスラ」

突然の登場にイスラは、訳が分からない。

「あなた……誰?」

「イスラさんは、まだ、会っていませんでしたね……えつと」

ジュードが紹介しようとする。

しかし、ホームズは、それを手で制する。

『ヴォルマーノ』に覚えがあるだろうか？』

ホームズが吐いた言葉にイスラは、言葉を無くす。

「あなた、まさかあの時の………」

ホームズは、口角を釣り上げ、

顔に三日月の様な笑顔が浮かび上げる。

その不気味で、そして、背筋の凍るような笑みは、見る物全てを飲み込む。ヨルがやるのはよく見る。

しかし、こんな笑顔をするホームズは、レイアもローズも見つた事がない。

「そう、君を散々脅した女の一人息子さ」

ホームズの言葉にイスラは、目を丸くし、呼吸が荒くなる。

「大方、アルクノアにでも言われたんだろ、つり目のガキ共に近づいてな」
ヨルは、馬鹿にするようにイスラをホームズの肩から見下す。

イスラは、そんなホームズ達から目を逸らすように下を向いて歯を食いしばる。

「イスラさん……………嘘だよね……………」

レイアは、震える声でイスラに尋ねる。

「あの人達……………ばれないから、大丈夫だって言ったのに……………でも、私だってあの人達に……………」

「脅されてたんだよね、弱みを握られてたから……………」

言葉を詰まらせたイスラの代わりにジュードが後を引き継ぐ。

ローエンは、エリーゼに目を向ける。

「昔の仕事ですか……………」

イスラは、頷く。

「ユルゲンスにバラされたいのかって……………」

イスラは、エリーゼを見ながら震える声で叩きつけるように言う。

「この子には、すまないって思ってる。でも、あの時は、私だって……………」

そこがイスラの限界だった。

イスラは、膝から崩れ落ちるとそのまま土下座の形をとる。

「お願い、あの人には黙っていて……………」

懇願。

これ程ぴったりな言葉はないだろう。

ローズは、今だに目の前で行われている事が信じられなかった。

「ユルゲンスは、知らないのか？」

そんな、ローズに構わずミラは疑問をぶつける。

「言えるわけじゃないじゃない！ユルゲンスはとても純粋な人なのよ！」

ミラは更に不思議そうにする。

「何故話せないんだ？すでに過ぎた事だろう？」

イスラは、少しだけ顔をあげる。

「あなたも女なら分かるでしょう？こんな醜い女を彼が愛してくれるわけがない！完全に顔を地面になすりつける。」

「そういうものか？」

「おれに聞かれても…………おれ、男だぜ」

ミラは隣にいるホームズに尋ねる。

しかし、ホームズは、引きつり笑いをするだけだ。

「そうではない。男から見ての話だ」

ホームズは、腕を組む。

「……………ま、美人の方がいいかな、おれは」

ホームズは、どうでも良さそうに言う。

その後すぐに、イスラに顔を向ける。

「ユルゲンスに話してみたらどうだい？趣味は、人それぞれだからね」

イスラは、涙を溢れさせる。

「馬鹿な事を言わないで！捨てられるに、決まってるじゃない！」

「拾ってくれる男でも探せば？」

ホームズは鼻で笑いながら言う。

ジュードやレイアは、眉を顰める。

「私は、ただ幸せになりたいだけなのに……………」

ヨルは、その様子を顔に感情を浮かべずに眺める。

ミラは腕を組んで考え込む。

「ふむ、人間の愛というのは、難解だな……………私には理解できそうにない」

エリーゼの方を向く。

「どうするかは、エリーゼ、お前が決める」

突然話題を振られたエリーゼは、驚く。

「どうして、私……………なんですか？」

「私よりもお前の方が権利があるだろう」

ミラの正論に、エリーゼは地面に頭をこすりつけているイスラを見る。
「今更償えること何てないけど……………お願ひします！」

必死な願ひ。

心からの願ひ。

幸せを欲しがる、絶対的な願ひ。

「どうでも……………いいです」

『どうせエリーゼが独りぼっちなのは変わらないだからー』

エリーゼは、そう言い残すとそこからティポを連れて川を見る。

イスラは、そこから、よろよろと立ち上がりその場から去ろうとする。

「待ちなさい、イスラ」

ローズがイスラを呼び止める。

「アルクノアとの繋がり、いつからなの？」

イスラは、ローズの顔を見ない。

肩を抱いて震えるのを押さえる。

「……………ずっと前からよ」

「……………そう、ならもう一つ聞いわ」

ローズは、大きく息を一つ吐く。

「私の家族が皆殺しにされた時、貴方はどちら側の人間だったの？」

空気が凍る。

「正直に言っつて、イスラ。別に怒りはしないわ。過去の事だもの、正直に言っつてくれたらそれで満足よ」

ローズは、優しい口調で、イスラに言う

イスラは、そんな、ローズに安心したのか、恐る恐る口を開く。

「その時、私は……………アルクノアに弱みを握られてたわ。だから、それをネタに脅されたわ。バラされたくなかつたら、貴方達家族が一同に集まるタイミングを教えろつて

……………」

イスラは、震えながら、言葉を繋ぐ。

「ごめんなさい……まさか、奴らがあんな事をするなんて、思いもしなくて………だから、だから、」

ローズは、優しく微笑む。

「そう。正直に言ってくれてありがとう。そして………」

ローズは、腰に手をやる。

「さよなら」

腰にあった刀を引き抜く。

しかし、出だしで、ホームズが柄を押さえる。

「やめておきたまえ、ローズ」

ホームズが、ローズを抑えている所をみて、イスラは腰を抜かす。

「怒らないって……………言つたのに……………」

「女のくせに、女の嘘に騙されてちやあ、世話ないわね」

馬鹿にするように鼻で笑うと今度はホームズを睨む。

「その手をどけなさい！ホームズ！」

ローズの怒号にホームズは、冷静に言う。

「……………やだね。ワイバーンが借りられなくなっちゃうもの」

「……………でも！」

「……………冷静になりたまえ、ローズ」

ホームズは、射抜くようにローズを見る。

ローズは、ホームズの言葉を聞くと悔しそうに刀を鞘にしまう。

ホームズは、ローズが刀をしまうのを確認すると、イスラの方を向く。

「この事は他言無用だよ。それが分かったら、何処へなりとも消え失せたまえ」

ホームズは、円盤状の盾を触る。

「おれも割と、我慢の限界なんだ」

無表情に告げるホームズを見るとイスラは、その場から今度こそ立ち去った。ジュードは、エリーゼを見、そして、歯を食いしばっている、ローズを見る。

「どうした？」

その様子を見たアルヴィンが尋ねる。

ジュードは、考えながら、言葉を繋ぐ。

「……イスラさん、他にできる事なんてないって言ってたけど……本当かな？」
ミラは腕を組む。

「それは、イスラにしか分からないだろうな」

ジュードは、悩む。

「そういう事。贖罪の方法は、自分で見つけるものだからね」

ホームズは、先程までの態度が嘘のような明るい口調になる。

そんな、ホームズをレイアが怪訝そうに見いる。

「……………」

「どうしたんだい、レイア？」

レイアは、少し眉を釣り上げる。

「わたしのセリフだよ……それは。どうしたの、随分と様子が変わったよ……………」

「元からだ」

その結果が、これだ。

裏切られたショックは、そう簡単に消えるものではない。

震える後ろ姿から、泣いているのが分かる。

ホームズ達の方を向かないのは、泣いている所を見せたくないのだろう。

ホームズは、そのまま歩みを進め、通り過ぎざまにローズの頭にハンカチを乗せる。

「マーロウさんの所に行つてくるよ。また、後でね」

ホームズは、後ろを振り向かず手を振る。

最後まで、ホームズは、ローズの顔を見ることはなかった。

「……………うん、分がっだ」

ローズは、そのハンカチで涙を拭きながらそう返した。



「あのジジイの所に何しに行くんだ？」

ヨルが肩からホームズに声をかける。

「エリーゼ達が無事見つかった事と、イスラの件に付いての報告、つてところだよ」
「なるほど」

ヨルは、そう返す。

そして、ホームズは、自分で言ったイスラという言葉で、先程のローズの行動を思い出す。

「あの子、本気で殺す気だったね……………」

ホームズは、ため息を吐く。

「心配だなあ……………」

「何がだ？」

ヨルはホームズの眩きに質問する。

ホームズは、肩をすくめる。

「復讐に走った人間は、ロクな目に会わないからね。それは、古今東西の物語が示すとおりさ」

ホームズは、ヨルの方を向いて喋る。

「ま、物語ではな」

「……………どういふことだい？」

ヨルの返答にホームズは、いかぶしげに言う。

ヨルは、鼻で笑うと口を開いた。

「意外にな、復讐に走った人間達は幸せな顔をしていた。生きる目的ができた者。過去の因縁に決着をつけると、意気込む者………殆どの人間共は、目を輝かせ、幸せそうだった。ま、結末は、ともかくな」

ヨルは、昔の封印される前の事を思い出し出していた。

まあ、ヨルの場合は、主に復讐される側だったのだが。

ヨルは一旦言葉を切り、ホームズの肩からホームズの正面に降りて、向き合う。

そして、両方の口角を上げ、白い歯を見せる。

ヨルの白は、ヨルの黒によって、夜空に浮かぶ三日月を不気味に連想させる笑みとなる。

「むしろ、ロクな目に会わないのは、復讐に走った人間の周りにいる人間達だ……」

ヨルは、三日月の様な笑みを更に細く、深くする。
その笑みは、見るもの全てに恐怖を感じさせるものだった。

「……なあ？ ホームズ・ヴォルマーノ」

ホームズは、片眉をピクリと上げる。

「……せいぜい、気を付けるよ」

先の事を言えば猫が笑う

「以上が、報告です」

マールロウは、キセルを吹かしながら、ホームズの報告を聞いていた。

「なるほど。イスラの所に辿り着いた訳だ……………」

マールロウは、フウと煙を吐く。

ホームズが煙を嫌がって顔を顰めるが、知った事ではない。

「しかし、増^{ブースター}霊極に、研究所に、孤児に、イスラに、アルクノアに、と……………随分とトンデモないキーワードが出てきたな……………」

マールロウは、指を折りながら数える。

「貴様は何か知らないのか？」

ヨルの質問にマールロウは、首を振る。

「残念ながら、な」

ただ、とマールロウは、続ける。

「十中八九、その研究には、ア・ジュール王、いや、若しくは、それに近しい誰かが係わっている。これは、間違いないだろう」

マーロウの言葉を聞いて、ホームズは、考える。

「……………そうか、王の狩り場のすぐ先ですもんね……………」
ため息を禁じえない。

ホームズは、深いため息を吐くと立ち上がる。

「さて、報告も終わったし、そろそろ行きます。みんな待つてるだろうし」
「おう、またな」

マーロウは、そう言つて手を振る。

ヨルは、歩きはじめたホームズの肩にピヨンと飛び乗る。

ホームズは、ヨルが飛び乗ると、一旦歩みを止め、マーロウの方を振り向く。

「ええ、今度は、ゆっくりとお茶でも飲みに来ますよ」

マーロウは、キセルを咥えている。

「断る」

「は？」

「今度は、酒持つてこい」

戸惑うホームズにニヤリと笑う。

「お前の両親の故郷のとびつきり上等な奴を、な？」

ホームズも答える様にニヤリと笑う。

「……………お任せを」

そう言つて、ホームズは、部屋を出て行つた。



「ただいま帰つたよ……………つて、あれ？」

ホームズが、自分達の部屋に帰ると、そこには誰もいなかった。いつもなら、男勢がいるはずなのだが、彼らの気配は、ない。

「……………どこ行つたんだろ？」

「置いてかれたんじゃないのか？」

「前科持ちがいるから、否定できないねえ」

ヨルの言葉にホームズは、冷や汗が止まらない。

「あ、あ、あのさ、取り敢えず、ミラ達の所に言つてみようよ」

ホームズは、強引に話題を切り替えて、女性陣の部屋へと向かう。

「誰もいなかったら、どうするんだ？」

ヨルは、ポツリとこぼす。

それは、ホームズが一番考え無いようにしている事なのだ。

ホームズは、血の気がサーッと引いていく。

「……………不吉な事を言わないでくれよ」

「そんな事はないぞ」

そんな会話をしていると、突然ホームズの背後から声があった。驚いて振り向くと、そこには、凜と立つミラがいた。

「びつくりした……………他のみんなは？」

ミラは、腕を組む。

「何かを探しにいったぞ。私は留守番だ」

「何故だい？」

ホームズは、首を傾げる。

リーダーの様な存在を置いて行動というのがよくわからないのだ。

ミラは、一度頷くと話始めた。

「実は足がまた、痛んでな。取り敢えず、痛みが引くまで待機という事になった」

「今は？」

いつもの調子で現状を説明するので、ホームズは、頬が引きつっている。

「さつきよりは、少しマシだな」

つまり、痛いのだ。

「今すぐ、部屋に戻りたまえ！何で寝てないんだい！」

ホームズは、思わず声を荒げる。

しかし、そんなホームズに構わずミラは真っ直ぐホームズを見据えて続ける。

「ヒマだったのな。少し痛みも引いたし、なんとなく宿の中を歩こうと思ったら、ホームズが泣き言を言っているのが聞こえてな」

堂々としている、ミラを見てホームズはため息を吐く。

「だったら、おれが話し相手になるから……ほら、部屋に戻るよ」

ミラの怪我は、決して治った訳では無い。いつまた、痛みが再発するか、分からないのだ。

「助かる」

ミラは、そう言って歩こうとしたが顔を擡めて膝を付いてしまった。

「……………」

ホームズは、もう一度ため息を吐くと、ミラに肩を貸して、立ち上がる。

「ホームズ。お前は私をおぶった方が楽なんじゃないのか？ジュードもそうしていたし」

ミラの質問にホームズは、首を横に振る。

「ま、これぐらいの距離なら問題無いさ。君は？」

ミラは頷く。

「私も特に問題はない。しかし、何故だ？」

ホームズは、ミラの首から下を少しみただ後すぐに顔を前に向けて淡々と言う。

「おれも一応、思春期なの。ローズ程度ならともかく、ミラぐらいの女を背負うのはなあ……………」

「……………何だかよく分からないが、なんとなく、ローズに伝えるとお前の命が危ない事はよく分かった」

そんな会話をしていると、ミラ達の部屋に着いた。

ホームズは、ミラをベットのの上に移動させると、近くに椅子を引っ張ってきて座る。

「さて、何を話したもんかねえ……………」

ホームズは、困ってしまった。

あの場では、そういう事を言ったが、特に話題がないのだ。

ミラは、少し呆れる。

「まあ、予想はしていたが……………」

仕方が無いので、ミラの方から話題を振る。

「……………何回か話題に登っている、お前の母親、結局どんな奴なんだ？」

「化け物」

「それ以外でだ」

即答したホームズの言葉をミラは切り捨てる。

ホームズは、少し悩む。

「うーん……………なんて言えばいいのかなあ」

答えが出そうにないので、ミラはヨルの方を向く。

ヨルは、尻尾を揺らす。

「あのムスメにも言ったが、ホームズの数倍達の悪い奴だ」

ヨルはまだ、納得していないミラの為に、言葉をさらに続ける。

「ホームズは、本当の事を言わないだけで、嘘はつかないが、こいつの母親は、平気で嘘をつく」

「……………」

ミラは想像しただけで、冷や汗が止まらない。

「ついでに、いうなら、人を手のひらの上で転がすのが大得意だ」

ミラに寒気が襲ってきた。

「……………聞けば聞くほど、って奴だな……………」

「だから、言ってるだろう」

ホームズは、肩をすくめる。

「人を食った様な性格というか、食い尽くしている感じだ。喋りかたの通りにな」
ヨルはそう言つて締める。

ミラは腕を組む。

「人間の親と言うのは、色々だな」

ヨルは、くあつと欠伸をする。

「いずれ、追い抜きたいとは、思つてたんだけど」

ホームズは、そう言つと力無く笑つと、伸びをする。

「諦めたのか？」

「何事も諦めが肝心さ」

ホームズは、肩を竦める。

「まあ、話を聞いている限りだが……」

ミラは、そう言つて、ホームズを見る。

「お前にその人間を越えてもらつては困るな……手を焼きそうだ……」

「ハハハ」

ホームズは、渴いた笑いを浮かべる。

それから、ちらりと扉を見る。

相変わらず、物音一つしない。

「ローズ達、まだ戻ってこないねえ」

ホームズが出した『ローズ』と言う言葉にミラは顔を険しくする。ホームズもそれに気づいたようだ。

その、余りにも険しい顔に、ホームズは少したじろぐ。

「ど、どうしたんだい？」

「ローズの事だが………」

ミラは一旦言葉を切る。

「気を付けろ。あれは、力の使い方を間違えるタイプだ」

ホームズは、突然の言葉に驚いて押し黙る。

そんなホームズに構わず、ミラは続ける。

「ローズは、剣術を習いはじめた理由をお前は知っているか？」

「いや」

ホームズは、首を横に振る。

「ローズは、お前のイジメ騒動で、ホームズにあんな最悪な一手を打たせたのは、自分に力がなかった所為だと考えたらしい」

そこで、ミラはホームズを見る。

ホームズは、静かにミラを見ている。

「どうぞ、続けて」

「だから、ローズは、この先自分の力が足りないばかりに、自分の傷を押し付ける様な事がもう二度と起きない様に、と思つて剣術を習いはじめた、といつていた」

ホームズは、深くため息を吐いた。

剣術を習ったのが別にホームズの為ではなかったのだが、ホームズがキツカケである事に代わりはない。

「……………人の人生の分岐点に立つというのはなんとも不思議な気持ちだねえ」

「茶化すな、ホームズ」

「別にそういうわけじゃないさ」

ミラの叱咤にホームズは、肩をすくめる。

「私が言いたいののは、そのような理由で手に入れた力を、ローズは、復讐に使おうとした。」

あの場で、お前が止めていなければ、確実にローズは、イスラを切り殺しただろう」
「……………で、お前は何が言いたいんだ？」

今度はヨルが口を挟む。

ミラは一旦切った言葉を再び続ける。

「力の使い方を見誤った者に待つのは、幸せではない。過程はどうあれ、な」

「過程？」

ヨルと言っていることが近いようで遠い。

そんなセリフにホームズは、首を傾げる。

「力を振るう目的を得た人間は、その時は、幸せだ。

だが、復讐に力を使った者たちの末路は悲惨なものだ。

貴様なら分かるだろ、ヨル。ありとあらゆる復讐者達を相手にした貴様なら…………」

ヨルはフンと鼻で笑う。

そう、ヨルは過去、人間達を殺しまくったのだ。

ヨルの事を恨み、憎み、復讐しにきた人間達は、数えきれない。

「まあ、全部ぶっ潰したけどな」

ホームズは、そんなヨルを半眼で睨む。

「この前と言ってる事が違うんだけど……………」

「だから、前も言っただろ？ 『結末はともかく』と」

ヨルはニヤリと笑っている。

「俺に挑みにきた人間達は、それはそれは幸せそうだった。これから、死ぬとは思えないくらいいな」

ミラはヨルの言葉に不愉快そうに顔を歪める。

しかし、直ぐに表情を戻すとホームズの方に向き直る。

「……………つまりは、そういうことだ。気を付けろ、ホームズ」

「……………分かったよ」

ホームズは、重々しく頷く。

仮にも、昔馴染みだ。

そいつが、不幸な結末を迎える姿をホームズは、見たいと思わない。

そう、決意をした直後、部屋の扉が開かれた。

「ただいまー………って、ホームズ?!」

「相変わらず、やかましいムスメだな………」

元気良く入ってきたレイアにヨルはうんざりとしている。

ホームズは、苦笑いをする。ミラを指差す。

「宿屋に戻ったらさ、ミラ以外誰もいないもんだから、驚いたよ」

ホームズの言葉に、ジュードは、少し 申し訳なさそうな顔をする。

「ああ、ミラの足が痛むって言ってたから、痛みを和らげる効果のあるハートハーブを探してきたんだ」

「ふーん」

そう言って、ホームズは、レイアをちらりと見る。

「ま、レイアが、こんなに元気で帰ってきたってことは、見つかったんだね」

「うん、まあね」

ジュードは、そう言ってミラにハートハーブを使う。

ホームズは、邪魔にならない様に椅子から立ち上がり、少し離れる。

ローズは、そんなホームズに気付くと歩み寄る。

「ハイ」

ローズは、そう言って、先ほどのハンカチをホームズに渡す。

「安心して、さつき洗つといたから
目をそらしながら。」

やはり、泣いたのが恥ずかしいのだろう。

ホームズは、首を傾げる。

「そんなの君に貸したっけ?」

ローズは、驚いた様に逸らしていた顔をホームズに向ける。

「さつき、私の頭に乗せたじゃない!」

「さつきって?」

「さつき、私が……………」

泣いていた時という言葉が出てこない。

そこで、ローズは、ようやくホームズの魂胆が見えた。

顔を赤くして、呆れた様にため息を吐く。

「……………なんでもないわ」

「そうさ、何もなかったよ」

ホームズは、いつもの胡散臭い笑みを浮かべる。

ローズは、ホームズから顔を背ける。

今度はレイアが隣に来る。

「……………何もなかった……ね」

「何もなかった、そうだろレイア？」

レイアは、少し笑う。

「……………と、そうだ、ホームズ。下に行つて飲み物もらつてきてくれない？みんな探し疲れたと思うからさ」

「了解」

ホームズは、そう言つて部屋を出て行つた。

—————力を振るう目的を得た人間は、その時は、幸せだ。だが、復讐に力を使つた者たちの末路は悲惨なものだ。—————

—————ロクな目に会わないのは、復讐に走つた人間の周りにいる人間共だ—————

「前途多難だなあ……………」

ホームズは、二つの言葉を思い出し、飲み物を持ちながらため息を吐いた。

「ヒック、フフフフ、ヒック、フフフフ」

ホームズがそんな事を呟きながら、飲み物を持っていくと、そこには、しゃくりをし
ながら、笑っているミラの姿があった。

「何してるの？」

ホームズは、最後にもう一度ため息を吐いた。

孝行したい時に限って、親がいない

「さて、昨日は、聞きそびれちゃったけど、いつシャン・ドウに出発するんだい？」

ホームズの質問にジュードが説明する。

「なんか、今、戦争開始の雰囲気が高まっています、許可なくワイバーンを飛ばせないんだって」

「……………マジ？」

ホームズは、ゲツと言う顔をする。

「だから、許可を貰いにカン・バルクに行こうって事になったんだ」

ホームズは、組んでいた手をほどく。

「なるほどねえ……………戦争開始も現実味が出てきたって訳か」

ホームズは、やれやれと言った風のため息を吐く。

「それだけではない。エリーゼの実験についても聞きたいことがある」

ミラは、ジュードの説明にそう付け加える。

そこに更にレイアが口を挟む。

「でね、カンバルクの王様に言っただけで協力して、戦ってもらえないかなって話もしてた

の

ホームズは、レイアの話聞いて眉間にシワを寄せる。

「戦うって……………誰と？」

「だ、誰って、クルスニクの槍を使おうとしている、ラ・シユガルの王様、ナハティガルと」

ホームズは、頭を抱える。

「戦うって、戦争だよ」

レイアは、言葉を詰まらせると目を逸らす。

「……………アルヴィンと同じ事を言うんだね」

「戦ってもらおう、レイア」

先ほどの忠告する様子をガラツと変えて、ホームズは、レイアの肩に手を置き力強く言う。

「オイ……………どういう意味だ」

アルヴィンは、こめかみをひくつかせる。

ホームズは、肩をすくめる。

「まあ、冗談は、さて置き……………それぐらいの交渉はした方がいいかもね」
ただし、と指を一本、ピンと伸ばす。

「それをすれば否応なしに戦争に巻き込まれるからね、それぐらいの覚悟はしておいた方がいいんじゃない？」

ホームズの言葉にレイアは、頷く。

「因みに言うと、ホームズさん。ガンダラ要塞で増霊極の実験らしきものを見ました」
ホームズは、腕を組んで黙る。

代わりにヨルが口を開く。

「なるほど、両国して、増霊極ブリスターの開発をして、両国して戦争をしようとしてる訳、か

……………愉快な話だな」

ヨルの言葉に一同は、押し黙る。

なかなか、切羽詰まった現状なのだ。

「んで、出発は、いつだい？」

「明日かな。ミラの足の調子も考えると、今日、出発してわけにもいかないから……………」
ジュードの言い分にホームズは、黙って頷く。

「了解。それなら、今日一日は、自由行動ってところかい？」

「まあ、そんなところだ」

ミラの言葉にホームズは、ふむと腕を組んで考える。

今日一日、どうやって過ぐそうかと。

ホームズとしては、一日中寝ていてもいいのだが……
そうこうしているうちに、アルヴィンが口を開く。

「んじゃあ、俺はちよつとよらなきやならんところがあるんで、ここで失礼させてもら
うぜ」

そう言つて、アルヴィンは、部屋を出て行つた。

「私も少し、街をまわるとしよう、ジュード、君はどうする」
ジュードは、人差し指を頭にこめかみに当てる。

「僕は買い出しに行つてくるよ。今回の騒動で色々と回復アイテムが減つたし」

「ふむ、なら、私も手伝おう」

ミラの提案にジュードは、ありがとうとお礼を言う。

「エリーゼも街を見てくれば？ジュード達と一緒に」

ローズは、エリーゼにそういうとエリーゼは、少し戸惑っていたが、ジュードがにっ
こりと笑うと小さく頷いた。

「では、私は武器を新調しにいきましょうかね」

ローエンは、あご髭を触っている。

「じゃあ、わたしもー」

レイアは、手を上げる。

そんなレイアをホームズは、半眼で見る。

「この前、新しいの買って上げたじゃないか……」

レイアは、ホームズの言葉に指を一本出してチツチツと振る。

「棍じゃなくて、包丁。流石に何の魔物切ったか分からない刃物で料理して欲しくないでしょ」

レイアの言うことも、もつともである。

ホームズも納得がいったようだ。

「……………棍買ってあげたの？」

ローズが恐る恐る尋ねる。

レイアは、ギクリと肩をあげる。

そう、そこだけ聞くとレイアにプレゼントしたようにしか聞こえないのだ。

「そうだよ」

どう答えようか、レイアが迷っていると、ホームズはノータイムで返事をする。

案の定、ローズは、少し仏頂面になる。

(うわぁー！嘘は言っていないけど!!本当の事も言っていない!!)

心の中で、絶叫する。

まあ、確かに、買った事は事実だ。

正確に言うなら弁償したのだが。

そんな中、ミラは、ポンと手を叩く。

「おお、あの時の棍の事か！ちゃんと弁償したんだな」

「弁償？」

新たなキーワードにローズは、首を傾げる。

「うむ。ホームズとレイアが試合をしたのは、知っているだろう？あの時、ホームズは、レイアの棍を真つ二つに折ったのだ」

「何してるの、貴方は……………」

ローズは、半眼で、ホームズを見る。

ホームズは、すつ、と視線を逸らす。

ホームズとしては、弁償する事になったということをお願いしなかつたのだ。

何故なら、女の子の物を壊して！とローズに怒られそうだったからである。

「で、弁償するよう、私が言っておいたのだ」

「……………へえー」

ローズは、少し安心したような顔をしている。

レイアは、ホッと胸を撫で下ろす。

予想と違った反応にホームズも胸を撫で下ろす。

そんなホームズに若干イラツと来たが、レイアは、理性を持ってそれを抑える。

ホームズは、一日の過ごし方を考え込み、ポンと手を叩いてローズを見る。

「そうだ、ローズ。君の家族のお墓に案内しておくれ、挨拶したいし……」

ローズは、少し驚いた様だが直ぐに頷いた。

「ええ、いいわよ。私も出発前にしようと思っていたし」

ヨルは、話が終わるといつもの様にホームズの肩に乗る。

皆の過ごし方が決まると、ミラは口を開く。

「それでは、各々宿屋で集合だな」

「だね。んじゃ、また後で」

そう言つて、ホームズは、ローズと共に宿屋を出て行つた。



「……………それにしても、驚いたわ」

「なにがだい？」

ローズの言葉にホームズは、墓参り用の花を選びながら、答える。「どうして、私の家族のお墓参りなんてしようと思ったの？」

ホームズは、これ下さいと店員に言うのと、ローズの質問に答える。

「母さんが、随分とお世話になったみたいだからね」

ホームズは、店員から花を受け取ると歩き出す。

ホームズが進行方向を指差しローズに確認を取る。

ローズは、頷く。

「ホームズのお母さんが？」

そう言つてローズは、考え込む。

「ああ。言われてみれば、よくウチによく来てたわ。貴方は、なんやかんやで、ウチには、来てないわね」

ホームズの「最低宣言」の後、最終日まで、二人は会っていない。

なので、ホームズは、ローズの姉以外顔を知らないのだ。

「ま、だからさ、母さんの代わりに俺が挨拶しとこうかなつて」

そんな風に言うホームズにローズは、兼ねてからの疑問を尋ねる。

「というか、貴方のお母さん、どうして一緒じゃないの？」

ホームズは、肩をすくめる。

「おれも、もう十八だぜ。いつまでも、ママにベツタリつてわけにはいかないだろう」

「……………それもそうね。流石に私も少しヒクわ」

ホームズは、顔をひくつかせる。

「正直な感想、ドーモ」

ホームズは、一旦言葉を切るとローズに再び口を開く。

「てなわけで、カン・バルクで別れて来た」

「ふーん」

ローズは、そう返事をする。

「見えてきたわ、ここよ」

そう言って、指を指すとそこに墓石が三つある。

そして、墓石の前に酒が置いてある。

「……………確実にマールロウさんだね」

「でしようね」

「父さんと母さん達と一緒に酒が飲みたかったな……………」

ローズは、寂しそうに呟く。

「……………まあ、大人になつたら、親と一緒に飲むつてのは、夢だよね」

ホームズは、墓をに積もっている、埃を払う。

「……いなくなつてから、あれもして欲しいとか、これもしたかつたとか、してあげたかつて次から次へと出てくるんだから世話ないわ」

ローズは、そう言つて手を合わせる。

ホームズは、屈んで花を置き、手を合わせる。

「ヨル、君も手を合わせたら?」

「肉球でいいか?」

ホームズは、肩をすくめる。

「自由」

ローズは、そんなヨルに驚きを禁じ得ない。

「……驚いたわ……貴方がそんな事をするなんて。てつきり、『こんな石に手を合わ

せて何が楽しいんだ?』ぐらい言われると思つた」

明らかに、ローズは、昔の話をしている。

あの時のヨルは、死と言うものがよくわかつていなかった。

ヨルはつまらなそうに鼻を鳴らすと墓石を見る。

「……生きていれば変わるものだ」

そう言つて、2人と1匹は、死者に挨拶をする。

今後の事、これからの事、最近の事、様々な事を彼らは心に思いながら手を合わせる。

それぞれが何を思っているか分からないが、それでもいいとホームズは、思った。

「さて……………」

ホームズは、目を開ける。

ヨルは気配を察して肩にのる。

「そろそろ行きますか」

「そうね」

ローズは、そう言ってホームズに賛同する。

「あ、そうだ。忘れるところだった」

そういうと、ローズは、懐から例のハンカチを出す。

「はい、落し物貴方に渡しとくわ」

ホームズは、黙ってハンカチを見る。

それから深いため息を吐く。

「君の頭の上にも落ちてたかい？」

「よく知ってるわね」

ローズは、少し含み笑いをする。

ホームズは、頭に手を当てる。

「……………意地っ張り」

「借りは、作りたくないの」

ローズは、ぷいっとホームズから顔を逸らす。

ホームズは、そんなローズからハンカチを受け取ると懐にしまう。

ヨルは二人のやり取りを肩から眺める。

（やれやれ、こいつらは、本当に…………）

ヨルもため息を吐きたい気分だった。

そんなやり取りの後、ホームズ達は今一度墓を振り返る。

「最後にもう一度、していくかい？」

ローズは、ゆつくりと首を横に振る。

「いいわ。また、旅が終わった時にでも行くわ」

そう言う今度は、ホームズの方を向く。

「貴方こそ、もういいの?」

ホームズは、静かに頷く。

「報告すべきことは、全部報告したからね」

今度はホームズがヨルに目を向ける。

「……別に俺もこれ以上やる事はない」

ヨルはホームズの質問に先回りして答えると欠伸を一つする。

「んじゃあ、街をうろついて、宿に帰りますか」

ホームズがそういうと一行は、歩き出した。

ローズは、最後にもう一度だけ、振り返る。

(いつてきます。父さん、母さん、姉さん)

「おーい、ローズ!行くよ」

ホームズの声が離れたところから聞こえる。

「分かってるわよ！」

ローズは、そう返事をする、墓石を振り返らずにホームズの元へ走って行った。

覆水が盆に返るわけがない。

「ん？あれ、アルヴィン達じゃない？」

墓参りからの帰り、ホームズは、コートを着た大男を指差す。近くには、エリーゼ、ミラ、アルヴィンがいる。

「本当だ。何してるのかしら？」

ローズは、不思議そうにしている。

ホームズは、少し首を傾げる考える。

そして、ようやく繋がる。

（あ……あそこ、アルヴィンの家じゃん）

つまり、アルヴィンの母親がいるのだ。

あまり、広言するような事ではない。

「あのさ、ローズ、そろそろ宿に戻らな……」

「もう、行つたぞ」

そう言つて、ヨルは、ローズを尻尾でさす。

ローズは、スタコラとアルヴィン達の方に走り出して、何やら彼らと話している。

ホームズは、ローズを止めようとした、手をじっと見つめる。

「人生諦めが肝心だ」

「猫きみに言われてもなあ……………」

ホームズは、ため息を吐くと後を追いかけた。



アルヴィンは、ローズの突然の登場に驚いたが、家の中に案内する。家の中には、既にジュード、ミラ、エリーゼがいた。

案内されたローズは、ベットで寝ている女性、アルヴィンの母を見る。「あら、バランまた来たの?」

ローズの気配を感じると、アルヴィンの母は、目を覚ます。突然話しかけられた事にローズは、驚く。

「え、いや、わたしは……………」

「アルフレドもいるのかしら?」

「アルフレド?」

この女性が何を言っているか全くローズは、分からない。

「アルフレドなら、寄宿学校にいますよ、レティシヤさん」

「ああ、そう言えばさつきも同じ会話をしたわね」

状況が全く飲み込めてないローズの為にホームズは、耳打ちする。

「あの人、アルヴィンのお母さんなんだって」

ローズは、再びレティシヤを見る。

「もしかして、前に話してた、故郷に連れて行ってやりたいお母さんって……」

「そ、この人。まあ、見ての通り、具合が悪くてな……」

悪いなんてもんではない。会話が噛み合わないし、恐らく、アルヴィンの事も分かっていない。

『アルヴィン君は、お母さんの為に小さい頃から、傭兵をやってたんだってー』

ティポの言葉にローズは、アルヴィンを見る。

思わず息を吞んでしまったのが分かる。

なんて言おうか迷っていると、アルヴィンが先に口を開いた。

「健気な話だろう?」

にやりと笑って戯けて返す。

「アルヴィン……………」

逆にローズには、それが痛々しく見えてしまう。

「ま、綺麗事ばかりじゃ、やってられなくてね……………」

そんなローズを察してアルヴィンは、言葉を続ける。

「で、イスラに俺のいない間は、見てもらってるってわけ」

イスラの名前が出た時、ローズの肩がビクつと上がる。

「ローズ……………」

「大丈夫よ。不意打ちだったから、驚いただけ……………そう言えば、そんなことを言ってたわね」

心配そうなホームズに、ローズは、ぎこちない笑顔で返す。

「さて、お袋も寝たことだし、そろそろ出るか」

アルヴィンにそう促され、一同は、後にした。

部屋には、ホームズとヨルとアルヴィンが残る。

「黙っててくれたんだな」

アルヴィンの言葉にホームズは、肩をすくめる。

「まあ、少し喋ったけどね」

「あんなの喋った内に入らねーよ」

アルヴィンは、そう言ってホームズの横を通り過ぎる。

「ありがとな」

「別に」

ホームズは、微笑みながらそう答えた。



「あ、あの」

部屋から出ると、誰かに声をかけられた。

「……………イスラ」

ローズは、ギリと齒軋りをして、声を掛けた本人、イスラを睨む。

イスラは、ビクリと肩を震わせたが、直ぐに口を開く。

「アル……………」

「ありや、俺をご指名？」

「それと、ローズも……」

「……………私も？」

ローズは、思わず後ずさりする。

はつきり言ってイスラの側になど行きたくない。

家族の殺された原因とまでは、いかににしても、原因の一端を担っているのは、確かだ。

そんな、奴の側に行くのは、もうそれだけでトラウマを抉る様なものだ。

しかし、ここでイスラの側に行かなければ、後々、何を言うつもりだったのか、気になつてしかたがないだろう。

そのぐらいの予想は、つくのだ。

そんな葛藤の中にいると、不意に背中を叩かれた。

思わず振り返ると、ホームズが涼しい顔をして、イスラを見ている。

「……………おれも、混ぜておくれよ、イスラ」

「え……………」

「まさか、嫌だなんて、いわないだろうね？」

口調こそ、変わらない。

声音もいたって静かだ。

しかし、そこには有無を言わせない、迫力があつた。

「え、ええ、言いわ」

了承をもらうとホームズは、薄ら寒い笑みを浮かべる。

「ほら、ローズ」

「え？」

ホームズは、戸惑うローズに構わず、ローズの手を引つ張る。

そして、ローズにだけ、聞こえる音量で話しかける。

「大丈夫、何があつても、俺とアルヴィンなら、君を止められる」

予想もしない台詞にローズは、目を丸くすると、静かに微笑む。

「ええ、よろしく頼むわよ」



「ローズ、それにホームズにも聞いて欲しいの」

イスラは、そう前置きをすると、口を開く。

「アルは、知ってると思うけど、私、孤児だったの……子供一人で生きていくには、あ
あするしか、なかったのよ」

「それをこいつらに話して、どうするつもりだ」

ホームズの肩で様子を伺っていたヨルが口を開く。

ヨルが喋った事にイスラは、驚いたがぐつと言葉を飲み込む。

「頼み事があるなら、口で言うべきだろう？ニンゲン。その人殺しの口で、舌で、心か
ら頼んだらどうだ？」

何が言いたいのか、すっかり分かってるくせにヨルは、意地悪く尋ねる。

イスラは、怯えながら、何とか言葉を繋ぐ。

「ユルゲンスには、言わないで欲しいの……それと、アル……」

イスラは、一旦言葉を切るとアルヴィンの方を見る。

「レティシヤさんを診るのも終わりにしたい、それと、アルクノアにも、もう関わらない
様に言って欲しい」

ホームズは、目を細める。

ローズは、目を丸くする。

「あ……………」

一番最初に口を開いたのは、ローズだ。

「貴方が、アルヴィンのお母さん、レティシヤさんの世話を辞めて、誰か他の人が世話を出来るの？」

イスラは、ローズの問いに答えない。

アルクノアと縁を切りたい。

それは、ローズにとっても嬉しい事だ。

その決意があるのなら、許す事が出来る気がする。

しかし、レティシヤさんの世話を辞めたいというのは、頂けない。

それは、仲間の親の命を見捨てると言っているのだ。

答えないイスラの代わりに、アルヴィンが口を開く。

「無理だな。お袋を安定させる薬を作れるのは、アルクノアしかない。そして……」

アルヴィンは、静かにイスラを見据える。

「その薬を処方出来る闇医者もお前しかない」

ローズは、もう一度イスラを見る。

「もう、裏稼業は、嫌なのよっ!!」

我慢の限界だった。

ローズは、イスラに掴みかかる。

「いい加減にしなさいよ！イスラ！貴方のせいで、一体どれ程の人が悲しんだと思ってるの！」

ローズは、胸ぐらを更に掴み顔を近づける。

ホームズは、止めようかどうかしようか、迷ったが、刀に手を掛けていないので、見逃

す。

「エリーゼも！私も！貴方が売った子供達も！どうして、そこまでして来ておいて、そんな勝手な言い分が出てくるの！」

「うるさい!!!」

イスラは、ローズを突き飛ばす。

突然の事にローズは、おもわず手を離す。

「孤児でなかったあなたに分かるわけないでしょう!!あの時、ああしてなければ、私は死んでいたのよ!!あなた達と違って私には、誰もいなかった……」

そう、エリーゼには、ジャオが、ローズには、マーロウがいた。

生きていくには、どうにかなったのだ。

しかし、イスラは、違ったのだ。

「それが何？アルヴィンのお母さんの世話をしない理由になるの？」

ローズは、イスラを真っ直ぐに見る。

刀に手を掛ける。

ホームズがピクリと動く。

しかし、ローズは、直ぐに離すと両手を広げ、刀を握っていないことを見せる。

あの時とは、違う。

ローズは、冷静とは言い難いが、それでも、彼女は武力ではない解決をしたいと思うようになっていた。

「ねえ、イスラ……私は、私の家族殺しに加担した事をもう責めない、誰にも言わない。だから、せめて、アルヴィンのお母さんだけは……」

ローズは、泣きそうだ。

本当は、再起不能になるぐらい、責めたいのだ。

けれども、それでは、話しは終わらしたくない。

脅しではなく、イスラと仲の良かったローズと言う人間の言葉を聞いて欲しい。

たとえ、イスラを許せなかったとしても、彼女は、優しかったと、そう思いたい。

だから、ローズは精一杯の『お願い』をするのだ。

でないと、イスラとの人間関係は、もう完全になかった事になってしまう。

楽しかった思い出も、嬉しかった思い出も、全部全部嘘になってしまう。

「嫌よ！何度も言わせないで！」

しかし、ローズの願いは、見事に打ち砕かれた。

ローズの説得が失敗に終わると、アルヴィンは、切り札を切る。

「……………悪い。」

でも、口止め料としちや妥当だろ」

容赦のない言葉がイスラを襲う。

「酷いわ。私はただ、あの人と幸せになりたいだけなのに……………」

目に涙を溜めはじめたイスラにアルヴィンは、底意地の悪い笑みを浮かべる。

「なれるさ、昔のことを知られなけりやな」

その一言で、イスラは、完全に泣きはじめた。

話に区切りが付いたとアルヴィンは、感じたのだろう。

ジュード達の元へと歩いて行く。

ローズは、暫く泣いているイスラを見る。

そして、泣いているイスラの頬に平手打ちをすると、髪留めの輪を自分のトレードマークの一つ縛りから外し、イスラに投げつける。

「……………行きましょう、ホームズ」

ローズのクルリと、向きを変えると黒い長髪が広がる。

「……………そうだね」

ホームズもポンチョを翻して歩く。

「ただいま」

アルヴィンは、いつもの通り少し碎けた感じでくる。

「……………あの人……………泣いています」

エリーゼの言葉にアルヴィンは、イスラの方を振り返る。

「ああ。泣き虫なんだ」

どう考えてもそうではないだろう。

しかし、アルヴィンは、さざりと言う。

「その、小ムスメの一撃が効いたんだろ」

ヨルも面白そうに乗っかる。

「いいの？」

ジュードは、泣いているイスラを見る。

「だったら、慰めてやれよ。悲劇のヒロインさんを……さ」

アルヴィンの台詞にジュードは、何も答えず、ミラ達と一緒に泣いているイスラを後にした。

ホームズとヨルが最後に通り返ぎようとする、呼び止められる。

「ホームズ……あの……」

「君も言うんじゃないよ。おれも言わないから……ね」

ホームズは、一方的にそう告げて再び歩き出した。



ローズは、俯きながら歩いている。

後から来たホームズは、ローズに追いつく。

「Yes。」

ハンカチを用意しているホームズにローズは、首を横に振る。

「……………もう、涙もでないわ」

あれで、イスラがあんな事を言わなければローズは、泣いただろう。

しかし、返って来た言葉は、残酷だった。

悲しい気持ちよりも失望の方が強かったのだ。

「……………何で、上手くいかなかったのかしら？」

ローズは、ぼそりと呟く。

ホームズは、空を見上げる。

「あの人はね、過去を切り捨てて進もうとしてる。なかった事にして、今を生きようとしている……………だからだろうね」

ローズは、ホームズの方を見る。

「過去つてのは、向き合っていかなければならないんだよ。そして、向き合った上で、背負わなければならない。なかった事なんて出来ないからね」

「お母さんの言葉?」

ローズの質問に、ホームズは、首を横に振る。

「おれの経験則」

含みのある物言いにローズは、首を少し傾げる。

ヨルは心当たりがある様だ。

しかし、口を挟むつもりはない。

「そう」

ローズは、無理矢理納得して頷く。

どうせ問い詰めても答えてくれないのだ。

「そうだ、ホームズ」

ローズは、思いついたようにパンと手を叩く。

「どうしたんだい?」

ローズは、髪を翻しホームズに向き直る。

「さつきは、ありがとう」

さつきというのは、ホームズが、億しているローズを引つ張っていった事だろう。

ホームズは、突然の言葉に目をパチクリさせる。

「贅沢を言うなら守ってやるぐらいは、言って欲しかったけどね」

ローズの続きの台詞にホームズは、肩をすくめる。

「……気が向いたら考えてあげるよ」

ホームズの言葉にローズも肩をすくめる。

「まあ、でも、あそこでイスラの話を聞かなければ、私は一生後悔したと思う」

ローズは、そこで一旦言葉を区切る。

「だから……本当にありがとう、ホームズ」

ローズを守った訳でもない、ローズと一緒にイスラに怒りをぶつけた訳でもない。

やった事と言えば、彼女を辛い場所に連れて行っただけだ。

しかし、ローズは、心からホームズに感謝をした。

そんな、ローズにホームズは、いつもの調子で口を開く。

「君がお礼を言うなんて、明日は雷でも降るのかな？」

ローズは、自分の想像通りの答えにクスリと笑う。

「言うと思った」

「フフフ、笑ってくれて良かったよ」

ホームズは、嬉しそうな笑みを浮かべる。

滅多に見せない、満面の笑みだ。

ローズは、自分の頬が紅潮するのを感じる。

そんな、自分を隠すように、ローズは、少し仏頂面になる。

「本当に、嬉しそうに笑うわね」

「そりゃあ、友人が、笑顔になってくれれば嬉しいさ」

ホームズは、肩をすくめる。

ローズとしては、言いたい事は山ほどある。

(……………まあ、今回はその笑顔に免じて我慢してあげるわ)

ローズは、やれやれと仏頂面を崩すと微笑みながらため息をつく。

そして、もう、結ばれていない髪を棚引かせ、ジュード達の元へと歩き出した。

(さてさて、どうなることやら……)

ヨルは、来た道を振り返ると薄っすらと笑った。

カン・バルク

心頭滅脚

「ヘックシユン!!」

ホームズは、盛大にクシャミをする。

ただいま、こちら、モン高原。

雪がざんざか降り注ぎ、そして、温度も急激に下がっている。

先ほどまでのシヤン・ドウが嘘のようだ。

「寒い」

ホームズは、ポンチョについているフードを被る。

「そりゃあ、雪降ってて暑い訳ないでしょう」

ローズの冷たいツツコミが飛んでくる。

ホームズは、頬を引きつらせる。

「ユルゲンスさん、まだですよ？」

「まだまだだよ」

ホームズは、大きいため息を吐く。

「アルヴィン、コートおくれ」

「やだよ、何でおたくに、あげなきやいけねーんだよ」

「いいだろ、減るもんじゃないし」

「減るわ!!色々!!」

ホームズとアルヴィンのくだらないお喋りにジュードは、ため息を吐く。

「ミラ、大丈夫?寒いと足に響くと思うけど……………」

「大丈夫だ、ジュード」

ミラは心配そうなジュードに微笑みかける。

それを見ていたローズは、ホームズに尋ねる。

「ホームズ、傷口痛くない?」

何せ、短時間で同じ場所を二度も刺されているのだ。

しかし、当の本人は、アルヴィンからコートを引き剥がそうとするのに精一杯で、それどころではない。

「……………なんか、心配するのが馬鹿らしくなってきたわ」

「……………そうですね」

ローエンは、呆れたようにローズに賛同する。

ホームズは、そのままアルヴィンにバックドロップを食らっている。

「ああ、そうだ、ホームズ」

ユルゲンスが、ホームズに声をかける。

「ふあい……………」

ズボツと、雪から出てくる。

「指輪外しておいた方がいいぞ。凍傷になるから」

「手袋しても？」

「……………まあ、多分大丈夫だろうねど、念のため」

ホームズは、手袋を取り、中指についている指輪を外す。

「もっと早く言ってください」

ホームズは、仏頂面で、腰にある非常用袋に放り込む。

「ハハハ、すまない」

ユルゲンスがにこやかに謝る。

ホームズもそれ以上追求しない。

「そう言えば、ホームズのお母さん、カン・バルクにいるんだよね。少し怖いけど、会ってみたいなあ」

レイアは、複雑な顔をしながら、ホームズに言う。

対照的にジュードは、胃が痛くなってきた。

すっかり、忘れていたがジュード達はホームズを殺しかけたのだ。何を言われるか、いや、何をされるか、分からない。

「ん？なにいつてるの？そんな事一言もいってないよ」
ホームズは、さも当然と言うような顔をしている。

「え、だって、カン・バルクで別れてきたって……」

「うん、別れてきた。でも、そこにいるかどうかは、分からないよ」
レイアは、ようやく納得がいった。

そう、ホームズの母は行商人なのだ。

一所に、ずっと留まっている訳がない。

「騙したね」

「君が勝手に勘違いしただけだろう」

膨れっ面のレイアにホームズは、肩をすくめる。

そんなホームズに構わず、レイアは、棍を構える。

ホームズは、思わず顔を強張らせる。

「え、いや、そこまで怒らなくても」

レイアは、力強く棍を振るう。

ホームズは、屈んでかわす。

レイアの棍は、そのままホームズの後ろにいた、魔物を直撃する。

「油断大敵」

「……………今度から、気を付けるよ」

ホームズは、倒れる魔物を眺めながら呟く。

「では、早速お願いしましょう」

ローエンは、ホームズにそう言いながら武器を構える。

注意してみると、いつの間にかやら、魔物達がホームズ達を囲んでいた。

「うわぁ……………つーか、ヨル、君気付いてただろう」

ホームズは、フードの下にいるヨルに話しかける。

「当たり前だ」

「教えてくれればいいのに……………」

「直ぐに分かる事を教えても仕方ないだろ」

ホームズは、ため息を吐くと構える。

魔物達が襲いかかって来た。

いつもの様に蹴りを放とうとするが、雪に足を取られて、ワンテンポ遅れる。

「……………仕方ない！」

ホームズは、すぐに切り替えて魔物を殴りつける。

殴られた魔物は痛みを耐える。

その様子をレイアは、ポカンと眺めている。

「ホームズ………今、殴った？」

「え？あ、うん。見ての通り」

なんて事ない様に言うホームズを見ながら、レイアは、言葉を繋ぐ。

「なんで？今まで頑なに蹴ってたのに」

「いや、だって、指輪してたから………殴った拍子に壊したくないし……」

「理由が思ったよりも可愛らしい!？」

「母さんから、譲り受けた指輪だから………」

「理由が思ったよりも重苦しい……」

遠い目をしながら、言うホームズにレイアは、同情する。

自分のお菓子を勝手に食べただけで、半殺しにする様な親なのだ。

譲り受けた指輪を壊したなんて、知られたら、どうなるかなんて想像したくない。

しかし、もう一つ疑問がでてくる。

「というか、荷物の中に入れておけば？」

「うーん……荷物もなくす事もあるからさ………」

ホームズの言葉に、レイアは、ホームズがル・ロンドに来た時の事を思い出す。

あの時、ホームズは、荷物を置いてきてしまっていたので、無一文だった。

その荷物に指輪を入れておいたら、悲惨な事になっていただろう。

ホームズは、まだ構えを解かない。

「それに、指輪は、指にはめてこそ、指輪だしね。まあ、結局、殴るより……」
ホームズは、殴られた痛みから回復し襲いかかってくる、魔物に蹴りをかます。
蹴りを食らった魔物は派手に倒れた。

「蹴った方が強いんだよね……」

「ああ、そうだね」

レイアは、ピクリとも動かない魔物を見ながら、ポツリともらす。

「そういうわけだったんだね……」

魔物を倒したジュードは、ホームズに近づく。

「ずっと不思議だったんだ」

「疑問が解けたようでは何よりだよ」

ホームズは、肩をすくめる。

「それより、魔物は？」

「とりあえず、全滅させました。このまま進みましょう」

ホームズの質問にローエンが答える。

「りよーかい」

ホームズは、そう言つて前に進むが一旦止まる。

振り返ると、俯いているエリーゼが目に入る。

まだ、シヨックから回復していないようだ。

「エリーゼ、いくよ」

ホームズの声にエリーゼは、無言で頷くとホームズの少し後ろを歩く。

「……………ズは、」

「ん？」

しばらく歩いていいると、ホームズにエリーゼが声をかける。

「ホームズは、お父さんが死んでいゝつて言われてた時、どう思ひ……………ましたか？」

「どうつて言われても……………」

ホームズは、物心ついた時には、死んでいる事を知つていた。

エリーゼと違ひ、いつか会えると思つていた訳ではないのだ。

しかし、それでも……………

「寂しかったかなあ……………やっぱり……………」

ホームズは、俯く。

ホームズの言葉をエリーゼは、黙つて聞いている。

「そんな事を聞いて、どうするんだい？」

エリーゼは、しばらく黙る。

「よく……分かりません……」

『今、エリーゼの頭の中は、ぐちゃぐちゃなんだよー』

ティポの言葉を聞いて、ホームズは、考える。

ティポは、エリーゼ自身の言葉を喋っていただけ、おまけにデータを抜き取られて、以前とは変わっている。

更に追い打ちをかけるように知らされる両親の事実。

「まあ、ぐちゃぐちゃになるよねえ……」

エリーゼは、こくりと頷く。

「ホームズは、無いんですか？そういう経験……」

ホームズは、一瞬だけ黙る。

記憶の中を様々なものが通り過ぎる。

「……あるよ」

小さくホームズは、ポツリと返す。

「その時、どうしたんですか？」

「ん……ああ、まあ、参考にしな方がいいかな……」

ホームズは、齒切れの悪い返事をする。

「いつもの、ですか？」

エリーゼは、呆れた様に言う。

「まあね」

ホームズは、小さく微笑む。

『役に立たないな、ホームズ』

テイポの言葉は、エリーゼの本音だ。

「おれにアドバイス求める時点で、君は色々間違えてるよ」

テイポの言葉にホームズは、顔色を変えずに返す。

ホームズはその物言いにエリーゼは、再び黙って俯いてしまう。

その様子を見たホームズは、ため息を一つ吐く。

「じゃあ、一つだけ、アドバイスしてあげる」

ホームズは、指を一本ピンと立てる。

「みんな、君の事を心配してるよ、ジュードも、レイアも、ミラも、ローエンも、ローズも、多分アルヴィンも。ヨルは怪しいな……」

ヨルの名前は少し小声になってしまうホームズ。

その言葉を聞くとエリーゼは、思わず顔をあげる。

ホームズは、そんなエリーゼの顔を見て溜息を吐く。

「信じてないね」

『当然だよーバホー』

誰一人として、エリーゼの頼み事を聞いていない。

『一人ぐらい聞いてくれてもいいじゃないかー』

「それでもね、君が思ってるより、みんなは、君の事を心配してるんだよ」

ホームズの話の話を聞くと、エリーゼは、しばらくむすつとしたあと、みんなの元へスタスタと歩いて行った。

一度もホームズの方を振り返る事もなく。

ホームズは、そんなエリーゼを見るとため息を一つ吐く。

「やれやれ………やっぱり、難しいよ、ローエン」

ホームズは、後ろにいるローエンに話しかける。

そう、ローエンは、ホームズ達の後ろに居て、ずっと話を聞いていたのだ。

「いえいえ、上出来ですよ」

ローエンは、微笑んでいる。

「ま、後は彼女しただね」

ホームズは、肩をすくめる。

結局のところエリーゼの問題なのだ。

「……ホームズさん、厳しいですね」

ホームズは、少し驚いているがニヤリと笑う。

「何の事だい？」

「ジジイの戯言です」

ローエンもホッホッホッと笑っている。

ホームズとローエンは、
そう言うと、
歩みを進めた。

売り言葉と買い言葉

「ついたー！カン・バルク！」

ホームズは、叫び声をあげる。

長かったモン高原から、ようやくぬけだせたのだ。

喜びもひとしおだ。

レイアは、物珍しそうに見回す。

「シャン・ドウもそうだったけど、カン・バルクも変わった街だね」

「ラシユガルは、ア・ジュールと比べて、精霊信仰が強いからな」

アルヴィンの言葉にレイアは、感心した様に頷く。

「レイア、こつちも見てご覧」

ホームズは、乗り物の様な物を指差す。

「なに、それ？」

「ここ、世界でもカン・バルクでしかお目にかかれない空中滑車さ」

「空中滑車？」

レイアは、聞き覚えのない言葉に首を傾げる。

「カン・バルクは、山地に作られた街で、いくつかの地域をあれで繋いでいるのです
そんなレイアにローエンは、説明をする。

「景色がよくて楽しそうだね」

レイアは、エリーゼに話しかける。

「二、三回乗ったけど、なかなか面白いよ。ぜひ、乗るべきだと思うけど」
ホームズもエリーゼに話しかける。

しかし、エリーゼは、仏頂面で二人を睨んだ後、ぶいっと目を逸らした。

レイアは、そんなエリーゼに引きつり笑いを浮かべる。

ホームズは、少し困った顔をする。

「ユルゲンス、ガイアスに会うにはどうすればいい？」

「ワイバーンの許可をもらうついでに、謁見を申し込んでみるよ。」

ただ、みんな謁見を申し込むから時間がかかると思う。みんなは、宿をとっていき
れ」

ユルゲンスは、そう言うのと城に向かって歩き出した。

ミラはその様子を見ながら腕を組む。

「ユルゲンスさんに頼らなくても何とかならないかって考えているでしょ」
「む？」

ジュードの言葉に、ミラは首を傾げる。

「いい人なんだから、迷惑かけちゃためだよ」

「なるほど。ホームズにならいいのか？」

「君……おれになら、何を言っても許されるわけじゃあないんだよ」

ホームズは、半眼で納得した様子の子のミラを見る。

「とりあえず、宿に行きましようか」

ローエンの言葉にミラは頷く。

他の面子も特にはないようで、宿に向かって歩き出した。

「宿か……早くあったかい暖炉に当たりたいね。ね、エリーゼ」

ホームズは、先程無視されたにも関わらず、隣りにいるエリーゼに話しかける。

エリーゼは、あの一件以降にも、喋られなかった。

そんなエリーゼが気になり、もう一度声をかける。

しかし、エリーゼは、ホームズの言葉に答えずスタスタと前を歩く。

ホームズはぼんやりと後ろ姿を見送る。

「嫌われたんじゃないのか」

一部始終見ていたヨルは面白そうに言う。

ホームズは、肩をすくめる。

「……いつものことだろう」

ホームズが、女の子に嫌われるのも、無視されるのもいつものことなのだ。今更いちいち落ち込んでいられない。

「哀しいことにな」

「ほっとけ」

ホームズは、ヨルにそう返すと宿に向かって歩いて行った。



「あー………あつたかい」

ホームズは、宿に着いた時から暖炉に当たっている。

「………？ホームズは、寒いのが苦手なの？」

レイアは、布団の上でゴロゴロとしながら、ホームズに尋ねる。

「いやあ、別に。苦手じゃないよ」

ホームズは、暖炉から目を逸らさない。

「好きじゃないだけ」

「あ、そう……」

ホームズのいつもの煙に巻いた様な返しにレイアは、適当に返事をする。

「ああ、それにしても、ユルゲンスさん、まだかな」

レイアは、再びゴロゴロする。

そう、許可を取りに行つたユルゲンスから、何の連絡もないのだ。

「まだだよ」

ジュードは、本から目を離さずに返す。

「相手は王様だからねえ………気長に待とうよ」

ホームズは、欠伸をしながら、答える。

すると、レイアは、何かを思いついた様に起き上がる。

「そうだ。街の観光しよーよ、エリーゼ」

「……………」

エリーゼは、レイアから、顔を背ける。

「エリーゼさん、行ってきたらどうですか？」

ローエンも進める。

「それもそうね。ホームズ、案内してあげなさいよ」

「は？…何で？」

ローズからの突然の言葉にホームズは、驚いて暖炉から目を離す。

「……………だって、貴方ここに何回か来てるんでしょ。だったら、案内ぐらいしなきゃローズの提案にも一理ある。あるのだが……………」

ホームズは、無視を決め込んでいるエリーゼをちらりと見る。

自分と、レイアが一生懸命喋って、全部無視される構図が余裕で想像できるのだ。女に嫌われるのは慣れっこだが、気まずい空気には、慣れていない。

「……………それもそうだね」

ホームズは、そう言うとき中指から、指輪を外し、外出の準備をする。

断りきれないのが、ホームズだ。

「ねえ、エリーゼってばあ」

レイアは、返事をしないエリーゼに声をかける。

「ティポが、はしゃいでくれないから私ばつかうるさいみたいだよ」

「前からそうでしょ」

「なにを今更」

相変わらず、ジュードは、本から顔を上げずにどうでも良さそうに返し、ヨルは、呆れた目でレイアを見る。

「ベー」

そんな彼らにレイアは、舌を突き出す。

しかし、すぐに顔を戻す。

「じゃあさ、ティポみたいにエリーゼも元気にお喋りしない？」

そういいながら、レイアは、ベットに腰掛ける。

「エリーゼの口からもつとあなたの事を教えて欲しいな」

レイアは、優しく尋ねる。

落ち込んでいるエリーゼを励ますための言葉だろう。

しかし、それがエリーゼの逆鱗に触れてしまった。

『レイアは、うるさいなあー。いつもみんなの足を引っ張ってるくせに』

答えたのはティポだった。

しかも返ってきた言葉はレイアの心をえぐるものだった。

「えっ……？」

ティポの言葉、いや、正確に言うなら、エリーゼの言葉に場の空気が凍りつく。

「エリーゼ、言い過ぎじゃないのか、謝った方がいい」

「ミラが言うんだから相当だぞ」

アルヴェインがベットから起き上がりながらエリーゼに言う。

「そうだねえ……」

ミラの無自覚な言葉に何度も傷付いたホームズがうんうんと頷いている。

「というか、エリーゼ、君おれの言った言葉を忘れてるだろう」

頷くのを止めるとホームズは、エリーゼを見据える。

「ジャリに何を言っても無駄だろ」

ヨルはどうでも良さそうに言う。

このタイミングで、ジャリと言われたエリーゼは、ヨルをキツと睨む。

「あなたには、人間の気持ちなんて分からないんです！だって……」

エリーゼは、最後まで言葉を続ける事が出来なかった。

代わりに、パンツ！と言う乾いた音が響く。

ホームズがエリーゼにピンタをしたのだ。

突然の事にエリーゼは、ポカンとしている。

いや、エリーゼだけでは、ない。ジュードもローエンもレイアもローズも、ミラもアルヴィンでさえも言葉を失った。

「その辺にしておきたまえ、エリーゼ」

珍しく真剣な顔のホームズにエリーゼは、さっきまで言うつもりだった言葉が出てこない。

そんなエリーゼにヨルはニヤリと笑う。

「だって化け物だから、だろ？よく分かってるじゃないか」

エリーゼは、最後まで言葉を聞いていなかった。

叩かれた事によくやく思考が追いついて来たエリーゼは、涙を堪え、ホームズを睨む。

「レイアも・ミラも……ホームズも」

そう言うと、エリーゼは、テイポの中からハンカチを取り出し暖炉に放り込む。

突然物を入れられた暖炉は、火の勢いが強くなる。

そして、そのまま部屋から飛び出して行った。

「おい、どこ行くんだよ」

アルヴィンの言葉への返答は、なかった。

エリーゼが出ていった後、部屋には、重苦しい空気が流れる。

「あいたたたたー、いやあ、今のは効いたなあ」

その思い沈黙をレイアが崩す。

懸命になんでもない振りをしているが、声が震えている。

「レイア……………」

ジュードが心配そうに声をかける。

そんなジュードにレイアは、首を横に振る。

「ほら、わたしは平気だから、エリーゼを連れ戻しに行こう」

それから、ホームズの方を見る。

「ホームズもね。女の子にピンタするなんて、良くないよ」

ホームズは、手のひらを見つめる。

「……………まあね」

そう言うと、先程エリーゼが放り込んだせいで燃えている暖炉に近づく。

「うーん……………火事が起きそうだ」

ホームズは、火かき棒で暖炉の中をあさると、先程放り込まれたハンカチを引っ張り

出す。

「ミラ、控えめでよろしく」

「了解した」

ミラは、ハンカチに向かって手をかざす。

「アクアプロテクション」

弱めの魔法が炸裂し、ハンカチの火を消す。

そこにあるのは、薄汚れた灰色の布だった。

ハンカチの面影は、何処にもない。

「ホームズ、それって、エリーゼにあげた奴だよ」

ジュードが、聞きずらそうに尋ねる。

そう、このハンカチは、ホームズが泣いていたエリーゼにあげたのだ。

お詫びとして。

そして、エリーゼは、仲直りの証として大事にティポの中にしまっていた。

「そうだよ」

ホームズは、ジュードの質問になんて事なさそうに返すと、近くにあるゴミ箱に投げ入れる。

「ホームズ……」

「そんな顔しないでくれよ、ジュード。女の子に渡したプレゼントが捨てられるなんて、いつもの事さ」

ホームズは、肩をすくめてみせる。

いつもと様子は変わらない、おちやらけた感じである。

しかし、レイアがそうだったように、当の本人がなんて事なさそうに振りまいているのは、ハタから見ていると痛々しい事この上ない。

そんな一同に構わずホームズは、薪を移動させ、火の勢いを弱める。「うしっ！それじゃあ、行くとしますか」

ホームズは、立ち上がると、ミラ達は、扉に向かって歩き出した。

ジュードは、ホームズが出てから行こうと考えていた。

少し疑問に思っている事をききたかつたからだ。

「おい、ホームズ」

ホームズが出ようとすると、アルヴィンが、声をかける。

「まさか、ヨルの為にエリーゼを叩くとは思わなかつたぜ。おたくら、そこまで仲良かったか？」

ジュードが、聞こうとした事をアルヴィンが先に尋ねる。

ホームズは、エリーゼがヨルに向かって暴言を吐いている時にビンタをしていた。

どう見ても、ヨルが酷い事を言われない様にしてるとしか、見えない行動だ。

しかし、ホームズとヨルは、そこまで仲良くはない。

どちらかが笑われていればどちらが、全力で馬鹿にする関係だ。

ホームズは、ピタリと歩みを止めると、クルリと振り返る。

「当然だろう？十年以上一緒にいる相棒だぜ？」

いつもの胡散臭い笑みを浮かべ、演技っぽい口調でホームズは、アルヴィンに言う。

アルヴェインは、肩をすくめる。

「それって、エリーゼからヨルを庇ったって事？」

「違うぜ、優等生。ホームズは、エリーゼから、ヨルを庇ったんじゃない。ヨルから、エリーゼを庇ったんだ」

「え？」

ジュードは、驚いてホームズを見る。

ホームズは、相変わらずニヤニヤ笑っている。

「ヨルが言われると怒る言葉があつただろ」

そう言われてジュードは、こめかみに指を当てる。

—— 『オイ、その名で呼ぶな女、切り裂かれないのか』

「シャドウもどき……」

ジュードは、ようやく辿り着いた。

そう、ミラが言ったのだ。

あの時、エリーゼは、側にいた。

だから、ヨルに言っではいけない言葉も分かっていた。

だからこそ、言おうとしたのだろう。

ホームズは、それを察したから、先回りして、エリーゼにピンタをしたのだ。

「あの場で、いったらヨルは、絶対にエリーゼを許さないだろうから……そうだろ、

ホームズ」

話を振られたホームズは、肩をすくめる。

「さてね。そんな事は、置いといて、とつととエリーゼを追いかけよう」

ホームズは、適当に返すと部屋を出て行った。

アルヴィンとジュードもそれに続く。

「損な生き方してるよ、あいつは」

アルヴィンは、誰にも聞こえないようにポツリとこぼした。

風に流す

「いた。でも……………」

レイアは、見つけたが、言葉を失うを

そこには、エリーゼとジャオがいた。

ミラ達は思わず身構える。

「安心せい、たまたま会っただけじゃ」

ジャオは、そう言うのと離れて行った。

レイアは、一歩前に出る。

「さつきは、ごめんね。エリーゼ、ティポの事で寂しい思いしてたのにね」

一旦言葉を切るとレイアは、下を向く。

「ほら、わたしつてき、遠慮なく言っちゃうところ、あるでしょ。許してよ」

ホームズは、黙って見ていたが、ローズに小突かれ、口を開く。

「いや、まあ、その、アレだ。ピンタしたのは、やり過ぎだったよ、ごめん」

ホームズとレイアの言葉にエリーゼは、答えるべく口を開く。

「いやです」

レイアは、再び固まってしまふ。

ホームズは、やっぱりという風にため息を吐く。

「そんな事言わないで、ね……」

レイアは、困ったようにエリーゼに頼む。

エリーゼは、険しい顔で、振り返る。

「レイアもミラも……ホームズも嫌い！友達だと思ってたのに！」

「エリーゼ、わたしはあなたの事が心配で……」

レイアは、叫ぶエリーゼに戸惑いながら、言う。

「ウソ！本当は、私の事なんてどーでもいいくせにつ！」

「そんな訳ないだろう。この前からそう言ってるじゃないか」

ホームズは、言い聞かせるように言う。

「いつも隠し事だらけのホームズの言葉なんて、信じられません！」

ホームズは、ウツと言葉を詰まらせる。

普段の態度のツケが物の見事に今きている。

もう少し、好青年だったら、今の様な事を言われる事もなかったかもしれない。

言い返せないホームズと戸惑うレイアにエリーゼは、次の言葉を告げる。

「もう、友達やめる!!」

エリーゼは、そう言つて走り出した。

ホームズは、止める事ができない。

「エリーゼさん!!」

そんなエリーゼをローエンが止める。

「みんな、貴方の事を思つて優しくしているのですよ」

「ホームズは、叩きました……………」

「エリーゼさん、貴方はヨルさんに対して何か酷い事を言おうとしましたね。ヨルさんにそんな事言つてしまえば、どうなるか、分かっていますか？」

人間とは、違う自他共に認める化け物。

そんな奴の逆鱗に触れば、恐らく関係の修復は、不可能だろう。

「……………あ」

エリーゼも気づいた様だ。

「何で、ローエンがその事知ってるの？」

「ジジイの耳は地獄耳何ですよ」

「はははは………」

ホームズは、乾いた笑いを浮かべる。

そんなホームズに構わずエリーゼは、思考を巡らせる。

「じゃあ………ホームズは……私をかばって？」

ホームズは、目を逸らす。

「エリーゼさん、これでも優しくしていませんか？」

「……………」

今度はエリーゼが黙る番だ。

「エリーゼさんは、自分の心が傷付けられたと言っていました、貴方はどうですか？」

ローエンは、更に言葉を続ける。

「テイポさんの言葉に、エリーゼさんの行動に、レイアさんとホームズさんが、それぞれ心を痛めた事に気付いていますか」

エリーゼは、目を開く。

段々と自分のした事に気づき始めている。

「本当ですか……二人とも」

レイアとホームズは、それぞれの方を向く。

「いや、傷ついたって言うか……へこんだって言うか……」

レイアは、頭を掻きながら、苦笑いをしている。

因みにホームズは、何とも言えない表情でポリポリと頬を掻いている。

「ホームズは？」

「んー……女の子に嫌われんのも、渡したプレゼント捨てられるのも慣れっこだからなあ」

肩を竦めてヘラヘラと笑いながら答えるホームズ。

「ホームズだって人の子よ。傷ついてるわ」

しっかりと答えないホームズに代わりローズが答える。

「ちよつと、ローズ。勝手に気持ちを捏造しないでくれよ」

「じゃあ、喜んでるの？」

「まさか！人を変態みたいに言わないでくれよ！」

ローズは、ピクリと眉を上げホームズを一瞥すると、エリーゼを見る。

「ね？ホームズも傷ついてるのよ」

「あ……えーつと……」

ローズの口車に見事乗せられてしまい、ホームズは、二の句が続かない。エリーゼは、俯く。

「私、レイアとホームズが傷ついてるなんて、思わなかった……」
ジュードは、そんなエリーゼに近づくと屈んで視線を合わせる。

「それじゃあさ、二人に謝っちゃおうか」

「でも、私酷い事を言っちゃったし、しっちゃった……」

「ちゃんと謝れば許してくれますよ……ホームズさんは、少し怪しいですが……」
当の本人は、目を逸らす。

「しかし、それが、友達です」

ローエンは、ちらりとホームズを見る。

ホームズは、苦虫を噛み潰した顔をしている。

許さなければならぬと、釘を刺された感じだ。

「レイア、ホームズ、ごめんなさい。許してくれますか？」

「うん。でも、これからは、エリーゼの口からエリーゼの事を教えて欲しいな」

レイアは、につこりと微笑むとホームズの方を向く。

「さあ、次はホームズだよ」

ホームズは、ため息を一つ吐く。

「みんなが君の事を心配しているのが分かっただろう」

エリーゼは、コクリと頷く。

「んじゃあ、よく、反省したまえ」

ホームズは、そう言つてハンカチを渡す。

エリーゼは、先ほどの自分の行動を思い出し、苦い顔をする。

受け取らないエリーゼをしばらく見るとホームズは、頭に乗せる。

「おれからの、お詫び。それと『仲直りの証』」

ホームズは、ウイंकをする。

———「あの……これ……」

「いいよ、別に返さなくても。そんなもの、たくさんあるしね」

「でも……」

「じゃあ、こうしよう。これは、お詫び」

「お詫び？」

「そ。さつきは、まあ、おれもやり過ぎたし、そのお詫び。これなら、文句ないだろう」

「……分かり……ました。これは、もらっておきます」

「仲直りの証……です」

「……………はい」

エリーゼは、シャン・ドウでの出来事を思い出すと、嬉しそうに微笑み、ハンカチを受け取る。

ホームズも微笑みながら頷くと、直ぐに、先ほどの優しい笑みを遠い彼方に消し去って、代わりに底意地の悪い笑みを浮かべる。

「もう、燃やすんじゃないよ」

「ホ、ホームズ!!」

『一言余計だよー、バホー!!』

怒るエリーゼ達に、ホームズは、ニヤニヤ笑いながら、手を振る。

ティポは、それからむっとして口を開く。

『それにしても、二人とも三歳しか違わないくせに偉そうだなあー』

「ティポ!!」

余計な事を言うエリーゼが慌てて抑える。

レイアは、腰に手を当て不敵な笑みを浮かべる。

「エリーゼ。それでも私の方が年上だから」

『ひいー、こわー』

ティポは、恐れおののいている。

その様子に満足げに頷く。

しかし、ホームズは、半眼で、エリーゼを睨む。

「つーか、エリーゼ。おれ、十八だよ、君の六歳上だよ」

『えっ………あ、そう言えば………』

ティポとエリーゼは、声を揃えてホームズを見る。

「何だい、その目は!!」

「ホームズ、落ち着いて!!」

ジュードが後ろから羽交い締めにして止める。

ローズは、そんな様子を遠くから眺める。

「なんか言ってやれよ」

アルヴィンが、そんなローズにやれやれと言った風に言葉をかける。

「なんて言っていないか、分からないわ………アルヴィンは？」

アルヴィンは、肩をすくめる。

「ほっとくに限るな」

いつの間にやら、レイア達のそばに来ていたヨルは、どうでも良さそうに呟く。

「ふふ、はははは」

さつきまでの緊迫した雰囲気がウソの様な空気にミラは思わず笑みがこぼれる。

ホームズは、それを見るとため息を吐くとやれやれと言ったふうに着る。

「娘っ子、友達を大事にな」

ジャオは、そう言うとそのばから去っていった。

それを見送ると、ジュードは、ローエンの方を見る。

「僕たちは、どうしようか？ユルゲンスさん、まだ戻ってこないけど……」

「直接王城に乗り込んでみる？」

アルヴィンは、不敵な笑みを浮かべながら言う。

「いいなあ、それ。分かりやすくして」

ヨルもニヤニヤしながらいう。

ジュードは、ため息を吐く。

「だから、ユルゲンスさんに迷惑かけちゃダメなんだって……」

「ダメか……アルヴィンのその案は、じっくりくるのだが……」

ミラの言葉に皆は呆れ顔だ。

「取り敢えず、宿に戻ろうよ……ここにいっても寒いだけだし」
ホームズの提案に誰も特に反対する事なく宿に歩きだした。

—— 『んー……女の子に嫌われんのも、渡したプレゼント捨てられるのも慣れっこだからなあ』 ——

ローズは、先ほどのホームズの言葉を思い出す。

「あ、あのさ……ホームズ……」

「ん？」

ローズは、顔を赤くしながら、ホームズを呼ぶ。

「わ、私は、捨ててないわよ……貴方からの、プ、プレゼント」

「プレゼント……ってあれ？」

ホームズが、渡したプレゼントと言えば、あの別れ際に渡した花冠だけだ。ローズは、コクリと頷く。

ホームズを元気付けようと思い、ローズは、勇気を振り絞って言った。

因みに言うと、近くにレイアとアルヴィンがいるのだが全くローズは、気付いていない。

「（おい、レイア……どうすればいいの、俺たち？ 凄く気まずいけど……咳払いとかしていい？）」

「（何言ってるの！ わたしたちにできる事と言えば黙って様子を見守るだけだよ）」

「（わかった。じゃあ、叫んでいい？）」

「（何も分かってないじゃん！ いいから、黙ってるの！ ローズがホームズに対して珍しく素直なんだから！）」

二人は、小声でボソボソと言い合う。

（オイ……一番気まずいの誰だと思ってるんだ）

ホームズの肩にいるヨルが目で語っているのを見て二人は、苦笑いをして黙る。

「ローズ………君………」

ホームズは、ローズをじっと見つめる。
ローズの頬は、どんどんと赤くなっている。
アルヴィンとレイアは、身を乗り出す。

「気持ち悪い」

「チビ」

ホームズの予想外の言葉に思わずローズは、聞き返す。

ホームズの顔は、真っ青だ。

「気持ち悪い！君凄く気持ち悪い！アクセサリーとかの小物とかなら、ともかく、花の冠だよ！十年も前のもの何で取ってるの！枯れてるでしょ！そんなものどうして、まだ持ってるの!!」

ようやく、ホームズの言い分がわかったローズは、先程とは別の意味で顔を赤くする。
「ちつがうわよ!!その花の一つを押し花にして、葉を作っているの！それを取っておいであるの!」

「ああ、何だ。そういう事」

ホームズは、ホッとため息を吐く。

「おれ、君の引き出しの中に枯れた花の冠が入ってるの想像しちやたよ……………」

「……………」

「いやあ、良かった。これから、どう接していこうか考えちゃったよ……………」

先程、オモクソ気持ち悪いと連呼しておいて何を今更という話だが…………

「いやあ、良かった良かった」

ホームズは、そう言うのと固まっているローズを放置して、宿屋に向かっていった。

「なあ、ローズ」

「なに？」

取り残されたローズの側には、アルヴァインとレイアがいる。

「もう一度聞くけどよ……………」

アルヴァインは、一度言葉を切る。

「あいつのいい所ってどい？」

「……………えがお？」

ローズは、斜め下を見つめながら、疑問形で返す。

せめて、ありがとうの一言ぐらい言えればいい様な所なのに、ホームズの言ったことと言えば……………

三人は、思い出してため息を吐く。

「あんなんだから、ホームズは、モテないんだらうね……………」

レイアは、目の前を意気揚々と歩く友人、ホームズを見つめながらポツリと呟いた。

カン・バルクの冷たい風がローズ達の前を通り過ぎて行った。

休憩中

ボーイズトーク

「ボーイズトークをしましょう」

ローエンは、ジュードと共に部屋に帰ってくるなり、そう宣言した。

「……………は？」

ホームズとアルヴィンは、訳の分からない申し出に疑問を浮かべる。

「どうしたんだい突然？」

「さっきね、エリーゼとレイアとローズがガールズトークをしてたんだ」

「へえー……それで？」

ホームズは、どうでも良さそうに尋ねる。

「でも、僕たちは、話に入れなかったんだ」

「まあ、男だしね」

ガールズではない。

ボーイズだ。

「それで、ボーイズトークをしようと思ったんだけど……………」

「だけど？」

「盛り上がらなかつたんです」

ローエンが言葉を引き継ぐ。

話を聞くと、人生相談やら、身体の不調やらで、中々話が盛り上がらないらしいのだ。「しかし、諦めてはいけません!!女性陣が羨むくらいの楽しいトークを繰り広げましょう!」

ホームズは、呆れた目で見ている。

「アルヴェイン、どうする?おれ、凄いいんどくさいんだけど………」

「……普段ならおたくが真っ先に言いそうなことだよな」

アルヴェインが、しみじみと言うのでホームズは、頬を引きつらせるが、その通りなので、反論出来ない。

「じゃあ、やるか!」

「おー!!」

アルヴェインの掛け声にローエンとジュードが声を合わせる。

「……………乗り遅れたなあ……………」
ホームズは、ポツリと呟いた。



「で、何を話す?」

アルヴィンは、周りを見渡して尋ねる。

「やっぱり、ここは、妥当に恋愛話じゃない?」

「それでいいと思うよ」

ホームズの言葉にジュードは、賛成する。

「意義なし」

「私もそれで」

「ヨルは?」

「俺も参加するの?」

「当然」

半ば無理やりヨルを引つ張り込むことに成功する。

「それでは、言い出しつぺのホームズさんから、いきましよう」

話を振られたホームズは、頬を引きつらせる。

「えーつと、おれの恋愛話は……」

ホームズは、頭を捻って思い出す。

しかし……

「……………ごめん、ロクなものがない」

そう、ちよくちよく、話しているが、ホームズは嫌われたり、無視されたりと、ロクな目にあつていない。

「えーつと、ドンマイ」

ジュードは、涙を堪える、ホームズの肩に手を置く。

「今日ほど君の友情に感謝した事はないよ」

ホームズは、目尻に浮かんだ涙を拭き取る。

「……………そういうジュードは……………やっぱいいわ」

ホームズは、途中で話を振るのを止めた。

「えっ? 何で」

ジュードは、不思議そうだ。

((だって、どうせ、ミラの話だし……………))

一同の心の声が一致した瞬間だった。

「ローエンは？」

話を遮られたジュードは、少し不服そうにローエンに話を振る。

「私ですか？」

ローエンは、懐かしむ様に目を細める。

「あるだろう、ローエン。隠し事は、無しだよ」

「ホームズが言うんだ……………」

ホームズの言葉にジュードが思わず突っ込む。

「ありますよ」

ローエンは、そう前置きをして話す。

ホームズとジュードは、興味深そうに身を乗り出す。

「実は私には、将来を誓った女性がいました」

「ほうほう……………ん？」

ホームズは、面白そうに頷いて、首を傾げる。

『『いました』？過去形って事は、振られたの？』

「いえ、二十年前の津波に巻き込まれて……………」

そこから先を想像出来ない程ホームズは、馬鹿ではない。

「あ……うん。その辺にしとこうか……」

「そうですね、こういう場で話す事ではないですね」

ローエンも途中で気付いた様で話を止める。

「アルヴィンは、ロクな事してなさそうだよね」

「おい……」

ホームズの失礼な言い草にアルヴィンがこめかみを引きつらせる。

「ヨルにいたっては……」

「あると思うか？」

「だよね……」

早速、行き詰まった。

僅かな望みをかけて、ホームズは、一応ジュードに尋ねる。

「ジュードの話そうとした恋愛話は？」

「あ、うん、初恋の話をしようと思って……」

ホームズは、目を輝かせる。

「こういう話を待っていたのだ。」

「相手は誰？レイア？」

「ううん、違うよ」

「ごめん。やつばやめよう」

ホームズは、友人の事を思うと可哀想なので話を止める。

「え、なんで？」

「うん………また、そのうち気が向いたら話すよ……」

ホームズは、そう言葉を濁す。

すると、話を二度も中断されたホームズに対して不服そうに聞き返す。

「それなら、ホームズの初恋の話をしてよ。まず、初恋の相手は、誰だった？」

「えっ？？」

ホームズの顔がどんどん赤くなる。

「いや、それは、ほら、別に」

ジュードの質問にしどろもどろで誤魔化そうとする。

「なんか、言いづらい訳でもあるの？」

ジュードの追撃にホームズは、更に話を逸らそうとする。

何としても知られたくないのだ。

「ローズだろ」

「ローズさんですね」

アルヴィンとローエンが、ホームズに言う。

「べ、別にそんな訳ないだろう！」

あからさまに、動揺するホームズに一同は、ため息を吐く。

「ホームズって、隠し事は、得意だけど、嘘つくの下手だね……………」

「待って、ジュード！ローズが初恋の相手だって言うのは、決定事項なの？」
ホームズの決死の言い返しにアルヴィンがため息を吐く。

「ファーストキスされた相手が、初恋の相手じゃない訳がないだろ……………」

「いや、でも、あれは、ローズが騙されてやった奴だし……………」

「おや、ファーストキスは、認めるのですか？」

必死に食い下がろうとする、ホームズにローエンが追撃する。

「ついでに言うなら、一番最初に、お前の瞳の色を褒めた女だもんなあ」

ヨルも意地悪く言う。

「……………君たち覚えてろよ」

反論のできなくなつた、ホームズは、膝を抱えてしまった。

そんなホームズを見てジュードは、口を開く。

「ローエン……………」

「何でしょう?」

「ちよつと楽しいね」

「奇遇ですね、私もです」

「俺も。もうちよつと、ホームズの初恋の話をしようぜ」

「やだよ!!」

ホームズは、立ち上がる。

「ふざけんなよ!!楽しいの君たちだけじゃないか!!こつちは、全然楽しくないんだよ!!何が悲しくて幼い頃の記憶をさらさなきやいけないんだよ!!」

ホームズは、ギャーギャーと騒ぎ立てる。

「もういい!この話は、これで終わり!」

「ええー、俺はおたくの話をもう少し聞きたいぜ」

アルヴィンがニヤリと笑つてホームズを見る。

「絶つつ対ヤダ！おれだけが恥をかくだけじゃないか!!」
ホームズは、顔を赤くして、じたんだをふむ。

「もう別の話にいくよ！今度のお題は、『友情』でいこう！何か話は、はい、ジュード
！」

「え、え？」

ジュードは、少し考える。

「なんかあるだろう？医学校に通ってたんだから、何か友達との友情の一つや、二つぐ
らいさ」

「えっ……………と、僕、指名手配になってるから……………多分友達は、僕の事をもう……………」
「ああ……………」

そう、忘れがちだが、ジュードとミラはお尋ねものなのだ。

「後、『あそこまで、いい人をやるとね……………』て、陰で言われたよ」

お人好しの性格は、人によっては、そう見えてしまう。

「……………ロクなものがないねえ……………」

ホームズは、頬を引きつらせる。

「……………ホームズは？」

昔の事を思い出し、ジュードは、落ち込みながらも、ホームズに尋ねる。

「いや、イジメられてた記憶が強いなあ……まあ、友達になった子もいない訳じゃないけど、そのまま再会する事なく別れた連中もいっぱいいるからなあ……」

「ああ、うん。そう言えばホームズは、そうだったね」

「ローエンは？」

「ええ、ナハティガルの話でもしますか？」

「やめとく」

何が悲しくて、敵の王様の話を聞かなければならないのだろうか

「アルヴィンは？」

「俺もロクな子ども時代を送ってないからなあ……」

友情話終了。

「おい！いい加減にしろよ！何にも話が進まねーぞ！」

「そうだねえ……」

ホームズもため息を一つ吐く。

基本的にロクな目にあつていない面子が多すぎる。

今度はアルヴィンが提案する。

「じゃあ、アレだ、ウチのパーティーの女性陣の話をしよう。これなら、誰もトラウマを抉られねーだろ」

「ですね」

「だね」

「そうしよう」

男面子は、全員頷く。

「じゃあ、行くぞ、まずは、『付き合うなら誰?』!」
アルヴィンの言葉にホームズが真つ先に手を上げる。

「はい!ホームズ!」

「とりあえず、エリーゼは、除外しようよ。ウチのパーティーから、犯罪者は、出したくないし」

「だな。じゃあ、エリーゼ以外で」

ここに当の本人がいたら、どんな目に会うか分からない台詞を平気で吐く二人に
ジュードとローエンは、引きつり笑いをする。

「じゃあ、ホームズは、ローズか?」

「いやあ……………」

ホームズは、微妙そうな顔をする。

早速つまづく。

「いやいや、そんな顔するなよ……………初恋の相手だろ？ロマンチックじゃん」
アルヴィンは、そんなホームズに言葉を続ける。

「ん……………何か付き合った時のイメージがわからないんだよね」

「じゃあ、レイア」

「もつとないね。友達だもん」

「ミラ」

「想像したくないね。無自覚な一言にどれだけ傷つけられると思う？」

「エリーゼ」

「それは、選択肢から、外そうって言ったじゃん！」

アルヴィンはホームズの返答を聞いて考える。

「じゃあ、次。次は……………」

「待って、今思ったんだけど……………これ、後々気まずいよね」

女性陣の誰と、付き合いたいと言う様な物だ。

「……………確かに、そうだな……………じゃあ、こうしよう！好みのタイプは?!はい、ローエン

！」

アルヴィンは、ローエンに話をふる。

ホームズの忠告を聞いて話題は、改善されていた。

「そうですね……家庭的な人ですかね」

「なるほど、悪くないな……次、ジュードは……」

話を振っておいて、アルヴィンは、言い淀む。

「年上だな」

「絶対そうだね」

アルヴィンとホームズは、ウンウンと頷き合う。

「ねえ、何でさつきから、勝手に決めるの？」

ジュードは、こめかみをピクリと動かすと、後ろにいる、ヨルの方を見る。

「そう言えば、ヨルは？」

「マナの保有量の多い奴だといいな……エサとして」

「何で、ヨルに聞いたの？」

ホームズは、頬を引きつらせながら、ジュードに尋ねる。

「ごめん、うっかりしてた……」

ジュードは、ため息を吐く。

「そう言うホームズは？」

ジュードからの、質問にホームズは、考え込む。

「そうだねえ……………髪が黒くて、ちよつとつり目だといいいかな」

アルヴィン、ローエン、ジュードは、一人の女を思い浮かべる。

((ローズだなあ……………))

「んで、素直な子がいいなあ」

((ローズじゃないなあ……………))

三人は、ため息を一つ吐く。

「何だい、その顔は……………」

ホームズは、イライラしながら、三人を睨む。

とはいえ、初めてまともな会話ができた気がする。

「うーん……………なんか、もうだいたい出尽くしたね……………」

ホームズは、ポツリと呟く。

「疲れたね……………」

ホームズの言葉に皆が頷く。

話をするよりも、話題を作り出す方が大変だった。

ここで、休みを取るのもいいかもしれない。

「なんか、飲み物を持ってくるよ」
ホームズは、そう言つて扉を開ける。

そこには、エリーゼがティポを抱えて佇んでいた。

「……………エリーゼ？」

ホームズは、だらだらと冷や汗を流す。

いつから、いたのか凄く気になるのだが、怖くて聞けない。

願わくば、ついさつき、好みのタイプあたりだとありがたいのだが……………

「どうして、私は選択肢に入らないんですか？ ホームズ？」

ホームズの希望は、潰えた。

まあ、エリーゼとしては、別に彼らの事はどうとも思っていない。

しかし、真っ先に恋愛対象から、外されて怒らない女性は、まず、いない。

その所は、子供と言えど、女である。

単純に言うとは、ホームズは、女のプライドを踏み躪ったのだ。

「いや、何というか、ね、アル……」

助けを求めて、後ろに顔を向けるとアルヴィンは、どこにもいなかった。

（あの野郎！）

ホームズは、拳を握りしめる。

後ろから、怒気を感じてホームズは、顔を戻す。

そこには、輝かんばかりの笑顔のエリーゼがいる。

「エリー……」

「でも、いい事を聞きました」

ホームズが、エリーゼと呼ぶ前に、エリーゼが言葉をかぶせる。

「ホームズの初恋って、ローズだったんですね」

ホームズは、一瞬にして、顔を赤くすると、直ぐに青くなる。

「あの……………エリーゼさん？」

『みんなに伝えてきてあげるよー！』

ティポは、ふよふよと浮かびながらホームズに言う。

「いや、ちよつと、待つ……………」

しかし、時すでに、遅し。

ティポは、勿論、エリーゼも女子部屋の方に走り出していた。

『ホームズの、は……………』

「わああああ!!待て待て待て……………」

走りだしたエリーゼを追いかけ、ホームズも駆け出して行った。

「……………行つた？」

アルヴィンは、ベットの下から這い出てくる。

ジュードは、無言で廊下を指差す。

「エリーゼえええ！止めておくれええ！頼むからっ！お願いだからっ！後生だからっ
！」

「うるさい、ホームズ!!何エリーゼに絡んでるの！」

『あ、ローズ、いい所に。実はね…………』

「させるか!!」

『ふごー!!伸ーびーるー』

「ちよ、ホームズ！」

「ティポに酷い事しないで下さい！」

「おれに酷い事しないで下さい!!」

「……………」

宿の廊下は、大騒ぎだった。

アルヴェインは、引きつり笑いを浮かべる。

心底巻き込まれなくて良かったと、アルヴェインは、胸を撫で下ろした。

「アルヴェイン、どうするのアレ」

「ほっとくに限るだろ。巻き込まれたくないし」

「アルヴェインにも責任の一端は、あると思うけど……………」

とことん可哀想なホームズにジュードは、同情を禁じ得ない。

「いつもの事だ」

ヨルは、一つあくびをして、丸くなった。

「そうだ！えーつと、アレだ！何か、一つだけ、お願い聞くから！！だから、頼むよおおおお！！」

遊びましょー

「で、何で、私たちここに居るのかしら？」

ローズは、開口一番にホームズに尋ねる。

そこには、一同が全員が同じ部屋にいる。

「えつとね、エリーゼが、みんなで遊びたいって言うからさ……」

ホームズは、困ったように頭をかきなから、ほんの数分前の事を思い出す。

『アレだ！何か、一つだけ、お願い聞くから！！だから、頼むよおおお』

お!!!
』

この一言が原因だった。

ホームズが、これを言った瞬間、エリーゼが提案してきたのだ。みんなで遊びたいと。

ホームズとしても、バラされたくないこと（初恋）があるので、その程度の願いことで黙っていてくれるのなら願ったり叶ったりだ。

「ふむ。それで、ホームズ。何をして遊ぶのだ？この大人数だと、中々限られてくるぞ」

ミラがホームズに尋ねる。

ホームズは、エヘンと胸を張る。

「幸いな事に男と女が揃っているし、これでいいだろうー！」

そう言って、ホームズは、少し太い竹串のような物を九本だす。

竹串には、八本に番号がふってあり、一本だけ、『王』と書かれていた。

「その名も王様ゲーム!!」

「待て」

アルヴィンがホームズを止める。

レイアとジュードも頭を抱えている。

「何だい？」

ホームズは、疑問そうに首を傾げる。

「誰から、何て聞いたんだ」

「ん、男と女でやって、一番盛り上がる遊びだつて、聞いたよ」

「誰が言った？」

「おれの母さん。因みに、おれが十歳だったよ」

(顔も見たことけど……)

アルヴィンとジュードとレイアは、心を一つにして思う。

(（ガキに何を教えてるんだ、あの親!!）)

「ほっほっほっ、面白そうですね」

「おい、年長者。率先切つて賛成してんじゃねーよ。止めるよ……」

ノリノリな、ローエンにアルヴィンが突つ込む。

「ねえ、ローズ、ホームズの事を止めてよ……」

レイアは、先ほどから、無言のローズに言う。

「え、え、ああ、うん。でも、まあ、ちよつとくらいなら、いいんじゃないかなあゝつて思うんだけど……………」

最後に行くほど小さくなる声に、レイアは、半眼を向ける。

「ローズ……………」

何を期待してるか、丸わかりだ。

ジュードは、隣にいる、ホームズに尋ねる。

「ねえ、王様ゲームって、どんなものか知ってる?」

「確か、王様を引き当てた人が、番号で、命令をするんでしょ。例えば、六番と四番が腕立て五十回とか」

「……………間違っちゃいけないけど」

ジュードは、何とも言えない顔をする。

「ホームズさん、男女間に関わる命令を出すものですよ。例えば、三番と八番が恋人つなぎをするとか」

「あ、そうなの」

ホームズは、その話を聞いて考える。

「うーん……………でも、エリーゼもいるし、程々にしようか」

何せ教育上よろしくない。

「例えば？」

「うーん……キスは、無しにしとこうか。後は程々につてことで」
着々とルールが決まってく中、ジュードとレイアとアルヴィンは、げんなりとして
いる。

「おい、お前、アホか」

そんな中、ヨルがホームズに尋ねる。

「ヨル………」

ジュードは、安心し、そして、期待の目を向ける。

普段は、口を開けば言わなくてもいい事を平気で、人を傷付ける事しか言わないのに。
きつと、彼なら止めてくれるだろう。

「九本あるんだが、もしかして、おれも入ってるのか？」

「そこじゃないでしょ!!止めてよ!!」

「うん、そうだよ」

「ホームズも答えないで!というか……ヨルも入るの?」

ジュードは、最後の希望をかけて尋ねる。

「……みたいだな。特に断わる理由もないしな……なにせ」

尻尾をゆらゆらと揺らし、にやりと笑う。

「合法的に命令が出来るもんなあ」

もう、それは、最高の笑顔だった。

ここで、三人は、選択する。

巻き込まれない為に、参加しない。

これが一番いいだろう。

しかし、もう一つある。

それは……

(わたし僕が参加して、ヨルが暴君として君臨する、確率を減らす！)

お人好しの二人は、後者を選択した。

「よかったよ。二人が参加してくれて」

ホームズは、うんうんと頷いている。

「おたくら……」

アルヴィンは、ため息を吐くと自分の参加表明をこめて、参加側に手をあげる。

「おっしーそりじゃあ、全員参加だね」

ホームズは、九本の棒を持ち一同の前に出す。

「せーの……」

それぞれの棒を取る。

『『王様だーれ?!』』

「俺だ」

ヨルが尻尾で掴んだ棒を見せる。

（早速オチいつちやった……）

ジュードとレイアは、ため息を吐く。

そんな二人に構わず、ヨルは、続ける。

「そうだなあ………じゃあ、三番が六番に全力ビンタで」

「おい、いきなり最悪なのが来たよ！どーすんの!!」

アルヴィンが、冷や汗を流す。

「三番だれ？」

ジュードが尋ねると、手が上がる。

「はい」

エリーゼがおずおずと手をあげる。

「じゃあ、六番は？」

「……………はい」

六番は、ホームズだった。

一同は、それを見ると頷く。

(仕方ないね、ホームズなら)

「うわ！ 凄い嫌な心の声が聞こえた気がする！」

「じゃあ、ぱっぱと済ましちゃいましょう、エリーゼ」

「はい」

ローズは、面倒くさそうに、エリーゼに声を掛ける。

エリーゼもそれに答えるように、頷くとホームズの前に立つ。

「……………エリーゼ……………さん？ あのお手柔らかに……………」

ホームズは、ガタガタと震えている。

いい笑顔とは、裏腹に手を精一杯振り上げる。

「歯、食いしばってください……………」

その言葉を合図にエリーゼの全力ピンタが、ホームズの頬に炸裂する。

「痛い！ 想像してたよりもかなり痛い！ 何で？」

ホームズは、そう言つてエリーゼを見る。

エリーゼのリリアル・オーブが輝いていた。
ビンタをするのに少し活用したのだろう。

「おれ、君に恨まれるような事したっけ？」

『今日の出来事いつてやろうかー!!』

「ごめんなさい」

ホームズは、頬にもみじを作りながら謝る。

「はーい、それじゃあ、二回戦」

ローズが、流れを変えるように手を叩く。

「せーのー！」

『『王様だーれ?』』

「私だ」

ミラだった。

ローズは、自分の棒を見てため息を吐く。

レイアとジュードは、再びヨルが王様にならなかつた事にホツと胸をなで下ろす。

「ふむ、命令か……………」

ミラは、うーむと、考え込む。

特に思いつかないのだ。

いつその事、誰か適当に番号を言つてそいつを王様にしてしまおうという考えに至つた。

「よし、五番は……………」

そこで、グーとミラのお腹になる。

「外の屋台にあつた、食べ物を買つてこい」

王様も、精霊の主様も空腹には、勝てなかった。

「五番だーれ？」

ローズの問いに1人が手をあげる。

「俺だ」

アルヴィンだった。

アルヴィンは、雪の降る中屋台の食い物を急いで買ってきた。

「うむ、ご苦労」

ミラはそう言うのとアルヴィンの買ってきた暖かいおでんをほうばる。

「あのさ、おたくら、分かってる？」

「何が？」

ホームズは、首を傾げる。

「もつと、男女の事を絡めてこいよ！さつきから、やってる事全部罰ゲームじゃねーか！！」

アルヴィンの説得にホームズは、引き気味に頷く。

「わ、わかったよ………それじゃあ、次からは『男女』つてのを生かすように………」
ホームズは、そこで、言葉を切ると棒を用意する。

「せーの！」

『『王様だーれ?!』』

「俺だ」

アルヴィンが王様だった。

アルヴィンは、ふふふと笑う。

「見せてやるぜ、ガキどもこれが王様ゲームだ！」

「何やかんで、アルヴィン君も楽しんでるね」

「まあ、こうなる事は分かってたけど……」

レイアと、ジュードは、ボソボソと話す。

「二番が髪型を変えて、四番に上目遣いをしろ！」

「四番だれ？」

ローズが手をあげる。

「二番は？」

ホームズが手をあげる。

「やだよ！絶対やだ！というか、髪型なんて変えられないよ！こんな長さしかないんだよ！」

ホームズは、自分の髪を持って説得する。

「……………確か、何かあったよね。『ついでにーる』だっけ？」

そう言つてジュードが引つ張り出したのは、髪が二つ別れているウィッグのような物

だ。

「何でそんなものがあるんだい？」

ホームズは、嫌そうに顔を歪める。

「……………まあ、王様の命令は絶対だし、とっとやれや」

「わあい、すつごい投げやり」

アルヴィンは、心底萎えたようだがどうでも良さそうに、ホームズに告げる。

ホームズは、仕方なさそうにため息を吐くジュードから、『ついんてーる』をひったくると、頭に二つ着けようとする。

「待って、ホームズ」

しかし、ここで、レイアが止める。

「折角だから、もつと、可愛くしよう」

最悪な形で再開する。

「え、いや、勘弁して……………」

レイアは、そんなホームズを無視して部屋の外まで引つ張る。

「じゃーん！どう？折角のポンチョだから、それを生かすように髪型を変えてみたんだ、ピン留めとか付けて。『ついんてーる』の位置も調節したんだよ」

そう言つて指差す先には

髪が二つ分けに結ばれ、横から垂れるたれ目の可愛い、可愛い、

ホームズがいた。

「うわあ………ウソでしょ？本当にホームズ？」

思わずそう言つてしまう程、今のホームズは、文句無しで美少女だ。

普段付けているポンチョがまたいい具合にマツチしていて、違和感が全くない。

ジュードの言葉にホームズは、キッと涙を浮かべて睨む。

「おれだよ！ホームズだよ！というか、ジュード！君の幼馴染みどうかしておくれ

よ！すごいノリノリだったんだよ、このコーディネートをするのにつ！！」
「いやあ、まさか、ここまでとは、思わなかったよ……………」

レイアは、変身したホームズの姿を見て若干頬を引きつらせる。

「さあさあ、わかったから、ほら、ローズに上目遣いしてこいや」

アルヴィンの命令にホームズは、ため息を吐いて、ローズの方に近づいていく。

「はあ、なにが悲しくて……………」

ホームズは、涙を浮かべながら、ローズに近づく。

そして、上目遣い。

涙で目が潤んでいる為、威力二倍だ。

ローズは、呆気に取られた後直ぐに暗い顔をする。

「女として、負けた気がする……」

「わぁーい、勝つても何にも嬉しくない」

約二名に心の傷を負わせたところで、次。

「せーの」

『『王様だーれ?』』

「いやったあー……!!」

ホームズだった。

喜びのあまり、雄叫びをあげ、飛び跳ねる。一緒に『ついんてーる』も飛び跳ねる。

「男女を絡めればいいんだろう?」

ホームズは、意地悪くにやりと笑う。

(やばい、忘れてた……………)

レイアは、冷や汗をかく。

(ヨルの印象が強くて忘れがちだけど)

何にしようかと、『ついんてーる』を揺らしながら考えているホームズに視線を向ける。

(ホームズも、かなり達が悪いんだった!)

「折角だから、恥をかかせてやる!」

ビシッと指差す。

「1番が9番に……………」

「9番に……………」

レイアが、冷や汗を流しながら尋ねる。

「膝枕」

『膝枕あーー?!』

一同は、声を揃えて叫ぶ。

ホームズは、そんな一同に構わず、腰に手を当て、人差し指をピシッと指す。
その姿は、もう女子のそれだ。

「そう、膝枕。やってる男女は、相当恥ずかしい！しかし、見てるこちらとしては、散々からかう事が出来る！」

もし仮に、女同士でやる事になっても、微笑ましいだけ！」

ホームズは、膝枕の意義を述べると更に笑みを深くする。

対照的に、レイアは、顔を暗くする。

「ああ、だから、ホームズは、モテないんだなあ……………」

レイアは、友人の残念な所をまた、見つけてしまった。

「ふふふ……………それでは、一番恥ずかしい思いをする番号から、行こう！」

ホームズは、不敵に笑いながら、辺りを見回す。

「9番だーれ？」

「はい……………」

ジュードだった。

ホームズは、内心でガッツポーズを決める。

(やったね！さあ、1番は、誰だ？ミラか？レイアか？間をとって、エリーゼか？)

「俺だ」

ヨルだった。

「えっ？」

ホームズは、頬を引きつらせ、ヨルを見る。

「だから、俺だ」

ヨルは、そう言つて『9』と書かれた棒を見せる。

一同を微妙な沈黙が包む。

「え？ヨル君？」

レイアは、ヨルのその小さな後ろ足を見る。

「どのへんが、膝で、どのへんが腿なんだか分からないんだけど……」

ローズは、何とも言えない表情で、ヨルを見る。

ホームズは、ため息を一つ吐く。

「まあ、いいや。ヨル、王様の命令は、絶対だから」

「ウソ！やるの！」

レイアは思わず突っ込むが、ヨルは、平然として、後ろ足を投げ出す。

「どう見ても長さが足りねえだろ……」

アルヴィンがそう言った瞬間、

ヨルの後ろ足がウネウネとベットの端から、伸び始めた。

「「ぎいやあー！！！！」」

レイア、ローズ、エリーゼは、その不気味な光景に思わず叫び声を上げた。

レイアは、前に一度見たことがあるが、それでも、突然されると驚きを隠せない。

「さあ、ガキ、好きな所を枕にしろ」

「アルヴィン……………」

ジュードは、引きつった表情でアルヴィンに語る。

「僕さ、正直に言うと、ホームズの命令が出た瞬間、始めてホームズの事を尊敬したんだよね」

「……………今は？」

「全力で殴りたい」

そう告げると、ジュードは、諦めてヨルに膝枕をしてもらった。

「……………なんか疲れたし、次で、ラストにしよう」

ホームズの提案に、一同は、頷く。

女子の面子は、先ほどのヨルの不気味な行動が忘れられないし、ジュードは、何だか放心状態だ。

「はい、セーの……………」

『王様だーれ？』

「私ですね」

ローエンだった。

「まあ、そうですね、それでは、まだ、出ていない番号の7番と8番の二人は、恋人とつなぎで宿の前の大通りを歩いてください」

「7番は？」

「はい」

ローズが手をあげる。

「8番は？」

「はい」

ホームズが手をあげる。

ローズは、今まで一番嬉しそうな顔をする。

しかし、レイアと目が合うと慌ててそれを隠すように咳払いをして、誤魔化す。レイアは、そんなローズをやれやれと暖かい目で、見る。

「ローエン………」

ホームズは、ギロリと睨むが、ローエンは、ホッホッホと笑っている。

ホームズは、ため息を一つ吐くと、ローズの手を握る。

「え、えっ、え？」

「早く行くよ、寒い所に行くんだ。パツと行つてパツと帰つてくるよ」

「ちよ、ちよつと待つて!!」

ローズの言葉にホームズは、耳を貸さず、ローズを連れて、宿から出て行つた。そんな二人を見送るとレイアは、にっこりと笑う。

「いやあ、考えたねローエン。流石だよ」

「たまには、ローズさんにもいい思いをさせてあげないと可哀想ですからね」
「だよね」

レイアは、窓から二人が宿から出て行くのを眺める。

見ていてじれつたい二人には、これぐらいのキラーアシストが必要だろう。

これで、二人の仲も少しは……………

「ねえ、そう言えばホームズつてさあ……………」

ジュードは、思い出したように口を開く。

『ついでにーる』つけたままなんじゃない？』

「あ……」

「最悪だぁー！ー！こんな格好で外に出る羽目になるなんてー！！」

「だから、待ってっていったでしょう!!」

「もういい。こうなったらとつとと、終わらせてやる」

「ちよ、突然引つ張らない……でえ!?!」

「痛い！何でコケるんだい！手を繋いでるから、巻き込まれるんだよ！」

「突然引つ張るからこうなるのよ!!」

「うわぁ………本当にアシストをキルにしてるよ………」

レイアは、騒音の出処である宿の入り口を窓から見ている。

二人は、散々叫んだ後再び歩き出した。

「まあ、形だけでも、デートぼつくなれば……………」

「なあ、忘れてるかもしれないが……………」

ヨルがレイアに声をかける。

「俺とあいつは、一定の距離以上離れられないぞ」

ヨルは、そう告げると姿を消した。

「ぎゃあー！！突然猫が現れたぞ！」

「何やってるだ、ヨル」

「しかも二つ縛りの女の方は、全く動じてねえ！何者だ！」

「誰が………」

「待ったホームズ！」

「離れたまえ、ローズ！あいつには、地獄を見せてやらないと………」

「こんなところで騒ぎを起こしたらアウトよ！」

「もう、大騒ぎだけだな」

「貴方は黙ってなさい！ヨル!!」

「おいジーサン、收拾つかなくなってんぞ、どうすんだ………」

「……まさか、こんな事になるとは………」

ローエンも窓から惨劇を眺める。

窓の外を見ると、ローズが女と言われているいきり立つホームズを何とか引きずっていい。

「なるほど、これが王様ゲームか……恐ろしいな」
ミラが一人納得している。

「……………否定したいけど、否定出来ないよ……………」
そんなミラにジュードは、ため息を吐く。

こうして、王様ゲームは、幕を閉じた。

(ホームズのお母さんに会ったらぶん殴ろう……………)

ジュード達に新たな決意を生み出して。

仲良くなるろう

「はあ……酷い目にあつた……」

ホームズは、ため息を吐きながら、ボソリと呟いた。

流石にもう『ついんてーる』はとっている。

あれを付けて街を歩いたホームズは、心に大きな傷を負った。

「お疲れ、ホームズ」

そんな、ホームズにレイアが紅茶を差し出す。

先ほど、宿から貰ってきたのだ。

今、部屋には、レイアとホームズとヨルしかない。

他の面子は、それぞれの部屋にいる。

「誰か言ってくれてもいいじゃん」

「似合い過ぎてて、違和感なかつから……その、気づかなかつたんだ」

「そう……」

ホームズは、紅茶をちびちびと飲んでる。

「注目の的だったな。良かったじゃないか、人気者だぞ」

「励ましどーも。君の気遣いに涙が止まらないよ」

ヨルの言葉にホームズは、半眼で返す。

「ま、まあ、それはともかく……どうだった？一応恋人つなぎで、ローズと街を歩いたんでしょ？」

「どうって言われても……」

ホームズは、困った顔をしている。

何せ自分の格好が恥ずかしくてそれどころではなかったのだ。

「何かないの?! 仮にも女の子と手を繋いだんだよ！」

「いや、そう言われても……」

ホームズの態度にレイアは、ため息を吐く。

そんな事をしていると、アルヴィンが部屋に入ってくる。

「よ……って、何だもう格好を元に戻したのか」

「当たり前だろう……あんなのいつまでもしてたくないよ……」

ホームズは、元凶となったアルヴィンを睨みつける。

アルヴィンは、肩をすくめると話題を無理矢理変える。

「ま、それは、ともかく、何の話してんの、おたくら？」

「ホームズと、ローズ一緒に歩いたでしょ、手を繋いで」

「ああ、そうだな」

「その時の感想を聞いてたの」

「それで？」

「特に何もだつて」

「おたく、本当にモテたいの？」

アルヴィンが、半眼でホームズを見る。

ホームズも半眼で睨み返す。

「あんな格好で歩けば大体の人がそれどころじゃないだろう」

「というか……………」

そんな二人に構わず、レイアは、ホームズに尋ねる。

「前から聞きたかったんだけど……………ホームズつてさ、ローズの事をどう思ってるの？」

「どうつて言われても……………」

ホームズは、困つたように頭を掻く。

ローズが、ホームズの事をどう思っているのか？

そんなものは、明白だ。

けれども、ホームズがどう思っているのか、というのは正直微妙なところだ。

「十年ぶりにあつた友人だけ……………」

「…………まあ、ある程度は、予想してたけど……………」

レイアは、ため息を吐く。

「会えて嬉しかった？」

「当然だろう」

この質問には、ホームズは、ノータイムで返した。

「何てだったって、初恋の相手だもんなあ？」

「それは、もういい」

アルヴィンの言葉にもホームズは、ノータイムで返す。

若干頬が赤いのは、ご愛嬌だ。

ホームズは、ゴホンと咳払いを一つする。

「まあ、ローズがどう思っているのかは、知らないけれど、おれとしては、嬉しかった

よ」

「…………ローズも嬉しかったと思うよ」

レイアが控え目に主張する。

「だったら、もう少し感動の再会が良かったなあ……………何、飛び蹴りって、ハイタッチ

とかじゃないの、普通？」

「あくそう言えば、ホームズが勘違いする前に蹴ってたね……………」

その後のホームズの行動は、ともかく、前半は、確実にローズの方が悪い。

レイアは、そんなホームズを見て一つ思いつく。

「あのさ、ホームズ」

「何だい？」

「一つ思いついたんだけど」

「何を？」

「伝えてみたら？」

「だから、何を？」

「また会えて嬉しいよって気持ちをさ」

ホームズは、レイアの言葉を聞いて考え込む。

「……………伝わってない？」

少しシヨックを受けた顔をしながら、ホームズは、尋ねる。

「うーん……………というか、そう言う事は口で言ってもらいたいと思うよ」

レイアの言葉にホームズは、考え込む。

「ヨシ！分かった。じゃあ、いつてくるよ。ローズは、確か隣の部屋だよね？」

「うん、そうだよ」

レイアの言葉を聞くとホームズは、部屋から出て行った。

レイアとアルヴィンは、それを見送る。

「さて……」

「行きますか」

二人は、ホームズの後を追って部屋を出て行き、扉の影に隠れて、経過を覗き見する。

「ローズ！」

「な、なに？」

突然のホームズの来訪にローズは、少し驚き、読んでいた本から顔を上げる。

「君に会えて嬉しかったよ」

「はっ？」

時間が止まる。

ローズの冷たい視線が、ホームズに突き刺さる。

「ちよつとごめん……………」

ホームズは、ダッシュでローズの部屋から出て、元いた部屋に戻る。

「……………戻るか」

「そうだね」

レイアとアルヴィンは、元いた部屋に戻る。

するとそこには、膝を抱えて窓を見つめているホームズがいた。

「……………見てただろう」

ホームズの言葉に二人は、無言で頷く。

気のせいじゃなければ、声が震えている気がする。

ホームズは、二人の返事を受けると振り返る。

「全然ダメじゃないか!!見た? ローズのあの目! レイア! 君には分からないかもしれないけどね女の子にああ言う目を向けられる事がどんなに辛い事かわかってるのかい!!」

ホームズは、句読点が何処にあるか分からずいほど全力で叫ぶと、ゼーハーと息を大きく吸い込む。

「ああ……ドンマイ」

レイアは、迫力に押されて一応そう言うが直ぐに、ホームズを見据える。

「でもさ、突然会えて嬉しかったって言われても、困るよ普通は……」

ホームズは、レイアの言葉にピクリと固まる。

「そう?」

「そりゃあね……ホームズだって、今突然『会えて嬉しかった』なんてわたしから言われたらどうする?」

「君の頭を心配する」

「とても友人に向ける言葉とは思えないけど……まあ、ローズもそういう事だよ」

レイアの言葉を聞いて、ホームズは、ようやく納得した。

因みにレイアは、ホームズの奇行は、予想してなかったが、アルヴィンは、分かっていた。

「うーん……………ホームズは、ローズと仲良くなりたんだよね？」

「そうだね……………再会と同時に飛び蹴りを喰らわなくらいには……………」

ホームズの言葉にレイアは、考える。

「アルヴィン君、何かない？」

「ああ……………」

アルヴィンは、考える。

そこで、ふとある考えが浮かぶ。

その考えに気付いていない二人を少し哀れむ様に見てしまう。

(なんで、真っ先にこれが出てこないんだよ……………)

「褒めてみたらどうだ」

「は？」

「いや、だから、ローズの事を褒めてやったらどうだ？褒められて嬉しくない女なんていないだろ」

「なるほど……………」

ホームズは、納得すると同時に尊敬の目をアルヴィンに向ける。

しかし、直ぐに目が曇る。

「でも、ローズのいい所って何処だろう……………」

「…………おたく……………」

アルヴィンは、呆れた目で見る。

「待って…………えつと……………」

悩み出したホームズをアルヴィンは、無言でしばらく見た後、レイアを見る。

「レイア」

「なに？」

「前も見たことあるんだけど…………この光景」

「…………奇遇だね。わたしもだよ」

二人揃って似たような悩み方をし出しているので、レイアとアルヴィンは、ため息を吐く。

「…………ホームズ、レイアのいい所は？」

「元気な所、前向きな所、頑張り屋な所。ざっと、こんな所じゃない？」

「…………仲良いな、お前ら……………」

アルヴィンは、スラスラとレイアのいい所を出すのを見て、前回レイアが、ホームズのいい所をスラスラと言ったのを思い出した。

レイアは、引きつり笑いをしながらホームズに忠告する。

「ホームズ……もう少しローズの事を見てあげようよ……」

友達に褒められて嬉しくない訳がないのだが……ローズの事を考えると微妙である。

ホームズは、考える事を止めるとアルヴィンの手をガシツと握る。

「ご教授を！アルヴィン先生！」

「諦めんなよ！」

「だって、ローズのいい所出てこないよ！なかなか！」

「イジメから、庇ってくれたじゃないの？」

「その話をする、おれの罵倒も思い出しちゃうと思うんだけど……」

「アルヴィン君何か適当に任せた」

「おたくも諦めんなよ！」

「……ねえ、やつぱりやめないこれ……」

諦めた事を言うホームズに取り敢えず、チョコップを一発食らわせてから言う。

「もう、めんどくせーな！可愛いねとか、綺麗だね、とかぐらい、言つときゃあ良いんだよ！」

アルヴィンのアドバイスを聞き、ホームズは、悩む。

そして、悩んだ末

「……………うーん、ローズって、綺麗いかなあ？」

「……………本人の前で言うなよ」

「どっちかって言う则可愛いと思うけど……………」

「……………本人の前で言えよ」

「まあ、おれが『ついんてーる』つけた方が可愛いんだけどね」

「……………本人の前で言うなよ、絶対」

アルヴェインの言葉にホームズは、再び考え込む。

そんな中レイアが、思いついた様に手を叩く。

「じゃあ、もうまどろっこしいこと抜きで、二人で何処か買い物にでも行ったら？」

「ふむ……………悪くないね」

ホームズは、賛成の様だ。

「ヨシ！それじゃ、ちよつくら行ってくるよ！」

ホームズは、そう言つて部屋を出て行つた。

「上手くいくかな？」

「行動にオチがつくのが奴だからな………」

アルヴィンとレイアは、考える。

「行くか」

「そうだね」

「あ、ローズ」

「なに？」

ローズは、ホームズの声を聞くが本から顔を上げない。

先程の訳の分からんやり取りの事を思い出すとあまり、顔をあげたくない。

「一緒に買い物に行かない？」

その言葉でローズは、ようやく顔を上げる。

「どうしたのよ、突然？」

「いや、折角空き時間もある事だしさ……」

「ま、まあいいけど」

ローズは、そう言うと本を閉じる。

「で、何買うの？」

再び、ホームズは、固まってしまう。

買い物に誘う事に手いっぱい、何を買うのか全く考えていなかった。

「えーつと……」

ホームズは、早く何か言わなければと焦る。

しかし、焦れば焦るほど、ロクな案は、出てこない。

ホームズは、焦る事をやめなかった。

そして、答えをだす。

「おれのパンツを買いに行きたいんだけど………」

鈍い音が響き渡った。



「ホームズ、何か反省は？」

「いや、流石に今回は自分が悪いって、はっきりと分かりました」
レイアの問いにホームズは、頭のタンコブを触りながら答える。
本でしっかりと叩かれたのだ。

「ここまで、盛大なオチをつけるとは、思わなかったぜ」
アルヴィンもあきれ顔だ。

「……………まあ、こういう所なんだろうな」

ヨルは、ホームズの肩で馬鹿にした様にため息を吐く。

「……………さて、ローズとホームズが仲良くなる様に色々やって見たけど……………ホームズ、感想は？」

「遂に武器を使うようになったんだけど……………」

ホームズの目標は、『再会と同時に飛び蹴りを喰らわないくらい』の仲なのだ。

しかし、素手から、凶器^本を使うようになってしまった。

ホームズは、ため息を一つついて立ち上がる。

「まあ、取り敢えず、買い物には、本当に行こうかな。必要な物もあるし……………レイアとアルヴィンも来ない？」

「パンツを買いに？」

「いや、ちゃんと持つてるよ……………」

「テンパった時に真っ先に出てきた単語が、パンツって……………」

ホームズとアルヴィンの会話を聞いて、レイアは、少し呆れている。

「で、どうするんだい？」

答えが出ていない二人にホームズは、問いかける。

「ま、せっかくだし、行くか」

「わたしも！」

「ヨルはどうする？」

ホームズは、意地悪くヨルに尋ねる。

「流石、いい性格してるぜ」

悪態で返したヨルをホームズは、連れて外へと出て行った。



「それで、何を買いたいんだ？」

「ん………酔い止め。ほら、おれって、船酔い酷いから……」

ホームズは、頬を引きつらせながら答える。

船酔いには、思い出したくない事でいっぴいだ。

「……って、空中滑車があるでしょ。だから、酔い止めもなかなか効きがいいのが揃っ

てるんだよ」

ホームズは、そう言って空を行き交う空中滑車を見る。

「そんなに効く薬をどうして、もっていないんだ？ おたく、この街に来た事あるんだろ？」

「切らしてたんだよ……………」

ホームズは、ため息を吐く。

カバンの中にもいつも入れてあるのだが、切らしていたのだ。

まあ、今はそのカバンがないのだが……………」

「あ、あった。これだ」

ホームズは、お目当ての薬を見つけるとそのまま精算し、店を出て行った。

「後なんか買うものあるの？」

「うーん……………まあね」

レイアの質問にホームズは、そう言って小物を売っている店に歩みを進める。

ホームズは、その店に入るとハンカチを手に取り考える。

そんな中、レイアは、ある事に気付いてアルヴィンを呼ぶ。

「(アルヴィン君、これ、チャンスじゃない?)」

「(……………確かに……………ここでローズへのプレゼントを買わせれば)」

ここで、アルヴィンとレイアは、すっかり諦めていた『仲良し作戦』を再びやる事に決めた。

「ねえ、ホームズ」

「何だい？」

レイアは、ホームズを呼び止めるとイヤリングを見せる。

「こういう、イヤリングをとか、ローズに買ってあげれば？」

「こつちのネックレスとかどうだ？」

アルヴィンもそう言って、ネックレスを見せる。

しかし、ホームズは、一瞥するとハンカチコーナーから離れる。

「両方とも買わないよ」

意外な一言にレイア達は、言葉を失う。

そして、ホームズのダメさを改めて認識する。

ここで、買わなくて、いつ買うんだ。

そう思ったレイアは、少し語気を強めて詰め寄る。

「ちよつと、ホー………」

「髪留めの方がいいから」

「へ？」

ホームズの言葉にレイアは、喉まででかかった言葉を飲み込む。

「だから、髪留め。正確には髪留めの紐」

ホームズは、そう言って輪になって並んでいる髪留めを選ぶ。試しに黒色を手にとってみる。

しかし、直ぐにもとの位置に元に戻す。

「君も見ただろう？あの子髪を纏めてないんだよ」

今度は、やたら煌びやかなものを手に取る。

「イスラにもらった奴は、投げつけちゃったからね……」

「そうなの?!」

「うん。そこではつきりと決別してた」

レイアは、その場にいたから知らない。

しかし、気持ちは分かる。

「……やっぱり、持つてられないよね……イスラさんからもらったものだから……」

レイアは、闘技場でのローズとの会話を思い出す。

あの時、ローズは、宝物だといっていた。

しかし、宝物には、なり得ない理由が出てきてしまった。

「……ま、だからさ、代わりと言ってはなんだけど、髪留めを買ってあげたいんだよ

ねえ」

何てことはない。ホームズは、ホームズなりにローズの事を考えていたのだ。そう思うとレイアは、なんとなく微笑んでしまう。

自分たちが、ワザワザ手を出さなくても、良かったのかも知れないと思った程である。

「うーん……この色はないね」

ホームズは、そう言つて元に戻す。

「レイアは、どれがいいと思う?」

「ホームズが、選んであげなよ……」

やっぱり、もう少し世話を焼こうと思った。

こういう物は本人が選ばなくてはならないのだ。

レイアのアドバイスを聞くとホームズは、再び悩む。

「うーん……黒は、目立たないなあ………白は逆に汚れが目立つだろうし……」

ホームズは、そう言つて茶色の物を手に取る。

「ふむ……よし、これにしよう」

ホームズは、そう言つて清算した。

それを見ていたレイアは、ホームズに尋ねる。

「というか、ホームズ……ローズ連れてくれば良かったんじゃないの?」

そうすれば、好みだつて一発で分かつただろうに。

「値段を見て遠慮とかすることになるだろう？」

「……………いくらだったの？」

ホームズの言葉を聞いて、レイアは、恐る恐る尋ねる。

「————ガルド」

レイアは、血の気が引く。

「高い！そんな物買ったの？」

「おたく……………それは、一周回って重い……………」

アルヴェインも呆れ顔だ。

しかし、ホームズは、不敵に笑っている。

「ばれたらね。バレなきや、タダのプレゼントさ」

ホームズは、そう言つて髪留めの入った袋を店員から、受け取る。

「……………そうか……………ホームズは、こうやって、隠し事を増やしてくんだね」

レイアは、大きいため息をついた。



「ヤツホー、ローズ」

ホームズは、手を上げながら部屋に入る。

それに続くように、レイアとアルヴェインも入ってくる。

しかし、ローズは、本から顔を上げない。

先ほどの事を怒っているのだろう。

(き、気まずい……………)

レイアとアルヴェインは、同じことを考えていた。

「はい、どうぞで」

そんな他の面子に構わず、ホームズは、ローズに買ってきた物を渡す。

「なに……………これ？」

ローズは、戸惑いながら、紙袋を開ける。

中に入っているのは、ホームズが先ほど買った髪留めの紐だ。

予想外の事に、ローズは、目を丸くすると、ホームズの方を見る。

「あ、ありがとう……………」

ローズは、珍しく素直にお礼を言っていると、早速使ってみる。久々の一つ縛りだ。

「ど、どうかしら？」

ローズは、恥じらうように確認する。

「似合ってるよ、ローズ」

「いい感じだと思うぜ」

レイアとアルヴィンは、口々に褒める。

「ホームズもそう思うよね」

「んー……」

突然、そして、強引に話題をホームズは、話題を振られた。

「やっぱ、そっちの方がしっくりくるね」

しかし、特に困る様子も見せず、微妙な返事をする。

「……………ホームズ……………」

レイアは、呆れ顔だ。

せつかくだから、褒めればいいいいというのに。

ヨルも同様にため息をつく。

「そういう時は嘘でもいいから、似合ってるって言うもんだ」

「なるほど……」

ホームズは、そう言われてローズを見る。

「似合ってるね」

鈍い音が鳴り響いた。



「はぁ……」

レイアは、床で伸びているホームズを見る。

どこまで行っても決まらないホームズを見て、二人は、ため息を吐いた。

「つとに、こいつは……」

アルヴィンも同じような顔をしている。

ローズは、先ほどまで結んでいた髪を解いてブスツとした顔をしている。

「ローズ、あのさ……」

「……………」

完全にご立腹だ。

アルヴィンは、ホームズの首根っこを掴むと引きずり出した。

「取り敢えず、こいつは、俺が部屋に連れてくわ……………」

そうやってアルヴェインとホームズ、は、消えて行った。

詰まる所、『後は任せた』と言う奴だ。

ヨルもいるが、頼りになりそうにない。

レイアは、引きつり笑いをしてローズの方を再度見る。

「つけてみたら、ローズ？」

「似合っていないでしょ」

（拗ねてるよ……めんどくさいな……と言うか、わたしより年上だよね？）

レイアの方が泣きたくなってきた。

ヨルは、そんなローズを見ると、髪留めの紐を尻尾で、ひよいと掴み上げる。

「……………」

驚いているローズに構わずヨルは、尻尾でクルクルと回す。

「付けないんだったら、寄越せ。売って金にする」

「な……………」

ローズは、信じられないという顔を見るとヨルに殺意を込めた視線を送る。

「返しなさい。それは、私がホームズから、貰った物よ」

「ハア……………」

ヨルは、ため息を吐く。

そして、直ぐにローズに投げ返した。

「……だったら、使え」

ヨルに言われるがローズは、しばらく見つめる。付けようかどうしようか迷っているのだ。

「似合ってたよ、ローズ」

これは、間違いなく本心だ。

ローズにだってそれぐらい分かる。

ただ、その度に出てくるのが、ホームズの、あの間の悪い一言なのだ。

「……いや、気持ちは分かるけど……」

でも、とレイアは、続ける。

「ホームズは、嘘はつかないよ」

ローズは、口をへの字にして徐々に顔を赤くする。

冷めた目で見ているヨル。

そして、暖かい目で見ているレイア。

ローズは、ぷいっと目を逸らす。

「あーもう！分かったわよ！私も少し大人げなかったわ……」

そう言うところでは、髪を一括りにして、後ろに垂らす。

いつものスタイルの完成だ。

「これでいいでしょう!?!」

ローズは、赤くなった顔を隠すように後ろを向くと再び読書に戻った。

「ヨル君」

「なんだ、ムスメ」

「ホームズがモテない理由が、よく分かった」

「なにを今更」

レイアは、大きいため息を吐いた。

スキット

《考えてみると……》

レ「ホームズってさ、いつもハンカチいくつ持つてるの？」

ホ「どうしたの、突然？」

レ「いや、だつてさ、エリーゼに二枚、ローズに一枚、傷口を塞ぐのに使った一枚、んで、さつき買ってた一枚……気にならない方がおかしいよ」

ホ「まあ、ローズにあげた奴は帰ってきたよ」

レ「それにしたつてだよ」

ホ「まあ、だいたい、四、五枚かな」

レ「持ち過ぎだよ……」

《何の為？》

レ「何でそんなに持つてるの？」

ホ「いや、まあ、その……」

ヨ「あの小ムスメが、泣いていた時、ハンカチが使えなかったのを知ってるか？」
ホ「ちよつ、なに勝手に喋ってるんだい?!」

ヨ「んで、その事をこいつは地味に後悔しててな……だから、それ以降もう、そんな事がないようにと、ハンカチを大量に持ち歩いているんだ」

レ「へえー……」

ホ「そんな温かい目で見ないで!」

レ「なかなか、かつこいいじゃん!初めてホームズの事かつこいいと思つたよ……」

ホ「……褒めてくれてありがとう。君の友情におれは、涙が止まらないよ……」

《ローズの詠唱》

ティポ（以下、ティ）『裂け裂け切り裂け、出て来い刃……』

レ「豪雨で来い!聖なる光!」

ローズ（以下ロ）「……なにしてるの?」

レ「ローズの詠唱のマネ」

ロ「私の?」

レ「そう!」

テイ『なんか、変わってるよね〜』

ロ「貴方に言われたくないわ」

レ「と言うか、全部命令形だよね」

エリーゼ（以下エ）「どうしてですか？」

ロ「ああ、そっちの方が良かったのよ。最初は、お願いするつもりで言ってたんだけど、全然上手いかなかったから、いつそのこと、命令形でいつてみようって……」

レ「そしたら？」

ロ「大成功……なんか、釈然としなかったわ」

エ「色々あるんですね」

《コンプリート》

レ「せっかくだし、『ついんてーる』にしてみようよ……ローズ」

ロ「私?!レイアが、じゃなくて？」

レ「うん、だって、ローズ、わたしより髪長いじゃん」

ロ「だったら、エリーゼでも……」

エ「やです」

ロ「じゃあ、ミラ」

ミ「遠慮しておこう。ホームズがやった後にやる自信は、私にはない」

ロ「……………分かったわよ。というか、私だって自信ないわよ……………つとどう？これでもいいんでしょう？」

一同「……………」

ロ「な、何よ！似合っていないの？」

レ「似合い過ぎだよ、ローズ……………」

ロ「そ、そう？／＼／＼」

レ「……………若干のつり目」

テイ『（素直じゃない性格ー）』

ミ「（そして、『ついでにーる』か……………）」

レ「（……………全部揃ったね）」

ミ「本で読んだぞ。こういうのを『様式美』というんだらう？」

レ「ちよつ！声大きいよ、ミラ！」

ロ「貴方もね、レイア……………」

ミ「ふむ……………ホームズも呼んでみるか」

ロ「んな！な、な、何でそこでホームズが出てくるのよ！」

エ「……今までで、一番しつくり来ますね……」

《またか……》

エ「ホームズのお母さんってどんな人なんです……か？」

ローエン（以下J）「私も少し興味があります」

アルヴィン（以下ア）「まあ、俺も少し興味があるかな」

ホ「みんな、どんだけ、おれの母さんのことが知りたいんだい？」

テイ『何てったって、ホームズのお母さんだしねー』

ホ「………何だか、引つかかる言い方だなあ……」

ヨ「喋り方は、こいつそっくりだ」

ホ「というか、おれが母さんに影響されたんだと思うけどね」

ア「容姿は？」

ホ「えーっと、たれ目で茶髪、目の色は髪と同じ茶色だったよ。んで、ついでに言う
と、いつも眠そうな目をしてた」

ヨ「結構、若作りだったな」

ホ「そうだね。そんな容姿だから、よくナメられてたなあ……」

ア「具体的には？」

ホ「よく、ポーカーをやるうって言われてたよ。パツと見はどう見ても賢そうに見えるからね、カモにしようとしたんだろうね。イカサマをされたって言ってた」

エ「……………どうなった……………んですか？」

ホ「母さんの全勝」

J「……………どうやって勝ったんですか？」

ホ「イカサマ」

ヨルを除く一同「……………」

ホ「『私にイカサマをしようとするなら、脳みそが二つないと無理だね』ってさ」
ア「つくづく、恐ろし奴だな」

《ホームズとレイア》

レ「えーつと、コンピ部門一位だ、ヤッター……………でいいのかな？」

ホ「疑問に思ってる時点できつと間違ってるんだらうね」

レ「ま、まあ、それはともかく、コンピ部門に選ばれたんだからさ、ホームズ、なんか一言」

ホ「友情っていいもんだよね」

レ「……………出来れば、もう少し感情を込めてよ……………次いでになんか私との出会いについて一言」

ホ「衝撃的だったよ……………色んな意味で……………」

レ「……………どういう意味？」

ホ「内緒。男は秘密があつた方が格好良いからね」

レ「イラツときた……………ヤバイ、友情にヒビが入りそう……………」

《ローズとレイア》

レ「ヤッホー、ローズ」

ロ「どうも、レイア」

レ「どう、コンビ部門に出た感想は？」

ロ「どうって？」

レ「なんかあるでしょ!!これからも友情を深めたいとか、この票を貰って嬉しいとか
!!」

ロ「まあ、しいというなら……」

レ「うんうん」

ロ「……私と貴方の組み合わせって……そんな出来事、なんかあったけ？」

レ「……」

ロ「別に一緒に共鳴リソクしたわけでもないし……」

レ「ホームズ呼んでこよう」

ロ「ゴメン！待って！よく考えたら、すつごくお世話になってた！ありがとう!!」

レ「別に気にしてないから、いいですよーだ」

《結果発表》

ホ「人気投票により、おれとヨルが……まあ、選ばれました！同率一位です！」

ヨ「……裏話してもいいか？」

ホ「出来ればやめてほしいな……」

ロ「ねえ、私選ばれなかったんだけど……」

ホ「コンビ部門にいただろう？マーロウさんなんて何処にもいなかったからね」

ロ「……まあ、確かに」

ホ「だろう？」

ロ「ああ、そうだ。何処にもで思い出したわ……コンビ部門のことなんだけれど

……」

ホ「何？」

ロ「レイアがいたわよね……両方共に……」

ホ「……」

ヨ「……人気者だな、あいつ」

ガイアス王

目上の者には、礼儀を尽くせ

「いい加減そろそろ行かないか？」

宿屋で、待つことにしびれを切らしたミラは、そう提案した。

「ん〜……まあ、それもそうね」

ローズも賛成する。

いくら何でも時間がかかり過ぎだ。

色々とやって、時間を潰しては、いたがそれもそろそろ限界である。

「……さてと……なら、そろそろ行くかね、ほい、『ロイヤルストリートフラッシュ』」

「ああ！また、負けた！」

ホームズは、ローズに10、J、Q、K、A、のスペード五枚を机に広げる。

対する、レイアは、10のワンペアだ。

「何、ポーカーやってたの？」

ジュードの質問にレイアは、答える。

ホームズは、手を止めているレイアの代わりに、カードを片付ける。

「そうだよ。それがさ、ホームズ、強いんだよ。さっきから、ずっと、ストリートフラッシュユヤラ、ロイヤルストリートフラッシュユヤラ、の大役ばっか揃えるんだよ」

レイアの発言を聞いて、ジュードは、ため息を一つ吐いて頭を押さえる。

「……………ホームズ……」

「いや、どこで気付くかなって………軽いはずらのつもりだったんだけど、全然気付かなくてね……………」

「……………何の話？」

レイアは、不思議そうに首を傾げる。

ホームズは、トランプをしまうと、ジュードに渡す。

代わりにヨルが口を開く。

「イカサマをやっていたんだ」

レイアは、目を丸くするがすぐにホームズを睨む。

ホームズは、肩をすくめる。

「……………というか、常識的に考えろ。そんな手が、そうそう揃うわけないんだよ。そんなのが連続で揃ったら、絶対おかしいだろ」

ヨルが、さらに言う。

「ホームズ！どんなイカサマしたの！」

「何の話だい？」

「とぼけないで！」

「証拠がないだろう？」

そう、ホームズが真つ先にトランプを片付けてしまったのだ。

証拠も何も無い。

「……………なんか、コテンパンに負けた気がする……………」

イカサマを仕掛けられ、おまけに証拠も消されてしまった。

ため息しかでない。

「でもね、ホームズ！次は勝つ！」

「じゃあ、ポーカーは、やめたほうがいいね。君、顔に出るから」

正直に言うと、イカサマをしなくても勝てたのだ。

しかし、それはつまらないから、と言う理由で途中から、イカサマをしていたのだ。

イカサマがバレたら即負け。

ある意味緊張感は、半端じゃなかった。

「じゃあ、いつか、また、私が勝負の内容を提案するよ」

「はいはい。ほら、早く支度をしたまえ」

力強く意気込むレイアにホームズは、おびなりに返す。

レイアの支度も整い、全員は、城に向かった。



城門に一行が、辿り着くと、そこには、王に謁見しようと、大勢の人々が、列を連ねていた。

「こりゃあ、時間がかかる訳だねえ……」

ホームズは、納得するように呟く。

「あれ？ユルゲンスさん？」

ローズの声の前を見てみれば、そこには、城から出てくるユルゲンスが目に入る。

「おお、みんな来たか」

ユルゲンスは、にこやかな笑顔でやってくる。

「話を通ったんですか？」

ジュードの言葉にユルゲンスは、頷く。

「君たちの名前を出したら、すぐに許可が下りたよ。それどころか、向こうから会いたいと言ってきた。君たち何か心当たりは？」

ジュードとミラは、互いに顔を見合わせる。

「もしかしたら、我々の闘技大会の結果が、ガイアス王の耳に入ったのかもしれないな」
ユルゲンスは、とても嬉しそうにしているが、ジュード達は逆に渋い顔をする。

ユルゲンスは、そんな二人に構わず一行に告げる。

「それじゃあ、私は先にシャン・ドウに帰ってるよ」

ユルゲンスは、そう言ってその場から立ち去った。

「どう思う?」

「あまり、いい予感は、しませんね」

ジュードの質問に、ローエンは、あごひげを触りながら答える。

「……行くしかないだろう。エリーゼのこともあるしな」

エリーゼの実験のことだ。

「ミラ……」

エリーゼは、ミラの言葉に少し嬉しそうな顔をする。

それから、ホームズの方を見る。

「ホームズの言った通り……ですね」

ホームズは、肩をすくめる。

「だから、言っただろう。おれは、嘘は、言わないよ」

「……ホームズ、何か言ったのか?」

「……みんなエリーゼの事を心配してるよって、言ったの」

そう言うのと、ホームズは、エリーゼの頬を軽くつねる。

「まあ、この子は、全然信用してなかったけど……」

前と違い、痛くはないのだが、エリーゼは、むつとするとティポを飛ばす。

ホームズは、直ぐにエリーゼから、離れるとティポに向かって構える。

「やめなさい」

そんなホームズをローズから後ろから叩いて止める。

彼らを見てミラは、呆れると、先ほどから無言のアルヴェインを見る。

「……アルヴェイン、どうかしたのか?」

「ん、いや、別に」

「また、いつものか?」

アルヴェインは、ミラの言葉に静かに微笑む。

「あつたりまえだよ。だから、俺は魅力的なんだ」

ミラは、アルヴェインの台詞を聞いて考え込む。

「どういう意味だ?」

「ホームズが、よく言ってるでしょ。男は秘密があつた方がかっこいいって」

「おお、言ってるな」

ミラが納得するのを見届けると、ジュードは、アルヴィンを見る。

「……………アルヴィン、嘘は、嫌だからね」

ジュードの言葉にアルヴィンは、背を向ける。

「おたくらが、俺の事を信用してるってのは、知ってるよ」

アルヴィンの言葉を聞くと一同は、謁見の間へと、歩みを進めた。



「……………何してるの?」

謁見の間の前でなにやら、城の兵と話しているローエンとエリーゼを見て、ジュードは、不思議そうに尋ねる。

「いえ、王様に会うのに、ヌイグルミは、どうかと思ひまして」

ローエンは、微笑みながら答えると、エリーゼは、城の兵にティポを預ける。

「なるほど、ホームズは？」

「おれは無理だよ。君知つてて言ってるだろう」

何せ、ホームズとヨルは離れられない。

ジュードは、クスリと笑う。

そんなジュードにホームズは、頬を引きつらせる。

そんなやり取りの後、ホームズ達は謁見の間の扉を開ける。

広々とした、部屋。真ん中には、赤い絨毯が引いてあり、その先の台座の上に、一人の男がいた。

その出で立ちは、一目で王と分かるそれだ。

その近くには、見たことある大男がいた。

「ジャオさん?! どうして、ここに？」

ジュードは、驚いて声を上げる。

「儂は、フォーブが一人、『不動のジャオ』」

「まさか、貴方が……」

ローエンは、恐る様に呟く。

「フォーブ？」

「王直属の戦士です。あの方が、そのひとりだったとは……」

ミラの質問に、ローエンが、声を潜めて答える。

そんな事を話していると、玉座の後ろの扉が開いて男二人が出てきた。

黒を基本とした服と、そして、もう一人は、見ただけで王と分かる風格を持ち合わせた男だった。

黒髪の男は、ローエンを見る。

「これはイルベルト元参謀長殿。お会いできて光栄だ。」

ローエンは、黒髪の男を見て思わず息を飲んだ。

「……まさか、ア・ジュールの黒き片翼『革命のウインガル』」

ローエンは、驚きの声を漏らす。

「あの人もフォーブとか言う？」

そんなローエンを視界の端に捉えながら、ローズが首を傾げると、ホームズが、隣で耳打ちをする。

「そうだよ。伝説の聖獣にフォーブってのが、いるんだ。四つの武器があってね、爪を意味するプレザ、角を意味するジャオ、針を意味するアグリア、翼を意味するウインガルって、なっているんだ」

「……つまり、後二人いるって事？」

「そういう事」

ホームズの説明に納得すると、改めてガイアスの方をローズは、見る。目を逸らしたら、それだけで殺されそうな勢いだ。

それだけで、ローズは、今自分がとんでもない所にいる事を自覚した。

「お前が、ガイアス？」

ミラの質問に、ガイアスは、頷きもせず、ミラを見つめる。

「我が名は、ア・ジュール王ガイアス。よく来たな、マクスウエル」

ガイアスが紹介を終えると、次はウインガルが口を開く。

「お前達は、ガイアス王に謁見を申し入れたそうだな？」

ガイアス王の質問に、ジュールが答える為に口を開く。

でなければ、何しにきたのか、分からない。

「ア・ジュールで作られた、増^{ブースター}霊極が、既にラ・シユガルに渡っています。

もし、両国が戦争になってしまえば、取り返しのつかない事になってしまうと思うんです」

ジュールの言葉にガイアスは、目を細める。

「ほう。それを伝えるために来たのか」

何かしらの反応が、あると思った。

拒否か、協力の意思か。

しかし、ガイアスから、返ってきた反応は、そのどちらでもない。予想外の事にジュードは、言葉が続けられず、下を向いてしまう。

そんなジュードの言葉に続く様に、レイアが口を開く、

「それで、私達、ラ・シユガルの兵器を壊そうと思っっているんです。

そうすれば、ア・ジュールに進行出来ないから……協力して貰えませんか？」

レイアは、手を組んで頼む。

ウインガルは、そんな事は気にも止めず、感情のこもっていない声で尋ねる。

「お前達の話はそれだけか？」

「もう一つだけ」

ローエンが、最後の質問をする。

「かつて、王の狩り場にあった、増霊極ブラスターの研究所についてです」

ジャオが暗い顔をする。

そんなジャオをヨルは目ざとく見つける。

「(ふむ……当たりを引いたか)」

「(まだ、わからないよ)」

ホームズとヨルは、声を潜めて観察する。

ローエンの言葉を引き継ぐと、今度は、ミラが喋る。

「あの場所に親を無くした子供達を集めて実験利用しようとしていたのは、本当か」

ガイアスは、ミラの言葉を聞き、鼻で笑う。

「何を言いだすかと思えば……精霊のお前に関係があるのか？」

「私はマクスウエル。精霊と人間を守る義務がある」

ガイアスの言葉にミラは、臆することなく、時間を空けることなく返す。

しかし、ガイアスも引かない。

「精霊が人を守るだと……実に面白い事をいうな」

ミラは、更に顔を険しくする。

「お前は、王でありながら、守るべき民を弄んだ、違うか？」

「その件に関しては、私に一任されている」

「へえ、貴方が……」

ガイアスに代わり発言した、ウインガルをホームズが品定めするように見る。

ウインガルは、ちらりとそんなホームズの方を見ると再び続ける。

「そうだ。あの場に集められた者たち他に生きる術を知らない子供たちだった。あなた方思うような非道な行いは、していない」

「それを信じろというのか！」

ミラの劍幕にウインガルは、身じろぎひとつしない。

「行き場のない人間のガキ共をいよいよに使ったってわけか。いつの世も人間ってのは、無駄がないな」

ヨルは、肩で馬鹿にするようにウインガルを笑い飛ばす。

「何とでも言えればいい。所詮、シャドウもどきには、関係のない話だ」

「ああ？」

ヨルは、ギロリとウインガルを睨みつける。

ホームズは、それを目で制する。

そして、考える。

確かに、非道な行いは、なかったかもしれない、しかし、エリーゼは、一人ぼっちだと言っていた。

(……なんか、まだ、情報が足りない)

「でも、私は！」

そう、実験場にいたエリーゼは、ずっと一人だったのだ。

ホームズの疑問をジュードが、エリーゼの言葉を引き継ぐように声を荒げる。

「エリーゼは、ハ・ミルにずっと閉じ込められていたんですよ！それじゃあ……」

「非道だと？」

ガイアスが、ジュードにかぶせるように尋ねる。

「え……はい」

口を挟んだガイアスの口調は、尋常では、なかった。

その迫力に飲まれたジュードは、次の言葉が出てこない。

「ジュード、それ、本当？」

ジュードの様子にホームズは、構わず尋ねる。

「……そうだよ、ホームズが仲間になる前、エリーゼは、そういう目にあつてた」

ホームズは、一層眉をひそめる。

ガイアスは、そのままジュードに尋ねる。

「……お前は、民の幸せとはなんなのか、考えた事はあるか？」

「えっ……」

「人の生涯の幸せ、何を持って幸せというのか……お前は、答えられるか？」

そんなもの普通は考えはしない。

答えに詰まっていると、ミラが口を開く。

「己の考えを持ち、選ぶ、生きること」

「答えに詰まったジュードの代わりにミラがスラスラと答える。

「そ、そう。僕もそう思う」

ジュードは、便乗するように言うと、ホームズは、呆れたようにため息を吐く。

まあ、ある程度どう答えるかは、想像出来ていたのだが……

そんなホームズを目ざとく見つけるとガイアスはホームズに矛先を向ける。

「ならば、お前はどう思うのだ？ ホームズ？ そんな顔をするなら、何か考えがあるのだから」

突然話題を振られたホームズは、少し、眉を上げしれつとした顔で聞き返す。

『『民の幸せ』でしったつけ？』

「そうだ」

ホームズは、肩をすくめる。

まあ、答えは決まっている。

ホームズの考えている解答は、至ってシンプルだ。

普通に言えば、何も起こらない。

しかし、ホームズが普通に言うわけがない。

忘れがちだが、ホームズとヨルの巻き込まれた原因の八割がヨルで、二割がホームズなのだ。

その事を今ジュード達は理解する。

「愚かな王がいないことだと思えますよ」

残りの二割が発動した。

瞬間、謁見の間の空気が凍った。

昨日の友は、今日の敵

「……貴方自分が何を言ったのか、分かっている？」

静まり返った王宮内で、真つ先にローズが口を開いていた。

その場にいた人間は、戦慄している。

聞きようによつては、侮辱しているのと同義語だ、一国の王を。

ローエンとヨルを除いた面子は、空いた口がふさがらない。

これから、交渉をしようという相手に、ほとんど喧嘩を売つたようなもの言いにレイアは、ハラハラとしながらホームズを見る。

「口の利き方に気をつけるんだな、ホームズ……次、そんな事を言えば、首に頭が乗つていないと思え」

ウインガルは、静かに告げる。

その静けさには、殺気がこもっている。

指一本動かすのも

呼吸をするのも躊躇われる、そんな空気だ。

気のせいでもなくとも、ジャオからもその空気が出ている。

(なんて……緊張感……これが、四象刃！)

ローズは、改めて自分がいる場所を改めて実感する。

そんな空気の中、原因は、^{ホームズ}へらつと笑う。

この時、ホームズの正面に立っていたガイアスと四象刃^{フォーブ}は、気付く。

(目が笑っていない……)

「やっだなあー。そんなに怒らなくなっちゃっていいじゃないですか……」

一旦言葉を区切るとガイアスをその碧い瞳で見つめる。

その目に宿る光は、挑発、挑戦、そして、敵意。

ガイアス相手に一本も引かず、その全てを目に宿しガイアスを真っ直ぐに見抜く。

「ガイアス王は、違うんですから」

ホームズは、そう言つてより一層笑みを深くする。

相変わらず目が笑っていない。

つまりこういうことだ。

ここで怒ればガイアス王は、愚かな王だと言うことになるぞ、というある意味の脅しだ。

だから、このホームズの無遠慮な言葉にも四象刃フォーブは、どんなに憤りを覚えても、決してホームズを処罰する事は出来ないのだ。

自らの王を暗君と認める行動をとることなどの、決して許されるものではない。

「……なるほど」

ウインガルも、それを察したようだ。

忌々しそうにホームズを睨む。

ホームズは、ニヤニヤと笑っている。

化かし合いは、ホームズの方に旗が上がったようだ。

ガイアスは、ホームズの挑戦的な碧い目をしかと見据える。

訳がわからないエリーゼは、近くにいるローエンにしか聞こえない声で尋ねる。

「ホームズは、どうしてあんな事を言ったん……ですか？」

「(エリーゼさんが原因ですよ)」

「(私の?)」

ローエンは、そう言つてウインガルに目を向ける。

「(ええ。ウインガルさんのあの物言いと、エリーゼさんが、一人で寂しい思いをし

ていたという事実、この二つに我慢が出来なかつたのでしょう)」

簡単に言つと、仲間の為にホームズは、静かに怒り、喧嘩を売つたのだ。

一杯食わすために。

エリーゼは、ローエンの説明に背中しか向けていない、ホームズを見る。

「(ホームズは、何時だつて分かりづらいです)」

エリーゼは、少し不満そうな顔をして、自分に対してアドバイスした時の事を思い出した。

あの時も、もう少しちゃんと説明してくれれば、エリーゼだつて少しは違った態度を

取つただろう。

しかし、ホームズは、エリーゼに対して自分から気付くように仕向けた。その方が成長するからである。

しかし、相変わらずそのことは口にしない。

エリーゼの言葉にローエンは、仕方なさそうな顔をする。

「まあ、分かりづらいように行動してますからね」

ローエンは、そう言つてガイアス相手に一步も引かなかつたホームズを見ていた。

そんな二人の会話に構わずガイアスは、ホームズに言葉を続ける。

「ますます、母に似てきたな」

ガイアスの一言で、ホームズは、今まで浮かべていた笑みを瞬時に引つ込める。

「やめて下さい。おれは、あの人と違つて常識人です」

ホームズは、頬を引きつらせながら返す。

「……………平気で、王様相手に喧嘩売つた人を常識人とは、言わないと思うんだけど」

レイアは、近くにいるヨルに小声で話しかける

「(何を今更言っているんだ、ムスメ。あいつが非常識なのは、いつものことだろう)」

「(ヨル君が言つてもなあ…………)」

「(君たち、聞こえてるよ)」

彼らがそんなことを小声で話していると、ガイアスが口を開く。

「ふむ。まあ、ホームズのは、ともかく、マクスウエルの方では、俺は賛成しない」
そう言うと、ガイアスは、立ち上がる。

「人が生きる道に迷うこと……それは底なしの泥沼にはまる感覚に似ている」

「生きる事に……迷う？」

ジュードの言葉にガイアスは、頷く。

「そうだ。生き方がわからなくなったものは、苦しみから抜け出せずにもがき、より苦しむ」

ガイアスは、ホームズを見る。

「故に民の幸福とは、その生に迷わぬ道を見出す事だと俺は考える。

俺の国では脱落者は、出さない。

それが、この俺の王としての役目だ」

そう言うと、ガイアスは、ミラに手を差し出す。

「イル・ファンで、鍵を奪ったらしいな……それをこちらへ渡せ、マクスウエル」
言葉を切るとガイアスは、ミラに向かって手を伸ばす。

「断る。あれは人間の使えるものではない」

そう言って言葉を切る。

「人間は、世界を滅ぼす力を前に己を保つ事なんて、できない……………二千年以上見てきた」

ミラは、最後の方は、寂しそうに呟いた。

ミラの決意は、固い。

向こうもそう判断したのだろう。

「なら、あなたに聞くとしよう」

「あなた？」

ローズが首を傾げる、その横をアルヴィンがゆっくりと歩いていく。

「アルヴィン……………」

ミラは、睨みつけるようにアルヴィンの名を呼ぶ。

「嘘……………だよね？」

「悪いね、これもビジネスなんでね」

驚くジュードにこやかにそう言うと、アルヴィンは、ガイアス王の前にいく。

「サイテーです！」

エリーゼの言葉もアルヴィンには、届かない。

アルヴィンは、そのままガイアスに告げる。

「二・アケリアに、イバルっていう巫女がいる。恐らくそいつに渡したんだろう」

「ご苦労だった。さて……」

アルヴィンの報告を聞くとミラ達を見る。

「これで、マクスウエル様達にはもう用はない。お引き取り願おうか……」

ジリジリと城兵達が近づいてくる。

「……これは」

ローズが、刀に手をかけようとした瞬間、扉が勢いよく開き、青いを基調としたタイツに身を包んだグラマラスな女性が髪を揺らしながら入ってきた。

「大変です！」

その女性は、ガイアスの近くにいるアルヴィンを見て驚く。

「アル……!?!」

「よ。プレザ」

気さくなアルヴィンにプレザは、少し戸惑う。

しかし、直ぐに思い直すとガイアスに報告を続ける。

「ハ・ミルが、ラ・シユガルの進行を受けました！大精霊の反応アリとのことですよ！」

ホームズは、それを聞いて眉を潜める。

「四大達、解放されたの？」

「いや、それだったら、私に分かる」

ミラは、一度言葉を切るとハツとしたように声を上げる。

「まさか！新たな鍵を作り出したのか!？」

驚愕しているミラに関わらず、ガイアス王は、立ち上がる。

「全ての部族に通達しろ！開戦の準備だ！我が民を傷つけるものは、何人たりとも許

さん！」

そう言うと、ガイアス王は、姿を消した。

ヨルは、誰もいなくなった玉座を見て口を開く。

「…………ふむ、妙な雲行きだな」

「それは、こつちもだよ」

ホームズは、そう言つてウインガルを指差す。

「さて…………」

残されたウインガルは、城兵を集める。

「マクススウェルを捉えろ。精霊の主を捉えたとなれば、未だ反抗的な部族も従うかも知れん」

ウインガルの言葉と共に、城兵達がミラ達一同を取り囲む。どうやら、戸惑っている暇はないようだ。

「エリーゼさん！」

「ハイ！」

ローエンの声にエリーゼは、答えると、あらん限りの声で呼ぶ。

「ティポ！来て！」

ティポは、呼び声に答えると城兵の手の中で突然動き出し、相手を驚かせた。

『今の内だー、逃げろー』

その一瞬の隙を突いて一同は、走り出した。

ジュードとローズが最後に後ろを振り返ると、アルヴィンは、ヘラヘラと手を振っていた。

「……………覚えてなさいよ」

ローズは、歯ぎしりしながら、駆け出した。



「それにしても、ティポをあんな事に使うとはね……」

ジュードは、感心している。

「ええ、万が一の為に用意しておいたのです。ミラさんが信念を貫く時、必ず、何か起きますからね」

「……確かに、心配になるよね」

ローエンの言葉に、ジュードは、頷く。

「知ってますよ、そういうの、トラブルメーカーって言うんですよね」

「ふむ……」

エリーゼの言葉にミラは、考え込む。

『うわー！ミ、ミ、ミ、ミラ、聞いてたの』

「……ああ。ティポの意見、否定はしないが、それを言うならティポこそトラブルメーカーなのでは、ないのか？」

「それは……」

誰もフォロローしなかった。

「げー！フォロローなし？」

「まあ、今回は、ホームズもそうだけど……」

そう言つて、レイアは、ホームズを見る。

ガイアス相手に一步も引かずとんでもない悪態をついてきたのだ。

ガイアスが本当に愚かな王だったらどうなっていたのかと考えると背筋が寒くなる。

ホームズは、先ほどから最後尾で、後ろからやってくる城兵を蹴つたり何かを投げつけたりしながらはしっている。

そんなホームズを視界の端に捉えるとレイアは、先ほどからの、疑問を口にする。

「なんで、ホームズは、あんなこと言つたんだろう？」

「まあ、エリーゼさんが原因でしょう」

そんなレイアの疑問にローエンがエリーゼにしたのと同じことを話す。

話を聞いたレイアは、大きくため息を吐く。

「……………だからつて、ふつう、王様に喧嘩を売る？」

レイアは、思わずため息を吐く。

「……………あいつは、別に普通じゃないだろ」

ミラの言葉に側から聞いていたローズは、頬を引きつらせる。

「……………まあ、否定はしないわ」

そう言つて、ローズは、ため息を吐く

「見えた、あの扉よ！」

ため息から、回復したローズは、目の前の扉を指差す。
あれを抜ければ城外へと出る事が出来る。

そう、抜ければ、城外へ出る事が出来るのだ。

抜ければ……………

扉が一行の目前に迫った時、最後尾を走って会話に参加していなかったホームズが、スピード上げ先頭に躍り出る。

そして、扉を開かないように、両手で押さえる。

「何をしている？早く開けろ」

ミラは、怪訝そうに聞く。

何せ、後ろから兵士達が追ってきているのだ。

ふざけている場合では、ない。

しかし、ホームズは、扉を開かない。

「悪いけど、それは出来ない」

ホームズは、背を向けたまま、続ける。

その声には、全く感情がこもっておらず、何を考えているか分かりづらい。

戸惑う一行に構わず、ホームズは言葉を続ける。

「実はさ、闘技大会が始まる前に、アルヴィン経由で、ウインガルさんから、手紙を貰ってね………有事の際には、ガイアス王が、有利になるよう動けと言われてるんだ」
突然の告白に、ミラ達は言葉を無くす。

皆、ホームズが何を言っているのか分からなかった。

分かりづらいが、ホームズは、仲間の事を思っただけで行動していた。

闘技場の時も、エリーゼの痲癩の時も。

それには、皆気付き始めていた。

だからこそ、信じられない。

目の前で起こっているこの現実を一同は、理解することが、出来なかった。

「まさか……ホームズも」

意外にも真つ先に口を開いたのは、エリーゼだった。

エリーゼの言葉にホームズは、ようやく、彼らの方を振り返る。

「そう、よく分かったね、エリーゼ」

そう言うホームズの顔は笑顔だ。

いつもの如く胡散臭い笑顔で、相変わらず、何を考えているか、分からない。

そんな混乱の中にいる面々に関わらず、ホームズは、最後の、そして、駄目押しの一
言を告げる。

「悪いね、マクスウェル殿。おれ、ホームズ・ヴォルマーノは、貴方を裏切り、敵に
回る」

そして、胸の真ん中に手を当て、高らかに宣言する。

「そうだね、分かりやすく言うなら……」

『ここを進みたくば、おれを倒してからにしろ』 って奴だ。 覚悟したまえよ」

情けも容赦もありやしな

「ホームズさん……」

ローエンは、歯噛みをする。

考えてみれば、変なところはあった。

ガイアスは、ホームズのことを名前で呼んだ。

ローエン達は、呼ばないのだ。

何より、ウインガルは、ヨルが喋っていることに驚かなかった。

あまつさえ、シャドウもどきという言葉を口にした。

第一、一介の行商人が、フォーブと親しいと言うのも妙な話だ。

あげ出せばキリがない。

ミラは、ホームズを睨みつける。

信じられないのだ、今だに。

ホームズが、裏切ったことが。

闘技大会の時に、ミラの心配をしたり、ミラの代わりに大会に出ようとしたりとして
いる。

そして、仲間の状況を考えて自分の怪我を隠して、アルクノアと戦ったりしていた。そして、ホームズが裏切ったということが信じられないという理由がもう一つある。

「……ホームズ、何故だ？何故、私の報酬から背を向ける」

ホームズにとって、ミラの与える報酬というものは、ホームズの旅そのものだ。

ホームズの両親の故郷に行ってみたいという、欲望。

どこから、そんなものが来ているのか知らないが、ホームズにとっては、常に優先すべきものであつたはずだ。

それをここに来て裏切りと言う行動に出ることに、ミラは、動揺せざるを得ない。

この辻褄の合わない出来事にミラは、一つの可能性に辿り着く。

「……貴様、嘘をー」

ホームズは、肩を竦める。

「どう思おうと、君の自由だ」

ホームズは、そう言って一歩、歩みを進める。

「ま、おれも、義理と人情と報酬で生きてる、行商人なんだよ」

そう言ってホームズは、笑みを浮かべミラ達を見る。

「……報……報酬？」

その言葉にエリーゼは、呆然とする。

あのホームズの言ったことに頭が追いつかない。

ホームズは、ニヤリと笑って肩を竦める。

ホームズとの会話を終えたミラは、今度は、ヨルを観察する。

「貴様もホームズの方につくのか……」

「こいつが殺されると俺も死ぬからな……どつかの馬鹿共の仕掛けた封印の所為で」

ヨルは、ミラの視線を押し返す。

そのやり取りを見ていたホームズは、ヨルから、ミラ達へ視線を戻す。

「ところで、一人だけ、武器を構えていない子がいるんだけど……」

ホームズのは、そう言うって人差し指を立てる。

指の示す方向を辿ると、そこには体を小刻みに震わせいる、ローズがいた。

両手を胸の前で組んで刀を抜いてすらいない。

「で……出来るわけないでしょう……貴方は、私の昔馴染みで、幼馴染みなのよ……」

ローズは、震えるてを無理やり押さえる。

こんな事になるなんて、思いもしなかった。

こんな事になっても、信じたくなかった。

しかし、ローズの思いも虚しく、これは実際に起こってしまったのだ。

ホームズが、一体何を考えてこんな事をしているか、分かりもしない。

しかし、自分と幼い日に遊んだ、あのホームズと戦わなければならない。

そんな現実の前にローズは、何もできずにいた。

「おれとは、戦えないと？」

ローズは、何も言わない。

しかし、震えるその体が全てを物語っていた。

「だったら、戦場から、出て行きたまえ」

ホームズは、そう言うで一瞬で、ローズまで距離を詰め、容赦なく腹に蹴りを入れ、後

方に飛ばす。

「ローズ!!」

ジュードは、その光景に、目を疑った。

ホームズは、ローズを背負つて、自分が不利になるなかで、アルクノアと戦つたのだ。それさえなければ、もつと楽に戦えた筈なのにだ。

そして、ローズが目を覚ますまで、ずっと側にいた。

そんなに大切にしていた人をホームズは、何のためらいもなく、蹴り飛ばした。

「ツカハー!」

ローズは、大きく咳き込む。

自分に起きたことが全く信じられない。

絶望に満ちた目でローズは、ホームズを見る。

「言つたはずだよ。『覚悟したまえ』と」

ホームズは、そんなローズにそう告げると、彼女を見ていない。既に、次の敵になるであろう、ジュード達を見ようとしていた。

「ホームズーーーーー!」

そんな、ホームズにジュードが激昂し襲いかかる。

ホームズは、円盤の盾で、拳を止める。

「アルヴィンも……ホームズも！」

ジュードは、顔を険しくしている。

ホームズは、一旦距離を置くと足を上げる。

ジュードも同じように距離を置き、足を上げる。

「輪敦旋風!!」

両者の回し蹴りが、炸裂し、お互いの足が交差する。

「—————!」

そして、両者は弾かれたように離れる。

「ナイスだ、ジュード」

ミラは、その隙にホームズの後ろに回り、手を構える。

「フレア……」

「させるか」

ヨルは、そう言って、ミラの手に尻尾を巻きつけ攻撃を反らす。そして、そのままミラのバランスを崩し倒れる。

「……な?!」

初めて、ホームズ達と戦った時、ホームズとヨルは、ミラの魔技に大苦戦した。しかし、ヨルは、あつさり^{あつさり}と防いで見せた。

「人間は、成長するらしいな」

戸惑うミラにヨルは、見下ろしながら告げる。

「お前らに出来る^{出来}ることが、化け物^物に出来ない^{出来}とでも?」

ミラは、歯をくいしばると剣を構える。

ヨルは、魔技の発動のタイミングを掴んでいる。

今、この時、ヨルに対する切り札は、消えてしまった。

しかし、ミラは、諦めない。

これがマクスウエルの誇りなのだろう。

「だったら、共鳴^{リソナンス}だ! ジュード!

ミラは、そう言う^{いう}と光の剣を空に打ち上げる。

ジュードも、宙に飛び、それを掴む。

「カタラクトブレード！」

ホームズに照準を合わせると、一気に光の剣を伸ばす。

(手応えが……)

ジュードが、首を傾げていると光が消える。

しかし、そこには、ホームズは、いなかった。

「こつちこつち」

ホームズは、そう言つて手を振っている。

「な?!」

壁の上で。

何とも奇妙な事にホームズは、壁に立っている。

ジュードたちが、地面に立つように、ホームズは、壁に立っているのだ。

「どう言うこと？」

「その、マクスウェル様に言わせると、おれも化け物だからね。常識なんてクソ食らえって奴だ」

ホームズの足には、いつもの黒い靄がまとわりついている。

そして、そのままホームズは、壁を平然と走り、助走をつけてミラに蹴りを入れる。

「——！」

思わず、息がつまる。

「ミラー！」

ジュードは、ミラに駆け寄る。

そこで、ジュードは、首を傾げる。

あの黒い霧を纏ったホームズよ蹴りを食らった割には、怪我の程度が低い。

「それ……もしかして」

「ピンホーン。壁とか、天井とかで戦える分、いつものように攻撃力が変化する事はないんだ」

そう言つて、壁から降りる。

「ま、持続時間はそんなにいつものと変わんないけど、出し入れ自由。どう、一家に一台？」

「……また、本当の事を言っていないね、壁とか天井で戦えるだけじゃないでしょ？」

ジュードは、そう言つてホームズのポンチョを指差す。

「ポンチョが地面に向かって広がってなかったよ……」

ホームズは、驚くとニヤリと笑う。

「よくわかつたね」

「大方その状態で歩くところがホームズにとつての地面になるって所でしょ？」

ホームズは、パラパラと乾いた拍手をする。

ミラは倒れたまま顔を擡める。

「『常識なんてクソ食らえ』か………本当に、お前は……」

ホームズは、肩をすくめる。

「何を今更言ってるんだい？ マクスウエル殿？」

そう言うのと再び、ホームズは、ジュードに蹴りをかます。

ジュードは、何とかいなすと拳を固める。

「三散華!!」

ジュードの拳、一発目がホームズを襲う。

ホームズは、その拳を右足で弾く。

ジュードは、弾かれた事に構わず、そのまま二発目の拳を放つ。

ホームズは、足を入れ替えて、それをかかと落として叩き落とす。

最後の一撃をジュードが、執念で打ち込む。

しかし、

「残念」

ホームズは、ジュードの拳をかわし腕を掴む。

そして、そのままジュードを背負い投げをする。

(まずい!!)

ジュードは、何とか受け身を取るが、それでも衝撃が体に響く。

立ち上がるのに数秒のラグがある。

その隙を逃すホームズでは、ない。

すぐさま追撃を仕掛ける。

横たわる、ジュードにかかと落としをかまそうと足を上げる。

『ティポライジング!』

「おっとー!」

それを阻止するかのよう、エリーゼがティポに掴まりながら飛んできた。

振り回す杖にあたり、ホームズは、下がる。

エリーゼは、いつまでも飛んでいられず着地する。

ホームズも迷わず着地を狙う。

足を上げる回し蹴りの用意は、出来ている。

後もう一押し……

しかし、動きが止まる。

ホームズの脳裏によぎるのは、イスラに売られ、泣いているあの子だ。

「……………」

本当に一瞬の躊躇いだ。

たかが一瞬、されど一瞬。

戦場においては、その一瞬が命取りだ。

ましてや、かつて、指揮者コンダクターと言われたローエンにとっては、またとない反撃の機会だ。

「セヴァード・フエイト!!」

ホームズの周りをローエンの投げたナイフで、魔方陣を描き囲む。

そして、不意打ちの精霊術が発動する。

しかし、ホームズは、気付かなくとも、ヨルは、気付いていたようだ。

対処の遅れたホームズの尻拭いをする為、いつもの生首になると、精霊術を吸い込む。

「惜しかったな、ジジイ」

「ええ、そのようですね」

ジュードは、その隙に起き上がると、エリーゼを連れて、後ろに下がる。

「ローエン……結構キツイ」

ジュードは、正直、驚きを隠せない。

一応、ジュード達は、一度ホームズ達を退けたのだ。

その時と、ホームズは、比喩物にならない力で、ジュード達を圧倒している。

「ジュードさん、落ち着いて下さい。冷静に我々で対処すれば、勝てない相手では、ありません」

「冷静に？」

怪訝そうなジュードに、ローエンは、そう告げる。

「はい。ホームズさんは、先ほどから、ジュードさん達相手に、裏を描くような戦い方をしかけていました。……冷静さを失わせるように」

ジュードは、ようやく合点がいった。

確かに、ジュードは、動揺していた。

アルヴェインの裏切り、ホームズの裏切り、ローズへの容赦ない攻撃、そして、壁を歩くというとんでもない行動。

全部ジュード達を動揺させた。

そこをホームズは、突いたのだ。

相も変わらず、正々堂々とは、程遠い戦い方をする男である。

「冷静に対処すれば……」

「はい、どうにかかります」

「そんな余裕ないわ」

ローズは、そう言っ、自分たちの走ってきた方向を指差す。

そこには、武器を持った兵が走ってきていた。

ホームズで時間をかけ過ぎたのだ。

ローズは、二刀を構える。

「とりあえず、私が足止めするわ……ホームズ相手じゃ戦力にならないし」

悲しそうに悔しそうにローズは、呟く。

「なら、エリーゼとローエンもそっちに回って。精霊術があれば大分楽でしょ？」

ジュードの提案に、ローエンとエリーゼは、頷く。

「後は、僕とミラでやる」

そう言っ二人はホームズを睨みつける。

ホームズは、クスリと笑う。

「分かってるのかい？精霊術師を援護する人が足りないんだよ？」

ジュードは、レイアに頼もうと後ろを向く。

先ほどから、レイアは、戦闘に参加してない。

ローズでさえ、ああだったのだ。

友人である、レイアをホームズと戦わせるのは、酷というものだろう。

そう思いジュードは、レイアに声をかけようとする。

「鶏足刃の如く……シャープネス」

「レイア……？」

ジュードが怪訝そうな顔でレイアを見る。

レイアは、そんなジュードに構わず、詠唱を続ける。

「力を鎧え……バリアー」

「非霊壮活……クイックネス！」

身体強化の詠唱を終えると、レイアは、ホームズに歩みを進める。

「ジュード、ミラ。二人は兵士の方をお願い。ホームズは……」

レイアは、ホームズを睨む。

「私が倒す！」

レイアは、そう言つて棍を構える。

確かに、人数的には、そちらの方が、絶対にいい。

しかし、ホームズは、想像してるほど強くはないが決して弱いわけではない。

1人で戦うには、無理がある。

ジュードが迷っているとミラは、頷く。

「わかった。任せたぞ、レイア」

「うん」

「行こう、ジュード」

ジュードは、ミラに促されると、兵士の方へと向く。

「無理しちゃダメだよ」

「……それは、約束できないかな」

レイアは、につこり笑うとホームズと向き合う。

ジュードは、一抹の不安を覚えながら、兵士の方へと走っていった。

1人残ったレイアは、ホームズと対峙する。

「お前、馬鹿か？1人でやるには、荷が重いだらう」

「分かっているな、ヨル」

レイアは、ヨルの言葉にホームズを正面から見据える。

「友達が馬鹿やらかしたら、馬鹿やらかしても止める。それが友情つてものだよ」
迷いなく放たれたレイアの言葉にホームズは、少し微笑む。

「さすが」

その言葉を合図に二人は強く踏み込んだ。

乾棍一擲

「はああっ！」

先手を取ったのは、レイアだ。

クイックネスでスピードが上がっているため、桁違いのスピードで、ホームズを攻める。

レイアの棍が、後手に回ったホームズに向かって振り下ろされた。

ホームズは、盾で受け、両足から先ほどの黒い霞を出し纏う。

そして、その流れでレイアに蹴りを入れる。

レイアは、それをバックステップでかわす。

「伸びろー！」

レイアの棍が、伸びる。

「行くよ、散沙雨!!」

レイアは、連続で突きを繰り出す。

「ぐっ!!」

雨のような突きの応酬をホームズは、盾で堪える。

しかし、当たり前と言えども当たり前だが、全部は、防ぎきれない。

ホームズは、二、三発では、すまない量だ。

「うお!!」

そのうちの一発をモロに食らいヨルは、大きく吹き飛ぶ。

シャープネスで、攻撃力の上がつている攻撃をそれだけ食らうというのは、何を意味するか。

「やってくれるね……手加減抜きだ」

ホームズは、顔に付いた傷を拭う。

答えは簡単、体に響く。

「当たり前。手加減したら、ホームズに勝てないよ」

そう言う棍を構える。

「瞬迅爪!」

レイアは、ホームズに向かって行く。

ホームズは、レイアの攻撃を体を入れ替え躲す。

そして、向かってくるレイアの顔をホームズは、掴み、そのまま叩きつける。

「!!」

レイアは、突然見えた天井に戸惑う。

「その通りだ、レイア」

ホームズは、仰向けにひっくり返ったレイアを見下ろしながら、そう告げる。

「だよな」

レイアは、自分を押しさえているホームズの手の隙間から、キツと睨むとホームズの背中を蹴る。

予想外の反撃にホームズは、体制を崩し転がる。

そして、直ぐに体制を整える。

「嘘でしょ、アルヴィンだって、エリーゼの精霊術無しじゃ復活しなかったよ」

ホームズは、信じられないという顔でレイアを見る。

「忘れたの？わたしは、バリアーをかけてるんだよ」

レイアはゆらりと立ち上がる。

頭を押さえているところを見ると、全くのノーダメージというわけではないようだ。

ホームズは、レイアの言葉によく得心が行ったようだ。

「なるほどねえ……でも、それは、いつまで持つかな？」

レイアの精霊術の効果は、無限ではない。

いずれ時間切れが起きる。

「持つてる間に倒すよ」

レイアは、ホームズへの問いに平然と言い放ち再び棍を構える。

「そう言えば、ヨル君がさっきの攻撃で飛んで行ってから帰ってこないけど？」
そして、横薙ぎに振る。

自分の顔へと真つ直ぐにやってくる棍をホームズは、盾で防ぐ。

「さてね。生きているんだつたら別にどうだっていいさ」

そんなホームズに再びレイアの棍が今度は、逆方向から襲ってくる。

ホームズは、その棍を飛んでかわすとそのまま一回転し、踵落としを繰り出す。

レイアは、それをいなすと、着地したばかりのホームズを襲う。

「くっ！」

ホームズは、横腹に走る痛みを耐える。

刹那、動きを止めるとそのまま距離を詰め、回し蹴りを放つ。

「……つうつ！！」

予想外の反撃にレイアは、息を詰まらせる。

両者共痛みに耐え、一瞬身体の動きが止まり、二人は一度、後ろに引く。

そして、再び向かって行く。

「はっ！！」

レイアが棍を真つ直ぐホームズに向かって繰り出す。

ホームズは、レイアより迫る棍を睨みつけると、自分に届く前に踏みつけて動きを封じる。

そして、そのまま不安定の足場で回し蹴りを放つ。

ホームズの回し蹴りは、レイアの顔面を捉える。

バリアーのおかげでめちやくちやなダメージは無いが、それでもダメージは、ある。

「くっ!!」

レイアは、直ぐに視線を戻すと、棍から、右手を離す。

いつものように、蹴りで吹き飛ばされなかつた事が功を制した。

そのまま握り拳を固めるとレイアは、ホームズの顔面にそれをお見舞いする。

「躊躇なく、狙ってきたね」

レイアは、頬に付いた汚れを払う。

「……………まあね」

ホームズは、肩をすくめる。

レイアは、棍を持ち直しそんなホームズに向かって振り下ろす。

「そういう事してるから、モテないんだよ」

ホームズは、眉一つ動かさずに盾で受け止めると、棍を押し。

「グウで、人の事を殴る女の子が何を言ってるんだか……」

ホームズの手加減抜きの力押しに、レイアも負けずに押し返す。

「ローズも……やつてたでしょ？」

二人の鏝迫り合いは、どんどん激しくなっていく。

お互いがお互いの押しを歯ぎしりしながら、耐える。

「彼女も……モテない……だろうね……」

ホームズは、そう言うのとレイアの腹に蹴りを入れ、後ろに下がる。

「ぐっ!!」

レイアは、蹴られた腹を抑える。

バリアーが無ければ、この程度では、済まなかつただろう。

(絶対に剛照来なんかさせちゃダメだ!!)

でなければ、勝ち目は確実に消える。

「……………なーんて、考えてるんじゃないだろうねえ？」

ホームズは、壁に両足を付けながら言う。

そして、両足に力を入れ、奇妙な表現ではあるが、地面にいるレイアに向かって、高く飛び上がる。

「飛燕連脚!!」

「なっ!!!」

呆気にとられているレイアに構わず、ホームズの空中回し蹴りがレイアに繰り出された。

慌てて、棍を構えるが信じられない勢いで押される。

本来この技は、空中に相手を浮き上がらせたり、空中にいる相手に攻撃をしたりするものだ。

決して地面近くの空中で、回し蹴りを放ち相手に猛襲を仕掛ける技ではない。

(そうか!今のホームズにとっては、わたしの^{こっち}の方が空中なんだ!)

そう今のホームズにとっては足の付く場所がホームズにとっての地面になる。

つまりホームズは、壁と言う地面からレイアという空中に向かって飛び上がっただけなのだ。

「グウ!!」

とはいえ、タネが分かっても威力が下がるわけでは無い。

むしろ、今日一番厄介だ。

(剛照来をしてなくても、か……)

レイアは、想像以上の厄介さに歯噛みをする。

そんな事をしているとホームズは、足から霞を消し、今度は、地面に足を付く。

今、レイアとホームズの距離は、ゼロに近い。

(ヤバイ!)

レイアは、慌てて後ろに下がろうとする。

しかし、それを阻止するかのようにホームズが、レイアの足を踏みつけ動きを封じる。

身動きの取れないレイアの襟首をホームズは、掴むとそのまま宙に持ち上げ、そのま

ま……

「だああああ!!」

抵抗する暇も与えずに、壁に投げ飛ばす。

「いったあー……」

レイアは、壁に叩きつけられるとそのまま地面に転がる。

そして、気づく。

身体強化の呪文が切れかかっていることに。

「これは、本格的にヤバイかも……」

正直いつ切れてもおかしくない。

手のひらを見て眩くとふいにレイアの頭上に影がよぎる。

驚いて顔を上げると、そこには足を天高々と上げるホームズがいた。

「爆砕陣!!!」

「うわあ!!」

レイアは、思わず声をあげ、壁とは反対方向に逃げる。

しかし、思いの外範囲が広がった。

全ては躲しきれず、レイアは、弾ける床に巻き込まれてしまった。

「ぐっ!」

レイアは、思わず体制を崩す。

そして、悪いことは、更に重なる。

身体強化の精霊術が、このタイミングで全て解けた。

ホームズは、舞い上がる土砂の中で、レイアへと狙いをつける。

レイアは、この時ホームズの目と合う。

そして、危機を感じた。

（効果が切れたのがバレてる……）

この一瞬の危機感が、レイアにほんの数秒の隙を作り出してしまった。

ホームズは、その隙を見抜くと、精霊術の効果が切れたレイアに回し蹴りを踵から、彼女の脇腹に叩き込む。

「!!!」

レイアは、今度こそ大きく吹き飛ばされ、壁を背に戦っているホームズから離される。身体強化無しの一撃。

今で一番のダメージだ。

蹴られた腹、蹴られた拍子に叩きつけられた背中。

とんでもなく鈍い痛み、そして腹に叩き込まれたものによる、吐き気にレイア意識を失わないように堪える。

（やっぱり、強いよね……）

レイアは、棍を杖代わりに床につく。

正直な話、弱っていることを願っていた。

仲間を裏切るといふ行動に心を迷わせ、実力が出せていない事を願った。

しかし、ホームズは、微塵もそんな様子を見せない。

むしろ、ジュードに姑息な仕掛けを施す余裕すらあったのだ。

ホームズは、結局、仲間を裏切っても、昔馴染みを裏切っても、友を裏切っても、動揺なんかしなかったのだ。

(冗談じゃない!!)

レイアは、足が震えるのを感じながら、右足を地面につける。

そんな、悔しいことが、悲しい事があつてたまるか。

覚悟の出来ていないローズがいけないのでは、ない。

覚悟の出来ているホームズの方がおかしいのだ。

それを伝えるには、どうすればいい。

それは、間違っているとそう、理解させるには、どうすればいい。

(決まってる……)

レイアは、震える足を誤魔化しながら立ち上がる。

(言い訳なんてさせない勝利でホームズを倒す!!)

レイアは、棍を構える。

つまり狙うは完全勝利だ。

文字通り叩き伏せて、ホームズを止めるのだ。
この、愚かな行為を。

——「でもね、ホームズ！次は勝つ！」——

（今がその『次』だ！）

レイアは、決意を固めると、ある事に疑問を感じる。

（どうして、攻撃してこないんだろう？）

ホームズは、相手の隙を徹底的に突くタイプだ。

事実、ジュードが隙を見せればそこを全力で突こうとしていた。

（手加減している……いや、それはないね）

そんな奴では、ない。

なら、選択肢は、一つだ。

(罨を張っているね……)

イカサマ、騙し討ち、ルールギリギリの反則技。

ホームズの真骨頂は、そこにある。

(なら……)

レイアは、床についている棍を杖代わりにするのをやめる。
そして、本来の用途の為に真っ直ぐに構える。

完全勝利を目指す為に。

ここで疑問が浮かぶ。

完全勝利とは、なんだろうか。

答えは、人によって違う、これに限る。

つまり何をもって勝ちと感じるかは、人によって違うという事だ。

ホームズは、罊を仕掛けている。

レイアは、それに気づいた。

なら、次は、どうすればいい。

罊を見抜いてその裏をかい攻撃をする。

または、毘にあえてハマリ油断させたところを攻撃する。

(決まってる……………)

レイアは、ホームズに棍を真つ直ぐ構える。

「瞬迅爪!!」

そして、そのまま愚かにも真つ直ぐと突つ込んで行つた。

(毘にはまった上で攻撃をする。それが、わたしにとつての……………)

「完全勝利だー!!」

レイアの雄叫びと共に棍は、ホームズに向かって行く。

「守護氷槍陣!!」

ホームズの視界に氷の柱が現れ、レイアの姿を消す。

ホームズは、無言で氷の柱を見つめる。

守護方陣では、ない。

ル・ロンドでやった、対レイア戦で足止めを使ったのは、守護方陣だった。

マジシャンは、同じ人の前で同じタネの手品は、やらないという。

ホームズも同じだ。

今回ホームズが、レイアに対して張った罫は、ホームズが前回と同じ技を使うと見せかける事だ。

案の定、勝てると思いつ込んできた。

そして、守護方陣より威力が上の氷槍陣の方の餌食になった。

完全にホームズの予想通りの展開になった。

しかし、ホームズは、レイアの事を一つ勘違いしていた。

レイアは、勝てると思っていたのではない。

勝とうと思っていたのだ。

「アアアアアアアアアアアア」

突然の雄叫びと共に、氷の柱達が砕け散る。

ホームズは、目を丸くする。

そこには、ズタボロになりながら、そして、氷の柱を砕きながら、一直線に向かってくる、レイアがいた。

「瞬……迅……」

余りに突然の事でホームズは、盾で防げない。

「……爪!!」

レイアの渾身の突きが、ホームズの腹に命中する。

もう、身体強化の効果は切れている。

しかし、それでも突きの威力は、この前の時とは訳が違う。

レイアの決意と友を止めるという、ホームズとは違う意味の覚悟、その全てを乗せた一撃だ。

迷いだってある、ホームズを倒す覚悟に関しては固まったとは、言いづらい。

けれども、レイアのこの一撃は、何よりも力強かった。

「——ツカハ!!」

腹に食い込む棒。

思わずホームズは、えづく。

しかし、レイアの攻撃は、それだけでは、終わらない。

レイア・ロランドには、義務がある。

友として、ホームズを止めなければならぬ義務がある。

「……………活伸棍・円舞!!」

棍が伸びさながら舞うようにホームズを連打する。

そこから、派生するレイアの切り札、最強の技、

秘奥義

「ぐる……」

歯を食いしばって棍を回す。

「ぐる……」

もう一度回す。

「ぐるー!!!」

さらに、回し、ホームズに猛追をする。

レイアは、歯ぎしりをする。

何が悲しくて、友人にここまでしななければならないのだ。

しかし、手加減をすれば、やられるのはこっちだ。

全力をしなければならぬ。

「ぶんぶん回して……」

棍を空中に投げる。

「大……」

「……ジャンプ……!!!」

そして、空中でキャッチする。

「お母さん……直……伝!!」

ホームズに狙いを定める。

おれはホームズ、ホームズ・ヴォルマーノ

出会った時、ホームズは、大怪我をしていて、そして、若干酸っぱい匂いがした。後で聞いたら船酔いしていたらしかった。

何か恥ずかしいんだよ、その話

ホームズの初恋の話。

本人は、隠そうと必死だったが、バレバレだった。

問い詰められて、少し拗ねたように顔を背けていたのを覚えている。

怒ってる？

レイアと試合をして棍を思い切り真つ二つに折った。

それを弁償するため買い物を一緒にしたのだ。

若干高い物にしたが、そんなの気にしない。

——
君は本当にいい奴だね
——

ホームズをこれと言った時初めてとても嬉しそうに笑っていた。

次々と出て来るホームズとの思い出にレイアは、棍をぎゅつと握る。

外してしまいたい。

しかし、それは自分も、そして、ホームズも許さないだろう。

友情に馴れ合いなど不要だ。

(泣くな！)

涙を見せるな!!

わたしが武器にするのは、

この棍のみ!!!)

ピタリと狙いを定める。

「活伸棍・神楽ア—————!!!」

レイアは、最後の一撃も完璧にホームズに命中させた。

レイアの秘奥義を食らったホームズは、轟音と共に壁まで吹き飛ぶ。秘奥義により、辺りには、砂煙が舞う。

レイアは、油断なく棍を構える。

(頼むよ、わたしもこれ以上は……)

砂煙が晴れると……………

そこには、壁にもたれかかり、四肢を投げ出しているホームズが、いた。

レイアは、ホームズに勝つたのだ。

「何してるの、ホームズ……………」

完敗したホームズを見て、レイアは、ポツリと呟く。

ジュード達は、あらかた兵士を倒しレイアに駆け寄る。

「レイア!!」

ジュードが心配そうにレイアに近づき、治療する。

安堵からレイアは、膝を付く。

「へへへ、やっぱり、ホームズは、強いね……悔しいくらい」
レイアは、力無く笑う。

そして、先ほどから、ピクリとも動かないホームズを心配そうに見る。

「安心しろ、気絶してるだけだ」

いつの間にやらいたヨルは、レイアの心配を先読みして、そう言う。

突然のヨルの登場にレイア以外が身構える。

「俺が敵討ちでもすると思っただか？」

ヨルは、馬鹿にする様に笑うと尻尾で、まだ向かってくる兵士を示す。

「……とつとつと行つた方がいいんじゃないのか？」

ジュード達は何か言いたそうにしていたが、直ぐに扉へと走り出した。

レイアは、走ろうとするが、膝をついてしまう。先ほどのホームズとの戦闘のダメージ

ジがまだ残っているようだ。

「ごめん、直ぐに追いつく」

「でも……」

ジュードの心配そうな声にレイアは、首を振る。

そんなレイアにヨルが小袋を尻尾で投げる。

突然の事に戸惑いながらレイアは、何とかキャッチする。

恐る恐る袋を開けてみると、中は、回復道具のオンパレードだった。

「これ……」

「ホームズのだ」

レイアは、ライフボトルを飲み、ミラクルグミを食べる。

先ほどの状態が嘘の様に力がみなぎる。

「まあ、一個や六個消えたところであの馬鹿は、気付かないだろう」

ヨルの言葉に皆が各々食べたいグミを食べる。

ミラはそんなヨルに尋ねる。

「ヨル、お前はどっちの味方だ？」

「ホームズの敵、お前らの敵だ」

ヨルは、ニヤリと笑う。

「……らしい答えだな」

ミラは微笑む。

「だろ……ほら、扉を開けて進むといい」

「分かった」

一同は、扉を抜けていく。

そして、最後に、レイアが扉を抜けようとする。

「オイ」

そんなレイアをヨルが呼び止める。

レイアがヨルの方を振り返る。

そこには、後ろを向いている、ヨルがいた。

「やはり、足手まといと呼ぶには無理があるな……」

ヨルは、そう言つて、レイアの方を振り返る。

「見事だった、レイア」

レイアは、目を丸くする。

いつもムスメと呼んでいたヨルが、初めてレイアを名前で呼んだのだ。この事実にはレイアは、驚きを隠せなかった。しかし、直ぐに状況を飲み込むと、レイア微笑む。

「ありがとう、ヨル」

レイアは、そう言うともう、二度と振り返ることなく走り出した。

怒髪天を衝きあげる

「何とか、逃げたけど……………」

ローズたちは、門の外まで来た。

しかし、ここまで来るのに色々あり過ぎた。

仲間だと思っていた、アルヴィンに裏切られ、ホームズに至っては、ジュード達に容赦ない攻撃を繰り出してきた。

「やっぱり、アルヴィンは、嘘つきです」

エリーゼは、俯く。

「ホームズも…………折角仲直りしたのに……………」

スカートの裾をギュツと握りしめる。

まさか、ホームズが裏切るなんて、エリーゼも思いもしなかったのだ。

分かりづらかったとは、言え、あんなに自分の事を心配していた人間がいと簡単に、裏切った。

そして、仲直りしたばかりというのもダメメージが大きい。

「…………ホームズさんが、裏切るとは、思いませんでした」

先程のガイアス王との謁見を思い出していた。

あの時のホームズは、エリーゼの為に、仲間の為に、喧嘩を売っていた。まさか、あれもこの為にやった事なのか？

ローエンにも分からなかった。

『アルヴィンをダンザイしろー！ホームズも引きずり出せー！』

テイポの言葉に、ローエンは、髭を触る。

「何か、事情があるのかと思いましたが、今回ばかりは……」

ローエンは、考える。

「何が僕が信じてるのを知ってるだ……アルヴィンも、ホームズも!!」

ジュードは、吐き捨てるように喋る。

次の瞬間、扉の降りる音がする。

城外へと続く最後の扉が閉まる。

「城外に逃げたぞー」

兵が追ってくる気配がする。

恐らく、ホームズが気絶しているのを見つけたのだろう。

ローエンが、急いで扉を調べる。
すると、近くに妙な機械がある。

「どうやら、ここにマナを注ぎ込めば、門が開くようです。

ただし、七個とも近いタイミングでやらなければなりません」

ローエンの言葉にジュードが頷く。

「ガンダラ要塞の時と同じだね」

「ガンダラ要塞？」

レイアは、不安げに首を傾げる。

「……何それ、聞いてないわよ」

ローズも不安げだ。

「大丈夫ですよ、精霊術と要領は、一緒です」

ローエンの言葉に二人は、戸惑いながら頷く。

「……分かった」

「……やってみるわ」

二人の返事を聞くとミラが口を開く。

「時間がない。機会チャンスは、一度だけだな」

その言葉を合図にそれぞれが持ち場に着く。

ローズは、言われた通りに手をかぎす。

今回、自分は、全く役に立っていない。

何としてもここでケジメをつけなければならぬ。

ローズは、更に気合いを入れるとマナを注ぎ込む。

そんなことをしてる間に、ジュード、エリーゼ、ミラ、ローエンと着々と終わっていく。

「……………」

ローズも最後にマナを注ぎ込み終える。

「出来た」

しかし、これで、全てではない。

まだ、レイアが残っていた。

全く色が変わることのない機械にレイアは、涙を堪える。

「……………せつかく、足手まといじゃないって言われたんだ……………それを裏切りたくない！」

期待を裏切るのは、確かに辛い。

しかし、それ以上に辛いのは、評価を裏切ることだ。

そんなレイアを嘲笑うかのように、機械は、全く色を変えない。

「どうして、かわらないのよ!!」

レイアがそう嘆くと、ミラの手が添えられる。

「ミラ……………」

「…………落ち着け、レイア。お前が人より劣っているなんて事は無いのだから……………」
ミラの方を涙目で見る。

「あの時、ホームズをお前は倒した。だからこそ、ヨルも認めたのだろう」

「……………聞いてたの?」

「さっきの言葉聞けば分かる」

レイアは、ミラの言葉に涙を拭う。

ミラは、それを確認すると、表情を引き締める。

「さあ、やるぞー!」

二人は、手をかざすと更にマナを注ぎ込む。

「はあああああ!!」

すると、すぐに色が赤へと変わる。

赤に変わると、連動して扉が開く。

「早く!!」

ジュードの言葉に全員その扉を駆け抜けた。

ローズは、後ろを振り返ろうとするが、何とか堪える。

「……馬鹿」

ローズは、悔しそうに呟くと再び駆け出した。



「私を置いて先に行くなんて、そんな奴滅多にいないわよ」

青いタイトルの女、プレザは、そう言って一行を見る。

「なるほど、どうやら、ホームズは、ちゃんと仕事をしたみたいね。さすが」

「貴方、一体……?」

「あら、気になっちゃう? やっぱり女の子よね……」

ふふふとからかう様にプレザは、ローズを笑う。

ローズは、それを取り合わず質問を続ける。

『『プレザ』って事は、ガイアス王の部下?』

「正解」

ローズの質問にプレザは、どうでもいいように手を叩く。

「……イル・ファンから、脱出した私達は、最初から狙われていたわけか……」

ミラは、腰に手を当ててプレザに言う。

「ニ・アケリアじや、アルが、陛下に貴方達の情報を売ったのよ」

ジュードは、それを聞くと悔しそうに口を噛む。

「アルヴィンは……最初からあなた達の仲間だったんだね」

ジュードのその言葉を聞くとプレザは、先程までの笑みを引つ込める。

「やめて。あんな男……仲間でもなんでもないわ」

その迫力に皆は、言葉を失う。

それを察するとすぐにまた笑顔をつくる。

「……ふふ、私達の関係は、貴方達にお任せするわ」

そう言って、プレザは、ジュードを見る。

「……アルは組織を渡り歩く根無し草の一匹オオカミよ、誰にも心を許さない、信じたほうが悪いわ、ボーヤ」

話が終わると今度は、ウインガルが口を開く。

「戦になれば、クルスニクの槍が最たる脅威となるのは、明白。それがわからぬマクス

ウエルでは、ないだろう」

「お前らの縄張り争いに手を貸すもりはない」

ミラは、腕を組む。

「アレを手によればお前達には悲惨な結末が待っているだろう」

ミラの言葉に顔をしかめると、刀を構える。

「随分と上から見られたものだな」

ミラも刀に手を掛ける。

そんなミラをローエンが手で制する。

「お辞めなさい！戦功者と名高い貴方もその誉、剣で得たわけではないでしょう」

ミラが刀から手を離す。

「若さが見誤らせているのでは？」

ウインガルは、表情を崩さず、刀を構える。

「イルベルト殿、それが貴方の限界……古い……故に間違い……逃げ出す」

ローエンは、言葉に詰まる。

そんなローエンに代わり、今度は、ローズが口を開く。

「ねえ、ウインガルさんて言いましたよね……」

ローズは、真つ直ぐに見据える。

「答えて、ホームズは一体何で貴方達に味方したの？」

「ああ、簡単な事だ。あいつは、私達に恩があった」

「恩？」

「そうだ。人によっては、馬鹿馬鹿しいの一言で済ましてしまうだろう。

だが、ホームズにとっては、特別に恩義を感じるものだったのだろう」

何処か遠くを見つめるウインガルにローズは、首を傾げる。

「それって一体……」

ローズの質問にウインガルは、ローズ達を見る。

「ここには、奴の親の墓がある。余所者である、あいつの親の墓を置くことをガイアス王と私達が許可したのだ」

その言葉に一同は、言葉を失う。

「……………ホームズのお父さんのお墓が？」

「そうだ」

ローズは、目を丸くする。

エリーゼが今度は、ウインガルを見る。

「そんな……………お父さんのお墓があるなんて、私、聞いてません！」

「言えるわけないだろ、自分が裏切るといふようなものだからな」

エリーゼの啖呵をウインガルは、一蹴する。

エリーゼは、何も言えなくなつて、押し黙る。

そんな中、ウインガルの答えにより、ローズの頭の中にある言葉が浮かび上がる。

——ま、おれも、義理と人情と報酬で生きてる、行商人なんだよ——

「『義理と人情』……………そういうことだったの……………」

ローズは、ギリっと歯ぎしりをする。

一体、どんな報酬を貰ったのかそちらにばかり気が行ってしまいが、そうではなかった。

ホームズは、ガイアス王達から受けた恩義を返すために、ミラ達を裏切ったのだ。更に腹の立つことに、ホームズは報酬で裏切ったとジュード達を勘違いさせた。

理由は、単純。

ホームズを倒すということに対して罪悪感を感じさせないためだ。

ローエンの感じた違和感は、全てここに通じる。

つまり、裏切りたくて裏切った訳ではないのだ。

ホームズのあのちぐはぐな行動は、全てここに繋がる。

エリーゼの為にとんでもない啖呵を切ったのも、ミラを庇おうとしたのも、ローズを背負って無茶な戦いをしたのも全部本当のことだった。

ホームズ自身も裏切りたくはなかったのだろう。

しかし、ホームズは、仲間と恩どちらを取るかで、悩み、そして、恩の方を取ったのだ。

ホームズという男はそう言う奴なのだ。

ローズは、ホームズの気持ちを考えていたたまれない気持ちになる。

そして、声を震わせながら、ウインガルを見る。

「じゃあ、貴方達はそこにつけ込んで……」

「そういう事になるな」

ローズの中で何かがプチンと切れた。

ローズは、その言葉を合図にウインガルに斬りかかった。

ウインガルは、それを防ぐ。

「ローズ!!」

突然の行動にジュードは、思わず叫ぶ。

「よくも……よくも……よくも!!」

ローズは、ギリギリと刀を押す力を強める。

こいつらは、ホームズの弱みにつけ込んで利用したのだ。

最も付け込んで欲しくない弱みに。

許せるわけがない。

それと同時に自分自身も許せない。

どうして、見抜けなかった。

嘘は何一つ付いていなかったというのに。

騙すことが得意だって知ってたはずなのに。

どうして、自分は、そんなホームズの気持ちに気付けなかった？

どうして、自分は、そんなホームズを止める覚悟すら持てなかった？

許せなかった。

「許せる………ものか……!!」

激情と共にローズは、刀に込める力を一層強める。

ローズの二刀とウインガルの一刀、三本の刀がギチギチと異様な音を立て始める。

「うるさい」

ウインガルは、そう言うのとローズを押し返す。

ローズは、思いがけない力に思わず転んでしまう。

そんなローズにウインガルは、続ける。

「だいたい、あんな奴を信じたお前らが悪い。

よくもまあ、あんな胡散臭い男を信じたものだ」

「……」

ローズは、ウインガルを睨みつける。

「あいつは、自分の事を全く話さない。そんな奴をどうして信用できる」

「……」

「いずれ遅かれ早かれ、こうなる事は分かっていただろう」

「……そんな事ない」

ローズは、立ち上がる。

「……？」

「そんな事、思わなかった。信じてた」

「何故？」

ウインガルの問いかけに、ローズは、悔しそうに呟く。

「……理由なんてない」

「だから、裏切られるんだろうな」

「黙れええ——！！」

ローズは、地獄の底から響くような雄叫びをあげ、激怒の刃を再びウインガルへと向けた。

氷水を浴びる

「ん？」

ウインガルは、懐から出てくる光を疑問そうに見る。

「なるほど、リリアルオーブか」

ウインガルは、鬼の形相で刀を押すローズを見る。

「貴様程度の奴がそれをどこで手に入れた？」

「私の師匠からもらったわ」

つまり、マールロウから貰ったのだ。

「……そうか」

ウインガルは、ローズを押し返し、大きく後ろに下がる。

「このまま戦うのは、得策では、なさそうだ」

ウインガルは、目の前で手を交差する。

「はああああ!!」

突然ウインガルの身体が光り始めた。

そして、それが振り払われるとそこには、先ほどの黒髪が嘘のように白く輝く、ウイ

ンガルがいた。

「な、何あれ！」

レイアは、ウインガルの突然の変化に驚いている。

ミラは、眉を潜める。

「マナが、急激に……………」

その理由にジュードが思い至る。

「増^{ブースター}霊極?!」

「どういうこと?!」

『なんだ、おまえー!』

エリーゼとティポも驚きの声を上げる。

《エリーゼ! 誰に向かってそんな口を聞いている!

先輩には、敬意を払うもんだ!》

「言葉が……………」

ジュードは、怪訝そうに見る。

「これは、……………ロンダウ語?」

ローエンには、何の言葉だか分かったようだ。

《マクスウェル。捕らえるつもりだったが、殺した方が早そうだ》

ウインガルは、そう言うと、ミラに飛びかかろうとする。ミラは、剣で受ける為構える。

《馬鹿め！》

ウインガルは、ミラを飛び越えローエンに狙いを定める。

精霊術師を狙うのは常套手段だ。

(速い！)

ローエンも予想していなかった訳ではないが、想像を上回るスピードで来た為反応が遅れてしまったのだ。

しかし、ウインガルの刀がローエンに届くことはなかった。

《貴様……！》

ウインガルの刃をローズが二刀を交差させ防いでいた。

「貴方の相手は私よ……」

ローズは、そのままジュード達に声をかける。

「ジュード！そっちは頼むわ。こいつは……」

ローズは、そう言うと、そのまま、押し返し、半身になる。

「私がやる！」

そう言う切先を真つ直ぐ相手に向ける。

「散沙雨!!」

ローズの無数の突きが、ウインガルを襲う。しかし、攻撃はそれだけでは終わらない。

「秋沙雨!!」

更に、剣撃を加える。

だが、ウインガルは、それをたった一本の刀で全て弾く。

「…………ちい!」

《今度は、こつちの番だ!》

ロンダウ語でそう言うと今度はウインガルの剣撃の嵐がローズを襲う。

「こなくそ!」

ローズは、ウインガルの剣撃の嵐を二刀をでいなし、弾き、反撃の気配を伺う。二人の戦いは、剣撃の打ち合いは、苛烈を極め文字通り、火花を散らしていた。最早目で全てを追うのは不可能である。

(…………ダメだ! 決め手に掛ける!)

拮抗は、している。

マールロウの指導の賜物だろう。

あの、フォーブの、更に能力を底上げしている、ウインガル相手にローズは、一歩も

引いていない。

しかし、所詮拮抗しているだけなのだ。

勝ちの一手に後一つ届かない。

「ローズさん!!」

ローエンの声にローズは、ウインガルの正面から外れる。

「フリーズランサー!!」

ローズが横に移動すると、ローエンの精霊術が、氷の槍となって、ウインガルに襲いかかった。

《グウ!!》

ウインガルの声が雪煙の中に消える。

「ローエン!こいつは、私が……」

食ってかかるローズにローエンが厳しい視線を送る。

その迫力にローズは、思わず黙る。

「頭を冷やしなさい、ローズさん。今しなければならぬことはなんですか?」

「ウインガルを倒すこと」

「それは、二人では出来ませんか?」

「……そんな事ない」

ローズは、ようやくクールダウンする。

ローエンは、にっこり微笑む。

フリーズランサーによる雪煙は、晴れ始めている。

ゆらりと起き上がるウインガルがわかる。

ローエンは、真っ直ぐにウインガルに刀を構える。

「では、一緒に頑張りましょう」

ローズは、頷くと刀を大きく振り被る。

二人のリリアルオーブが輝き始める。

「ローエン！」

「了解しました！」

二人のリリアルオーブが大きく輝く。

ローズの二刀をローエンの精霊術の冷気を纏う。

冷気により、元々の白銀の刀が更に白く輝く。

「絶氷刃!!」

ローズの二刀から放たれる二つの氷の斬撃が、ウインガルを襲う。

起き上がりにもう一度技をくらいウインガルは、大きく吹き飛ぶ。

「やった……う？」

ローズは、怪訝そうに様子を伺う。

「ローズ!!」

ジュードの声にローズが振り返る。

「遅い! ブルースファイア!」

プレザの精霊術が完成し、ローズの頭上に形成されている。

「しまっ……………」

そう思った時は遅かった。

その水泡は、ローズに向かって一直線に落ちていった。

《ざまみろ》

水泡が落ちた瞬間、先ほどの攻撃で再び起きた雪煙を刀で払いウインガルが姿を現す。

ローズの膝を付いた姿を確認しようと水しぶきが消えるのを待つ。

しかし、そこにいたのは、膝を付いた惨めなローズではなかった。

凜として立つ勇ましいローズだった。

「……………」

プレザは、何故という顔をする。

対照的にローズは、にやりと笑う。

「助かったわ、ローエン」

「いいいえ、女性を守るのは紳士として当たり前ですよ」

ローエンがギリギリのところリソックで共鳴による、オートマジックガードにより、精霊術のダメージを軽減したのだ。

「なるほど」

ローズは、少し微笑むと、ウインガルまで跳躍し、一步で距離を詰める。

「仕切り直しよ」

そう言うのと、踏み込んだ足を軸足にして回る。

「円閃牙!!」

遠心力で更に威力の増した二刀の攻撃をウインガルに叩き込む。

ウインガルは、突然の事に驚いたもの、防ぐ。

そして距離を空ける為、ローズの腹を蹴る。

「——っ!!」

ローズは、後ろへ押される。

しかし、歯ぎしりをするとウインガルが攻撃を仕掛ける前に、体勢を立て直すとそのまま、突っ込む。

「……ヌルい蹴りね。どっかの誰かさんとは、大違いだわ」

刀を持ったまま、両手を合わせる。

「獅子戦吼!!」

ローズの猛攻にウインガルは、なす術もなく、後ろに吹き飛ばされる。

《ちっ……魔神剣!》

「打ち返す!」

ローズは、地面から宙に向かって刀を振る。

「魔神剣・双牙!!」

ウインガルの斬撃をローズの一つの斬撃が打ち消し、もう一つの斬撃がウインガルを襲う。

《舐めるな!》

ウインガルは、空中に飛び上がる。

《鳳凰天翔駆!!》

炎を纏いローズに突撃する。

「地砕昇！」

ローズは、地面を刀で叩きつける。

それにより、石畳みが砕け土煙が巻き上がる。

《それで防いだつもりか！》

ウインガルは、土煙の中にはためく、羽織りを見つけると、ウインガルは、構わず、突き進む。

そして、見事捕らえる。

しかし……………

(手ごたえがない……………)

土煙が晴れると、そこに現れたのは、

刀に刺さり風で、はためくローズの羽織りだった。

《まさか……》

思わず、後ろを振り返る。

そこには、所々土で汚れ、そして、煤で汚れている、ローズが刀を振りかぶっていた。

本当は、黙っているつもりだったが、ばれてしまえば、仕方がない。

「はあああああ!!!」

思い切り叫んで力と気合いを入れる事にしよう。

ウインガルは、それを防ぐ。

しかし、勢いまでは殺せず、刀で防いだまま、大きく吹き飛ばされた。

《くそ!!》

ウインガルは、直ぐに起き上がるとそのまま突撃をする。

《散沙雨!!》

刀が雨となって、ローズに襲いかかる。

しかし、ローズは、刀の腹で受ける。

一つ一つ、丁寧な、そして、素早くウインガルの攻撃を全て防ぎきる。やがて、ウインガルの攻撃が止まる。

ローズもウインガルの攻撃が止まると二刀をだらんとだらしなく下げる。

「……終わり？」

ローズは、下にだらんと下げた二刀に力を込める。

「なら、次ば私の番ね！」

ローズは、下げていた刀を頭上高く振り上げ、そこから連続技へとつなげていく。

「爪竜連牙斬!!」

ローズの二刀による連続攻撃が出る。

ウインガルもさるものローズの攻撃を全て防ぐ。

とはいえ、防いでいるだけでは、ない。

《調子に乗るな!》

ウインガルは、ローズの刀を一本弾き飛ばす。

弾き飛ばされた刀は、宙を舞いローズの背後に落ちる。

ローズの刀が一本になってしまった。

ローズは、後ろに下がる。

ウインガルは、それを逃さない。
下がるローズに追撃を仕掛ける。

しかし、ウインガルが踏み込んだそこは……

「フエイタルサーキュラー!!」

ローエンがナイフで作り出した魔法陣の中だ。

発動した精霊術に捕らえられ身動きが取れない。

《小癩な!》

ウインガルは、無理矢理動こうとする。

ローズは、その止まった瞬間を利用し、一本の刀の切先をウインガルへと向ける。

「瞬迅剣!!」

ローズは、そのまま突撃を仕掛ける。

ウインガルは、何とか手を動かし刀を構え、ローズの攻撃を逸らす。

外してしまったローズは、そのままウインガルの横を通り抜け、背後に回る。

しかし、直ぐに右足で強く踏み込むと、体勢を整える。

そして再び刀を奮おうとする。

しかし、ローズの刀が届くより先に、ウインガルの拘束が解けてしまった。

ウインガルは、振り向きざまにローズに攻撃を仕掛ける。

二つの刃が激しくぶつかり火花を散らす。

(……は、負けられない……)

ローズは、そのまま鏑迫り合いに持つて行き、歯を食いしばって自分の持てるだけの力を込める。

ウインガルは、そのローズの顔を確認するとニヤリと笑う。

そして、込めていた力を一旦緩める。

突然の事にローズは、前のめりなってしまう。

支えを失い、体勢を崩したローズをウインガルが強く押し返す。

「しまっ……………」

ローズは、ゆっくりと地面に倒れこむのが分かる。

ウインガル相手にこんな隙を見せるのは、はつきり言つて死と同じだ。

(……だけど、防がなくちゃ!)

ローズは、倒れこみながらも刀を構え、何とか前を見る。

しかし、そこにいたのは、ウインガルでは、なかった。

何かの術が完成した、プレザだった。

「ドラゴネス・スニーカー!!!」

「!？」

術どころの騒ぎでは、なかった。

発動していたのは、プレザの秘奥義がだった。

水の双竜が、ローズを目掛けて襲い掛かってくる。

《同じ手に二度も三度も引つかかる奴をマヌケと言うんだ》

(ヤバイ！)

しかし、体勢を崩しているローズには、何も出来ない。

刀を一本で防げるものではない。

いや、刀が二本あっても厳しい。

「ローズさん!!」

ローエンが何とかオートマジックガードを発動させようと走ってくる。

(ダメね……これは)

恐らくオートマジックガードで防げる容量を遥かに超えている。

だからこそその秘奥義なのだろう。

例え、もし仮に防げたとしても、ローエンも多大なダメージをもらってしまっただろう。

(……足を引つ張つても仕方ないわね)

ローズは、共鳴^{リソニック}を切ると最後の一本となった刀をローエンに向かって投げる。

ローエンは、刀が飛んでくるとは思わなかったのだろう。

慌てて細剣で防ぐ。

その為、足を止めてしまった。

もう、絶対に間に合わない。

ローズの狙いが分からないローエンではない。

「ローズさん!!」

ローエンの言葉、そして、ジュードが何か叫んでいる言葉をボンヤリと聞きながらローズは、自分に向かってくる水竜達を見る。

素早い筈の竜達がゆつくりと自分に向かってくるように感じる。

それこそ、一秒が一時間に感じるという奴だ。

そんな限りある永遠の時間の中、迫ってくる竜を前にローズは、考える。

結局、一番の役立たずは誰だったのだろうか、と。

考えるまでもない、それは、ローズ私だな、と。

何せ、ホームズとの戦い。

ローズは、何も出来なかった。

他の面子はホームズ相手にどうにか戦っていた。

レイアに至っては、ホームズを完全に倒していた。

じゃあ、ローズは、どうだ？

ホームズとの戦いでは、戦いにすら辿り着けなかった。

今も、結局同じ手に二度も引つかかり、やられようとしている。

(……情けない)

なす術のないローズは、心の中でそう呟いた。

もう、竜達は目前まで迫っている。

(もうちよつと素直になつとけばよかったかな……)

ローズは、何処かのアホ毛を思い出しながら、大きく口を開けた二頭の龍をボンヤリ

と眺めた。

飛んで雪に入る冬の虫

「ジュード！そっちは頼むわ。こいつは……………」

ローズは、そう言うと、そのまま、押し返し、半身になる。

「私がやる！」

ローズは、そのまま右足に力を込め、ウインガルとの戦いを始めた。

「待て！ローズ！」

ミラも加勢しようとする。

ウインガルの実力が只者ではないというのもあるが、今のローズは、完全に冷静さを失っている。

そんな状態の奴を一人で戦わせるわけにはいかない。

「あら、貴方達の相手は私よ」

ウインガルの所へ行こうとしたミラの前にプレザが現れる。

そう言うとヒールの高い靴でミラに蹴りを入れる。

ミラは、直ぐにバックステップでかわす。

プレザは、ミラに躲されるとすぐに精霊術を発動させる。

「ブルースファイア！」

ミラの頭上に水泡が結成され、真っ直ぐに落ちてくる。

「ミラ!!」

ジュードは、直ぐ様ミラに駆け寄り、ミラを安全な所まで引つ張る。

ミラは、ギリつと歯ぎしりをして、プレザを睨む。

どうやら加勢する事は許されないようだ。

「ミラさん！」

ローズの一番近くにいたローエンが、ミラに鋭く声を飛ばす。

「ローズさんは、私はどうにかします！」

ローエンが精霊術を唱える体勢をとる。

ミラは、そんなローエンにコクンと頷く。

「分かった、頼んだぞローエン」

ミラは、それを聞くとゆらりと立ち上がり、刀を向ける。

「仕切り直した、プレザ！」

「あら、怖い怖い」

ミラの剣幕に構わず、プレザは、妖艶に微笑む。

プレザが、ミラに気を取られている隙に、レイアとエリーゼが自分の武器にグツと力

を入れる。

(……見るからに精霊術で戦うタイプ……だったら……)

ジュードも籠手に力を込め一気に突撃する。

(精霊術を発動させる前に倒す!)

レイアも同じ考えに至ったようだ。

ジュードと同じようにプレザに突撃する。

しかし、二人の突撃にプレザは、慌てることなく、ハイヒールの靴で地面を軽く踏み込む。

それと同時に広範囲に青白く輝く陣が展開される。

「守護方陣」

どこかの誰かさんのような守護方陣に二人は驚く。

しかし、どこかの誰かさんとは、比べ物にならない程の広範囲だ。

ジュードとレイアは、プレザの攻撃範囲にまんまと誘い込まれてしまったわけだ。

「うっ!」

「っっ!」

二人はものの見事に捕まってしまい、プレザに攻撃が届かない。

攻撃が終わるとプレザが手に持つ本を振る。

恐らく、マナか何かが込められているのだろう。

たかだか、本の攻撃だというのに、ジュード達は吹き飛ばされてしまった。思わず膝をついたジュードにプレザは、更に攻撃を仕掛ける。

「クイーンモーメント！」

「グッ!!」

持ち前のハイヒールで、ジュードを執拗に踏みつける。

『……ネガティブゲート!!』

その隙にエリーゼが精霊術を完成させ、プレザを攻撃する。

ジュードは、その間にプレザから逃げる。

「ありがとう、エリーゼ」

『どういたしましてー』

ジュードは、大きく後ろに下がる。

お礼を言うのと直ぐにプレザを睨み拳を振り上げる。

「魔神拳！」

ネガティブゲートに囚われているプレザにジュードは魔神拳を繰り出す。

魔神拳は、真っ直ぐにネガティブゲートの中に吸い込まれていく。

「やったか、ジュード？」

「いや……」

ミラに尋ねられたジュードは、首を横にふる。この程度で倒せたら、そもそも四象刃^{フォーエブ}なんて名乗らないだろう。

エリーゼの精霊術が終わるそこには、相変わらず、余裕綽々で佇むプレザがいた。いや、それどころか、精霊術を発動している。

「……………嘘！」

レイアは、辺りを確認する。

見回してみても、精霊術が発動している様子はない。

「どっ?!」

そして、ジュードがプレザの精霊術を確認する。

プレザの精霊術は、ローズの頭上にあつた。

「ローズ!!」

「遅い！ブルースファイア！」

ジュードの言葉も虚しくローズに向かって落ちていく。ローズに向かって落ちて落ち、水泡が弾ける。誰もが倒れているローズを思い浮かべた。

しかし、ローズは、凜として立っていた。

「なんで？」

エリーゼが訳が分からず、尋ねる。

けれども、その疑問は直ぐに解決した。

側にローエンが立っていたのだ。

恐らくオートマジックガードを発動させたのだろう。

「決まったと思っただのに……」

「残念だったな」

残念そうなおプレザにミラが剣を振るう。

プレザは、手に持っている本で攻撃を防ぐ。

「ジュード、今だ！」

ミラの言葉に、プレザは、後ろを振り向く。しかし、そこにはジュードは、いなかった。騙されたかと思ひ、直ぐにミラに視線を戻す。ここで、一つプレザはミスを犯した。

それは、頭上を確認し忘れたことだ。

「鳳墜拳!!」

炎を纏ったジュードの拳がプレザに叩き込まれる。プレザが地面に倒れると、ミラは後ろに下がる。

「行くぞ、ジュード!」

「分かった!」

二人はそれぞれ、拳と刀を振るい空中に巨大なバツ印を描く。

「絶風刃!!」

風の刃がプレザを襲う。

「グッ!」

立ち上がろうとしたプレザは、攻撃を何とか防ぐが、それでもダメージは、免れない。

「やってくれるわね……」

油断なく、二人を見つめる。

そして、気付く。

「二人?」

そう、四人いたはずなのに、この二人、ジュードとミラしか見当たらないのだ。

思わず後ろを振り返る。

そこには、飛び上がっているレイアと、ティポグライダーで飛んでくるエリーゼがいた。

「はああああつ!!」

『くらえー!!』

レイアの横薙ぎの一撃と、エリーゼの杖が、プレザを襲う。

プレザは、目を鋭くすると、それらを本で吹き飛ばし、二人を地面に落とす。

「きゃつー！」

「つうー！」

二人は、直ぐに立ち上がり、武器を構える。

プレザは、周りを見回すため息を吐く。

「もしかして、貴方達もローズと一緒で、ホームズを裏切らせたこと怒ってるのかしら？」

「当たり前でしょー！」

レイアが、真つ先に声を荒げ、ギロリとプレザを睨む。

「あなた達が余計なことしなければ、わたし達、特にわたしが痛い思いせず済んだんだから!!」

ホームズと激闘を繰り広げたレイアの心からの叫びだ。

顔を狙ったり、身体強化の精霊術が切れたレイアの腹に思い切り蹴りを叩き込んだりと相当容赦がなかった。

『まあ、エリーゼをホームズは、攻撃しなかったけどねー』

エリーゼは、頷く。

本当にこればかりは、ずっと謎だったのだ。

初めて出会った時もそうだったが、どう考えても、ホームズがエリーゼに攻撃をしない理由はないのだ。

確かに、テイポという増霊極ブースターによって、底上げされているエリーゼの精霊術は、強力だ。

しかし、精霊術を食うヨルを連れている、ホームズにとつて、そんな事は関係ない。頭数を減らすのなら、真つ先に狙うべきはエリーゼなのだ。

「そして……」

エリーゼがそんな考えを広げているなか、レイアは、プレザを睨み、一度切った言葉を続ける。

「ホームズだって、辛い思いをせずに済んだ」

「あら？ どうして、彼が辛かったと思うの？」

レイアの言葉を聞いて、プレザは、ニヤッと面白そうに、微笑む。

「仲間を裏切って辛くないと思う程、ホームズは腐っていないもん」

プレザは、レイアの答えを聞いて更に笑みを深くする。

「付き合いが、わたし達より短い貴方がよく言うわね」

「うわあ……ローズがこっちにいらなくてよかった……」

恐らく更に面倒くさい事になっていただろう。

引きつった顔を元に戻すと、レイアは、意思の強い目で睨む。

「知らないの？ホームズは、行商人、信頼第一。そんなホームズが信頼裏切って何も思わないわけないじゃん」

「レイア……」

レイアの微妙なホームズへの信頼にジュードは、頬を引きつらせる。

「それに……」

レイアは、それに構わず続ける。

「仲間思いなんだよ、ホームズは。とつても、分かりづらいけどね」

プレザは、その言葉に思わず目を向く。

それから、直ぐに元の表情に戻す。

「なるほど、それが貴方達の評価なのね」

それから、不敵に笑う。

「ところで、貴方達、そんな所にいていいの？」

「……？」

レイア達は首を傾げる。

しかし、ジュードは、直ぐに気付いた。

「みんな……!!」

「遅い!!」

プレザは、地面を軽く踏み込む。

「守護方陣!!」

青白い光の陣に四人は、捕らえられてしまった。

そう先程の会話は、プレザが全員を有効範囲内に入れるために仕組んだ事なのだ。

物の見事に全員引っかかってしまった。

「飛んで火に入るなんとやら、って奴ね」

プレザは、そう言うのと本を開いて何やら唱え始める。

どうやら守護方陣だけでは、無さそうだ。

「龍精召喚!」

「ま……さか」

プレザが、何をしようとしているのか、発生するマナの量を見れば、それは火を見るよりも明らかだ。

ミラは何とか体を動かそうとする。

しかし、上手くいかない。

「ドラゴネス・スニーカー!!」

二頭の水龍が出現し、口を大きく開けている。

ジュード達は思わず身構える。

しかし、水龍は、ジュード達を素通りして……………

ローズの所へと進んでいった。

そう、向こうは、こちらと違い二人で戦っているのだ。

ローズさえ倒してしまえば、ローエン一人になってしまう。

加勢させないようにプレザが気をつけなければの話ではあるが、そう難しいことではない。
い。

例え加勢に入ろうとしても、秘奥義を食らって瀕死のローズを人質にとってしまった
それまでである。

どちらかに転がろうと、フォーブ四象刃の独壇場だ。

「逝っちゃいなさい！」

体勢を崩しているローズにかわすことは出来ない。

ローズは、ローエンに向かって刀を投げ、足止めする。

「ローズ——
!!!」

ジュードの叫びも虚しく水龍は、ローズへの距離を詰めていた。

誰もが諦めたその時、見覚えのある影が現れる。

遠目でもはつきりと分かる。

それは、巨大な猫の生首だった。



「……………ヨル？」

啞然としてる、ローズを他所にヨルは、二頭の竜を飲み込む。
そして、ゲップを一つ。

「あの野郎、思い切りぶん投げやがって……………」

生首……………ヨルは、元の姿に戻ると顔を丁寧に手で洗う。

「まあ……………その分の価値はあったということか……………」

ヨルは、ゆらゆらと尻尾を揺らす。

「な……………んで？」

ローズは、ポカンとした顔をしている。

「そんなの、おれがいるからに決まってるだろう？」

その声の先に目を向けると、そこには、ポンチヨをはためかせ、アホ毛を揺らした、ホームズ・ヴォルマーノが白い息を切らしながら、立っていた。

雪だらけの白い世界で、碧い瞳を静かに輝せながら。

既死回生

「……いつてえ」

ホームズは、ゆっくりと目を開ける。

そこには、ズタボロになっている自分の姿が目に入った。

「酷いぞまだなあ………」

袖は破れているし、血はダラダラと流れている。

ポンチヨも所々破れている。

額も切ったようだ。血が垂れている。

そして、先程から感じる痛みで何となく想像がつくのだが、肋骨も二、三本イッている。
る。

「全くだ」

ホームズがため息を吐くと隣でヨルは、大あくびをしている。

ひとしきり、欠伸をすると、ヨルはホームズに袋を投げつける。

例の回復薬の入った袋だ。

「……なんか、大分減ってるんだけど……」

「ネズミにでも食われたんじゃないのか？」

「猫^{きみ}、仕事しておくれよ……」

ホームズは、そう言ううとライフボトルを飲み、ミラクルグミを食べる。

「彼らは？」

「無事に走り去っていった」

「ふーん……」

ホームズは、どうでも良さそうに返事をする、ヨルを見る。

「君、おれがレイアと戦っている時、手出ししなかったね？なんでだい？」

ヨルは、眉をピクリと上げる様な動作をする。

「気絶してたからな……」

「ふーん……ま、そういうことにしといてあげるよ」

グミを食べ終わると、ホームズは、ゆっくりと立ち上がる。

「さて……」

グミ達のおかげで大分体が楽になる。

「行きますか……ヨル」

ヨルは無言でホームズの肩にぴよんと飛び乗る。

ホームズは、そのまま自分が裏切った仲間達の元へ走り出した。



「ホームズ!？」

ローズは、驚いてその姿を凝視する。

身体がボロボロだが何処からどう見ても、ホームズだ。

「そうだよ、ホームズだよ。ホームズ・ヴォルマーノだ」

ミラはホームズを鋭い目で見る。

「何しに来た？」

「戦いに来たに決まってるだろう」

ホームズは、ニヤリと笑う。

「報酬分の働きをするのがプロってものさ」

そう言うホームズは、ウインガルとプレザと向き合う。

「貴方、私達を裏切るつもり? ガイアス様からの恩を忘れたの?」

プレザは、顔を険しくさせ、ホームズを睨む。

ホームズに与えた恩は、決して裏切れないものだ。

だというのに、ホームズは、プレザ達に加勢するわけでもなく、ミラ達の側で凜と佇んでいる。

顔の険しいプレザとは、対照的にホームズは、胡散臭い笑みを浮かべている。

「まっさかー。ちゃんと返したじゃないですか。

貴方達が来るまで、おれは、ちゃんと足止めをしましたよ」

両手を大袈裟に広げさながら言葉が続ける。

「これで、貸借りなしの恩返し終了です。これ以上何か欲しかったら報酬を下さいな」
ホームズのその物言いにプレザは、歯ぎしりをする。

そんなプレザに構わず、ホームズは思い出した様に続ける。

「ああ、そうそう。裏切りっていうのはね、友情や信頼で結ばれてることが前提ですよ」

ホームズは、心の底からの意地の悪い笑みを浮かべる。

「あなた達とマクスウェル御一行達の場合とは、訳が違う、信頼が違う……」
そこで言葉を切ると、レイアとローズを見る。

「……友情が違う」

ローズとレイアは、お互いに顔を見合わせて、それからため息を吐く。
どこまでいってもホームズは、ホームズだった。

《貴様……》

ウインガルの言葉にホームズは、肩を竦める。

何を言っているか分からなくても、激怒していることは分かったようだ。

「どうせ、おれのことだって信用してなかったんでしょ？何を怒ってるんです？」
怒りに震えるウインガルをホームズは、完全に見下した目で見る。

「こうなつて当然だと思わなきゃ、ですよ」

《……なるほど》

ウインガルは、怒りの顔から笑顔に変わる。

そして、そのままホームズに斬りかかる。

ホームズは、ウインガルの突然の香華を盾で受ける。

《お前を斬る理由は、星の数よりある……この様な事になったのは、むしろ好都合だ。》

「ヨル……さつきから、この人は何を言ってるんだい？」

「ロンダウ語だな……まあ、要約すると斬り殺したいそうだ」

「そりゃあ、この状態で友達になろうなんて言われても困るよ」

ホームズは、ウインガルの腹を蹴り飛ばし、距離を取り、ミラ達の所まで下がる。

別れてからそれほど時は立っていないというのに、雰囲気の高さにホームズは、気ま
ずそうに目をそらす。

何せ、裏切つてジュード達を散々な目に合わせたのだ。

「えーつと、そのさ、んー……………」

ホームズは、気まずそうにしどろもどろに言葉を絞り出す。

そんなホームズをローズは思い切り握り拳で殴る。

「後で、夢に見るほど文句を言つてやるわ」

ローズは、そう言うのと二刀を構える。

「……理由は、聞いている。後で経緯を話せ」

ミラはそう言うのと片手剣を構える。

「誰から聞いたんだい？」

「ウインガルだ」

ホームズは、大きいため息を吐く。

折角自分が隠していたのにこれでは、全部パーだ。

そんな事を考えていると後ろから声が聞こえる。

「……………ホームズ……………」

『後で覚えてろよー!』

エリーゼとティポにも文句を言われる。

ヨルは、半眼でホームズを見る。

「良かったな、愛されてるぞ」

「……………おれは、幸せ者だよ」

ホームズは、頬をひきつらせながら言う。

「自業自得だよ」

「これに懲りたら、その性格を少しでも直すことだね」

ジュードとレイアは、そう言うのと再び構え直す。

ローエンは、それを見て微笑むと口を開く。

「さて……………ホームズさん達には、プレザさんをお願いしていいですか？」

あの方は、精霊術がメインのようですし」

「りよーかい!」

「ああ、普通に攻撃もしますのでお気をつけて……………」

「……………りよーかい」

ホームズは、少し気を落とすとプレザに向かって走り出す。

「瞬迅脚!!」

ホームズの飛び蹴りをプレザは、本で受ける。

「躊躇無く蹴ってきたわね……」

プレザは、本で受けながらホームズに言う。

「おれ、猫嫌いなんだよね」

ホームズは、プレザの猫耳の様な髪型を睨みながら、足の力を更に強める。

そして、一瞬緩める。

プレザは、そのせいで体勢を崩す。

ホームズは、そこでもう一度足の力を強めて本ごと押す。

プレザは、派手に倒れる。

ホームズは、追撃を仕掛ける。

大きく足を後ろに下げるとプレザに向かって蹴りを放つ。

プレザでは、防げない一撃。

代わりにその一撃は、ウインガルが防ぐ。

「へえ……」

《残念だったな》

ホームズは、失敗したことを悟ると後ろに大きく下がる。しかし、ウインガルは、ホームズを逃さない。

《魔神剣》

斬撃が地面を滑って追ってくる。

「守護方陣!!」

ホームズは、青い白い光の陣を出現させ打ち消す。

守護方陣が消えた瞬間にウインガルが斬りかかってくる。

ホームズは、回し蹴りで剣撃をそらす。

そして、その勢いのまま、先程とは逆の足でウインガルの顔面に蹴りを放つ。

ウインガルは、逸らされた刀をホームズの首筋に当てる。

ホームズの足はウインガルの顔の横で止まっている。

緊迫した空気が届かない。

お互いに、王手をかけている状況だ。

二人とも下手に動けない。

二人は、だ……

だが、一匹は違う。

ヨルは尻尾を伸ばすとウインガルの刀を固定する。
ホームズは、そのまま回し蹴りを叩き込んだ。

《小癩な！》

ウインガルは、ギリツと歯ぎしりをし、蹴り飛ばされると同時に無理矢理尻尾の拘束を解く。

「なんて？」

「死ねだ」と

ホームズの質問にヨルは、相変わらず微妙な通訳をする。

ホームズは、ウインガルを見るとため息を一つ吐く。

「やれやれ、おれをプレザさんと戦わせないつもりだねえ……」

「まあ、敵の作戦に乗る理由は、ないわなあ」

ヨルはウインガルを睨む。

「おい……」

「なんだい？」

「出し惜しみなしだ、受け取れ」

ヨルは黒い球を出す。

ソレは、ホームズの足に落ちると弾け、黒い霞となり、ホームズの足にまとわりつく。

「やれやれ、随分と気前のいいことだね」

「商人には、必須スキルだろ？」

「そりゃそうだ」

単純な話、ヨルのことをシャドウもどきと呼んだことを根に持っているのだ。

ホームズだって、そのぐらいのことは分かっている。

ホームズは、ヨルから、力を受け取ると、そのままウインガルに蹴りを放つ。

ウインガルが、かわしたことにより、ホームズの蹴りが壁に当たり、物の見事に壁にひびが入る。

ウインガルは、その光景を見ると一瞬息を飲む。

しかし、直ぐに刀を構えるとホームズに襲いかかる。

ローズに襲いかかった様に無数の刃を繰り出す。

ホームズは、盾でどうにか逸らす。

ウインガルは、こう考えていた。

確かに威力は脅威だ。

しかし、それならば当たらなければいいだけの話だ。

もつと言うなら、蹴り技を使う前に殺してしまえばいいのだ。

(くっそー速すぎて、どうにもならない！)

ホームズは、何とか紙一重でかわしているが、それも時間の問題だ。

何せホームズには、怪我と言う大きなハンデがある。

どうしたって、長時間の戦闘は無理だ。

(こんなのと、よく戦ったよ……)

ホームズは、つり目の幼なじみのことを考える。

それと同時にローズの腹を蹴ったことを思い出す。

必要な事とは言え、随分と酷いことをした。

(ああ、後で謝らなきゃな……)

なら、今すべきことは何だ。

決まっている、勝って生き残ることだ。

『覚えておきたまえ、ホームズ。男が頑張ったら、女が頑張る、女が頑張ったら、男が頑張る……』

『そうやって、バランスがとれてるのさ、男と女、それぞれがそれぞれのプライドを持つてるからね』

「やれやれ、面倒くさいこと思い出しちゃった……」

ホームズは、剣の嵐の切れ目を見極め、後ろに下がる。
ローズに出来たことが、自分には、出来ない。

これは、由々しき事態だ。

「仕方ない、おれの安いプライドをかけるとしましょうか……」

ホームズはニヤリと不敵に笑ってウインガルを見る。

ウインガルは、ホームズの右足に注意を払う。

あれが当たればタダでは済まない。

先程の壁の二の舞いだ。

その刹那、ホームズの右足が僅かに動いた。

ウインガルは、直ぐさま、ホームズに斬りかかっていく。

《爪竜連牙斬!!》

流れる様な連続技にホームズは、盾で防ぐ。

しかし、時間切れが近いようだ。

肩に一つ貫ってしまった。

怪我の痛みも、切れかけている体力もじわじわとホームズの身体に響いてくる。

(チャンス
機会は、次がラスト……)

ホームズは、ウインガルを睨みつける。

普段の垂れ目からは、想像も出来ない闘志、殺気、覚悟……

戦いに、おいて必要な全てが目宿っていた。

ホームズは、もう一度霞を纏った右足を動かす。

それが最後の合図だった。

ウインガルは、連続の突きを繰り返す。

ホームズは、紙一重でかわす。

しかし、かわしきれなかった一つが、ホームズの腹を貫く。

『ホームズ!!』

皆のホームズを心配する声が響く。

ホームズは、口から血を吐く。

この前よりも多く。

ホームズの口から吐き出される血はカン・バルクの雪を赤く染め上げる。

ウインガルは、赤く染まる雪を見て勝ったと思った。

しかし、それが間違いだった。

ホームズ、相手に絶対に思っではいけない感情なのだ。

何せ、ホームズの真骨頂は、相手のそういった隙を突くところだ。

ホームズは、腹に刺した刀を持っているウインガルの手首を掴む。そして空いた手で更に刀を持っていない手を掴む。

とても、怪我人とは思えない力で捕まれ、ウインガルは、攻撃が出来ない。ならばと、足を動かそうとするが、

黒い霞を纏ったホームズの足に踏まれ、それも出来ない。

左足で強く踏み込んでいるため退かすことも出来ない。攻撃どころか、逃げることも出来ない。

「君、ずつとおれの右足だけを見てただろう……」

黒い霞は、まだホームズの足に纏わり付いている。

「派手な手品に気を取られすぎだよ、君。

だから、こんな事になるんだ」

ホームズは、口から血を流しながらそうニヤリと笑う。

つまり、ホームズは、強力な切り札を在ろう事か、匣に使ったのだ。

「雨のような攻撃だか……無数の突きだ……か知らないけど……一回食らって……まえば……封じるのは……簡単だよ……ね」

ホームズは、ギリギリとウインガルの手首を掴む力を強めていく。

《だが、どうするつもりだ、両手両足を封じられているのは、お前も一緒だ》

「なんて？」

「お前だって何も出来ないだろうだとさ」

ホームズは、口から血を流しながら笑う。

「頭が固いぜ、軍師どの。もっと頭柔らかくしていこうよ」

ホームズは、そう言うとうインガルより伸び上がり、最大の勢いをつけ、ウインガルに頭突きをかます。

どんなに強くなろうと、内臓だけはどうにもならない。

頭蓋骨で吸収できなかった、衝撃は、ウインガルの脳を揺らしてしまい、ウインガルは、そのまま膝をついて倒れた。

「ま、石頭のおれが言っても説得力ないけど……」

ホームズは、フラフラとしている。

側から見ればどっちが勝ったか分からないが、気を失ったのはウインガルだ。
ホームズが確かに勝ったのだ。

「ウインガル!!」

まさかの結末に、プレザが思わず目をそらす。

だが、それは決してやってはいけないことだった。

「どこを向いている」

ミラがゆらりとプレザの背後に立つ。

「レイア！」

「任せて！」

「エアリアルファイア！」

レイアとミラの共鳴が炸裂する。
リンクアーツ

しかし、それだけでは終わらない。

「続けていく！ローズ！」

「了解！」

二人は螺旋を描きながら、宙に浮く。

「竜虎滅牙陣!!」

二人の刀が地面にあたり、弾ける。

「エリーゼさん！我々も！」

「はい！」

『「ピコハンワルツ」』

無数の斬撃と共にピコハンが大量に現れる。

連続の共鳴リンクアーツにプレザは、膝をつく。

「最後だ、決めろ、ジュード」

「わかった……」

ジュードの籠手が赤く光る、

狙うは連続の共鳴リンクアーツで弱っている、プレザの腹だ。

「掌底破!!」

ジュードの拳がプレザの腹を捉えるとプレザもウインガルと同じように倒れた。

四刃象^{フォーブ}が二人倒れた。

これによりマクスウエル一行の勝利が確定した。

ホームズは、それを見届けると、今まで意地で持たせていた膝を地面につけた。

刀抜いて逃げる

「ホームズ!!」

ローズは、慌ててホームズに駆け寄る。

「そう、焦りなさんな、急所は……外れているんだから」

ホームズは、そう言って刺さっている刀に手をかける。

「待つて」

ジュードがそれを止める。

「下手に抜けば大出血だよ」

「なら、どうする?このまま、こいつは、刀と共に暮らすか?」

ヨルの言葉にジュードは、真剣な表情になる。

「……治療孔で治療しながら、同時に刀を抜くしかない……レイア、指示をするから、

その時に真っ直ぐ抜いて」

「……………うん、わかった」

力強く頷いたレイアをヨルは、見ると満足そうに笑う。

「尻込みしたら、どうしてやろうかと思っていたところだが……………」

ヨルは、レイアの様子を見る。

「……………杞憂だったようだな」

「看護師見習いだからね」

そう言うレイアは、ホームズの近くに膝を突く。

「ローズは、ホームズの体高を高くして。他のみんなはホームズを押しさえて……………多分暴れるから」

「……………えっ?……………ちよ……………、そんなに痛いのか?」

なけなしの血が更にホームズから、引く。

ローズは、それに構わず、ホームズを膝枕する。

「あ、そうだ。ホームズ、ハンカチ貸して」

「……………何に使うの?」

ホームズのポケットから無理やりハンカチをあさると、ホームズの口に突っ込む。

「舌噛んだり、歯にひびが入るとダメだし……………」

「ねえ、おれはこれからどうなるの?」

ジュードは、そんなホームズを無視するとみんなに目配せをする。

「いくよ……」

「待って……心の準備が……」

『『せーの!!』』

レイアが深々と刺さった刀を引き抜く。

ホームズの腹に激痛が走る。

最早、痛み通り越して炎だ。

「い——ッ!!!」

声にならない。

「……………もう少し!!」

レイアがラストスパートをかける。

案の定、手足に力が入る。

ミラ、ローエン、エリーゼが力を込める。

「……………取れた!」

レイアは、ホームズズの腹に深々と刺さっていた刀を遠くに投げる。

ジュードが素早く傷を塞ぐ。

ホームズズの傷は、見事に消え去った。

「ホームズ、ライフボトル……」

レイアから、ライフボトルを受け取ると一気に飲み干す。

「……………この前のナイフよりきつかった……………」

ホームズは、げんなりしている。

「これに懲りたら、もう無茶はしない事ね」

ローズは、そう言つて頬を摘む。

その間に、ジュードがホームズを治癒孔で治していく。

エリーゼは、その手伝いだ。

「……………よし、とりあえずこれで大丈夫だと思うけど……………どう？」

「いい感じ」

そう言つて、ホームズはゆっくりと立ち上がる。

傷は、全て治った。

しかし、身体に残ったダメージと、身体から消えた血までは、治らない。

正直な所、立つので精一杯だ。

それを見越すとジュードがホームズをおぶる。

「やってくれたな……………」

ウインガルが意識を取り戻した。

髪の色も言葉も元に戻っている。
プレザもゆつくりと立ち上がる。

二人とも意識を取り戻したとは、いえ、まだダメージがありそうだ。
ミラは、ゆつくりと剣を構える。

「また……相手をしてくれるのかしら？」

今にも斬りかかりそうなミラをジュードが止める。

「邪魔するな！」

「違うよ！アレー！」

ジュードの視線の先には、ア・ジュール兵が迫ってきていた。

「潮時という奴か……」

一行は、一気に駆け出す。

ローエンも最後に駆け出す。

「また、逃げるのか……イルベルト……」

そんなローエンに、ウインガルが言葉を投げかける。

「あなたが、逃げたから、ナハティガル王は……」

ローエンは、立ち止まる。

実際、反論のしようがないのだ。

しかし、ローエンは、それを振り切るように再び走り出した。

そんな彼らを遠くからアルヴィンは、眺めていた。



「なんとか、逃げ切れた……………」

ジュード達は、今、モン高原にいる。

ホームズは、雪を避ける為にフードを被る。

「代わるわ、ジュード」

「……じゃあ、お言葉に甘えて」

流石にジュードでも、雪に足を取られながらホームズを背負いながらずつとと言うのは無理だ。

ローズがホームズを背負い直すと、ミラは、ローズの背中にいるホームズに尋ねる。

「それで、お前はいつから裏切るつもりだった?」

ミラのストレートな物言いに慣れたホームズは、ため息一つ吐かず話す。

「……カン・バルクの一日目の夜から、かな」

「えらく、具体的だね……」

ジュードは、ホームズの詳しいタイミングに少し呆れる。

「ほら、アレだよ。君たちが、おれにアルヴィンを探させに行かせたでしょ?」

ローエンがあごひげを触る。

「ああ、あの時ですか……」

「そ。その時に、アルヴィンからウインガルさんからの手紙をもらったんだ」

ホームズは、順番に話していく。

「まあ、色々書いてあったけど、要約すると、『時が来たら、ガイアス王に最も有利になる様に動け』って所かな」

「恩を返せ、とは書いてなかったの？」

レイアは、ホームズに尋ねる。

レイアの質問にホームズは、少し驚くと首を横に振る。

「まあ、明確には書いてないさ」

つまり、暗にそう言っていたということだ。

ホームズは、ミラの言葉を思い出しながら、今度は、逆に自分から訊ねてみる。

「あのさ、ウインガルさんから、聞いたって言ってたけど……どの辺まで聞いたの？」
ホームズの質問に、エリーゼが答える。

「ホームズのお父さんのお墓があるって言ってた……です」

エリーゼの答えにホームズは、少し目を伏せ、自嘲するように言葉を繋いでいく。

「……………思ってたより、しょうも無い理由だろうか？」

何せ、おれの命を助けられた、とか、おれの家族を助けてもらった、て訳でもない。間違った道に迷いそうだったのを救ってくれたって訳でもない。ただ、墓を建ててもらったってだけの話だ」

ホームズは、エリーゼの方を向くと言葉を続ける。

「……………でも、おれとっては、デカイ恩だった……」

なんと言ったら、おれは、行商人。

死体なんて、野山の何処かに埋めちやうのが当たり前だったからねえ……

でも、ガイアスさんとウィンガルさん達は、カン・バルクに墓を建てていいって言ってくれたんだ……」

ホームズは、静かに目を閉じる。

その時の事を思い出しているのだろう。

この気持ちを理解してもらえらるとは、ホームズは思っていなかった。

人によつては、甘い一言で済ましてしまうようなものだ。

寧ろ、やつてもらつて当たり前と思えばホームズもこんな事をしなかったかもしれない。

しかし、ホームズには、それが出来なかった。

そして、その出来事は、ホームズにとつては、絶対に返さなければならぬ恩へと変わつていった。

だから、今回、ホームズは、ジュード達を裏切つたのだ。

そりゃあ、迷いも消えるはずである。

自分の生き方をホームズは、真つ直ぐに選んだのだ、迷うわけがない。

レイアは、ため息を吐く。

恩を返す、

これは、間違っていない。
しかし……………

「そうは言っても、迷って欲しかったよ……………ホームズ……………」

レイアは、ポツリと言う。

ホームズとの一対一の勝負。

あの時、ホームズから迷いは感じなかった。

友と戦う事に迷わなかったホームズにレイアは、寂しさを感じていた。
ホームズは、そんなレイアを見ると少し驚くがすぐに穏やかに笑う。

「君は、迷いながらも戦っていたね……………やり合つてて分かったよ……………」

そう言うと、ホームズは、レイアの方を見る。

「本当にいい奴だね、君は」

ホームズは、そう言つて前を向く。

そこで、ホームズは大事なことに気づいた。

まだ、自分のすべき事を何もやっていない事に。

「えつとさあ……………」

ホームズは、言葉を区切ると皆を見回す。

「……ごめん。今回は、みんなに迷惑をかけたよ……」

ホームズの言葉に一同は、目を見開き、思わず立ち止まる。

なんと言ったって、あのホームズが真剣に自分の過ちを認めて謝ったのだ。

いつも、のらりくらりと生きて自分の弱味を誤魔化している様な男が、こんなに弱味を見せている、こんなに驚く事があるだろうか。

ホームズは、更に口籠りながら言葉が続ける。

本当は、これが一番言いづらいのだ。

ホームズは、目を泳がせる。

「ええっと、後さ、凄く言いづらいんだけど……出来ればさ、まだ、みんなと一緒に旅をしたいんだ……ダメ……かな？」

その瞬間、ローズは、ホームズを背中から落とす。

「……何するんだい!!」

尻もちをついたホームズは、雪まみれになりながら、抗議をする。

因みにヨルは、巻き込まれる前にレイアの肩に逃げた。

そんなホームズをローズは、見下ろす。

「貴方、少しは頭を使いなさい」

ローズは、そこで言葉を切るとミラ達を見る。

みんな少し呆れている。

「何の為に、足手まといの貴方を背負ってここまで来たと思ってるの」

ホームズは、尻もちをついたまま驚いて目を丸くする。

そんなホームズにローズが、手を差し伸べる。

ホームズは、暫くそれを見つめるとフードを深々と被り、目元を隠す。

「……………ありがとう」

ホームズは、そう言うと、ローズの手を取る。

ローズは、優しく微笑むとホームズを再び背負い直す。

ヨルは、その様子を見て少しだけ笑う。

「あの馬鹿、泣……………」

「し……………」

レイアがヨルの口を押さえる。

もちろん、レイアだって気づいている。

あの時、ありがとうと言ったホームズの声は震えていたのだ。

ホームズが深くフードを被っているため分かりづらいが、目元も涙でいっぱいだろう。

ヨルやレイアだけでなく、みんな気づいている。

そんな中、ティポが、ホームズのところまで飛んでいく。

何処かで見たとのことのあるハンカチを啜えて。

『どうぞでー』

ホームズは、ティポからのハンカチを受け取る。

「……おれは幸せ者だよ」

ホームズは、小さく、本当に小さくポツリと呟いた。

疑信暗鬼

「着いた……………」

「サンキュー、レイア。助かったよ」

最後に背負ったのは、レイアだった。

ホームズは、そういうとレイアの背中から降りる。

ふらふらとしているがとりあえず、地面に足をつける。

ミラはそんなフラフラとしているホームズを見て眉をひそめる。

ミラがこれからどうしようか考えている時、ユルゲンスがやってきた。

「謁見は、どうだった？」

ミラたちは、顔を見合わせる。

どうだったもクソもない。

どこかの垂れ目は、ガイアス王に喧嘩を売り、その後一行で、フォーレブ四象刃相手に大立ち回りだ。

とてもじゃないが、報告できない。

「すまない、話は後だ。直ぐにでも発ちたいところだが……………」

そうやって、ミラはホームズを見る。

どう考えても、今のホームズの状態では無理だ。

傷も怪我也全て直したとは言え、体に溜まったダメージまでは、消えていない。

ついでに言うなら、血液も足りない。

「……別に出来なくはないが……どうした」

不思議そうにユルゲンスは、尋ねる。

『うん、ぼくたち、ガイアスに……』

余計なことを喋り出したティポをローエンとジュードで止める。

ユルゲンスは、不思議そうな顔をしている。

「急ぐ必要は、なくなつたよ」

後ろから聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「アルヴェイン！」

「よっ」

驚くジュードにアルヴェインが適当に返事をする。

「奴ら、今頃せつせと山狩りをしてるからな」

ミラは、顔を険しくすると、アルヴェインに近づくと、

「お前が……？手土産のつもりか？」

ミラの言葉に、アルヴェインは、肩を竦める。

「土産も何も……仲間だろ？俺たち」

そんなアルヴェインを一行は、不信な目でみる。

アルヴェインは、涼しい顔をして歩み寄る。

「お前達が、俺の事を信じてるのを知ってる、そう言っただろ」

そう言つて、アルヴェインは、ジュードと肩を組む。

「まだ、俺の事を信じてくれるよな？」

ジュードは、迷いながら俯く。

「……うん」

「サンキューな、ジュード」

そんな二人をヨルは、冷めた目で見る。

何処までも軽薄なアルヴィンに、エリーゼとレイアは、不満げに睨む。

「お、おかえり……帰ってきて……嬉しい……です」

棒読み口調のエリーゼにアルヴィンは、笑う。

「なんだ、それ」

そう言つて、ホームズを見る。

「どう思う、ホームズ」

同じ裏切つたもの同士、という意味を込めて目を向ける。

そんなアルヴィンにホームズは、肩を竦めてみせる。

「さてね。ま、おれとしては、感謝してくらいだよ、時間稼ぎしてくれてね」

ホームズは、そういつて、真つ赤に染まったポンチョを見せる。

「……なるほど」

そう言つて、納得する。

「とにかく、大分時間は稼げそうですね。ホームズさんの具合も悪そうですね、丁度い

いかもしれませんね」

「悪いね、どーも」

ホームズは、青白い顔で微笑む。

ユルゲンスは、そんな面々を見てにつこりと笑う。

「君達といると、本当に退屈しないな。詳しくは、聞かないどくよ」

「助かるわ、ユルゲンスさん」

ローズは、そう言つて微笑む。

「なら、とつとと、宿に行こうぜ。俺、疲れちまつた」

アルヴィンの言葉と共に皆は宿に向かつた。



「待つて、アルヴィン」

宿に入る前にジュードが呼び止める。

アルヴィンは、やれやれといった風に頭を搔く。

「まあだ、納得いつてないつてか」

そう言つてアルヴィンは、振り向く。

「他の連中も大体同じだな……しゃーないか」

アルヴェインは、そう言って、いつからの事なのか説明をする。

「三人で、初めてニ・アケリアに行った時だよ。社から俺一人で何処かに行つたらう？」

「確か、私が社から出ると、ジュード一人だったな」

ミラが腕を組む。

「ニ・アケリア？何しに行つたんだい？」

ホームズは、首を傾げる。

ミラは、ホームズの方を向く。

「色々あるが、まあ、四大を再召還する為だったのだ……失敗したかな」

「だろいな」

ヨルは、鼻で笑う。

ホームズは、そんなヨルの顔を掴む。

アルヴェインは、パンと手を叩いて話を戻す。

「ま、その時に、ウインガルと出会った訳だ」

アルヴェインの言葉にローエンが一つ考えを提示する。

「密約を交わしていたのでは？ いざという時は、ミラさんを引き渡すと……ホームズさんのように」

「グサツときた……でも、あり得る話だねえ、アルヴィン」
ホームズは、一瞬間を歪めるが直ぐにアルヴィンに質問する。

「ふむ、貴様が言うと言得力が違うな……」

ヨルの言葉にホームズは、再度顔の影を濃くする。

「アルヴィン君、ひどい！

やつぱり、ミラやジュードを裏切ったんだ！」

ホームズは、ウツと胸を押さえる。

アルヴィンへの裏切り関係の台詞は、全てホームズにも降りかかる。

勿論、全て自業自得なのだが。

「待てよー！」

ホームズが、罪悪感の渦に巻き込まれている中アルヴィンがレイアの言葉にストップをかける。

「確かにあの時は、色々考えてたけど、今回は、それが利用できると思ったんだ」

「……………どういふことだい？」

罪悪感の渦から、戻って来たホームズが首を傾げる。

「ワイバーンの事。アレの許可が下りたのだから、事前に話を通してからなんだぜ」

アルヴィンの説明にエリーゼが、ハツとする。

「え……それって、ガイアスの前で裏切ったのって……」

「そ、あの場で裏切ったフリしてなきや、ワイバーンも使えなかつたって事だから、シャン・ドウとは、真逆に逃げたってウソをついたんだ」

ローズは、腕を組んで考える。

アルヴィンの手腕は、賞賛すべきところだ。

しかし、素直に褒める気になれない。

「ホームズへの手紙は、何時どうやって受け取ったの？」

ローズの質問に、アルヴィンは肩を竦める。

「オレの相棒、ま、鳥が運んできたんだ」

ローズが不審そうに眉を潜めるとジュードが横からフォローを入れる。

「本当にアルヴィンは、その鳥を持つてるよ。いつも手紙のやり取りを誰かとやってるから」

そう言つてジュードは、アルヴィンを見ようとするが、直ぐに俯く。

「僕は、アルヴィンを信じたい、けど、……まだ……」

ジュードの言葉を聞きミラが頷く。

「そうだったな。あのプレザという女だ。キジル海瀑の時といい、知った仲のようだったぞ」

アルヴィンは、ミラの言葉を聞き気まずそうに頭を掻く。

「何が聞きたい」

少し怒気を込めてアルヴィンは、尋ね返す。

「あのプレザッて人、どういう人なの？」

「……………」

アルヴィンは、ここで初めて言葉に詰まる。

今までのスラスラと答えていたのが嘘のようだ。

「アルヴィンっ!!」

ジュードは、それに痺れを切らしたように怒鳴りつける。

その剣幕にアルヴィンは、ジュードを見る。

「なんだ、お前…………泣いて…………」

「泣いてなんかない…………ただ、僕は…………僕は…………」

「アルヴィン、本気には本気で返すべきよ…………」

ローズは、アルヴィンを睨む。

しかし、それはまるで自分に言い聞かせているようにも聞こえる。

「はあ…………出会いは、俺がラ・シユガルの情報機関に雇われていた時の話だよ」

アルヴィンは、思い出していく。

「あいつは、ア・ジュールの工作員として、イル・ファンに潜入中だったけどな」
「それで？」

「その後、個人的に色々あつてよ……まあ、詳しくは聞かないでくれや」

「なんだ？ 浮気でもしたか……」

「聞くなつたろうが……つーか何で、真っ先にそれが出てくるんだよ……」

ヨルの言葉にアルヴィンは、とても嫌そうに顔歪める。

「誠実そうに見えないからだろう」

「お前も人の事言えねーだろ」

不誠実な二人は、お互いにダメージを与えながら言い合っていた。
裏切り者

そんな二人に構わず、ジュールは、アルヴィンの説明に頷く。

「納得は、した。でも、まだ、信用したわけじゃないからね」

ジュールの下した決断を聞くとアルヴィンは、笑う。

「くくく、ジュール君は、かわいいね」

ジュールは、顔を険しくする。

「なんだよ！ それ！ 僕は、怒ってるんだよ！」

「わかつたって……」

アルヴィンは、そう、適当に返事をする。

「最後に一つ聞いていいか？」

「なんなりと」

ミラの質問にアルヴィンは、腕を組んで答える。

「お前が私達に肩入れをする理由を教えて欲しい。メリットがあるのか？」

そう言うつてミラは、ホームズを見る。

「ホームズは、ある意味それがはつきりしている。だから、理由を聞けば信用できる

……だが、お前は分からない」

ミラの言葉にホームズは、首を傾げる。

「……褒められてる？」

「微妙なラインだな」

頭の上に、はてなマークを浮かべているホームズにヨルは、そう答える。

「今更聞く？」

アルヴィンは、ミラの質問に対して一旦言葉を切る。

「優等生や、みんなが大好きだからに決まってるでしょーが！」

かつてない、冷たい空気が流れた。

『ウソつきやがってー！』

ティポが、エリーゼだけでなく全ての人間を代弁する。

「なんだ、それ、ちよつとヒデーじゃねーか!!」

流石にアルヴィンも傷ついたようだ。

ヨルは、欠伸をする。

「さて、下らないオチがついたところで、そろそろ宿に行くぞ」

ヨルの言葉に、ホームズとアルヴィンは歩みを進める。

しかし、ローズは止まっている。

「私は、マールウさんの所に行くわ。少し、話がしたいし」

ローズは、そう言うのと宿とは、別方向に歩き出した。

「ふむ、彼女のダメージも軽いものでは無いと思うんだけどなあ」

ホームズは、少し心配そうにローズを見送る。

蹴った本人のお墨付きだ。

ローエンは、ポンと手を叩く。

「ホームズさん、何故、ローズさんを蹴り飛ばしたんですか？」

わざわざあんな無駄な体力を使うよりも、もっと他にした方がいいことがたくさん

あつたはずだ。

「……………別に、どうだつていいだろう」

ホームズは、肩を竦める。

「当てるやろうか、ホームズ？」

面白そうに言うヨルをホームズが睨む。

「まあ、なんとなく私も分かっていますけどね」

「……………ローエン、君ね……………」

分かっているくせに聞いたのだ。

ローエンの言葉にホームズは、頬を膨らませ、ため息を大きく吐くと、頭をボリボリとかく。

「ああ、もう！おれは寝る！ローエン、余計な事を言うんじゃないよ！」

ホームズは、拗ねたようにそう言う。宿の中に消えていった。

ホームズが宿に入るのを確認すると、ローエンが口を開く。

「さて、ホームズさんがローズさんを蹴った理由ですが……………」

「余計な事言うなつて言われたばかりでしょ……………」

ジュードの引きつり笑いにローエンは、不敵に笑う。

「ええ、これから話すのは、余計なことではありませんよ」

「……………」

言葉のないジュードに代わりにローエンは、言葉が続ける。

「あの場で、ローズさんは、戦うことができませんでした。しかし、思い出してください。」

あの時の敵はホームズさんだけではありません。

城兵達も私たちの敵でした」

ローエンの言葉に、ジュードは、何かに気付いたようだ。

「もしかして、ホームズは、その相手をローズにさせようとしていたの?」

ジュードの答えにローエンは、頷く。

「役目のない彼女に、役目を与えようとしていたのですよ、そして、私たちが城兵にやられないようにね……まあ、悟らせるわけにもいかなかったでしょうが」

「……………確かに、ローズのおかげで、城兵の存在に気付けたもんね」

ジュードは、思い出すように呟く。

ジュードの言葉にみんな納得する。

レイアは、納得するとホームズの入っていった宿を見て呆れたように呟く。

「本っ当、分かりづらいつたらないよ……」

負うた子に教える。

「いらっしや……………て、何だ、ローズかどうした？」

突然の来訪にマールロウは、驚く。

ローズは、そんなマールロウに無言を貫く。

「……………紅茶でいいか？」

無言を肯定と受け取ると、マールロウは似合わない可愛らしいカップを用意する。

そして、薬缶に火をかけると薬缶を凝視する。

紅茶のお湯は沸騰直後がベスト。

美味しい紅茶を作ることにごだわるマールロウは、気を抜かない。

暫く時間が経過し、ベストだと見極めると火から外しポットにお湯を注ぐ。

そして、それぞれ二つのカップに注ぐ。

「……………ほれ」

「……………どうも」

ローズは、マールロウからの紅茶を一口飲む。

マールロウもそれを確認すると、紅茶に口を付ける。

「……………ホームズが、敵に回りました」

マーロウは、紅茶を思わず吹き出す。

「は？」

「まあ、今は和解してますけど……………」

ローズは、それに構わず紅茶を飲む。

「待て待て、何が起こったか分からん、最初から話せ」

マーロウに言われてローズは、ホームズにまつわる出来事を最初から話し始めた。



「……………なるほど、そういう話か」

マーロウは、煙管に火をつけ啜える。

「……………ええ」

ローズは、最後の一口を飲む。

「実は、ここに来たのは理由があります」

ローズは、マーロウを真剣な目で見つめる。

マーロウは、気だるげに煙を吐き出す。

「まあ、大体予想が付くが………何だ？」

「貴方は、ホームズの事をどこまで知っているんですか？」

ローズは、凜とした声で告げる。

マーロウは、煙を大きく吸い込むと吐き出す。

ローズは、煙に顔を顰めることなく言葉を続ける。

長年世話になっていれば副流煙なんて何のことはない。

「ホームズが敵に回ったと話した時は動揺したのに、経緯を話した時、貴方は、大して動揺しなかった」

ローズは、更に睨みつける。

「経緯に関して言えば、貴方は、全部知っていたのではないですか？ いや、下手すれば今話したホームズの秘密の他に貴方は、何か知っているんじゃないんですか？」

マーロウは、ローズのカップが空になっていくのに気づくと、ティーポットから、ティーカバーを外し紅茶をローズのカップに注ぐ。

「お前が知らないことは、大体知っている」

マーロウは、紅茶の入ったカップをローズに渡す。

ローズは、握り拳を作るとテーブルを殴りつけた。

派手な音が鳴り響き、ガシヤンと音を立てて、ティーカップがひっくり返る。

「……………話して下さい」

ローズは激情を隠そうともせず、マーロウを睨む。

「却下」

対するマーロウは、至って冷静だ。

というより、そろそろ聞かれるだろうと思っていたのだ。

「なんで!?!」

「ホームズが話さなくちゃいけねーことだからだ」

マーロウは、煙管を咥え直すと台拭きを探して、テーブルを拭く。

「正確に言うなら、俺がここで弟子にせがまれてしていい話じゃない」

マーロウは、椅子に深く腰掛ける。

灰皿を近づけると、煙管の灰を捨てる。

「今回の件で、ちったあ、分かったと思うが、あの馬鹿が話していないことを知ろうとすれば、気分を害するだけだ」

マーロウは、煙管をもう一度咥える。

「あいつも、それが分かっているから、言わねーんだよ……これからは特に」

「これからは？ なんで？」

マーロウは、やれやれといった風に肩を竦める。

「お前からこれから王様の所に乗り込みに行くんだろ？」

そんな時に関係のない、土気の下がる話をしてもしようがないだろ」

マーロウは、煙を吐き出す。

ローズは、何となくだが、納得する。

確かに決戦に行く前に、土気が下がる話をあまり聞いてみたいとは思わない。

ローズが理解したのを確認するとマーロウは、言葉を続ける。

「つてのが、三割、残り七割は、そんなの関係なく話したくないって奴だ」
マールロウは、空になった自分のカップに紅茶を注ぐ。

「……俺も本人から直接は、聞いていない、あいつの母親から聞いたんだが……」
紅茶を冷ましてから、口を付ける。

「……納得したよ。アレは、話したくない」

マールロウは、そう言葉を区切るとローズを見る。

「つーわけだ、悪いな」

「……仕方ないですね」

ローズは、ため息を吐くと渋々引き下がった。

「にしても、お前がちゃんとホームズの事を知ろうとするなんてな」

「……やっぱり、少し甘く見えました？」

ローズの言葉に、マールロウは、ふうと煙を吐く。

しっかりと答えない。

しかし、どう見ても行動は、肯定している。

「原因は、あの元気な嬢ちゃんか？」

「……ええ」

ローズは、俯く。

「あの時、私だけ、ホームズとの戦いに参加できませんでした。昔馴染みと、ホームズと戦うなんて、想像もしてなかったんです。

いざ、ホームズと向かい合ったら、手が震えてそれどころじゃなかった」

マーロウが、ローズのカップに紅茶を注ぐ。

「…………でも、レイアは、向かっていった。友人として、ホームズの敵になって、完全に勝利しました」

ローズは、マーロウの方を見る。

「マーロウさんの言った通りでした。

あの時、私はうかうかしていて、自分にも、ホームズにも、レイアにも負けてしまいました」

「妬いたか？」

マーロウの言葉にローズは、少し首を傾げる。

「…………あつてるような…………間違っているような…………何ていうか、こう…………経験ありませんか？自分よりも、優れている人を見ると、自分も負けたくないって思うところ」

「ないわけないだろ」

マーロウの返事にローズは、悲しそうな顔をして、俯く。

「……そして、それと同時に自分が如何に未熟かという事を理解してしまうこと」
マールロウは、煙管を置く。

ローズは、顔を下に向けたまま言葉を続ける。

「……………覚悟が足りなかったんです、私は……………この旅に同行する、覚悟が……………」
マールロウは、黙ってローズの言葉を聞いている。

声が震えているのが手に取るように分かる。

「みんな、自分の為すべき事をしようと必死だった。

レイアは友人として、

ミラは、マクスウエルとして、

ジュードもローエンもエリーゼも、それに続くように……………

裏切ったホームズにだって、為すべき事をなそうとしていた、恩を返すという為すべき事を……………でも、私は……………私だけが……………」

ローズの膝の上にポタポタと水滴が落ちる。

あの戦いは、結果としては、ミラ達の勝利となった。

しかし、ローズだけは違う。

ローズだけが、あの場に立つこともできなかつたのだ。

あの場に立つ事に尻込みしてしまった。

迷わずにホームズを倒そうと戦ったミラ。

迷いながら戦い、ホームズを止めようとしたレイア。

自分は、どちらでもない。

勝つてもいなければ、負けてもいない。

ましてや、引き分けですらない。

戦いに参加すらしていない。

ホームズと戦えなかったこと……

それは、とても優しく間違っていない。

事実、ホームズと戦ったレイアは、そう思っている。

むしろ、戦うことに迷わなかった、ホームズの方が間違っていると思っている。

しかし、あの時、ローズは気付いてしまったのだ。

自分が、この旅を、ミラの使命を、ナメていたこと、

そして、ホームズと向かい合う覚悟がなかったこと。

ただ、十年ぶりに再会したホームズと旅が出来ると浮かれていたただけだと……

「……………十年前に、ほんの僅かな期間しか過ごしてないくせに……………ホームズの何を理解しているとおもっていたんでしょね……………」

ローズは、自嘲するように言葉を吐く。

自分が弱いばかりに自分の痛みを人に押し付けたくない、そう思って剣術を習ったというのに、このザマだ。

自分がホームズと戦うという痛みをレイアに押し付けてしまった。

情けなくてしょうがないのだ。自分のいることが間違っていたと本気で肌で感じてしまう、そんな出来事だった。

マーロウは、そんなローズを黙って見つめる。

覚悟が足りないのは、何となくマーロウは理解していた。

確かに十年前の思い出は、ローズにとってもホームズにとっても忘れられないものだ。

そんな思い出のホームズと再び一緒に行動出来る。

その喜びが悪いとは、言わない。

むしろ、十七歳の少女が、その理由で動くのは、普通と言ってもいい。

しかし、軽いとも思う。

結局ローズが理解しているのは、追いかけているのは、十年前のホームズだ。

十年も経てば誰だって成長する。

自分の知らない過去を十年分持っているのだ。

そんな人間の事をローズは、理解した気になっていた。

そして、そんなホームズをローズは、追いかけていた。

これは、危うい以外の何者でもない。

寧ろよくこの程度で済んだものだと思う。

マーロウは、煙管に溜まった灰を捨てる。

「それに気付けただけ、てめーは上出来だ」

そして、再び煙管を啜え直す。

「一応聞いておいてやる、ホームズは、お前にとってなんだ？」

まず決めるべき覚悟は、ホームズと向き合うというものだ。

これを決めなければ何も始まりはしない。

マーロウの質問にローズは、涙を拭いて顔を上げる。

「昔馴染みで、そして……」

ローズは、にっこりと笑う。

「友達です」

「まずは、そこからだな」

マーロウは、にっこりと笑った。

どうやら、ローズは、ようやくスタートラインに立てたようだ。

このローズの言葉がその証拠だ。

何故これが、スタートラインに立った証拠になるか？

それは、古今東西の物語が示す通りである。

まずは友達から、と。

藍は青より青いかも？

「……なんか、話したら気が楽になったわ……」

マーロウの所で決意を新たにしたローズは、橋の上でポツリと呟く。

年長者に話すというものは、自分を見つめ直すいい機会なのかもしれない。

何せ、自分よりも長く生きているのだ。

経験から来る含蓄もローズの様な若造とは、量も質も段違いだ。

「とはいえ、これからどうしよう……」

ローズは、欄干に顎を乗せ、ため息を吐く。

それに呼応するように、先ほど戻った家から取ってきた新しい羽織が風にはためく。

気は楽になったが、悩みは尽きない。

ホームズの事もそうだが、自分自身の事もだ。

周りに比べて自分の情けなさが目立つ。

「分かっただけはいるんだけど……」

「何が？」

ローズのポツリとした呟きにジュードが尋ねる。

「うあ!!」

ローズは、心から驚き、勢いよく欄干から離れてしまい派手に転げる。

「え……ゴメン……大丈夫?」

まさかそこまで驚かれると思わなかったジュードは、思わず謝る。

「いや、別にどうって事ないわ……死ぬほど驚いただけだから」

「ねえ!本当に大丈夫?!」

ジュードの心配など、どこ吹く風と言った風にホームズは、立ち上がる。

「まあ、別にどうって事ないわ……」

「ふ、ふーん……それでどうしたの?」

ジュードの質問にローズは、眉間にしわを寄せ首を傾げる。

「なんて言うのかな……、こう、このままじゃいけないのは、分かってはいるんだけ

どって感じかしら……」

ジュードは、ローズの話の聞いて頭に指を当てる。

「もしかして、ローズ……変わりたいの?」

ジュードの言葉にローズは、ポンと手を一つ叩く。

「そう、それよ!」

ローズは、うんうんと頷いている。

「なんかさ、みんなを見ていると、私もこのままじゃダメだって思うっていうか、焦るっていうか……」

街にいた時は、気づかなかったし思いもしなかった。

しかし、ミラを見て、ローエンを見てレイアを見て、そして……

「なに？何かついてる？」

ローズにじつと見られたジュードは、思わずたじろぐ。

「いやね、なんかジュードは、頑張ってるなあと思って……」

「どういふこと？」

ジュードの質問にローズは、少し微笑む。

「ジュードは別に普通の少年でしょ。でも、変わろうと頑張ってる」

ローズは、そう言うのと欄干にもたれかかる。

「自分だけなんの変化もしてないなんて、焦るわ……特に自分よりも年下の人達が頑張つてればね」

「……そういうもん？」

「そういうもの」

ローズは、にっこりと微笑む。

「とりあえず、私はホームズと同じ土俵に立てるくらいは、変わりたいの……レイアを

見ててそう思った」

ローズは、そこで言葉を切り俯く。

「でも、それだけじゃ、私は何も変わらないでしょうね……」

今のところのローズの悩みはそれだ。

ホームズに關係する悩みが一つ減つたと思つたらまたもう一つ。

「はあく……乙女に悩みは尽きないものね」

ローズは、ふざけたように言葉を続ける。

ジュードは、そんなローズを見て微笑む。

「まあ、お互い頑張ろうね」

「そうね」

ローズは、そう答えると歩き出した。

ジュードは、そんなローズを見て首を傾げる。

「どこ行くの？」

「んー……まあ、色々」

ローズはそう言つてジュードに手を向け手をヒラヒラと振り、雑踏の中に紛れていった。



「……はあ、また来ちゃった……」

ローズは、家族の墓の前でため息を吐く。

あのホームズ達との墓参りの時に全てが終わったらもう一度来るとローズは、心に決めていたのだ。

決めていたのだが……

「このザマか……」

何処かの誰かさんの様に格好が付かない事この上ない。

「……ローズ？」

その声に戻ると、そこにはエリーゼとティポがいた。

「エリーゼ?!」

ローズは、驚いて声を上げる。
それから、首を傾げる。

「どうしてこんな所に？」

「歩いてたら、ローズが見えたから……」

『だから、ついてったんだよー』

ローズは、ティポの言葉を聞いてため息を一つ吐く。

「声かけてくれればいいのに……」

「だから、声をかけましたよ」

目的地に着いた後にだが……

呆れるローズに構わず、エリーゼは、墓石に目を向ける。

「それ、ローズのお父さんとお母さんのお墓ですか？」

「まあね」

ローズは、そう言つて静かに墓を撫でる。

全く汚れていない。

恐らく、マールウが毎日綺麗にしているのだろう。

「ローズは、寂しくない……ですか？」

エリーゼの質問にピタリと動きを止める。

「ストレートに聞くわね……でも、そっちの方が有難いわ……」

ローズは、そう言って笑う。

エリーゼの質問の答えは、その笑顔を見るだけで分かる。

「今でこそ、こうやってお墓詣りに行くけどね、昔は出来なかつたわ……」

ローズは、昔を思い出す様に言葉を続ける。

顔には、華やかな笑顔はない。

「このお墓つてのは、人がこの世にはいない証拠に見えない？ 私にはそう見えてね……それを見ると母さんも父さんも姉さんも、もう死んでいる。そんな事を自覚する事になる。」

それが堪らなくやだったのよ」

代わりにあるのは見るだけで胸を締め付けられる様な笑顔だ。

「でも、マールロウさんがそんな私の気持ちを見抜いてね、必ず月に一回は、お墓に連れて行っていったわ」

ローズは、そう言ってエリーゼの方を向く。

「まあ、お陰で家族の死にようやく私は向き合えた。だからこそ、こうして墓参りに来るわけよ」

そこでローズは、言葉を区切るとにつこりと微笑む。

「マールウさんには、感謝しているわ。やっぱり、残された身としては、お墓参りぐらいしたいもの」

エリーゼは、そんなローズの話を聞いて頷く。

「私も……お父さんとお母さんのお墓参りしたい……です」
スカートをキュツと握りしめる。

考えてみれば自分の父親も母親もお墓参りをしていない。
もう時間が経っているためもう見つからないかもしれない。

しかし、思ってるだけ、願ってるだけでは確率は、ゼロのままだ。

「だから、私も頑張り……ます！」

『住んでた所を見つけてやるー！』

エリーゼ達のそんな様子を見るとローズは、目を丸くし、そして直ぐに優しく微笑む。

「ええ、頑張ってね」

ローズは、墓石から離れる。

「さて、私はそろそろ行くわ。貴方達も早めに帰った方がいいわよ」

ローズは、そう言って墓地を後にした。



「『だから、頑張り……ます』か……」

ローズは、エリーゼの言葉を思い出しながら、道を歩きながらポツリと漏らす。

(なんかだか、本当にみんな頑張ってるなあ……)

ローズは、そう言っつて空を見上げる。

(いつまでも子供ままじゃいられないってことかしらね……)

周りが大人や大人になろうと頑張っている連中が多い。

ローズは、ようやく自分の焦りの正体に気づく。

(私だけが子供みたいだ……)

ジュードもレイアも自分と歳の近い二人との間に差を感じるのは、

ホームズとの間に距離を感じるのとは、

結局の所、そこに繋がる。

「ん？ローズか？」

「……………ミラ」

ローズは、向かいから歩いてくるミラに声をかけられ、考え事の世界から引つ張り戻される。

ローズは、ミラをジトつと睨む。

「貴方達には、私を驚かせる趣味でもあるのかしら……………」

「私には、そんなのないぞ」

「知ってるわよ……………」

八つ当たりに近い悪態を真面目に返されてしまいローズは、ため息を一つ吐く。

「それで、どうした？ローズ？先程から元気がないようだが……………」

ローズは、言葉を詰まらせる。

「……………ねえ、一つか聞いてもいい？」

「質問にもよるが……………」

ミラの言葉を肯定と受け取ったローズは、質問をする。

「この前のハートハーブの時に言っただけ、貴方の足の事……」

ローズの言葉にミラは顔を険しくする。

ホームズがいない間にローズは、ミラから事情を聞いている。

「貴方はクルスニクの槍を破壊しようとした結果、ナハティガルに捕まり、足を失った

……貴方は怖くないの？その時の事を忘れてるわけじゃないでしょう？」

ローズは、そう言っただけで何かに怯えるように肩を抱く。

「ローズ？」

ミラはそんなローズに眉を寄せながら尋ねる。

「私はね……まだ、あの、家族と過ごした家に入れないの……」

唇をぎゅつと噛みしめる。

「怖い……私の家で起きたあの夜の事が、忘れられなくて……」

「じゃあ、今暮らしてるのは……」

ミラの質問にコクリと頷く。

「マーロウさんの紹介してくれた所で暮らしてるわ」

ローズは、必死な目で見る。

「ねえ、貴方はどうして平気なの?!」

ミラは暫く黙ると口を開く。

「きつと、お前と私では、少し事情が違うだろうが……」

ローズの必死な質問に慎重に言葉を選びながら続ける。

「私にとつて、黒^{ジン}匣を破壊することは、使命だ。

マクスウエルとして為すべきことだ。

もし、私に恐怖を感じるとしたら、それは、使命を果たそうとする炎が消えることだ」

ミラの凜とした佇まいに息を呑む。

そして、知る。

自分との確固たる差を。

確かにローズの場合とは、微妙に違うものがある。

しかし、そういう事を差し引いても、差を感じざるを得ない。

「ミラは、強いね」

ローズは、心からそう言う。

自分が弱いばかりに起こった事をローズは、決して忘れない。

だからこそ、剣術を習い「強さ」を身につけたはずだった。

だが、結果は、凄惨たるものだった。

今のミラを見てローズは、気づく。

自分が身につけたのは、所詮「力」であつて、「強さ」ではない。

そして、ミラが持っているのは、「意志の強さ」だ。

これは、凄いと思うし、そして、それと同時に羨ましいと思う。

(……て、思っちゃダメよね……)

ローズは、首を振り、手を握りしめる。

確かに今のローズには、ミラ程の意志の強さは、ない。

しかし、それは、あくまで、『今は』という話だ。

(だったら、これから、少しずつ強くなっていけばいい……)

自分の持っていない無い物、意志の強さ。

それを自覚したローズが取るべき行動は、何だ？

(決まってる。自分にそれが無いのなら、持てばいい……その為には……)

ローズは、握り拳を胸に持って行き、顔を上げる。

「ミラ」

そうやってミラを見るローズの目に宿る光は、先程までの弱々しいものではない。

「なんだ？」

ローズは、自分の決意を告げる前に一つ呼吸をする。

「私は、貴方に追いつく。

そして、私は、自分を……こんな情けない自分を、変えてみせる」

今のローズの目に宿る光は炎のように明るい。

「本当の意味で強い人間になってみせる」

真っ直ぐに目を見て告げるローズを見て、ミラは少し驚いた後、真剣な顔になると口を開く。

「私はどうすればいい？」

「ただ、見届けてくれればいいわ。私が、貴方に追いつくその時を」

ミラはローズの決意表明を受け、柔らかなく微笑む。

「わかった。見届けよう」

ミラの笑顔にローズも釣られる様に微笑んだ。



「やれやれ、落ち込んでるかと思っただけど……」
レイアは、物陰からローズとミラを伺いながら、そう呟く。

「心配ないみたいだね」

元気な笑顔を見せるローズを見るとレイアも微笑み、その場所を後にした。

三者三様の空模様＋1

「さてと」

笑顔になったローズを見送ると、マールウは紅茶の片付けを始めた。

「……と、やっぱりやめとくか……」

マールウは、入り口の方を見る。

そこには、ローズとは違う人影があつた。

「あんた、たしか……」

「ローエンとお呼び下さい」

マールウは、目を丸くすると新しいカップを出す。

「……酒ならぬぞ。ちよとど切らしてるからな」

「紅茶でいいですよ」

「待ってろ」

そう言うのと先ほどの手順で、紅茶を注ぐ。

ローエンは、マールウの出した紅茶を飲んで少し驚く。

「……美味しいですね……どんな茶葉を？」

「内緒だ。秘密をスパイスにしてくれ」

「ふふふ」

ローエンは、微笑んでいる。

マールロウは、そんなローエンを見ると煙管を啜える。

「で、あんた一人か？」

「ええ、少しローズさんの様子が気になっていたのですが……」

そう言つて、カップをテーブルの上に置く。

「大丈夫そうですね」

マールロウは肩を竦める。

「手間がかかつてしゃーないぜ……弟子なんて取るもんじゃないな……」

「その割に楽しそうですね」

ローエンの言葉にマールロウは、キョトンとすると面白そうに笑う。

「……で、何をしに来たんだ」

「お礼に来ました」

「お礼？」

「エリーゼさん達の件尽力して下さいありがとうございます……で、どんな手を使ったんですか？」

「……誰から、聞いた？」

「ホームズさんが。まあ、あの人も詳しくは分かっているようでしたが」
マーロウはキセルに火をつける。

「ああ、別に大したことじゃない」

キセルをもくもくと吹かしながら、なんて事なさそうに答える。

実際は、とんでもなく無茶な手だった訳なのだが……

「……答える気はないですか？」

「まあ、言っちゃってしようがないからな」

キセルの灰を灰皿に落とす。

ローエンは、しばらくマーロウを見ると紅茶に再び口をつける。

「まあ、この話はこの辺にしておきましょう」

「なんだ、まだあるのか」

「ローズさんの事です」

ローエンは真剣な目でマーロウを見る。

対するマーロウは、キセルを吹かす。

「あいつの好きな奴はホームズだ」

「そんなの見てれば分かります。そうでなくて……マーロウさん、リアルオーブル

持つてますか？」

「ま、一応な。貴重品だから、一つが限度だが……」

「それです」

ローエンが、マールロウを見る。

「リアルオーブは、貴重品です。そんな物をどうして……こう言つては何ですが、一般人のローズさんがもっているのですか？」

ホームズ達は知らないが、ジユードやレイアは、実家を離れる時に念のためと言つて持たされていた。

ミラも似たようなものだ。

因みにエリーゼは、ティポが落ちていたものを拾い食いだしたのだ。

アルヴィンとローエンは言わずもがな。

だが、ただの剣術を習つただけの女子が何故もっているのか？

黙つたマールロウにローエンは更に言葉を続ける。

「ついでに聞きますが、リアルオーブをローズさんに上げたのは誰ですか？」

「誰だと思う？」

マールロウの言葉にローエンは、順序立てて話を進める。

「あなたは、ローズさんがリアルオーブを持つていることを知っていた……では、

マーロウさんがあげたのか？ 答えはNOです。

何故なら、マーロウさん自身がさっき自分で言いました。

『貴重品だから、一つが限度だ』と。

しかし、ローズさんはマーロウさんから貰ったと言っていた……」

「いいね、面白くなってきた。軍師殿の実力が見てみたい。黙って聞いててやる」

マーロウは、含み笑いをする。

ローエンは、更に言葉を続ける。

「おかしいです。誰かが嘘を言っているのか？ いや、実は違うんです」

「とうとうと？」

ローエンは、あごひげを触る。

「簡単な話、マーロウさんが誰かからリリアルオーブを貰い、それをマーロウさんが

ローズさんにあげる、こうすれば辻褃が合います」

ローエンの言葉にマーロウは、ニヤリと笑う。

「当たり前だ。ここで、俺が誰から貰ったかまで当てれば、百点だな」

「では、百点を貰いに行きましょう」

ローエンは、指を一本立てる。

「ホームズさんのお母さん、違いますか？」

マーロウは、少し目を丸くすると煙を吐き出す。

「根拠は？」

「ホームズさんです」

マーロウは黙ってキセルを加え直す。

ローエンは、それを見ると静かに、そして、一気にまくし立てる。

「ローズさんの家族が殺されたのは、ホームズさん達が去った後でしょう。」

ローズさんとホームズさん、そして、ヨルさんの話を聞いてみると、ホームズさんはあの別れ以降ローズさんには、会っていません。

何故かは分かりませんが、立ち入り禁止になってしまいましたからね。

しかし、ホームズさんは、ローズさんに起こったことを知っていました。

何故か？恐らく、ホームズのお母さんが突き止めたのでしょう。

それをホームズさんに話した。

だから、ホームズさんは、知っていた」

マーロウは、黙って聞いていたが少し眉をひそめる。

「それが、何の関係があるんだ？」

「ローズさんは、言っていました。リアルオーブをもらったのは、家族がアルクノアに殺された直後だ、と……こういうのは、どうでしょうか」

ローエンは、紅茶に口をつける。

「ホームズさんのお母さんは、その事を知った。まあ、どうやってかは、知りませんがね。それを知ったホームズのお母さんは、こう考えた、『まだ、脅威は去っていない』と。実際、アルクノア側の人間である、イスラさんがいたんですから、この読みは、当たっていました。」

そこで、こう思った、『自分の息子の友人を危険に晒したくはない』

とはいえ、行人人である二人がずっと側にいるなんて事は不可能です。

そこで思いついたのが……」

「リアルオーブ」

「そうです。リアルオーブを渡す事により、自分で自分の身を守るようにした……どうですか、この仮説は？」

マーロウは、ニヤリと笑う。

「当たっている。細かい事情を知らないで良くそこまで考えたもんだ。」

……だが、少し根拠が弱い」

「とうとうと？」

「ホームズの母親が知っていたという考えがだ……実際に当たってはいるんだが、少しこじつけに聞こえる」

ローエンは、静かに首を横に振る。。

「いいえ、だから、最初に言いましたよ、『ホームズさんです』と」

マーロウは、ローエンの言葉を聞き少し思案する。

そんなマーロウに構わずローエンは、続ける。

「いいですか、その時街にいなかった、ホームズさんがローズさんに起こった出来事を知っている……これは、何処かからその情報を知ったということですよ」

「そこだよ、一番弱いのは」

マーロウの言葉にローエンは、首を横に振る。

「いいえ、ここが一番の肝ですよ」

「いや、だって、ホームズが知っていたからって、ホームズの母親が知っていたのが、少し厳しくないか？ホームズが先に突き止めて黙っていたって考えはないのか？本当の事を言わないあいつの性格なら、黙っていたって不思議じゃない」

「いいえ。ホームズさんが友人の危機を知ったら真っ先に、相談します、自分の母親に

ね」

マーロウは、ようやく納得が言ったようだ。

「そう、一番考えやすいのは、ホームズさんのお母さんがホームズさんに教えたということなのですが、逆のパターンだって、十分にあり得るんですよ。

なにせ、化け物と呼んでいるお母さんなのですから、友人の家族が死んだという事を知れば、相談しない理由がありません」

ローエンは、仮説を話し終えると、につこりと微笑む。

「いかがですか？」

「文句無しだ」

マーロウは、拍手を送る。

その後キセルの灰を灰皿に捨て啜え直す。

それから、事の顛末を話し始めた。

「あの女は、ローズの家族の事があつてから、数日後、俺の所に来た。『これをローズちゃんに渡しておくれ』と言つてな。その時アルクノアの存在を説明したんだ」

マーロウは、煙を吐く。

「それから、こうも言っていたな、『悪いけど、君には監視役を任せたい。師匠として彼女を守つてやつておくれ。アルクノアの事もちゃんと説明しておきたまえよ、彼女に

危ないと言っておかないと、奴らどこに潜んでいるか分からないんだから。ま、私も一応、手は打っておくけどね』てな感じだ」

マーロウの言葉にローエンは、ホームズの言葉が脳裏によぎる。

——「君の事を散々脅しつくした、女の息子さ」——

「打った手というのは、まさか……」

ローエンの様子を察してマーロウは、顔を暗くする。

「恐らく、死ぬほど脅したんだろう。気のせいじゃなければ、翌日、イスラの指に包帯がしてあった。お陰で、誰が監視しているのか、おれには分かったがな……」



ローエンが一つの事実に辿り着いた時、ホームズの部屋に来訪者が来た。

「……何の用だ？」

ヨルがむくりと起き上がり、扉の近くに立つ男を睨む。

「チャラ男」

「酷いあだ名……アルヴィンと呼ぼうぜ」

「気が向いたらな。それで、何の用だ？」

アルヴィンは、ニヤリと笑う。

「仲間が傷付いたんだったら、心配するのが当然でしょうよ」

「そうだな、俺だったら、同じ裏切り者同士、何か余計な事を喋っていないか心配になるな。自分が傷付くから」

ヨルの言葉に、アルヴィンは、にこやかな目をスツと目を元に戻す。

ヨルは、眠っているホームズを一瞥すると、言葉が続ける。

「安心しろ、余計な事は言っていない。言った事と言えば、せいぜい、お前から手紙を預かった、ということぐらいだ」

「……それを信じると？」

「ククク、お前が言うのか……」

ヨルは、面白そうに笑うとアルヴィンを見据える。

「気になるんなら、他の連中にでも尋ねたらどうだ？」

「……わかった。確かに、俺の事をベラベラ喋ってもお前らに得はないからな……」

「どうだか、お前の事を手土産に裏切り者である、俺とホームズの株を上げるという手もあるぜ」

ヨルの物言いにアルヴィンは、ニヤリと笑う。

「それは、俺にも言えることだ。嘘と本当を織り交せてな」

アルヴィンは、ヨルを真っ直ぐ見る。

嘘全部よりも本当全部よりも混ぜられた方が人間は、信じやすい。

「ま、俺は何も言わないがな」

ヨルは、どうでも良さそうにアルヴィンを脅し返す。

直訳すると、それをしたらヨルの知っているアルヴィンの事を全て話すと脅しているのだ。

アルヴィンは、ため息を吐くと椅子にどっかりと腰掛けてヨルを見る。

化かし合いはどうやら、引き分けに終わったらようだ。

「つくづく、食えない奴だな」

アルヴィンの言葉をヨルは、鼻で笑う。

「化かし合いで化け物種が負けるかよ」

アルヴィンは、少し顔を顰める。

相変わらず人の数歩上を平気な顔して歩いている。

そんなヨルを見てある事に気付く。

「そんなお前を手玉にとったホームズって……」

恐れを覚えたアルヴィンにヨルは、口を開けて牙を見せる。

「やってみるか、化かし合い？」

「せいぜい、大怪我してろ」

「……遠慮しておく」

アルヴィンは、大きくため息を吐く。

そんな危ない橋を渡ってまで勝利の美酒を味わうことを目指したくない。

アルヴィンは、ホームズの寝顔を見ながら口を開く。

「どうやら、もう少し仲良くした方が良さそうだ」

「懸命な判断だな」

ヨルは、大きなあくびをする。

「なあ、お前は、ミラの事をどう思ってる？」

「敵」

アルヴィンの質問にヨルは、簡潔に答える。

そして、アルヴィンの思惑を見透かすように言葉を続ける。

「そして、お前も敵だ。味方して貰えるなんて思わない事だ」

アルヴィンは、ヨルの言葉に肩を竦める。

「別に何も言っていないだろ」

「貴様のような人間の考える事なんて、今更言葉で聞く必要もない」

ヨルは、見下すようにアルヴィンを見る。

「……そんな生き方ばかりしていると、ろくな目に合わんぞ」

ヨルの言葉にアルヴィンは、肩をすくめる。

「忠告どうも。お前が心配してくれるなんて、思わなかったよ」

ヨルは、一瞬キョトンとした顔をするが、直ぐに面白そうに笑う。

「馬鹿か、お前は」

口角を釣り上げ、白い牙をととも楽しそうに見せる。

「忠告じゃない、予言だ。賭けてもいい、お前の様な奴はろくな目に合わせないし、ろくな目にも合わない。その時まで一緒にいるか微妙だが……」
そこで言葉を区切ると、尻尾でアルヴィンを真っ直ぐに指す。

「せいぜい、後悔にまみれて生きるがいい」

アルヴィンは、楽しそうに笑うヨルを睨む。

そして吐き捨てるように言う。

「……つとに……流石化け物と言った所か」

「そういう事だ」

アルヴィンは、肩をすくめると扉へと歩き出す。

ヨルを利用する事はどうやら、不可能なようだ。

人間とは違う、ミラとも違う、アレは真正銘の化け物だ。

利用しようとするだけで怪我をするレベルだ。

シャドウもどきの名前は伊達じゃない。

まあ、そんなヨルをホームズは、手玉に取った訳だが……

アルヴィンは、そこまで、考えてふと疑問に思った事を訪ねる。

「ああ、そうだ興味本位なんだが……」

「なんだ？」

「どうして、お前、シャドウもどきなんて呼ばれてるんだ？」

ヨルは、嫌そうな顔をした後口を開く。

「シャドウと同等の力を持ったからだ」

「本当か？」

「どういう意味だ？」

「だって、シャドウは精霊術を食べないだろ……つか、精霊術を食う奴なんてお前くらいなものだ……それって、同等っていうのか？」

ヨルは、少し考え込むとニヤリと笑う。

「いいところに気がついたな、ま、気が向いたら話してやるよ」

「それ話さないと同義語だよな」

「さてな」

ヨルの言葉を背中で聞きながらアルヴィンは、扉を静かに閉めた。

「……………腹に一物抱え目的に挑む、か……………」
ヨルは、消えていったアルヴェインの姿を思い出し、ポツリと零し、そして、眠っているホームズを見る。

「いつの世も変わらん、人間というものは……………」

ヨルは、欠伸を一つしてもう一度眠りの中へと落ちていった。



「やれやれ、今度こそ片付けだ」

マーロウは、そう言つてコップを綺麗に洗つていく。

カップを洗っている時、不意にあの時の事を思い出す。

『……………というのが、ローズちゃんの家族殺しの真相だ。てなわけで、マーロウ、このことは誰にも話すんじゃないよ、もちろん、ローズちゃんにもね』

「んなこと言つたつて、時間の問題だと思うがね…………」

マーロウは、最後のカップを洗い終え、そのまま自分の部屋へと戻つていく。

束の間の休息が終わるのを肌で感じながら…………

マーロウの元にガイアス王からの通達が届いたのは、この直ぐ後だった。

舞台は整い、役者が揃う。

ホームズ達の正念場は、もうすぐだ。

ラ・シユガルへ

天から下るこの気持ち

「よしー！」

ホームズは、ポンチヨを羽織り、靴紐を結ぶ。

そして、部屋の中の鏡に立つとアホ毛をいじり始める。

一晩寝たことにより、ホームズの体調は、周りが呆れるほど回復した。

「流石、ジュード君、おかげで助かったよ」

「……これからは、気をつけてよ」

ジュードは、ため息を吐く。

刀を腹で受け止めるなんて馬鹿みたいな行動は、これつきりにして欲しいというのがジュードの思いだ。

「まあ、考えておくよ」

今度も同じ治療をやる羽目になりそうだ。

「ホームズさんも懲りませんね……」

ローエンは、呆れている。

「優等生も大変だねえ」

「アルヴィン代わってよ……」

ジュードは、ため息を禁じ得ない。

「俺としては、殺されなければ、いくらでも食らっても構わないがな」
そんな中、ヨルが、ホームズの肩から白い牙を見せてそう言う。

「君は、本当に優しいね」

ホームズは、どうでもよさそうに返すとアホ毛を一本立てる。

「お待たせ。さ、行こうか」



一行は、ロビーで合流すると、そのままワイバーンの檻のところを歩いていった。

「どう、ホームズ調子は？」

ローズの質問にホームズは、手を振る。

「バツチリ。睡眠で偉大だね。君は？」

「同じくつてところね、そう言えばレイアは？」

「わたしも大丈夫だよ」

レイアは、エツヘンと胸を張る。

それから、何かを考え込む。

「そう言えば、ホームズ、あの時の守護氷槍陣の事だけどさ……」

「話題変わりすぎだよ……どうなんっているんだい、君の頭」

ホームズは、片眉を上げる。

しかし、そんなホームズに構わずレイアは、続ける。

「槍じゃなかったんだけど、柱だったんだけど」

それから、ニヤリと笑う。

「どうして？」

ホームズは、その顔を見て全てを察した。

(この子気付いてるな……)

ホームズは、面倒くさそうに顔を歪める。

「何、言わなきゃダメなの？」

「ええ、ホームズさんの実力に関わる問題ですので」

ローエンもにこやかに笑っている。

ローズも途中で気づくとニヤニヤしだした。

「ホームズ、この期に及んで、隠し事とは感心しないな」

何も気づいていないミラが追い打ちをかける。

ホームズは、観念した様のため息を吐く。

「槍になんてしたら、柱とは比べ物にならない怪我をしちゃうだろう、下手すりゃ死んじゃうよ」

ホームズの言葉にミラは、ポカンとした顔をする。

アルヴィンは、対照的にクスクスと笑っている。

その生暖かい空気に耐えられなくなったホームズは、顔を背ける。

「優しいね、ホームズ君」

アルヴィンの言葉にホームズは、肩をすくめる。

「ほら、おれって紳士だから」

『鏡見てから、いえー』

ティポの言葉に心底傷ついた顔を見るとホームズは、話し始めた。

「まあ、殺すつもりは、なかったからね。最初から足止めする事が目的だったし……」

「なるほど、手加減していたのか？」

ミラの言葉にホームズは、目を丸くした後大笑いする。

レイアに至っては呆れ顔だ。

「手加減なんてしてなかったよ、ホームズは……」

レイアは、ため息を吐く。

ホームズのどの攻撃にも手加減なんて物はなかった。

常に全力だったと言ってもいい。

「よく分かっているじゃないか、レイア」

ホームズは、目元に薄っすらと涙を浮かべると頭にはてなマークを浮かべているミラに説明する。

「何も殺す気でやるだけが、全力勝負というわけでもないんだよ」

水槍陣がいい例だ。

確かに槍ではなく柱だった。

しかし、そうは言ってもスピードタイミング、パワー、どれを取っても手加減のこの字もなかった。

ミラも自分の腹を蹴られた事を思い出す。

「なるほど、理解した。お前は、そんなもの手加減とは縁遠いところにいるということだな」

ホームズは、悪戯っぽく笑う。

「頼まれたら、考えてあげるよ」

「そして、実行しないんだろ」

ミラは、ホームズを見ながらそう告げる。

ヨルは、肩で聞いていてニヤニヤする。

「大分、分かってきたな、オンナ」

ホームズは、オールドアップをする。

そんな事を話していると、ワイバーンの檻に着いた。

ユルゲンスが腕を組んでお待ちかねだ。

「もう出発するか？」

「頼む」

ミラの言葉を聞くとユルゲンスが檻を開ける。

四頭のワイバーンとご対面だ。

「四頭？」

ローズは、首を傾げる。てつきり、一人一頭かと思っていたのだ。

「そうだ。だから、悪いけど二人で一頭に乗ってくれ」

「分かった」

ミラは、そう返事をする。

「組み合わせは……………」

ホームズは、どうするかと考える。

とりあえず、エリーゼとレイア、それからローズとレイアというのは無しだ。

どう考えても力が足らず、ワイバーンを制御出来ない。

ホームズが考え込んでいる間にミラが指示を出す。

「アルヴィンとエリーゼ、ローエンとレイア、ホームズとローズ、そして、余った私とジュードでいいだろう」

「ま、妥当だな」

ヨルの言葉に皆頷く。

そして、それぞれワイバーンに乗る。

迷いなく乗る面々を見てローズは、首を傾げる。

「もしかして、みんな乗ったことあるの?」

そのローズの問いに一同は、口を揃えて答える。

『『あるわけないだろ（でしょ）』』



「うわあああああー!!」

大空に響き渡るジュードの声。

只今一行がいるのは、地上百メートルの場所だ。

まあ、言うまでもないことだが、落ちれば無事では済まないだろう。
そんなところをホームズ達は……………

言うことを聞かないワイバーンを必死に操っていた。

「くっ……！」

ミラは、必死に引つ張る。

ジュードと違い、ミラには、獣隷術なしでワイバーンを従えるという力を持っているのだ。

だから、代わったのだが、思いの外上手くない。

「わああああ!!落ちる!落ちるう!」

レイアは、ローエンが操るワイバーンで声の限り叫ぶ。

「意外に、難しいですね……！」

顔を険しくさせながら、手綱を引つ張る。

しかし、言うことを聞く様子はない。

「真っ直ぐ飛んで欲しいですー！」

エリーゼ達のところも似たようなものだ。

アルヴィンの言うことを全く聞かない。

『しつかり、操縦しろー!!』

「うるせえ！黙ってる！」

「あばばば」

よっぽど余裕がないのだろう。

いつものチャラチャラしたもののいいとは、かけ離れている。

では、ホームズ達は？

「だあああああー!!」

どこの組み合わせよりも暴れていた。

「ちよつと、ホームズ！」

ちなみに手綱を握るのはホームズだ。

ローズは、ホームズの腰に抱きついている。

せっかくのシチュエーションだが、ロマンもクソもありやしない。

「クソ！全然言うこと聞かない！どうなってるだいい！」

ワイバーンは、右へ左へと忙しい。

周りを見てもみんな苦勞しているが、ホームズ達のは格別だ。

そんなワイバーンを見て、ホームズはある事に気づく。

「なんか、この子怯えてないかい？」

そう行動が明らかに挙動不審なのだ。

ローズもホームズの言葉に頷く。

そう考えれば色々納得がいく。

「なんか、まるで得体の知れない物を恐れているかのような……………」

ホームズは、ある事に思い至り、フードの中にいる奴を見る。

「君、自分の事、なんだと思ってる？」

「化け物。得体の知れない、な？」

ヨルは、ホームズの言葉に流し目で答える。

つまり、ヨルに怯えてワイバーンは、暴れ回っていたのだ。

仕方ないと言えば仕方ない。

何せ、自分の背中にいるのは、リーゼ・マクシアを滅ぼしかけた化け物。

そして、ヨルの話を鵜呑みにするなら、ワイバーンはヨルとの戦いで使用されている。

ワイバーンに刻み付けられた先祖から恐怖を察知したのだろう。

ホームズの堪忍袋が破裂し、手綱を掴みながら叫ぶ。

「こんの……クソ猫!!今すぐ降りたまえ!そして戻ってくんない」

「それが出来たら苦労しない」

「だったら、ミラみたいにワイバーンを大人しくさせておくれ!!」

「さっきも言ったろ。無理だつて」

「本ツ当に使えな……いー!!」

ホームズの文句が言い終わる前にワイバーンは、急下降した。

暴れながら、海に向かって一直線に落ちていく。

「ホームズ!!」

「言われなくて……も!」

ホームズは、手綱を力の限り引つ張りギリギリのところまで、墜落を免れる。

しかし、今度は、石柱に向かって飛んでいる。

このままでは、激突してしまう。

恐怖に動揺しているのだろう。

ワイバーンもタダではすまないというのに、避ける気配がない。

「この、クソワイバーン！ちったあ、言うこと聞きたまえよ!!」

ホームズは、手綱を引っ張るが言うことを聞く気配はない。

このままでは、待ち受ける運命は、火を見るよりも明らかだ。

「調子に………乗んな!」

ホームズは、リアルオーブを活用して最大限の力で手綱を引く。

突然来た強い力にワイバーンは、驚くと、そのまま柱ギリギリのところを飛ぶ。一歩間違えば足をかすってしまいそうなどころを全力で上空へと飛んでいく。

歯をくいしばって、どうにか安定させる。

そして、そのまま雲の上へと躍り出た。

「ふん!」

ホームズは、手綱でワイバーンを何とか制御して飛ぶ。

「ホームズ」

「なんだい?」

ローズの言葉に、ホームズは、漸く周りの景色を確認する。

「これは……」

ホームズは、思わず息を飲む。

自分の足元に広がる雲、そして、地上にいる時よりも遥かに強い光を放つ太陽。綺麗、というのが一番だろう。

「すごいねえ……これは」

ホームズは、そう言つて目を丸くする。

「本当に……」

ローズは、思わず微笑む。

先程までの騒ぎが嘘のように穏やかな時間が流れる。

ヨルも珍しく、表情を柔らかくして、その景色を眺める。

「長生きはするもんだな」

「君が言うと言得力が違うね」

何せ二千年以上生きているのだ。

ヨルは、ホームズの言葉にクスリと笑つた後、すぐに顔を顰める。

その突然の表情の変化にホームズは、怪訝そうに尋ねる。

「ヨル？」

「来るぞー！」

ヨルの言葉と共に雲が蹴散らされる。

現れたのは、巨大な竜だった。

「なんだ……こいつは?」

アルヴェインは、思わず口走る。

とりあえず、友好的でない事だけは確かだ。

「降りよう!!」

ジュードの言葉と共に一行は、下降していく。

しかし、竜は、追ってくる。

おまけに、火まで吐いてくる始末だ。

「クソーどうして、追ってくるんだ、あの子は!？」

ホームズの悪態を背中で聞きながら、返す。

「恐らく、うっかりあの馬鹿の縄張りに入ちまったんだろな」

「……それか、エサか。つて所かい？」

「そういうことだ」

そんな事を話していると火の球が吐き出される。

ホームズ達にはギリギリで当たらなかつた。

しかし、ホームズを逸れた火の玉は、そのままジュード達のワイバーンの翼に当たる。

翼を負傷したワイバーンは、そのまま真つ逆さまに落ちていった。

「ジュードー！」

レイアが叫び、皆は彼らのワイバーンを追う。



「くっ！」

ミラとジュードは、何処かの広場に不時着した。

その場からどうにか立ち上がろうとする。

何とか怪我もせずに済んだが、衝撃が体から抜けない。

そのフラフラとしている所を魔物、プテラロングは、襲いかかる。

「ジュードー！」

ジュードが振り返るとプテラロングが迫っていた。

迫りくる、ワイバーンをアルヴェインが、大剣で防ぐ。

しかし、あつさりと振り払う。

アルヴェインは、空中で一回転をすると着地をする。

「アルヴェイン……！」

アルヴェインの突然の行動にジュードは、驚く。

「っだああああ!!」

その間に、遅れてやってきたホームズは、勢いをつけた飛び蹴りをプテラロングにお見舞いする。

アルヴェインは、ジュードに背を向けて、プテラロングに銃を構える。

「今はよそ見して暇はないぜ」

戦いの火蓋は、切って落とされた。

天は二物以上与える

「というか、ここって……」

ホームズは、辺りを見回す。

見覚えのある街並みに、見覚えのある風車、そして、ホームズが気まずい思いをしたあの、見覚えのある屋台。

「カラハ・シャルルだったのかい……」

そう言つて広場で羽を広げ叫んでいる魔物、プテラロングを見る。

「……………厄介なことだ」

ホームズは、プテラロングを睨みつける。和やかな広場とは不釣り合い過ぎてため息が止まらない。

突然の魔物の襲来に一般の民衆たちは、出来るだけ距離をとつたり、店から離れたりしている。

「にしても、デカイなあ……」

巨大というのは、それだけで強味だ。

だというのに……

「火も吐いて、空も飛んでつて……二物与えないでおくれよ……」

「グチ言つてないで、とつとと構えなさい！」

泣き言を言っているホームズにローズがげきを飛ばす。

「へいへい……」

ホームズは、足にグツと力を入れ、飛び上がる。

「飛燕連脚!!」

回転しながら、ホームズは連続の回し蹴りを叩き込もうとする。

しかし、プテラロングは、翼で応戦する。

そして、そのまま地面に向かって叩き落す。

ハンマーズファームの時とは比べものにならない怪我を追う羽目になるだろう。

(ヤバイ……!)

「ジャリ!!」

ヨルの呼び声にエリーゼが、ティポライジングで、駆けつけ、ホームズを支える。

「うっ……」

とはいえ、男の体重を片手で支えるのは、いくらリアルオーブがあろうと無理である。

直ぐに緩やかに着地する体制に入る。

「サンキュー、エリーゼ」

ホームズがお礼をすると直ぐに顔を険しくさせる。

「ホーム……?」

戸惑うエリーゼをホームズは、脇に抱えて横に跳ぶ。

エリーゼが驚いていると先ほど自分達のいた場所から炎が上がる。

『ぎゃー!!』

その威力を目の当たりにしたホームズは、顔を引きつらせる。

「……ヨル、アレ食べれる?」

「精霊術ならな」

「アレは?」

「精霊術に見えるか?」

「だよね……」

「いいから降ろして下さい」

ホームズの脇に抱えられたエリーゼが、ホームズとヨルの情けない会話を止める。

すつかり、エリーゼの存在を忘れていたホームズは、下ろそうとする。

しかし、その間もなくプテラロングがホームズに襲いかかる。

「クソツタレ！」

ホームズは、構える。

「守護氷槍陣!!」

今度は、柱ではない。白く煌めく氷の槍がプテラロングを襲う。

動きが止まったのは、一瞬のだった。

氷の槍を翼で砕き散らすとら再びホームズ達に襲いかかる。

「……マジ？」

『ホームズ！なんとかしろー!!』

「んなこと言ってたって……」

ホームズは、そう言っただけで気付く。

(さつきから、おればかり狙われているような……いや……違うな……)

ホームズは、そう言っただけでヨルを見る。

「君を狙ってる？」

「ご名答。どうやら、忌々しいことに俺の事をエサだと思っただけだ……ワイ

バーンよりも頭が悪そうだ」

しゃあしゃあと言うヨルにホームズは、頬を引きつらせる。

「厄介事をもってくるのは、いつだって君だよなあ」

そう言いながらエリーゼを両手で抱える。

「二割は、お前だ」

「八割を担つてる自覚は、あるんだね」

「……あの、さつきから何を……」

戸惑うエリーゼに構わずホームズは、ジュードを呼ぶ。

「ジュード!!」

そして、そのままエリーゼをジュードに向かつて放り投げる。

「きやあああああ!!」

『嘘————!!』

ジュードは、突然の事に驚いたが、なんとかキャッチする。

そして、ホームズと一番最初に戦った時の事を思い出す。

「あの時も同じことしてたよね……」

ため息が止まらない。

ホームズは、ジュードが無事にエリーゼをキャッチするのを見届ける。

これでプテラロングに狙われるのは、ホームズのみとなった。

エリーゼの安全を確認し、ほっと胸を撫で下ろすホームズに、後ろからプテラロングが近づく。

ホームズは振り向きざまにプテラロングの顔面に回し蹴りをする。

驚いたようにホームズの歩幅にして、半歩下がった。

顔面にホームズの蹴りを食らい、半歩下がったプテラロングは、お返しとばかりに翼でホームズを襲う。

「ぐっ!!」

盾で防ぐが勢いを殺し切れず、ホームズは、商品を飛び散らせながら、出店に派手な音を立てて頭から突っ込む。

「ホームズ!!」

ジュードは、思わず叫ぶ。

プテラロングは、追撃をしようとホームズの元へ行こうとする。

しかし、その行く手を防ぐ人影が現れる。

「アルヴィン!」

「任せろ!」

ローズの声にアルヴィンが大剣を構える。

「飛天翔星翔!!」

いつもと違い打ち上げると言うよりは、真つ直ぐ飛ばすという形にし、ローズに勢いをつける。

ローズは、その勢いのまま、背中を二刀で切る。

「グギャアアア!!」

痛みにプテラロングは、叫ぶ。

そして、ホームズ達を背にし、今度は、ローズにターゲットを絞る。

ローズは油断なく構え、プテラロングの突進をかわす。

「……！」

ただ、かわすだけでなく、同時に刀で斬りつける。

「アルヴィン！ 援護お願い！」

そう言うところでは、詠唱を始める。

「来たれ、正義の雷……！」

「……人使いの荒いこつて……！」

アルヴィンは、忌々しそうに言うところでは、プテラロングに銃を構える。

「ヴァリアブルトリガー!!」

引き金を引くと同時に銃弾が、プテラロングを襲う。

「祖は、ツボ剣となりて……！」

ローズの詠唱は、中盤に差し掛かっている。

「ついでだ」

アルヴェインは、それを確認すると、怯んだ隙に剣と銃を合わせ、チャージする。

「チエイスキヤノン!!」

そこから放たれて三つの銃弾がプテラロングに向かって放たれるが、回復したプテラロングは紙一重でかわしていく。

アルヴェインは、かわしたプテラロングを見てニヤリと笑う。

「バーン」

すると、かわされた弾丸が弧を描き三発全てが襲いかかる。

「ま、ズルと卑怯はホームズだけの特権じゃないって事だ……ローズー!」
相手が動きを止めた今がチャンス機会だ。

「あのバカを裁け!!」

ローズは、閉じた目をカッと開く。

「サンダーブレード!!」

劍ツルギの形を纏った刀が、プテラロングに突き刺さり、雷撃の波を放って弾け飛ぶ。

まさかの攻撃の連続にプテラロングは、雄叫びをあげ、高度を下げる。

そして、自分をこんな目に合わせた人間ローズをギロリと睨む。

そして、もう一度雄叫びを上げるとローズに向かって突進する。

ローズは、刀を構え、ジリジリとタイミングを計る。

「来たわね……ローズン!!」

「お任せを……」

ローエンの精霊術が完成する。

冷気がローエンの前で収束されていく。

「フリーズランサー!!」

しかし、プテラロングは、氷の矢を避ける。

当たらなかった氷の矢は、プテラロングの後ろへと降り注ぎ、砂煙スチが舞い上がる。

どうやら、プテラロングはこの攻撃を読んでいたそうだ。

「……なるほど」

ミラは、そんなプテラロングの動きを感心したようにみると、精霊術の待機を止め、発動させる。

「スプラッシュ!!」

プテラロングの上空に現れた水亀は、その蓄えられた水をプテラロングに注ぐ。

完全に不意打ちの攻撃に、空中でのたうち回る。

「ローエンの言った通りになったな」

「ええ、この程度の誘導なんてお茶の子さいさいです」

いきなりの連続でプテラロングは、頭に血が上っていた。

自分に楯突いた人間全てに裁きを下すため、羽を広げ、周りを巻き込むように回ろうする。

その時、プテラロングの背後で砂煙を上げている出店から、ドン!という音が響き渡

り、出店が吹き飛ぶ。

そして、吹き飛んだ出店が、プテラロングに当たる。

「ガア？」

プテラロングは、奇妙な声をあげ振り返る。

振り返った先は、砂煙に包まれている。

しばらく見ていると、徐々に晴れていき、ポンチョはためかせ、剛照来のオーラを纏ったホームズと、生首になっているヨルの姿が露わになる。

「……まさか、ヨルに精霊術を食わせるのが目的だとはね……もつと早く説明してよ」

ホームズは、ローエンの方を見る。

すると、ローエンは、静かに微笑む。

そう、最初からそれが目的で、ローエンは、フリーズランサーを放つたのだ。

プテラロングになど初めから当てるつもりなどなかった。

「助かったが……一応、今後の為に言っておくが、俺は強すぎる光属性の精霊術は、食えないからな」

ヨルは、ギロリとひと睨みすると、巨大生首から、いつもの猫の姿に戻る。

「どつちで行く?」

「非常識の方で」

「……」

ホームズのネーミングセンスにヨルは、若干顔を引きつらせると口から球を吐く。

ホームズの足に当たり砕けた球は両足に黒い霞を纏う。

「覚悟したまえよ、クソトカゲ」

そう言つてホームズは、プテラロングへと駆け出した。

「悲壮靈活!クイックネス!」

レイアの精霊術が発動し、ホームズのスピードが上がる。

プテラロングは、それに構わず襲いかかる。

ホームズは、右に前転してかわす。

「エリーゼ!援護を!」

そういつて、レイアはティポライジングで跳ぶエリーゼに捕まる。

そして、二人はそのまま突っ込む。

「『ライオットグライダー!』」

二人の杖と棍の連打が、プテラロングを襲う。

二人の乱打にプテラロングは、ジリジリと後退し始める。

「効いてる！」

レイアは、更に攻撃の手を強める。

プテラロングは、この攻撃に対してどう対処しようか悩んでいた。

火を吐こうにもこの空中突撃の技は、その隙を見せてくれない。

だったら、一声雄叫びを上げ相手を驚かせばいい。

轟音というのは、それだけで相手にダメージを与える。

こんな近くで叫べば、レイア達もただでは済まない。

その考えに至るとプテラロングは、咆哮をあげようと口を開ける。

しかし、その考えを出してしまったが為にプテラロングは、気付かなかった。

広場の街頭を二本の脚で駆け上がり、プテラロングの頭上を取ったホームズに。

遠巻きにジュード達の戦いを見ていた、市民達は、当たり前のように駆け上がるホームズを見て空いた口がふさがらない。

ホームズは、高々と上げた足を一直線にプテラロングに向かって振り下ろす。

「断空打!!」

絶対に来るはずないと思っていた頭上からの攻撃にプテラロングは、声もあげる間もなく地面に叩きつけられる。

「レイア、ジュードー!」

未だ空中にいるホームズは、レイアとジュードの名前を呼ぶ。

プテラロングは、すぐに起き上がり、羽ばたこうとする。

そして、ほんの僅か地面から離れるようにする。

しかし、それをレイアとジュードは、挟む。

「巻空鏡舞!!」

プテラロングは、再び宙に浮く。

「ホームズ！足！」

時間差で着地したホームズに、レイアが要求する。

「任せたまえよ……」

ホームズは、足を振り被る。

そして、その足にレイアが乗り、足場にする。

「飛燕連月華!!」

足に乗ったレイアをそのまま宙にいるプテラロングに向かって、打ち出す。

攻撃を食らったプテラロングは、そのまま広場の崖下へと落ちていった。

開けてびつくり？

「ふうー……終わった……」

ホームズは、ため息を付く。

ようやく一息つけたという感じだ。

それからホームズは、レイアの方を向く。

「にしても、最後、助かったよレイア」

ホームズは、礼を言うのと隣でエリーゼも頷いている。

レイアは、二人の様子を見て胸を張る。

「えっへん！これからは、空の王者って呼んでね」

「はい、空の王者！」

エリーゼは、そのままレイアの要求通り賞賛を送る。

まさか、本当に言われると思わなかったのだろう。

少し恥ずかしそうだ。

「良かったね、エリーゼに感謝したら？空の王者」

「……ホームズは、相変わらずだよね」

レイアは、ホームズに半眼を向ける。

そんな事をしてしていると、誰かが兵士を連れて走ってくる。

「皆さん落ち着いて、女性と子供は家から出ないでください」

男性の皆さんは、私と協力して戦ってください」

そう言つて女性、ドロツセルが何かの構えを取る。

エリーゼは、そんなドロツセルに駆け寄る。

ドロツセルは、ここには、いない筈のエリーゼを見てポカンとしている。

「エリー……………どうして?」

「ただいま……………です」

エリーゼは、ちょこんと小首を傾げながらドロツセルに挨拶をする

「お嬢様」

「ローエン……………」

ローエンとエリーゼの姿にドロツセルは、わけがわからない。

「それに皆さん!」

ジュード達を見て更に驚く。

「お久しぶりです」

ジュードは、挨拶をする。

代わりに全く面識のないレイアとローズは、しどろもどろになりながら、自己紹介をする。

「えっと……初めまして、レイアです」

「あ、えっと、ローズです」

突然の人々にドロツセルは、理解が追いつかない。

「どうも……」

そう言うのが精一杯だった。

「何だか、えらい物騒な指示を飛ばしてましたけど……何かあったんです？ ドロツセルさん？」

ホームズがドロツセルに尋ねると、ドロツセルは、目を丸くする。

「ホームズさん!?! どうして、皆さんと?!」

「……まあ、話すと長いんですが……色々あつて一緒に旅をしています」

ドロツセルは、大きくため息を吐く。

「はあ……何が何やら……」

ようやく状況を飲み込めてきたドロツセルにミラがもう一度ホームズと同じ質問をする。

「それで、どうしたんだ？ ドロツセル？」

「てつきり、ア・ジュールが攻めてきたかと思ったの……」
ホームズは、ちらりといたすらっぽい笑みを浮かべ、ア・ジュールから来たローズを見る。

ローズは、ホームズを睨みつける。

二人がやり取りをしていると、アルヴィンが膝から崩れ落ちる。

「ケガしたの？ さつき、僕をかばった時？」

ジュールが急いで駆け寄る。

「大したことないって思ったけど……やっぱ、キツイわ……」

ドロツセルは、それを見ると直ぐに指示を飛ばす。

「誰か、運ぶのに手を貸して」

何人か人が集まり、アルヴィンを運ぶ。

ジュール達もそれについていく。

ローエンは、広場に残る。

流星にドロツセルが仕事をしているのに、執事の自分が真つ先に屋敷に行くわけにも
いかない。

「ワイバーンの様子が気になるので……」

そのまま、言えばドロツセルに気を遣わせてしまうのでローエンは、そう言う。

「ま、そのキャラ男より心配する価値があるよな」
ヨルは面白そうに笑っている。

アルヴィンは、半眼でヨルを睨む。

「おまえ……」

ホームズは、ヨルの髭を引つ張る。

ドロツセルは、それを見て驚く。

「ヨル……喋っ……え？」

ドロツセルのそんな様子を見てホームズは、ため息を吐く。

「後で説明します」

それからヨルの頭を鷲掴みする。

「人前で喋るなって言ってるだろう……」

ギリギリとヨルを締め上げる。

「ああ、もう、早く行くよー」

ジュードがホームズを止める。

ホームズは、渋々手を離すと再び歩き始めた。

ドロツセルは、混乱したが、直ぐにワイバーンを見ている男の元へ行く。

「どう、治りそう?」

「お嬢様……私は馬の調教師なんです……」

男は困惑しながら言う。

「あなたしか頼める人がいないのよ……」

「はあ……」

男は一応、診察を始める。

仕事かひと段落したのを見ると、ローエンは、ドロツセルに言葉をかける。

「お嬢様には、私が離れた為に苦労をかけました」

そう言っつて周りの様子に気づく。

何だか、ローエンの事をよく見て過ぎていく気がするのだ。

「アレ、イルベルト様じゃない?!元ラ・シユガルの参謀か何かだったんだって」

「おお!だったら戦争になってもア・ジュールなんて敵じゃないな!」

ドロツセルは、申し訳なきように俯く。

「近頃はア・ジュールとの戦争が始まるって、みんな不安がつてたいたから……」
ドロツセルは、言葉をそこで切ると顔をあげる。

「ここでは、無用な騒ぎになってしまいますね。」

とりあえず、屋敷に行きましょう。……ヨルの事も聞きたいですし」

最後に戯けるように言うドロツセルを見てローエンも微笑む。

「そうですね」

そう言つて二人は歩き出した。



ジュール達が、椅子に座つて待つているとドロツセルとローエンが帰つてきた。

「調教師によると、あの子たちの治療は、もう少しかかるみたい。

それまでは、街でゆっくり休んでいってください」

そう言つて、ドロツセルは、ヨルを見る。

「それで、ヨルはどうして喋れるんですか？」

どうやらずっと聞いたかったようだ。

ホームズは、肩で欠伸をしているヨルを指差す。

「こいつ、猫じゃないんです」

「そりゃあ、そうでしょ。猫が喋るわけじゃない」

口を挟むローズの言葉にホームズは、こめかみを引きつらせる。

「……まあ、説明しづらいんですが、どちらかと言うと精霊に近いんです」

「はあ……」

ドロツセルは、深いため息を吐く。

とりあえず、猫でないことは理解出来たし、魔物と言う訳でもないということも理解

出来た。

「なんだか、分かったような、分からないような……て感じですね」

ドロツセルがそう言ううと屋敷の扉が開き兵士が入ってくる。

ドロツセルは、直ぐにそちらに駆け寄る。

何やら報告を聞いているようだ。

ヨルは、肩から机の上に降り立ちホームズの方を見てニヤリと笑う。

「全部話さなくていいの？」

「百戦錬磨のローエンならともかく、あんな子にベラベラ君が化け物だなんて喋るわけにいかないだろう」

ホームズは、心底うんざりしたふうに睨む。

ローズは、そのやり取りを視界の端に捉えるとミラに話しかける。

「それで、どうするの？直ぐには、発てないようだけど……」

「寧ろ、好都合だ。大事の前だからな、体を休められるに越したことはない」
そう言つてミラは立ち上がる。

「皆十分に休むといい」

「え？」

ミラの言葉にジュードは、ポカンとする。

「なんだ、ジュード、そんなに意外だったか？」

ミラも逆に驚いたようだ。

ローエンは、面白そうに笑う。

「ふふふ、確かに、ル・ロンドを発つてから大立ち回りばかりでしたしね」

「ホームズとチャラ男が裏切ったりとかな」

ヨルの言葉にホームズは、頬を引きつらせる。

「君ね……………」

ヨルのギリギリの発言に周りは、苦笑いする。

そんな空気の中、ミラはローエンに目を向ける。

「お前も、考えをまとめる時間が必要だろう?」

ローエンは、少し驚くと直ぐに微笑む。

「お心遣い、ありがとうございます」

二人の会話が終わる頃、ドロツセルの方も兵士との話が終わった。

話の終わったドロツセルは、ホームズに近づく。

「ホームズさん、あなたに渡したい物があるんです。少しここにいて下さい」

訳の分からないホームズは、マヌケな顔をした後頷く。

「はあ……………分かりました」

ホームズの返事を聞くとドロツセルは、姿を消した。

ホームズは、首を傾げる。

それからジュード達の方を振り返るとそこは、さつきとはまた違った意味で変な空気になっていた。

「……………なに？」

ホームズの言葉にレイアが声をあげる。

「何じゃない！何でそんなにこの領主さん、ドロツセルさんと仲がいいの？」

これはジュードとミラ、そしてローズの疑問でもある。

「いや、だつてお得意様だもん」

ホームズは、困惑しながら答える。

いつも色々な商品を買ってもらっていたのだ。

ローズは、まだ疑いの目を向ける。

「……………それだけ？何でただのお得意様があなたに渡したいものつて？」

「さてね」

ホームズは、肩をすくめる。

本当に心当たりがないのだ。

しかし、そうは言ってもホームズのテンションは、上がっていく。

「ふふふ、女の子からプレゼントがもらえるなんて……………生きててよかった」

「ああ……………いつも渡す側だったんだっけ？」

ジュードの質問にホームズは頷く。

「そして、いつも捨てられていた、と言っていたな」

「わざわざ言ってくれて嬉しいよ」

ミラの言葉にホームズは、半眼でミラを見る。

しかし、直ぐに目の輝きを取り戻すと熱く語り出す。

「そう！おれにプレゼントをくれた女の子なんて、大して居なかつたけど……」

ホームズは、拳をグツと握る。

「今回は、ドロツセルさんがくれる!!これで喜ばない訳が無からうが！」

ホームズがご機嫌に、そして熱く話す傍ら、ローズは、不機嫌そうに頬杖をついている。

何だか面白くないのだ。

そして、自分があげたものを考える。

(子供の頃に作った花の冠……)

原価1円もかからない。

そして、領主様があげる何か。

どう考えても釣り合わない。

「ロ、ローズ」

わたわたとしながらレイアは、ローズに話しかける。

しかし、ローズは反応しない。

レイアは、目の前にいるヨルに助けを求め。

「(どうかしてよ、ヨル！ローズ拗ねてるんだけど！)」

ヨルは、嫌そうに顔を背ける。

「(知らん。お前がどうかしろ、レイア)」

「(そうやってこの面倒な事ばかり押し付けて！どうするの、ドロツセルさんがホーム

ズの事が好きでなんか家宝的なものをあげたりとかしたら！)」

「(その妄想力をどうかしろ！そんな事あるとおもうか？)」

「(ないと思う)」

「(即答だな………なら、いいだろう)」

「(でも……)」

レイアは、そう言ってローズを見る。

ローズは、イライラしながら机を指で叩いている。

「お待たせ」

「(来た!!)」

ヨルとレイアは、ドロツセルの方を見る。

「はい、ホームズさん」

そう言つて渡したのは……

「あー!!おれのカバン!どうしてここに!?!」

ホームズがジュード達との戦いのゴタゴタで置いてきた、薬箱のようなカバンだった。

ホームズは、目を白黒させている。

余りのオチにレイアとローズとヨルは、開いた口がふさがらない。

「ジュードさんたちが届けてくれたんです」

「本当に!? いやーありがとう、ジュード」

女の子からのプレゼントにしては、という奴なので、落胆してもおかしくないのだが、逆にホームズは、大喜びだ。

長い行商の生活でお世話になった、大切な品だ。

ついでに言うなら、こいつが無かったせいでホームズは、レイアの宿で借金返済生活を余儀なくされたのだ。

「う、うん、まあ、どういたしまして……」

喜びのテンションのホームズとは違い、ジュードは、気まずそうだ。

「それでは、私はこれで」

ドロツセルは、そう言って立ち去った。

そんなジュードとドロツセルなんて気にもとめず、ホームズは、カバンをあける。

そして、

ホームズの動きが突然止まった。

「ねえ、ジュード君……………」

ホームズの声から先ほどのテンションが消え去る。

「何も入っていないんだけど……………どうして?」

ホームズは、カバンの中身を見つめながら聞く。

そう、何もないのだ。

商品も、服回復道具も、そして、金も…………

ジュードとエリーゼは、気まずい思いをし、答えられない。

「私たちが全て使った」

代わりにミラが答えた。

「はあ!!何で!?!」

「お前に武器を殆ど壊されたせいで買い直さなければならならな」

対して詫びれもせず言葉が続ける。

そう、あの時ホームズは逃げる為にジュードを抜かすメンバーの武器を全て破壊したのだ。

「あの後、ジュード以外武器を全て壊されてしまい、どうしたものかと頭を抱えていたのだ、すると……」

「すると?」

「お前が忘れていったカバンが目に入ったのだ。試しに中身を確認したところ金が割とあったのでな」

「……それで？」

「全部使わせてもらった」

「最悪だー！ー！！」

ホームズは、心から叫ぶ。

道理で再会した時に皆武器を持っていた筈である。

「君たち、なにやってんの!! おかしいだろう?! 君たちのやってること、盗賊と変わらな
いよ!!」

ホームズ達に襲いかかって金だけ奪い去ったのだ。

「ミラ……今回は、珍しくホームズの方が正しいよ………」

ジュードがミラに耳打ちをする。

「ふむ……」

ミラは考え込む。

「どうすればいい?」

「返したまえ、金を」

ホームズは、即答する。

しかし、ホームズだって今すぐ返せるほどないことぐらい分かっている。

何せ、カバンの中にあつたのは、コツコツとホームズが貯めてきたお金だ。

常に赤字と戦いながら、それでもいざという時の為にと健気に貯めてきた金だ。直ぐにおいそれと返せる金額ではない。

ホームズは、指をミラに向かって差す。

「決めた。君には、この旅が終わるまでに使い込んだおれの金を返してもらおうよ」

「ふむ、いいだろう」

ミラは凜として返す。

「ちったあ、反省したまえよ……」

ホームズは、頬を引きつらせる。

ホームズにもう一つ、ミラ達と旅をする理由が増えたのだった。

「よ、良かったね！ローズ！」

「いや、どの辺が？」

レイアのフォローにローズは、哀れな男を見ながら呟いた。

温故知人

「はあ……やれやれ、衝撃の事実が発覚したねえ……全く……」

カバンのシヨックから冷めきらないホームズは、天井を見上げながらポツリと呟く。

「衝撃つうか、笑撃だったけどな」

「誰が上手いこと言えって言ったんだい……何も笑えないよ……」

身体を休めろと言われたヨルとホームズは、ダラダラと過ごしていた。

「さてと、折角頂いた休みだし……」

「どうするつもりだ？」

「クレインさんのお墓参りにでも行こうかな、と思うけど……どう？」

「ま、拒否権はないだろ、俺に」

「よく分かってるじゃないか」

ホームズは、どうでも良さそうに、ヨルに返事をする。部屋からでて、階段を降りる。

一階の大広間にローエンが物憂げに一人佇んでいた。

「……ローエン？」

気になって声をかけると、ローエンは、考え事から、引き戻され少し驚いた顔を向け

る。

「ホームズさんでしたか」

「そうだよ」

ホームズは、ひらひらと手を振る。

ローエンは、それを見て口を開く。

「いよいよですね……」

「そうだねえ……」

ホームズは、そう言つて微笑む。

相変わらず胡散臭い。

特に何も隠していないのだ。

「……まだ、決意は固まらないのかい？」

ホームズは、ローエンに尋ねる。

「決意というより、覚悟ですね……」

「覚悟？」

首を傾げるホームズにローエンは、微笑む。

「ホームズさんが、私達を裏切った時、レイアさんは覚悟を決めて挑んでいました。気

づいていました？」

ホームズは、先程の笑みを引っ込める。

「……彼女、迷つてもいたけど、そんな中でも覚悟を決めてたねえ……絶対におれを止めらるっていうね」

ホームズは、椅子に腰をかける。

「あの時、レイアがおれを倒してくれなかったら、多分ここにはいないよ」
ホームズの言葉にローエンは、頷く。

「あの時、レイアさんに出来たことが私には出来なかった。

友の間違いを正す覚悟がなかったんです」

「……なるほどね……思い出すわけだ、過ちつて奴を……」

「そういうことです」

ローエンは、ホームズの言葉にそう返す。

ホームズは、席に着く。

「でもさあ、別にいいんじゃない？」

ホームズの言葉にローエンは、首を傾げる。

「レイアに言われて思ったんだ。友達と戦う覚悟を決めることが正しいとは、限らないって」

ローエンは、ホームズの言葉に静かに微笑んで頷く。

「……しかし、必要なことです」

「必要？」

今度は、ホームズが首を傾げる番だ。

「ええ。そして、友の間違いを正す為に戦う覚悟を決めることは、決して間違ってもいいと思いますよ」

ローエンの言葉を聞いたホームズは、しばらく考える。

「……………それもそうだね……………」

ホームズは、考えきつた後深く息を吐きながら言う。

「難しいもんだ……………やれやれ」

大きくため息を吐きながらホームズは、言葉を出す。

「ええ、本当に……………」

ローエンは、そうこぼした。

「もし、もしですけど、ホームズさん」

「なんだい？」

「私がこの戦いから降りるとしたら、貴方は、私を責めますか？」

ホームズは、少し目を丸くする。

「どうしたんだい？突然？」

「いえ、なんとなくそう思っただけです」

ホームズは、驚きはしたが、碧い目をローエンに向ける。

「別に、責めないよ」

そう言つて、ホームズは肩を竦める。

「君が、いなかつたらいなかつたでそれなりに頑張るさ」

「私は必要ないですか？」

「そうじゃなくてさ……」

ホームズは、困つたように頭をボリボリとかく。

「友人と戦うのは辛いことだからさ、それを辛いと感ずるなら、それは仕方ないと思う

よ」

ローズを蹴り飛ばした時、ジュードと戦つた時、ミラと戦つた時、そして、レイアと戦つた時、辛くなかつたと言つたら嘘になる。

「だからさ、そこから降りたら、おれ達が頑張つてナハティガルと戦うさ」

ローエンは、目を丸くしている。

それから、嬉しそうに目を細める。

「実は、ジュードさんに言われたんです。『この戦いから降りても僕は責めないよ』、と」

「ジュードが？」

「ええ。だから、少し気になったので尋ねさせて貰いました」

ホームズは、それを聞くと微笑む。

「満足かい？」

ローエンは、微笑み返す。

「なら、良かった……と、そうだ、ローエン、クレインさんのお墓つて何処にあるんだい？」

ローエンは、一瞬何を言われたか分からなかったが、直ぐに理解する。

「屋敷の裏です……クレイン様も喜びますよ」

ホームズは、それを聞くと椅子から立ち上がる。

「ありがとね……さて、行く前に、ちよつと、トイレへ……」

ホームズは、そう言うところを置いて歩き去って行った。

大した距離ではないので別にどうってことはない。

ポツリと一匹残されたヨルは、つまらなさそうに尻尾を振っている。

ヨルは、そして、ピタリと尻尾を止める。

「……因みに言っておくとだ……」

ヨルは、そこでローエンの顔を見る。

「お前がこの戦いから逃げたら、俺はお前の事を軽蔑する」

ヨルは、ニヤリと口角を上げる。

「ま、元々人間を尊敬なんかしていないがな」

ローエンは、特に表情を変えない。

黙ってヨルの言葉を聞いている。

「お前は、馬鹿王の友人である前に、一国の参謀長だったんだろう、指揮者？」
コンダクター

そう言つて、テーブルの上に移動する。

「だったら、お前には、責任があつた筈だ、王を止める役目がな？」

テクテクと可愛らしく、しかし、声は、震える程の迫力でテーブルを歩く。

「二度も三度もそれから逃げるような馬鹿を軽蔑するなと言う方が難しいと思わんか？」

ヨルは小首を傾げながら尋ねる。

その仕草だけ見ればとても可愛らしい。

しかし、ヨルがそれをやっているというのが問題だ。

それだけで、不気味さが増す。

「ま、というのが一般論だ」

ヨルは、尻尾をローエンに突きつける。

「……一般論？」

ローエンは、不思議そうにする。

今までその様にローエンは、責められてきたのだ。

それは確かに正しかったし、間違っていないかった。

それをヨルは、一般論と言って切り捨てたのだ。

「ここからは、俺の自論だ。というより、レイアを見ていて思った」

ヨルは、そこで言葉を切るとホームズの方を見つめる。

「友とやらに全てを賛同する理由はないのだから？間違っていたら、間違っていると
言わなければならぬ、正さなければならぬ」

ヨルは、再びニヤリとわらう。

「それが出来なければ、ただの信者だ。友とやらとは言えないだろ」

ヨルの言葉にローエンは、少し驚いて目を丸くする。

「盲信する人間なんぞ、気持ち悪いの一言に尽きる。

軽蔑するのは、当然だろ？」

ヨルの言葉にローエンは、面白そうに笑う。

「ふふふ、あなた方は、本当に面白いですね」

ローエンは、そう言って天井を仰ぐ。

「……そうですね、そうですね……」

ローエンは、そう言つてヨルの方を見る。

「ありがとうございます、ヨルさん」

「そりやどうも」

ヨルは、そう言うと、もう用はないと言わんばかりにテクテクと歩き出した。

歩いて行つた方向を見れば、そこには、トイレから出てきたホームズが歩いて、こちらにやつてきていた。

「……何を話していたんだい？」

ホームズは、不思議そうに尋ねる。

「内緒って奴だ」

「ふーん、そう」

ホームズは、肩を竦め、歩き始めようとする。

すると、玄関前でエリーゼにばったり出会う。

「あれ？エリーゼ、どうしたんだい？君もトイレ？」

ホームズがそう言うとティポが飛んできて頭をかじる。

「サイテー……です」

エリーゼは、デリカシー皆無のホームズを冷たい目で睨む。

「ホームズの声が聞こえたから来ただけです」

ホームズは、無理矢理ティポを取るとエリーゼに目を向ける。

「なんで来たんだい？」

「……少し、聞きたい事がある……です。ちよつと来て下さい」
「？」



不思議そうなホームズに構わず、エリーゼは、近くの部屋にホームズを入れ、椅子に座らせる。

そして、自分も座ると更に言葉を続ける。

「どうして、初めて会った時とこの前の時、私を攻撃しなかった……ですか？」
ホームズは、少し目を丸くすると、困った様に頬を引きつらせる。

「え……言わなくちゃダメ？」

「それで、ホームズが裏切った事はチャラにする……です」

「君の寛大な措置に感謝するよ」

ホームズは、やれやれと大きくため息を吐く。

それから、少し寂しそうな顔をして話し始める。

「ローエン達には話したけど、おれは、とある村で、昔、君みたいな境遇の女の子に会った事があるんだ」

エリーゼは、驚く。

まさか、ホームズがそんな自分と同じような子に会っているとはおもわなかったのだろう。

ホームズの話はまだ続く。

「その子もイスラに売られたみたいでね、いつも泣いてたんだ。寂しい、寂しいってね」

ホームズは、そう言って話す。

「その子は、施設に引き取られていたから、厳密に言えば一人じゃなかったけど、お父さんとお母さんの事を思い出していつも泣いてた」

後ろで手を組みホームズは、更に言葉を続ける。

「ま、おれは村にいた間は、だいたいその子と過ごしてね……おれとその子の年の差が六つ。ちょうど、エリーゼと似たような年の離れ方なんだよ」

「……もしかして、一緒にしてますか？」

「ま、そういう事」

ホームズは、そう言つて肩を竦める。

エリーゼは、納得した。

ホームズは、エリーゼとその子を重ねてしまっている。

だから、エリーゼに対してはどうしても戦えないのだ。

頭で分かつていても、後一步の踏み込みがどうしても出来ない。

「因みに教えておくと、こいつのガキのメソメソ嫌いも似たような理由だ」

肩にいるヨルが口を挟む。

ホームズは、うんざりしたようにヨルを見る。

「君は余計なことしか言わないよね」

「ホームズも……です」

エリーゼの言葉にホームズは、頬を引きつらせる。

そんなホームズに構わず、エリーゼは、続ける。

「どんな子でした？」

「泣き虫だったね」

ノータイムで返すホームズにエリーゼは、頬を引きつらせる。

それから、先程とは違い言いつらそうに言葉を濁す。

「まあ、後、ちよーっと変な、いや、変わった子だったなあ」

「……」

相変わらず、ホームズには、微笑ましいというものが似合わない。

もう少し、暖かい話を期待していたのだが……

「どうして、仲良くなったんですか？」

「彼女の話し相手がおれしかいなかったんだよ」

エリーゼは、首を傾げる。

「施設のみんなは、当たり前だけど、親がいないからそこにいるんだよ。だから、一々自分が、それを悲しいとそこで泣くわけにいかなかったんだよ」

ホームズは、そう言つて椅子に深く腰掛ける。

「んで、隠れて泣いているところをおれがうつかり見つけちゃってね……そしたら、なんかおれの前だけで泣くようになって、いつの間にか話すようになったんだよ……あれ、逆だっけ？ いつの間にか話すようになって、おれの前だけで泣くようになったんだっけ？」

『どつちでもいいーよー』

迷うホームズをバツサリとティポが切り捨てる。

思わずこめかみをひくつかせる、ホームズ。

「どうして、でしよう？」

エリーゼの言葉にホームズは、肩を竦める。

「知らない、頑として答えなかったから、あの子」

ヨルは、頭の上でため息を吐く。

「どうやら我慢できなかったようだ。」

「お前が何も言わなかったからだ」

ホームズは不思議そうな顔でヨルを見る。

「慰めもせず、余計な事も言わず、ただ黙って、泣き止むまで待つてたから、奴はお前

に懐いたんだよ」

ヨルの言葉にホームズは、更に目を丸くする。

「懐かれてたの……か？ いや、心当たりがないわけじゃないんだけど……うー

ん……あれを懐かれてたと言うべきなのだろうか……」

ホームズは、複雑そうな顔でうんうんと唸っている。

エリーゼは、ため息を吐く。

「ホームズって、本当にろくな目にあってませんね」

エリーゼは、ホームズの女運の悪さのため息を吐く。

僅かではあるが、同情を禁じ得ない。

それから、エリーゼは少しだけ微笑む。

「やっぱり優しいですね、ホームズ」

自分の時もそうだったし、ローズの時も、分かりづらいが色々動いている。そんなエリーゼの言葉にホームズは、心底驚いた顔をして、真剣な声で言う。

「君がおれのことを褒めるなんて、明日は雷でも降るんじゃないか？」

ホームズの言葉にエリーゼは、半眼で呆れる。

「そういうところがダメなんですよね……」

『バーホー！』

エリーゼは、ホームズがモテない理由を改めて再確認した。

エリーゼとティポの言葉にホームズは、決まり悪そうに肩を竦めると、立ち上がる。

「さて、聞かれたことはあらかた話したと思うけど、まだ何かあるかい？」

ホームズの質問にエリーゼは、首を横に振る。

「まあ、この辺でいいです。多分これ以上は、どうせ喋ってくれないです、ホームズは」

「理解してくれて、ドーモ」

ホームズは、ひらひらと手を振って答える。

「じゃあ、おれはおれで用事があるから、この辺で」

そうやって扉に手をかける。

「ホームズ」

そんなホームズをエリーゼが呼び止める。

「なんだい？」

エリーゼの言葉にホームズは、振り返る。

「頑張りましょう……ね」

エリーゼの力一杯の言葉にホームズは、目を丸くするが、直ぐにニヤリと笑い、エリーゼに人差し指を向ける。

「誰に言ってるんだい、エリーゼ・ルタス」

ホームズは、そう言って部屋の扉を閉めた。

いつかの敵といつもの友

「ん？あれは……」

花を買いに広場に来たホームズは、見覚えのあるコートの男を見かける。

「よう」

「……アルヴィンじゃん。怪我大丈夫かい？」

「お、まあな」

アルヴィンは、ひらひらと手を振る。

「何してたんだい？」

ホームズの言葉にアルヴィンは、ん？と顔を向ける。

「さつきまで、ミラと話して、次にジュードと話して……てな感じだ」

「ふーん……」

ホームズは、出会っていない。

どうやら、すれ違いになってしまった様だ。

「二人は、何だって？」

ホームズの言葉にアルヴィンは、肩を竦める。

「俺の事を信頼するんだか、しないんだかって、感じだな」
「それはそれは……」

ヨルは、アルヴィンに冷ややかな目を向ける。

「『僕もミラみたいに精霊と人を守れるかな』だつてさ」

「なんだい、それ？」

怪訝そうなホームズにアルヴィンが、肩を竦める。

「ジュード君の言葉、あいつ成長してるよね」

「君の言動から、悪意しか感じないのは気のせいかい？」

ホームズは、呆れたようにふざけているアルヴィンを見る。

アルヴィンは、少し面白そうに笑う。

「さて、どつちでしょう？」

「知らない方が幸せそうだ」

ホームズは、頬を引きつらせながら答える。

そんなホームズにアルヴィンは、ところで、と切り出す。

「ホームズは、俺の事を信じるのか？」

ホームズは、肩を竦める。

「まあ、信じてあげるよ。おれは」

「随分と微妙な返事だな……」

アルヴィンの言葉にホームズは、片眉を上げ、指を一つ立てる。

「なんと言ったって君はおれと同じく、ここ、リーゼ・マクシアの人間じゃない
もう一つ立てる。」

「んで、次に君の生い立ちには、まあ、言い方は何だけど、同情するものがある」
そして、更にもう一本指を立てる。

「そして、最後に一つ」

ホームズは、胡散臭い笑みを浮かべる。

「おれと君は裏切り者同士。なんか、こう通じる物がある……そう思わないかい？」
アルヴィンは、少し驚いた顔を見ると、クククと面白そうに笑う。

「そう奴だよな、お前は」

ホームズも面白そうに笑う。

二人とも笑顔だというのに寒気がするほど空気は、薄ら寒い。

ホームズは、笑みを引っ込めると真剣な顔を向ける。

「まあ、おれはみんなに信じてもらえた。」

「だったら、誰かを信じてやるのが当たり前だと思わないかい？」

ホームズの言葉にアルヴィンは、目を丸くする。

それから、ふつとため息を吐く。

「そんな理由で俺を信じるのか？」

「なんだい？これ以上何か理由が欲しいのかい？」

「いやいや、充分だよ」

ホームズの言葉にアルヴィンは、空を見上げ、ふと疑問に思った事を尋ねる。

「なあ、お前はどれくらい隠し事してるんだ？」

「内緒。男は秘密があつた方が格好良いからね」

ホームズは、人差し指を一つ口に持つていくいつものように胡散臭い笑顔で答える。

アルヴィンは、ため息を吐く。

「よく、そんなんでミラ達に信用されたよな」

ホームズは、肩を竦める。

「生きてれば不思議な事なんていくらでもあるさ」

「流石、俺より年下の奴が言うと言得力が違うぜ」

アルヴィンの言葉にホームズは、肩を竦める。

「おれより年上の君が分からない事がおれに分かるものか」

「違いねえ」

アルヴィンは、面白そうにホームズの減らず口を聞いている。

それから、もう一つ質問をする。

「なあ、両親の故郷なんて行つてどうするんだ？」

「どうするつて……」

ホームズは、不思議そうな顔をする。

「まさか、特に目的もなく行くのか？」

「いやいや、両親の故郷を見てみたいんだよ」

アルヴィンの質問にホームズは、当たり前のように言う。

「知らないことを知りたいと思ひ、行つたことのない所に行つてみたいと思ひ、食べた事のないものを食べたいと思ひ、見たことのないものを見たいと思ひ、それに理由なんているのかい？」

ホームズは、当たり前のように理由を並べる。

それから、ホームズは、肩にいるヨルを見る。

「殆どのが気が合わないけど、そこだけは、通じ合うものがあるよね」

「そこだけは、な」

ヨルは、欠伸をしながらホームズに答える。

ヨルの言葉に頷くとホームズはいつもの笑みを浮かべる。

「要約すると、行きたいから、行きたいんだよ」

そう言つてホームズらしい答えて締めた。

しかし、アルヴィンは、そこで質問を止めない。

「それだけじゃないだろ？ 確かにそれも嘘じゃないだろうが、もう一つか、二つ理由があるだろ？」

ホームズは、アルヴィンの的を得た質問にニヤリと笑う。

「まあね。でも、言わなくてもいいだろう？」

ホームズは、中指の指輪を空に掲げ、それからアルヴィンを見る。

「ゴシツプ好きなおばちゃんじゃないんだから、さ」

ホームズは、肩を竦める。

「根掘り葉掘り聞くなんて紳士じゃないだろう？」

「ま、君を紳士と呼ぶのは、少し無理がある気がするけど」

「お前ほどじゃないぜ」

ホームズは、思わず頬を引きつらせる。

その頬を戻すとなんて事無さそうに話す

「まあ、大した理由じゃない。気が向いたらたら話してあげるよ」

アルヴィンは、やれやれとため息を吐く。

「せいぜい期待せずに待つてるよ」

アルヴェインの言葉にホームズは、ニヤリと笑うと花屋に向かって歩き始めた。

「……くせ者揃いだこと」

アルヴェインは、誰に聞かせるまでもなくポツリと呟いた。



ホームズは、花を抱えて屋敷へ向かっていった。
屋敷の階段には、レイアが座っていた。

「ん、なにしてるんだい？こんなところで？」

「ホームズこそ……って、ああ、なるほど」

レイアは、ホームズの持つている花束を見て納得したようだ。

「クレインさんのお墓参り？」

「まあね。あの人には、色々とお世話になったし」

ホームズの言葉にレイアは、そうと返事をする。

「何か落ち込んでいるのかい？」

「んー……まあ、色々。乙女に悩みは尽きないんだよ」

ホームズは、レイアの言葉にニヤリと笑う。

「空の王者が乙女だったとはね……」

「……まだ、そのネタ引つ張るの？」

レイアは、半眼を向ける。

ホームズは、肩を竦めて答える。

それから、何かを思い出したように、手をポンと叩く。

「ああ、そうだ。いい機会だから聞いてちょう。ミラに見せたあの紙には、なんて書いて

あったの？」

「紙……って、あ！」

レイアは、思い出したようだ。顔を赤くすると目をそらす。

「な、何でもない」

「要約するとつり目のガキが心配だ！って感じだったな」

ヨルの言葉に、レイアは、驚いたように顔をヨルに向ける。

「み、見たの?!」

「いや、別に。……そうか、そんな事が書いてあったのか」

ヨルは、ニヤリと笑みを浮かべる。

「やられた……」

レイアは、がつくりと肩を落とす。

つまり、カマをかけたのだ。

レイアは、少し落ち込むが直ぐに開き直る。

「そうですよ！ジュードが医者に成れなかったら困る、怪我したら困るって書いたんだよ！」

つらつらと述べていくレイアをホームズは、面白そうに笑っている。

レイアは、反対に頬を膨らませていく。

「大変だねえ、幼馴染みは」

「ホームズもね」

ホームズは、二刀流の昔馴染みを思い出してため息を吐く。

「まあ、別の意味だね」

ホームズは、何回暴力を振るわれたか思い出せない。

まあ、段々と割合が上がってきて、七対三ぐらいの割合でホームズが悪いのだが。

レイアは、落ち着くとホームズに座るように促す。

ホームズは、レイアとここでおなじように階段に座る。

レイアは、先程の雰囲気とは、がらりと変えてホームズに尋ねる。

「ホームズはさ、黒匣とかクルスニクの槍とかどう思う？」

「どうって……あつていいものじゃないだろう」

ホームズは、色々と思い出す。

昔戦ったアルクノアの持っていた黒匣。

あれは、あつてはいいものではない。

「ふーん……前にさ、私が怪我したって話したの覚えてる？」

「まあね」

ホームズは、レイアの言葉を肯定する。

「あれさ、黒匣だったんだよね……」

「ま、だろうと思っただけ」

「気づいてたんなら、言ってくればいいのに……」

レイアは、頬を引きつらせながらホームズに悪態をつく。

ホームズは、ため息を一つ吐く。

「君みたいな一般人に、そんな裏側を教えるわけないだろう」

「まあ、それもそうだけど……」

「それに、推論にすぎなかったからね」

ホームズの言い分に納得するとレイアは、空を見上げる。

「……ホームズは、さ……この旅が終わったらどうするの？」

レイアの問いにホームズは、首を傾げ、考える。

「まあ、両親の故郷を探そうと思うけど……」

「結局それが一番の目的だもんね、ホームズにとって」

レイアの言葉にホームズは、頷く。

「ミラの報酬は、それに関する情報だけ……それが確実とは限らないし……」

レイアは、ホームズの言葉を聞いて驚く。

「確実じゃないの？」

「あれ、言ってなかったっけ？可能性があるかもしれない、その程度のものなんだよ」

ホームズは、平然と何を今更と言うよう言葉を発する。

「無駄骨になるかもしれないって思わないの？」

レイアの言葉にホームズは、考える。

そして、暫くして口を開く。

「例えばさ、ここに100個の閉じられた箱があるとするだろうか？」

ホームズは、手で箱の形を示す。

「この中に一つだけ、餡がある箱がとする……レイア、君ならどうする？」

「なにそれ？なぞなぞ？」

「いや」

ホームズは、首を横に振る。

「だから、普通に考えておくれ？」

ホームズの言葉にレイアは、頭をひねる。

というか、悩まなくても答えは出ている。

「箱を片っ端から開けていくしかないんじゃない？」

ホームズは、頷く。

「どうやら正解のようだ。」

「100個の箱の内1個をあける。すると中は空だった。ということは、残り99個の中にある事になる。次にもう一個開ける。するとまたしても中は空だった。という

ことは、残り98個の中にある事になる」

ホームズは、順を追って説明していく。レイアは、段々とホームズの言いたいことが分かってきた。

「そうやって、箱を片っ端から開けていく作業、君は無駄骨だとおもうかい？」

「……なるほどね」

レイアは、納得したようだ。

「ま、箱の中に本当に飴玉があるという大前提が必要だがな」

ヨルは、水を差すようにホームズにニヤリと笑いかける。

ホームズは、頬を引きつらせる。

しかし、一理あるのだ、ヨルの言うことには。

もし、ミラを犠牲にせず、エレンピオスに行く方法がなかったとしたら、それは……

「徒労以外の何物ではないな」

ホームズの旅は、何も実らせないことになる。

「ま、おれとしては、そうならない事を祈りながら、箱を開けるしかないねえ……」

ホームズは、ため息を吐きながらそう答えた。

そんなホームズを見てレイアは、理解する。

（そっか、ホームズって分かりづらいけど、いつもその不安と戦ってるんだよね……）

自分の弱みをそうそう見せず、そして、自分の常識から少し外れている友人をレイアは、また一つ理解する。

レイアは、立ち上がるとホームズを真っ直ぐ見る。

「あのさ！きつと見つかるよ！ホームズの両親の故郷に行く方法」

ホームズは、レイアに目を向ける。

「根拠は？」

「わたしの勘！」

「は？」

ホームズは、レイアの言葉に思わずマヌケな顔をする。

「わたしの勘は、当たるの！」

「そんな話、初耳だけど……………」

「いいの！」

レイアは、そう力強く胸を張って言い放つ。

そんなレイアを見てホームズは、顔の暗い影を振り払うと嬉しそうに笑う。

「やれやれ、君って人は……………」

ホームズもレイアを習うように立ち上がる。

「そうだねえ……………いつか、見つかるさ。人生は長いんだものね」

「そういう事」

レイアは、笑う。

「ふふふ、ありがとう、レイア」

ホームズは、お礼を言うと歩き始めた。

「それじゃあ、おれはこれで」

ホームズは、そう言ってクレインの墓へと歩いて行った。

「ホームズ！頑張ろうね！」

そんなホームズの背中にレイアは、声を掛ける。

ホームズは、ひらひらと手を振って答えた。

「100個の閉じられた箱を開ける、か……」

ヨルは、先程のホームズのたとえ話を思い出しながら言う。

「なんだい？」

そんなヨルにホームズは、怪訝そうに尋ねる。

「せいぜい、うっかりパンドラの箱を開けないよう気をつけることだな」
ヨルは、口角をつり上げニヤリと笑った。

ホームズは、冷めた目でヨルを見る。

「ご忠告どうも。せいぜい気をつけるよ」

カラハ・シャルの誓い

「……いつ見ても、なんとも言えない気分になるな……」
ヨルは、クレインの墓の前でポツリと呟く。

「……まあ、ね」

ホームズは、花を置き手を合わせる。

「いい人だったんだけどなあ……」

手を合わせながら、ホームズはそうこぼした。

そんな彼らに近づくと人影が一つ。

「ホームズ？」

声の方を振り向くと、そこにはジュードがいた。

「ジュードじゃん。君も墓参り？」

「まあ、そんなところ」

ジュードは、そう言うとホームズと同じ様に手を合わせる。

「クレインさん、いい人だったよ」

「知ってるさ。お得意様だよ」

「そうだったね」

ジュードは、手を合わせ終える。

「クレインさん、ナハティガルの手の者よって暗殺されたって……」

「知ってる。ローエンが教えてくれた」

ホームズは、ジュードの言葉にそう返す。

「ナハティガル、ねえ」

「どうしたの？」

感慨深そうに呟くホームズにジュードが、不思議そうに尋ねる。

ホームズは、ジュードの方を向く。

「いやね、一医学生が、王様と戦うことになる……って思うと、なんだか不思議なものがあるなあってね」

「それは、ホームズも一緒でしょ」

ホームズの言葉にジュードがそう言い返す。

ホームズは、面白そうに笑う。

「まあね。まさか、ただの行商人が精霊の主殿と二回も戦うとは、思わなかったよ」
お話のだけだと思っていた存在と戦う羽目になったのだ。

「それでもって、次は王様か……人生ってのは、どう転ぶか分からないもんだねえ」

「……………ホームズが言うと言得力が違うね」

ジュードは、人外ヨルを見ながら言う。

ヨルはふふんと鼻で威張る。

出会ってきたものの場数が違う。

ホームズは、肩を竦めて答える。

会話が途切れ、二人の間をカラハ・シャルルの風が流れる。

「ホームズはさ……………」

「ん？」

ジュードが言いづらそうに尋ねる。

「どうして、黒匣ジンとか、クルスニクの槍を壊そうと思うの？」

先程、レイアにジュードは、同じ質問をされたのだ。

考えてみれば、ミラが壊すといったから行っていただけなのだ。

そんな考えを読まれないようにするのに精一杯だった。

だからこそ何となくではあるが、ホームズに尋ねた。

ホームズは、ジュードの質問に特に考えるそぶりも見せずに口を開く。

「ミラが壊すって言うてるからさ」

何てことなさそうに、そして当たり前前のようにホームズは、答えた。

ジュードは、ポカンとして口が塞がらない。

「お忘れかい、ジュード？おれは、ミラに雇われているんだ。

だったら、よっぽど変な事じゃない限り、雇い主の意向に従うつてもものだろう？」

ジュードは、ようやく納得がいった。

「……そうか……ホームズは、そういう人だよな」

「報酬分の働きはしないとね……ほら、おれって前科持ちだし」

ホームズは、そう言つて自嘲する。

前科とは、明らかにこの前の裏切りのことだろう。

「ホームズ……気にしてる？」

ジュードの質問にホームズは、片眉を上げる。

「さてね……でも、まあ……」

ホームズは、そう言つて空を見上げる。

「気分は、良くないよ」

ジュードは、それでホームズの事を察する。

みんなに許されてもホームズ自身、自分を許せていないのだ。

お首にも出さなかったが、あの時の選択は、とても辛いものだったのだろう。

「自業自得だ、馬鹿」

「……煩いなあ、知ってるよ」

ヨルの言葉にホームズは、顔を顰める。

そういった後ホームズは、口を開く。

「まあ、ミラの依頼を置いといても、黒^{ジン}匣もクルスニクの槍も容量を超えてるよね」

「容量？」

ジュードは、首を傾げる。

ホームズは、頷く。

「ほら、コップ一杯に風呂桶一杯の水は入らないだろう？」

「まあね」

「黒^{ジン}匣もクルスニクの槍も、それに近いものがあると思わないかい？」
ホームズの説明にジュードは、コクリと頷く。

「なるほどね……」

納得するとジュードは、ホームズの方を向く。

「ホームズってさ、例え話上手いよね」

ホームズは、突然の事に目を丸くする。

「わあお……君がおれの事を褒めるなんて初めてじゃないかい？」

いつもの悪態を消し去り、本気で驚いているホームズ。

そんなホームズを見てジュードは、引きつり笑いをする。

(もう少し優しくしてあげよう……)

冷たくしてつもりはなかったのだが、この反応をされるとうっかり涙が出そうになる。

そこまで考えたところでジュードは、話題が逸らされた事に気づく。

ジュードは、ため息を一つ吐いてホームズの逸らした話題を戻す。

「ホームズ……ガイアスたちって、恩を返したいって思うような人なの？」

ジュードの質問にホームズは、少し寂しそうに笑う。

「親の墓を作ってくれた……前にも言ったけどね、これをしてくれただけでも、おれには充分すぎるくらいなんだよ」

そう言つてホームズは、クレインの墓石をそつとひと撫でする。

「君達には、想像も出来ないだろう？家族が死んだ時、墓がないなんて。行商人つてのは、常にそういうものなんだよ」

ホームズは、ふふつと笑う。

「そんなおれ達にガイアス王は、墓を用意してくれた。これって凄いいことなんだよ」
そう語るホームズは、とても生き生きとしていた。

そこまで言うとうとホームズは、ポツリと最後に言葉を足す。

「正直、カン・バルクに行くまでガイアス王に着こうと思つてた」

ジュードは、思わず息を飲む。

「でもさ、カン・バルクの宿でグタグタと過ごしてるうちに変わったんだよねえ……」
ホームズは、とても楽しそうに笑う。

「変わった？」

「うん。男衆で下らない話をして、王様ゲームをして、プレゼント買って、まあ基本的にロクな目に合わなかったけど、こうみんなワイワイやってさ……ああ、やっぱりこっちの方がいいなあって思ったんだよ」

楽しそうに語るホームズを見てジュードは、あの時の言葉を思い出す。

—— 『ああ、そうそう。裏切りっていうのはね、友情や信頼で結ばれてるところが前提ですよ』 ——

（そっか、結局ホームズは、ガイアス王の恩より僕たちの方をとったんだ……）

「二つ聞いていい？」

「何なりと」

「ホームズの方がレイアに勝っていた場合、どうするつもりだったの？」

「……まあ、多分君達と戦って負けてたんじゃない？」

ホームズは、事も無げに言う。

「いや、逃げてたかも……勝てないからね、どう考えても」

「ほんつと、正直だよね」

ジュードは、引きつり笑いで返す。

「それで、そのまま二度と君達の前には、現れなかつただらうね」

更にそう補足する。

「珍しく、嘘ついたね」

ジュードは、そう言ってホームズに視線を向ける。

「多分、ウィンガル達と戦うときには、戻ってきたと思うよ。別れるなら、その後だらうね」

「……かもね。どちらにせよ、今ここにはいなかったよ」

ホームズは、言い終わるとジュードの方を見る。

「だからね、君の幼馴染みには、本当に感謝してるんだ。いつか、機会があつたら言つといておくれ」

ジュードは、ため息を一つ。

「自分で言いなよ、それぐらい」

ホームズは、そんなジュードを見ると優しく微笑む。

そして、レイアの事を言われた瞬間顔を俯かせたのを見逃さなかった。

「……レイアに何か言われたのかい？」

ジュードは、ゆっくりと頷く。

「うん、レイアに聞かれたんだ……『この旅が終わったらどうするの？』てさ……」

「あ、それ、おれも聞かれた」

ホームズは、そう言ってから、ふうつとため息を吐く。

「ジュードは、決めてないのかい？」

「うん、まあ……」

ホームズは、少し以外そうな顔をする。

「イル・ファンで医者 of 勉強を再開するんじゃないのかい？」

ホームズの言葉にジュードは、更に難しい顔をする。

「ふーん……」

ホームズは、ジュードを暫く見ると伸びをする。

そして、よっこらしよ、と立ち上がる。

「まあ、アレだ。人生という料理に悩みというスパイスは、欠かせないんだよ」

ホームズの言葉を聞いたジュードの顔から影が少し晴れる。

ホームズは、ジュードの横を通り過ぎ様に肩に手を置く。

「せいぜい悩みたまえ、少年」

「……ホームズもね」

ジュードの言葉にホームズは、ニヤリと笑いながら墓地の外へと歩いて行った。

「料理のできない奴が何言ってるんだ？」

「煩いなあ……」

◇◇◇◇

屋敷の入り口に帰るとそこには、レイアでは無く、ミラがいた。

「なんだ、ホームズか……」

「何だつて事はないだろう……」

開口一番のミラの言葉にホームズは、ため息を一つ吐く。

そんなホームズに構わず、ミラは言葉が続ける。

「どうやら、ようやく報酬を払えそうだ」

「そりゃあ、良かった。何回も腹に穴を開けた甲斐があるってものだ」
ホームズは、戯けて返す。

ミラは、やれやれとため息を一つ。

「ナハティガルとの戦いでは、あまり無理をするなよ」

ホームズは、ミラの言葉に驚いた様に目を丸くする。

「君がおれの事を心配するなんてねえ……」

ミラは、ホームズの言葉にふっと笑う。

「失礼な奴だ」

「君もね」

ホームズは、ニヤリと笑う。

ミラは、直ぐに笑みを引っ込めるとホームズを挑むように見る。

「ホームズ、これからも裏切る事はあるか?」

突然の言葉にホームズは、少したじろぐ。

「何? どうしたの? 突然」

ミラはホームズに構わず続ける。

「これから、私の目標を果たしに行くのだ。だから、裏切られるのは、迷惑だ」
ホームズは、頬を引きつらせる。

「馬鹿正直に言うねえ……それ、裏切るつもりがあつてもなくても、裏切らないつて言うに決まつてるじゃないか」

ホームズの言葉にミラは、考え込む。

「なるほど、裏切らないとは、言わないのだな」

ミラは、ホームズの言葉を聞いて思案する。

「確かに本当のことだ……こうやって、嘘をつかず相手を欺いていたわけか……」

ホームズは、何も言い返さずに黙つてミラの言葉に耳を傾ける。

「全部とは、言わない。しかし、お前の事は大分、分かつてきた」

ミラは、ホームズの目を真つ直ぐに射抜く。

「どうやら、お前には思ったより因縁というものが多そうだ。その因縁のせいでまた、敵に回るかもしれない。お前はそう思つてるわけだ」

ホームズは、パチパチと心のこもらない拍手をする。

ミラは、ならつと、ホームズに一步近づき、凜と立つ。

「約束しろ、ホームズ。今後は、私達を裏切るな、絶対にだ」

ホームズは、驚いて目を丸くする。

そんなホームズにミラはもう一手打つ。

「約束を破った場合は、嘘をついたと見なす」

ホームズは、動きを止めミラを見る。

ミラの言葉は、的を射ている。

ホームズの過去は、因縁は、どこでどのように顔を出すのか分からない。

今回が良い例だ。

まさか、自分自身も裏切ることになるとは、思わなかった。

また、同じことをしないとはい切り切れない。

一行の事は確かに大切に思っている。

しかし、恩を出されれば断れない。

因縁があればそちらを優先させる。

ホームズ・ヴォルマーノは、そういう人間だ。

はつきりと言うことは出来ない。

しかし、約束をしなければ、ミラは、ホームズの事を二度と信用しないだろう。

最悪報酬は、支払われない。

なら、どうするか？

簡単だ、誤魔化せばいい。

そうして仕舞えば、後はうやむやにできる。

『真剣な申し出には、それなりの対応がある』

『因みに言っておくと、誤魔化すなんてのは、悪手中の悪手だ』

母の言葉を思い出したホームズは、決意を固める。

いい加減、選ばなければならぬ。自分が誰の味方か、誰が自分の味方か、はつきりさせねばならない。

あの時、ミラ達に許してもらえた時、ホームズは、本当に嬉しかった。

それは、ただ報酬が貰える、というだけではない。

みんなと一緒に旅が再びできる事が喜ばしかったのだ。

あの時間をまた皆と過ごすことが出来る、そう思えたから、ホームズの瞳は涙に濡れたのだ。

勿論その旅にいずれ終わりが来ることは分かっている。

実際、近づいてきてもいる。

これで無事ナハティガルを討ち、クルスニクの槍を壊し、報酬を貰えばそれで終わるだ。

しかし、終わるのなら、ちゃんと終わりたい。

うやむやに、そして、後味悪く終わるのだけはごめんだ。

「わかった。約束するよ、ミラ・マクスウエル。おれ、ホームズ・ヴォルマーノは、この先、どんな事があろうとあなた達を裏切らない」

ホームズは、滅多に見せない、真剣な顔になる。

ホームズのその顔を見るとミラは、優しく微笑む。

そして、右手を出す。

「その言葉を待っていた」

ホームズは、微笑むと同じように右手をだす。

そして、誓うように強く握手をする。

「お待たせしちやつて悪かったよ……」

そう言つてホームズは、肩にいるヨルを見る。

「とういうわけだ、ヨル。残念だろうけど、マクスウエル殿と戦う事はしばらくはないけど

……いいよねえ？」

「俺に拒否権なんて最初^{ハナ}ないだろ」

「よく分かつてるじゃないか」

ヨルの言葉にニヤリと笑うと握手を解き、意地の悪い笑みを消し、目に力を込める

「頑張ろうね、ミラ」

「ああ、改めてよろしく頼む」

ミラは、短く、簡潔に、そして、凜として答えた。

縁は異なるもの通なもの

「……………何してるんだい？ローズ？」

「見ての通り、掃除よ」

ローズは、そう言うのと箒のゴミをちりとりを集める。

「……………質問を変えるよ、ローズ。どうして、掃除をしてるんだい？」

ローズは、ちりとりを集めたゴミをゴミ箱に捨てる。

「ただ、泊めてもらうのも悪いから、掃除でもしようかなって」

ローズは、そう言うのと広間のソファに腰掛け、本を開く。

ホームズは、ローズの栞に見覚えのある花があるのを見つけた。

「それかい？おれが上げた花の冠の花って？」

ローズは、一瞬動きを止めるが、本を閉じて答える。

「そうよ」

そう言ってローズは、栞をホームズに見せる。

「へえ……………」

ホームズは、少しだけ嬉しそうに微笑む。

ローズは、気恥ずかしそうにホームズから、栞に視線を移す。

「……で、貴方こそ何してるのよ」

「ああ、クレインさんのお墓参りの帰り。後はダラダラしてようかなって時に君が掃除をしているのが目に入ったの」

ローズは、ホームズの言葉を聞くと首を傾げる。

「クレインさんって？」

「ドロツセルさんのお兄さんだよ。ナハティガルの手の者に殺されたらしいんだ」
ホームズの話聞きローズは、顔を曇らせる。

「……もしかして、だからあんなに若い女の子が領主をやっているの？」

「正解。多分亡くなってからそう日は立っていないよ……」

ローズは、ドロツセルの事を思う。

「……そっか、思ったよりもナハティガルの名前を聞くわね……」

改めて、自分が一体誰に挑もうとしているのかを再認識した。

「何だか、貴方達に会ってから色々変わったわ……」

「……どの辺が？」

「アルクノアを知った。まあ、昔から知っていたけれど、それでも実際に見たのは初めてだった訳だし……後は、黒匣ジンやら、マクスウェルやら、ガイアス王やら、四象刃フォーエッジやら、

ナハティガル王やら……大騒ぎもいいところよ」

「まあ、あそこにずっといれば知ることもなかったし、関わることもなかったらうね」
ホームズは、肩をすくめる。

ローズは、伸びをする。

「お陰で自分がどれだけ、未熟者か理解する事が出来たわ」

伸びをした後ローズは、静かに下を向く。

カン・バルクの城での事を思い出しているのだろう。

彼処で自分が如何に覚悟が足りなかったのかはつきりと分かった。

そして、そういう事が分かるほど……

「みんな凄いやね……」

「みんながみんなって訳じゃないだろう……例えば、つり目のガキとか」

ローズの言葉をヨルが冷めた口調で遮る。

ヨルの言葉を聞いてローズは、首を横に振る。

「それでも、ジュードは、変わろうとしてる、大人になろうと必死になつてる。勿論、

迷いながらね」

そこでローズは、言葉を切ると伸びを一つ。

「年下が、そんな事になつてるだもの……焦らない理由はないわ……」

ホームズは、黙ってローズの話の話を聞いている。

「だからさ、私も目標を作ったの。こうなりたい！て言うものをね」

「へえ……………誰？」

と聞きながらもホームズは、何と無く予想は付いていた。

このパーティーには、それが一番似合う奴がいるのだ。

男でも、恐らく目指すだろう。女なら尚更だ。

「ミラよ」

予想通りの言葉にホームズは、少しだけ微笑む。

そんなホームズに構わず、ローズは、言葉が続ける。

「私はミラみたいに自分の信念を貫き、使命を果たせる人間になりたい」

「ま、彼女、人間じゃないけどね」

「人の決意を茶化さない」

ローズに睨まれホームズは、肩をすくめる。

「その為にも私は、覚悟を決めるわ。今度こそ、ね」
ローズは、ギョツと手を握る。

ホームズは、黙ってローズの決意をきいていた。
そんなホームズを見て、ローズは、決意を熱く語っていた自分が恥ずかしくなったのか、顔を赤くする。

「ま、ま、まあ、成れたらいいなあ……なんて感じなんだけど……」

ホームズは、そんなローズを片眉をあげて見る。

「最後までカッコつけたまえローズ。その決意は、誇れるものだ。高みを目指す、その心意気、覚悟、決意、どれをとつてもいいものだ」

真つ直ぐな褒め言葉にローズは、更に反応に困ったように顔を赤くしながら頭を掻く。

「そ、そう?」

ホームズは、そんなローズに優しく微笑む。

「楽しみしてるよ、君がそんな人になるのをね」

皮肉もからかいもないホームズの言葉にローズは、赤くなった顔を隠すように背ける。

「意外ね、貴方がそんな事を言うなんて」

「友人の成長を楽しみにしない奴はいないだろう？」

「……………ま、それもそうね」

ホームズの言葉に少し冷静さを取り戻す。

「貴方は、成長するのかしら？」

「なんで、そこ疑問系なんだい？」

ホームズは、頬を引きつらせながら尋ねる。

ローズは、椅子に深く腰掛ける。

「……………何というか、もう成長し終わってる感じがするのよ、貴方」

ホームズは、神妙な顔をしながら聞いている。

「もう、やるべき事も見極めて、その為の努力もして、覚悟も決めて……………なんかさ、大人というか……………」

「そりゃあ、君より年上だからね」

ホームズは、どうでも良さそうに答える。

ローズは、ホームズの返答を適当に聞きながら首を捻る。

何だかニュアンスが違う気がする、と。

これよりもっと近い表現がある様な気がするのだが…………

しかし、直ぐにぴったりな言葉を探し始める。

「そうじゃなくて……えっと……ああ、分かった」

「何が？」

「到達してるのよ、貴方」

「到達？」

「そう、なんかこうゴールしてるみたいな」

ホームズは、ローズの言葉に肩をすくめる。

「くっだらない。おれをいくつだと思ってるんだい？まだ、十八だぜ。」

まだまだ成長するんだよ、これからね」

ホームズは、そう言っただけで欠伸を一つ。

そんなホームズに構わずローズは、続ける。

「何だか残念な行動の方が多けれど、時々？偶に？稀に？見せる行動を見るとやっ

ぱり凄いなって思うわ」

ホームズは、そこで目を丸くする。

「……君がおれの事を褒めるなんて……珍しい事もあるもんだね」

心の底から驚いているホームズにローズは、しまったと唇を噛む。

何と無くその場の雰囲気ホームズを褒めた気恥ずかしさが一気に襲ってきた。

しかし、否定するのもあまり好ましくない。

「……え、え、ええ、そうでしょう?」

ローズは、精一杯なんて事ないという風に笑う。

勿論引きつった笑みになっているのだが。

ホームズは、ローズの言葉にニヤリと笑い、意地悪く尋ねる。

「ま、目標にする程じゃないだろう?」

「他人の褒め言葉ぐらい素直に受け取りなさいよ……」

ローズは、一気に冷めた表情になった。

ホームズは、クツクツクと楽しそうだ。

対するローズは、膨れっ面だ。

ヨルはそんな二人のやりとりを聞いていたため息を一つ。

ホームズは、ひとしきり笑うと深いため息を吐く。

「……『到達してる』か……」

「どうしたの?」

「まあ、君の言葉が意外に的を射てるなって……」

「?」

「こつちの話」

そうやって胡散臭く微笑むホームズを見てローズは、ため息を吐く。

「その秘密主義もどうにかしたら？」

ホームズは、肩をすくめて立ち上がる。

「ま、気が向いたらね」

「……答える気ないわね」

半眼のローズを他所にホームズは、自分に割り当てられた部屋へと歩いて行く。

「ああ、そうだ、ローズ」

突然名前を呼ばれたローズは、少し戸惑う。

「何？」

「頼りにしてるよ」

ホームズは、そう言い残し去っていった。

ローズは、ポカンとしていたがホームズが姿が見なくなると少し拗ねたようになる。「不意打ちは、卑怯だと思おうわ……」
悔しそうにそういった後、ローズは、もう一度口を開く。

「任せなさい！」

そう言っ胸をどんと叩いた。



ホームズは、与えられた部屋に入るとベッドに倒れこむ。

「なーんか、みんな色々考えてるんだねえ」

仰向けになるとホームズは、ポツリと呟いた。

「……お前も別に例外じゃないだろ？」

ヨルの言葉にホームズは、眉をびくりとあげる。

「あのオンナと約束をするまで、裏切る羽目になるかもしれないとビクビクしていたのは、何処のどいつだ？」

「さて、誰だろうね」

ホームズは、肩をすくめ、それから口を開く。

「まあ、約束もしたし、そんな事はもうないだろうけどね」

「……ま、お前は一度決めればそうそう破らないだろうからな」

ヨルの言葉にホームズは、少し笑顔になる。

「まあね」

そう言ってから何かを思い出すように指をくるくる回す。

「そう言えば、おれってナハティガルの顔も知らないんだよね……どんな奴なのんだい？」

「俺が知るか」

「だよねえ……」

ホームズは、ふむと腕を組む。

「おれだけ、縁が薄い気がするなあ……」

「何が？」

「いや、ローエン、ジュード、ミラ、エリーゼ、アルヴィンは、一度は対峙したことがあるわけだろう？」

レイアとっては、自分の国の王様。

ローズとっては、一応敵国の王様。

なんかおれだけ、こう……ね？」

「報酬が欲しいんだろ？ だったら、それだけで十分じゃねーか」

ホームズが、言葉を探しながら言うホームズにヨルは、どうでも良さそうに返す。

「まあ、そう考えこまなくとも縁だの因縁だのは、お前が忘れてるところでひよつこり顔を出すさ」

「……そう?」

ヨルの言葉にホームズは、首を傾げる。

「……おれがナハティガル王に対して関わっているものって、クルスニクの槍のぐら
いしか思い当たらないんだけど……おまけにそれも実物を見たわけでもないし……な
んか、冷静に考えてみれば裏切るとかそれ以前に……こう……」

ホームズは、うーんと唸りながら何かピツタリの言葉を考えた後ヨルのほうをみる。

「アレだ。文字通り、縁も所縁ないって奴?」

「どうだか」

ヨルはそれが正解とは思っていないようだ。

首を傾げるホームズにヨルは口を開く。

「昔っからな、縁とか因縁ってやつは、生きてきた分絡みついてるものだ。」

そして、大抵の人間は、それに気付かない」

ヨルはそう言ってホームズを見る。

「例えば、俺とお前の関係がそうだろ? きつと俺に関わらなければ、お前はマクスウエ
ルと闘うこともなかった……」

「……お前が気付かなかっただけで、マクスウエルと因縁だって、生じてだろ」

「……属に言う縁は異なるもの味なものって奴かい?」

ホームズの言葉にヨルは頷く。

「てなわけで、馬鹿王にもお前が気付いていないだけで何かの因縁があるかもしれないぞ」

「……ま、忠告程度に聞いてあげよう」

そう言うのとホームズは、うーんと大きく伸びをし、感慨深げに口を開く。

「………とりあえずは、あれだ。やつと、ここまで来たつて奴だねえ」

「長かったな……」

ヨルもホームズの言葉に同意する。

この手掛かりの手掛かりを掴むのに幾年も。

手掛かりに辿り着くまで、何日も。

この道のりは、長く険しいものだった。

しかし、ようやく彼らの望むものが手に入るかもしれない。

結局確実ではないところがなんとも言えないのだが、そうは言っても今まで一番根拠のあるものだ。

ホームズにも自然と力が入る。

「もう少しだ……ヨル」

「そうだな。足を引つ張るなよ」

「君こそね」

ホームズとヨルは悪態をつき合い、どちらともなくニヤリと笑った。

それぞれの決意をそれぞれの胸に秘め、束の間休息は、こうして過ぎて行った。

決戦の日はもうすぐだ。

立つ鳥？跡を濁さず

「みなさん、ワイバーンですが、そろそろ飛べるそうですよ」

テラスに集められた一同は、ドロツセルからそう告げられた。

「ふむ……早いな」

ミラはワイバーンの回復の早さに驚いたようだ。

「それじゃあ、出発しよう」

ジュードの言葉に一同は、広場へと歩き出した。

「はあ……また、アレに乗るのか………」

ホームズは、ポツリと呟いた。



「……て、あれ？アルヴィンは？さっきまでここにいたのに」

ホームズは、キョロキョロと辺りを見回す。

「どうせまた、嘘つく準備です……」

エリーゼは、下を向いて悪態をつく。

「ふむ、一理あるな……」

ヨルはエリーゼの言葉に納得している。

「ははは……」

ホームズは、頬を引きつらせる。

否定したいのだが、完璧に否定する事は出来ない。

そんなエリーゼをジュードが、諭す。

「そんなはずないよ、エリーゼ」

少し声が震えているところを見るとジュードも完全に否定は出来ないのだろう。

そんな面子を見ていたミラが口を開く。

「他の者はどう思う？このままアルヴィンとこの先の戦いを共にしてもいいと思うか？」

答えづらい質問だった。自分達を裏切ったような男をそう簡単に信用できるものではない。

ホームズも中々、微妙なラインだというのに、同じ様な事をしたアルヴィンが何も無しに信じてもらえるわけがない。

「お母さんの事で頑張ってるみたいだし、わたしは、応援してあげたいな……」
レイアは、優しくそう言う。

「私は、彼自身がこのまま行くのかとても心配しています」
ローエンがアルヴィンの事をそう評価する。

余り褒められた生き方をしてない。大人とは言いづらいところがあるのだ。
「ふい……」

エリーゼは、少し膨れっ面をして顔を背ける。
代わりにティポが口を開く。

『でもさ〜僕を悪い奴から取り戻してくれたのもアルヴィン何だよね〜』
隣で聞いていたエリーゼは、少し驚いた顔をする。

「どう思う? ホームズ?」

尋ねるローズにホームズは、微笑む。

「おれは別にいいよ。同じ裏切り者同士、彼のことを信じてあげるよ」
場の空気が凍りつく。

「ホームズ……」

ローズの絶対零度の視線を喰らいホームズは、気まずそうに肩をすくめる。

「まあ、それはともかく、あの子ほどの戦力を手放すのはおれとしては御免被りたい
ね」

ホームズは、割と真面目に言う。

確かにパワータイプで戦い慣れしているアルヴィンは、重要な戦力である。

「他にも理由は幾つかあるけど、まあ、そんなところかな」

最後の方は、戯けてそう言った。

そんなホームズの言葉を聞くとジュードは、ミラの方を向く。

「ミラはどう思ってるの?」

「真意が分からない以上信頼は、出来ないが戦いにおいてはこと信用している」
ミラの言葉を聞きエリーゼが微笑む。

「本人のいないところで悪口なんて、イケナイ子のすることだぞ」

声のした方を振り返るとアルヴィンがそこにいた。
エリーゼは、アルヴィンを睨むと顔を背ける。

「知りません」

冷たい対応にアルヴィンは、肩をすくめる。

「俺の味方は、お前らだけだよ」

アルヴェインの物言いにジュードは、半眼を向け、レイアは、何処かの誰かさんの様に肩を竦める。

ホームズは、面子を確認する。

「うん、全員揃ったみたいだね」

ホームズの言葉にミラは頷く。

「ふむ、ならばそろそろ出発……」

「待つてください!」

ミラの言葉をエリーゼが止める。

『ローエン、友達とケンカするのー?』

ティポの言葉を聞いたローエンは、柔らかく微笑む。

「ナハティガルがああなあってしまったのは、私にも責任があります。

私は私なりの覚悟をもって戦います」

ローエンの言葉を聞いてレイアは、ホームズをちらりと見る。

目のあったホームズは、レイアに片眉をあげる。

「頑張ろうね、ローエン。私も頑張るから」

友と戦う辛さは、レイアには分かる。だからこそその、心からの応援だ。

「骨は拾ってやるよ、じいさん」

アルヴィンが、縁起でもない冗談を言うと、ローエンはアルヴィンを見る。

「その時はよろしくお願ひします」

まさか、そんな返しが来るとは思わなかったのだろう。

アルヴィンは、顔を暗くする。

「……マジにとるなよ」

それぞれの言葉を聞くとジュードは、表情を固くする。

「覚悟は決まったね、後は……」

「ああ、準備を整えて出発するのみ……みんな準備はいいか？」

ミラの質問にみんな力強く頷く。

ミラはそれを見届けると、ドロツセルの方を向く。

「世話になったな、ドロツセル」

ドロツセルは、静かに首を横に振り、その後ローエンに言葉をかける。

「ローエン、お兄様の為にも必ず帰ってきて下さいね」

ローエンは、優しく微笑む。

「分かりました、お嬢様」

ローエンのその様子を心配そうに、そして満足そうに見ると、今度はホームズの方を向く。

「あなたもですよ、ホームズさん。貴方が仕入れる紅茶が終わりそうなんです。また、持って来てくださいね」

ドロツセルの言葉に、ホームズは、少し目を丸くすると嬉しそうに微笑む。

「了解です。その時は、サービスしますね」

「具体的には?」

「三割引きでどうです?」

ホームズという言葉にドロツセルは、面白そうに笑う。

「そのセコさがらしいですね……分かりました。ちゃんとお金を用意しておきます」
ドロツセルの言葉を聞くとホームズは、そのまま自分のワイバーンへと歩いていく。

ローズは、後ろを付いていく。

「……随分と仲よさそうじゃない」

「お得意様と仲悪くてどうするんだい……」

ホームズの呆れた様な物言いにローズは、少し時間をかけて納得すると、ドロツセルの方をチラチラと見る。

「私もお茶菓子持って行ってもいい?」

「ドロツセルさんに聞けば?」

ホームズの言葉にローズはドロツセルの方を見る。

ドロツセルは、それを見ると優しく微笑む。

「ええ、楽しみにしてますよ」

ローズは、嬉しそうに笑うとホームズの後を追うようにワイバーンに乗る。

「いい人ね、ドロツセルさん」

ローズは、心の底からそう言う。

するとホームズは、嬉しそうに微笑む。

「まあ、お得意様ってのは、そう言うもんさ」

そう言ってホームズは、手綱を握った。

みんながワイバーンに乗るとそれぞれ飛び立って行った。

「待ってますよ、皆さん」

ドロツセルは、そう言って見送った。



「世の中には、『しばうふらぐ』と言うものがあるらしいな」
バナウル街道に降りるとヨルは、そう呟いた。

「……どこで覚えたのそんな言葉……つーか、どうしたの突然?」
ホームズは、グツタリとしながら返す。

因みにローズも似たようなものだ。
先程から魂の抜けた顔で雲の流れを見ている。

相も変わらず、言うことを聞かないワイバーンを操ってホームズは、疲弊していた。
「いや、何先程の女領主との会話を思い出してな」

ホームズは、ワイバーンの方を見ると口を開く。

「だったら、安心したまえ。さっきの命がけの空の旅でフラグ回収したから」

実際今回も3回ほど死にかけている。

勿論ワイバーン達が何処かの化け物を怖がっていたからだ。

ミラは、そんな会話をしている彼らを尻目にローエンにこの道であっているのか尋ねる。

「よし、それじゃあ、行こう！」

ジュードの言葉にホームズは、重い腰を上げた。

「ほら、ローズ行ってくつてよ」

「うー……」

ローズは、なんとか頷くが立ち上がる元気は、無さそうだ。

ホームズは、ため息を一つ吐くとローズの手を掴んで引つ張りあげる。

ローズは、ホームズの行動に目をパチクリさせる。

「……………ありがとう」

少し顔を赤くしながらローズは、礼を言う。

代わりにホームズは、怪訝そうな顔をする。

「まさか、手を握られて照れてるんじゃないかあるまいね。

別にこれが初めてじゃないだろう？」

確かにこれが初めてではない。

ホームズは、何回かローズの手を掴んでいるのだ。

ホームズの言葉を聞くとローズは、赤くなつた頬をスツと元の色に戻す。

そして、

「ハニー」

ホームズの頭にチョップを食らわせ、スタスタとホームズを置いて歩いて行つた。

アルヴィンとローエンは、顔を抑える。

一部始終見ていたレイアとエリーゼは、何とも言えない顔でホームズを見る。

別にローズは、手を握られた事だけに照れていたのではない。

ローズを引つ張り起こしてくれた事に照れていたのだ。

滅多に見せない優しさにローズは、不意打ちを食らつた気分だつたのだ。

まさか、不意打ちでそれをやられるとは思っていなかった為、不覚にも照れてしまつ

たのだ。

まあ、勿論手を握られた事にも照れていたのだが……

そんな乙女心を全く理解していないホームズは、痛む頭を抱えていた。

「こういうの知ってます……確か、デリカシーがないって言うんですよね?」

「正解だよ、エリーゼ……」

レイアは、ため息を一つ吐くと愚かで哀れな友人に視線を送った。



「……………ねえ、ローズ……………何が気に障ったか知らないけど、そろそろ機嫌直しておくれよ……………」

緊張感のない哀れな声をだしているのは、ホームズである。

先程から口をきいてくれないローズにホームズは、気まずい思いをしている。

勿論、もれなくホームズの肩に居るヨルも気まずい思いをしている。

さつきから、レイアの方に助けを求める視線を送っているのだが、レイアは見ない振りをしている。

「……………ねえ、ジュード」

「何？」

「わたし達、これから王様に喧嘩を売りに行くんだよね？」

「そうだよ」

オロオロしているホームズを見てレイアは、ため息を吐く。

「緊張感ないなあ……………」

「ほ、ほら、張り詰めた空気を和らげようとしてるのかも？」

「いや、あいつらの空気張り詰めまくってんだろ」

ジュードの決死のフォローをアルヴィンが冷静に潰す。

段々と空が暗くなっている。

つまり、夜域であるイル・ファンに近づいているのだ。

敵の親玉へと乗り込むというのに、このていたらしく。

そんな空気の中、ホームズが何かを見つける。

「ほ、ほら、ローズ！「アオイハナ」だよ！」

ホームズが指差す先には青色の綺麗なら枚の花びらを広げている花があった。

ジュードは、それを見て苦笑いする。

「……………それ、カエルラでしょ……………「アオイハナ」って……………まんまじゃん」

ジュードは、冷たくホームズをあしらう。

ホームズは、驚いたように手を叩く。

「へえ……そんな名前だったんだ……」

ホームズは、そう言うと一本むしりローズに渡す。

「何？」

「あげるよ」

「はあ？」

余りの突然の行動にローズが、ポカンと口を開けると、ホームズはその花をローズの口の中に放り込む。

突然の事にローズは、目を丸くして驚く。

「ちよっ………！何すんの………よ？」

モグモグと口を動かし首を傾げる。

「あれ？美味しい？」

そんなローズにホームズは、得意げに胸を張る。

「だろう？これはね、食べれる花なんだよ。肥沃な土地でしか育たないのが難点だけど、とても美味しいんだ」

疑わしげな目でローズは、ローエンとジュードを見る。

ローエンは、そんなローズに微笑みかける。

「その通りですよ。私も軍にいた頃は、よくお世話になりました」

ジュードもコクリと頷く。

ローズは、不思議そうな顔をする。

「どうして、私に？」

「いや、美味しいものでも食べれば機嫌も直るかなあつて、思ったんだけど……」
最後に行くにつれて声が小さくなつていく。

そんなホームズを見てローズは、ため息を一つ吐く。

「別にそこまで怒つてないわ……ごちそうさま」

ローズは、ホームズにそう返す。

「……うん、と言うか、やつぱり怒つてたよね？なん……」

ホームズが最後まで言葉を出さないようにアルヴィンがホームズの口を腕で塞ぐ。
そして、レイアが前に出て手を振りながら誤魔化す。

「えつと……ほら、何でもない……よ？」

ローズは、それを見ると深いため息を吐く。

「分かったわよ、なんでもないのね」

そう言つて再び歩き始めた。

「ローエン」

ミラはそれを見ながらローエンに尋ねる。

「これから、という時なのに緊張感がまるでないのだが……」

「いいじゃないですか」

ローエンは、そう言つて騒いでいる彼らを見る。

「これからという時にいつも通りでいるのも大切ですよ」

「物は言いようだな……」

騒ぎから逃げて隣にいるヨルは、そうこぼした。

ナハティガル王 足元から現れる

「おおー！」

イル・ファンに着いたホームズは、感嘆の声を上げる。

「いつ来ても、やっぱり息を呑むねえ」

夜域と言われるイル・ファンを街灯樹が彩る。

その幻想的な光景は、見るものを魅了する。

カバンをホテルにおいて身軽になったホームズは、そんな景色を楽しそうに眺めていた。

「景色を楽しむのもいいけど、今はそれどころじゃないでしょ」

ローズは、そう言って舞い上がっているホームズの前を指差す。

ホームズは、ローズの指差す方向に目を向ける。

そこには、ラ・シユガルの兵が辺りを走り回っているのが目に入る。

「うーん……なんだか、物々しいねえ」

ホームズは、顎に手を当て考える。

ジュードも不審そうに見回す。

「何があつたんだらう？」

「見て！あれ！」

レイアが指差すその先には、煙が上がっていた。

「あれ、研究所の方向だ!!」

ジュードは言葉にミラは顔を険しくさせ口を開く。

「行こう！」

その言葉を聞くと一同は、走り出した。



一行が研究所に辿り着くとそこには、倒れている兵士が多数いた。それぞれ倒れている兵に駆け寄る。

「エブアさん!？」

ジュードは、駆け寄った兵士の顔を見て驚く。

「先生……ジュード先生なのか？」

「知り合いかい？」

ホームズの質問にジュードは、首を縦に振る。

ジュードの答えにホームズは、改めてエデと言われた男を見る。

ひどい怪我を負っており動くのも辛そうだ。

「聞いてくれ。兵士の中にア・ジュールのスパイが紛れ込んでいた」

エデは、そんな状態にも関わらず、ジュードに現状を報告する。

エデの言葉にジュードは、息を呑む。

「拘束しようとしたら、奴ら……実験室を爆破して……」

ジュードにそう言うのと、医者が近寄ってきて、エデを抱えていく。

「ガイアスがもう動き出したんじゃ……」

今の話を聞いてジュードは、何か思ったようだ。

ホームズは、アホ毛を触りながら考える。

「……というより、何で研究所なんだい？」

イル・ファンの夜に青白い光を放ち佇む研究所を見上げながらホームズは、言葉を続ける。

「ガイアス王が動き出してるんだったら、もっと別の場所を狙うもんだろう？何でよりによって、学者さん達の聖地が襲われてるんだい？」

「それは、ここに『クルスニクの槍』があるからだ」

ホームズズの疑問にミラが答える。

ミラの答えにホームズズは、眉を寄せる。

国の研究所を利用して、最悪の兵器を作る。

そして、それを嗅ぎつけたア・ジュールのスパイが進入しようとしたのだ。

自分の物とする為に。

「……なるほど」

ホームズズは、納得したようだ。

「とにかく、急ぐぞー！」

ミラは、そう言うのと先頭を切って研究所に入ってしまった。



「……外から見ても思ったけど……」

研究所に入ったホームズは、辺りを見回す。

「広いね」

「……なるほど、兵器の一つや二つあっても不思議じゃないな」

ホームズの言葉にヨルも感想を漏らす。

「何だお前たちは？」

兵士がヨル達の方に来る。

爆発騒ぎで警備をしていた兵士がジュー達に近づく。

ミラとジュードが構える。臨戦態勢が整った。

そんな二人をホームズが手で制する。

「どうも、以前こちらにお渡しした物の点検に参りました」

ホームズは、にこやかに笑う。

「渡したものの？」

兵士は、不審そうに首を傾げる。

「はい」

そんな兵士に構わず、ホームズは更に笑顔で言葉が続ける。

「まあ、お節介かとは思いますが、仕事の関係でここを通りかかったら、研究所の方が騒がしかったようなので心配になって寄せせてもらいました……どうでしょう？」

ホームズが物腰低く交渉をする。
兵士は迷う。

この非常時に、関係者以外を通すのは、余りいいものではない。
しかし、もしこの目の前の人間の言っていることが本当だった場合、それを止めた自分は完全に足を引つ張ることになる。

どうしようか悩んだが、正直今は呑気に悩んでいる場合ではない。

「分かった。そういう事なら、頼んだ」

「はい、ありがとうございます」

ホームズは、とびきりの笑顔を浮かべ、ミラ達を先導していく。

ローズとレイアは、しらつとした顔を浮かべホームズを見る。

「見た？」

「見たわ。とびきりの胡散臭い笑顔だったわね……」

その兵士から、かなり離れ、声が届かない位置に來るとミラが険しい顔で訪ねる。

「一体ここに何を売った？物によっては……」

「用紙」

「は？」

「だから、用紙、紙、ペーパー」

ミラは開いた口が塞がらない。

そんな様子のミラに構わずホームズは、言葉を続ける。

「前にここに来た時にさ、この研究所から出てきた白衣を着たおっさんに紙を売ったんだよ、無くて困ってたみたいだからね」

「……………確認する？」

ジュードの言葉にホームズは肩をすくめる。

「するまでもないだろう。何年前の事だと思っっているんだい？」

「……………ホームズ、嘘吐いたんですか？」

エリーゼは、ジトつと睨む。

ホームズは、ニヤリと笑ってエリーゼに答える。

「失礼だなあ。おれは何一つ嘘はついてないよ。おれが言ったのは全部本当の事。彼が勝手に勘違いしただけだよ」

ジュードは、大きくため息を吐く。

確かに何一つ嘘はついていない。

以前と言うのも確かに前だし、実際にここに物を売りに来ている。

「相変わらずだね……」

「つーか、君たち、お礼の一つや二つあってもいいんじゃないの?」
ホームズは、半眼で一行を見る。

「そうか、言われてみればお前のお陰だな」

今気づいたという風にいうミラを見てホームズは、ため息を吐く。

「ま、いいけどね」

そう言っってホームズ達は、ある扉の前で立ち止まる。

「なんだい、これ?」

鋼で覆われており、全く開く気配がない。

「この先に何かあるか知ってるかい?」

ホームズの質問にミラは顔を険しくする。

「クルスニクの槍だ」

ミラの言葉にホームズは、もう一度扉を見る。入ろうとする者を拒む確かな圧力があつた。

ミラは剣を抜くとその扉を何度も斬りつける。

「クソ！この向こうにクルスニクの槍があると云うのに！」

しかし、斬れる気配は、全くない。

それを理解したミラはホームズを見る。

「ホームズ、何時ものあの黒い霞を出せ！」

ホームズは、静かに首を横に振る。

「止めておきたまえ。音を聞きつけて兵士達が向かってくる事になるよ」

ホームズの言葉にミラは渋々と頷く。

「他のところを探そう」

ジュードが静かに言うのとミラは剣を収め、再び歩き始めた。

「大したものだねえ……」

ミラのそのクルスニクの槍に対する怒りを見てホームズは、そうつぶやいて再び歩き始めた。



一行が別の扉を探していると、ガタンという音が聞こえた。

「何だろう？」

ホームズが前方に見える扉を指差しながら言う。

「行ってみよう」

ジュードは、力強く言うとその扉に駆け出し、他のみんなもそれに従う。

「なに……これ？」

ローズは、異様な部屋の光景に言葉が続かない。

扉を開けて入った部屋の中には、円柱状の水槽が両側に並べられている。

しかもよく見れば……

「人が……入ってる……」

ぶくぶくと水の中に浮かんでいる人間達は皆意識がなく、ぐったりとしている。

ホームズは、ホームズで呆然とその水槽を眺めている。

そんな中、ジュードは床に倒れている老婆に駆け寄る。

「大丈夫か!？」

ミラの言葉を聞き、老婆は口を開ける。

「わ、わたしは、もう何も……許して下さい……」

アルヴィンは、その顔を見て気づく。

「このバアさん!!」

「知ってるの?」

ローズは、驚いてアルヴィンに尋ねる。

「知ってるも何も……」

「村長さん!!」

アルヴェインが説明する前にエリーゼが駆け寄る。後から合流したホームズ達は知らないのだが、ここに倒れているのは、エリーゼを軟禁していた村の村長である。

『しつかりしてよー!!』

ティポも必死に呼びかける。

「ハミルの村長か……ラ・シユガル軍に進行されたと言っていたな……」

ミラは現状を把握しようとしてハミルの村長に話しかける。

「みんなが……凍り付けに……」

しかし、返ってくるのはうわ言の様な返事だけだ。

「やめてくださいれー……」

掠れながらも村長は、何かを恐れる様にうわ言を繰り返す。

「あ……あ……あ……あ……」

そして、最後には何も物を言わなくなってしまう。

息絶えてしまった村長を見てジュードとミラは目を背ける。

「村長さん！村長さん！」

エリーゼの必死な叫びも村長には、もう届かない。

一部始終見ていたローズは、強く手を握る。

「これ、ラ・シユガルの王様がやったのよね……」

ローズにとつての王は、間違つても人をこんな哀れな死に様にさせたりしない。怒りに震えているローズを尻目にヨルは、静かに観察する。

「ホームズ……こいつからはマナを一切感じないぞ……」

ヨルは、嫌悪感を一切隠さずホームズにそう言う。

ヨルの言葉にジュードが答える。

「きつと……この水槽みたいな装置でマナを搾り取られたんだよ……僕の教授も同じ死に方をしてた」

ジュードの言葉にホームズの顔から血の気という血の気が全て消えていく。

「何……で……」

頭をくしゃくしゃと手でかきながら、誰に問うわけでもなく呟く。

「ホームズ？」

そんなホームズを不審に思ったジュードは声をかける。

しかし、ホームズの呼吸は、そんなジュードを他所にどんどん荒くなつていく。

一目見て異常だと分かるほどにまで……

ても何も遜色のない程だ。

そんな彼らに構わず、ありったけの声で叫ぶとホームズはそのままふらふらとおぼつかない足取りで歩き出し、壁にぶつかる。

「ホームズ!!」

慌ててホームズ駆け寄るジュード。

しかし、ホームズは駆け寄ってきたジュードを虚ろな目で確認すると、顔を険しくさせ胸ぐらを掴み上げる。

「ホームズ!?!」

その唐突な行動にエリーゼは、驚きの声をあげる。

「——!!」

突然の事にジュードは、声も出ない。

普段のホームズからは想像もつかない恐ろしさにジュード達はただ黙って見ているしかない。

「……………どうして……………どうして!…どうして!…どうして!…ここにこんなものがあるんだ!!」

これは、この機械は……！この装置は……！この技術は……！！」

ホームズは、そう言うのと更に拘束する力を強める。

ジュードは、苦しそうに呻き声を上げる。

ヨルは、尻尾を伸ばすと鞭のように振るってホームズを叩く。

ホームズは、痛みと突然の出来事に硬直する。

「落ち着け、阿呆。そいつは、唯の医学生だ。」

この国の裏側になんぞ今の今まで関わっちゃいない」

ヨルのビンタと言葉にホームズは、正気をとりもどした。

正気をとりもどしたホームズは、ジュードの胸ぐらから手を離す。

胸ぐらから手を離れたホームズは、申し訳なさそうに頭を掻く。

「……ごめん」

謝ったとは言え先ほどのホームズが忘れられない面々は、心配そうに見る。

ホームズは、口に手を当てブツブツと何かを喋っている。

「まさか……なんで……そうか……でも……」

そんな中ミラが質問をする。

「ホームズ、一体どうした？」

しかし、ホームズは、先程と同じ様にブツブツと喋っている。

どうやら聞こえていないようだ。

ジュードは、近づいて肩をポンと叩く。

ホームズは、びくんつと肩を震わせ、肩を叩いたジュードを見る。

「ホームズ……僕達は上にある機械を調べておくよ」

「あ……ああ、そう分かった。じゃあ、おれも……」

ホームズの言葉にジュードは首を横に振る。

「……ここで待ってて。何かあつたら伝えるから」

「でもさ……」

しかし、ホームズは付いて行こうとする。

すると、ミラがおもむろに口を開く。

「雇い主からの命令だ。ホームズ、お前はここにいろ。何かあつたら、必ず伝える」

「……分かった」

ホームズは、渋々頷くとジュード達が上への梯子を登って行くのを黙って見送った。

それを見届けるとホームズは、どかっと腰を落とす。

「何でこんなものがここに……」

ホームズは、思わず頭を抱え、髪をくしゃくしゃにする。

「きつと、繋がりがあつたのだろう……どうやら、お前にも因縁がありそうだな」

ヨルの言葉にホームズは力無く笑う。

「こんな、因縁があるなんて思わなかったよ……ヨル、君は気づいてた？」

「まさか。クルスニクの槍の原理なんて今知ったところだ」

「……だよねえ」

そう言つてホームズは、もう一度人の入っていた水槽を見る。

「過去は無かつた事にならない……か」

そんな会話をしているとジュード達が降りてきた。

「どうだったんだい？」

ホームズの問いにミラが答える。

「ここにはない。どうやら持ち出されたようだ……」

ホームズは、一気に顔を険しくする。

「わかつた。探しに行こう」

そう言つて勢いよく立ち上がるが、立ち眩みを起こし、ホームズは、膝から崩れ落ちる。

「ホームズ」

今度はミラが駆け寄る。

ホームズは、近寄つてきたミラの肩をぎゅつと握る。

「ホームズ？」

肩に込められた力に戸惑いながら、ホームズの顔を見る。相変わらず血の気は無く、真つ青だ。

「ミラ……誓うよ、おれは」

不審そうにミラに構わずホームズは、言葉が続ける。

「……クルスニクの槍は、必ず壊す。」

「コレは、あつていいものじゃない」

今まで、報酬の為の仕事だった理由が完全にホームズの理由になった瞬間だった。

唐突の宣誓にミラは戸惑ったが、直ぐに力強く頷く。

ホームズは深呼吸をし、今度はゆっくりと立ち上がる。

「休まなくていいの？」

ローズの言葉にホームズは、大丈夫と胡散臭い笑顔で返す。

「行こう！」

ミラの言葉に頷き、皆が歩き出した。

ホームズの歩みが一番遅いため、必然的に最後になる。

最後尾を遅れて歩いていたホームズは、ミラ達の姿が見えなくなった瞬間、胃の中の物を全て吐き出した。

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

幸い吐瀉物は、服にはつかなかった。

ホームズは、壁に寄りかかりながら立ち上がる。
ライフボトルで口を濯ぐのも忘れない。

これで匂いもどうにかなるだろう。

「しっかり……しなきゃ」

ホームズは、そう決意し再び歩みを進める。

曲がり角を曲がるとそこには、ローエンとレイアとローズがいた。

「貴方、本当に大丈夫？」

「大丈夫だよ」

ホームズは、そう言つて青白い顔のままひらと手を振る。

三人は、そんなホームズを見ると思わず顔を顰める。

「ホームズ、嘘はヤダよ」

レイアは、とても心配そうに言う。

どう見ても大丈夫とは、程遠い表情をするホームズにレイアは、不安そうに尋ねる。

「大丈夫だつて……」

「看護師見習いの前でそんな嘘は通用しないよ……いや、誰であれ今のは嘘だつて分かるよ」

「うるさいっ！大丈夫だつて言つてるだろう!!」

ホームズは、金切り声を上げ叩きつけるようにレイアに言い返す。

その剣幕にレイアは、思わず距離を置く。

しかし、直ぐにぐっとお腹に力を込めてホームズを睨む。

「……ホームズ。だつたら、無理をしないで」

「する。無理してでも必ず壊す」

すると脇で聞いていたローズのピンタが炸裂する。

「いい加減にしなさい、ホームズ」

それから、ホームズを睨む。

「……どうしたのよ……レイアが心配してる事が分からない貴方じゃないでしょ」
そして胸ぐらを掴む。

「それに、レイアの事が的を得ていることぐらい、わかっているでしょ」
静かにそして有無言わせない迫力でホームズを問い詰める。

「……分かっているよ……それぐらい……」

「――！」

ホームズは、力無くローズに返す。

その普段のふてぶてしさからは、考えられないぐらい弱々しい反応にローズは、思わず胸ぐらを掴んでいる手を緩める。

「……何があったのよ……貴方」

ローズの言葉にホームズは、答えようと口を開く。

しかし直ぐに口を塞ぐとローズを突き飛ばし、三人から離れたところでもう一度吐いた。

もう、胃液しかない。

ひとしきり吐ききるとホームズは、ライフボトルを取り出し口をゆすぎ、水を吐き出す。

そして、ゆらゆらと立ち上がり、

「……………また、気が向いたら、話すよ」

ホームズは、ポツリとこぼした。

「……………行こう……………置いてかれちゃう」

最後にそう付け足し、ホームズは、フラフラと歩いて行つた。

「……………ローエン」

ローズの心配そうな言葉に、ローエンは顎髭を触る。

「……………残念ですが、あまり聞き出すことは出来ないでしょう」

ローエンは、目を伏せる。

「ローズさんの質問にホームズさんは、答えようとしていました。しかし、答えられなかった」

ローエンの言葉にレイアは、何となく察しがつき領く。

ローエンは、更に言葉が続ける。

「答えるためには、その時の事を思い出さなくてはなりません。

恐らく、ホームズさんの心が身体がそれを拒否しているでしょう。だから、話そうとするとあぁなってしまう」

「……………一体、どんな目に……………」

「さあ、それは分かりません。しかし、ホームズさんが危ういのは、事実です。

そして、それを上手に隠していたことも」

そう言つてポツンと歩いていくホームズをローエンは、見る。

まるで今にも消えてしまいそうさだ。

「……………気をつけましょう……………ホームズさんの為にも」

「ええ。そうね」

「うん、分かったよローエン」

レイアとローズは、それぞれそう返事をし、歩き出した。

『何かこう、気味が悪い』

レイアは、歩いている途中でヨルの言葉をハッと思い出した。
ル・ロンドの港でホームズが寝た後ヨルが言った言葉だ。

あの時の会話が忠告となって降り注いでいる予感がするのだ。
思ったよりも危うい友人の背中を見ながらレイアは、頬をパンと叩く。

「……わたしもしつかりしなきや！」

そう言ってから、レイアは、ホームズの後を追いかけた。

会うは面倒の始め

「それで、クルスニクの槍は、何処にあるのか見当は、ついているのか？」

ヨルの言葉にジュードは首を横に振る。

「赤い服の女の子が映像に映ってたから……その子が何か知ってるかもしれないだ」

「なるほど……ふむ……女の子か……」

ホームズは、そう言つて首をうんうんと縦に振る。

さつきまでの取り乱しようが嘘のように通常運転だ。

「……………」

ジュードは、胡散臭そうに見る。

「何だい？その目は？」

「いや、切り替え早いなあと思つて……」

「出来る男の条件さ」

ホームズは、そう言つてひらひらと手を振る。

そんなホームズをレイアが少し離れた所から怪訝そうに見ていると、レイアの肩にヨルが飛び乗った。

そして、小声で話す。

「切り替えてないぞ、アレは」

いつも通りに『女の子』という言葉に反応しているフリをしているホームズに一瞥を加えながらヨルは、ローズに言う。

「見れば分かるよ……と言うより、あんな事があつたのに、直ぐに切り替えるなんて不可能だよ」

そう言つてレイアは、ヨルを見る。

「休ませた方が良くない？寝かした方がいいんじゃない？」

あんなに弱っているホームズを見たのは初めてだった。

足取りもいつもより少し遅い。

恐らく膝から崩れ落ちないように、踏みしめて歩いているのだろう。

「あいつは断るぞ」

しかしヨルは、レイアの提案を否定した。

「やつぱり？確かに一刻も早く壊した方がいいだろうけど……でも、それ以上に万全

の状態で挑んだ方がいいと思うけど……」

自分を後回しするホームズの性格上、人の時間を遅らせる事を嫌がるのは、簡単に想像できる。

ただでさえ、ホームズの為に暫く足止めを食らった事が何回かある。

今回もまたホームズの為に足止めを食うというのは避けたいと思うのは自然と言え
ば自然だ。

しかしヨルは、そんなレイアの思考を否定する様に首を横に振る。

「そんな小難しい事じゃない。単純に……」

ヨルは、そこで言葉を切る。

「悪夢にうなされるのが怖いからだ」

ヨルの言葉を聞いたレイアは、思わずホームズを見る。

ホームズは、普通にジュードと話している。

その普通な顔の下にそんなものがあるとは想像しづらい。

「背負った荷物は重く、負った傷は深い」

ヨルは、そう言うとホームズを見る。

「あの馬鹿は、今でこそ平気になったが、それでも年に一、二回のペースでその出来事を悪夢で見る」

「……あんなに取り乱す原因になった出来事を?！」

レイアは、驚愕の表情を浮かべる。

そしてへらへらと胡散臭そうに笑っているホームズをもう一度見る。

「ねえ、ホームズ本当に大丈夫なの?」

「大丈夫なわけないだろ……壊れてるんだよ……あの馬鹿は、とつくに、な。

前にも言っただろう……種類は違うが、あいつはあいつで……」

ヨルは、何かを思い出す様に言葉を一度切る。

「化け物だつて」

ヨルは、静まった湖畔に波紋を放つように静かにそう言葉を落とす。

ヨルの言葉の意味を再度認識したレイアは、いつもと変わらず、へらへらと笑っているホームズに唇を噛みしめる。

「……ヨル、ホームズに何があったの?」

ヨルは、少し悩むが直ぐに口を開く。

「話すとき……また時間のある時に話してやる」

そう言つてヨルは、ホームズの元へと戻る。

レイアは、そんなヨルの後ろ姿を見ながら歩みを進める。

気になることは山程ある。

しかし、それどころでないのも事実だ。切り替えていかなければならない。

(ま、出来る女の条件だしね)

レイアは、そう思い直すと心配そうにホームズを見ているローズの肩を励ますように叩く。

ローズもレイアの様子を察したため息を吐く。

「ホームズの事、到達してると思つてた」

ローズは、そこで言葉を切る。

そして、でも、と続ける。

「到達せざるを得なかったのね……」

気を抜けばあんなに取り乱してしまうのだ。
相当無理をして到達したのだろう。

今の状態に到達していなければ、先ほどのように取り乱してしまうのだから。
ある意味の防衛手段なのだろう。

ローズは、そこまで言って髪を縛り直す。

前にも見せた、気合いを入れる為のローズなりの儀式だ。

「まずは、クルスニクの槍。そのカタがついたら後で聞き出すわ」
力強く言い切るローズを見てレイアは、驚いたように口を開ける。

「なんか……変わったローズ？」

ローズは、一瞬キョトンとするが顔に笑みを浮かべる。

「当然」

目標を定めたローズに立ち止まっている時間は、ない。

そんな暇があるなら目標に向かって歩かなければならない。

二人の会話に耳を傾けていたヨルは、夜域の空を見上げる。

(まあ、到達した場所が正解とは言えないんだけどな……………)

心の内でそう呟いた。

ヨルがそんな事に想いを馳せ、ローズとレイアが会話をしている時、ミラが、赤い服の女を見つけた。



「あんたは……」

赤い服の女は、ゆっくりとミラの方を振り返る。

白い髪の長髪に赤い服がよく映える。

丸く大きな瞳、そして口をゆっくりと開く。

とても嬉しそうに。

「アハハハ！ようやくあんたを殺れる日が来たってわけだ！」

ローズは、近くにいるジュードに尋ねる。

「知り合い？」

「あー……うん、まあ……知らないと言えば嘘になるかな……」

煮え切らないジュードの返事にローズは、益々首を傾げる。

ミラとジュード以外知らないが、彼女とは、昔戦った事があるのだ。

その時と変わらず相変わらず、奇妙な動きをする。

ミラは武器を構えず尋ねる。

「待て、聞きたいことがある」

「アハハハ！バーク！答えるわけねーだろ！」

赤い服の女は、ミラの要求を一蹴する。

そんな中ずっと黙っていた、ローエンが口を開く。

「あなた……何処かで………」

そして、思い出す。

「ひよつとして、トラヴィス家のナディア様ではありませんか？」

赤い服の女は、ローエンの言葉にハツとした表情をし、今までの目つきが一瞬戻る。

一瞬のことだったが、それはどう見てもローエンの言葉を肯定していた。

「やはり、そうでしたか……六家のお嬢様がどうして、ア・ジュールのスパイを？」

「私はトラヴィスなんて関係ない！」

ローエンの言葉に赤い服の女は、先程とは、打って変わって、凜として言い放つ。

そして、

「私は、^{フォーブ}四象刃、無影のアグリアだ！」

最後の^{フォーブ}四象刃が名乗りを上げた。

皆がその言葉に息を飲む。

「^{フォーブ}四象刃って!!」

「そんな、何で?!」

ローズは、理解が追いつかない。

何故、ラ・シユガルの貴族様が、^{フォーブ}四象刃なんて物をやっているのか？

そんなローズを他所にミラは腕を組む。

「つまり、ガイアスの命令で動いているわけか……」

「だったら、なんだよ」

ミラは腕を解きアグリアを見る。

「お前はクルスニクの槍を破壊しようとしているのだな」

「あたりだよ！アハ！」

ここに来て、ようやくローズは、ミラが何を言おうとしているのかが分かった。

「私も同じだ。つまり、私はお前の敵ではない」

アグリアは、そんなミラの話を面白そうに聞いている。

「槍の運び出された場所を教えてください」

「アハハハ！誰が教えるかつーの！」

アグリアは、とても楽しそうに笑って断る。

ついに我慢できなくなったレイアが口を開く。

「お願いよ。あなたもあんな危ない物壊したいって思うでしょう？」

レイアの言葉にアグリアは、笑うことを止める。

「くせえな……」

「え？」

レイアは、そんなアグリアを怪訝そうに見る。

因みに後ろにいたホームズは、慌てて自分の匂いを嗅ぐ。

なにせ、先程吐いたのだ。

口をゆすいだとは言え、心配になる。

そんなホームズを他所に、アグリアは、高笑いをしてイル・ファンを指差す。

「決めた〜！ 槍を壊す前に、ラ・シユガルにぶつ放してやるよ」

「な?!」

驚いているローズを尻目にアグリアは、高笑いをする。

それが、レイアの癪に障ったのだろう。

「みんな一生懸命やろうとしてるのにどうして邪魔するのよ!」

レイアがアグリアに怒る。

そんなレイアを他所にアグリアは、更に面白そうに笑う。

「アハハハ! やつぱりくせえよ! お前」

「何、失礼な人!」

レイアも黙ってばかりではない。

腕を組んで大変ご立腹だ。

アグリアは、下を向きながら言葉が続ける。

「お前、頑張れば世の中どうにかなると思ってるだろ」

そして、直ぐに天を仰ぐ。

「お前からはそんな悪臭がプンプンすんだよ!」

ローズは、そんなアグリアを唾然と見る。

「仮にも元貴族のお嬢様が悪臭悪臭言いまくってただけど……」

とても似つかわしくない言葉を連呼しているアグリアが信じられないようだ。

「……………んまあ、世の中色々だよ」

そんなローズにアルヴィンは、適当に返す。

「頑張るのはいいことじゃない！」

ローズとアルヴィンを他所にレイアも負けじと言い返す。

しかし、

「うるせー、喋んなブス！」

アグリアも負けていない。

まあ、言っている言葉があまりにもレベルが低いのでみんな呆れ顔だ。

「な、なによー！」

レベルは、低いが言つて欲しくない言葉を連呼するアグリアにレイアもたじたじだ。

「あのさ、その辺にしときなよ……君いくつだい？」

遂に我慢できなくなったホームズが口を挟む。

そんなホームズを見たアグリアが蔑むような目で見る。

それを見たホームズは、しまったと言う風に顔をしかめる。

「てめー……………」

アグリアのその腹の底から響くような声に、ホームズから変な汗がダラダラと流れ出した。

「よくまあ……………抜け抜けと顔をあたしの前に出せたな……………」

そう言つて剣を向ける。

「裏切り者」

ホームズに否定する言葉は、ない。

引きつり笑いが張り付き、ダラダラと変な汗の量が増えているホームズを見てレイアは、ため息を吐く。

「道理で静かだと思つた……………」

アグリアが現れてから、ホームズは、一度も喋つていない。

こういう事になるのが目に見えていたからだ。

そう、忘れがちだが、ホームズは四象刃フォーブと繋がりがあつたのだ。

「裏切りつて言うのは、ある程度の友情と信頼が必要なんじゃなかつたけ?」

「いや、まあ……………そうなんだけど……………」

ジュードの言葉にホームズが、アグリアを見る。

もちろんホームズとアグリアの間にそんなものはない。

そして、アグリアが問題にしているのは、アグリアへ対する裏切りではない。

「あんだだけ、恩を受けたガイアス様を裏切ったそうじゃねーか」

そう、問題にしているのはガイアスへの裏切りだ。

「その恩分の働きはしたよ」

「うるせー！裏切りは裏切りだ！」

そして、ホームズの言い分はハナっから聞く気はない。

まあ、誤魔化しや言葉遊びで相手を騙すホームズには、ある意味一番の対処方とも言えるのだが。

ホームズは、うんざりと言う風に顔を押しさえる。

「相変わらずだねえ……君」

「まあ、裏切ったホームズもいけないだけだね……」

「君、どっちの味方だい？」

レイアをギロリと睨むホームズ。

レイアは肩を竦める。

そんな二人に構わず、アグリアは、禍々しい剣を構える。

「くっせえブスに裏切り者……揃いも揃って、て奴だな……」

次から次へと出てくる汚い言葉遣いにヨルは、うんざりとした顔をする。

「相変わらず、品のない白髪だな」

「猫の分際ではぎいてんじゃねーぞ！チビ！」

ヨルもため息を一つ。

そして、今度はミラに剣を向ける。

「あんたにやられた痛み忘れてないからね」

「話にならない奴だ」

ミラもアグリアに対して剣を構え、他の面子も武器を構える。

「つとに……だから、会いたくなかったんだよ」

ホームズは、心底うんざりして構える。

絶不調のホームズの敵は、ホームズの苦手な相手……

(何も起きなきやいんだけれど………)

ローズは、ため息を吐いて刀を抜いた。

手のひらで踊り狂う

「覚悟しろ」

アグリアは、そう言うのと炎を纏いミラに襲いかかる。

それと同時に近くにいる防護服の男が、ホームズに襲いかかる。

ホームズは、目を細くすると体を入れ替え避ける。

そして、そのまま顔を驚掴みにし、地面に叩きつける。

叩きつけられた防護服の男は、大地からの強い衝撃に意識を手放す。

「ふう……」

そして、直ぐにアグリアに視線を向ける。

アグリアは、ミラに剣を弾かれると、ホームズに視線を向ける。

「相変わらず、殴らないんだな」

「まあね、つーか、君余所見して場合じゃないんじゃない？」

ホームズの指摘の通り、レイアとローズが、アグリアに襲いかかっていた。

しかし、アグリアは、それを予想していたようだ。

纏っている炎をアグリア中心に渦を巻かせる。

「ぶっっ！」

「あっっっ！」

二人は、炎に阻まれアグリアにたどり着く事は許されなかった。

地面に転がった二人に視線を向けると再びホームズに視線を戻す。

「お前も人の事言えないんじゃないのか？」

その言葉と同時にホームズの右側から、もう一人の防護服の男によって棍棒が振り払われる。

そう、盾があるのは、左側なのだ。

基本的に武器も使わず、殴らない為籠手もない。

なので、右側からの攻撃を防ぐ術がホームズには、ないのだ。
色々と弱点の多いホームズにとっての一番の弱点といえよう。

ホームズには、防ぐ術がない。

ホームズには、だ。

ヨルの尻尾が伸び蛇のように棍棒に巻きつき動きを殺す。

棍棒は、ホームズの目と鼻の先で止まった。

「ま、武闘派の連中には、無理なんだがな、この手は」

ヨルの言葉を適当に聞きながらホームズは、防護服の男に蹴りを放つ。

めきつ！と嫌な音を立てて、男は、自分のやってきた方へ飛んで行った。

どう見ても武闘派ではなかったのだ、この手を使ったのだ。

「手じゃなくて、尻尾だろう？」

「揚げ足取ってる場合か？」

ホームズとヨルがそんな会話をしていると、アグリアが炎を巻き上げ斬りかかってきた。

ホームズは、バックステップでかわす。

そんなホームズをアグリアは、忌々しそうに見る。

「避けんなよ」

「いやいや、無茶言わないでくれよ」

頬を引きつらせながら言うホームズにアグリアは、剣を構える。

無言の睨み合いをヨルが壊す。

「ホームズ、周りを見ろ」

ヨルに言われて辺りを見回すと、魔物が周りに集まってきている。

「これ、君が？」

「当然だろ！」

アグリアは、愉快そうに笑っている。

ふよふよと漂っているサマは、どう見ても武力タイプではない。

見るからに、精霊術タイプ。

ホームズは、問答無用で一体を蹴り飛ばし倒す。

しかし、直ぐにまた別の魔物が現れ、ホームズを囲う。

「……くそつたれ」

ホームズは、そこでアグリアの意図に気づく。

この魔物達、一匹一匹の攻撃力は、雑魚そのものだが、いかんせん数が多い。時間差で精霊術を発動されてしまえば、ヨルの精霊術喰いも間に合わない。これを全て捌いて、アグリアと戦うのは至難の技だ。ホームズは、歯ぎしりをする。

「……いい趣味してるよ」

「アハハハ！マクスウエル御一行を相手にするだ。むしろ足りないくらいだろ」数、ヨル、と的確にこちらのアドバンテージを潰しに来ている。

アグリアはそう言つて、ホームズに剣を繰り出す。

奇妙な動きに目が行きがちだが、アグリア自体の強さは本物だ。

ホームズが盾で攻撃を防ぐと見越したように、炎の渦を巻き起こす。

「あつっ!!」

思わず地面を転がり火を消す。

「アハハハ！バーカ」

アグリアの罵倒に思わず顔を上げると、魔物の火の精霊術が発動していた。

「ヨル！」

ヨルは、呼ばれるより早く巨大生首になる。

ホームズの声より先にヨルが生首になり、精霊術を喰らう。

しかしというか、やはりというか、ヨルが精霊術を食べているのとは、逆方向からもう一匹の魔物が同じ様に火属性の精霊術を発動していた。

ヨルは、黒猫状態に戻る。

「来い！ヨル！」

ホームズがそう叫んだ瞬間、そこからヨルの姿が消え、代わりにホームズの肩に現れる。

ヨルと言う的を失った精霊術は検討違いの方へと飛んで行った。

ヨルは、その精霊術を忌々しそうに見ている。

「まさか、この機能が役に立つ日が来るとはな……」

「そう言えば最後に使ったのって……確かおれが風邪ひいた時だっけ？」

ホームズは、顔についた炭を拭う。

ヨルは、歯ぎしりをする。

「俺が精霊術を食えなかった……」

「向こうの戦略勝ちだね」

このやり取りの中でホームズは、悟っていた。

言葉が示す通り、確実にホームズ達が負けていたのだ。

完全にホームズ達は今、アグリアの手のひらの上にいるのだ。

悔しそうなホームズ達とは違い、アグリアは高らかに笑う。

自分の策が功を制しているのを悟ったのだろう。

「お前みたいなのは、お似合いだぜ、その姿」

アグリアは、地面に膝をついているホームズを指差して更に笑う。

ホームズは、土埃払いゆっくりと立ち上がる。

「なあ、ホームズ知ってたか？」

「君こそ知ってるかい？」

ホームズとヨルは、邪悪な顔になる。

「負けっぱなしほど、頭にくるものはない!!」

ホームズは、ヨルを肩に乗せるとアグリアに向かって走り出す。

「ホームズ！待って！」

ジュードが止めるがホームズに止まる気なんて全くない。

「……仕方ありません。私達でフォローに回しましょう」

ローエンはそう言って、周りの雑魚達に攻撃を仕掛ける。

「瞬迅脚！」

アグリアは、予想していたかのように剣で防ぐ。

「アハハハ！そんな直線的な攻撃をあたしが喰らうわけないだろう！」

そう言って、雑魚達が群がる。

ヨルは、尻尾を増やす。

そして、花が開くが如く一気にひろがり、魔物達を弾き飛ばす。

「ヒューー！さすが！」

アグリアの楽しそうな声を聞きながら、ヨルは、フンと鼻でコケにする。

「夜は、化け物の時間だ」

暗い所や夜は、ヨルの力を強める。

夜域のイル・ファンは、ヨルの為の場所といえよう。

しかし、折角の地に利もホームズの単調な攻撃のせいで上手くいかせていない。

ホームズは、歯ぎしりをするとそのままアグリアの顔を掴もうとして手を伸ばす。

「だーかーらー！」

アグリアは、ホームズを剣の柄で押し飛ばす。

「そんな見え見えで、直線的な攻撃！喰らうわけないだろー！」

押し飛ばされたホームズは、バランスを崩す。

そこをアグリアの剣が襲う。

勿論ホームズの右側から始める攻撃だ。

ホームズは、態勢が崩れているにも関わらず右足でアグリアの剣を蹴り上げる。

「ちっ！」

予想外の反撃にアグリアは、思わず舌打ちをした。

因みに無理な態勢で蹴りを放ったホームズは、そのまま背中から、地面に倒れる。

倒れる瞬間に腕を支えにし、全身をバネにし跳ね起きる。

「器用だな」

ニタニタと笑いながら言うアグリアにホームズは、ぺつと口から唾を吐く。

「褒めてくれて嬉しいよ」

口調こそ、いつもの悪態だが、険しい顔のままのホームズを見てジュードは、内心で歯噛みをする。

どう考えても今のホームズは、冷静ではない。

アグリアに散々コケにされて、頭に血が上っている。

なので如何にかして、フォローに回りたいのだが、魔物に阻まれて辿り着けない。

せめてアグリアが攻撃対象をミラに変えてくれれば良いのだが、中々ホームズから変えてくれない。

「ミラも許せないんでしようけど、それ以上にホームズの事が許せないんでしようね」
ローズもジュードの考えをなんとなく察して言う。

何せホームズは、アグリアの主であるガイアスを裏切っているのだ。

「にしても、あの馬鹿がやる気出すとロクな事が起きないわね……」

ローズは、ため息をつきながら顔を険しくさせて戦っているホームズを見る。

「普段のホームズなら、早々ああはならないと思うんだけど……」
レイアは、言いながら先程の取り乱したホームズを思い出す。

「全部が全部悪い方向に作用してるな」

ミラもため息を吐きながらも、魔物を切り倒すことを忘れない。

しかし、フラフラとかわす。

意外に攻撃が当てづらい。

全く当たらないというわけではない所がまた、ミラ達にストレスを溜めていく。

「どうにかしないと……」

エリーゼもハラハラしている。

「ま、頑張りますか」

一行の感想を他所にホームズは、蹴りを連発で放つ。

しかし、アグリアは全てを受け流している為、ホームズの蹴りは残念ながら、何一つ届かない。

「アハハハ！弱い弱い！」

アグリアは、そう言うのと剣をホームズの右側面を狙って勢い良く振る。

ホームズは、バックステップでかわす。

少しだけ間に合わずポンチョが僅かに切れる。

下がるホームズに構わず、アグリアが距離を詰める。

ホームズは、アグリアの一撃を盾で受け止める。

そのまま額が当たりそうな程力を込める。

「当てるやろうか？」

「何がだい？」

ホームズは、力を一切緩めず聞き返す。

「お前の頭に血が上がった理由だよ」

喋らないホームズの代わりに、アグリアは更に言葉が続ける。

「お前は、あたしがあのブスを馬鹿にした事に腹を立てた……いや、少し違うな、あの

女の考えを馬鹿にした事に切れた、ちがうか？」

相変わらずホームズは、答えない。

代わりに歯ぎしりをしながらアグリアの剣を受けている。

「アハハハ！何でキレてんだ！お前！まさか、あの女に熱でも上げてんのか!？」

とても楽しそうに神経を逆撫でする笑いを上げるアグリア。

「うっ？」

代わりにホームズ小さくボソボソと喋る。

「アア？」

聴き取れなかったアグリアが聞き返す。

「直線的でなければ良いんだろう？」

そう言つてホームズは、先程まで苦しそうに耐えていたのが嘘のように、アグリアを押し返す。

そして、一歩分だけ、ホームズとアグリアの間合いを空ける次の瞬間、ホームズは、力強く地面を踏み鳴らす。

「弾けろ！爆砕陣!!」

地面が爆ぜる衝撃に巻き込まれアグリアは、吹き飛ぶ。

「な!？」

信じられないという顔しながら地面を転がり、そして、這いつくばる。

ホームズは、人差し指を口に当て楽しそうに笑う。

「直線的じゃ無くて、拡散的、なんてね」

そう言うとホームズは、口から人差し指を離し、代わりに地面に這いつくばっているアグリアを指差しニヤリと邪悪な笑みを浮かべる。

『お前みたいな奴には、お似合いだぜ、その姿』

ホームズのその勝ち誇ったかのような顔にアグリアは、顔を歪める。

「てめー……」

先程まで確かに押していたはずなのに、今はホームズによって地面に膝をつかされて
いる。

しかし、まだ逆転というには、まだ程遠い。

「今だ！一斉に襲いかかれ！」

アグリアは、自分が召喚した魔物に指示を出す。

そう、アグリアには大量の魔物がいるのだ。

しかし、その大量の魔物達はホームズに襲いかかる気配が全くない。

不審に思っただけで魔物を見る。

そこでアグリアは、気付く。

魔物達は襲いかからないのではない、襲いかかれないのだ。

より正確に言うなら、動けないのだ。

黒い紐に縛られている為に、一切の動きを封じられている。

紐の先を辿っていくとそこには、金色の目を輝かせたヨルがホームズの肩にいた。

アグリアは、目を丸くしてその光景を、その異常な光景を見つめる。

それ、ヨルの尻尾がホームズと言う木を支える根のように地面に張り巡らされ、広がっている。

そして、その根は、地面から魔物達へと伸び、巻きついて拘束している。

黒い根が辺りに張り巡らされ、そしてそれが魔物を拘束している……

不気味、恐怖、異常、どれを使ってもそれを言い表すのに足りない。

「な、何なんだよ！それ！どうなってんだよ！」

ようやく口を開けたアグリアの言葉を聞くと、ヨルは、面白そう笑う。

「言ったろう？夜は化け物の時間だって」

そんなヨルにホームズは、半眼を向ける。

「お楽しみ在所悪いけど、その為に時間稼ぎしたおれに何か言うことは？」

「間に合って良かったな、命拾いしたぞ」

「……………そうだね……………涙が出るほど嬉しいよ」

ホームズは、吐き捨てる様にそう返す。

ヨルは、ホームズの悪態を聞くと尻尾を自分に引き寄せ魔物を一箇所に集める。

「今だ！ブチのめせ！」

「待ってました！」

アルヴィンとローエンが武器を構える。

二人のリリアルオーブが輝く。

「行くぜ！ジーさん！」

「お任せを」

アルヴィンが銃弾を上空に撃ち、ローエンがナイフを投げる。

それらすべては、魔物達へ殺意を持った雨となって降り注ぐ。

その技の名は……

「「フェイタルサーキュラー!!」」

二人の共鳴奥義リンクアーツにより、殲滅させれる。

ホームズは、盾を頭上に掲げ弾丸とナイフの雨を避けながら、それらを満足そうに見届ける。

「さてと……雑魚は、消えた。後は君だけだねえ……四象刃フォーブ、無影のアグリア」

ホームズは、アグリアに人差し指を向ける。

アグリアは、そんなホームズを忌々しそうに睨む。

「……オマエ……苦戦してたんじゃ」

ホームズは、面白そうに笑いながら近づく。

「何故だい？」

ホームズは、歩みを始める。

「おれたちのアドバンテージを潰されて？」

一歩アグリアへの距離を詰める。

「おれが弱点ばかり突かれて？」

もう一歩距離を詰める。

「頭に血が上ったせい？」

最後にもう一歩歩みを進める。

「その程度の苦戦何回くぐり抜けてきたと思ってるんだい？
何回、腹に穴を空けたと思ってるんだい？」

ホームズは、ゆっくりとアグリアを指差す。

「苦戦程度で根を上げて溜まるもんか……………寧ろ……………」

ホームズは、口角を釣り上げ、底意地の悪い……さながら、悪党の笑みを浮かべる。

「苦戦を演出して、相手を誘い込むぐらいの事をやっちゃまわないと……ねえ？」

それから馬鹿にしたように舌をだす。

「手の平で踊ってくれてありがとう」

「テメー!!」

アグリアの剣がホームズを襲う。

勿論狙いは、ホームズの右側面だ。

しかし、それが届くより先にレイアの棍が死角から現れ、アグリアを襲う。

アグリアの剣が届く事はなく、アグリア自身はそのままバランスを崩す。

ホームズは、右足を下げる。

「ああ、そうそう……」

ホームズへの攻撃を諦め、踏ん張る事に務めるアグリアを見ながら、ホームズは容赦無く半歩下げた脚をアグリアに振り抜く。

「ッ……がはっ!!」

その容赦も躊躇も加減もないホームズの蹴りを腹に貰ったアグリアは、意識を手放し階段下に落下した。

「友人が馬鹿にされたら、怒るってものだろうか？そこに必要なことなんて他に何がいるんだい？」

ホームズは、そう地面でのびているアグリアにそう告げた。

「えーつと……」

エリーゼは、何と言おうか首を傾げている。

「私たちの勝ち……ですよね？」

「全部ホームズの手のひらの上だったけどな」

アルヴィンは、ハアとため息を一つ。

要約すると、心配して損した、という奴だ。

そんなアルヴィンにホームズが右手を上げて近づいてくる。

もう一度アルヴィンは、ため息を吐くとホームズに応えるように右手を出し、叩く様にハイタツチをする。

そしてそのままローエンとも。

ホームズ達がそんな事をやっているのを尻目にレイアは、ミラの方にコソコソと近づくと、

「ねえ、わたしって臭くないよね？」

すると、側で聞いていたジュードが口を挟む。

「うん、レイアは……」

「ワアアア！ジュードには、聞いてない！」

レイアの慌てふためく様を隣で聞いていたローズは、ため息を吐く。

「やれやれ」

そう呟いてローズは、ホームズに目を向ける。

頭に血が上がったというのは、実は見せかけ、全部相手に自分が優位と勘違いさせる為の芝居だった。

そんなホームズの種明かしを聞いた時、やっぱりとおもってしまったのは、勿論内緒だ。

勝利のハイタッチを終えたホームズは、地面に伸びているアグリアを見て目を笑うように細める。

「調子が悪いのに良くやったわね」

「別に。いつもの事さ」

ホームズは、肩を竦める。

そんな会話をしながら、ローズは少し迷った後ホームズに尋ねる。

「やっぱり、怒ってたんだ、レイアを馬鹿にされて」

「君だってそうだろう？」

「まあね……まあ、ちよつとレベルが低くて笑っちゃいそうだったけど……」

「それ、どういう意味……」

ローズが正直に答えると影が後ろから忍び寄る。

「うわあ！」

驚いて後ろを振り返るとレイアが仁王立ちしていた。

ローズは、早鐘を打ち鳴らす胸を押さえながら答える。

「驚かさないでよ！だから、レイアじゃなくて、アグリアの方！」

「ああ、何だ」

レイアは、ポンと手を叩く。

「君は人を驚かせることにかけてちゃ一級品だよね」

「ホームズ、馬鹿にしてるでしょ」

「褒めてると思ったのかい？」

怒りをぶつけようと思つたが、意地悪く笑っているホームズを見て、ため息を吐く。

「ま、一応お礼は、言つておくよ……ありがとう」

色々と言いたい事はあるが、とりあえず、お礼をホームズに言う。

お礼を言われたホームズは、肩を竦める。

「ま、これつきりにしておくれ……女同士の喧嘩なんて男が首を突つ込むものじゃないからね」

面倒臭さそうに言うホームズを見てレイアは、もう一度ため息を吐く。

「相変わらずだね、ホームズ」

「だから、モテないんだろ」

ホームズの肩で話を聞いていたヨルが口を挟む。

「君達の熱い友情におれは、涙が止まらないよ」

ホームズは、舌打ちをしながら返した。

殴り込み？

「さて、とりあえず……」

ホームズは、そう言つて伸びているアグリアを指す。

「色々聞き出した方が良さそうだねえ」

ホームズが言葉を発し終わる前に、ミラは、階段から飛び降り刀を向ける。

目を覚ましたアグリアは、驚きで目を丸くする。

そんなアグリアに構わずミラは、口を開く。

「生憎、剣は不得手でな……うっかり手が滑らないよう、よく考えて喋ることだ……槍は何処だ」

切っ先を向けられたアグリアは、観念したように喋る。

「研究所の地下に秘密の通路があつてオルダ宮に繋がっていたんだ」

「オルダ宮？」

黙つて聞いていたミラが不思議そうにする。

「ナハティガルのいる城だよ」

そんなミラにジュードが説明をする。

「……びつくりだねえ……ここまで、クルスニクの槍にご執心とは」
用意周到にも程があると言うものだ。

ホームズは、砕けた口調で忌々しそうに顔を歪めながら言う。

「そんなものがあるとは、初耳ですね……」

ローエンも驚きを隠せないようだ。

「まだあるのか？」

「残念。さっきの爆発で潰れたよ」

アグリアの言葉にミラは、落胆する。

「使えないか……」

そんな風に眩き目をそらしたミラを目ざとく察すると、アグリアは、仰向けのまま足だけで移動する。

その様は、カサカサという音がびつたりだ。

「あ！逃げるな！」

レイアが止めるが、もう間に合わない。

遙か彼方の階段の上まで移動すると、じたんだを踏む。

「マクスウェル！あんたもいつか、グチャグチャにしてやるからね！」

そう言った後、びしつと指を差す。

「ホームズ！お前もだ！あたしをコケにした事、きっちり後悔させてやる！」
ホームズは、頬を引きつらせる。

「……勘弁しておくれよ」

そう言つてアグリアは走り出そうとして、ぴたりと足を止める。

「そうだ、忘れるところだった……」

アグリアはゆつくりと振り返りながら、レイアを睨みつける。

「そのブス！これだけは言つといてやる！お前がどんだけ頑張ろうと、報われることなんてないんだよ！」

アグリアは、言いたい事だけ散々怒鳴り散らすとレイア達に背を向け、走り去つて行つた。

「な、何であなたにそこまで言われなくちゃいけないの！」
もちろんこのレイアの叫びは、届かない。

「なんなのよ！あの子！」

レイアは舌を出し、あつかんべーをする。

ホームズは、去りゆくアグリアを興味深そうに見ている。

そんな中、ヨルが口を開く。

「あの白髪女とレイアは、何度ぶつかるんだろうな……」

「さてね」

ホームズは、肩を竦める。

「ま、考え……信念かな？まあ、そいつが違う者同士は戦うことが世の常だよね」
そんな事を話していると、レイアがホームズの方を振り返る。

「随分好き勝手言うてるけど、ホームズもターゲットに入ってるからね」

レイアの指摘にホームズは、ため息を吐く。

「良かったな、女のターゲットになったぞ」

「わーい、超嬉しい。涙が出そう」

ホームズは、適当に手を上げて喜びを表す。

そんな彼らに構わずミラは、思案する。

「オルダ宮か……敵の本陣だな」

「ミラ」

「分かっている、まずは様子を伺おう」

心配そうなジュードにミラは、そう返す。

会話が終わったのを見計らうと、ローズは、ジュードに尋ねる。

「それで、オルダ宮ってどこなの？」

ローズの質問にジュードが真つ直ぐ指差す。

「その橋を真つ直ぐ行つた先だよ」

ジュードの答えにローズは、腕を組む。

一本道の橋を真つ直ぐ、隠れる場所もないというのに、お尋ね者二人と、元参謀長を連れて行く。

「まあ、行つてみるしかないわよね、結局の所……」

不利な要素を考えないようにする為にも、ローズはため息で切り替えた。

「よし、行くうー!」

ジュードの声と共に一行は、歩みを進めた。



「なんなの、あの子!」

レイアは、道中ずつとこの調子だ。

「なんでわたしが、あんなひどいこの言われなくちやいけないわけ!」

「ああ……ブスだとか、臭いとか、天然とかだね」

「ホームズ……最後の奴は言われてないよ」

レイアの半眼の睨みにホームズは、目をそらす。

しばらくホームズを睨んでいたレイアだったが、直ぐにアグリアの話しに戻す。

「ローエン、アグリアって子、本当に貴族のお嬢様なの?!」

腕を組み唇を尖らせながら、レイアは、不満げだ。

そのご立腹の様子を見たローエンは、少したじろぐ。

「は、はい。確かトラヴィス家の次女です。もつともトラヴィス家は……」

ローエンは、そう一旦言い淀み、続ける。

「数年前の放火で、屋敷が全焼し、一族がほとんど亡くなった筈ですが……」

「ああ、その話聞いたことある……そっか、それってアグリアのところだったんだ」

ホームズの言葉にローエンは、頷く。

「はい。恐らく大変な思いをしたのでしよう」

その言葉にレイアは、顔を伏せる。

「あの子、家族を亡くして……」

それで、あんなになっちゃったのかな……」

さつきとは違いレイアは、悲しそうだ。

そんなレイアを見てミラは、ふふと笑う。

「面白いな。怒っていた相手にすぐ同情するとは」

ミラのその言葉にレイア自身も呆れたように肩を竦める。

「こーいう性格だから、クサイって言われちゃうのかもね」

「そういう性格じゃなかったら、レイアじゃないよ」

ホームズは、さも当たり前のように言う。

余りにも自然に言われた為レイアは、一瞬何を言われたか分からなかった。

ミラもそれに続くように優しく言う。

「ホームズの言う通りだ。それに仮にそうだったとしても、それはレイアの優しさの匂いだ」

「そうですね」

ローエンも頷く。

そして、それから少しおどける。

「おっと、私達もクサイことを言ってしまいましたね」

「全くだ」

ヨルは、ホームズの肩で耳をボリボリと後ろ足で、さながら猫のようにかきながら、気

だるそうに言う。

そんな彼らを見てレイアは、明るく笑う。

「みんな、ありがとう」

その言葉に各々笑みでかえす。

レイアの言葉を聞いたヨルは、ホームズの肩の上にながらレイアの方を向かずに言葉をかける。

「あの白髪女が何と言おうと、お前はお前なりに自分の経験から得た物を信条としているんだ、卑下することじゃない」

ヨルの珍しく優しさのある言葉にレイアは、目を丸くするが、直ぐに微笑む。

「ホームズに、ヨル……珍しい事もあるもんだね」

ホームズは、思わず肩を竦める。

「ま、それはあの白髪女にも言えることだがな」

「あつ、やつぱりヨルだ」

人間をなかなか褒めない化け物は、何処まで行ってもぶれない。

そんな中、ホームズが思い出したように口を開く。

「えーつと……さ……レイア」

言いづらそうに頬をほりほりと人差し指でかいているホームズを見て、レイアは、

不思議そうに首を傾げる。

「何?」

「んー……その、さっきはゴメン……急に怒鳴りつけたりして」

レイアは、突然謝られてしまい、言葉を失う。

しかし、直ぐに先程の研究所での出来事だという事にたどり着く。

確かにあの時のホームズの態度は褒められたものではない。

謝るのは、当然と言える。

とはいえ、レイアとしても過去に何があつたかは、知らないが辛い思いをしていた事ぐらいは分かっている。

だから、いいよと言おうとして、口を開くが、直ぐに意地の悪い笑みを浮かべる。

「ホームズが謝るなんてね。明日は雷でも降るのかな?」

レイアのそのニヤリとした笑みとともに出た言葉にホームズは、目を丸くすると苦笑いをする。

「……つとに、いい性格してるよ」

「ふふん」

ホームズの言葉にレイアは、胸を張る。

側で見ていたローエンは、そんな二人を見て微笑んでいる。

「一本取られましたね、ホームズさん」

ローエンの言葉にホームズは、肩を竦める。

すると、レイアが手を差し出す。

ホームズは、不思議そうにその手を見る。

「なんだい、その手は？」

「握手。仲直りの」

「別に、喧嘩してた訳じゃないだろう？」

ホームズは、片眉を上げながらそう言う。

すると側で成り行きを見守っていたミラが口を挟む。

「物事には、ケジメと言うものがあるのだろうか？ホームズ」

ミラのそのもつともな言葉にホームズは、ため息を吐いてレイアの手を見る。

握手を待つ形の手だ。

ホームズは、そのレイアの手を持ってレイアの顔の位置へと移す。

そして、ホームズは、その手にハイタッチをする。

「……ま、これからもよろしく」

「……相つ変わらず、素直にやらないね……ま、ホームズらしいけど」

レイアは、やれやれとため息を吐いた。

ミラとローエンも優しく微笑んでいた。



ホームズ達がそんな事をしながら歩いていると、オルダ宮の門が見えてきた。

門の前は、兵士が数名で守っている。

「……どうする?」

ローズの言葉に、レイアが不審そうに当たりを見回す。

「あれ? 以外に手薄だね」

そう、門の前にしか兵がないのだ。

妙と言えば妙である。

「出来ればこのまま突破したいね」

ジュードにしては、珍しい物騒な発言にホームズは、目を向く。

「しかし、敵の本拠だ。慎重に行かなくては」

「二人ともリリアルオーブの調子は、大丈夫かい？」

ミラとジュードが普段とは逆の事を言っているのでホームズは、首を傾げている。

そんなホームズとは対照的にローエンは、静かに顎髭を触って思索する。

エリーゼは、それを不思議そうに見ている。

「ローエン？どうしたんですか？」

「いえ……………」

エリーゼの質問にローエンは、顎髭から手を離し提案し、そして、提案する。

「ジュードさんの言うように……………やってみませんか？」

その言葉に、アルヴィンは目を向く。

「おいおい。珍しくミラが慎重にって言ってるのに」

ホームズも頷く。

「だよ。こんな機会もう二度とないかもしれないだよ」

失礼な事を言うホームズをミラは、ひと睨みして黙らせると、ローエンに尋ねる。

「何か考えでもあるのか？」

「考えと言うほどのものでもないですけど……どうでしょう？」
ローエンの言葉に、ジュードはあっさり頷く。

「ローエンがそういうんだったらそうした方がいい気がする」

ヨルは、そんなジュードを馬鹿にしたように見る。

ホームズは、そんなヨルを目で制すると兵士達の方と向き直る。

「いち、にい……」

ホームズは、数え、敵の戦力を図る

「ふむ。三人か……まあ、この人数ならどうともなるね」

「困みに言っておくと、四人だ」

ヨルの訂正にホームズは、決まり悪そうな顔をする。

「ぶっ！」

横で聞いていたローズは、思わず吹き出す。

「……………」

ホームズは、そんなローズを半眼で睨んでいた。

「さて、ヨルのおかげで正確な人数も分かった」

ミラは、前を見据える前にジュードと目を合わせ頷く。

「ホームズ、任せたぞ」

そのあと、ホームズの方を見てそう告げた。
ホームズは、静かに頷く。

「行くぞー！」

ミラとジュードに続くようにホームズ達は走り出した。

「何者だ！止まれ」

兵士達は、走ってくるジュード達にそう言つて武器を構える。

「それで止まるならこんなところ来ないよ」

突然上空から聞こえた声に兵士達は思わず上を見上げる。すると、そこには夜空を背負ったホームズが足を天高く掲げていた。

武器を構え、啞然としたている兵士にミラを飛び越えたホームズの踵落としが決まる。

先程の言葉は、ミラ達が着く前に奇襲を仕掛けて突破口を作れというのが、ミラからの指示だったのだ。

奇しくも今回、ホームズは、前回やった裏切りによる足止めとは、逆の事をやっている。

(偶然か……それとも……)

ホームズがそんな事を考えていると踵落としを決めたはずの兵士がゆらゆらと立ち上がる。

流石に兵隊の鎧は、頑丈だ。

「ま、どつちでもいい事だねえ」

そう言ってホームズは、向かってくる兵士の顔面を掴み、思い切り地面に叩きつける。フルフェイスの兜の中で響き渡る轟音に兵士は、直ぐに立ち上がる事が出来ない。

「今だ！ホームズに続け！」

彼らの大勝負が始まった。

藪をつついて敵を出す

「三散華！」

ホームズズの蹴りが三発、ゆらりと立ち上がった兵士を襲う。

「……」

鎧を着込んだ兵士は、無言で蹴りを受け止める。

「……効いてない?！」

「ふむ、防具の性能の差だな」

鎧の強さも闘技場で相手とは、訳が違う。

こちらは、兵士。

力比べの場にいる相手とは強さも強度も違う。

(だったら……)

ホームズズは、脚に闘気を纏う。

そのまま闘気を纏った左脚を顔面にぶつける。

「獅子……」

ホームズズの左脚から闘気の渦が巻き起こる。

「戦哮!!」

名前を告げ、ホームズは、左から脚から鬨気の獅子を呼び出す。耐えられると思っていた慢心から、兵士は、想像以上の攻撃を食らってしまった。気が失った。

しかし、直ぐに別の兵士が槍で攻撃を仕掛ける。

ホームズは、地面を滑るように移動し槍の柄の部分に入る。

そして、今度は右足に鬨気を纏い振り被る。

「獅子戦哮!!」

再び放たれる鬨気の獅子。

辺りが一瞬砂埃に覆われる。

(手応えが……)

砂埃が晴れるとそこには、ホームズの蹴りを盾で受け止めている兵士がいた。

ホームズは、直ぐに距離を空ける。

そして、直ぐに回し蹴りを放つ。

しかし、相手はそれを器用に槍で防ぐ。

「な……」

ホームズは飛び上がり、敵兵の頭上を取る。

「鷹爪撃！」

そして頭上から連続の踏みつけを放つ。

「フーン！」

兵士は、それも防ぎ軽く薙ぎはらう。

実力自体は大したことはない。

問題は、その防御力とカード能力だ。

「やっかいだねえ……それ」

そう言つてホームズは、地面に降りると光るリリアルオーブを握る。

「てな訳で、頼んだ！アルヴィン！」

「頼まれた！」

アルヴィンは、そう言うのと身体を半回転させて大剣を相手にぶつける。

「ドッカーン！」

威勢の良い掛け声と共にアルヴィンが相手のガードを崩す、いや、壊す。

相手のガードを壊し、隙を作るのがブレイカーの真骨頂だ。

アルヴィンの攻撃により相手は大きくのけぞる。

ホームズは、その隙に踵落としを相手の頭にぶつける。

そして、そのままそこを足場にしてバク宙をし、地面に着地する。

着地したと同時に今度は回し蹴りを顔面に放つ。

連続の同じ場所への攻撃でダメージの溜まった兵士は、そのまま気絶した。

そして、残りの敵兵を探すとそれらは、ミラ達が倒していた。

「全部倒したか……」

ヨルは、ホームズズの肩の上で確認するように呟く。

「増援は？」

ジュードは、油断なく構えたままだ。

レイアは、前方を確認しながらゆっくりと武器をしまう。

「大丈夫みたい」

「王様のいる場所なのに……不思議です」

エリーゼは、思わず呟く。

「畏かもしれないぜ」

アルヴィンが余計な事を言う。

指摘としては正しいが、そのしれっとした顔を見るとどうやら何か知っているようだ。

ローエンは、顎髭から手を離し口を開く。

「すでにラ・シユガル軍は、ア・ジュールとの戦いに向けて動いているのかもしれないませ

ん」

「戦いが迫ったら、王宮の守りは厚くなるんじゃないの?」

ジュードの疑問にローエンは、答える。

「元々、イル・ファンは、南北を要害によって守られています、決戦としては作られていません。街の内部まで突破されてしまえば、敗戦は濃厚です」

ローエンは、更に言葉を続ける。

「ですから、戦時下は兵の大半が街を離れて、海上の防衛とガンダラ要塞に配備されるのです」

「うーん……そこだけ聞くと街で戦争をさせない、いい王様に聞こえるんだけど……」
ホームズは、ため息を吐く。

まあ、実態はとんでもない兵器を作っているとんでもない王様な訳だが……

ミラは、腕組みを解く。

「話は分かった。どうやら、開戦が近づいてきている。時間を無駄には出来ないな」

「ええ」

ローエンは、静かに同意する。

一同は、そのままオルダ宮へと突入していった。



オルダ宮に入るとそこには、光る円陣があつた。

「何だい？これ？」

「オルダ宮の各所を繋ぐ、ロータス蓮華陣です。これを使わないと奥に進めません」

「よし、行こう！」

ジュードの言葉に一同は、頷く。

ホームズもそれに続こうとする。

「王に齒向かえば、お前の人生はそこで決まるぞ」

ヨルは、肩からホームズに言葉を投げかける。

「決まるんじゃない、決めるんだ」

ホームズは、肩にいるヨルにそう投げかける。

「王様に決められるんじゃない。自分で、決めるんだよ、ヨル。それが決意って奴さ」
ホームズのそんな様子を見てヨルは、残念そうにため息を吐く。

「迷うとおもつたんだがな……」

「その程度で迷うものか」

ホームズは、鼻で笑うと蓮華陣ロータスの中に足を踏み入れた。蓮華陣ロータスが展開され、ホームズは思わず目を瞑る。

そして、次に目を開くとそこは二階だった。

目の前には、さほど長くない廊下と一つの扉のみ。

「ふーん……本当に兵士いないのね……案外楽勝じゃない？」

ローズは、そう言つてすたすたと歩いていく。

そんなローズとは対照的にホームズは、難しい顔をする。

街に入られてしまえば、それだけで敗戦は濃厚。確かにその通りだし、道理に適っている。

とはいえ、王宮が落とされてしまえば、敗戦は確定である。

『『何もない』なんて事があるのかねえ？』

「冴えてるわね、ホームズ」

ローズは、そう言つて刀を構える。

ホームズは、目を険しくさせローズの先を注視する。

扉に魔法陣が出現し、魔物が現れる。

「……何だい、これ？」

ホームズは、眉をひそめながら構える。

魔物というには、少し神々しい。

緑色に薄ぼんやりと光っているその様は、ありえないというに相応しい。そのありえない魔物は、一行を襲う。

先頭にいたローズは、片方の刀で流し、もう一方の刀で攻撃をする。

「これ、魔物なの？」

ジュードは、疑問を口にする。

「魔法陣が変化したよう見えた」

目ざとく見ていたミラがジュードに答える。

魔物は、容赦無くその尻尾でミラを薙ぎはらう。

「ぐっー！」

刀で防ぐが、吹き飛ばされる。

ジュードがすかさずレストアで回復させる。

「進入を防ぐ術か何かでしょう。まさか、私の知らない間にこの様なものが……」

ローエンは、歯噛みをしながら細剣で防ぎながら、精霊術を発動させるタイミングを探す。

「簡単には通してくれないみたいだね」

レイアは、そう言って棍をぶつける。

しかし、造られたもののせいかな、ダメージが通っているか、分かりづらい。

「こんなところで時間を食ってる暇なんてないのに……」

ローズは、忌々しそうに刀で斬りかかる。

そんな中、ホームズは、口元に手を当てて何かを考え込んでいた。

「おい！ボサツとするな！」

「ねえ、ローエン、さっきなんて言った？」

ヨルの忠告を無視してローエンに尋ねる。

「まさか、私の知らない間にこの様なものが……」

「違う。その前」

「進入を防ぐ術か何かでしょう」

「それだ」

ホームズは、肩にいるヨルに目配せをする。

「君の定番だ、ヨル」

「ああ?!何が……」

訳のわからない事を言ったホームズに苛立ちを覚えたが、直ぐに察する。

「……なるほど」

ヨルは、一言そう呟くと飛び上がり、生首になる。

魔物達は新たな標的である、ヨルに攻撃を仕掛ける。頭のいい魔物ならば、その時点でヨルの脅威に気付いただろう。しかし、目の前にいるのは、唯の造られたなにか。

故に、恐怖が、生物として持っているべき感情である恐怖がない。

故に目の前にいるモノの恐ろしさが分からない。

故に天敵の存在に気づかない。

ヨルは、そんな愚かな彼らを見ると、ニヤリと耳まで口を裂け真つ赤な舌を見せる。

そして、そのまま、がぶりと一齧りで一匹を口の中に放り込む。

「なっ!?!」

余りに突然の事にレイアは、何が起こったか分からない。

ヨルは、ごくんと飲み込み次のエサに標準を合わせる。

そして、誰にも何も理解をさせないまま、もう一匹を間髪入れずに再び喰らい付く。もう一度ごくぐりと飲み込む。

最後に舌舐めずり。

「ま、悪くはない」

突然の事にローズもジュードも声が出ない。

今まで、ヨルが精霊術を食べる所は何度も見た。

今回も精霊術ではある。

しかし、曲がりなりに生き物の形を取っていた。

それを目の前で食べたヨルには、言葉にし難い感情が湧き上がるのだ。勿論それを眉ひとつ動かさずに指示を出したホームズにも。

とても楽しそうにくくくと笑うヨルを見てレイアは、ある種の恐怖を覚える。

(そうか、忘れがちだけど……)

「化け物だもんね、ヨルは」

「どうした？声が上ずっているぞ？」

面白そうに尋ねてくる生首ヨルにレイアは、ぐつとお腹に力を入れて睨み返す。

ここで怖いとか口にしたら、それこそ負けだ。

王と戦う前に、身近な化け物に心で負けてしまう。

「震えてるんだよ」

それから、レイアも負けじにニヤリと笑い返す。

「武者震いって奴だね。これから、王様に挑むんだもん！」

ヨルは、見るからに強がるレイアを見て高笑いをして、いつもの姿に戻るとホームズの肩にちよこんと乗る。

ホームズは、目の前で起こった結果を確認している。

「ふむ。やっぱり、ヨルなら食べれたね。この先いくつこう言うのがあるか知らないけど、どうにかなりそうだねえ」

「ええ、まさかヨルさんがここまで頼もしいとは思いませんでした」

ローエンは、直ぐに切り替えホームズにそう返した。

ヨルは、ローエンのその物言いに少し不満そうだ。

「よし、さっさと行くぞ」

ミラは、そう言つて扉を開ける。一行もそれに続く。



「うーん……しっかし、綺麗な廊下だ事」

ホームズは、面白そうに眺めている。

流石は、オルダ宮。

王の住むところなだけはある。

こんな状況でなければ、ゆつくりと観光したいぐらいだ。

エリーゼは、おっかなびつくりホームズの肩にいるヨルを見ながら進む。

先程の光景が頭から離れないのだ。

ヨルは、そんなエリーゼを見ると、

「わあ！」

「きやあああああ!!」

脅かしていた。

「何やってるんだい、馬鹿」

ホームズは、そう言ってガキの様な事をやっているヨルの耳を引つ張る

「言動には、注意したまえ。そんな事をしてると敵兵が嗅ぎつけ……」

「居たぞ！こつちだ！」

エリーゼの声を聞きつけた兵士達がワラワラと向かってくる。

「るから……」

ホームズが言い終わる頃には、兵士に囲まれていた。

「ごんの……クソ猫」

ホームズは、忌々しそうに吐き捨てた。

馬鹿の尻拭い

「ペットの世話ぐらいしつかりしてほしいものだな」

ミラは、呆れながら剣を抜き、自分の後ろにいるホームズに文句を一つ。

「ペットだったなら、少しは愛着も湧くんだけどねえ」

「全くだ」

ホームズの言葉にヨルは、うんうんと頷く。

ホームズは、一旦納得しかけて首を傾げる。

「どういう意味だい？」

「どういう意味だと思おう？」

ホームズは、しばらく固まるとヨルの首を絞め上げる。

「ああ、もう！そんな事やってないで！」

ジュードは、隣にいるホームズを呆れながら止める。

そして、ミラと背中を預けながら尋ねる。

「そっちは、任せて良さそう？」

「問題ない。そっちは？」

問われたジュードは、近くにいる面子を確認する。

元凶のヨルにエリーゼ、そしてホームズ。

更に和解したのかしてないのかよく分からないアルヴィン。

「問題……ないよ」

「声が震えてるぜ優等生」

アルヴィンの言葉により一層頬を引きつらせるジュード。

「ひい、ふう、みい……ダメだ。数えるのが面倒くさい」

そう言つて、ホームズは忌々しそうに隣にいるヨルを睨む。

この旅の厄介事を運んでくるのは、八割がヨル、二割がホームズだ。

その八割が発動したと考えるべきだろう。

「まあ、いつもの事だし、頑張りますか」

ため息一つで切り替えると、ホームズは肩にいるヨルに話しかける。

「あのさつきやつた、尻尾の根、できそう？」

「あんなの早々何度も出来るわけないだろ」

「色々食つたじゃないか」

「……時間がかかるんだよ。さつきもそうだったろ？今回に限つて言えば、時間をかけている場合じゃないだろ」

「ごもつとも」

ホームズは、そう言うのと隣にいるアルヴィン達に話しかける。

「つて事になつてゐるから」

「先行きの明るい知らせをどーも」

アルヴィンは、油断なく構えながらそうホームズに返す。

「それで、何か案でもある？ 経験豊富な傭兵どの」

「エリーゼの詠唱を援護しながら、片っ端から倒すつてのが、最有力だけど……どうする？ 優等生？」

「どうもこうも、それしかないでしょ」

エリーゼも武器を取り出しヨルを睨む。

「ヨルのせいですからね！」

『このバボー!!』

「んだと、このヌイグルミ！」

牙を剥くヨルの頭をホームズは、鷲掴みにする。

「君にそんな事を言う資格は……」

ホームズは、そう言つて大きく振り被る。

「待て、テメツ！ 何する……」

「ない!!」

そして、そのままヨルの言葉を聞かず兵士に投げつけた。

突然の攻撃に思わずたじろぐ兵士。

次の瞬間、ホームズとジュードが踏み込む。

「ハアア!!」

先陣を切つて二人は、攻撃を仕掛ける。

回し蹴りを腹に当てる。

しかし、相変わらず、効きが弱い。

「厄介なこと……」

そんな事を呟いてる間に他の兵士の蹴りがホームズを襲う。

それを何とか盾で防ぐ。

「どうしたもんか……」

兵士とは、言わば戦いのプロ。それが装備しているものが生半可なものな訳がない。

それがワラワラと出てくる。

先程とは、量が桁違いだ。

もう一度蹴りの構えをとる。

今度は、タダの回し蹴りではない。

脚が鬨気を纏う。

「獅子戦哮!!」

獅子を模る鬨気が兵士を襲う。

先ずは、一人。

「とはいえ……こんな技連発してたら、こつちが先にバテちゃうよ……」

「何か他に手はないのか?」

ヨルの言葉にホームズは、兵士達の攻撃をかわしながら、考える。

「確か……鎧通しだっけ? 鎧の中に衝撃を伝えるやつ……母さんがよくやってた……」

ジュードの方を見ると、どうやら心得があるようでの的確に倒していく。

「……アレか……しっかし、一朝一夕、つか、突然の思いつきで出来るのか?」

「無理だね」

ホームズは、そう言って考える。

手詰まりに近いのだ。

まあ、エリーゼの詠唱さえ完成してしまえばこちらのものなのだが……

アルヴィンがどうかか援護しているとはいえ、これ以上は、ジュードとホームズでせき止めなくてはならない。

「ゴリ押しで行くか……」

ホームズは、そう言つて剛照来の構えをとる。

しかし、発動させるより早く相手が攻撃を仕掛ける。

発動さえすれば相手を吹き飛ばすこともできるのだが、発動させてもらえない。

『君程度のゴリ押しなんて、たかが知れてるぜ』

母の言葉を思い出す。

『いいかい？絶対防御の鎧なんざ存在しないんだ。完璧な鎧なんてものがあるだとならば、それは、鎧じゃないぜ』

よく、ホームズの母は、ホームズが生き抜く為に幾つかの技術を授けた。足技も戦い方の授業の一環だ。

「そうか！」

ホームズは、後ろから振り下ろされ剣を蹴り上げる。

敵は天高く腕を上げている状態になる。

その状態が終わらない内にホームズは、肘を突き出す、

そして、そのまま相手の脇に肘から自分の体重を打ち込む。

そう、鎧を着て動く以上、関節にまで鎧を仕込むことは出来ない。

めき、と相手の骨の折れる音が聞こえる。

そして、タチの悪いことに脇の衝撃は、肺にまで到達する。

「ツツ、ガア！」

兵士は、そう呻くと倒れてしまった。

暫くは指一本足りとも動かさそうにない。

「大成功。流石、年の功って奴だ」

ホームズは、そう言つて兵士に躍りかかる。

(……狙うは)

向かつてくる兵士に対して、低めに足を上げる。

(関節!!)

ホームズは、兵士の膝を横から蹴る。

鈍い音が響き、兵士は、崩れ落ちる。

「ジュード、肩貸したまえー」

「え?!」

ホームズは、了承など取らず、ジュードの肩に飛び乗ると、それを踏み台にし天井に向かつて飛び上がる。

「ヨル!」

「わーつてる」

ヨルは、黒い球を吐き出す。

霞となりホームズの脚に纏わりつく。

ホームズは、そのまま天井に降り立つ。

「アルヴィン!!」

ホームズは、蹴りの構えを取りながらアルヴィンを呼ぶ。

「……っちーどうなんつても知らねーぞ！ヴァリアブルトリガー!!」
アルヴィンは、銃を構えるとそのままホームズに向かって打ち出す。
ホームズは、そのままその弾丸を蹴り落とす。

兵士の集団に向かって。

弾丸を蹴り飛ばすと言うこの非常識さ、今のホームズでないと出来やしない。
突然の頭上からの攻撃に兵士たちは慌てふためく。
その隙にホームズが地面に降り立つ。

爆砕陣のおまけ付きで。

「はじけろ!!」

爆ぜた地面に巻き込まれ、兵士達は、吹き飛ぶ。

何人かは耐えて、ホームズに攻撃を繰り返すが、ことごとく脇や、ひざに蹴りを打ち込まれ意識を飛ばす。

「薙ぎ払え、葬送の鎌……」

『切れるぞ〜』

「うわっ、やっべー！」

ホームズは、急いで兵士達から離れる。

『『ブラック・ガイド!!』』

エリーゼの精霊術が発動し闇の鎌が出現し、兵士達を薙ぎはらう。

精霊術が消えたときには、立っているものは、1人もいなかった。

ホームズは、パンパンと服を叩いてゴミを落とす。

「うーん……どうにかなったみたいだねえ、そっちは？」

「こちらも似たようなものだ」

ミラはそう答えて刀をしまう。

「急ごう！ 応援が来る前に」

ジュードの言葉に皆が頷くと一同は、走る。

「ああ、そうだ」

ホームズは、そう言つてエリーゼにオレンジグミを渡す。

「あげる」

エリーゼは、突然の事に驚いたが、直ぐに食べる。

「原因に優しくするとはな」

「君が言うんじゃない！」

ホームズの言葉を鼻であしらう。

「驚く方が悪い。これから命がけの戦いが待つてるんだぞ。この程度でビビってどうする」

ヨルの物言いは、めちやくちやだが筋は通っている。

「私、もうびつくりしません！」

『足なんか引つ張らないぞー！』

エリーゼは、そんなヨルの言葉を弾き飛ばす。

そしてグミを食べると共に決意を新たにす。

「ヨルだって怖くない、です！」

「だってさ」

ホームズは、ニヤリと笑ってヨルを見る。

「……はあ」

怖くないと言われて何となく腑に落ちないところはあるものの、たくましくなってきた所には賞賛すべきものがある。

なんとも言えないヨルに変わり、ホームズはエリーゼの背中をポンと軽く叩く。

「頼りにしてるよ、エリーゼ」

「ドンと来い、です！」

エリーゼは、力強く頷いた。

口は戦いの門

「これで、三つ目、か……………」

ホームズは、ヨルが術で出来た魔物モドキを食べている傍で考える。

「そろそろ、本命に……………」

そう呟いてホームズは、言葉を切る。

「ホームズ？」

不思議そうに尋ねるローズに答えずホームズは、顔を険しくさせる。

「いるねえ……………この扉の向こうだ」

ホームズは、そう言つて腕を押さえる。

まるで、何かを堪えているようだ。

「……………殺気が尋常じゃないな」

「流石、腐つても王……………歯向かうものには、容赦せずつて奴かねえ」

「違う」

ヨルは、そう言つてホームズを睨む。

「お前だ、ホームズ」

ホームズは、片眉をピクリとあげる。

「そんなに、出てた？」

「上手に押さえてる方だとは、おもうがな」

「ホームズ、大丈夫か？」

ヨルの言葉を聞いて、ミラは慮るようにホームズに尋ねる。

ミラの言葉にホームズは、頷く。

「安心したまえ」

そう言って、ホームズは瞳に決意の炎を宿す。

「蹴りをつけよう、必ず……！」

ホームズの言葉にミラは頷くと扉に手をかける。

そして、ぎぎぎと音を立て扉を開く。

扉の向こうは、見渡す限りの大広間、奥には、大きなガラス窓。

そして、ガラス窓の前の玉座にどっしりと腰を下ろす額にバツ印の傷を負った老人が

一人。

「ナハティガル……！」

ミラの視線の先の男を見て、ホームズは拳を強く握り込む。

「アレが……」

老人、ナハティガルはゆっくりと玉座から立ち上がった。



「来たか、マクスウエル、あの怪我からよく復活したものだ」

ナハティガルは、従者に指示を飛ばす。

「貴様は、槍の元で待つておれ。マクスウエル狩りの後は、北の部族狩りと行こう」

「かしこまりました」

従者が去るのを見届けると今度は、ローエンを見据える。

「イルベルト、まさか本当に主である儂に逆らうのか？」

ローエンは、静かに目を閉じる。

「私の主は、クレイン様ただ一人です」

見開いたローエンの言葉に、ナハティガルは、不遜に言葉を続ける。

「今なら、まだ許してやる……儂の元に来い」

ローエンは、静かに首を振る。

「かつて、貴方に見た王の器は、翳りを見せてしまった」

「儂以上に王にふさわしい者などおらん」

「随分とデカイ口を叩くじゃないか」

ホームズは、一歩歩みを進めて口を開く。

「まあ、その自信は評価してあげるよ」

ナハティガルは、ホームズの顔を見た時、興味深そうに頷く。

「黒猫を肩に乗せた、碧眼の男……そうか、貴様がホームズか……」

「どこから、仕入れた情報か、今更問いただす迄も無さそうだ」

ホームズは、どうでも良さそうに返すとナハティガルを睨みつける。

「研究所にあった、あのマナを吸い出す装置、アレ試作品つて訳じゃないよね？」

「口の利き方に気をつけろ、小僧。首を飛ばされたいのか？」

「黙りたまえ、質問してるのはこっちだ」

ホームズは、ピシヤリと叩きつけるように言い放つ。

そして、言葉が続ける。

「アレが、完成品だというなら、試作品は、どこに？」

「全て潰した」

ナハティガルの言葉にホームズは、更に目つきを険しくする。

「やっぱり……試作品を作って実験してやがったな、ナハティガル」
口調こそ静かだ。

しかし、普段からは、考えられない口調の荒さに回りは、信じられないと言う顔をす
る。

ナハティガルは、ホームズの意図を読んでニヤリとする。

「なるほど、それが聞きたかったわけか……そんな、回りくどい事をしなくても問われ
れば答えてやったものを」

「なら、単刀直入に聞いてあげよ」

ホームズは、真つ直ぐにナハティガルを睨みつける。

「アーティイーという名に聞き覚えはあるかい？」

「勿論、クルスニクの槍の礎となった人間ぐらい覚えているとも」

「礎って……」

ローズは、あの老婆の事を思い出す。

あの苦しそうな顔は今でも思い浮かぶ。

歯ぎしりをする、ローズに構わずホームズは、ナハティガルを睨みつける。

「ピースは揃ったようだな」

ヨルの言葉にホームズは、頷く。

「全部繋がった……納得だよ……」

ホームズからは、殺気が溢れ出ていた。

ローズは、殺気立つホームズに構わずポツリと呟く。

「貴方にとつて、民は……」

「王の為だ、当然だろう」

人は、相容れない考えを受け入れられない。

特に、自分の良心がそれを拒絶すれば尚更である。

「貴方………それでも、王か！」

「当然。だから、ここにいる」

ローズは、キツとナハティガルを正面から睨みつける。

「貴方……人を統べる資格なんてない!!」

「資格などいらぬ、資質もいらぬ」

そう言つて驕り高ぶつた笑みを浮かべる。

「王は、生まれ出づる刻より、王よ！」

「だから、民を犠牲にしてもいいと？」

今度は、ミラが尋ねる。

ナハティガルは、静かに頷く。

「そう。それが儂の権利だ」

ホームズは、ナハティガルの主張を聞き拳を強く握る。

「ふざけた事を！民の……人の命を何だと思ってる！」

今のホームズの感情は、激怒ではない。

憤怒だ。

そんなホームズに構わず、ナハティガルは指を一本立てる。

「王の為の必要な、犠牲だ」

「あなたの下らないクルスニクオモの槍チヤの為に、失われる命が必要だ?!」

「さつきから、そう言っておるだろう。ついでだ、人の次は、精霊も支配してみせよう」

「人も精霊もあなたに支配されたりなんかしない！」

ジュードが凜として返す。

ナハティガルは、そんなジュードを鼻で笑う。

「小僧が……マクスウェルとつるんで、すっかりつけ上がりおって……」

「つけあがってるのは、お前だろ、馬鹿王」

ヨルは、吐き捨てるように言う。

「何?」

不快感を隠そうともせず、ヨルを睨みつける。

「お前ごときに支配できるものか。お前程度に支配できるなら、俺は封印されたりなんかしていない」

「それは、貴様が弱かったからだ」

ヨルの言い分をナハティガルは、そう鼻で笑い流す。

「……クルスニクの槍か?」

「おうともよ、貴様になくて儂にあるものだ」

「いつの世も、どの人間も変わらん」

ヨルは、呆れ切った目でナハティガルを見る。

そして、ヨルはローエンを見る。

「こんな奴の為に、お前は……」

ローエンは、ヨルの言葉に悲しそうに目を伏せる。

「イルベルトがどうした?」

ナハティガルは、面白そうに尋ねる。

ジュードは一步前に踏み出す。

「ローエンは、あなたの事でたくさん悩んだんだよ!

僕の事は何と言つてもいい……でも、ローエンがどれだけ悩んだかぐらい、考えられないの!？」

「ジュードさん……!」

ローエンが思わずジュードを止めるように言う。

恐らく、次に来る台詞に予想がつくからだろう。

「民が悩むなど当然!」

ナハティガルは、そう言つてジュードの言葉を一蹴する。

「貴様らに安穩と生きる権利などない!」

「なっ!？」

ローズは、突然の暴言に言葉が続かない。

しかし、ナハティガルの暴言は、更に続く。

「儂の為に命を費やせ！それが儂の民たる者の使命よ！」

悪王そのままの暴言。

ホームズは、何かを言おうとヨルを見るがヨルの方が先に口を開く。

「何も言うな……全て現実だ。いるんだよ、こういう奴も……」

そう言つてヨルは、ホームズを見る。

手を強く握り込み、歯を食いしばるその姿は、鬼の形相というのも生ぬるい。

普段のチャランポランとした印象からは、想像もつかない。

ヨルは、そんなホームズを一瞥すると言葉が続ける。

「感情に飲まれるな。感情は、武器にもなるが、落とし穴にもなる」

そう言つて、ホームズの頬を尻尾で軽く叩く。

「ま、こんな事をお前に言わなくなつていいだろうけどな」

ホームズの得意分野は、相手のそういった感情を突くところだ。

ホームズは、少しぼかんとした後深く深呼吸をする。

そして、いつもの胡散臭い笑顔に戻る。

「ナハティガル、今の言葉、嘘偽りはないだね？」

「ない」

即答だった。

「そう」

ナハティガルの答えにホームズは、表情を消す。

ミラは代わりに決意の色を瞳に浮かべる。

「救えないな」

その言葉を聞くとナハティガルも自分の意見が聞き届けられないことが分かったのだらう。

「時間の無駄だったようだな」

そう言って、身の丈以上の突撃銃ランスを構える。

そして、その突撃銃ランスに向かって何やら紫色の物が集まってゆく。

「それは……」

ミラは気付いたようだ。

ナハティガルは、自慢気に笑み浮かべる。

「クルスニクの槍に吸収されたマナの部分転用よ」

その集まるマナを見て、ミラ達はナハティガルが本気で殺しに来る事を悟った。

ローエンは、悲しそうに目を伏せる。

「貴方の事を共に歩む友と思っていたのですが……」
そしてゆつくりと細剣を抜く。

「どうやら、もう後戻りは出来ないようですね」

肩で大剣を担ぎ、銃をくるくると回し、アルヴィンはナハティガルに照準を合わせる。
「あんたみたいに生きられたら、どんなに楽なんだろうな……だけどよ……」
そう言つて、アルヴィンは、目つきを鋭くする。

「正直付き合つてられねーわ、裸の王様さんよ！」

アルヴィンが言い終わるとレイアが棍をくるくると回す。

「こんな人が自分達の王様なんて信じられない！」

絶対、代わつてもらうからね！」

エリーゼも杖を取り出す。

「ジュードとミラ、友達を守ります！」

『やるぞー。敵討ちだー！』

ローズも腰の二刀に手をかける。

「故郷を守る為にここにきたわ……でも……」

そこで言葉を区切るとローズは二刀を抜く

「貴方は、いるだけで不幸を振りまく……不愉快だわ……必ず引きづりおろしてやる

！」

ホームズは、しらっとした目の下に感情を隠す。

「こんな人に人を嫌悪したのは久々だよ」

「全くだ」

「ヨルも頷く。」

ヨルをコケにした言葉、傲慢な言葉、全てに腹が立っているのだろう。

「君と気があうとはね……明日は、雷でも降るのかな？」

「フン。せいぜい降って血の雨だ」

ホームズは、ヨルとの会話を終え、右足を構える。

次に続くはジュードだ。

ジュードは、籠手を出し両拳を突く。

「あなたの野望もここで終わり……終わりにしなくちゃ！」

「覚悟しろ！ナハティガル！」

ミラの言葉を合図に全員がナハティガルに向かって駆け出した。

クルスニクの槍を巡る戦いの幕が切つて落とされた。

王を射と欲すればまず馬から射よ

「いぐざー！」

ホームズは突撃槍ランスを持つナハティガルに単身で挑む。

どの戦いにせよ、切り開く者は必要不可欠だ。

「貴様が先鋒か……よかろう！」

ホームズの眼前に突撃槍ランスが迫る。

ホームズは、身体を入れ替え避ける。

『いいかい、槍使い相手に戦うなら、三倍の実力が必要だよ』

ホームズは、難なく躲す。

『……まあ、昔から言われているのは、相手の初撃から三発は躲すこと。』

それが出来れば相手の三倍の実力があるってことになる、らしいよ』

(まず、一発！)

ホームズは、ナハティガルが引き戻した槍を見つめる。

そして二撃目が腹を襲う。

その二撃目もホームズは、難なく躲し、槍の先端では無く腹の辺りに移動する。

(二発目……！次も……)

ホームズは、ナハティガルが突撃槍ランスを引き抜くのを待つ。

しかし、次の瞬間視界がひっくり返る。

ナハティガルは、突撃槍ランスを戻さず、その腹でホームズを横殴りにしたのだ。

「……カッハ!!」

予想外に響く衝撃にホームズは、思わずえづく。

『ああ、そうそう。因みに行っておくと、経験が上つてのは、それだけで実力だからね』

(あの人は……!!忠告は、多いけど肝心の対処法なんて、滅多におしえやしない!!)
母の忠告を思い出しながら、ホームズは胸の内で悪態を吐く。

しかし、直ぐに転がると体制を立て直す。

「どうだ? コレの威力は?」

「さてね」

痛みを噛み殺し胡散臭い笑みで返す。

聞かれるまでもない。最悪だ。

もう少し時間が稼げれば、何とか回復も出来るところだが、ナハティガルがそれを許さない。

ホームズの軽口を聞き流し、突撃槍ランスを構える。

「これで終わりだ」

突撃槍ランスに纏うマナが少し強まる。

「瞬迅槍!!」

目の前に迫る突撃槍ランス。

しかし、ホームズはその場から動こうとしない。

そんなホームズに更にナハティガルが一步近づいた瞬間、ホームズの口が開かれる。

「アルヴィン!!」

「あいよ……」

ホームズの声に答えるよう、アルヴィンが引き金に指をかける。

「ヴァリアブルトリガー!!」

放たれた銃弾は、ホームズの後頭部を目掛けていく。

しかし、その弾丸がホームズに届くことはない。

ホームズは、後ろ向きのまま首を振り、背後からの弾丸をかわす。

そして、ホームズに当たらなかつた弾丸は代わりにナハティガルを目掛けて飛んで行く。

「ぬん?!」

弾丸が当たり煙が舞い上がる。

「でかしたわ、ホームズ！」

ローズは、いつものように刀を足元でバツ印に交差させず、左手に持つ刀をナハティガルに向ける。

「省略！フオトン！！」

煙に包まれるナハティガルに光の玉が炸裂する。

「なるほど、リアルオーブの恩恵か……」

ヨルはホームズの頭の上で、そう呟く。

「出番よーエリーゼー！」

『まかせろー！！』

エリーゼにマナが収束して行く。

『『ブラック・ガイド！！』』

墮天使が現れ鎌で切り刻む。

「こんだけやれば……」

ローズは、そう言つて息を漏らす。

勝ちを確信したのだ。

しかし……………

「考えは悪くない」

煙が晴れるとそこには、以前と変わらないナハティガルがいた。

「嘘！」

ローズは、勝ちを確信しただけに驚きを隠せない。

「お前らのごときの物差しで儂をはかるな……………」

ナハティガルは、そう言つて突撃槍ランズを構える。

「……………儂は、王だぞ！」

繰り出される突撃槍ランズ。

ローズは、ワントンが遅れたものの身体を捻り何とか躲す。
「ぐっ！」

しかし、肩をかすめ血が腕をつたう。

「ローズ！」

ホームズは、袖から流れる血を見て声を上げる。

「大丈夫。刀を振るうのに何の問題もないわ」

ローズは、歯を食いしばって答える。

そして、傷を負ったローズに代わりジュードが拳をぶつける。

ナハティガルは、突撃槍ランスで拳を防ぐ。

「こんのっ！」

ジュードは、空中に僅かに飛び上がり回し蹴りを放つ。

しかし、ナハティガルはそれも防ぐ。

「貴様ら如きに、つく膝もないわ!!」

ナハティガルは、そう言うときジュードに槍を振るう。

ホームズは、ジュードの戦いを見ながらアツプルグミを口に放り込んでいた。

「エリーゼの精霊術を防ぐなんてね……」

「まあ、あの槍のおかげだろうな」

ヨルはホームズの肩でそう分析する。

「やっぱり？」

「そして、次いでに言うならあいつもそれ頼りじゃない」

「どうということだい？」

ホームズがヨルの言葉に首を傾げる。

「ナハティガル自身がそれなりの実力者ということですよ」

ローエンが代わりにホームズの疑問に答える。

ホームズが知らないだけで、ナハティガル自身武術もそれなりの実力だ。

「経験、武器、フィジカル……なるほど、全部あつちの方が上つてことか……厄介な事だ」

ホームズは、ため息を吐く。

「でも、やるしかないよー！」

「そりゃあ、そうだ」

レイアの言葉にホームズは、ニヤリと笑って返す。

「負けっぱなしほど、腹立たしいものは、ないからねえ……」

「ホームズ、武器の破壊を頼む」

ホームズは、ミラの言葉にこくりと頷くとヨルを見る。

「食ったと思ったら、いきなり消費か……やれやれ、健康的な事だ」

ヨルはため息を吐くとホームズに向かって黒い球を吐き出す。

ホームズの右脚は、それを纏う。

「レイア」

「任せて！悲霊壮活！クイツクネス!!」

ホームズの体が軽くなる。

ホームズは、軽くその場でジャンプをする。

「ついでに、鶏足刃の如く、シャープネス！」

そして、レイアは自分にも身体強化の精霊術をかける。

「よしー」

着地と同時にポンチヨをはためかせナハティガルに向かって滑るように走る。

「どきたまえっ！ジュードー！」

言葉と同時に左足で踏み込む。

「瞬迅脚!!」

クイックネスのスピードを乗せたホームズの霞を纏った脚がナハティガルに向かって放たれる。

突然の面子の入れ替えにナハティガルは、避けることも叶わず、突撃槍で防ぐ。ホームズの脚と、ナハティガルの突撃槍が火花を散らす。

そう、火花を散らしているのだ。

ホームズの黒霞の脚を受けながら、突撃槍が壊れることもなく、火花を散らしている。

「マジかい……!!」

「ぬん!!」

ナハティガルは、そのまま槍を振り抜く。

「うおっ!!」

壁に向かって吹き飛ばさせれるホームズ。

何とか壁にぶつかる前にジュードが、ホームズを抱えて軌道をそらす。

「はあっ!」

「おらあ!!」

追撃をしようとするナハティガルにレイアとアルヴィンが襲いかかる。

「なんだい、アレ？この状態の脚で壊せない武器なんて初めてなんだけど……」
ホームズは、そう言つて紫色に輝く突撃槍ランスを睨む。

「考えられるのは、やつぱり……」

「ま、あのマナだろうな」

ヨルはそう言いながら、考える。

「ヨル、出来ればあのマナは食べて欲しくない」

ホームズは、そんなヨルの考えを見透かしたように告げる。

あのマナは、クルスニクの槍からの部分転用だと言つていた。

と言うことは、あのマナは、先ほどの人々の命、ということになる。

つまり、あのマナを食べるといふ事は、ホームズにとって人の命を食べる事に相当する。

ヨルは呆れたようにため息を吐く。

「あのな、そんな悠長な理想論を言ってる場合じゃないだろ。食わなきゃ殺されるぞ」「文字通り食うか食われるかって奴だね」

ホームズは、適当にそう返すとナハティガルを睨みつける。

「ヨル。おれはあの馬鹿に勝ちたい」

「だったら、手段を選んでる場合じゃないだろ」

「そりゃあね……でもさ……」

そこで言葉を切る。

そして、ホームズはあのヨルの苦手とする目をする。

誰もが尻込みするものを強い覚悟で選ぶあの目だ。

「妥協もしたくない」

こうなつてしまえば何を言つても無駄だ。

その力強い目で紡がれたホームズの言葉を聞き、ヨルは舌打ちをする。

「腹に穴を開けたり、進んでいらんハンデを背負つたりするくせに……」
そう言つてヨルはホームズの肩に乗る。

「いつか、お前にとつての妥協つて奴を是非とも聞きたいもんだ」

「機会があつたら、教えてあげるよ……て、ことなただけどいいかい？」
ホームズは、そう言つてミラの方を振り向く。

「何故私に聞く？」

「君は俺の雇い主。だつたら、意向を聞こうとするのは、当然だろう？」
ホームズの言葉にミラは不敵に笑う。

「……侮られては困るな、ホームズ。私を誰だと思つている」

ミラは、そう言つて胸を張る。

「精霊の主、マクスウエルだぞ。

第一ヨルそんに食なわ手せるを使つたら、報酬の話は無しだ」

「そりゃあ、恐ろしいことだねえ」

ホームズは、両足を肩幅に広げ腰を落とす。

「剛……」

赤い霞がホームズから噴きだされる。

「……照来!!」

赤い霞を身体に纏い、足には黒い霞。

準備は出来た。

「もう一度」

ヨルを肩に乗せ、目の前でレイア達と戦っているアルヴェインを見る。

「いっつつつつ……」

右足を前に出し力を集中させる。

そして……

「……くぞおおおお!!」

床にヒビを入れる程の強い右足の踏み込み、一步で距離を詰める。

「レイア！」

リリアルオーブの光がレイアに届く。

レイアは、棍を立たせる。

ホームズは、立っている棍を足場にしそこから更に前転しながらナハティガルに向かつて飛ぶ。

「月華追尋脚!!」

遠心力という力が加わったホームズの踵がナハティガルに向かつて落ちていく。

先程とは威力が段違いだ。

しかし、相変わらず突撃槍ランスには、ヒビ一つ入らない。

「だったら……!」

「ホームズ!!」

レイアが棍をホームズに向ける。

ホームズは、光るリリアルオーブと差し出された棍を見て、ニヤリと笑う。

「……………どうなっても知らないぜ」

そう言つてホームズは、向けられた棍の先を掴む。

ホームズが、棍の先を掴むのを確認するとレイアは、持ち上げる。

「づっ!重い……………けどっ!……………」

「おたくら……何する気？」

アルヴィンの質問に答えずレイアは、棍を回し始める。

「ハアアアアアッ!!」

最初は、横に回していたホームズの掴んだ棍が最後には縦の斜めになる。

「行くぞ!!」

遠心力とホームズの体重を乗せ、棍と言うよりは鎚となった武器を振りかぶる。

「爆砕……」

暗い部屋で更に暗い黒の槌が振り下ろされる。

「……ロック!!」

引力、重力、遠心力、全ての力を集結させた大槌が、ナハティガルの突撃槍ランスに振り下ろされた。

鳴り響く音は、どう優しく言っても、安全靴と突撃槍ランスがぶつかった音ではない。

鉄骨と鉄骨が全力で、ぶつかりあつた音だ。

その音は、暗いがらんだりの部屋を震わせる。

「ッあ、ああああ!!」

ホームズは、更に脚力を込める。

対するレイアは、共鳴術技リンクアーツとは、いえ、今ので力を使い切つた為、床に膝から崩れ落ち倒れそうになる。

それをアルヴェインが慌てて、受け止める。

「無茶し過ぎだ、おたくら」

アルヴェインは、先程の二人の技に呆れている。

まだ、逆でやった方がマシというものだ。

確かにリリアルオーブの力を借り、更にシャープネスをかけているとはいえ、男の体重を女の腕力で振り回すなど無理がある。

「行け……ホームズ……」

レイアは、アルヴィンの文句には、答えず聞こえるか聞こえないか分からない声で言う。

「ツだあああああら!!」

更に力を込める。

その時飛び散る火花の中に、ヨルは、あるものを見る。

「ヒジが……!!」

「えっ?」

「なめるなっ!小僧!!」

ナハティガルは、無理矢理ホームズを弾き飛ばす。

「……ぐっ!!」

ホームズは、地面の少し上一直線に飛んでいく。

(嘘だろ!渾身の一撃だったのに!!)

アルヴィンは、それを見ると舌打ちをする。

「ジュード！レイア頼んだわ」

そう言つてレイアをジュードに投げる。

そして、ホームズの飛ばされる方向に立つ。

「ホームズ！発射の用意してろ」

「無茶言うねえ……」

ホームズは、地面に手をつきそれをバネに跳ね上がる。

そして、そのままアルヴィンの大剣を足場にする。

「よしー」

アルヴィンは、柄を持つ両手に力を込める。

「飛天衝星駆!!」

そのままホームズは、再びナハティガルに飛んでいく。

「ワンパターンな奴らめ！」

ナハティガルを向かつてくるホームズを突撃槍^{ランス}で叩き落す。

舞い上がる煙のせいで見えないが、唯一見えるホームズの手は動く様子はない。

攻撃の失敗を悟ったアルヴィンは、ホームズに突撃槍^{ランス}を振り下ろし、ガラ空きに

なっている頭に銃口を定める。

しかし、ナハティガルはアルヴェインに向かって突撃を仕掛ける。

銃を撃つよりも早く迫る槍の切っ先。

アルヴェインは、何とか、かわす。

しかし、

「時練爆鐘!!」

横薙ぎがふられ、アルヴェインに六芒星の陣が刻まれる。

その六芒星は、徐々に光を増してく。

「やべっ!」

やがて、最大まで輝くとその陣は、爆発した。

「……………つくそ!」

アルヴェインが倒れるとナハティガルは、後方でレイアの手当てをするジュード、エリーゼに狙いを絞る。

「まずい!」

ミラは、思わず声を上げる。

途端ナハティガルの動きが止まる。

「っ、これは……」

見るとナハティガルの体には、よく見たことのある黒い紐が巻きついている。

その尻尾の先には、肩に乗せたヨルの尻尾を掴んでいるホームズがいた。

「ヨルだけの力じゃ、君の勢いを殺すなんて無理だからねえ……」

幸い剛招来の効果は、きれていないようで、おかげで突撃槍ランスの攻撃は何とか防げたようだ。

あくまで何とかだ。

その証拠に額からダラダラと血が流れている。

そう言って、床に倒れているアルヴィンを見る。

「安心しろ、生きてる」

ヨルは、尻尾を伸ばしながらそう言う。

「い」の……」

ナハティガルは無理矢理拘束を解いた。

しかしその時にはホームズは、ナハティガルまで迫っていた。

（おれが起きるのが遅かったから……）

ホームズは、胸の内でそう呟くと黒霞の右足をもう一度振るう。

もちろん先程のヒビが入った場所だ。

しかし、

（ヒビが……ない？）

ヨルは、眉を潜める。

ホームズも驚いた顔をしている。

「無駄だったようだな。所詮、王に勝とうなど、夢も……」

「やかましい！」

ホームズは、ナハティガルに一言そう叫ぶと右足に気を取られているナハティガルの

顔面に左足で蹴りを決め、文字通り一蹴する。

「なっ？」

ナハティガルは、想像以上の威力に何をやられたか分からない。

攻撃力の方が目を引くホームズの黒霞だが、忘れてはいけないのは、どうしても攻撃力が異常なのかという事だ。

異常な力を持っているからこそあの攻撃力なのだ。

つまり、ホームズは異常な力を持っている足を軸足にし、ナハティガルに蹴りを放つた。

威力は言うが及ばず。

ナハティガルは、上空からの叩きつけるかのような、回し蹴りにそのまま膝から床に落ちる。

それと同時にホームズの足から黒霞が消えた。

どうやら、時間切れのようだ。

ナハティガルの突撃^{ラン}銃を破壊することは叶わなず、レイア、アルヴィンの協力を無に帰してしまった。

しかし、

「膝をついたねえ……ナハティガル」

ホームズは、見下ろしながら、決してナハティガルが認めたくは無いであろう事を告げた。

暴虐王は、ついに平民に膝をついてしまった。

幾本もの矢

「どこの馬の骨とも知らん奴に膝をつかさされた、君の王の威厳もそれまでだ」

そう言うと、ホームズは蹴りを放つ。

それをナハティガルは、素手で止める。

「心が折れたと、思っているのだな」

ニヤリと笑うと手の力を強め始める。

ホームズの足から、枝が軋むような音が聞こえる始める。

「ツツ！」

「貴様程度に心を折る程、ヤワではないわ！」

更に力を込める。

「ツ——」

(まずい！このままじゃ！)

「アサルトダンス！」

ミラが剣の乱撃を放つ。

ナハティガルは、思わず後退する。

ホームズは、痛そうに足をふる。

「あつぶねえー……助かったよ、ミラ」

「礼には及ばない。それより、いけるか？」

ホームズは、首を傾げるとだんつと強く踏み込む。

「ふむ、大丈夫だね」

「ならいい、二人で行くぞ。ローエンには、後方支援を頼んである。他の二人には、レ

イアとアルヴィンの治療を頼んである、ローズは、」

「ランコよ」

ローズは、刀に闘気を纏う。

「獅子戦哮！」

ナハティガルを闘気の獅子が襲いかかる。

「ぬう」

ナハティガルは、後退する。

「私はローエンの援護に回るわ。二人が突破されたときのために」

「了解」

ホームズは、力強く頷くとミラと共鳴する。

二人は、走りだし、ナハティガルを挟む。

「この！」

「くらえっ！」

二人は、呼吸を合わせ前後から攻撃する。

しかし、ナハティガルは、剣を突撃槍で防ぎ、脚を腕で止める。

「おいおい、勘弁しておくれよ……」

「くっ！」

ナハティガルは、戸惑う二人を押し飛ばし、突撃槍を振るう。

「……デイベインストリーク！」

二人が時間を稼いでいる間に、ローエンの精霊術が完成し、光線がナハティガルを襲う。

「豪破槍！」

槍のマナを増し、それを防ぐ。

そして、

「闇龍槍！」

そのままローエンへと突撃していった。

「獅子戦哮・氷牙！」

凍気を纏った獅子が、ナハティガルの行く手を阻む。

しかし、それも槍の一突きで消してしまう。

「……っちー！」

ローズは、刀二本で槍をいなすと左側に移動し懐に入る。

そして、そのままナハティガルの柄で殴る。

ナハティガルは、距離を取る。

勿論逃げたわけではない。

「爆砕槍！」

突撃槍ランスを叩きつけ、床を爆破させる。

(まずい！)

ローズは、ローエンを押し飛ばし何とかその攻撃から守る。

しかし、代わりに自分が巻き込まれてしまった。

「——っ！」

ごろごろと床を転がりなんとか、片膝立ちになるローズ。

「ローズさん！」

「大丈夫。この前の借りを返しただけよ、気にしないで」

ローズは、所々か血を流している。

かすった肩からは、更に血が流れる。

「しかし……」

ナハティガルは、更に槍を構える。

「ならば、もう一度だ」

突撃槍ランスをふりあげる。

それをホームズが背中から蹴る。

「ぐっ！」

動きが止まった、ナハティガルにチャンスとばかりに右足の回し蹴りを叩き込み、次は入れ替え左足を叩き込む。

そして、リリアルオーブを光らせる。

「畳み掛ける！ミラ来たまえ！」

「了解した」

二人は、螺旋を描くように宙に上がる。

そして、ミラは片手剣をホームズは、足を掲げる。

「竜虎滅牙陣!!」

二人がかりの攻撃をナハティガルは、突撃槍ランスでふせぐ。

「甘い！」

「ぬわあ！」

「くっ！」

二人は、そのまま地面に叩き落とされてしまう。

「どうだ、これが槍の力だ」

背中を打ち付け動けない二人にナハティガルは、自慢気に槍を見せる。

ローエンは、下手に動けない。自分を援護する状態なしで、精霊術は、発動できない。

「二人がかりの攻撃でも傷付かず、

人外の力をもつてしても、壊れることなどない」

「それを扱える、お前は王だと言いたいんだな」

ヨルは、ホームズを下敷きにし、下から睨みつけるように言う。

「おうともよ。この力に勝てる誰かが、他にいるか？」

この儂を完膚なきまでに叩き潰す、そんな奴がいるか？

いないであろう、探すことさえできないであろう？

誰も儂に逆らうことなど出来ぬ、させぬ、それこそ、王というものだ」

「……ハッ」

ヨルは、ナハティガルの言葉を鼻で笑う。

「これまた、たいそうな御高説だ。」

「たまたま手に入れた宝クジみたいな景品で強くなった気でいやがる」
ヨルは、とても面白そうに言う。

「つまり、アレだ。アレにそっくりだ、お前。」

「前から何かに似てると思ってただけだよ……ようやく思い出した」
ヨルは、ホームズをちらりと見る。

「お前、ホームズをいじめてた精霊術を覚えたてのガキとそっくりだ」

ナハティガルは、ピクリと眉を動かす。

「そっくりだ、お前。」

こいつ昔いじめられてたんだがな、その時、精霊術を使ってきた奴がいたんだ。そいつは、覚えてたでだったらしくてな、試したくてしようがなかったらしい」
「……何が言いたい」

「お前、十歳にも満たない人間のガキと何も変わらん」

空気が凍りつく。

正面きつてヨルは、馬鹿にしにかかる。

昔ならいざ知らず、今の実力差は、火を見るより明らかだ。
だが、ヨルは、言葉を続ける。

「お前なんか、王なもんか。支配者なもんか。せいぜいガキ大将が関の山だ」
「貴様……！」

明らかにナハティガルは、怒りに震えている。

「器も小さきや、心も狭いな。」

本当、なんで王なんてやってんだ？」

「死ねっ！」

ナハティガルは、ヨルに向け突撃槍ランスを繰り出す。

しかしそれは、ヨルの目前で天井を向く。

代わりにあるのは、突撃槍ランスを蹴り上げたホームズの安全靴だ。

「やれやれ、おれの腹の上で随分と言いたい放題だねえ……」

ホームズは、むくりと上半身を起こす。

「時間稼ぎをしてやったんだ、少しはお礼を言ってもいいんじゃないか？」

「君がおれの為に頑張るなんてね、きつと、全世界が涙するんじゃない？」

「ふつ。私はそこに拍手もつけてやる」

ミラとホームズは、そんな事を言いながら立ち上がる。

「さて、言いたいことは、全部ヨルが言ってくれた。

てなわけだ、そろそろ玉座から降りてくれないかい、ガキ大将？」

「そういう訳だ、ナハティガル」

ナハティガルは、ギリつと歯ぎしりをするとギロリと睨む。

「……よかろう。そこまで、命を大事にしない奴らも珍しい」

そう言つて、ナハティガルは突撃槍ランスはマナの量を増す。

「これは……？」

「元々、頃合いではあつた……」

そして、突撃槍ランスは今までに無いほど輝く。

「アレは……！」

ナハティガルは、それを持ち上空に浮く。

「……ふむ、マナの量が半端じゃないな」

「じゃなくて！何、余計なこと言ってるの！

自分より強い奴に言いたい放題言つて！一体、何考えてるのよ！」

ヨルの呑気な物言いにローズが思わず突つ込む。

「なんだ、お前は自分より弱い奴にしか、言いたい放題言えないのか？」
ヨルは馬鹿にした様に返す。

「やれやれ……面倒事を運んでくるのは、いつだって君だよ」

ホームズは、齒噛みする。

その間にナハティガルは、突撃槍^{ランス}を自分の頭の上で回す。

「天上天下唯我独尊！」

その槍は、パーティの中心に向けられる。

「ホームズ。アレが地面に当たれば恐らく爆発的にマナが広がる……タイミングを見計らって飛べ」

ホームズは、ぴくりと眉を動かす。

ヨルの囁きの直後、ナハティガルの手から突撃槍^{ランス}が放たれる。

「デモンズランス!!」

真つ直ぐに落ちてくるマナの爆弾を背負った槍。

周りには動けないレイア、アルヴィン。

そしてそれを治療するエリーゼとジュード。

ローエンとミラ、そして負傷したローズ。

誰一人としてこの攻撃を防げるものは、いないだろう。

そして、自分もだ。

アレに立ち向かうなんて、馬鹿げている。

まさに絶体絶命という奴だ。

『逃げる事を考えてごらん』

自分一人なら、確かに如何にか逃げることが可能だ。

『絶体絶命というものに、立ち向かわなきやならない時というのが人生にはあるんだよ』

しかし、ホームズの脳裏に続きの母の言葉が蘇る。

『その時君がどんな手段をとるかは分からないけど、後悔のしない手段をとりたまえ』

ホームズは、落下点に走って移動する、

(おれの後悔しない手段は……)

「こいつだあ!!」

そして、いつもの円盤で迫り来る突撃槍ラシスを受け止める。

「ふんぐつ!」

ホームズは、何とか左腕を右腕で支え、歯を食いしばって耐える。

「ホームズ!!」

いつもの無茶にローズが叫ぶ。

ジュードも驚いてレイアを治療する手を止める。

「おい!無茶だよせ!」

ミラの言葉にホームズは、耳を貸さず踏ん張り続ける。

「こんの……阿呆!絶対やると思った!」

ヨルは、思わず舌打ちをする。

しかし、現実は無情だ。

槍のManaが一気に爆発的に広がる。

「まずいー！」

ジュードが叫ぶ。

それと同時にホームズが地面を強く踏み込む。

(プレザさんに出来たんだ。

おれに出来ない筈がない！)

「守護——方陣!!」

巨大な青白い円陣が、ホームズを中心として、

ローエンを

ジュードを

エリーゼを

アルヴィンを

レイアを

ローズを

ミラを

全てを囲んで守っていた。

「ヨル……分かってるだろうねえ？」

「……………もつといい方法があったというのに……………まあいい、任せろ」
ヨルは吐き捨てる様にそういった。

ホームズの守護方陣とナハティガルの突撃槍^{ランス}。

どちらも一歩も引かない。

（どちくしよう！気張ってやる！頑張ってやる！意地はつてやる！）
更に威力をます槍にホームズは、歯をくいしばる。

（自分を受け入れてくれた人達を犠牲になんて、させない！）

ホームズは、踏み込みを強め更に守護方陣を輝かせる。

しかし、威力が落ちる事はない。

腕は軋む。

腕が裂け血が出る。

しかし、守護方陣のおかげで瞬時に回復をする。

先ほどからそれをずっと繰り返している。

「無茶です！ホームズさん！守護方陣程度では、いくらなんでも!!」

ローエンの声もホームズの耳には、届かない。

今、ホームズには、守護方陣を維持することしか頭がない。

(めげるな！折れるな！負けるな！絶対勝つんだ!!)

「ホームズ?!」

ミラが助けに行こうとして首を傾げる。

動かないのだ、身体が。

つまり、今回発動した守護方陣。

規模はデカく仲間に害こそ加えないもの、その場に拘束してしまう。

ミラは、ギリつと歯ぎしりをする。

(動け！動け！動け！動け！動け！動け！動け！)

ローズは、何とか動こうとするが全く動く気配がない。

「——っ!!あの馬鹿っ……土壇場で変なもの出して!」
ローズは、悔しそうに歯噛みをする。

「アああ” あ” あ” あ” あ” あ” あ” あ” あ” あ!!!”!!!」

ホームズは、あらん限りの力を振り絞る。
マナと守護方陣は、激しくぶつかり合う。

永遠に続くかのようにぶつかり合う槍と守護方陣。

「今だ!ホームズ!!」

その時間をヨルとホームズが壊す。

ヨルは、そう言う口から今まで見たことのないほどの黒い球を吐き出した。

その黒は吸い込まれそうなんて表現も生ぬるい。

吸い込みそのまま帰ってこれない程黒く、そしてどんな闇よりも人を不安にさせる底なしの黒だった。

ヨルは、ここに来るまで散々精霊術で出来た魔物を食べている。

そして、夜域のイル・ファンは夜域と名がつくようにずっと夜である。

この全ての要素を飲み込んで吐き出された黒球が、今までと同じ威力なわけが無い。

吐き出された球はホームズの右足に当たると弾け黒霞となってまわりつく。

「っだあらあ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ!!」

ホームズは、渾身の力を込めて目の前にあるナハティガルの突撃槍ランスに蹴りを放つ。

ホームズの蹴りが放たれた突撃槍ランスは、

今までどんなことをやっても壊れなかった突撃槍は、

その時、完全に碎け散った。

突然の光景にナハティガルは、目を向く。

「槍が………!?!」

その突撃槍の無惨な姿にナハティガルは、そう呟くことしか出来ない。

今まで槍が壊せなかったのは、ひとえに突撃槍を守ってきたマナのおかげである。

これのおかげ、ヒビが入った程度も回復していたのだ。

しかし、今回ナハティガルが放った秘奥義は、そのマナを大量に使う。

つまり、突撃槍を覆うマナが大幅に減る。

ホームズが狙ったのはその瞬間だ。

その瞬間を最大出力の黒霞の足で蹴られた突撃槍ランスが無事なわけがない。

足から霞は消え、そしてパキンという音とともに、ホームズの盾も突撃槍ランスと同じように
砕け散る。

「……………」

ミラは眉をひそめる。

「ハア、ハア……………ハア……………ハア……………」

ホームズは、俯いたまま荒い呼吸を何度も繰り返す。

『感情は、武器にもなるが落とし穴にもなる』か……………」

ホームズは、力無く笑い、顔を上げナハティガルを見る。

「まんまとハマったね、落とし穴に」

フラフラのホームズから放たれる言葉にナハティガルは、ハツと思ひ至る。

「まさか、あのシャドウもどきのアレは……………」

「そう、挑発だよ。君はあそこで秘奥義なんて放たなくたって勝てたんだ。なのに放った……くくくくくくく」

面白そうに力無く笑う。

その傍でヨルは、ため息を一つ吐く。

「本当は、もう少し楽な方に傾くよていだったんだがなあ」

誰に言うともなくヨルは、呟いた。

ホームズは、苦笑いをすると呼吸を整える。

「誰かが、側にいればこんな事にはならなかったらうねえ……」

自分の肩にいる化け物は、冷静でいるようここに来るまでの間に忠告を何度もしていた。

それを思うとホームズは、やはり少し笑ってしまふ。

ホームズは、笑いながらユラリと一歩前に進む。

思わずナハティガルは、半歩下がる。

「……繋がりがある方が強いなんて、今更そんな事言わないけどさあ……」

更にもう一步距離を詰める。

「二人ぼつちが弱いつてのは、きつとそういうことだろうねえ……」

肩にいるヨルは、フンと鼻を鳴らす。

ホームズは、そう言つてナハティガルまで距離を詰めるとそのままナハティガルの腹に回し蹴りを放つ。

放たれた回し蹴りは、メリメリとナハティガルの腹にめり込む。

「ツグハツア!!」

ナハティガルは、思わず口から血を出す。

形勢は、ようやくひっくり返つた。

「やった!」

ローズは、思わず声を上げる。

しかし、ナハティガルは口から血を流しながらも腹にあるホームズの脚をしつかりと掴んでいた。

そして、そのままナハティガルは、ホームズの顔を殴り飛ばす。

ホームズは、地面に打ち付けられる。

「……あと、一手及ばなかったな」

ナハティガルは、歯を食いしばりながら言うとそんなホームズを見下ろす。対する、くちびるを切りながら、ふふふと面白そうに笑う。

「そのあと一手を詰める最高の役者がこちらには、いるんだぜ」
ホームズは、ニヤリと笑う。

「まあ、軍師^彼は、それがお仕事みたいなもんだからねえ」

ホームズの言葉は、そこまでだった。

代わりに聞こえたのは、

「フローツエ！荒々しく！」

ローエンの秘奥義の声だった。

辺りに湧き上がり立ち上る水柱、
それにナハティガルは、巻き込まれる。

「グラーツォ！そう優雅に！！」

水柱が立つと、それら全ては、一緒に氷柱となる。

「グランドフィナーレ！」

氷柱は、ナハティガルを巻き込み、崩れ去った。

「ぐっ………は………」

ナハティガルは、今度こそ倒れた。
最早起き上がる力もない。

「ナハティガル、貴方が望んだ決着です」

ローエンは、そうナハティガルに告げた。

長いクルスニクを巡る戦いに今ようやく、幕が引かれようとしていた。

マナ降って地固まる

「ホームズ！」

起き上がったホームズにローズが呼びかける。

ホームズは、左手をポケットに突っ込みヒラヒラと手を振ってローズに返していた。一見余裕そうに見えるがよく見ると足元がおぼつかないのが分かる。

「どうやら、意地だけで立っているようだ。」

そんなホームズにレイアは、ため息を吐く。

「本当に無理したね……」

「おれは有言実行の男だから」

「はいはい……ジュード」

レイアは、呆れたように返すとジュードを呼ぶ。

呼ばれたジュードは、ホームズの治療をする。

とはいえ、目立った傷はナハティガルに殴られたところぐらいだ。

「きつと、あの守護方陣のおかげだね……」

そう言いつつ、ホームズの両腕を見て言葉を失う。

「ホームズ……これ……」

ホームズの両腕は、赤黒く濁っていた。

ジュードが軽く触っただけでホームズは、顔をしかめる。

「……あんだだけ……回復と怪我を繰り返してれば……こうなるよね……」

そう言いつつ今度は足に目を向ける。

蹴りとは、思えない音を何度も立てていたのだ。

一応診なくては、ならない。

「……ホームズ、靴脱いで」

「……………んー……………多分大丈夫だよ」

「それを判断するのは、患者ホームズじゃないよ」

「へいへい」

ホームズは、そう言つて靴を脱ぐ。

確かに見た目は何の異常はない。

「ま、念の為」

そう言つてジュードは、治療をかける。

その後は、腕だ。

とは言え、あまりしつかりとはかけられない。

元々回復と破壊を繰り返していたところにもう一度治療をするのは、いいことではない。

「……………はい、とりあえず簡単に痛みだけでも和らげておいたから」

「サンキュー」

ホームズは、ジュードにそう言つてフラフラと立ち上がる。

そして、ナハティガルに視線を向ける。

「ぐ……………」

ローエンの秘奥義を食らったナハティガルは、フラフラとしながら玉座を目指す。

そんなナハティガルをローエンとホームズは、静かに見つめる。

「馬鹿者共が……！儂を殺せば、ラ・シユガルは、ガイアスに飲み込まれるぞ……」
「しかし、王とて罪は償わなければなりません」

苦しうに言うナハティガルにローエンは、そう静かに告げる。

「知ったことではないわ!!」

ローエンの言葉をそう一蹴するとナハティガは、玉座に手をつく。

「クルスニクの槍さえ……あれば……儂は絶対の力を……」

苦しみながらもそう告げるナハティガルをホームズは、冷めた目で見る。

「……………無様だな」

「否定はしないよ」

ヨルの言葉にホームズは、そう返し、ナハティガルを見る。

「槍の力に頼って、なのに敗北して……抛り所を失ったようだねえ」

「黙れ……」

ホームズは、冷え切った目で見つめる。

「折れただろう、君の心」

核心をついた言葉にナハティガルは、思わず息を飲む。

そして、さらにミラが剣を突きつける。

「ナハティガル」

凜として呼んだ後静かに言葉を続ける。

「人の部を超えた力は、いずれ世界を滅ぼす……お前も同様だ」

「ぐっ……」

ミラは、そのまま一步踏みでようとす。

しかし、

「ミラ、待って！」

それをエリーゼが止める。

「この人は、ローエンの友達だから……」

エリーゼの言葉を聞きミラは剣を下ろし、ローエンに視線を向ける。

ローエンは、静かに頷きホームズの方を見る。

「よろしいですか？ホームズさん？」

先ほどの様子とナハティガルへの言動。

どう考えてもホームズにも何かしらの感情が渦巻いているのは、確かだ。

しかし、ホームズは、優しく微笑んで頷く。

「最初からそのつもりだよ」

そう言つてホームズは、ポンとローエンの背中を叩く。

そして、直ぐに痛そうに顔をしかめる。

「……ありがとうございます」

ローエンは、ホームズという言葉とともにナハティガルに歩みを進め、向かい合う。

「ナハティガル」

玉座にもたれかかるナハティガルにローエンは、静かに告げる。

「……ラ・シュガルには、民を導く王が必要です」

そう言っつて言葉が続ける。

「私も貴方と同じなのですよ……背負うべき責任から目を背けた」

そこで言葉を切り、ナハティガルを見る。

「ナハティガル」

そして、静かに自分の友の名を呼ぶ。

静かに、本当に静かに。

けれども、大広間には確かに染み渡るそんな声音だ。

ナハティガルは、信じられないというふうに目を見開く。

「まさか……イルベルト……貴様……！」

どうやらローエンの思惑に気がついたようだ。

ローエンの言葉は、続く。

「私と貴方とでもう一度、ラ・シユガルの未来を……」

「貴様……農の生み出した業まで背負って……」

ナハティガルは、ローエンの言葉に驚愕する。

「構いません……」

ローエンは、そう言ってちらりとヨルの方を見る。

「私は、指揮者コンダクターであり、そして……貴方の友です。

構いけませんよ」

そう言ってローエンは、にっこりと笑う。

ヨルは、ふんと鼻を鳴らす。

ナハティガルは、その言葉に憑き物が落ちた顔をする。

「ローエン……」

今、ようやくナハティガルは、ローエンを名前で呼んだ。

さながら、友人のように。

ホームズは、何とも言えない顔で見つめる。

ナハティガルには、個人的に言えば憎悪のみだ。

しかし、ローエンの言葉にナハティガルは、動いた。

「……まあ、またの機会にしとくかな」

ホームズは、そう言って諦めたようにため息を吐く。

言葉とは裏腹にその時が来ない事ぐらいホームズだつて分かっている。何せもう、問い詰めるべき暴君はいない。

いるのは、ローエンの友人であり、業を背負つて歩く覚悟を決めた一人の人間だ。ホームズの抱えた過去の恨み言の出番などありはしない。

「くくく、相変わらずお人好しだな」

ヨルの言葉にホームズは、ふんと鼻を鳴らす。

「別に。そうじゃなくてさ……なんと言うか……」

なんと言おうかホームズは、悩む。

そして、ポンと手を叩く。

「ああ、これだ。いわゆる『おれが言うまでもない』つて奴さ」

ホームズは、そう言つてローエンを見る。

「きつと、後はローエンがやってくれるよ」

「二度逃げた人間に期待をするのか？」

ヨルの意地の悪い言葉にホームズは、クスクスと笑う。

「分かつてる癖に」

「……さて、なんのことやら」

ヨルは、とぼけたようにホームズに返す。

安心しきったホームズ。

そのホームズからは、先程までであった殺気は確かに消えていた。周りもホツとし、そしてローエンの言葉で揺れ動いたナハティガルを見守った。

誰もが、暴君と言われる王と分かり合えた思えた

その瞬間、

ヨルの耳だけが声を捉える。

「ちっ……やれ」

「はい、マスター」

(……なんだ?)

ヨルが不審そうに眉はないが、眉を擡め、ヒゲをピクリと動かす。

(……マナの気配?……それに……デカイ!)

た。
ヨルが不審な気配に首を傾げたまさにその時、氷の矢がナハティガルに降り注がれた。

「……………っ！グアアア！！」

降り注いだ氷の矢に貫かれたナハティガルは、苦悶の声を上げる。

「なっ！！」

突然起こった惨劇にホームズ達は思わず息を飲む。

「ナハティガル!!」

ローエンは、思わず駆け寄るが、時既に遅し。

ナハティガルの生命の灯火が消え、氷の矢が弾け飛ぶ。

「誰だ!!」

ジュードは、辺りを見回す。

しかし、何処にも人のいた様子はない。

「…………どうなってるんだい」

ホームズは、呆然としながら、いかぶしむように弾け飛んだ氷に目を向ける。

「…………それにこの精霊術…………詳しいことはよくわかんないけれど、コレ、フリーズラ

ンサーの威力じゃないだろう?」

ホームズの言葉にローズは、頷く。

「というより、何でナハティガルを…………!」

ローズは、動揺しながらそう口にする。

そんな中、ミラは顔を険しくさせ口を開く。

「まさか、狙いは!!」

「クルスニクの槍……でも、誰がどうして!!」

ローズは、自分で言っていて信じられないようだ。

何せクルスニクの槍を使っていたのも指示を出していたのもナハティガルだ。そんなナハティガルが死んだのに誰がクルスニクの槍に関わろうと言うのだ。

「誰がはともかく、どうしてなんて考えるまでもないだろう」

ホームズは、吐き捨てるように言う。

あの圧倒的な力を見れば、必要な理由などそれこそ考えるのが疲れるほどある。

「とりあえず、クルスニクの槍だねえ」

真剣な表情のホームズの言葉に皆は頷く。

方向性が決まった中ヨルは、静かにローエンを見つめる。

「ローエン」

ヨルの言葉にローエンは、静かにナハティガルを見つめる。

後ろ姿の為、どんな表情なのか、ホームズ達には分からない。

「私は大丈夫、行きましよう」

そう言ってナハティガルを振り返らず一同の元へと歩みを進めた。

友の死に胸は痛む。

しかし、確かに友と最後の最後で分かり合えた。
これだけでも、ローエンにとっては意味のあるものだ。

(……………さらばです、ナハティガル)

ローエンは、後ろにいる友にそう告げると一同の元にたどり着いた。

クルスニクの槍を巡る戦いに幕が引かれるのはもう少し後になりそうだ。

一難去つてまた一問

「槍がない!!」

大広間の蓮華陣ロータスを抜けて下の部屋へと行くが、そこはがらんどろとしており何もない。

ホームズは、辺りを見回すが何処を見ても見当たらない。

「本当にここにあつたのかな？」

レイアは、不思議そうに首を傾げる。

「ナハティガルは、槍の力を自分に集めて使っていたんだからここにあつた筈だよ」

ホームズは、更に辺りを見回す。

「ねえ……あのおかつば頭もないんだけど。」

彼、確か……ナハティガルに待つてろつて言われた筈だよね？」

ホームズの言葉にミラは眉間にしわを寄せる。

「まさか……あいつが……」

考え込むミラをよそにヨルは、ホームズの肩から降りて辺りを探る。

(……声は二つ……一つがあのおかつばだとすると……もう一人の方が、攻撃した事

になるわけか……)

そう考え先程の氷を思い出す。

ホームズは、こう言っていた。

フリーズランサーのレベルじゃない、と。

しかし、より正確に言うなら、アレは……

(人間の精霊術のレベルじゃない……)

「……………ル、ヨル！」

「……………なんだ？」

ホームズに呼ばれたヨルは、不機嫌そうにホームズを睨む。

「とりあえず、王宮の外に出るよ」

ジュード達は扉へと向かって走っている。

「……分かった」

ヨルは、そう言つて肩に乗る。

そんなヨルにホームズは、視線を向ける。

「何か勘付いてるね、君」

「……まあ、まだ可能性の域を出ない……というより、ありえないんだよ」

ホームズは、そのまま最後尾を走る。

「……回りくどいな、スパツといたまえ」

「あの精霊術、人間のレベルじゃない……大精霊のレベルだ」

「……マジかい……」

ホームズは、戦慄する。

しかし、直ぐに納得のいかなそうな顔をしてアホ毛を触る。

「……でも、おかしいじゃないか。」

確か、四大は捕まつてるし……ミラはここにいるし……いや、待てよ……」

そう言つてホームズは、ある出来事を思い出す。

——「ハ・ミルが、ラ・シュガルの進行を受けました！大精霊の反応アリとこのですー！」——

——「四大達、解放されたの？」

「いや、それだったら、私に分かる」——

「…………ミラの感知しない、おれたちの知らない大精霊がいるってことかい？」

「ご明察。それが、可能性として一番高い」

「…………考えたくないなあ…………」

そこまで言って、ホームズはヨルを不思議そうに見る。

「そこまで辿り着いているのに、どうして君はそんな回りくどい事言ってるんだい？ヨルは、少し躊躇ってから話す。」

「……………考えてもみろ。精霊を殺す道具だぞ、クルスニクの槍は。」

そんなものを使う奴と大精霊がどうして協力する」

「……………ま、妙な話ではあるね、確かに」

「それともう一つ」

「？」

「……………あり得ないんだよ、この大精霊がここにいることが」

ヨルの言葉にホームズは、首を傾げる。

そんなホームズに構わず、ヨルは、言葉を続ける。

「俺が殺したんだからな」

「なるほど」

ホームズは、そう言つて納得しかけるが、直ぐに首を傾げる。

「待った。大精霊は、転生する筈だろう？」

「だったら、君が殺した大精霊とやらももう代わりが居るはずだ」

ホームズの指摘にヨルは、ゆっくりと首を振る。

「……その考え方は、微妙に違う。」

精霊が死んでも確かに代わりのものが出てくる。

とはいえ、そいつは死んだ奴と同じではないんだ」

ホームズは、顎に手を当てて、今のヨルの言葉の意味を考える。

「つまり、ミラが死んで、代わりのマクスウエルが現れても、それがミラという事にはならないんだね」

「そういう事だ」

ヨルは、静かに頷く。

そして、ヨルは、最大の疑問を口にする。

「だと言ふのにだ……今回感じた気配は、そいつと同じだった……どうも妙でな」

ホームズは、ヨルの疑問を聞き、暫く考え込むと指を二本出す。

「考えられるのは、二つ」

そう言った後、直ぐに指を一本にする。

「二つは、君のその感じた気配というのが、そもそも勘違い。何せ、二千年以上も前のことだろうか？」

「まあな」

あまり自信がないのだろう。

ヨルは、否定もせずあっさり頷いた。

そして、ホームズはもう一本の指を立てる。

「そして、もう一つが君の知っている大精霊が何らかの原因により蘇ったということ」

「待て待て、そんな事があり得るのか？」

ヨルは、ホームズを止める。

「人間如きが、精霊を……大精霊を支配し、おまけに蘇らせているだと？」

頭を抱えヨルは、ホームズを見る。

「本気で言っているのか？」

「可能性の話だよ」

ホームズは、そう言って肩をすくめる。

「まあ、とはいえだ……個人的には、これが近い気がする」

「阿保言え、俺の勘違いの方がまだあり得るぞ」

ヨルの言葉にホームズは、真剣な顔で言う。

「俺は君の事をそこまで過少評価するつもりはないよ」

ホームズのきつぱりした物言いにヨルは、思わず面食らう。

そんなヨルに構わずホームズは、更に言葉を続ける。

「どうも情報が少ない……そのくせ妙な事が多すぎる……厄介だね」

「……だな。気をつけろ、後手に回っている時は、特にな」

「分かっているさ」

ホームズは、そう言って更に走った。



「誰だ貴様ら！」

王宮を出ると直ぐにラ・シユガル兵が武器を構えて駆け寄ってくる。

「おっと……まずい……」

アルヴィンは、そう言つて少し引く。

ローエンがエリーゼを庇うように前に出る。

兵士の緊張は、溶けることなく武器を更に突きつける。

「おい待て」

そんな中で一人の兵士が気付く。

「もしや……貴方、イルベルト殿ではないですか？」

「ええ、そうです……」

突然の事にローエンは、少したじろぐ。

「ふーむ……ローエンつてやっぱり有名人だねえ……」

「お前とは大違いだな」

「どうして、そういう事を言うんだい……」

ホームズとヨルがそんな会話をしていると

橋の向こうから兵士が走ってくる。

「伝令だ！通してくれ！」

そのあまりに切羽詰まった様子にホームズは、思わず道を開ける。

「どうした？」

「ア・ジュール軍の進攻だ！」

「敵兵力およそ五万！」

「どっ!?」

思わず息を呑みホームズはレイアと顔を見合わせる。

周りも似たような感じだ。

ジュードは、静かに顔を俯ける。

「戦争が……始まった……」

ジュードは、嘸みしめるようにそう呟いた。

「ご、五万の大軍?! 東方^{サマンガン}辺境か?」

ジュードの呟きをよそに兵士が更に尋ねる。

「違う! イル・ファン北方

ファイザバード沼野だ」

「はあ?!」

隣で聞いていたホームズは、思わず声を上げる。

その声に兵士は、驚いたように肩をびくんと竦める。

「バカな！彼の地をどの様に攻略するつもりですか?!

霊勢は、変化していないはずでは?」

「イ、イルベルト殿……」

伝令の兵は、ローエンに少し驚いた後、報告を続ける。

「ア・ジュール軍がどの様に進攻しているかは、未だ不明です」

ジュールは、考え込む様に口を開く。

「大丈夫なの？兵力は、ガンダラ要塞と海上に集中してるんでしょ?」

「今から兵を移動させて間に合うかどうか……」

状況は、ラ・シユガル軍にとって大変厳しい。

ローエンは、思わず顔を顰める。

「ご安心ください。ジランド参謀副長が敵の攻撃を予期し、すでに新兵器を移送中
です」

そんなローエンに伝令兵は、心配無用とばかりに明るく言う。

しかし、伝令兵に思惑とは反対に一同は、顔を顰める。

「やはり……」

ミラは腕を組んで考え込む。

「……ジランドつてのが、もしかしてきつきのあのおかつぱ頭かい？」
「そうだ」

ホームズは、思わず舌打ちをする。

「あなた、この伝令は誰からの命令ですか？」

「ジランド参謀副長ですが……それが何か？」

ローエンの質問に意図がわからず兵士は、困惑する。

ローエンは、その返答を聞くと暫く考え込む。

「いえ、ありがとう」

「はっ」

ローエンのお礼に兵士は、敬礼で返すとそのままオルダ宮の中へと消えていった。

「何か、裏がありそうだな」

ミラは組んでいた腕を解いてそう言う。

「抜けられない筈のない、ファイザバード沼野へのア・ジュール軍の進攻、突然の精霊術に襲われて死んだナハティガル王、そして、消えた槍」

ローズは、指を一本ずつ立てて起こった出来事を口に出し整理する。

「その精霊術の所に、大精霊のワードを足しておきたまえ」

ホームズは、ローズにそう伝える。

「大精霊!？」

ローズは、ホームズからの突然の報告に更に驚く。

「なにそれ! どういう事よ!？」

驚いているのは、どうやらローズだけではないようで他の面子も似たようなものだ。しかし、勿論例外もいる。

「やはり……気付いていたか、ヨル」

「当然だ」

ヨルは、そう言つてミラに目を向ける。

「俺を誰だと思つてる」

「……そうだったな……お前は心当たりあるか? これをやつた大精霊に」

ミラの質問にヨルは、頷く。しかし、顔は渋いままだ。

「あるには、あるんだが……ホームズにも言つたが色々ありえないんだ」

ヨルは、ホームズにそう目配せをする。

いくらホームズが信じてくれても自分自身が信じられなければ、意味がない。

「……とりあえず、確証を持てるまでは話せん。いたずらに場をかき乱しても仕方ないだろ」

「……分かつた」

ヨルの言葉にミラは、そう返事をする。

「とりあえずファイザバード沼野に急ぎましよう」

ローエンの言葉に一同が頷き歩き出そうとしたところをホームズが止める。

「ああ、そうだ。その前にちよつとホテルによつてもらつていいかい？

荷物取りに行きたいし」

ホームズの言葉にジュードがホームズの腕を見る。

「だったら、次いでにホームズの腕を治療しようか。

本当は、しない方がいいんだけど……そうも言つてられないし……」

「サンキュ」

ミラは少し顎に手を当て考えてから口を開く。

「ふむ、ならば先にそちらの方に行こう」

「助かるよ」

そう言つてホームズは、左手をポケットに入れて先頭をきつて歩いて行つた。

「ミラ？」

じいつとそんなホームズを見ているミラを不思議に思ったローズがミラの名前を呼ぶ。

「あ、ああ……行こう」

ミラは、少し驚いたようだったが、直ぐにそう言つて歩き始めた。暫くするとミラが口を開いた。

「ローズ、ホームズの事どう思う？」

「えっ!？」

突然の質問にローズは、顔を赤くしながら、しどろもどろになる。

「え、いや、その、べ、別に何とも思つてないわ!」

「そうか」

顔を真っ赤にしているローズを放置して、ミラはそう答え、顎に手を当てて考える。

(何か、見落としている……………あの時の、光景に違和感を覚えたのは確かなのだが……………)

残念ながら、それが何なのかまでは分からない。

「まあいい。まずはクルスニクの槍だ。行くぞ、ローズ」
考えても答えは出ないと考えたのだろう。

顎から手を話すと再び前を向いて歩き始めた。

「え？あ、うん」

赤くなった顔を元に戻すとローズは、ミラの後を追った。

Gift!!

裁判!

「えーつと、なにこれ」

目を開いたホームズの一言はまずそれだった。

見回せど見回せど、辺りは真っ暗。

光なんてどこにもない。

そう眩いた瞬間、光が目の前を照らす。

そこに居たのは、

「ミラフ?」

ミラだった。

なんだか、黒いマントのような様な服を着ている。

「なにその格好?」

「被告人黙れ」

「被告人?! つーか、黙れつつた?!」

ホームズは、驚いて辺りを見回す。

そして、明かりが照らされていることによく気づいた。光に照らされたそこは、法廷だった。

「なにこれ？」

「被告人、黙れと言ったはずだ」

「すげー圧迫感あるんだけど……」

ミラの目力込みの言葉にホームズは、思わず頬が引きつる。

「静かになつたな、それでは検察側、奴の罪状を」

「はい」

そう言つて立ち上がったのは、レイアだった。

「いや、待つて待つて……」

「それでは、読み上げます！」

元気いっぱいにそう言つてレイアは、読み上げる。

「えーつと、罪状は……」

レイアは、読み上げようとする。

しかし、時間ばかり流れて行き、全くもって進みそうにない。

「ジュード、何書いてあるかよくわからないよ」

ついにジュードに助けを求めた。

「いや、分からなくてもいいから読めばいいんだよ」

「いい訳ないだろう!!」

裁判長! 検察の交代をお願いします!!」

「被告人、貴様の要求を却下する」

「貴様とか言ってるんだけど!! 君、本当に裁判長?」

ホームズの言葉を無視してミラは、傍聴席にいるジュードを呼ぶ。

「ジュード、取り敢えず来い。」

要約して読んでやるといい」

「分かった」

そう言つて、ジュードは、傍聴席から出てくる。

「……つーか、傍聴席まであるんだ……なにこれ?」

ホームズは、げんなりしながら二人が罪状を要約している作業を眺める。

時間が過ぎること、二十分。

「読み上げます!」

「元気だなあ……」

「被告人、ホームズ・ヴォルマーノは……」

そこで、言葉を切る。

「致命的にダメである」

「異議ありいっ!!」

「被告人の異議を消去する」

「せめて却下にしてよ!

「つーか、二十分かけて要約した文章がたったの一行って、どういう事?!」

「それぐらい、ホームズの性格は、完結なんだよ」

「字違う!! 終わらせんな!!」

「正しくは、簡潔である。」

「なんか、ホームズのいいところが色々書いてあつて邪魔だったから消していったん

「だけど」

「消さないでおくれよ!!」

「なんで消しちゃうの?!」

「いや、だってそれだと趣旨がづれるし……」

「趣旨で何?!」

「それでは、検察側説明を」

「はい!」

「元氣だなあ………」

こうしてホームズの罪状が読み上げられる。

「被告人、ホームズ・ヴォルマーノは、主人公にあつてはならない……」

「レイア。ホームズは、主人公じゃないよ」

「……あ、そつか。えーつと、色々と行為が目につく、これでいい?」

「いいと思うよ」

「よくないよ、おれが何したって言うんだい？」

ホームズの言葉にミラ裁判長が、木槌を強く叩く。

「被告人、うるさい」

「はい……」

ホームズは、そう言つて静かになる。

「まず、コーヒーが飲めない」

「は？」

「船酔いをする」

「ちよつと待つて」

「それから、モテない」

「待つて」

「子供」

「いや、あの」

「基本胡散臭い」

「……」

「それから……」

「ストーツプ!!」

ホームズは、全力で叫ぶ。

張り上げた声にレイアとジュードは、驚いたような顔をする。

「タダの悪口じゃないか!!」

「どういふことだい!!」

「つーか、さつきから思ってたけど、何なんだこれは!!! どうしてこんな事をやってるん

だい!？」

「何って、貴様を裁いているのだ、ホームズ」

「はあ?!」

ミラはホームズの顔を見ると面倒臭そうにため息をつく、レイアを見る。

「レイア、説明を」

「はい」

そう言つて、レイアは、見覚えのあるメモ用紙を引つ張り出す。

「ええーつと、ホームズの評価なんだけどね、感想から抜粋させてもらうんだけど

……」

「感想ってなに?」

「ええーつと、ホームズの事を色々評価してくれる人もいるんだよ」

「それで?」

レイアは、言いづらそうに目をそらす。

「それがね、うん、ちよつと的を射ているていうか、裁いた方がいいかもつていうか……何ていうかね、まあ、読むね」

そう言つてレイアは、メモ用紙に書いてあることを読み上げる。

「ホームズは、個人的には好きだつて」

「……………」

「分かつてるとは思うけど、これつて、私は、好きだつて事だよ。

他の人からは、嫌われる可能性が高い」

ジュードの丁寧な説明が入る。

「次は、エリーゼより子供」

「どういう事だい?」

ホームズは、不思議そうに首をひねる。

「まんまの意味だよ」

ジュードは、半眼で返す。

「後はね……………というか、これが決定的なんだけど、『オリキャラだけど、テイルズの中では、一位二位を争うダメキャラですな』だつて」

レイアの憐れみの目線にホームズは、いたたまれなくなつて指を突き合せる。

「いや、でもさ、ほら、ダメな子ほど愛らしいって……」

「因みにその人にとつてのダメキャラって、長髪ルークと自分に自信がないルカだつて」

そう言うと、レイアは、バンつと机を叩く。

「分かる!?これ相当だよ!長髪ルークなんて、基本的にネタとして使われてて、笑いを誘うけど、プレイしてみると、笑えないくらい最悪だからね!」

ルカだって、自分に自信がない頃なんて見ててイライラするんだよ、殆どかまってるちゃんに近いし!

というか、ヒロインと兄貴ボジの子にも言われるからね!」

「ちよ、ちよつと、レイアさん?だれか乗り移ってない?」

「そんなのと並べられるって……ホームズ相当だよ!!分かってる??」

ホームズは、迫力と筋の通った説明にグウの音も出ない。

「取り敢えず、以上です」

「ふむ、検察側の話だけでもいいんだが、それでは裁判ではないのな」

そう言ってミラ裁判長は、木槌をカンカンと二回叩く。

「弁護人前に」

そう言って、ホームズの右隣に光が当てられる。

光に照らされた弁護士、それは……

「エリーゼ・ルタスです」

『ティポだよー』

「チェンジ!!チェンジお願いしまーす!!」

ホームズは、直ぐに声を上げた。

そんなホームズにエリーゼは、頬を膨らませる。

「どういう意味……ですか?」

「こっちのセリフだよ!」

「つーか、よく引き受けたね」

基本的にホームズは、エリーゼに脅されたり、色々言われたりと碌な目にあつていない。
い。

因みに言うなら、ホームズ自身も碌な目に合わせていない。

「じゃんけんで負けたんです」

「思ったより理由が酷い」

ホームズは、先ほどから頬が引きつったままだ。

「弁護士、弁護を」

ミラ裁判長に促され、エリーゼは罪状を読み上げる。

「えーつと、ホームズにもそれなりにいいところがあり……ます?」

早速疑問形だった。

そんな不安の中、エリーゼが紙を読み上げる。

「高い目標がある」

『モテたいんだよねー!』

「少年の心を忘れていない」

『精神年齢が低いぞー!!』

「甘いものが好き」

『コーヒーをブラックで飲めないー!!』

「嘘をつかない」

『本当のことと言わないぞー!!』

「自分の足で歩いていく」

『乗り物酔いー!!』

「二股をかけない」

『そもそも、そんな相手がいないー!だって、モテないもんねー』
エリーゼとティポは、そう言っただけで紙をしまし。

静まり返る法廷で、エリーゼは、締め言葉を告げる。

「以上です。ホームズには、こんなにいいところがあるんですよ」

エリーゼは、満面の笑み（棒読み）で言い切った。

「君、確信犯だろう!!最後にティポが要らない事を色々入れるもんで最悪な事になってるよ!」

ホームズのツツコミにエリーゼがしらっとした目を向ける。

「頑張つて良いところを探ただけでも褒めて欲しいくらい……です」

エリーゼの言葉に、レイアがうんうんと頷いている。

そして、レイアの隣にいるジュードが口を開く。

「………というか、裏切ったよねホームズ」

ジュードの一言にホームズは、ぎしりと固まる。

こればかりは、言い訳のしようがない。

「私は、腹を蹴られたわ」

ローズがいつの間にか、ホームズの隣にいた。

「ああ、そう言えばそうでしたね」

ローズと同じくいつの間にかホームズの隣に来たローエンも納得する。

そして、傍聴席から手が上がる。

手袋をした手、アルヴェインだ。

「出会い頭じゃ俺と、ミラと優等生とお姫様は、戦ってるぜ」

出てくる出てくる、ホームズの罪状。

流石にホームズも焦る。

しかもどれこれも言い訳のしようがない。

ホームズは、冷や汗を流す。

「べ、弁護士、弁護を……」

そう言つて弁護士席を見るが、そこにはエリーゼがいなかった。

代わりに「おやすみなさい」の立て札。

「裁判長!!おれの弁護士がいないのですが!!」

「ああ。被告人の良いところを探そうと頑張つて昨日寝ていないんだ。大目に見てやってくれ」

「おれのいいところつて、そこまですらないとないのかい!？」

「まあ、安心しろ。代わりを呼んである」

ミラ裁判長が言うのと、弁護士席に黒猫、ヨルがポンと現れた。

ホームズは、その姿を見た瞬間血の気が一気に引くのを感じた。

「チェンジ!チェンジお願いします!!」

「つーか、さつきから何でおれの弁護士マトモなやつが来ないんだい!？」

「被告人、うざい」

「そんな言い方ある?!」

心底鬱陶しそうにミラ裁判長をホームズに言うのとヨルの方を見る。

「弁護士? 弁護士にやん? 異議はあるか?」

ミラ裁判長の言葉にヨルは尻尾を上げる。

異議があるようだ。

そう、ヨルに異議があるのだ。

ホームズは、少しヨルの事を見直す……………

「にやんでも人でもない」

「そこじゃないだろう?!」

答だった。

「分かつてはいたけど、弁護しておくれよ!!」

ヨルは、そんなホームズを一瞥すると、それはそれは、底意地の悪い笑みを浮かべ、口を開いた。

「異議はない。適当に罰を与えとけ」

「こんの、クソ猫おーおー!!」

命のかかかっていない場所で、ヨルが助けしてくれる訳がなかった。

「判決を言い渡す」

ホームズの叫びも虚しくミラ裁判長は、木槌を叩く。

「被告人ホームズ・ヴォルマーノは、色々ダメなので……」

「なに?!色々ダメって!!」

「よって、エスプレッソの刑に処す」

「なんだって?」

ホームズは、首を傾げる。

そんなホームズの前に、普通のコーヒーカップに並々と注がれたコーヒーが出された。

「これは？」

「エスプレッソだ」

「いや、それは知ってる。知ってるんだけど、おれの知ってるエスプレッソと大分量が違うんだけど……」

コーヒーの種類のエスプレッソ。

エスプレッソは、コース料理の最後に小さめなカップに入れられ、出されることがある。

勿論喫茶店でも飲める。

特徴としては、とても苦いこと。

調子に乗って飲むとかなりの苦さに驚く羽目になる。

正しい飲み方は、砂糖を大量に入れ、そのコーヒー風味の砂糖を食べるように飲むというものである。

「ミラ、一応聞いておくけど、砂糖は？」

「入れるわけがないだろ」

「……これどうやって作ったの？」

「幾つか、一般的な量のエスプレッソを作りそれをこのカップに入れた」
つまり濃度は、全く変わらない。

最高濃度の状態だ。

コーヒーのブラックが飲めないホームズにこれ以上の罰はない。

「……………」

冷や汗が止まらない。

無言で逃げようとするが、周りにいたローエン、ローズ、ジュード、レイア、アルヴェイン、ヨルに捕まり、拘束される。

ミラ裁判長は、裁判長席から下りると、コーヒーカップを持つ。

「さあ、飲め」

「わあい、イケメンボイス」

ホームズは、げんなり言うがそんなこと関係なく、ひたすらミラは、エスプレッソを勧める、いや、進める。

無情に目の前に迫り来るエスプレッソにホームズは、涙が出そうになる。

「エ……エ……エ……エ」

ホームズは、ゴクリと唾を飲む。

「エスプレッソオオオオオオオオ!!!」



「エスプレッソオオオオオオオ!!」

ホームズは、叫びながら起きた。

「ゆ、ゆめ……か」

「いや、なんの夢みてたの?」

一緒に部屋にいたジュードは、パタンと読んでいた本当を閉じて尋ねる。

「ほつとけ、どうせ下らん夢だ」

ヨルは、寝ているところを起こされて不機嫌そうにジュードに言う。

「エスプレッソを飲まされる夢」

「……それだけ? なんか、チエンジとか言ってたけど」

「…………色々だよ」

悲しそうに言うホームズにジュードは、何だかそれ以上は、言えなかった。

「悪夢でも見てたの?」

「悪夢というか、なんか色々疲れる夢だった」

「……そう。まあ、よくわかんないけど、夢のことだから、そんなに気にしなくていいんじゃない?」

「……」

ジュードの言葉にホームズは、思わず泣きそうになった。

そんな話を話していると、がちやりとホームズ達の部屋の扉が開かれる。

入ってきたのは、レイアとエリーゼだ。

二人とも眠そうに目をこすりながら入ってきた。

「……なに？　なんか、『エスプレッソオオオオオオオ!!』とか聞こえたけど、なんかの刑でエスプレッソでも飲まされる夢でも見たの？」

「……凄いね、見てきたように」

ホームズは、頬の引きつりが止まらない。

よりも寄って今は、会いたくない検察官と、弁護士がやってきた。

ホームズは、少し考え込むと、エリーゼに質問する。

「あのさ、おれのいいところってどんなところかな？」

「えっ？」

エリーゼは、その難しい質問に眠気がすっかり冷めたようだった。

そして、目をそらして真剣に考え込む。

やや間があつて一言漏らす。

「……一晩もらつていいですか？　寝ないで考えるので」

「ああ、うん。やっぱ今のなしで。

ゆっくり寝て、お休み」

そう言つて首を傾げているレイアとエリーゼを部屋から追い出した。

「正夢だった……」

ホームズは、そう言って枕を濡らしながらも一度眠りについた。

「エリーゼ、なんかあるでしょ、ホームズのいいところ」

『まあねー』

ティポがふよふよと浮いて答える。

「言つてあげなよ。きつとホームズも喜ぶよ」

レイアの優しい言葉にエリーゼは、心底嫌そうな顔をする。

「それがやなんです」

『絶対、調子乗るもんねー！』

「……だね」

レイアは、ハハハと苦笑いしてもう一度眠りについた。

クルスニクの槍

一分一時間の思い

「よし……終わったよ」

「おお、さすが、サンキュー」

治療をして貰ったホームズは、そう言ってお礼を言うと言った治療の終わった両腕を不思議そうに見る。

「……………あの、一応聞くけど……………なんで包帯？」

ジュードは、包帯をしまいながらホームズの質問に答える。

「念のため。本当は、治療はしない方がいいんだけど、そうも言ってもらえないからやっただよ」

「えーつと……………どういう事だい？」

ジュードの言葉の意図が分からず、ホームズは、首を捻る。

「簡潔言うと、今から二時間、両腕とも絶対安静にしてね」

「は？」

ホームズがぼかんとしているとジュードは、更に説明を続ける。

「別に日常生活を送るぶんなら、別にどうってことないんだけど……重いものを持ちたり、攻撃をガードしたり、いつものように相手を掴みかかるとか、そういう事はしないでね」

これから戦場に行くというのにとんでもない制約が付けられてしまった。

「……………マジ？」

「マジ」

そう言つてジュードは、包帯を仕舞う。

ジュードの容赦のない言葉にホームズは、ため息を吐く。

治療して貰えたのは助かるのだ。

下手すればもっと治るのに時間を要したのにだ。

その点について言えば喜ぶべきなのだろう。

ホームズは、包帯の巻かれた腕を忌々しそうに見ている。

「とはいえ、困ったなあ……二時間なんて……だいたい、そんなの正確に測ってられないだろう?」

「そうでもないわよ」

ホームズがそう言うのと扉が開き、ローズとレイアが入ってきた。

そしてそれに続くようにアルヴィンとエリーゼが入ってきた。

ローズは、部屋に入ると金色の懐中時計を投げる。

ホームズは、慌ててキャッチする。

そして、それを不思議そうに見る。

「なんだいこれ?」

「時計」

ローズは、即答する。

「いや、それは見りゃ分かるけど……」

ホームズは、頬を引きつらせながら言う。

「髪留めのお礼よ。それでぴったり、二時間測りなさい」

ローズは、何てことなさそうに言う。

懐中時計は、チクタクと無機質に時間を刻んでいる。

ホームズは、汗を一筋流しながら見つめる。

「……いくらしたんだい？これ」

「ワゴンセールで550ガルド」

「……成る程」

ホームズは、そう言って懐中時計を眺める。

「なら、相当な掘り出し物だね。」

これ、普通に買ったらゼロがもう一つ着くよ」

ホームズは、そう言いながらポケットの中に仕舞う。

「流石。腐っても行商人ね」

「別に腐ってないよ」

「ものの例えよ」

「いや、分かってはいるけどね……」

ホームズは、ため息を吐く。

そして、それを遠巻きに見るレイアとアルヴィン。

「（流石だね、ホームズ）」

「ああ、本当にゼロがもう一つ付いてたからな」

二人は小声でそんな事を話しながら、ホームズがローズにプレゼントを買った時の事を思い出す。

ホームズもあの時値段を伏せてプレゼントをあげたのだ。

「二人して考えることは、一緒だね」

「(本当、似た者同士だよ)」

レイアとアルヴィンは、どちらとも無くため息を吐いた。

そんな高価な物を手に入れたとは、知らずホームズは、カバンを背負おうとする。

「ホームズ、話聞いてた?」

ジュードは、半眼でそんなホームズを睨む。

「え?これもダメなのかい?」

「当然。絶対安静だから」

そう言つてジュードが代わりにカバンを背負う。

ズシつとした感覚が背中に来る。

「前も思つたけどさ……何も入つてないのに……何でこんなに重いのか?」

ジュードは、引きつらせながらホームズに尋ねる。

ホームズは、キョトンとした顔をしながらさも当たり前のように言う。

「え？だって、大切な商品が入るカバンだもの。丈夫じゃないと」

「ああ、そうか……言われてみればそうだね」

ホームズにしては、珍しくまともな言葉にジュードは、納得する。

「……何か今失礼なことを考えただろうか？」

「まさか」

ジュードは、少しギクリとしながらそう返事をする。

ミラは、それを見届けると立ち上がる。

「よし。準備は、出来たな」

ホームズ達はこくりと頷く。

「さて、では行くでしょう」

皆は立ち上がり、戦場へと駆け出した。



「……地面がぐちゃぐちゃしていない、湿原つてないかなあ？」

ホームズは、そんな事を言いながらアルカンド湿原を走っていた。

このアルカンド湿原を行けば直ぐに、ファイザバード沼野だ。

足に泥が付き、少し鬱陶しそうだ。

「んなものあるわけないでしょ」

「どうでもいいけど、泥を飛ばさないでください」

そんなホームズにローズとエリーゼは、口々に言う。

先程から足に着いた泥を払う時に泥がエリーゼに飛んでいるのだ。

『女の子に泥を飛ばすなんてサイテーだぞー!』

ティポの言葉にホームズは、少し決まり悪そうだ。

「悪かったよ」

そう言つてホームズは時計に目を移す。

「只今、三十分経過……先は長いなあ……」

「ハアとため息を吐くホームズをレイアは、半眼で見る。

「さつきから三分置きに言ってるんだけど……止めない？」

「仕方ないだろう……気になってしょうがないんだから」

「……なんか、学校の休みが待ち遠しい子供みたいだね」

「ジュードも苦笑いをしながら答える。

「少しは、精神年齢を上げたらどうだ？」

「へいへい、流石二千年以上生きてる年寄りが言うとう違うわ」

「ホームズは、皮肉っぽく吐き捨てる」と時計をポケットにしまい、ジュードの方を見る。

「そーいやあ、学校の休みで思い出したけど……ジュード、君、学校に顔出さなくて良かったのかい？」

「ああ、うん。ほら、僕、指名手配犯だから……」

「ああ、言われてみればそうだったねえ」

「そうホームズは、ジュード達の情報をそこから仕入れたのだ。

「妙な落書きの様な顔を思い出しながらホームズは、歩みを進める。

「学校、どうだった？別に気の合わない奴だけって事はないだろう？」

「まあ、普通に勉強して、仲間たちと話して、なんて事のない日々を送ってたよ」

「そのなんて事のない日々がいずれ大事な宝物になるんですよ」

ローエンは、そう笑ってジュードに言う。

「そうかもね」

「ねえ、可愛い女の子とかいた？」

そんな和やかな空気を読まないホームズがジュードに尋ねる。

「は？」

思わずジュードは、間拔けな声が出てしまった。

そんなジュードに構わず、ホームズは言葉を続ける。

「学校！青春！とききたら、やっぱり恋が欲しいよね」

「勝手に自己完結しないで、ホームズ。ないから、そんな事」

「ええー……青春真っ盛りの少年がそんなつまらない事を言うなよ。ね？ローエン

先生」

「ふふふ、そうですね」

「ローエンまで……」

「そういうホームズは、どうだったんですか？」

二人にからかわれて、可哀想なジュードに助け船を出すかのようにエリーゼが口を開く。

「いや、そもそも、おれ学校行ってないし……行商人だぜ、おれ」
「ああ、そうでしたね……」

エリーゼは、納得したように頷く。

「行ってみたいとは、思わないの？」

側で聞いていたローズがホームズに尋ねる。

「うーん……ジュード君の話を聞いてたら、なんか興味が出たね」

ホームズは、ふふふと面白そうに笑う。

若干胡散臭いのは、ご愛嬌だ。

「私は、行ってみたい……です」

『僕もー!』

エリーゼは、ティポをぎゅつと抱きしめながらそう呟く。

「ヌイグルミ持つていくのは、無理だろ」

ヨルの言葉にエリーゼは、心底シヨック受けた顔をする。

ホームズは、ヨルの顔を驚掴みにする。

「大丈夫ですよ、エリーゼさん。」

ちゃんと学校の方にティポさんが大切な方だと言うことを話しますから」

シヨックを受けているエリーゼにローエンが優しく語りかける。

「本当ですか？」

「はい。このローエン・J・イルベルトにおまかせください。交渉術なんてお手の物です」

「……………だったら、早速任せてもいいかい？」

ホームズは、そう言って前方に指を指す。

そこには、ラ・シユガル軍の中継基地が見える。

ローエン以外にラ・シユガル軍に顔の利くものは、この面子の中にはいない。

「……………分かりました」

ローエンは、先程の優しい顔から険しい顔に切り替えると、ラ・シユガルの中継基地に先陣を切って歩みを進めた。

ホームズは、懐中時計をぱかん、と開く。

「只今、四十五分経過、か………長いねえ………」

ホームズは、静かに時計を閉じた。

大舞台の続きが再び始まろうとしていた。

身から出た結果

「なんだ、お前達。所属と名前は」

ミラ達は案の定、ラ・シユガル兵に進入を止められてしまった。

足を止めたミラとジユードに代わり、ローエンがすつと前が出る。

「私は、ローエン・J・イルベルト」

その名前に聞き覚えがある様で、兵達も戸惑う。

「え？『指揮者コンダクターイルベルト』殿？」

「こんな事態です。戦況を伺えませんか？」

「ハッ！では、こちらへ」

そう言つてミラ達は中継地へと通された。



「なんです？それ？」

ホームズは、不思議そうに机の上に広げられ、駒が乗っている光っている地図を見る。

「これは、リリアルオーブの反応を拾い戦況図を見るものです」

兵士の説明にホームズは、目を丸くする。

「へえ……そんな物がこの世にあるんだねえ……」

ローズも口にくそ出していないが、驚いているようだ。

「……あれ？これだけなんか違うね」

レイアは、そう言って一つ異彩を放っている駒を指差す。

「それは、参謀副長殿が勧めている戦略の部隊です。

四刃象アグリアの妨害を突破したようですね」

「(その妨害を突破したのって……)」

「(まあな)」

ホームズとヨルはコソコソと会話をする。

ミラは彼らに構わず眉をひそめる。

「ジランドの戦略だと？」

「ええ。一の鐘の後には、予定地点に至るはずです。

詳細は聞かされていませんが、戦局の流れを一気にこちらへ寄せる、切り札のようなものかどうか」

「切り札、ねえ……」

ホームズは、苦い顔をする。

何せ自分の腕がこんな様になった原因の一端だ。

間違いないかあの力は、切り札になり得る。

「作戦実行の際、予定到達地点へできるだけ部隊を集結させるように指示が出ています」

ローエンは、話を聞くと地図をいじり矢印を出す。

「ふむ、……この進路だと……」

矢印は、曲線を描き一つの地点を示す。

「予定到達地点はここですね」

「は、はい。流石ですね『指揮者』コンダクター」

褒められてもローエンの顔は晴れない。

「嫌な予感がしますね……」

顎髭を触りながらポツリと呟く。

「ああ」

ミラも頷く。

「クルスニクの槍を使うつもりだろうが、自軍に詳細を明かさないと理由が見えない」

「……クルスニクの槍は、ジランドという人が持つて行ったんでしようか……」

エリーゼがポツリとこぼす。

「状況から考えればそうだと思う……けど……」

エリーゼの言葉にジュードは、頷きミラを見る。

ミラは静かに頷く。

「クルスニクの槍を起動に必要な鍵は、私が奪い、イバルに託してある」

「だから、槍は使われる事はないって思ってたんだ」

ジュードが後を引き継ぐ。

「ですが、槍は持ち出され、使用準備が進められている。

それはつまり……」

「新たなカギが生み出されたのかもしれない」

ローエンとミラは推測をまとめる。

ホームズがそんな中、包帯だらけの手を挙げる。

「あのく、根本的な事を聞くんですけど……ファイザード沼野でどうやって動いてるんです？ 霊勢がめちゃくちゃで戦争どころじゃないと思うんですけど……」

微妙に場に合わない呑気な声で言うホームズにローズは、ため息を吐く。
兵も少し戸惑う。

「あ、はい。ア・ジュールで開発された増^{ブースター}霊極は、ご存知でしょうか？」

「ええ、まあ、おおよそ」

そう言つてホームズは、エリーゼの近くに浮いているティポを見る。

皆も同じ事を考えていたようだ。

『ううー。そんな見ないでよ恥ずかしい』

「ああはいはい、かわいいかわいい」

ホームズは、適当に手を振る。するとムツとしたティポがホームズの頭に齧り付く。

そんなホームズを見て兵士は、顔を引きつらせる。

「あの……大丈夫ですか？」

「あく別に大丈夫です。きつと手加減してくれるだろうって信じてますから」

「血が出てるんですが……」

ホームズの頭から垂れる赤い液体により一層頬を引きつらせる。

エリーゼは、ホームズを半眼で睨んでいる。

「エリーゼ!!」

「ホームズがいけないんです!!」

喧嘩を始めた二人にミラが咳払いを一つすると、ローズは、静かに頷き無言で拳骨をホームズだけに落とす。

突然脳天に現れた痛み思わず頭を押さえ、ローズを睨む。

「静かにしろ、ホームズ。話が聞こえん」

ローズを睨んでいるホームズにミラはピシヤリと言いつつ。

「何でおれだけ……」

ホームズは、そう言つてティポを引つ張る。

しかしとれる気配はなく、無情に伸びるだけだ。

「すみません。お話の続きをお願いしてもいいですか？」

ローズは、ホームズの前に立つとそう話を進める。

兵は、頬を引きつらせながら説明を続ける。

「敵はその増霊極ブースターでマナを増大させ自分達の周囲の霊勢を変化させています」

「マナで地の微精霊を大量に召喚し、地場ラウムに変えたのですか」

ローエンは、驚いている。

「なんと言う奇策……流石ウインガルといったところですね」

感嘆するローエン。

「ラ・シュガル軍は、どうやって抵抗しているんですか？」

「我々にも増^{ブリスター}靈極がありますから」

頭にティポをつけたままホームズは、素直に驚く。

ホームズが驚いてる間にローエンが口を開く。

「兵全員に配備し、小隊に一人靈勢を変化させるものを置いたのですね」
「は、はい。その通りです」

その言葉を聞くとティポは、ホームズの頭から口を離す。

『もしかして、僕らの出番ー？』

「いや、ここはローエンに任せよう。」

地の術に長けているものがやった方がいい」

ミラの一言にティポとエリーゼは、ガツクリと肩を落とす。

その様子を面白そうに笑っていたホームズは、ローズに殴られていた。

「時間がありません。ジランドを追いましょう」

ローエンがそう言って残ると、後の面子は、外に出た。



「エリーゼ、傷を治してくれないかい？」

頭から血を一筋流しながらホームズは、エリーゼを半眼で睨む。

「……………仕方ないです」

そう言つて精霊術をかける。

ホームズの傷はふさがり、流血も消えた。

「お礼くらい言つたら？」

隣で見ていたローズがそう言つと、ホームズは、ティポを指差す。

「はあ?!こいつが原因なんだよ」

「貴方が余計な事を言うからでしょ」

「じゃあ、何かい? 『きやく♡かゝわくいくいく♡』…………でも言えば良かったのかい?」

「いや、何も言わなきゃよかったのよ」

ホームズの女子の声真似に若干鳥肌を覚えながらローズは、いたつて冷静に返す。

達が悪い事に若干可愛かつた。

「ホームズは、一言も二言も多いんです」

「モテたかつたら、もう少し寡黙な方がいいかもね」

「流石、君が言うと言得力が違うぜ、元気っ子」

『それを止めろって言ってるんだよー!』

「まあ、それが出来りや苦労はないよな」

ヨルは肩で耳をピクリと動かしながら、どうでもよさそうに言う。

女子三人（＋ヌイグルミ十一匹）に責められ、思わずホームズもたじたじだ。

「そこまで、言わなくても……」

泣きそうな顔をしているホームズにレイアは、苦笑いをしながら口を開く。

「まあ、たまには手加減無しでいかないとね」

「君がおれに対して手加減したところをみたことないよ!!」

ホームズは、涙目でそう返した。

そんな事を話していると、ジュードとアルヴィンが話しているのが目に入る。

「ん？アレは……」

ホームズは、少し眉をひそめる。

腕を広げ肩をすくめている様は、何処か胡散臭い。

程々のところで切り上げるとホームズは、彼らの所まで歩いていく。

「なんの話をしてるんだい、アールヴィン?」

ホームズは、そう言っ肩を組む。

ニヤリと胡散臭い笑みを浮かべているホームズにジュードが説明する。

「その、また、アルヴィンが一人で行動してて……」

ホームズが呆れた顔で見る。

「君……」

「また、嘘つくんですか？」

エリーゼは、少し口調を強くして問い詰める。

「は？何を言ってるんだよ、エリーゼ」

アルヴィンは、サラッと言う。

『アルヴィン！白々しいぞー!!』

ティポもエリーゼに続く。

明らかに不信の目を向けられているアルヴィンは、ジュードに尋ねる。

「おたくも、おれのこと疑ってるの？」

「……………」

ジュードは、俯く。

「アルヴィンさん。さすがに今の状況で一人で行動されると疑わざるを得ませんよ」

ジュードに代わりローエンが厳しく問い詰める。

それに続くようにジュードも口を開いた。

「アルヴェイン。今は僕達から離れないでよ」

「本当だよ、約束だからね！」

レイアもそれに続き、幼馴染みコンビに押されアルヴェインは、苦笑いをしながら頭を搔く。

「はいはい」

「モテモテだねえ、アルヴェイン君」

「そりゃあ、おたくとは違うさ」

馬鹿にしたように言われホームズは、青筋を額に立てると、そのままチヨークスリーパーをかけようとする。

しかし、直ぐにローズの鉄拳がホームズに飛んでくる。

「ふぐおっ!!」

もろに画面にもらったホームズは、アルヴェインから離れ、後ろから倒れる。

「腕は安静に」

「……忠告どうも。涙が出るほど嬉しいよ」

顔に落ちる雨に混じって、ホームズの頬を一筋の涙がつつた。

そのあまりのクリティカルヒットにレイアは、引きつり笑いをする。

「あのさ、もう少し優しくしようよ……」

「馬鹿ホームズには、いい薬よ」

ローズは、ひらひらと手を振ってどうでも良さそうに返す。

「さて、ホームズ。残り何時間だ？」

いつの間にやらレイアの肩に逃げてきたヨルは、ホームズに尋ねる。

ホームズは、仰向けのまま時計をポケットから出す。

「……………只今、一時間経過……………残り一時間でーす……………」

ホームズは、懐中時計をぱかんと開き針の動きを確認する。
ヨルはそれを見ると今度はミラ達を見る。

「さて、足手まとい復活まで残り一時間……どうする?」

ヨルの問いにジュードは、一瞬言葉に詰まる。

「どうするもこうするもない」

ホームズは、懐中時計を閉じ、ポンチヨを翻し立ち上がる。

「ハンデぐらいで、足手まといになる程やわじやないよ、おれは」

先程までの情けなさが嘘の様に凜とした佇まいに空気もぴしりと張り詰める。

「……………いつも、そうしてればいいのに……………」

ローズは、ホームズから顔を背けながら小さく呟いた。

レイアは、横で聞いていたため息を吐く。

「なるほど……しかし、ホームズ、お前はここにいろ」

「は？」

ホームズから、間抜けな声が出た。

ミラの言葉に思わずホームズから力が抜ける。

ぴしりと張り詰めた空気は、一瞬で緩んだ。

「ええーつと……今なんて？」

「だから、ここにいろホームズ。幸い、ローエンの顔が利くから悪いようにはされないだろう」

「なんで、おれを置いていくんだい？」

訳がわからないという顔でミラを見る。

「お前は、どうせ腕を使うからだ」

ミラは、ホームズの両腕を指しピシヤリと言い放った。

「自分の身体を酷使し、ギリギリのところまで勝利を掴み取る……そんな事をしてるお前が、自分の腕を使わないなんて、まずない」

闘技場、ウインガル、ナハティガル、上げ出せばきりが無い。

そんな訳で、ホームズは足手まといとかそれ以前の問題として連れていけないのだ。

「……………」

反論のしようが無いのでホームズは、目をそらす。

それをミラは了承と取った。

「では、荷物は私たちが持っていく。お前は、そこで一時間大人しくしている」

「……………え？」

「後で合流しよう」

「いや、ちよ、ちよつと……………」

「安心して下さい、ちゃんと話は通しておきました」

「いや、じゃなくて……………」

「あと一時間経ったら、ラ・シユガル兵が^{ブースター}増霊極を持って一緒にホームズさんと行動し

てくれるそうですよ」

「え？いや、本当に置いてくの……………」

「では、行くぞ、みんな」

ミラの言葉にホームズを抜かして全員が力強く頷くとローエンが^{ブースター}増霊極を展開させ

る。

「では、また会おう」

ミラは、そう言ってローエン達を引き連れ颯爽と去って行った。
その堂々とした立ち去る様にホームズは、ポカンと立ち尽くし思わず見送ってしまった。

「ねえ、今の状況、一人でいると疑われるんだよね、確か」

「お前の場合は、連れてく方が信用出来ないんだろ」

ヨルは尻尾を振りながら、もうすっかり見えなくなった方向を見つめるホームズにそう返す。

「……………ハア」

ホームズは、ため息を一つ吐いて中継基地のテントの中に入っていった。

塞翁が猫

「……………ホームズ、ちゃんと待機してるかしら？」

「……………ローズ、それ、もう十回目」

チラチラと後ろを確認するローズにレイアは、呆れ顔でそう言う。

「心配なら戻る？」

レイアの言葉にローズは、顔を真っ赤にする。

「ばばばか言ってるんじゃないわよ！」

心配なんてするわけじゃないでしょ！あんな奴!!」

全力で否定するローズをレイアは、しらっとした目で見つめる。

「なによ！その目は!!」

「いや、通常運転だなんて思ってる」

「二人とも漫才してないで……」

ジュードは、呆れ顔で二人を止め、辺りを見回す。

「思ったより、視界が悪いね……敵が何処にいるか全然わからないよ」

「やっぱり、ホームズとヨルを連れてきた方が良かったんじゃないの？」

アルヴィンは、ジュードの言葉にそう言う。

確かに、ヨルの霊力野探知能力ゲイトがあれば、敵の大まかな位置ぐらい察知する事が出来る。

ローズは、腰にある刀の柄をトントンと二回叩く。

「……………ないものをねだっても仕方ないわ。」

「どうするの？迂回して安全なルートに行くの？」

「ううん、直線に駆け抜けようよ。それが一番早い」

『僕たち死んじやうかもねー』

不吉なことを言うティポに頬を引きつらせるローズとレイア。

「だ、だいじようだよ……………ジュードが言うんだから」

言葉とは裏腹に声が入るレイア。

「……………それにほら、私たち悪運強いし」

『一番悪運が強いホームズがいらないんだけどねー！』

「……………」

ローズは、自分の励ましを潰されてしまい、言葉につまる。

しかし、何とか絞り出す。

「ええーつと、ほら、私だっているし大丈夫よ。」

悪運はないけど、マーロウさん仕込みの剣術があるもん」

『声を震わせながら言ってもなー』

「……………」

今度こそ返す言葉がない。

「恐れるな」

そんな二人にミラがそう声をかける。

「今、最も恐れるべきは、人間と精霊の命が脅かされることだ」

「ミラ、かつこいい!!」

レイアは、につこりと笑い賞賛する。

「行こう、みんな」

ジュードの言葉に皆は頷き、走り出す。

そんな矢先にミラ達の前にア・ジュール軍が立ちふさがる。

「止まるな!!」

ミラの声を聞くが早いか、ローズは腰の両刀に手をかける。

「当たり前でしょっ!!」

ローズは、抜いた刀で兵士に斬りかかる。

鎧に当たり、ガチンという音になる。

「……だつたら!」

刀を持ったまま握り拳を合わせる。

「獅子戦哮・氷牙!!」

獅子をかたどった氷の鬨気が兵士を襲う。

雨が降っているため氷の獅子は、更に牙を剥く。

ア・ジュール兵は、倒される。

「もういっちょっ！」

そう言つてローズは、身体を捻るとその勢いのまま別の兵士に当てる。

「フレアボム!!」

「三散華!!」

ジュールもミラも応戦をする。

「流石!!」

ローズが褒める。

そんなローズを兵士が後ろから襲いかかる。

「ローズ!!」

エリーゼの声にローズは、刀を一本兵士に向ける。

「省略! フォトン!!」

光の球が弾け向かってきた兵士を吹き飛ばす。

「追撃、行くわよ」

そして、二刀を足下で交差させる。

「豪雨で来い! 聖なる光!」

しとしと雨が降る中、ローズは、詠唱を続ける。

「レイ!!」

雨に混じって光が兵士達に降り注ぐ。

「グアアアアアアアア!」

ローズの精霊術を喰らい、攻撃の手を緩める、ア・ジュール兵達。

(今が、チャンス!!)

ローズは、リアルオーブを光らせる。

「アルヴェイン!!」

「任せろ」

リアルオーブを光で繋ぐ。

二人は、刀と大剣を前方突き出し、突進し、そして交差する。

地面には、二人の軌跡のバツ印が刻まれている。

交差し終わった二人は地面を叩く。

「衝破十文字!!」

漢字の十をかたどった傷から衝撃波が発生し、兵士を襲う。

「続けていくわ!!」

ローズは、刀を再び足下で交差させる。

「貫け、氷の刃!!フリーズランサー!!」

衝破十文字により、中に浮いている兵士達に氷の矢が放たれる。

雨の中、放たれる氷の矢は更に威力を増し、兵士に襲いかかる。

そして、それを確認するとローズは、更に踏み込み、リリアルオーブをエリーゼと繋ぐ。

「お次は、エリーゼ!!」

『任せろー!』

二人は呼吸を合わせ、共鳴術技リリックアーツを発動させる。

「『ティポ・ザ・ビースト!!』」

獅子よりも更に大きなティポをかたどった紫色の闘気は兵士達を襲う。

「ふふん！どうよ、ティポ！わたしの実力！」

ローズは、ない胸を張って自慢する。

しかし、ティポはふよふよと浮かびながら答える。

『まだまだだねー』

「なっ!!」

ローズは、キツとエリーゼを睨む。

エリーゼは、半眼で返す。

「共鳴術技リリックアーツなので、ローズだけの力じゃないです」

ごもつともな意見にグウの音も出ない。

「わかったわよ、そんなに言うなら見せてあげるわ」

ローズはそう言うのとレイアとアルヴィンに顔を向ける。

「そんな訳で、レイア、アルヴィン！時間稼ぎ、任せた！」

そう言っつて刀を足下で十字に交差する。

「どんな訳だよ……」

「ホームズといい、ローズといい、エリーゼと真剣に張り合わないで欲しいな……」
レイアとアルヴィンはため息をついて、向かってくる敵に駆け出す。

「精霊達に命ずる……」

相変わらず上から目線のローズの詠唱が始まる。

アルヴィンは、大剣を振り抜き兵士を吹き飛ばす。

兵士の量は減らない。

「だったら……………」

アルヴィンは、剣と銃を合体させる。

「見せてやるよ」

そう言つて地面に合体させた件を刺す。

瞬間地面に青白い光の円陣が展開される。

「守護氷槍陣!!」

アルヴィンを中心とし氷の槍がア・ジュール兵を襲う。

「ま、ホームズだけじゃねーんだよ」

「凄いよ、アルヴィン君!」

「霊光よ、遙か彼方より現れ……………」

レイアは、そう言つて棍を構える。

そして、三連続の棍の攻撃。

「三散華……………」

普段ならここで終わりだ。

けれども、アルヴェインのせいで碧い目をした垂れ目の男が脳裏をよぎる。

レイアは、棍にもう一度力を込め、おまけにもう一撃くらわせる。

「……………追連!!」

合計で四つの攻撃が兵士を襲う。

四連撃を食らった兵士は、後ろに吹き飛ぶ。

しかし、兵士は減る気配がない。

それどころか、兵士はローズに向かって剣を持って飛びかかってきていた。

「ローズ!!」

「集束せよ。そして……………」

ローズは、詠唱をして防ぐ気配はない。

(なんで……………!?)

レイアは、疑問が脳裏をよぎる。

しかし、最初に言われた言葉を思い出し、直ぐに答えに至る。

『レイア！アルヴィン！時間稼ぎ任せた!!』

（本当に任せてるんだ、わたし達に!!）

「兔迅衝!!」

うさぎのような跳躍で棍と一体になり兵士を吹き飛ばす。

「……………全てをぶち抜き、全てを蹴散らせっ!!」

ローズは、目を見開く。

そして、刀を自分の目の前を真っ直ぐに指し示す。

「デイバインストリック!!」

ローズの詠唱と共に集束された光は大砲のように放たれた。

その光は、ローズ達の目の前の兵を全てを蹴散らして一直線に進んだ。

光が収まる頃にはア・ジュールの兵士は、数える程度しかいなかった。

「よくやった、ローズ！ みんな行くぞ！」

ミラの言葉にローズ達はア・ジュール兵士を抜けていく。

元氣よく走るローズをローエンは、不思議そうに見る。

「ローズさん、平気なのですか？」

「何が？」

ローズは、訳が分からないというふうに首を傾げる。

「あんなに、大技を連発して、大丈夫ですか？」

「ああ、平気よ」

ローズは、首を戻す。

「私、^{ゲート}靈力野がかなり大きい方なの」

そう言つてローエンは、ウインガルとの戦いを思い出す。

確かに、剣戟だけでなく散々技を出していた。

しかし、バテている様子はなかった。

そうローエンが納得しかけた瞬間にローズは、こける。

「ぶべえ!!」

何とも言えない表情でローズを見る面々。

ローズは、顔を赤くしてそらす。

「……………まあ、と、とりあえず、グミでも食べて、ね?」

レイアは、そう言つてグミを差し出す。

選んだグミは、オレンジグミ。

パイングミを選んでいない所を見ると、どうやらあながち見栄だけというわけでも無

さそうだ。

「にしても、ローズ。デイバインストリークが出来るなら、ナハティガルとの戦いで使つてくれれば良かったのに」

ジュードの言葉にローズは、頬を引きつらせる。

「いや、だって、ナハティガルの戦いでローエンがぶつ放すのを見るまで知らなかったもの……」

「ふー………ん？」

ジュードは、一瞬納得しかけて首を傾げる。

「待って……じゃあ、さっきのが」

「ええ、初披露よ」

自慢も謙遜もなく、なんて事のないように、それこそ、『明日のご飯はカレーだよ』ぐらいの軽い調子でローズは、返した。

そのあまりに自然な返しに一同の顔は引きつるばかりだ。

「おたくらは、揃いも揃って……」

アルヴェインは、ホームズの事を思い出す。

ホームズも出会って大して日数の立っていないアルヴェインと共鳴術技リンクアーツをやっていた。

「失敗するとか、考えなかったの？」

「いや、適当にマナを込めればどうにかなるかな？ って思ってたから……」

段々と自分を見る目が冷たくなっているのにローズは、気づいた。

つまり、適当な思いつきで適当にマナを込めた為、ローズは地味に消耗してしまった

のだ。

「ローズさん、ひと段落したら、私が精霊術を教えましょう」

ローエンは、呆れながらローズにそう告げた。

「ふむ。ローズには、それがいいな」

ミラも隣で聞いていてうんうんと頷くと前方を見る。

「……と、見えてきた、ラ・シュガル軍だ」

ミラ達はア・ジュールと言う敵を抜けようやく気が休まる……………筈だった。

「危ない!!」

ミラにラ・シュガル兵が襲いかかった。

間一髪のところ、ジュールが蹴り飛ばす。

「……なにをするんだ！僕たちは、敵じゃないよ！」

「ジランド参謀副長より、全軍に指令が下った」

ラ・シユガル兵は、そう言つて武器を再び構える。

一人、二人と段々と集まつていき、ジユード達の行く手を防ぐ。

『ローエン・J・イルベルトは、敵となつた、殺してでも排除せよ』とな

突然の宣告に、ジユード達は目を向く。

ローズの脳裏に腕に包帯を巻いた昔馴染みがよぎる。

彼は、今どこにいる。

いや、何処に置いてきた？

「——ヤバイっ!!」

ローズの顔から血の気が引いた。

善のために急げ

「何ですと……!?!」

ローエンは、驚いて目を向く。

「ラ・シユガル戦略要点の破壊など絶対にさせん!!」

驚いているローエンに構わず、ラ・シユガル兵が襲いかかってきた。

「くっ……結局、ラ・シユガル兵とも戦うのか……」

ジュードは、歯噛みをしながらか構え、向かい討とうとする。

しかし、ラ・シユガル兵は、ジュードではなく、ローズに襲いかかってきた。

「ローズ!!」

ローズは、ジュードの声で我に帰るとギリギリでかわそうとする。

「ぐっ!」

しかし、かわしきること叶わず腕をラ・シユガル兵の剣が刺さる。

「大丈夫!?ローズ?、今、治療を」

近寄ろうとするジュードをローズは手で制する。

「かすっただけよ。」

それに、それどころじゃないわ」

ぐるっと自分達を囲んでいるのは、味方の筈のラ・シユガル兵だ。

「ま、ラ・シユガルの兵器をぶち壊しに行くんだ。こうなって当然だろ？」

「そうね」

アルヴェインの言葉にローズは、苦笑いを浮かべた。

「ねえ、ミラ、ホームズは……」

「後にしろ、ローズ。」

今はこの場を切り抜けるのが専決だ」

そう言われローズは、周りを取り囲む兵達を見る。

ローズは、二刀をぎゅっと握りしめた。

「……………分かった」

そう言っつて刀を構える。

「要はとつとと突破すればいいのね」

ローズは、そう言うのと精霊術師に斬りかかる。

「ぐっ！」

一気に斬り伏せると振り向きざまに兵を薙ぎ倒す。

そして、直ぐに別の兵をターゲットにする。

「行くぞ、ローズに続け！」

ミラの声に続き、他の面子も敵兵を倒しにかかる。

ローズの一瞬にして無駄のない戦いぶりを見ていたレイアは、そうもならず。

「……………ローズって本当、ホームズが絡むと性格変わるよね」

「ですな」

エリーゼもコクリと頷く。

「よし！私達も行くぞー！」

レイアとエリーゼも駆け出す。

「援護しますー！」

そう言つて、エリーゼはティポを構える。

「ティポ戦哮!!」

ティポから、紫の球体が発射される。

それに兵士が押された瞬間に、レイアの棍が襲う。

「ローズ！ローエン！頼むぞー！」

ミラの言葉にローエンとローズはコクリと頷く。

「アルヴィンさん！ジュードさん！援護頼みます」

二人に指示を飛ばすと今度はローズに指示をする。

「この際、過程は問いません。

先程の精霊術を前方にお願いします」

「タイミングは？合わせるの？」

ローズは、ローエンに背中を預けながら尋ねる。

「その方が良いでしょう」

「でも、私の詠唱長いわよ」

心配そうに言うローズにローエンは、大丈夫と言う。

「私が合わせますから」

ローズは、それを聞くとふふふと笑う。

「指揮者が言うコンダクターと説得力が違うわね」

ローズもそう言ってて刀を足元で交差させ、詠唱を始める。

「精霊達に命ずる……」

「さて、ジュード君。いっちょやろうぜ」

アルヴィンは、そう言つて大剣を構える。

「うん、なんとかしよう！」

ジュードは、そう言つて拳を突き合せる。

「靈光よ。遙か彼方より現れ……」

ローズが詠唱を始めるとラ・シユガル兵がそれを止めようと群がってくる。

「こんのっ!!」

ジュードは、近づくと兵を右手を握りしめ武器が届くより速く殴り飛ばす。

そのジュードの後ろに兵士が槍を持って突撃を仕掛ける。

「おっとー！」

アルヴィンは、それを体の回転を加え大剣をカウンターの要領でぶつける。

その兵を倒したのは良かったが、ジュードを助けようとした為、代わりにローズ達から離れてしまった。

ラ・シュガル兵は、そんな二人に近づく。

「アルヴェイン!!」

「安心しろって……俺だって成長するんだぜ」

そう言って銃口を上空に向ける。

そして、未だにホームズに『ひどい不意打ち』と言われる技の名前を告げる。

「レインバレット!!」

打ち上がった弾丸は、上空で拡散し前のように降り注ぐ。

しかし、ローエンとローズには一切当たらない。

「なんで?」

「言ったら、優等生」

アルヴェインは、そう言って大剣を掴む手に力を入れ、弾丸の雨で怯んでいる兵士に大剣をお見舞いする。

「俺だつて成長するんだぜ』つてな？」

アルヴィンは、ニヤリと笑つてそう答えた。
ジュードもそれに吊られるように微笑む。

「集束せよ、そして……」

「虚空より出でし靈光よ……」

ローズの詠唱もいい感じになっている。

アルヴィンは、大剣を上空に向かって振り上げる。

「虎牙破斬!!」

そして最後に叩きつけられるラ・シユガル兵。

「掌底破!!」

掌から衝撃を放ち鎧の内部にまで響き渡る。

「全てをぶち抜き、全てを蹴散らせ!」

「万物を討ち払わん!」

二人の前に光が集束していく。

そして……

「「ダイバインストローク!!」」

二人から、光の大砲が放たれる。

その二つの光は、降り注ぐ雨を押し抜け、兵士達を吹き飛ばして進む。

ローズの精霊術は前方に、そして、ローエンの精霊術は、後方に向かって放たれた。

光の大砲が消えると、あんなにいた、ラ・シユガル兵は、ほとんどいなくなっていた。

「よし、今の内に進むぞ」

ミラの言葉にローズは、信じられないという顔をする。

「ま、待って、戻るんじゃないの?！」

しかし、既に走り出しているミラには届かない。

「ローズ、早く!!」

立ち尽くすローズをジュードが急かす。

ローズは、状況が飲み込めないまま、後を追うように走り出した。



「ミラ、ミラ、ミラってば!!」

敵兵のいない地点まで走っていると、ローズが後ろからミラを呼んでいた。

「何だ?」

ローズの言葉にミラはようやく足を止めて答える。

「何だじゃないわよ! 戻るんじゃないの?」

ローズは、顔を険しくさせる。

「何故だ?」

ミラの言葉にローズは、更に顔から血の気が引くのがわかる。

「何故って、ホームズよ!」

私たちがラ・シユガル兵に襲われているように、ホームズだって……」

ホームズとヨルもご多分に漏れず襲われているだろう。

「しかし、戻れば、クルスニクの槍を使われてしまう可能性が上がってしまう」

ミラの言っていることはどこまでも正しく、正論だ。

しかし、正論を必ずしも受け入れられるかといえればそんな事はありません。

現に、ローズは、納得出来ない。

拳を握りしめる。

「私には、使命を果たさねばならない。

戻ることは愚か、立ち止まることもゆるされない」

「……………だから、戻れない？」

ローズは、震える声で尋ねる。

ミラは、静かに頷く。

「……………冗談でしょ？ 貴方、自分が言っている言葉の意味がわかってるの？」

それは……………」

震える声でローズは、ゴクリと唾を飲む。

「ホームズの事を見捨てるって言っているのと同義語よ」

その言葉に、エリーゼとレイアは、息を飲む。

ローエンとアルヴィンは、現状がわかっているため渋い顔をする。
無理なのだ。

実際ホームズを助けに戻るなど。

そして、国の政に関わったことのあるローエンなら、更にその先の判断も下せる。

ホームズ一人の命とリーゼ・マクシアの人間と精霊の命。

天秤にかけることすら、おこがましい。

ジュードは、慌ててローズを止める。

「待つて、ローズ。そんな言い方ないよ！

ホームズの事を信じてあげようよ」

「耳障りのいい言葉で誤魔化さないでっ！

助けに戻らない……それを見捨てる、切り捨てるって言うのよ！」

ジュードの言葉をローズは、バツサリ切り捨てる。

ローズのその剣幕にジュードは、思わず後ずさる。

「なら、お前はホームズを助けに戻るか？」

ミラのそのセリフに覚えのあるエリーゼは、ティポをぎゅつと抱きしめる。

「好きにすればいい。」

だとしたら、お前とはここでお別れだ」
ローズは、目を向いて驚く。

思わず、エリーゼの方を見てしまった。
そして思い出す。

あの時、ティポから何かを抜き取られた時、味方できなかつた自分を。

奇しくも今度は自分が同じ立場になつてしまった。

思わず、ハハハッと乾いた笑いが漏れる。

「……………無理に決まつてるじゃない。増^{ブリスター}霊極もないのよ」

力無くいつて俯く。

そうだ。

ローズがここにいるのは、故郷の為にもクルスニクの槍を使わせないためだ。

もちろん、ホームズの事がないとは言わないが。

とはいえ、ここにいる面子はクルスニクの槍を破壊するためなのだ。

クルスニクの槍が使用されればどうなるかは想像に難くない。

自分の取るべき道もわかつている。

けれども、それを取ることは何を意味しているか？

(私も見捨てるしかないの?)

『ローズは、もう少し頭を使おうね』

不意に姉の声が頭の中に響く。

『彼女達だって進んでこんな事をやりたいんじゃないよ。

それしかないからやってるんだよ、だから、『信じよう』なんて言葉が出てくるんじゃないか』

そんな事はわかつている。

ローズだつてそれぐらいはわかる。

しかし、姉の声は止まらない。

『君のそれは、ただのワガママだ』

頭をハンマーで叩かれたような衝撃が走る。

『因みに言っておくとだ。

それが悪いなんて言わないよ。

ただね、ワガママには、通し方がある。

私は教えたはずだよ』

姉のニヤリといたずらつぽい笑みが思い出される。

それで一気に頭の靄が晴れる。

ローズは、思い切り自分の頬を殴る。

「ちよつ、ローズ?!」

隣で見ていたレイアは、驚きの声を上げる。

「……………いいわ。私も戻らない」

静かにそう告げると髪を結び直す。

「その代わり、クルスニクの槍を破壊したら必ずホームズを助けに行きましょう」
ローズは、震える声を抑えながら真剣な目で言う。

そんなローズを見たミラは、うむと静かに頷く。

「当然だ」

そう言うミラ達は、再び走り出した。

エリーゼは、ローズを見ながらポツリと呟く。

「でも、ホームズ大丈夫でしょうか？」

『腕も怪我してるのにー』

「……………知らないわよ」

ローズは、そう返す。

余りに素つ気ない返事にテイポが驚く。

『心配じゃないのかー!? あんなに必死だったじゃないかー!!』

「ばか言ってるんじゃないわよ。心配なんてするわけないでしょ、あんな奴」

ローズは、震える声を必死で抑え、誰にも顔を見せない。

そんなローズを後ろから見て優しく微笑む。

自分よりも年上の癖に、色々と子供っぽい意地っ張りなローズ。

そんな小さなローズの背中をレイアは、ポンと叩く。

「頑張ろう、ローズ」

「……………当然でしょ」

ローズは、涙ぐみながらそう答えた。

地獄の沙汰も運次第

「どうぞで」

「あ、どうも」

一人取り残された（正確に言うならヨルも）ホームズは、誰もいない部屋に通され兵士に飲み物を出されていた。

ホームズは、出された飲み物の中身を確認せずに口に運ぶ。

そして、吐き出し、目の前の兵士にコーヒ^ーを吹きかける。

コーヒ^ーを吹きかけられた兵士は、無言で固まっている。

「……………あ、えーつと……………紅茶をお願いできますか？」

兵士は、無言で顔を拭き、しばらくすると紅茶を持ってやって来た。

「お茶です」

「……………あ、どうも」

そして、口の周りを拭く為にハンカチを出す。

「……………ホームズ殿とおっしゃいましたね」

「ええ、まあ」

兵士の質問にホームズは、コクリと頷く。

「指揮者殿とは、コンダクターどういう関係で？」

「旅の仲間です」

ホームズは、につこりと胡散臭い笑みを浮かべる。

（疑ってるなあ……まあ、そりゃあ、そうだよねえ……）

ホームズは、心の中でため息を吐く。

こうなるから、一人で残りたくなかったのだ。

確かに、どつからどう見ても一般人のホームズが軍の関係者であるローエンと知り合
いと言うのも中々疑わしいものがある。

とはいえ、それを全く隠そうとしないで聞いてくる態度を見る限り、この兵士の實力
もたかが知れている。

「普段の職業は？」

「行商人です」

「行商人が何故、指揮者殿と一緒にいる」コンダクター

先程までの丁寧な口調は、何処へやら。最早ただの尋問である。

「さあ？道連れ仲間だって事でいいんじゃないですか？」

「ふざけるな!!」

兵士は、どんと机を叩く。

ホームズは、冷めたようにその様子を見つめる。

「お前らは一体何を知っている？何を企んでいる？」

あの会議室での事は遠巻きから見させてもらったが、明らかに一般人が知っているレベルを超えていた」

「別に一般人じゃないでしょう？ローエンは？」

「とぼけるな。秘密兵器の開発はな、指揮者殿コンダクターが去って暫くしてから始まったんだよ。指揮者殿コンダクターが知っていることはあり得ないんだ」

「……………へえ」

ホームズは、ニヤリと笑みを浮かべる。

「それで、おれに何を聞きたいんです？」

カップの紅茶を口に運ぶとホームズは、上品にハンカチで口を拭く。

尋問されているホームズの肩の上でヨルはヒゲをピクピクと動かしている。そんな空気の中、兵士はゆっくりと口を開く。

「お前、ア・ジュールのスパイか？」

意を決した兵士の質問にホームズは、面白そうに笑う。

「何がおかしい!!」

「ああ、そうか、そうだよねえ……そう思わない方がおかしいよねえ」
ホームズは、笑いすぎて滲んだ涙を拭く。

そして、更におかしい事はこの質問全く外れてもいないところだ。

「安心したまえ。別に君たちの事をどうこうするつもりはこちらにはないよ」
ホームズは、口到人差し指を持って行き片目を閉じながら、面白そうに言う。

「とは言え、だ」

ホームズは、最後の一口を口に運ぶとハンカチで口を拭く。

「君達には、あるんだろうねえ……」

ホームズがそう言った瞬間部屋に武装した兵士達が入ってきた。
兵士達は武器を構え、ホームズをぐるっと囲んでいた。

「悪いようにはされない。それを信じてここに残ったんだけどねえ……………」

ホームズは、ハンカチを仕舞う。

「君達は、指揮者コンダクター殿の言葉に逆らうのかい？」

ホームズは、ジロリと目の前にいる兵士を睨みつける。

しかし、兵士は平然として答える。

「たった今、伝令がきた。指揮者は敵となった。殺しても排除せよ、とな」
ホームズは、突然の言葉に目をむく。

「……それで、ローエンの仲間のおれにも、この様なおもてなし、と……一応聞いておくよ、指令を出したのは、誰だい？」

「ジランド副参謀長だ」

ホームズは、思わず歯噛みをする。

つまり、ミラ達は今、ラ・シユガルとア・ジュールとの両方から狙われているのだ。

「最悪だ……」

「安心しろ。貴様に対してはその様な指令は来ていない」

「なんて指令が来ているんだい？」

「『殺さずに捕らえよ』だ」

ホームズは、更に驚く。

「何で、おれなんか……」

「なんでも、貴様は精霊術を無効化する力があるらしいじゃないか」

ホームズは、ちらりとヨルの方を見る。

要するに対ア・ジュール相手の戦力としてホームズの事が欲しいのだ。

「……ジランドから聞いたのかい？」

「そうだ」

ホームズは、改めて自分をぐるっと囲んでいる兵士を見る。

「因みに、殺さなければ何をしてもいいとお達しだ」

そんなホームズに兵士は、そう言々と武器を更に近づける。

ホームズは、ティーカップを持つ。

「……とりあえず、紅茶のお代わりをもらえませんか？」

「大人しく来てくれたなら」

それを聞いた瞬間ホームズは、手に持ったティーカップを鮮やかに目の前の兵士に投げつける。

鎧にあたり、がしやんと砕ける音がする。

それに兵士達が一瞬気をとらた隙にホームズは、椅子から飛び上がり兵士達の後方に着地する。

「それじゃあいらないや。」

あんな不味い紅茶、そうまでして飲みたくないもの」

ホームズは、やれやれといった風に肩をすくめる。

大人しく捕まらないなら、ホームズの次にしなければならぬことはなんだ？

(決まってる……全員倒して、ミラ達の元へ行く!!)

ホームズは、そういつて一歩踏み込む。

しかし、次の瞬間ホームズは膝から倒れる。

「あ……………れ？」

訳がわからないという声を出すホームズを見て、今度は兵士が大笑いをする。

「やっと効いたか」

兵士は、そう言つて薬の袋を見せる。

「残念だったな。お前の飲んだ紅茶の中にはしびれ薬が入っていたんだよ」

ホームズは、床に倒れながら先程飲んだ紅茶のことを思い出す。

「分かつたか？お前がどうすべきか？」

「くそっ……………」

床に向かつてホームズは、そう吐き捨てる。

せつかく相手の不意をついたというのに、あつという間に相手のペースになつてし

まった。

「さて、お前には働いてもらうぞ。これでア・ジュール兵も恐るにたらないな」

兵士は、床に倒れているホームズの腕を持つ。

「……………だ」

ホームズは、下を向きながらポツリと呟く。

「ああ？」

何を言っているか分からず、兵士は尋ねる。

「なるほど、道理で不味かった訳だ」

ホームズは、俯いていた顔をあげる。

そこにあるのは敗北を悟った表情ではない。

人をコケにした意地の悪い笑みだ。

肩にいるヨルが尻尾を振るい兵士達の鎧に当てる。

ホームズは、突然の事に驚いている兵士の脇につま先から蹴りを入れる。

「グッ………カハッ！」

「なっ?!」

自分の隣の兵が気を失っていることが信じられないようだ。

「君もだ」

ホームズは、そう言うともう一人にも同じように蹴りを食らわせる。

二人が気を失って倒れるのを確認するとくるりとポンチョを翻し先程まで意気揚々と喋っていた兵士を睨む。

「紅茶に砂糖とミルク以外の物を入れるなんて言語道断だぜ」

ホームズは、ぺつと吐き捨てる。

「だからお前はおこちゃまなんだよ。なんだその好みは」

喋り出したヨルを見て兵士は、更に驚愕する。

突然の事の連続に兵士達は、全く理解が追いつかない。

「何で……」

「ん？」

「何故！薬が効いていない！効果は実証済みだぞ！」

「効くわけないだろう。飲んでないんだから」

そう言つてホームズは、濡れたハンカチを取り出す。

そう、最初からホームズは、紅茶を飲んではいなかった。

飲んでふりをして口に含み、その後口を拭くふりをしてハンカチに染み込ませていた

のだ。

「殺気だった野郎どもに囲まれてちや、お茶を飲む気分にもならないよ」
「……………お前、まさか最初から？」

「まあね。ヨルがヒゲをピクピクと動かしてサインをくれていたし」
ホームズが指を指すとヨルはニヤリと笑いヒゲをピクピクと動かす。

最初からホームズの掌の上というわけだ。

ホームズを問い詰めていた兵士は、拳を握りしめ、ワナワナと震える。

「貴様……………騙したなっ!!」

ホームズは、そんな兵士相手に肩をすくめる。

「失礼だなあ。おれは何一つ嘘はついてないよ。

君達が勝手に勘違いしただけだろう？」

確かに膝をついただけで身体が痺れているなんて一言も言っていない。

「というより、お前らがそれを言うのはおかしいだろ」

ヨルは、やれやれと呆れている。

「君が言うと言得力が違うねえ」

ホームズは、はあとため息を吐いた。

「くそっ!!全員、あの男を捕らえよ!!生きてさえいればどうしても構わん!!」

その号令を聞くと兵士達はホームズに向かって襲つてきた。振るわれる槍をホームズは、いつもの癖で左腕で防ごうとする。

『いい、二時間は絶対安静だからね？』

ジュードの言葉が脳裏をよぎる。

「やれやれ……」

ホームズは、屈んで槍の横薙ぎをかわすとそのまま足払いをかける。そして、倒れた兵の膝の関節を踏み抜く。

「想像以上に大変だ」

「グガアあああつ!!」

激痛に叫ぶ兵士をよそにホームズは更にもう二三呟く。

そんな事をしてる間に次の兵士はホームズに剣を構え狙いを定める。

ホームズは、直ぐにその兵士と相対し、腰を落とし目の前の兵士にターゲットを絞り攻撃の姿勢をとる。

そして、その兵士の兜を見るとそこには、ホームズの後ろで振りかぶっている兵士が映り込んでいた。

「———っ」

ホームズは、息を呑むと横に滑る様に移動する。

「獅子戦哮っ!!!」

そして、兵士の背後に獅子をかたどった闘気をぶちかます。

更にホームズは、振りむきざまに追撃をする。

「ガオオオッ!」

ホームズは、一声そう叫ぶともう一度獅子戦哮を食らわせる。

気を失ったのを確認する隙もなく次の兵が襲い掛かる。

まず目の前の敵の剣を蹴り上げる。

そして、そのまま蹴り上げた足を地面につけるとそれを軸にし、今度は後ろ向きに蹴り上げる。

ホームズは、足を炎に包み、近くにいる兵に今度は自分から攻めに行く。

「紅蓮脚!!!」

炎纏った蹴りを喰らい兵は倒れる。

いくら、頑丈でも所詮は鉄。

熱を持った攻撃には何処までも弱い。

ホームズは、倒れた敵を見下ろす。

弱点は、見つけた。

光明が差したようにも見える。

しかし、残念な事に兵はここにいるだけではいけないのだ。

時間をかければかける程兵達は集まってくる。

案の定今のやりとりだけで兵士が増えてきた。

「……………厄介だなあ」

そう呟いた矢先、中継地点のテントの壁が割かれ槍を構えた大柄な兵士が突撃してきた。

「———つく!!」

ホームズは、目の前にあつた机を蹴り上げ、盾代わりにする。

「ハアアアツ!!」

突撃兵は、それに構わず勢いを緩めずそのままホームズに向かっていく。

兵は、机を足で押さえていたホームズをそのままテント外まで吹き飛ばした。

雨が振る曇天の空の下にホームズは、叩き出された。

空中を舞いながらホームズは、息を吸い込み、あらん限りの声で叫ぶ。

「ヨルーーーーッ!!!」

声に呼応するかのようにテントがぐらりと揺らぐ。

「————来いッ!!!」

呼び出されたヨルはパツとホームズの肩に現れる。

それと同時にテントが崩れ去った。

「うわあああああっ?!」

曇天の空の下、崩れたテントの下敷きになったラ・シユガル兵の叫び声が響き渡った。

「ふう……やれやれ」

背中から落ちたホームズは、よっこいせつと立ち上がる。

「お疲れ、ヨル」

「ああ……疲れた」

ホームズがラ・シユガル兵達と戦っている間、ホームズはヨルにある役割を頼んでいた。

テントを崩せ、と。

主要部分の柱をバラせば崩すことはできる。

できるのだが……

「時間制限がいかつすぎんだよ……」

出現の拍子に巻き込まれたヨルも地面に投げ出されていた。

ヨルはため息を吐いて立ち上がった。ホームズの肩にぴよんと飛び乗る。

ホームズは、肩をすくめる。

「仕方ないだろう。普段とは違うんだから、色々」

そう言つて腕の包帯を見せる。

そして、ホームズはファイザバード沼野を見つめる。

「とりあえず、集まってくる前にととつと行こうか」

「因みに、残り時間は？」

「後、四十分」

ホームズは、ヨルの質問に答えるとファイザバード沼野に向かって駆け出す。

そう、増^{ブリスター}霊極もなく、拳^{ゲイ}句^ト霊力野もないホームズが、霊勢がめちやくちやなファイザバード沼野へと駆け出したのだ………

「どうしよう……………」

雨の中、文字通りうねりを上げる大地を見つめ、ホームズはポツリと呟いた。「お前は分かってやってるんだと思っっていたんだが……………」

しかし、残念ながら愚痴る時間も迷っている時間はない。

ここでもたついて居れば、直ぐに兵士がやってくる。

「ん？兵士……………」

ホームズは、そう言つて腕を組む。

そして、思い出す。

そう、ホームズの母親は、通り抜けることが出来たのだ。

ホームズを助けながら。

今回は、前回と違う要素もある。

ホームズは、腕を解く。

「……………突っ切るぞ、ヨル」

とんでもないことを言い放った。

「言うと思つた」

心底うんざりしたようにヨルは、言葉を吐き捨てる。

呆れこそすれ、驚きはしない。

ホームズ・ヴォルマーノとはそう言う奴だという事をこの十年近い付き合いで学んでいる。

「ま、一応人間のお前の母親に出来たんだ。無理ってことはないだろ」
ヨルの続きの言葉を聞きホームズは、苦笑いをする。

「君も同じ事考えてた？」

「忌々しいことにな」

ヨルの言葉を聞き、ホームズは走り出す。

ヨルは、ホームズの肩のため息をつく。

「念のため言っておくが、回り道して兵士達に会わないよう逃げるって手もあるぞ」

「念のため言っておくけど、それじゃあ、ミラ達と合流出来ないよ」

ヨルは、ホームズの言葉を鼻で笑う。

「随分と部の悪い賭けだな。こんな色んな意味で地獄のような戦場でお互い無事に会えるぞ？」

ヨルの言葉にホームズは、ニヤリと笑った。

「ゼロに賭ける気は無いけど、一があるなら、そちらに賭けたいよね」

ミラ達と合流がゼロではないとホームズは、信じている。

ホームズの碧い垂れ目に決意の炎が灯ると、ヨルはため息を吐く。

こうなつて仕舞えば、何を言っても無駄だ。

「やれやれ、忌々しいことだが、俺たちは一連托生だ。死ぬなんて許さんぞ」

「肝に命じておくよ」

ホームズは、そう言つてファイザ^地バード沼^獄野に駆け出した。

急がば落ち着け

「急がないと……」

「分かったから、ローズもう少し落ち着いて。」

「さっきから何回も転んでるんだから」

レイアは、隣で焦っている泥だらけのローズを何とか宥める。

「失礼ね。私程落ち着いてる人はいないわ」

「ローズ程落ち着いていない人はいない……です」

エリーゼにまで言われてしまい、返す言葉がない。

「まあ、気持ちは分かりますけど……」

エリーゼは、そう言つて俯く。

俯くエリーゼにティポが続く。

『いつつも、僕達が目を離れた時に無茶をするもんね、ホームズは』

ティポの言葉に全員渋い顔をして、今までのホームズの行いを思い出す。

毒殺騒動の後、闘技大会の決勝、ウィンガル戦にナハティガル戦。

どれもこれもふと目を離れた隙にとんでもない無茶をやらかしていた。

空気は更に重くなった。

『……………』

走る一行に沈黙が降りる。

賭けてもいい。ホームズは、必ず予想外の無茶をしてる。

「両腕……使つてないといいけど……………」

ジュードの言葉に更に一行の顔から血の気が引く。

「早く破壊して戻るぞ！」

ミラの切羽詰まった声に皆は力強く頷いた。

一行のかける足は更に速くなった。



走る抜けた一同の前には、ラ・シユガル兵達がいた。

「ジランドかつ!？」

ミラは刀に手をかけようとする。

「ううん、違う。アレは……」

「四象刃……」

ジュードとローエンは、気付いたようだ。

そこには、ウインガル、ジャオ、プレザの三人がいた。

彼らは、兵達に囲まれていた。

「まだ？ウインガル？」

尋ねられたウインガルは、兵達を観察する。

兵達の白い鎧に紛れ、一人だけ、赤い鎧に身を包んだものがある。

ウインガルは、目を険しくさせる。

「アレが隊長だ」

ウインガルのその言葉を合図に四象刃^{フォーブ}は、動き出した。

「久々に血が騒ぐのおー！」

ジャオは、楽しそうに言うのと巨大な槌を振り回し自分の周りにいる兵を一掃する。

ジャオには、勝てないと思っただろう。

兵達は、プレザに集中する。

しかし、プレザは、それを嘲笑うかの様に精霊術をぶつけて倒していく。

「チエツク
王手」

ウインガルの声が響き、赤い鎧を着た兵は切り倒された。

「失礼。王と呼ぶには相応しくなかったな」

そう言つてウインガルが刀を納める頃には全ての兵は倒されていた。

ウインガルは、ミラ達の方に顔を向ける。

「来たか、マクスウエル」

「…………やはり、戦場で出会う事になったか。悲しい時代だのお」
ジャオは、寂しそうに告げた。

「山狩りは、楽しかったわ。アル」

プレザは、含みを込めてアルヴィンに言う。

「そいつは、良かった」

アルヴィンは、肩を竦めてやれやれと言う風に返す。

「ジランドを討ったの？」

「答える義理はないな」

ジュードの質問にウインガルは、にべもなく言い返す。

「なら、話を変えよう。」

道を開けろ！」

ミラが口を開き、要件を伝える。

すると、プレザが馬鹿にしたように笑う。

「うふふ。冗談でしょ」

「生憎、冗談は苦手なの。こっちは急いでるし、どいてくれないかしら?」
ローズがぴしやりと言いつつ。

その有無を言わせない物言い他所にプレザは一行を見回して、ポンと手を叩く。

「ああ。ホームズの坊やとはぐれちゃったのね……」
うふふと面白そうに笑っている。

「今や、ラ・シユガルからも追われる身だものね、そちらさんは」
ローズは、その情報の早さに驚いて目を向く。

「心配なの?あの坊やの事が」

「ばか言ってるんじゃないわよ。心配なんてする訳ないでしょ、あんな奴」

ローズは、即答する。

(嘘つき)

レイアとエリーゼは、突っ込んだ。

ティポも口を開こうとしたが、エリーゼがしつかり抑える。

なにせ、先程からローズの顔は、強張ったままなのだ。

急いで槍の元へと行こうとした矢先にこれだ。

焦らない方がどうかしている。

「まあ、心配しなくても大丈夫よ」

プレザは、そんなローズにひらひらと手を振る。

ローズ達は首を傾げる。

「彼には、生け捕りの指令が出ているから」

プレザの言葉にローズは、更に首を傾げる。

若干安堵したローズとは、違いローエンはハツとした顔をする。

「まさか、ヨルさんの力目当て……」

「その通りだ」

ローエンの言葉にウインガルは、頷く。

「ホームズさん達を戦争に利用しようというのですね」

ローエンの言葉にローズの顔は一気に険しくなる。

「ま、攻撃系の精霊術を無効化するどころか、更にパワーアップするようなのを利用しない手はないわな」

アルヴィンは、納得する様に呟く。

「でも、だったらホームズは安全なんですよ……ね？」

エリーゼの言葉にローエンは、顔を険しくさせる。

「ローエン？」

「生け捕り……つまり、生きてさえいれば何をしてもいいと言うことです」

その言葉に一行は、顔を険しくさせる。

大人しく協力の要請に首を縦に振ってあげればいいが、もしそれを断っていた場合、どのような目に合わせられるか、想像に難く無い。

「でも、ホームズの事だから裏切って一時的に、味方して切り抜けるんじゃない？」

エリーゼの言葉にミラは首を振る。

「ホームズは、私と約束をした。

もう裏切らないと。

恐らく、ラ・シユガル軍の誘いには乗らないだろう」

エリーゼは、ミラの言葉に少し驚いた顔をする。

ミラは険しい顔のまま口を開く。

「……私達が槍を破壊する。

そうすればそちらにとつての脅威を排除できる」

ミラはそう言った後ちらりとローズを見る。

「そして、槍さえ壊せば私達は、ホームズを救出に行ける。

ホームズさえ参加しなければ脅威は完全に消える。

そうすれば、お前たちの勝ちは確実だ。何故邪魔をする？」

「陛下の望みだからだ」

ミラの質問にジャオはあっさりと答える。

「この戦は、ただの通過点にすぎない」

ウインガルは、相変わらず冷淡に言う。

「ここで、争えばあなた達も命を落とすかもしれない」

ローエンは、ウインガルを必死に説得する。

「王を支えるものがいなくなるのですよ！」

「陛下は、お一人でも歩まれるわ」

しかし、ローエンの必死な説得も四象刃フォーブには、届かない。

ブレザは、あっさりと切り捨てた。

「あなたと違って、後ろに隠れてこそ戦うような真似はされない」

ウインガルは、冷淡にローエンに告げる。

「どういう意味でしょうか？」

「イルベルト殿、なおも誤魔化されるつもりか？」

ウインガルの口調が少しだけ強くなる。

「民の先陣を切り、戦わなければならぬ筈のあなたは、最後尾に回ってしまった」

ローエンは、もう何を言われているのか分かったようだ。

顔を伏せるローエンに対してウインガルは、追撃の言葉を緩めない。

「その結果がナハティガルの独裁を許し、自らの手にかかる結末を迎えたのだろう」

「ちよつと、ローエンじゃ……」

ないとローズは、言おうとしたが、ローエンは手で制する。

おいそれと晒していい情報ではない。

「さつきから、情報はえーな」

アルヴィンは、頭をかきかながら、呆れた様に言った。

「ローエンは、悪くないよ。」

悪いのはナハティガルだ」

「国にとって、個人の是非など関わり合いのないことだ」

ジュードの言葉をウインガルは、バツサリと、切り捨てる。

「……………どういふこと？」

レイアは、戸惑いながら尋ねる。

「導く指導者がいなければ、民は路頭に迷うだけ、と言っている」

「なら、今からでもローエンが……」

「……………そう簡単には、いきません」

ジュードの言葉をローエンは、少し黙った後否定した。

「私など、所詮は一介の軍師。」

王には、相応しい器の持ち主が必要なのです」

ローエンの言葉にジュードも押し黙る。

「我らが王は、その器を持っている」

ジャオは腕を組んで自慢気に言う。

段々とローズにも話しがどこに行きたいのか分かってきた。

「そして、民を導く為の道を見出されたのよ」

「槍は我らが陛下の力として貰い受ける」

そう、だから四象刃フォールブは頑なに道を譲らなかつたのだ。

せつかく手に入れようという力を壊されては堪らないのだから。

「何度も言わせるな」

しかし、ミラはそれにびしやりと言いつつ。

「クルスニクの槍は渡さない。」

どんな理由があろうとだ」

そう言つてミラは片手剣に手をかける。

「ミラの……マクスウエルの思いは邪魔させない！」

ジュードも小手をはめて戦闘の準備を整える。

話し合いは無駄だと悟つたのだろう。

ウインガルは、自分の増霊極ブースターを起動させる。

眩い光とともにウインガルの髪が白くなる。

《ふん！ 決着をつけてやる！》

「何を言っているかは、分からないけれど、やる気みたいね」

ローズは、二刀を引き抜く。

「来るぞ！」

「みんな、油断しないで！」

ジュードの言葉を合図にローズは、泥水を散らすように踏み込んだ。



「先手必勝！魔神剣・双牙!!」

地面を二つの剣戟が這うように進む。

ウインガルは、それを無言で防ぐ。

防がれている間にローズは、距離を詰め刀を振り被る。

しかし、

「儂を忘れてもらっては困るぞ」

ジャオの槌がローズを襲う。

ローズは、ギリギリのところまで防ぐが思い切り吹き飛ばされてしまう。

「ぐっ!!」

ローズは、泥だらけに転がりながらも何とか立ち上がる。

「どんな力してるのよ……」

悪態を吐くのも束の間、今度はウインガルが襲いかかる。

「鳳墜拳!!」

そんなウインガルをジュードが殴りつけ、止める。

「助かったわ、ジュード」

「ローズさんよ、少し落ち着いてくれ」

そう言つてアルヴィンは、銃弾をウインガルの後ろにいるプレザに打ち出す。

しかし、プレザに届く前にウインガルが叩き落す。

「失礼ね、こんなに計画的に攻撃してるのに」

「不用意に近づくのを計画的とは言わないよ、ローズ」

ローズは、さっと目を背けるとため息を吐く。

「……正直にいうわ。ホームズの事が心配なの。

だから、早く決着をつけたい」

うん知つてた、という言葉を取り返し、飲み込むと、ジュードは諭す様に言う。

「でも、それで負けちゃつたらそれこそそれまでだよ」

「……………」

ローズは、頬を引つ張る。

「……………どうも、私は頭に血が上りやすいわね……………」

「うん、知つてる」

「優等生、声に出てる」

アルヴィンの突っ込みでジュードは、ローズが真っ赤になって睨んでいるのに気付いた。

ジュードは、慌てて咳払いをする。

「ごほん、取り敢えずローズはウインガルさんを任せていい？」

「ジュード達は？」

「プレザを止めるさ」

ローズの質問にアルヴィンが軽く答える。

「……ジャオさんは、どうするの？」

「私たちに任せろ」

ミラがそう言うと、レイアとエリーゼが頷く。

「ローエンには、後方支援をお願いしてある」

ローエンは、微笑みながら頷く。

ローズは、二刀を構える。

「わかったわ」

ローズは、そう言うと詠唱を始める。

《馬鹿め!!》

ウインガルは、ローズの詠唱を止めるべく全力で突っ込んでくる。しかし、

「省略！フオトン!!」

詠唱は、あつという間に終わり突っ込んできたウインガルを光の球が弾けて吹き飛ばす。

態勢を崩したウインガルにローズの追撃を仕掛ける。

「瞬迅剣!!」

ウインガルが慌てて防ぐ。

ローズにとつて、それも予想済みだったようだ。

防がれた時、ローズの二刀を炎が包む。

「鳳凰天駆!!」

燃え上がる鳥となったローズがウインガルを切り上げる。

《ぐっ!!》

「ウインガル!!」

「余所見してる場合か？」

視線を逸らしたジャオにミラが手をかざす。

「フレアボム!!」

「ぬおお!!」

ミラの魔技をジャオは、ギリギリで防ぐ。

ガードを解くと、そこには詠唱を終えたエリーゼがいた。

『ブラッティ・ハウリング!!』

地面から黒い手が現れ、ジャオを襲う。

普通ならこれで勝ちだ。

しかし、プレザの事もある。

「多分……………」

レイアは、構える。

精霊術が解けるとそこには、普通に立っているジャオがいた。

「やはりな……………」

ミラは、歯噛みをする。

ジャオは、パンパンと服を叩く。

「……………恐ろしい威力だのお……………やはり、倒さねばならんのだのお」

ジャオは、悲しそうに目を一瞬伏せる。

ジャオとしては、エリーゼを傷つけない訳ではない。

しかし、この戦いに勝つにはエリーゼの存在は無視できない。

ジャオは、決意を固めると槌を肩に担ぐ。

そして並んでいるレイアとミラに向かって槌を振り上げる。

「魔王地顎陣!!」

「?!」

ミラとレイアは、弾ける地面から何とか飛び退く。

しかし空中に浮いた、ミラとレイアをジャオの振り回された槌が襲い来る。

「ぐっ!!」

「うっ!!」

レイアは、ローズの方に、ミラはジュード達の方に吹き飛ばされてしまった。

「ミラ、レイア!!」

「レイア!？」

苦痛に顔を歪めているレイアを見て、ローズが驚いている。

すると、レイアに気をとらている間にウインガルがローズに斬りかかる。

《余所見している場合か?》

(ヤバい!今かわすと、レイアが……)

ローズは、刀を交差して防ぐ。

「ぐうっ!!」

予想外の力にローズは、齒軋りする。

(前より……強い!)

「ミラ!」

同じように苦痛に顔を歪めているみらにジュードは、目で追う。

「……ブルースフィア!!」

そのジュードの頭上に水泡が形成され、落下してくる。

ジュードは、バックステップをしようとするがギリギリで間に合わず食らってしまった。

「うっ!!」

とは言え、大体かわせているので、ダメージ自体は少ない。

「ジュード! 取り敢えず、ミラをどうにかしろ!」

アルヴィンの言葉にジュードは、コクリと頷き治療に駆け寄る。

「ミラ」

ミラはジュードの言葉に顔を歪ませながら辺りを見回す。

「エリーゼ……は？」

ジュードは、急いでエリーゼの方を見た。

そこには、一人でジャオと対峙しているエリーゼがいた。

ジャオは、槌ではなくその大きな手を握り拳にして構える。

エリーゼは、必死に震えないように堪える。

はつきりと分かるのだ。

二人の援護なしでは、詠唱も間に合わない。

ローエンの援護も今はジュード達に向いてしまっている。

それでも、震えは見せない。

どこかの化け物との約束だから。

震えを堪えながらも強い意志を宿したエリーゼの目を見てジャオは、呟く。

「……………安心せい。ちゃんと手加減する。少し痛いだけじゃ」

そう言ってジャオは、拳をエリーゼの水月に向かって放った。

『エリーゼー!!!』

誰も駆けつける事が出来ない。

その時、エリーゼの前に人影が飛び込んでくる。

一瞬のことで何だか分からなかったが、はたらくポンチョだけがしっかりとわかった。

その人影は、エリーゼに拳が届く前にそのまま空中で回し蹴りを放ちジャオを蹴り飛ばした。

その人影は、そのまま地面に水を飛ばしながらは、着地する。
「安心したまえ。手加減なんてしない。ばつちり痛いだけだ」

人影……泥だらけのホームズは腰に片手を当ててそう言った。

繰り返してはならない

『『ホームズ!!』』

「やっほー」

ホームズは、ひらひらと手を振って返す。

とても気楽な風だが、ポンチョの至る所に泥が付いており、顔も泥に塗れている。肩にいるヨルも疲れ切っている。

「どうして、()に?」

エリーゼは、とても不思議そうに尋ねた。

ホームズは、ニヤツと笑って尻餅をついているエリーゼにポンチョの裾を差し出す。

「お姫様を助けるのが、騎士ナイトの役目だろう?」

キザったらしい台詞にティポとエリーゼは、ファイザバード沼野の湿度に負けないぐ
らいのじとつとした目を向ける。

『調子乗るなよー、ホームズなんて精々兵士ボーンがいいところだぞー』

「ぐさつと来た。覚えてろよこのムラサキダルマ」

馬鹿な事を言っているホームズに呆れながらエリーゼは、ため息を吐くと、差し出さ

れたポンチョを掴んで立ち上がる。

「……………どうやってここに来た、ですか？」

靈勢がめちやくちやなファイザバード沼野を行くなんて無茶なんてレベルじゃない。

そう言っていたのは、ヨルだ。

エリーゼの質問にホームズは、肩をすくめる。

「勘と運」

「は？」

「つまりねえ……………つと、ここまでだエリーゼ」

ホームズは、そう言って言葉を途中で切ってジャオを指差す。

ジャオは、蹴られた顔を抑えながら立ち上がる。

「やはり、お前さんか……………」

「どうも」

ジャオの言葉に軽く返す。

ジャオは、大きくため息を吐く。

「陛下を裏切った時、正直な事を言うとはやはりと思った」

ホームズは、黙ってジャオの言葉を聞く。

「何度か見かけたが、彼奴らと居るお主はとても楽しそうだった。」

一時とは比べものにならないのお」

「楽しい？いつもぐさぐさ来る言葉を言われるのが殆どです」

「だが、お前はそいつらと居ることを取ったのだろう？」

ホームズは、ぴたりと言葉を止める。

「お主が、そう言った奴らと出会えた事は儂としても嬉しい」

「そんなにあの時のおれは、塞ぎ込んでました？」

「まあ」

そう言つてジャオは、槌を肩に乗せる。

「だが、それとここを通すのは、また別の話じゃ」

目に力が込められる。

ホームズは、ぐつと足に力を込める。

「それと、エリーゼ、お主とは戦いとうない。

下がつてくれんか？」

エリーゼは、構えようとした杖を下ろす。

「随分とジャリに甘いじゃないか」

「色々あるんじゃないよ」

ヨルとジャオの会話を聞きながらホームズは、頭の中で算段をまとめていた。

エリーゼが戦いに参加しない場合、精霊術という後ろ盾を失うことになるが、その代わり詠唱を援護しなくてもいいという側面がある。

ジャオ自身何かエリーゼに思うところもある様なので、そうなれば攻撃はしないだろう。

(ふむ……………)

ホームズが考えをまとめている間にエリーゼがホームズの前に一歩歩み出る。

「ジャオさん、私が戦わなかったら、ホームズとも戦いませんか?」

「いや。さつきも言っただろう、別の話だよ」

「だっただら!」

エリーゼは、杖を構える。

「私も戦います!」

「……………えっ? ちよ、エリーゼ?」

ホームズは、考えていた作戦が音を立てて崩れ落ちていくのを感じた。

そんなホームズを無視してエリーゼは、言葉が続ける。

「ホームズは、胡散臭くて、裏切り者で、残念で、子供で、本当のことを言わなくて、イカサマ師で、デリカシーなくて、言うこと聞かなくて、コーヒー飲めなくて、船酔いして、モテないですけど……………」

「言われたい放題だな、お前」

エリーゼの言いようにヨルがポツリと呟く。

ホームズは、引きつり笑いを浮かべる。

「それでも、私の友達です！

だから、ホームズだけを……！友達だけを戦わせたりしませんっ！」

その言葉がエリーゼの口から発せられた時、ホームズは、一瞬驚いた後とても嬉しそうに微笑む。

「ジャオも驚いたようだ。

「ふふふ、涙が出るほど嬉しいねえ」

本当に嬉しそうにそう言うとホームズは、一歩前に出てエリーゼと並び立ち、腕の包帯と懐中時計を見る。

「さて、そんな訳だよ、皆の衆。

ジャオさんは、おれとエリーゼに任せて他は君達で頑張っておくれ」
ホームズの張り上げた声を聞くと、一同はこくりと頷く。

しかし、ジュードが心配そうに尋ねる。

「ホームズ、残り時間は?! 大丈夫なの?」

「ああ、大丈夫大丈夫。だから、そっちはそっちで、どうにかしたまえ。
はつきり言つて、四象刃^{フオイブ}二人以上相手取るのは、無理だからね」

そう言つてホームズは、ジャオを見る。

「時間とは、なんじゃ?」

「ああ、今おれ、色々あつて両腕使えないんです。

残り時間は、約十分」

そう言つて懐中時計をしまう。

「まあ、丁度いいハンデです。

何せこちらには、最強の精霊術使い……いや」

ホームズは、言葉をきる。

「友人がいるからねえ……任せていいんだろう?」

「当たり前です!」

『どんとこい!』

ホームズは、隣のエリーゼを見るとニヤリと笑う。

ジャオは、黙って見つめていたが、直ぐに大笑いをする。

「よかろう、そこまで言っている奴ら相手に遠慮することもなからう」

そう言つて、ジャオは少し腰を落とす。

「不動のジャオ、参る」

そう言つて、ジャオはホームズに向かつて横薙ぎに槌を振る。

当たる、そう思われた瞬間、槌はホームズによつて大きく上に蹴り上げられた。

予想外の槌の動きに、ジャオは驚く。

「マクスウェル一行が一人、ホームズ・ヴォルマーノ、押して参る」

ホームズは、そう言つたとそのまま回し蹴りを放つ。

ジャオは、慌てて下がろうとする。

「——っ!!」

しかし、一瞬ジャオの動きが止まった。

止まった原因は、身体に巻き付いたヨルの前足だ。

「俺を忘れんなよ」

ヨルはがニヤリと笑うとホームズが回し蹴りを喰らわせ、直ぐに距離を取り、エリーゼの元へもどる。

ホームズは、エリーゼの元に戻るとエリーゼに幾つか耳打ちをする。

「エリーゼ、いいね」

「分かりました」

エリーゼに確認を取るとホームズは、そのまま下がったジャオに向かって走り出す。そして、勢いを乗せた回し蹴りを叩き込む。

「ぬうっ!!」

がんとと言う音が鳴り響く。

ジャオは、槌で防ぐ。

防がれるや否やホームズは、直ぐにその場から立ち退く。

『ネガティブ・ゲート!!』

ホームズがその場から離れた瞬間エリーゼの精霊術がジャオを襲う。

「ぬうん!!」

ジャオは、それを槌を一振りして消し飛ばした。

精霊術を力技で消しとばしたジャオにホームズの追撃を仕掛ける。

「輪舞旋風!!」

旋風のような回し蹴りは、ジャオの腹を捉えた。

しかし、

(手応えが……)

「惜しかったのお。」

儂が後ろに下がっていないければ、な？」

ジャオの言葉にホームズは、はあとため息を吐いて、馬鹿にしたように笑う。

「お喋りしてていいんです？」

「なに？」

『ブラック・ガイド!!』

死神の鎌が現れ、ジャオを後ろから切り刻みにかかる。

「——っ！魔王地顎陣!!」

ジャオは、槌で地面を爆破させ、精霊術をかき消す。

「——っ!!」

ホームズは、爆発に巻き込まれ宙に舞いがる。

ジャオは、先程と同じように空中で身動きの取れない相手ホームズに向かって槌を横薙ぎにふる。

「ティポ戦哮っ!!」

しかし、それが届く前にティポから放たれたマナの砲弾がジャオの手を襲った。

「ぐっ!」

痛みで一瞬動きが止まる。

その一瞬の隙にホームズは、地面に落ち、距離を開ける。

「助かったよ、エリーゼ!」

エリーゼは、こくりと頷いて返す。

ジャオは、そんな二人を見ながら考える。

「やはりのお……………」

ジャオは、そう呟き走り出した。

実はジャオは、というより、四象刃フォーエブ（アグリア以外）は、ここに来る前にウインガル

に言われていた。



『いいか、もし、ホームズと戦う事になったら、いつも以上に神経を張り詰めろ』
ホームズがウインガルに頭突きをかまし勝敗を決した後の作戦会議だ。

『なぜ？あの子がそこまで強いとは思えないんだけど？』

プレザの言葉にウインガルは、静かに頷く。

『だからだ。あいつは、それを逆手に取る。』

相手を油断させたところに渾身の一撃を入れる』

三人は知らないのだが、アグリアはバツチリその策に嵌りホームズに敗北している。
『なら、油断しなければいいのか？』

『ところが、そうとも言えない』

ジャオの言葉にウインガルは、首を横に振る。

『あいつの手はそれだけじゃない』

ウインガルは、思い出した様に頭に手を当てる。

『手品師相手の台詞でこんなものがある。』

『手品師が右手を見せたら左手を見ろ』とな』

『どういうこと?』

プレザは、訳が分からず頭をひねる。

『今回のホームズとの戦い……私は、強化された右足にばかり注意していた。』

結果、私は予想もしていなかったホームズの頭突きを食らい敗北した』

『……何と無く言いたい事は分かってきたわ』

プレザは、ふふふと笑う。

『ホームズは、目立つものを引けひらかして、視線を集め、そしてそれに疎かになった所から、追撃の一手を放つ』

ウインガルは、そこで言葉を切る。

『つまり、ホームズが何かしらの目立つものを見せてきたら、それ以外にも注意を向けるようにしろ、いいな?』

『了解』

二人の返事を聞くとウインガルは、頷く。

『タネを晒した手品師には、舞台から降りてもらおう』



今この戦いにおいて目立っているのは？

包帯を巻いたホームズ？

ボロボロ状態で駆けつけたホームズ？

腕が使えないホームズ？

いや、違う。

先程から、ジャオはそれを基準に戦闘を組み立てていた。

ジャオは、エリーゼに向かっていく。

エリーゼに向かってジャオは、槌を振り下ろそうとする。

このまま行けば確実にエリーゼを倒せる。

その瞬間、ピタリと槌を振り下ろすのをやめる。

(目立っていたのは、ムスメつこーその影に隠れていたのは……)

そのまま後ろに向かって、振り回す。

「ホームズ、お主じゃ」

その振り回された先には、ホームズが今まさに蹴り放とうとしていた。

攻撃態勢に入ったホームズは、もう他に出来ることはない。

驚きに目を向いたまま、ホームズはモロにジャオの槌を喰らった。

「——っ!!!」

声にならない声をあげ、ホームズは吹き飛ばされる。

「ホームズ!!」

突然の事に思わず、エリーゼは詠唱を止めてしまった。

「甘かったのお……ホームズ。二度も三度も同じ手品をするからこうなるんじゃないかと思った時には、もう遅い。」

ジャオは、そう言うのと吹き飛ばされた、ホームズに向かって歩みを進める。

止めをさす為に。

種明かしをしてはならない

「——ツカハ！」

ホームズは、這いつくばりながら血を吐き出す。

「ホームズ!!」

エリーゼの声が響く。

「終わりじゃ」

「守護方陣！」

ホームズは、無理矢理立ち上がって踏み込んだ。

ホームズの足を軸にして巨大な光の陣が展開され、エリーゼとジャオを拘束する。

「!!」

身動きが取れなくなり、ジャオは驚くが直ぐに力を込め、陣を吹き飛ばす。

「——?!」

その馬鹿力にホームズは、目を向くが直ぐにトントんと足を踏み替え、

そして、

「連牙弾！」

連続の蹴りを放つ。

三散華より威力は、落ちるものの三散華とは比べものにならない蹴りの連続にジャオは、防戦一方だ。

ホームズは、直ぐに右足を一步後ろに下げ、鬨気を纏う。

「獅子……」

歯を食いしばって連牙弾が終わると同時に打ち込む。

「……戦哮!!」

獅子の形を纏った鬨気がジャオに襲いかかる。

「ぬうん!!」

ジャオは、堪らず吹き飛ばされた。

しかし、ジャオは、鎧を着た兵士を沈めた獅子戦哮を喰らっても普通に立っていた。

「マジかい……………」

「それはこつちのセリフじゃ。

お主何で平気なんじゃ?」

ジャオの言葉に、ホームズはポンチヨの中を見せる。

そこには黒い紐、ヨルの尻尾がきつちりと隙間無く巻きつけられていた。

「なるほど」

ジャオは、納得した。

ホームズは、両腕を使えない以上、攻撃をガードする事は出来ない。だから尻尾を鎧代わりにしたのだ。

先程、ジャオを拘束したのが前足だったのは、そう言う訳だ。

「ま、ダメージを誤魔化すのが関の山ですけどね」

ホームズは、肩をすくめる。

ボロボロになっているところを見るともうこの手は使えそうにない。

降りしきる雨に紛れてホームズの頬を脂汗が一つ落ちる。

何せ、拘束ついでに回復に使おうとした守護方陣を破られたのだ。

満身に回復なんかする訳がない。

「……それより、お主。」

先程の守護方陣、ムスメっこも拘束していたぞ」

「知ってます」

ジャオの言葉にホームズは、適当に返す。

そして、更に言葉が続ける。

「エリーゼが動けようと動けまいと関係ないでしょう?」

その言葉は、二人の空気をしんと静まり返らせた。

聞こえるのは、周りの戦闘音と雨のみ。

戦闘において動けなくなると言う事は、あつてはならない。

それは、無抵抗と同義語だ。

例えばジャオが攻撃出来なくとも他の連中が攻撃するかもしれない。

だというのに、ホームズはなんて事の無いように、まるで「明日は、カレーだ」とでも言うようにどうでも良さそうに言い切ったのだ。

確かにホームズは、ジャオの攻撃から身を守ることが出来た。

しかし、エリーゼはどうだ?

「……お主」

ジャオは、静かに怒りをこらえる。

「最低じゃな」

「よく言われます」

「褒められる方が少ないよな」

ジャオの言葉を聞き、ヨルは面白そうに肩で笑う。

「うるさいなあ……おれだって褒められた事ぐらいあるよ」

「覚えていられるぐらいだろ」

グウの音も出ない。

何も詫びれていないホームズとヨルを見て怒りが、ふつつつと湧き上がってくるが、ジャオは、努めて冷静であろうとする。

ホームズ相手に激昂するのは、まずい。

今のホームズは、両腕が使えないため、攻撃を防ぐ事ができない。

そして、尻尾の鎧も使えない。

つまり、一撃さえ入れれば勝ちなのだ。

勿論時間制限がある。

(タイムリミットは、十分)

ジャオは、戦う前に言っていた言葉を思い出す。

(……確実に五分は立っておる)

ジャオは、そこまで考えると槌を肩に担ぎ、ホームズに向かっていく。

(この残り五分が勝負!!)

ホームズに向かって行ったジャオは、ぎゅつと槌を握った。

ホームズは、ぺつと唾を吐き捨ててジャオが来るのを待つ。

そして、槌を振るわれる前にその槌を持つ手を掴んだ。

「は?!」

遠くから見ていたジュードは、目を見開いた。

対するホームズは、手加減抜きでジャオの両腕を握るのに力を込める。

間違いない。

ホームズは、腕に最大の力を込めている。

「お主、腕は、使えないはずじゃ?」

目を丸くしているジャオに構わず、ホームズは、ニヤリと笑う。

「さつきまでは、ね?」

そう言うところからホームズの懐から懐中時計を取り出し時間を見せる。

案の定、先程見せてもらったところから五分しか進んでいない。

「終わっておらんぞ、十分経ってないではないか」

ジャオは、そう言つて動かそうとするが動けない。

それぐらい半端じゃない握力で掴まれている。

「四捨五入つて知つてます?」

突然ホームズから、数学の言葉が出る。

「四以下は切り捨て、五以上は切り上げる。商人が使わない日はありません」

「まさか……………」

「そのまさかですよ」

ホームズは、意地の悪い笑みを浮かべる。

「制限時間、正確に言うなら残り五分でした。

なので、四捨五入して、約十分にしました」

ホームズは、ジャオをジリジリと押していく。

「そうすれば、勝ちを急ごうとするあなたがこんな風に来てくれるだろうと思ったのでねえ」

そう言つて更にホームズは、力を込める。

ジャオは、少し顔をしかめる。

そんなジャオに構わずホームズは、意地の悪い顔で更に続ける。

「……………分かつてるとは思いますが、おれは嘘は言つてませんよ？

ちゃんと言いましたからね、約十分と」

四捨五入されたものは、勿論正確な数字ではない。

だから、ホームズは約をつけた。

確かに嘘は言っていない。

かなりギリギリではあるが……

何せ、普通は一桁しかない数字を四捨五入なんてしないのだ。

イカサマ、騙し討ち、ルールギリギリの反則技。

ホームズの真骨頂だ。

いつの間にもやら、包帯も解けて始めていた。

「力比べだ」

ホームズは、片手をジャオの腕から離し手で胸ぐらを掴む。

そして、

「うおおおらっ!!」

そのまま背負うように投げ飛ばした。

投げ飛ばされたジャオは、壁に叩きつけられる。

「グウっ!!」

ジャオは、思わず衝撃で吐き出す。

「嘘、ジャオさんを?」

『どうなんてんだー、お前ー!!』

エリーゼは、驚きの声を上げる。

何せホームズよりも一回りもふた回り大きい男をホームズは、投げ飛ばしたのだ。

信じられるわけがない。

「いや………ホームズならやつてもおかしくない」

治療を受け復活したミラは、それを見ながらそう呟いた。

「あいつは、私を片手で投げ飛ばしたんだぞ」

「ああ、そう言えば」

アルヴィンも初めてホームズと出会った事を思い出していた。

ミラを投げ飛ばすと同時にヨルも投げていた。

つまり、片手で約169cmの女を投げていたことになる。

「それに、ホームズのカバン凄く重かった」

ジュードも思い出したようだ。

そんな会話をよそにジャオは、むくりと起き上がる。

「くくくくくく」

ジャオは、面白そうに笑う。

「ガーハツハツハツハツ!!」

性格は最悪でもここまで見事に嘘一つつく事なく、騙し切ったホームズには、笑いが止まらない。

ひたすら大笑いをした後、ジャオはホームズの方を見る。

「一応、聞いてやる。」

「……騙したのか？」

「二応、言つといてあげますよ。

……勝手に勘違いしたんでしよう？」

ホームズは、緩くなつた包帯を投げ捨てる。

ホームズは、肩幅に足を開き構える。

「ヨル」

ヨルは呼ばれると、地面に置いてあるホームズのカバンを肩にいる状態で尻尾を使い漁る。

そして、隠し引き出しから、いつもの丸い円盤上の盾を引つ張り出す。

「ホームズ、それ……」

ジュードが驚いた様に尋ねる。

「予備。金も隠し引き出しこっに入れときや良かった」

そう言つて腕にはめ、いつものスタイルになる。

アホ毛が雨でしなっているのはご愛嬌だ。

「さあて……ここからだ！」

説明してはならない

「出し惜しみなんてしない！」

ホームズは、そう言つて足を炎で包む。

「紅蓮脚!!」

炎に包まれた脚がジャオを襲う。

槌を地面に起き、柄の部分で盾にする。

ホームズは、防がれたのを悟ると、直ぐに一步引き、右足を軸に置き換える。
そして、

「獅子戦哮!!」

鬨気の獅子がジャオに襲い掛かる。

しかしジャオは、防がない。

代わりに槌を持つていない手を獅子に向ける。

「戦迅狼破!!」

狼の鬨気が現れ、獅子の鬨気を食い殺す。

そして、獅子を食い殺すと今度は、ホームズに襲いかかった。

慌てて盾で防ぐが、それでも吹き飛ばされる。

「狼に食い殺されるとは、大した獅子じやのう」

そう言うのと更に拳を握る。

「金剛拳!!」

全体重を乗せたジャオの一撃をホームズは、宙にいながらもろに食らってしまった。

「——っ!!」

湧き上がる吐き気に堪らず吐き出す。

危うく意識が飛びそうになるが、口を噛んで血を流し、意識を引き止める。

「こんのっ!!」

ホームズは、放たれた拳の手首を無理矢理掴むとそのまま、ホームズは脇に向かって爪先を蹴り上げる。

(急所狙い!!)

「だがのう……」

ジャオは、そう言うのと槌をから手を離し、拳を固める。

そして、ホームズの脚が届く前にもう一発こんどは、顎を殴りつける。

「ぐっ」

ホームズは、そのままごろごろと吹き飛ばされた。

地面に投げ出されたホームズは、何とか起き上がろうとするが、膝に力が入らない。

「なん………で？」

「顎への衝撃が膝にきておるんじやろ」

そして槌を構える。

「ジャリ!!」

『『ファースト・エイド』』

ヨルの呼びかけにエリーゼの精霊術が発動し、ホームズのダメージを和らげる。

その瞬間、ホームズの顎にもらったダメージも消えた。

ジャオは、その一連流れを見て一瞬硬直した。

ホームズは、そのまま逆立ちをして、両足でジャオの頭を挟む。

そして、そのまま地面に向かって叩き落した。

「ぬおっ！」

「フランケンシュナイダー、お前の母親の得意技だったな」

「いや、まだまだ母さんには及ばないねえ、何せ」

ジャオに目を向ける。

ジャオは、響く頭を抑えながら何とか立ち上がった。

「仕留めてないからねえ……」

ホームズは、頬が引きつるのを感じる。

完全に不意をついての一撃だ。

だというのに、まだ倒れない。

(これが、四象刃^{フォーブ}、不動のジャオって訳かい……)

ホームズは、もう一度身構える。

そんなホームズを見て、ジャオは考え込む。

(全く、次から次へと……驚かせてくれる……)

『目立つものを引けひらかして、それに注意を取られた瞬間、別の止め一撃が来る』

ウインガルの言葉が脳裏をよぎる。

そして、更に考える。

今一番目立っていたのは？

包帯がとれ、ジャオいっぱい食わせ、投げ飛ばした。

(ホームズじゃな……)

逆に目立っていないのは、エリーゼだ。

(あそこで、回復の精霊術を唱えられなかったら気づかなかった……)

ホームズは、見事にジャオの注意を移動させていた。

案の定、視線を移せば、エリーゼが目立たないながら精霊術の詠唱を始めている。

なら、もう時間との戦いだ。

ジャオは、痛む頭を抱え、駆け出す。

そして、まずは、ホームズに向かって槌を振るう。

突然の突進に防ぐのは、無理と判断すると、地面を強く踏み込んだ。

「守護氷槍陣!!」

氷の槍が複数出現し、槌の威力を若干削ぐ。

削げなかった威力は、そのままホームズ襲い、退かされる。

ホームズは、ジャオの狙いに気づいたようだが、足が思うように動かず倒れる。

障害物は、消えた。

ジャオは、そのままエリーゼに辿り着くと、拳を固め殴る。

エリーゼは、慌てて詠唱を止めるとガードをする。

けれども、所詮子供。

「きゃっ！」

大きく後ろに吹き飛ばされた。

ジャオは、静かに近づく。

「今度は、お主が切り札だったんじゃないや……」

そう言っつてちらりとホームズを見る。

エリーゼは、杖を支えに立ち上がる。

「……あのファーストエイドがなければ、儂は気づかんかった」

そう言っつて何とか立っているエリーゼに目を向ける。

「皮肉な事じゃ。その優しさが、お主らを追い込むなんてのお……」

そう言っつて、槌を大きく振り上げる。

その瞬間、エリーゼは、ジャオに向かって杖を突きつける。

「勘違いしないでください。

私が、ホームズに優しくしたことなんてない……です」

エリーゼの不満気な顔とともに、ダンと地面を踏み込む音が響いた。

「守護方陣!!!」

巨大な光の陣が展開され、ジャオ、エリーゼを纏めて拘束する。

思わず舌打ちをして、エリーゼとホームズを睨む。

これは、壊せる。

その程度のものだ。それは実証済みでもある。

そう言っつて力を込める。

しかし、どんなに力を込めても全く壊せない。

「なに!?!」

驚くが直ぐに分かった。

最初のあれは、大して力を込めていなかったのだ。
壊せると思わせる為に。

壊すことが出来ない陣に囚われたジャオは、身動きが取れない。
しかし、それはエリーゼも同じ……

「深淵の盟約を果たせ！」

はずだった。

エリーゼは、杖を突きつけた姿勢のまま、詠唱を始めていた。

「なっ?!」

「馬鹿だねえ………クイーンに自分から近づくなんて」

—— 『エリーゼが動けようと動けまいと関係ないでしょう?』 ——

『精靈術士エリリーゼが動けようと動けまいと関係ないでしょう？』

ジャオは、ようやくホームズの言いたいことが分かった。

詠唱中は、動けない。

勿論中断すれば動ける。

しかし、どうせ詠唱を中断する気のないエリリーゼだ。

守護方陣で拘束されていようと、いまいと関係ない。

私が、ホームズに優しくしたことなんてない……です

確かに全くもって優しくない。

自分の詠唱が終わるまで、フォーブ四象刃の一人を足止めさせているのだから。

（くそっ！アレだけ注意しておったのに……結局ホームズから、注意をそらしてしま
うた……）

『リベールイグニッション!!』

後悔してももう遅い、エリーゼの精霊術は、至近距離でジャオに向かって放たれた。

「ぬおおおおお!!」

デイベインストリークと似ているが、色が闇のような色だ。

何とか耐えているが、それも時間の問題だ。

遠のく意識を何とか保たせる中で気づく。

（陣が消えておる?）

何故、陣が消えているか?

答えは簡単、ホームズが解いたからだ。

ホームズは、守護方陣を解くと右足を下げる。

闘気纏う。そして、その後、炎が現れ、闘気と混ざり合う。

準備は、出来た。

後重要なのは、タイミングと度胸だけ。

迫り来る、ジャオに向かつてホームズは、右足を大きく下げ、ジャオを後ろから蹴りつける。

「獅子戦哮・——」

蹴られた瞬間鬨気が上がる。

「ほむら焰!!」

焰を纏った鬨気の獅子は、ジャオを後ろから食いに掛かる。

前からは精霊術、後ろからは獅子戦哮・焰。

二つの攻撃に挟まれたジャオは、なす術がない。

そのままジャオは、気を失って倒れた。

倒れたジャオを見下ろし、ホームズはニヤリと笑う。

「おれ達の勝ちです、ジャオさん」

そう言つてホームズは、エリーゼの方へ歩いて行つた。

他の面子を見ても、全員勝つていた。

ホームズは、ため息を吐く。

「あー、疲れた」

「自分で立てた作戦……です」

エリーゼの指摘にホームズは、肩をすくめる。

ホームズとしては、腕を残り時間がある内に使うつもりだった。

しかし、エリーゼにクギを刺されたのだ。

絶対に止めろ、と。

自分も戦うのだから、と。

ホームズもそこまで言うなら、とこの作戦を立てたのだ。

結果エリーゼに重要な役目を任せる形になった。



『じゃあ、今言ったような感じで頼むよ』

『……………容赦のない作戦ですね。まあ、私が言い出した事ですけど』
完全にエリーゼが決め手の作戦だった。

『出来るだろう？おれの友人なんだから』

『本当にエリーゼ大丈夫なんだろうなー！』

『100%とは、行かないけれど頑張るさ』

『……………らしい返事ですね……………』

エリーゼは、呆れ顔だ。

その言葉を聞くとホームズは、自慢げな顔で腕に支障のない程度にエリーゼの頬をつねる。

『君の友人を信じたまえ。君の友人は、やる時はやる男だよ』



エリーゼは、その時の事を思い出し、静かに頬を撫でた。

あの、作戦を授ける時のホームズの顔はとても頼もしかった。

「普段から、そうしていれば、もう少し、違う……ですよね」

ホームズは、それを聞くと少し驚いたように目を見開く。

「およ？もしかして、ドキツとしちゃった？」

ホームズがヘラヘラとしながら言うとしらつとした視線を送る。

「ホームズなんかドキツとしたら、病気です」

『ふせいみやくー!!』

帰ってきた言葉は、無情だった。

ホームズは、心底傷ついた顔をする。

「ほんつと……優しくないよね、君」

「別にジャリに限った話じゃないだろ」

基本的にホームズに優しくしてくれる女性は、切ない程いない。

ヨルの言葉にホームズは、頬を引きつらせると直ぐに思い出しように片手を上げる。

「エリーゼ」

ホームズは、そう言つて片手を上げた。

エリーゼは、一瞬止まるが包帯の取れた腕を見ると直ぐに思い直し、少しジャンプをしてホームズの手を叩くようにハイタツチをする。

「サンキュー。おかげで助かったよ」

「どういたしまして、です」

エリーゼは、ふふふと得意げに笑つた。

案中模索

「……………が……………ハッ」

ウインガルは、そう言つて膝を着く。

そんなウイガルにローエンは、急いで駆けつける。

「ウインガルさん！あなたの増^{ブースター}霊極は、何処に？」

ウインガルは、ローエンの質問にトントンと頭を叩く。

「トントン……………だよ……………」

そう言つて、ウインガルは意識を失つた。

「頭の中……………」

ローズは、思わず息を呑む。

「そこまでしてガイアスに使えるのですね」

アルヴィンは、プレザに銃を構える。

「悪い。遺言聞くつもりないから」

地面に倒れこみなんとか上半身を起こしているプレザにアルヴィンは、そう告げる。

「アルヴィン！もう決着はついてるじゃない!!」

ジュードの言葉にアルヴィンは、銃を下げる。

「……わーっつたよ。お前がそういうならそうするよ」

そんなアルヴィンを見てプレザは、笑う。

「怖い怖い。そうやって生きていくのよね」

自嘲する様に言うどプレザは、ジュードに視線を向ける。

「ボーヤ。そうやって、弄ばれて、最後は捨てられるのよ」

「……けど、アルヴィンは僕の気持ちを分かってくれれると思う」

ジュードが返すとアルヴィンはそれっきり何も言わなかった。

エリーゼは、意識を取り戻したジャオに尋ねる。

「あの……どうして……わたしを心配して……してくれるんですか？」

『わけをいえー!!』

ジャオは、その言葉に俯く。

「どうして!!」

エリーゼの再度の言葉にもジャオは、答えない。

「エリーゼ」

レイアがエリーゼに近づく。

「答えたくないんだよ。そんな人に聞いてもなかなか答えてくれないのは、君もよく

知ってるだろう?」

ホームズは、自分を指差しながらエリーゼにそう言う。

エリーゼが諦めたのを見届けるとジャオを見る。

「おれのことにも心配して下さってありがとうございます」
ジャオは、ホームズの言葉に静かに笑って答える。

「クルスニクの槍までもう少しだ。

皆思うところもあるだろうが、先に行かせてくれ」

ミラの言葉に一行は頷き走り始めた。



「……ホームズ」

「なんだい?」

エリーゼからの質問にホームズは、首をかしげる。

「どうやってここまで来た……ですか？」

「私も聞きたいわ。だって、増霊極ブリスターなんて絶対手に入らなかったでしょう？ まあ、手に入ったところで使えないでしょうけど……」

隣で聞いていたローズも不思議そうに尋ねる。

ホームズは、走りながら手短に答える。

「勘と運」

「それは、聞きました。もっと具体的なものです」

エリーゼに言われホームズは、肩をすくめる。

「……少し、考えれば簡単な事だよ」

そう言つてホームズは、説明をした。

「兵士のみんなは増霊極ブリスターの恩恵にあるわけだろう？。

つまりだ、単純に考えてその人の周りは地場ラノムになっているわけだ」

「……まさか」

ジュードは、頬が引きつるのを感じる。

「そ。兵隊さんがたくさんいる道を通ってきた。あ、勿論、両腕は使わなかったよ
つまり、両腕ラノムが使えない状態で戦場のど真ん中を突きつてきたのだ。

「ヨルが、地場ラノムになっているところを大まかに見つけて、そこを通ってきたんだ」

「なるほどね。そりや、そのとお……………大まか？」

ロームズが首を傾げると、ヨルが思い出したくという風々に顔をしかめる。

「仕方ないだろ。こんな事やった事ないんだから。」

なんとなく、そうっぽいところをロームズに指示して走ってきたんだ」

「……………何回か外したよね」

ロームズは、顔を暗くして言った。

「……………ああ。何度辞世の句を詠んだか分かったもんじゃない」

ヨルのミスでロームズが死ねばヨルが殺した事になる。

そうなって仕舞えば、ヨルも死ぬ羽目になる。

まあ、靈勢が無茶苦茶な中に放り込まれて仕舞えばそれだけで死に直結するのだが

……

「……………なるほど、泥だらけなのは、そのせいか……………」

レイアは、隣で聞いてため息を吐く。

「よく生きてたな、おたくら」

「だから、言つたろう？ 勘と運だつて」

ロームズは、やれやれと言つた風にそう言った。

「まあ、無事で良かったよ」

ジュードは、そう言つてにつこりと笑う。

「いや、死にかけたし、そこまで無事じゃなかったんだけど……」

ホームズは、顔暗くしながらそう返す。

「まあ、合流できたんだからいいじゃん！」

レイアがそう言うのとホームズは、ため息を吐く。

「まあね」

『こつちだつて、大変だつたんだぞー!!』

特にローズ!!』

テイポの言葉にローズは、直ぐに真つ赤になる。

「……………ローズが?」

ホームズは、小首を傾げる。

「もしかして、前みたいに心配してたの?」

ホームズの言葉にローズは、否定しようとするが、ぐつところえる。

「もしかしてつて何よ。心配したわ」

若干優しくない言い回しが入っていたが。

ホームズは、ぽりぽりと頬を人差し指でかく。

「……………そ。心配してくれてありがとう」

そつぽを向きながらホームズは、そうお礼を言った。

その後直ぐにローズの方に向き直る。

「そう言う君達は、どうだったんだい？」

「別にどうって事なかったわよ」

調子に乗って大技を出してこけた事を遠い彼方にはふっ飛ばしてローズは、そう言った。

「……………心配した？」

ローズは、おずおずとホームズにそう尋ねる。

「馬鹿言え。状況が知りたいんだよ」

しかし、ホームズは、そう素っ気なく返す。

ローズは、カチンと来たようだ。

拳をぶつけようとするが、理性をもって抑える。

「ああそう」

ローズは、そう言つてこの会話を終わらせた。

一部始終見ていたレイアとエリーゼは、深くため息を吐く。

そんなレイアの肩にヨルがぴよんと乗る。

「言わなくてもいいと思うが」

「うん。分かつてるよ、ヨル」

レイアは、そう言ってホームズの頭をスパンと叩く。

「本当のこともおうね、ホームズ」

「……………気が向いたらね」

ホームズは、そう言って肩をすくめた。

レイアとエリーゼは、もう一度深いため息を吐いた。

ホームズ達がそんなやりとりをしている中ローエンは、顎髭を触っている。

「どうしたんだい？ローエン？」

「……………ホームズさんは、逃げ出したんですよね」

「まあね。痺れ薬入りの紅茶を飲まされかけたよ。

お返しにテント潰してきたけど」

「何してるのよ、貴方……………」

隣で聞いていてローズは、我慢出来ずにため息を吐く。

心配してた自分が馬鹿みたいだ。

「ウインガルさんの話によると、ホームズさんを殺さず捕らえるよう指示が出ていた
そうですが」

ローエンは、そんなローズに構わず続ける。

「その通りだけど……なんでそんな事まで知ってるんだい、あの人？」

ホームズは、頬が引きつる。

「それよりも私は、ホームズさんに聞きたいことがあります。

本拠地を抜け出してから、私達の所に来るまでにラ・シユガル兵に殺されそうになりましたか？」

「いや、別に。普通にみんな生け捕りにしようとしてたけど。

それがどうしたん………」

「だい？と言おうとしてホームズは、途中で気付いた。

「おかしい………妙だ」

ホームズは、真剣な顔で悩む。

「何がよ」

ローズは、訳が分からない顔をする。

そんなローズにホームズは、どう説明しようか考えると指を一本立てる。

「少し立場を変えて考えてみよう。

「いいかい、君はラ・シユガル軍の大將だ。想像できるかい？」

「まあ、なんとか」

「さて、では、ラ・シユガル軍としては、当たり前だけど戦争に勝ちたいよね？」

「そりやあね。負けたいと思つて戦争なんてしないでしょ」
ローズは、ホームズの質問にこくりと頷く。

「そんな時、降つて湧いた最高の武器、それが……」

「クルスニクの槍？」

「これから君の事を暫くアホの子つて呼んであげる」

「貴方に言われる程屈辱的な事はないわね」

「だったら、おれにそう言われぬように賢くなりたまえ」

「喧嘩しないで。続きは？」

険悪な雰囲気になり始めた二人をレイアが止める。

続きを促されたホームズは、こくりと頷き先を続ける。

「さて、アホの子が言つたクルスニクの槍は、降つて湧いた武器じゃない、最初から用意してあつた武器だ。」

そのために前から準備をしていたんだ。アホの子も聞いていたはずだろう？」

強靱な精神力でローズは、湧き上がる殺意を抑える。

（あ、あんなに心配したのに……こんな言い草つてある？）

ホームズは、そんなローズを無視して更に話を続ける。

「降つて湧いた武器は、おれ達。もっと正確に言うならヨルなだけどね」

「あ、精霊術の無効化」

「流石、ジュード君。アホの子より頭いいね」

「ローズ、落ち着いて。黙って話を聞こうよ」

レイアがどうしようと抑える。

エリーゼは、ローズを煽るホームズに半眼を向けている。

「さて、精霊術を無効化できるおれ達を戦力に加えたい。

ところが、作戦は失敗しおれ達に逃げられてしまった……さて、どうする?」

「どうするって、捕まえ……いや」

ローズは、表情を険しくさせる。

「殺すわね。敵の手に渡るぐらいなら」

「正解。その通りだよ、ローズ」

ようやく名前で呼ばれ少し嬉しくなったが、そもそもそれがおかしいと思い直し、余分な気持ちを追い払う。

段々とホームズとローエンの言いたい事が分かってきた。

ホームズを仲間として考えれば、まず出ないと答えたが、ジランドはそうは見えていない。

ラ・シユガルにとって所詮ホームズは、戦力でしかない。

そして、精霊術を使うのはア・ジュールだけではない、ラ・シユガルだつて使うのだ。もし、ラ・シユガル軍がホームズを捕まえられず、ア・ジュール軍がホームズという戦力を確保すれば……

「降つて湧いた武器は、自軍を滅ぼす凶器になる……そういう事ね」

「そ。リスクをとつて敵を倒すか？」

それともリスクを取らず味方の損害を減らすか？」

「ま、わざわざ武器を相手に渡す理由はないわな」

ヨルは、ふむふむと頷く。

話がひと段落すると、ホームズが指をもう一本立てる。

「さて、ここで問題になつてくるのが、さっきの話だ。

おれが逃げ出したことは伝わったはずだ。

何せ、戦場を突きつてるんだから。

でも、討伐命令は出ていなかった。

妙だと思わないかい？」

一同は、ホームズの言葉に黙り込む。

その沈黙をミラが破る。

「とりあえず、出来ること、分かっていることから片付けていこう。」

「勿論、先程の話を念頭においてだ」

「まあ、結局そうするしかないよねえ」

ホームズは、そう頷く。

「さて、クルスニクの槍まで、もうすぐだ」

ミラがそう言つて曲がり角を曲がろうとした瞬間、目の前をラ・シユガル兵が音を立てて飛んで行つた。

突然の光景に一同は、息を飲む。

「ようつ」

聞き覚えのある声に特にホームズとローズは、驚きで一瞬声が出なかつた。

しかし、ホームズは直ぐに息を飲み、声が震えるのを必死で隠し、できる限りいつも通りの調子で言葉を紡ぐ。

「……まさか、あなたにこんな所で会うとは思わなかったなあ」

ホームズ達はゆつくりと声のした方に顔を向ける。

そこには、積み上げられたラ・シユガル兵の上に腰掛けている男がいた。

「そうか？俺はこうなると思ってたぜ」

男………マールロウは煙管を啣えながらそう返した。

能ある鷹が爪を剥く

「マーロウさん……」

ホームズは、じわりと手に汗をかくのを感じる。

マーロウは、顔しかめるとキセルを口から外す。

「あー、くそっ！ やっぱり雨の中で、キセルなんて吹かすもんじゃねーな」

マーロウは、忌々しそうにそう言うときセルを懐にしまう。

「それで、何してんだお前ら」

「……それは、こつちのセリフです」

ホームズは、汗を流しながら尋ねる。

「ガイアス王に言われてんだよ、フオーブここを守るようにな。

四象刃の連中がやられた時の保険だそうだ」

腕を組んでジロリと睨みつけるマーロウ。

その瞳は、悪戯っぽいが宿っているのは敵意だ。

マーロウに明確な恐怖を抱いているホームズとは対照的にミラは凜として一歩前に
でる。

「マーロウ、そこを退け」

張り詰めたような迫力のミラにマーロウは、やれやれと情けなくため息を吐く。

「そいつは出来ない相談だ。」

おめーらが、俺らに協力しない以上、通す義理はない」

マーロウは、そこで言葉を区切ると目を向ける。

「今は戦争中。敵を通す訳ねーだろ」

「聞いて、マーロウさん」

今度はジュードが説得にかかる。

「ガイアスが手に入れようとしているのは、クルスニクの槍なんだ。」

それが、ガイアスの手に渡れば人と精霊が……」

「不幸にاندらる、知ってるよ。ホームズから聞いたしな」

マーロウは、そう言ってキセルを唾えようとするが、先ほどの事を思い出しししまう。

「だがよ、そいつを手に入れれば少なくともこの戦争、ア・ジュールの勝ちだよな」

ジュードの言葉を遮ってマーロウは、簡単な事のように言う。

「なっ!!」

余りに自然に言うのでジュードは、言葉が続かない。

「そうすりゃあ、ア・ジュールの連中は、それ程死なずに済む。」

だとしたら、通すわけには、いかねーよな」

「自分の国の人以外どうなってもいいの!!」

レイアは、我慢出来ずに叫ぶ。

あんなに自分達の為に尽力してくれたマーロウが、まさかこんな事をするなんて思いもしなかったのだ。

裏切られたという気持ちが強くなる。

マーロウは、やれやれという風に首を振る。

「そんな事言わねーさ。俺だって、人が死ぬのはやだし、精霊にだって死んで欲しくない……だがよ」

そう言つてマーロウは、ラ・シユガル兵の腰掛けから、立ち上がる。

「俺の知り合いが死ぬのは、それ以上にごめんなんだわ」

そう言つてマーロウは、レイアを指差す。

「何がいらないつて話じゃない。何が大事つて話だ」

マーロウは、そう静かに言い放つた。

「あなたは……正しくないです」

エリーゼの言葉にマーロウは、自嘲する様に笑う。

その通り、エリーゼにすら看破されてしまう理屈だ。

褒められたり、尊敬されるようなものではないだろう。

しかし、マーロウにとってこれは、何者にも譲れない、揺るぎない信念なのだ。だからこそ、ここにいます。

「そりゃ、そうだろ。戦争に関わつた連中なんて、全員正しくないさ」

とはいえ、マーロウだつて負けていない。

面倒臭い親子の側にいたのだ。

屁理屈なら負けていない。

「酷いねえ、おたく。裏切つたのかよ」

アルヴィンは、自分の事を柵に上げてマーロウを軽白に責める。

「おいおい。そりゃあ、ないだろ。」

ア・ジュールの民がア・ジュールの為に働いてんだからよ」

マーロウは、心外そうに否定する。

そして、マーロウはローズを指差す。

「むしろ裏切ってるのはお前だ、ローズ」

そう、ローズだけア・ジュールの人間なのだ。

自分の国にクルスニクの槍を使われたくない。

旅を始めた理由は、それだ。

だとしたら、マーロウに着くのも間違いいではない。

ミラ達は一斉にローズを見る。

ローズは、思わず一步後ろに下がる。

自分の手が震えているのが分かる。

しかし、覚悟を決めねばならない。

本当は、ずっと分かっていたことだ。

この戦場に来た時からずっと目をそらしていた問題だ。

もう一步下がろうとする足を止め、ローズは、マーロウの方を向く。

「私は、ア・ジュールの人間。それは否定しません……でも！」

そう言って刀を抜く。

「私は、今、ミラ達の味方。」

人と精霊を守る、ミラ・マクスウエルの味方だ!!」

ローズの迷いのない言い方に、マーロウは、深くため息を吐く。

「四十点つてところだな」

マーロウは、そう言つて両手を組む。

「まあいい。それよりも、だ……ローズ、お前刀を抜いたな」

「……………だから？」

「強気だな」

「ええ。気持ちで負けるなど言つたのは、貴方ですよ。師匠？」

「ほんと、いい度胸してるぜ」

マーロウは面白そうに笑っている。

「別に。武器がなければせめて五分にぐらいは、持ち込んで見せるわ」

「へえ……………頼もしいな」

そう言つて組んでいた手を解く。

「まずい!!下がりたまえ!!」

ホームズの叫びに構わずマーロウは、

左の掌から、刀の柄を出した。

「!?」

ローズは、突然目の前で起こった出来事に頭が追いつかない。

しかし、目の前で起こっている現実には、変わらない。

左手に光る陣の中から刀の柄が現れている。

そして、マールロウは刀を右手で掴み刀を引き出した。

「……………武器がなけりや、五分だったか？」

マールロウは、引き抜いた刀を引きづりながら、ローズへの距離をじりじりと詰める。

「だったらよう……………」

「くっ!!」

そこで言葉を切り一瞬でローズに切りかかった。

刀の斬撃は、防げども勢いだけは消すことが出来ない。

そのまま後方に飛ばされた。

「俺に武器を持たせたら、その時点で負けだな」

マールロウは、飛ばされたローズを見下ろしながらそう告げる。

「ローズ!!」

ホームズがローズを気にかける。

「余所見してる場合じゃねーだろ」

そんなホームズにマールロウは、既に間合いまで入っていた。

ホームズは、盾を使って防ぐ。

金属のぶつかる高い音が鳴り響く。

マールロウの渾身の横薙ぎをホームズは、飛ばされずに踏ん張って耐えた。

マールロウは、そう言ってホームズを見る。

よく見るとホームズからは赤い蒸気が吹き出ている。

「剛照来してやがったとはな……道理で一人だけ、俺に文句を言っていないわけだ」

「相変わらずですね、その空間系の精霊術……」

ホームズは、忌々しそうにそう言う。

「まあ、色々と面倒な制限があんだがな」

マールロウが、そう笑っている間にミラとジュードが後ろから攻撃を仕掛ける。

マールロウは、まずホームズに腹に力一杯の蹴りを入れ距離を取る。

「つつ!!」

マールロウの渾身の蹴りを食らったホームズは、そのまま意識と共に後ろに飛んで行つた。

ホームズを倒すと手に持っている刀を振り向きざまにミラに向かって投げた。

慌てて躲すミラ。

その隙をついて、マールロウは再び手を組み、今度は籠手を出現させ、身につける。

「行くぜ、一発」

マールロウは、そのまま身体を捻る勢いでジュードを殴りつける。

「カハッ……」

腹に貫い、ジュードは嘔吐する。

身体に力が入らない。

意識がブラックアウトしていくのを感じていた。

「ジュードー」

「どいつもこいつも、余所見してんなよ」

そう言つてマーロウは、そのままミラに向かつて拳を向ける。

しかし、その瞬間マーロウを囲むようにナイフが落ちてきた。

そして、そのまま陣が炸裂し、マーロウを拘束する。

「なるほど……だが！」

マーロウは、踏ん張つて赤い蒸気を吹き出す。

「剛照来!!」

マーロウが剛照来を発動させた瞬間ローエンの陣は、弾け飛んだ。

「次行くぜ!!」

マーロウは、今度こそミラに拳を放った。

刀を構え何とか防ぐが、マーロウの拳は刀を壊し、ミラに放たれた。

「ぐっ!!」

マーロウに殴られたミラは、地面を転がる。

「レインバレット!」

アルヴィンの銃弾が雨となつてマーロウに降り注ぐ。

「なら、こいつはダメだな」

マーロウは、それを見てポツリと言うと籠手を捨て、再び手を組んで陣を発動させる。

今度引つ張り出した武器は、大剣だった。

手より遙かに大きな幅の大剣を引き抜き、頭上に掲げ銃弾の雨を防ぐ。

「……………なんでもありかよ」

アルヴィンは、忌々しげに言つて大剣を振りかぶつた。

マールロウも片手で持つと遠心力を乗せてアルヴィンに振りかぶる。

(重つつつてえ!!)

片手で振つたとは、思えない大剣の重さにアルヴィンは、何とか斬撃だけは防ぐ。

しかし、体制が崩れた。

「やべっー!」

体制の崩れたアルヴィンをマールロウの大剣が襲う。

「瞬迅爪!!」

その瞬間、レイアが攻撃を仕掛けた。

マールロウは、慌てて迫り来る棍をかわす。

お陰でアルヴィンに大剣が振り下ろされる事はなかった。

マールロウは、レイアの棍を見ると大剣を捨てかわしながら、手を組む。

そして、今度は棍を出現させた。

レイアは、それを見ながら思い出す。

——あの人、大抵の武器ならなんでも使えるわよ。もちろん、格闘技も——

「……………どうして、ホームズ達の周りには、普通の人っていないのかな」

思わず声に出してしまった。

マーロウは、それを聞くとガハハと面白そうに笑う。

「苦労してそうだな」

「本当に……………」

レイアは、そう言って棍を振り被る。

マーロウもくるくると棍を振り回しレイアに向ける。

そして、レイアの棍の間を縫って真っ直ぐに突きを放つ。

放たれた棍の先端は、一部の狂いもなくレイアを捉える。

「うっ!!」

思わず意識が飛ぶ。

レイアは、そのまま後方に吹き飛ばされた。

そこをアルヴィンが銃弾を撃ち込む。

しかし、マーロウは、棍を振るって銃弾を弾いた。

そして、一直線にアルヴィンに棍を撃ち込む。

「ぐっー」

予想以上の衝撃にアルヴィンは、思わず膝をつく。

着々と詠唱をする間も無く倒れていくミラ達。残るは、ローエン、エリーゼ。

エリーゼとローエンは、自然と武器を持つ手に力が入る。

「エリーゼさん、皆さんの治療を。」

「ここは、私がどうかします」

「……分かりました！」

ローエンは、エリーゼの返事を聞くこともなく直ぐにナイフを投げる。

マーロウは、棍を捨てると手を組み、今度は、杖を出現させた。

そして、それを片手で振り回しナイフを全て弾く。

そして、杖を捨て、今度は細剣を出す。

そして、ローエンに向かって突き進んだ。

ナイフを投げた、そのほんの一瞬の隙を突いてマーロウは、細剣を突き刺す。

「ぐうっ!!」

マーロウは、細剣をローエンの肩に刺すとそのまま崖に向かって一直線に進み、ローエンをそこに打ち付けた。

そして、その衝撃でマーロウの剣は、折れた。

しかし、代わりにローエンは動けない。

動けないローエンにマーロウのボディブローが炸裂し、ローエンの意識を飛ばす。

ローエンを倒したマーロウの視線は、必然的に治療中のエリーゼに向けられる。

あつという間だった。

ナハティガルの時と違い、純粹にマーロウのみの力。

何のドーピングもしていない、素の実力だけで、こんなにも自分達を圧倒し、瞬殺している。

「さてと、ガキをいじめんのは嫌いなんだが……ま、しかたねーか」
そう言つて拳を握り振りかぶつた。

その時、刀がマールウの腕を目がけて飛んできた。

マールウは、驚いて腕を引く。

腕に当たらなかつた刀は、そのまま地面に突き刺さる。

マールウは、飛んできた方向を見る。

そこには、拳を握りしめたローズが眼前まで迫っていた。

恐らく刀を投げると同時に走っていたのだろう。

「——つらあ、ああつ!!」

ローズは、そのまま気合と共に全体重を乗せマールウの顔面を殴りつけた。

「……………ようやく……………ようやく、一発、当ててやったわ。こんのクソ師匠」

ローズは、そう言つて地面に突き刺さつた刀を引き抜き、両手二刀を持つ。

「エリーゼ! こつちは、任せなさいっ!!」

マールウさんに精霊術なんて使わなくていいわ! 治療に専念しなさいっ!」

「は、はい!」

ローズの劍幕にエリーゼは、思わず頷く。

マールロウは、ローズが指示を飛ばしている間に、二刀を出現させる。

「お前、師匠に勝てると思ってるのか？」

「師匠を倒すのも弟子の役目ですよ」

ローズは、精一杯の虚勢を張って笑って見せる。

武器が五分。

勝敗なんて火を見るよりも明らかだ。

けれども、引くわけにはいかないのだ。

理由としてあげるなら、まあ、お行儀のいいことを言えばクルスニクの槍を破壊する

為だ。

しかし、それ以外にもローズを突き動かす理由がある。

「男にはやらねばならない時があるそうですね」

二人を囲む様に雨が降る。

雨の雫は、刀を伝って地面に滴り落ちる。

ローズの言葉にマールロウは、少し眉毛をピクリとあげる。

「負けると分かかっていてもな」

「女にだってありますよ」

刀を伝う雨を払って構える。

マールロウもそれに習う。

「なるほど、そういう事か」

「ええ。そういう事です」

そう、結局は単純にプライドの問題なのだ。

意地っ張りのローズにこれ以上の理由はない。

ローズの言葉を合図に二人は一步踏み込んだ。

女の一念岩をも貫く

『待て』

ローズは、比較的早く意識を取り戻し、直ぐに戦いに加わろうとした。しかし、倒れているホームズの側でヨルは、ローズをそう止めた。

『何でよ！今行かないと完全に全滅よ』

『今行けば確実に全滅だ』

ヨルは、そう言つて周りを確認する。

一向は、一人また一人と倒れていく。

ヨルは、舌打ちをしてローズを見る。

『時間がない。簡潔にそして、一度しか言わんから、よく聞け！いいか、今から言うのは必勝法なんかじゃない！』

けれども、これしかない！お前は、これを成功させる事だけ考えろ』



「ハアアア!!」

先に仕掛けたのはローズだ。

マールロウは、ローズの一刀を防ぐともう一方の刀をローズに向ける。

ローズは、余ったもう一刀を地面に突き刺し防ぐ。

キーンと高い音が鳴り響く。

ローズは、マールロウの足を踏んで、動き止めるとそのまま頭突きをかます。

マールロウの方が背が高い為、額には届かない代わりに、胸に思い切り思い切り当てる。

「——っ!!」

突然の衝撃に息がつまり、動きが止まる。

『いいぞー!ローズ!!』

ティポは、ノリノリで声を上げる。

その声でレイアが起きる。

「……………何、今、どうなってるの?」

「ローズが、戦っています。レイア、私たちは治療を」

「わかった」

レイアは、エリーゼの言葉に頷いた。頷いた。

レイアが意識を取り戻している間にローズは、刀を引き抜くと同時に動きの止まった

マーロウに斬り上げていた。

マーロウは、その拍子にローズの足が退けられたのを見計らうとそのまま後ろに下がる。

しかしかわしきること叶わず、少し刀をもらってしまふ。

「ぐっ!!」

ローズは、その隙を逃さない。

「瞬迅剣!!」

刀を突き出し、マーロウに向かう。

マーロウは、刀で防ぐ。

しかし、

「散沙雨!」

無数の突きがマーロウを襲う。

「秋沙雨!!」

そこにローズは、踏み込む足を代え更に攻撃を足す。

突きの雨が止む事はない。

(実力が足りなければ手数でどうにかするしかない!)

ローズは、マーロウを押ししているこの間に、更に剣撃を加えようと足を踏み込む。

「とか、思つてんじゃねーだろーな」

マーロウは、そう言つて更に攻撃を仕掛けようとするローズの額に刀を突きつける。
「浅いな、考えが」

肌に触れてはいない。

しかし下手に動けばローズの命は、そこで切り取られる。

そんな恐怖で、ローズを縛られていた。

しかし、ここで恐怖しては何も始まらない。

ローズは、ぐつと恐怖を飲み込む。

「……マーロウさん、貴方のその精霊術初めて見ましたよ……隠してたんですね」

「当然だろ。こんな奥の手知つてんのは、ホームズとヨル、それでホームズの母親ぐら
いだ」

「逆になんで、その面子が知つていのか聞きたいですね……」

ローズは、頬を引きつらせながら、そう言う。

マーロウは、ニヤリと笑う。

「まあ、勝負が着いたら教えてやるよ」

「そりゃあ、是非とも勝つて高笑いしながら聞きたいですね」

ローズは、そう言つて横に身体をずらしマーロウの中心から外れ、刀を振るう。

捉えた。

確かにそう思った。

しかし、マールロウは、眉ひとつ動かさず、刀で防ぐ。

「それで、とつたつもりか……」

マールロウは、そのままローズの腹を蹴って距離を空け、刀を後ろに弾き飛ばされるローズに構える。

「馬鹿弟子」

そのままマールロウは、瞬迅剣を放った。

（———つつう！重い！）

刀を交差し何とか防ぐ。

先程自分が放ったのとは、比べ物にならない重さの一撃だ。

男女の差、体格の差、それを差し引いたとしても埋まらない、及ばない実力。

自分と同じ技。

だからこそ全てをローズは、実力の差を悟ってしまった。

「おい、へばるなよ」

そう言つてマールウは、刀を構える。

「まだまだ、行くぜ」

そう言つて刀の突きを無数に繰り出す。

「散沙雨!!」

連続のローズを上回る突きの速さと量、そして、威力。

「ぐっ!」

何とか捌き、防ごうとするが、マールウの突きの速さと量がそれを許さない。

防げども、捌けども一向に減らない突き。

既に何発もローズの身体をかすっている。

しかし、マールウは、攻撃の手を緩めない。

「秋沙雨!」

それどころか寧ろ突きの量が増えた。

「ぐっ!」

遂にローズの防げる量を完全に超えた。

かするどころでは済まない刀傷がローズに刻まれていく。

羽織は、切り傷だらけになっており辛うじて羽織という形を保っている。

マーロウは、突きを繰り返し終えると刀を持ち変える。

そして、

「鳴時雨!!」

先程ローズが出そうとした技をマーロウは、放った。

この技は、突きだけではない。

無数の横薙ぎも混ざる。

「——つづああ!!」

マーロウの斬撃がローズを襲う。

辛うじて羽織のだったものは、布切れと代わり、ローズは、至る所から血が流れる。

「ローズ!!」

エリーゼは、思わず叫んだ。

レイアがその声で振り返るとそこには、

技を喰らうと前のめりに倒れていくローズの姿があった。

「ローズ!!」

近づく地面を見ながら、ローズは思い返していたを

瞬迅剣を食らった時、いや、もつと言えば最初からこうなる事ぐらい分かっていた。自分がマーロウより強いわけがないのだ。

仮にも自分の師匠だ。

手合わせだつて、何度したか分からないし、その度に数え切れない程負けている。

だからこそわかる。

(勝てるわけがない……………)

そしてローズは、歯を食いしばり、前にダンつと強く踏み込んで倒れないよう耐える。倒れなかったローズにマーロウは、少なからず驚く。

「でも……それがなんだっ!なんだつて言うんだっ!!」

ローズは、そう言つて刀が手から落ちないよう力を込め、マーロウの腹を蹴る。

思いがけない攻撃にマーロウは、思わず後ろに下がる。

「女にだって、負けると分かっているもやらねばならない時がある!!」

ローズは、そこで顔を上げ、キッとマーロウを睨む。

とても瀕死とは、思えない迫力にマーロウは、思わずこんな時だというのに弟子の成長を喜んだ。

ローズは、言うだけ言うと刀を二本仕舞う。

マーロウは、眉を潜める。

「抜刀術か………なけなしの速さにかけるって訳だな」

そう言うとマーロウは、ローズを指差す。

「だがよ、お前、その満身創痕で、満足のいく速度が出せんのか？」

ローズは、身体から血が流れ、ほぼ意地だけで立っている。

「出すわ。その為に、私はここにいます」

迷いなくローズは、そうマーロウに告げ、剛照来をする。

マーロウは、その言葉を聞くと二刀を構え、そしてローズに向かって駆け出した。

ローズは、静かにマーロウを待つ。

本来なら、ローズも走って迎え撃つ所だが、生憎満身創痕の為そんな事に回せる力はない。

だが、それでもローズに迷いはない。

自分のやるべき事が分かっているのだ。

だからこそ、不安はあれど迷いはない。

マーロウがローズの間合いに入り刀を振り被る。

ローズは、それを見切ると刀の鯉口を切る。

抜刀されたローズの刀は、キーンと高い音を立ててマーロウの二刀の内一つを捉える。

そして、ローズの刀はマーロウの刀を折って進む。

「っはあああああー！」

ローズの刀は、マーロウの二刀目を捉えた。

しかし、マーロウの二刀目は、折れることはなく、逆にローズの刀が真つ二つに折れた。

一刀目を折るのに全ての速さと力を注ぎ込み、遂にもう一刀折ることは、叶わず、逆にローズの刀が折れてしまった。

無情な結果を見届けるとマーロウは、刀を返す。

「うっー」

それによりローズは、姿勢を崩し膝をつく。

マーロウは、折れて柄だけになっている刀を捨てる。

そして、俯くローズにもう片方の手にある刀を構える。

ローズは、刀を全て破壊する事叶わず、満身創痍。

もう一度抜刀するには、抜きづらい右腰の刀。

おまけに、ローズの右手にあるのは刃の折れた刀。

どうやっても間に合わない。

勝敗は、決した。

筈だった。

ローズは、雨に打たれ、今にも消えそうだった姿から一変した。
キツと顔を上げると左手に折れた刀の刃を素手で持ち、マーロウに突進する。
「っあ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ!!」

精一杯叫ぶと、ローズは、そのままマーロウの右手に刀を突き刺し、崖の壁に叩きつける。

「ぐっ!!」

マーロウもこの攻撃は、予想外だったようだ。
驚いて目を開く。

「……………ヨルが言ってた」

ローズは、マーロウの右手を見ながら言葉を出す。
マーロウの掌には、何らかの文字の入れ墨があった。

「……………掌に精霊術の詠唱を書いてあるって。

片手じゃたりないから、両手にある。それをマナを込めながら合わせて精霊術を発動させて、マールロウさんの家にある武器を引つ張り出して……。

まあ、代わりに一つの精霊術しか出せないそうですけど」

マールロウは、それを聞くとニヤリと笑う。

「なるほど、お前は最初からそれが狙いで負けると決まっている勝負を挑んできたのか」

「言つたでしょう。『女にだって、負けると分かっているもやらねばならない時がある』って」

「なるほど……」

マールロウは、そう言つて自分の弟子を見る。

よくやったものだと言ふと褒めなくなる。

だが、残念ながら、まだ足りない。

肝心の事をローズは、忘れているのだ。

「……………そう。お前の言う通り。」

俺はこいつのおかげでこんな無茶苦茶な精霊術が出せる。

ま、代わりに他の精霊術は、使えないんだがな」

マーロウは、そう告げるとローズの腹を蹴りローズを後方に下げる。

ローズは、内側に響く鈍い痛みと刀傷を抉られた鋭い痛みが襲う。

「——っ!!」

耐えながらマーロウを睨む。

マーロウは、刀を引き抜き無表情で血だらけの右手を見せる。

「そう、こいつがあつたせいで、な?」

そう告げるとマーロウから、マナが溢れ出た。

(ヤバイ!!)

ローズは、マーロウの言葉の意味に気づいたが、遅かった。

ローズの足元に風の陣が出来上がっている。

「ぶっ飛べ……アリーヴェデルチ!!」

忘れていること、すなわち、誰がローズに精霊術を教えたか、という事だ。

突風が、上空に向かって吹きローズの身体は宙に舞い上がった。

そう、マーロウは、あの精霊術を使える代わりに他の精霊術が一切使えなかった。当たり前と言えれば当たり前である。

常に別の精霊術の詠唱をしているというのに、他の精霊術を使えるわけがない。

しかし、ローズの捨て身の攻撃のおかげで両手にあつたマーロウの精霊術は、終わった。

代わりに、今まで何一つ発動が許されなかつた精霊術に発動の許しを与えてしまったのだ。

ローズを襲つた浮遊感。

宙を舞つたら次に待つのは重力による落下のみ。

ローズは、目を閉じて落下の衝撃に備える。

しかし、その衝撃は自分の想像していたものより遥かに柔らかいものだった。優しく何かに包まれる感覚と言ってもいい。

不思議に思い目を開けると、そこには、ホームズの顔があつた。二つの碧い瞳が印象的だ。

「よくやった、ローズ……後は、任せたまえ」

ホームズは、抱きかかえているローズに言葉をかけた。

減らず口を叩きつける

「エリーゼ、レイア、ローズを頼むよ」

ホームズは、ローズをレイアに渡す。

レイアは、無言で頷く。

「分かりました」

『任せろー!』

エリーゼとティポからも返事を聞くとホームズは、ポンチヨを翻しマーロウと向かって歩き出す。

「ホー……………ムズ……………」

そんなホームズの背中にローズが息も絶え絶えに言葉かける。

「……………がんばれ」

雨音に掻き消せられてもおかしくないほどのか細い声の応援。

ホームズは、一瞬だけ動きを止め、右手をひらひらと振って返す。
どうやらホームズには、届いたようだ。

マローウは、近づいてくるホームズとヨルを見ると納得した顔をする。

「なるほど、最初^{ハナ}から、これが狙いか」

ローズの捨て身の攻撃により、武器を取り出す精霊術は、使えない。では、代わりに精霊術をと思ってもヨルがいるためこれも使えない。

ローエンの術を見るまで、レイとフォトンしか使えなかったローズを見れば分かる通り、マールウもご多分にもれずその程度しか使えない。

その程度の術ならヨルに食われてしまう。

ホームズは、そんなマールウに構わず肩をすくめる。

「金棒持った鬼と戦ったって勝てませんからね」

「ローズを捨て石にしたのか？」

ホームズは、冷めた目でマールウを見る。

「あんまり下らないこと言うと怒りますよ」

マールウは、きよとんとした顔をするが直ぐに面白そうに笑う。

「なるほど、そりやそうか……バトンを繋いだ奴を捨て石というのは、侮辱だわな」

マールウは、そう言つてやれやれと深いため息を吐く。

「つたく、俺が意地の張り合いにそんな無粋なことを言う日が来るとは思わなかったぜ。歳はとりたくないもんだ」

「年寄りに激しい運動は、毒です……どうです？諦めてそこを退いてくれませんか？」

ホームズは、馬鹿にした様にマールウに言う。

マーロウは、言葉を鼻で笑うとホームズの右手を指差す。

「年寄り相手に震えてるくせに何を言ってるやがる」

ホームズは、さも今気づいたように震えている右手を見せる。

「ああ、これの事ですか？」

そう言つて、右手を見た後、マーロウを見る。

「知らないんですか？今、若者の間で流行っているんです。

こうすると、身体が温まるんですって。お手軽準備運動ですね」

「くくく、なるほど」

「フフフ、一つ賢くなりましたね」

そう言つると二人は笑い出す。

「くくく」

「フフフ」

「クハハハハハハ」

「フハハハハハハ」

雨に打たれ笑い出す二人。

『どうしたんだー!!』

ティポの言葉には、耳も傾けず、更に声をあげ、笑う二人。

「ガハハハハハハハハハハ」

「アハハハハハハハハハハ」

そんな二人をレイアとエリーゼは、息を飲んで見守っていた。

「ダ————ハッハッハッハッハア！」

二人は、足元の水を飛ばし同時に踏み込む。

水飛沫が立ち昇る水飛沫は、二人の姿を遮る。

立ち上る水しぶきが晴れると、そこには、お互いの手を掴みあっている二人がいた。

「相変わらず、嘘が下手だな。」

そんな健康法聞いたことねーぞ」

「流行っているのは、若者の間ですからね。」

年寄りが知らなくたって当然です」

二人は、歯を食いしばりながら、軽くを叩き合う。

「ハーン！言ってる」

マーロウは、鼻で笑うとそのまま手に力を入れ、ホームズを崖に向かって押す。

「!!」

「そんな……ジャオさんを投げ飛ばしたホームズに……」

『力勝負で勝ってるー!?!』

ホームズは、耐える事が出来ず、じわじわと後ろに押されていく。

(くそっ!!)

「世話の焼ける奴だ」

ヨルは、ため息混じりにそう言う。地面の水たまりを尻尾で叩きつけ水しぶきをマー

ロウに飛ばす。

(目潰し!?)

思わず怯んだマーロウにホームズは、蹴りを叩き込み距離を取る。

「んの……相変わらずだな」

マーロウは、目を手で拭くと呆れながらそう言葉を吐く。

「お褒めに預かり、ども」

ホームズは、詫びれもせずさらつと返し、回し蹴りローズに貫かれ激痛を伴っている右手のある側面に向かって叩き込む。

それをマーロウは、腕を盾にし受け止める。

手応えは確かにあつた。

しかし、マーロウは、ピクリとも動かない。

ホームズは、少し驚くと直ぐに顔を顰める。

何と無くでは、あるが予想はついていたのだ。

「いい蹴りだ」

マーロウは、そう言うのとホームズの足を掴む。

「褒める程度にはな」

そう言つてホームズを振り回し、壁面に向かって投げ飛ばす。

背中に走る硬い衝撃に思わず息がつまり、壁に背を預け座り込む。

「ホームズ!!」

思わず駆け寄ろうとするレイアをホームズは、右手を前に出し止める。

ホームズは、もう片方の手で顔を押さえ、何とか意識が飛ばないように抑え込む。

「……君は……君達は、ローズ達の治療をしていたまえ」

「でも!」

「……さっき言ったことをもう忘れたのかい」

ホームズは、ゆっくりと崖の壁から背中を離す。

「君は、今出来ることをやりたまえ」

ゆっくりとしかし、確実に立ち上がる。

「おれも今出来ることやる」

立ち上がったホームズは、マーロウを睨みながらそう告げる。

ヨルは、鼻で笑う。

「瀕死程度にやれよ」

「心配してくれて嬉しいよ」

ホームズは、ニヤリと笑いマーロウに向かって駆け出す。

駆け出したホームズから、マーロウの顔に向かって右手を伸びた。

このままでは、マーロウの顔にアイアンクローが決まる。

しかし、マーロウは、避けるそぶりを見せない。

代わりにホームズの右足を踏みつけた。

「!?」

「右手はフェイク。本命は、蹴りこっちなんだろ」

そう言つてマーロウは、左拳を固め、ホームズに向かって左フックを放つ。

左フックは、ホームズのもつとも防御の薄いある右に向かつて放たれた。

左フックは、ホームズの顔を捉える。

完全に口の中が切れた。

目を回してもおかしくない拳にホームズは、意識を飛ばさずマーロウに向かって右手を伸ばし、顔を掴む。

「叩きつける!!」

ホームズは、そのままマーロウを地面に向かつて叩きつけた。

泥水を上げ、マーロウは、倒れこむ。

ひっくり返つた天地に驚いたが直ぐにマーロウは、原因に目を向ける。

原因は、直ぐさまマーロウの腹を渾身の力を込めて踏みつけた。
ホームズ

その容赦も慈悲もない一撃にレイアは目を剥き、エリーゼは、顔を逸らす。

踏みつけられた事により、マーロウの胃の内容物が逆流し、口から溢れ出る。

ホームズは、踏みつけの一撃を決めると直ぐに距離を取った。

「やった？」

「いや……………」

その光景を見て、レイアは、ホームズに尋ねる。ホームズは、口の中に溜まった血をぺつと吐き出して警戒する。

ホームズの予想通りマーロウの手が直ぐにピクリと動いた。

倒れたマーロウは、ゆっくりと動く。

「……………なるほど、その馬鹿猫がおれのフックの威力を殺したわけか」

マーロウは、口を拭うと立ち上がる。

そして、顔を上げ、ホームズを見る。

「おしかったな、あと一息だった」

マーロウは、ホームズに踏みつけられた腹を触りながら更に言葉を続ける。

「……………なあ、一つ聞いていいか？」

ホームズは、答えない。

それをマーロウは、了承と取ったのだろう。

「なんで、あそこで獅子戦哮や爆碎陣をしなかったんだ？」

マーロウは、更に続ける。

「それと、何でヨルの黒い球を使わないんだ？」

そう言って、マーロウは、傷だらけのホームズを指差す。

「そんでよ、何でおれが起きるまでの間、守護方陣を使ってないんだ？」

いや、迂闊に攻撃出来ないってのは、分かるんだがよ……回復をしない理由は、ないよな？」

マーロウの質問にホームズは、答えない。
否、答えられない。

そんなホームズを無視してマーロウは、最後の言葉を告げる。

「お前、技を出す気力残ってないだろ？」

ホームズは、何も言わない。

しかし、それが全てを物語っていた。

そう、ナハティガルとの戦いで、ヨルにあるだけの黒い球を作らせたので、もうヨルに黒い球を吐き出す気力は、ない。

そして、ナハティガル戦、ジャオ戦、そして、ミラ達との合流までにホームズは、力を使い過ぎてしまっていた。

先程の剛照来が最後だったのだ。

更に言うなら、グミもない。

それは、ホームズの腰にあるかさの減った袋が物語っていた。

蹴飛ばし、掴み叩きつける。こんな事ぐらいしか、今のホームズには出来ない。

その状態で化け物マロウと戦うなんて死に行くようなもの、いや、自殺と一緒だ。

マロウは、呆れたようにため息を吐く。

「お前、そんな状態でよく俺に挑もうと思ったな」

そう言ってマロウは、グミを口の中に放り込む。

ホームズは、どうでも良さそうに肩をすくめる。

「別に、どうだっていいでしょう？ それよりも……」

「それよりも？」

「口臭いんで黙ってもらえますか？」

ホームズは、馬鹿にしたように嘔吐したマーロウに言う。

マーロウは、ホームズのその強気な台詞を聞くとため息を吐いて笑う。

「……つとに、可愛げのないやつだよ、お前は」

「何ですか？おじいちゃん、お小遣いちょうだいとでも言えはいいんですか？」

ホームズがそう言った瞬間マーロウは、近くに落ちていた籠手をホームズに向かって投げる。

ホームズは、首を少し傾げてかわす。

「前に言ったよな? 『次は当てる』って」

「外してから言っても説得力ないですね」

ホームズは、馬鹿にしたように笑う。

そんな減らず口を叩きながらホームズは、雨のせいで分かりづらいが冷や汗をかいていた。

マーロウの実力は、自分の母親には、及ばない。

それは、分かっている。

しかし、それでも、それが弱いということにはならない。

元々、比べる対象が間違っている。

百と二百を比べて、百の方が小さいと言っているようなものだ。

ホームズは、静かに身構えるとマーロウを睨む。

マーロウもそれに対応する様に構え、今度はマーロウから先に仕掛けてきた。

振りかぶられたマーロウの拳をホームズは盾で受ける。

とても拳と盾がぶつかったとは思えない音が鳴り響く。

「ぐっ!!」

ホームズは、何とかマーロウの拳を受け切った。

しかし、化け物にギリギリ及ばない程度の人間が、その程度で終わるわけが無い。

「獅子戦哮!!」

突然現れた鬨気の獅子にホームズは、地面に打ち付けられる。

「紅蓮拳つ!!」

そして、マールロウは、そのまま紅蓮の炎を纏いホームズに向かって振り下ろす。

ホームズは、何とか身体を捻ってかわす。

しかし、地面は弾け飛び、ホームズは、吹き飛ばされる。

「つ、くそつ!!」

ホームズは、巻き込まれながら立ち上がる。

そこにマールロウは、更に追撃を仕掛ける。

「三散華!」

拳と蹴りの混ざった三連撃が、ホームズを襲う。

「つつつ!!」

痛む身体を抑えて、ホームズは踏ん張ると回し蹴りを放つ。

マールロウは、静かに構えて捕まえ、拳をホームズの蹴りに向かって放つ。

「幻竜拳!!」

ホームズの足に衝撃が響く。

ホームズは、そのまま倒れこむが、身体を回し、何とか立ち上がる。

そこにマーロウは、更に追撃を仕掛ける。

「瞬迅脚」

崩れた姿勢のまま腕を交差しホームズは、受け止めた。

後ろに後退もせず、仰け反る事もせず、ホームズは受け切った。

マーロウもまさか受けきるとは思わなかったのだろう。

驚き目を少しだけ見開いている。

しかし、それだけでは終わらなかった。

ホームズのリリアルオーブが光ったのだ。



『いいかい、二人ともそのまま、耳を傾けておくれ』

ホームズは、剛照来のおかげで比較的ダメージが軽く、直ぐに意識を取り戻した。しかし、他の面子は、残念ながら意識が戻るには、まだ治療が必要だ。

『次、マーロウさんと戦うのは、おれだ』

そう言って、ホームズは、二人を見る。

『でもね、ヨルは黒球を吐き出せないし、おれにも技を出すだけの気力はない』

『ちよつと、そんな状態であのマーロウさんに挑むの?!』

レイアは、あり得ないと言う口調だ。

治療で回復できるのは、怪我ぐらいだ。

残念ながら、技を出す為の気力までは回復出来ない。

『仕方ないだろう? ヨルの黒球は全部ナハティガルの時に使っちゃったし、守護方陣・

改(仮)もすつごく力使うし……』

『だったら、グミを食べてからにして下さい』

エリーゼの言葉にヨルは、ホームズズの腰にある袋を逆さまにしてみせる。袋からはなにも落ちてこない。

確かにナハティガル戦の前までは沢山あった。

エリーゼに渡す余裕まであつた筈なのだ。

しかし、今、そこには何も無い。

『まさか……』

レイアの言葉に、ヨルは、頷く。

『前にも言ったろ、あそこを通るのは、無茶とかそういうレベルの話じゃないんだ』

ファイザバード沼野を突き抜ける時に全ての回復道具を使ってここまで来たのだ。

『だったら、私のあげま……』

そう言って取り出そうとするエリーゼの手をホームズズが止める。

『それは、君のだ。いいかい、君達はここにいるみんなを回復させなくちゃいけない。

その為に、それは必要なんだ』

『でも、それだったら、ホームズズはどうするの?』

レイアの言葉にホームズズは、考え込む。

『協力してもらえる?』

その問いにレイアは、首を横に振る。

『頼み方が違うよ、ホームズ』

ホームズは、静かに目を閉じ開ける。

『レイア、君の力を貸しておくれ』

『いいよ。どんな無茶振りにも応えてあげる』

レイアは、満面の笑みで、そう答えた。

ホームズは、それを聞くと少しだけ笑ってエリーゼとレイアを見る。

『考えがあるんだ。その時にまた指示を出す。』

その代わり、それまでは君達は、今出来ることをやっておくれ……そう、治療をね?』

ホームズは、直ぐに真剣な顔になり、レイアとエリーゼに告げる。

二人は静かに頷いた。

『それで、ホームズ、作戦って?』

『ああ、それはね……』



「エリーゼ!!今だっ!」

ホームズのリリアルオーブが、エリーゼと共鳴する。

『すつてー!!』

ティポの言葉と共にマーロウから力が抜ける。

『あげるー!!』

今度は、ホームズに向かって放つ何かを吐き出す。

ホームズは、ニヤリと頬を吊り上げる。

マーロウは、その瞬間、何が起こったか悟った。

エリーゼの固有リンクサポート、ティポドレインだ。

「……………てめー、俺の力を?」

それは、相手の力を共鳴相手に移すことが出来る。

「レイア!!」

ホームズは、マーロウの言葉を無視してエリーゼとの共鳴を切つて、レイアと結ぶ。

「任せて!」

ホームズは、崩れた姿勢を立て直す。

「行くぜ! 転泡!!」

そして、下段回し蹴りをマーロウに放った。
下段蹴りを食らったマーロウは、背中から落ちる。
その瞬間、レイアの棍が軽く宙を舞う。

「いいものとりれた♪」

レイアの固有リンクサポート、アイテムスタイル。

ダウンした相手からアイテムを奪う。

レイアが今回奪ったのは、

「パイングミ!?!」

マールウは、自分の手元から離れていくパイングミを信じられないという顔で見る。そう、ホームズだつてワーストコンディションで挑もうと思うほど、間抜けではない。だから、マールウから武器を奪い、そして、自分の武器を復活させたのだ。エリーゼとレイアの固有リンクサポートを使って。

更に目指すべきタイミングは、マールウがホームズの状態を看破した後出なくてはならない。

でなければ、不意をつけない。

人間は、他人が教えたものよりも自分でたどり着いた答えを信じる。だからこそ、それが間違いだと気付いた時に、確実に動揺が走る。

実力で圧倒的に負けるホームズは、それでもして相手の隙を討つしかないのだ。

慌てて取ろうと立ち上がるが間に合わない。

マーロウの手から離れたパイングミは、そのままホームズの元へ渡った。

ホームズは、ニヤリと笑って、パイングミを噛み、飲み込む。

その一連の動作の間に右足を後ろに引き紅蓮の炎を纏う。

「紅蓮脚!!」

立ち上がったマーロウにホームズは、紅蓮に燃える蹴りをぶつける。

「ぐっ!!」

熱と痛みでマーロウの意識が思わず飛びかけた。

そこに更に踏み替えたホームズの左脚が、マーロウを襲う。

「獅子戦哮!!」

鬨気の獅子が、マーロウを大きく吹き飛ばし、壁にぶつける。

その衝撃で、舞い上がる水しぶきと泥水。

マーロウが離れるとホームズは、守護方陣を発動する。

ポンチョが舞い、ホームズの傷が少しずつ治っていく。

「さあて……仕切り直しだ」

青白い光に照らされる碧い瞳をマールウに向け、ホームズはそう言い放った。

鎗が削れる

「やってくれるじゃねーか……」

マールウは、立ち上がりながらホームズを睨む。

不意打ちからの連続の攻撃による火傷と打撲が、マールウの身体に響く。

対してホームズは、守護方陣により回復している。

技を出す気力が回復し、ホームズのダメージは、減っている。

マールウとホームズのコンディションは、完全に逆転した。

「一杯食わされたわけか……」

マールウは、そう言つて腰を落とす。

「剛招来」

静かにそう告げ、マールウから赤い蒸気が発せられる。

その威圧感にホームズは、唾を飲む。

確かに状況は、ひっくり返った。

しかし、マールウのタチの悪い所は、それでもホームズに勝利の確信をもたらせない

ところだ。

ヨルは、ホームズの肩からマーロウを睨む。

「根性見せたまえよ、ヨル」

「ああ。ここまでできたならそれしかないな」

ホームズは、腰を落とし、気合を込める。

「剛照来」

二人は、睨み合う。

そして、

「魔神拳！」

先に動いたのは、マーロウだった。

地面を這う拳の衝撃波がホームズに襲いかかる。

「爆碎陣！」

ホームズは、地面を踏み付け、爆破させる。

爆発の衝撃と、マールウの衝撃波がぶつかり合い、水しぶきが立ち上った。

「うおっ！」

立ち上る泥水の水しぶきは、壁となり二人を遮った。

「獅子戦哮・氷牙!!」

その壁をマールウの放った凍気の獅子が食い破る。

元々凍気の塊の為、水しぶきを凍らせ更に巨大になって、ホームズに襲いかかってきた。

「水には、負けるけど………」

ホームズは、そう言いながら、炎を纏う。

「氷に負けるわけないだろう？」

ホームズの炎を纏った蹴りが凍気の獅子に襲いかかる。

「獅子戦哮・焰!!」

炎の獅子は凍りの獅子を食い尽くした。

氷の獅子は溶かされ、水蒸気となつて辺りを埋め尽くす。

マールウは、水蒸気を掻き分け、ホームズに殴りかかる。

ホームズもそれに対応するように蹴りを繰り出す。

マールウの拳とホームズの脚がぶつかり合い轟音が響く。

「つつー！」

「くっ！」

ホームズとマールウは、それぞれ拳と脚を離す。

ホームズは、齒をくいしばると脚を踏み替える。

「輪舞旋風!!」

風を纏つた回し蹴りをホームズは、マールウに放つた。

マールウは、それを屈んでかわす。

そして、マールウはそのままアツパーを繰り出す。

ホームズは、アツパーが辿り着く前に両足を地面につき、上体を逸らしてかわす。

そして今度は逆足でマールウに蹴りを放つ。

左手でアツパーを放ち無防備な状態、そして、ローズの攻撃により右手に怪我を負つ

ているマールウへの右側からの攻撃。

間違いないベストな攻撃だった。

しかし、マールウは平気な顔でホームズの攻撃を右腕で受けた。

腕で受けたとは言え、衝撃は右手の傷に響く筈だ。

だというのに、マールウは平気な顔をしている。

ホームズは、目を向き、直ぐに納得する。

自分の母と並ぶくらい化け物なのだ。

常識が通じないのは当たり前だ。

ホームズは、脚を掴まれる前に距離を置く。

マールウは、静かにしやがみ、そして地面を掴み、黒い紐を引っ張り上げる。

「ヨルの尻尾か……成る程、今のやりとりの間にこんなものを仕込んでたわけか。

ご丁寧に俺の脚にまで巻きついてやがる……」

ヨルは、顔色を変えず、（まあ元より黒いので変えようはないが……）尻尾を短くして自分の元へ戻した。

ウインガル戦の時で学習済みだ。

不意を突くならともかく、もう、ばれている状態で、しかも掴まれてしまえば不利な要素しか残らない。

「賢いな、ヨル」

「何年生きてると思ってるんだ」

ヨルは、吐き捨てるように言いながら、考える。

マールロウの武器を呼び出す精霊術をローズが潰し、そして、普通の攻撃の精霊術をヨルがいることで封じている。

拮抗はしている。

しかし、それは逆におかしい。

不意をついたとは言え、ミラ達を一瞬の内に倒した化け物じみた実力の持ち主にヨルの力を使わず拮抗している。

ローズも何とかマールロウに食らいついていたが、それでも一撃を入れるのが手一杯だった。

「きつと、勘のいい君の事だ。気づいているだろう？」

ホームズは、ヨルにそう言う。

「まあな」

(消耗が半端じゃないな)

ホームズの息は今さっきに戦い始めたというのに既に上がっている。

馬鹿な発言が多くて忘れがちだが、ホームズは頭が悪いわけじゃない。

今回ホームズは、誰よりもマーロウの規格外の強さを理解していた。

その為マーロウに対する恐怖も人一倍だ。

更にマーロウから発せられるプレッシャーも尋常ではない。

そして、もう一つ、ホームズの戦い方だ。

ホームズは、普段の実力以上の力で戦っている。

この戦いで何かを犠牲にする様な勝ち方は、残念ながら通用しない。

より正確に言うなら犠牲にする物を選ばなければならない。

例えば、腕とか腹とかは論外だ。

そんな事をしてしまえば、確実にマーロウはそこを尽く。

もつと言うならそんなハンデを持ってしまえば、ホームズに勝ちはない。

犠牲にする物を間違えた時点で、ホームズの勝ちが確実に無しになる。

だからこそ、ホームズは体力を犠牲にし実力以上の力を出している。

これで、消耗するなという方が無理である。

詰まる所、先程の不意打ちにつけこんでダメージを食らわせ、ボロが出るまえにケリをつけるしかない。

しかし、中々攻撃が通らず、更に体力は、消耗していく。

ヨルもそして、マールウもそれを見抜いている。

「……相変わらずのやせ我慢だな」

「さて、どうでしょう?」

ホームズは、そう言うのと脚を振り被る。

マールウも同じように拳を握る。

「三散華!!」

拳と脚。

三つの連撃は、それぞれ激しくぶつかり合う。

態勢を崩したのは、ホームズだ。

マールウはその隙を逃さない。

拳をもう一度振り被る。

「——っ！」

ホームズは、慌てて盾を正面に構える。
マーロウは、それに構わず盾を避け、

ヨルを思い切り殴りつけた。

「——っ！」

ヨルは、そのまま殴り飛ばされ、地面に叩きつけられた。

「ヨル!!」

ヨルは、ピクリとも動かない。

幸いホームズはまだ生きているので、ヨルも死んだわけでは無さそうだ。

しかし、ホームズのアドバンテージは一つ消え、マーロウに一つ戻る。

つまり、

「切り裂け、ウインドカッター」

マーロウの精霊術の復活だ。

「ぐっ!」

風の刃は、ホームズに容赦なく襲いかかった。

何とか距離をとつたので、急所こそ外れたものの、左肩から吹き出す血を見る限り無事とも言い難い。

ホームズは、左肩を抑えながら立ち上がる。

「距離をとつたな？」

マールウは、そう言つて更に詠唱を始める。

「来いっ！フレイムドラゴン！」

炎の龍は、唸りを上げホームズに向かつていく。

「んのっ！」

ホームズは、脚に炎と闘気を纏う。

「獅子戦哮・焰！」

ホームズの脚から放たれた炎の獅子が炎龍に襲いかかる。

炎龍は、炎の獅子を物ともせず食ひ殺し、ホームズに襲いかかった。

「——がアッ！」

熱という熱がホームズを襲う。

一瞬でも気を抜けば、そのまま全てを焼かれそうだ。

もう完全にマールウの独壇場だ。

ようやくホームズの舞台に引きずり込んだと思つたのに、また逆転してしまった。

「———っ！守護方陣!!」

炎に焼かれながらホームズは、地面を強く踏み込み守護方陣を発動させ、何とか炎を退ける。

「……驚いた。まさか耐えるとはな」

マールロウは、目を丸くし、心底驚いたようだ。

「危なかつたです。危うく禿げるとでした」

ホームズは、へつと笑う。

「相変わらず、口の減らない奴だ」

マールロウは、やれやれとため息を吐く。

「大方、他の連中が起きるまでの時間稼ぎのつもりだつたんだろうが……」

そう言つてホームズを指差す。

ホームズの肩にはマールロウの精霊術を封じていたヨルは、いない。

「どうするんだ、お前」

「……貴方に言う必要はないでしょう?」

ホームズは、震える肩を抑えそう言い返す。

「強がりだけは、一人前だな」

ホームズは、ニヤリと負け惜しみの様に笑う。

「自分より強い奴と戦うんです……強がらなくてどうするんです?」
そう言つてちらりと後ろを見る。

レイアとエリーゼは治療を続けているが、まだ誰も意識を取り戻していない。
ホームズが負ければ、その時点で負けは濃厚だ。

ホームズは、パンと頬を両手で挟む。

「……………まあいい。ここからが本番だ」

静かにホームズは、震える声を必死に抑えてそう言い放った。

不安もある、恐怖もある、心細くもある。

しかし、ホームズはそれを全て自覚しそれでもマーロウの前に立ちはだかる。
そんなホームズを見てマーロウは、満足そうに笑うともう一度構えた。

マーロウの舞台から飛び降りる

『圧倒的に強い奴に負けない方法?』

ホームズの母は、もぐもぐとピーチパイを食べながらホームズの質問を復唱する。

『そんなの簡単だよ。戦いになる前に逃げればいいんだよ』

『……………聞き方が悪かったよ。どうすれば強い奴に勝てるんだい?』

ホームズは、頬を引きつらせながらも一度尋ねる。

ホームズの母は、ふむと考え込む。

『質問を質問で返すようであるけれど……………いや、君相手だったら別にそうでもないな……………まあ、それはともかく。試合でかい?それとも戦闘でかい?』

ホームズは、腕を組んで考え込む。

『……………せっかくだし両方教えておくれよ』

ホームズの母は、新しいピーチパイのピースに手を伸ばし手づかみで食べる。

『OK。まず、試合。この場で言う試合つてのは、ルールのある競技のことだけど、その場合、そんな奴に勝つなんて無理だね』

ホームズの母は、あっさり言い放った。

『えっ？それじゃ努力するだけ無駄じゃないか』

『馬鹿言え。みんなその『強い奴』になりたいから努力するんだよ』

ホームズの母は、当たり前のように言うともぐもぐと食べる。

『試合つてのは、ルールの上で勝ち負けを競うものだ。』

ルールで勝ちをとればそれで話は終わり。

逆にルールをおかせば負けることだってありえる。わかるね？』

『まあね』

『それぞれの競技でそれぞれの選手は、ルールの試合で勝つ為に努力をして強くなる、そんな奴に弱い奴が勝てるわけないだろう？』

ホームズの母の言い分にホームズは、こくりと頷く。

『ま、戦略がものという勝負は例外だけどね』

『じゃあ、戦闘は？』

ホームズの母は肩を竦める。

『単純に戦闘不能にすれば勝ちだ……どんな手を使おうとね？』

ホームズの母は、ニヤリと底意地の悪い笑みを浮かべる。

『食ベカスついでるよ……』

ホームズが呆れた声を出すとホームズの母は、何てことなさそうに口元を拭く。

ホームズが一切れ食べる間にホームズの母は、既にふた切れを食べている。その食事のスピードにホームズは、若干引く。

『ただし、それでも圧倒的に強い奴が勝つてことの方がほとんどだよ……ね、ヨル？』

『何で、俺に話を振るんだ……』

ヨルは、忌々しそうに言う。

『別にいいじゃないか、経験豊富な化け物に聞いておきたいんだよ』

『……お前の言い分に賛成するのは、忌々しいが、その通りだな』

ヨルの言葉にホームズの母は、うんうんと頷く。

『強い奴に勝つ方法なんて幾らでもある。』

けれど、圧倒的に強い奴に勝つてのは、ほとんど確率だよ』

そう言うてホームズの母は、これで話は終わりと云わんばかりにピーチパイに手を伸ばし、口に運ぶ。

ホームズは、なるほどと母の言い分に納得仕掛けるが直ぐに首を横に振る。

『いや、じゃなくて！そう言う圧倒的に強い奴に勝つ方法を教えてって言うてんの』

ホームズの母は、ピーチパイを口に運ぶのを止めるため息を吐いて答える。

『簡単だよ。ミスをしなればいいんだよ』

『馬鹿なことをいうもんじゃないよ』

瞬時に返したホームズにホームズの母は、くくくと面白そうに笑った。

『それを瞬時に理解するのは、君の頭のいいところだけど、その夢のないところは残念なところだねえ……そんなんだと、モテないよ』

『うるさいなあ……』

若干傷ついた様子の子のホームズをヨルとホームズの母は、面白そうに笑う。

ホームズの母は、一頻り笑った後、肩を竦める。

『ま、冗談はともかく。そう、ホームズの言う通り、戦いに置いてミスをしないうなんて無理だ。』

そして、ついでに言うならこれは必要条件であつて、十分条件ではない』

『十分条件は？』

『戦略だね』

ホームズは、頬が引きつるのを感じる。

『ミスをせず、戦略を立てろだつて？ほとんど無理じゃないか』

『だから、最初にも言ったし、前にも言ったろう？』

ホームズの母は、そう言つて最後の一口を飲み込む。

『逃げろって』



「貫け！フリーズランサー!!」

短い詠唱からは、信じられない速度で氷の矢がホームズを襲う。

「ぐっ!!」

躲しきれなかったホームズは、氷の矢の餌食になる。

氷の矢が肩に突き刺さる。

「ナメるんじやあない！」

ホームズは、そう言つて腰を落とす。

「剛招来！」

ホームズの体から赤い蒸気が吹き出し氷の矢を溶かす。

そして、ホームズはマールウに向かって駆け出した。

マールウと距離があるこの状況は、ホームズに取つて不利だ。

何せ、ホームズには中遠距離からの技がない。

せいぜい、ヨルの尻尾で縛り上げる程度だ。

つまり、距離が離れてしまえば精霊術の詠唱を邪魔する手がない。

そして、更に達の悪いことにマールウの詠唱は極端に短い。

こんな距離で精霊術を連発されてしまえば勝ち目は、薄くなる一方だ。

「ま、悪くはない」

マールウは、そう言つて手をかざす。

「ストーンブラスト」

一言告げた瞬間、ホームズの足元から石が現れホームズに向かって打ち上がる。

傷口に容赦なく石が襲いかかる。

しかし、ホームズは歩みを止めない。

(つーか、絶対止まるともつと酷いに決まってる！)

ホームズは、そのまま石の壁を通り抜け、マーロウに向かって蹴りを放つ。

ホームズの蹴りは確かにマーロウを捉えた。

しかし、マーロウは、眉一つ動かさない。

「身構えてりやダメージなんぞ、殆どねーよ」

マーロウは、そう言つてホームズを殴りつけた。

ホームズは、そのまま地面に顔面から落ちていった。

マーロウは、ホームズに狙いを定め、詠唱を始める。

「登つてけ、トラクタービーム」

発動した精霊術は、ホームズをゆっくりと上空に持ち上げていく。

ホームズの身体は先ほどローズとは違い静かに上がっていく。

しかし、ゆっくりと無理矢理あげている分ホームズにダメージが襲う。

そして、精霊術は消え、ホームズは地面に向かって落ちていった。

その時をマーロウは、逃さない。

素早く下にいき、拳を固める。

そして、

「うるうあああつ！」

落下するホームズの腹に向かって拳を突き上げた。
素手だ。

籠手は、していない。

しかし、腹にマールロウの拳がめり込んで行く。

「——つ!!」

声にならない叫びを上げ、ホームズは嘔吐する。

更にマーロウは、そのまま若干ホームズを打ち上げ、蹴り飛ばす。

ホームズは、無様に泥水の上を転がった。

「ホームズ！」

その惨状に、思わずエリーゼは治療の手を止めてホームズの名を呼ぶ。

しかし、ホームズはそれに応えることなく、冷たい雨に打たれ続ける。

肩から流れる血は、ホームズの周りをじわりと赤く染めていった。

「勝負ありつてところか」

マーロウは、そんなホームズを見てそう判断すると、エリーゼとレイアに一步步近づく。

エリーゼとレイアは、それぞれ武器を構え、共鳴する。^{リンク}

「ま、懸命な考えだな」

マーロウは、そう褒める。

治療は、終わっている。

しかし、未だに一行は、起きる気配がない。

ホームズの戦いの惨状を目の当たりにしたレイアとエリーゼは、若干震えている。

「わりーな、おめーらの友達をこんなにしちまつて」

「別にどうってことない……です」

エリーゼは、きゅつと力を込めて杖を持つ。

マーロウは、ハハハつと笑う。

「心配とかしないのか？」

「しません」

「なんで？」

「ホームズ相手に心配してたら、キリがないです」

目を離れたすきに大怪我ばかりしているホームズだ。

今回も似たようなものである。

エリーゼとレイアは、武器を持つ手に更に力を込める。

今の戦いを見ればわかる。

確実に自分たちでは勝ちようがない。

マーロウがこのまま自分達に向かって踏み込んだ瞬間負けが決定するだろう。

マーロウが踏み込み、そして、レイア達に向かって行こうとした瞬間ガクンと動きが止まった。

不審に思ってから後ろを振り返る。

するとそこには、泥だらけのホームズがマーロウの服の裾を掴んで立っていた。

「嘘だろ……………」

マーロウは、信じられなかった。

いや、マーロウだけではない。

レイアもエリーゼも驚いている。

ほとんど戦闘不能状態だったホームズが立ち上がったのだ。

顔は泥だらけ、肩からはとめどなく流れ続ける血が、痛々しい。

確かに攻撃は、ホームズを捉えていた。

事実、ホームズは、地面に突っ伏して動けていなかった。

「……………何……………言ってるんです……………」

ホームズは、マーロウの服の裾を掴む力を強める。

「……………おれは、まだ……………動ける。戦闘不能になんて……………なっていない……………」

そう言つてそのまま服を引つ張り、距離を詰め、そして、

背負い投げの要領で投げ飛ばした。

「……………だ……………から……………負けて……………ないっ！負けてないったら、負けてない！」

ホームズは、声を張り上げそう言い放つた。

しかしホームズの肩からは先ほどの傷のせいで血が流れている。

背負い投げなんてしていい傷ではない。

ホームズは、マーロウが倒れている間に守護方陣をして回復に努める。焼け石に水程度の回復だ。

とはいえ、やらないのでは随分と違う。

マーロウは、ゆっくりと立ち上がり、ホームズの右手を見る。

「…………お前、その爪…………」

「ああ、これ？」

ホームズの親指の爪は、剥がれ、柔らかい肉が見えていた。

「危うく意識が飛びそうだったんで、逆に痛いことをすれば大丈夫かな？ って…………ま

あ、大成功でしたよ」

「お前…………そんな手で背負い投げなんてしたのか…………」

そんなホームズを見てマーロウは、呆れ半分驚き半分で更に言葉を続ける。

「お前、よく挑んでこれるな…………あいつの息子だったお前がこの実力差でどうして挑もうとする？」

言われただろう、逃げろとか戦うとか」

ホームズは、肩の傷を抑える。

—— 『まあ、そうは言ってもいずれ君にも逃げられない時が来るかもしれない
んだけどね?』

『……なんか、前も似たようなこと言ってたね』

絶対絶命の対処の仕方の時も似たような事を言っていた。

ホームズの母は、クスクスと面白そうに笑う。

『私とすれば、君にはいずれそんな時が来る事を祈りたいね』

『何? 死んで欲しいの?』

『そうじゃなくてさ……』 ——

「あなたには、関係のない事です」

ホームズは、そう言い返した。

「……………ま、いいけどよ。お前、勝てると思ってるのか？」

「そんなことを考えることに意味はない」

ホームズは、呼吸を整える。

「勝てないかもしれないとか、

負けるかもしれないとか、

倒せないかもしれないとか、なんて関係ない！」

ホームズは、肩から手を離す。

「勝つんです!!」

そう言ってホームズは、駆け出した。

マーロウは、静かに手を前に構える。

「……………アクアレージャー」

水がホームズに襲いかかり、マーロウから距離を離された。

「……………ぐっ！」

案の定、ホームズは膝をつく。

しかし、直ぐに立ち上がり、もう一度駆け出す。

「震えろ！グランドダツシヤー！」

地面の衝撃がホームズを襲い、思わず足をもつらせ、転ぶ。

「ホームズ！」

レイアがホームズに駆け寄ろうとするが、それをホームズは手で制する。

「後ろを……見たまえ」

ホームズに促され後ろを向くとそこにはア・ジュール兵が集まっていた。

「君達には……そつちを頼むよ」

そう言いながらホームズは、ゆっくりと立ち上がる。

出来ることならホームズを助けに行きたいところだ。

しかし、こちらも捨て置けない。

そんな中、倒れていたジュード達が目を覚ます。

「ん………あれ？」

「ジュード！みんな！」

レイアは、そう声をかけた。

「つて………ホームズ！」

ボロ雑巾の様になっている、ホームズの後ろ姿を見て、ジュードは、思わず駆け寄ろうとする。

「後ろ」

ホームズは、そう言ってもう一度、後ろを指差す。

ホームズの指差す方向に集まるア・ジュール兵を見てジュードは、今の状況を理解した。

ローズ達も直ぐに後ろを向く。

確かに敵達が溢れている。

「でも、ホームズ大丈夫なの？」

「任せたまえ。料金分の仕事はするさ」

自分達の知らない間に傷を増やしているホームズを後ろから見ながらジュードは、まだ迷う。

「わかった。任せたぞ、ホームズ」

一行が迷う中、ミラがホームズの背中にそう告げた。

ミラは、そう言いながら折れてしまった自分の剣の代わりに、マーロウが捨てた剣を拾う。

「ちよつ、ミラ!?!」

ジュードは、ミラの口から出た言葉に戸惑う。

ホームズを助けに行かなかった時とはまた、訳が違う。

ホームズは、今にも倒れそうで、マーロウは一人で戦うには強すぎる。しかし、ミラはそんなジュードの言葉を無視してホームズにさっさと背中を向ける。

「それと、忠告しておくが、死んだりしたら報酬の話は無しだ……借金も踏み倒してやる」

ミラはホームズに背中を向けたままそう言った。

ホームズは、ひらひらと手を振って応えた。

マーロウは、そんなホームズを見ながらたずねる。

「頑張るな……」

マーロウの質問にホームズは、静かに口を開く。

「ま、頑張らなきゃやらなきゃならない理由が三つ四つありますからね」

「二つ目は、報酬と借金だとして、二つ目はなんだ？」

そう言ってホームズは、ちらりとローズを見る。

「女の子に頑張れと言われたんです……男として、頑張らない訳にはいかないでしょう？」

ホームズの言葉を聞き、マーロウは、面白そうに笑う。

「モテない男は、そういうのがあるよな。応援なんかされた事なくて、テンション上がってんだろ？」

「ノーコメントです」

殆ど肯定だった。

マーロウは、面白そうに笑って、ホームズに手を構える。

「三つ目と四つ目は？」

「終わって、気が向いたら話してあげますよ」

ホームズは、ニヤリと笑いながらそう返した。

「なるほど……まあ、終わりだ……来い！フレイムドラゴン！」

炎龍が現れホームズに襲いかかる。

ホームズは、かわそうと足を動かした。

しかし、足をもつらせて倒れてしまった。

レイアとエリーゼは、それを視界の端に捉える。

「ホームズ——っ!!」

牙を剥く炎龍、防ぎ様の無い熱。

その龍がホームズの目前まで迫ったその瞬間、

真つ黒な猫の生首が現れた。

生首^{ヨル}は、大きな口を開け、炎龍を丸呑みにした。

「ふうむ、俺にかかれば龍なんざ、目じやないな」

ヨルは、そうやって元の姿に戻り、口からいつもの黒球を吐き出す。

黒球は、ホームズの足に当たり弾け、霞となってまとわりつく。

「寝すぎたよ、君……」

ホームズは、そうやって呆気にとられているマーロウに向かって駆け出し、そのまま腹に蹴りをかました。

「——っカツハ！」

問答無用の黒霞のホームズズの蹴りをくらい、マーロウの息が詰まる。

マーロウは、突然の事に思考が追いつかない。

しかし、一つだけ理解はしていた。

(……んの、野郎……ハメヤがつたな！)

さて、この世に猫を全力で殴った事のある人間は、一体どれだけいるだろうか？

猫を全力で殴る人間は、更に少ない。

そして、殴るにしても猫にあつた力で殴るのがせいぜいのはずだ。

では、ヨルという全く知らない、魔物とも違う、猫とも違う、人間とも違う、そんな生物を殴るのにズレは発生していなかったのだろうか？

ヨルに対し、その力は妥当だったのだろうか？

ホームズとヨルは、そのズレにかけた。

(ミスを、不測の事態を起こさない為には……)

ホームズは、蹴りを更に放つ。

今までとは、考えられない力の強さにマーロウは、押されっぱなしだ。

「ワザとミスをしてしまえばいい！」

ホームズは、そう言っただけで今度は普通の足で蹴る。

マーロウに勝つ為には、どうしてもヨルの黒球が必要だったのだ。

しかし、精霊術を使うエリーゼには、治療を優先させた為、マナの補給ができなかったのだ。

かと言っただけで、ヨルがいる限りマーロウは、精霊術なんて使わない。

そこで、ワザとミスをした。

ヨルが退場するという不測の事態を起こした。

しかし、下手すれば復活出来ないものだ。

何故と疑問に思ったがマーロウは、直ぐに答えに辿り着いた。

「なるほど、三つ目の理由は、それか……」

単純な話ホームズは、信じて、賭けていたのだ。

レイアの突きを食らっても気絶せず、ミラの魔技を食らっても直ぐに復活したヨルの強さに。

「だが……」

そう言つてホームズの顔面を掴み地面に叩きつける。

「それだけで、勝てると思うなよ？」

立ち上がるとうとするホームズに腹にサッカーボールを蹴るようにマーロウは、蹴りを入れた。

「ぐっ!!」

腹部に走る激痛にホームズは、意識を飛ばしそうになる。

しかし、ホームズは、意識が飛ぶ前に自分の傷口を抉る。

「——痛——」

激痛で飛びそうになる意識を掴む。

「……舐めるんじゃあないよ……」

ホームズは、ゆっくりと立ち上がる。

その時、ホームズのリリアルオーブが光り始めた。

今までホームズの見せたことのない、輝きに思わずマーロウは、身を引く。

ホームズは、幽鬼のごとくゆらりと立ち上がる。

そして、マーロウに向かって駆け出した。

マーロウは、拳を固めた。

本能で分かる。

あれは、近づけさせてはダメだ。

ホームズが、間合いに入った瞬間、自分の負けが決まる。

「魔神拳！」

「ホームズ、左に避ける」

ヨルの言葉にホームズは、右に避ける。

「君、ふざけんなよ……………」

「至つて真面目なんだがな」

「真面目に痛めつけようとするのやめようよ……………」

悪態を付きながらホームズは、走る。

マーロウは、もう一度拳を固める。

先ほどまでのボロボロの状態のホームズの気合いと心意気は、褒められたものだった。

しかし、賞賛を与えるまでだ。

決して、負けのイメージが現れることはなかった。

だが、今はどうだ？

ヨルが復活し、肩に乗った。

それだけでホームズに恐怖を感じ、圧迫感を感じる。

「魔神拳・双牙！」

二つ牙が地面を這ってホームズに襲いかかる。

「ヨル！」

「やれやれ」

ヨルは、生首になりホームズを押し上げる。

ホームズは、そのまま空中に飛び上がり、マーロウにかかと落としをかます。

マーロウは、ギリギリで一步引きホームズの攻撃をかわす。

当たらなかつたホームズのかかと落としは、泥水を激しく吹き飛ばした。

「ぐっ！」

泥水は、マーロウに壁となって襲いかかる。

思わずマーロウは、手で防ぐ。

そして、泥水が晴れるとそこには、ホームズがいた。

リリアルオーブが、輝くホームズの間合いにマーロウは入ってしまった。

「今度はこっちの番だ……」

「ああ、やつとだ。待ちくたびれたぞ」

リリアルオーブの輝きは激しさを増していき、そして……

「辛酸を舐めろ」

輝きは最高潮オーバーリミッツに達した。

ここから出される技は、ただの技ではない。

秘奥義だ。

「地獄の様に熱くっ!!」

ホームズは、炎を纏った左脚で踏み込みホームズとマーロウだけを囲むように炎の陣を発動させる。

今までの紅蓮脚と違い、炎の色はより高温である青色となりマーロウを焼く。

「——っ！」

「悪魔の様に黒く!!」

ホームズは、黒霞を纏った足にリリアルオーブを使い、自分の闘気を上乗せし、最早脚が見えなくなるほど黒霞の量を増やす。

そして、今度は炎の脚を軸足にし、マーロウに蹴りを放つ。

もう、マーロウは声を上げていない場合では無い。

ヨルはホームズの肩でニヤリと口角を上げて笑う。

「化^天け物^使のように純粹で？」

ヨルは、そう言つて尻尾でマーロウの関節を拘束していく。

「人生の様に苦い!!」

ホームズは、黒霞の右脚で炎の陣を踏む。

すると炎の陣は、渦を巻くように徐々に右脚に巻きついていく。

青い炎はホームズの黒霞と混ざり合い、新月の夜を思わせるほど暗い黒となる。

激痛と拘束の為動けないマーロウにホームズは、背を向ける程身体を回して遠心力をその必殺の脚に乗せる。

「エスプレッソ・ラプソディー!!」

全ての力を乗せたホームズの右脚はマーロウの腹をまるで何か丸太か何かをぶつけたかのような重く響く音を立てて、捉えた。

「——ッグハ!!」

その攻撃の熱と衝撃は全身を巡り、とうとうマーロウは立っていられず、その場に仰向けに倒れた。

それは、まるで何か夢を見ているように、一秒が一時間に感じるほどゆっくりと倒れていった。

ホームズとヨルは、しばらくマーロウを見るが動く気配は無い。

勝ったのだ、ようやくマーロウを倒す事ができたのだ。

しばらくしてそれを自覚すると、緊張の糸が切れたホームズは、ゆっくりと膝をついた。

「ホームズ!!」

ローズが慌てて地面につかないように寝かせるように抱える。

他の面子もホームズを囲むように集まる。

「あ……これ? ローズ? 兵士……は?」

「倒したわよ! 貴方がグダグダやつてる間に、それより……」

そういつてローズは、手を見る。

そこには、ホームズの血がベツタリとついていた。

「ジュード! レイア! エリーゼ!」

急いで後ろにいるジュード達を呼ぶ。

「わかった」

「任せて！」

「はい」

『任せろー！』

そう言つてジュードは、ローズに指示を出す。

「ローズは、ホームズの頭を膝を上でもどこでもいいから乗せて高くして」

「分かったわ」

そう言つてホームズの頭を膝の上に乗せる。

ジュード達は急いで治療をする。

傷も出血はひどいが、急所をギリギリで外れているので何とかかなりそうだった。

申し訳程度の守護方陣も中々効果があつたようだ。

「にしても、おたく、俺たちが寝てる間に随分と無茶したねー」

「君たちが起きてくれればもう少し楽だったんだけどねえ……」

ホームズは、アルヴィンの言葉にヘツと鼻で笑つて返す。

「ホームズさん、マーロウさんは？」

「生きてるよ。ま、暫く動けないけどね」

何せ、ホームズの秘奥義を食らっているのだ。

無事かもしれないが大丈夫ではない。

ホームズは、その後ミラを見る。

「……………ふふふ、ミラ、借金と報酬の話覚えてるだろうね？」

ホームズの言葉にミラは笑顔で頷く。

「ああ」

「良かった」

ホームズは、ニヤリと笑う。

そんな会話をしているとホームズの傷の治療は、終わった。

ホームズは、治療が終わると立ち上がり、渡されたライフボトルとミラクルグミを食べる。

実は渋ったのだが、エリーゼとレイアの無言の圧力に屈しようとうホームズが折れたのだ。

まあ、何せ、ホームズが食べなかった為にこの様な事態になったのだから仕方ない。所謂日頃の行いのせい、という奴だ。

減りに減った体力なんとか元に戻すし、ホームズは立ち上がる。

そして一行は、再び、クルスニクの槍に向かった。



「ところでさ、ホームズ」

走っている中、レイアが思い出した様に尋ねる。

「頑張る理由の四つ目って、結局何だったの？」

ホームズは、一瞬、本当に一瞬だけ動きを止める。

「あー……それ？」

目を少しそらす。

—— 『そうじゃなくてさ、私にもそういう時が来たんだよ』

ホームズの母は、ニコニコと笑いながら、続ける。

『どんな時だったんだい？』

『君が後ろにいた時さ』

ホームズは、母の言葉に目を丸くする。

『逃げきるには、少しばかり大変な奴だったんだよ、でも、君が後ろにいたからね、頑張らなくちやいけなかった』

そう言つて手についたピーチパイのカスを払う。

『ここまで言えば、分かるだろう？ 自分にとって、大切な人あるいは、人達にまで危機が及ぶ場合は、逃げようがないんだよ』

ホームズの母は、椅子に深く腰掛ける。

『だからさ、君にもそんな状況が来るほど大切な、宝物の様な人達が出来ることを私としては願わずには、いられないのさ』

ホームズの母は、ニヤリと笑う。

『母親つてのは、息子の安全を願うけど、それと同じくらいに幸せを願うものなのさ』

ホームズは、興味深々に見つめるマクスウェル一行を改めて見る。

自分の事を友達と言ってくれたレイアとエリーゼ。

ツツコミ役と治療をいつも任せてしまう、ジュード。

静かにホームズの事を理解してくれるローエン。

エレンピオス人繋がりなのか分からないが、なんだかんだでノリの合うアルヴィン。

結構グサリとくる言葉を吐くが、ここぞという時は決めてくれるミラ。

久々に会えた自分の瞳の色を褒めてくれたローズ。

まあ、そして、不本意ながら腐れ縁のヨル。

「……………別にどうだっていいだろう?」

ホームズは、目をそらして、素っ気なくそう返した。

そんなホームズの返しに一行は、不満顔だ。

「ええーきになるなあ?」

「ジジイも気になりますね」

「ふむ。出来れば私は知りたくないな。今後の為にもなりそうだ」

あまりの押しの強さにホームズは、助けを求める様にローズを見る。

しかし、ローズは首を傾げるだけだった。

「何で、そんなに嫌がるのよ? いいでしょ、別に。減るもんじゃないんだから」

ローズの助けも期待出来ない。

「おたく、そろそろ観念したらどうだ？」

アルヴィンは、面白そうに笑いながらそう返す。

ホームズは、頬を人差し指でぽりぽりとかく。

「ああ、もう！うるさい！うるさい！うるさいあーい！！

内緒！男は秘密があつた方が格好いいんだからつ！！」

そう言つてホームズは、ずんずんと先を歩いて行つた。

「えっ？ちよ、ホームズ!？」

慌ててローズが後を追ひ、一行もそれに続く様に後を追つた。

『……思春期の息子に母親の愛情なんて鬱陶しただけだよ』

『だったら、頬を人差し指でかくのをやめたまえ。』

君のソレは、照れ臭い時にでるくせだからね』

ホームズの母は、ふふんと面白そうに笑いながら言つた。

ホームズは、ふいと目をそらす。

『くくくく、直せるといいね？ホームズ？』

『……うるさい』——

ホームズは、雨が降るなかずんと一人で進んで行く。
冷たい雨も火照った頬を冷ますのには、ちょうどよかった。

槍でつついて蛇を出す

「ねえ、ホームズ聞いてもいいい？」

「四つ目の理由以外なら」

「いつまで、言ってるのよ……」

ローズは、ぷいと顔をそらしているホームズにため息を吐く。

「じゃなくて、貴方どれだけ回復したのよ？」

傷は治っても体力全部って訳にはいかないでしょ？」

ホームズは、罰が悪そうな顔をする。

体力が回復したばかりのホームズの代わりに荷物を背負っているジュードは、無言で頷く。

「まあ、良くて約四割ぐらいかな」

「……『良くて』で、『約』で、『ぐらい』か、とことん頼りない事この上ないな」

ミラの最もな言葉にホームズは、返す言葉がない。

「しかも、そこまで言って結局四割だもんね……」

レイアもため息を吐く。

「まあ、四象刃^{フォーブ}レベルが来ると辛いかなあ……」

ホームズは、正直に自分の状態を言う。

「マールウさん相手に勝とうなんて考えるからよ」

ローズは、声を鋭くして言う。

「君も応援してくれたじゃないか」

「頑張れとは言ったけど、死にかけると言った覚えはないわ」

「君にだけは言われたくないね。」

目を覚ましたらズタバポロになって空から落ちてきてくせに」

ホームズの言葉にミラは首を傾げる。

「なんだ？ そんな事あったのか？」

『うん！ ホームズがお姫様抱っこしたんだよー！』

「おお！ 本で読んだ事があるぞ！ ホームズ、お前にも出来るんだな！」

「どういう意味だい？」

心底驚いたように言うミラにホームズは、ジロリと睨む。

そんな二人に構わずティポの言葉にローズは、カッと顔を赤くして、拳を握る。

そんなローズを慌ててレイアが、後ろから羽交い締めにして止める。

ジュードとローエンは、やれやれとため息を吐いた。

そんな中、アルヴィンは、全く動じていないホームズを見て首を傾げる。

「あれ？おたくはなんの反応もないの？」

「ないね」

ホームズは、心底どうでも良さそうに返す。

流石にその反応は、ローズもカチンと来たようだ。

振り上げようとする拳を必死で押さえる。

仮にも怪我人。

そして、自分を一応助けてくれたのだ。

「つーか、むしろどうして、ローズがあんなに照れてるのか不思議なくらいだよ」

そんな決意は、一瞬で崩れ去った。

「なっ!?!」

(ああ、せっかく落ち着いたのに……………)

レイアは、再びハラハラする。

何せ、ホームズがこの後気の利いた事を言う訳がないのだ。

「君、別れ際におれに何したか忘れたわけじゃないだろう？それに比べればどうって事ないじゃないか」

冷たい雨が、一瞬だけ氷になった気がした。

ローズは、赤くなった顔を更に赤くし、直ぐに元の色に戻り、そしてゴミを見るような目でホームズを見る。

「貴方はそんなだから、モテないのよ」

「なんて目でおれを見るんだ……」

ホームズは、思わずたじろいだ。

そして、同意を求める様にミラ達を見るが、全員呆れ返った目でホームズを見ている。

「はあ、行くわよ」

そう言つてローズは、先を歩いて行つた。

「ねえ？今のおれが悪いの？」

「おたく以外誰が悪いんだよ」

アルヴィンは、やれやれと肩をすくめる。

「もつたいないね、ホームズ」

レイアは、苦笑いをしながらホームズにそういつた。

対するアルヴィンは、不思議そうな顔をしている。

「もつたいない？」

「いやね、凄かつたんだよ。ホームズ。

治療が終わつて目を覚ました瞬間にローズを助けに行つてさ」

『しかも、ローズを僕たちに渡した時の顔は普段からは、想像できないくらい真剣な顔だつたんだよ』

「マジ？」

気絶していたアルヴィンは、何も見ていない。

エリーゼは、不本意そうに渋々頷く。

「恐ろしいね。おたくが二人にここまで褒められるなんて……雨でも降るんじや

……いや、もう降ってるか」

「君、喧嘩売ってるだろう？」

しとしと雨に濡れたホームズは、頬を人差し指でかきながら半眼で睨む。

「いや、事実だろ？」

ヨルは、肩で頷いている。

ホームズは、パンと手を叩く。

「ああ、もう！この話は終わり」

これ以上話題を広げても得るものなどないと判断したホームズは、話を打ち切る。

そんなホームズにエリーゼが尋ねる。

「だったら、別の話をしてもいいですか？」

「四つ目の理由以外なら」

エリーゼは、直ぐに目をそらした。

「君……」

ホームズは、エリーゼの予想通りの反応に頭痛を堪えるように頭を押さえる。

「教えてください」

「やだよ」

『何でだー！いいから、教えろ！だからモテないんだ、お前は！』

テイポの言葉にホームズは、顔をしかめる。

「しつこい男は、モテないけど、しつこい女も持てないよ」

「……ホームズが言うのと説得力が違いますね」

二人は、お互いを罵り合う。

イーツと歯を見せて威嚇をする二人を見てヨルは、肩で呆れ返っていた。

「そこまで言うなら、別にいいです」

諦めた？ そんな訳はない。

エリーゼには、とっておきの切り札があるのだ。

ローズ以外既に周知の事実だが、ホームズの弱味の一つだ。

「ホームズの初……」

い、と言おうとするエリーゼの口にホームズは、人差し指を持っていき黙らせる。

「おふざけはここまでだ、エリーゼ」

そう言つてホームズは、エリーゼから、前方に視線を移動させた。

そこには、一人の男が佇んでいる。

ホームズは、顔が引きつるのを感じていた。

『世の中には、『しぼうふらぐ』というものがあるらしいな?』

ヨルの言葉が脳裏をよぎる。

『^{フォーブ}四象刃レベルが相手だとキツイかな……』

「ばっちり回収しちゃったよ……」

ホームズは、目の前の男に改めて目を向ける。

「会いたくなかったなあ……」

「ガイアス王」

そこには、ア・ジュールの王が静かに佇んでいた。



ガイアスは、ホームズの言葉を背中で受ける

相変わらずの迫力にローズは、肩を押さえる。

「そうか、ウインガル達とマールロウは、破れたか……」

ガイアスは、静かに目を閉じる。

「やはり貴方も戦場に赴いていましたか……」

「無論。これは、俺の道だからな」

ガイアスは、ローエンの言葉にそう返した。

ミラはジュードに向かって静かに頷くとガイアスに向かって歩みを進めた。

ジュードも後を追おうとするが、ローエンに止められる。

「答えろ、ガイアス。何故、クルスニクの槍を手に入れようとする？」

「全ては民を守るためだ。力は全て俺に集約させ管理する」

ミラの質問に瞬時に返す所がガイアスの強い信念を物語っている。

「それは、ただの独占にすぎない。」

結果、お前も、守るべき民も槍の力が災いし身を滅ぼすだろう」

「俺は滅びぬ。弱きを導く意志がある限りな」

「(すつごい自信だねえ……)」

ホームズは、肩にいるヨルに小声で話す。

ヨルは、ガイアスを見る。

「(まあ、いるんだよな、たまにああ言う奴が)」

「……お前は、一つの重要な事実から目を背けている」

「なんだと？」

初めてガイアスの声に同様が走った。

「お前が幾ら力のある者であっても、いつかは必ず死ぬ。その後はどうなる？」
ヨルやミラと違いガイアスは、人間だ。

時間には限りがある。

「人の系譜の中で再びお前のような人間が現れるのだろうか？」

「……………?!」

ガイアスは、ミラの言いたいことがわかったようだ。

そうヨルの言っている通りガイアスの様な人間はたまにしか現れない。

「残された人間達は過ぎたる力を持て余し、そして、自らを滅ぼす選択をする」

ミラは、ガイアスを睨みつける

「それが、人だ。歴史がそれを証明している」

ミラの話の聞くとガイアスは、ようやく振り返る。

「……………ならば、俺がその歴史に新たに道を示そう」

迷いも躊躇いもない真つ直ぐな目を見てミラは静かに目を伏せる。

「……………ガイアス。やはりお前も人間だな」

落胆を隠しきれないミラの言葉にガイアスは、不敵に笑う。

「人間だからこそ俺には、リーゼ・マクシア平定という野望がある。

お前は、ただの欲望と云うだろうがな」

「別に欲望それが悪いとは言わないがな」

ミラはそう言つて目線だけでホームズを確認し、片手剣に手をかける。

「最後だ、ガイアス。槍を渡さない。どうしても退かないのか？」

ガイアスは、身の丈もある長刀を構える。

「退かん」

静かにしかし確かな闘気を感じる佇まいだ。

ジュードは、背中の荷物を降ろし、静かにミラの隣りに立つ。

「……………あなたなら、もしかしたらつて、思つてた。

でも、クルスニクの槍だけは壊さなくちやダメだと思つ」

籠手をはめジュードは、構えながらそう言つた。

「ええ、クルスニクの槍は悲しみしか生み出しませんから」

ローエンは、先ほど拾つた細剣を構え、指揮をとる。

「悲しいのは、終わらせないといけないんだから！」

レイアは、棍をくるくると回して構えた。

「そうです！ミラはいつも正しいんです！」

『僕たちはミラの味方だもんねー！』

エリーゼは、杖を構える。

「ガイアス王。刀を向けるご無礼、申し訳ありません」

ローズは、そう言って両刀に手を掛け、引き抜く。

「……それでも私は、クルスニクの槍を壊してみせる」

「ま、そういうことらしいぜ」

アルヴィンは、大剣を肩に乗せ銃を構える。

「軽いねえ、アルヴィン君」

ホームズは、そう言って肩をすくめ、ガイアス王の奥にそびえる槍を睨みつける。

「……おれとしてもそいつが、ここにあるのは我慢ならないねえ」

「いつの世も不幸になる力を選ぶ……人間は本当に愚かだな」

ヨルは、肩で馬鹿にした様に笑った。

「行くぞ!!」

ミラは力強くそう告げる。

長刀を持つ手に力を込めた。

◇◇◇◇

「ハアアア!」

ジュードは、ガイアスの長刀を掻い潜って拳をぶつける。

しかし、ガイアスは間合いが近い間合いを直ぐに放し長刀で防ぐ。

そして、長刀を返しジュードに向かって薙ぐ。

ジュードは、拳を問答無用で長刀に向かって放ち防ぐ。

「つつう!」

予想以上の重さにジュードは、歯をくいしばる。

横薙ぎを弾かれたガイアスは、そのまま上段に構え、振り下ろした。

迫り来る白刃にジュードは直ぐに手を交差させて受け止める。

しかし、横薙ぎの一撃と同じように一撃の重さが尋常ではない。

「…………ぐっ！」

(やばい！)

「飛燕連月華!!」

そんなガイアスにレイアの棍を踏み台にしたホームズが回転踵落としを放った。

「——っ」

ガイアスは、ホームズの踵落としを喰らうと直ぐにホームズに向かって手をかざす。

「獅子戦哮!!」

そう言って放たれた鬨気の獅子はホームズとは、比べ物にならないくらいの大きさだった。

「嘘だろう……」

鬨気の獅子は、頬を引きつらせるホームズに襲いかかった。

盾で防ぐが間に合わない。

鬨気に押されホームズは、そのまま地面に転がる。

マールウの獅子戦哮と同じかそれ以上の大きさにホームズは、歯噛みしかでない。

「霸道滅封!!」

長刀から砲撃のようなマナと鬨気の光線が出され、ホームズに襲いかかる。

ホームズは、それに押し流され、詠唱中のローエンとエリーゼを巻き込んで倒れた。

「つつう！」

『どけーホームズ！邪魔なんだよ！』

「ティポから、その言葉がでるとつくづく泣きたくなるねえ……」

ホームズは、そう言って立ち上がると巻き込んでしまったエリーゼとローエンに手を差し出し、立ち上がらせる。

「優しい言葉でもかけて欲しいですか？」

「遠慮しとく。雷が降られても困るからね」

エリーゼの悪態にそう返すと、ホームズは、クルスニクの槍を見てガイアスを見る。

ホームズは、そう言って立ち上がる。

「本当は槍を壊す為にとっておきたかったんだけど……」

そう言って肩にいるヨルを見る。

「ま、ここで負けたら元も子もないしな」

ヨルは、そう言ってホームズに向かって黒球を吐き出す。

マールロウの精霊術の残りが現れた。

ホームズは、それを回し蹴りで弾けさせ黒霞を左足にまとう。

「ガツンと行くぜ！ローエン！」

「お任せを」

そうやって調律をし終わる。

「フリーズランサー!!」

氷の矢がガイアスに襲いかかる。

「獅子戦哮!」

しかし、ガイアスの獅子はそんな氷の矢を喰らい尽くした。

獅子が消えると、そこにはホームズがガイアスの眼前にいた。

ホームズは、右足をガイアスの顎に向かって蹴り上げる。

ガイアスは、僅かに後ろに下がりがわす。

ホームズは、そのまま勢いで宙返りをして右足で着地をし、そのまま身体を反転させ、

ガイアスに左足の回し蹴りを放つ。

防げば刀を折り、防がなくては、あばらを折る。

ガイアスは、前者を選んだようだ。

上段に構えたまま長刀の切っ先を下にする。

ホームズの破壊の左足がそれを捉えた、かのように見えた。

しかし、ホームズの左足は、ガイアスの長刀を破壊する事なく水しぶきを立てて地面

に着く。

「おいおい、なんだあれ？」

アルヴィンは、信じられないという風に今の光景を見ている。

「妙だ。ホームズのあの状態で壊せないものなどないはずだが……」

ミラも首を傾げている。

ジュードは顔をしかめる。

「今のは、受け流しだよ。」

ガイアスは、自分の武器ホームズの力が伝わらないようにそのまま受け流したんだよ」

どんなに、強大な力であつても力が伝わらなければ意味はない。

暖簾に腕押し、ぬかに釘状態だ。

手応えが存在しない。

ホームズは、受け流され態勢が崩れそうになるが、何とか踏ん張つてもう一度、左足で蹴りを放つ。

しかし、ガイアスはそれを再び受け流す。

「……んのおっ！」

ホームズは、崩れそうになりながら何とか空中でぐるりと回って着地する。

その瞬間をガイアスが長刀で突く。

きいんと高い音が鳴り響きホームズの盾とガイアスの長刀がぶつかり合う。盾で防ぐが、勢いを殺す事叶わず、ガイアスから、大きく離される。

「……………ナイス時間稼ぎ！」

ローズは、そう言つて刀を構える。

「デイバインストリーク!!」

詠唱を完成させたローズのデイバインストリークがガイアスに向かって放たれた。

「霸道滅封!!」

しかし、ガイアスは、闘気の光線を放ちデイバインストリークをかき消した。

「嘘でしょ?!!」

ローズは、自分の現時点での切り札に近い術をかき消され、驚くばかりだ。

ホームズは、立ち上がりもう一度、ガイアスに挑もうとする。

「あれ?」

しかし、立った瞬間バランスを崩して膝をついた。

「ホームズ！」

レイアは、ホームズの先ほどの言葉を思い出す。

——まあ、良くて約四割ぐらいかな——

結局、四割だって回復していないのだ。

ホームズの攻撃が通じず、ローズの精霊術は、かき消され、ジュード達の攻撃は届かない。

マーロウという敵と戦ったばかりの面子にこの相手は厳しすぎる。

ガイアスの長刀が膝をついたホームズに襲いかかる。

「蒼破・追蓮!!」

ローズから放たれた二つの斬撃が空を切ってガイアスに襲いかかる。

ガイアスが長刀を振るってそれを打ち消している間にジュードがレストアでホームズを回復させ、ガイアスから離れる。

「結構自信あつただけれども……」

儂く消えた斬撃を見てローズは、頬を冷や汗が流れるのを感じていた。規格外過ぎる。

そう思っているところにガイアスは、一行に向かって魔神剣を放つ。

地面を這う剣戟をかわしたが、風圧が一行を襲う。

「……………うー！」

ホームズのポンチョがたなびく。

「く……………なんて、強さだ！」

ミラは思わず眩く。

「お前達も流石と言っておこう！」

ガイアスは、そう言うとき身体から赤いマナが現れる。

長刀にもマナと闘気が混ざり合ったものが纏われている。

「だが！クルスニクの槍は、必ず手に入れる！」

ガイアスを中心に渦巻くさながら、炎のような赤い闘気とマナの迫力は尋常ではない。

「ちよ、ヤバくない？」

レイアは、思わず声に出した。

「ヨル、食える？あれ？」

「……不純物が混じてるから、無理だな」

ヨルは、悔しそうに呟く。

「……どうするんだい、これ？」

もう、後は技の発生を見極めて避けるしかない。

上手くいくとは思えないが。

「ち、まだかよー！」

アルヴィンは、小声で何かを確認するように辺りを見回す。

「さらばだー！」

ガイアスは、そう言っつて刀を振るおうとした。

それをどこからともなく飛んできた双剣が止めた。

振おうとする長刀を止め飛んでくる双剣を弾き飛ばす。

「誰だ!？」

飛んできた方をガイアスは、睨む。

すると、上空から一人の男が降りてきた。

「この靈力野の気配は……」

ヨルは、一人の男の顔を思い浮かべていた。

(間違いない、あのテンションの高い男だ)

男は、クルスニクの槍の前に着陸した。

「そこまでだ!」

「……イバル?」

ミラは、不思議そうに男、巫女イバルを見ている。

何せ、何故ここにいるのか、さっぱりわからないのだ。

「何だかよくわからないけど助かった……」

ホームズは、ホッと一息吐く。

そして不思議そうな顔をしているミラに構わず、イバルは懐から円盤状のものを取り出す。

「ミラ様! 本来の力を取り戻し、そのものを打ち倒してください」

そうやって上空に円盤を掲げると、それは展開し筒状になった。

「貴様！」

ガイアスが怒鳴りつけるが、イバルは聞く耳を持たず高笑いをしている。

ホームズは、その隙に先ほど貰った残りの回復道具を食べながらたずねる。

「ねえ、ミラ。おれはよく知らないんだけど、あの不思議蚊取り線香みたいなのに？」

「クルスニクの槍を起動させる鍵だ」

ミラは頭抑えながら答える。

「……………何だって？」

ホームズの時間が止まった。

そんな事をしているうちにイバルは、それをクルスニクの槍に差し込んだ。

クルスニクの槍に光が通い、徐々に展開されていく。

「どうだ！ジュード！俺こそが本物の巫女だ！」

そして槍の先が開かれた。

「今、四大様の力が蘇る!!」

その言葉と同時に槍は完全に槍は起動し、戦場一帯の人間からマナを吸い上げ始めた。

吸い上げられたマナは、槍の銃口へと集まっていく。

「……………うっ……………ぐ……………」

「ローズ!？」

ホームズは、苦しそうなローズを見て声を上げる。

いや、ローズだけではない。

眼に映る人々は、例外なく苦しそうだ。

「……………つつ」

そして、御多分に洩れずホームズにも症状が現れた。

「あれ?なんで?おれも?」

若干震えている手を見ながらホームズは不思議そうだ。

他の面子と比べれば格段に症状が軽い。

とはいえ、症状が現れた事にホームズは戸惑いを隠せなかった。

「マナは……霊力野の有無に関わらず……存在する……勿論……俺にもな」

ヨルも歯ぎしりをしながら堪える。

クルスニクの槍は、戦場という戦場の人間から、マナを吸い上げ、銃口に収束させていく。

臨界点まで集まるとソレは、戦場ではなく、どんよりと雲が敷き詰められた空へと放たれた。

そして、あっという間に上空に到達し、空に穴を開けた。

一行は、突然の事に何が起こったか理解できない。

ホームズは、軽くなった頭を捻る。

空に穴が開くというこの事象に心当たりがある気がするのだ。

——「少なくともお前達を通れるだけの穴は作り出せるだろう」——

(なんだっけ……確か)

——「断界殻シエて何処にあるだい？」

ミラはホームズの質問に指を上に向かつて指す。

「上空、そして、海の方こう」——

「……………まさか!？」

ホームズは、顔を険しくさせ、ミラを見る。

ミラは、滅多に見せない絶望に打ちひしがれた顔をしながら、声を絞り出す。

「……………ああ……………そのまさかだ。」

クルスニクの槍は、兵器なんかではなかった

ミラは、顔を伏せる。

「断界殻シエが壊ルされてしまった」

ホームズは、ミラに言葉をかける余裕はない。

空に空いた穴から目が離せないのだ。

予感がある、いや、悪寒がするといったほうが正しいだろう。

『覚えておきたまえ、ホームズ。予感があった時より、悪寒を感じた時こそ用心したまえ』

ホームズの脳裏に母の言葉が過った、その時だった。

空の穴から、宙に浮かぶ、戦艦が無数に出てきた。

無機質なその船に纏われているのは、純粹な敵意とそして、殺意。

『何故かって？決まってるだろう？予感の外れる事はあっても悪寒は、外れる事はないんだから。』

風邪にしろ、恐怖にしろ、殺意にしろ、悪寒が運ぶのは不幸のみ。用心するのが、当然だろう？』

「……………頼もしい助言だよ」

震える声でだれにきこえるともなくホームズは、呟いた。

「嬉しくて涙が出そうだ」

艦隊から砲弾が戦場に向かって発射された。

砲弾は、業火となり戦場に色を添える。

人々に災いをもたらすクルスニクの槍。

その意味を湾曲してではあるものの、一行は、確かに感じ取っていた。

パンドラの匣庭が開かれる

「ヨル」

「なんだ？」

「確か、カラハ・シャルルで言ってたよね。」

『せいぜい、うっかり開ける羽目になつたな。いや、空けるといった方が正しいか？』

「ああ。ぼっちり開ける羽目になったな。いや、空けるといった方が正しいか？」
ホームズとヨルは、次々と出現し空を埋め尽くす空中艦隊を見ながら呟く。

「ねえ？ホームズこれは……」

ローズの言葉にホームズは、頷く。

「ヤバいねえ……いつでも逃げられるよう準備しておきたまえ」

『怖いよー。メツチャ怖いよー』

ティポは泣きそうな声で叫ぶ。

「空をかける船だ?!？」

その瞬間、ぞわりとヨルの背筋に悪寒が走った。

(なんだ!?!このマナの気配は!?)

ヨルは、急いで空に空いた穴を見る。

その瞬間、空中艦隊の何隻かが精霊術の球体に飲み込まれ潰れた。

奥に何らかの人影が見える。

(あいつは、大精霊……か?)

ヨルが思考の渦に沈んでいる内に1人の人影がクルスニクの槍に歩み寄る。

「……………ついに……………フハハハハッ!」

人影、白髪をオールバックにした男は、高笑いをする。

そんな男にアルヴィンは、顔を険しくさせ、声を荒げる。

「ジランド!!どうなってる!」

その言葉に一行は、全く雰囲気が違うジランドを見て驚く。

「ジランドだと!?!アレが?!」

「おいおい、嘘だろう?ナハティガルの腰巾着じゃなかったのかい……………」

ホームズは、眉を潜めた。

ジランドは、アルヴィンの言葉に対しつまらなそうに目をそらす。

「お前……」

アルヴィンは、ジランドに銃口を構えた。

その瞬間、ヨルの髭がピクリと動く。

ホームズは、それを見逃さない。

「下がりましたまえー！アルヴィン!!」

その言葉と同時にアルヴィンを取り囲むように見覚えのある氷の矢が地面に放たれた。

一行は、更に息を飲んで氷の矢が飛んできた方向を見る。

ガイアスは、それを見て眉を潜めた。

「ハミルをやったのは、貴様らか」

「そう。この俺の精霊……セルシウスがな」

ジランドは、そう言って黒匣ジンのような機械を取り出した。

その機械は輝き陣を刻みそして、左目を氷で覆った女性を出現させた。

ヨルは、それを見ると顔をしかめ歯を剥きだしにする。

「マジで、俺の間違いでも勘違いでもないのか……………」

ヨルは、敵意も殺意も隠そうとせずに氷の矢が飛んできた方向、ジランドを睨みつける。

ミラは突然の事に唾然とする。

「馬鹿な…………セルシウスなんて聞いた事もないぞ…………」

「そりゃあ、お前はそうだろうよ」

ヨルは、ミラにそう言うのとセルシウスを睨みつける。

「…………そんな事よりも、そんな事よりもだ！お前…………何故、そんな所にいる！！答えろっ！！」

激昂するヨルをセルシウス取り合わない。

「貴様！」

「落ち着きたまえ、ヨル」

ホームズが静かにヨルにそうなげかける。

「俺の民を傷付けたこと！許しはしない！」

ガイアスは、そう言つて再び紅い闘気とマナを纏う。

すると、空中からガイアス達に向かって砲弾が注がれた。

「うおっ！」

幸い誰にも当たらなかつたが、外れた砲弾は、水と泥を巻き上げた。

ホームズは、思わず砲弾が飛んできた上空に視線を移す。

「おいおいおい……」

思わずホームズが見上げたそこには、人が船から大量に降りてきた。

普通なら重力によって真つ逆さまところ、空気の様なものを噴射してゆっくりと降り

てくる。

「なんなのアレ！」

「格好から見るにアルクノアっぽいけど……」

レイアの言葉にホームズは、そう返した。

二人がそう話しているうちに空から降りてきた一人がジランドの側に降り立つ。

「アルクノアのジランドさんですね」

「ああ、そうだ。そいつが例の女だ」

ジランドは、そう言ってミラを顎でさす。

ミラはジランドの言葉に目を剥く。

「アルクノア……だど？ 貴様が、ナハティガルに黒匣ジレンを伝えたのか!？」

ミラの言葉にホームズは、ギリつと唇を噛み、ジランドを睨みつける。

「あなただったのか……そんなものを作って……一体何がしたいんだい!! そいつの

せいで、一体どれだけの人が死んでいったとおもっているんだい!!」

ホームズの激昂もミラの言葉もジランドは、笑っていて取り合わない。

「その女を殺すなよ。台無しになる」

ジランドは、そこで言葉を切ってホームズに目を向ける。

「それと、その黒猫を肩に乗せた男もだ。必ず捕らえろ」

「なっ?!」

ローズは、突然の事に言葉を失った。

ホームズは、がちんと歯を噛み合わせる。

「ローズ!!みんな!逃げるぞ!」

ホームズは、ミラ達に声をかける。

「装甲起動兵前へ」

「はっ!」

しかし、遅かった。

アルクノアの様な兵士は、濡れた斜面を滑り降りてきた。

そして、ミラの横を滑りながら銃弾を撃つ。

キント、幾つかホームズの盾に当たる音がする。

弾丸は、防げた。

しかし、その間に黒匣ジンのチャージが終わり、ホームズ、ジュード、エリーゼ、ミラに

向かって放たれた。

「ぐわああああっ!!」

ジュード達は派手に吹き飛ばされ、ヨルは、ホームズから離れた所に叩き落された。

「——っ!」

ホームズは、何とか立ち上がろうとする。その時微かにカチンという音が聞こえた。

音の方向を慌てて振り返るとそこには、アルヴィンが地面に突つ伏しているミラに向かって銃を構えている姿があつた。

「アル……………」

ヴィンと叫ぼうとすると、ホームズは、背後から近づいた黒ずくめの兵士に髪を掴まれ地面に押し付けられた。

「……………ぐっ!!」

黒ずくめの兵士は、しつかりとホームズを拘束し、動く事を許さない。

ホームズの口の中に泥水の味が広がる。

そして、周りの景色を見る。

アルヴィンは、相変わらずミラに銃口を向けたままだ。

そんなアルヴィンの腕にセルシウスの氷の礫がヒットし、銃を下ろさせる。

「聞いてなかったのか？勝手なことはさせねーぜ」

一行が何とか立ち上がり、ミラは片手剣を構え、斜面の上にいるジランドに身体を向けた。

何としてもここで倒さなくてはならない。

「エリーゼさん!!ホームズさん!!」

ようやくローエンが事態に気づいた。

エリーゼにもホームズと同じく黒づくめの兵士が集まっていた。

「つちい!省略!フォト……」

ンと言うまえにローズに向かって銃弾が発射される。

ギリギリで気づいた為、急所は、外れたが、詠唱を中断させられてしまった。

ホームズは、地面に押し付けられながらも視界の端で黒づくめの兵士に捕まっている

エリーゼを捕らえる。

「んの……離れたま——」

ホームズが声をあげようとした瞬間薬の染み込んだ布でホームズの顔を押しさえる。

そして、ホームズはそのまま意識を失った。

意識を失ったホームズを黒づくめの兵士が抱える。

「そんな、ホームズ!!」

ホームズの異変にローズがいち早く気付く。

ぐったりとしているホームズを見てローズは、身体が震える。目の前で自分の昔馴染

みが消えようとしている。

その現状に感情が激流のように荒れ狂う。

「起きなさいっ！ホームズ！」

ローズの呼びかけも虚しく、ホームズは動かない。

刀を交差させ、詠唱をしようとするが再び銃弾がローズを襲う。

明らかにローズの詠唱を潰しにきている。

「だったら……」

そう言つて蒼破・追蓮を放つが別の兵士が盾になつて防ぐ。

ローズは、ギリつと歯をくいしばる。

「このままじゃ!!」

ホームズを肩に担いだ兵士は、一步また一步と進んでいく。

「そのガキも連れて行け。増霊極ブースターの適合例だ」

エリーゼも黒ずくめの兵士が抱えられてしまった。

仲間が一人、二人と、連れて行かれる。

「エリーゼとホームズから離れる！」

ミラが片手剣を携えて駆け出す。

そこに、ガイアスが割つて入りミラの腹に肘鉄を入れる。

「寝ている。どうやら、お前がいると事態がややこしくなりそうだ」

そう言つてガイアスは、ミラを肩に担ぐとそのまま長刀を振り辺りの人間達を切り倒

していき、ジュード達にミラを預けた。

「マクスウエルを連れて逃げる」

「でも！エリーゼとホームズが!!」

レイアの言葉にジュードは、少し考えてミラをローエンとレイアとローズに預ける。

「ミラをお願い。僕が何とかする。」

ローズは、もう完全にターゲットになつてゐたからレイア達の援護に回つて

それから、ジュードはヨルにパナシニアポトルを渡す。

「ホームズにこれを飲ませて。そうすれば意識が戻るから」

ヨルは、静かに頷きパナシニアポトルを尻尾で巻きつける。

「ジュード、ヨル……任せたわよ」

「……………うん」

ジュード達は、頷き走り出す。

ジュード達とは、別に戦っていたガイアスにも兵士達は迫つてきていた。

ガイアスの背後から黒ずくめの兵士が襲いかかる。

「陛下!!」

それを駆けつけたウインガルが、斬り伏せる。

いや、ウインガルだけではない。

何処からともなくプレザの精霊術が発動し、兵士達を上空に水柱で打ち上げていた。そして、ジャオはホームズを抱えている黒ずくめの兵士を槌で打ち倒した。

「お前！」

ヨルが驚いている間もなく、ジャオは、ティポを持っている兵士の頭を掴んで放り投げ、エリーゼを担いでいる兵士の頭を踏みつけ、エリーゼ達を救出した。

ヨルは、直ぐに我に帰るとホームズの口を無理やりこじ開け、パナシーアボトルを開け中身を飲ませる。

「——っ！ゲホッ！ゴホ！」

ジュードの言う通りホームズは、目を覚ました。

「……ヨ……ル？」

「貸しイチだ。それより起きろ」

ホームズは、何とか起き上がるすると、そこにはエリーゼを意識を取り戻したエリーゼを静かに地面に立たせるジャオがいた。

「良かった……起きたね、ホームズ」

ふと気付くとホームズの周りにはジュードとアルヴェインがいた。

「どのくらい寝てたんだい？」

「大して寝てないよ」

良かったと胸を撫で下ろそうとした瞬間、ガンと鈍い音が辺りに響いた。

音のした方を見るとジャオが黒ずくめの兵士に鈍器の様なもので殴られていた。

「ジャオさん!？」

ホームズは、慌てて起き上がり駆け出す。

ジャオは、殴ってきた黒ずくめの兵士を掴み上げ、後ろに向かつて投げようとする。

しかし、そこを三つの黒匣ジンの攻撃が襲う。

「ぐぬううううー!」

腹部に思い切り食らいながらも、その兵士を自分に黒匣ジンを向けた三人の兵士に投げつける。

「エリーゼ!!」

何とか追いついたジュード達が、エリーゼに駆け寄る。

「ジャオさん……その傷……」

ホームズは、ジャオを見て思わず叫んだ。

背中のマントは、血で染まり、頭からも血が流れている。

「……ホームズ。すまんかったのお……弱味につけ込むような事をしてしまつて

……」

「……別に気にしてないです」

「……………」

ホームズはその言葉にジャオは、困ったようだ。

ホームズからは、見えないが困った顔をしているのが、ありありと分かる。

ホームズは、深々とため息を吐く。

「おれは嘘はつきませんよ、それより……」

いつもの調子で言おうと思っても声が震える。

ジャオから流れる血を見てホームズは、思わず顔をしかめる。

別れが目の前に迫っている人間を前に平常心など保てない。

その言葉にジャオは、安心したように頷く。

そして、ジャオは、振り返らずに更に続ける。

「エリーゼにも謝らねばならん事がある」

「……………」

エリーゼは、不思議そうに首を傾げる。

「お前さんの殺された両親……殺した野盗ってのは、儂じゃ」

「え？」

突然の告白に一同は、固まってしまった。

「これ以上、お前を見守る事は出来ないだろう」

ジャオは、ゆっくりと立ち上がる。

エリーゼの目から涙が溢れていく。

「だから、生きてくれ」

何か言わなくてはならない。

「ジャオ………さん………」

しかし、エリーゼには、震える声でそう言うのが精一杯だった。

ジャオは、振り返り、静かに目を開く。

「エリーゼの事………」

俯いているホームズを見てジャオは、少し困った様な顔をしてそれからもう一度言う。

「頼んだぞ」

「——つ」

ホームズは、思わず顔を上げた。

「阿呆、すっかりしろ。ジャリの方が辛いんだ」

ヨルの言葉にホームズは、ポンチョで涙を拭く。

ジュード達もジャオの言葉に頷く。

「……………頼まりました」

「うん」

「ああ」

ホームズ達のその言葉にジャオは、静かに微笑み、黒ずくめの兵達の元へ歩いて行った。

静かに歩みを進めていくジャオの背中をホームズ達は見守っていた。

ジャオは、ガイアスに黒匣ジンを向けようとしている黒ジンずくめの兵を槌でのめす。

そして、二人は暫く無言で向かい合う。

ガイアスにもジャオの覚悟が分かったのだろう。

「長年世話になった」

そう言つてガイアスは振り返らずに進んでいった。

「皆を頼みます」

ジャオもガイアスの方を振り返ることなく、そう告げた。

ガイアスの後にウインガルとプレザがそれぞれ後に続き、静かに礼をして行った。

ジャオの目の前には、それこそ数えるのが面倒になるほど黒ジンずくめの兵達がいた。ここが、自分の死に場所だ。

そのつもりでジャオは、降りしきる雨の中今ここにいる。

「最後の足掻きじゃ！」

ジャオは、先程の戦闘でホームズが見せたような笑みを顔に浮かべる。

ジャオに向かって一斉に黒匣ジンが照射される。

照射された攻撃は、辺りに砂煙を巻き上げる。

そして、それが晴れた時、ジャオがマナをまどつて佇んでいた。

「ゲート靈力野全開!!」

「マナを紫の鎧の如くまとったジャオは、そのまま慟哭を上げ走っていく。」

「おおおおお!!」

そして、地面を渾身の一撃で叩いた。

マナを込められて殴られた地面は、まるで爆発を起こすかのように吹き上げ、黒ずくめの兵達を軒並み、殲滅させた。

だが、それだけの事をやれば弊害が出て来る。

この目立った事象に空中戦艦が、ジャオに照準を合わせ、そして、

容赦なくも、遠慮もなく、無機質に光の攻撃が注がれた。

怪我と靈力野^{ゲート}の酷使で、動けないジャオは、眩しそうに手をかざす。のんびりと死ぬだな、とそんな事を思っていた。

エリーゼの事も心配がないと言えば嘘になる。

しかし、今、エリーゼは一人ではない。

ホームズも同じだ。

あそこまで落ち込んでいた男が今は、仲間に囲まれている。

順風満帆とは、行かないだろう。

しかし、それでも、

「……生きてくれ、
エリーゼ・ルタス、
ホームズ・ヴォルマーノ」

照射された光線は、止まる事なく地面を抉った。

逃がせば勝ち

「ジャオさん……」

「後にしろ！ホームズ！今はこっちが先だ！」

ホームズの発言にヨルの言葉が響く。

アルヴィン、ホームズ、ジュード、エリーゼは、戦場を走り抜けていた。

しかし、黒ずくめの兵達は、次々と襲ってくる。

「まだいるー！」

「とにかく逃げる事だけ考えろ！」

ジュードとアルヴィンは、そう言つて敵をなぎ倒していく。

そんな二人の背後に別の兵達が現れるが、ホームズは、空中で回し蹴りをし、なぎ倒す。

そんなホームズに打ち込まれる弾丸。

回避不能に見えた弾丸は、突然出現した、光の陣で行動を遮られる。

ホームズは、弾丸の飛んできた方を睨むと人差し指を向ける。

尻尾がそれに従うように伸び拘束する。

そして、ホームズはヨルの尻尾を持つとそのまま大きく地面に叩きつけた。伸びている兵士を見てホームズは、何かに気づく。

「勘だけど、こいつらアルクノアじゃないかい？」

「どういう事ですか？」

「おれの勘が正しければ、突如出現した兵士と、アルクノアつまり、敵勢力がふたぐループきてる」

ホームズは、考え込む。

「……………ヤバイな」

そういうホームズにアルヴェインのヴァリアブルトリガーが放たれる。

ホームズは、首を振ってかわし、ホームズに当たらなかった弾丸は、真後ろにいたアルクノアに炸裂した。

アルヴェインは、そのまま周りにいる兵士を切りつける。

「そりゃあ、びつくりだ。敵さんが多いなんて初めて知ったよ」

嫌味たらしくアルヴェインは、ホームズに言い返した。

ホームズは、アルヴェインの嫌味に取り合わずリリアルオーブを輝かせ、アルヴェインのリリアルオーブと結ぶ。

「はいはい」

ホームズは、適当にそう言いながら地面をトントんと叩く。

アルヴィンは、無言で銃と大剣を合体させる。

「合わせたまえ」

「了解」

「ジュード！エリーゼ！おれ達の周りに」

二人を呼び寄せると、ホームズはダンと地面を力強く踏み込む。

アルヴィンは、地面に大剣と銃が合わさったものを突き刺す。

「守護氷槍陣・改!!」

巨大な光の陣が現れた瞬間次に地面から氷の槍がその陣を埋め尽くす様に出現した。

「ぐああ!!」

しばらくすると氷の槍は、弾けて消え去った。

軒並み兵達は倒れているが、それでも普通に立っている奴らがいる。

それどころか、まだ増える。

「……………きりがない」

『ぼくたちに任せてー』

ティポがそういつた瞬間、銃弾が飛んでく。

銃弾は、ホームズ達の脇をギリギリで過ぎ去っていく。

「ダメだねえ……多分、彼ら積極的にそれを潰しに来てる」
「そんな……!」

「エリーゼ!できるだけ、精霊術以外で頼むよ」

「いや、精霊術無しじゃこれ、きついだろ……」

次々と増える兵。

上空から、打ち込まれる別の砲弾。

絶体絶命だ。

(状況整理しろ!)

ホームズは、今起こっている事を整理する。

絶対絶命を打開し、切り抜ける手がかりを探すのはこれからやらなければならない。

ホームズの母の教えだ。

「一、おれ達は、今兵士達に襲われている。

二、兵士達の武器は黒匣ブラックボックス、連射式の銃、後は幾つか。

三、兵士達の目的は、エリーゼとティポ、そして、おれとヨル……」

ホームズは、そこで気付いた。

この場をどうにかする事ができる事を。

そんな考えに至った所、黒ずくめの兵士がホームズに躍りかかった。

ホームズは、容赦無く回し蹴りを兵の顔面にぶち込み、そして地面に叩きつける。

「……………ふむ、空気で降りてきただけあって、兵士の方は大分鎧の強度が低いねえ……………」

ホームズは、顎に手を当てながら考え込む。

(もう、これしかない)

ホームズの碧い瞳に覚悟の炎が宿る。

「ジュード、アルヴィン。エリーゼを守りながら先に行っておくれ。

こいつらは、おれがどうにかする」

迫り来る兵達を前にホームズは、そう告げた。

「なっ!？」

「ダメだ! ホームズ!!」

驚くアルヴィンとそれを止めるジュード。

ホームズはジュード達に目を向ける。

「彼らが狙ってるのは、おれとエリーゼだよ。だったら、分断させるのが、妥当つてもものだろうか?」

「ダメです！」

『そんなのゆるさないぞー!』

エリーゼとティポも反対するが、ホームズは取り合う気もない。

「他に方法はないだろう？ ジャオさんのおかげ兵が減っている、今しか逃げ出すチャンスはないんだぜ？」

これ以上引き伸ばせばどんどん兵達は増えてくる」

しかし、ジュードもエリーゼも容認しない。

「……………ダメだよ、ホームズ」

ジュードは、ポツリとホームズに目の前の敵、そして、消耗しているホームズ。

どう考えてもここでホームズ一人を残して別れば、それがどういう意味を持つかは明白だ。

助けを求めるようにジュードは、ヨルを見る。

ヨルはホームズにいう。

「せめて、チャラ男かつり目のガキにはいてもらったらどうだ？」

「いや、ダメだねえ。精霊術士を援護するんだ。二人の方がいい」

キツパリと言うホームズにヨルはため息を吐く。

「ま、俺もあまり賛成はしないが、悔しい事にこいつの言う事に筋は通ってる」

ヨルは欠伸を一つ。

「第一、俺には基本的に拒否権はない」

面倒臭そうにヨルはそう言った。

「何もせずに殺されるのもシヤクだ。忌々しいが、乗ってやるホームズ」

「涙が出るほど嬉しいよ、つーか、死なないでしょ？ ジランドの命令が出てるんだよ？」

「阿保、お前がどれだけアルクノアに恨みを買ってると思ってるんだ」

ホームズは、ヨルの台詞を聞いて軽く肩を竦める。

「どうやら、最初から分かっていたようだ。」

そんなホームズを見てエリーゼは、ギユと杖を握る。

「ホームズ!!」

しかし、そんなエリーゼの叫びホームズは、適当に手を振って答える。

ヨルと適当な会話をするホームズは、もうジュード達の方を見ていない。

「やつぱり、ダメだよ！ ホームズ！ 一人で残るなんて!!」

ジュードの言葉にホームズは、振り返らずに肩にいるヨルを指差す。

「ヨルがいるよ」

「俺の数え方は、一人じゃないだろ」

彼らのくだらない会話している間も去り行く足跡が聞こえない。

おかしな話だ。

初めて出会った時ホームズは、自分が彼らから逃げることを考えるので精一杯だった。

それが今はどうだ。

ホームズは、自分が逃げることは考えず、彼らを逃がそうと精一杯だ。

(何が起ころるか分からないもんだねえ……)

焦りと懐かしむ気持ちとそれともう一つ渦巻く感情の中ホームズは、そんな胸の内を吐き出すようにため息を吐いた。

どうしたものかと。

何せ、このままでは、確実に全滅だ。

「……………随分と愛されたもんだねえ……………」

ホームズの言葉に感情はない。

「ホームズ一人で残すわけには、行きません」

「ま、そういう事らしいぜ」

エリーゼもジュードもアルヴィンも武器を構えている。

その言葉を聞きホームズが言い返す。

「馬鹿な事言うんじゃない!!この状況が分からない、君たちじゃないだろう!!」

ホームズは、そう言って歯をくいしばった。

これ以上ジャオのような人をホームズは、見たくないのだ。だが、それはジュード達も同じこと。

「だからって！ホームズ一人で置いて行くわけに行かないよ！」

「言ったはずです！ホームズ一人だけ戦わせないと！」

エリーゼの言葉を聞くとホームズは、頭をかきむしって叫ぶ。

「じゃあ、どうしろって言うんだい！このままじゃ、確実に全員死んじゃうだよ!？」

「一人じゃなけりやいいんだよ」

聞き覚えのある声とともに、無数の光の矢が、黒ずくめの兵達に降り注ぐ。

「ぐああ!!」

しかも、物の見事に鎧の隙間に打ち込まれていた。

「……俺も残るから、お前さん達はとつと人形の嬢ちゃん連れて逃げな」

ピチャリピチャリと静かに足音は、ホームズの隣まで歩いていく。

「……ここに来てくれるとは思いませんでしたよ、マーロウさん」

ホームズの言葉にマーロウは、ニヤリと笑ってもう一度弓を引いた。

「なかなか、冴えた登場だろ？」

そう言って再び矢を放った。

三十六計逃げるに限る

「……………うわあ!!」

砲撃が地面を抉る。

ローズは、砲撃に驚き思わず頭を抱える。

ミラに肩を貸しながらローズは、走っている。

そして、レイアが側を走る。

「敵が少なくてどうにかなりそうね」

「ミラさんを殺すつもりがない事が、最大の要因でしょう」

今や狙いは、完全にエリーゼとホームズだ。

「……………結局、ホームズという戦力が欲しかったのは、ラ・シユガルではなくてジラン

ドだった……………だからなのね」

ローズは、ジランドの事を思い出しながらそう言った。

ローズの言葉にローエンが頷く。

「ええ、恐らく」

「ホームズ……………大丈夫かしら?」

ローズは、後ろを振り返りながらそう呟く。

「大丈夫だよ。ジュードもいるし、アルヴィン君もいるんだもん」

レイアの言葉にローズは、少し顔を俯かせる。

「ローズ？」

「……アルヴィンのことだけど……」

その沈んだ言葉にレイアが首を傾げる。

「アルヴィン君がどうかした？」

「……うん、ミラに銃を向けてたのよ……」

ローズの言葉を聞き、レイアも少し顔を伏せる。

「……信用してもいいのかしら？」

ローズのその言葉は雨の中に静かに響いた。

誰もが何となく思っていた事だ。

しかし、それを口に出す事は憚れた。

言ってしまうえば、取り繕ってきたアルヴィンとの関係を断ち切ってしまう、そう誰もが感じていた。

しかし、もう目を背けることは許されないレベルのところまで話は進んでいる。

「……信じるしかないでしょう……でない、ホームズさんやエリーゼの事が不安

です」

ローエンの言葉は最もだ。

けれどもそれでローズの不安が晴れるわけではない。

ガイアスとの戦いホームズは、勝手に膝を付いていた。

「ローズさん、今はホームズさんのことより、私達が生き残る事を考えましょう。

ホームズさん達が無事だったとき、私達が合流出来ないなんて事になってしまえば元も子もありません」

その言葉にローズは、少し迷ってから頷く。

「……………それも……………そうね」

「大丈夫だよ！ホームズは、いつも死にかけてるけど、最後にはフラフラになって戻ってくるじゃん！」

「……………励まそうという気概だけは買うわ」

レイアの言葉にローズはため息を吐く。

励ましてくれるのは、素直に嬉しいし、その通りだと思う。

気を失ったミラを連れて戦場を抜けるというのは、なかなかの荒行だ。

他の事に気を取られている場合ではない。

しかし、胸騒ぎが収まらない。

「……………なんで、こっちに兵士がないんだっけ？」

そこでローズは、口を開く。

「ミラさんを殺すつもりがないからでしょう」

ローエンは、先程と同じ事をいう。

「……………なら、奴らは誰を狙っているの？」

ローエンは、静かに言う。

「……………ホームズさんとエリーゼさんですね」

「それって！」

レイアが声を上げる。

敵は、完全にそちらに集中してしまうだろう。

しかし、ここまではまだ予想通りだ。

分かっていた事態だ。

問題は、その後だ。

目を離れた隙に平気で無茶をするホームズ。

ローズは、ようやく納得が言った。これが、胸騒ぎの正体だ。

「……………逃げ切るには、敵を分断するに限るわよね？」

ローズは、声が震えるのを感じていた。

レイアもローエンもローズの言いたい事が分かった。

「……………ホームズ、一人で戦っているんじゃない？」

標的を一つに分ける事で、敵の量は単純に考えれば二分の一になる。

なら、あの四人を二人に分けるか？

否である。

エリゼという精霊術師を守るのに人は多いほうがいいに決まっている。

ホームズは、自分のそばに人が残る事を嫌がるだろう。

ローエンは、顔を俯かせる。

「杞憂……………で、済ます事が出来ませんね」

ローズは、思わず戻ろうとした。しかし、肩に感じるミラの重さになんとか冷静になる。

「……………どうしよう」

「……………しかし、我々にできることはミラさんを安全な所まで運ぶだけです」

ローエンの重苦しい声にローズは、思わず歯をくいしばる。

ホームズがマールロウと決着をつけた時のあのボロボロの状態は今でも蘇る。

もう、あんなのは見たくない。

いや、下手すればもう二度と見ることはなくなってしまうかもしれない。

思わず足を止めてしまったローズ。

「ローズ！それでも今は……」

そう言つて目を前に向け、目を剥く。

目の前には、アルクノアが立ちはだかつていた。

「そんな！なんで!?!」

「マクスウエルをよこせ！」

ローズは、ミラを背負い直し左手で支え、右手で刀を構える。

「随分とモテるわね……流石、ミラ」

ローズは、軽口を叩きながら面々を見る。

「なんで、私達を襲うのかしら？ ジランドから、そんな命令は出ていないはずだけれど？」

寧ろ逆の命令が出ている。

「そんなの我々の知ったことではない！我々の目的はマクスウエルだ！」

ローズは、刀を向けながらハツと鼻で笑う。

「どうやら統率は完全に取れているわけではないようだ。」

ジランドの暴挙に焦らされたローズからしてみればいい気味だということだろう。

少しだけ溜飲が下がった。

そうは言っても状況は変わらない。

人の失敗を心の中で馬鹿にして笑ったところで事態は全く好転していない。目の前には詠唱無しで精霊術レベルの攻撃を放つ奴らがズラリだ。

「……………まずいよね、これ……………」

「そうですね。ラツキーとは言えそうにないわ……………」

レイアの言葉に返しながらローズの握りこぶしは震える。せめてミラが起きてくれれば大分違うだろうが、ミラに起きる気配はない。

「……………ミラを背負って闘うのは厳しいわね……………」

「そう考えると、ホームズよくやったよね……………」

レイアは、シャン・ドウで気絶したローズを背負って来たことを思い出した。

「それもそうですね……………」

（つて、あ！まだ、お礼言っていないじゃない……………）

ローズが心の中でため息を吐く頃、ローエンがナイフを取り出す。

「みなさん私が、一瞬足止めをします。そしたら、一気に仕掛けて今度は皆さんが精霊術までの時間を稼ぎをお願いします」

ローズは、刀を突きつけたまま頷いた。

レイアも棍を掴む手をぎゅつと握る。

準備は出来た。

ローエンがナイフを投げようと振り被った、

その時、空から槍がアルクノア目掛けて二本降ってきた。

二本の槍はアルクノアを貫き、そして、空から声が一つ。

「爆砕……………」

影がアルクノアの真上に落ちる。

「陣!!」

振り下ろされたハンマーは、周りの地面をえぐって弾け飛んだ。

「ふーむ……俺の勘も捨てたもんじゃないな」

空から落ちてきた男、マーロウはハンマーを肩に担いで言った。



「マーロウさん？」

「なんで、疑問形なんだ？」

マーロウは不満げにそう言っつてハンマーを振り回す。

それに巻き込まれた兵士達はそのまま吹き飛ばされる。

ローズは、そんなマーロウに言葉を続ける。

「そりゃあなりますよ！聞きたい事だつて山のように出てきますよ！何故ここにいるのかとか、どうしてここにいるのか、なんでここにいるのかとか！」

「実質一つじゃねーか。高台に登って位置を確認したんだよ」

マーロウの呆れたような言葉にローズは深呼吸してそれ以外の事を訪ねる。

「あの……その精霊術潰した筈なんですけど、なんで使えるんですか？」

ローズの言葉にマーロウは、右手を見せる。

そこにはローズのつけた刀傷はどこにもなかった。

「ああ。時間はかかるが、こいつは勝手に復活するんだよ。つか、質問の変わりようがとんでもないな」

後半のセリフを聞き流し、背中に冷たい汗を走らせる。

「……………もしかして、下手すれば私のやったことって……………」

「まあ、ホームズの馬鹿が更に手間どえば、分からなかったな……………」

マールロウは、そう言ってハンマーをアルクノアに投げつけ、両手を合わせる。

レイアは、そんなマールロウに棍を構えている。

マールロウは、それを見て鼻で笑う。

「安心しろ。お前さん達を攻撃するつもりはねーよ」

そう言って両手を解き、今度は巨大ブーメランを出現させる。

「言つたろう？俺は、知り合いが死ぬのはゴメンなんだよ」

マールロウは、その言葉と共に今度はブーメランを投げる。

放たれたブーメランは、曲線を描き残りのアルクノアを吹き飛ばしていった。

ブーメランが、マールロウの手元に戻る頃、立っているアルクノアは何処にもいなかった。

マールロウは、ブーメランとハンマーを手の中に仕舞うと、一行を見る。

「ところで、ホームズ達はどうした？」

ローズは、その言葉を聞くと一瞬顔をしかめる。

「別れたんです」

レイアの言葉にマーロウは、目を丸くする。

そんなマーロウにローズは詰め寄る。

「お願いです、マーロウさん。ホームズを助けて下さい」

そう言つてローズは、そのまま泥水の上に膝をつき、土下座をする。

弟子の土下座にマーロウは、目を白黒させる。

「お、おい」

しかし、それに構わずローズは続ける。

「勝手な事を言っているのは、重々承知です。それでも、ホームズを助けて下さい。あの馬鹿は、確実に自分がしんがりを務めるといふ提案をしている筈です。なので、どうか……」

ローズは、自分の声が震えているのを感じている。

そんなローズの言葉をマーロウは、遮る。

「わーってるよ。元々お前ら助けたら直ぐにホームズの所に行くつもりだったんだよ」

「……マーロウさん」

マールロウの言葉を聞き、顔を上げる。

その顔は雨で分かりづらいが確かに涙が流れていた。

「だから、とつとと立て、馬鹿弟子」

マールロウは、そう言つてローズの腕を持ち無理矢理立たせる。

そして、少しだけニヤリと意地の悪い笑みを浮かべる。

「お前、よっぽどホームズの事が大事なんだな」

「なっ?!」

マールロウの言葉にローズは、顔を真っ赤にする。

「な、な、何言つてるんでしか!ふ、普通です!そう、普通ですよ!」

「……………突っ込んだ方がいいかな?」

「突っ込んだら負けという奴ですよ」

思いつきり噛んだローズにレイアは呆れたように呟く。

マールロウは、懸命に言い訳をするローズを見て面白そうに笑つた後、ローズの頭に手を乗せ、くしゃくしゃと撫でる。

「その気持ち、大事にしるよ。この先何があるうとだ」

マールロウに頭を撫でられながらローズは、その言葉に首を傾げる。

「あいつだって、お前の事が大事なんだからな」

「……………?それってどういう……………」

「さてな」

「……………マールロウさん、意地悪です」

「優しいだけじゃダメなんだよ」

頬を膨らませ拗ねたように言うローズにマールロウは、軽くデコピンをしローズ達とは逆の方向に歩いていく。

ホームズの居場所もおおよそ見当はついているのだ。

ローズは、くしゃくしゃになった髪を解きながらマールロウの背中に言葉をかける。

「……………頼みましたよ」

「頼まれた」

マールロウは、そう言って手を振る。

「元気な嬢ちゃん、えーつと……………」

走るローズを追おうとするレイアとローエンをマールロウが呼び止める。

「レイアです」

名前の出てこないマールロウに代わり、レイアが名乗った。

「レイアとローエンは、なんか、言いたい事あるか?」

マールロウの言葉を聞くと二人は、近くにローズがいない事を確認し同時に口を開く。

「ローズ（さん）が必死にお願いしていた事、伝えておいて下さい」

マーロウは、クスリと笑うと二人に背を向けひらひらと手を振った。

「頼まれた」

その返事を聞き、レイアとローエンも走り出した。

二人が走り出した時マーロウは手を組み、弓を出現させる。

「さて、行きますか」

マールウは、弓を持って走り出す。

弟子の想い人、そして、大事な茶飲み仲間の元へと。

撃つていいのは……？

「よく、ここが分かりましたね」

「ローズとぼったり会ってな。そしたら必死の形相でお願いされたんだよ」

「それはそれは」

ホームズは適当に返すと後ろを振り向く。

マールロウは、再び弓を引き絞り放つ。

「ほれ、あと一押し説得しろ」

「言われなくても」

ホームズは、そう言つて言葉を続ける。

「ま、そんなわけだ。みんな先に行つておくれ」

アルヴィンは、頭の後ろをかく。

「そんな言い方あるかよ」

「……うん。ホームズ」

「分かつたつて、必ず戻るよ」

ホームズは、ジュード達に背中を向けた。

「ああ、そうだ」

背を向けたまま、ホームズは何かを思い出したように続ける。

「君たちが残るって言うてくれた時、白状しちゃうとね……情けない事に嬉しかった」
そのまま頬をぼりぼりとかく。

「ありがとうね」

エリーゼとジュードは少し肩をすくめる。

「ただし！その倍以上に鬱陶しかった……今後はそんな事、無しにしておくれよ」
その台詞を聞いてエリーゼとジュードは、しらっとした目を向ける。

アルヴィンは面白そうに笑っている。

「ホームズは、そんなだから友達がいらないんです」

「……………せめて、そこは少ないにしておくれ、エリーゼ」

困った様な顔をするホームズを見てエリーゼは、思い出したように微笑む。

「そうでしたね。そんなんだから、友達が少ないんですよ、ホームズ」

ホームズは、ひらひらと手を振って前を向いた。

言いたいことは言った。

それ以降ジュードもエリーゼもアルヴィンもホームズもヨルもマーロウも振り返る
ことはなかった。

ホームズは、彼らが去るとマールウに目を向ける。

「あの、気になっていたんですけれど、その武器どうしたんです？」

召喚の精霊術は、潰したはずですけど……」

「お前ら二人して同じこと聞くのな……復活させたんだよ。ローズに潰されたせいでもう一度一からやり直しだった。」

時間がかかったのは、そのせいだ」

「ああ、なるほど」

マールウは、そう言つて弓を引く手を止め、ホームズに水の入った瓶を渡す。

「これ、エリクシール？」

「やる、飲んでけ」

ホームズは、言葉に素直に従つて瓶の中身を飲み干した。

すると、先ほどまでの疲れが嘘のように消し飛んだ。

睡眠をとつたかのようにホームズの身体に力が戻つた。

そんなホームズに兵士が襲いかかる。

ホームズは、瓶をぶつけ、そして、回し蹴りを腹に叩き込む。

意識を失つた兵を掴むとそのまま持ち上げ、自分の後ろにいる兵達に投げ飛ばす。

「……隙を作つたな？」

そう言つてマーロウは、目の前の的に弓を引く。

その放たれる殺気に兵士たちは慌てふためき更に銃弾を放つのだが、当たらない。頬をかすめる銃弾に一瞥をくれる。

「やれやれ」

マーロウの手からマナが溢れそれを弓が矢へと形を整える。

マーロウ自身にマナを矢に変化させる力はない、弓が変えているのだ。

「覚悟出来てんだらうな？」

その言葉と同時に矢は放たれた。

放たれた矢は同時に無数に分かれ、矢は兵達に突き刺さる。

しかし、幸い急所は外れている。

「ぐ……………これぐらい!」

「んなわけねーだろ」

向かってくる兵達に向かつてマーロウは、指をパチンと一発鳴らす。するとそれを合図に兵達に刺さった矢は爆発した。

「うわああああ!!!」

自分の身体の一部が弾け飛んだ兵士達は急いで退却していく。

残った兵士達は、弓を打たせなように遠距離から銃を連射しようとした。しかし、兵達が構えるより早くマーロウは次の矢を放っていた。

銃を構えるより早く矢に刺さる兵士達。

「い、いや、いやだ——!!お願いだ!助けてくれ!止めてくれ!!」
周りがどのようなようになったか見ていない訳ではない。

恐怖が襲いかかる。

その様は、惨めで哀れだ。

しかし、

「……………却下だ」

そう言つて再度爆発音が響きわたる。

「凄いですね、それ…………」

「ま、でも、ここらで打ち止めだな」

マーロウがそう言った瞬間弓の弦が消えた。

「えっ?」

「時間制限があんだよ……お気に入りに入りなんだが……連発すると弦が痛んじまつてなあ……こうしてしまいこんで自動回復に努めるんだよ」

マーロウは、そのため息をついて両手を組み、そして、その中にしまう。
代わりに矛を取り出した。

矛を構えるとマーロウは、ニヤリと笑う。

「事、突進に置いて槍に勝るものはないぜ」

「矛ですけど、それ……」

「どっちも似たようなもんだろ」

ホームズが、マーロウに呆れた瞬間、兵達の足元が爆発した。

先ほどの矢がまだ地面に残っていたのだ。

それと同時にマーロウは、踏み込んでいた。

爆発で、戸惑っている兵士達を矛で蹴散らしながら進んでいく。

兵達は、マーロウに銃を放とうとするが、味方の兵が邪魔で下手に発砲出来ない。

マーロウは、突進で相手の度肝を抜くと武器を切り替える。

「密集地帯じゃあな？」

出てきたのは、一振りの日本刀だった。

マールロウは、左手から引き抜くと同時に回転する。

「円閃牙ア!!」

マールロウを中心として、兵達は切りつけられ吹き飛ばす。

「うわああああ!!」

マールロウの周りにいた兵達は、ことごとく倒されていく。

「な………何をやっている！黒匣ジンを使え!!早く!」

「魔神剣・焰!!」

しかし、それをマールロウは許さない。

マールロウから放たれた炎の剣戟は、兵達をなぎ倒して進む。

近距離から攻撃をすれば、刀で斬られ、かといって遠距離から離れて戦おうとしても

マールロウは、それを許さない。

ようやく兵達はマールロウの規格外の強さに気づいた。

詠唱という無駄な手間をかけずに力を使える、自分達の方が一枚上手だと思っ
た。

しかし、マールロウにはそのアドバンテージも意味をなさない。

一対十なんてレベルではない戦力差を平気で覆してくる。

兵達は、寧ろ恐怖し始めていた。

「……………つ！間違うな！我々の目的は、その男を倒すことではない。

その黒猫を連れられた男を捉えることだ!!」

一人の兵の言葉に兵達は、ハツとして今度はホームズに襲いかかる。

「……………まあ、そう来るよねえ……………」

ホームズは、顔が引きつるのを感じる。

マールロウのような無双は、夢みたいなものだ。

(まあ、でも、何回も戦ったんだから、強くなってる……………はず！)

敵の数を見てもホームズは、己を鼓舞する。

『勘違いしちやいけないよ、ホームズ。命懸けの戦いをしたから強くなるわけじゃない』

ホームズの脳裏に蘇る言葉。

思わず心を折る言葉だが、続きの言葉が蘇る。

『まあ、でも、命を賭けて戦ったんなら、強くならなきゃ損だよねえ』

ホームズは、静かに足に力を込めながら上げる。

爆砕陣にしては、大きいタメにマーロウは、遠目で見ながら首を傾げる。

『行商人私の息子なら、得する方を選びたまえ』

「ヨル、見極めたまえ」

「……なるほど。ふむ」

ヨルはそう言っ
て金色の目を凝
らす。
そして、尻尾で
示す。

「そこだ」

ホームズは、ヨ
ルの示した位置
を思い切り踏み
つける。

「魔王地顎陣!!」

爆碎陣とは、比喩物にならない威力。

ヨルは此処まで来るのに散々靈勢を見てきた。

だから、不安定な場所を見極めることが出来る目が鍛えられていた。

だから、ホームズはそこを渾身の力を込めて踏み抜いた。

ヨルの力を借り、更に力を込め、今は亡きジャオの技をホームズは再現しきつた。

命を賭け、削った戦いで得たものは全てホームズとヨルのもの。

彼らは知ったことを過ごしたことを無駄にしない。

迂闊に近寄った面々は爆発に巻き込まれ中に浮くか、派手に吹き飛ぶ。

勿論吹き飛んだだけではない。

「ああ” あああ” あっー！」

足が砕け激痛に悶えている兵がそこにいた。

突然光景に戸惑っている連中にホームズは、躍りかかる。

一人の顔面に蹴りを食らわせるとそのまま顔を足場にし、バク宙して、今度は背後にいる兵の士頭に体重を乗せ着地をする。

更にそのまま目の前に向かってきた兵士に回し蹴りを食らわせる。

「ご丁寧に関節を狙って。」

「があっ!!」

地面でもがいているいアルクノア兵の腹を踏みつける。

踏みつけられた兵は声もなく気を失った。

ホームズは、群がる兵を更に蹴り飛ばす。

「文字通り、命懸けで成長したんだ……君たち程度に負けるものか」

そう言うホームズの背後にジャオを殴った大型の爪のような籠手を嵌めた兵士が襲いかかろうとしていた。

しかし、それは突如現れたマーロウの一刀の元に切り捨てられた。

「……………本当、お前母親そっくりだ」

「それ、ガイアス王にも言われました……………」

そんな事を言っているとホームズの目の前で兵士が踵を鳴らす。

すると靴がスイッチが入ったように光る。

そして、人間とは比べ物にならないスピードで回し蹴りを放った。

ホームズは、それを後ろに下がってかわす。

「やれやれ、鍛え方が足りないんじゃないのかい?」

ホームズは、蹴りを外した兵士の顔を思い切り掴み持ち上げる。

そして、そのまま地面に叩きつけた。

「キックつてのは、ここうやるんだよ」

そう言つてホームズは、地面に叩きつけた兵士の腹にサッカーボールキックを食らわせる。

ラ・シユガル軍の鎧より防御力が薄いのが災いしたようだ。

身体に響き渡る衝撃に声もなく兵士は、氣を失つた。

蹴りを食らつた兵はそれこそボールの様に吹き飛び、更に別の兵士の意識を奪つた。

「何処かで見えた蹴りだな！」

マールロウは、そう言つて群がる兵を切り倒していく。

「奇遇ですね、おれもです！」

そして、マールロウの背後に襲いかかる敵をホームズは、蹴つ飛ばしていく。

敵は減っている。

しかし、終わりが見えない。

マールロウは、リリアルオーブが輝かせながら、刀を投げ捨て両手を組み、新たな武器を引つ張り出す。

出てきた武器はアルヴェインやエレンピオス人が使う武器、銃だった。

リーゼ・マクシアに銃という武器はない。

だから、マールロウが持っているはずはないのだが、マールロウの手に収まっているそれは、間違いなく銃だ。

ホームズは、その銃を見てひとつの可能性に辿り着く。

(そうか、母さんのを見て、見よう見まねで作ったんだな……)

しかし、だからと言って普通は、作れるわけではないのだが。

「まあ、此奴を普通というのには無理があるだろう」

ヨルの言葉と共にマールロウのリリアルオーブの輝きは、オーバーリミッツ最高潮に達した。

「覚悟しろよ」

それが、秘奥義の開始だった。

マーロウは、撃鉄を引き、銃にマナを込めていく。

紫の光が銃を怪しく光らせそれは、銃口に集中していく。

銃口に集まらなかつたらマナは、やがて銃口の前に魔法陣を描き出す。

兵達は銃を撃つが、余りに濃密なマナにマーロウの周りの空間が歪んで見えてしま
い、狙いが定まらず、見当違いの方向に飛んでいく。

「撃つていいのは撃たれる覚悟のある奴だけだぜ？」

マーロウは、放たれる銃弾に一瞥すると銃口に現れた魔法陣が彼の視界に映る兵士の
前全てに現れる。

「轟け撃鉄……………」

そうやってマールウは、人差し指に力を込める。

「別れを告げる歌となれ！」

魔法陣は、輝き敵兵達はまぶしくて目を開けていられない。

”エターナル・フェアウエル!!”

カチリと引き鉄を引く音共に撃鉄が轟音で振り下ろされる。

轟音は、言葉通り目の前の的達に別れを告げる鎮魂歌レクイエムなって辺りに響き渡った。

放たれたマナの塊は、陣を通り、それぞれの陣を指し四方八方に散っていく。

兵達は避けようとするが、マナの銃弾は、陣を追っていく。

銃弾は、兵達の胸を次々に貫き、絶命に追い込んでいった。

兵達が動かなくなるのを見届けるとマールロウは、銃を下ろす。

「さて、こんだけやりやあいだろ」

「ですね」

そう言って二人は走り出そうとした。

やるだけの事はやった。

後はミラ達と合流するだけだ。

(みんな無事でいておくれ!)

ホームズが心中で願ったその瞬間マールウに冷気が襲いかかった。

「——なっ!?!」

マールウの足は地面に縫い付けられたように氷漬けにされた。

冷気は、まだ終わっていない。

ヨルはその冷気を辿って崖の上を確認する。

そこには、セルシウスとジランドがいた。

「まさか……………!!」

ホームズが気付くと同時にマールウに向かって氷の矢が降り注がれた。

(くそーこれじゃあ!!)

ホームズの方が先に進んでしまった為、投げているヨルの精霊術喰いも間に合わない。
い。

かといって、ヨルを投げている間もない。

ホームズは、顔から血の気引くのを感じていた。

直ぐに踵を返し、マールウに向かって走り出した。

肩でヨルが何かを言っているが、そんな事を耳に入らない。

いや、入れている余裕なんてない。

今のホームズにとって優先すべきは、マールウだ。

これ以上自分の知り合いが死ぬのはごめんなのだ。

自分の知り合いの死。

それは、ホームズにとって味わいたくないことだ。

ホームズは、完全にマールウの盾になるつもりだ。

一秒が一時間に感じるほど、ホームズは空中にいた。

雨は数えられるような早さでゆつくりと地面に落ちていく。

氷の矢がマールウの目前まで迫っている。

しかし、ホームズの判断が功を制した。

この調子なら氷の矢が届くより、ホームズが盾となる方が早い。

(間に合った！)

ホームズは、安堵に包まれた。

様々な策を消してこれを選んだ甲斐があつたというものだ。

しかし、それを容認しない男がいる。

ホームズが命を捧げて守ることを良しとしない男がここにいる。

その男……マールウは、フツと微笑んで自分の前に出ようと迫ってくるホームズに裏拳を食らわせ、来た方向に返した。

ホームズは、突然の事に何が起きた信じられなかった。

マールウからゆっくりと離れていく身体を自覚し、暫くしてして、ようやく何をされたか、気づいた。

ホームズは、目を見開き手を伸ばす。

「マ——……………」

吹き上げる水飛沫と轟音。

氷の矢は、マールウを一片の慈悲もなく貫いた。

永く遠い別れ

「ん？」

視界を遮っていた水飛沫が消えると、そこにはいるはずのホームズとマーロウの姿はなかった。

「……逃げたか」

ジランドは、そう言うのとセルシウスを機械の中にしまう。

「如何致しますか？」

近くの兵士が今にも飛び出しそうになりながら、構える。

「……退くぞ。もう、何もないだろうが、万が一何か奥の手が用意されていると厄介だ。

出来れば欲しい戦力ではあるが、それで逆に戦力を減らしていれば意味がない」

そう言ってジランド達はその場から立ち去った。



「ハア…………ハア…………ハア…………」

マールウを背負いながら、ホームズはなんとか走っていた。

そんな中、ホームズは石につまづいて転んだ。

幸いホームズが下敷きになった為、マールウ自体に転んだダメージはない。

「……………つくー！」

ホームズは、もう一度背負おうとするが、マールウがそれをやんわりと拒否する。

マールウは、力なくホームズの背から転がり仰向けになる。

ギリギリのタイミングで剛招来をした為、即死はまぬがれた。

しかし、マールウの腹には、巨大な穴が空いている。

その穴はもう長くこの世に長くいる事を許されていない証拠だ。

「もう……………いい。無理だ…………」

「馬鹿言うんじゃない!!」

ライフボトルも使ったんだ! 傷だって……………」

しかし、傷が塞がっていく様子はない。

ホームズは、歯をぎりつとくいしばる。

「エリクシールは?!」

「お前に……やったので、最後だよ」

「そんな……」

ヨルはホームズの肩にいながらたずねる。

「……お前、どうしてホームズを殴り飛ばした?もし、ホームズが盾になればお前は助かったろう?」

マールウは、傷を少し見る。

「ま、俺だって……撃たれる覚悟ぐらいしてたさ……」

弱々しい声にホームズは、首を横に振る。

「……マールウさん?嘘だろう?化け物みたいにマールウさんが……」

「……くくく、なんて顔してんだよ、お前」

ホームズは、今にも泣き出しそうに顔を歪めている。

「……涙が似合うなんてイケメンだけだぜ……モテない男はな、笑ってなんぼなんだよ」

「……なんだ……元氣じゃないか……そんな減らず口が出るんだ……だから……」

震える声で絞り出されるホームズの言葉を聞きながらマーロウは、困ったような顔をする。

口の端から流れる血の量が、ホームズの希望を潰していく。しかし、ホームズはそれに構わず更に言葉を続ける。

「まだ、おれは故郷に行っていないじゃないか!!おれの故郷の酒が飲みたいって言ったの、あなたですよ!!」

マーロウは、少しだけ笑う。

「ああ……………そうだったなあ……………それ……………が飲めないのは、少し惜しいな……………」

「そうですねよ!だから!だから!!」

ホームズの瞳に涙がたまっていく。

「……………おれも、精霊術が使えれば……………」

ホームズは今初めて自分が精霊術を使えない事を呪った。

俯きながら悔しそうに震えているホームズにマーロウがコツンと拳を当てる。

「阿保言え……………それじゃあ、お前はヨルに……………とり殺されてるだろうが……………」

そう言つて、俯くホームズの頭に手を乗せる。

「それじゃあ……………お前は……………誰にも出会えなかった……………ローズや、マクスウエルの姉

ちゃん達や……俺にもな」

「……………マールウさん」

「俺は、そんなのゴメンだね」

マールウは、ホームズの頭から手を落とす。

「なあ、ホームズ……………俺はお前らに会えて……………楽しかったぜ」

マールウは、ポツリとこぼした。

「辛い事も多かったが、それでも、お前らと……………紅茶飲んで……………情報交換して……………よお

……………いいもんだよなあ、ああいうの」

「づん、づん」

もうホームズの涙は決壊していた。

マールウの顔に雨に混ざって暖かいものが、顔に落ちる。

マールウはゆっくりとコートのポケットを漁り、ホームズに鍵をヨルにリリアルオーブを渡す。

「おい、お前、これ……………」

「お前に使えるかは、分からんが……………俺が持っているより、マシだろ……………」

ヨルにそう言うのとマールウは、ホームズの方を向く。

「その鍵の使い道は……………俺の家に行けば分かる」

「……………自分の家でしよう？自分で案内してくださいよ……………」
マールロウは、それには答えず、煙管を啜える。しかし、雨が邪魔をし、煙管に火が灯る事はなかった。

マールロウは、煙管を吹かすのを諦めた。ただ啜っていた。

「もう少し見ときたかつたんだがなあ……………お前らは揃いも揃って不安で仕方ねーよ……………」

「だったら、生きろ!!最後まで見てろよ!」

マールロウは、煙管を啜えながら言葉が続ける。

「……………我儘だなあ、おい……………」

マールロウの視界は極端に狭くなっている。

マールロウ自身もう、終わりが近いのを悟っていた。

いや、氷の矢が迫っていた時から、それぐらいわかっていた。

だからこそ伝えなければならぬ。

先を歩くものは、後を歩くものに伝えなければならぬ。

ホームズは決してマールロウの弟子ではない。

しかし、ホームズより遥かに歳上だ。

だったら伝えなければならぬ。

それが、マーロウの役目だ。

「ホームズ……………」

マーロウは、そう前置きすると掠れる視界の中に移る碧い瞳を頼りに言葉を続ける。

これだけは言っておかねばならない。

ホームズが、直面している間違いそのもので、そしてこれから、確実に行われる事を未然に防ぐべきなのだ。

「お前がこれから歩むのは、お前の人生だ。お前だけの、お前による、お前の為の、人生だ。

だから、他人の荷物を背負ってまで潰れるな」

マーロウは、殆ど狭まった空を見上げる。

「人生は、長い……………それなのに他人の荷物で潰れたら、どうしようもないだろ……………」

遺言ぐらい聞いてあげたい。
しかし、ホームズは領けなかった。

「ゴメン、マーロウさん。それは、無理だ」

ホームズの言葉にマーロウは、悲しそうに笑う。

「やっぱり、そう答えるか……………なら、後はお前に任せた……………」
そう言つてマーロウは、ヨルを見る。

「頼むぞ」

ヨルは無言でマーロウを見てこくりと頷いた。

「分かった……………元々一連托生の身だ。一回だけはどうかしてやる」
ヨルの言葉に満足そうに頷くとマーロウは、ホームズの方を向く。

「ローズの馬鹿には、頑張れつて言つといてくれ。あいつ、自分でも気付かないうちに成長しているフリをしちまうからな……………」

「……………分かりました……………必ず伝えます」

もう、ホームズは涙を堪えていない。

顔は雨と涙で濡れていた。

「もう行け……………じきに奴らも来るだろう」

マールロウの口から煙管が転がった。

もう啜えている力もないのだろう。

ホームズは、悔しそうに俯く。

「ホームズ」

「わかつてるさ、ヨル」

ホームズは、マールロウの煙管を拾って立ち上がった。

マールロウは、音だけでそれを察する。

「……………ホームズ、生きろよ……………死んだりしたら……………今度こそ手加減抜きで殺してやる」

ホームズは、煙管をいつもの小袋の中に入れる。

「ええ、言われなくても……………ありがとうございました……………さよならです」

「じゃあな、マールロウ」

マールロウは、ヨルの言葉に少し驚き、ニヤリと笑う。

「もう……視界もぼやけてよくわからんが……ホームズ、ヨル、お前ら笑ってるだろうな？ さよならぐらい笑顔で言えよ」

弱々しい声でマールロウは、ホームズにそう言った。

「あた……りまえじゃ……ないですか……どんな女の子だってイチコロの笑顔……ですよ」

「……そうか……ならいい。じゃあな」

「はい」

ホームズは、ヨルを肩に乗せ、もう二度と振り返る事なく走っていった。遠ざかる足音をマールロウは、満足そうに聞いていた。

「ようやく、行ったか……………」

マーロウは、曇った空を見上げる。

顔を打つ雨の強さも相変わらず変わらない。

「……………あいつ、ほんと子供だよなあ……………おまけに嘘も下手くそだし……………そこだけはあいつとは大違いだよ……………」

そうつぶやいてマーロウは腹の傷に手を触れる。

あの時、ホームズの厚意を受け取っていたら、確かに死ななかつただろう。けれどもマーロウは、それを拒んだ。

もう少し後悔があるかと思つたのだが、以外に普通だ。

顔を打つ雨に顔をしかめる事もない。

—— 『お前、本当にいつも楽しそうだな』

『当たり前だろう？人は生き方は選べるけど、死に方は選べないんだから。だったら、楽しく生きた方がいいじゃないか』

『……………もし選べたら？』

『そんな時は私の負けでいいよ。君の初白星だ。てなわけで、どうする今ここで腹でも切るかい？』

『アホ言え。誰がやるんだよ、そんなこと。つか、勝負だったのかよ……………』

『出来るか、出来ないかの賭けだろうか？だったら、勝負さ』——

「はっ……ははは……」

もう、今まですっかり忘れていた思い出を思い出し思わず笑ってしまった。いつも負け続きだった。この時もいつものように負けたマーロウは、そんな会話をしていたのだ。

マーロウは、ニンマリと笑い口を開く。

「……………どうだ、自分で死に方……………選んでやったぞ……………賭けは……………おれの勝ちだ……………ざまあみやがれ……………」

マーロウは、ゆつくりと空に向かって手を伸ばす。

あの空の向こうに彼らの目指すべき場所がある。

それが分かった。

彼らの目的ももうすぐだ。

「ルイーズ・ヴォルマーノ」

そう呟くとマーロウの手は地面に静かに落ち、それっきりもう二度と動く事はなかった。

真実

知に動くと角が立つ

「……………」

ホームズはヨルを肩に乗せ雪の降る平原を一步ずつ歩みを進めていた。

泣き腫らしたホームズの目は真つ赤だった。

「む？あいつらの靈力野の気配がする」

「そうか……………全員いるかい？」

「まあ、靈力野ゲートのないチャラ男は気配を感じれないが、まあ多分全員いるだろ」

「……………なら良かった」

ホームズは、腰にある袋をちらりと見る。

「早く行こう……………また、ローズも心配してるだろうし……………」

「珍しいな。お前がそんな事を言うなんて」

「……………まあ、今だけの話さ」

「……………ああ、そうだな」

ホームズは、ゆつくりと歩みを進める。

太ももに当たる小袋がマールウの言葉を思い出させる。

—— 他人の荷物を背負ってまで潰れるな ——

「……………無理に決まってるだろう」

ホームズは、もう一度そうつぶやいて歩みを進めた。



「ホームズ!!」

ザイラの森の教会に來たホームズを見つけたジュードは、驚いたようだ。ローズは、ジュードの言葉にぱつと振り返り、急いで駆け寄る。

「ホームズ!? 血だらけじゃない!!」

あわあわと慌てているローズにホームズは、ゆっくりと首を横に振る。

「……………おれの血じゃあない」

「じゃあ、返り血か?」

ミラの言葉にもホームズは静かに首を横に振る。

ホームズは、歯をくいしばる。

「マーロウさんの血だよ」

その言葉で一同は、マーロウがない事にようやく気付いた。

空気が凍りつく中、ホームズはローズの目をそらさずに言葉を続ける。

「ごめん。マーロウさん……助けること出来なかった……」

ホームズは、喉の奥から声を精一杯絞り出してローズにマーロウの事を告げた。

「うそ………でしよ？」

ローズは、信じられなかった。

再び訪れた自分にとって近しい人間の死。

ローズは、これを容認出来ないでいた。

「本当だよ。マーロウさんは……死んだ」

そう告げるとローズは、膝から崩れ落ちた。

「そんな……………」

ホームズは、袋からマーロウの煙管を取り出し、ローズに渡す。

「こんなものしか持ってこれなかった……………」

ローズは、ゆつくりと横に首を振って受け取らない。

「いない……………」

「ローズ……………」

「私はまだ、マーロウさんの死体を見ていない。だから、死んだなんて信じない」

ローズは、立ち上がってそう言い切った。

ホームズは、そんなマーロウさんを見て悲しそうに顔を顰める。

「ローズ……………間違いなく、マーロウさんは死んでる。」

それはどうしようもない事実だ」

「やめて」

「そこから目をそらしてもしょうがないだろう?」

「……………やめると言っただけはよ」

俯き聞きたくないというふう「やめて」と繰り返すローズ。

しかし、ホームズは続ける。

慰めるなんて事はしない。

正確に言うならローズはまだ、そんな状態ではない。

「おれは、嘘が下手だ。だから、本当の事を言うようにしている。

だから、今言っている言葉は、嘘も偽りも裏もなく本当の事だ」

「やめてって言ってるでしょっ!!」

ローズは、そう言つてホームズの頬に平手打ちをした。

「マーロウさんは、私の師匠で、そして、家族も同然だったのよ!」

ホームズは、平手打ちを食らつても微動だにせず、ローズを真つ直ぐ見据える。

「だったら、認めたまえ。君がマーロウさんの死を弔わないで、どうするんだい」
目をそらされて言われた言葉に力はない。

なら、目を逸らさず言われ、しかもそれが正論だったらどうだ。

それは、残酷な程に強い力を持つ。

ローズは、歯を食いしばり俯く。

「……………分かった。でも、煙管はいらない」

「そう……………」

ホームズは、ローズの言葉を聞くと袋を腰に下げてある小袋の中にした。

何となく予想はついていたのだ。

マーロウの満足そうな笑みが頭をよぎる。

再び溢れそうになる涙をこらえ、ホームズは頭を振る。

(今は、感傷よりも……)

現状の把握に努めようと判断したホームズは、兼ねてからの疑問を口にする。

「それで、この羽の生えた美人誰だい？」

いつもの調子とはかけ離れた冷めた口調でホームズは、ジュードに尋ねた。

ホームズの視線の先には水色と白を基調した服に身を包み宙に浮いている女性がいる。

その女性は、先ほどから柔らかく微笑みながらジュードの側にいた。

「ミラの姉だって。僕を助けてくれたんだ」

ジュードは、そう言つて後ろにいる背中に羽というより、何らかの模様を背負った女性

「ミュゼよ。よろしく」

柔らかく微笑むミュゼにホームズは、曖昧に頷く。

若干片足を前に出して構えるホームズを見てミュゼは、ふふふと笑う。

「そう構えないで。別にあなた達をどうこうするつもりはないわ」

「……精霊のくせに何を言っている」

ヨルは、毛を逆立てて更に尋ねる。

「この靈力野の氣配……お前、戦場にいたな？」

「ええ。おかげでマナが足りなくなっちゃて……」

「ふーん……だからおれ達を襲わないのかい？」

「それだけじゃないわ。今のあなた達を見ていれば、そんな気は起きないわ。マクス
ウエルも信頼してるし」

「……………本当に？」

「ふふふ、疑り深いわね。もしかして襲って欲しいの？」

その言葉に面々は、息を飲む。

しかし、当の本人は肩を竦める。

「遠慮しとく」

何にせよ、ミラ達が無事だった事は喜ばしい事だ。

ホームズは、気持ちを切り替えるようにため息を吐く。

「それより、ホームズ、大丈夫？ 別れ際、かなり消耗してたけど……」

ガイアスとの戦いの時、ホームズはマールウとの戦いのダメージを残していた。
レイアの言葉にホームズは、軽く掌を振る。

「大丈夫だよ。マールウさんに会った時エリクシールをもらったから」

マールウの名前からは、一気に早口で説明する。

ローズの肩が少しだけ動いた。

ホームズは、それに気付かないふりをして、レイアに逆に尋ねる。

「君たちは？」

「……あ、べ、別に大丈夫だよ」

自分の一言で気を遣わせてしまったレイアは気まずそうに答える。

微妙な沈黙が降りようとした時、教会からウインガルが出てきた。

「ウインガルさん！」

ローエンの言葉と共に、一行は武器に手をかける。

それをウインガルが手で制する。

「後にもらおう」

カン・バルクの城の鐘が鳴り響いた。

「情報通りか……」

ウインガルの呟きと共に、空にハウリング音が響き渡る。

「私は、ジランド。まずは君たちの街に強引に進駐した非礼を詫びよう」

そして、ジランドの声が鳴り響いた。

ジランドという名前を聞いた瞬間、ホームズの顔が険しくなる。

「だが、勘違いしないでらおう！我々の目的は支配などではない！」

ヨルは、ホームズの肩で冷めきった目で声の降ってくる空を見上げている。

「これは、大国間の戦争を回避する為の非常措置だ。

諸君の生活と安全は、アルクノアが保障しよう！」

ローズの拳が強く握られる。

「それと、ホームズ・ヴォルマーノ。君には手荒な真似をしてすまなかつた」

ホームズの片眉がピクリと動く。

「しかし、理解して欲しい。リーゼ・マクシアに平和をもたらす為には、君の力が必要だ！」

「……………」

皆の視線を集めながら、ホームズは無言で聞いている。

「あの戦場を生き抜いているなら！どうか、我々と共に来て欲しい！」

ジランドの力強い言葉を聞き、ホームズは、一気に冷めた顔をする。

「……………ああ、なるほど。そういう事か……………もっと早くに気づけばよかった」
もちろん、この眩きがジランドに届く事はない。

「我々の願いは、一つのはずだ！リーゼ・マクシアに永遠の平和を！」

ジランドの演説は、そこで終わった。



「ふざけたことを……………精霊に害をなす黒匣^{ジン}を作っておきながら……………」

「……………」

ホームズは、何も言わない。

「もう、あの者たちを討つしか道はないのかしら？」

ゆつくりと尋ねるミュゼにミラは静かに頷く。

「でもどうやって？」

『あいつら、めっちゃ強かったでしょー!!』

ティポとエリーゼの言葉にミラは押し黙り思索する。

「……………アルヴィン、ホームズ、知ってることを話してよ」

ジュードは、自分の手の内をほとんど見せない二人にそういった。

アルヴィンは、ジュードを無視して自分の元へとやってくる鳥から手紙を取る。

「アルヴィン!!」

「……………その男が答えないのであれば、そこのご指名を受けた奴に尋ねればいい

のではないか？」

ウインガルの言葉に一同は一斉にホームズを見る。

ホームズは、いつも通りの口調で答える。

「おれだって彼らについて知ってることは、ミラと大差ないよ」

「……………本当に？」

迷いながらも今、ローズははつきりとホームズを疑った。

ホームズは、そんなローズの顔を見ると諦めたように笑う。

「なら、一つ。ミラには言っていて、君たちに言っていないことを教えてあげる」

そう言っただけで表情は、とても悲しそうな表情だった。

その表情を見た時ローズは、自分が何か間違えたのか、それとも取り返しのつかないことをしてしまったのを悟った。

ミラ達もそのホームズの顔に生唾を飲み込む。

ホームズは、そんな面々の事など構わず淡々と喋り出す。

「おれの両親は、リーゼ・マクシア生まれじゃない」

今の状態でこれを言えばどういいう目で見られるか、それぐらいホームズだってわかっている。

けれどもあの放送が流れた時点で、諦めはついている。

アルクノアから特別にご指名の入った、ホームズ。

彼のことを快く思うリーゼ・マクシア人が一体何人いるのだろうか？

きっと、今まではラツキーだけでどうにか乗り切っていた。

しかし、これはもうダメだ。

リーゼ・マクシアにホームズの居場所はもうない。

かといって、アルクノアの下に行くなど心の底からごめんだ。

(まあ、いつもの事だよな)

ならば、別に隠す理由はない。

元々、嫌われるのは、慣れっこなのだ。

更に言葉が続けようとするホームズをミラが止める。

「もういい、よせホームズ。後は私が説明する」

言葉を途中で止められたホームズは、驚いたように目を丸くする。

「お前の知っていることは、私と大差ない……そう言ったのは、お前だろうか？なら、私が説明をする」

ミラの目に気圧され、ホームズは、静かに首肯する。

ホームズが頷いたのを見届けると、ミラはウインガルの方を睨む。

「ガイアスは、抗うのだろうか？」

ウインガルは、それに答えず教会の中に消えていった。

「誘っていますね。わざと、私たちの前に現れるとは……」

ローエンは、口を開いた。

「僕たちを試してるのかな……？」

「罨……とか？」

一行は、ウインガルの行動が読めず足踏みをしていた。

すると、アルヴィンが後ろか雪を踏んで歩いてきた。

「行こうぜ。ケリつけに行くんだろ」

普段とは考えられない、何かを押し殺すかのような声にジュードは、目を細める。

「……………何かあったの？」

しかし、アルヴィンはジュードには答えずミラを真つ直ぐに見る。
「もう裏切ったりしない。」

ジランドは、許せねえ……頼む……俺にジランドを殺らせてくれ」

ミラは表情を変えず、アルヴィンの話を聞いている。

「次にもし裏切ったら、お前の剣を迷わず俺に突き立ててくれてもいい」

そこで、言葉を切る。

「……だから、俺も一緒に行かせてくれ」

「ダメだと言ったら？」

アルヴィンは、ミラを真つ直ぐに見たまま口を開く。

「……おれだけでもヤツを殺る」

いつもの軽薄な雰囲気は、なりを潜め、確固たる決意でアルヴィンはそう宣言した。

「……………いいだろう」

ミラも真つ直ぐにアルヴィンを見返して言った。

「悪い……サンキュな」

ミラは、アルヴィンのお礼の言葉を聞くとホームズに目を向ける。

「ホームズ。お前も来い」

「は？」

ホームズは、心底驚いた顔をした。

「今のお前に、リーゼ・マクシアの中に居場所はないだろう……ほとぼりが冷めるまで、私達とともにいろ」

ホームズは、ミラを見るとハアとため息を一つ。

「……………わかった。雇い主の言葉には逆らえないもんねえ」

「そういう事だ。報酬が欲しかったら私達と居ろ」

ホームズは、ひらひらと手を振って答える。

そして、ちらりとローズに視線を向ける。

しかし、ローズはホームズから気まずそうに視線を逸らした。

ホームズは、それに気づかないフリをすると、教会の扉に手をかけた。



「来たか」

ガイアス、ウインガル、プレザ、アグリアが、奥に佇んでいた。ウインガルは、ホームズとアルヴィンを見る。

「ふん、結局そいつらを信じるのか……意外に甘いな、マクスウエル」
ホームズは、ウインガルに構わずガイアスの方を向く。

「ガイアス王……おれと共に残ったマールロウさんが戦死しました」
その言葉にガイアスは、静かに頷く。

「……わかった」

その短い言葉にどんな感情が籠っているか？

それは、ガイアス以外分らないだろう。

何せ、マールロウ一人に防壁の一つを任せていたのだ。

信頼がないといえば嘘なのだろう。

「私達をここに導いた理由はなんだ？」

ホームズとガイアスの会話が終わるとミラが尋ねる。

「我らは、奴らと雌雄を決すべく、発つ。

お前らが、勝手に奴らと戦うというなら、それはそれでいい」

ウインガルがそう言うのとガイアスが言葉を引き継ぐように口を開く。

「だが、その前に、お前には話してもらおうぞ。お前がひた隠しにしてきた断界殻シエの存在について」

ミラは迷ったように俯く。

ミラ自身その事は秘密にしておきたいのだ。

しかし、先ほどホームズに代わりに説明すると言った手前、説明しないわけにはいかない。

「分かった。全て話そう」

今、リーゼ・マクシアの真実が語られ始めた。

口は災いの元凶

「……………今から二千年前。このリーゼ・マクシアは、私の施した精霊術、断界殻シエールによって閉ざされた世界として生まれた」

ミラから発せられた言葉にエリーゼ達は息を飲む。

「……………この世界が、ミラに作られた……………」

『神様みたい』

レイアとティポの言葉にホームズは、肩をすくめる。

「まあ、実際マクスウエル様ただけどねえ……………」

ミラは言葉を続ける。

「全ては人と精霊を守るためだった」

レイアは、近くにいるヨルに尋ねる。

「知ってた？」

「まあ、ある程度は」

そんなヨルとレイアの会話に構わず、ガイアスは口を開く。

「閉ざされたと言っていたな……では、外にはまだ世界が広がっているのか？」

「ああ。その世界をエレンピオスと言う」

その言葉で、ウインガルがホームズの方を見る。

いや、ウインガルだけではない。

この空気は、全てホームズに尋ねている。

ホームズは、肩をすくめる。

「そうだよ。みんなの想像通り、おれの両親はエレンピオス人だ。

だから、必然的におれもアルクノアと同じって事になるかな？」

「ホームズ………」

ホームズは、ローズの声を背中で感じながらも無視をする。

「それで、結局クルスニクの槍つてのは、なんなんだ？兵器と言うには使い方がおかしい」

ヨルは、重くなった空気を無視して続ける。

「ああ。クルスニクの槍は兵器などではない。

アルクノアは、ナハティガルに兵器と謀り、断界殻シエールを打ち消す装置を作っていたのだ」

「断界殻シエールを打ち消す？一体何の為に？」

ガイアスの言葉にミラは首を振る。

「……わからない。マナを還元する算段でもついたか……」

「違う」

ここで初めてずっと黙っていたアルヴィンが口を開いた。

「アルクノアは、帰りがたかっただけだ。自分の生まれ故郷に……」

アルヴィンは、とても悲しそうにそういった。

「生まれ故郷って……エレンピオスに？」

ローズの言葉にアルヴィンは、静かに頷く。

「……リーゼ・マクシアに閉じ込められて二十余年……それだけを考えて生きてきた」

アルヴィンは、腕を組んだまま続ける。

「断界殻^{シエ}をぶち破るか、消す方法を探してな……」

その言葉を聞くとミラは俯く。

「だが、断界殻^{シエ}を消すには、私を殺さなくてはならない」

ミラのその言葉にレイアは、納得した顔をする。

「そうか。だから、アルクノアはミラを狙っていたんだ……」

その言葉と共に視線は、ホームズに集まる。

何せ、両親の故郷の行き方が最悪な形で分かったのだ。ホームズは、辺りを見回して口を開く。

「まあ、知ってたよ。とある情報からね、その事にたどり着いた」とある情報というのは、ジュードの父親の事なのだが。

「しかし、ホームズは、その方法を拒み、別の方法はないかと問いかけてきた」
ミラがそれを引き継ぐ。

「私も幾つか提案はしたのだが、どれも実現不可能でな。

だが、私が知らなくても捕らえられている四大が何か知っているかもしれない
……………」

「それが……………」

ジュードの言葉にミラが頷く。

「ああ。それが、今回ホームズに支払われるべき報酬だ」

ホームズは、ひらひらと手を振る。

「……………うして……………」

「ん？」

ボソボソと言ったエリーゼにホームズは尋ね返す。

「どうして、言ってくれなかったんですか！」

エリーゼの言葉は、ジュード達の代弁だった。

しかし、ホームズは薄く笑う。

「言えるわけないだろう？この箱庭の世界の秘密だぜ？やすやすと知っているものじゃあない」

エリーゼは、グウの音も出ない。

「……もし、四大が知らなかったら、ホームズはどうするつもりなの？」

レイアの言葉にホームズは、肩をすくめる。

「また、別の方法を探ささ。言つたらう？箱を一つ一つ開けて、潰してくしかないんだよ」

レイアは、カラハ・シャルルでの出来事を思い出した。

「なるほど……隠してる事を知れば、色々と行動に納得がでるね」

ル・ロンドの港での事、そしてホームズの裏切りにミラがあれ程狼狽した事も。

この報酬はミラでなければ払えない。

だというのに、ホームズはミラを裏切った。

だから、信じられなかったのだろう。

そして、ホームズの両親の故郷探し。

物心ついた時から探していて見つからないと言っていた。

そりゃあそうだ。

この世界にはないのだから、当たり前だ。

「嘘は言っていないだろう?」

ホームズのニヤリとした笑いにレイアは、苦笑いをする。

そんな中、ジュードが口を開く。

「ホームズ、確か、十八歳だったよね?」

「うん」

ホームズは、ジュードの言葉に頷く。

「つまり、ホームズは、両親がこっちに来てしばらくしてから生まれたってこと?」

「そういうこと」

ホームズが決してアルクノアと一緒にではない。

リーゼ・マクシアで生まれた人間なのだ。

そう皆が思った時、アグリアが口を開く。

「なあ、聞いていいか?」

「なんなりと」

「お前どうしてその女についてる?」

クルスニクの槍を使えば簡単にエレンピオスとやらに行けるじゃねーか」

そうクルスニクの槍は断界殻シエを打ち破つて見せた。

ミラを殺すことなく。

だつたらホームズがここにいる理由はない。

さつさとジランドの元へ行けばいいのだ。

そうすればホームズの望む通りの結末を迎えられる筈だ。

しかし、

「アグリア」

ゾツとする冷たい声が響き渡つた。

辺りを埋め尽くす殺気に教会の温度が下がる。

皆が戸惑っている間に轟音と共に長椅子が一つ崩れ去つた。

その椅子の近くにいるホームズを見て、ミラ達は、ようやくさつきの言葉がホームズ

のものだと気付いた。

「口は災いの門だ。おれが言うんだから間違いない。せいぜい気をつけることだね」
その殺気と説得力にアグリアは、思わず口を噤んだ。
それを見るとホームズから殺気が消えた。

「いい子だね。聞き分けのいいところもあるじゃないか」

ホームズは、馬鹿にしたように言う。

アグリアは、思わず武器に手をかける。

ヨルがそれを睨みつける。

「やめておけ。お前、ホームズに一度負けているだろ」

ヨルの言葉にアグリアは更にいきり立つが、ガイアスが止める。

「にしてもだ」

ホームズは、それを歯牙にもかけず考える。

「せっかく断界殻シエに穴を開けたっていうのに、どうして彼ら出て行かず、わざわざ入ってきたんだい？」

アルヴィンは、首を横に振る。

「わからない。俺たちはリーゼ・マクシア統一なんて望んじやない」

忌々しそうにアルヴィンは、吐き捨てた。

「俺たち……か」

ヨルは、誰に聞こえるでもなくポツリと呟いた。

もう自分で自分の正体をばらしている。

ウインガルが顎に手を当てて考える。

「ジランドは、断界殻のある今の状況を利用してしようとしているのかもしれないな」

「ふむ。なら、その女を殺さないと言うのにも納得がいくな」

ヨルもウインガルの言葉に頷く。

アルヴェインは、そんなヨルとウインガルの言葉で何か気付いたように立ち上がる。

「そうか！ 異界炉計画だ！」

「ああ？ なんだそれ？」

アグリアが不思議そうに尋ねる。

アルヴェインは腕組みを解き続ける。

「通称、精霊燃料計画。黒匣の燃料になる精霊を捕まえようって計画がある事を昔向

こうにいた頃、従兄弟が話していた」

「でも、それ変だよ！ 精霊を捕まえるだけならこんな事する必要ない」

ジュードは、こめかみから指を離す。

「ジランドは霊力野のある僕たちも閉じ込めるつもりだよ！」

ローズは、顔を青くする。

「……………そんな……………」

「ま、つり目のガキの言う通りだな」

ヨルの言葉にホームズは、齒をくいしばる。

「ああ……………分かっているさ……………」

ガイアスは、腹立たしそうに顔をしかめる。

「リーゼ・マクシアの民を資源とするつもりか……………馬鹿げた事を……………」

「多分ジランドは、海上にある本拠地に戻ってる……………エレンピオス軍も来てるんだ、近づくのは厳しいぜ」

アルヴィンの言葉を聞きウインガルは、考える。

「ならば、カン・バルクにある連中の空駆ける船を奪うというのは、どうでしょう？」

レイアは、それを聞いて、エリーゼに耳打ちをする。

「あの人、さらつと凄い事言ってるじゃない？」

「しかし、それしか手はないでしょう」

ローエンは頷いている。

ガイアスは、すつと顔を真っ直ぐ前に向ける。

「よし、明日決行するぞ」

そう言ってガイアス達は奥へと歩みを進めていった。

「待って！ガイアス！」

それをジュードが止める。

「一緒に戦ってくれるんでしょ？」

ジュードの言葉に少し歩みを止める。

「目的は、一緒でしょ？だったら、協力出来ない……かな？」

「冗談ではない」

ガイアスは、一言で切り捨てた。

「勘違いしてんじゃねーよ！」

アグリアも照れ隠しではなく、心底嫌そうに言う。

「マクスウェルが断界殻シエを作り、我々を閉じ込めていたと言うのもまた事実。

いずれ、お前たちとはまた争うかもしれない」

ガイアスの言葉にジュードは、二の句が続かない。

「そんな人達と必要以上に馴れ合う必要はないわ」

プレザがそう言い残すとウインガル以外奥へと消えていった。

「お前たちは、勝手にやるがいい。」

だが、一つ条件がある」

ウインガルは、そこで言葉を切るとホームズを冷たい目で見る。

「その男を殺せ。出来ないなら、代わりに私がやる」

「なっ!？」

レイアは、信じられないというふうに声を上げる。

「当然だろ。そいつにはアルクノアと同じ血が流れている。」

それだけならまだいい。信用出来ない程度の話だ。その男と一緒だ」

そう言つてアルヴィンを顎で示す。

「だが、ホームズは別だ。そいつらは、精霊術を無効化する。ジランド達の目的は、それだ。自分達の敵となる対リーゼ・マクシア用の戦力としてホームズを欲している」

そうだから、ジランドはホームズを欲しがったのだ。

ホームズも先ほどの放送で気づいていた。

ウインガルは、更に言葉を続ける。

「裏切ったにせよ、捕らえられたにせよ、そいつが奴らの手に渡れば、精霊術を使う我々にどのような影響が出るか……………」

ウインガルは、ミラを見る。

「リーゼ・マクシアの民の命とホームズ一人の命、どちらが重いかなど考えるまでもないだろう」

ミラは、クルスニクの槍を壊すためホームズを助ける事を後回しにした。

その事を考えると、誰もがミラの行動に予想がついてしまう。

「……………その通りだ。リーゼ・マクシアの人と精霊の命の方が重い」

ミラはそう口にした。

予想通り、だが、聞きたくなかった言葉がミラの口から発せられ、空気が、しんと冷え切った。

ウインガルは、それを聞くと刀に手をかける。

「だからこそ、殺す必要はない」

ミラは続けてそう言い切った。

「なんだと？」

「お前の言った通りだ。ウインガル。リーゼ・マクシアの民と精霊の命の方が、ホームズより重い」

そう言ってミラはホームズを見て微笑む。

「元々、釣り合っていない天秤だ。」

ホームズを殺したところで釣り合いはしない。

だから、殺す必要はない」

ホームズは、目を見開き驚く。

ウインガルは、そんなホームズとミラを見るときため息を吐く。

ミラのその強い瞳が断固断ると語っていた。

「……勝手にしたらいい。ただし、我々は巻き込むな」

そう言ってガイアス達の後を追った。

（そっか、あの時もミラはちゃんと事が終わったら助けに行こうとしてた……）

ジュードは、ミラを見て納得した

「どうするんだい？ ウインガルさんにあんな啖呵切っちゃって……」
そんな中当のホームズは、引きつりながらそんな事を言っている。

「まあ、ああ見えて、結構頼りにしてると思いますよ」

「殺せって言われたんだけど……というか、ミラのそれ、大分詭弁だよねえ……」
ホームズは、はははと引きつり笑いを浮かべてミラを見る。

「それよりも言うことがあるでしょ、ホームズ」

レイアに言われホームズは、ため息を吐き頬をポリポリと人差し指でかく。

「ありがとね、ミラ。嬉しいよ、そう言ってもらえて」

珍しく素直なホームズの言葉に思わずミラは面食らった。

「……なんとも、妙な気分だな。ホームズに礼を言われるとは」

「普段からそういう行動しないからだろうか？」

「いや、そんなのホームズだけだよ」

「なご悪い」

横から口を挟んだレイアの言葉にホームズは、半眼で言う。

「普段のホームズの行いなら、当然……です」

エリーゼにまで言われ、思わず涙が溢れそうになる。

隣で頷いているミラを見て、アルヴィンは苦笑いになる。

「おたく、よくこんなの信用したな。アグリアやウインガルの言ってること、決して間違つてないぜ」

「君にだけは、言われたくないね」

ホームズは、アルヴィンにそう言い返す。

ミラは腰に片手を当て自信たつぷりに口を開く。

「なにホームズは、信用するポイントさえ押さえておけばいいのだ」

ホームズは、頭痛をこらえるように頭に手を当てる。

「……突つ込まないよ、おれは」

絞り出すような悲壮感漂う言葉にレイアとジュードは、苦笑いをする。

そんな面々を興味深そうに見た後、ミラはホームズを見る。

「そうだ。ホームズ」

「何？」

言葉の端に滲み出る不機嫌さをミラは気にせず言葉を続ける。

「お前の母親と連絡は取れないか？」

「無理だね。けど、何故だい？」

ホームズは、不思議そうに首を傾げる。

「化け物と呼ぶ、お前の母親……一体どれくらい強いんだ？」

「マーロウさんよりも強かったよ。比べるのが馬鹿馬鹿しくなるほど」

「……………あのさ、他人のお母さんのこと、こうは言いたくないけどさ……………ホームズのお母さんって、人間？」

ジュードの引きつる声にホームズは肩をすくめる。

「まあ、おれが人間だから、そうだと思うよ」

どこか遠い目をするホームズになんとも言えない空気が生まれる。

「……………何としても敵に回したくない。どうにか連絡は取れないか？」

ミラの言葉にホームズは、手をひらひらと振る。

「別に大丈夫だよ。前にも言ったろう？母さんがアルクノアの味方なんてするわけないよ」

そう言って、壊れていない椅子に腰をかける。

「昔は勧誘とか結構いたんだけどねえ……………」

ヨルとホームズは、顔を見合わせる。

「……………あいつ、あんだだけ強いくせに追っ手を巻くのすっげえうまかったから……………」

「そのうち諦めたよね……………」

哀愁漂うヨルとホームズにレイアは、頬が引きつる。

「そ、そうだ！逆に、味方になるってことはない？今の放送を聞いて駆けつけくるかもよっ。」

レイアの提案にホームズとヨルは首を横に振る。

「ないね」

「ないな」

「なんで!？」

ヨルは答えずらそうに口を開く。

「まあ、うん。俺がいうのも何だが……………」

ふっと遠い目をする。

「常識が通じない人間だから……………」

『』……………ああ、そう』

一行は、追及するのを諦めた。
なんだけか、どっと疲れた気がする。

「まあ、母さんの力は当てにせず、頑張ろうぜ、ミラ」

そう言っつて、ホームズは自分を親指で示す。

「そうだな。常識はずれはお前らだけで十分だ」

ミラはそう言っつて笑みを浮かべた。

釣られてジュード達も顔に笑顔が戻った。

張り詰めていた一行の空気が緩やかに柔らかくなっていった。

だが、一人だけ、笑顔が戻らない人間がいる、一人だけ柔らかくならない人間がいる。ローズだ。

ローズだけ、何かに絶望した顔をしている。

ローズは、目を見開き、呼吸が浅くなっていくのを感じていた。

先ほどのホームズの言葉が頭の中で渦を巻いている。

(……………まさか、でも……………)

「ローズ? どうしたの?」

「な、な、何でもない……………わ……………ちよつと、色々あつて疲れたから先に休むわね」

ジュードの問いかけにローズは、慌ててそう答えると部屋に戻っていった。

「どうしたんだろう?」

ジュードは、不思議そうな顔をしてレイアの方を向くがレイアだって知るわけがな

い。

おのずと、ホームズに視線は集まる。

ホームズは、どうしてもよさそうに肩をすくめて返した。

「まあ、それはともかく、明日も早いし、小ムスメに習つてとつと寝た方がいいんじゃないのか？」

ヨルの言葉にミラが頷くとその場は解散となった。

レイアも女子の部屋へ行こうとして後ろを振り返る。

「……………?」

部屋割りじゃんけんをして負けているホームズの背中を見てレイアは、首を傾げる。

ローズの行動も気になるが、それよりもホームズだ。

(……………なんか、変だ)

レイアの頭を離れない違和感は、今に始まった事ではない。

下手をすればもつと前からあった。

しかし、その正体がまだわからない。

(何なんだろう………)

レイアは、考えながらミラ達の後をついていった。

歯車の狂い始めた音が、辺りに響き始めた。

信じぬものは、突き止める

「……一体何をしようとしてるんだろう」

一人暗い廊下を歩きながら、ポツリと呟いた。

先ほど感じた違和感。

それを考えていたらここまで来てしまった。

部屋を出るとき誰にも気付かれていないはずだ。

そして、幸いな事に彼はじゃんけんで負けて一人だけ別の部屋だと言っていた。

これ以上のタイミングはない。

そんな事を考えていると部屋の前まで来てしまった。

ここまでできたら引き下がれない。

静かに物音を立てないようにドアを開ける。

彼はドアに背を向け本を読んでいた。

どうやら、部屋に置いてあった本を見つけたようだ。

本を読むのに夢中で彼は全く気付いていない。

それを確認すると一歩踏み込み、武器をホームズに向かって振り抜く。

しかし、ホームズは、背を向けたまま左手の盾で受け切った。

「やれやれ……夜這いなら、もう少し色っぽいのがいいなあ」

彼、いや、ホームズは、盾で受けながらゆっくりと立ち上がる。

「こんばんは、ローズ」

ホームズは、優しくそう言つて刀を押し返した。
ローズ自身も特に抵抗するつもりもなかったようだ。
直ぐに下に降ろす。

ローズは、ありとあらゆる感情押し殺してホームズを睨みつけた。



「あれ？ローズは？」

「……ああ、ローズなら先ほど部屋を出て行ったぞ」

何となく目が冴えてしまった、レイアが何とは無しにそう言うのと、ミラは少しだけ身体を強張らせて返した

「……………？どうしたのミラ？」

「いや、何でもない」

「ふーん……………ローズ何しに行ったんだろう？」

「ホームズの所じゃないのか？」

『好きな人と話したいんだよー、きつと』

「……………まあ、多分そうだろうね」

レイアは、そう言いつつも何とは無しに違和感が拭えない。

「……………ねえ。ホームズの事どう思う？」

「……………？レイアがそんな事を言うなんてめずらしいな」

ミラは不思議そうに尋ねる。

「うん……………なんか、気になってき……………」

答えは直ぐそこまで出ているのだ。

しかし、後一步が足りない。

「……………あ」

ミラは突然何かを思い出したように声を上げた。

「そう言えば私もあつたぞ……思い出した……」
ミラは、そう言うときレイアにナハティガルとの戦いの後の話しを始めた。



「どうしたんだい？えらく物騒じゃないか？」

ホームズは、ローズの刀を見ながらそう告げる。

「……………」

「まあ、別にいいけど……」

「ねえ、ホームズ」

ホームズの言葉を遮るようにローズは、言葉を発した。

「私の家族は、アルクノアに殺された……知ってるわよね？」

「まあね」

ホームズの言葉を聞きながらローズは、俯き、ぎゅつと拳を握り締める。

「私……ずつとその事だけを考えてた。私の家族はアルクノアに殺されたって……でも……」

ローズは、そこで顔を上げる。

「問題はもつと別の場所にあった」

ローズは、そう言つてホームズを睨みつける。

「何で、アルクノアに殺されたかと言うことよ」

ホームズは、ただ黙つてローズの話に耳を傾ける。

「冷静に考えてみるとおかしいわよね？ 私達家族は普通に過ごしていた筈なんでも

の。アルクノアなんて、家族が殺されてから知ったわ」

ローズは、そこで言葉を切る。

「関わりなんてないと思ってた。」

でも、今日改めて分かった」

「……………何が言いたいんだい？」

ホームズの言葉にローズは、刀を向ける。

「貴方達親子は関わりがあったのよね？」

ホームズは、表情を崩さない。

ローズは、更に言葉を続ける。

「貴方は、ヨルの力でアルクノアからご指名が入るほどの存在だし、貴方のお母さんだつてアルクノアに散々狙われてた……………」

ホームズは、相変わらず表情を崩さない。

ローズは、言っていて気付いていた。

ここから先を言っただけいけないと。

これを言えば確実に全てが壊れると。

マーロウが言っていた。

ホームズの隠していることを知らうとすれば気分が悪くなるだけだと。

だが、知らないことが気分のいいことだろうか？

確かに知らなければ、言わなければ、薄氷の上を恐る恐る歩くような関係を保つていけるだろう。

しかし、それを永遠に続けられるかといえば、答えは否だ。

この疑惑を知りながら見て見ぬ振りをするなんて、ローズには出来るわけがない。

口を閉じることは難しいことだ。

そして、ここまで来てしまつては止めることは不可能だ。

「アルクノアに追われている貴方達親子に関わったせいで、私の家族は殺されたんじゃないの？」

部屋の中にローズの声が染み渡っていく。雪降るカン・バルクの夜。建物の中とはいえ、冷え切っている。

「よく、そこまでたどり着いたねえ……ローズ」

ホームズは、そう言つて椅子に座りなおす。

そう言いつつもとくにローズが気付いていることにホームズは気付いていた。

あの時、ローズが真っ先に帰った時、ホームズは肩をすくめていた。

しかし、『知らない』とは一言も言っていないのだ。

「じゃあ！今の私の話は!!」

「当たつてると思うよ。おれ達の行方をアルクノアが調べようとして、君達の家族は殺された……そう母さんから聞いている」

その人づてに聞いたような無責任な言葉を聞いた瞬間ローズは、刀を捨て、ホームズの胸ぐらを掴み上げる。

これ以上うっかり刀を持っていたら、本当に斬り殺してしまいそうだ。

「……貴方は、知らなかった……」

必死に湧き上がる激情を抑え込み、言葉を続ける。

「だから、関係ない……そう言いたいのか……」

胸ぐらを掴み上げられながら、ホームズは口を開く。

「不満かい？でも、仕方ないだろう？君の家族が殺されたのって、確か、おれと別れてからだろう？」

その時、おれがいくつだと思ってるんだい？」

ホームズは、胸ぐらを掴まれながらも平然としている。

「真相なんて人づてで聞くしかないだろう？」

「だったら！なんで言ってくれなかったのよ！」

「聞かれなかったからね。聞かれてもない事をホイホイ話すわけにいかないだろう」
激昂するローズとは対照的にあくまでホームズは、いつも通りだ。

ローズは、そんなホームズをみると思わず涙が溢れる。

「じゃあ……じゃあ……」

声が震え、胸を掴む手が弱まる。

もうなんの制御も出来はしない。

その次に出る言葉が何なのか、想像するまでもない。

「おいよせ」

ヨルは、そう言うがローズは、言葉が続ける。

「貴方達親子さえいなければ、アルクノアに私の家族は殺されずに済んだの!？」

ローズの身を切るような叫びが響き渡った。

言っではならない、決して口にしてはならないその言葉が部屋の空気を凍りつかせる。

ローズの家族を殺したのは、アルクノア。だから、ホームズは関係ない。

それが正論であり、正解だ。間違っていない。

ローズの叫びは、言いがかりと言ってもいいレベルだ。

しかし、そんな風に割り切れるほど、人の心は簡単ではない。
どうしたって、考えてしまう。

不幸を呼び寄せた人間の事を。

その人間さえ、いなければありえなかつた不幸を。

その人間さえ、いなければありえたはずの幸福を。

そして、それはある意味事実でもある。

それを言いがかりと呼べる人間がいるだろうか。

ホームズは、何も言わない。

今まで散々口答えをし、減らず口を叩いていたホームズが、今の言葉にだけは、何も言わない。

ローズは、滲む視界の中にいるホームズを見る。

ホームズの笑顔に見惚れ、それから意識し、そして再会し、旅までする事になった。

彼のことになれば、頭に血が上り冷静からはかけ離れてしまう、それほど大事だった。

そんなホームズが実は家族殺しの遠因の一つだった。

あの路地裏で泣いていたホームズも、

船着場で友達と言われて嬉しそだったホームズも、

別れ際に動揺していたホームズも、

自分を抱きとめたホームズも、

全てがまるで自分の中で静かに壊れていくのを感じた。

どんなに手を伸ばしても決して届かない、過去の産物へと変わっていく。

ローズは、それを止められない。いや、止める気すら起きない。

そんな想いとは反対にある感情が出来上がっていく。

ローズは、静かにホームズの胸から手を離し、落ちている刀を拾い納刀する。

明日は、決戦だ。

マールロウを殺し、自分の家族を殺し、イスラの裏切る原因となったアルクノアとの決戦だ。

ここまで来て、自分だけ降りるわけにはいかない。

ローズは、とぼとぼ扉に向かって歩いて行き扉に手をかける。

「……………貴方と出会わなければ良かった」

ローズは、膨れ上がった感情をそう静かに言葉にして扉を閉めた。

扉を閉める間際に視界に入った碧い瞳だけがやけに印象的だった。



「……というわけなんだ。まあ、別に気にする程でもないと思うのだが……」

一方こちらは、ミラの話が終わっていた。

「へえ……ホームズが……まあでも、別にいいんじゃないですか？」

エリーゼは、そう言って頷いた。

しかし、そんな中何も言葉を発しないレイアをエリーゼは、不思議そうに見る。

「レイア？ どうしたんですか？」

レイアは、ミラの話聞いて驚きで目を見開いている。

「ミラ、今の話……本当？」

「ああ。本当だ。別に隠すような事でもないだろ……まあ、私も忘れていたし……」

レイアは、ガタツと突然立ち上がる。

「レイア？」

「ホームズのとこ行ってくる。遅くなると思うから先寝てて。それと、その話ホームズに喋っていいか許可取つとくから、それまで他言無用ね」

レイアは、そう言って部屋の扉を開けた。

「わっ！ローズ！」

「……………レイア？」

涙で潤んでいる目を慌ててローズは、隠そうとする。

しかし、レイアは、それに構わず走り出していった。

「ごめん！先寝てて」

そう言ってレイアは、走り出していた。

もつと早くに気付くべきだった。

違和感の正体はこれだ。

足に比例して早くなる鼓動。

レイアは、思わず胸を抑える。

早鐘を打つ心臓が痛い。

ホームズの部屋の前で深呼吸をして開ける。

しかし、ホームズの姿はない。

どうやら、入れ違いになったようだ。

「——！一体、どこへ」

『……には、奴の親の墓がある』

ウインガルの言葉が脳裏をよぎる。

(……って、教会……そうか……この事だったのか！)

レイアは、そう言つて外に出て墓地に向かう。

すると案の定、そこにはホームズとヨルが墓前にいた。

降り積もる雪の中に立っているその茶髪の後ろ姿は、中々に景色映えしていた。

雪を踏みしめながら、レイアはホームズに近づく。

恐らくヨルが告げ口をしていたのだろう。

ホームズは、レイアが声をかけるより先に大して驚いた様子も見せず振り返った。

「何してるんだい？こんな時間に？」

「……なんか、眠れなくてさ……それ、お父さんのお墓？」

早鐘を打つ心臓を懸命に抑え勤めていつも通りに話す。

「まあね」

深々と降り続ける雪。

口から漏れる白い息がその寒さをものがたっていた。

「お母さん……参加してくれない？……」

「何てつたおれの母さんだし？」

「ははは……無駄な説得力だね」

レイアは、苦笑いをして口を開く。

「ねえ？ホームズのお母さんの事教えてよ」

「え？何で？つーか、散々言っただけ……」

「化け物じゃなくてさ、もつとこう……どんな事が得意とか、どんな料理が苦手とか、

どんな食べ物が嫌い……そして、どんな物が好きとか」

レイアの質問をホームズは、考えていく。

「そうだねえ、大抵の事は出来たから、苦手なものはこれと言って……まあ、しいて

言うなら精霊術かな？」

「料理は？」

「うーん……前にも言っただけだと思うけど大抵の物ならなんでも出来たよ」

「嫌いな食べ物とかは？」

「食べ物っていうか、コーヒー。」

おれ、母さんのコーヒーをずっと飲んでたから、コーヒーがあんなに苦い物なんて知らなかった……」

そう言つてホームズは、遠い目をする。

「多分、母さんも苦い物が苦手だったんじゃないかな？」

レイアは、ニヤリと笑う。

「分かんないよ？ ホームズの事を氣遣つて砂糖を多めにしてくれてたのかもよ？」

「そんなに甘い人じゃなかったよ」

ホームズは、ため息を吐く。

きつと碌な目にあつていなかったのだろう。

「……………好きな物は？」

「明確には言わなかったけど、家族だったと思う。

父さんのお墓の前では絶対泣いてたし、おれの事を宝物だつて言つてくれた」

レイアの質問にホームズは、とても楽しそうに答える。

いや、正確に言うならため息を吐いたりうんざりした風もなくはない。

レイアは、思わず顔を綻ばせ、楽しそうに笑う。

「いいお母さんなんだね」

「ふふふ、どうだか」

楽しそうに笑うホームズの顔を見てレイアの心臓は、更に早くなる。

寒い中走ったせいか、顔は赤い。

心臓に比例して早くなる呼吸は、白い息となつて雪の降る夜へと消えていく。

ずっと言いたい事があつた。

会つた時からもしかしてと思つていた。

恐らく、気付いているのは自分だけだ。

誰にもバレていない。

アレだけ分かりづらく動いているのだ。

レイアは、ふと思う。

物語に出てくる、人物とは常にこう言う思いを抱えているのだろうか。

早鐘を鳴らす心臓が、そうだと答える。

もつと鈍ければとも思つた。

今回に限つてはそう思つた。

しかし、もう遅い。

気付いてしまった。

黙つたレイアを見てホームズは、不思議そうに首を傾げる。

レイアは俯く。目を見てこの言葉を絞り出すには、辛い。

レイアから、静かに声が出される。

「ねえ、ホームズ。どうして、お母さんの話をする時、いつも過去形なの？」

二人の周りを雪が包み込む。

雪の降る静かな夜にレイアのその絞り出すような質問だけがやけに響いた。

レイアは、ふと思う。

物語に出てくる人物とは常にこう言う思いを抱えているのだろうか。

きっとその通りだ。

物語に出てくる人物、人の隠している秘密に辿り着いたものは、きっとこう言う思いを抱えているのだろう。

レイアは、胸の前で手を握り顔を上げホームズに向かって顔を上げた。

「……ホームズのお母さんって生きてるの？」

タフでなくては生きていけない。優しくなくては生きて
いる資格なんてない。

『そうだね、母親は料理上手だったよ』

一番最初に夕食をホームズと食べた時、ホームズは確かにそう言っていた。
父親の事を聞いた筈なのに母親の話をした事にレイアは、違和感を覚えた。

しかし、同時にもう一つの事にも違和感を覚えたのだ。

普通は、こう答えるべきだ。

『母親は、料理上手だよ』

ところが帰ってきた答えは、過去形だった。

「……………最初は、私の勘違いかな？って思った」

レイアは、そこで言葉を切って息を吸い込む。

「でも、聞けば聞くほどホームズが、語るお母さんは、いつだって過去形だった。

偶に過去形じゃない時もあったけど、それはホームズじゃなくて、ヨルが喋ってた。

そして今……………」

レイアは、ホームズを指差す。

「二つ墓の間に立っている」

指を指したままレイアは、続ける。

「ワインガルさんは、こう言ってた。『ここには、奴の親の墓がある』って。一言も、父親の墓だなんて言っていない。

でも、私達は勝手に勘違いした。

お父さんのお墓だと。多分、ホームズは知らないと思うけど、エリーゼが言ったんだよ。『ホームズのお父さんのお墓が？』ってね」

ホームズは、相変わらず黙って聞いている。

「……………冷静になって思い返してみると、ホームズは、一言も自分の母親が生きているなんて言っていない。

どこにいるか分からないってよく言ってたよね？

多分こう言う意味じゃないかなって思うんだ」

レイアは、そこで大きく深呼吸をする。

「この世界にいない事は知っている。でも、じゃあ、何処にいたかって聞かれると分

からない。

あの世なんて本当にあるかどうかも分からないからね」

レイアとホームズの言葉が一語一句ずれる事なく紡がれた。

「……………やっぱり……………そうなんだね、ホームズ」

レイアは、うつむきつつそう言う。

何故、ホームズが自分達を裏切りガイアス達についたのか、今ならはっきりと分かる。

両親の墓を立ててもらったのだ。

顔も知らない父親の墓だけでなく、ずっと一緒にいた母親の墓まで立ててもらった。
た。

恩を感じたのは、必至だったのだろう。

レイアがそう納得している中、ホームズは、右側の墓の雪を払いのける。

雪が払われ現れた墓標には、《ルイーズ・ヴォルマーノ》と書かれていた。

「それが、お母さんの名前？」

「……………うん」

そう答えるホームズ顔を見てレイアは、やはり後悔した。

しかし、そうは言っても仕方ない。

起こってしまった事は元に戻せないのだ。

そう決意し、レイアは更に言葉を続ける。

「カン・バルクで別れたって言ってたよね？それってつまり……………」

「うん、カン・バルクで母さん死んだんだ。もう二年も前にの話だけだね……………」

「どうして、とか聞いても大丈夫？」

控えめに紡がれる言葉にホームズは、静かに頷く。

「病気だった……………どうやっても治らないってことだった。でも、余命宣告から半年程

長生きしてね……………アレには呆れたよ……………」

ホームズは、俯く。

「治るんじゃないかって……………そう思えたよ……………」

そう言って静かに母の墓を撫でる。

「誰にも言わないつもりだったんだけどなあ……………」

ホームズは、寂しそうにそう言うと、レイアの方を見る。

「まさか、君に見抜かれる日が来るとは思わなかったよ。

もし、見破るとしたら、ジュードかローエンだと思つてた」

レイアは、困つたような顔で笑う。

逆の立場だったなら、確かに同じように思つただらう。

ヨルは、ホームズの肩で尻尾を振る。

「まあ、俺は気付くなら、レイアだと思つてたがな」

「何故だい？」

ヨルの言葉にホームズは、首を傾げる。

「お前が一番最初に説明した相手だろ？」

ヨルは、事も無げに言う。

レイアは、少し笑つて頷く。

「友達の事ならなんでも分かるとは言わないけどさ……………このことを人づて聞かなく

て良かったつて思うよ……………」

それは、レイアの心からの気持ちだった。

後悔する事を分かっている、それでも実行したのは、やはりそれが根底にあったの

だ。

「君は本当にいい奴だねえ……」

ホームズは、言ってもう一度墓を見る。

話は、ひと段落ついた。

ここで話を終わらせてもいい。

しかし、まだはつきりさせていない事がある。

「……ねえ、ホームズ。どうしてここまで隠したの？」

レイアが一番知りたいのはそこだ。

言うタイミングがなかったなんて言わせない。

ホームズの母の事は散々話題に上っていた。

何処に居るのかも聞かれていた。

なのに、ホームズはさらりとかわした。

雰囲気が悪くなる、確かにそうかもしれない。

だが、違うのだ。

今回ののは、圧倒的に違う。

ホームズのかかし方は、嘘ギリギリだ。

そうまでしてホームズは、隠したがっていた。

レイアが、一番不思議だったのは、そこだ。

レイアの真つ直ぐな目を見てホームズは、雪のように白い息を一つ吐く。

「……………君、覚えてる？ル・ロンドでさ、フェルガナ鉱山に行く前確か、『格好悪くてもいいから、いつかおれの本当の事を知りたい』って言ったよね？」

ホームズは、墓をひと撫でしてレイアを見る。

レイアは、首肯する。

「うん、友達だからね」

迷わず頷いたレイアを見てホームズは、決心を固める。

「いいよ、教えてあげるよ。最高にカッコ悪くてだっさい話だ」

そう言つてホームズは、両親の墓の前に身体を向ける。

「おれ、まだ、母さんが死んだ事を受け入れきれてないんだ……………」

震える声で呟かれたそれは、雪のように辺りを覆った。

「母さんは、二年前に死んだ。その時突然起こった別れをおれはまだ受け入れきれて

いない……………」

そう言つてホームズは、齒をくいしばる。

「受け入れると、それは過ぎた事になつてしまう。

母さんとの別れも思い出として風化していく……………」それが、堪らなく嫌だつた……………」

ホームズは、そう言つて煙管を見る。

「ローズには、盛大なブーメラン投げてるなつて思った。

墓の前に立つ事も出来る……………」でも、どうしても整理がつかない」

ホームズは、そう言つて手を握る。

「おれが両親の故郷を探してる理由……………」両親がどんなところで育つたか見たい。

行つたことのない場所に行きたいとも言つた。でも、でも……………」

ホームズは、この続きのことを言うのは避けたかつた。

しかし、避けられない。

言葉にすれば認めると一緒だ。

今まで一番騙していたのは、ミラ達ではない。

ホームズがホームズを一番騙していたのだ。

「それだけじゃない。死んだ両親の故郷だから、どうしても行ききたかつた。行つて、母さんと父さんの両親に報告をしたかつた……………」

ホームズは、ハハハツと力無く笑う。

「笑つちやうだろうか？自分の為とか言つといて、結局旅をする理由を自分以外に求め
てる。

自分の理由が見つけられないから、両親をダシにして、ようやく立ち上がってるフリ
をしてる」

ホームズの頬を涙が伝う。

「そうさ、結局フリなんだよ……………立ち上がれる訳ないだろう……………母さんの事、そんな
風に思つて受け入れてないのに、今度は世話になったジャオさんが死んで、次はマーロ
ウさんだ……………それに……………」

ホームズは、先程のローズとの事を思い出す。

——『……………貴方と出会わなければ良かったわ』——

「……………勘弁しておくれよ……………」

心の底からの弱音を吐いてホームズは、いつの間にか膝から崩れ落ちていた。

レイアは、黙って見ているしか出来なかった。

雪は深々と降り積もり辺りには、ヨルとホームズとレイアしかない。

ホームズが雪を両手で掴む。

「……………いずれ別れが来ることもわかってる。永遠に続くなんてそんなこと起こらないことぐらいわかっている……………でもさ、でもさあ……………」

すすり泣き、ホームズは顔を拭く。

「……………こんなのやだよ……………」

ホームズは、聞こえるかギリギリの音量で呟いた。

レイアは、そこで、ホームズに歩み寄り、ハンカチを渡した。

ホームズは、驚いた後ハンカチを受け取る。

「……………ありがとう」

そう言つてハンカチで涙を拭く。

「……………話してくれてありがとう」

レイアは、そうポツリと言つた。

「それと、ごめん……………きつと、辛い思いをさせるんだらうなつて思つてた」

そう言つてレイアは、ホームズの隣にしゃがむ。

「でも、どうしてもホームズの口から聞きたかつた。

でない後悔をしそうでさ……………隠してること気づいてそれでも気付かないフリを

続けるなんて、やっぱりわたしには、無理だったから……」

レイアは、そう言って俯いた。

「エレンピオスに行けるといいね分かるといいね。上手く言えないんだけど、それで
お母さんのことは完全に整理が着く、そんな気がするんだ」

レイアの言葉にホームズが何か言う前にヨルが口を開く。

「人間は、俺達より短い命だ。だからこそ、人間は整理をつけられる。いや、
つけてしまう」

ヨルは、ホームズを見据える。

「そうやって前に向かって歩いていく。お前がどれだけそれを拒もうと、それだけは
避けられない」

「そんな……」

「お前だつて分かつてるだろ。墓の前に立てているのが、何よりの証拠だ」

エリーゼには話していたが、ローズは、家族の死を受け入れることが出来ず、墓の前
に立てなかつたと言っていた。

けれどもホームズは、墓に向かい合つて立っていた。

それは、もうホームズの中で整理が尽きかけている証拠だ。

ホームズは、二つの墓を見つめる。

「……………ああ、そうだね……………おれはまた、目を逸らしてたのか……………」
そんなホームズにヨルは、金色の目で真っ直ぐに見るを

「いずれ、お前の立ち上がるフリがフリでなくなる日も必ず来る」

ヨルの言葉を聞き、ホームズは立ち上がる。

「……………そうか、結局人間つてのは、前に進んでいくんだね……………力強い、けれども、それはとても悲しいことだね……………」

ホームズの言葉にレイアは、悲しそうに笑う。

「……………そうかもね……………きつと、強いつて事はそう言う事なのかもね」

ホームズは、雪を払って身体を伸ばす。

レイアも立ち上がる。

「強い事が正しいとは限らない。弱い奴が正しい事もあるし、強い奴が正しくないことだってある。逆もまた然りだ」

ホームズは、そう言うとマローロウの煙管の灰を捨て口に啜える。

「それでも、強^{タフ}くなくちゃあね？」

レイアは、そんなホームズを見て微笑む。

そんなレイアを見て、ホームズは、申し訳無きように笑う。

「ありがとうね、レイア。助かったよ。やっぱり持つべきものは友だね」

「どういたしまして」

そう言つてレイアは、ふと考えた。

「レイア？」

「ねえ、今思つたんだけど、わたし達出会い方が違つたらどうなつたんだろうね」「なにそれ？」

訳がわからないという顔でホームズは首をかしげる。

「偶に考えない？この人と別の出会い方をしたらどうなつたんだろうってさ？」

「まあ……分からはないけど……」

そう言つてホームズは、レイアに尋ねる。

「例えば？」

ホームズは、不思議そうに首を傾げる。

「幼馴染みとか？」

「ジュードの心労が増えそうだ」

「迷惑かけてる自覚はあつたんだね……」

レイアは、はははと乾いた笑いを漏らす。

「でも、君の恋い焦がれる幼馴染みは、ジュードだつたらうねえ」

ホームズの言葉にレイアは、思わず顔を赤くする。

「ちよっ！なんで今そんな事言うの!!」

ホームズは、そんなレイアをみて心底面白そうに笑う。

「いや、君に惚れらるのはなあ……数少ないおれの友達が減っちゃうし……」

「真っ先に恋愛対象から外された訳が悲しすぎるんだけど……」

レイアは、引きつり笑いをする。

レイアにもホームズにそんな気持ちを抱く事は全くないが、それでもこころも残念な物
言いにため息が出そうになる。

そんなレイアに構わずホームズは、続ける。

「まあ、君の友人になれてよかったよ。

幼馴染みとかじゃなくて、あの時、マティス治療院で、君に出会えて本当によかった」
満面の笑みで言われレイアは、思わずため息を吐く。

「……そういう風にローズに言えばいいんだよ」

ホームズは、それを聞いた瞬間硬直した。

それを見て、レイアは慌てる。

「あれ？なんか……まじった？」

「いや、その……」

「小ムスメに逆の事を言われたんだ」

ホームズが何かを言う前に、ヨルが先に口を開いた。

「……………どういう事？」

眉を潜めてレイアは、ヨルに尋ねる。

ヨルは、ホームズの代わりにレイアに今夜あった事を全て話した。

レイアは、聞き終わると少し考え込む。

その間、ホームズは、ヨルにアイアンクローを決めていた。

「ねえ、ホームズ。お母さんが言ってたんだよね？ ホームズ達のせいでローズの家族が殺されたって」

「まあね」

「ならば、遺書にはなんて書いてあったの？」

レイアの言葉にホームズは、ヨルの手を緩める。

「鋭いね……………」

「大分ホームズの事が分かってきたからね」

ホームズは、空を見上げる。

「随分、時間が経っちゃったねえ……………」

そう言つてレイアの方を見る。

「また、今度教えるよ」

そう言つてホームズは、歩き始めた。

レイアもそれに習うように歩く。

『気が向いたら』が付いてないよ、ホームズ。必ず話してもらうからね」

そう返しレイアは、ホームズの後ろをついていく。

「レイア」

ホームズは、足を止め振り返る。

「死なないでね。これ以上、おれの知り合いが死ぬのはやだよ」

真つ直ぐレイアを見るホームズにレイアは、優しく笑う。

「ホームズ、そこはね、知り合いじゃなくて仲間って言うべきだよ」
そう言つて胸を張る。

「安心して、ホームズ。お母さん仕込みの棍術があるし、それに……」
そう言つてホームズを指さす。

「ホームズみたいな無茶はしないしね」

「守護氷槍陣の中突つ込んできたのって誰だっけ？」

レイアは、さつと目を反らす。

そんなレイアを見てホームズは、ふふふと笑うと手を振る。

「まあ、いいや。明日頑張ろう」

「うん」

矛と盾

「む？帰ってきたか？」

教会の聖堂に入るとそこにはミラが一人椅子に座っていた。

ミラは二人とヨルが来ると振り返ってそう言った。

「なに？待ってたのかい？」

ホームズが冗談めかしてそう言うのとミラは静かに頷いた。

「ああ。明日を迎える前にすつきりさせておきたくてな。まあ、座れ」

ホームズは、ミラに従い座る。

レイアは、どうしようか迷うが、ホームズに習って座る事にした。

二人が座るとミラは口を開いた。

「……………ローズから聞いた。自分の家族が殺されたのは、お前達親子のせいらしいな」

「ほんつと……………ストレートに聞いてくるよね、君」

「……………すまない。確かにあまり気分のいい話ではなかったな」

「いや、ただの感想だよ。非難してるわけじゃあない」

ホームズは、そう言って背もたれに腰掛ける。

「そうか。なら、話を続けよう。」

ローズの話なんだがな、素直に領けないところが幾つかあってな、それをホームズに言いたくてここに来た」

「どういうことだい？」

「筋が通つてるようでは通つていないんだ」

そう言つてミラは指を一つ立てる。

「追われていたのはホームズの母親、お前はそう言つていたよな」

「うん」

「つまり、お前は追われていなかったな」

ホームズは、答えない。そんなホームズに構わずミラは言葉を続ける。

「詠唱なしで、精霊術を出す黒匣ジンは、下手すれば私の魔技に近い。」

ヨルのその能力は、アルクノアの前では発動させようがない」

ミラはそう言つてホームズを指差す。

「ヨルの力を知らないアルクノアがホームズを狙つたとは、考えづらい。必然的に、追つていたのはお前の母親という事になる、ここがまずおかしい」

ミラはそう言つて腕を組む。

「細かい事だが、お前達親子のせいという言葉と矛盾する」

ミラはそこで言葉を切ってホームズを真つ直ぐに射抜く。

「そして、もう一つ、ローズは、お前ら親子に関わったせいで、家族が殺されたと言っていた。

なら、真つ先に殺されていないとおかしい人間がいる」

レイアが隣で聞いて思案する。

ホームズに友人と呼べる人は早々いないはずだ。

更に行商人をしている親子と深く関わった人間なんているはずが……

(行商人……?)

そのワードでひらめく。

「そうか！ドロッセルさんだ。ホームズのお得意さんでしょ？」

正解だったようだ。

ミラは静かに頷く。

「それと、マーロウだ。

マーロウは、恐らく襲われてもいないはずだ。

黒^ツ匣の存在をホームズが説明したんだろ？あの時のマーロウとの戦い前での話を聞く限り」

ホームズは、頷く。

ミラは更に続ける。

「つまり、この時点で例外が二人いる事になる」

ミラは更に話を続ける。

「アルクノアは、目的の為なら手段は、選ばない。

実際、私を殺す為に食事に毒を入れ、関係のない人々を殺したからな」

そして指を一つ立てる。

「だがな、あれは私を殺す為の行為だ。だからこそ派手に動いた。

しかし、派手に動けばそれだけ目立つ。私と準備の出来ていない状態で戦う事になってしまう。

だというのに、ローズ達の家族は惨殺された」

「ホームズ達の行く先を教えてくれなくて、カツとなったとか?」

レイアの提案にミラは首を横に振る。

「いや、そんな事はないだろう。」

先程も言ったろう? ホームズ親子は、行商人なのだ。

だったら、客を装って何処へ行ったか聞けばいい」

そう言つてホームズを見る。

「馴染みの腕のいい商人が次へ何処へ行くか聞いたつて別に不自然じゃないだろう

「？」

「まあね。この人の物なら、今度その街に行くしついでに買うと言う人もいるし」
ホームズの返しにミラは満足そうに頷く。

「手段は選ばない。しかし、目立ちたくないアルクノアが、こんな事をしている……おかしいだろう？」

そう言つてミラは指を三本出す。

「今度は回りくどいね……何が言いたいんだい？」

ホームズの言葉にミラはホームズの瞳を真っ直ぐ見る。

「お前から親子のせいでローズの家族が死んだわけではない。ローズの家族が殺されたのは、何か別の理由がある」

そう言つてふつとため息を吐く。

「そういうつもりだった……だが、途中で気づいた」

ミラは、目元を険しくさせホームズを睨みつける。

「お前がそれに気づいていないわけがないのだ。

馬鹿なくせに隠し事に関しては頭の回るお前が、気付かないわけがない。

これは、言い訳でもなんでもない、ただの事実だ。

なのに、何故、お前は否定しない。

何故、お前は答えない」

ミラの追求にホームズは、少し困った顔をしている。

「答えろ、ホームズ。お前は一体何を隠している」

ミラの低く静かな声音にホームズは、大きくため息を吐いた。

「随分と強引な推理だねえ。こじつけに近いよ……そんなんじゃあ、おれが隠し事を

してゐるって根拠にはならないよ」

「筋は通つてゐるだろ？まあ、そんなものよりもっと決定的なものがある」

「なんだい？」

ホームズの疑問にミラが口を開く。

「お前、母親がアルクノアに追われていた事をバラしただろう。聞かれてもいないのに、自分から」

ミラの言葉にホームズは、ピタリと口を閉じる。

「あそこでわざわざわざわざお前の母親が過去、アルクノアに追われていた事を話す必要は、どこにも無かった。

なのに、何故かお前は自分から母親が過去アルクノアに追われている事を話した」
そこで言葉を切りホームズを睨む。

「本当の事を言わず隠し事をすることが得意なホームズが何故、こんなミスをした？
そう考えると少しづつ別の結論に辿り着く」

「別の結論？」

レイアは、隣で首を捻る。

「あれは、ミスではない。ミスに見せかけた、ニセのヒント」
そう言ってホームズをギロリと睨む。

「そうだろうか？ ホームズ・ヴォルマーノ？」

天使は悪魔の顔をしてやってくる

「……………あー……………これって話した方がいい奴かい？」

ホームズは、諦めたようにため息を吐いた。

「そうして貰えると私がここに残った意味がある」

ホームズは、ミラの言葉を聞きヨルに顔を向ける。

「ローズは？」

「いないな」

「そう……………じゃあ、レイア、君もそこにいたまえ。話してあげる」

そう言つてホームズは、口元に人差し指を持つてくる。

「ただし、これから話すことはトップシークレットだ。

ローズは、もちろん他の面子にも話さないでね」

声を潜めて真剣に言うホームズにミラとレイアは、頷く。

「よろしい。なら話すよ」

そう言つてホームズは、口を開く。

「ミラの推理は当たりだ。ローズの家族が殺されたのは、厳密に言えばおれたち親子

のせいじゃない。

まあ、そうなれば他の原因はひとつだ」

「そうなるな」

ミラはホームズに同意する。

しかし、レイアは訳が分からず、首を傾げる。

ホームズは、そんなレイアを見ると先程ホームズが粉々にした長い椅子の欠片を三つ拾い、レイアの前に置く。

「……いいかい、回りくどいようだけど、丁寧に説明するよ。」

ローズの考えでいくとクリステイ一家殺しに関わっているのは、犯人であるアルクノア」

そう言って大きめの木片の一つを指差す。

「アルクノアとの関係をもたせたおれたち親子」

ホームズは、先程より少し小さい木片を置く。

「そして、被害者ローズの家族」

最後にホームズは、更に小さい木片を置く。

椅子の上には、全部で三つの木片が置かれた。

「さて、問題はこのアルクノアがローズの家族を殺した動機だ」

そうやってホームズは、一番大きな木片を持つ。

そして、中ぐらいの木片に近づける。

「いいかい、おれ達が理由じゃない、するとどうなるか……」

そうやって中ぐらいの木片を椅子から落とす。

レイアは、少しずつ理解していく。

今、椅子の上に残るのはローズの家族小さな木片だけだ。

「そうか、そうなるね」

「そう、ローズの家族が殺された原因は、ローズの家族自身にあったんだ」

「でも……なんで？」

レイアの疑問は、最もだ。

ホームズは、少しどう説明しようか考え、レイアを指差す。

「レイアの棍、おれに壊されたよね？」

レイアは、言われてふと思いつく。

「古くなってガタが来てた所に剛招来で強化されたかかと落としを食らったからね……」

レイアは、そう言っただけ息を吐く。

妙に説明口調なところをみると未だに思い出すたびに不愉快になるようだ。

「ホームズには迂闊な事言うもんじゃないって思ったよ」

「いい事だよと思うよ。失敗は、教訓として学ぶべきだよ」

「……………色々言いたい事はあるけど、続けて」

レイアのじとつとした湿度の高い半眼に構わずホームズは、続ける。

「さて、レイアの棍がいい例だ。

道具というものは、時間と共に風化し、老朽化し、壊れていく」

そう言っただけ大きな木片を持つ。

「黒匣ジンも一緒だ。

どんなに強大な力を放とうと、どんなに悪魔の様な代償があろうと、それが人の手で

作られた道具である限り、壊れる事は避けられない」

そう言っただけ大きな木片をくるくると回す。

「彼らは二十年の間、このリーゼ・マクシアの中に閉じ込められていた……………黒匣ジン

だって、徐々に使えなくなっていく筈だ……」

ホームズは、木片をミラに向ける。

「君に聞きたいんだけど、アルクノアの力は弱まっていったかい？」

「……………いや。そんな事はなかった」

ホームズは、ミラの言葉に頷き口を開く。

「それは何故か？ 答えは単純、黒匣ジンが使えるよう援助をしていた奴らがいたからだ」
そう言って小さな木片を持つ。

「ローズの家族がそれだ。

彼らは、黒匣ジンの原料を渡し、金を得ていた」

しんと空気が静まり返った。

「えっ? どういう事?」

「死の商人の代名詞、武器商人こそが、ローズの家族の正体だ」

ホームズは、そう言つて大きな木片を持つ。

小さな木片を弄びながらホームズは、言葉が続ける。

「表向きは、どこにでもいるしがない商人。」

しかし、裏の顔は人と精霊に仇なすリーゼ・マクシア人だ」

「ちよつと待つて。エレンピオスの物がどうして、リーゼマクシアで作れるの?」

レイアの言葉をヨルは鼻で笑う。

「クルスニクの槍だつて、リーゼ・マクシアで作れただろ? 何も不思議なことはない」
ホームズは、片手に小さい木片と大きな木片を持ち、もう片方の手で、中ぐらいの木片を持つ。

「これに気づいたのは、母さんだ。」

税金を納める為にその月の売り上げを計算しなくちゃいけなかつたけど、クリステイ一家の手が離せそうになかつたから、親切でやつたらしい。

まあ、普通は嫌がる筈なんだけどね」

そう言つて中ぐらいの木片と小さい木片を今度は同じ手に持つ。

ヨルは、ゆらゆらと尻尾を動かしながら口を開く。

「ホームズの母親相手にイカサマをやるなんて不可能だ。

例え、イカサマがかけられていないと信じていても、あいつの目にかかれば、不自然な点は矛盾となり、不正となる」

ホームズは、ヨルの言葉に頷いて三つの木片を椅子に置く。

「母さんは、気づいてしまった。

アルクノアとクリステイ一家の繋がりに気づいてしまった。

のちによく言っていたよ。『私が気を使うと大抵碌な結果にならない』って」

「……………それで、ホームズのお母さんは、どうしたの？」

レイアが恐る恐る尋ねる。

「母さんはね、どうでもいい人間には、かなり適当だけど、恩人や気に入った人間には、本気で力になろうとする、そんな人だった」

そう言っと思って出したように手をポンと叩く。

「ああ、勿論気に入らない人間は、自分の力の及ぶ範囲で徹底的に潰す人だったよ」

「いや、今はその情報いらないよ」

「……………話を戻そう。ローズの家族は前者だった。

だから、臆することなく迷うことなく言った。自分の気付いたことを」

「……………ローズの家族に言ったの？」

「……らしい。そう書いてあった。まあ、おれが黒匣^{ジン}について詳しく知ったのはつい最近だけど……」

ホームズは、そう言つて口から煙管を外しくると回す。

レイアとヨルだけがその言葉の意味を察する。

「どうしてそんな事を……」

「彼らの商売はね、傾いていたみたいなんだ。その埋め合わせにつて始めたのがキツカケだつたらしい」

ホームズは、ふうつとため息を吐く。

「悪魔は天使の顔をしてやってくるとは、よく言つたものだねえ……」

ホームズは、ポツリとそう言うと言を戻す。

「ローズの家族はね、どうやら抜けるつもりだつたらしい、一刻も早く。

しかし、母さんがそれを止めた。

金つてのは、素直でね……金額の大きさはそのままアルクノアとの関わりの強さだ。

その強さは今更、そう抜けられる物じゃあなかつた……」

ホームズは、そう言つてカバンから紙と封筒を幾つか引つ張り出す。

「紙だし、売らなかつたんだね、ミラ」

「まあな。一銭の価値にもならなそうだからな」

ホームズが出した紙は金額が書き連ねてあり、合計金額が書かれていた。金額の大きさに思わずミラとレイアは、息を飲む。

「ホームズ、これ……」

「母さんが計算した奴だよ……これだけの取引を彼らはしていた。客を区別するなどは言わない。

金を持って、店に並べば、その時点でお客様だ」

そう言つてホームズは、目を険しくする。

「問題は、そのお客様との商売に不正を働き、犯罪に加担していたことだ」

「ローズの家族は、ここから抜けようとしていたんだよ……ね？」

レイアの質問にホームズは、頷く。

「だけどね……アルクノアがそれを許すと思うかい？」

「ここまで、秘密に加担した人間を何もせず野放しにするとと思うかい？」

そう言つて紙を手を持つ。

「目的の為なら手段を選ばないアルクノアが、そんな事をするわけがない、そうだろう

?ミラ」

「ああ」

ミラは静かに頷く。

「母さんもそれを指摘した。だから、下手に動くなと忠告をした。

けれども、クリステイ一家は、恐らく母さんの隠し事分かっちゃったんだろうねえ

……」

「隠し事？」

「今更抜けられないってこと」

レイアの言葉にホームズは、にべもなく言い放った。

凍りつくレイアに構わずホームズは、言葉を続ける。

「……できない事をできる事にする為の最終にして最高の手段って、何だかわかるかい？」

そんなものホームズを見てれば一発でわかる。

「命を……かける事……」

レイアの呟きにホームズは、頷き、俯く。

「結果は知っての通り、彼らは賭けに負けた」

そう言つて、ホームズは煙管を啣え直す。

「交渉は失敗し、

家族は殺され、

ローズは一人になつた……………」

そう言つてシワだらけの封筒を開ける。

「えらく、くしゃくしゃだね……………」

「まあ、母さんが握り潰したからね」

そう言つてホームズは、その時、手紙の届いた時の事を思い出す。

碧い瞳に焼きついた母の表情は、今でも忘れられない。

『……………んの馬鹿!』

ホームズの母は、眠たそうな垂れ目を険しく釣り上げ、ホームズの手を取った。

『急いで、シャン・ドウにもどるよ!!』

母の手から感じる体温は冷たく、その動揺を隠そうともしない、母の態度から当時のホームズは幼心に良からぬ事が起きているのを感じた。

『突然のお便りを許してほしい。』

貴方には、色々とお忠告されたが、それでも私達は、アルクノアと手を切りたいと思う。確かに手を切りたいと言えばタダでは済まないだろう。

けれどもこのままでも安全とは限らない。

それに、私は商人だ。

お客さんは、区別するつもりはない。

しかし、商人として願う事はある。

商人ならば商品売って人々を幸せにしたい、幸せになりたい。

確かに私達はそうやって生きてきた……生きてきたのだ。
願う事なら、その日々に私は戻りたいと思う。

こんな後ろ暗い思いをして生きていきたくない。

だからこそ、その為に私は、いや、私達は、命を賭けようと思う。

本来ならば、私達の娘達は巻き込みたくない。

しかし、巻き込まれないのはローズだけだ。

上の子は関わってしまったからと、作戦まで提案してきた。

色々と可能性が低い事は確かだ。だからこそ心配などせず、成功だけを祈っていてほ

しい。

勝手な事ばかりで済まない。

お元気で」

ホームズは、そう言つて手紙を全て読み上げた。

ホームズの言葉が終わり、辺りは静寂に包まれる。

「……………決意の手紙だな」

「そうだね。自分の生き方を貫き直そうとしたんだ……………例え、結果がどうであっても……………いや、ローズとアルクノアとの縁を切る事は出来たある意味成功したんだろうねえ」

ホームズは、くしゃくしゃになった封筒をしまう。

レイアは、ローズの話を思い出す。

「そうか……………サプライズパーティーは、ローズを巻き込まないためだったんだね……………」

「そういうこと」

ミラは顎に手を当てホームズを見る。

「……………ホームズ、これをローズに言う気は……………」

「ないね」

ミラの心配そうな声をピシヤリと潰す。

「しかし……………このままでは……………」

「別にいいだろう？嫌悪されるのは、おれだけだ。君たちにまで被害が及ぶ事はない

よ
」

何て事なさそうに言うホームズにレイアの中で何か切れた。

「そんな事を言ってるんじゃない！ホームズ分かってて言ってるでしょっ!!」

レイアは、座っているホームズの胸ぐらを掴む。

しかし、ホームズは動じない。

「じゃあ、君はどうするつもりだい？まさか、この話をローズにするつもりじゃないだろうねえ？」

ホームズは、そう言っただけでレイアの手を解く。

「それは、約束違反だぜ？まあ、例え言った所でローズは、信じないだろうけどね」

「……………えっ？」

思わず首を傾げるレイアに今度はヨルが口を開く。

「簡単な話だ。レイア、お前はホームズの友人だ。そんな奴の事をどうしてローズが

信じる？」

きつと何を言ってもホームズを庇っているように見えてしまうだろう。

レイアが答えに詰まると尻尾でミラを指す。

「お前もだ。湾曲的とはいえ、ホームズの事を認め信頼している奴をどうして、信じる？」

ヨルは尻尾を分け、三又にする。

「ジャリもレイアと同じ理由でダメだ。いや、自分より年下というのが更に加わるかもしれないな。」

チャラ男は、論外だ。

それにそもそも、前提条件が必要だ」

「前提条件？」

ミラが首を傾げる。

「この事実自力で辿り着いているという前提条件がな。この条件なしで説明をしたところで、あの小ムスメは、信じないだろう。」

お前ら以外で、つり目とローエンが自力で辿り着かない限りは、ダメだ。

ホームズから聞いたなんて言えば更に小ムスメの憎悪を煽る事になるぞ」

何も知らないローズからしたら、ホームズが言い訳をしているようにしか見えない。

「……………ホームズは、こうなる事が分かかって言ったの？」

レイアの声は堪える激情で震えていた。

「まあね。ローズのこれは、ミラ辺りが気づくだらうとは思ってたしね。おおよそ予

想通りだ」

ホームズは、なんてこと無さそうに淡々と言葉を並べていく。

ホームズの様子をレイアは、我慢がならなかった。

「卑怯だよ……ホームズ」

歯を食いしばって辛そうに言うレイアにホームズは、肩をすくめる。

「何とでもいいたまえ。これ以上の選択肢は、おれにも君にも選べないだろう？」

レイアは、ホームズから手を離す。

レイアに話してしまえば、ローズにホームズの真意を伝えようとする。

だが、ホームズの友人という立場がそれを許さない。

レイアの語るホームズにローズが耳を貸す事はない。

つまるところ、ホームズはレイア^{友人}を利用した、

心配をする友人をホームズは掌の上で転がしていたのだ。

けれども、それは全てローズのためだ。

だからレイアは反論を出来ない。

だからこそ

「……………卑怯なんだよ……………」

レイアは、絞り出すようにポツリとこぼした。

「……………だが、ホームズ」

そんな中、ミラが口を開いた。

「これは、お前が背負うべき荷物じゃない。どう考えてもこれは、ローズが背負うべきものだ！」

「……………何をそんなに熱くなっているんだい？」

ホームズは、煙管をぶかぶかと動かし、ミラを睨む。

「家族は自分を守るために皆殺しにあった。」

ずっと信じていたイスラは実は情報を流した張本人だった。

更に自分の師匠であるマーロウさんはエレンピオス人を助けに行ってエレンピオス人に殺された。

こんな状態のローズに家族のことまで背負わせるつもりかい？ 『君の家族は精霊を殺

しまくる黒匣ジンを使うアルクノアを支援していた。だから殺された』なんて言うつもりかい？」

ホームズの声に感情はない。

どこで息継ぎをしているか分からないほど一息で言い切った。

「馬鹿を言うんじゃない。そんなの無理だ。ローズを低く見てるとかそんなのじゃない。刃物で刺されれば血が流れるのと同じぐらい当たり前の事なんだよ」

そう言つてミラを見る。

「君には、縁のない話だろうけどね、誰も彼もが背負つて歩めるわけじゃないんだよ」

「でも！これじゃあホームズがローズに憎まれたままじゃん」

「それがどうしたつて言うんだい？」

ホームズは、碧い瞳で真つ直ぐレイアを見る。

「おれが憎まれる事で、

家族のことも知らず、

ローズが生きていける、これ以上何を望むつて言うんだい？」

ホームズは煙管をくるくると回す。

「別に気にすることじゃない。おれにとつて、女の子に嫌われるのはいつものことだ」

そう言つてホームズは、肩をすくめる。

レイアは、あの墓場で泣いていたホームズを思い出す。

淡々と紡がれる言葉も、いつも通りの憎まれ口も全て強がりだ。

『いつものこと』かもしれないけど、平気じゃ無いよね」

レイアの言葉にホームズは、煙管を弄ぶ手を止める。

ミラに無遠慮な事を言われ、エリーゼとテイポの言葉に涙を流すホームズが、ローズ

のあの言葉を聞いて平気なはずがない。

少し前のレイアなら見落としただろう。

しかし、レイアは墓場でのホームズを見ている。

ホームズは、とにかく隠すのだ。

自分の感情も、

強さも、

弱さも、

過去も、

全てを隠して生きてきた。

先ほどからローズの事を話すホームズの言葉には、感情がない。

「……まあ、答えなくてもいいよ。聞かなくても分かる事だしね」

レイアは、ホームズが口を開く前にそう言つて腰を下ろす。

「ホームズは、最初から計画していたの？」

ホームズは、煙管を啜え直す。

「正確に言つて、原案を作つたのは、母さんだ。

マーロウさんに全部話してね、リアル・オーブを預ける時に全部自分達のせいにするつて。

それを裏付ける為にもおれ達は、シャン・ドウを立ち入り禁止になつた。

マーロウさんが、いずれ時期を見て話す筈だつただけど……」

「……話してなかつたのか」

「まあね」

ミラの言葉にホームズは、ふうとため息を吐く。

「一番いい方法は、師匠であるマーロウさんに教えてもらい、ローズはそれからおれら親子に会わずに生きていく、それがベストだつただけど……」

「……それどころかついてきてきたからな、あの小ムスメ……」

ヨルは尻尾をゆらゆらと動かす。

「まあでも、結果としては上手くいったんだろうね。

真実つてのはさ、誰かに教えてもらうんじゃないやダメつてことなんだろうね。

自分で辿り着くからこそ、信じられるそうということなんだろうさ……」

ホームズは、そう言つて煙管を揺らす。

ホームズがそう結論づけたその出来事にミラは心当たりがある。

「イスラの時か……」

「正解。いずれ自分から話そうと思つていたけど、少し軌道修正した」

ミラは、ホームズを睨む。

「だから、お前は……」

「そういう事。君の言う通り本気で隠すつもりなら、あんな事言わない。

でも、アルクノアが現れて、エレンピオスの存在も明らかになった。

ここで言えば確実にローズは、自分の結論を信じるだろうと思つた。だから、ヒントを出した」

そう言つてホームズは、肩をすくめる。

「別に嘘はついてないぜ、何一つね。全部ローズが考えた事だ」

自分に憎しみの矢が向かうようにローズを騙す。

そして、ローズは、自分がホームズに守られていることに気づいていない。

誰かの為に頑張る、そう言えば聞こえはいい。

しかし、ホームズの自分の人生を他人に使うその様は、滑稽を通り越して、寧ろ気味

が悪い。

ローズは、自分の瞳の色を一番最初に褒めてくれた大切な人間のはずだ。そのローズに恨まれることは、ホームズにとって愉快なことではない。

それは、先程レイアが見抜いた通りだ。

しかし、ホームズはそれを選んだ。

ローズを守る為にローズとの関係を叩き壊し、恨まれ生きていく道を選んだ。

ホームズはその生き方をレイアは、否定したい。

しかし、ホームズがその生き方を選ばなければ、今度はローズが無事ではすまない。

二つに一つだ。

いや、ホームズ自身が後者の道を潰している。

そんな道などないように、見つからないように隠してしまった。

「……ホームズ、お前の人生は、お前の為のものだ。

それを人に使うのは、褒められた行動ではない」

ミラは静かに言葉を続ける。

「忠告しておく、その生き方の先に待つのは、深い絶望だ」

ホームズは、ミラの言葉を聞くと瞳を閉じてローズとの事を思い返す。

出会ってから先程までの別れが走馬灯のように蘇る。

しばらく思い出に浸ると目を開き、ホームズは、背もたれに背を預ける。

「……………その通りなんだろうねえ……………」

ホームズは、ミラの方を見る。

実際、ホームズは会えて嬉しかったローズに出会いそのものを否定されている。

心がブレなかったと言えば嘘になる。

未練がないと言えれば嘘になる。

「……………それでも悔いはない。後悔はしない。大事な昔馴染みは、絶望せず、前を向いていく……………これ以上なんてない」

ホームズは、そう言つて立ち上がる。

「さて、随分と遅くなつたねえ……………明日もあるし、おれは先に寝るよ」

ホームズは、そう言つて手を振つて部屋へと戻つていった。

ヨルはその場に残る。

距離はまだ大丈夫なようだ。

「ヨル」

レイアの心配そうな瞳にヨルは、金色の瞳で向き合う

「前にも言つたろう？ あいつは、あいつで化け物だつて……………自分の為に、頑張れない。他人のためにしか頑張れない。

友人が出来るると喜ぶくせに自分からその繋がりを壊す。その友人を守る為に」
ヨルは吐き捨てるように続ける。

『いづれ手放すなら大切なものなど作らなければ』、なんて考えられれば楽だろうに
あいつはそれを考えない」

ヨルは、尻尾を揺らし天井を見上げる。

「本当、馬鹿な奴」

そう言っただけで一定の距離から離れたヨルはふっと闇に溶けるように消えた。

レイアは、消えたヨルの場所を見続けた。

『死なないでね。おれはもうこれ以上知り合いが死ぬのは見たくないんだ』

レイアは、頬をパチンと叩く。

「寝よう、ミラ」

「……………そうだな。そうしよう」

大切なものを平気で手放すホームズ。
だったら、ホームズの大^友切^人なもの取るべき行動は一つだ。

「絶対にホームズより先になんて死ぬもんか」

「ああ、そうだな」

ピーチパイは砂糖と秘密と素敵な何かで出来ている

「……………やつぱり、君の事を紳士と呼ぶには無理があるねえ」

そう言つてホームズは、階段を上る足を止めて振り返る。

「出歯亀なんて、男が廃るぜ？アルヴィン」

アルヴィンが壁に背を預けていた。

「なんだ、気づいていたのか」

アルヴィンは、そう言つて歩みを進める。

ホームズは、肩を竦める。

「まあ、もしかしてつて奴さ。ヨルが察知出来ないのは、この面子で靈力野ゲイのない君ぐらいだからねえ……気を張つておくのは当然だろう？」

正確にいうなら殆どないのだが。

そう言つてアルヴィンを涼やかな笑みを向ける。

「何か面白い話は聞けたかい？」

「まあまあつてとこだな」

「そりやあ良かった」

ホームズは、どうでもよさそうにそう言つてアルヴィンに目を向ける。

「立ち話もなんだ、おれの部屋に来るかい？」

アルヴィンは、こくりと頷くとホームズの後についていった。



ホームズは、部屋に入るとピーチパイを出す。

「いつの間に……………」

アルヴィンが驚いているとホームズは、自分の分を切り分ける。

「君たちと別れた後、直ぐだよ。材料を漁つたら出て来たから適当に作つた」

アルヴィンは、いかぶしむようにピーチパイを観察する。

「……………おい、これ食えんのか？」

前科の多過ぎるホームズ相手にこの用心は妥当なものだ。

ホームズは、睨みで答えると自分の分をパクリと食べる。

ホームズが平気そうに食べるのを見てアルヴィンも恐る恐る毒物を口にするように

食べる。

そして驚いたように目を丸くする。

「驚いた……美味いもんだな」

「こいつ、こういうのは、失敗しねーんだよな……」

ヨルはそう言つて自分の分を食べる。

「まあ、時間短縮の為に色々簡略化したけど」

自分の分を食べつつアルヴィンを見る。

「で、どうだい？」

「どうだいって？」

「君の知っている味と大分違うだろう？」

「………まあな」

アルヴィンは、少し面白そうに笑う。

エレンプピオスでは、ポピュラーな家庭料理の為、家の数だけ違いがあるのだ。

「………まあ、食う機会ももうないだろうがな」

「まあ、あなつてしまえばな」

ヨルの言葉にアルヴィンは、首を横に振る。

「………死んだんだよ、俺の母さん」

アルヴィンの言葉にホームズは、眉を動かす。

「さっきの手紙は……………」

ホームズの問いに声音だけは何とか明るい声を出す。

「御察しの通り。手紙には、母さんが死んだって書いてあった……………」

ホームズは、少し悲しそうな顔をする。

「そうか……………それは、辛いねえ……………」

ホームズの心からの言葉。

しかし、事情を知らないアルヴィンには、届かない。

アルヴィンは、ハッと鼻で笑う。

「同情か？」

「……………なに？金の方が欲しいのかい？」

ホームズは、そんなアルヴィンに構わずさりと返す。

そんなホームズにアルヴィンは、顔をしかめる。

「おたく、本当、いい性格してるよな」

「褒めてくれてありがとう」

ホームズは、ピーチパイを食べ終わると手をパンパンと払う。

そんなホームズの様子にアルヴィンは、首を傾げる。

「……………おたく、本当にいつも通りだな。普通、こういう話をされるともう少し違う反応をするもんだと思うんだが……………」

ホームズは、少しだけ微笑んで椅子に腰掛ける。

「別に。話を聞くぐらいやるよ。今日、おれは色んな人に話を聞いてもらったからね」
そう言つてホームズは、窓の外に目を向ける。

「聞きたい事があれば、可能な限り答えてあげるし、言いたい事があれば幾らでも聞いてあげる」

そう言つてホームズは、ニヤリと笑う。

「勿論、悪態も嫌味もね？」

アルヴィンは、そんなホームズを見てふつと笑う。

「……………おたく、本当にもつたいない奴だな」

アルヴィンの言葉にホームズは、首を傾げる。

そんなホームズに構わずアルヴィンは、口を開く。

「おたくはさ、ローズがお前を憎むように誘導したんだろ？」

「まあね。人は自分の出した結論に矛盾が無ければ信じちやうからねえ……………それだけが正しいってね」

分かりやすい選択肢を目の前にぶら下げられれば、他の選択肢が霞んでしまい、下

手すれば見えない。

ホームズの見せられた右手に目を奪われたロースは、ホームズの左手で何が行われているか気づけない。

「でも、それがどうしたんだい？」

「一つ聞きたいんだが」

「ん？何を？」

「ロースがおたくの事をどう思ってるか、知ってたか？」

アルヴィンの質問にホームズは、頬をひきつらせる。

「随分と答え辛い質問だねえ」

ホームズは、煙管を啜える。

少し唸って渋々口を開く。

「例えばさ、女の子に優しくされたり、心配されるとき、勘違いする事ってない？」

「男つてのは、単純な生き物だからな」

アルヴィンは、思わず顔をしかめる。ホームズより歳上のアルヴィンは、それだけ経験も上だ。

勿論上手に回避してきた筈だが、回避できないものもしつかりもらっている。

ヨルが肩で面白そうに笑っている。

「ところがどっこい、心配しているだけって話なんだよな、悲しいことに。お前、それで何回フられた？」

「トラウマを数えたところで幸せは訪れないよ」

ふっと遠い目をするホームズにアルヴィンは、同情を禁じ得ない。

「心配してくれたことは嬉しかったけどね」

ホームズは、寂しそうに笑う。

（結局、気づいてないって事か……まあ、そっちの方が幸せかもな……）
アルヴィンは、ゆっくりと立ち上がる。

「んじゃあ、おれはそろそろ寝るわ。話聞いてくれてサンキュな」

「別に構わないけど……殆どおれの事じゃないか、それでいいのかい？」

アルヴィンは、扉に向かう足をピタリと止める。

「……………そんなに俺の事気になっちゃおう?」

「そうだね、バナナはおやつに入るのかどうかの問題の次くらいには、興味あるかな」
心底どうでもよそさそうにホームズは、手をひらひらと振って返し、煙管をぶかぶかと口で動かす。

「君になさそうだから、最後におれから一つ」

タレ目で流す様にアルヴィンを見る。

「おれとヨルの事をバラしたの、君だろ?」

アルヴィンは、肩を竦める。

「さあ?」

「別に怒ってるわけじゃないんだけど……まあ、とぼけるのなら、話を進めるよ」
そう言ってホームズは、言葉が続ける。

「ヨルの黒球はともかく、精霊術喰いはミラの魔技には使う暇がない。同じ様に発動までの時間がない黒匣^{ジン}相手に使う暇はない。

必然的にアルクノアの目に触れる事はなかった。

そして、おれをその理由で追ってくるアルクノアもいなかった」

ホームズは、煙管を口から外しアルヴィンに向ける。

「ところが、君たちと合流してから、おれも狙われる羽目になった……」

アルヴィンは、ただホームズの言葉を聞いている。

「……君達の前で使ったとは言っても、側にアルクノアはいなかったはずだったんだ
けど……」

ホームズは、そう言ってニヤリと笑う。最後はアルヴィンに言わせたいようだ。

ホームズの追求にアルヴィンは、両手を挙げて降参する。

「正解だよ。でも、おかげで、ローズを誘導出来たんだからいいだろう？」

「だから最初から言ってるだろう？怒ってないって」

ホームズは、そう言ってピーチパイを再び食べる。

そうホームズは、別にそのことは気にしていない。

どうせ情報はいつかはバレるだろうと思っていた。

だから、ホームズにとつてこれはただの答え合わせで、そしてちよつとした意地だ。自分は、気づいているぞ、と、

騙されていないぞ、と

そう言いたいだけのつまらない意地だ。

ホームズのその様を見てアルヴィンは、背中を向けて手を振って返す。

「アルヴィン」

そんな背中にホームズが言葉を投げる。

「死ぬんじゃあないよ」

ホームズは、ポツリと言った。

アルヴィンは、扉を静かに開ける。

「……………当たり前だ」

そう言つてアルヴィンは、ホームズの部屋から出て行つた。

ホームズは、残りのピーチパイをヨルに渡す。

ヨルは、もぐもぐと食べる。

「……………いよいよ、か……………」

「カラハ・シャルルでも似たような事言つたよね……………」

結果は最後ではなかったのだが。

「どうも、色んな人間の思惑が絡み付いてきてるねえ……………」

「そこにお前も入っているのを忘れるなよ」

ヨルの言葉にホームズは、顔を伏せる。

「あの元おかつぱに激情を持ち、アルクノアに勧誘されたお前は、もう完全に重要人物だ。」

縁が薄いかそんなレベルじゃないぞ」

ホームズは、煙管を口で動かす。

「…………どうだっという話だ。どうせ、おれの目的は変わらないのだから」

そう言っつてホームズは、煙管を口から外す。

ヨルは、それをしばらく見た後ホームズに目を向ける。

「煙を吸わなくていいのか？煙管つてのは、そう言うもんだろ？」

「吸わないよ。死へのカウントダウンが近づくからね」

ホームズは、マーロウに生きろと言われた。

別段断る理由もない。

断らない理由もある為ホームズは、煙管を啜るまでしかしない。

「……………ローズに持つてて欲しかったんだけどなあ……………」

「無理だろ」

ヨルにそう言われたホームズは、ため息と共に煙管を置く。

「頑張ろうぜ、ヨル」

「当然だ」

スキット

《そう言えば》

レ「そう言えば、前にホームズ三回シヤン・ドウに訪れた事があるって言ってたよね？」

ホ「うん。一番最初に散々いじめられたのが一回目。ローズとヨルに出会ったのが二回目、最後に手紙をもらって大急ぎで訪れたのが三回目」

レ「その時、ホームズはローズに会わなかったの？」

ホ「……………とても声をかけられる状態じゃないって聞いていたし、何より母さんに止められてたからね」

ヨ「まあ、その時にはもうあいつの中で策が出来上がっていたんだろな」

ホ「だろな」

レ「……………ホームズのお母さんがここまで誘導してるって事？」

ホ「いや、さつきも言ったけど微妙におれが書き換えてる。だから、母さんの書いた筋書き通りには、ならないだろうね」

ヨ「幸か不幸か、な？」

《続・そう言えば》

ミ「どうして、お前はマーロウの精霊術を知っていたんだ？」

ホ「……ああ、それね。母さんとマーロウさん戦った事があるんだよ」

レ「え？何で？」

ホ「マーロウさん、母さんの立てた例の隠蔽作戦に反対してね……勝った方が言う事を聞かなくて流れになって……」

ミ「負けたのか？」

ホ「まあね。マーロウさん、ありとあらゆる手を使ったんだけど、結局母さんの圧勝だった」

ミ「あのマーロウ相手にかっ!？」

レ「想像できないんだけど……」

ヨ「しない方が幸せだ」

《友人》

ホームズ母（以下母）「いやーまさか、死人二人がランキングに入るとは思わなかったなあ」

ローズ姉（以下姉）「私だって驚きだよ。まさかって奴だよ」

母「姑にしたいくないランキングに入ると思ってたからねえ……」

姉「私は入ったよ」

母「わあ……まあ、わかる気がする。君はかまひ倒しそうだよねえ……」

姉「因みにホームズ君も入ってるよ」

母「そんなランキングにあつさり入るとは、流石私の息子だなあ……」

姉「因みに言うと、レイアちゃんも、友人ランキングでは一位だよ」

母「私の息子の友人をやってくれようかな子だもの……」

姉「私の妹も苦労をかけるだろうなあ……」

母・姉「はあ……」

《コンビ》

レ「というわけで、今回も票を貰いました！ホームズ&レイアコンビです！」

ホ「そんなことより、人気投票で票を取ったぞおー！」

レ「わあ、そんなことよりで流しちゃうんだ……………」

ホ「当然！おれに票が入るなんて……………見る人は見てる！おれの魅力を知っている！」

レ「……………そうだね。探さないと見つからないよね」

ホ「わあい、褒めてくれてありがとう。涙が出るほど嬉しいよ」

レ「今度、エリーゼと話し合ってみるね」

ホ「他人のトラウマを抉るな！！」

《姑》

ホ「姑にしたくないランキング……………どうしておれが……………」

レ「いちいち細かそうだったてき。親しくなってから細かく注意してきそうだった」

ヨ「まあ、あつてるな」

ホ「ローズのお姉さんは、いたずらさたら……………だった」

レ「女子力の高い嫌われ方だね……………」

ヨ「まあ、ホームズが女子力高くてもなあ……………」

ホ「何を言うか！おれだって、女子力高いぞ！ハンカチ持ち歩いてるし、料理作りはともかく、お菓子作りは得意だ！」

レ・ヨ「……………」

ホ「な、なんだい!?その目は!!」

レ「……………そこで張り合うから、友達ランキングに入らないで、こっちに票が入るんだよ……………」

《ルイーズ・ヴォルマーノ》

母「いやあ、私が入るとは思わなかったなあ」

姉「またまたあ！友人部門に入っててこっちに入らないなんてことないよ」

母「私の息子、アレだけの種類に票が入ってるくせに友人部門こっちに入っていないんだけど……………」

姉「わあ！流石、ルイーズさんの息子！」

母「褒めてもなにも出ないよ」

姉「褒めてないけど、感心してるよ」

母「馬鹿にしてるのは分かった。でも反論は、しないよ。私の馬鹿息子は、そう言う奴だしねえ……」

姉「反論してあげようよ……ごめんホームズ君！私は気に入ってるよ！本当だよ！」

とある夜の話

「ん？まだ寝ないのかい？」

とある宿での出来事。

ルイズが帰ってくるとヨルは、窓際で星を眺めていた。

ルイズの言葉に鬱陶しそうな顔を向けるとヨルは再び星を眺める。

「まあ、もう少しな」

「夜は君の時間だものね」

「まあな。夜、特に新月だと特に身体の調子がいい」

「だったら、早く寝たほうがいいんじゃないのかい？」

調子のいい時に寝れば君の力とやらも回復するだろう？」

ルイズの言葉にヨルは、尻尾を振る。

「……………新月だと、月明かりがないから、星がよく見えるんだよ」

「へえ」

ルイズは、少し驚いた顔をして、ヨルを見る。

「もしかして、星を見るのが好きなのかい？」

「もしかしくなくてもな」

ヨルは、そう言つてちらりと寝ているホームズを見る。

「本当は、屋根の上とかで見たいんだが……まあ、仕方ないな」

ルイーズは、ワインの瓶とグラスを持つて窓に近づく。

「意外だねえ……化け物^{キモノ}が、そういうものを好むなんて」

「阿呆。俺が嫌いなのは、人間と精霊だ。それ以外は、割と好ましい部類に入るんだよ」

「ふーん………」

ルイーズは、ワインをぐいっとあおると一つ星の筋を指差す。

「知ってるかい？アレは、ミルキイウエイと言つてね夜空を流れる川なんだよ」

自慢げにそう言つて更に言葉を続ける。

「昔どこかの誰がミルク缶を零してしまつて出来上がったという逸話付き」

「ふむ、俺が知つてるのと少し違うな。」

確か、アマノガワと言つて、仕事ををしないイチヤイチャバカップルを分かつ為に作り出した川だと聞いているぞ。

分けたはいいが、今度は余りにも哀れなんで、一年に一度会うことを許したとか、何とか………」

「それってあれだろうか？ 願い事を書いた札を吊るしておくとかいう奴だろうか？」

「……………知ってたのか」

悪戯っぽく笑っているルイズにヨルは嫌そうな顔をして返す。

「割と有名な話だしね。その話、君はどうして知っているんだい？」

二千年以上閉じ込められていた筈の人間嫌いなヨルが何故かこの話を知っている。

ルイズは、それを引き出す為に、もう一つの話を引き張り出したのだ。

「カマかけて見て正解だったねえ。」

星にまつわる話なんて人間が作ってるもんだからさ。

教えておくれよ。人間が嫌いな君がどうして人間の作った話を知っているんだい？」

「……………昔、人間に教えて貰ったんだよ。封印される前の話だ」

ヨルは面倒くさそうにそう返す。

ルイズの目が他に何か聞きたがっているのをヨルは、見つけてしまったため息を吐い

て言葉が続ける。

「昔の話だ。夜する事がなくて空を見上げて星の数を数えてたら、人間が来てな、色々

話したんだよ」

「……………それ、いつの話だい？」

「俺を倒そうと精霊と人間が結託してる頃だ」

そう言つて夜空をもう一度見上げる。

ルイーズは、顎に手を当てて考える。

命を狙われ続け、回復が必要だと言うのにヨルする事がない。

つまり、寝られなかったのだろう。

命を狙われているという危機感がヨルに睡眠という安らぎを許さなかったのだ。

ヨルは、ルイーズの考えなどどこ吹く風という風に笑う。

「まあ、その頃から星を見るのが気に入つてな……………」

「楽しかったかい？」

ルイーズの言葉にヨルは少しだけ目を伏せる。

「まあ、な」

そう言つて伏せた目を上げると、ルイーズを見る。

「おい、それより、星が幾つか見つからないんだが……………」

「hgc。」

「俺が封印される前は、輝いていた筈の星が見当たらない」

ルイーズは、この世界の秘密を知っている。

下手すればリーゼ・マクシアから見えない位置の星かもしれない。

そう思っているルイーズに構わずヨルは言葉が続ける。

「……………同じ場所で同じ時間に見ているのに、何故見つからないんだ？」
不思議そうな顔のヨルにルイーズは、ニヤリと笑う。

その言葉を聞いたルイーズは、ヨルの疑問に正解を告げる。

「一年かけて光が進む距離を一光年と言うんだ」

「なんだ、突然」

「いいから聞きたまえ。夜空に輝く星々は、地上から何十光年と離れている。下手すれば何百光年もね？」

ヨルはルイーズの言葉に首を傾げる。

「だから？」

「単純な話、今見ている星の光は、今光っているわけじゃないんだよ。

何十年前に光ってたものなんだ。だから、今もその星が存在してるかどうかは分からないんだ」

「……………つまり、俺が封印される前に見ていた星は…………」

「多分、もうないんだろうね…………」

ヨルはそれを聞くと悲しそうに目を伏せる。

その普段からは考えられない弱々しい様にルイーズは、少し驚いた。

「……………そうか。それじゃあ、仕方ないな」

ヨルはそう言つてルイーズの持つているワインを奪い少しだけ飲んだ。

「ヨル？」

「『形あるものは、いずれ無くなる』か……………」

そう言つて夜空を見上げる。

星の光が夜空を彩っている。

「形なんてなくても無くなるんだな」

封印される前には、あつた筈の光がもうヨルに届く事はない。

そう呟くヨルにルイーズは観念したようにため息をついて、机の下からピーチパイを

取り出して置く。

「本当は、私のためだったんだけど、君にもあげるよ」

「お前、これ一人で食うつもりだったのか？」

「当然」

そう言うが早いかももうピーチパイを食べていた。

それから、ルイーズは口をもぐもぐと動かしながらヨルを見据える。

「……………変わらない、なんて事はない。

それと同じようになくならないなんて事はない」

そう言つて寝静まつたホームズを見ながらローズは、もう一口、運ぶ。

「いずれこんな時間がなくなる日も来るだろうね。ヨルが居て、私が居て、ホームズが居て、なんて時間が永遠に続く事はない」

ヨルももぐもぐと口にピーチパイを運ぶ。

「そりゃあ、俺としてはそうなつて欲しいんだが……」

「ピーチパイいらならいならよこしたまえ」

「続くといいな」

ヨルの即答を聞くとルイーズは、自分の分を口に運びごくんと飲み込む。

「それでも、思ひ出は残り、未来を生きる力となる」

そう言うルイーズの笑顔は、とても優しい笑顔だった。

余りにも意外な笑顔にヨルは思わず面食らってしまった。

しかし、それが何か悔しかったのだろう。

「忘れたら？」

ヨルは、できるだけつまらなそうにそう返した。

ヨルの言葉を聞くと、ルイーズは先ほどまでの笑みを消しとぼして面白そうに笑う。

「君なら忘れないだろう？二千年も前の星の位置を覚えていたんだもの」

『綺麗な色でしょ！あの星だけ金色に光るんだよ』

ヨルはもう一度星を見ようと窓を見る。

その前に鏡となっている窓ガラスが目を引く。

鏡となった窓ガラスには、金色の瞳が暗い夜の中に爛々と輝いていた。

ヨルは、少しだけ優しく微笑む

「そうだな」

そんなヨルを見るとルイーズは、満足そうに微笑み、ヨルの頭を軽く撫でた。

「付き合わせて悪かったな」

ヨルの言葉にルイーズは、ピーチパイをかじりながらウィンクをする。

「別に。女の子は、甘いものと綺麗なものが好きだからなんてことないさ」
「女の子、ねえ……………」

子持ちの女を子と呼べるかどうかは、中々微妙なところだ。

「何か言ったかい？」

「いや。何にも」

ヨルは、そのままルイーズの方を向かず、ぽつりと言葉を続ける。

「ありがとな。ルイーズ」

「どういたしまして、ヨル」



「もう、アレからだいぶ経つな……」

ヨルは、そう言つて夜空を見上げる。

時間は深夜。

ホームズは、相変わらず先に寝ている。

ヨルはその夜以降何回かルイズと一緒に星を見るようになった。

していた話は他愛のなくくだらないものだ。

その相手がいなくなつてからもう二年経つ。

それから、ずっと一匹で星を眺めていた。

夜になると偶に胸に渦巻くこの感情が、なんなのか大体予想はついている。

そんな話をしたらルイズは、きつと腹を抱えて笑うだろう。

それを思い出すと少しだけ腹がたつ。

そして、星を見ると何とは無しに思い出す、あの夜の出来事。

あの夜の思い出すと少しだけ頬が緩む。

「思い出……ね」

そう呟くとホームズの寝ている布団がもぞもぞと動く。

そして、むくりと起き上がると寝ぼけ眼でヨルを見る。

「ん？まだ寝ないのかい？」

寝ぼけたようにいうホームズの言葉にヨルは思わず苦笑してしまった。

「まあ、もう少しな」

ホームズは、窓際で夜空を見上げているヨルを見て不思議そうに口を開く。

「星を見てるのかい？」

「まあな」

「ふーん………」

そう言つて頭をボリボリとかく。

「なら、屋上に行くかい？」

ヨルは、驚いたように目を丸くする。

その顔が珍しかったのか、ホームズは首を傾げる。

「どうしたんだい？」

「いや、逆にお前こそどうしたんだ？」

「なんか、目が冴えちゃってさ……夜風にでもあたろうかと思って。まあ、そうすれば君も行かざるをえないんだけど」

支度を整えたホームズを見てヨルはニヤリと笑う。

「ああ、行くか」

これは、そんなとある夜の話し。

作戦開始

酸っぱい葡萄

「……………ふあ〜」

翌朝、決戦の日。

ミラ達は先に起きており、ガイアス一行も揃っていた。

そんな中ホームズは、眠そうに目をこすっていた。

昨晩は幾らなんでも色々あり過ぎた。

いつもの如く女の子に嫌われ、隠し事はバレ、人に見せた事のない内面を晒し、大泣きし、そして更に企みも呆気なくバレた。

本人には何一つバレていないことはせめてもの救いだ。

そんな事を思い出すと目が死んでいく。

元々たれ目のホームズの目は更に落ちていく。

『気合入れろーホームズ!』

ティポに喝を入れられホームズは、迷惑そうに顔をしかめる。

「うるさいなあ、バッチリ入ってるだろう? 見たまえ、このやる気に満ちた目を」

「眠氣の入ったタレ目にしか見えません……」

エリーゼは、しらつとした目でホームズにそう言った。

「ハハハ……」

ジュードは隣で苦笑いをしてローズを見る。

ローズは、普通に腕を組んでそんな二人を見ていた。

いつもならここで更に被せてくるのだが、何も言う気配がない。

「……ローズ？」

「………何？」

不思議に思つてジュードが尋ねると、ローズは更に不思議そうに首を傾げて返した。

「………いや、何でもない」

「気になるわね、なによ？」

まさか、ホームズと何かあつた？何て聞けない。

どう答えようか迷っていると、ホームズが口を開く。

「君、大丈夫かい？マールロウさんの事もあるし、休んだらどうだい？」

ホームズのその言葉に一瞬だけ顔をしかめるとローズは、直ぐにホームズに目を向ける。

「分かつてるくせにそういう事言うのよね、貴方は」

ローズは、ホームズにそう言うのとジュードの方を向く。

「平気よ。気にしないで」

「ああ、うん」

釈然としないが、ジュードはとりあえず頷く。

ヨルはそんな微妙な空気に構わず口を開く

「それで、空中にある船とやらにはどうやって行くつもりだ？」

「城に繋いであるワイバーンを使う」

ウインガルは、そう答えると更にもう一つの疑問をローエンが尋ねる。

「しかし、城にはどうやって行くつもりですか？」

「俺の城に行くのに策を弄するつもりはない。正面から大通りを使って突破する」
ローエンの疑問にガイアスは迷う事なく答える。

その答えに一同は、思わず息を飲む。

「……わああ、まるで王様みたいだねえ」

「何を頭の悪い事を言ってるんだ、お前は」

ヨルは、ホームズの肩で呆れている。

そんな彼らに構わずジュードは声を荒げる。

「そんな無茶だよー！」

「そうです！せめて二手に分かれて……………」
ローエンも同じ様に声を荒げたが、段々と声が小さくなっていき、静かに髭を触り始める。

静かになったローエンに構わずアグリアが立ち上がる。

「てめーらの意見なんて求めてねーんだよ」

そう言つてアグリアは立ち去つてしまった。

ガイアスは、立ち去らずジュードを見る。

「ジュード。お前のなすべきこと、わかっているか？」

ガイアスの言葉にジュードは、力強く頷く。

「うん。ミラを勝たせること、それが僕のなすべきことだ」

ガイアスは、それを見て満足そうに微笑み、四象刃フォーブを連れて歩き出した。

そんな中、プレザが歩みを止める。

「教会の脇に、市街に続く道があるわ」

そう言うのとアルヴィンの方を見ずにそのままの歩いて行つた。

ポツンと残された面々には、何とも言えない空気が流れる。

『もうー！なんで仲良くしてくんないのー！』

ティポは、がつくりとする。

「うふふ、どうしましょうか?」

ミュゼは微笑みながらミラに尋ねる。

「そうだな……」

ミラが腕を組んで考える間にローエンが口を開く。

「教会の脇を抜けて裏道から、市街に入り、そこからは屋根伝いに城を目指し、空中戦艦奪取とともに城と兵を奪い返すのです」

ローエンは、そう言つてふふふと微笑む。

「彼らは、陽動を買つて出てくれたんですよ」

その言葉と共に一行は、目を丸くする。

そしてレイアは、呆れたように腰に手を当てる。

「素直じゃないな」

「全くだ」

「……………なんでこつち見てるんだい、ヨル」

ホームズは、そう言つてヨルをジロリと睨みつける。

そんな彼らを見てジュードは、苦笑いをする。

ミラは、ホームズを見て少しだけ目を伏せると直ぐに顔を上げる。

「よし、行こう」

一行は、ミラに続くように歩き始めた。

ホームズだけ欠伸をしながら歩く為、自然と最後尾になる。

そして、皆が前を向いているその瞬間に後ろを振り返る。

「いつてきます、父さん、母さん」

肩にいるヨルにだけ聞こえる声量でそう言うとホームズは、後を追うように走り出した。



「なるほど、ここに繋がるわけか……」

ホームズは、煙管を口に咥えながらそう呟く。

道は終わっており、そこから少しだけ段差を飛び降りるだけで屋根の上に降り立つ事

が出来る。

下に広がる街並みを見ると少しだけ寒くなるが、それと同時に……

「なんか、テンションが上がるね」

その言葉に皆は顔をそらす。

言わないほうがいい優しさもこの世にはあるのだ。

そして、そんな優しさとは無縁のミラはポンと手を叩く。

「おお、アレだな。馬鹿となんとかは高いところが好きという奴だな」

「肝心のところが隠れてないんだけど……」

ホームズは、頬を引きつらせながら返す。

「あら？ ホームズは、お馬鹿さんなの？」

「おい、人を馬鹿にするなって言われなかったのかい？ なんなの？ 精霊ってこんな

ばつかなのかい？」

ミラに被せるように言うミュゼにホームズは、半眼を向ける。

「あらあら、隠し事はいけないでしょう？」

ミュゼにそう言われてしまい、ホームズは返す言葉もない。

ジュードは近くのアルヴィンに話す。

「ホームズが押されてるよ……」

「あいつ、女の子の素直な言葉に弱いよな……」

「ああ……………」

そう言つてレイアとミラを見る。

「何？」

「どうした？」

レイアとミラは首を傾げる。

「何でもない」

アルヴィンとジュードは声を揃えてそう返事をした。

「馬鹿な事言つていないでとつと降りなさい」

ローズが絶対零度の声音で、ジュードとアルヴィンに声をかける。

「だつてさ、ホームズ」

「え？」

そう言つてアルヴィンは、戸惑うホームズを他所に屋根の上に突き落とした。

「君、何やつてるん……………」

雪を払いながら立ち上がると、そこには、

雪国仕様の鎧を着込んだ兵士がいた。

「えーつと……………」

目が合い、時間が止まる。

「アルヴェイン!!」

先に我に返ったホームズは、固まった後、アルヴェインのほうを向いて叫んだ。

「はいはい」

そう言つて頭上に銃口を構える。

「レインバレット!!」

銃弾は、兵士達に雨のように降り注ぐ。

ホームズは、その隙に駆け出し、勢いそのまま顔面に蹴りを食らわせ、家の壁まで蹴り飛ばす。

そんなホームズの後ろに回った兵士が、踵を鳴らす。

どうやら、戦場の兵士と同じく靴に何らかの黒匣ジッが仕込んであるようだ。

勢いよく回し蹴りが放たれる。

「はああっ！」

蹴りが届く前にレイアの棍が、兵士を襲う。

少しだけのけぞったところにトドメの一撃とばかりにローズが斬り伏せる。

しかし、

「まだいるよ……………」

兵士は、まだ四人残っていた。

「ホームズ下がって！」

闘気を纏おうとしていたホームズの前にジュードが現れる。

そして、拳を合わせる。

「ミュゼ!!」

ジュードのManaがミュゼに移り、ミュゼは、ニコリと笑う。

そして、髪を伸ばし兵達を倒していった。

突然の攻撃にホームズは、空いた口がふさがらない。

「……………何、今の？」

「ジュードの直接使役よ」

ミュゼは、ふふふと笑っている。

対するミラは複雑そうな顔をしている。

訳の分からないホームズは、ジュードにもう一度目を向ける。

「えーっと、僕のマナを与える代わりに戦ってもらってるの」

「ああ、前言ってたね。だから直接使役って訳か」

「し、しかし…………ジュード、その、もう少し、人目に気を使った方が…………」

珍しくミラが歯切れ悪くそう言う。

ジュードは、訳が分からず首を傾げる。

「どうして？」

「どうしてだど!?それを私にここで説明させる気か!」

ミラは顔を真っ赤にしてジュードに詰め寄る。

「え?な、なに?僕変なこと言った?」

「別にそんなことないけど」

「よせ！ ジュード、ホームズの言うことを鵜呑みにするな！ 普段から変なことしか言っていない奴なんだぞ」

「喧嘩売ってるなら買おうよ」

聞き捨てならない発言をするミラにホームズは、半眼を向ける。

そんなホームズ達を遠目にレイアは、見る。

昨日の今日で不安もあつたのだが、至つていつも通りのホームズだった。

まあ、分かっていたことだ。

少しぐらい沈んで貰つていた方が、まだ安心できたかもしれない。

ローズがいい例だ。

迷惑をかけないように頑張っているのが、まだ手に取れる。

しかし、ホームズには、それが全くない。

「ねえ、ローエン」

考えても出ない答えを抱え込んだレイアは、自然と声を出した。

ローズと距離のあるのは、確認済みだ。

「辛いことがあつてさ、どうしたつて、苦しい筈なのにいつも通り過ごすことなんて出来るのかな？」

ローエンは、そんなレイアの視線の先を見て少し考える。

「そんな事はないでしょう。辛いことも悲しい事もきつと残っていきます」

「なら、それを感じさせない人ってやっぱり変だよな？」

レイアは、不安そうに言う。

そんなレイアにローエンは、少し目を伏せ静かに微笑む。

「それはきつと感じさせていないだけです。」

そうですね、俗に言う………」

目の前のホームズは、今に飛びかかろうとしてジュードに抑えられていた。

「やせ我慢というやつですよ。得意ですからね」

レイアは、ローエンの言葉にようやく納得した。

ローズと違い昨日の晩の事が嘘のように消えているホームズ。

何も事情の知らない人間には、いつも通りにしか見えなかった。

逆にレイアは、事情を知っているため不自然に移った。

けれどもなんてことない。

単純にホームズの方がローズよりやせ我慢が上手かったただけの話だ。

いや、慣れているといった方が正しいのかもしれない。

そんな事を思いながら歩いていると、刀を納めているローズが目に入った。

レイアは、そんなローズに近づくと。

「大丈夫？」

「別に。平気よ」

ローズは、そう言うてぎこちなく笑うと前に進んでいく。

色々あったが、ローズもホームズのカバーに向かっていた。

それでもあの輪の中には入っていけないのだろう。

ホームズの策に嵌り、彼を憎むようになった彼女にその場所は、もう甘酸っぱい思い

を感じる場所ではない。

いや、見た目は、恐らくまだ甘酸っぱいのだろう。

事実何も知らないジュードは不思議そうにローズを見ている。

しかし、それはあり得ない。

甘いことはない。

辛く、酸っぱく、苦い場所だ。

「……………ローズ、あの、」

それを見ていたエリーゼがローズに声をかける。

エリーゼもローズから昨日の話を聞いている。

「……………話、しなくていいんですか？」

『だって、ローズは』

続きを言おうとするティポの口をローズが押さえる。

「いいわ、別に。ありがとうね」

ぎこちなく嘘くさい笑顔、そして、感情を押し殺したような声がローズから発せられ、その場にいたレイアとエリーゼは、胸が締め付けられた。

やせ我慢を続けるホームズときこちなく笑顔を浮かべるロース。

二人の気持ちを置き去りにし、城へと歩みを進めていく。

追いついてきたレイア達を見て、ミラは少し困ったように俯く。何を考えているか、丸分かりだ。

「少し、様子を見よう。必ずタイミングが訪れるはずだ」

「うん、そうだね」

「はい」

そんなミラ達の会話を洩い顔をしてローエンは、聞いていた。時が経てばどうにかなるものももちろんある。

しかし、時が経つほどどうにもならなくなるものもあるのだ。

それを彼女達はわかっていない。

時を置き、どうにもならなくなってしまった戦友の事を思い出すとどうしてもローエンは、眉間にシワが寄っていく。

「さて、どうしたのですかね……」

狂った歯車の回り出した音をかき消すようにローエンが静かに呟いた。

命大事に

「見て、ガイアス達が……」

屋根の上から見るとガイアス達が敵兵達と苦戦しているのが見えた。

「苦戦してるね」

「助けに行つた方がいいんじゃない？」

レイアの言葉にジュードは俯く。

「しかし、ここで助けに行けばガイアス達の陽動が無駄になる」

ミラの言葉にローエンが頷く。

「ええ。私達は先を行きましょう」

ローエンの言葉に後ろ髪を引かれる思いで立ち去ろうとしたその時、市民達が各々武器を持って現れた。

「いたぞ！ガイアス王をお守りしろ!!」

しかも一人や二人ではない。

市民達は、必死で敵兵達に向かっていく。

「人望があるんだね」

ジュードの言葉にホームズも頷く。

「まさに、理想の王だねえ」

そう言つて歩みを進める。

ホームズは、視界の端にそれを捉えながら、そう評価した。

自分の理想を貫き、そして、それに民衆が付いてくる。

王としてこれより上などないだろう。

「理想の………王」

ローズは、民衆達に助けられるガイアス達を見てポツリと呟いた。

「お、見えてきたぞ」

ヨルは、そんなローズに構わずホームズの肩から城門を尻尾でさす。

そこには、ガイアス達の言つた通りワイバーンが繋がれていた。

レイアが、ローズに耳打ちをする。

「大丈夫？」

ローズは、静かに首を横に振る。

「……悪いけど、代わつてくれない？」

小さく零すローズの言葉を聞いてレイアは、ホームズの所へと行く。

「……損な役を任せちゃつて悪いね」

ホームズは、申し訳なきそうに言う。レイアは、少し笑う。

「……いいよ、別にこれぐらい。辛いのは、わたしじゃないしね」

レイアは、そう言いながらホームズの後についてワイバーンに乗る。

「ああ、うん、それもそうなんだけど……」

ホームズは、言いづらそうに目を逸らす。

「……………先に謝っとくね、ごめん」

「え？」

レイアの疑問を無視してワイバーンは、天高く飛び上がった。



ワイバーンは、空中戦艦まで飛び、ミラ達を降ろす。

ミラ達は空中戦艦降りたつたミラ達は、各々武器を構えた。

「さて、ここからは、力押しだ」

ミラの言葉に武器を構えジュードは首を傾げる。

「あれ？ホームズとレイアは？」

「……そう言えば、いないな………いや待て、何か聞こえる」

「ああああアアアア」

小さく聞こえるレイアの声に一行は、首を傾げるし、集まってきた兵達も首を傾げている。

「うあああああああああああああああああああああああ！」

徐々に聞こえてくる叫び声とともにレイアを脇に抱えたホームズが落ちてきた。

ホームズは、赤い鬨気を纏って着地する。

脇に抱えられたレイアは、ガチガチと歯を震わせていた。

「死ぬかと思った……………」

「良かったね、生きてて」

ホームズとレイアは、青い顔でそう言う。

「まあ、これから死ぬかもしれないんだがな」

そんな二人にヨルは、どうでもよさそうに言う。

その言葉を聞いたホームズは、ヨルの顔面を掴む。

「誰のせいでも、こんな事になったと思ってるんだい……全部全部君のせいだろう」
余りにもワイバーンが言う事を聞かないので、ホームズはレイアを抱えてここまで飛び降りたのだ。

勿論上手く空中戦艦に降りられなければ死は、必至だ。

「レイアさん、大丈夫ですか？」

「まあ、なんとかね……」

ローエンの言葉にげんがりしながら返すとレイアは、武器を構える。

一方ホームズは、まだヨルと喧嘩をしている。

「ああもう！そんなことやつてないで！来るよ！」

ジュードの言葉にホームズは、嫌々ヨルの顔から手を離す。

エレンピオスの兵達は、武器を構えて走り出してきた。

ホームズは、ずっと目を細めると足を一歩下げ、向かってくる兵士にカウンターの要領で蹴りを喰らわせる。

「グ、これくらい」

ホームズの蹴りに耐えた兵士は、そのまま武器を振おうとする。

しかし、それが届くより前に回し蹴りを放った。

二回目のカウンターをもらいフラフラしている兵士を掴むとそのまま、レイアと戦っ

ている兵士に投げた。

兵士達は、そのまま遠くへ突き飛ばされ意識を失った。

「助かった！ありがとう」

「どういたしましてっ!!」

ホームズは、レイアに返事をしながら今度は詠唱しようとしているローズに武器を振おうとする兵士に向かって、近くにいる兵士を蹴り飛ばす。

アシストをもらったローズは、詠唱を完成させ、上空に雷の剣を出現させる。

「サンダーブレード!!」

地面に突き刺さった剣は、雷の波を放ち弾け飛んだ。

「ぐわああああ!」

弾け飛んだ雷はそのまま兵士達を巻き込んで打ち倒していく。

しかし、兵士達は減らない。

いや、正確に言うなら減ってはいる。

しかし、量が多すぎるのだ。

「共鳴術技リソニックアーツの守護氷槍陣でもやったらどうだ?」

「いや、今回は人数が多いから巻き込んだらどうよ」

ホームズは、そう言いながら相手の剣を踏みつけ、そのまま蹴りを放つ。

アルヴェインは、銃弾を敵兵に打ち込む。

「だったら、どうする!? キリがないぜ」

銃弾を打ち込まれた兵は倒れたが、またすぐ別の兵がアルヴェインに斬りかかってきた。

「……………そうだ! 船を下ろそう!」

ジュードが思いついたようにそう言う。

そんなジュードに襲いかかろうとした兵士にヨルの尻尾が巻き付く。

「なるほど。そうすれば援軍も来る……悪くないな」

その言葉と共にホームズは、ヨルの尻尾を掴み巻きつかれている兵士を自分の後ろの甲板に打ち付ける。

ジュードの言葉に船の操縦室らしき部屋をエリーゼが見る。

「でも…だれが?」

ジュードは、真つ直ぐミラを見る。

「ミラ、行って」

その真つ直ぐな目を見て一瞬驚くが直ぐにミラは頷く。

「ああ。分かった」

そう言つて走り出そうとすると、どこからともなく高笑いが聞こえる。

「……………この声は……………」

ホームズは、げんなりした顔で空を見上げる。

するとワイバーンから、一人の男が飛び降りた。

途中柱に頭をぶつけていたが、それは些細なことだ。

男はコブを作りながらビシツとジュードを指差す。

「話を聞かせてもらったぞ！ジュード！」

「イバル…………!？」

ミラは目をパチクリさせている。

「ここからは、俺の独壇場だ！」

「うん、任せたよ」

あつさりとしたもいい笑顔でジュードは返すとイバルは、更に悔しそうに震える。

「……………何故お前は俺の活躍に嫉妬しない!!」

ビシと指をさされジュードは、驚いた後とても優しい笑みを浮かべた。

「あ、そうか……………なら代わりに僕が」

「ふん！お前の出番などないわ!!」

言うだけ言うと、イバルは敵を蹴散らし操縦室へと柱へと向かう。

アルヴィンは、それを見てニヤリと笑う。

「扱い上手くなつたじゃないの、優等生」

「もう、からかわないでよ。咄嗟に思いついただけなんだから」
照れ臭そうに頭を掻く。

「もう少しで、ホームズに近づくんじやないのか？」

アルヴィンの言葉にティポは、ムツと睨みつける。

『そんな訳ないだろー！ホームズなんかと一緒にするなー！』

「口は災いの門つて知ってるかい？」

ホームズは、ティポを握りしめ、伸ばす。

それをエリーゼが慌てて止めようとする。

レイアは、そんな二人を見て引きつり笑いをするとミラの方を向く。

「でも、ミラのこと言わないんだね」

「よほどジュードの事が気になるのだろう。」

それで、仕事をやるなら文句はない……さて」

そう言つてミラは後ろを振り向かない。

見れば肩の力が抜けそうな気がする。

武器を手に構える。

「やるか」

ホームズは、顔に張り付いたティポを剥ぎ取る。

「了解」

そう言つてティポをエリーゼに放り投げる。

「さて、働きたまえ、エリーゼ、アルヴィン傭兵」

「分かりました」

『言われなくたってー!』

「ま、報酬分は、働くのがプロだよな?」

ホームズは、エリーゼと共鳴し突撃する

アルヴィンは、ホームズを援護する為に遠距離から銃弾を撃ち込む。

「ホームズ! そのまま突っ込め!」

「了解」

走りながら返事をするホームズは、同じ様に向かつてくる敵の人数を数える。

「ひい、ふう、みい……」

数え終わると脚に鬨気を纏う。

「全部で六人か……」

「二人多い。五人だ」

ヨルの冷静な声を聞きながらホームズは、脚を下げる。

「獅子戦哮!!」

一人だけ獅子の餌食になったが、もう四人は、まだ、ホームズに向かつていく。
「獅子の咆哮じゃ不満なら……」

そう言つてホームズは、そう言つてリアルオーブを光らせる。
共鳴リソングしているエリーゼのリアルオーブもそれと同じように輝く。

「ヌイグルミの口撃だ」

エリーゼは杖を。ホームズは脚を回す。

『「テイポ・ザ・ビースト!!」』

巨大なテイポの闘気が残りの兵に襲い掛かる。

「エリーゼ！ 援護してあげる」

「はいー！」

『恩着せがましいなー!』

「蹴り飛ばされたいのかい！ ムラサキダルマ！」

ホームズは、そう言つて敵の顔を足蹴にする。

そのままそこを足場に飛び上がる。

空中で、回転しそのまま次の兵の顔面に踵落としを決める。

そのまま着地をしようとするホームズを中心に敵兵達が襲いかかる。

『ネガティブゲート』

そこをエリーゼの精霊術が襲いかかる。

寄つてたかつてホームズに攻撃を仕掛けようとした兵士達は、そのまま闇の腕の餌食となつた。

ホームズは、自分の周りに倒れている兵を一人掴むと別の兵に投げつける。

怪我も回復し、絶好調のようだ。

「さて、ガンガン行こうぜ」

ホームズは、いつものようにニヤリと笑つて宣言する。

こうして、リーゼ・マクシアの逆襲が始まつた。

「じゃあ、私は命令させろで」

「……………誰に？」

「じゃあ、俺は呪文使うなで」

「……………術使えたっけ？」

「じゃあ、俺はみんながんばれで」

「働け！クソ猫！」

馬鹿が騒げば誰かが疲れる

「蒼破・追蓮!!」

蒼い劍戟が二つ兵士を襲う。

ローズは、その後直ぐにもう一度刀を振り回し、背後にいる兵士を斬り伏せる。

「レイア!」

「悲霊壮活! シャープス!」

レイアの身体強化がローズにかかるるとローズは、両手を合わせる。

「獅子戦哮・氷牙!」

冷気を纏った鬨気の獅子が、兵士達に襲いかかる。

「ローズ!!」

ジュードがローズを呼び共鳴リソングを結ぶ。

「OK、任せなさい」

ジュードは拳を、ローズは、二刀を振り被る。

「魔神連牙斬!!」

連続で襲いかかる魔神剣と最後に、二人の力の合わさった劍戟が、兵達を蹴散らして

進む。

技を決め一息つくと、その二人に人影が襲いかかる。

「ファイアボール！」

その人影に向かって術後調律を終わらせたローエンのファイアボールが、連続で打ち込まれる。

「助かったわ、ローエン」

「いえいえ、これくらい」

ローエンは、そう言うてにこやかに微笑む。

ローズもそれに頷くと刀を足元で交差させる。

「援護よろしく」

「わかった」

レイアがローズの前に立ち、ジュードが突撃する。

「業火よ……」

詠唱を始めたローズに敵兵達が向かい出す。

ジュードの漏れをレイアが棍で捌く。

「爪となり、斬り裂け……」

その詠唱の一節が出るとローズの周りの温度が上がる。

「牙となり、喰らいつけ」
更に上がる。

「あつつー！」

レイアの棍が熱を帯び始めていた。

鎧で身を包んだ兵士達もそれ以上踏み込めない。

「竜となり、蹂躪しろ！」

ローズの周りを炎が渦巻く。

「フレイムドラゴン！」

渦巻く炎は竜となり、目の前の獲物に襲いかかった。

「うあああああつ!!」

灼熱の竜に襲われ悲鳴をあげる兵士達。

そんな兵士達とは、別に竜に襲われていない兵士達もいる。

ローズは、それを見ると刀の交差を解く。

そして、ポツリと呟いた。

「……………突っ込むわ」

「え?」

ジュードの返事など聞かずローズは、刀を構え直すとそのままその兵士達の元へ突っ込み刀を振るった。

一人、また一人と倒し、ローズは、進んでいく。

ローズは、研ぎ澄まされた感覚を頼りに次々と斬り伏せていく。

しかし、そんな状態は長くは続かない。

兵士達は、ローズを囲むように武器を構える。

「ローズ!!」

離れたところにいるジュードの言葉を聞きながらローズは、呼吸を一つ。焦ってはいけない。

無傷では済まないだろうが、それでも死ぬ前には、必ず援護が来る。

リーチの一番長いレイアが、幸い近くにいますが、レイアの周りにも敵がいてそれどころではない。

「まずい……」

レイアが棍を伸ばしながらそう呟く。

明らかにローズは、ヤケになっている。

それが分かっているのだが、目の前の敵がそれを許してくれない。

そう歯噛みをしているとレイアのリリアルオーブが輝き、光が一筋背後に伸びていく。

「飛天翔星駆!!」

ホームズが、アルヴィンとの共鳴術技で、天高くから飛び蹴りを放った。

「ナイスタイミング!」

レイアは、直ぐに棍の先をホームズに突き出す。

ホームズは、着地と同時にそれを掴む。

「爆砕……………」

レイアは、棍を両手で掴み、歯を食いしばって上段に振り被る。

「ロツク!!」

大上段から打ち下ろされたホームズが地面を弾けさせ地面を抉る。

ナハティガルと戦った時とは違い、振り回していないので今回のレイアの負担は大分軽い。

「レイア、しっかりと掴んでいたまえ」

振り下ろされたばかりのホームズは、そう言うレイアの棍を掴む手に力を込める。

リアルオーブは、まだ光っている。

「…………小ムスメ、巻き込まれたくなかったら離れろ」

ヨルの言葉に反論しようとしたが、直ぐに口を紡ぎ、急いで離れる。

「多めに回す!」

ホームズは、そう言うレイアが掴んだままの棍を回す。

ホームズの馬鹿力が遺憾なく発せられ棍を回すスピードがぐんぐん上がっていく。

「超牙旋滅タイフーン」

やがて巨大な竜巻を作り出し周りの兵達を上空へと巻き上げた。

おかげで敵の数も大分へった。

「よくやった、ホームズ、レイア」

ミラの言葉を聞き膝をつくホームズとレイア。

「目が回る……」

「う、視界が歪んで気持ち悪……」

ホームズは、青ざめた顔で口を抑える。

「……お前は、もう少し後先考えて行動したほうがいいな」

ミラは呆れたようにそう呟く。

「………うう、何処かで聞いた台詞だなあ……」

ホームズは、げんなりしながら精一杯の口ごたえをするが、覇気ががない。すると同時に空中戦艦にイバルの声がスピーカー越しに響き渡る。

「あ、あ……この船は俺が占拠した。大人しく投降しろ」

その声を聞いた兵達は、ミラ達のまえから一人また一人と去っていった。

「イバル！船を降ろして！」

「貴様に言われなくてもわかっている！」

ジュードにそう力強く言い返すとスイッチを探し始める。

「えーっと………これ………じゃない………これでもない………あつた！これだ！」

カチという音がスピーカーを通して船に響き渡る。

しかし、船が降りる気配などない。

代わりに、ミラ達を取り囲むように黒匣ジンの機械が起動した。

四足歩行をしながら、辺りを規則的に伺う。

「……………えーっと」

ローズは、動き出したそれに頬を引きつらせる。

「ヤロー……………何しやがった……………」

アルヴィンは、声が若干震える。

ホームズは、ジュードを見て操縦室を見てため息を吐く。

「……………何がわかったんだい、何が」

ホームズは、呆れた顔で（ついでに青い）そう呟いた。

「……………しようがない奴だ……………」

ミラも今回は呆れていた。

ミュゼがふわふわとジュードの側に浮かぶ。

「これはこれは」

「？ミュゼ、知ってるの？」

「そんな事より、ジュード。敵が来ますわよ」

六人はそれぞれため息を吐くと武器を構えた。ホームズは、肩にいるヨルに声を掛ける。

「ヨル」

「なけなしの一発だ。受け取れ」

ヨルはそう言うのと黒球を吐き出した。

それは、弾け霞となつて右脚に纏わりつく。

そして、そのまま目の前の機械に回し蹴りを喰らわせる。

回し蹴りを食らつた機械は、一瞬で碎け散つた。

それと同時にホームズの右脚の黒霞も消えた。

「……………あれ？早すぎない？」

「だから言つたろ。なけなしの一発だつて」

ホームズは、霞の消えた右脚を見てため息を吐くと左脚に鬨気を纏う。

「まあ、いいや」

向かつてくるもう一つの機械に蹴りを放つ。

「獅子戦哮!!」

ホームズから放たれた鬨気の獅子は正面から鋼の生き物に食らいつく。

しかし、機械は怯むことなく銃口をホームズに向ける

「いつは……」

ホームズが、眉を潜める。

それと同時に銃口からマナの光線が放たれた。

ホームズは、粉々に砕け散った破片を蹴り飛ばし、少しだけ威力を殺し、横に転がる。

「どうやら、黒匣^{ジン}が内蔵されているみたいだねえ……」

「どうする？俺でも食う暇がないぞ」

面白そうに言うヨルを他所にホームズは、目の前の機械を冷めた目で見つめる。

「ま、やりようなんて幾らでもあるさ」

ホームズは、そう言うのと腰を落とし力を込める。

「剛招来っ！」

ホームズは、赤い蒸気を身に纏う。

黒匣^{ジン}を内蔵した機械はホームズに照準を定めようとするが、ホームズは、ジクザグと

走り照準を合わせない。

攻撃をかわし続けたホームズはそのまま機械の背後を取る。

「ふんぐおらあつ！」

ホームズは、機械を持ち上げるとそのまま別の機械に投げつけた。

剛招来で強化されたホームズに投げ飛ばされた機械は、他の機械を巻き込み動きを止

めた。

ホームズは、飛び上がり、上空から脚を打ち下ろす。

「爆砕陣!!」

辺りは弾け飛び、鋼の機械にヒビが入る。

しかし、動きは停止しそうにない。

「下がれ、ホームズ!」

ミラはそう言うのと、己を光に包み突撃する。

「ハイアザースカイ!!」

光と一体となったミラに切り上げられた機械は動きを止める。

「光に弱いのか……」

そして、ミラのリリアルオーブが輝く。

「ジュード!」

「任せて!」

ミラは空中にいるジュードに光の剣をなげてよこす。

ジュードは、それを受け取るともう一機に向けて光の剣を伸ばす。

狙うは、ホームズが入れたヒビだ。

「カカラットトレイ!」

ジュードは、見事に貫き、破壊した。

飛び散る部品と共にジュードは、着地し、後ろを振り返る。

「後一機！」

残りの一機にローズは、刀を向ける。

「省略！」

そう言うのと四本の脚にそれぞれ光球が出現する。

「フォトン!!」

その言葉と共に弾けたフォトンが四本の脚を吹き飛ばす。

突然支えを失った機械は地面に落ちる。

脚を失っても鋼の機械は、しぶとくローズに照準を合わせようとする。

「虎牙破斬!!」

黒匣^{ジン}が発動するより早く、アルヴィンが大剣で打ち上げ、斬りおろした。

元々ボロボロだった機械は、遂に鉄くずへと成り果てた。

「はあ、やっと終わった……」

ホームズは、げんなりしながらそう言うのと、どこからともなく翼の羽ばたく音が聞こ

えた。

「ん？」

思わず顔を上げるとワイバーンから、ガイアスと四象刃^{フォーブ}、そして、ア・ジュール兵達
が降りてきた。

「そこまでだ！この船は我々が完全に掌握した！」

ウインガルの言葉と共にア・ジュール兵達が次々と倒していく。

「ガイアス達だけでどうにかなったんじゃ……………」

ジュードは、どっかりと腰を下ろしながらそう零す。

「……………否定できないわね……………」

ローズは、ため息をついて二刀を収める。

ガイアスは、大役を果たしたジュードと向かい合う。

ジュードは、座りながら微笑む。

ガイアスも満足気だ。

そして、直ぐに兵達に告げる。

「我々の勝利だ！」

ガイアスがそう告げると辺りに勝どきが響き渡った。

「城に戻るぞ」

ガイアスは、勝どきを聞くとそう兵達に告げた。

「ミラ様！ご無事でしたか？」

「ああ、お前以外のおかげでな」

自信満々に降り立ったイバルに呆れたように言う。

すると、イバルは、ジュードを睨んで悔しそうに歯をくいしばる。

偽者ときき下ろすジュードと差が開いていくばかりのイバル。そんなイバルからローズは、視線を外すと刀の柄に片手を乗せ、ローエン達の所へ歩いて行く。

ふと、目を向けるとジュードがミラの手を借りずに立ち上がった。

「……………私も、か」

ポツリとそう呟くとローズは、歩いて行く。

この感情が何なのか、気づいている。

そして、今の状態も理解している。

それでもこの状態を止められない。

止めたら、立ち上がれない事が自分でもわかっているのだ。

「……………城に戻る？」

空気を讀まないホームズ言葉が空中戦艦の甲板にポツリと零された。

黒いものに蓋をする

「ウインガル、出発までは？」

城に戻った一行は、謁見の間にいた。

「兵達が船の掌握の為に動いているので、数刻はかかるかと」
ジュードは、それを聞くとミラに話しかける。

「まだ、時間がかかるみたいだね」

ミラは考えるように腕を組む。

「ふむ……………ならば、我々も少し休むとしよう」

そう言つて後ろを見る。

「ホームズもあんなんだしな」

視線を向けた先には、青い顔をして横になっているホームズがいた。

「づー……………気持ち悪い……………」

レイアとの共鳴で目を回していたホームズを襲った空中戦艦の揺れ。

一発で船酔いを起こし、今はこのザマだ。

「この吐きそうで吐けない中途半端なのが、一番キツイなあ……………」

「吐かないでよ、頼むから。仮にもお城の中なんだから」

『『仮にも』って……』

レイアの言葉にジュードは、引きつり笑いをする。

ホームズは、フラフラと立ち上がると壁に手を付きながら歩き出した。

「ちよつとホームズ！どこ行くの!?!」

ジュードの言葉にホームズは、口を押さえながら答える。

「酔い止め……買ってくる。この前買ったやつ何処かに落としちゃったし……」

ホームズは、そう覇気のない声で返すとフラフラと城から出て行った。

多分ファイザード沼野だなあという声と共に。

「ホームズ、本当に船ダメだね」

レイアは、思わず苦笑いしている。

「まあ、準備が整うまで自由行動とするか」

ミラの言葉で一同は解散となった。



自由行動というわけでローズは、一人廊下に佇んでいた。

色々な事が起こりすぎて、ローズ自身上手く整理できてないのだ。けれどもそんなローズを置いて周りは目まぐるしく変化していく。

「ローズさん」

そんな事を考えていると、ローエンに声をかけられた。

ローエンの言葉にローズは、我に返る。

「ローエン？」

ローエンは、ふっと笑って答える。

「……………どうしたのよ？」

「いえ、先ほどまでラ・シユガル軍の応援を要請していました」

「流石、指揮者^{コンダクター}。つてが違うわね」

ローズは、心底感心したように頷く。

ローエンは、微笑むと直ぐに真面目な顔になる。

「少し、話をしませんか？」

「そう言つてローズを再び見る。」

「話？」

「ええ。例えば、ホームズさんの事とか」

その言葉にローズは、息を飲む。

いつか、言われるだろうとは、思っていた。

できるだけ隠していたのだが、それでも限界というものがある。

元来隠し事の苦手なローズだ。

いつ誰に聞かれたつて不思議ではない。

「よろしければ、話して頂けませんか？」

ローエンの言葉にローズは、口を開き、そして、言葉を発する前に首を振る。

「……………ごめん。話せないわ。ここで、私だけが言うのはフェアじゃないのよ」

ミラとエリーゼには、感情に任せるままに話した。

しかし、考えてみればそれはあまり好ましいとは言えない。

ホームズにとつて悪情報を与えるようなものだ。

「……………頭では分かっているのよ……………」

そう、別にホームズ親子が、アルクノアを手引きしたわけではない。

ましてや、ホームズ親子がローズの家族を殺したわけではない。

そこまで分かっててもローズは、納得出来ない。

頭では分かってても感情が納得しない。

「……………ホームズさんの事が嫌いになりましたか？」

「……………よく、分からないわ……………」

ローズは、そう今の気持ちを正直に話した。

少し前なら、顔を真っ赤にしていたところだろう。

しかし、顔を赤く染めるほどの熱はもうローズに上つてこない。

なら嫌いかと問われれば、これまたはつきりとは言えない。

「結局、何もかも中途半端なのよね……………」

そう言つてローエンを見る。

「私さ、今でも考えるのよ。マーロウさんにホームズの事を頼まなければ、マーロウさんはまだ生きてたんじゃなかった……………」

「マーロウさんは、元々助けに行くつもりでした。

ローズさんのせいでも、ホームズさんのせいでもありませんよ」

ローエンは、そう言つて指を立てる。

「マーロウさんは、最後まで信念を貫き通しました。

それをそんな風に言っでは、マールウさんに失礼ですよ」

「……………そうよね……………」

ローズは、そう眩くと刀の柄をトントンと叩く。

「……………やつぱり、私って最低だなあ……………」

ローズは、そう言っただけでまだ何か言いたげなローエンに気づかないふりをして歩き始めた。

これ以上ここにいれば、ローエンに言わなくてもいい事まで喋ってしまいそうだ。

「あ、そうだ。ありがとう、ローエン」

ローズは、振り返ってローエンにそう言っただけでその場を後にした。

「ローズさん。最後です。ジジイの戯言だと思っただけ聞いてください」

そんなローズの背中にローエンが言葉をかける。

「私達のようにならないようにして下さい。時間だけでは、解決できない事もあるのです」

ローズは、背を向けたまま立ち止まると小さく頷いた。



「あれ？ジュードとエリーゼ？」

ローズの進んだ先には、二人が話していた。

ローズの言葉に二人は振り返る。

「ローズ？みんなといたいの？」

「さつきまで、ローエンといたわ」

ジュードにローズは、そう返すと二人を見る。

「それで、二人は何の話をしていたの？」

ローズの質問にエリーゼが俯きながら答える。

「ジャオさんが、どうして、私の事を助けたのか、です」

エリーゼの言葉にローズは、目を伏せる。

そんなローズの言葉にティポがふよふよと浮きながら口を開く。

『ミラとローエンに聞いたら死んだ人の気持ちなんて知るもんか、だつてさ』

その遠慮のない言葉にエリーゼは、顔を赤くして手を振る。

「そ、そんなふうに言ってますからね！」

ティポの言葉は、エリーゼの考えている言葉だ。

慌てるのも無理はない。

「分かつてるわよ」

ローズは、やれやれという風に言う。

ジュードも困ったように笑うと、エリーゼの目線に合わせるように屈む。

「でも、死んだ人の気持ちは分からないよ」

声こそ優しい。

しかし、紡がれる言葉は何処までも厳しい。

けれども、

「その通りよね……」

ローズは、薄く笑いながらそう答える。

短いその言葉に幾重もの感情を込める。

エリーゼは、ローズの言葉を聞くとキツと目に力を込める。

「で、でも！お父さんとお母さんに聞いたことがある気がするんです！

死んだ人は精霊に生まれ変わるって」

エリーゼが力一杯紡いだ言葉を聞くとジュードは、優しく微笑む。

「なら、やっぱり、僕達が守らないとね」

ジュードの言葉にエリーゼは、ニツコリと満足そうに頷いた。

ローズは、目を見開き、驚いて声が出ない。

そんな様子に二人は気付かず、エリーゼは、納得したように頷く。

「そうか………はい、分かりました」

エリーゼは、そう言う顔あげる。

「ありがとうございます」

そのままエリーゼは、城の外へと出て行った。

ローズは、無言のまま洗面でそれを見つめる。

そんなローズを不思議に思ったジュードは、声をかける。

「ローズ？」

「………なんでもないわ」

ジュードの言葉にローズは、少し苛立ちを混ぜながら、素つ気なく返す。

「あ………そう」

ジュードは、戸惑いながら曖昧に頷く。

「じゃあ、また後で」

ローズは、そう一方的に告げるとその場を足早に離れた。



誰もいないところまで、歩くと廊下の柱にコツンと頭を当てる。

あの時のジュードを思い出すと胸がざわめく。

チクチクと痛むというの様な生易しいものではない。

どろりとヘドロのようなもので心が汚れていくというものだ。

「……………認めない……………そんな訳ない！」

とはいえ、なら、これはなんだと説明しようとしたところで出来ない。

ジュードは、頼りのないところがあった。成長しようと頑張っている、そんな男の子

筈だった。

だが、今のはどうだ？

成長しようと頑張り、僅かに変わり始めている。

エリーゼに対する発言だけで、こんなに感情が渦を巻くのだ。

あの時ミラの力を借りず立ち上がったジュードにローズが、何も感じなかったはずがない。

しかし、ローズは、この感情を認めない。

この感情だけは認めるわけにはいかない

「私は、ミラみたいになるの………だから」
ローズは、背を預けている廊下の柱を殴りつける。

「嫉妬なんかする筈がない」

胸に渦巻くドス黒い感情に蓋をするようにローズは、呟いた。

聞く人が聞けば、虚勢なことがわかるぐらい震える声で。

小粒でもピリリと辛い

「ふう、やっと収まった……」

ホームズは、雪の降るカン・バルクを歩きながら、そうこぼした。

外の澄んだ空気に当てられるうちにホームズの酔いは、すっかり冷めた。

酔いも覚め、お目当ての酔い止めも買えたので後はこのまま城を目指すだけである。だけなのだが……

「……………何の用だい、エリーゼ?」

後ろを振り返ってエリーゼに尋ねる。

さつきからずっと後をつけている気配があつたのだ。

物陰に隠れていたエリーゼは、少しずつ出てくる。

エリーゼの歩幅に合わせるようにホームズは、歩幅を小さくして歩き始める。

「……………言っておきたい事がある、です」

「おれは、別に言うことはないけどねえ」

「ローズのことです」

エリーゼの物言いにホームズは、一瞬だけ言葉に詰まった。

エリーゼは、チャンスとばかりに言葉が続ける。

「ローズから、聞きました」

そう言われれば一つしか思い当たらない。

「ああ、家族殺しのこと？」

そういうホームズにエリーゼは、頷く。

ティポは、ふよふよと浮かびながら、ホームズを睨む。

「アレは事故です。ホームズのせいじゃないです」

エリーゼは、しっかりと横を歩く向ホームズの方をむく。

そして、ティポの口からではなく、エリーゼ本人の口から言葉を発した。

ホームズは、その言葉を聞き、首を傾げる。

「もしかして、慰めてる？」

「逆です。怒ってます」

エリーゼは、ホームズを睨みつけた。

「……………なんで？」

「ホームズが平気なふりをしてるからです」

『ホームズだつてツライくせにー！どうして何も言わないんだー!!』

ホームズは、ハッと鼻で笑うと肩をすくめる。

「おれが辛いだなんて、一体いつ言ったんだい？」

エリーゼは、それを聞くとホームズの前に回り込み、目を真っ直ぐ見る。その無言の圧力にホームズは、思わず足を止め、たじろぐ。

「な、なに？」

「ホームズは、辛いことがあると、右上を見るくせがあるんです」

その言葉にホームズの目が焦点を求めて泳いだ。

すると、ティポがふよふよと浮かぶ。

『まあ、嘘なんだけどねえー』

ティポの言葉を聞きホームズは、目を見開き、直ぐにいつも通りのたれ目になってため息を吐いた。

ようは、エリーゼにハメられたのだ。

「……………凄いじゃん、エリーゼ。若干可愛げがないけど」

「負け惜しみは、見苦しいぞ、ホームズ」

ヨルの言葉にホームズは、頬をひきつらせる。

どう誤魔化そうか考えるが、どう考えてもいい案が浮かばない。

ホームズは、煙管を啜えて頬をかく。

「まあ、弱音なら散々吐いたんだよ。君のいない時にね」

いつ思い出しても情けない限りだ。

思い出すたびにホームズは、過去の自分を蹴り飛ばしたくなってくる。

『だから、エリーゼには、言わないのか？』

「そういう事」

そう言つて、エリーゼに指を向ける。

「それより、エリーゼ、君は？」

「私ですか？」

「そうだよ。君こそ、大丈夫かい？弱音ぐらいなら聞く事ができるよ」

その言葉にエリーゼは、ようやく、ホームズがジャオの事を言っているのがわかった。

エリーゼは、少しだけ動揺すると咳払いをする。

「別に。大丈夫です」

『ジュード君に励ましてもらったもん！ホームズと違って頼りなつたぞー！』

ティポの言葉にホームズは、目を見開き、それから憎まれ口を叩く事なく少しだけ優しく微笑んだ。

「それは、良かった」

そう言つてそして、エリーゼのデコを弾く。

優しく、ではない。

割とガチで。

「~~~~~!!」

額を赤くし、恨めしげに睨む。

ホームズは、それを澄んだ碧い目で受け流して歩き出した。

「憎まれ口を叩いた子へのお仕置きだよ」

そんな事をホームズが言っているとティポが飛んできて頭をかじる。

「痛いんだけど……」

ホームズは、不満気にそう言うのと剥ぎ取り、追いついてきた。エリーゼ放り投げる。

「……まあ、アレだ。ありがとね」

その憎まれ口に隠された意図に気付いたホームズは、そうお礼を言いながら人差し指で頬をかく。

エリーゼは、そんなホームズを見てニンマリと笑う。

「いいですよ」

「お礼に何か奢ってあげるよ」

『お詫びの分はー?』

「また時間のある時にね、何せ……」

ホームズは、そう言って懐に手を入れる。

「君に許してもらおうのは、かなり面倒くさいからねえ……」
そう言つてハンカチを取り出しひらひらと見せる。

エリーゼは、それを見て思わず顔を顰める。

その意地の悪い笑みとハンカチが意味する事がわからないエリーゼではない。

「本当に……いい性格してますよね、ホームズ……」

「褒めてくれてありがとう」

そう言つて屋台で売っている串焼きの肉をエリーゼに渡した。

エリーゼは、串焼きの肉を受け取りながら呆れたように笑う。

「まあ、ホームズは、それぐらいがちょうどいいのかもしれないね」

「でも、モテないぞ」

「聞こえてるよ、ヨル」

「やっぱり、直した方がいいかもしれないね」

「撤回早いな……」

情けない顔でホームズは、はあ、とため息を吐く。

「それにしても、ホームズをこんな風に育てたお母さんってどんな人だったんですか？」

ホームズは、言葉に詰まる。

別に母親の事を話すのが辛いというわけではない。

むしろ生きていた頃の母の話をするのは、ホームズにとって楽しい事だ。ただ、どんな人と聞かれるといつも言葉に詰まる。

「まあ、タチの悪い人だったよ」

「毎度毎度どうしてそう言うマイナスなものが真つ先に出てくるんですか？」

半眼でエリーゼは、ホームズに尋ねる。

ホームズは、腕を組んで考える。

言葉に詰まったホームズに変わり口を開く。

「……………確か、結婚した後こそ料理は美味かったが、結婚する前は壊滅的だったらしいぞ」

「……………ああ、なんか凄く納得です」

「ちよつと、おれを見て納得しないで」

ヨルは、エリーゼに文句を言うホームズを無視して言葉が続ける。

「料理の腕のレベルアップは結婚後の花嫁修行の成果らしい」

「……………花嫁修行って普通結婚するまえにするものじゃないのかい？」

「お前、あいつに普通なんて言葉が通じるわけないだろ」

ヨルの言葉にホームズは、頬を引きつらせる。

「……………そう言えば、昔からお菓子作りは得意だったとは言っていたけど、料理が得意だったとは一言も言つてなかつたねえ……」

ホームズは、ため息を吐きながら母親との会話を思い出していた。
エリーゼは、ポンと手を叩く。

「もしかして、ホームズもお菓子作りが得意だったりしますか？」

「そうだよ」

「お前の数少ない特技だもんな」

「一言多い」

ホームズは、ムツとした顔でヨルの髭を引つ張る。

「……………イマイチ信用できない、です」

ホームズは、額に青筋を浮かべる。

「分かった、機会があつたら作つてあげるよ」

「いえ、遠慮します」

即答で返されホームズは、情けないため息を吐いた。

少し悲しそうなのが逆に面白い。

エリーゼは、ふふと笑う。

ホームズも最初こそ不満気だったがすぐにエリーゼにつられるように笑みを浮かべ

た。

「泣いて頼んだって作ってあげないよ」

「頼まれたって食べません」

二人がそんな憎まれ口を叩いているといつの間にか空中滑車にたどり着いた。

エリーゼは、意気揚々と空中滑車に向かっていく。

しかし、ホームズは先ほどまでの元気が嘘のように無言になり渋い顔になっている。

そんなホームズを見て、エリーゼは不審そうに首を傾げ、そしてポンと手を叩く。

「……………ホームズ、乗り物酔い大丈夫ですか？」

「……………昔は大丈夫だったし……………きつと、多分大丈夫……………」

確かに空中滑車は、平気だったのだ。

しかし、ホームズは先ほどまで船酔いでダウン仕掛けていた。

もしこれで再び酔いが戻ってきたらと考えるとどうしても渋い顔にならざるを得ない。

い。

自信を持って大丈夫と言えないホームズがエリーゼは、心配になってきた。

「じゃあ、さつきは、どうやって街まで降りたんですか？」

「屋根伝いに……………」

ふらふらの状態で、そんな事をやったのだ。

『お前、バカじゃないのかー!?!』

「君達……………」

ホームズの半眼にエリーゼは、思わず目をそらした。
とはいえ、反論のしようもない。

それに母と来た時は確かに景色を楽しめたのだ。

大丈夫だろう。

「よし、乗るか!」

「いや、そんな悲壮な決意で言わなくても……………」



「お」

「話しかけるじゃあない。いま景色が見るのを集中してるんだか!!」
酔わない努力を必死で続けるホームズ。必死すぎて、なんか変な言葉使いになっているが、気にしない。

エリーゼとヨルはため息をついた。

酔い止めを飲めばいいようなものだが、ホームズは短時間に何度も薬を飲むのを嫌う。

ここで薬を使う事はしたくないのだろう。

ホームズに話しかけても仕方ないと思いつ、窓を見ると街が一面雪化粧されており、思わず息を飲んだ。

「わあー!」

そんなエリーゼの声にホームズは、エリーゼの方に顔を向ける。

窓から景色を楽しそうに見ているエリーゼを見て、ホームズは、ヨルの方を向いた。

「もしかして、おれもこんな感じだった?」

ホームズの言葉にヨルはニヤリと意地の悪い笑みを浮かべる。

「聞きたいか?」

「……………やめとく……………」

ホームズは、先に制止をかける。

しかし、エリーゼの耳に入ってしまった。

「どんなでした？ホームズ？」

目を輝かせて詰め寄るエリーゼにヨル咳払いをして話し始める。

「こいつ、最初は、ビビってなあ……………」

「ちよつと、他人が忘れた黒歴史掘り返さないで」

「ガチガチに体をこわばらせてやがってよ……………」

「ちよつと、やめてていったよね」

「最終的に涙」

「わああつ！待った！待った！」

ヨルを抑えようとするが、ヨルはびよんと軽くかわす。

下手に捕まえようとすれば、そのまま揺られて乗り物酔いの原因になる。

うかつに動けないホームズをいい事に晒されるホームズの黒歴史。

「ついでに、こいつ、苦手なものがまだあつてな……………」

「うおおおー!!やめろー!この子、他人の弱み握って楽しむような奴なんだから!!」

『エリーゼのことなんだと思ってるんだ!!』

必死にヨルの言葉をかき消すように、大声を出すホームズ。

狭い空間に響くホームズの声が鬱陶しい。

『乗り物で酔わないコツはね、誰かと賑やかなお喋りをするんだよ』

『まあ、友達のいない君じゃあ、無理かもねえ』

騒がしい空中滑車は、そんな彼らを乗せて進んでいった。

晴れ時々クルスニクの槍。ところによりアルクノア

「む？きたか」

ミラの視線の先には、ホームズとエリーゼがいた。

アルヴェインは、それを確認すると口を開く。

「全員揃ったな。それじゃあガイアスの所に行こうぜ」

「お待ちください」

そう言つてローエンが遮る。

「今回の戦い、ガイアスさんも本気の様です。

皆さんも準備だけは怠らないようにしましょう」

「……………うん、そうだね」

ジュードは、そう言つたとホームズを見る。

「買ったの、酔い止め？」

ホームズは、頷いてみせる。

「おかげさまで」

「ふむ、なら行こう」

ホームズズの準備を確認すると、ミラはそう言った。

「……………君たちは、準備とかいいのかい？」

「船に乗るのに準備がいるのは、お前だけだ」

「……………理解してくれて嬉しいよ。涙が出そうだ」

ホームズズは、半眼でそう返した。

「さて、いつも通りのホームズズの悪態が聞けた所で、行くぞー！」
寂然としないホームズズを含めた一行は、空中戦艦に向かった。



空中戦艦には、ラ・シュガル兵とア・ジュール兵の両兵が整列していた。

ホームズズは、両国の揃った兵を見て首をかしげる。

「もしかして、ローエン？」

「はい、僅かですが、私が呼び寄せました」

「流石」

ホームズの言葉にローエンは、微笑んでお辞儀をする。

「あれ？イバルもいる」

当の本人は、ジュード達の方を振り返り胸を張る。

そんなイバルを見てミラは呆れ顔だ。

「あいつ、ニアケリアでの使命を放り出してきたな……」

胸を張るイバルからジュードが目をそらすと不満げに動き出した。

ローズは、そんなイバルを見てため息を吐く。

そんな中、ウインガルに促されたガイアスが口を開く。

「かつて、我々は、リーゼ・マクシアの覇権を賭けて争った」

戦場に出る前の王の言葉は、何より重い。

「だが、この戦いは、今までのそれと一線を画するものだ。

敵の本拠地のジルニトラの場所は既に掴んである」

そこでガイアスは、更に声を張る。

「臆するな！信頼せよ！昨日までの敵を！」

握り拳を強く握りしめる。

「我らの尊厳を再びその手に！」

兵達は、一気に雄叫びをあげた。

「凄いわね……………ガイアスの言葉でここまで、士気が上がるなんて……………」
ローズの言葉にローエンが頷く。

「兵の士気をあげられるのも王の素質の一つですからね」

「……………なるほど」

ローズは、静かに頷いた。

「船を出せ」

士気が上がるのを見届けるとウインガルが指示を出す。

「お待ちください!!」

その兵の言葉にホームズは、慌てて酔い止めを飲むとした手を止める。

「リーゼ・マクシア全域に高出力魔法陣の展開を感知!!」

ホームズの脳裏にやな予感がよぎる。

「来ます!!」

その言葉と同時だった。

ミラ達を含めた船の上にいる人々が膝をついた。

ホームズも思わず頭を押さえる。

「つつ…くそ、くらくらする……………」

この前とは、明らかに威力が違う。

ヨルも同じようにへばっている。

「何……………これ……………マナが抜けるみたい……………」

「この感覚は……………」

ミラが呟く。もしかしなくてもクルスニクの槍だ。

「クルスニクの槍のマナ吸収機能を世界中に向けて使ったんだ！」

ジュードの言葉にウインガルは、齒噛みをする。

「燃料計画が始まったか……………」

「民を犠牲には、させん！リーゼ・マクシアの民は俺が！」

ガイアスは、そう言って操縦室体を向ける。

「今すぐ、船を出せ!!」



ガイアスの指示通り、船は空を進んでいた。

「どうやら、この高度では、魔法陣の影響はないようですね」

「エリーゼ、大丈夫？」

甲板にぺたんと座り込んでいるエリーゼにレイアが屈んで尋ねる。

「頭痛いです……」

目を閉じて辛そうにエリーゼは、こぼした。

「医務室行こうか」

レイアの言葉にエリーゼは、頷く。

レイアは、ジュード達の方を向く。

「じゃあ、エリーゼを医務室に連れてくるね」

そう言つて二人は医務室へと歩いて行つた。

そんな中ジュードが辺りを見回す。

「あれ？ミラは？」

「そう言えば見えないな……」

アルヴィンも同じように辺りを見回すが見つからない。

「僕、ちよつと探してくるね」

ジュードもそう言つてその場から立ち去つた。

それを見届けるとアルヴィンが口を開く。

「まあ、ホームズとローズもいないんだけどな」



医務室の扉を開けたレイアとエリーゼは、目を丸くしていた。

何しろそこには、見覚えのある茶髪のアホ毛が椅子に座って本を黙々と呼んでいたの

だ。

「ホーム………!」

「静かに」

『ズ』と言おうとするレイアの口にホームズは、人差し指を持って行き黙らせる。

「起きちやうだろう?」

そう言つて視線は、医務室のベッドで寝ているローズを向く。

最近の憂いや険しい顔が嘘のように穏やかな寝顔を浮かべている。

「ローズ、どうかしたんですか?」

「なんか、倒れてたから連れてきた」

エリーゼの質問にホームズは、ページをめくりながら答える。

元々^{ゲート}霊力野の大きなローズは、モロに影響を受けたようだ。

「にしても」

そう言つて、ホームズはローズの目の下を指差す。

「昨日、この子眠れてなかったね」

そこには、薄つすらと黒く隈が出来ていた。

寝不足の所にこのクルスニクの槍の力だ。

恐らく相当キツかつただろう。

ホームズは、そう言つてページを戻す。

先ほどから一ページも進んでいない。

「もしかして、ホームズが一番最初に見つけた？」

「いいや。二番目。一番最初は、別にいる」

そう言つてヨルを見る。

ヨルは、うんざりしたような顔をする。

「お前が探せと言つたんだろ？」

あのクルスニクの槍の作動の後、直ぐにホームズは、ヨルに探すよう言つたのだ。

「ローズが倒れること分かつてたの？」

レイアの言葉にホームズは頷く。

「あの時、一人だけ何処かに隠れようとしてたからねえ……」

そう言つてホームズは、再び本に目をやる。

全く、ローズと会話をしていなかつたホームズだが、結局ローズに気を配っていたのは、いつも通りだった様だ。

『ローズと仲直りしないのー？』

ティポの言葉にホームズは、肩をすくめる。

「うーん……まあ、難しいかもね」

ホームズは、ローズの家族の問題に目を向けさせない様にこの様に誘導してきた。今更、この状態を解消するつもりはない。

「私は、いつものホームズとローズに戻って欲しい……です」

「そう言われてもねえ」

ホームズは、エリーゼの言葉に肩をすくめる。

「まあ、アレだ。いつものことだ。女の子に嫌われるなんて、いつものことだよ」
そう言つて、眠っているローズを見る。

「それが、今回はローズだったってだけの話さ」

ホームズは、そのまま視線を二人に戻す。

「で、二人はいいのかい、休まなくて？その為に、医務室（いむつしつ）に来たんだらう？」

ホームズからその言葉出るとエリーゼは、レイアに促され渋々ローズの隣のベッドに横になる。

ホームズは、本をパタンと閉じる。

「まあ、君達も無理しないようにね」

「……………ホームズもね」

レイアの言葉に肩をすくめるとホームズは、目を閉じて眠りについた。

「ホームズの距離感は、かわってないんだよね」

そんなホームズを見てレイアは、そう言っているとヨルが頷く。

「ああ。あいつの中で、小ムスメは、昔馴染みで友人のままだ」
ヨルは口角を吊り上げる。

「だからこそ辛いだろうに、本当、馬鹿な奴だよ」

ヨルの言葉にレイアが沈んだ顔をする。

すると、ヨルの尻尾が伸びてきて、レイアの額を弾く。

「そんな顔しないで、お前もさっさと休め」

「……………そうだね」

レイアは、そう言つて椅子に腰かけようとしたその時、ウインガルが扉を開けて入ってきた。

「ウインガル？」

「何の用だ？」

ヨルの言葉を聞き流し、ウインガルはレイアの方を向く。

「ジルニトラの位置を捕捉した。全員用意しろ」

言うだけ言っていると、ウインガルは医務室から出て行つた。

レイアは、慌ててエリーゼ達を起こそうとする。

そんな中、ホームズはレイアに起こされるより前に目を開いた。

そして、寝ているローズの鼻をつまむ。

「おー起きたね」

「……………」

目覚め最悪な状態のローズは、不機嫌そうな顔でホームズを睨んでいた。そんな二人をレイアとエリーゼは、苦笑いをしてみている。

ホームズは、ローズの視線をさらりとかわし立ち上がる。

「さて、行きますか」



ホームズ達が甲板に行くときアルヴィン達は深刻な顔をしていた。

不思議そうに首を傾げるとアルヴィンが口を開く。

「ジルニトラに空中戦艦が集結しつつあるってよ」

「わあ……………聞きたくない情報だあ……………」

ホームズがげんなりしてため息を吐く。

敵が増えていけると言う情報を聞いてテンションが上がるわけがない。ホームズが肩を落としていると空が震えだした。

「な、なに？」

ジュードが音のした方を向くと光の柱が立ち上っていた。

「今のつて!!」

「クルスニクの槍みたいでした!」

ジュードにエリーゼとレイアが詰め寄る。

ウインガルは、目を鋭くする。

「光の発信源は、ジルニトラで間違いなさそうだ」

ウインガルの言葉を聞きながらミラは、顔を険しくする。

「今の光、再び断界殻シユェルに穴が………」

「でも、今回は何も来ないわね」

プレザは、不思議そうにつぶやいた。

「エレンピオスにマナを送った感じじゃなかったか？」

アルヴィンは、光の柱を差しながら言う。

ジュードは、アルヴィンの言葉に頷く。

「アルヴィンの考えは、正しかったんだね」

アルヴェインは、思わず肩をすくめる。

「最悪な現実だけは、嘘にならないってのは皮肉だよな」
そう言いつつアルヴェインは、ホームズを見る。

ホームズは肩をすくめる。

「人生ってのは、そんなもんさ」

二人がそんな会話をしていると、アグリアは不審そうに眉をひそめ空を凝視する。
そして、突然腹を抱えて笑いだした。

「上等じゃない!!」

アグリアがそう言いつて指を指すその先には、一隻の空中戦艦が真っ直ぐに向かってきていた。

【こちらに接近する船がいるぞ！全員衝撃に備えろ!!】

イバルの声が響き渡ると同時に敵の戦艦が突撃してきた。
突如襲った衝撃に甲板の面子は、体制を崩す。

ホームズは、突撃してきた船の方を向く。

空には、あの時と同じように兵士達が空気を噴射しながらこちらの船に向かってきた。
た。

空を埋め尽くす、アルクノア。

そして、彼らは着々と甲板に降り立つ。

目の前に広がるアルクノアの軍勢を見て、ホームズは息を吐き出し、煙管をしまう。
碧い瞳に少し力を込める。

「相手してやるぜ、アルクノア……」

ホームズは、そう言って駆け出した。

寸陰を惜しめ!!

「先ずは、こいっだー！」

ホームズの足を赤い炎を纏う。

「紅蓮脚!!」

ホームズは、そのまま目の前の敵に蹴りを放った。

鎧を伝わって襲い来る熱にたまらず、兵士達は倒れる。

「よしー！」

「じゃない！後ろ!!」

ジュードの言葉に振り返ると、ホームズ目掛けて黒匣ジンを一斉に照射した。

「やべー！」

ヨルの尻尾も精霊術喰いも間に合わない。

照射された攻撃は、ホームズを捉え轟音と煙をあげる。

「ホームズ!!」

ジュードは、思わず叫ぶ。

上空を流れる風が煙を払う。

すると、そこには、青白い光の陣を発動させ静かに佇んでいるホームズがいた。「やってくれるねえ……………」

ホームズは、そう言つてアルクノアに向かつて駆け出した。

一直線に駆け出したホームズは、アルクノアの一人が構えた黒匣^{ジン}を踏み台して、そのまま顎を蹴り上げる。

そして、その勢いそのままに宙返りして着地をし、そのまま回し蹴りを放つ。

その間に再びもう一人のアルクノアがホームズに黒匣^{ジン}を構える。

「掌底破!!」

そこをジュードの掌底が捉える。

「ナイス!」

そう言つてホームズは、自身のリアル・オーブを光らせる。

「行くぜ!ジュード君!」

「わかった!」

ホームズは、上体反らし後ろにいるジュードに両手を伸ばす。

相手と組む。

そして、ホームズはそのままジュードを打ち下ろす。

「崩襲震衝!」

打ち下ろされたジュードの脚がそのままアルクノアの鎧の中に衝撃を伝える。レイアとの技と似ているが技の範囲が狭い。

だが、一人を倒す分には、威力は十分だ。

もうひとつ利点を上げるなら技を出すのに時間がかからない。

そんな事をやっているとはホームズとジュードは、囲まれてしまった。

右を見るとアルヴィンとミラとレイア。

そして、左を見るとエリーゼとローエンとローズという風に囲まれている。

「なるほど、精霊術士から潰していくつもりだねえ………」

「なんとかしないと!」

ジュードは、歯をくいしばる。

「片付きしだい行くしかないねえ」

そう言ってホームズは、長髪を後ろで束ねた昔馴染みを見る。

「ローズに任せよう」

そう言ってホームズは、ジュードに背中を合わせる。

「そんな事より、おれたちの方が危ないぜ? 何せこっちは二人だからね」

「ヨルは?」

「一匹と数えろ」

ヨルはフンと鼻を鳴らして答える。

ホームズとジュードは、軽く笑うと腰を落とす。

「剛招来!!」

二人は、赤いオーラを纏いアルクノア達に突撃した。

アルクノアの攻撃がホームズに向かって放たれる。

ホームズは、それを身体を反らし紙一重でかわす。

そして、その勢いのまま回し蹴りを放つ。

「魔神拳!!」

ジュードは、ジュードで、ホームズが攻撃をしている間に地面に拳の衝撃波を走らせ

る。

「ぐっ!!」

怯んだ隙にジュードは、距離を詰め更に追撃をする。

「三散華!!」

拳の三連撃。

そして、脚を踏み替え、

「輪舞旋風!!」

回し蹴りを放ち敵を二人倒す。

そんなジュードの背後にアルクノアが立つ。

ジュードが気付いた時には、アルクノアは武器を振りかぶっていた。

「——っ！」

腕を交差させ衝撃に備えようとしたその瞬間、

「飛んでけーっ！」

黒い影が、そのアルクノアを弾き飛ばした。

飛んできた方向を見るとホームズが、何かを投げた後だった。

折り重なって倒れているアルクノアを見て、ホームズが投げたものが、意識を失ったアルクノアだと気付いた。

そしてホームズの後ろに佇む、アルクノアに魔神拳を放つ。

ホームズは、直ぐに身体ひねって回し蹴りをぶつける。

ホームズとジュードは、互い向かって走り出す。

「ハアアアアっ!!」

二人の攻撃は、それぞれの背後の敵を倒す。

ホームズは、再びリアル・オーブを光らせる。

「ジュード!!」

「わかった!!」

ホームズは、炎を纏った脚で思い切り甲板を踏む。

「炎穿陣」

ホームズとジュードを中心として炎の陣が展開し、周りのアルクノアを焼く。しかし、敵はまだいる。

「ミュゼ!!」

ジュードに呼ばれ、ミュゼが自分の髪で蹴散らす。

そんな中ホームズの剛招来のオーラが揺らぎ始める。

「つつー!」

時間切れが近づいている。

そんなホームズにアルクノアが黒匣ジンを構える。

「ヨル!!」

「ちやうど出来たところだ」

その瞬間、黒匣ジンを構えた兵士達は、動きを止めた。

指一本動かせないのだ。

よくよく見ると兵士達にヨルの尻尾が巻きついてた。

ホームズは、ヨルの伸ばした尻尾を掴み、そのまま兵士達を引っ張り上げる。

「一本釣りじゃあつ!!」

「!!?」

突然自分達を襲った浮遊感に戸惑っている内に兵士達は、甲板に叩きつけられた。それと同時にホームズの剛招来の効果が切れた。

「ハアアツ!」

ジュードの拳が炸裂し、アルクノアをまた一人倒す。

着実に二人はアルクノアを倒していた。

しかし、いつこうに減る気配がない。

「どうするんだい!!?これ!!?キリがないよ!」

大部分は、リーゼ・マクシア兵が相手をしているとは言え、キツイことになりはな
い。

「船首!構わん!このままジルニトラに突撃しろ!!」

ガイアスがそう指示を出した瞬間、船首に砲撃が放たれる。

「おい!マジか!」

ホームズが驚いている間に船は、ゆっくりとジルニトラに向かって降下していく。

「うおっ!落ちてる!!」

「いや、違う!降りてるんだ」

焦ったホームズにジュードは、そう返す。

墜落でないことはわかった。

しかし、敵の艦隊は、砲撃を続けている。

「イバル!!どうにかしたまえ!!」

【言われなくてもやっている!!】

砲撃は、確かにこちらの艦からも放たれている。

しかし、当たらない。

「どうしろってんだ!!」

「せめて、アルクノアか砲弾どちらかをどうにかできればいいんだけど……」

その瞬間、光の砲撃がローズから放たれた。

轟音とともにそれは、確かに砲台を打ち壊した。



「やってみるものね」

ローズは、そう言つて刀を構える。

今の精霊術を見て、ローズを脅威と判断したアルクノアが襲いかかる。

「イバル!!後どれくらい!」

【正確なところは、分からんが、かかって五分だ!!】

イバルの言葉を聞くとローズは、刀でアルクノアを切り伏せる。

「五分ね……………」

戦闘で五分は長い。

守りに入った場合は、特に長い。

「ローズさん。三分稼いでくれませんか?」

「三分?」

ローエンの言葉にローズが首をかしげる。

「ええ。エリーゼさんと合わせてそこまで稼いで貰えれば、どうにか……………」

エリーゼも同じように頷いている。

「わかった……………」

ローズは、刀に火を纏う。

「紅蓮剣」

刀の火がアルクノアに襲いかかる。

「グアアアツ!!」

のたうち回るアルクノアに一瞥をするとローエンとエリーゼの方を向く。

「エリーゼ! ローエン! 任せなさい!」

「わかりました」

『頼んだぞー!!』

ローズは、両刀をだらりとぶら下げる。

(この量を捌くなら強さより速さ……だったら……)

ローズは、棍を扱う女の子の姿を思い浮かべる。

「ぱっぱとなさい!! クイツクネス!!」

ローズに光が纏う。

「行くわよ」

ローズは、強く甲板を打ち鳴らした。

目の前の敵を切り伏せるとそして、そのまま振り返り刀を振るう。

そして、エリーゼに向かって黒匣ジンを構えているアルクノアが目に入る。

「魔神剣・双牙!!」

地を走る二つの剣戟が、アルクノアを倒す。

ローズは、剣戟を放つと同時に今度は、ローエンに向かって駆け出す。

駆け出した先のローエンは、今まさに武器を振り下ろされようとしていた。

(勝った!!)

そうアルクノアが確信した瞬間、一陣の風とともに長髪のとおり目の女が現れた。

「馬鹿な！アレだけ距離があつたの……」

「獅子戦哮!!」

アルクノアの言い切る前に獅子を模る鬨気が食らいつき、吹き飛ばした。

そして、ローエンの後ろに周り、エリーゼに近づく敵に刀を構える。

「魔神剣・焰!!」

炎の剣撃がアルクノアを襲う。

エリーゼを守りきったローズに今度は、アルクノアが襲いかかった。

「ぐっ!」

ローズは、左右から襲い来るアルクノアをそれぞれ両刀で受ける。

両側の力が強く動けない。

(———っ!———ここで時間を食ってる場合じゃない!)

「省略!」

そう言つて光球を自分の腹の前に作り出す。

「フォトン!!」

そして、光球で自身を弾き飛ばした。
アルクノア達も突然の事に驚いた。

「——っ！」

ローズは、腹部に走る痛みをどうにか飲み込むと距離を詰め一人を斬り伏せる。

「もう一人!!」

そう言うと自身に炎が纏う。

「鳳凰天駆!!」

鳳凰となり、アルクノアを上空に切り上げる。

「イバル!後何分?」

【三分だ!!そんな事聞くな!!】

(二分経った……つまり……)

その時、ローズの鼻先を銃弾が掠めた。

ローズは、その方向を睨むと剣劇を飛ばす。

「蒼破・追蓮!!」

(後一分!!)



「ジュード！援護に行くよ！」

ホームズは、アルクノアを蹴り飛ばす。

「そうしたいのは、山々だけど！」

ジュードは、相手に跨り相手を一撃の元打ち倒す。

そんなジュードの後ろにアルクノアが立つ。

そのアルクノアをホームズは、両足で挟み地面に叩きつける。

ジュードは、立ち上がりホームズと背中合わせに立つ。

目の前に立ちふさがる敵にホームズは、歯ぎしりをする。

このアルクノア達の黒い壁を突破するのは、それだけで至難の技だ。

精霊術がないと切り抜けるのは、無理な状況。

だが、精霊術の援護をする為には、この壁を突破しなければならない。

アルヴィン達の方を見ても辿り着くのに時間がかかりそうだ。

「ヨル！後何分？」

ヨルは、ホームズの懐から懐中時計を取り出す。

「後……………」

【三分だ！そんな事聞くな!!】

イバルの声が響き渡った。

「なら、後一分か」

「……………後一分？何で？」

「ローエンが三分稼ぐよう小ムスメに指示をしていた」

ヨルは、耳をピクピクと動かしながらそう答えた。

ヨルの言葉にホームズは、考える。

ローエンの言う三分、それは、精霊術の発動までの時間だ。

「ヨル…………アルヴェイン達の方に行つて、残り三十秒で、こちらの援護に来るよう言つて

おくれ」

ホームズは、そう言つて懐中時計を持たせる。

ヨルは、それを受け取るとアルクノアの合間を縫つてアルヴェインの所に行く。

ホームズは、それを見届ける背後にいるジュードに言う。

「ジュード！三十秒だけ踏ん張るぞ！」

「何を企んでいるか分からないけど、わかつた!!」

そう言つて両手を合わせる。

「ミュゼ!!」

「仰せのままに！」

現れたミュゼは、アルクノアを蹴散らした。

桃栗三年策三分

「というわけだ。残り二十五秒でここを突破しろ」

ヨルは、レイアの肩に乗り時計を見せる。

「おい、レイア。おたくの友人どうにかなんないの？」

レイアは、苦笑いで返す。

「仕方ない。ホームズの無茶振りに答えるでしょう」

ミラはそう言つて片手剣に風を纏う。

「ウインドカッター！」

風の刃がアルクノアに襲いかかる。

「ヨル！ホームズにやってるあの黒い球わたしたちにも出来ないの？」

「出来たらとづくにやっている！」

そう言つてヨルが尻尾でアルクノアを引つ掛ける。

倒れた兵士にアルヴェインの銃弾が打ち込まれる。

「三散華・追蓮!!」

四連撃をそれぞれ兵士に一撃ずつ加え四人倒す。

「レインバレット!!」

アルヴィンが銃弾を上空に打ち上げる。

「ついでだ! 虎牙破斬!!」

目の前の敵を切り上げ、そして、切り落とす。

地面に落とされた瞬間弾丸が雨のように降り注いだ。

突然の上空からの攻撃に敵が怯んだ。

「今だ!」

ヨルの声とともに三人は、一斉にホームズ達に向かって走り出した。

その三人を追撃しようとアルクノアが追ってくる。

「ちっ!」

「いいから走れ! 後十五秒だ」

ヨルの尻尾がアルクノアを絡め取り動きを殺す。

「見えた! ホームズとジュードだ!」

レイアの言葉に三人は更に足を早める。

しかし、それをアルクノアが行く手を阻む。

「魔神剣!!」

(後五秒!)

ミラとアルヴェインの魔神剣がアルクノアを弾き飛ばす。僅かにヒビを入れたその隙間にレイア、アルヴェイン、ミラは潜り込んだ。



「来たぞー！」

ヨルの声に振り返るとそこには壁を潜り抜けてやってきた、アルヴェイン、レイア、ミラが走ってきていた。

「アルヴェイン！援護したまえ！」

そう言つてホームズは、リアル・オーブを光らせる。

「ジュード！」

「わかった!!」

ジュードは、ホームズに向かって走り、そしてホームズの足を踏み台にする。

「飛天翔星駆!!」

ホームズは、そのままジュードを打ち上げた。

「そういうことか!」

天高く打ち上がったジュードを上空のアルクノアが狙う。

それをアルヴィンが片っ端から撃ち抜く。

それでも撃ち漏らした敵は、ミラのウインドカッターが襲う。

下から狙う敵は、ホームズとレイアが倒していく。

そう、甲板を走り抜けて辿り着くことははつきり言つて無理だ。

なら、上空を飛ばばいい。

ただそこで問題になつてくるのが、身動きの取れない空中にいるジュードの援護だ。

ホームズにそんな距離のある技はない。なら精霊術をと思つてもそもそもその援護をしているので、彼らの力はアテには出来ない。

そこで考え付いたのが、アルヴィンの銃だ。

銃なら、いくらでも援護が出来る。

だが、宙を舞うジュードを援護している間、アルヴィンが無防備になる。

「うるああ!!」

アルヴィンに狙いを定めていたアルクノアをホームズが蹴り飛ばした。

「その為にも君たちを呼んだんだよ」

そうやってジュードを援護しているミラを見る。

「ま、ミラもあんな事が出来るとは思わなかったなあ……」
ホームズとレイアは、そのままアルクノアを倒していった。
援護を得たジュードは、エリーゼ達の元へと降り立った。



「ジュード!?!」

突然天から降ってきたジュードにローズは、ポカンと口を開けている。

「文句も回答も後回しにするよ、後三十秒を切った」

そう言ってジュードは、向かってくるアルクノアの顔面を殴りつける。

そして、そのまま回し蹴りを放つ。

「輪舞旋風!!」

ローエンに近づこうとした敵は、物の見事に蹴り飛ばされた。

ローズは、最初こそ戸惑ったが、直ぐに刀を揃える。

「円閃牙!!」

周りのアルクノアを一蹴する。

その瞬間ローズの体にまとわりついていた光が消えた。

(ちっ!クイックネスが解けた!!)

そして、そのままエリーゼに黒匣ジンを向ける敵に斬りかかる。

それを狙っていたかのように今度は、別のアルクノアがローズに襲いかかった。

「くっ!」

ローズは、それを刀で受ける。

そして、もう片方の刀を握った手で相手を殴りつけた。

「ぐっ!」

殴られた鼻を抑えているアルクノアを前にローズは、刀を持った手を合わせる。

「獅子戦哮・氷牙！」

冷気の獅子で氷漬けにし、吹き飛ばす。

「紅蓮剣!!」

そのまま振り返りざまにローズは、炎纏った刀で先ほどの黒匣ツッを構えたアルクノアを斬り伏せる。

次の敵を探そうとすると辺りを一瞬見回すと別のアルクノアがエリーゼに襲いかかろうとしていた。

距離のせいで蒼破・追蓮も魔神剣も届くのに時間がかかる。

ローズは、急いで駆け出す。

「マズイ!!」

（魔神拳じゃ間に合わない!!）

二人が歯噛みをした時、

「誰でもいい!道を作りたまえ!!」

ホームズの声が聞こえた。

突然の事に文句も何もかも二人は、飲み込んでそれぞれの武器を構える。

「剛・魔神剣!」

「ミュゼ!!」

二人の攻撃により敵は吹き飛び誰もいない空白の道が出来る。

そこをミラ、レイア、ホームズ、アルヴィンの四人が走り抜けた。

「アルヴィン!!」

「分かってるって!!」

アルヴィンは、エリーゼに狙いを構えていたアルクノアを銃で撃ち抜いた。

「五」

レイアは、棍を振るいローエンに襲いかかろうとしていたアルクノアを上空に築き上げた。

「四」

ミラはミュゼを出したばかりで背後に隙のあるジュードに襲い掛かるアルクノアを斬り伏せる。

「三」

ホームズは、ローズの背後にいたアルクノアの脳天に踵落としを食らわせる。
「二」

ジュードは、目の前で自分に振り下ろされる武器をかわし敵に裏拳を放つ。
「二」

ローズは、ホームズを除け、ホームズの後ろにいる敵を斬り伏せる。
「零」

ヨルは、ニヤリと笑う。

「ローエン！ジャリ！！」

「お任せをー！」

ヨルの言葉にローエンが答える。

そして、ローエンより先にエリーゼの精霊術が完成する。

「『ブラック・ガイド！！』」

その言葉と共に墮天使が出現し手に持った鎌でオルダ宮で見せた時より遥かに広範の敵を一掃した。

突然の攻撃に戸惑うアルクノアにローエンが追い打ちをかける。

「タイダルウェイブ!!」

ローエン達を中心とし、巨大な渦潮が甲板を覆った。

巻き込まれたアルクノア達はあるものは意識を失い、またあるものは船から叩き落された。

そして、渦潮が止んだ時、アルクノアは誰一人として甲板に立っていないかった。

「や、やった!!」

「まだだよ、レイア」

ジュードは、そう言って自分達の船に降りてくる敵を指差す。

「まあでも、あと二分なら、どうにでもなるだろう?」

【おいお前達! 聞いて驚け! 何があつたかしらんが、三十秒でジルニトラに辿り着くぞ!!】

そんなホームズズの言葉をかき消すようにイバルの声が響いた。

ヨルは、ローエンを見る。

「お前の精霊術の水が重くて、とかなか？」

「かもしれないね」

ヨルの言葉にローエンは、そう微笑んで答える。

アルヴィンは、ホームズズの肩をポンと叩く。

「二つの所に俺たちを集めるとはね、やるじゃねーの」

ホームズズは、アルヴィンのほめ言葉に肩をすくめる。

「まあ、アレだ。君達が咄嗟のおれの判断に従ってくれるかは、賭けだったんだけど、上手く行って良かったよ」

「それにしちゃ、色々時間がギリギリだったよね……………」

ため息と共にその言葉を繋いだのはレイアだ。

三十秒で合流させたり、敵陣真つ只中に突撃させたりとなかなかの無茶振りだ。レイアの言葉にホームズは、キョトンとした顔をする。

「でも君達なら出来るだろう?」

当たり前のように紡がれた言葉に一行呆れて頭を押さえる。

「あ、あれ? おれなんか変なこと言った?」

「ううん。別に」

ジュードは、笑って答えた。

いや、ジュードだけではない。

他の面子も笑っている。あのローズもだ。

ホームズは、そんな面子を見て首を傾げる。

「変なの」

『『お前が言うな』』

ミラ達の心が一つとなった言葉が共に空中戦艦に響いた。

ローズは、それに参加せずやれやれとため息を吐いていた。

空中戦艦は、イバルの言った通り三十秒後に着水し、辿り着いた。

ホームズ達の船出は、迷うことなくエレピオスとリーゼ・マクシアの戦いへと突き進んでいった。

ジルニトラ

呉越同艦

「どわあっ！」

ホームズは、着水した衝撃に思わずよろめいた。

目の前にはジルニトラ。

そこにジュードが飛び込んでいく。

ジルニトラの甲板には黒匣ジンを構えたアルクノアがずらりと並んでいる。

「——っ！」

「ウインドカッター！」

思わず身構えたジュードの背後からミラがウインドカッターを放つ。

そして、そのままジュードの隣に降り立つ。

それに続くようにホームズ達もジルニトラに降り立った。

「おい！」

ヨルの言葉に顔を上げると別の空中戦艦からアルクノアが降りてきていた。

ホームズ達が載っていた空中戦艦から攻撃を仕掛けるが、それでも減る気配がない。

ジルニトラに降り立った二人がホームズ達に襲いかかる。ホームズは、向かってくる二人のアルクノアの顔面を掴むとそのまま甲板に叩きつけた。

甲板が凹む程の衝撃に、フルフェイスの鎧の二人は、気絶した。しかし、敵はまだ降りてくる。

「ああ、もう！ゴチャゴチャとうるさいっ！」

ミュゼは、鬱陶しそうにそう言うとそのまま上空に上がっていき、手のひらの上に球体を作る。

ヨルがヒゲをピクリと動かす。

（あれは……………）

手のひらの上に現れた球体は、やがて膨らみそして、空中戦艦を閉じ込めた。更にそれだけでは終わらない。

膨れ上がった球体は、今度は元の大きさに縮んでいき、船を潰した。

「おいおい、マジかい」

ホームズは、そのミュゼの強さにそうもならずと半眼になる。

「どういうか、ミュゼ？それぐらいの事ができるならもつと初めからやってくれないかい？」

「あら？これは、ジュードの使役のおかげなのよ？」

小首を傾げてふふと笑う。

「ジュードが使役してくれたおかげで私にも力が戻ってきたのよ」

とても穏やかに笑われてしまい、ホームズは言葉がない。

「凄まじい力だな」

「流石ミラのお姉さん！」

戦慄しているミラを他所にレイアは、感心しきつてそう言う。

「頼もしいです」

エリーゼとティポはニコニコと笑いながらそう言った。

ホームズは、そんな二人を見て倒れているアルクノアを見る。

「おれも頑張ったんだけどなあ……」

「ホームズの場合、いつ怪我をするかって考えると不安で不安で……」

ジュードは、はははと乾いた笑いで返す。

「まあ、賭けてもいいが、今回も無傷じゃ済まんぞ」

「だよね……」

ヨルの言葉にジュードはため息を吐く。

ホームズは、そんな彼等を見て半眼を向ける。

「あつそう。そこまで言うんなら、見せてやる！今回、おれは無傷で切り抜けてみせる！！」

「ホームズ、頭になんかついてるけど」

ホームズの頭には、タイプがかじりついていた。

血が一筋流れる。

「……………」

「早速、終わったけど」

ジュードの冷静な突っ込みが甲板に染み渡る。

ホームズは、無言でタイプを剥がすとエリーゼの顔に投げる。

「何するんですか！」

「そりゃあ、こつちのセリフだ！！」

『デコピンのお返しだぁー！！』

十二歳と同レベルの喧嘩をするホームズを他所にミュゼは、ミラの方を向く。

「私はここに残って皆さんに力をお貸しします」

「……………どういうつもりだ？」

ミラがミュゼに不思議そうに尋ねるとミュゼは軽く微笑む。

「ここが落とされたら終わりでしょう？」

「まあ、そうよね。援軍なんてこられたらたまったもじやないわ」
ローズの言葉にミュゼは、頷きジュードを見る。

「ジュード、ご無事で」

そう言うのと今度はミラに視線を向ける。

「あなたもよ、ミラ。忘れないで、あなたはマクスウエルなのよ」

ミュゼは、そう言うのと空へと飛んで行った。

顔を伏せているミラにローエンが声をかける。

「時間がありません。敵の増援を防いでいる、今が好機です」

「……………なら、ここは二手に分かれた方が良さそうだ」

ミラの言葉にガイアスが歩き出し、ジュードを横目で見る。

「わかっているよガイアス。僕のなすべきことを忘れるな、でしょ？」

ジュードの言葉を聞くとガイアスは止めていた足を進める。

「奴らの企みここで必ず阻止する！目標はジランド、そしてクルスニクの槍だ」

ガイアスがそう言い切るとイバルが空から降りてきた。

「ゲツ……」

露骨にヨルは嫌そうな顔をする。

その声にホームズは、エリーゼと諍いを一旦止めヨルの視線の先を見る。

するとホームズもヨルと同じ顔をしてため息を吐く。

そんなヨルに構わずイバルは、着地の姿勢から立ち上がる。

「おれも手を貸しましょう！ミラ様！」

「お前、まだいたのかよ」

『邪魔だからこつちくんなー！』

アルヴィンとティポの言葉にイバルは、胸を反らして笑う。

「はっはっは。当然だ。俺はガイアスにつこう」

尊大な態度のイバルにガイアスたちは顔色を変えずにイバルを品定めする。

「では、ジャオの抜けた穴を埋めてもらおう」

「余裕」

ウインガルの言葉にイバルは更にニンマリと笑い指をピシツと突き出す。

そんなイバルをガイアスたちは無言で睨む。

「よ、よゆうだ」

流石に地雷を踏んだことに気がついたのだろう。

イバルから余裕が消えた。

「行くぞー！」

ガイアスの言葉に四象刃^{フォーエッジ}の三人が歩みを進める。

「貴様には、負けんぞ！ニセモノ！」

「早く来なさい、おバカさん」

「無礼な奴だ！だが許そう！」

余計なことを言っているイバルをプレザが黙らせていた。

そんなイバルをホームズはじとつと湿度の高い目で見た後ミラの方を向く。

「……………あれ、本当に巫女？」

「まあ、無能な奴ではないのだがな」

ミラは、ため息が止まらない。

そんな中プレザが足を止めアルヴィンを見る。

「アル…………」

「なんだよ」

不機嫌さを隠すことなくアルヴィンは、即答する。

「……………死なないで」

プレザは、返事も聞かずガイアス達についていった。

「アルヴィン？」

ローズがそんなアルヴィンを不思議そうに見ている。

「どうした？ローズ？」

アルヴェインの質問にローズは、肩をすくめる。

「いや。女の人相手に言い方キツイなと思って、アルヴェインらしくないわね」

「……………おたくもホームズと話さないのな。らしくないんじゃないの？」

ローズは、目を見開いて思わずうつつむく。

「……………貴方には、関係ないわ」

「そう言うこつた」

アルヴェインは、肩をすくめる。

「私達も行くぞ」

ミラの言葉に一同は、続いていった。



「ジルニトラ……………ジルニトラ……………うーん……………」

「どうしかしたのですか？ホームズさん？」

歩きながらブツブツと繰り返すホームズにローエンは、不思議そうに尋ねる。

「いやね、実は何処かで聞いたことがあるんだよ……………」

「ジルニトラを？」

「うん。どーこだったけなあ…………絶対聞いたことあるんだけどなあ……………」

緊張感のない声を上げながら首を捻るホームズは、扉を潜り抜けた。

「いたっ!」

そんなことをしているとアルヴェインの背中にぶつかつた。

「急に止まらないでくれよ……………」

「なら真つ直ぐ進んでいくか?」

そう言つてアルヴェインは、正面を指差す。

そこにはアルクノア達が武器を構えて佇んでいた。

ホームズは、アルヴェインの言葉に肩をすくめる。

「お望みとあらば」

そう言うのと腰を少し落とし、一気に駆け出した。

地面を滑る様にポンチヨをはためかせ、駆けるホームズ。

そんなホームズにアルクノアの一人が合わせるように巨大な爪の様な籠手を構える。

カウンターを狙っているのが見て取れる。

ホームズは、アルクノアの籠手のギリギリ間合いの外で両手を地面に着く。そして、それをバネにし、前方宙返りをする。

そのまま突っ込んでくるだけだと思っていたアルクノアの籠手は、虚しく空を切る。そんなアルクノアの脳天にホームズの宙返りの遠心力と重力を乗せたホームズの踵が落とされる。

「ローエン!!」

「お任せを」

二人のリリアルオーブが輝き、アルクノアの一人を巨大な水泡が包みこみ宙に浮かせる。

「ヨル!!」

「つたくー!」

ヨルは巨大な生首となりジャンプをしようとするホームズとタイミングを合わせて更にホームズを高く飛ばす。

ホームズは、真っ直ぐに足を掲げそのまま水泡に向かって打ち下ろす。

「蒼華月瀑封!!」

水泡地面に叩き落されたアルクノアは、そのまま意識を失い、割れた水泡は、辺りを巻き込んだ。

水泡の攻撃から逃れたアルクノアは、遅れて着地したホームズに背後から襲いかかった。

「私をお忘れ？」

しかし、それをローズの二刀が防いだ。

アルクノアは、更に力を入れる。

ローズを女と理解し力勝負を仕掛けてきた。

その目論見が分からないローズではない。

ローズは、俯いたままジリジリと後ろに下がる。

「ローズー！」

加勢に駆けつけようとするレイアとジュードの前にホームズが出て止める。

「ほっときなつて」

「なんで!？」

「力勝負じゃ不利だよ！」

「そうだねえ……………」

幼馴染みコンビに攻められてホームズは、ため息を吐く。

「相手の方が」

ローズは、一瞬だけ上体だけ後ろに引く。

相手は、それにつられるままに前のめりになる。

そこをローズは、一気に押し返した。

支えを失ったところにローズの体当たりをくらいバランスを失うアルクノア。

ローズは、それを待っていた。

「獅子戦哮……………」

ローズは、両手を合わせる。

アルクノアの身体が地面に届く前にローズは、技の名を叫ぶ。

「……………氷牙!!!」

文字通りの氷を纏って獅子はアルクノアに食らいついた。

食らい付かれたアルクノアは、そのまま地面に叩きつけられ気を失った。

「ね？」

ホームズは、煙管を啜えながら指をさす。

流れる様な体当たりにはレイアとジユードは、ぽかんと口を開けている。側で見ていたエリーゼが納得したように呟く。

「そういえば、ローズの先生は、マーロウさんでしたね」

『ホームズよりも強かったよねー！』

単純な話一級品との力勝負なら嫌という程やっているのだ。

今更、雑魚程度に挑まれた力勝負で遅れなど取らない。

(本当にローズのことよく分かってるよね)

レイアは、思わず頬が緩みそうになる。

だが、今のホームズとローズのことを思うと少しだけ悲しくなる。そんな百面相を繰り広げるレイアをホームズは怪訝そうに見る。

「……………どうしたんだい？君、気持ち悪いよ」

「……………ホームズさま、そういうとこ本当に残念だよね」

レイアの本気でドン引きした表情にホームズは、こめかみを引きつらせる。

「ねえ……………その顔本気で止めて。男の子は、そういうの弱いんだから」

胸がキュンどころか、ぎゅつと握りつぶされる感覚に近い。

そんな二人に構わずローズは、ふうつと一息をついて歩みを進める。

すると、カンという音が聞こえる。不思議に思つて下を向くと小さなボタンが無数にあり、小さな棒が伸びている物体を手取る。

「何、これ？」

「いいもの拾つたな」

アルヴィンは、そう言つてローズから謎の機械を受け取る。

「これ、相当使えるぜ？」

ニヤリとアルヴィンは、笑いながらそう言つた。

リーゼ・マクシアの逆襲劇は、まだ始まったばかりだ。

灯台下真つ暗

「通信機って言うんだ」

不思議そうな顔をしているローズから通信機を借りアルヴィンがスイッチを押す。

「味方と連絡を取るのに使うんだ」

【船内の侵入者を一名確保！至急応援頼む】

通信機から流れた声に一同は口をぽかんと開けている。

『すげー。声出てる』

「お前が言うな」

「君もね」

ヨルの突っ込みにホームズは、半眼で切り捨てる。

そんな面々に一同は頬をひきつらせる。

【くっ……貴様……にをする！離……俺を……れだと思っっている!!】

スピーカーの音声は止まらず何処かで聞いたような声が聞こえてきた。

「これって……」

ホームズは、自分の頬が引きつるのを感じていた。

【くそー……また……いつに……負ける……か!?!】

「ミラ?」

「知らん」

困ったようにいうホームズにミラは、ため息をつきながらそういう。

「イバル、助けに行かなくていいの?」

「すべてが終わった後でいい」

ホームズの時もそうだったようにまず優先すべきはなすべきことだ。

ミラがそういうと船に衝撃が走る。

「な、何?」

エリーゼがキョロキョロと辺りを見回す。

ミラは、悔しそうに俯く。

「また、精霊が大量に死んだ」

「クルスニクの槍を使っただってことか」

アルヴィンは、舌打ちをするように空を見上げる。

「急がないと！」

ジュードの言葉にミラは頷き、再び歩き出した。



「この先にクルスニクの槍があるんだよね」

「みたいね」

レイアの言葉にローズは、そう返す。

「槍に捕まった四大を助けなきゃ」

エリーゼが力強くさういふとティポがふよふよと浮かぶ。

『ミラの友達だもんねー』

ミラは、それを隣で聞きながらハツとした顔をする。

「そうか。四大なら私の抱える矛盾にも答えられるかもしれない」
「ブツブツと小さく呟くミラにエリーゼは、不思議そうな顔をする。」

「……ミラ？」

「!いや。なんでもない」

レイアは、両手を握りしめミラを見る。

「ミラ。ボーツとしてると置いてくからね」

ミラは、そんなレイアの物言いに目を丸くした後フツと笑う。

「言うな？」

そう言うとミラは、ニヤリと笑う。

「お前たちこそ遅れずについて来い」

「OK。やっぱりミラは、ここうでなくちや!」

レイアは、うんうんと頷きながらそう言った。

「ふーん………」

ヨルは、それを見てニヤリと笑った。

「どうしたんだい？」

「いや。別に」

「うわあ、隠し事。感じ悪い」

「お前にだけは、言われたくない」

和やかなミラ達の会話と違いギスギスした会話を続けるヨルとホームズにジュード達は頬をひきつらせる。

「あのさ、急ごうって言ったよね？」

「まあな。何せ……」

そう言つてアルヴィンは、銃弾を放つ。

放たれた銃弾は、宙を浮く黒匣ジンの機械に命中した。

「敵さんがどンドン集まつて来ちまうからな？」

「やれやれ」

ホームズは、その機械に回し蹴りを当てる。

そして、ジュードが追撃の拳を当て、敵の機械を砕く。

「ホームズ、無駄口叩いてないで行くよ」

「なんか、君も大分おれに対して遠慮がなくなってきたよね」

ホームズは、ジュードの言葉にため息を吐いて目の前の扉に手をかけた。



「うお！なんだい、これは？」

ホームズは、扉の先の光景に思わず息を飲む。

扉を抜けた先は、天井にシャンデリアがぶら下がっており一階から二階にかけて吹き抜けとなっていた。

およそ敵の本拠地としては、考えづらい豪華で煌びやかな内装だった。

「……………綺麗……………」

『お城みたーい！』

レイアとティポの言葉にローズは、不思議そうに首を傾げ、アルヴェインに尋ねる。

「ここ、本当に軍艦なの？どう見てもそうは見えないんだけど」

「そりゃあな。このジルニトラは、二十年前、この海を旅した旅客船だからな」
アルヴェインは、そう言いつつ一階につながる階段とその先の扉を見つけた。

ホームズは、ポンと手を叩く。

「ああ！そうか！わかった！」

「何が？」

レイアが首を傾げる。

「ジルニトラ！どこで見たのか、やっと思い出した！名簿だ！」

「名簿？」

ホームズは、カバンを漁ろうと思ったが、置いてきた事を思い出すと諦めて口を開く。

「母さんに渡されたんだよ、エレンピオスへの手がかりとして、『ジルニトラ』の乗客名簿を」

ホームズは、そう言ってぼんやりと辺りを見回す。

「そっか、これがあの二十年前にリーゼ・マクシアにやってきた船なのか……」

ホームズは、クルリと身体をアルヴェインに向ける。

「それで？」

「何が？」

「おれは、この船がとある実験に巻き込まれてこつちに來たつて聞いているんだけど、そのとある実験ってなんだい？」

ホームズは、彼らと合流する前にデイラックから大体の話の概要を聞いている。

しかし、細かいところまでは知らないのだ。

「クルスニクの槍の実験、オリジナルの方のな」

ホームズは、首を傾げる。

「オリジナル？」

「そ。今ある奴は、その二十年前のクルスニクの槍を真似して作られたんだ」

「にしては、色々と効力がえげつないんだけど……最初からああだったのかい？」

ホームズの問いかけにアルヴィンは、話している最中に見つけた階段へと歩みを進め、一行はそれについていく。

「まあ、こつちで色々開発したんだろ」

アルヴィンの言葉にジュードは、うつむく。

「それってやっぱり、精霊を欲しかったから？」

「……………エレンピオスは、黒匣^{ジン}とともに発達した世界だ。

黒匣^{ジン}と精霊は、文明の要なんだよ」

レイアは、アルヴィンの言葉を聞きホームズに尋ねるように目を向ける。

ホームズは肩をすくめる。

「おれも初耳。黒匣^{ジン}の溢れた世界とは聞いていたけれど、それに支えられてたなんて聞いてない」

「どうして止められないんですか？」

エレンピオスと黒匣^{ジン}の話聞き、エリーゼがアルヴィンに尋ねる。

『きつと、アルヴィンみたいに野蠻な奴らばつかなんだろー!』
ティポの言葉付きで。

しかし、そんなティポの言葉にアルヴィンは、面白そうに笑う。

「俺、野蠻か？」

「胡散臭いだけだ。ホームズといい勝負だ」

ヨルは、馬鹿にしたように言う。

ヨルの言葉にホームズは、ムツとした顔をする。

「理由なら、そこにいるだろ」

アルヴィンは、そう言ってホームズを指差す。

「^{ゲー}靈力野がないのは、何もホームズだけじゃない。

それは、エレンピオス人共通の特徴なんだ」

アルヴィンは、再び歩み進め、一階に下りる。

「だから、精靈術を使えない。マナを操るなんてマネ、俺たちには出来ないんだ」
ミラはようやく納得がいったようだ。

「それで、^{ジン}黒匣を使っていたのか？」

「そゆこと」

アルヴィンは、右手を軽く動かしそう言う。

アルヴィンの説明が終わる頃には、全員一階に辿り着いた。

ローズは、腕を組む。

「なんか、色々事情があるのね」

しみじみと言うローズにアルヴィンは、意地の悪い笑みを浮かべる。

「おや？同情した？」

「まさか。私、そこまで人間出来てないわよ」

家族を皆殺しにしたアルクノアに同情などしない。

裏の事情を知っているアルヴィンは、何も言い返す事なく、少しだけホームズに視線を向ける。

ホームズは、それに気づかないフリをして一階の扉を指差す。

「アルヴィン、これなんだい？」

ホームズの指差す扉には、赤い光の線のようなものが張り巡らされていた。

「封鎖線だな。また面倒なものを……」

アルヴィンは、近寄ってそれを確かめる。

『ホームズ。試しに通ってみてよー』

「よせ。身体弾け飛ぶぞ」

アルヴィンの忠告を聞くとホームズは、無言でティポを睨みつける。

テイポは、気まずそうに視線をそらしてふよふよ宙を浮く。

「それで、こいつはどうすればいいんだ？」

ヨルの言葉に皆が頭を抱えているとミラの持つている通信機からアルクノアの声が聞こえた。

【報告！中央部に封鎖線展開完了！

しかし、他区画の封鎖線が起動しません！】

【何！発動機の不調か!?!】

【いえ。発動機は、二つとも起動中。他の装置の故障と思われます】

【中央の封鎖線を消すわけにはいかない。何としても左右の発動機を死守しろ!】

【了解!】

そこで通信は、切れた。

「……………ナイスタイミング」

ホームズは、怪訝そうに通信機を見る。

「……………これき、通信機全部に音声か飛んでくの？なんか、こう通信する相手を指定する事とかできないのかい？」

情報ダダ漏れの通信機を前にホームズは、思わずそう呟いた。

「基本は無理だな。それに伝言ゲームやるよりは、効率がいいだろう？」

「まあ、確かに」

ホームズは、ふむと頷き、封鎖線をもう一度見る。

「にしても、元客船になって物騒なものを仕掛けているんだか……………」

ホームズは、ため息を吐く。

そんなホームズを見て、エリーゼが尋ねる。

「アルヴィンは、この船に乗ってたんですか？」

「ん？まあな。母さんとの旅行だった」

旅行とは楽しいものだ。本来なら。

だが、結果は悲惨なものだったのだ。

アルヴィンは、いつものように背中越しに言葉を告げるためどんな表情をしている

か、分らない。

一行は、そんな話をしながら別の扉を目指す。

「ところで、お前の両親はやはり商売関係か？」
アルヴィンの質問にホームズは、頷く。

「多分ね。どこに行こうとしたか知らないけどねえ……………」
ホームズは、顎に手を当てながらそう呟く。

「違う。新婚旅行だ」

そんなホームズの言葉をヨルがバツサリ切り捨てる。

「……………は？」

「いや、なんでホームズが驚いてるの……………」

ジュードの言葉にホームズは、首を傾げる。

「え？てつきりそうかと……………」

「阿呆。あいつが、一言でもそうだと言ったか？」

ホームズは、ぐるぐると頭を回して考える。

「言っていないね……………」

この十八年間ずっとそうだと思っただけにホームズは、その突然の展開についていけていなかった。

「そっか……………そうだよ。あの人だって、新婚旅行ぐらいしたよね……………」

「実の母親をなんだと思っっているんだ、お前は」

アルヴィンは、呆れながらそう言うのと封鎖線の貼られていない扉を開ける。

そこは薄暗い回路となっていた。

エリーゼがそんな中、ホームズに尋ねる。

「そう言えば、ホームズの両親の馴れ初めってどんなだったんですか？」

「え？知らない」

ノータイムで返したホームズに一同は、がくりと肩を落とす。

「なんで？」

レイアの言葉にホームズは、言いづらそうに頬をかく。

「いや、さ、そのおれの母さん父さんの墓参りに行きたびに泣いてたから、聞きづらかったんだよ……………」

その言葉に思わずレイア達は閉口した。

そうホームズの父親は母親より先に死んでいる。それが辛くなかったわけではないのだ。

墓参りに行けばその人のことを思い出し、涙が溢れていた。

出来る限りホームズの両親の話に触れないよう気をつけていたのとうっかり触れてしまい、レイアは後悔した。

その重い空気を感じたホームズは、慌てて口を開く。

「いや、まあ気にしないで！ そのいつもはとても元気な人だったから………」
「俺は知ってるぞ」

ホームズの言い訳を遮るようにヨルが口を開いた。

ホームズは、開いた口がふさがらない。

「……………なんで君が知ってるんだい？」

「あいつ、酔う度に同じ話をしてきたからな。いい加減覚えた」

何てことないふうにいるヨルにホームズは、少し不満そうだ。

「……………おれには、話さなかったのに」

「聞かれなかったから言わなかったんだよ。」

父親を知らないお前に話しても辛いだけだと思っただよ

ヨルはつまらなそうに言った。

父親の顔を知らないホームズにそれを語るのは、母親からしてみればやり辛い。

父親がいない、という事で寂しい思いをしているかもしれない息子に聞かれてもいない父の話をする事が、ルイーズには出来なかったのだ。

ホームズは、それを聞くと目を丸くし、それから寂しそうに笑う。

「そっか……聞いてあげればよかったかな……」

もうそれが叶わないことをレイアは、知っている。

ホームズは、そんなレイアの視線に気づくと慌てたようにヨルに尋ねる。

「それで、おれの母さんと父さんの馴れ初めってどんなだったんだい？」

「確か仕事場の自己紹介だったと言ってたぞ、軍だと言ってた」

「ストップ」

ホームズは、頭痛を堪えるように眉間を揉む。

「ごめんもう一度、言ってくれる？」

「自己紹介だったとさ」

「もう少し後」

「仕事場の」

「後って言ったよね？」

「軍の」

「はいそこ」

ホームズは、振り返ってレイアを見るがレイアもコクリと頷いている。

「どうやら聞き間違いではないようだ。」

「おれの母さんと父さん、軍にいたの？」

「軍と言つても憲兵みたいなものみたいだつたらしいぞ。普段は、町の巡回。不審者確保みたいなことをやっていたらしい。」

勿論有事の際は、言わずもがな、な訳だが」

キヤパを超えかけているホームズは、必死にヨルの話についていこうとする。

まあ、確かに、一介の行商人があそこまで強いというのは、確かにおかしい。

これで納得は出来る。

無理やりそう頷いていると、明るくなつたホームズに釣られてレイアが興味津々という風に尋ねる。

「それで、どんな関係だつたの？同期？同僚？それとも先輩後輩？」

ぐいと詰め寄るレイアにたじろぎながら、ヨルは首を横に振る。

「確か、教官と訓練生だつたらしい」

予想を突く返しに一同の空気は凍りついた。

「ホームズ。話についていけないんだけど……………」

「耐えてアルヴィン。おれも一緒だから」

ついていけない男性陣を他所にレイアとエリーゼは更に盛り上がる。

「先生と生徒っていうほど離れてない、でも教える立場と教えられる立場というのは、何かこう……………」

『ロマンチックー!』

「……………どこが?」

ホームズは、ローエンの方を見るがローエンも首を横に振るばかりだ。

「ふむ、だが、ホームズの母が訓練生というのは、苦勞しそうだな」

「だね。ホームズのお父さん苦勞したんだろうな……………」

レイアとミラは、言いたい放題言っているがホームズもコクリと頷く。

「あの人を教えるなんて想像もしたくないよ」

うんうんと納得している面々を見てジュードは、頬が引きつる。

「まあ、苦勞しそうですね」

仮にも軍に勤めていたローエンは、そう頷く。

そんな一行の反応を無視してヨルは、散々聞かされた自己紹介で交わされた言葉を思
い出す。

「確か、最初に教官、その次に訓練生の順番で自己紹介だったらしい」
ヨルは、そう言って言葉を続ける。

「『こんにちは。これからこの班の指導を担当することになった教官のルイーズ・ヴォ
ルマーノです。よろしく』」

『そっち（ですか）!？』

一行の全力の突っ込みがジルニトラに響き渡った。
この後、アルクノアを呼び寄せてしまい一行は少しだけ後悔した。

蛙の子はやっぱり蛙

「やっとなつた………」

左の発動機にたどり着いた時、ローズはため息をついた。

ここにたどり着くまで妙にアルクノアの数が多かったのだ。

「そりゃあ、死守するって言ってたし、仕方ないよね」

「お前らが必要以上にデカイ声出したからに決まってるだろ」

ジュードの言葉をヨルは鼻息とともに消し飛ばす。

「それよりも、これ、どうするんだい？」

ホームズは、発動機に近づき観察するのだが、何がどうなっているのかさっぱり分からない。

「アルヴィン、君分かる？」

「いや。専門外だし無理。優等生は？」

「僕も無理かな」

三人が頭を抱えているとミラがボンと手を叩く。

「ようは、停止させればいいのかさっぱり？」

ホームズは、ミラが何を言いたいかわからず首を傾げる。

「アルヴィン。それを撃ちぬけ」

「……………了解」

苦笑いと共にアルヴィンは、銃を構え発動機を撃ち抜いた。

撃ち抜かれた発動機は、完全に沈黙した。

「んじゃあ、次は右舷の発動機か？」

「だね」

引きつり笑いが止まらないホームズは、そう賛同すると右舷を指して歩き出した。



「それで、ヨル続きは？」

「はっ。」

ホームズの言葉にヨルは怪訝そうに顔をしかめる。

「だから、続きだよ。父さんと母さんの馴れ初めの。あの後母さんの自己紹介で終わってわけじゃないだろう?」

「わたしも聞きたい!」

『僕たちもー!!』

レイアとティポも便乗してきた。

そんな面々を見てジュードは、呆れ顔だ。

「あのね、ここが何処だか分かってる……」

そう言っただけで止めて貰おうとミラ達の方を見るが、どう見ても止める気はない。寧ろ聞こうとしている。

「ハア……………」

ジュードは、ため息をついて観念した。

ヨルはその面々を見ると口を開く。

「まあ、いいか。暇つぶしにはなるだろ」

「別に暇じゃないけどね」

ホームズは、後ろから近づいてくる敵を蹴り飛ばしてそう言った。



『さて、私の自己紹介はこんなところだよ。何か、質問あるかい？』

体重以外だったら答えてあげるよ』

ホームズの母、ルーズの言葉に一人手を挙げる。

『どうぞ』

『歳は幾つですか？』

『わあ、真っ先にそれを聞くんだ………』

ルーズは、呆れながらため息を一つ吐く。

『二十二歳だよ。それが？』

よく言えばキリツとした目つき、悪く言うなら、目つきの悪い男は促されるままに言葉が続ける。

『なら、教官やめて下さい』

突然の暴言にルーズは、少しだけ目を細める。

『へえ……理由は？まあ、大体予想はつくけどねえ』

表情を崩さないルーズに男は更に続ける。

『俺は十八です。俺と四つしか変わらない、しかも女を教官とは呼びたくないです』

『わあ……失礼千万だなあ……』

『別に俺個人の意見じゃないですよ。多分みんなも同じ事を考えていると思います』
そう言って班員を見ると班員の何人かは目を反らす。

『どうやら当たりのようだ。』

『つまり、アレかい？女は男に力で負けるからって事かい？』

『それと軍とは言え、憲兵程度の実力者なら俺は、教官とは認めません』
『なんで？何か恨みでも？』

『単純に憲兵が弱かったからです。俺は何回も倒しています』

自慢するでもなくただ淡々と事実を述べていくその男にルイーズは、やれやれとため息を吐きたくなつた。

女性というだけで舐められるのは、覚悟していた。

というより、ルイーズは、そこにタレ目というのが加わり年相応に見られない。

若く見られるというのは、中々女としては喜ぶべきものだが、幼く見えてしまうのは、ある意味マイナスとも言える。

『そうは言ってもねえ……教官やれつてのが、上司からの命令だし』

ルイーズは、心底困つたようにため息を吐くと目の前の不躰な質問をした男を見る。

『それでえーつと……』

ルイーズは、手元の書類をパラパラとめくり確認する。

『ベイカーは、どうすれば私を認めてくれるんだい？』

ベイカーと呼ばれた男は、立ち上がりルイーズに近づく。

『簡単です。俺より強い事を証明してください』

ルイーズは、驚いて目を丸くする。

『思ったよりも分かりやすいねえ……何がいい？組手？逮捕術？ボクシング？』

『いえ、試合ではなく、実戦です』

『実戦？』

ルイーズは、首を傾げる。

そんなルイーズに構わずベイカーは、続ける。

『実際の現場で、道場のような礼儀正しい試合なんてないでしょう？そんなまやかしの強さじゃなくて、実戦でのみ生きる本物の強さです。』

それで俺より上だと証明してください』

ルイーズは、アゴに手を当て考える。

『ふむ。思ったより簡単だね』

その言葉と共にベイカーの身体は、宙を舞った。

誰もが突然起こった出来事に開いた口がふさがらない。

全てを理解したのは、ベイカーが地面に叩きつけられた時だ。

叩きつけられたベイカーは、地面につくと同時に胃の中のモノを吐き出した。

ルイーズは、殺気や闘気も出さず、構えも取らずなんの前触れもなくベイカーの腹に渾身の一撃を決めたのだ。

腹から広がる痛みにはベイカーは、動けない。

ルイーズは、近づいていく。

『実戦じゃあ、動けなくなつたヤツの負けだ。つまり……』

そう言つてルイーズは、ベイカーの顔を踏みとても楽しそうに笑う。

腹の痛みが酷くベイカーは、声が出せない。

『君の負け、私の勝ちだ』

ルイーズは、踏みつけているベイカーの目を見てハッと馬鹿にしたように笑う。

『なんだい？その目は？これが君の望んだ実戦だぜ？』

ルイーズは、後ろを振り返り他の班員を見る。

『いいかい？実戦には、よーいどんもレディファイトも始めもないんだ』
そう言つて少しだけ踏みつける足に力を込める。

『不意打ち騙し討ち通り魔。突然始まって突然終わるなんて当たり前のように起る』

そう言つてルイーズは、バイカーの胸ぐらを掴んで立たせる。

『さて、君の望んだ実戦での決着だ。私のことを教官と認めてもらうよ』

ルイーズは、パツと手を離し支えを失つたバイカーは、そのまま地面に伏した。地に伏しながら、その透き通るような碧い目には、見間違ひのような闘志が宿つていた。

『今に………見てろ』

ルイーズは、それを見て面白そうに笑う。

『君のその綺麗な碧い目で睨まれると迫力だねえ………』

そう言つて紙を投げ捨てる。

『五分もすれば回復するはずだから、回復したらそれをやっておきたまえ』
それからとても意地の悪い笑みを浮かべる。

『私に目にももの見せたいなら、それぐらいあつさりこなすんだねえ？』



「てな感じだ……………」

ヨルの話を聞き、一行は各々頭を押さえている。

「流石という感じね」

ローズは、ため息が止まらない。

「というか、名前ルイズとベイカーって言うんだ……………」

ジュードとは、ハハハと乾いた笑い声をあげる。

ホームズは、頭の上に暗い影を作って落ち込んでいる。

「聞かないやよかった……………もう少しぐらいロマンチックなのを期待してたのに……………」

「なんだ？口に食パンくわえたのを期待してたのか？」

ヨルの馬鹿にしたような言葉にホームズは、深々とため息を吐く。そんなホームズに

エリーゼは呆れたようにため息を吐く。

「ホームズだつて他人のこと言えないです」

ローズとホームズの出会ひもこんなものだ。

いや、それでも二人の出会ひの方がまともに見える。

「にしても、本当にホームズの上位互換だよね……………」

「おれそんなに傍若無人なつもりないけど……………」

レイアの言葉にホームズは、頬を引きつらせる。

「まあ、アレだよな。ホームズを完成させると多分こうなるな」

「それ完成されてるのかい？」

アルヴィンの言葉にホームズは、怪訝そうに返す。

ミラは顎に手を当てそれから納得したように口を開く。

「おお！分かったぞ。所謂、ホームズの数倍タチの悪い奴ということだな」

『『ああ…………』』

ミラの言葉にようやくしっくり当てはまった面々は、納得したように頷く。

「……………君たちがおれの事をどう思ってるか、よく分かった」

ホームズは、吐き捨てるようにそう言う。

すっかり機嫌の悪くなったホームズにレイアは、引きつり笑いを浮かべる。

「というより、ホームズのお父さんも相当だよな」

「ああ。若干思春期特有の病氣から抜け出せていなかったというのが、ホームズ母の話だ」

「ハハハ……………」

ローズは、乾いた笑いを浮かべる。

「でもさ、ホームズのお父さん、ベイカーさんだっけ？多分弱いわけじゃないよね？」
ジュードは、こめかみに指をつけながらそう分析する。

ヨルは、こくりと頷く。

「単純にホームズの母親が強すぎたって話だ」

「まあ、母さん、見た目じゃマジで実力分かんなかったからなあ……………」

幼げな印象のせいで強く見えず、更に賢そうにも見えないルーズは、とにかく絡まれる事が多かった。

結果は、全部返り討ちだったのだが。

「それで、ホームズのお母さんとお父さんは、どうやって仲良くなったんですか？」

エリーゼは、そうヨルに尋ねる。

ヨルは少し考え込む。

「詳しく話すと長いんだよな……………あのバカ、その話をするとマジで一晩中話しやがっ

たからな……」

「そんな大ボリルームなんだ……」

「とりあえず、プロポーズと新婚旅行は、同時だったらしい」

「ごめん。君が何を言っているかマジでわからない……」

ホームズは、もう何度目かも分からないため息を吐いた。

ヨルも説明する事を諦めたようだ。ため息を吐くと尻尾を振る。

「……とにかく、仲が良くなるまでに時間がかかったらしい」

「………余裕で想像出来るよ。母さん、気に入らない相手は徹底的に叩き潰すタチ

だったからね」

そんなホームズにヨルは、ヒゲを動かしながら頷く。

「まあ。彼奴は、屈辱には屈辱で返すタイプだからな」

ベイカーは、自分より下だと思っていた女に一撃で意識を刈り取られたのだ。

これは屈辱以外の何者でもない。

「うん。疑ってなかったけど、確実にホームズのお母さんだね」

ジュードの言葉にホームズは、半眼を向ける。

「どういう意味だい………と聞きたいところだけど……」

ホームズは、そう言いながら前方を指差す。

そこには、アルクノアがずらりと並んでいた。

「時間もなさそうだし、後回しにするよ」

ホームズは、右脚を一步前に出す。

どんな話をしていようと、ここは戦場だ。

臨戦態勢は、整っている。

他の面々も武器を構える。

「待て！お前、ホームズ・ヴォルマーノだな？」

突然名前を呼ばれたホームズは、ぴたりと動きを止める。

「それが？また生け捕りにしろとでも言われたのかい？」

「違う！おれは、ビネガー。お前の母親、ルイーズ・ヴォルマーノさんに世話になったものだ！」

ホームズは、構えを解く。

アルクノアは、それを見るとホームズに歩み寄っていく。

「母さんに？」

「ああ。指導は厳しかったが、それでも我々は、感謝しているのだ。

今でも、それは、大きな借りだと思っている」

ホームズズの身体に走る緊張が消える。

「だから、今度は、我々の番なんだ。その借りを必ず返さなくては、嘘だ」

ホームズズは、その言葉を聞き、ヨルに目を向ける。

「びつくりだねえ、母さんに感謝する人がいるなんて……」

「まあ、否定はしない」

ヨルとホームズズの言葉に突っ込みを入れないジュードだが、ぐっと堪える。

「それで？」

「お前たちの味方をしたい。信じてくれないか？」

その言葉に一行は、微妙な顔をする。

エレンピオスから来た奴ら。

そんな奴らが、味方をするというのが信じられない。

何より、アルクノア達にジャオは殺され、マーロウは殺され、ローズの両親は殺され

ている。

味方をしてくれるなら、それは嬉しいことだが、感情がそれに追いつかない。

「……………まあ、いいよ。君達が味方をしてくれるなら、歓迎だよ」

そんな沈黙を無視してホームズズは、アルクノアに向き合った。

一行は、驚いて目を剥く。

「ホームズ!？」

レイアが驚いたような声をあげる。

エリーゼは、ティポをぎゅつと抱きしめる。

「信じられるんですか？」

「まあ、同じ釜の飯を食った仲になるだろうしね」

ホームズは、戯けてそう返す。

「食べたことぐらいあるだろう？」

「ああ。部隊の訓練の時に何度かある」

その言葉を聞き、ホームズはにっこりと笑う。

そんなホームズにミラが言葉をかける。

「ホームズ、お前、その言葉微妙に意味が違うぞ」

「突っ込むところそこじゃないよ」

ジュードは、そう言ってアルクノア相手に構えを解いているホームズに不満そうな目を向ける。

ホームズは、ジュードの視線に応えるように振り返る。

「まあいいじゃないか。信じてみようよ」

「もし、違った場合は？」

「その時は、おれが責任を取るさ」

ホームズは、肩をすくめてそう答える。

そう言つてアルクノアの一人ビネガーとホームズは、談笑をする。

「へえ、母さんの料理を食べたのか！身内褒めになるけれど、相当美味しいよね」

ホームズのその笑顔から紡ぎ出される言葉にアルクノアの男は頷く。

「ああ。絶品だった。訓練という悪条件でよくアレだけのものを作ったもんだと驚いたよ」

普通に談笑するホームズを見て一行は、複雑そうな顔だ。

「普通に会話してるよ」

「なんか……………納得できないなあ……………」

レイアとジュードは、そう言いながらホームズを見る。

「でも、母さん、お菓子作りは下手なんだよねえ……………」

「ああ。確かにルイーズさんは、そうだった」

エリーゼは、納得出来ないように更に首を捻る。

「甘いコーヒーは、好きなくせにな？」

突然喋つたヨルに男は驚いて頷く。

「ああ。苦いものより甘いコーヒーの方を好んでいたな」
そう頷いて答える。

「まあ、嘘なんだが」

ヨルの言葉にアルクノアの空気が凍りつく。

「あ……………ああ！そうだった。あの人は苦い飲み物が好きだった。

甘いのが好きだったのは、バイカーさんの方だった」

突然の不意打ちに思わず、早口でまくしたてる。

「まあ、それも嘘なんだが」

ヨルの言葉に今度こそ一行は、声が出ない。

「因みに言っておくと、奴にとつての甘さの基準はコーヒーの香りはするが基準だ。別名はコーヒー風味の砂糖水」

そう言つて、ヨルはホームズの肩からビネガーバカにしたように睨みつける。

「お前ら、嘘をついてるな？」

「ま、待て！コーヒーの味ぐらい別にな？」

そう言つて助けを求めるようにホームズを見る。

ホームズは、にっこりと笑顔で頷く。

「もちろん。それだけなら別に疑う理由にはならないよ」

アルクノアは、安心した瞬間、地面と天井がひっくり返った。

ミラ達の憤った顔が段々と変わっていくのを不思議に思い、首を傾げているとそのまま頭に衝撃が走る。

そして腹部から広がる衝撃に堪えられず胃の中ものを吐き出す。

アルクノアは、ようやくそこでホームズに蹴られた事に気付いた。

ホームズは、につこりと胡散臭い笑顔を浮かべていた。

「それだけならね？」

そう言ってホームズは、そのまま近くにいたアルクノアの頭を掴みそのまま別のアル

クノアに投げつけた。

これで、三人動けなくなった。

開いた口が塞がらないアルクノア、そして、マクスウェル一行。

「……………今、ノーモーションで蹴りをやった?」

レイアの言葉にジュードは、頷く。

胡散臭い笑顔が消えたホームズは、アルクノアを見る。

「母さんの料理は、確かに美味しかった。結婚した後はね?」

ホームズは、そう言っ指を立てる。

「確か、花嫁修業の成果だと言っていた。

新婚旅行とプロポーズがいつしよだった母さんの花嫁修業なんてリーゼ・マクシこっア
に来てからだ。君たちアルクノアがその修行の成果を口にするのではない。それに

……………」

ホームズは、煙管を口から外しくると回す。

「お菓子作りは、得意だった。自分で自慢してたんだから間違いない」

『やっぱりー!前に聞いた話と違うなーって思ってたんだー!!』

テイポの言葉にホームズは、パチパチと拍手を送る。

「よく覚えていたねえ。流石」

そう言つてエリーゼから、アルクノアに視線を移す。

「ああ。借りを返さなきや嘘だとかなんとか言つてたねえ……」
そこで言葉を区切つてニヤリと底意地の悪い笑みを浮かべる。

「一体、君達どんな目にあつたんだい？」

ようやく現実には追いついたアルクノアは、一斉に武器をかまえる。

ミラ達も負けじと武器をかまえる。

今にも飛びかかろうとするミラ達の前にホームズの手が現れる。

「ホームズ、何のつもりだ？」

「何のつもりだつて？先言つた通りさ」

そう言つて口に人差し指を一本あて、悪戯っぽく笑う。

「おれ一人で責任を取る」

その言葉と共にヨルが、ホームズの肩から降りる。

「ヨル?!」

エリーゼが驚いてそう言っている間にヨルはレイアの肩に乗る。

「まあ、どちらにせよ。黒匣^{ジン}相手じゃ、俺の力は使えないし、黒球もこんなとこ

ろで使うわけには行かないしな」

何て事なさそうに欠伸をする。

「尻尾は?!」

ローズの質問には、答えずヨルは鼻で笑って返す。

「なんだ? あんな目にあわされたのにホームズの心配か?」

容赦のない言葉に思わずローズは、言葉が出ない。

「死にかけたら手を貸してやるぞ、ホームズ?」

ヨルの嫌味つたらしい言葉にホームズは、これまた嫌味つたらしい笑顔で肩をすくめる。

「そりゃあ、どうも涙が出るほど嬉しいねえ」

ホームズに一斉にアルクノアが飛びかかる。

「ホームズ!!」

ミラの叫びと同時に赤い蒸気が溢れ出る。

「剛招来!!」

技名と共にアルクノアは、吹き飛ばされた。

アルクノアが散らされ、赤い蒸気の背中が現れる。

「精々、温存しておきたまえよ、ヨル」

そう言つてホームズは、強く踏み込んだ。

ポンチヨのはためく背中を見てみると、少しホームズより小柄な茶髪の長髪の女性の姿がだぶる。

それを見ると思わず目を丸くして、ヨルはフツと笑う。

「くくく、
間違いなくあいつの息子だな」

報復絶倒

「いちにい……………」

ホームズは、敵の攻撃をかわしながら考える。

「ふむ、六人か、少しキツイなあ……………」

「八人だよ」

レイアとジュードの冷めた突っ込みが聞こえた。

本人としては、ばつちり決めたつもりだっただけに気まずい。

ホームズ気まずい思いを振り払うようにそのまま目の前に迫る敵の顔面に回し蹴り放つ。

仰け反るようにアルクノアは、倒れこむ。

そして、そのままアルクノアを掴むと大上段に振りかぶり迫る敵に叩き落す。

「さて、残るは……………」

『六人だよ』

「……………わかってるよ」

ホームズは、頬を引きつらせながら、そう返す。

そんなホームズにアルクノアが、靴の黒匣ジンのスイッチを蹴りを放つ。

ホームズは、それを左腕の盾で受け流し、そのまま顔面を掴み地面に叩きつけた。

「後……五人！」

ホームズがそう構えた瞬間、アルクノアが背後からホームズを首を押さえるように羽交い締めにする。

「ぐっ!!」

振りほどこうともがくホームズ。

アルクノアもその千載一遇のチャンスを逃さないよう必死押さえる。

純粹な力勝負ならともかく、押さえるべきポイントを抑えているアルクノアをホームズは、なかなか解くことが出来ない。

「柔よく剛を制すって奴だ！」

アルクノアは、自慢気にそう言うて指示を飛ばす。

「っ———今だ!!」

羽交い締めにしたアルクノアの声と共に別のアルクノアが籠手を振りかぶる。

「ヨルっ！助けないと!!」

ローズの言葉にヨルは欠伸をして返す。

ホームズは、迫り来る籠手を前に一瞬力を抜く。

突然脱力したホームズに力を入れていたアルクノアは、バランスを崩した。ホームズは、その隙を逃さない。

両脚を地につけ、身を屈めてアルクノアを背負うと同時に首を絞める腕を掴む。

「つうおおらっ!!」

「!!」

そして、そのまま籠手を振り被るアルクノアに投げた。

「ぐっ!!」

巻き込んで体制を崩す二人を前にホームズは、後ろに下がり両脚を手すりの側面を足場にし、そこから一直線に飛び蹴りを放つ。

その素早さは、今までの瞬迅脚とは比べ物にならない。

「兔迅衝!!」

放たれた蹴りはアルクノアの二人を反対側の壁に叩きつけ、意識を刈り取った。

「後三人!!」

ホームズは、そのままダンと地面を踏み込み体重を乗せ目の前の敵を蹴りとばす。

そんなホームズの後ろからアルクノアの一人が武器を横薙ぎに振る。

ホームズは、それを屈んでかわす。

「転泡!!」

そして、下段回し蹴りを放ち相手の脚を刈り取る。

転んだ相手が立ち上がる前にホームズは、相手の脚を掴む。

「だあつらつ!!」

そして、振りかぶり最後の一人に思い切り叩きつけた。

「全部で八人……」

ホームズは、得意気な顔でジュード達の方を向く。

「どうよ」

「すごいではないか、ホームズ」

ミラの言葉にホームズは、自慢気に胸を張る。

「まあ、私ならもつと短くて済むが」

「よし、褒めてないことだけは分かった」

いつものやりとりにジュードは、苦笑いを浮かべ、一行は扉を開けた。

開かれた扉の先には、先ほどと同じ発動機が目の前にあつた。

これさえ壊せば、封鎖線は、消えジランドの元への道が開かれる。

「アルヴィン」

「了解」

ミラの言葉にアルヴィンは、発動機を撃ち抜いた。

相変わらざるの乱暴な手段にジュードは顔を引きつらせる

「……………これで、消えた筈よね？」

ローズの言葉にローエンは、頷く。

「ええ。戻ってみましょう」

一行は、その部屋を出ようと歩みを進めようとした瞬間銃弾がホームズの顔をかすめる。

「ホームズ!？」

レイアの驚いた声に構わずホームズは、床に落ちていた石を投げつけ銃を飛ばす。

アルクノア、ビネガーは銃を拾うことを早々に諦め剣を振りかぶっていた。

「っー」

思わず左腕の盾でホームズは、受け止める。

「……………やっぱりねえ」

構えなしで蹴り飛ばした時にこうなるだろうと分かっていた。

構えないということは、単純に準備がないのと同じだ。

一撃は、与えられるかもしれないが、必殺にはならない。

もつと言うなら、ルイーザの方がホームズより力は上だ。

同じことをやったホームズの方が威力が弱いのは当然だ。

「ナメるな、俺はもうヴォルマーノと名のつくものにも負ける気はない」
ギンと二人は弾かれたように距離を取る。

しかし、ビネガーが先に距離を詰める。

「お前の母のせいで、エレンピオスがどれだけ大変なことになったか！」
振られる剣の重さにホームズは、歯をくいしばる。

剣戟を受けるのに精一杯のホームズは、返答する暇がない。
そんなホームズに構わずアルクノアは、更に続ける。

「知ってるか？この精霊燃料計画」

「はあ？」

ホームズは、額に青筋を浮かべながら尋ね返す。

「本来なら、二十年もかかるはずではなかった」

ホームズは、その言葉に目を丸くする。

アルヴェインも驚いた顔をしている。

「オリジナルのクルスニクの槍さえあれば、こんなに時間がかかるはずなかったのだ」
「……………今、そつちにはないのかい？」

「ああ。貴様の両親がいらんトラップを仕掛けたせいだな」

「トラップ？」

ホームズは、そう言いながら蹴りを返す。

しかし、アルクノアは、それを紙一重でかわす。

「貴様の両親は、クルスニクの槍が発動すると同時にクルスニクの槍が崩れ去るトラップを仕掛けたのだ」

そう言ってアルクノアは、ホームズに剣を振り、ホームズと無理やり距離を開ける。

「設計図も全て消し去り、クルスニクの槍のオリジナルを壊した。」

貴様の両親のせいでエレンピオスがどれだけ終わりに近づいたと思う？」

「知った事じゃないね」

ホームズは、返事共に蹴りで返す。

ビネガーは、ホームズの蹴りを冷静に受ける。

「元々軍でも、精霊燃料計画の賛成派が殆どだったんだ！なのに！なのに！」

ビネガーは、狂ったように剣を振るい続ける。

「あいつらは、その否定派に回った！そのせいで、エレンピオスは、終わりへのカウ
ントダウンを着々と歩むことになったのだ!!」

ホームズは、その言葉を聞くと眉をひそめる。

「終わりへのカウントダウン………？どういうことだい？」

「お前………何も知らないのか!!」

最早ピネガーを突き動かす感情は、怒りなのかその他の何かなのかピネガー自身も分
からない。

「アルクノアだって、二十年間もリーゼ・マクシアに閉じ込められることもなかった
！」

アルクノアの目に強い敵意が宿る。

「どう考えても、エレンピオスが生き残るにはそれしか方法がないんだ！」

なのに、奴らは自分達の為にリーゼ・マクシアを犠牲に出来ないなんて綺麗事を抜か
してエレンピオスを破滅に追い込んだんだ！」

アルクノアの強い憤怒と共に振るわれる剣をホームズは、盾で受け流す。

「分かるか!?! エレンピオスは、もう綺麗事では、抜け出せないとこまで来ているんだ
！」

軍の上層部もそれが分かっているから、それに賛成したんだ！」

ホームズは、その言葉を聞きながら蹴りを放つ。しかし相手もそれを受け流す。

「なのにお前の両親は、それに反対した！こちらに閉じ込められたと言うのに！奴の夫であるベイカーは、死んだというのに！ルイーズは、アルクノアに参加することを最後まで拒んだ！」

激昂するアルクノアの力は、徐々に上がっていく。

「あいつさえ参加すれば、もつと計画は早まったというのに！」

何度も勧誘したが、奴はその度にこう言いやがった。

『悪いけど、黒匣ジンを使う組織に属するつもりはない』ってな」

そう言つてアルクノアは、渾身の力を込めてホームズを剣で押し返し飛ばす。

ホームズは、手すりに背中をしたたかにぶつめた。

「——っ！」

思わず息がつまる。

ホームズは、そのままずりりと腰を床に落とした。

そんなホームズに剣を向けてアルクノアは、更に言葉を続ける。

「教えてやろうか？お前の母親、隊長を務めていたが、結局隊員は、お前の父親だけだったんだぜ」

アルクノアの言葉を聞きヨルは、ふっと目を細める。

何せこの話何度も聞いたのだ。

「隊員の最低人数は、決まっているはずなのに、あいつの所には誰一人として集まらなかった」

アルクノアは、そう言う息が詰まっているホームズに剣を振るい地面に転ばせる。

「そうして、彼奴らは二人で任務に当たっていたんだ」

アルクノアは、そう言う息を再び剣を振るう。

ホームズは、つまる息を堪えてなんとか盾でいなして立ち上がる。

「そして、二人はわけのわからん綺麗事の為にエレンピオスを危機に晒した」

そう言う息で横薙ぎに剣を振るう。

「その罪、お前にも払ってもらおうぞ」

静かにしかし、有無を言わせない迫力と共にアルクノアは、剣と盾をつばぜり合いさせる。

その必死な形相のままビネガーは、ホームズに恨み事を続けた。

「……………くくくく」

ホームズは、俯きながら堪えるように笑みをこぼした。

「……………」

突然笑い出したホームズをアルクノアの怪訝そうに見る。

「くくくくくくくくくく」

「おい」

なおも笑い続けるホームズにアルクノアは、苛立っていた。

「フハハハハハハ」

「いいか加減に………」

「アーーーーーハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッ！」

ホームズは、今度こそ堪えきれなかったようで、顔を上げて腹を抱えて心底面白そうに笑い出した。

その張り裂けんばかりは、回廊にこだまし、聞いているもの背筋を凍りつかせた。

「何を笑っている!?!」

「これが笑わずにいられるか!!」

そう言ってホームズは、思い切りアルクノアを蹴り飛ばし距離を置く。

「母さんのことをそんな風に思うのがあるとは、思わなかった！そりゃあ、笑うに決まってるさ！」

そう言つてホームズは、指をさす。

「何？」

アルクノアは、訳が分からず首を傾げる。

そんなアルクノアに腹の底から意地の悪い笑みを浮かべ、ホームズは、口を開いた。

「君、ルイーズ・ヴォルマーノに嫉妬していただろう」

ホームズの言葉が回廊に静かこだまする。

一瞬本当に一瞬、アルクノアは、動きを止めた。

その反応がホームズの予測が的中していることを何よりも雄弁に物語っていた。

「まさか……ふふ、まさか母さんに嫉妬する人間がいるなんて考えもなかったよ」
ホームズは、再び笑いそうになる。

「君はおれの母さんが羨ましかつたんだ」

紡ぎ出されるホームズの言葉は、アルクノアの体にゆっくりと巻きついていく。

「多数いる賛成派、精霊燃料計画が必要なエレンピオス、リーゼ・マクシアに閉じ込められそして、支えがなくなった。」

そんな状況において、なお綺麗事を貫き通せる母さんが羨ましかったんだらう？」

「……………れ」

「綺麗事は、間違っていない。

しかし、現実の前には、何の意味も持たない。

それを間違つてないと声を張り上げ誰にも屈しなかった、そんな力を持った母さんが羨ましかった。

自分だつて貫きたかった綺麗事を

諦めてしまった綺麗事を

貫き通した母さんが羨ましくて妬ましくて仕方なかったんだらう？」

「……………まれ」

「そして、そんな母さんに並び立った、自分と同じ無力はずの父さんが羨ましかったんだらう？」

「……………だまれ」

「自分には、出来なかつたことを悠々とやつてしまふ母さんと父さんを見ているうちに自分の無力さを突きつけられた。そんな自分が惨めで憐れで無様で我慢出来なかつたんだらう!!」

「黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れつ！」

回廊に響き渡る絶叫と共にアルクノアは、突撃を仕掛けてきた。ホームズは、それを盾で受ける。

アルクノアは、それに構わずめちやくちやに武器を振り回す。

「そんなはずない！そんな訳がない！寧ろ俺は、ああはならないと心に決めて——」
「バカを言うんじゃない！」

ホームズは、静かにそう告げると腹に膝蹴りをする。

腹に真つ直ぐに入りアルクノアは、手を止める。

その隙にホームズは、アルクノアにアイアンクローを決める。

「ならない、じゃあない、なれないだろう？」

自分の顔に走る激痛にアルクノアは、答えられない。

そんなアルクノアに構わずホームズは、顔面を掴む手に力を込めていく。

「とりあえず、君には、この言葉をプレゼントしよう」

ホームズは、ニヤリと笑う。

「男の嫉妬は醜いぜ？」

轟音と共にホームズは、顔面から床に叩きつけた。

「まあ、偉く偏った見方だったけど、両親の事がわかって良かったよ。そこだけは、お礼を言っておくよ」

そう言つてホームズは、ミラ達の方を見る。

「さて、終わったよ」

「ああ、そうだな」

ミラは静かに頷いた。

「お前、辛くないのか？」

「いや。なんか、逆に驚いちゃったぐらいだよ。母さんなんか嫉妬する人がいるなんて思わなかったからね」

ホームズは、肩をすくめて返す。

「それよりアルヴィン、君はなんともないのかい？」

実質閉じ込められる原因を作ったのは、ホームズの両親だ。

アルヴィンは、しばらく沈黙してから口を開く。

「まあ、おたくの両親も閉じ込められたから、それでまあいいかな」

これで、おたくらの両親だけ、エレンピオスに残ったとかなら話は別だったけどな」

「怖い怖い」

ホームズは、適当にそう返すと前を進む。

ホームズの肩にヨルは、飛び乗る。

肩に乗ったヨルに視線を移すと俯くジュードとレイアがいた。

「どうしたんだい？二人とも？」

ホームズは、足を止めて振り返る。

「いや、アルクノアにも色々な人がいるんだなって」

ジュードの言葉にホームズは、首を傾げる。

「だってさ、この人だって本当は、こんな計画に反対だったんでしょ？」

なのに、これを選ばざるを得なかった……………」

「何？同情でもしているのかい？」

「……………うん」

ジュードは、ホームズの質問に頷く。

「ホームズは、そうは思わないの？」

レイアの質問にホームズは、肩をすくめる。

「別に。思わないね」

そう言って口に煙管を咥える。

「どんな経緯があろうが、それがこの人の選んだ結果だ」
ホームズは、ぷかぷかと煙管を動かす。

「……………まあでも、母さん達の味方して欲しかったなあ」
小さくホームズは、そう呟くと歩みを進める。

「ホームズ」

「なんだい、エリーゼ？」

先ほどの封鎖線が消えているか確かめる道すがらエリーゼは、ホームズに尋ねた。

「……………結局あの人は、いい人だったんですか？」

ホームズは、倒れたビネガーを無感情の目で見ると口を開く。

「いや……………哀れな人だよ」

ホームズは、短くそう返すと目的に向かって足を踏み込んだ。

逆鱗を踏む

「お、消えてる消えてる」

吹き抜けに戻ると先ほどの封鎖線は、綺麗さっぱり消えていた。

「アルヴィン、この扉を開ければすぐなの？」

「なんで、俺に聞くんだよ？ ローズ」

「だって、乗った事あるんでしょ？」

ローズの言葉にアルヴィンは、肩をすくめる。

「もう二十年も前の話だよ。覚えてないって」

ホームズは、アルヴィンの言葉に耳を傾け、天井を見上げる。

相変わらず戦場とは不釣り合いな程綺麗な装飾だ。

「ねえ、ローエン」

「はい？」

ホームズは、ローエンの方を見ずに言葉が続ける。

「この船、今回の作戦が終わったらどうなるんだい？」

「ホームズさんの想像通りですよ」

ローエンは、静かに言葉を紡ぐ。

「……………だよね。流石に残しておかないよね……………」

両親の思い出の船が沈むのは、見たくない。

しかし、それも仕方のない事なのだろう。

「なんとかならない?」

事情を知っているレイアとしては、どうにかしたいところだ。

「無理だ。ここには、クルスニクの槍の他にも黒^{ジン}匣がある。人間達がやらなくても私が沈める」

代わりにミラが口を開いた。

「だよね。まあ言ってみただけだから、そんなに気にしないで」

ホームズは、そういつもの胡散臭い笑顔でそう言う口を煙管を啜える。

「形あるものは、いずれきえてなくなる、か」

ポツリと呟くホームズにヨルは尻尾を揺らす。

「……………まあ、そんなもんだろ。」

「だいたい、そんなこと言ってもものをとって置いたら永遠になくならんぞ」

「分かっている……………」

ホームズは、煙管をぶかぶかとさせながら返し扉を開ける。

「まあ、でもここに来ただけでも良かったかもね……」

母親の話は散々聞いていたが、それでも、両親の話となるとホームズはとんと知らない。

それを知ることが出来たというのはある意味良かったのだろう。

潮風がホームズの頬を撫でる。

目の前には、甲板が広がり、そこには黒い建物がある。

ミラは腕を組んでその建物を見つめる。

「いるな。間違いなくあそこだ」

その言葉に一行に緊張が走る。

「報酬、忘れんなよオンナ」

ヨルの言葉にミラは静かに頷く。

「ああ。クルスニクの槍を破壊した暁には、必ず支払ってやろう」

「あ、ついでに借金も忘れないでね」

「ああ……クルスニクの槍を破壊した暁には、必ず返してやろう……」

ホームズの発言にミラは、ため息とともに返す。

ホームズは、満足そうに頷くと目を険しくし、歩き出す。

先ほどまで叩いていた軽口が嘘のようにホームズから重々しい空気が発せられる。

「ホームズ、一つ聞いていいか？」

「質問によるね」

ホームズは、静かにそう返す。

「お前は、何故、そこまでクルスニクの槍を敵視するんだ？」

ミラの質問にホームズは、肩をすくめる。

「精霊に仇なすものだからに決まってるじゃないか」

「それだけじゃないだろ」

ホームズの戯けた物言いをミラはバツサリ切り捨てる。

周りを見ると他の面子も気になっているようだ。

「隠し事は、感心しないぜ」

「君に言われたくないね、アルヴェイン」

ホームズは、そう言いつつため息を吐く。

何せ身体自体が拒む鬼門とも言える隠し事だ。

「……………また、気が向いたらでもいいかい？」

ホームズの静かに紡がれた言葉にミラは頷かざるをえない。

そんなミラを察してホームズは、フツと短く笑う。

「とりあえず、クルスニクの槍を壊したら、話せるよう努力するよ」

そう言うとホームズは、ヨルを見る。

ヨルはその問い詰めるような視線に顔を歪ませる、

「……なんだ？」

「おればつかり訪ねられるんじやあ不公平だと思わないかい？」

「……………何が言いたい？」

「君、えらくセルシウスとやらにご執心のようだけど、」

ホームズは、そこで言葉をわざとらしく切る。

「どういう関係だい？」

ヨルは、ホームズの言葉を聞くとゆっくりと口を開く。

「決着をつけたはずの相手ってというのが、まあ一番妥当だな」

ヨルは、ゆっくり選んだ言葉でそう告げた。

それからヨルは更に言葉を続ける。

「昔俺を討伐しようとする精霊達と闘った事がある。その時何度も闘ったのが、奴だつたんだ。まあ何度やろうと返り討ちにしてやったがな」

ヨルは、淡々と話を進める。

「俺がトドメを刺す前に逃げ出したり、邪魔が入ったりとなんやかんやで決着がつかなくてな……………」

ヨルは少し懐かしむように言葉が続ける。

レイアは、隣で聞いていてポンと手を叩く。

「つまり、アレだね。強敵と書いてともと読むみたいなの？」

ヨルは呆れたような顔になる。

「いや、別にそう言うわけじゃないんだが……」

しかし、レイアにヨルの言葉を聞く気配は、全くない。

助けを求めるようにホームズとジュードを見るが二人とも首を振った。

「もう、それでいい」

ヨルはため息と共にそうこぼした。

ホームズは、そんなヨルを面白そうに見た後思い出したように口を開いた。

「そう言えば、精霊術、食つといた方がいいんじゃないのかい？」

「まあ、贅沢は言わないが、闇属性の精霊術だと文句はないな」

そう言つてヨルは、エリーゼを見る。

エリーゼは、コクリと頷くと精霊術を発動させる。

『「ネガティブゲート!!」』

黒々とした腕は地面から溢れでてヨルに襲いかかる。

ヨルは生首になるとそれを丸呑みにした。

「ふむ。せめて中級の精霊術が食いたかったな」
そして、一言文句をつける。

『しつかり贅沢言ってるじゃないかー!!』

「これ以上は、エリーゼさんの戦闘に影響がでますよ」
そう言つてローエンが、ファイアーボールを放つ。

ヨルはそれも大口を開けて食らう。

「ふむ。せっかくだ。オンナ、お前も寄越せ」

「色々突つ込みたいがまあ、我慢しよう」

そう言つてミラは詠唱を始める。

「……………スプラッシュユー！」

水瓶が現れヨルに降り注がれる前に全てを飲み干し、ヨルはいつもの黒猫の姿に戻つた。

「まあ、これぐらい食つておけばどうにでもなるだろ」

ヨルはニヤリと笑つてローズを見る。

勿論もらえない事ぐらいわかつているのだ。

ホームズは、準備の出来たヨルを見ると手をパンと叩く。

「よし。行くとしますか」

「ああ」



扉を開けた部屋でまず真つ先に目を引くのが黒々としたクルスニクの槍だ。

そして、床はガラスのように透明だ。

試しにコンコンと爪先で叩いてみると意外に固い音が返ってきた。

どうやら相当な強度を持ったガラスのようだ。

床からクルスニクの槍に視線を移す。そこにはオールバックにしたジラントが腰を下ろしていた。

ジラントはアルヴィンを見ると薄ら笑いを浮かべる。

「ご苦労、マクスウェルを連れてきてくれて」

そう言つてアルヴィンが、ミラ達の側にいるのを見て言葉を続ける。

「二応、裏切った訳を聞こうか」

「簡単だよ」

アルヴィンは、吐き捨てるように言葉を続ける。

「昔から、あんたの事が大嫌いだったからさ」

一体過去に何があったかは、分からない。

しかし、その言葉には確かな感情が宿っていた。

「一生をリーゼ・マクシアで過ごす覚悟が出来たようだな」

「……………関係ないだろ」

アルヴィンが悔しそうに呟くとジランドは、手を振り被る。

ホームズは、ヨルに目配せをする。

そして、ジランドの手がふりかぶられた瞬間、文字が浮かび上がり氷の矢が照射された。

ヨルは、巨大な生首になると全て飲み込んだ。

「……………なるほど」

ジランドは、ニヤリと笑みを浮かべる。

「それが、お前の力か？」

「ああ。俺の力だ」

ヨルは生首のまま口を開けて答える。

「微精霊の死は、感じなかった………どういう事だ？」

ミラは不思議そうに呟く。

ヨルは生首から、いつもの黒猫の姿に戻る。

それと同時にアルヴェインから弾丸が放たれた。

しかし、それは、ジランドに届く前に突如現れた氷の壁に阻まれた。

姿を歪ませる氷の後ろに人影が現れる。

ヨルは、スツと目を細める。

「やはり、貴様か」

「またあの精霊さん！」

エリーゼは、そう言って目を丸くする。

そう言うって精霊は、氷の壁を砕き矢のようにアルヴェインに向かって飛ばす。

ミラは、それに割って入るとマナの壁を張り防ぐ。

「………あなたが、マクスウェルか。随分と様変わりしたものだ」

セルシウスが口を開いた瞬間、ジランドが頬をぶつ。

その光景に一行は、目を向く。

「オレの許可なく、勝手に口を動かすな」

「………ハイ。マスター」

ジランドの理不尽と言える命令にセルシウスは、眉ひとつ動かさず返事をした。「酷い……………どうして、そんな人にしたがってるの!？」

レイアの言葉にジランドは、ゆっくりとセルシウスの頭に手を置く。

「道具は、主人に従うのが道理だろ」

レイアは、顔を険しくする。

「人と精霊は、支え合って生きていくものでしょ！それを道具だなんて……………」

「こいつは、普通の精霊とは少々違う」

ジランドは、そう言ってジュード達を見る。

「こいつは、オリジン源霊匣だ」

ヨルは、その言葉に眉をひそめる。

「オリジンだと?」

自分の封印に関わっていた精霊の名にヨルが反応する。

「こいつは、ブースター増霊極を使い、精霊の化石に眠るセルシウスを再現した」

ジランドは、自慢気に言葉を続ける。

「こいつは、精霊術自体が形を成した存在だ」

アルヴィンは、その言葉にピンときた。

「さっきのは、オリジン源霊極のマナを自分のものとして使ったのか!」

ジランドは、正解とばかりに高笑いをする。

「だから、道具だって言うんだ」

レイアは、両手を握りしめる。

「あなた、最っ低！」

「テイポのデータを盗んだのもこの為だったんですか!？」

ジランドは、声を荒げるエリーゼの言葉に頷く。

「貴女に感謝してるぜ、お嬢さん。源^{オリジン}霊匣が生まれたのも、リーゼ・マクシアが燃料になったのも、全て貴女のおかげなんだからなあ？」

エリーゼは、声を震わせ俯く。

突きつけられた事實は、容易に容認できるものではない。

「なんだ？嬉しくて泣きそうか」

そのジランドの心底面白そうな言葉に一行は、武器を強く握りしめる。

そんな時、ビシツツと言う音が響く。

音のした方を見るとホームズが、エリーゼに軽くデコピンを放っていた。

エリーゼは、驚いて顔を上げる。

「顔を上げたまえ、エリーゼ。この男相手に顔を俯かせる必要なんてない」

ホームズは、そう言ってジランドを涼やかな目で睨みつける。

「随分ご大層な事を言っているけれど、それが精霊術って言うなら、天敵がここにいるぜ？」

ホームズの言葉にジランドは、ニヤリと笑う。

「まあな。どうだ？ホームズ？こつちに来る気はないか？」

「は？」

「精霊術を無効化するその力、リーゼ・マクシアを燃料にする上でなくてはならない力だ」

ホームズは、冷めた目でジランドを睨む。

「対リーゼ・マクシアの為の戦力ってわけかい？」

ジランドは、大仰に頷く。

「どうだ？別に悪い話じゃないだろ？こつちに来れば、お前の行きたいと言っていたエレンピオスにも簡単に行けるぜ？」

「遠慮しとくよ。母さんに知らないおじさんに付いてくなくて教えられたんでね」

ホームズは、ハッと馬鹿にしたように返す。

ジランドは、そのホームズの回答にニヤリと意地悪く笑う。

「お前、リーゼ・マクシア人に随分いじめられたらしいな」

その時、ホームズの表情が凍りついた。

「確か、靈力野^{ゲート}がないのが理由だったか？」

あの時のホームズの苦い日々^{ゲート}にジランドは、塩を塗り込んで行く。

「いやあー大したもんだ。あんな目にあつたというのに、リーゼ・マクシアの味方がで
きるなんて、心の広さが違うぜ」

ホームズは、ギリと歯ぎしりをする。

「ジランド！」

ローズの怒号が飛ぶが、そんなのどこ吹く風というようにジランドは、更に言葉を続
ける。

「ついでに言つてやろうか、お前の父親が死んだ事故つてのは、リーゼ・マクシア人が
原因だぜ」

その言葉に一行は、言葉を失つた。

「リーゼ・マクシア人の運転中の馬車に巻き込まれ、ジ・エンドってわけさ」
言葉がでないホームズにジランドは、意地悪く笑い続ける。

「いや、お前ら親子は、心が広い！大したもんだ！」

先程自分を元気づけてくれたホームズが、どンドン俯いていくその様子にエリーゼは、胸が締め付けられる。

ローズは、刀に手をかける。

「貴方は、お前だけは………！」

背中の小さくなったホームズを見てローズの中で何かがはじけた。

何故自分がここまで、激情を抱いているのか、理解していない。

しかし、それでも煙管を強く嘯むホームズを見て、我慢が出来なくなっていた。

「あなたと言う人は!!」

ローエンも我慢の限界のようだ。

「指揮者^{コンダクター}。ジジイの出る幕じやないぜ。」

それともまだ踊り足りないのか？」

「ええ。ジジイは、しぶといのが売りですから！」

そう言つて細剣を引き抜く。

「我が友を弄んだこと、決して許しはしません！」

ジュードは、一歩前に出る。

「僕たちは負けない」

そんなジュードを見てジランドは、唾を吐く。

「てめーみたいなのなんの力も野望もないクセにのぼせあがっているお前を見ると反吐がでるぜ」

そう言つてジュードを睨みつける。

「場違いなガキが！」

「あなたみたいなのが、力とか野望とか口にしないでよ！」

ジュードは、そう返すと武器を構える。

「僕は、あなたが間違つているのを知っている」

ミラも片手剣に手をかける。

「もはやお前と語る口はないが、最後に一つだけ聞いてやる」

その瞳でジランドを射抜く。

「お前とジュード達の違いが何かわかるか？」

「ハッ、知るかよ」

ミラは、片手剣を引き抜く。

「だろ。だから、お前は愚か者なのだ」

ジランドは、ニタリと意地の悪い笑みを浮かべる。

「愚か者は、そつちだろ」

そう言つてホームズを指差す。

リーゼ・マクシア人に苦渋を飲まされ続けたホームズ。

「どうする？ ホームズ」

しかし、誰もホームズには、注意を払わない。

その様子を不審に思ったのだろう。

ジランドは、初めて動揺した。

「……………知つてたよ、父さんの死因ぐらい」

ホームズは、そう言いながら口から煙管を外す。

「当然だろう？ リーゼ・マクシアにきて父さんは、死んだんだ。

リーゼ・マクシアでアルクノアの起こした事故に巻き込まれるより、リーゼ・マクシアでリーゼ・マクシア人の起こした事故に巻き込まれる方がどう考えたつて可能性が高い」

ホームズは、相変わらず顔をうつむかせてながら、煙管を小袋にしまいしばらくその小袋を見つめる。

「……………ジランド、君、アーティーの村の事知ってるかい？」

「ああ。知ってるぜ。傑作としか言いようがないよな？」

「……………そう」

そのゾツとするほど冷たい声音に思わず、ローズは振り返る。

ホームズの顔は俯いたままで顔がわからない。

ヨルはホームズの肩でジランドを流し見る。

「やつちまつたなあ、お前」

「あ？」

「お前、ホームズの逆鱗に触れたぞ」

ヨルの言葉と共に顔を上げたホームズの瞳は、涼やかだ。

一見は、に限るが。

ホームズの殺気にヨルのヒゲがビリビリと震える。

「君は一つ勘違いをしている」

ホームズは、ドンと右足を踏み込む。

「おれ、心が広くはないんだ」

青い炎は静かに燃えるので赤い炎と比べ分かりづらいが、温度は赤く燃えるよりもはるかに高い。

澄んだ碧い瞳に宿る激情の炎は、静かにそして熱く燃え盛っていた。

「だから、君だけは、許さない」

はつきりと拒絶したホームズを不愉快そうに見るとジランドは、銃を取り出す。

「お前ら親子は、揃いも揃っておれの前に立つんだな」

そう言つて弾を込める。

「マクスウエル、お前だけは、生かしておいてやる。

だが、他の奴らは………」

そう言つて銃口をホームズ達に向ける。

「皆殺しだ」

ジランドの言葉にミラは、片手剣を構えながら口を開く

「リーゼ・マクシアの人と精霊は、私が守る!!」

「ジランド！僕はお前を許さない！」

ジュードもはつきりとそうつげる。

「ヨル、遠慮なんてするんじゃあないよ」

「当たり前だ」

母親譲りのタレ目と父親譲りの碧い瞳に闘志を宿したホームズの言葉にヨルはゆっくりと頷いた。

リーゼ・マクシアとエレンピオス、その二つが、今、ぶつかる。

借りがモノを言う

「ヨル！」

ヨルは口から黒球を出す。

吐き出された黒球は、ホームズの右足を黒霞で包む。

「行くぜ！」

ホームズは、ジランドに向かって飛び上がった。

(馬鹿め！空中では身動き出来まい！)

ジランドは、ホームズに向かって照準を合わせる。

しかし、銃弾が発射されると同時にヨルの尻尾が襲いかかる。

尻尾は、銃身を弾き銃弾を見当違いの方向に照射させた。

ホームズは、銃弾を食らうことなくそのままジランドに向かって踵を落とす。

「くそっ！」

ジランドは、一歩後ろに引き何とかかわす。

ジランドに当たらずだったホームズの踵は、そのまま落とされ地面にひびを入れた。

ホームズは、そのまま踵落としの足を軸にして蹴りをもう一度放つ。

その瞬間ホームズに向かって氷の矢が襲いかかった。

「ホームズ!!」

ミラが間に入りマナの盾を作り出す。

ジラランドは、その隙に大きく距離をとった。

「やつぱりこいつら、厄介だねえ……」

ホームズは、そう言つて再びジラランドと向き合おうとする。

「おい、ホームズ」

そんなホームズにヨルが声をかける。

「なんだい？」

「セルシウスと戦え」

「は?」

ホームズは、訳が分からないという風に首をかしげる。

「貴様が言つたんだろ、奴の天敵は俺だと」

精霊術が形を成したものだということなら、確かに精霊術を喰うヨルは、オリジン源霊匣のセルシウスにとつて天敵以外の何者でもない。

「……………建前はわかった。本音は?」

「奴にはちよつとした因縁がある」

「おれもジランドをぶつ飛ばしたいんだけど」

ホームズが即答すると、ヨルは、少しとほけた顔をする。

「ファイザバード沼野での出来事覚えてるか？」

「色々あり過ぎてどれのこと言ってるか分からないんだけど……」

「薬を嗅がされて気を失ったお前にパナシーアボトルを飲ませた奴だ」

ニヤリと底意地の悪い笑みを浮かべているヨルを見てホームズは、しまったという顔を
をする。

そんなホームズに構わずヨルは続ける。

「俺、言ったよな？貸し一だイチって？」

ヨルのその憎たらしい言葉にホームズは、齒軋りをするが直ぐに抵抗は諦め、ため息
を吐く。

「……分かった。商人として借りを作つとくのは、あまり良くないしね」

ホームズは、そう言うミラに背中を向けたまま続ける。

「てなわけだ、ミラ。セルシウスはこっちに任せてくれないかい？」

その言葉にミラは、少し驚く。

「確かに、そつちのほうがいいだろう……いいの？ジランドと因縁があるようだ

が……………」

「それは、君たちが晴らしてくれらるんだらう？」

ホームズのいたずらっぽいな笑みにミラは、目を丸くした後、真剣な顔で頷く。

「いいだらう」

「よし」

ホームズは、左手の盾を調整し、セルシウスに向かって駆け出した。

ミラは、それを見届けると片手剣を振るう。

ジランドは、一歩下がって躲す。

そして、ミラに銃口を合わせる。

引き金が引かれる瞬間、アルヴェインの銃弾がジランドの銃口を弾く。

弾かれた銃口から発射された銃弾は、ミラの頬をかすめて飛んで行った。

「チツ……………」

ジランドは、再び銃を構えようとする。

「飛んでけーっ！！」

そこにローズの放った刀が襲い来る。

ジランドは、ローズの刀をかわす。

かわされた刀はそのままミラへと直進して行った。

ミラは、飛び来る刀の柄を持つとジランドに一刀を振るう。迫り来る一刀をジランドは、銃身で防ぐ。

その隙にミラの二刀目がジランドに襲い来る。

「チッ！」

振るわれた刀はジランドの服を僅かに掠めた。

刀をかわされたミラは、そのまま勢いを殺さず体を回し、

「受け取れ！」

自分の片手剣を走り向かってくるローズに投げた。

ローズは、それをキャッチすると同時に両刀を高々と掲げる。

「崩襲剣!!」

叩き落される剣の衝撃にジランドは、弾き飛ばされた。

「ボルテックチェイサー!!」

ジランドは、吹き飛ばされながらも雷の銃弾を放つ。

「ぐっ!!」

技を出したばかりの隙を狙われたローズは、かわす事かなわず攻撃を食らう。

「ローズ！」

レイアが慌てて駆け寄ろうとする。

「レインバレット！」

しかし、ジランドは、更に追撃を仕掛けた。

ローズに駆け寄ったレイアのその場所は、レインバレットの範囲だ。

「ヤバイ！」

雨のように降り注ぐ銃弾に思わず二人が息を飲む。

『『ブラックガイド!!』』

突如レイアとローズの上空に堕天使が現れ、鎌で銃弾を薙ぎはらう。

「チッ！」

再び銃を構えるジランド。

「飛んでけ！」

そこに打ち上げられたジュードが上空から落ちてくる。

「飛天翔星駆!!」

アルヴィンとジュードの声が響き渡る。

ジランドは、それを銃身で受け流し、拳を放つ。

「グウ！」

ジュードは、何とか攻撃を受けきる。

しかし、ジランドから距離が開いてしまった。

ジランドは、直ぐにジュードに狙いを定め引き金を引く。轟音が響き渡る。

ジュードに弾丸が届くかに思えたその瞬間、ローエンのナイフが銃弾を弾いた。

「やってみるものですね……」

ローエン自身も驚いているようだ。

『すごいぞーローエン!!』

ティポは、クネクネと動く。

ジランドは、ぺつと唾を吐き捨てる。

「……………来い！セルシウス！」

「無駄だ」

ミラは、そう告げる。

「精霊術がメインのセルシウスでは、ヨルとホームズに勝てない」

更にそう続けた。

ジランドは、それを聞くと顔を俯かせる。

そんなジランドにミラは、刀を向ける。

「ホームズがセルシウスを倒す間に私達がお前を倒す」

「……………ハ」

力強いミラの言葉のあと、ジランドから小さく息が漏れた。

「?」

不審に思つて首を傾げると背後で轟音が響き渡つた。
衝撃と共に砂煙が舞い上がる。

その瞬間ジランドの高笑いが上がつた。

「何か、勘違いしているようだな」

「なんだと?」

ミラは、余裕を崩さないジランドを不思議そうな顔で睨む。

「あいつがいつ、精霊術タイプだと言つた?」

徐々に砂煙が晴れていく。

「あいつのメインは、近接格闘だ」

砂煙が晴れると壁に背を預けているホームズが現れた。

「ホームズ!!」

ジュードの言葉に返事しようとして口から、血を吐き出した。

ジラントは、その隙に弾を込める。

セルシウスもその隣に立つ。

二人のリリアルオーブが耀いた。

「決めるぞ、セルシウス」

セルシウスは、両手を前にジラントは、銃口を構える。

「パーフェクトバニツシュ」

二人から巨大な紫の光の砲撃が一行を襲う。

「ぐっ！」

光の砲撃の威力で皆一様に膝をつく。

「くそ……これが、源^{オリジン}霊匣の力か………」

ミラが悔しそうに睨みつける。

そんななか、ジランドは、面白そうにホームズを見た後ミラを見る。

「これが道具の差だ」

横に佇むセルシウスを自慢げに見せる。

「あいつを信じて任せたのが失敗だったなあ？」

そう言つてセルシウスの頭を掴む。

「ホームズのことやセルシウスの事を何も知らないから、こうなるんだ」
ミラは、その言葉を聞き顔をニヤリと笑みを浮かべる。

「馬鹿な事を言うな。ホームズの事を何も知らないのは、お前の方だ」

その瞬間、セルシウスの態勢が崩れた不思議に思つて、足を見るとヨルの尻尾が巻き付いていた。

「あいつは、もう裏切らないと言っていた。」

だったら、私の期待も裏切らないだろう」

尻尾に巻きつかれたセルシウスは、宙に引つ張り上げられた。

「だああああらっ!!」

そのまま壁を転がすように振り回す。

セルシウスの体は壁を引きずり回されていた。

巻き上がる砂けむりの量が尋常ではないスピードと威力を持っているかが、目で見て分かる。

「あああああら!!」

その容赦のない攻撃に空いた口がふさがらないミラを除いた一同を他所にホームズは、セルシウスを床に叩きつけた。

ミラは、ニヤリと笑う。

何せ、ホームズがそれだけで終わるはずがないのだ。

「引き寄せる!!」

ホームズは、そのままセルシウスを引き寄せるとそのまま腹に蹴りを放つ。

「紅蓮脚!!」

炎のおまけつきで。

「つづあ!!」

セルシウスは、短く声を漏らすとそのまま弾き飛ばされた。

「あー……口の中がしょっぱい」

ホームズは、そう言って血をぺっと吐き出す。

「強いね、流石大精霊。思わず泣いちゃうよ」

ホームズは、にいつといたずらっぽいな笑みを浮かべながらそう返した。

それからジュード達の方を向く。

「ほらほら、おれの心配はいいから君たちは、君たちで頑張りたまえ」

「安心しろ。心配なんてしない」

ミラの言葉にホームズは、やれやれとため息を吐く。

「もう少し優しくてもバチは当たらないと思うんだけど?」

「優しくすれば調子に乗るのが目に見えてるからな」

ホームズとミラがそんな会話をしているとジランドが銃を構える。

背中を壁に預けるように倒れるセルシウスを見てジラントは、顔を険しくし、銃を放つ。

銃弾は、セルシウスの顔の真横に突き当たる。

「……………道具の分際でおれに恥をかかせるな」

「ハイ、マスター」

セルシウスは、ゆつくりと立ち上がった。

ジラントは、それを満足そうに見つめる。

その光景をみて一行不愉快そうに眉をひそめる。

「さあ、マクスウエル、どっちの道具が上か勝負といこうじゃないか」

エリーゼとレイアがムツとした顔をする。

「ホームズは、道具なんかじゃ……………」

「まあ、スペックだけでいけば、セルシウスが上だな」

「うおい！勝敗つけんの早いよ！」

遠くから聞こえるホームズの突っ込み到我聞せずという形でミラは、言葉を続ける。

「頼んだぞ、ホームズ」

その力強い目で言われホームズは、うなずき返すとセルシウスに向かい合う。

そして、二人は一定の距離を保ったまま、走り出した。

ジランドとミラは向き合う。

「流石、マクスウエル。中々非情なご決断だ」

ジランドは、楽しそうに言う。

「ああ。あいつが道具なら、決してセルシウスとぶついたりしない。とてもじゃないが信じられないからな」

ミラは、刀を構える。

「だが、仲間なら任せられる。仲間だから信じられる」

ミラの言葉に一行の武器を握る言葉に力が入る。

レイアとエリーゼも嬉しそうに笑っていた。

ローズは、ミラに片手剣を返す。

「こりゃあ、ホームズもついにぼっち脱脚ね」

ミラからは、刀を返してもらいそのままローズは、構える。

「さあ、仕切り直しだ。ジラント！」

一行は、心を一つに踏み込んだ。

ヤバイものの蓋をとる

「さて、やりますか」

ホームズは、一言そう言うのと蹴りを放つ。

セルシウスもそれに対抗するように蹴りを放ち、二人の脚は交差する。

二人はすぐに足を戻す。

「続けていくぜー！」

足をトントんと踏み替え、

「三散華!!」

三連撃を放った。

セルシウスは、それを無表情で、捌いていく。

捌かれた足を下ろすとポンチヨを翻しそのまま回し蹴りに切り替えた。

セルシウスは、一步後ろに下がってかわす。

そして、蹴りを外し隙だらけになっているホームズにセルシウスは、拳を固めて打ち込んだ。

「食らうかー！」

ホームズは、外した勢いそのままに軸足を右足から左足に変え迫りくる拳を横から蹴った。

そして、それだけでは終わらない。

ホームズは、両手を地面に着くとそのまま逆立ちをして、両足でセルシウスの顔を挟む。

「フランケン……………」

そのまま身体を捻る。

「……………シユナイダー!!」

セルシウスは、顔面から落ちていった。

「お前、よくやるな……………こんな奴に」

技の発生の時に逃げていたヨルは、いつの間にかやら肩に戻り呆れている。

「本当はこれで、決めたかったんだけど……………」

セルシウスの身体がピクリと動き、ゆっくりと起き上がる。

「仕方ない」

ホームズは、もう一度腰を落とすとセルシウスに向かって駆け出した。

セルシウスもそれに対抗するように駆け出した。

瞬間、セルシウスは、足を止め、地面に手をつく。

突然の行動にホームズは、訳が分からず蹴りを躊躇った。

その不自然な行動に何かの罠かと疑いもした。

しかし、そんな様子はない。

不思議に思っていると、ジラントの前に氷の盾が上がっているのが目に入った。

ホームズは、それを見てようやく合点がいった。

つまり、セルシウスは、自分の戦闘を二の次にして、ジラントを守るという指示に従ったのだ。

あの時ホームズが躊躇わずに蹴りを放っていればダメージを負ったかもしれないのだ。

「随分、つまらん奴になったものだ」

ヨルは、その行動を見るとホームズの肩から無表情のセルシウスを馬鹿にしたように

口を開いたを

「大精霊とも言われたお前が、あんな元オカッパに従うなんてな」

セルシウスから無言の拳がホームズに飛ぶ。

ホームズは、それを受け流すとそのままの流れでセルシウスの腹に蹴りを放つ。
セルシウスは、それを一歩引いてかわす。

「なんか……………面倒になつてきたな」

「……………ヨル？」

顔をゆがめてそういうヨルにホームズが不思議そうに首を傾げる。

「おい、ホームズ。一瞬だけ動きを止めろ」

そんなホームズに構わず、ヨルは指示をだす。

ホームズは、断る理由もないので、素直に頷く。

「いいよ」

「ただし、守護方陣以外な」

「注文が多いね……………」

威力によつては、ヨルの身動きまで止めかねない。

ホームズは、ため息と共にポンチヨの胸ぐらを掴む。

「まあいい。君のワガママも無茶振りもいつものことだ」

「お前にだけは言われたくないな」

その言葉を合図にホームズは、回し蹴りを放つ。

セルシウスは、攻撃を受ける瞬間、腰を沈め衝撃を吸収する。

そして、身体をいれかえると同時にホームズに裏拳を入れる。

ホームズは、それを喰らい地面に落ちる。

(たった一撃でこの威力！)

いかに大精霊というのが、自分達と違う存在なのか理解した。

(でも!!)

ホームズは、再びポンチョを掴む。

「そんなのいつものことだ!!」

瞬間セルシウスの前にポンチョが広がり視界は全て遮られた。

命のかかった戦いにおいて、急な状況変化は、付いて行くことに一瞬の隙を作る。

突然の現れたポンチョ、遮られた視界、姿の見えないホームズとヨル。

それら全ての状況を理解し、対応するのにそれこそコンマ数秒の時間が必要なのだ。

そのコンマ数秒こそ、ヨルのオーダー通りのものだ。

「!？」

巨大生首となったヨルは、顔の左側に牙を向ける。

セルシウスは、何とか顔が食われないよう一歩引くと同時に顔面に蹴りを当て距離を空ける。

「ん？何それ？」

ホームズは、戻ってきたヨルの口にぶら下がっている氷の板を見つめて首を傾げる。

「目の前の奴を見てみる」

ヨルは、それを飲み込んで黒猫の姿になる。

ホームズは、不思議そうに顔を上げるとそこには片側覆っていた氷がとれたセルシウスがいた。

それを見てホームズは、眉を潜める。

「セルシウス、君……」

その現れた素顔には、爪痕がしっかりと刻まれていた。

「ヨル、これはもしかして……」

「ああ。俺がくれてやった傷跡だ」

セルシウスは、慌てたように左目に手を当てるとヨルを睨みつける。

「……………貴様らの狙いは、これか？」

セルシウスからの初めての言葉怒りに震えていた。

「そうだ」

ホームズが答える前にヨルがニヤリと笑って答える。

「貴様……………」

初めて感情を顔に出したセルシウスを見てホームズは、背筋が寒くなるのを感じていた。

「おい、ヨル。君、まさか……………」

「感情のない道具と戦う気など毛頭ない」

詰まる所、ヨルの目的は最初からセルシウスの眼帯を取り煽ることだったのだ。

怒りという感情を引き金にこの戦いに道具ではなく、セルシウスというものを引きずりだそうとしていたのだ。

その為なら、どんな手段でも取る。

セルシウスは、静かに左側から手を離す。

「貴様のその腐った性根、相変わらずだな」

「ハッ！腐ってようが性根は性根だ。それすらない貴様にとやかく言われる筋合いなんでないな」

邪悪な笑みを浮かべながら、そう返すヨルにセルシウスは、無言で睨みつけ、腰を落とす。

「いいだろう。今度は、殺してやる」

そう言ってセルシウスは、一気に距離を詰め、ヨルに向かって手を伸ばす。

「——っ!!」

しかし、それはホームズに阻まれる。

ホームズは、向かってくるセルシウスの腕を掴み、そのまま投げ飛ばした。

「くっー!」

急いで起き上がると、ホームズが上空で高々と脚を掲げていた。

そしてそのままかかと落としを放った。

セルシウスは、腕を交差させ攻撃を受ける。

「これもダメか……………」

押し返されたホームズは、そのまま宙返りをして着地する。

そこにセルシウスが、拳打を放つ。

ホームズは、慌てて左腕の盾で防ぐ。

ガンという音共に盾がセルシウスの拳を受けた。

「っはあー！」

その掛け声と共に衝撃が盾を超え、ホームズの腕に直接届く。

「——っ!!」

左腕に激痛が走る。

「鎧通しだ。人間」

セルシウスは、見下したようにそう告げる。

ホームズの左腕は、全く動かなくなつた。

「やばい、折れたなんてもんじゃない………」

完全に左腕は碎けている。

ホームズが歯を食いしばつて激痛に耐えている間にセルシウスの拳がホームズの腹に放たれる。

「ヨル！」

言葉と共にホームズは、派手に吹き飛ばされた。

壁に打ち付けられたホームズは、膝を抑えながら立ち上がる。

セルシウスは、自分の拳を見つめる。

「まあ、ありえるだろうとは思っていた」

セルシウスは、そう言いながらホームズを見る。

「手応えが少しおかしかった」

セルシウスの目に映ったホームズの腹には、尻尾がまかっていた。

あの拳が当たる瞬間にホームズは、ヨルにこの指示を飛ばしていたのだ。

「なるほど、人間というのは知恵が回るな」

「褒めてくれてどうも」

ホームズは、額に浮かぶ脂汗に気づかないフリをして睨みつける。

「だからこそ、容赦はしない」

そう言って、セルシウスは、回し蹴りを放った。

その蹴りは、今度はホームズの右側に向かって放たれている。

今度は、右腕を持っていくつもりなのだろう。

「?!」

しかし、それはホームズに届くことはなかった。

向かってくる回し蹴りをホームズは、膝と肘で挟み込んで止めた。

「両腕を折ってやろうなんて、馬鹿なことを考えるからこうなるんだ」
脚を抑えられてしまい動けないセルシウスは、焦る。

何せ、このタイミングで現れるのは、奴しかない。

「だが、気付いた時には、もう遅い」

ヨルは、ニヤリと生首になるとセルシウスの腕を食いちぎった。

ヨルに飲み込まれる自分の腕を睨むとホームズに手をかざす。

「獅子戦哮!!」

セルシウスは、第二波が来る前にホームズに獅子戦哮を放ち吹き飛ばした。

「おのれ……………」

セルシウスは、ヨルを睨みつける。

ヨルは、しらっとした目を向ける。

「さて、どうする？ 腕を復活させる為にマナを使用し、戦力を減らすか？

それとも腕を復活させず、戦力を減らすか？」

ヨルは楽しそうに邪悪な笑みを浮かべ、犬歯を見せる。

「どうする？ 大精霊？」

「……………この、化け物め」

セルシウスは、ヨルを睨みつけ、ホームズを睨む。

「お前、自分が何をしたのか分かってるのか？」

「もちろん」

ホームズは、そう言って腰に下げている小袋を見る。

袋がキセルの形に合わせるよう変わっている。

脳裏を過る目の前で体温が下がっていくマールウと、それ比例するかのようにな暖かい血。

「……………何もできなかつたさ」

後悔するようにそう言つて腰を落とす。

「悔やんでも悔やみきれないことばっかだった……」

ホームズは、右拳を握る。

「剛招来」

左腕に激痛が走る。

ホームズは、それを歯を食いしばって耐えるとセルシウスを睨む。

「でもね」

剛招来のオーラを纏いホームズは、ゆっくりと腰を上げる。

「後悔の時間は終わりだ」

ホームズは、地面に落ちているポンチヨを拾い片腕の状態で羽織る。

碧い瞳に赤いオーラ。

そんな中静かに右脚を前に出す。

ヨルは、黒球をホームズの右足に落とす。

落とされた黒球は黒霞となつて右足を纏う。

「いくぞ、仕切り直しだ」

踏んで躪る

「魔神剣・双牙!!」

ローズの魔神剣が二つ地を這いジランドに襲い掛かる。

「サドンベイカー!!」

ジランドの放った銃弾が、地面で爆発を起こしローズの二つの魔神剣を打ち消す。

「ちっ！だったらー！」

ローズは、近づこうと一歩踏み込む。

「レインバレット」

そこをジランドの放った銃弾が上空から降り注ぐ。

ローズは、上空を睨みつける。

(やってやる！)

両刀を合わせる。

「獅子戦哮!!」

獅子が咆哮を放ち銃弾を吹き飛ばしていく。

どうやら、獅子の球遊びには、少々小さすぎたようだ。

「…………少し、かすった」

ローズは、不満そうにかすり傷のついた頬を指でなぞる。

「いやいや」

レイアは、そのローズの無茶苦茶な行動に呆れながら突っ込む。

「それより、ホームズを助けに行かなくていいの？」

ジュードの不思議そうな質問にローズは、刀を払って答える。

「行かないわ」

そう言つて再びジラント相手に構える。

「何せ、ミラが大丈夫と太鼓判を押し込んだもの。

私が出るまでもないわ」

ローズは、とても落ち着いた声で言い放った。

強がりではなく、ローズは心底安心している。

「むしろ、ホームズの方が心配してるかもしれないぜ」

アルヴィンは、そう言つて銃弾を放つ。

しかし、それをセルシウスの氷が防ぐ。

その光景に一行は、思わず首を傾げる。

「馬鹿な！ホームズさんが、抑えているはずだというのに……」

ホームズと戦闘中のセルシウスの行動に理解が出来ないでいた。

ホームズも不思議そうに蹴りを放つ足を止めていた。

それを見て一行は、全てを理解する。

「ジランド、まさか！」

ジュードは、ギリつと歯ぎしりをする。

「道具が身を尽くして主人を守るなんて当然だろう？」

セルシウスは、自分が不利になることを承知でジランドを助けたのだ。

そして、ジランドは自分の為にセルシウスを犠牲にした。

ローズは、顔を険しくさせ目を見開く。

そして、床を強く踏み込み跳躍していた。

上空から振り下ろされる二刀をジランドは、銃身で防ぐ。

「……………本当、腹が立って仕方ないわね」

ジランドは、銃身で払いのける。

ローズは、くるりと宙返りして着地する。

「絶対、ここで倒すわ」

「ハッ！ やってみろ」

ジランドは、そう言って引き金を引く。

ローズは、刀を振るって銃弾を弾いた。

「だったら、こいつだ！」

そう言つてジランドの銃口に光が集まる。

「エアリアルレーザー！」

突如銃から放たれた光線をローズは、何とか体を捻つてかわす。

「つつ！」

だが、完全にかわすこと叶わず、肩に少しもらつてしまった。

ジクジクと染み渡る火傷のような痛みによりローズは、思わず顔をしかめる。

「ボルテックチェイサー！」

そこにジランドが雷の銃弾を放った。

雷光の球は、動きを止めるローズに襲い掛かる。

「守護方陣!!」

ローズは、二刀を地面に刺すと青白い光の陣を発生させ、威力を殺す。

「……ぐっ！」

いくらか、威力は殺せたがそれでもダメージを食らった。

ローズは、雷光の球を喰らい倒れこむ。

「ローズ！」

ジュードが瞬時に共鳴^{リンク}をし、レストアで助け起こす。

ジランドは、容赦無く二人に銃口を定める。

「させるか！」

ミラとレイアが共鳴^{リンク}をし、武器を振るう。

「ちっ！サドンベイカー!!」

ジランドは、一歩下がると同時に銃弾を放つ。

二人は思わず足を止め防ぐ。

しかし、ジランドの意識は、ローズ達からミラたちに移った。

「ジュード!!」

「わかった！」

ローズは、その隙を逃さない。

やっときたチャンス逃さない。

ジュードとローズは、拳の衝撃と剣の斬撃を地面に走らせる。

「魔神連牙斬!!」

共鳴^{リンク}術^{アーツ}は、ジランドに届き彼を吹き飛ばす。

「っ！」

ローズは、先程食らった左肩から走る痛みに顔をしかめる。

「エリーゼさん、治療を」

「はい！」

ローズの状態に気付いたローエンは、エリーゼに治療の指示を出す。杖を構え精霊術の詠唱を始める。

「させるか！」

起き上がったジランドは、エリーゼに向かって銃弾を放つ。

「!!」

驚愕するエリーゼを他所にアルヴィンは、エリーゼを抱えて横に跳ぶ。

からん、とその瞬間杖が落ちる。

「あつぶねえ……………」

「アルヴィン！」

エリーゼは、安堵したように言う。

アルヴィンは、地面にエリーゼを下ろすとエリーゼに代わって杖を取りに行く。ローズも同じことを考えていたらしく二人は杖のところまで走っていく。

「鬱陶しい……………セルシウス！奴らを止めろ！」

その瞬間ジランドからセルシウスに指示が飛ぶ。

セルシウスは、ホームズを蹴り飛ばと地面に手をつき、床に冷気を流す。

「マズイ！」

ミラは、そう言うとりリアルオーブをフルに活用して詠唱を短縮する。

「アリーヴェデルチ!!」

ミラの精霊術が完成するとエリーゼの杖に向かっていたローズとアルヴィンは、宙に浮いた。

「な……!!」

ローズは、宙に浮きながら思わず口に出そうになった文句を地面にいるミラ達を見て飲み込む。

宙に浮く二人を除いた面々は、体の半分を氷漬けにされて身動きを止められていた。

言葉を無くしている間にローズとアルヴィンは、地面に落ちた。

「ミラ! みんな!!」

「安心しろ、ローズ。ちゃんと生きている」

「ええ。安心してください」

ローズの悲壮な声にミラとローエンは、顔をしかめながら精一杯の笑顔で返す。冷たさは過ぎ去れば痛みとなり襲いかかる。

ジュードやエリーゼ、レイアも辛そうに顔をしかめる。

「ちつ。二人逃したか……まあい、い」

ジランドは、そう言うのと立ち上がったセルシウスに指示を出す。

「やれ、セルシウス」

「ハイ、マスター」

すると冷気が今度は宙に集まる。

間違はなく次に飛んでくるのは、あの、氷の矢だ。

「やめて」

ローズは、目を恐怖で見開く。

アルヴィンは、引き金を引くが、銃弾もセルシウスは、モノともせず防ぐ。

「やめろおおお!!」

叫び声とともに刀を構えて走り出した。

しかし、ローズでは間に合わない。

思わず溢れそうになる涙をこらえ、ながら走る。

ローズを無視して氷の矢を作るセルシウス。

そんなセルシウスの顔に見覚えのある黒い霞を纏った安全靴が現れる。安全靴の先を目で追うと空中で逆さまになったホームズが、セルシウスに向かって蹴りの構えを取っていた。

現れた安全靴は、黒いのを纏ったまま、セルシウスの顔面を捉えた。

それにより集中力が切れたのか、冷気は氷の矢を形作ることなく霧散した。

逆さまだったホームズは、くると回転し、足から降りる。

「ヨル！」

ホームズの言葉にヨルは、生首になると半身が氷漬けになっているミラへと飛んでいく。

「よせーホームズーヨル！」

それをミラが止める。

そう、氷の矢という精霊術を使うセルシウスだ。そんな相手に自分の武器を手放すような事やってみようなんてことはあってはならない。

セルシウスは、直ぐに矢を用意してホームズとヨルに向かって放った。

「?!」

ヨルとホームズは、自分達に飛んできた氷の矢を睨む。

ヨルは、ミラの氷を食らうのをやめやめ、自分に向かってくる氷を丸呑みにする。

ホームズは、かわそうとして体を捻る。

「っ痛う!!」

左腕から走る痛みに顔をしかめる。

そのせいでホームズの反応が僅かに遅れた。

そこを氷の矢は、無慈悲に襲いかかる。

かわしきる事が叶わなかった氷の矢は、ホームズの右腕を貫いた。

白銀の矢は、ホームズの腕から流れる血で真っ赤に汚れていた。

「あぐっ……………」

ホームズは、突如走った激痛に思わず膝をつく。

役目を終えた氷の矢が姿を消すとホームズの右腕にはポツカリと大きな穴が空いていた。

「ホームズ!!」

エリーゼは、何とか精霊術を唱えようとするが、杖もなくそして、体にじわじわと響く氷からくる痛みに集中をかき乱され、発動できない。

「右腕、もらった」

セルシウスはその言葉と共にホームズの首に右腕を当て壁まで走りそのまま壁に叩けつける。

「ホームズ!!」

「おおっと」

ホームズの援護に向かおうとしたアルヴィンとローズをジランドが止める。

「セルシウスを倒されると困るからな」

ジランドは、そう言つて銃弾を放つ。

ローズとアルヴィンは、かわす。

「マクスウェル達には、ゆっくりと凍傷にでもなつてもらおう」

「ジランド……」

ローズは、ギリつと歯軋りをしながらジランドを睨みつける。

何としてもミラ達を助けに行きたいが、それをジランド達は許さない。

ホームズもセルシウスに押さえられ動けそうにない。

ホームズも必死に拘束から抜け出そうとしているが、両腕が使えない為、どうしようもない。

(どうすれば……)

「ローズ! ホームズ! アルヴィン! ヨル!」

その時ミラの声が響く。

「私達の事はいい。お前達は、セルシウスとジランドに集中しろ!」

ホームズは、セルシウスの脇に蹴りを打ち込み拘束から抜け出す。

「何を言ってるんだい！直ぐにヨルを飛ばすから……」

「ホームズ」

ホームズという言葉がミラが遮る。

「私はお前を信じたぞ。お前は、私を信じられないのか？」

ホームズは、言葉を飲む。

ミラ以外も皆同じ顔をしている。

ホームズは、それを見ると大きくため息を吐いた。

「つたく……この強情っぱり」

「お前には負けるさ」

ホームズは、ヨルに視線を向ける。

ヨルは、それに応えるようにホームズの右腕に尻尾を巻きつけ止血する。

「わかったよ。女の言葉を信じるのが、モテる男の条件だしね」

「ああ、荷物持ちな」

「そつちのもてるじゃないよ！」

ヨルの悪態にそう返すとミラ達を見る。

「おれが言うのも何だけど、裏切るんじゃないよ」

「ああ。私はお前とは違うからな」

ホームズは、ミラの軽口を聞き流すとセルシウスを睨みつける。

ローズとアルヴィンが助けに行こうとするがジランドに阻まれる。

「この、本当に邪魔くさい！」

刀を握る手に力を込めるローズ。

そんなローズの頭の上にアルヴィンがポンと手を置く。

「セルシウスの事は、ホームズに任せるぞ。俺たちはジランドを倒す事に集中するぞ。

ホームズやミラ達を助けるのは、その後だ」

アルクノアだったアルヴィンと共闘をする。

ローズの胸に感情が渦巻く。

しかし、首を振ってそれを打ち消す。

「いいわ。それでいきましよう」

そう言って左肩の痛みを顔をしかめる。

(これは、無理そうね)

ローズは、動かしづらい左側にある刀を納刀する。

「フン、両腕の使えないホームズが倒れる前に助けに行けるといいな？」

「は！舐めんよ」

アルヴィンは、ニヤリと笑う。

「あいつは……………」



「どうやら、お前に助けはなさそうだな」

左腕のないセルシウスは、そう言ってホームズを見る。

対するホームズ両腕をぶらりとだら下げ動く気配を見せない。

「両腕の使えないお前では、私に勝つなど無理だ」

セルシウスは、ホームズの右腕を見る。

「あの時、マクスウエル達を助けようとしたのは、失敗だったな
そんな事をしなければ、まだ勝機はあったろうに」

そんなセルシウスの言葉を無視してホームズは、剛招来を自分にかける。

「言ったはずだよ。『後悔の時間は終わりだ』と。それに……」

ホームズは、一気に距離を詰め、足払いをかける。

「!？」

突然払われた足にセルシウスは、対応できずそのまま倒れる。

ホームズは仰向けに倒れたセルシウスの顔を踏みつけた。

「おれには、足がある。両足がある」

そう言って更に足に力を込める。

「君達を踏み躪るのにこれ以上のものはいらないさ」

「どんな状況であろうと蹴りをつける奴だ」

アルヴィンとローズは、その言葉を合図に踏み込んだ。

急転特攻

「…………どけー！」

セルシウスは、地面に手をつき氷の柱を出現させた。

ホームズは、セルシウスから離れ氷の柱をかわす。

「ちっー！」

思わずこぼれた舌打ちに構わずセルシウスは、起き上がった。

そしてホームズに右の拳打を放つ。

その拳をホームズの顔をかすめる。

「っのおー！」

ホームズは、掠めた拳に構わず身体捻りセルシウスに蹴りを放つ。

セルシウスは、一步下がりがかわす。

ヨルは、無言で黒球を吐き出す。

空を切った蹴りをホームズは、そのまま身体を回す。

セルシウスは、背中を見せたホームズに再び拳を放つ。

しかし、その拳が届く前にホームズの身体が再びセルシウスと向かい合った。

その右足には、いつもの黒霞がまとわりついていた。

「うおらー！」

遠心力と黒霞、そして剛招来を乗せたホームズの右足の一撃がセルシウスの身体に響き渡る。

「ぐっ……い！」

動きを止めたセルシウスにホームズは、畳み掛ける。

「獅子戦哮・焰!!」

左足から現れた炎の獅子がセルシウスに襲いかかった。

「ガアアっ！」

炎に焼かれた氷の大精霊は、辛そうに声を上げる。

しかし、すぐに歯を食いしばり獅子戦哮で炎を消し飛ばす。

ホームズがその荒技に目を向いている間にセルシウスは、ホームズの左腕に回し蹴りを放つ。

「——っ!!」

声にならない声が響き渡る。

気を強く保たないと気絶してしまうレベルだ。

腕に走る激痛に気を取られたホームズにセルシウスは、腹に向かって拳を固め殴りつ

けた。

しかし、拳をホームズは、防ぐ。

セルシウスの拳は、ホームズの黒霞を纏った右足の裏と接していた。

「残念」

ホームズは、ポンチヨを翻しそのままセルシウスの顔の側面に踵から回し蹴りを放つた。



「レインバレット！」

降り注がれる銃弾。

アルヴィンとローズは、急いでその場から離れる。

「これ以上、その技を食らうつもりはないわ」

「こつちからも行くぜ」

アルヴィンは、そう言つて銃口を天井に向ける。

「レインバレット！」

「ぐっ！」

アルヴィンからの予想外の反撃にジランドは僅かに傷を負う。

ローズは、ちらりと凍らせられているレイアを見ると詠唱の体制をとる。

「速く！速く！だんだん速く!!どんどん速く！」

そう言い終わると刀を払う。

「アツチエランド・クイックネス!!」

現れたマナは、ローズを纏う。

「クイックネス？」

レイアは、ローズの詠唱を見て納得する。

(そう言えば何回か見せたなあ……………)

だが、自分のクイックネスと何かが違うのだ。

(アツチエランド?)

ローズは、右腕の刀に力を込める。

「魔神剣！」

刀は、一つしかない為、いつものように二つ斬撃は飛ばない。

案の定ジランドは、かわす。

しかし、そこをアルヴィンの魔神剣が襲いかかる。

「蒼破刃!」

地を這う剣戟をかわそう下に目を向けていたジランドの身体に空を切るローズの剣撃が襲いかかった。

「ぐあ!!」

思わずよろめくジランド。

ローズは、そこを逃さない。

「アルヴィン!」

「おうよ!」

アルヴィンとローズは、リリアルオーブを結ぶ。

ローズは、アルヴィンの大剣の上に乗る。

「発射の準備は万端ね?」

「ああ、飛んでけ!」

アルヴィンは、大剣を大きく振りローズを飛ばす。

「飛天翔星駆!!」

ローズは、そのままジランドに突っ込んだ。

ジランドは、慌てて銃身でローズの刀を防ぐ。

ローズは、鏢迫り合いをせず直ぐに間合いを取り、刀を振るう。この近距離で刀を振るわれてはジランドは、銃を使えない。

「ちっ！セルシウス！」

ジランドからセルシウスに再び指示が飛んだ。



「来たぞ！」

「了解！」

ヨルの声にホームズは、直ぐに左脚に炎を纏う。

「紅蓮脚!!」

冷気を発生させようとしていたセルシウスは、ホームズからの炎の脚に意識を取られた。

「まだまだあ!!」

今度は、黒霞を纏った右足で蹴りつける。

「もう一発!!」

踏み替えた炎の脚が再びセルシウスを襲う。

セルシウスは、まだホームズではなくジランドを助けようとしている。

忠実に命令を守ろうとしている。

そうジランドに従わざるを得ないのだ。

一回目を見たときは戸惑った。

二回目は思い切り蹴飛ばされた。

三回目にしてようやく、ホームズとヨルは対応した。

ヨルは、ジランドからの指示が飛ぶその瞬間をホームズに教え先手を取ったのだ。

「更に一撃!」

踏み替え黒霞の脚を頭上から振り下ろす。

前のめりには倒れるセルシウスにホームズは、左脚の用意をする。

「止めの一撃!」

ホームズは、倒れるセルシウスを蹴り上げた。

「……………貴様」

セルシウスは、ギロリと睨む。

しかし、ホームズの攻撃は止めの言葉とは裏腹にまだ続く。

「だめ押しにもう一発!!」

蹴り上げた顔面に脚をぶつける。

身体を縛るジランドの援護の命はまだ続いている。

だが、ホームズはそれを許さない。

再び高く掲げられた脚がそれを告げていた。

「君の相手は、このおれだ」



「くそっ！役立たずが!!」

「そんな感想しか持てないのね」

ローズは、刀を振るう。

先ほどからローズの刀は、止まることなく流れるように振るわれ続けていた。ジラランドは、銃身で受け流している。

ローズの刀はジラランドには届かない。

(まあ、所詮女の力。大したことはない)

「使える腕も減って、手数も減ったしなア!!」

ジラランドの込めた力にローズは、思わずよろめく。

よろめいたローズの顔面をジラランドは、銃身で殴りつけた。

「ぐっー」

思わず目を閉じたローズに銃口を合わせる。

「させるか!!」

アルヴェインの大剣がジラランドには襲いかかる。

ジラランドは、一歩引いてかわすと同時に、ボルティックチェイサー放った。

アルヴェインは、僅かに身体そらしてかわす。

ローズは、再び刀を振るう。

腕を切るとるように。

ジラランドはそれを紙一重でかわす。

そんなジランドには構わずローズは先ほどと同じように剣を振るう。

再び、ジランドはローズの攻撃を銃身で受ける展開になった。

アルヴィンは、ローズに気を取られているジランドを背後から斬りかかる。

「調子に乗るなよ」

ジランドは、懐から金色の銃を引つ張り出す。

アルヴィンは、動きを止める。

「そいつは!？」

「その通り」

言葉と共に放たれた銃弾は、アルヴィンの銃を弾き飛ばした。

「……………なるほどなア」

ジランドは、ローズを睨みつける。

「貴様のせいで弾がそれたか……」

罅迫り合いをしているローズをジランドは、忌々しげに睨むと今度は、ローズの額にその銃を突きつける。

「———っ!!」

ローズは、瞬時にかわし、距離を取った。

その反射にジランドは、思わず目を向く。

「……………驚いたな」

「それは、こつちのセリフよ。まさか銃を二つ持つてるなんて思わなかったわ」

「ああ、これか？」

そう言つてローズに銃口を定める。

この距離では下手に動けない。

アルヴィンは、悔しそうにそれを睨みつける。

「それは、父さんのものだ。どうしてお前が……………」

「さて、なんでだと思ふ？」

意地悪く笑うジランドにアルヴィンは、ギリと歯軋りをする。

「……………貴方、本当に最低ね」

ローズは、刀に力を握る手に力を込める。

「怖い顔だな。だが、それだけだ」

そう言つとジランドは、再び撃鉄を下ろす。

「さよならだ、お嬢さん？」

ジランドは、引き鉄を引いた。



「何?」

もう何度目かわからないかかと落としをセルシウスは、受け止めた。

「マスターの有利になったようだ」

そう言つてホームズの腹に今度こそ拳を打ち込む。

「——ツカハ!!」

ホームズは、地面を転がる。

背中を丸めてえづくホームズをセルシウスは掴み上げると蹴りを放つ。

再びホームズは、転がった。

「先ほどは、やりたい放題やつてくれたな」

ホームズは、飛びそうになる意識を無理やり繋ぎとめる。

そんな努力をするホームズに再び蹴り飛ばす。

「源^{オリジン}靈匣という道具になったとは言え、私は大精靈だ」

ホームズは、胃の中のを吐き出す。

「なめるなよ、人間」

氷の大精靈の名に相応しい絶対零度の声音で睨みつける。

ホームズは、口元を吹き、ニヤリと笑う。

セルシウスは、再び蹴り飛ばす。

壁まで弾かれたホームズ。

ホームズは、壁伝いに身体を起こす。

「君こそ、おれ達を舐めるんじゃない」

「……………そうか」

セルシウスは、そう言うとホームズに向かって全体重をのせ拳を放った。



「どういふことだ!?!」

ジランドは、不思議そうに目の前の光景を見ている。

銃に撃たれたはずのローズが、普通に立っているのだ。

「くそー!」

もう一度放つが、ローズには当たらない。

先ほどから同じ場所にいるというのに、何故か当たらない。

「どういふことだ!?!」

「忘れたのかしら? それとも知らないのかしら? はたまた、その両方かしら?」

ローズは、納刀する。

「私には、クイックネスがかかっているのよ。刀を使えば使うほど速くだんだん速くなるタイプのがね?」

「まさか?!」

「気づかなかったの? 貴方の服、綻びだらけよ?」

ジランドは、そこで驚いて自分の服を見る。

ローズの言う通りジランドの服はボロボロだった。防げていたつもりだった。

大したスピードではないと、たかを括っていた。

しかし、それは自分が気付いていなかっただけなのだ。

徐々に上がっていったスピードに全く気付いていなかったのだ。

ローズは、屈んで抜刀術の構えを取る。

「蹴りをつけるわ。最高速度よ、かわせるよう祈ってなさい」



「なに?!」

セルシウスは、驚愕の表情でホームズを見ていた。

ホームズは、セルシウスの拳を動かないはずの左腕で防いだのだ。拳をしつかりと盾は受け止めていた。

「どういふことだ!?!左腕は、砕けて動かないはずじゃ……」

「だよね。骨が砕けたら、動かないそんなの常識だよねえ」

「……………まさか」

「そのまさかさ」

ホームズの左腕には、黒霞が纏わり付いていた。

バージンは、非常識だ。

今のホームズの左腕は、骨が砕けたら動けないと言う常識が効かない。

下じゃないところを下にする力とばかり思っていた。

しかし、もしかしてというホームズの思いつきで今に至るのだ。

「出来るかどうか怪しかったけど、やってみるもんだよねえ……………」

そう言いつつホームズは、黒霞を纏った右腕でセルシウスの顔を掴む。

込められる力に手加減の余地はなかった。

徐々にセルシウスを空に持ち上げる。

みしみしと響く頭蓋の音が聞こえる。

ホームズは、獲物を前にニヤリと凶悪に笑う。

「行くぜ大精霊。とくと味わいたまえ」



ローズは、納刀したまま一気に走りこみ抜刀術にそのスピードを載せようとしていた。

しかし、下手に回り道をしてしまえばそれだけで、スピードが落ちてしまう。
(なんて、考えているだろうな)

ジランドは、向かってくるローズに引き鉄を引こうと構えていた。

そう、このまま行けばローズは、自分から銃弾に突っ込んでいく羽目になる。

それが分かっているからこそ、ジランドは、笑っていられるのだ。

ローズは、そんなジランドの思惑に構わず、踏み込んだ。

(来た！)

ジランドは、自分の銃弾の引き鉄を引く。

しかし、銃弾が打ち出せれる様子はない。不思議に思つて、銃を見るとそこには、銃がなかった。

いや、もつと正確に言うなら、ジランドの腕自体がなかった。

代わりにあつたのはアルヴィンの大剣だ。

普段使わない腕で降つた大剣だったのでジランド右腕を切るのに精一杯だった。

「やれ、ローズ」

アルヴィンは、肩を押さえながら、ニヤリと笑つた。

黒髪たなびかせ、距離を詰めるローズの白刃が鞘から銀色に輝き現れた。



「おおおおおおお!!!!」

ホームズは、セルシウスの顔を掴んだまま反対の壁まで走っていた。

セルシウスは、抵抗しようとするがこめかみを握る握力でそれどころではない。

そして、そのまま壁に叩きつけた。

壁には、ヒビが入る。それがどれだけの力で叩きつけられたのか、はつきりと告げていた。

ホームズは、壁に叩きつけたセルシウスから、徐々に距離を置く。

だが、戦いは、まだ終わっていない。

セルシウスの目はまだ死んでいない。

「だろうと思ったよ」

ホームズは、そう言うのと右脚の黒霞を消し、炎を纏う。

「ヨル」

「ま、これが本来の使い方だよな？」

ヨルは、そう言いながら黒球を吐き出す。
落とされた黒球は、ホームズの両脚で弾け黒霞となってまとわりつく。

そして、ホームズは、助走をつけてセルシウスに向かつて落ちていった



「ハアアアアアアッ!!」

鞘を走る白刃は、そのままローズのスピードを手に入れ、最高速度のままジランドを捉えた。

かわすことなど叶うはずがない。

鞘から現れた白刃は、そのままジランドを捉えた、斬り伏せた。



真っ直ぐにホームズは、セルシウスに向かっていく。

(盾を……………)

セルシウスは、氷の盾を出す。

しかし、

「俺の事、忘れてたろ?」

ヨルは、生首になるとセルシウスの出した氷の盾を飲み込んだ。

もはやホームズの自由落下を防ぐすべはない。

重力と言う強い力を得たホームズの炎の足。

セルシウスは、避けようとする。

終わりよければ？

「ぐっ、あああ」

ジランドは右腕のなくなった肩を抑え膝をついた。

ホームズの両腕からは、黒霞が消える。

セルシウスの方を見ると目を開けていた。

「……………」

「そう構えるな、もう指一つ動かせん」

ホームズは、その言葉を聞くとほうと一息つく。

「っ痛」

その時、全身を激痛が駆け巡る。

どうやら、非常識を使用したツケが回ったようだ。

立っている感覚がない。

そのままゆっくりと体が傾く。

ヨルは逃げるようにホームズから飛び降りた。

それをミラが片腕で支える。

「……………ミラ」

「よくやった、ホームズ」

ミラの言葉にホームズは、ニヤリと笑う。

「当然」

「ホームズ!!」

そんなホームズにジュード、レイア、エリーゼが慌ててホームズに駆け寄る。

黒霞の消えたホームズの両腕は、だらりとぶら下がっているだけだ。

「毎度毎度無茶ばかりして!!」

ジュードは、若干ご立腹のようだ。

「いや、まあ、今回ののは、おれのせいじゃ……」

「言い訳無用」

そう言うのと三人でホームズの両腕を治療し始めた。

ホームズの右腕に空いた傷は見る見る塞がっていく。

「というより、君達は、凍傷とかになってないの?」

不思議そうなホームズにレイアは、ジト目を向ける。

「ホームズが無茶をしたおかげで大丈夫だよ」

「なんか……感謝の念を感じないんだけど」

「はいはい、ありがと……うっ！」

ジュードは、キユツと左腕の包帯を締める。

「痛い！骨砕けたんだから、もっと優しくしておくれよ！」

「ホームズには、これぐらいがいい薬です」

エリーゼは、しらっとした目を向けながら、ローズの火傷後を治療する。

「助かったわ、エリーゼ」

『どういたしましてー』

レイアは、アルヴィンの傷の治療をする。

「やれやれ、皆さん無事でよかったです」

ローエンは、ホツホツホと笑っていた。

「いや、全然無事じゃないからね」

セルシウスは、そんな面々をぼんやりと見ていた。

自分との違いをまざまざと見せつけられているような感覚に陥る。

しかし、暖かな日差しを見るように不思議と悪い気はしない。

「また、貴様の負けだな」

ホームズが倒れるより前に逃げたヨルは、地面に寝ているセルシウスにそう声をかける。

「訂正。気分が悪くなった」

「そいつは良かった」

ヨルは、ハッと鼻で笑う。

セルシウスは、少しだけ笑って返した。

「勝てると思っただがな……………」

セルシウスは、自嘲するように呟いた。

「お前は、自分のことを道具と言った」

尻尾を振りながらセルシウスを見る。

「道具じゃ化け物には勝てん。敗因があるとするれば、それだ」

セルシウスは、ヨルの言葉を聞くと静かにそうかと頷く。

「結局、お前には勝てずじまいか……………」

「お前達だな、正確には」

ヨルはそう言うのと吐き捨てるように続ける。

「忌々しいことにな」

セルシウスは、発光し姿が消えかかっている。

「消える前に一つ答えろ。お前は俺に殺されたのか？」

「どうしてそう思う？」

ヨルは目の傷を尻尾で示す。

「それを隠していた氷の眼帯、俺は見たことがない。いつ付けた？」
セルシウスは、手で傷口を触る。

「ああ。お前に殺されかけてから、しばらくして出会った人間に言われたんだ」
ヨルは、その話を聞くとため息を吐く。

結局、ヨルが殺したと思っていただけの話だったのだ。

「……………なるほど、そこは俺の勘違いだったのか」

そんな悔しそうなヨルを見てセルシウスは、瞳を閉じ、ポツリと口を開く。

「……………一応言っておこう」

「何をだ」

「あの人間生きていたぞ。お前が封印された、その後も」

ヨルは、初めてそこで驚いた顔をした。

「……………死んだんじゃないのか？」

「お前が守りきったんだよ」

ヨルは突然のことに頭がついていけていなかった。

「まあ、この世界からは弾かれたがな」

続きの言葉を聞くと、ヨルは苦虫を噛み潰したような顔になる。

「あの馬鹿、まさかあの大精霊に口ごたえでもしたのか」

「すごい剣幕だった」

ヨルはため息を吐く。

「……つとに何処までも後先の考えない奴だ」

「まあ、もういないと思うが」

「当たり前だ。二千と五百年も経ってるんだぞ」

ヨルは呆れたように笑って返した。

「嬉しそうだな」

「さてな」

そう返したヨルの顔を見てセルシウスは、満足そうに笑う。

「私もお前も人間と出会った。きつとそれは、幸せなことだったんだろう」

ヨルはその言葉に目を丸くする。

人間を嫌うヨルとしては、聞き捨てのならない台詞だったのだろう。

しかし、ヨルにそれを否定する言葉は、出ない。

頭をよぎるのは、あの人々が寝静まった夜の出来事だ。

封印される前も、封印が解けた後も、あの夜空を見上げた日々がつまらなかつたとい

えば、それは嘘だ。

あの日々のことは、確かに残っている。

いや、忘れぬよう、いつも寝る前は夜空を見上げていた。

「心当たりがあるようだな」

「……………幸せかは、分からん。だが、思い出である事は確かだ」

ヨルの答えにセルシウスは、満足そうに頷く。

ヨルは、そんなセルシウスに文句を言おうとして口を開く。

しかし、セルシウスから発せられる光が強くなっていくのを見て言葉を飲み込む。

「さて、そろそろだな」

セルシウスは、そう言っつてふわりと宙に浮く。

発光し、姿はどんどん薄くなっていく。

「さよならだ、ヨル」

「ああ。じゃあな、セルシウス」

ヨルがセルシウスを見送っているとジランドが消えかけているセルシウスに手を伸ばす。

やっとな手に入れた力なのだ。

霊力野ゲートのないジランドの手に入れた貴重な力だ。

「ま、待て、消えるな！お前は…………」

「道具ではない」

ヨルは、そう言うとうジランド右腕の消えた後を叩く。
走る激痛に手を止め地面をのたうち回る。

「身の程をわきまえろ、人間」

激痛に顔を歪めているジランドをヨルは、思い切り見下ろしてそう言った。

セルシウスは、その間にふつと風が吹くように消えた。

ヨルは、それを視界の端に捉えるとホームズの元へと戻っていく。

「いいのかい？」

「十分話した。これ以上はない」

「そうか」

ホームズは、微笑んでそれ以上聞かなかった。

そして、直して貰った腕を支えに立ち上がろうとして硬直した。

痛いとかそう言うわけではない。

単純に身体が動かないのだ。

「……………あれ？」

「分かっているとは思いますが、アレだけの無茶をしたんだ。

しばらくお前の身体動かんど」

ヨルのじとつとした目で見られホームズは頬を引きつらせる。

「どうやら、何も考えず実行しようだ。」

ジュードは、呆れたようにため息を吐く。

「ローズも同じようにため息を吐くとホームズに肩を貸して立ち上がらせた。」

突然の行動にホームズは、目を剥いた。

「何せ、ローズがホームズを助ける理由はないのだ。」

別にローズがやらなくてもジュードが肩を貸してくれたらうし、ホームズと距離の出

来てしまったローズがわざわざやる理由はないのだ。」

「……………なによ」

「いや、こっちのセリフなんだけど……………」

ホームズの本気で困惑した声をローズは、無視して歩みを進めることにした。

ようやく会話らしい会話をした二人を見てレイアとエリーゼは、どちらともなく笑い

あつた。

二人はそのままジランドへと近づいていった。

ジランドは、恨めしそうにホームズを睨んでいる。

「また……………ヴォルマーノか……………お前から親子は揃いも揃って……………」

「そう言う物を言わなくなった源^{オリジン}霊匣の装置を見つめる。」

「そうまでして、エレンピオスを滅ぼしたいのか……………」

「…………他の人にも言われたけれど、それってどういう意味だい？」

ホームズという言葉にジランドは、苦虫を噛み潰したような顔をする。

「エレンピオスは、精霊が減少し、マナが枯渇し消えゆく運命の世界だ」

「……………そう言えば、黒匣は、そう言う仕組みだったわね」

ローズは、納得したように頷いた。

「だから、異界炉計画を……………」

ローエンは、顎髭を触りながら頷いた。

「それだけじゃない。他にも必要なものが出てくる……………」

「黒匣の代用品、源霊匣^{オリジン}ってわけかい？」

「そうだ……………ようやくだったのに……………お前に邪魔されたがな」

ジランドの憎しみを込めた目をホームズさりと受け流す。

ジランドは、傷口を抑える。

恨みがましくホームズを睨むジランドにレイアが口を開く。

「でも、そんなの黒匣^{ジン}を使い続けたあなた達の自業自得じゃない!!」

ジランドの手の中にある源霊匣^{オリジン}は、淡い光となりながら消えていく。

「源霊匣^{オリジン}さえあれば、精霊を犠牲にせずにマナを得ることが出来る」

ジランドの言葉にミラは眉をひそめる。

「何を今更……二千年前、黒^{ジン}匣と共に生きていく道を選んだのは、お前達だろ」
「俺じゃねえ!!」

震える声で否定するジランドの哀れさに思わずミラも黙った。

そう、黒^{ジン}匣を使う事を選んだのは、ジランドではない。

先祖の選択の結果がこれなのだ。

ホームズも見ていて憐れだとは思う。

だが、

「同情する気にはなれないねえ」

ホームズは、そう言つて腰にぶら下がる小袋を見る。

「君は、色々な人に不幸を振りまきすぎた」

そんなホームズを見るとジランドは、みるみる顔を歪ませていく。

「どこまでも、忌々しい奴らだ。親子揃つて俺の思い通りに動かねえ」

「おれら親子に喧嘩売つたのが運の尽きさ」

ホームズがそう吐き捨てた瞬間、ジランドに黒い電気のようなものが現れた。

「ぐつ、あゝあゝあゝ!!」

それに伴つてジランドから苦悶の声が漏れる。

「おい！大丈夫か！」

アルヴィンは、慌てて駆け寄ろうとする。

ジランドは、それから逃れるように立ち上がった。

「例え、俺が死んだってリーゼ・マクシアの運命は、変わらねえ!!

お、俺達の計画は、断界殻シエがある限り何度でも続くぞ!!」

アルヴィンは、その様を間近で見続ける。

「ぞまあみやがれ!!」

ジランドは、そう叫ぶとそのまま仰向けに倒れていった。

ドサリという音が木霊し、みなはしばらく動かないジランドを見る。

「……………死んじゃったの？」

レイアという言葉に脈を取っていたアルヴィンがコクリと頷く。

「セルシウスを使った反動が来たのでしょう」

ローエンの言葉にヨルが頷いて答える。

「力を得るとはいえ、高い代償だな」

「力を得ただけ儲けもんみたいなもんだ」

ヨルは息絶えたジランドを見ながらそう答えた。

アルヴィンは、ジランドの手にある金色の銃を持つ。

「こいつは返してもらおうぜ」

そう言つてジランドの臉を降ろす。

『ジランドール・ユル・スヴェント』叔父さん

ホームズは、そこで少し驚いた顔をする。

「叔父さん、だつたんだねえ」

「まあな。ちいっと、複雑なんだけどな」

ヨルは、眉をひそめる。

「そうか、なるほど」

「？」

首を傾げるホームズにヨルが口を開く。

「お前の母親の話で、聞いた名前だ。スヴェントといえ、あつちでは名家中の名家らしいぞ」

ヨルは、そう言いながらアルヴィンを見る。

「チャラ男、お前もそうなのか」

「まあ、そうだったと言うべきか……また時間のある時に話してやるよ」

「ホームズもアルヴィンもそればかりです」

エリーゼは、じつとりとした目を二人に向ける。

ホームズとアルヴィンは、互いに顔を見合わせて困ったように笑いあつた。

「そう拗ねないでおくれ、エリーゼ」

そう言つてミラに目を向ける。

「これから、時間なんていくらでもできるんだから」

セルシウスを倒し、ジランドを倒した今、クルスニクの槍を壊すのを妨害するものは、

誰もいない。

がちやりと、ドアが開く音が背後で聞こえる。

ホームズが首を動かすとそこには、ガイアス一行がいた。

「既に勝敗は、決していたか……」

ガイアス達に構わずミラは背を向けたまま答える。

「悪いが、こればかりは譲れない。クルスニクの槍はここで破壊する」

そう言うミラは空に魔法陣を描く。

魔法陣が出来上がると、四方に炎、水、風、土が現れる。

燃え盛る炎と共にイフリートが、

湧き上がる水と共にウンディーネが、

吹き抜ける風と共にシルフが、

土煙と共にノームが、

それぞれ姿を現した。

「久しいなお前達」

ミラの声と共に四大精霊が、それぞれ反応を示す。
すると、シルフがヨルに気づく。

ミラは、シルフが何か言う前に口を開く。

「ああ。色々あつて雇った」

「雑な説明……」

ホームズは、ため息を吐く。

「また、時間のある時にゆっくり喋ってやる」

「どっかで聞いた台詞だねえ」

ホームズの言葉を無視してミラはそのままクルスニクの檣に向かって歩みを進めた。これで、ようやく蹴りがつく。

「——っ!？」

そう誰もが思った瞬間、彼らに重圧が襲いかかった。

みしみしと鳴り響く艦内とガラス張りに一瞬で入るヒビ。

まるで巨大な何かが現れたかのような重み。

一同は、立っていられるずそのまま床に押さえつけられた。

幕は降りず舞台は、続く。
ホームズとヨルの旅の終わりは、
今ではない。

全方塞がり

「な……………なんんだい……………これは……………」

ホームズは、上からの重圧に押しつぶされながら声を絞り出す。

アグリアは、床に這い蹲りながら、プレザに目を向ける。

「ババア！どうにかなんないのか!!」

「無理……………力が強すぎる……………」

ガイアスもウインガルも同じように動けない。

このままでは、全滅だ。

「ジランドの罠……………」

「馬鹿な……………精霊の死の気配は、感じなかった……………」

ミラはジュードの言葉を否定する。

ホームズは僅かに見えた光明に歯をくいしばる。

「だったら……………ヨル……………」

精霊術なら喰えるのだ。

しかし、ヨルは、押しつぶされながら何とか首を振る。

「無理だ……さつきから生首に変わろうとしてるが……」
そこで更に押さえつけられる。

「……この押さえつける力がデカすぎて出来ん……」

ホームズは、ヨルを恨めしげに睨む。

「気づきたまえよ……この……クソ猫」

「出来たら……苦労してないんだよ……このクソアホ毛」

ホームズは、その言葉に考え込む。

マナの気配、^{ゲート}霊力野の気配を察知するヨルがわからない。

何が考えられる？

何か邪魔なものがあつたと考えるのが自然だ。

「マナの気配を邪魔するもの……」

そこで、ホームズは、思いつく。

「そうか……四大精霊の出現……」

「そう言うことだ……」

ヨルは、押しつぶされながら答える。

「四大精霊のマナはデカすぎるんだ……出現とこの術の発動が被ったのが運の尽きだ……」

「解説もありがたい……けど……これをどうにかする手は……ないのかしら?」
ローズの言葉にジュードが思いつく。

「そうだ!クルスニクの槍だよ!槍は精霊術を打ち消す装置なんだ」

確かに、クルスニクの槍は断界殻断界殻という精霊を打ち消し、穴を開けた。
ホームズは、心底嫌そうに顔をしかめる。

「……まさか、こいつにすぎる日がくるとは、思わなかったよ……」

「まあ……やるしかないだろ……」

ヨルはそう言つてクルスニクの槍を睨みつける。

「分かつてるよ……」

ホームズも頷く。

とりあえず、愚痴はここまでだ。

槍を使う事には、了承した。

槍さえ使えばこの精霊術を打ち消す事ができる。

だが、それには……

「マナが必要だよね？でも、マナは、さっきのでもないんじゃないや……」
「という事は……………」

レイアの発言に気づいたエリーゼの言葉をローエンが引き継ぐ。

「ええ。この場にいる全員のマナを注げば或いは……………」

「命懸けだねえ……………」

ホームズは、そう言いつつもニヤリと口角を上げる。

「だが……………まあ……………生き残るのに賭けるものとしちゃあ、妥当だよねえ……………」

「おたくが言うと言説力が違うな……………」

ホームズの発言にアルヴィンが呆れながら返す。

「骨は拾ってあげますよ」

いつかのお返しとばかりにローエンが言うのとアルヴィンは、苦笑いを浮かべる。

皆が覚悟を決めたその時、ミラが無理矢理立ち上がった。

そして、槍の発動機に近づいていく。

発動機に辿り着くとミラは背を向けたまま皆に告げる。

「何も皆が命の危険を冒す必要はない」

その言葉にジュードは、目を見開く。

他の面子も一瞬何を言われたか分からなかった。

「ダメだ……ダメだよ！ミラ！」

真つ先にその言葉の意味を理解したのはジュードだった。

「何故だ……あんたには、なすべき使命があるだろう！」

「断界殻シエが消えればアルクノアの計画は、完全に潰える」

そう言つてクルスニクの槍の制御盤までたどり着いた。

「……やめなさいよ……」

ローズは、振り絞るように口を開く。

「やめてよ……お願いだから……」

ローズの悲壮な声でもミラは止まらない。

皆が命を賭ける事を覚悟したようにミラもマクスウェルとして命を賭ける事を覚悟したのだ。

「……………ない……………」

ホームズからポツリと漏れる言葉にミラが振り返る。

「ふざけるんじやあない!!死ぬなんて許さないよ！」

ホームズの怒鳴り声が辺りを震わす。

「ホームズ……」

感情を露わにして自分を怒鳴りつけるミラは少し面食らった。

「報酬はどうする気だい!? 約束したろう!?

借金は?! 君、おれの金をいくら使い込んだと思ってるんだい!?

王様ゲームじゃ、君だけいい思いしやがって! その借りも返してない!

後は……: そうだ! 君、おれの作った不味い料理しか食ってないだろう?! おれの作った菓子は上手いんだぞ……: 後は……: 後は……:」

怒鳴っていた筈のホームズの声は後に行くほど震えていた。

「冗談じゃない……: おれは……: 僕は……: 知り合いが……: 仲間が……:」

そこで満足そうに笑うマーロウの顔がよぎる。

その後、ルイズの困ったように笑った顔がよぎる。

「死ぬところなんてもう二度と見たくない!!」

ミラはあきれた顔をする。

「お前は、こういう時だけ我儘だな」

それから起動装置に向き合う。

「すまないな、ホームズ、みんな」

そして最後のスイッチ押そうと手を伸ばす。

「ダメだ……: ダメだよ! ミラ! 勝ってもミラがいないんじゃない!」

そう言つて今にも飛び出しそうなジュードをアルヴェインが止める。

「やめろ」

「何言ってるんだよ！アルヴィン！このままじゃミラが本当に死んじゃう!!」
ジュードは、そう言っつて何とか這いつくばって進もうとする。

「ミラー！ミラー!!」

ミラはジュードの泣くような叫びを振り払うようにスイッチを押した。

周り飛び交う大精霊は、クルスニクの槍にマナを注ぐ。

ミラだけよりも更に確率は、上がる。

もうカウントを数えるだけになった。

「……………ダメだよ」

ジュードは、泣きそうになりながら顔を上げる。

「ミラがいなくなったら……………僕は……………」

ミラは振り返ってそんなジュードの顔を見る。

「そんな顔をするな」

そう困ったような顔で笑うとジュードに最後の言葉を告げる。

「さらばだ、ジュード」

そう言うのとクルスニクの槍を睨みつけ最後の力をクルスニクの槍に注ぎ込んだ。

「クソ！クソ！クソ！クソ！動け動け動け動け!!」

ホームズは、必死なつて動かそうとするが先ほどの反動で全く動けない。ローズも必死に身をよじつて起き上がろうとする。

だが、動かない。上からの重圧にローズは、立ち上がる事が出来ない。

「ヤダヤダヤダ!!」

ローズの口からは拒否の言葉しか出ない。

クルスニクの槍は、一同願いを無視してマナを重点した。

「ミラアアアアア———!!」

ジュードの張り裂けんばかりの慟哭が響き渡ると同時にクルスニクの槍は発動した。

轟音と共に今までなんども忌々しいと思つた閃光が照射され皆を押さえつけていた精霊術をかき消していく。

その眩い光が辺りを埋め尽くし思わず目を瞑つた。

一発逆転の策は確かに成功したのだ。

鳴り響く轟音もやがて止み、上から押さえつけられるような重圧も消えた。

まだ僅かジュード達は、ゆっくりとまぶたを開ける。

まぶたを開けた先には、装置の前に佇むミラの後ろ姿があった。

そして、ミラはそのまま、ゆっくりと左に流れるように倒れていった。

「ミラ!!」

ジュードは、立ち上がって慌てて駆け寄ろうとする。

しかし、その瞬間船が大きく軋む

船全体にかかっていた重圧は、船自体を大きく蝕んでいた。

天井から瓦礫が降り注ぎジュードの行く手を妨げる。

そして、瓦礫の一つは、真っ直ぐにクルスニクの檣の操作盤の前、

佇むミラに向かって落ちていった。

「ミリアアアアアアアア!!」

瓦礫に阻まれ進むことが出来ないジュードは、虚しく手を伸ばす。

だが、その手が届くことはない。

船はゆつくりと崩壊していき、海へと消えていった。

ジュード達を飲み込んで、ゆつくりと、しかし、確実に。

嵐の前の静寂

「……………プハッ!!」

動けないホームズをレイアとローエンが海岸に引つ張り上げた。

「助かった……………ありがとう」

ホームズは、そう言う^と海の方を振り返る。

そこには、もうジルニトラは無くそして、海岸にはもうミラはいない。

ホームズは、思わず歯噛みをする。

「あの馬鹿女……………勝手なことしやがって……………」

悔しそうに悲しそうにこぼすホームズに一同は、俯く。

ローズは、ミラの最後を思い出す。

「最後の最後まで、本当に……………」

俯きながらローズは、そう零す。

自分の命と引き換えに断界殻^{シエル}を壊し、アルクノアの計画を潰した。

どこまでも人と精霊の為に生きたミラにローズは、続く言葉が見つからない。

「……………嘘だろ……………」

アルヴィンは、水平線を見ながら震える声で呟く。

「……………断界殻シエが消えてない……………」

その言葉にローズは、慌てて振り返る。

そこには、いつもと変わらない夕焼けの空が広がっていた。

「は……………」

アルヴィンは、乾いた笑い声を漏らす。

「空は紅いまま……………エレンピオスも見えない……………これじゃあ……………」

アルヴィンは、泣きそうな顔でこちらを振り返る。

「何のためにミラを見殺しにしたのか、分かんねーよ……………」

言葉を続けるとアルヴィンは、何処かへ歩き始めた。

「アルヴィン、どこ行く気だい？」

アルヴィンは、ホームズズの質問に立ち止まる。

「おたくも、そこにいない方がいいんじゃないのか？」

ホームズズの質問には、答えずそう一方的に告げるとそのままアルヴィンは、歩いて立

ち去ってしまった。

その質問の意味のわからないホームズではない。
否定したい。

だが、その言葉を信じて貰える確信がホームズにはない。
今何を言っても白々しく聞こえる。

そう考えてしまえば、ホームズに言葉を続ける力はない。
それがそのまま振り向くことを躊躇わせる。

ホームズに変わりヨルは、平気な顔して振り返った。

ヨルと目のあつたローズは、目をそらした。

ローズのその行動はヨルに全てを悟らせた。

「とりあえず、今は休みませんか？」

ずっと黙っていたローエンは、そう言った。

ここは港、宿もある。

休むのにこれ以上はない。

誰も異議を唱えず一行は、そのまま宿屋へと向かった。



「ふむ……大分回復したねえ……」

皆が寝静まるとホームズは、レイアの用意してくれた杖を使い部屋を抜け出した。

全く動けなかったホームズだったが、一眠りしたら杖を使えば歩けるところまで回復した。

ロビーにきたホームズは、腰を下ろす。

ヨルは、ホームズの肩から飛び降り向かいの椅子の上にちよこんと座る。

「で、何を考えているんだ」

「君が精霊術を喰えればこんな事には、ならなかったなあって所かな？」

「俺のせいだっっていうのか？」

ヨルは、ニヤリと笑う。

いつもの笑いだが、僅かに敵意が滲み出ている。

そんなヨルに構わずホームズは、続ける。

「君は、四大精霊が現れたせいで、マナが溢れ、あの精霊術の気配に気づかなかつたといっただね」

「ああ。単純にあのオンナの不注意とその時たまたま発動した精霊術のタイミングが合ってた……ただ、それだけの理由だ」

堂々とした物言いにホームズは、ため息を吐く。

「つたく、どつからどう聞いても言い訳にしか聞こえないよ……」
そう言って肩をすくめる。

「ま、だから、みんなのいない時に話したかったんだけど」

ホームズは、そこで声を落とす。

「君は言ったね、『タイミングが合ってた、ただそれだけだ』って」
「ああ」

「合つてたじゃなくて、合せてたとしたら、どうだろう？」

ヨルは、ホームズの言葉に目を丸くする。

「お前、何を言ってるんだ？」

「四大精霊が現れる事を知る事ができ、そのマナのせいで精霊術に君が気付かない、それら全てを見越して、タイミングを合わせたとしたら？」

「阿保言え。人間にそんな事できるものか」

ヨルは、首を振る。

「それにいいか？俺は最重要秘密だ。そうそう対策なんて立てられる訳がないんだよ」

「それは、前までの話だろう？ここに来るまでの間に一体何回精霊術喰らいの力が発動しなかった事があった？」

ホームズ達の情報は、逐一アルヴィンが広めていた。

知らないと思わない。

「だが、結局最初に戻るが、人間にそんな芸当が出来るとは思わんぞ」

「……………なんだ」

ホームズは、真顔で片眉を少しあげる。

「分かってるじゃないか」

「あ？」

ヨルは、不思議そうに首を傾げる。

ホームズは、煙管を咥え、ヨルに向かつて杖を突きつける。

『不可能を消去して残ったものは、如何に奇妙なものであつても真実となり得る』
そう言つたホームズの言葉にヨルは、首をひねる。

「おい、どういう意味だ」

ヨルの質問には、答えずホームズは立ち上がりひよこひよこ歩いていき、くるりと振り返る。

「内緒。男は、秘密があつた方が格好良いからね」

ホームズは、静かにそう言うとそのまま部屋に向かつて歩き出した。

ヨルは、掃除ロッカーを睨む。

「あいつ、お前に気づいてたぞ」

そう言う椅子から降りる。

「ジャリ。お前もとつとと寝ろ。あの馬鹿何かに気付いてるぞ」

エリーゼは、ゆっくりと掃除ロッカーから現れた。

「ホームズは、一体何に気づいてるんです……か？」

「知らん。だが……」

ヨルはティポとエリーゼを睨む。

「ホームズは、お前がいることに気付いてあんな風に煙に巻いた言い回しをしやがった」

ヨルは尻尾を振りながら続ける。

「きつとロクなことじゃない。寝れる時に寝とけ」

ヨルの言葉にエリーゼは、首を縦に振らない。

エリーゼは、黙ったままギュッとティポを抱き締める。

「アルヴィンは、何処かへ行つてしまいました……………」

「……………」

それから俯いたまま言葉を続ける。

エリーゼは、不安なのだ。

エレンピオス人のアルヴィンは、ジュード達の元を離れた。

なら次、離れるとしたら？

そんな事、考えるまでもない。

「ホームズとヨルはいなくなったりしませんよね？」

ヨルはエリーゼの質問に答えずそのまま歩き出した。

エリーゼは、それを見送るがどうしても部屋に戻る気にはなれなかった。

起きた時にホームズ達がいらない。

そんな想像がエリーゼの眠りを妨げる。

『ミラもない、アルヴィンもない、ホームズとヨルはいなくならないよね？』
「当然です」

エリーゼは、そう言つてそのまま椅子に腰を下ろした。

立つ鳥跡を残さず

「……………ゼー！エリーゼ！」

突然揺り起こされエリーゼは、瞼を擦って起きる。

目の前には、レイアの顔があった。

どうやら結局エリーゼは、寝てしまったようだ。

「レイア？」

見るとあの時と同じ椅子に腰掛けていた。

「大変だよ！ホームズ達がいなくなった！」

「……………え？」



ローエン、ジュード、ローズも遅れて出てきた。

「……………ホームズ……………」

ローズは、震える声を押し殺す。

あの時、目を逸らしてしまった自分が憎くて仕方ない。

「まだ、そう遠くまでは、行っていない筈です。手分けして聞き込みをしましょう」

ローエンの言葉にジュード達は、頷く。

「もしかして、碧い目して黒猫を肩に乗せたにいちやんの話してるのか？」

近くで聞いていた宿屋の主人が声をかけてきた。

「あのにいちちゃんなら、イル・ファンの行き方おれに聞いてきたぞ」

こんなに早く情報が手に入るとは思わなかったのだろう。

しかし、手に入った情報を使わない手はない。

一行は、そう思っ歩き出そうとする。

「馬鹿言ってるんじゃないよ、アンタ。そのあんちゃんなら、ル・ロンドに行く船を聞いてきたよ」

「?」

新しく出てきた情報に皆が首を傾げていると更に朝食を食べていた老人が口を開く。

「いや、僕は綺麗な滝が見えるところはどこかと聞かれたぞ」

「あ、おれはニアケリアは、どこだって聞かれた」

「僕はハ・ミルは、何処か聞かれた」

「私はカラハ・シャルへの行き方聞かれた」

「わたしはね、イル・ファンへのいきかたをきかれたよ」

老人の言葉を皮切りに方々ほうほうからホームズの目的地が次々と出てくる。

「これ………どういう事?」

レイアの言葉にローエンは、顎髭を触る。

「恐らく、ホームズさんでしょう。私達を巻こうとしていますね」

ホームズは、後を追われる事を可能性の一つとして考えていた。

つけられる事はホームズとしては望むところではない。

だつたら行先は、絶対に完璧に隠さなければならぬ。

だが、物事に完璧はない。

ホームズはそれを知っている。

手掛かりを残さないなんて不可能だ。

だからこそ、ホームズはありとあらゆる情報をぶちまけた。行方を眩ませるのは諦め、時間を稼ぐことを選んだのだ。

「……………どこまでもホームズは……………」

エリーゼは、ギユツと拳を握り締める。

情報を隠す事にかけては容赦がない。

レイアも俯いてしまう。

一度見破ったとはいえ、そう何度も出来るとは思えない。

「また、居なくなってしまうんですね……………」

その時、エリーゼははっと気が付いた。

「ティポが居ないです」

エリーゼの言葉にジュード達は思わず息を飲む。

消えたホームズ達とティポ、やな予感が皆の頭をよぎった。

エリーゼは、瞼に涙を浮かべる。

「そんな……………ホームズどうして……………」

ローエンは、その言葉に頷く。

「確かに、今更そんな事をしてホームズさんに得などないはずですよ。」

いえ、もつと言えばホームズさんにとってティポさんにその様な価値はありません」

だが実際、ティポは居ない。

エリーゼは、震える声で叫ぶ。

「ティポ!!どこにいるんですか!!」

『ここだよー!!』

今までの空気をぶち壊すかの様に呑気な声が聞こえた。

声のした方、掃除ロボットの方を振り返るとエリーゼは、急いで扉を開けた。

『エリーゼー!!』

ティポは、扉が開くと同時にエリーゼの胸に飛び込んだ。

「ティポ!!」

『大変だよー!! ホームズが出て行っちゃたんだよー!!』

「知ってるわよ」

ローズは、そう返すとティポの腹に巻かれた紐を見つけ、眉を潜める。

「ティポ、後ろ向いて」

ティポは、ローズの言葉の通り後ろを向く。

【みんなへ】

ティポの背中には、そう書かれていた封筒が紐とティポの背中に挟まれていた。

ローズは、目を丸くするとそれを急いで開いた。

【みんなへ】

きようまで、どうもありがとう。勘違い
をしないでおくれよみんなという事が
つらくなつたから別れるわけじゃない。
ケンカもしたけど、楽しい日々だった。
ロクな思い出もなかったけどね

そんなわけでここでみんなとはお別れだ。
今日までありがとう。

それじゃあ

p. s テイポには、謝つといて
ホームズ・ヴォルマーノより」

「ホームズ……………」

ローズは、もう涙をこらえる事が出来なかった。

妙に言い訳くさいその手紙がホームズの隠し事を晒している様なものだ。

「ごめん……………私のせいだ……………」

ローズの手から手紙が一つ落ちる。

きつと、ミラならホームズをここまで追い詰める様なことはしなかっただろう。

ミラの様になりたいと願ったというのに結局このザマだ。

「……………ホームズ……………」

もう一度ここにはいない、昔馴染みの名前を呼ぶ。

ローエンは落ちた手紙を拾い上げ、眉を潜める。

「……………これから、どうしようか……………」

レイアの言葉にジュードも俯いたままだ。

今まで指針を決めてきたミラがいらない今、誰も行動を決めようがない。

「みなさん、今すぐホームズさんを追いましょう」

そんな空気を振り払うかの様にローエンの鋭い声が飛ぶ。

「……………ローエン？」

首を傾げているジュードにローエンが手紙を見せる。

「文章の初めを縦に読んでください」

ローエンの言葉にジュードは、不思議そうに首を傾げながら言われた通り読み始める。

「『きをつけろ』……………？ローエン、これって…………」

「ええ。恐らくホームズさんは、何かに気付いています。

そして、それを確かめに何処かへ行った。私達を置いて」

「危険を伴うから…………」

レイアは、ギョツと拳を握る。

「早く追わないと……………」

「どうやってよ…………」

エリーゼの言葉をローズがポツリと放った言葉で黙らせてしまった。

ジュードは、今までの情報を集め考える。

一つ、この状況に相応しい行く先を口にしていた人がいた。

「ニアケリアだ。多分ミラ絡みのことでホームズ何かに気付いたんだよ」

「何かあって？」

「多分、あの精霊術のことです」

ローズの言葉にエリーゼがポツリと呟く。

「昨日の夜、聞きました。ホームズあの時の事に何か気付いているみたいでした」
「でも、精霊術の事だったらイル・ファンに行くのが筋じゃない？」

ローズの言う事は一利ある。

そう、あそこは精霊術に関しては一級品の都市だ。

ジュードは、宿屋の主人のほうを向く。

「イル・ファン行きの船ってもう出ましたか？」

「いや、これから第一便が出るところだよ」

まだ、出て行っていない船。

「二応、聞きに行ってみるわ」

ローズは、そう言うのと船の受け付けまで走って行った。

「ローズさんの事も一利あります。けれども、もし船に乗っていなかったとしたら
……………」

「ニ・アケリアだね」

二人がそんな話をしているとローズが帰ってきて船に乗っていないことが分かった。

彼らの行く先は決まった。



「見えてきた、アレがニ・アケリアじゃない？」

ローズは、指を指して確認するとジュードは、ゆっくりと力なく頷く。

そう、ニ・アケリアに行くという事はそのままミラの死亡の事も伝えなくてはならないのだ。

気が重くなるのも仕方ない。

「みなさん、取り敢えず、まずは、ホームズさんです」

ローエンの言葉に頷きニアケリアに足を踏み入れた瞬間一行を鉄の匂いが襲った。

「何よ……………これ？」

そこには、

ニ・アケリアの人々の死体が所狭しと並んでいた。

「何よ……………これ！」

ローズは、必死に家族殺しの光景がフラッシュユバックしないよう抑える。

「誰が……………こんな事を……………」

「アルクノアに決まってるでしょ!!」

ローズは、そう言うのと刀を両刀引き抜く。

それに続くようにジュード達も武器を構え、辺りを見回す。

辺りに注意していると戦闘音が聞こえた。

皆はそれを聞くと、こくりと頷き音のした方に走り出した。

どうやら、町の広場のようだ。

目の前の家を越えれば、直ぐに辿り着く。

「来るな!!」

その瞬間ホームズの鋭い声が飛んできた。

その鬼気迫る声音に一瞬足が止まったが直ぐにローズは、踏み込んだ。

「ホームズ!!」

広場の真ん中でホームズは、膝をついていた。

身体からは、相変わらず血を流している。

「来るなって言っただろう!!」

ホームズの言葉にローズは、取り合わず、駆け寄ろうとする。

「あら？援軍かしら？」

その聞き覚えのある声にローズは、立ち止まり、思わず耳を疑った。

そして、声の発した本人を見て違うと言いたかった。

ローズは、震える声で別の言葉が続ける。

「どういふことよ………なんで、貴方が………」

遅れてやってきたレイア達も驚きで声が出ない。

「こいつがやったんだ………ニ・アケリアも、そして、あの精霊術も全部！」

ホームズは、キツと上空に漂う人影を睨みつける。

「このミューゼが全部やったんだ!!」

ミュゼは、口に手を当てフフフととても愉快そうに微笑んだ。

晴天の霹靂

「来るなって言つたらう……」

ホームズは、そう言いながらやってきたローズ達を睨む。

「気をつけろと言つたらう！」

そう、震える声でそう言うホームズに構わずジュード、エリーゼが治療に走る。

「だから、言つたら。あんな手紙残すべきじゃなかったんだよ」

ヨルは、そう言つてホームズを馬鹿にしていた。

「……………どういふことなの……ねえ！ホームズ!!」

レイアは、ミュゼに向かつて棍を構えながら尋ねる。

ホームズは、ぎりつと齒を食いしぼる。

辺りには血だらけで倒れている人々。

ホームズが来た時にはもうこの有様だった。

この村人の数に対して遺体の数が少ないところを見ると辺り構わず殺しているわけではないようだ。

だが、それは理由にならない。

この空中に浮かぶ精霊を庇う理由には、ならない。

「あのおれ達を押さえつけた精霊術を発動させたのは、ミュゼだったんだよ」
ホームズは、自分の推論を口にする。

ジュードは、その言葉に驚いて治療の手を止める。

「どういうこと……？」

「ヨルが精霊術を察知出来なかつたのは、四大精霊が現れたせいだ。

出現のタイミングとたまたまあつてあの押さえつけられるような精霊術が発動した」

「……それが……どうしたの？」

「それがたまたまじゃないとしたら？」

四大精霊が現れることを知ることができ、ヨルの精霊術喰いの弱点を知ったうえで合
わせてきたとしたら？」

エリーゼは、そこでホームズとヨルの会話を思い出す。

——人間にそんな芸当が出来るとは思わんぞ——

「人間には出来ない………そうです………人間じゃないなら!!」

「そう言うことだエリーゼ」

ホームズは、ゆらりと立ち上がる。

「おれはそれを確かめにきた。ミラ・マクスウエルに姉なんて本当にいたのか、ミュゼとは一体何者なのか!」

ホームズに指をさされたミュゼは、面白そうに笑う。

「何が可笑しいんだい?」

ホームズは、心底不愉快そうに聞き返す。

「ミラ・マクスウエルですって? フッフ本当は何も知らないのね」

「どういう意味です?」

ローエンの言葉にミュゼは、微笑んで返す。

「彼女、マクスウエルなんかじゃないわよ」

その言葉の意味をこの瞬間誰も飲み込むことは、出来なかつた。
いや、一匹だけ、例外がいた。

ヨルだけは、驚愕という感情に飲まれず、ミユゼを睨んでいた。
「そのシヤドウドもどきは分かっているようね？」

ミラはね、アルクノアを呼び寄せる為のただの餌。
マクスウエルなんてそんな大事なものじゃないわ」

「待つて！ミラは、人と精霊の為に頑張ってきたのよ!!それが使命だと、やるべき事だと」

「あなたこそ何を言ってるのかしら？」

ローズの言葉にミュゼは、小首を傾げる。

「私の話を聞いてなかった？ミラはね、アルクノアをおびき寄せる餌でしかないのよ。強いて言うなら、それが使命よ。」

アルクノアに命を狙われ、無様に自分の事を精霊の主だと信じ続けることがね？」

ミュゼは、ずつと笑みを崩さない。

「人と精霊を守るとか、そんなのないわ。全部与えられた、それが使命だと思ひ込まされた、ただの無力な人間よ」

空中で体育座りをして、そのままぐるりと一回転して逆さまの状態でホームズ達を覗き込む。

「そんな人間が人と精霊の為にとか言って命を張っちゃって、フッフ………」

その薄暗い嘲笑にホームズ達の背筋に寒気が走る。

これ以上は、聞いてはいけない。

そんなどろりとした予感がホームズ達を支配する。

しかし、ミュゼの言葉は止まらない。

「本当はあなた達も薄々分かっていたんじゃないの？」

ミュゼは、体育座りを解いてくるりと一回転して元に戻る。

「ミラが死んでしまったのに断界殻シエールが消えなかったその時に」

ミュゼから発せられたその言葉は、致命的な毒となつてホームズ達の心に回る。

「見たくないものから、目を背けて、盲目に信じて理想を押し付けて、本当に愚かね」
「……………じゃあ、君は、側で見ていておれ達の事を」

「ええ、ずつと笑つていたわ」

ミュゼは、また面白そうに笑い、必死に心が折れないよう耐えているジュードを見る。

「ねえ？ジュードは、気づいてた？ミラがマクスウェルとしての使命と、自ら死地に飛び込んでいく矛盾に悩んでいた事に？」

「え？」

情けないぼかんとした声を発し今までの事を思い出す。

たくさんあった。

気付いてもおかしくはない。

ミラは、何回かジュードに尋ねようとしていた。

しかし、ジュードは、今の今まで気づくことはなかった。

ジュードは、遂にそこで全くミラが見えていなかった事に気付いた。

「そんな……………じゃあ、あの時…………」

ローズは、甲板で何やら元気のなかったミラのことを思い出す。

あの時、ミラは確かに悩んでいた。

それにローズは、気付けなかった。
もうローズの両手に刀はない。

「ああ。あなたはミラみたいになるのが目標だったわね？ どう？ 現実を知って？ 今、あなたはどんな気持ちかしら？ 目標としていたものがニセモノなんて私なら耐えられないわ」

ローズは、何か言おうとするが口の中が乾いて声が出ない。

認めたくないこの気持ちを否定する言葉が欲しい。

だが、出てくるのは虚しい呼吸音のみだ。

呼吸によって流れてくる血の匂い。

ローズの両手から刀がするりと二本地面に落ちる。

「ミュゼ。もうやめたまえ。それ以上おれの雇い主を、仲間を侮辱する事は許さない」

ホームズは、そのままミュゼを睨みつける。

そんなホームズをミュゼは、涼やかな視線で流す。

「あなたに、いや、あなた達に何ができるのかしら？」

ミュゼの言葉に辺りを見回すと皆一応に項垂れている。

ミュゼは、それを見ると面白そうに髪を伸ばし、ホームズに叩きつけた。

その髪とは思えない重量に思わずホームズは、吹き飛ばす。

「ぐっ……………」

「因みに行っておくとね、私の使命は」

そう言つて見覚えのある青みがかつた黒い半透明な球体を作り上げる。

「断界殻シエの存在を知つてしまった人間を始末する事よ」

精霊術は、完成した。

「ヨル!!」

言われるより早くヨルは、生首となつてミュゼの発動させた精霊術に食らいついた。

「ええ。そうくるだろうと思つていたわ。シャドウもどきサン」

ミュゼは、後ろに回していた手に先ほどより小さい精霊術を作り出し喰つたばかりで隙だらけのヨルにぶつめた。

「ガッ……………」

ヨルは、そのまま地面に叩き落とされ生首からいつもの黒猫の姿に戻される。

「……………ヤロウ……………」

「ふふふふ」

ミュゼは、面白そうに含み笑いを浮かべる。

ホームズは、口の中に溜まった血をぺつと吐き出す。

「飛燕連脚!!」

空中にいるミュゼに向かってホームズは、飛び上がり空中回し蹴りを放つ。

しかし、

「ざんねん」

ミュゼは、ふわり身体を浮かせホームズの蹴りをかわす。

空中という身動きの取れない場で蹴りをかわされたホームズになす術はない。

「くっ!?!」

身動きの取れないホームズにミュゼは、髪の一撃を叩き込む。

「——、がつ——!」

空中から叩き落とされたホームズは、背中から伝わる衝撃で肺にある空気を吐き出

す。

「いい眺めね。最高よ」

ミュゼは、そう言ってもう一度巨大な球体を出現させる。

「こんの………」

ホームズは、両手を地面につけ咳き込みながらなんとか立ち上がろうとする。

「ふふふ、安心なさい」

ミュゼは、そう笑うと球体を落とした。

球体は、

「うあー！」

「ぎゃあー！」

ジュードとローズを囲んでいた。

そして、再び発生する重量に二人は地面に押しえつけられていた。

「ジュード！ローズ!!」

ホームズは、急いで助けに入ろうする。

しかし、

「あらあら。まだ、ダンスの相手を代える時間じゃないわよ」

ミュゼの髪がホームズを拘束する。

髪の毛というには、強い力でホームズを拘束していく。

「つつう……………」

さつき叩きつけられた身体に塩を塗るようにミュゼの髪がホームズを締め付ける。

「ホームズ!!」

レイアの叫びにミュゼの髪が反応しレイアを襲う。

戦意を失っていたレイアは、棍で防ぐ事も出来ずそのまま弾き飛ばされた。

それを満足そうに眺めるとミュゼは、ホームズの拘束を強めていく。

「まずは、一人」

(だめだ……………このままじゃ……………)

動けないホームズは、術を食らわなかったローエンとエリーゼに目を向ける。

ミュゼの攻撃を喰らい動かなくなっているホームズ達と違いこの二人はまだ動ける。

「……………つ！二人とも逃げたまえ!!」

「しかし……………」

「ここは、おれ達でどうにかする！後で連絡を入れる！だから、今は逃げたまえ!!ここ
で全滅するよりは、マシだ！」

「でも！」

「いいから！行きたまえ！エリーゼ！ローエン」

ホームズの必死な叫びにローエンとエリーゼは、急いで湿原の方に逃げ出した。

「馬鹿ね」

ミュゼは、ホームズに顔を近づけ心の底から蔑んだ笑みを浮かべる。

「逃すと思ってるの?」

そう言つてミュゼは、再び精霊術を作り出そうとする。

そんなミュゼの目に向かってホームズは、唾を吐いた。

「——っ!!」

思わず視界が塞がれミュゼの集中力が切れ、出現させたばかりの精霊術は、ジュード達を拘束する精霊術と共に消え去つた。

自身を拘束する髪も緩みホームズは、急いで抜け出す。

普段ならその程度の事で集中力など切れたりはしない。

だが、今のミュゼは、一度に何個もの事をやろうとした。

そして、ホームズ達相手に完全に油断していた。

その慢心と状況をホームズは、逃さない。

「……………貴様……………」

先ほどもでの余裕綽々の笑顔崩し、鬼の形相でホームズを睨みつける。

「おいおいどうした?化粧が崩れてきたぞ?」

復活したヨルは、減らず口を叩きながら、黒球をホームズの脚に落とす。

落とされた黒球は、弾け飛び霞となってホームズの右足にまとわりつく。

「爆砕陣!!」

ホームズは、それと同時に地面に自分の足を叩きつける。

威力の上がった爆砕陣は、土煙を巻き上げ、辺り一帯を茶色の視界で覆った。

「ケホッ……ケホッ……このっ……ああもう！うっとおしい！」

ミュゼは、煩わしそうに辺りを舞う砂煙りを吹き飛ばす。

土煙が払われるともうそこにはホームズ達の人影はなかった。

ホームズ達はまんまと逃げ出すことに成功したのだ。

「やってくれるわね……でも、まあ」

ミュゼは、そこで言葉を切ると口角を吊り上げていく。

「手なんて幾らでもあるんだけど」

広がる青空の下、
ミュゼは冷たい笑みを浮かべた。

残された者たち

いっばいのスーパ

「入るよ」

ホームズは、そう言うのとローズの部屋へと入った。

ローズは、ベッドに座ったまま身じろぎひとつしない。

ニアケリアから、逃げてからローズは、ずっとこの調子だ。

元々ホームズのこと塞ぎ込んでいたローズだ。

ジルニトラの戦闘で何とか振り払いかけた矢先にミラが自分を犠牲に命を散らした。

目標としていたミラが死んでしまったがそれでもローズは、何とか自分の心が折れな

いよう堪えた。

ここで折れてしまつては、ミラのようになれない。

そう思つて何とか誤魔化しそして堪えてきた。

しかし、ミュゼと出会いミラが本物のマクスウエルではないと聞かされた。

自分の目標としていた人物が、偽物であつたこと、それだけでも心を扶くというのに、

ミラの死が、人と精霊の為に懸けた命が無駄だったという事実遂にローズの心は折

れた。

家族と死に別れ、その原因はホームズだと気付き、ミラとも死に別れる。

今までずっと堪えていた事が全て吹き出してしまった。

気丈に、そして馬鹿みたいに誤魔化し続けていたローズは、ミュゼの言葉を受け遂に立ち上がる事ができなくなってしまった。

ホームズは、手に持った食事を見て、そしてテーブルに置いてある殆ど手をつけられていない食事を見てため息吐く。

「君、食べないともたないよ」

ホームズは、そう言うを持ってきた食事をスプーンですくう。

「ほら、あーん」

「……………いらない」

「そう言わないで、ほら、あーん」

「いらないっていつてるでしょ!!」

ローズは、そう叫ぶとホームズの手を振り払う。

その瞬間スープは、空を舞いホームズに降りかかる。

「……………ほっといてよ」

ポツリと零されるローズの言葉。

ホームズは、スープのかかったポンチヨを脱ぐとそれを脇に抱える。

「……………とりあえず片付けてくるね」

ホームズは、そう言うのと部屋を出て扉を閉める。

すると別の部屋から、レイアが俯きながら出てきた。

「レイア？」

「あ、ああ！ホームズ」

レイアは、慌てて空元気な返事でそう答えた。

「どうしたの？」

今にも泣きそうな感情を奥に止めて問いかけるレイアにホームズは、何と言おうか言

葉に詰まる。

「腹が減った。レイア、飯はまだか？」

そんなホームズに構わずヨルは静かに言葉が続けた。

「あ、うん。まだあるから、炊事場に行こう」



「……………どうだい？そつちの様子は？」

「ずっと落ち込んでる。そつちは？」

「同じく」

二人は、残った食事を食べながらそんな会話を繰り返していった。

ここ数日の二人は、ずっとこんな感じだ。

相変わらずホームズの両腕には、包帯が巻かれていたが動かせるようになっていた。

ホームズは、そう答えると窓から夕暮れの空を見上げる。

風と共に流れる。パレンジの甘い香りがハミルの村らしい。

風にたなびくポンチョを触ってみる。

「まだ生乾きだなあ……………」

「ああ。スープかけられたって言ってたね」

「まあ、事故だけだね」

そう言ってホームズは、レイアを見る。

「君の方は？」

「いつも、食器を叩き落としたりちやうんだよね……………」

レイアは、再び俯いてしまう。

食事を作っているのはレイアだ。

ホームズは、怪我をしており文字通り料理の腕は壊滅的だ。

そんな事もあって、レイアが料理を作っているのだが、自分の作った食事が床に叩き

つけられてしまう。

これで何も感じないはずがない。

レイアは、俯いたまま声を震わせる。

「ミラもない。ローエンもエリーゼもない。アルヴェイン君もない。ジュードも

ローズも落ち込んだまま……………」

ポタリポタリと自分の作ったスープに涙が落ちる。

いつも明るく振舞っていたレイア。

だが、今回の出来事の連続で遂に我慢できなくなってしまうた。

堪え切れなくなった感情は涙となって目から溢れ出る。

「……………ジュードを元気づけたいんだけどさ……………何でかな？全然上手くないや

……………」

ポタポタとスープに落ちる涙はとどまる事を知らない。

ホームズは、それをしばらく見ると今度は鍋の入ったスープを見る。四人分にしては、量が随分ある。

恐らくジュードが落としてもいいように多めに作ったのだろう。

しばらく固まりそして意を決したようように鍋を掴み、ゴクゴクと飲み始めた。

「え？ちよ！ホームズ!？」

ホームズの突然の奇行にレイアは、それ以上言葉が続かない。

しばらく炊事場には、ホームズのゴクゴクという音が鳴り響く。

そして、それが聞こえなくなるとからんという音とともに空になった鍋がレイアの前に置かれた。

レイアは、それを見て目を丸くする。

「ちよ、本当にこれ一気に飲んだの!!何考えてるの?!結構な量だよ、これ!」

「やかましい!!」

ホームズは、そう言いつけるとレイアにハンカチを投げつける。

「いいかい!おれは、少なくとも女子の手料理を食べて幸せだ!!超元気だ!!」

「……………えーつと…………?」

「オマケに上手い!これ以上に何があると言うんだい!」

「ホームズ……………」

分かりづらいがそれでもホームズは、精一杯レイアを励まそうとしているようだ。ホームズは、そのまま言葉を続ける。

「だから元気を出したまエロロロロロロロロ」

「吐いた!? 説得力まるでないんだけど!!」

やはりスープの一气飲みは無茶だったようだ。

ご丁寧に洗い場に向かって吐いていた。

口から先ほどの液体が流れるように溢れ出てきた。

「わたしの作ったのが、即効で吐き出されたんだけど!! 結構シヨックでかいよ! これ
!」

自分の料理が汚物に変わる様は見えていて気持ちのいいものではない。

「何をしてるんだ貴様は……」

ヨルは呆れ顔だ。

「いや、違、これはその反芻つって、ほらおれルーメンがあるから……」

青い顔で慌てたように弁解するホームズにレイアは、呆れたため息を吐いた後少しだけ笑った。

「ありがとね、ホームズ」

器用なようで不器用な友人の精一杯の気遣いにレイアは、そう笑って返した。無理をしていない本当に楽しそうな笑顔を見てホームズもつられて笑顔になった。

「でも、ホームズはやっぱりモテないね」

「一言多い」

ホームズは、桶に貯めてある水を口に含むと口をゆすぎ洗い場に吐き出した。そして洗い場を丁寧に掃除する。

「うわ……………包帯がビチャビチャだ……………」

そう言っただけでちらりとホームズは、レイアを見る。

レイアは、ため息を一つ吐いてホームズの両腕の包帯を巻き直していく。

「大分治ってきたね」

「……………まあ、もう二度とやりたくないね」

「そうだね。これ以上は、やめてほしいかな」

「……………善処するよ」

目をそらしながら言うホームズを見てレイアは、ため息を吐く。

「期待しないで待ってるよ」

「満点の返事だな」

ヨルは肩で面白そうに笑っている。

そんな会話をしているうちにホームズの包帯は綺麗に巻かれ終わった。

ホームズは、綺麗に巻かれた両腕の包帯を確認するとポンチョをふわりと羽織る。

「うっし、乾いたね」

フード付きのポンチョをホームズは確認していた。

「さて、レイア。君は少し休みたまえ」

「え?」

不思議そうなレイアに指を向ける。

「食べたら寝る。泣いたら寝る。元気でいる為の秘訣だよ」

ホームズの言葉にレイアは、突きつけられた指を見てそれから、少しだけ笑う。

「前半は、太る理由だよね?」

「消化にはいいんだろう?」

「まあ、そうだけど」

レイアは、そう言って手元にあるハンカチを見る。

ハンカチから視線をホームズに戻すとホームズは部屋から出て行くこうとしていた。

「ホームズ」

「なんだい？」

「あー、えーつと………」

レイアは、手元にあつたハンカチをホームズに見せる。

「ありがとね。ちゃんと洗って返すよ」

「いいよ別に。腐る程持つてるし」

ホームズは、そう言うのと椅子に残っているヨルを見る。

「君、来ないのかい？」

「範囲内だろ？たまには一人で羽を伸ばすさ」

「一匹だろう」

ホームズは、そう返すと炊事場を後にした。

ホームズが完全に出て行ったのを確認するとレイアは、ヨルをじつと見つめる。しばらくその沈黙が続いた後レイアから口を開いた。

「ホームズさ、寝れてる？」

吐いたばかりの青い顔に誤魔化されていたが、目元には隈が出来ていた。

ヨルは首を横に振る。

「いいや。ここのところは、しよつちゆう夜中に起きているな」
ヨルは尻尾をくるくると巻きレイアを見る。

「それって前に言ってた……」

「ああ。ここのところは特に悪夢をよく見るらしい」

年に一回か二回のペースで悪夢として見る出来事。

その悪夢をホームズは、ここ最近ずつと見ている。

ヨルは、喋りながらくるくると渦を任せていた尻尾を一気に解く。

「まあ、近しい人間の死を間近でしかも立て続けに見たんだ。当然と言えば当然だよな」

解かれた尻尾をホームズはゆらゆらと揺らす。

レイアは、ハンカチをぎゅつと握る。

「ねえ、ヨル。その出来事のこと教えてくれない？」

ヨルは揺らしていた尻尾を止め、ローズを見る。

「楽しい話じゃない」

「みたいだね」

「俺が言うんだから相当だぞ」

「すごい説得力だね」

レイアは、そう言うところを見る。

「でも、知りたい。何故って聞かれればうまく答えられないけど………ホームズとヨルのことを知りたいから、じゃダメかな？」

レイアのその真つ直ぐな瞳を見るとヨルは、重々しく口を開く。

「いいだろう。話してやる」

「いいわけないだろう？」

扉越しに聞こえた声にレイアは、思わずビクと肩をすぼませる。

それから、ゆっくりと扉が開き、ホームズが現れた。

「つたく、油断も隙もありやしないねえ」

「ホームズ………」

やってしまったというふうに肩をすくませるレイアをみてホームズはため息を吐く。

「別に怒っちゃいないよ……ただまあ……」

ホームズは、そう言つてヨルを掴む。

「悪夢にうなされるのは、俺一人で十分さ」

ホームズは、そう言つてそのまま扉を目指し、扉の前で振り返る。

「それじゃあ、おやすみ。良い夢を」

ホームズは、そう言つて静かに扉を閉めた。

取り残されたレイアは、ハンカチをぎゅつと握りしめた。

可愛さ余って憎悪百倍

「ローズ、食べるかい？」

食事を持ってきたホームズが尋ねるが、ローズは相変わらず返事をしない。

「あのさ、一つ提案があるんだけど」

ホームズの言葉にローズは、反応しない。

ヨルは、そんなローズを見て思わず舌打ちをする。

「おい、貴様いつまでそうしてるつもりだ」

ヨルは心底苛立ったように言葉を告げた。

ヨルのその言葉にローズは、初めて反応示した。

「レイアもホームズも言わないようだから俺が言つてやる」

ホームズは、止めようと手を伸ばすが、ヨルはするりとかわしクローゼットの上に飛び乗る。

「そこで膝を抱えてればマーロウは、生き返るのか？」

「ヨル」

「飯を食わなければ、オンナが生き返るのか？」

「やめたまえ」

「家族が生き返るか？」

「ヨル!!」

ホームズは、クローゼットの上にいるヨルを睨みつける。

「親しい人や家族、近しい人が死んだら悲しいのは、当たり前だ。それを責める資格なんてない」

強い口調で発せられるホームズの言葉をヨルは、鼻で笑うと肩に飛び乗る。

「俺には縁のない感情だ」

ヨルはニヤリと笑っている。

ホームズは、そんなヨルを見て深くため息を吐く。

そんな中ローズが、ベッドから立ち上がった。

「……………貴方になにが分かるのよ、ホームズ」

「え？」

『『親しい人や家族が死んだら悲しいのが当たり前』だつて？』

俯いていたローズは、キツと顔を上げる。

「貴方に一体何が分かるつて言うのよ!!ホームズ!!」

怒鳴りつけられ、ホームズは思わず目を見開く。

ずつと溜まっていた感情がローズの口から止まることなく溢れ出す。

「誰も言わないようだから言つてあげるわ！ミラがあの時、死んだ時これで両親の故郷に行けると思わなかった？」

「……………」

「そんな貴方が近しい人が死んだら悲しいのが当たり前とか言うんだ？」

ローズは、ハハハと乾いた笑い声を上げる。

「お笑い草ね！一番近しい人と死に別れたこともないくせに」

「おい、小ムスメ」

ヨルはローズが何を言おうとしているか予想がついていた。

だが、ローズは止まらない。

「生まれた時から父親はいなかったですって！！バカ言わないで！貴方には、母親が、ルーズさんがいるじゃない！！そんな貴方が知ったような口をきかないでよ！！」

「ローズッ！！」

レイアは、扉を蹴破らんばかりの勢いで部屋に入ってきた。

レイアは、ずつと部屋の外で聞いていたのだ。

ヨルを除けばこのパーティーの中で唯一ホームズの母親のことを知っているレイアは、我慢できなかつた。

友人のそんな顔を見たくはない。

レイアは、手を振り上げてローズとの距離詰めていく。

「おーっと」

そんな張り詰めた空気とは不釣り合いなホームズの間抜けな声が響く。

「包帯が解けちまったなあ………レイア」

ホームズは、そう言って腕の包帯をひらひらと振る。

「巻き直してくれないかい？」

「ホームズ！」

「ああ、ダメだダメだ。腕痛い。超痛い。昨日のあれだ、なんかこう、何かのせいかも

………」

そんなしどろもどろに声を上げながらそんなことを言うホームズを見てレイアは、俯いてホームズの腕を引いて部屋の外へと歩みを進めた。

ホームズは、振り返りざまにローズの方を見る。

「羽織綺麗にしといたから、元気になったら着てね」

そう言うと扉は静かに閉じられた。



「ちよ…………ちよつとレイア！」

強引に腕を引かれ座らされたホームズは、戸惑った声を上げる。

「……………腕、出して」

レイアは、目を伏せながらホームズに腕を出すよう促す。

差し出された包帯の解けた腕をレイアは、器用に巻いていく。

「……………んで」

「ん？」

「なんで、あそこで自分のお母さんもいないって言わなかったの？」

「まあ、理由は色々かなあ」

そう言うホームズは、面倒くさそうて話すつもりがないように見えた。

「一つずつ話してよ。聞くから」

その真剣な瞳にホームズは、諦めたようにため息を一つ吐く。

「あんなことを言った後におれの母親も死んでるなんて言つてしまえば、ローズは、自分の事を責めちやうだろう?」

「だからつて……………」

「それに、もし、言い返して喧嘩に発展した時、それを仲裁するのは誰だろうね?」
ジュードに仲裁をするなど不可能だ。

そして、ヨルは論外だ。

そうなれば、残るのは、レイアだけだ。

ホームズの包帯を巻く手が、震える。

レイアは、下唇を噛む。

「おいおい、そんな顔しないでくれよ。おれは、君にそんな顔させたくないぜ」

「わたしだって、ホームズにそんな顔させたくないよ」

ホームズは、いつもの胡散臭い笑みを浮かべていた。

だが、いつもと違うのは、そこに今にも泣きそうな感情が見え隠れしていることだ。

「わたしのために、ローズのためにつてそればっか」

レイアは、震える声で続ける。

「それで結局自分が傷ついて……………見てらんないよ……………」

ホームズは、決まり悪そうに目をそらす。

「もつと自分の事、大事にしなよ」

いつの間にかホームズの包帯には、涙のシミができていた。

ホームズは、本当に困った顔をする。

ヨルは、そんなホームズに興味を示さない。

散々注意しろと言われ続けていたのだ。

それを全て無視したり、誤魔化してきたのだ。

困るならここでしたっけ困ってもらわないといずれ本当に取り返しのつかない事が

起きる。

ヨルは、そう思いながら、ふと窓の外に目をやる。

「……………おい」

二人の会話に興味を示していなかったヨルが鋭く低く声を上げた。

「なに？」

「あそこにチャラ男がいるぞ」

「え？」

二人は驚いて振り向くと、窓の外は、遠く分かりづらいが確かにアルヴィンがいた。

そして、そのすぐ近くにはアルクノアも数人いる。

「どういふこと……？」

戸惑う二人を他所にアルヴィンは、銃弾を放った。

放たれた銃弾は、炊事場の鍋をひっくり返し、スープをぶちまける。

思わず手で防ぐ。

「いたぞ!! やつらだ!!」

アルクノアたちはホームズたちをぐるっと囲み銃を向けた。

ホームズは、巻かれた包帯を確認すると彼らを睨みつける。

レイアは、アルクノアを確認しながら棍を持つ。

「どうして、アルヴィンと？」

「たまたま、利害が一致したのだ!! ここで貴様らを殺せるなら、裏切り者とも手を組ん

でやる！」

その鬼気迫る表情に思わずレイアは、後ずさる。

「ああ。貴様らに償ってもらおうぞ！」

ホームズは、冷めた目でそんな面々を見る。

「知ってるかい。そういうのを責任転嫁というんだ」

ホームズは、その言葉と同時に床を強く踏み込んだ。

「守護方陣!!」

光の陣が現れ彼らを拘束する。

「レイア!今だ!」

「うん!!」

レイアは、テーブルをアルクノアにぶつけ、怯んだ隙に彼らをなぎ倒していく。

「これで……………ラスト!!」

レイアは、最後の一人に棍を振り下ろした。

アルクノア達は暫く目をさます様子はない。

二人はそれを確認すると部屋から飛び出る。

「ホームズ!ローズの元へ」

「分かった!ジュードは、任せたよ!!」

二人は急いでそれぞれの部屋へと向かった。

ホームズは、急いでローズの部屋の扉に手をかける。

「ローズ!!アルクノアとアルヴェインが……………」

部屋を開けた途端むわりとむせ返るような鉄の匂い。

そして、先ほどまではなかった、辺りに塗りつけられたような赤い塗料のような液体。

床には動かなくなったアルクノア達が並んでいた。

「ええ。アルクノアが突然襲撃してきから、返り討ちにしたわ」
ローズは、背を向けたまま淡々とどうでも良さそうに続ける。

「私分かったの」

そう言うときまだ息のあるアルクノアに刀を突き立てる。

「ぐつ……………があ……………」

「こいつらは、自分のしでかしたことの意味を分かっていない」

刀を突き立てられたアルクノアが無理矢理放った銃弾は、ローズの髪留めの紐をかすって見当外れの方向に飛んで行った。

髪留め紐が地面に落ち、ローズの黒髪がバサリと広がる。

「ローズ……………?」

薄っすら寒気を感じるほどの無感情の声にホームズは、戸惑いを隠せない。

「こいつら、一体何のために生きてるのかしら?」

「……………ローズ?なにを言っているんだい?」

ホームズは、そう言いながら自分の声が震えていることに気付いていた。

「こいつらのせいで、私の家族は死に、マールロウさんは死に、ミラは死んだ」
無感情でうわ言のように続けるローズの姿にホームズの肌が粟立つ。

今、目の前にいる人間は、ヤバイと。

関わってはならないと、直感と経験が告げていた。

今まで、溜めていた感情が最悪の形でローズから溢れ出ている。

「私決めたわ」

そう言つてローズは、腰にかかるほど長い黒髪をゆつくりと広げながら振り返る。

羽織は返り血で元の色をが分からない。

その何の感情も宿らない黒く暗い瞳にホームズは、冷や汗が流れ出る。

「エレンピオス人は、全て殺す。一人の例外もなく」

ホームズは、ローズから発せられる殺気に思わず足を一歩下げる。いつものように構えようとしての行動ではない。

純粹に構えなくてはならないと本能が告げていた。距離を取れと本能が告げている。

命が刈り取られそうになる恐怖、などという生易しいものではない。何だか分からない、得体の知れない、根源的恐怖。

「次は貴方よ。ホームズ・ヴォルマーノ」

血塗られた二刀は、ホームズに向かって振るわれた。

因果の応酬

「ジュード！早く!!」

レイアは、抜け殻のようなジュードの手を引つ張つて走っていた。

後ろからはアルヴィンが迫っている。

(ホームズとローズは!?)

走りながらレイアは、ホームズを探していた。

するとレイアの横の壁からメキという木が軋む音が聞こえた。

反射的に足を止めると音は破壊音となり壁は、砕け散つて人影が反対の壁に衝突した。

砂けむりが晴れて現れたのは、ホームズとそして、血だらけでホームズに切り掛かるローズの姿だった。

ギリギリと鏑迫り合いをするように迫る刀をホームズは、何とか左手の盾で防いでいる。

「ホームズ！ローズ!!」

レイアの声に一瞬隙が出来たローズを部屋に蹴り飛ばした。

「何してるの!？」

「こつちが聞きたいぐらいだよ……」

そう言つて崩れた壁の向こうからゆらりとローズが姿を表す。

「わかつてるのは、殺る気満々つてところだねえ」

「そんな!何で!!」

「そいつが、エレンピオス人だからよ」

ローズは、舞い上がる埃を刀で振り払う。

「エレンピオス人は殺す!全て殺す!」

再び刀をホームズに向かって振り下ろす。

ホームズは、何とか盾で防ぐ。

体重をかけ盾と刀は、ギチギチと鳴る。

ホームズは、膝をついて何とか刀を押し返す。

「私の家族が死んだのはエレンピオス人のせいだ!だから殺す!」

マーロウさんが死んだのはエレンピオス人のせいだ!だから殺す!

ミラが死んだのはエレンピオス人のせいだ!だから殺す!

そして、ホームズ・ヴォルマーノは、エレンピオス人だ!だから殺す!」

その狂気そのもののローズの叫びを聞き、思わずレイアは一步下がってしまう。

「そんな……でも!!ホームズは、ローズの幼馴染みでしょ!!そんな殺なんて!」

ローズは、そのままホームズの顔面を蹴り飛ばす。

蹴られたホームズは、廊下を滑るように転がる。

「ぐっ……………」

その容赦のない攻撃にレイアは、思わず息を飲む。

「貴方のいう通り、ホームズ・ヴォルマーノは、私の幼馴染みで昔馴染みよ」

ローズは、そう言うのと刀に着いた血を払う。

「だけど殺す!!」

そう言っつて再びホームズに向かって切り掛かった。

ホームズは、立ち上がりながらも一度刀を防ぐ。

「ホームズ!!」

「レイア!!君は、ジュード連れて逃げたまえ!!」

「でも!!」

その瞬間、銃弾がレイアをかすめる。

アルヴィンが追いついてきたのだ。

ローズとホームズには、目もくれずジュードとレイアに向かって歩みを進める。

どちらかが倒れたところで再びトドメを刺す気なのだろう。

「早く!!」

「……………ゴメン!ホームズ!!」

レイアは、ジュードを連れて小屋から逃げ出した。

ホームズは、ヒザ蹴りをローズ手首に向かって打ち上げる。

「ぐっ!」

突然の逆襲にローズは、思わず手をゆるめる。

ホームズは、その隙に一步体を下げ、それから踏み込む。

「うおら!!」

安全靴の蹴りをローズは、一刀で受ける。

「下がれ!ホームズ!!」

ヨルの言葉と同時にホームズは、下がる。

すると下からローズのもう一刀が切り上げられていた。

なにも刃で喰らうことの出来なかった刀はひゅんという音を立て空を切る。

もしあの場に足があつたらと考えると身震いが襲う。

ローズは、防御に使った刀を切り替えホームズに突きを繰り出した。

ホームズは、迫り来る刀を下から蹴り上げる。

ローズは、もう片方の刀をホームズに向かって繰り出す。

ホームズは、齒軋りをして体を捻ってかわす。

刀はホームズの刀をかすめる。

「ヨル!!」

ヨルはホームズの援護の為口を開こうとする。

「させない」

ローズは、ホームズの刀をかすめた刀の刃を返し、ヨルに向かって切り上げた。

「———っ!!」

ホームズは、慌てて屈みそしてバク宙をして刀を蹴り上げると同時にローズから距離をとる。

「やめておくれ!ローズ!おれは、君と戦いたくない!!」

「ハッ………貴方がそれを言うのね。カン・バルクで自分の都合で私達に襲いかかってきたくせに!!」

ローズの刀がホームズとヨルに迫る。

ホームズは、齒齧みをして一步後ろに下がる。

「どうする?あの小ムスメ俺の援護を潰しに来てるぞ」

ヨルの言葉を聞きながらホームズは、廊下の壁の距離を測る。

「………だからって諦めるわけに行かないだろう?諦めたらおれ達ジ・エンドだぜ」

ホームズは、そう言うのとスピードを上げ、壁を蹴る。

そして、そのまま反対の壁にたどり着きもう一度蹴って更に距離を詰めていく。壁を足場にし、床に足をつけず、そして、目で追えないスピードで距離を詰めていく。

(そんな! 『非常識』を使つてないのに!)

この狭い廊下で刀を振るうのは、困難だ。

結果使われる手は、突きに限られてくる。

だが、振るわれる刀に比べ、突きは圧倒的に範囲が狭い。

(でも! 動きは読める!! それぞれの壁を交互に来てるのだから……)

ローズは、左の壁から音が聞こえた同時に次に来るであろう右の壁に向かって刀を突いた。

しかし、刀が捉えたのは、木の壁だけだ。

ホームズは、どこにもいない。

戸惑うローズを他所にホームズは、上空から、踵を落とす。

落とされた踵はローズの肩をかすめて地面に落ちる。

「ぐっ……………」

かすめたとはいえ、安全靴の踵落とし。ノーダメージとは行かない。

動きが鈍ったのを見届けるとホームズは、そのままローズに向かって横薙ぎに蹴りを

放つ。

「調子に乗るな！」

ローズは、刀の柄で迫り来るホームズの安全靴を殴りつけ、勢いを止める。

「マジかい……………」

思わぬ反撃で態勢を崩したホームズにローズは、両手を合わせる。

この狭い場所で、刀を満足に振ることの出来ないこの場所でホームズと戦うのは、不利だ。

確実に負けるのは自分だ。

ならばどうする？

「獅子……………」

簡単だ。

場所を移してしまえばいい。

「戦哮!!」

ありたっけの鬨気は、獅子となりホームズに襲いかかる。

獅子はホームズに喰らい付き壁を壊し窓を壊し埃と土けむりを上げながらホームズを吹き飛ばした。

林に吹き飛ばされたホームズは、背中をしたたかに打つ。

「ガッ……………!!」

肺の空気が一気に吐き出される。

「……………くそ……………何でこんなことに」

ホームズは、地面に唾を吐きながら立ち上がる。

「それは、貴方がエレンピオス人だからよ」

その声の先には、ローズが髪をたなびかせ、佇んでいた。

ホームズは、ローズのその執念に恐れを覚える。

「……………まさか、生まれたことが罪だとも言うつもりかい？」

「さあ?どうでしょうね」

ローズの返答は、ゾツとする程の冷たい声音。

ホームズは、頬を引きつらせながら辺りを見る。

周りは、林というより、パレンジの木のような。密集して生えていない。

これでは刀も振りいたい放題だ。小屋を挟んだ向かいからは、銃声と激突音が響き渡る。

(みんな無事でいておくれよ)

ホームズは、そう祈るともう一度目の前にローズと向き直る。

「小ムスメお前、いい加減にしろよ」

「貴方が言っただんじやない？何をしたって死んだ人間は、生き返らないって」
ローズは、そう言っって刀を握る。

「だったら、不幸の連鎖をここで切る。これ以上私みたいな人を出さないために」
ローズは、ゆっくりと刀をホームズに向ける。

「その為の力を私は手に入れてきた！」

—— 『気をつけろ。あれは力の使い方間違えるタイプだ』 ——

ホームズを助けられなかったという後悔から手に入れた力は、
自分に力がないばかりに人に自分の傷を押し付けたくないと言っていた力は、

今ホームズに向けられている。

ミラの言葉を思い出しているうちにローズは、距離を詰めて襲いかかった。

ホームズは、左手の盾で、攻撃を防ぐ。

その鬼気迫る表情を見てホームズは、顔を伏せ、そして蹴り飛ばす。

(なんで……)

ローズは、腹を一瞬押さえると直ぐにホームズに刀を振るう。

ホームズは、上体を反らしながら刀を蹴り上げる。

(なんで……)

それからもう一度足を踏み替えローズに蹴りを放つ。

態勢を崩したローズは、そのまま地面に倒れる。

(なんで……!!)

ホームズは、そこを追撃しようとするが一瞬動きが止まる。

「馬鹿！止まるな!!」

ヨルの言葉で思わずハツとしたが、もう遅い。

ローズは、ホームズに刀を向け、マナを渦巻かせる。

「収束せよ！省略！」

ローズのリリアルオーブが輝く。

「デイバインストリーク!!」

光の砲撃は、狂いなくホームズに放たれた。

ヨルをかすめ、そして、ホームズは、そのまま木に叩きつけられた。

光の砲撃が消えるとホームズは、ゆつくりと倒れていった。

「ホームズ!!」

ヨルの声に反応するようにホームズは、ゆつくりと立ち上がろうと四肢に力を込める。

ヨルも動くこうとするが、かすったデイバインストリークの影響で思うように動けない。

「なんでだい……………ローズ」

ホームズは、ボソリと呟く。

「おれは、君に救われた。ガキの頃いじめられていたおれを君は助けてくれた」

ゆつくりと両手が地面から離れていく。

「こんな、おれのことを友人と言ってくれた……………」
傷だらけでその碧い瞳からは涙が溢れている。

「君と会えて本当に良かった」

あの宿でいった言葉に嘘偽りはない。

「なあ、ローズやめておくれ……………おれは、君と戦いたくない……………刀を収めておくれ」

「……………私は」

ローズは、刀を一瞬降ろす。

「貴方と出会わなければ良かったと思っているわ」

ローズの一刀は、深々とホームズの脇腹を突き抜けホームズとパレンジの木を縫い止めた。

「……………つガハ」

ホームズの口からは、夥しい血が流れ落ちる。

刀は、ホームズを木に縫い付け動き止める。

ローズは、残った刀を下段に構える。

「天光満るところに我はあり」

「まさか……………」

収束していくマナの量とその聞き覚えのある詠唱にヨルは、何とか生首に変わろうとする。

しかし、先ほどのデイバインストリークのダメージが残っており動けない。

「黄泉の門開くところに汝あり」

マナは、雷撃へと変わっていく。

「出でよ神の雷」

刀を抜こうとホームズは、もがくが、ホームズの今の状態では満足に力も出せない。ローズは、感情を消し暗い瞳でホームズに狙いを定める。

「これで、終わり……………」

ローズの周りは、雷となつて辺りを覆う。

「インディグネーション!!!」

雷は、ホームズに向かって落とされた。

轟く雷光、そして、響き渡る轟音。

一般の慈悲も無く落とされたその力は、己の無力さを叩きつけられた。

ローズは、その様を見ると今度はヨルに目を向ける。

「今度は貴方ね」

「いや、まだお前だな」

その時、ローズの背中に強い衝撃が走った。

その衝撃が走った原因にローズは、心当たりがある。

普通に考えてそれはありえない。

だが、この男に普通は、通じない。

背後を確認すると脇腹から流れ落ちる血を必死に抑えながら佇むホームズがいた。

「そんな……………抜けないはずなのに……………動けないはずなのに……………何で？」

ローズは、そう言つて雷を落とした木を見る。そこには、雷撃を受けながらも白く輝く刀が落ちていた。

「抜かなかつた……………どうやつても無理だったから、切つてきた」

ローズとヨルは、思わず息を飲む。

刀のは、確かに外側を向いていた。

ホームズは、抜くことを諦め、左に動き右脇腹を切ることで拘束から抜け出したのだ。

「肉を切らせて……………骨を断つ……………」

ホームズは、そう言つて口から血を吐き出す。

右脇腹からも血がだらだらと流れ落ちる。

完全に逃げ切ることはもう出来ない。

だったら、ローズを倒すしかない。

ローズは、ここで初めてホームズという男に恐怖を覚えた。

「貴方、正気？」

「君と……………同じくらいにはね」

ホームズは、そう言つたと右足を踏み込んだ。

強く踏み込んだその瞬間からの回し蹴り。

一瞬反応の遅れたローズは、慌てて刀を振るう。

ホームズの蹴りの方が早く届く。

「う、うああああ!!」

ローズの乱れた刀。

乱れた刀などホームズに当たるはずもない。

普段ならの話だ。

とつくに限界を迎えていた、精神状態、そして、身体。

ホームズは、ゆっくりと態勢を崩す。

そして、崩れたホームズに刀が襲う。

恐怖と焦りで振るわれたローズの刀は、

ホームズの両目に届いた。

「……………え？」

突然視界が暗くなったホームズは、戸惑う。

しばらくして、両目から迫り来る焼け付くような痛みでようやく自分がどうなったかを理解した。

顔も知らない父親との唯一の繋がりである碧い瞳。

そして、それを褒めてくれた人間。

不意をついた刀も本当に殺す気なら、心臓狙うべきだった。

確実に殺すつもりなら精霊術ではなくその場で首を落とすべきだった。

余計な詠唱という手間を踏んでしまったため、ホームズに逃げ出す隙を与えてしまった。

知らず知らずの内にあと一步を躊躇っていた。

だが、ローズは、切ってはならないものを切ってしまった。

その事実によくやく覚えた罪悪感がローズを襲う。

麻痺していた心が動き出す。

「ち、違う……そんなつもりじゃ……」

弱々しい弁解もホームズの慟哭にかき消され、本人届くことはない。

甘い匂いを乗せた風が静かに流れた。

心

「ホームズ……………」

感情を剥き出しに慟哭を続けるホームズにローズもヨルも息を飲んで見る。

ホームズは、慟哭を終えるとそのままパタリと糸の切れた操り人形のように倒れた。

「そんな……………つもりじゃ……………」

「小ムスメ、そこを退け」

ヨルは、泣き崩れるローズを無視してヨルは歩みを進める。

ローズは、慌てて刀を構える。

そんなローズを見てヨルは面倒くさそうに舌打ちをする。

「何のつもりだ？」

「ホームズは、私が殺すの……………だから……………」

震声で言うローズにヨルは、ハッと鼻で笑う。

「お前、意味わかって言ってるのか？」

ヨルは面倒くさそうに言う。

「うるさい！やかましい！だまれ！」

張り裂けんばかりに言うのとヨルに向かって刀を構える。

「邪魔するって言うなら貴方から……………」

その言葉を聞きヨルは眼を細め、奥にいるホームズを見る。

流れる血が早く助けろと訴えている。

「時間がない……………が、一つ教えてやる」

ヨルの身体を黒霞が覆う。

「俺にも実は怖いものがある」

黒霞は、徐々に大きくなっていく。

「俺は人間のその善人が悪人なるその様が本当に怖い」

その威圧感にローズは、思わず一步下がる。

ヨルはもう一度同じことを言う。

「善人と言われる人間達が何かの拍子に悪人になってしまう。その様が本当に怖い」

その言葉とともに黒霞は消えた。

そこには、ホームズだけ見たことのある本来のヨルの姿があった。

「黒い……………虎……………?」

見るものを圧倒するその迫力。

ローズは、刀を持つ手が震えるの感じていた。

「因みに言うのだ。動物は、恐怖を覚えれば逃げる。二度と恐怖の対象と会わないよう逃げ続ける」

ヨルの前足から爪が伸びる。

「だがな、化け物は違う」

一歩足を進める。

「化け物は、己に恐怖を覚えさせた対象を許さない」

ヨルから吹き出る殺気が一気に膨れ上がる。

「その場で、潰す」

その瞬間ヨルの尻尾がローズに襲いかかった。

しなる丸太のような尻尾は、容赦なくローズの腹を打ちそのままパレンジの木に叩きつけた。

「……………カハっ…………」

ローズは、そのまま意識をゆっくりと手放していった。

ヨルは追撃しようとするが、地面に突っ伏しているホームズを見て諦めたようにため息をついた。

「仕方ない。時間もないしな」

ヨルはホームズを背中に巻きつける。

さて、そこで行き先に迷う。

あの小屋に戻ったら再びローズが襲ってくるだろう。

「オマケにあそこにいるのは、腑抜けたつり目……………」

ヨルは、ピクリとある霊力野ゲイトの気配を捉える。

「そうか、奴らなら……………」

ヨルは、一人でそう納得するとびよんと木を登り枝から枝へと飛び移っていった。



「(ト)は……………」

ヨルは少し驚いたように辺りを見回す。

ヨルは靈力野ゲトの位置まで辿り着いた。

辺りは廃墟がチラホラと見える。どうやら、元は村だったようだ。

ヨルはそんな中か靈力野ゲトの気配のする家に入る。

「だ、誰？」

「俺だ、ヨルだ。ジャリ、ローエン」

エリーゼとローエンは、突然現れたヨル本来の姿に戸惑う。

そんな二人に構わずヨルはホームズをベッドの上に寝かせる。

血だらけのホームズを見て二人は息を飲んだ。

「そんな！ホームズ！なんで」

「いいから、早く治療しろ」

ヨルに急かされエリーゼは、慌てて精霊術をかけた。

エリーゼが精霊術をかけている間にヨルの身体から黒霞が溢れ出て段々と小さくなっていく。

エリーゼは、ふっとヨルとローエンのよ方を見る。

「とりあえず、終わりました……でも……」

腹の傷は、塞がっているし、しばらくは大丈夫だろう。

後で、目を覚ましたら病院に連れて行けばいい。

だが、

「ホームズの目は無理そうです」

ローズの刀で斬られたホームズの目は元に戻らなかった。

顔の知らない父親との唯一の碧い瞳は、もう光を移すことはない。

黒霞は、消えヨルの姿が現れる。

いつもより小さい、それこそ子猫のような姿にローエン達は再び開いた口がふさがらない。

「すいません。ヨルさん一体何があつたのですか？」

ヨルは小さな尻尾を少し振る。

「アルクノアが突然襲つてきてな。なんとか、それは撃退したんだが、その襲撃で小ムスメの奴、壊れちまつてな、ホームズに襲いかかった」

エリーゼは、思わず口を手で覆う。

「そんな……………」

「今、あいつに見つかるとマズイ。だから、離脱してきた」

「もう一つ聞いてもいいですか？」

ローエンの言葉にヨルは自分の身体を見る。

「さっきの俺の身体と今の俺の身体のことか？」

「はい」

ヨルは、前足を持ち上げる。

「さっきのは、貯めといたマナを還元して一時的にもとの姿に戻っただけだ」

『もしかして、今は力使いすぎて、こんな状態とかー？』
ヨルは忌々しそうに頷く。

「ご明察。この状態じゃ生首にもなれない。しばらくは、暗いところで回復に努めるしかないな」

そう生首になれないということは、精霊術を食べることができないということだ。

単純にエネルギー補給の手段が一つ減ってしまった。

そう言つてベッドの下に入る。

「うおっ！埃がすごいな……」

ヨルはそう言いながらガサゴソと動き続け、埃やらゴミやらを叩き出していく。

そのマイペースぶりにエリーゼが呆れていた頃、一つ見過ごせないものが出てきた。

「……………この白いものは？」

何やら白い石のようなものだ。

だが、石というには形が妙だ。

そして、手触りも違う。

ヨルは、その言葉を聞くとぬつと頭をベッド下から出す。

「よっせ」

「え、あ、はい」

ヨルは有無言わざず受け取るとそのままベッドの下で寝てしまった。

『なんなんだよー！ねえ？ローエン』

「……………ええ。そうですね」

ローエンは、顎髭を触る。

「エリーゼさん。我々も少し休みましょう。ミュゼさんが、いつもやってくるか分かりませんかからね」

エリーゼは、頷くとトテトテと部屋から出て行き、食べ物を取りに行った。

(……………今の白いものは間違いありません)

戦場で散々見たのだ。

見間違うはずもない。

「骨ですね」

「魔物か、人間か、まではわからない。

だが、あのヨルの態度を考えると結論は、おのずと絞られてくる。

「ローエン、ご飯持ってきました」

「ありがとうございます、エリーゼさん」

ローエンが考え込んでいるとエリーゼの持ってきた食事が届いた。

「まずは、腹ごしらえですね」

ローエンの言葉にエリーゼは、頷いて食事に手をつけた。



翌日。

ヨルはもぞもぞとベッドの下からあられた。

その姿は、いつもの黒猫の姿で子猫の面影はなかった。

エリーゼは、それを見ると少しため息を吐く。

「もう少し、あのままでいてくれたら……」

「阿呆なこと言っていないで、精霊術を出せ」

エリーゼとティポは、ムツとした顔をしつつも、ブラックガイドを出現させた。

ヨルはそれを生首になって丸呑みした。

「まあ、こんなもんか」

そう言つてヨルはベッドの上にいるホームズを見る。

エリーゼは、それを見ると静かに目を伏せる。

「……………ホームズは、昨日から起きてません」

「そうか」

ヨルは、そう言つと尻尾を振る。

ローエンは、そんなヨルを見る。

「ヨルさん。聞いてもいいですか？」

「なんだ？」

「昨日の白い石のようなもの。あれは、骨ですよね？」

「そうだ」

「人骨ですか？」

「おそらく」

ヨルの言葉を聞きエリーゼは、思わずベッドから飛び退く。

ヨルは、そんなエリーゼに目を向ける。

「なんかの拍子に落としたのをそのまま、ベッドの下に入れたんだろうな」
たんたんと言られる言葉にローエンは、首を傾げる。

「まるで、見てきたように言いますね」

「当然だ。この村に俺たちは、来たことがある」

ローエンは、顎髭を触りながら考える。

「もしや、廃村になったのは、そう昔の話ではないということですか？」

「まあ、人間たちにとつての昔の定義がよくわからないが、三十、四十年前とかの話じゃない」

ヨルはそう言つてホームズに視線を向ける。

「こいつが、生き方を決めた村だ」

そう言つて包帯の巻かれたホームズの両目を見る。

「その時選んだ生き方でこんなザマになって、そして、この村に来ることになるなんて
な……………」

ヨルはふつと息を吐く。

「全く、縁つてのは、不思議なもんだな」

エリーゼは、それを聞くとぎゅつとティポを握りしめる。

「ヨル、教えてください。ホームズは、過去に何があつたんですか？」

ヨルは振り回す尻尾を止め降ろす。

「楽しい話じゃない。はつきり言つてこんな時に聞きたい話じゃない」

「私は、聞きたいです。友達だから」

エリーゼの言葉にヨルは目を丸くする。

そんなヨルに構わずエリーゼは、続ける。

「友達だからちゃんとしておきたいんです」

『ヨルとケンカした時みたいに変なこと言わないためにもね』

エリーゼのジツと必死な目を見てヨルは本気だと悟つたようだ。

「この話を知らなくてもおまえの人生になんの影響もない。それでも聞きたいか？」

「はい」

ヨルは黙つて上を向く。

そして、ローエンの方に目を向けるとローエンも静かに頷く。

ヨルは大きく息を吐き出した。

それは、ため息というよりも準備運動のようだった。

「とりあえず、その辺の椅子に腰掛ける。ローエン、エリーゼ、それと、ティポは、いか……」

エリーゼは、ヨルの言葉に少し驚いたが直ぐに椅子に腰かけた。

「分かった、話そう。この村、名前がないと不便だな……そうだ、アオイ村でいいだろ」

ヨルは一人で納得すると咳払いをして再び口を開く

「アオイ村とホームズの話だ」

アオイハナの村

其の壺

「母さん、まだ着かないのかい」

「いや、もうちよつとなんだけど………」

「それは、さつきも聞いた」

ホームズは、はあとため息を吐きながら、てくてくと歩みを進める。

今より、若干背の低いホームズは、母親の身長といい勝負だった。

横に並ぶたびにため息を吐きたくなる。

「ええい。ため息を吐くのを止めたまえ！見たまえのこの綺麗な景色を!!」

「……………荒涼としていて、なにも生えてないんだけど、どの辺を見ればいいんだい？」

辺り一面の枯れた茶色の土しかない景色の山道。

ここをホームズ達はここ登っていた。

今回彼らは、行商に行った街でこの先にある村に行つて欲しいと頼まれたのだ。

隔離された陸の孤島とふさわしい場所、そして、土に栄養もなく細々とした農業しか

できていないので、何か物資を売りに行つて欲しいとの事だった。

断る理由は、山ほどあったが、それでも、今後のパイプを作るに越したことはないし、何より、ルイズ本人は自覚してなくてもお人好しの気がある。

人を振り回すお人好し。

これ以上厄介な人間などいないはずなのに、更にそれを自覚していないときたものだ。

もういい加減にして欲しいという奴だ。

ご多分にもれず、今回も仕方ないなあの一語で行先は決定してしまった。

「それと、リアルオーブは、まだなのかい？ちゃんと今度こそお金溜まるんだろうね？」

そうホームズは、いい加減リアルオーブが欲しいのだ。

まあ、確かに戦闘になればルイズのほうが強いのだが、いつまでも任せておくわけには行かない。

更に言えば技を教えてもらつても、リアルオーブがないため実効などまるで出来ない。

冷たい返しと冷たい要求にホームズの母親、ルイズは、目元を抑え、ホームズの肩にいるヨルを抱き寄せる。

「ヨルうくくく私の息子が最近冷たいんだけどくく反抗期かなあくく」
「……………お前に反抗するような命知らずはいないだろうううううううう」
ギリギリと首をしめられヨルは苦悶の叫びをあげていた。
笑顔のまま締め上げていくのが、また怖い。

「ギブギブ!!」

ヨルの言葉を聞くとパツと手を離しヨルは地面に落ちた。

ホームズは、その一連の行動を見てため息を吐く。

「頼むから殺さないでくれよ。僕まで死んじゃうんだから」
ルーズは、面白そうに手を振って答える。

「大丈夫だって」

「……………不安だなあ」

ホームズのため息を他所にルーズは、目の前を指差す。

「お！あれじゃないかい？ 私達の目的地！」

「ん……………」

ホームズは、タレ目で何とか目を向ける。

そこには、確かに村が広がっていた。

「本当だねえ……………とここで、村の名前は？」

「さあ？」

即答で肩をすくめて返すルイズにホームズは、額に青筋が立つのを感じた。

(蹴っ飛ばしたい……………)

文句を飲み込むそのままルイズの後をついていった。



「さて、私は村長に挨拶と許可取ってくるから、君はその辺で遊んでいたまえ」
ルイズは、そう言うときつとそうと走っていった。

取り残されたホームズは、辺りを見回す。

辺りにあるのは、一面の青い花畑と民家のみ。

「……………どの辺？」

「花の冠でも作って暇を潰してればどうだ」

「……………いや、畑の花は取っちゃダメだろう」

「畑じゃなければよろしいですわよ」

その聞き覚えのない声ホームズとヨルはうしろを振り返る。

そこには、自分より小さな女の子がいた。

パーカーにズボンといういでたちで、髪は赤毛の若干ズレたポニーテール。

くりつとした、くるみのように大きく鳶色の瞳が印象的だ。

「……………誰？」

「人に名前を聞く時は、まず自分から名乗るのが常識だと思うのですけれど？」

その小憎らしいお嬢様言葉にホームズは、青筋を浮かべる。

「ホームズ・ヴォルマーノ、これでいいかい？」

「わたしはマープルです。以後よしなに」

「ああ……………わかった」

(よし、以後関わらないようにしよう)

ホームズのアホ毛が過敏に反応していた。

「さて、わたしの自己紹介も済みましたし、その黒猫さん？名前をお聞かせねがえま
すか？」

そんな風にヨルに喋っているマープルを見て、ホームズはため息を吐く。

「あのねえ、お嬢ちゃん。猫が喋るわけないだろう？」

「そうですね。猫は喋りませんが、この黒猫さんは、喋っていましたよね？それとお嬢ちゃんではなく、マープルですわ」

その一言に余裕綽々だったホームズは、ギジリと固まった。

「ま、マープルちゃん。そのそれは、その……………」

「ちゃん付けで名前呼びびとは、中々たらしですわね？」

さっと両肩抱くようにホームズから距離をとるマープル。

「どの辺が!?至って普通だよ!!」

「あなたは、知らないのですわね。わたしたちの間では男子は、女子の事をちゃん付け

でなんて呼びびません。名 フエアーストネーム 前か苗 フエアミリーネーム 字で呼びびます」

子供たちには子供たちの世界がある。

そして、そこには暗黙の了解というものがある。

今回の件がそれなのだろう。

しかし、その上から目線にホームズは、ギリギリと歯軋りをする。

「じゃあ、マープル」

「初対面の人に向かって呼び捨てとは、大分なれなれいですわね」

「!!」

「おい、よせ。もう、俺が喋るからこれ以上こいつを煽るな」
ヨルは疲れたように口を開いた。

「ヨルだ。それと俺が喋ったことは、内緒にしといてくれ。色々ややこしいから」
「ええ。いいですわよ。肉球を触らせてくれたら」

今度は、ヨルが固まる番だ。

「あら?ここは、二つ返事で答えてくれるところではありませんの?」

ニヤリと底意地の悪い笑みを浮かべながらマープルは、案に脅していた。

「このクソガキ……………」

ヨルは渋々ホームズの方から降りると肉球を差し出した。

マープルは、満足そうにヨルの前足の肉球を押し続けていた。

「中々変わった押し心地ですわ」

「良かったね」

ホームズは、うんざりしたように言うのと立ち上がっていた。

「あら?どこ行きますの?」

「君のいないところ」

「君ではありません。マープルですわ」

ホームズの顔から笑顔が消える。

しかし、マープルは涼しい顔のままだ。

「……………ここで、マープルって呼ぶと君はなんて思うんだい？」

「記憶力のない方ですわね。なれなれしい方だと思えますわ」

「じゃあ、なんて呼べばいいんだい!!」

ホームズの全力の叫びにきよんとする。

「普通にマープルさんか、マープル様じゃありませんか？」

「一つ明らかに普通じゃない選択肢があったよ!!」

「ささいな問題ですわ」

しれっと返すマープルにホームズは、思わず引く。

「し、じゃあもう、ファミリーネームの方を教えてくださいよ。そっちで呼ぶ」

ホームズは、呆れたようにそう言うのとマープルは、涼しい顔で首を振る。

「ありませんわ」

「ない？」

「ええ。わたし、孤児ですの。だから、ファミリーネームは、存在しませんわ」

ホームズは、それを聞いて辺りを見回す。

村人全員が知り合いレベルの人数しかない。

(「こんなところで子供なんて捨てたら、誰が捨てたか一発じゃないか……」)

「どうもわたしは、人買いに攫われたらしくて……それをティーアさんが拾ってくださいましたんですわ」

ホームズの考えを見透かしたようにマープルは、そう続ける。

「わたしの他にもそう言う人たちは、いますわ。ここから見えるあの教会に皆さんいるんですの」

ホームズは、困ったように頭をぼりぼりとかく。

「なるほど。無神経なこと言って悪かったよ」

「いえ。気にしてませんわ」

そう言って笑うマープルをホームズは、少し目を細めてみる。

「ふうん。まあ、マープルさんがそう言うならそれでいいけど」
ホームズは、そう言うトスタスタと歩き出す。

「結局どこへ行くんですの?」

「とりあえず村をぐるっと回ってくるよ」

「なら、わたしもヴォルマーノについていきますわ。案内人なしの観光もあじけない
でしょう?」

てくてくとついてこようとするマープルをホームズは、手でしっしつと払う。

「いらぬ。というか、マープルさん。初対面の年上の人を呼び捨てするつても大
分礼儀知らずだと思っけどね」

ホームズのその言葉でマープルは、歩いていた足を止め不思議そうに首をかしげる。

「年上?どなたのことをおっしゃっているのですか?」

「……………目の前にいるんだけど」

「おいくつですか?」

「十四歳」

ホームズのその言葉にマープルは、目を丸くする。

「まあ!年上でしたのね!!」

「素直に驚いているね!!というか、君はいくつだい!」

「八歳ですわ。それと君ではありません。マープルです」
ホームズは、その回答に目眩がしてきた。

元々年相応に見られないことは自覚は、していた。

しかし、六歳も下の子に年上に見られないということはショック以外の何者でもない。
い。

「で、いやいや。流石にそれは、ないでしょ……」

そう、いくら何でも十四歳と八歳が同等ということはありえない。

そこから導き出される結論は一つだ。

「……………君もしかして、天然入ってるかい？」

「本当に失礼な方ですわね。わたしははっきり者ですわ」

「OK。今ので大体わかった」

ホームズは、ため息を吐いて今度こそ歩き出した。

「まあ！信じていらっしやらないですわね!!」

「ぐお！」

しかし、直ぐにマープルに両足を掴まれて転ばされしまい、それも叶わなかった。

「痛いじゃないか!!」

「いいからお聞きなさい！わたしがいかにしっかり者であるか!!」

「知らないよ!!毛ほども興味のない話をするんじゃない!!」
ぎやあぎやあど道の真ん中で騒ぐ二人。

「……………君たちは、何をやってているんだい?」

用事を終えたルイーズはその珍妙な光景にため息を一つ吐いた。

「いへや、ふえうに」

ホームズの頬はマープルに手加減抜きで引つ張られていた。

マープルは、そんなルイーズとホームズを交互に見ると首をかしげる。

「どちらさまですか?」

ホームズは、マープルの手を振りほどくと、頬をさする。

「僕の母さん」

「まあ!そっくりですね」

「喧嘩売ってる?」

「その言葉そっくりそのまま返すよ、バカ息子」

背筋に寒気が走った。

ルイーズは、胸に手を当てる。

「私の名前はルイーズ・ヴォルマーノ。君は?」

「わたしは、マープルと言います。以後よしなに」

ルイーズは、うんうんと頷きながら、ホームズの方を見る。

「で、何をもめてるんだい？」

「わたしの観光案内を断ったんですの」

それを聞くとルイーズは、大袈裟にため息を吐く。

「君は、本当にどうしようもないね。そういう時は二つ返事と相場が決まっているんだよ」

「あれ？おつかしいな？それでもめてたわけじゃないと思うんだけど……」

釈然としない顔でそういうホームズを無視してルイーズは、マープルの方を向く。

「それじゃあ、マープルちゃん。案内頼むよ」

「ええ。お任せください」

そんな二人を見てホームズは、さらに釈然としない顔を浮かべる。

「……ねえ、ちゃん付けで呼んでるんだけど」

「同性ならいいんだろ」

「ほら、とつときたまえ」

其の弐

「……………この辺り一面に広がる、青い花は、わたしたちの村のメインの産業ですわ
そう言つて、畦に生えている青い花をむしつてルリーズに渡す。

「見てよし、嗅いでよし、食べてよし、染め物にもよしとまさに一石二鳥を超えた究極
の花ですわ。まあ、その分肥料も必要なのですが……………」

ルリーズは、口に放り込む。

「なるほど、おいしいね」

「こんな鮮やかに青いのに食えるんだねえ……………」

ホームズは、ルリーズが花を食べている様子を興味深そうに見ている。

マープルは、首をかしげる。

「どういう意味ですか？」

「ん、いやね、青い色の食べ物って普通はないだろう？」

マープルは、その言葉を聞くと顎に指を当て考え込む。

「言われてみればそうですね」

「だろう？だから、珍しいなつて思つて」

「まあ、喋る猫ほどでは、ありませんわ」

「はははは………」

ホームズの口から乾いた笑みがこぼれる。

「おーい！マーブルちゃん！」

そんな会話をしていると何処からともなく女の子の声が聞こえる。

「まあ！ユーフォさん」

ユーフォと呼ばれた少女は、弟の手をつなぎながらマーブルの方に向かって走ってきた。

ポプカットの少女と、そして、自然に放置したような弟。

そんな二人を見てマーブルは、少し時間を空けてから口を開く。

「お散歩ですか？」

「そうだよ。それよりマーブルちゃん、後ろの二人は誰？」

興味深々というふう聞いてくる。

ルイーズが手を挙げる。

「私は、この街に来た行商人のルイーズ・ヴォルマーノ。そして、この隣にいるタレ目の奴が、私の息子、ホームズ・ヴォルマーノだ」

「どうも。そして、僕の肩にいる黒猫がヨルだ」

そんなホームズを冷めた目でマープルは、見ていた。

「自分の紹介も出来ないなんて、本当にわたしより年上ですか？」

「……………いやに突っかかってくるねえ……………僕に恨みでもあるのかい？」

「特に恨みも興味もありませんわ。単純な感想ですよ」

「わあーかわいくない」

そう言つて二人の会話を会話を面白そうに笑いながらユーフォは見ていた。

ホームズは、そんなユーフォを指差す。

突然のことにユーフォは、目を白黒させる。

「君も少しは可愛気を身につけたまえ」

「わたしは可愛くなくたって、構いませんわ！」

心外だとばかりにマープルは、胸を誇らし気に張る。

「わたしは、可愛いではなく、美しいのですから！」

その堂々とした物言いにホームズは、頬が引きつっていくのを感じていた。

(すげえ、変な子だなあ……………)

ルイズは、そんなホームズに構わずマープルとユーフォの方を向く。

「ところでこの町の広場って何処だい？そこで、商売をやる許可をもらったんだけど」

「お任せ下さい、案内いたしますわ」

マーブルが意気揚々と前を歩いてルイーズを案内する。

「ひろばにいくの?」

ユーフォの弟は、怯えながらルイーズに尋ねる。

そんな弟を見てユーフォは、呆れたようにため息を吐くとルイーズ達に苦笑いを浮かべながら説明をする。

「……なんでも、夜に広場の近くを通りかかったらすすり泣くような声が聞こえたんだって、それからこわがっちゃってこわがっちゃって……」

ホームズは、それを聞くと膝を抱えて、ユーフォの弟と視線を合わせる。

「安心したまえ。僕の母さんが来れば、幽霊の方がかわいそうだよ」

「どういう意味だい? ホームズ」

「やだなあ。頼もしいって言ってるんだよ」

ホームズとルイーズは、薄ら笑いを浮かべながらメンチを斬り合っていた。

「お二人とも? いかないんですの?」

ホームズもそれについて行くこうするが、ルイーズに止められる。

「君はこれを配ってきたまえ」

そう言つて紙をどきりと渡した。

その量にホームズの目が死んでいく。

「……………これは？」

「宣伝のチラシ。いいから、とつとそれを各家庭に配ってきたまえ」

「まさか、これを配り終えるまで……………」

「おつ、察しがいいねえ。君の予想通りだよ」

そう言つてルイズは、親指を下に向ける。

「配り終えるまでかえつてくるんじゃないよ」

とてもいい笑顔で。

ホームズの頬が引きつっていく。

「それじゃあ、行こっか、マーブルちゃん」

「はい」

二人はスタスタとホームズのまえを歩いて行つた。

取り残されたホームズとヨル、そして、ユーフォとその弟。

「あの……………チラシもらいますようか？」

「あ、そうしてくれる」



「少年、おかあさんいるかな？」

「おねえちゃんならいるよ」

「……………いくつ？」

「十歳」

「これ渡しとくからおかあさんにでも読んでもらうって」

「うん。おねえちゃんに渡しとく」

「君、人の話全く聞いてないね」

「……………えーつと……………とりあえずチラシです」

「あ、どうもです」

「背中で寝ている子は妹さん？」

「ええ。父も母も外出てることが多いんで、俺が面倒みてるんです」

「君、いくつ？」

「十二歳です」

「……………（僕より大人っぽい）」

「わあ！美人ですね！はいチラシどうぞ」

「……………は？」

「すみません。調子に乗りました。チラシをどうぞ。明日から商品を売るんで是非来てください」

「ふーん……………まあ、気が向いたら弟といくかな」

「やった！」

「あんたがいなかったら絶対行く」

「……………」

「こんにちは。お父さんかおかあさんいる？」

「はい！わたしだよ」

「いや、君じゃなくて……」

「今はわたしがお父さんなの」

「ああ、おままごと中か………つて、君がお父さん？お母さんじゃなくて？」

「うん」

「お母さんは、誰が？」

「お兄ちゃん」

「……………」

「いつもわたしがじゃんけんで勝っちゃうんだー」

「そっか………じゃあ、チラシ渡しとくからみんなで来てね」

「うん」

「みんなキヤラ濃すぎだろ……………」

ホームズは、土手に腰を下ろしていた。

「弟がしっかりとっしてればお姉ちゃんがぶつとんで、妹がぶつ飛んでれば、お兄ちゃんが不幸で……………」

今日の疲れを吐き出すようにふうとため息を吐く。

「なあ、ホームズ」

「なんだい？」

「お前、全部の家回ったよな？」

「回ったよ」

「だったらなんで、そこにそんなにチラシがあるんだ？」

ヨルが尻尾を差す先には四分の一程度のチラシが積み上がっていた。途中からホームズもおかしいとは思いついてはいたのだが、結局予想通り、配りきれなかったのだ。

「……………あのクソ親。ハナっからこのつもりだったなあ……………」
ホームズは、はあ、とため息と共に残ったチラシを叩く。

「……………さてさて、どうしたもんか……………」
ホームズは、そう言つて青い花畑を眺める。

風に揺れるたびに花のいい香りが鼻を抜ける。
そんな青い花畑の中にポツンと立つ教会がホームズの目に止まる。

—— 『ここから見えるあの教会に皆さんいるんですの』 ——

「そうだ！」

ホームズは、チラシを持つと勢いよく立ち上がった。



「改めて見るとデカイなあ……………」

ホームズの目の前にそびえる教会。

確かに驚くほど大きかった。

歴史を感じさせる、その石造りの建物にホームズは、圧倒されていた。

「いいから、入れ阿呆」

ヨルに促されホームズは、扉を開ける。

がらんと広がる礼拝堂。

長椅子が両脇にあり、入り口から石像まで真っ直ぐに道ができていた。

そこには、人影もなく、ホームズの足音だけが響いていた。

「なんか、妙な気分だな」

「まあ、化け物^きは、そうだよねえ」

化け物が神の領域に入っているのだ。

妙な気分にもなるというものだ。

「ふむ。さつきから誰も見ないねえ……」

ホームズは、そう言うと一緒に前の長椅子に腰をかける。

巨大な石像が目の前にあり、嫌でもそれが目に入る。

ホームズは、それを見て首を傾げる。

「これ、精霊なのかねえ……」

「いいえ。これは、神ですよ」

ドアがボタンと閉まる音とともに男の声が聞こえてきた。

ホームズは、背もたれに腕を乗せながら振り返る。

他人がいるところで声を上げるわけにはいかないのだ。

こざっぱりとした金髪に碧い瞳。

そして黒い修道服を着ている。

その出で立ちのせいで年齢不詳と言った感じだ。

男はゆつくりと歩みを進めていき、ホームズとは道を挟んだ向かい側に座る。

「まあ、精霊と言つてもいいんですが、なんとなく他と一緒だと思つたらないので神と呼んでいるんです」

につこりと笑つて答える男にホームズは、目をパチクリとさせる。

そんなホームズを見て、ポンと思ひ出したように手を叩く。

「ああ。自己紹介がまだでしたね。ボクはティーアと言います」

「へえ………じゃあ、あなたがマーブルさんが言つていた………」

ティーアは、笑顔で頷く。

「ええ。彼女たちのまあ、養父もやっています」

ティーアは、石像を眺めながら言葉が続ける。

「ところで、あなたは？」

ティーアの言葉でホームズは、ようやく自分がここに何しに来たかを思い出した。

「ああ。僕はホームズ・ヴォルマーノです。ここには、僕達の宣伝に来たんです」

そう言つてチラシを見せる。

ティーアは、渡されたチラシを興味深そうに読むとホームズを見る。

「行商人の方でしたか。助かります。この村は、ご覧の通りの場所なので、行商人が来るというのは、一つの娯楽なんですよ」

「へえ、そう言ってもらえると嬉しいですねえ」

「どうです？ ついでにこの神に入信しませんか？」

「ええ………なんか戒律とか面倒くさそうだからやだなあ………」

露骨に嫌そうな顔をするホームズにティーアは、面白そうに口に手を当てて笑う。

「まあ、戒律と言っても村の約束の三つと変わりありませんよ。早起きをする
食べ過ぎないこと、あとは一つは……」

そういうといたずらっぽくニヤリと笑う。

「入信してからのお楽しみという奴です」

「いや、入信しませんよ………というか、村の約束と一緒になんですわね」

ホームズは、ため息と共に残りのチラシをティーアに渡す。

「これは？」

「ここの子供達の遊び道具にでもしてください」

「ていよく、ゴミを押し付けましたね？」

「別にここに置いておいて、やってくる村人に持って行かせてもいいです」

「なるほど、宣伝ですか」

「そう言うことです」

そう言つてホームズは伸びをする。

ようやくチラシ配り地獄から解放されたのだ。

ホームズは、椅子に深く腰掛ける。

「ティーアさん、マナの欠片振り分けました！」

教会の奥の扉をあけ、少年が笑顔で袋を持ってやってきた。

「ここから、あまり騒いではいけませんよ」

にこにこ笑いながら静かに諭されると少年は、ホームズの姿に気づきぺこりと頭をさげる。

ホームズもその後、頭を下げながら首を傾げる。

「マナの欠片？」

「ええ。これのことです」

ティーアは、そう言つて袋から青白い石を取り出す。

「へえ。綺麗ですね」

ホームズの素直な感想にティーアは、微笑む。

「ええ。あまり知られていませんが、この村のもう一つの産業です」

「あれ？青い花だけじゃないんです？」

ティーアは、石を光に透かすように見る。

「これも影ながら支えているんですよ」

「……………どこで取れるんです?」

興味津々に尋ねるホームズにティーアは、微笑んで首を振る。

「それは、内緒ですよ。ボク達の生命線ですからね」

「ですよねえ」

そんな二人を見ていた少年は、ティーアの方を見る。

「ティーアさん、この人だれ?」

「ホームズさんと言って、この村に商品売りに来てくださった方だよ」

ホームズがひらひらと手を振ると少年は、不思議そうにホームズを見る。

「一人で来たの?」

「いや、母さんと一緒だよ」

少年は、ホームズの言葉を聞き少しだけ目を伏せティーアの袖をつかむ。

「……………お父さんは?」

ホームズは、少しだけどう答えようか悩むとニヤリと意地の悪い笑みを浮かべる。

「なら、マナの欠片どこで取れるか教えてくれないかい?」

ホームズの言葉に少年は、心底困ったような顔をする。

「知らない。ティーアさん、教えてくれないんだもの」

「ええ。あなたのような方がいますからね、ホームズさん」

ティーアの静かな言葉にホームズは、肩をすくめる。

「じゃあ、仕方ないね」

ホームズは、そう言うともんと力を込めて立ち上がる。

「それじゃあ、後よろしくお願いします」

「ホームズさん、ボクから最後にいいですか？」

そんなホームズをティーアが後ろから呼び止める。

「なんですか？」

ティーアは、目の前の石像を見ながら更に言葉を繋ぐ。

「神様っていると思いますか？」

ホームズは、そんな質問をするティーアに苦笑いを浮かべる。

「最後にしては、唐突だねえ……」

そう言うってホームズは、少し考える素振りを見せると呆れたように息を吐く。

「というか、あなたが、それを言っちゃあいけないでしょう？」

ホームズからの返しにティーアは、困ったように笑う。

「それもそうですね。すいません、今の質問は、忘れてください」

ホームズは、静かに頷くと教会を出て行った。



「あれ、帰ってきてるじゃないか」

太陽が沈み、代わりに月と星が空を照らす頃、ホームズ達は宿屋に戻った。

そんなホームズ達に開口一番にルイーズは、そう言った。

「文句を言われる筋合いはないよ。ちゃんとチラシは、配ってきたんだから」

「おかしいねえ、そんなはずはないんだけどなあ」

「ものはやりようだよ」

ホームズとルイーズは、そんな薄ら寒い会話を繰り返していた。

その不毛な会話をヨルはため息で吹き飛ばす。

「それより飯は？」

「もう終わった」

あまりにどうでも良さそうに言うのでヨルのこめかみが少し動く。

「まあ、もう一回食べられるみたいだからそれを楽しみにしたら？」

そんな中ホームズは、思い出したように手を叩く。

「そう言えば、あの子は？」

「あの子？ ああ、マープルちゃんか。彼女ならその辺で別れてきたよ」

ホームズは、それを聞くとはいあ、とため息を吐いた。

「あの子とは、関わりたくないなあ……………」

ホームズはため息を吐きながら椅子に座る。

ルイズは、不思議そうに首をかしげる。

「何故だい？ あの子、賢くていい子だよ」

「ええ……………」

ホームズは、げんなりという風な顔をする。

「自分の置かれた状況がわかるくらいは、賢い子だよ、あの子は」

ルイズは、ふっと息を吐くように溢した。

ホームズは、その何気ない一言を聞くとふむと頷き少し考え込む。

思い出すのは、今日の出来事だ。

実はいくつか目につくことがあったのだ。

今までスルーしていたが、ルイーズのその意味深な物言いにホームズの中で可能性が生まれていた。

ヨルは、そんなホームズに構わず鼻を動かす。

「ふむ。調理が始まったか」

ルイーズは、椅子に深く腰掛ける。

「どうする? ご飯までもう少し時間があるみたいだけど?」

ルイーズのその見透かしたものにホームズは、肩をすくめる。

「ちよつと、散歩してくるよ」

「そう。まあ、夕飯は、とっておくよ」

ホームズは、ルイーズに背中を見せるとひらひらと手を振って宿屋から出て行った。

「さて、ヨル。晩ご飯前に運動でもしておいで」

ルイーズの言葉にヨルは忌々しそうに舌打ちをすると姿を消した。

ルイーズは、ニヤニヤしながら、そして、少しだけ悲しそうにホームズの出で行った扉を見る。

「どうするのかねえ……………」

其の参

「で、何しに来たんだお前は？」

「んー……………余計な御世話？」

ホームズは、ヨルにそう返して夜空を見上げる。

「まあ、僕の気のせいとか考えすぎとかならいんだけどねえ……………」

そう言いながらホームズは、広場に向かって歩みを進めていく。

広場に近づくにつれ、すすり泣くような声が近づいていく。

「……………この^{ゲート}霊力野の気配は……………」

「静かに」

ホームズは、そう言つて辺りを見回す。

泣き声の方向は広場のベンチ。

しかし、誰も腰はかけていない。

ホームズは、泣き声のするベンチの後ろを覗き込む。

そこには、

「こんばんわ。マーブルさん」

あの小憎らしいマーブルが膝を抱えて座り込んでいた。

驚いたようにあげた顔は涙でぐしゃぐしゃに崩れていた。

「な……………んで、あなたがここに？」

ホームズは、不思議そうなマーブルに答えず抱きかかえる。

「なっ!?!ちよっ!?!」

マーブルが、突然の事に目を白黒させているうちにホームズは、マーブルを自分の隣に降ろす。

「椅子に座りたまえ。ベンチっていうのはね、座るために作られたんだよ」

ホームズは、マーブルを下ろすとむんと背伸びをする。

「……………して?。」

「ん?。」

「どうして、こんなところに来たんですの?。」

ホームズは、ふうつとため息を吐く。

「……………まあ、散歩かな。君は?こんな遅い時間に出歩くなんて感心しないよ。」

「……………私の勝手です。あなたには関係のないことです。乙女の秘密をほじくろうとするとモテませんわよ。」

「はいはい。」

ホームズは、そうやって笑って返すと椅子にどっかりと腰掛けた。

そんなホームズを見てマープルは、更に不思議そうな顔をする。

「あなたは、帰りませんか?。」

「君が帰るまではここにいますよ。」

そう言うのとマープルは、心底嫌そうな顔をする。

「夜に私のような少女と一緒にいたいと言うのですか?そう言うのを変態と言うんですよ。」

「……………君、本当可愛くないよね。」

ホームズも同じように心底嫌そうな顔をするとハンカチをマープルに渡す。

しかし、マープルはそれを受け取ろうとしない。

「使いたまえ。ちゃんと洗濯もしてあるし断る理由はないと思うよ」

「……………どういう意味ですの?」

震える声でホームズに問いかける。

「別に。何か拭くものが必要だろうか?」

「そうじゃありませんわ!!」

マープルは、ホームズを睨みつける。

「あなた…一体どういうつもりですの!! 私は、私は、私は、」

そう言いながらマープルの瞳からは、涙が一つまた一つと溢れていく。

ホームズは、それを黙って見つめていた。

マープルは、恨めしそうにホームズを睨みつける。

「私は、泣いてるところをみせたくないんです! だから、何処かへ行つてください!」

ホームズは、マープルの方を向かず空を見上げる。

「ん? 何か言つたかい?」

ホームズは、そのまま夜空に瞬く星から目をそらさない。

「……………まあ、アレだ。君の用事が終わるまで僕は天体観測でもしてるから」

ホームズの精一杯の言い訳にマープルは、それ以上言い返すでもなくそのまま声を殺

して泣き続けた。



「しっかし、よく泣いたなこのガキ」

ヨルは、感心したようにマープルを見ていた。

マープルは、泣き疲れたようにマープルを見ていた。静かに寝息を立てている。

ホームズは、起こさないようにそおとマープルを背負う。

「まあ、たまには感情を外に出さないとね」

そう言つてホームズは、孤児院に向かって歩き出した。

ヨルはホームズズの頭の上でバランスをとっていた。

「そう言えばお前も泣くだけ泣いて寝てたよな」

ヨルの心底面白そうな物言いにホームズズは、顔をしかめる。

いつの事を言っているのかよく分かる。

「覚えてくれて嬉しいよ」

ホームズズは、ゆっくりと歩みを進めていく。

月光が夜道を照らし歩くのに不自由はない。

ホームズズは、マーブルを背負いながらその道を進んでいた。

辺りには、月光で照らされた青い花が夜の闇の中に浮かび上がる。

その幻想的な光景にホームズズは、ほおつとため息を吐く。

「どうした？」

「いや、別に。きれいだあなと思ってさ」

「お前でも風景に感動することがあるんだな」

「どういう意味だい？」

「そう言う意味だ」

そんな会話をホームズズとヨルがしているとマーブルは、ゆっくりと瞼を開けた。

「ん……………」

中々覚醒しない頭でぼんやりと辺りを見回す。

「!!？」

そして、普段より高い視点に驚いて体を急に動かした。

ホームズも驚いたようだ。

少しだけ歩みを止める。

「ああもう！突然動くんじやあない！危ないだろう!？」

ようやくマープルは、自分がホームズに背負われているんだと理解できた。

「どういうつもりですか？」

不機嫌な様子を隠そうともせず尋ねるマープルにホームズは、ため息を吐く。

「孤児院に向かっているの。君、このまま、夜通し広場にいるつもりだったのかい？」

「君じゃありませんわ。マープルです」

「落とすよ」

「レディの扱いを知らないようですわね」

「……………レディを自称するならもう少し礼儀というものを知りたまえ」

月明かりに照らされるホームズの背中を見ながらマープルは、少しだけ口を開いた。

「……………私が泣いていると思っただけですか？」

「そうだ」

ホームズがどう答えようかどうしようか考えている間にヨルが代わりに答えた。ホームズは、背中にいるマーブルの方を見る。

涙で赤くなったマーブルの目とあつたホームズは、観念したようにため息を吐く。

「まあ、なんとなくね。君、家族とか兄弟とか見ると少しだけ動きが止まつてるんだよ」

ホームズは、それ以上言葉を続けない。

「だから、どこかで寂しいと泣いているんじゃないかと、そう思ったわけですね？」

「いや、広場だろうってことぐらいは当たりが付いていたよ」

マーブルは、一瞬何故だか分からなかったようだが、直ぐにわかつたようで舌打ちをする。

「ユーフォの弟ですわね」

「彼、夜中に広場から聞こえてくるすすり泣きを大層怖がつていたよ」

ホームズの言葉にマーブルは、観念したように口を開く。

「ええ。あなたの予想どおり私はいつも夜はここで泣いています。そして、それから孤児院に戻っています」

ホームズは、黙ってマーブルの方を見ている。

マーブルは、そのまま言葉を絞り出すように続ける。

「……………だって、しかたないじゃないですか……………皆さんにはお父さんもいてお母さんもいて、家族がいる……………でも私にはいない……………」

寂しそうに紡がれる言葉をホームズは、背中で黙って聞いていた。

「さびしいですよ……………悲しいですよ……………でも、孤児院というところはそういう子たちが集まったところですよ……………だから……………だから……………」

マープルは、ぎゅつとホームズの肩を掴む。

「私だけそこで、悲しい寂しい羨ましいと泣くわけにはいかないのです……………」

———「自分の置かれた状況がわかるくらいは、賢い子だよ、あの子は」———

ホームズの脳裏にルイーズの言葉が蘇る。

(なるほど、確かに賢い子だ)

だからこそ、賢いからこそこの子はこんなところで泣く羽目になっているのだ。自分の立場を理解する頭脳。

そして、年相応の心。

そのズレがこんな夜遅くに一人で泣くという状態になっているのだ。

昼間あんなにハツラツしていた彼女は、今は見る影もない。

「そっか……………」

ホームズは、そう言うとき少しづつ歩みを進めていく。

会話の途切れてしまったマープルは、不思議そうに首を傾げる。

「驚いた。慰めの言葉もないのですね」

その口調は、不満というよりも驚いていると言うものだった。

ホームズは、マープルの言葉を聞くと申し訳なさそうに笑う。

「悪いね。僕、そういうの苦手なんだよ」

ホームズは、そう言いながら、歩みを止めることなく進めていく。

「まあ、僕に出来ることなんて、せいぜいハンカチを用意してあげるぐらいさ。それ以上は、無理かな」

「充分ですわ」

「へ？」

予想外の返事にホームズは、思わず振り向く。

そこにはとても嬉しそうなマープルがいた。

目元には薄っすらと涙が浮かんでいる。

「それ以上なんてありませんわ」

「……………いや、泣きながらいわれても……」

顔は花が咲いたような笑顔だというのに目元には、涙が浮かんでいる。

そんな表情にホームズは、戸惑っている。

そんなホームズを無視してマープルの瞳からは次から次へと涙が零れ落ちた。

慰めの言葉が欲しかったわけではない。

励ましの言葉が欲しかったわけではない。

ただ、弱音を聞いて欲しかったのだ。

苦しくて、寂しくて、悲しい、そんな弱音を誰かに聞いて欲しかった。

だが、隠れて泣いているマープルには、そんな事はありえない。

しかし、ホームズはマープルを見つけた。

そして望みを叶えた。

こんなに嬉しい事はない。

「……………嬉し泣きという奴ですわ」

「……………何で？」

そんなマーブルの心情など知る由もないホームズは、戸惑うばかりだ。ヨルはホームズの頭の上で呆れている。

マーブルは、くすりと笑うとホームズの耳元で小さく囁く。

「内緒ですわ。女は、秘密があつた方が美しいですからね」

「ああはいはい。そうだね」

「腹の立つ言い方ですわね」

「そう言うのはね、あと十年歳をとってから言うんだね」

ホームズは、呆れたようにそう返すとマーブルを地面に下ろす。

「ついたよ。後は布団でゆっくりおやすみ」

マーブルは、静かに頷くのを見届けるとホームズは、マーブルに手を振ってその場を去った。



「なんとなくだが……」

「ん？」

ホームズは、宿屋に向かって帰っている途中、肩にいるヨルに話しかけられた。

「お前のモテない理由がわかった気がした」

「蹴り飛ばすよ」

思春期真っ只中のホームズにとってこれほど腹の立つ言葉はない。

そんなホームズに構わずヨルはケタケタと面白そうに笑っている。

「ったく、このクソ猫」

ホームズは、忌々しそうに吐き棄てると宿屋の扉に手をかけた。

「おつ、帰ってきたね」

ルイズは、食堂でお茶を飲みながらひらひらと手を振ってホームズを出迎えた。
「ただいま」

ホームズは、疲れたようにそう返すとルイズにならうのように食堂のテーブルに腰掛ける。

しばらく待っているとホームズの前にマーボーカレーが出てきた。

ホームズは、マーボーカレーにスプーンをつけて始める。

「どうだった？夜の散歩は？」

「……………その聞き方、答えわかっているだろう？」

「当然。私は君のお母さんだからね」

「はあ……………」

ホームズは、ため息と共にカレーを救う。

「君だつて予想できてたくせに」

ルイズの言葉にホームズは、マーボーカレーを食べる手をピタリと止める。

「あんなにうんざりしてたくせに探しに行くんだもの。君も相当お人好しだよねえ」

「……………母さんの息子だからね」

ホームズは、そう言うのとぺろりとマーボーカレーを平らげた。

「残念ながら」

「一言多いよ」

ルイズの半眼にホームズは、答えず手をひらひらと振ってそのまま寝室へと消えていった。



翌朝。

「んー……………」

ホームズは、眠そうに瞼を擦りながら降りてきた。

「おはよう、ホームズ」

「おはよう」

ルイズの挨拶にホームズはあくび交じりそう返すと、席に着く。

「おはようですわ」

「ん、おはよう」

ホームズは、そう返事をしながらパンにバターを塗る。

そして、ピタリと途中で手を止める。

「ん?」

ホームズは、寝ぼけた頭で、今の流れを思い出す。

徐々に覚醒していく頭、そして、隣の席に見覚えのある少しずれたポニーテール。

「はあ!?!」

「朝からげんきですわね……………」

呆れたようにマープルは、ため息を吐いた。

「なんでいるの!?!」

「ホームズに会いに来たのですわ」

「わあ……………君以外から聞きたかったセリフだなあ……………」

ホームズは、ため息を吐きながらトーストを齧る。

「どういう意味ですか?」

「そのまんまの意味だよ」

マープルの怒りに満ちた目を無視してホームズは、お茶を飲む。

「で、何の用だい？」

ホームズの言葉にマープルは、居住まいを正して真剣な顔でホームズを見る。

「私ときようだいになつてくさいませんか？」

ホームズは、一瞬でフリーズした。

「ええーつと……………」

突然の申し込みにホームズの頭がついていかない。

困惑しているホームズを他所に目の前のルイーズとヨルはとても面白そうにニヤニヤと笑っている。

ホームズは、直ぐに断ろうとしたが昨日の夜の出来事を思い出す。

そうあの時、マープルは家族がいない事を寂しがっていた。

それを思い出すと無下に断ることもできない。

そんな風に迷っているホームズをマープルは、覗き込むように見つめている。

「……………わかった。いいよ」

その言葉を聞くとマープルはとても嬉しそうな笑顔を浮かべる。

因みに言うるとルイーズとヨルは笑いを堪えるのに必死だった。

「良かったですわ。だったらこれからは……………」

私の事をお姉ちゃんと呼んでくださいいな」

ホームズは、思わず紅茶を吹き出した。

「はあ!? なんて?」

「それより私に言うことがあるだろう……………」

ホームズの吹き出した紅茶は全てルイズに降りかかった。

「あら、お姉ちゃん嫌いですの? だったら、お姉さん、姉さん、などでもいいですわよ!」
「そうじゃないよ! いやだよ! 呼ばないよ!」

「あら? あなたは了承したじゃありませんか」

目を白黒させているホームズを他所にマープルは、自分の紅茶を飲む。

「いや確かに言っただけ。ぎゃくだろう、普通! 僕の事をお兄ちゃんとかって呼ぶもんだらう?」

ホームズの言葉にマープルは、信じられないものを見たかのようにホームズから距離を置く。

「出会ったばかりの年下の女の子に自分の事をお兄ちゃんなんて呼ばせるなんて……………あなたは、変態ですか?」

「出会ったばかりの年上の男に自分の事をお姉ちゃん呼ばわりさせる変態に言われたくない!!」

ホームズのもっともな言い分を無視してマープルは、すくつと立ち上がって自分の胸に手を置く。

「孤児院のみなさんは私より年上なのです。

ですから、お姉ちゃんもお兄ちゃんも有り余っているのです」

「だから？」

「弟か妹が欲しかったのですわ」

「それで？」

「あなたなら私の弟と言ってもなんの違和感もありませんわ」

「君、頭のネジとんでじゃないの!？」

仮にも年上のホームズは、裏返る声で朝一番の突っ込みを入れた。

ルイーズは、こめかみに手を当てたため息を着く。

ヨルはもさもさと口を動かしながらルイーズの方を見る。

「お前、こうなることわかってたのか？」

「いや…………ちよつと、予想外だったかなあ……………」

そんなルイーズが目を向けた先には、未だにもめているホームズとマーブルがいた。

「なしなし！さっきのなし！君ときようだいなんて絶対ヤダ！」

「あら？男のくせに二言ですの？」

マープルは、ハツと鼻で笑う。

「そんなじゃ、モテないですわよ」

「年下の女の子を『お姉ちゃん』呼ぶよりは、モテると思うけどね」

ホームズも負けじと言い返す。

するとマープルは、意地の悪い笑みを浮かべる。

ホームズは、その何かを企んだ笑みに思わずたじろぐ。

「な、なんだい？」

「ホームズに拒否権なんてないですわよ」

そう言つてマープルは、ヨルを指差す。

その意図を悟つたホームズの額から汗が流れ落ちる。

そうマープルは、知っているのだ。

ヨルが喋ることを。

そんなものを言いふらすなんてことは、ホームズとしては絶対ゴメンだ。

何せ説明するのが面倒臭い。

「さあ！さあ！さあ！かもん！」

無駄にテンションの高いマープルと目が死んでいくホームズ。ホームズは、無言で固まるとその後、顔を屈辱で歪めながらマープルの方を向く。

「……………マープル……………姉さん」

今にも泣きそうなホームズとは対照的に、マープルは満面の笑みで満足気に頷いていた。

「よし！これで私たちは姉弟ですわ！てなわけで、ホームズ！早速遊びに行きますわよ」

「いや、僕仕事が……………」

「いいよ、行っておいで。こっちは、私に任せて君はお姉ちゃん……と遊んでおいで」

「蹴つ飛ばすよ」

「いいから行きますわよ」

ニヤニヤと笑うルイーズに詰め寄ろうとするとマープルは、ホームズの腕を引いて出て宿屋を出て行つた。

ルイーズは、それを見送るとふうとため息を一つ。

「いやあ、ほんと強烈な子」

其の肆

「さあさあ！何かわからないことがあつたらお姉ちゃんに聞きなさい！」

「帰るにはどうしたらいい？」

マープルは、無言でホームズにミミズを投げつけた。

「うお！顔を粘ついた紐が!!」

ホームズは、目を白黒させながら顔についたミミズを取り、釣り針につける。

「あら？手慣れてますわね」

「まあね」

そういつてホームズは、釣り糸を池に垂らした。

ホームズとマープルはただいま釣りの真つ最中だ。

あの後ホームズは、マープルに連れられ、孤兒院に釣竿を取りに行った後、この池まで来ていた。

「ここって釣れるのかい？」

「実力次第ですわ」

マープルは、そう答えながら蛙に釣り針を刺している。

まだ生きている蛙に平然と針を刺し、それを池に垂らすマープルを見てホームズの顔が引きつる。

「すごいね、君」

「珍しいですわね。あなたが、褒めるなんて。それと、君ではありません。姉さんですわ」

「はいはい」

ホームズは、そう言葉を濁しながら自分の浮きを眺める。

「にしても、釣りなんてえらいもんをチョイスしたねえ……」

「あら？お人形遊びがよろしかったのですの？」

悪戯っぽい笑みを浮かべながらそう返すマープルにホームズは、ため息を吐く。

「いや、まあ、君なりに考えてくれたんだろう？」

「君ではありませんわ。姉さんです」

「……………姉さんなりに考えてくれたんだろう」

嫌そうな顔で姉さんというホームズに構わずマープルは、肩をすくめる。

「考えすぎですわ」

「……………そっか」

ホームズが、そう返すと浮きがぶくりと沈んだ。

「うしーきたー！」

一気に釣り上げた竿には魚が食らいついていた。

ホームズは、手慣れた手つきで針を取りバケツの中に放り込む。

「手慣れてますわね」

「当然」

ホームズは、そう言つて餌を針につける。

「飢え死にしたくないからねえ」

行商人は、街から街へと旅をする。

その間の食料は、蓄えがあればいいがない場合は、自力での調達となる。

「……………なんか、聞かなきやよかつたて、感じですわね」

マープルは、顔を引きつらせながらそう返した。

そんなことをしてる間にホームズは、再び釣り上げる。

マープルは、未だにピクリとも動かない竿を不機嫌そうに眺めている。

そんな中、マープルの竿が大きくしなる。

「おっ？」

「むん！来ましたわ！！私の勝利の瞬間が！！」

マープルは、歯を食いしばり勢いをつけて釣り上げる。

「あ」

筈だった。

勢いよく引つ張り上げた竿は、プチんと切れた糸だけを残してプランプランと空中を彷徨っていた。

「……………あ、僕の釣れた」

ホームズは、そう言つて再び釣り上げた。自慢げに。

マープルは、そんなホームズを恨めしげに睨む。

「なんだい？ 実力の問題だろう？」

更に自慢げにホームズは、魚を見せびらかす。

マープルは、無言でホームズの魚の入ったバケツを池に向かって蹴り飛ばした。

「ああー!! 君！ 何するんだい!!」

「その嫌味つたらしい言葉遣いどうにかなさいませ!! それと君ではありません! 姉さんです!」

「だったら、姉さんらしい言動見せたまえ!」

二人は竿置いて掴み合っていた。

とはいえ、ホームズの方が体格も年齢も上の為、圧倒的に有利だ。

ホームズは、マープルを担ぎ上げると池に向かって投擲の姿勢を取る。

マーブルの抵抗をホームズは、高笑いして、相手にしない。

「フハハハハ！逃げた魚、せいぜい自分で捕まえたまえ！」

「……………こんの!!」

マーブルは、渾身の力を込めて先ほどまで握っていたミミズを大口開けているホームズに叩きつけた。

「———!!」

口の中をのたうちまわるネバネバとした紐とそして、味わったこのない奇怪な味。

ホームズは、パニックに陥り、ドタバタとしているうちに足を滑らせ、

「あ」

マーブルを抱えたまま池に落ちていった。



「何をしてるんだい、君たちは」

「ちよつと水浴びを」

仕事を終えて帰ってきてみればホームズとマーブルは、びしょ濡れ。

ルイーズは、ため息を吐いて、ゴソゴソと鞆を漁る。

そして、引つ張り出したのは、子供のような綺麗なロングワンピースだった。

「ほら、マーブルちゃんこれに着替えたまえ」

「はい」

「母さん、何でそんなものを？」

「昔君に着せようと思って」

「え？」

「……………冗談だよ」

「やべえ……冗談に聞こえない……」

ルイズからの不自然な間にホームズは、顔を引きたらせる。

ホームズは、それをどうにか頭の片隅にどけて自分の着替えを探す。

「それで？ 売り上げの方は？」

「まあ、上々だねえ。後はこの金を元手に何かこの村の特産品でも買ってあげたい感じだよ」

ホームズは、なにか良い特産品は、ないかと頭を捻る。

「あれはどうだ？ その辺に生えているアオイハナ」

ヨルがホームズの頭上で提案する。

アオイハナは、確かにこの村の一大特産品だ。

しかし、ホームズは首を振る。

「いや、生食品を持ち運ぶはめになるから無理だねえ」

果物等なら熟す前に収穫したものを運ぶという手もある。

しかし、辺り一面に咲き誇っているアオイハナを見る限り、それが出来るとは思えない。

恐らく持ち運んでいるうちに枯れる、最悪の場合腐る。

しかし、ヨルは不服そうだ。

「んなこと言ってたら、このアオイハナがこの村を支える特産品なんぞにならんだろ。何か方法があるはずだ」

ヨルの最もな言い分にホームズは、肩をすくめる。

「勿論あるよ」

ホームズは、そう言って人差し指をピンと立てる。

「ただし、精霊術の使えない奴僕たちには、無理だ」

ヨルはホームズが何を言いたいかようやくわかった。

「なるほど……加工品でも探すしかないな」

「そゆこと」

ホームズは、そう言い終わると予備のポンチョを羽織った。

そんなホームズにルイズは、じつとりとした目を向ける。

「それで？君たちは、いつまでそこにいるつもりだい？」

「は？」

ホームズが首を傾げた瞬間ルイズから、鋭い蹴りが飛んできた。

「ふぐおつ!!」

ホームズは、そのまま部屋の外へと蹴り飛ばされた。

「レディが着替えをするんだ。とつとと出て行きたまえ」

ルイーズは、そう言うときノータイムで鍵を閉めた。

扉が閉まる時に見えたマーブルのゴミを見る目が嫌に記憶に残った。

其の伍

「入って良いよ」

ようやく許可が下りたホームズとヨルは、扉を開けて入るとそこには、ルイーズに渡されたワンピースに身を包んでいるマーブルがいた。

髪は乾かしたようで、いつもの少しずれたポニーテールが揺れている。

普段は、ズボンのマーブルにとってワンピースというのは何だか妙な気分のようなだ。先ほどからスカートの裾をびらびらと触っている。

ホームズは、そんな仕草に心底呆れたような目を向ける。

「君って気品の欠片もないよね」

「レディの着替えの最中だというのに出ようともしなかつたあなたには、言われたくないですわ。それと、君ではありません。姉さんですわ」

「今の姉さんを見て、レディなんて思う奴いないよ」

そう言つてスカートをびらびらと動かしているマーブルに指を向ける。

「それ、間違つてもミニでやるんじゃないよ」

ホームズの発言の意味を一瞬考え、そして自分の行動を冷静にみたマーブルは、ス

カートの裾から手を離れた。

「忠告感謝しますわ。まあ、デリカシーは、ありませんでしたけど」

「どういたしまして」

二人は半眼でそう会話をしていた。

「とうか、服の感想は？」

ルイズの言葉にホームズは、キョトンとした顔をする。

「いいんじゃない？」

頭に『どうでも』が付きそうな言い方にルイズは、頬を引きつらせる。

マープルもそれを感じ取ったようだ。

額に青筋をピキリと立てる。

ホームズは、それに構わずマープルを見る。

「とうか、会った時から気になっていたんだけど、君のポニーテール、どうしてズレているんだい？」

マープルは、顔を赤くしてズレてポニーテールを触る。

「仕方ないでしょう？ 私は後ろの髪を上手に結ぶだなんてそんな器用なこと出来ませんもの！ それと、君ではなく姉さんです」

「……………ふーん」

ホームズは、そう言うのと顎に手を当てて考え込む。

そして、思いついたように椅子を持つてくる。

「姉さん。とりあえず座りたまえ」

「？」

マープルは、荒れた息遣いを整え椅子に座る。

「母さん、僕のカバンに櫛があるからとつて」

「ほれ」

ルイズは、ホームズに櫛を放り投げる。

渡された櫛はとても綺麗で、新品のようだった。

ホームズは、それをキャッチすると、まずマープルのズレたポニーテールを解いた。

「何をしますの!？」

「ああもう!動くじゃあないよ」

ホームズは、そう言つてマープルの視線を前に向けると髪を櫛で梳かし始めた。

しかし、

「……………君、すげえ櫛が引つかかるんだけど、普段髪ちゃんと梳かしてるかい？」

「いいえ。私はそんな事しなくても美しいですもの。それと、君ではありません。姉

さんです」

マーブルは、胸を張って自信満々にそう返す。

ホームズは、ため息をつく。

「美しさってのはね、誇るものじゃなくて磨くものだよ」

ホームズの言葉に思わずマーブルは、口をつぐんだ。

「弟のくせに生意気ですわ」

不満そうに口を尖らせながらそう言った。

「姉さんより歳上だからね」

ホームズは、そう返すと、髪を何とか梳かしていく。

ある程度梳かすとホームズは、マーブルの髪を一つにまとめていく。

そして、最後は綺麗なポニーテールに結び上げた。

「うし！出来た」

マーブルは、驚いたように目の前の鏡に映る自分のポニーテールを見る。

「……文句を何か言ってやろうと思っていたのに、そんな隙全くありませんわ」

「……………」

ホームズの額にピキリと青筋が浮かぶ。

「褒める時ぐらい素直に褒めたらどうだい？」

「お前が言えたことじゃないな」

ヨルはホームズの頭の上で尻尾を横に振る。

ルイズもうんうんと頷いている。

「昔は素直でいい子だったのになあ……」

「記憶は捏造しないほうがいいぞ」

「君たち後で覚えていたまえ」

ホームズがヨルとルイズにいじられている間にマープルは、立ち上がって鏡に全身を移す。

そして、ポニーテールを軽く触る。

「にしても、どうしてあなたはそんなに女性の髪を触るのに慣れていますの？」

ホームズは、肩をすくめる。

「昔、母さんの髪で散々遊んだからね」

ルイズは、うんうんと頷きため息を吐く。

「ああ、あの頃は本当に可愛かったのになあ……」

妙に芝居かかった口調でそう言うルイズを無視して、マープルを見る。

「さて。というわけだ。これからはちゃんと鏡で見ながらやっご覧。それと、髪の毛は毎日ちゃんと梳かしたまえ」

マープルは、ホームズにアドバイスされたのが微妙に気に入らないようだったが、頷

いて立ち上がった。

「ああ、そうですわ」

「何だい？」

ホームズは、椅子を片付けながら返事をする。

「さっきの話の続きですけれど、マナの欠片というのが、この村にはありませんわ」

ルイズは、ピタリと動きを止める。

ホームズは、ポンと手を叩く。

「そう言えば昨日神父がそんな事言ってたね」

ホームズの発言にコクリとうなずく。

「それはこの村でしか手に入りませんし、売るとしたらこれ以上のものはないと思

ますわ」

マープルの言葉を聞いてルイズは、考え込む。

「なるほどねえ……：……マープルちゃん、その神父さんの所まで案内してくれないかい？」

「いいですわ」

「よし！決まりだねえ。ホームズ、君も来たまえ」

我関せずといった感じで自分の頭をゴシゴシと拭いてホームズは、突然の事に思わず

間拔けな声が出た。

「へ？」

「言っておくけれど、断る権利なんて君にないよ」

「……………僕、なんかした？」

「この情報を黙っていた」

ルイズの言葉にホームズは、はあとため息を吐く。

「わかった。行けばいいんですよ」

ため息混じり立ち上がったホームズの肩にヨルがちよこんと飛び乗った。



「いやあ、これはこれは。わざわざ来ていただき有難うございます」

ティーア神父は、突然来たホームズ達を快く迎えてくれた。

「ティーアさん。こちら、ルイーズさん。マナの欠片の件でお話があるようですわ」
マーブルの紹介にルイーズは、お辞儀をしてにっこりと微笑む。

「どうも。ルイーズ・ヴォルマーノです。早速商談なのですが、どこですればよろしいでしょうか？」

「本当に早速ですね……分かりました。私の部屋で話しましょう」

ティーアが、自分の部屋の扉を手で示す。

ルイーズとホームズは、その後に続く為立ち上がる。

立ち上がったルイーズは、ホームズを手で制する。

「商談は、私がやるよ。君はその辺で待ってたまえ」

「……………何しにここに連れて来たの」

「嫌がらせ」

ルイーズは、困惑しているホームズに即答するとそのままティーアの部屋へと入っていった。

ホームズは、ポカンと消えていったルイーズを見つめていた。

「あのやろう……………」

ホームズは、ため息を吐いて椅子にどっかりと腰掛ける。

そんなホームズを眺めながらマープルは、頬を引きつらせる。

「何というか、色々ぶっ飛んでる方ですわね」

「……………お前も思ったか……………」

出会った瞬間に腹パンされたヨルは、うんうんとマープルの言葉に頷く。

ホームズは、そんな彼らの会話を聞き流しながら目の前の神と呼ばれた石像を眺める。

そんなホームズの視線に気付いたマープルは、不思議そうに首をかしげる。

「神様の石像がそんなに珍しいのですの？」

「まあね。精霊信仰ってのは、よく聞くけど、神様ってのは、なかなか馴染みがないからねえ」

ホームズの言葉を聞きながら、マープルは、ホームズの隣に腰掛ける。

「ホームズは、神様に祈ったりとか信じたりとかしてますの？」

マープルの質問にホームズは、顎に手を当てて考える。

「別に普通かな。やな事があつたら恨むし、ギャンブルの時は祈る程度かな？」

「俺はそんな事考えた事もなかったな」

ヨルは、ホームズの頭の上で尻尾を振りながら答える。

ホームズは、マープルの方を見る。

「そういう君はどうなんだい？」

マープルは、指を顎に当てどう言葉を選ぼうか考える。

「そうですわね……結論から言うとは私は信じていませんわ。それと、君ではありません。姉さんですわ」

どう言おうか迷っていたにしては、はつきりと言いつつたマープル。

そんなマープルにホームズとヨルは少し驚いた。

「それは、お前の両親と生き別れたのが原因か？」

ヨルの言葉にマープルは、首を振る。

「いえ。私を売りに出したのは人買いですわ。神様がそれをやったわけではありません。んもの」

マープルは、ゆっくりと言葉を選んでいく。

自分の思いを口にするというのはこんなに難しい事なのかと、マープルは、思いながら。

そんなマープルを急かす事なくホームズは、黙って話を聞いている。

「何かの悪い出来事を神様のせいにするのは、簡単ですわ。けれどもそれでは、何かいい事が起こった場合も神様のせいになってしまいますわ」

マープルは、足をぶらつかせながら更に言葉を続ける。

「例えば、足の遅い子がいたとします。その子は、足が速くなりたいたいと思い、毎日走り込みをします。そして、遂にその子は誰よりも速くなりました」

ぶらつかせていた足を椅子の上に乗せるてホームズを見る。

「さて、ここで質問ですわ。

この子の足が速くなったのは神様のおかげでしょうか？

この子の努力を神様が認めてくれたからでしょうか？

それとも神様が見えない力を使ってくれたのでしょうか？」

じつとホームズを見つめる鳶色の瞳。

「勿論違いますわ。

そう、神様のおかげなんて言ってしまうえば、自分達の成果と言うものが残りませんわ」
マープルは、ホームズから離れて天井を見上げる。

「幸せな事も不幸な事も

辛い事も楽しい事も

報われた事も報われなかった事も

全部全部私たち、人間が原因です。

でなくては、生きている意味がありませんもの」

辛い思いをしたというのに、それを神様のせいにはしない。

そんな事を自分よりも歳下の子が考えていた。

ホームズは、マーブルの話を聞いて優しく微笑んだ。

マーブルは、コホンと照れたように咳払いをする。

「……少し話しすぎましたわね」

「いやいや。中々考えさせられる話だったよ」

「君もそれぐらい考えたほうがいいと思うよ」

いつの間にやら音もなくルイズがホームズとマーブルの後ろの席で足を組んで座っていた。

「母さん！」

「やつほー」

ルイズは、ひらひらと手を振りながら立ち上がる。

「商談は？」

「まあ、交渉中つてところかな」

ルイズは、そう言つてマーブルの頭に手を乗せる。

「にしても、君は大したもんだよ」

言いながらホームズに意味深な視線を送る。

「はいはい、僕とはちがうよ」

「もしかして、拗ねてるんですの?」

「違う違う」

ホームズは、そう言うのと立ち上がる。

「褒めてるんだよ」

ひらひらと手を振りながらホームズとルイーズは、扉へと向かっていく。

ルイーズは、扉の前で振り返るとマープルの方を向く。

「じゃあね、今日はもう遅いしマープルちゃんも早めに寝なよ」

ホームズは、ひらひらと振っていた手を止めくると振り返る。

「あ、そうだ。姉さん」

「姉さんではありません。姉さんと……あら?」

今でと何か違う、そんな違和感にマープルは、不思議そうに首を傾げている。

ホームズは、マープルに構わず言葉を続ける。

「お風呂に入ったら、ちゃんと髪を梳かしておくんだよ」

ホームズ達は、教会から出ていった。



宿屋に戻り夕食を摘みながら話を続ける。

「なかなか、変わった子だね」

「そうだねえ」

ホームズは、肩をすくめる。

「どうだい、きょうだいができた気分は？」

「……………さてね」

ホームズの言葉にルイズは、ニヤリと笑みを深める。

「そう言うところ、本当に父親そっくりだ」

「どちらかと言うとお前に似てると思うがな」

その言葉にルイズもピタリと動きが止まる。

ホームズは、そんなルイズを見てお返しとばかりにニヤリと笑う。

「だつてさ」

「へいへい」

ルイズは、珍しく不機嫌そうに口を尖らせる。

ホームズは、それに満足すると自分の部屋へと向かう。

「いや、母さんに一泡も吹かせられたし、言うことなしだね」

ヨルはホームズの肩に乗り尻尾を振っている。

「俺の手柄だという事を忘れるなよ」

「わかった。忘れない限り覚えてるよ」

「おい」

ヨルはその返事に不満気だったが、ホームズは、無視して、ニコニコとしながら部屋の扉を開け、自分のベッドに寝転ぶ。

「遅かったですわね」

そんなホームズをルイズが、上から覗き込んだ。

「うおおあ!!」

ホームズは、驚きのあまり跳ね起きた。

マープルは、頭をぶつけられないように、直ぐに一歩引いた。

「え?!なんで姉さん、ここにいるんだい?どうやって入ったんだい?!いま何時だと思ってるんだい?何しに来たんだい?!」

「質問が多いですわ」

マープルは、うんざりしたようにため息をつく。

「じゃあ絞るよ。どうやってここに来たんだ………」

階段を上るには、ホームズたちが食事をした宿の食堂の前を通らなくてはならない。

だが、ホームズとルイーズは、マープルの姿を見ていない。

そうなると理論的には、侵入口なんて一つしか考えられない。

そして、目の前には開かれた窓。

そのキイキイとなっている窓が自分が証拠だよと語っていた。

「いや、方法はいいや」

ホームズは、額を押さええながら、椅子を勧める。

マープルは、それに従ってちよこんと腰掛けた。

「何しに来たんだい?」

ホームズの質問にマープルは、待ってましたとばかりに櫛を見せる。

「髪を梳かしてくださいませ」

「……………さてね」

ルイズは、ニコニコ笑いながら自分の寝室へと帰って行った。

マープルは、椅子に座ってホームズが櫛を梳かすよう目で訴えかけていた。

ホームズは、諦めたようにため息をつく。マープルの髪を櫛で梳かし始めた。

「全く、こんな夜遅くに出歩くんなんて危ないだろう？それに、風呂上がりは、風邪をひきやすいんだよ……………」

ホームズは、そんなことを言いながらマープルの髪を丁寧な櫛で梳かした。

「……………賑やかになったもんだな」

騒動が起こる前にちやつかりと逃げていたヨルは部屋の外からホームズたちを見ていた。

「やれやれ。あの子も分かってないね」

隣には部屋に戻ったフリをしたルイーズがいた。

ルイーズは、面白そうにホームズたちを見ている。

「何がだ？」

「女の子が、美容師でも家族でもない男に髪の毛を触らさるなんてことそうそうしないんだよ」

そう言つて視線をホームズ達に移す。

「髪つてのは女の子の命だからねえ」

「ま、弟相手に気取ることないんだろ」

ヨルの言葉に目を丸くした後ルイーズは、クスクスと面白そうに笑つた。

「ふふふ、なるほど、そうだったね」

ルイーズは、ヨルの頭をひと撫ですると自分の部屋へと歸つて行つた。

「それじゃあお休み」

「ああ。また明日」

ヨルは、ホームズの元へと歩いて行つた。

ホームズは髪を梳かし終えるとそのまま眠そうにしているマープルを背負つて教会まで歩いて行つた。

其の陸

「おはよ〜」

「おはようございますですわ」

「……………」

朝ホームズが、食堂に降りるとそこには、当たり前のように座っているマープルがいた。

今日は珍しくいつものポニーテールではなく、完全に髪を下ろした状態で現れた。寝癖は直っているところを見ると若干の成長を感じる。

「毎度毎度、早いね」

「ええ。今日は昨日、うやむやになってしまった釣り勝負の続きと行きますわよ」

「姉さんがうやむやにしたんだらう……………」

ホームズは、呆れながらトーストをかじる。

ヨルは離れたところでもさもさとルイズの用意した飯を食べている。

ホームズは、朝飯を早々に食べ終えたと席を立つ。

「さて、用意してくるから、姉さんはその辺で待っていたまえ」



「よし……」

ホームズは、いつものポンチョを羽織ると、寝室の扉を開ける。すると、そこには櫛と髪留めの紐を持つて満面の笑みを浮かべているマーブルがいた。

「よろしくお願ひしますわ」

「……………何をだい？」

「髪を結ぶのをですわ！」

ホームズは、はあとため息を一つ吐くとマーブルを鏡面の前に座らせた。抵抗は、無駄だということをホームズは、昨夜嫌という程味わっている。

「まったく……………」

「いいではありませんか」

ホームズは、一度櫛で髪を軽く梳かしそれから髪をまとめていく。呑気に鼻歌を歌っているマープルにホームズは、ため息が止まらない。そして、いつものポニーテールにしようと思いい少し手を止める。

「そう言えば、他の髪型ってしたことあるのかい？」

「？他の髪型ですか？」

「どうやらマープルは、知らないようだった。」

「ふむ……………三つ編みとか出来るけど、どうだい？」

「いいですわよ。あなたにお任せしますわ」

「よしてきた」

「どうやら、髪型が決まったようだ。」

ホームズは、黙々と髪を編んでいく。

「赤毛で三つ編みつてなると、何だかお話の主人公みたいですわね」

「ああ、あのくどい独り言をする女の子ね」

「……………あなた気をつけないと色んな人を敵に回しますわよ」

「そうだね。目の前から湧き上がる殺意にどう対処しようか考え中だよ」

ホームズは、マープルにそんな軽口を叩きながら三つ編みを一つ作る。

「アレですね。きつとあなたはモテませんわね」

ホームズの動きがぴしりと止まる。

先ほどまで軽快に結っていたのが嘘のように固まっている。

「喧嘩売ってるのかい？」

「ああ、その反応……確定ですわね」

「その通りだ」

「ヨル、余計な事を言うんじゃないよ」

三つ編みを再開したホームズの反論にヨルは、ホームズの反論を鼻で笑う。

「基本フラれる事はあってもフルことはない」

マープルは、大仰にため息を吐く。

「全く、姉として嘆かわしいですわ。弟が女の子から、近づくだけで泣かれる存在なっているとは……………」

「ちよつとちよつと。そんな事はないよ。どこで捏造したの」

「ああ、全くだ。そんな事はない。近づくだけで女共に嘲笑微笑みかけらされていたぞ」

「余計な事言わないでって言ったよね？」

「ああ、嘆かわしい！思わず同情してしまいますわ！」

「……………満面の笑みで同情されてもねえ……………」

鏡を見れば一発で分かるその表情にホームズは、ため息を吐く。

「どうか、姉さんは、どうなの？」

マープルは、待つてましたとばかりに胸を張る。

「何度も渡されましたわ！ラブレターー！」

「マジで？頭大丈夫？両方」

「どういう意味ですか？」

カチンときたマープルは、鏡に映るホームズを睨みつける。

「ええ。あなたと違って私はモテますのよ」

「ああそう」

ホームズは、そう言つて少し間を空けて、マープルに再度問う。

「因みに、そのラブレター、誰宛だったんだい？」

ホームズの言葉に一瞬、本当に一瞬マープルが固まる。

しかし、残念ながらホームズは、それを逃さない。

「……………つまりあれだろうか？友達にこれ渡しといて、と男子にラブレターを渡されていたのだろう」

マープルは、さつと視線を逸らす。

ホームズは、さっきのお返しとばかりに言葉を続ける。

「やれやれ嘆かわしい！ああ嘆かわしい！自分の姉がそんな情けない見栄を張るなん

て！情けないにも程があるよ」

大げさにさながら演技のようにいうホームズにマーブルのイライラは増していく。

「あなたおいくつでしたっけ？まさか、今までずっとフラれ続けですか？」

「姉さんこそ、ラブレター大量に貰ってるようだけれど、姉さん宛のものは、一つでもあつたかい？」

「あなたには、関係ないことですよ！せいぜい自分をフった女たちに怨嗟の言葉でも吐いているがいいですよわ！」

「姉さんこそ！せいぜいラブレター貰うたびに今度こそ自分宛だつて期待にない胸を膨らませてればいいさ！」

「目くそと鼻くそで罵り合うな。馬鹿馬鹿しい」

醜い言い争いにヨルが一言落とす。

その言葉を聞いた二人は、ピタリと動きを止めるとズーンと顔に暗い影を作つて黙り込んだ。

「やめようか」

「……そうですわね……いつか、私の下にも白馬に乗った王子様が来てくださいますわ」

「僕は空から降ってくる女の子かな……と」

情けないセリフを吐きながらホームズは、三つ編みを完成させていく。

「出来た。さて、行くかい？」

「ええ」

情けない姉弟は、はあとため息を吐きながら、昨日の池へと向かった。



「……………釣れませんね」

「……………まあ、こればかりはねえ……………」

釣りを始めて早、一時間。

二人の竿はピクリとも動かなかった。

竿の先には、先ほどからトンボが止まっている。

「話戻しますけど、モテるにはどうすればいいんでしょうね？」

「誰も得をしない話をどうしてわざわざぶり返すんだい？」

「だってモテたいじゃないですの。私だって日の暮れる教室に呼び出されて告白されたいですわ」

「……………」

「沈みゆく夕日！夕焼けに同調するように茜色に染まる教室！そして、真つ赤な顔した二人！憧れるじゃありませんか！」

「姉さんって、結構頭の中乙女だね」

「お花畑の方が合ってるんじゃないか？」

ジトとした目を向けるホームズとヨル。

ノリの悪い彼らにマープルは、不満気に口を尖らせる。

「むう……では、あなたは何か理想のシチュエーションとやらはありますか？」

「そうだねえ……………」

ホームズは、少し考える。

「ずっとフラれ続けだから、今度は告白されればなんだっていいかな」

「モテない男の代表のようなセリフですわね」

「うるさいなあ……だったら、告白してみればいいだろう？そして、フラれ続けるがい」

「なんてこと言うんですの……」

そんな事を話しているとようやく、マープルの竿が動いて一匹釣り上げた。

ホームズは、それを視線の端で捉えると、再び竿に視線を戻した。

「因みに男子の視線から見て、どんな子が好かれるんですの？」

ホームズは、その質問にふむと考え込む。

「アレじゃない？こう……ぶりっ子じゃない可愛い子とか好きだと思うよ」

「そんな子滅多にいませんわよ」

「スゲエ、男の夢をたったの一秒で終わらせやがった」

「可愛いなと思う子は、大抵ぶりっ子です。そして、男子は、それに気づいていないだけですわ」

「まさかの追い討ち」

「稀に素で可愛い子というのはいますけれど、そういう子は、大抵、その子と並ぶスペックの持ち主と付き合っていますわ」

「ねえ、なんで、そのセリフと共に僕の事をそんな哀れんだ目で見るんだい？」

「ねえ、なんで、そのセリフと共に僕の事をそんな哀れんだ目で見るんだい？」

マープルは、目を伏せながら返す。

「そんな残酷な事言いませんわ。真実というものは、オブラートに包まなければなりませんもの」

「ヘルニア並みにダダ漏れなんだけど」

ホームズがため息を吐くと同時にホームズの竿が動く。

「お、釣れた」

「私も釣れましたわ」

釣れた魚を見比べるとホームズの方が僅かに大きい。

「むう……次こそ！」

マープルは、そう言うのとミミズを針に通す。

ホームズは、少し考えた後蛙を針に通す。

「まあ、アレだろう」

ホームズは、マープルに遅れて蛙を池に投げ入れる。

「姉さんは、まず、身だしなみに気を使うところから始めるべきだろうね」

その言葉を聞いたマープルは、ホームズに編んでもらった三つ編みを触る。

「……………参考程度に聞いておきますわ。あなたは、そうですね……………」

マープルは、考え込む。

その間にホームズの竿が動く。

「お、きた!!」

ホームズは、力を込めて釣り上げる。

その魚は先ほどより遥かに大きかった。

自慢気に魚を見せるが、マープルは考え込んでいて目の前でピチピチと動く魚に反応を示さない。

ホームズは、そんなマープルにため息を吐くと釣った魚を自分のバケツに放り込む。

「今回も僕の勝ちだねえ」

ホームズは、やれやれといった風に言う。

「それですわ!!」

ホームズの勝利宣言にマープルは、ビシと指をさす。

「どれですか?」

戸惑うホームズにマープルは、ずいっと、ホームズに近づく。

「いいですか? 十四歳にもなって自分の事を『僕』なんて言うから、ダメなんですわ!」
ぐいぐいと来るマープルにホームズは、たじろぐ。

「ホームズも男の子なんですから、自分の事は『俺』と言わなければ!!」

ホームズは、とりあえず近づいてくるマープルを手でおしかえす。

「つまり、一人称を変えるって事かい……うーん……」

「そう！モテるためには、そう言う小さい事からコツコツとやっつけていくべきですわ！」
キラキラとした目を向けるマープルにホームズは、渋い顔をする。

そんなホームズをマープルは、不思議そうに見る。

「なんだか嫌そうですわね？何故ですか？」

「いや、それは……………」

「母親にからかわれるのが嫌なんだろう？」

「ヨル。砲丸投げって知ってるかい？」

ホームズは、肩に乗っているヨルの頭を掴むとそのまま湖に叩き込んだ。

特大の水しぶきを上げて沈んでいくヨルにマープルは、顔の血の気が引いていく。

「ちよつと!!すごい水柱立ちましたよ!!大丈夫ですよ!!」

「大丈夫だよ。魚は、逃げただけさ」

「いや、魚の心配なんてしてませんわ!」

マープルがあわあわど手を動かしているとのっそりとヨルが湖から上がってきた。

「貴様、いい度胸だな」

「人のトラウマ抉るんだつたらそれなりの覚悟をしておくんだねえ」

「トラウマ？」

首をかしげるマープルにヨルは身体を黒く光らせ水を飛ばしてからニヤリと笑う。

「ああ。こいつ昔、モテる為の努力をいくつかやってルイーズにからかわれたんだよ」
ヨルの話を聞きながらどこか遠い目を見るとホームズにマープルは、思わず涙を禁じえない。

「……………なら仕方ありませんわね」

そうふつと顔を伏せた後すぐにキラリといたずらっぽいなほほ笑みを浮かべる。

「とでもいうと思いましたが!？」

マープルは、そう言うのとホームズのバケツを取り上げ湖に持っていく。

「ああ！何するんだい!!」

ホームズの嘆きなどどこ吹く風。

マープルは、高笑いをしながらホームズを見る。

「さあ！言いなさい！この魚達を逃がしたくなければ、自分の事を『俺』と!!」

慣れないこと、キャラではないこと、この二つを満たすものをやろうとすれば、人の顔は朱色に染まる。

ホームズとしては、何としても回避したい。

しかし、迷っている間にマープルは、着々とホームズの魚を湖に投げ入れている。

「わかった！言う！言うから!!」

「最初からそう言えばいいのですわ。では、『俺の名前はホームズ・ヴォルマーノ』と言ってみてくださいいな」

ホームズは、咳払いをして顔を伏せる。

顔は、どんどん赤く染まっていく。

「……………れ」

「ん？」

「おれの名前は、ホームズ・ヴォルマーノです！」

羞恥で顔を真っ赤にしているホームズを見て、マープルは、とても楽しそうに笑みを浮かべていた。

「いいですね、あなたのその表情！人の恥ずかしがっている姿は最高ですわ!!」
その歪んだ感想にホームズは、頬引きつらせる。

若干恍惚としているその表情が更にホームズをドン引きさせる。

「ヤバイ、この子」

「変態だな」

「趣味嗜好は、人それぞれですわ」

「マープルは、そう言うかとバケツの中の魚を湖に放り込む。」

「さて、そろそろ帰ります?」

「そうだね」

「ホームズは、すっかり少なくなったバケツの中の魚を湖に放り込む。」

「基本的に食べるわけでもないの、二人の釣りはキャッチアンドリリースが基本だ。」

「魚の数、またわからなくなっちゃったねえ……」

「いいではありませんの。どうせ私の勝ちなんですから」

「……………」

「ホームズは、ため息を吐いて釣竿を肩にぶら下げそのまま歩き出した。」



「ん？」

日も傾き、茜色に村が染まるなかホームズとヨルとマープルが歩いていると、人だかりが出来ていた。

ホームズは前方に見える人だかりを指差す。

マープルも何事か分からず首をかしげる。

二人は人だかりへと歩いて行つて隙間から覗く。

「まあー！」

マープルは、目を輝かせて両手を握りしめる。

人だかりの中心には、母親に抱えられた赤ん坊がいた。

そして、側にはその赤ん坊の兄と思われる小さな男の子がいた。

皆それぞれに顔を隠したり驚かしたりしている。

「へえ……………」

ホームズは、ヨルを頭に乗せ興味深そうに赤ん坊を見ていた。

「あら？あなたはこの村に来た、行商のヴォルマーノさんの息子さん？」

赤ん坊を抱いていた母親の方がホームズに気が付いた。

「ええ。そうです」

「あなたのお母さんの売ってくれたこの子の服、とてもいいわありがとう」
そう満面の笑みで言われ、ホームズはありがとうごさいますと礼をする。

「あ、あの！その子は男の子ですか？女の子ですか？」

「女の子よ」

興味津々と尋ねるマープルに微笑みながら、答えた。

「僕はお兄ちゃんなんだよー」

男の子は、えっへんと胸を張る。

悪意はないのだろう。

その子にとって、妹が出来た言うのが嬉しく、そして、兄となった事が誇らしかったのだ。

ただその気持ちからでた無邪気な気持ちに悪意はない。

「ええ。それは、立派ですわね」

マープルは、優しく微笑みながらそう返す。

そして、母親の方を見る。

「どうか、その子のこと大事にして下さいな」

母親は、笑った後、頷いた。

「ええ。やつと授かった女の子だもの。この子共々大事にするわ」
マープルは、その答えに微笑んで返すとその場から、歩き出した。

「ちよ、ちよつと！」

ホームズは、一度ぺこりと頭を下げると慌ててマープルの後について行った。
マープルは、帰り道口を開くことはなかった。



「ふうん、そんな事が」

「まあね」

ホームズは、晩御飯を口に運びながら今日の出来事を話す。

因みに今日の晩御飯は、ピザだ。

とろりと垂れるチーズが食欲を誘う。

「それより、交渉の方は、どうなったんだい？」

「ああ、それね」

ルイズの何とも煮え切らないよう様子にホームズは、首をかしげる。

「ヨル、聞くけどさ、あのマナの欠片にマナは、本当に宿っているのかい？」

「ああ。それは、保証してやる」

「そうか……」

ルイズは、ヨルの言葉を聞くと再び黙ってしまう。

「母さん？どうしたんだい？」

「……………まあ、考え中かな」

ルイズは、そう言うのと最後の一切れを平らげる。

「マナの欠片、それは見たことも聞いた事もない品物だ。私としては、是非とも欲しい
んだけれども……………」

そう言いつつホームズのピザを鮮やかな手口で一切れ奪うと自分の口に放り込む。

「何だかなあ……………」

「ふうん……………」

ホームズは、少なくなったピザを無言で見つめると残りを食べられない内にルイズ

から、離す。

「まあ、いいや。取り敢えず、お……………僕は風呂に入ってくるよ」
ホームズは、そう言うのとピザを一気に平らげ、席を立った。



「ふう……………やれやれ」

風呂から上がったホームズは、タオルで頭を拭きながら自分の部屋に戻る。すると、そこには当たり前のようにマープルが赤毛を下ろして部屋にいた。

「こんばんわですわ」

「……………こんばんわ……………」

ホームズは、ため息を吐いて扉を後ろ手で閉める。

「昨日も言ったけどさ、風呂入った後に夜出歩かない方がいいよ。風邪ひくし」

「なら、心配いりませんわ。私は、この宿でお風呂に入りましたから」

「……………何してんの？」

「あなたのお母さんと宿屋の方には許可をもらってますわ」

「……………」

ホームズは、無言で母親の部屋へと走って行った。

ヨルとマープルは、取り残された。

母親の部屋からは、ホームズの声が聞こえてくる。

人よりも耳のいいヨルは、ホームズとルイーズの言い合いが耳に入ってくる。

どう聞いてもホームズの方が部の悪そうだ。

ヨルは、そんな言い合いを聞きながらため息を吐く。

「それで、お前は毎度毎度、何しに來ているんだ？」

「見て分かりませんか？」

ふふふつと笑いながら、自慢気に髪をたなびかせる。

「わかるわけないだろ」

ヨルは、ため息を吐く。

そう言つて尻尾で髪を指す。

「朝、自分の寝癖を直してたお前が、どうして髪を梳かしてもらいに来るんだ？」
その言葉にマープルは、僅かに動きを止める。

「髪を梳かせないってわけじゃないよな？」

「……………言わなきやいけませんか？」

ヨルは、興味なき気に首を振る。

「別に。予想ぐらいつくからな」

ヨルのその言葉にマープルは、ホッと胸を撫で下ろす。

そんな事をしてる間にホームズがガチャリと扉を開けて現れた。

ホームズは、ブスツとした顔で布団を抱えて現れた。

髪を梳かしてもらうのを今か今かとマープルは、待っている。

『マープルちゃん。君、今日から暫く泊まって行きたまえ』だつてさ。母さんが

「……………へ？」

突然の事にマープルの手から櫛が落ちる。

「何だかよくわからないけど、姉さんは、ベッドを使いたまえ」

「お前はどこで寝るんだ？」

「そのソファ」

ホームズは、そう言うのと布団をバサツと乗せ、落ちてゐる櫛を拾う。

「ええつと……………」

「ほら、じつとしていたまえ」

突然の事に困りきっているマープル他所にホームズは、髪を梳かしていく。

「……………ホームズは、本当に髪を梳くのが上手いですわね」

「まあ、慣れてるし」

「ふふふ。自慢の弟ですわ」

「……………弟ねえ……………」

ホームズは、そう言いながら髪を梳かしていく。

「なんかあったのかい？」

「……………別に。何でもありませんわ。ただ……………」

マープルは、そう言つて顔を少し下げる。

「あの親子を見て、少しだけですわ」

少しだけ寂しそうな声でマープルは、そう言った。

ホームズは、何も言わず髪を梳かしていく。

マープルはためらいながら、少しだけ口を開く。

「あの親子を見て、想像しましたの。自分の生まれた時の事を」

「……………そっか」

「……………ええ。きつと、両親は、あんな顔をしていたんだなあ……………と、思いますとね……………」

マープルの肩が震える。

「両親の顔もわからないので、全ては想像です……………でも……………でも」
だからこそ、あんな光景を見せられて仕舞えば、憧れてしまう。

そして、自分には、もう望めないことも分かっている。

それを考えると夜にあの孤児院にいるのが耐えられないのだ。

ヨルはそれを見抜いていた。

そして、ルイズもそれを見抜いていた。

だから、ルイズは、マープルをホームズの部屋に泊めさせた。

ぼたりぼたりと涙を流すマープルの髪をホームズは、梳かしていく。

そんなホームズをヨルは怪訝そうな目で見ている。

ホームズは、それを見ると頷く。

「ちゃんと聞いてるよ」

そう言つてホームズは、机の上に櫛を置く。

どうやら梳かし終わったようだ。

「泣くだけ泣きたまえ。弱音だつて吐きたまえ。幾らでも聞くよ」

そう言ってハンカチを差し出す。

「何てったって、僕は、姉さんの自慢の弟だからねえ」

ホームズは、そう優しく微笑んだ。

マープルは、そんなホームズの言葉に嬉しそうに微笑む。

「ありがとうございますわ。でも……」

そう言って少しだけ咎めるようにゆび立てる。

「ホームズ、『僕』ではありませんわ。『俺』でしょう？」

マープルの指摘にホームズは、少しだけ抵抗しようとする。

しかし、ふうと一息つく。

「何てったって、おれは、姉さんの自慢の弟だからねえ」

ホームズの言葉にマープルは、満足そうに笑うとベッドにダイブした。

ホームズは、そんな様子を見るとソファに潜り込んだ。

人に後悔与える夜の時間。

だが、休息の時間でもある。

夜の休息をホームズとマープル、そして、ヨルは確かに過ごしていた。

其の漆

「今日は、趣を変えましょう！」

マープルは、高らかに宣言した。

ホームズ達が滞在して早数日。

最初こそよそよそしかったが、最近では当たり前前の様にマープルは、ホームズの部屋で寝泊まりする様になっていた。

「その宣言は、今日の髪型リクエストと何か関係があるのかい？」

そして、毎朝マープルの髪を結ぶのが日課になっていた。

因みに今日の髪型はツインお団子だ。

「勿論ですわ！」

そう言つてマープルが引つ張り出したのは、エプロンだった。

「なにそれ？」

「モテる為の第一歩、ですわ！」



「えーつと、何これ？」

ホームズとマープルは、宿の自炊客の為のキッチンに立っていた。

「いつまでも釣りをしながらモテない事を嘆いていても仕方ありませんわ！」
マープルは、キュツとエプロンの紐を結ぶ。

「モテたいなら、モテる為の実力を付けるべき!! 顔を変える事は、不可能ですが、それ以外なら幾らでもなるのです！」

「くだらない事を言うのはこの口かな？」

ホームズは、マープルの頬を引つ張る。

「痛いいひやいへふわですわ」

マープルは、そう言うのと頬引つ張るホームズの手を振り払う。

「いいですか！ 顔以外にモテるには、押さえなくてはならないポイントが三つあります！」

そう言つてマープルは、指を一本立てる。

「一つ！これといった秀でたものはないけれど、とにかく優しいこと」

「なんか、素直に領けないなあ……」

「二つ！鈍感である事！

異性の好意に気づかず、そしてさらりというタラシな褒め言葉」

「ねえさんちようかわいいー」

「ありがとうございますわ。お礼に後でドロップキックを差し上げますわ」

「といいつホームズに向かつてマープルは、ドロップキックを放つ。

「そして、三つ！料理上手である事!!これさえ押さえれば、モテモテウハウハな未来は

待った無し!!」

「まあ、確かに料理の出来る女の子ってこう、ぐつと来るものがあるよね」

「でしょう！料理の出来る男の子と言うのもなかなか素敵ですわ！」

ホームズは、考え込む。

「ふむ………悪くない！悪くないぞ!!姉さんの考えに乗ろうじゃあないか!」

「それでこそ私の弟ですわ!」

ガシつと熱い握手をする二人を見つめる冷めたお目目が四つ。

「ヨル、二人はいつもこんな残念な会話をしているのかい?」

「ああ」

「だからモテないって教えてあげたら？」

「興味ないな」

そんなルイズとヨルの会話に構わず、二人は何やら盛り上がっている。

「それじゃあ、君達、試食よろしく」

ホームズのお願いにルイズは、ため息を吐く。

「頼むから食べられるものを作っておくれよ」

「任せてくださいいな」

マープルは、エプロンのハジを持ってお辞儀をする。

「頼むよ。ホームズは、ロクなもの作れないから、君だけが頼りなんだからね」

「ええ、お任せを。最強のピギナーズラックをお見せしますわ!!」

「ダメだ。誰も信用できない」

「どうやら先程のお願いが殺害予告になりそうだ。」

「で、お前達は、何を作るんだ？」

ヨルの言葉にホームズは、ふふふと不敵に笑う。

「決まっているだろう？先ずはこいつさ！」

そう言つてホームズが開いた料理本には、ビーフシチューが載っていた。

「馬鹿か君は。どう考えても君が手を出していい代物じゃあない」

「ふ………最初から低いハードルを用意してはしようがありませんわ」

「馬鹿か君達は！どう考えても君達の手を出していい代物じゃあない！」

マーブルの言葉にルイーズは、ため息を吐く。

「まずは、オムレツから作ってごらん」

「ええ………そんな初心者丸出しの品つくるの………」

「もうその文句が初心者丸出しだな」

ヨルの言葉にむっとするホームズとマーブル。

「いいでしょう。そこまで言うのなら特製の最高オムレツを作って差し上げますわ」

「見ていたまえよ」

そう言う二人は炊事場へと消えていった。

「いやあの、特製じゃなくていいから、普通の作って……」

ルイーズの言葉は、残念ながら二人には届かなかつた。



待つ事一時間……………

「つて、長すぎだろう!? オムレツ作るのにどれだけ時間かけてるんだい!!」

ルイズの突っ込みにホームズは、フツと息を吐く。

「まあまあ、文句は食べてからにしておくれよ」

そう言つてホームズは、オムレツをそつと、おく。

「黒いんだけど……………」

ホームズとマープルの作り上げたオムレツは、真つ黒だった。

「まあまあ。文句は食べてからにしておくれよ」

「食べる前から、文句しかないわ!! なんだこれ! 私はオムレツを作れと言つたんだよ

!! 誰が木炭作れつて言つたんだい!!」

マープルは、ルイズの言葉に胸を張る。

「オムレツというのは、弱火でじっくり焼き上げると綺麗に焼けると聞きますわ。私はそれを実践しただけですわ!」

「まさか、一時間ずっと弱火で焼いていたんじゃあないだろうね？」

「正確には、五十分ですわ」

「ばっかじゃないの!!」

「いいから黙って食いたまえ!」

ホームズは、フォークでザクツと刺し、そのままルイズの口を指していく。

「……………普通、オムレツからザクツなんて音はしない筈なんだが……………」

ヨルの呟きに構わずオムレツ（木炭）は、ルイズの口に押し込まれた。

「苦くて、甘くて、ジャリジャリして、ザラザラのガリガリ……………」

ルイズは、そう言いながら顔を赤くし、次に青くし、最後には、真っ白になってそのまま机に突っ伏した。

「……………」

その惨状にホームズとマープルは、声が出ない。

「おい」

「おかしいなあ……………食べられるものしか入れてないよ?」

「当たり前だ」

言い訳がましいホームズの一言をヨルが切り捨てる。

そんな話をしてる間に先ほどからルイズは、白目を剥いて動かない。

「おい、生きてるんだろうな？」

ヨルの珍しく人を心配した声に二人は目をそらす。

マープルは、ガツクリと膝を着く。

「そんな……………これでは、モテるなんて夢のまた夢ですわ……………」
そんなマープルの肩をホームズがポンと叩く。

「大丈夫だよ……………いつか、君もモテモテになるよ」

「そんな気休め……………」

「母さんだつて結婚できたんだ。君だつて、そのうちモテるさ」
「なるほど。納得ですわ」

ガシと二人が熱い握手をしてる中ゆらりと背後に立つ上る殺気。

「……………おい、いい加減にしたまえよ」

二人の頭に仲良く拳骨が落とされた。



「つたく……………二人はもう少し基本を身につけること！」

「はい……………」

正座をして説教を聞く二人の頭には大きなタンコブがあつた。

ルイズは、そう言うときエプロンを身につけ始めた。

「今日のところは私が初心者用の料理を教えるから君達は、もう一度台所に立ちたまえ」

ホームズは、ポカンと驚いた顔をしている。

「……………珍しいね、母さんが料理を教えるなんて……………」

ルイズは、キュツとエプロンの紐を結ぶ。

「当然だろう。私達はいつまでもここに居るわけじゃあない。だったら、ここにいる内に教えてあげなきゃねえ……………」

ルイズの言葉にマープルは、目を丸くする。

「それって……………」

「私たちはここに来ただけ。住むつもりは、ない。いずれ出発する」

「それは……………何時ですか?」

「まだ未定。さ、マープルちゃん、準備出来たよ」

マープルは、その言葉で我に帰ると、返事をしてマープルに料理を教わり出した。ホームズとマープルは、指示を聞きながら料理を作り上げていく。

そして……………

「出来た! マーボーカレー!!」

四つお皿に盛り付けられたマーボーカレーが食卓に並んでいた。

嬉しそうにハイタッチをする二人の後ろでルイーズは、ため息を吐いていた。

「……………なんか、疲れてるな……………」

「あの子たちに余計な事をさせないようにするだけで精一杯だったよ……………」
ルイーズは、そう言つてエプロンを取る。

「さ、食べるよ……………」

「いただきます」

ホームズとマープルは、そう言つてマーボーカレーに手をつけ始めた。

二人の楽しそうな顔を見るとルイーズは、諦めたように笑つてため息を吐きながら食事始めた。



「ふう……いいお湯だった」

ホームズは、頭を拭きながら自分の部屋に戻る。

部屋には、ホームズより先に出ていたマープルがちよこんと座っていた。その後ろ姿には元気がない。

「……………どうしたんだい？」

ホームズの質問には答えず、櫛を押し付ける。

ホームズは、少し戸惑ったが、マープルの髪を梳かし始める。

「別に、どうもしませんわ。ただ、改めて認識しただけですわ」
「ああ……………昼間のことか……………」

何を言いたいかホームズは、ようやくわかった。

マープルは、静かに頷く。

「どうしても、ここから出て行ってしまおうのですか？」

「まあね。他の所で商売もしなくちゃいけないしねえ……………」

ホームズは、迷わずにそう返した。

「そう……………ですか……………」

マープルは、思わず俯く。

思わず零れそうになる涙を必死に抑える。

ここで泣いてもホームズを困らせるだけだ。

それが分かっているからマープルは、必死に泣かないよう堪えている。

しかし、それでも涙が目から落ちる。

「姉さん」

自分を呼ぶ声に思わず顔を上げるとそこには小指を出したホームズがいた。

「約束するよ。また、いつか、必ずこの村にやってくる」

いつもの嫌味つたらしい笑みではなく、本当に優しい笑顔でホームズは、約束をする。

ホームズの言葉に目を丸くすると急いでゴシゴシと涙を拭き、自分も小指を出す。

「ええ。約束ですわよ！」

「もちろん」

「いつになるかは、分からないがな？」

「ヨル……………」

ヨルの余計な一言にホームズのこめかみがピクリと動く。

そんなヨルにマープルは、微笑む。

「ええ。いつまでも待っていますわ」

そんなマープルに少しだけ冗談を言うようにいたずらっぽく笑う。

「それまでには、もう少しモテるようになっているといいね」

「あなたに言われたくありませんわ」

ぴしやりと言われたホームズは、マープルの両頬を引つ張る。

「余計な事を言う口は、これかな」

「痛いいひやいへふわですわ……………」

二人は、こうして過ごしていく。

いつか終わりのくるその日まで、こんな日々を過ごしていく。

ヨルはそれ思うと面倒臭そうにため息を吐いて丸くなった。

「ん〜夜風が気持ちいいねえ」

ルイズは、夜、一人で村を歩きながら、考えていた。

ルイズは、夜が結構好きなのだ。

道を照らす光は、星と月明かりのみの夜を一人で歩く。

この何と言えない明るさの中を歩くのがルイズの楽しみでもある。

元々、この風景が好きと言うのもある。

それと、まあ、もう一つ程由来はあるのだが。

だが、それも秘密だ。

ホームズが小さい頃はこんな事も出来なかったが、今は別だ。

ホームズも中々大きくなったし、今ならこれぐらいの羽伸ばしは、問題ない。

「さて、少し、考えをまとめるかねえ……」

ルイズは、静かに目を閉じる。

そのほんの一瞬の間にルイズの頭の中を様々なことが駆け巡る。

「……………ふむ」

ルイーズは、ふうと一息吐く。

道端に生えているアオイハナを摘み、その花を眺める。

若干シミの出来た葉とそれと対するのように美しく咲く花。

月明かりと星明かりそこに照らされた花畑は、青白く輝き、夜風に誘われる様に花びらを舞わせる。

「やっぱり、おかしいよねえ……」

そのいつかは、
もう直ぐだ。

其の捌

「はあ……………毎朝毎朝」

ホームズは、ため息を吐きながらマープルの髪を結んでいる。
最早日課となっている。

因みに今日の髪型はポニーテールだ。

「これもいいですけど、今日は別の髪型がいいですわ」

「例えば？」

「ついんてーるって知ってます？」

「ああ、あのエビの味のする奴ね」

「……………何の話をしてますの？」

「こつちの話」

ホームズは、そう言うのとマープルのポニーテールを解き、二つに髪を分ける。

そして、器用に結び直す。

マープルは、鏡を見て感心している。

「本当、誰にでも特技はあるものですわね」

「……………馬鹿にしてるだろう」

ホームズは、そう言つて髪を再びほどく。

「?ホームズ?」

「自分で結んでみたまえ」

ホームズは、そう言つて髪留めの紐を渡す。

「いずれ、僕達はここを出て行く。」

その時は、自分で髪ぐらい結べるようにならなきゃいけないだろう?」

マープルは、ギョッとホームズから受け取つた髪留めの紐を握りしめる。

「分かりましたわ。それと、僕ではありませんわ」

マープルは、そう言つと再び髪を結ぼうとする。

しかし、

「ズレてるな」

「姉さんつて、結構不器用だよね」

「ふつ……………不器用というのは、格好良さを演出するスパイスですわ」

「その言葉がまずカッコ悪いね」

「……………」

マープルは、無言で髪をほどくと再び結び直そうとする。

「ところで、一つお聞きしても？」

「なんだい、コツかい？」

「いいえ。あなたは、精霊術を使えますの？」

ホームズは、ピタリと動きを止める。

「あなた、ここに来てから一度も精霊術を使っていませんわ」

「どうして、そんなこと聞くんない？」

マープルは、髪を一つにまとめる。

「普通、年上という存在は、年下より出来ることを自慢する者ですわ。

例えば、釣り。

「私より魚を釣る事のできたあなたは、自慢気に魚を見せてきましたわ」

マープルは、キュツとポニーテールを結び直す。

「何故、私に精霊術を見せませんでしたの？」

「単純に、君の方が凄いと思っただよ」

「何故ですか？」

「え？」

ホームズは、少し戸惑ったがすぐに肩をすくめる。

「^{ゲート}霊力野の大きさは、別に大人や子供で決まるもんじやないだろう？」

生まれた時から決まっているものだ」

「質問に答えていませんわね。私が聞いているのは、あなたが精霊術を使わない理由。

^{ゲート}霊力野の大きさの話なんてしていませんわ」

その力強い言葉にホームズは、マープルに嵌められたことに気づいた。

「精霊術は、扱い慣れた方が上ですわ。私より長く生きているあなたが、私に劣るはず

ありませんわ」

マープルは、そこで立ち上がる。

「あなたは、最初から分かっていた。私に精霊術で勝てないことを。

何故か？」

悔っていた。

馬鹿が目立つから忘れていた。

この子は聡いのだ。

いや、油断していた、というのは言い訳だ。

これは、ホームズの力不足だ。

ホームズの実力をマープルが上回っただけの話だ。

「答えは簡単。霊力野ゲイトが私の方が大きいと知っていたからです。

そして、精霊術というものをよく知らなかったからです」

僅かな言い間違い、そして、行動のヒントを元にマープルは、ホームズに追いつく。

「ホームズ、あなたに霊力野ゲイトは、ありませんわね」

結び上がった赤髪のポニーテールがゆらゆらとうごめく。

零では、一をこえることはできない。

ホームズは、パチパチと手を叩く。

「大したものだねえ……………全部正解だよ」

「私の名前は伊達じゃありませんわ」

「流石。ミス・マープル」

「ホームズにそう言われれば充分ですわ」

ホームズは、軽く肩をすくめる。

「それで、僕にそれを言っただけでどうするつもりだい？」

マープルは、呆れたようにため息を吐く。

「別にどうも」

それから、マープルは、真っ直ぐホームズを見る。

「私は、あなたときよならする前にわだかまりを消しておきたかったですわ
そう言っただけで椅子の上に乗るホームズの頬をつねる。

「隠していたのは、過去にそれを理由にいじめにでも合いましたか？」

「正解」

「私にまで隠していたのは、信用していなかったのですか？」

「聞かれなかったから、答えなかったただけだよ」

マープルは、そのままホームズに平手打ちを食らわせた。

「何をするんだい？」

「お仕置きです。こういうつまらない隠し事はなしにしてくださいな」

マープルにキツと睨まれホームズは、ため息を吐く。

「分かったよ……………」

「なら、よろしいですわ」

マープルは、そう言うそのままゆつくりと椅子から降りる。

「それで、今日は、何をするんだい？」

「ああ。今日は、私、やることはありませんので、ホームズ一人で過ごして下さいな」

「姉さん、何しに来たんだい？」

「さあ？何でしょう？」

マープルは、面白そうに笑うとスキップしながら、出て行った。

ホームズは、ため息を吐く。

「あの子は、本当にもう…………」

ヨルはホームズの肩で尻尾を振る。

「それで？父親のことは、言わないのか？」

「……………言うわけないだろう」

両親のいない人達が集まった孤児院では、泣けない。

そう言っていたマールプルが、父親のいないホームズの前で泣けるわけがない。

ホームズは、そう返すとポンチョを羽織る。

「ま、たまには母さんを手伝いに行くかね」

そう言つてホームズは、宿屋を出て行つた。



ホームズは、ルイズが商売をしている広場にやってきた。

しかし、ホームズがつく頃には、ルイズは、荷物をまとめていた。

「やあ。少し遅かったね」

ルイーズは、ひらひらと手を振る。

「……………もういいのかい？」

「まあね」

ルイーズは、そう答えながら荷物をまとめる手を緩めない。

「さて、ホームズ」

荷物をまとめ終え、ルイーズは、腰に手を当てる。

「明日には、出てくから君も用意したまえ」

「……………はっ？」

ホームズは、わけが分からずポカンとする。

「稼ぎもそこそこ貯まったし、そろそろ次の街に行く頃だろうか？」

「いや、けど、そんな急に……………」

「別に急じゃないさ。マープルちゃんには、もう話してるしね」

「は？」

ホームズは、更に信じられないという顔をする。

「なんで母さんが言うんだい？」

ルイーズは、そこで更にため息を吐く。

「君は、今までも親しくなった子にいつ出て行くか言わずに出て行つたろう？例えは、

ローズちゃんとか」

そう言いながらルイーズは、カバンを背負う。

「あの子にだけは、それをやってはダメだろう？」

その言葉にホームズは、ぐうの音も出ない。

ヨルはホームズの肩で面白そうに笑っている。

「ひどい奴だな。自分の息子も信じられないのか？」

「自分の息子だから、理解してるんだよ」

「そりゃあ、どうも涙が出るほど嬉しいね」

ホームズは、吐き棄てるようにそう言うのと、踵を返した。

忌々しいことだが、ルイズの言うことは正しい。

そんな事ないと声を大にして言いたいが、残念ながらそれを否定できるだけの証拠も確証もホームズには、なかった。

一方的な暴言なら、ともかく、至極まっとうな正論を覆せる力がホームズには、ない。母親から離れ、ふと気がつくといつももの釣りをする池にいた。

「はあ〜……………クソ、どうしたもんかなあ……………」

ホームズは、どっかりと池の側の石に腰を下ろす。

「どうしたもこうしたも、単純にあのガキに話に行けばいいだけの話だろ」

ヨルはあくびをしながらそう返す。

「あのガキ、お前が明日出て行く事を知っていないながら、いつも通り接していたところを見るとお前から話してもらおうのを待っているんじゃないのか？」

「……………」

いつも暴言を吐くヨルにまで正論を言われてしまい、ホームズは、またしても押し黙る。

「ああっ！もう！分かったよ！行けばいいんだろう！話せばいいんだろう!!」

ホームズは、そう言うのと頭をかきむしって立ち上がって歩き出した。



「どこにもいない……………」

日もすっかり暮れた頃、ホームズは、宿の食卓で頬を膨らませながらそう呟いた。

「避けられてるんじゃないのか？」

「どちらかというと遊ばれている気がする」

ホームズは、食卓にあるパンに手を伸ばす。

「だいたい、母さんも帰ってきてないし」

もぐもぐと口を動かしながらホームズは、そう愚痴る。

ホームズよりも早く荷物をまとめていたというのに宿に帰つてのは、ホームズの方が早かった。

「あのアオイハナとやらを盗んでいるんじゃないのか？」

「ははは、まさか」

ヨルの冗談をホームズは、肩をすくめて笑う。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………まさか」

ホームズは、立ち上がるとポンチヨを掴む。

「お客さん？そろそろ夕飯だよ？」

「ごめんなさい！後で食べます!!」

そう言うとホームズは、ポンチヨを翻し、夜の村へと出て行った。

しかし、ルイズは、どこにもいなかった。

「まあ、当たり前だよな。生食じゃ運べないんだから」

「……………言つてよ」

「貴様が言ったんだろうが」

ヨルは呆れながらホームズの肩でため息を吐く。

どっと来た疲れにホームズは、地べたに座わりこむ。

目の前には、夜の明かりに照らされたアオイハナが美しく青白く輝いていた。

「ほう……綺麗なもんだな」

ヨルは感心したようにつぶやいた。

ホームズは、驚いたように目をパチクリさせる。

「なんだ？」

「いや、随分とガラでもないこと言ってるなあ……と思つて」

ホームズの言葉にヨルは、ふんと鼻を鳴らす。

「人間や精霊以外なら割と好ましい部類に入るんだよ」

何処かの誰かにも言つたセリフをもう一度言う羽目になり、ヨルは嫌そうだ。

ホームズは、そんなヨルに構わずアオイハナ畑を眺める。

「ねえ、ヨル」

「なんだ？」

「アオイハナは、土地に栄養がないとダメなんだよね？」

「ああ。そう言っていたな」

「なんで、こんなにこの村で咲き誇っているんだい？」

ホームズに言われヨルはこの村に来た道のりを思い出す。
そう、この村に来る途中の道には、草一つ生えていないほどやせ細った土地だった。
しかし、この村では栄養が必要なアオイハナが咲き誇っている。

「質の高い肥料があるんじゃないのか？」

「だとしたら、不思議じゃないかい？ どうしてわざわざそんな肥料食いの作物を育てているんだい？」

ホームズは、そう言つて立ち上がる。

「お手頃値段で売れるアオイハナ。

いい肥料つていうのは、当たり前だけどその分値段が高い。

そんなコスト効率の悪い花をどうしてこんな貧しい村が育てていけるんだい？」

「そのためのマナの欠片なんじゃないのか？」

ヨルの言葉にホームズはアホ毛を触る。

「それも謎だよね」

「どこがだ？」

「ねえ、マナの欠片つて、マナを含んでいるんだよね？」

「というより、殆どマナだ」

「誰が何のためにそんなものを欲しがるんだい？」

ホームズの言葉の意味をヨルは理解できない。

「いいかい？ 青く輝く石ならその辺にいくらでもある。わざわざこんな辺境の地でマナが宿っているなんて付加価値のついた高い石をわざわざ買おうなんて考えるかい？」

「いるんじゃないのか？だから、この村を支えているんだろう？」

ヨルはホームズズの言葉を肩で聞きながら返す。

「マナの欠片でもう一個理解できないことがあるんだ」

ホームズズは、そう言つて懐から商品のリストが走り書きされた手帳を見せる。

「これは、母さんのノートだ。ここにマナの欠片なんて載っていない」

つまり、ルイズも知らない未知の代物なのだ。

ホームズズは、立ち上がつて歩き出す。

「ヨル、君に聞きたいんだけど、今まで、見た宝石店でマナの欠片と同じくらいマナを持った石を見たことあるかい？」

「……………ないな、それがどうし……………」

どうしたと言おうとしてヨルは、はつと口をつぐむ。

「そう、村を支えるハズのマナの欠片は、どの宝石店でも見たことがない」
ホームズズの碧い瞳には光が灯る。

「一体、この村を出て行つたマナの欠片は、どこに行つたんだらうねえ」

ホームズの言葉は、疑問形だ。

だが、ここまで言われて分からないわけがない。

一般人の目に触れないというなら、誰が見ているか？

「政府の人間、或いは裏社会の人間か？」

「僕たちは、よく分からないけど、軍にマナの塊なんてあつて困るもんじゃあないだらう？」

「なるほど、ルイズ相手に売るのを渋るのも領けるな」

兵器にもなるものを他国に売られては困るのだから、一般的な行商人に売つていいわけがない。

ホームズは、歩みを止めない。

ヨルはそんなホームズに嫌な予感しかしない。

「おい、ホームズ。まさか、これを神父に確かめに行くんじゃないだろうな？
明らかに深入りしていい話じゃない」

しかし、ヨルの制止も空しくホームズの歩みは、止まらず、教会にたどり着く。

「おい、ホームズ」

そこでヨルのヒゲがピクリと動く。

ホームズは、扉を力任せに開け、中に入る。

カツカツとホームズの靴の音だけが教会に響く。

「最後にもう一つ、いや、この村に來た時からずっと不思議だったことだから、最初に
一つって奴かねえ」

そう言つてホームズの脳裏に一番最初にチラシを配つた時の事を思い出す。

「どうして、この村のどの家の子供も兄妹か、姉弟二人組しかないんだらうねえ？」
ヨルは、ホームズの言った意味を考える。

チラシを配りに行った時どこの家もこの組み合わせだった。

「言われてみれば、そうだな。どの家も姉妹や兄弟は、いなかった。どの家の子供も性別がかぶっていないかった」

「だらう？とても不思議で、そして不自然だ」

ホームズは、足を止め後ろを振り返る。

「なぜだい、ティーア神父」

碧い瞳に睨まれた金髪の神父は、闇の中でニコニコと柔らかな笑みを浮かべていた。

其の玖

「どういう意味ですか？」

ティーアは、相変わらずニコニコと笑っている。

「不思議じゃないです？」

ホームズは、顔色一つ変えずティーアを睨みつける。

「コウノトリが運んでくるわけじゃあるまいし、子供を二人作って、必ず男の子と女の子が一人ずつなんてことはありえない」

ホームズは、肩をすくめる。

「そうですね、必ずはありえません。しかし、偶然はありえますよ？」

柔らかく微笑むティーアにホームズは、首を横に振る。

「いいや、偶然じゃあない」

ホームズは、冷めた口調のまま続ける。

「この村にいる間にとある赤ん坊の母親がこう言っていたよ。『ようやく生まれた女の子だから大切にしなきゃね』って」

「何かおかしいところでも？」

「シラを切るつもりかい？」

ホームズは、言葉続ける。

「家督を継ぐのは、男の子だ。『ようやく男の子が生まれた』ってなら、分かる。でも、逆なんてありえないだろう？」

「そうですか？」

ティーアは、そう言つて教会扉の前に立つ。

「家督を継ぐのは、もしかしたら、女の子かもしれません。それは、家によつて違いますよ」

ホームズは、目を険しくする。

「ああ、そう。まだ言い逃れるのかい？」

「言い逃れも何も……………」

『『ようやく生まれた女の子』、実はこれまだおかしいんだこの言葉』

その言葉にティーアの表情が一瞬だけ固まる。

「その家には息子一人だけだった。なのにだ、その母親は、『ようやく』そう言ったんだ」

ホームズは、さらに言葉続ける。

「いいかい？ 『ようやく』っていう言葉はね、何回か試してから使われる言葉なんだ。

子供が一人だけの家庭で使われる言葉じゃない」

「決めつけですね、他の可能性だってありますよ」

言及はしないが、神父の言いたいことは、分かる。

「もちろん、そうだろうね。でもね、だったら、性別はいらないんだよ。『ようやく生まれられた子』と言うはずなんだ」

ホームズは、少しずつ着実にティーアの逃げ道を塞いでいく。

「答えたまえ、ティーア神父。この村の約束とこの教会の戒律。早起きすること、食べ過ぎないこと、あと一つ」

ホームズの碧い瞳にティーアは、肩をすくめる。

「この村は、男の子一人女の子一人という子供の内訳にしないといけないという決まりがある？」

「それだけじゃあない。さつきも言ったけど子供を二人作って必ず男の子一人と女の子一人なんて内訳になるわけがない。男二人、或いは女二人になるかもしれない。つまり、何が言いたいかと言うとだ、」

ホームズは、そこで大きく息を吸い込む。

「この性別のダブってしまった子は、一体どこへ消えたんだい？」

ホームズの冷え切った声が教会に響き渡る。

「……………あなたの予想は？」

「この孤児院にいるんじゃないのかい？」

「隠しても仕方ありませんね。そうですね。あなたの言う通り、この村の約束で、この教会の戒律にあります。『兄妹、または、姉弟のどちらかにすること』とね」

ティーンは、肩をすくめる。

「まあ、どんなに約束したところでこればかりはね、だから、かぶってしまった子達

はここで引き取っています」

ホームズズの険しい顔を見てアーティは、ため息を吐く。

「念のため言っておくと、コレも村を生き残らせるためのものなんですよ」

ティーアは、そう言つて言葉を続ける。

「父親と母親、そして、子供一人の場合は、段々と人数は減つていく。当たり前ですね。かといつて父親と母親、そして子供が三人以上になつてしまえば、村の人口は増えていきます。」

元々豊かでない村にそれを生かしていける術はありません。

だから、男一人、女一人という子供の産み方にさせたのですよ」

ホームズズは、苦虫を噛み潰したような顔をしている。

「君たち、頭おかしいぜ」

ホームズズは、信じられないという顔だ。

この結論にたどり着くのには時間がかかった理由もそこにある。

あまりに信じられなかったのだ。

こんな事を平然とやつてのける人間が。

子供を抱き嬉しそうに微笑んでいたあの母親が、実は何人も子供を捨てているというその事実が。

ホームズは、どうしても信じられなかったのだ。

「大抵のものは、算数だ。でも、これだけは違う。これだけは、算数で測っていいものじゃあない」

「正論ですね。けれども、それだけで、人は生きていけません。綺麗事だけではやっていけないのですよ」

「だからって綺麗事を辞めていい理由にはならない」

ホームズは、ティーアを問髪入れずに否定し、そして言葉が続ける。

「知ってるかい？ そう言うのを言い訳と言うんだ」

ティーアは、呆れたように肩をすくめる。

「やれやれ、随分と青臭い理想論だ。若さの特権かな？」

「違うね。こういうのを一般論と言うんだ」

そう言って、ホームズはティーアを睨みつける。

「僕が君より若いとかじゃあない。君が僕より狂ってるんだ」

「怖い顔だ」

クスクスと面白そうにティーアは、笑っている。

人の笑顔は誰かを元気づける。

だが、この男の笑顔は見るものすべてに不快を覚えさせる。

「ティーア神父、最後の質問だ」

「何ですか？」

「引き取った子供たちは、今どこにいるんだい？」

ティーアは、肩をすくめ、やれやれと首を振る。

「どこにいるも何も、ここにいるに決まっているじゃないですか」

「嘘だね。はつきり言つてあげるよ、引き取った子供たちは死んでいる。そうだろう

？」

ホームズは、はき捨てるように言葉を紡ぐ。

「フフフ、おかしな事を……：散々マーブルや他の子を見たじゃないですか？」

「それが全部じゃあないだろう？ さっきの算数と逆だ。一人子供を預かったら、二人消す。そうする事で、単純に一人減らすことができる、そうだろうか？」

「……………証拠は？」

「君がさつき、白状したじゃないか、人が増えたら村が潰れてしまうって」

ホームズの目は険しく、口調は鋭さを増していく。

「増えた人間をそんな風にしか見られない君が、いらぬ子を引き取って育てている、こんな馬鹿な話があるものか」

ホームズは、そのままティーアを問い詰める。

いつの間にやらティーアの顔から笑顔が消えている。

目の前の人間を子供と見ていない。

ホームズの碧い瞳の奥に潜む脅威に気付いている。

「あえて聞いてあげる、ティーア神父。子供たちをどこへやった？」

ティーアは、パチパチと手を叩く。

「ブラボー……流石ですね、あなたの名前は伊達じゃない」

ティーアは、拍手し終わった手をポケットに手を入れる。

「質問に答えたまえ、ティーア」

「知りたいんですか?」

そう言いながらポケットから手をゆっくりと出す。

そこには、マナの欠片がにぎられていた。

「……………」

首をかしげるホームズ。そして、それを嘲笑うかのように青白く輝くマナの欠片。

ヨルのヒゲがピクリと反応する。

「まずい! ホームズ!!」

ヨルのその声とティーアの顔に笑みが浮かんだのは同時だった。

「冥土の土産に」

次の瞬間、マナの欠片は、炎となってホームズに襲いかかった。

ホームズのいた場所で轟々と燃える炎。

「おやおや、少し加減を間違えました」

そう言つて炎をパツと消し、燃え残っている炎を踏んで消す。

炎から少し離れた所でホームズは、息を切らしていた。

「まさか、逃げられるとは」

そう言つて今度は、氷の矢を作り出し、ホームズに照射する。

「ちっ！ヨル！」

「無理だ。間に合わん」

「こんの、役立たず!!」

ホームズは、そう毒を吐いて長椅子の影に身を隠す。

しかし、ガラスの様に輝く氷は、いとも容易く長椅子を打ち抜く。

「申し訳ありませんが、生かしてこの村を出すわけには行きませんね」

そう言つとマナの欠片を地面にポトリと落とす。

マナの欠片は、地面に当たつた瞬間碎け散り、湧き上がる水に変わる。

水は、ティーアを中心にして渦を巻き始めた。

水は、ホームズ達を巻き込んで唸りを上げる。

そんな光景をティーアは、ニヤニヤと笑いながら渦巻く水を眺める。

長椅子、石像等があるこの礼拝堂で激流に飲まれたホームズ達はきつと無事で済まない。
い。

しかし、渦巻く水が消えると、そこには文字通り猫の子一匹いなかった。
代わりに石像の裏に半開きのドアが一つ。

ティーアは、ふうとため息を吐く。

「それじゃあ、皆さん。後、よろしくお願いします」
ティーアの言葉に、三つの人影が静かに頷いた。

其の拾

「くそ、何なんだい！アレは！」

ホームズは、叫びながら走る。

「恐らく、マナの欠片を使って詠唱をすつ飛ばしてるんだろ。何せ、文字通りマナの塊だからな」

「ということは？」

「術喰らいは、使う暇がない」

「最悪だ………」

ホームズがそうこぼすと忌々しそうに舌打ちをする。

それと同時にホームズの後ろで爆発が起きる。

ホームズの顔から血の気が引く。

そして、更に足を早める。

「もうこうなったらヤケだ！姉さん連れてとつと逃げよう」

そう言つて扉に手をかける。

しかし、開かない。

「はあ!？」

ホームズは、慌てて押ししたり叩いたりを繰り返すのだが、扉はピクリとも動かない。そうこうしている内にも足音は、一つまた一つと迫ってくる。

「ああ!もう!どうすりゃいいんだい!!」

「ホームズ!脚を出せ!」

ヨルの突然の要求にホームズは、脚を一步前に出す。

「よし」

ヨルは、そう言う口をぱかりとあげ、黒球を吐き出しホームズの足に落とす。落とされた黒球は、ホームズの足で弾けると黒霞となつて纏わりつく。

「なんだい?これは?」

「いいから、それであの扉を蹴飛ばせ」

疑問に思う時間も迷う時間も惜しいホームズは、そのまま回し蹴りを扉に向かって放つ。

放たれた蹴りは扉を蹴散らしホームズたちへ道を作った。

「色々言いたいことはあるけど!」

ホームズは、そのまま部屋の中に入る。

「……………なんだい、これ?」

その部屋には円柱の水槽が所狭しと並んでいた。

そして、その中には例外なく子供達が閉じ込められている。

その光景の意味がわからないホームズは、首をかしげるばかりだ。

「なるほど」

そんなホームズと違いヨルは、そう呟いた。

「ここで、マナの欠片を作ったわけだ」

そういつて指差す先には、確かにマナの欠片を精製している機械があった。

「でも、どうやって？」

ホームズがそう呟いた瞬間水槽の床が開き一番手前の子供が下の階に向かって落ちていった。

そして、代わりの子供が水槽に入る。

「なんなんだい、これは……………」

ホームズの問いにヨルは、尻尾を一振りする。

「この妙な機械でガキどもの靈力野から、マナを吸い出してるんだろ」

「おい、ちよつと待ちたまえ、そんなことしたら！」

ホームズの言葉にヨルは、静かに頷く。

「ああ、ガキ共は死ぬ」

ホームズの顔から血の気が引く。

そして、ホームズは、片っ端から水槽を見る。

そう、最悪の可能性がホームズの頭をよぎったのだ。

今日、朝から見ていないあの少し変わっていて、そして、泣き虫な女の子の顔が先ほどから脳裏をチラついて離れない。

ホームズは、予想が外れる事を祈って水槽を確かめる。

だが、ホームズの予想は外れることはなかった。

「姉さん!!」

一番奥の水槽にマーブルは、瞳を閉じて浮かんでいた。

ホームズは、先ほどの脚で蹴りつける。

だが、時間と共に消えたその足では碎けない。

「ヨル! もう一回!!」

「阿呆。そうホイホイだせるか」

ホームズは、しばらく考え込むと急いで動き出した。

「ホームズ?」

「機械があるなら……………」

そう言つてホームズは、工具箱を引っ張り上げた。

「やっぱり!!」

工具箱をあさって金槌を引つ張り出す。

そして、ヨルの尻尾に巻きつけるとそのまま勢いよく回し遠心力を乗せる。

「せーのっ!!」

ホームズは、掛け声と共に金槌を叩きつけた。

二回三回と繰り返し、ようやく水槽は壊れた。

壊れた水槽からマープルを引つ張り出す。

「姉さん・姉さん・おい、しっかりしたまえー!」

引つ張り出されたマープルの顔は青白く、呼吸も弱い。

ホームズの声にも反応を示さない。

「んんか……………」

ホームズがマープルに懸命に呼びかけていると鉄仮面を被った黒ずくめの男達が入ってきた。

その男達の異様な殺気に気付いたホームズは、震えながらもマープルをかばうように抱きかかえる。

「誰だい、君たちは……………」

男達はホームズの質問に答えることなく銃口を突きつける。

引き鉄に手がかかった瞬間ヨルの金槌のついたままの尻尾が、襲いかかる。銃口に当たった金槌は、銃を暴発させる。

「——っ！」

暴発した銃に気をとられた瞬間、ホームズは、工具箱を蹴りつける。

顔面に工具箱をぶつけられた黒ずくめの男の一人はクラクラと頭を揺らす。

「ヨル！尻尾を！」

ホームズの指示に答えるようにヨルが尻尾を伸ばす。

尻尾は黒ずくめの男の一人に巻きつく。

その瞬間ホームズは、力を込めヨルの尻尾を振りまわし、そのまま壁に叩きつけた。

思わぬ反撃に面喰らう男達を他所にホームズは、マープルを背負い逃げ出した。

扉を開け部屋から走り出す。

暗い廊下をただひたすらに下っていく。

どんどんと出口から遠ざかっていることに歯噛みをしながらそれでもホームズは走る。

マープルを背負って懸命に走るホームズを追う足音迫ってくる。

ホームズの背後から電撃が発せられる。

「くそーティーアがもう!？」

「違うな。奴の靈力野^{ゲイト}じやない。さっきの奴らだ」

(というより、靈力野^{ゲイト}の氣配を感じない？なんだこいつら……)

ヨルが小首を傾げていると再び無詠唱で精靈術がホームズに襲いかかった。

ホームズが足を乗せようとした段が崩れた。

「っ——！！」

態勢を崩したホームズは、階段から転げ落ちる。

ギリギリでマーブルを抱きかかえ、なんとかマーブルに怪我がないように踏ん張った。

ホームズは、そのままころげおちて行き、最後扉に背中をしたたかに打ち付けた。

「——ツハ!!」

身体中を打ち付けたホームズの身体は、鈍い身体がホームズに響き渡る。

額から血が流れ、身体は擦り傷まみれだ。

そんなホームズに二人の黒ずくめの男がみたこともないこれまた黒い機械を持って迫る。

迫り来る死の氣配にホームズは、震えが止まらない。

ホームズは、床を拳で叩いて立ち上がる。

ここで死ぬわけにはいかない。

カチカチとなる歯を思い切り食いしばる。

「二つだけ手がある」

ヨルの言葉にホームズが反応した。

次の瞬間、黒い機械の先にエネルギーがチャージされ照射された。

轟音と共に巻き上がる砂煙。

暗闇の中砂煙が晴れるとそこには、ホームズ達の姿はなかった。

代わりに彼らの天井にマーブルを抱えたホームズが両足で立っていた。

その両足には黒霞が纏われていた。

ホームズは、宙返りをして黒霞を消し、一人に向かって踵落としをする。

上空からの不意打ちに一人は、意識を手放した。

だが、もう一人は別だ。

直ぐに現状を把握すると再び黒い機械に何かをチャージし、ホームズに向かって照射した。

攻撃をし終わった僅かな隙を突かれ、ホームズは、かわすこと叶わず、マープルを守るので精一杯だった。

照射されたソレは、ホームズ達をそのまま扉の向こうに吹き飛ばした。

「……………ぐっ、！」

埃を巻き上げ、ホームズは部屋へと飛び込んだ。

ホームズは、慌て目立ち上がる。

その瞬間、強烈な異臭がホームズの鼻をついた。

「なんだい……………この臭いは……………」

言葉で言い表すのは、不可能とも言える悪臭にホームズは、顔しかめる。

吐かないようにするので精一杯だ。

「くそ、一刻も早く出ないと……………」

ホームズは、ふらふらと足を動かす。

その瞬間ヨルのヒゲがピクリと動いた。

「ホームズ!!」

ヨルの切羽詰まった声に本能的に左に避けると先ほどまでホームズがいた場所を氷の矢が凄まじい速さで通り抜け、追撃しようとしてきた黒ずくめの男に命中した。

氷の矢に貫かれた男は、そのまま死に絶えたを

「あーあ、死んでしまいました……………ホームズさんが避けるから行けないんですよ」
その涼やかな声にホームズズの背筋は凍りつく。

振り返りたくない。

だが、振り返らなくてはならない。

まだ解けていない疑問、それを解く鍵は、間違いなく、この部屋で、そして後ろにいるあの男だ。

「ティーア……………！」

「怖い目だ。たれ目を怖いと思ったのは初めてですよ……………」

ティーアは、相も変わらずその腹の奥底を悟らせない。

「ここに来る時、あの部屋を見た。アレでマナの欠片を作っていたのかい……………」
マープルは、にっこりと頷く。

「なかなか、いい案でしょう？材料は、殺しても殺しても減ることのない人間。そして、それを安定的にマナの欠片を作り出すシステム」

「どこで、あんなものを……………」

「子供には関係のない話です」

そう言っただけで、一歩歩みを進める。

「さあ、返してもらいましょう。彼女は、大切な資源です」

ホームズは、腕の中にいるマーブルをティーアから奪われないように力を込める。

「資源？」

ポカンと口を開けるホームズ。

そんなホームズを見てティーアは、不機嫌そうにそして困ったような顔をする。

「……………人のものを取るとは、泥棒ですよ。商人の息子ともあろうあなたが、万引きですか？笑えませんかよ」

「全くだね……………」

ホームズは、マーブルを見る。

「この子は、泣いていてんだよ……………両親に会いたいと泣いていたよ……………」

目の前にいるこの男をホームズは、許せなかった。

「君は、資源というのか……………君達の都合で引き離れたこの子を!!」

「引き離れた？馬鹿なことを言わないでくださいよ。むしろ引き合わせたと言った方が正しいくらいですよ」

「……………は？」

「聞いてませんか？彼女は、人買いのところに行ったんですよ？」

「それを拾ったと言っていたな……………」

ヨルが喋ったことに少しも戸惑うことなくティーアは、頷く。

ホームズは、マープルを抱いたまま後ろに下がる。

「そうか、そういうことかい……………君、この子を買ったな……………」

「正解です。人買いから手に入れたかったのなら、それしか方法はありませんからね」
そう言ってホームズに向けて足を進める。

「その子の靈力野の大きさは目を見張るものがあつた。人買いのイスラさんの口も上手かつたので、つい……………」

その言葉を聞けばわかる。目の前のこの男は、自分が悪いとまるで思っていない。まるで、うっかり高い買い物をした主婦のように少し照れたように笑っている。

ホームズがそんなティーアの表情に戦慄していると後ろで何かが水に落ちるような音が響く。

いつの間にかホームズは、桶の前にいたようだ。

ホームズが後ろを確認するとそこには黒々とした泥のようなものが並々と入っていた。そして、あの異臭がより強い。

どうやらこの桶の中にある泥状のものが、異臭の正体のようだ。

「おや、マナを絞り終えたようですね」

異臭を放つ桶に放り込まれた死体は、そのままズブズブと死んでいく。

「これは、一体……………」

正体がわからず戸惑うホームズを差し置いてヨルが尻尾を泥状のものに突っ込む。

「こいつは……………」

「ヨル？」

「これ、人間だ」

「は……………」

ホームズは、ヨルが何を言っているか分からなかった。

「これ全部人間だ。すり潰されて、液状化されているがな」
ホームズは、ごくりと唾を飲む。

そんなヨルにティーアは、拍手を送る。

「ズバズバと真相にたどり着いていきますね。あなた方は」

そういうと大仰にため息を吐く。

「そうですよ。ここにすり潰した人間を入れ発酵させます。そうするとあら不思議」
ティーアは、何かのレバーを引く。

すると桶の中に現れた機械は、ゆっくりと動きだし死体を潰していく。

肉を断ち、骨を砕きながら。

ホームズは、言葉が出ない。唇からは、血の気が失われていく。

そんなホームズに構わずティーアは、自慢げに両手を広げる。

「あのアオイハナが、こんな貧相な土地でも育てることが可能になる最高の肥料となるんですよ」

この異臭の正体は、死臭の更に悪化したものだ。

ティーアのこの言葉を聞いた瞬間ホームズの頭に今までの疑問がよぎり、そして全てが繋がった。

「つまり、こういうことかい？ 男一人、女一人の子供を家族に入れるようにし、そして、それ以外はこの孤児院、いや、教会が引き取る。その引きとった子供のマナを搾りとり、

マナの欠片として売る。

そして、搾りとり終わつた子供達はすり潰しアオイハナを育てる肥料にする。

そうやって、この村は回つていると、そういうのかい？」

「大正解です」

フフフと楽しそうにティーアは、笑っている。

ホームズは、後ろの泥のを見る。

この泥達はかつての人間たちの成れの果て。

「どうですか？どこにも無駄がないでしょう？」

理不尽な理由で親に捨てられ、そして最後は、その理不尽な親達のためにこんな救われない死を迎えた。

マーブルもこうなっていたかもしれないと思うとホームズは、本当に吐き気を覚える。

「……………どうして……………どうして、こんな酷いことが出来るんだい!!」

子供達のあり得たはずの未来を問答無用に奪い取つたティーアにありたつた感情を込めてホームズは、睨みつける。

「村を救うためですよ」

ティーアは、更に言葉を続ける。

「いいですか。この村には何もありません。ですが商品がなくてはなりません。しかし、この村にはそんなものがない」

とても残念そうに呟きながらティーアは、コンと足元の石を蹴る。

「だとしたら、犠牲が必要です。ひ弱な老人？病人？いえいえ、そんな事をするわけにはいきません。なら、若者を？いえいえ、それも論外です。誰かを助けるために誰かを犠牲にするなんて、そんなことあつてはなりません！」

力説をするティーア。

言つてゐることは正しい。犠牲を良しとしないその言葉は、聞くに値する。

だが、それを言つてゐる本人が正しくない。

そして、その異様な光景にホームズは、なんとか言葉を絞り出す。

「……………だから、この子達に目をつけた。この子達を犠牲にした？」

「お前、言つてゐることが矛盾してゐるぞ」

ヨルとホームズの言葉にティーアは、ハア、と呆れたようにため息を吐く。

「元々、いらな言われた子供達です。そんなもの犠牲なんて言いませんよ」

なんてことないように当たり前のように言うティーア。

その言葉には、罪悪感なんて感情はどこにもない。

ホームズは、言葉が出ない。

そんなホームズに構わずティーアは、誇らしげに胸を張る。

「弱い人も強い人も老いた人も若い人もボクは、全ての村人を救ったアツ!!
賞賛こそされ糾弾されるいわれはない!!」

高らかにティーアは、そう言い切った。

ホームズは、ティーアの言葉を聞き考える。

————— どうして、こんな酷いことが出来るんだい!! —————

(ああ……………簡単な話だ)

「君の質問には答えました。さあ、マープルを返してもらいましょう」

ホームズは、ティーアを睨みつける。

(こいつは、自分が酷いことをしてるなんて毛ほども思っていない…………… 後ろにあ
る泥よりこいつの心は真っ黒だ……………)

歪んでいる。

狂っている。

だが、本人にそのつもりはない。

真っ直ぐで、

まともだと思っっている。

真つ当におかしく、

真つ直ぐに狂っている。

「……………そんな奴に姉さんを渡すわけないだろう」

ホームズは、そう言つて足元にある石を蹴り飛ばす。

予想外のことにティーアに隙が出来た。

ホームズは、その隙に出口へと走り出す。

しかし、出口まで後一步というところで出入り口が崩れ去つた。

「その子は、この村で一番の靈力野^{ゲイ}の持ち主です。返してください」

ティーアは、乾いた音響かせホームズとの距離を詰めていく。

「返してくれたら、貴方達は帰してあげますよ」

そんなティーアの言葉にもホームズは、首を縦に振らない。

「冗談にしては、笑えないな」

ヨルは肩でそう返す。

「おや？それは、残念ですね」

ティーアは、そう言つたとマナの欠片を指で弾く。

「光よ！デイバインストリーク!!」

光が砲撃となつてホームズ達に襲いかかった。

ホームズは、そのまま壁に叩きつけられた。

背中に走る激痛を堪えながらホームズは、ありつただけの憎悪を込めてティーアを睨みつける。

「ティーア……お前という奴は……」

「残念ながら、それは偽名です。ちよつと並び替えて、文字を足してください」
ティーアは、一歩ずつ近づき、そしてホームズの胸ぐらを掴みあげる。

「というわけで、本名は、アーティーです。この村というのがアレなら、アーティーの村とも呼んでください」

アーティ―は、拳を強く握りこんでホームズに照準をあわせた。

其の拾壺

「ぐっ……………」

殴り飛ばされたホームズは、そのまま転がる。

ティーア、いや、アーティーは、それを鼻で笑うとマープルにカツカツと歩みを進める。

そんなアーティーにホームズは、石を投げつける。

そんなホームズをアーティーは、不機嫌そうに見る。

「ヨル、姉さんの所に。それともう一個よろしく」

ホームズは、アーティーに聞こえないよう小声でヨルに話しかけた。

「……………時間稼ぎぐらいしてくれるんだらうな？」

「……………そのためにここにいるんだ」

逃げるだけにしてもアーティーが決してホームズを逃さないのは、明白だ。

「勝つつもりですか？ 私に？ 霊力野のない落ちこぼれが？」

「落ちこぼれだって？」

ホームズは、吐き捨てるように続ける。

「人を救えない神父が何を言ってるんだい？」

「……………近頃の子供は、人の話を聞かないようですね」

アーティーは、そう言うともナの欠片を弾く。

弾かれた欠片は、一瞬圧縮されたのちホームズの前で爆発した。

「がっ、!!」

ホームズは、地面に打ち付けられ転がる。

「まあ、まずは目障りなあなたから始末しましょう、ホームズ」

そんなホームズを追撃するように氷の矢がホームズに襲いかかる。

「ぐっ……………!!」

ホームズは、慌ててかわす。

肩をかすって氷の矢が地面に突き刺さる。

「それも、全部、あの子達の命を…………」

ホームズは、忌々しそうにマナの欠片を睨みつける。

ホームズの視線に気付いたアーティーは、マナの欠片を見せる。

「素晴らしいでしょう？ 精霊術の威力を底上げする、どの国も喉から手が出るほど欲しい、一品です。どうですか？ これを使えばあなたも、人並みに精霊術が使えるかもしれませんよ？」

「そんな物のために……………」

アーティーは、ホームズの言葉を軽く聞き流し、今度は雷の剣を作り出してホームズに打ち下ろした。

「ホームズ!!」

身体は、ススで汚れ地面に伏したまま動かない。

アーティーがそんなホームズにとどめを刺すため、ゆつくりと近づいてくる。

「その子達には、未来しかないんだ……」

「何ですか?」

ホームズのか細いの声にアーティーは、反応する。

ホームズは、四肢に渾身の力を込める。

楽しそうにしつつも夜になれば泣いていた年下の姉の涙がよぎる。

「……………いやいやと言われた子供たち、生まれた事を否定された子供たち、親との記憶のない子供達、幸せな過去もなければ楽しい今もない……………」

ホームズは、歯を食いしばり左足を軸に右足をあげる。

「そんな子供達の未来を! 笑顔を! お前は奪った!! 許せるわけないだろう!!」

そう言つてホームズは、回し蹴りを放った。

だが、所詮リリアル・オーブのない人間の蹴り。

アーティーは、あつさりと弾き飛ばした。

弾き飛ばされたホームズは、そのまま先ほどの氷の矢で貫かれた黒ずくめの男の所まで飛ばされる。

「……………ぐ……………」

「やれやれ、物分かりの悪い子供だ」

そう言つてアーティーは、氷の矢を作り出す。

ホームズは、力の入らない身体に鞭を打つて立ち上がろうとする。

しかし、氷の矢はホームズが立ち上がった瞬間、真つ直ぐにに放たれた。

アーティーは、確定した勝利に歪んだ笑みを浮かべる。

氷の矢は埃を巻き上げホームズに降り注いだ。

アーティーは、それを見るとフフフと溢れる笑いが止まらない。

それから、マーブルの前にいるヨルに近づく。

「あなたのご主人様も死んでしまいました。もう、その子を守る理由もないでしょう？」

ヨルは、心底嫌そうな顔をする。

「ご主人様なあ？」

「おや、違いますか？」

「ああ、違うね。それともう一つ、お前は思い違いをしている」
ヨルの言葉と共に埃が徐々に晴れていく。

「あいつが死ねば俺も自動的に死ぬんだ」

埃が晴れるとそこには青白く輝く陣で、氷の矢を食い止めるホームズが現れた。

「……………どういふことですか？」

アーティーは、目の前の状況について行けず首をかしげる。

ホームズは、アーティーの言葉を無視して腰を落とす。

「腰を落とし、力を込める、確か名前は……」

ホームズの身体を赤い蒸気が渦巻く。

「剛招来」

噴き出る赤い蒸気は、ホームズの身体を纏う。

それから、右足を前に出し、左足に力を込める。

「力は軸足に、想いは右足につ!!」

そう言つて一気に距離を詰め飛び蹴りを放った。

「——つ!!」

アーティーは、慌てて術を放とうとするがそれより早く、ホームズの蹴りが届いた。

「瞬迅脚!!」

空いた距離を埋めた跳び蹴りは、アーティーの腹にめり込み、そのまま弾き飛ばした。

飛ばされながらホームズの手にあるリリアルオーブを見た。

(いつの間に……………)

何故、ホームズの手にリリアルオーブがあるのか理解できなかった。

「別に。あそこの死体から奪っただけだよ」

そう言つてホームズは、氷に貫かれた黒ずくめの男を指差す。

そうあの時の挑発も全部あの死体まで吹き飛ばすためのものだ。

腹部の痛みに耐えているアーティーを他所にホームズは、ヨルに目を向ける。

ヨルは、こくりと頷く。

「見つけといたぞ、隠し通路」

「助かるよ」

ホームズとアーティーは、すれ違つてもいなければ追いつかれたわけでもない。

だが、アーティーは、ホームズ達より先にいた。

ホームズの思惑に気付いたヨルは、マーブルの前に立ちひたすら探していたのだ。

ホームズは、ヨルの案内でマーブルを背負いながら隠し通路を目指す。

「逃すとお思いで？」

アーティーは、マナの欠片を弾く。

「光よーディバインストリーク!!」

アーティーから、光の大砲がホームズらに向かって放たれた。

だが、気が付いた時には既に遅い。

ディバインストリークは、刻一刻とホームズ達に迫る。

ホームズは、目を閉じマーブルを庇うように抱きかかえ、来るべき衝撃に備える。

しかし、いつまで経つても光の衝撃は、襲いかかって来ない。

「？」

ホームズは、不思議に思つて目を開けると、そこには掌底破で光の大砲を防いでいるルイーズの姿があつた。

「母さん!？」

「遅くなつて悪かつたねえ」

信じられないという顔しているホームズにルイーズは、いつもの調子で返事をする。どこから入つてきたのか、不思議に思つて辺りを見回すとなんだか、不自然な穴が空いている。

「地下牢を壊すのに時間がかかつちやつてさ」

光の大砲は、ルイーズの手を超えることなくそのまま掻き消えた。

ルイーズは、パンパンと手を払いアーティーを睨みつける。

「く……………」

アーティーは、再びマナの欠片を弾く。

「凍てつけ! アブソリュート!!」

冷気がルイーズの周りを渦巻き、氷の牢獄となつてルイーズを襲う。

「剛招来」

静かな物言いとは対照的にルイーズから高熱を主張するように白い蒸気が噴き出す。そのルイーズの剛招来は、氷の牢獄を形をなす前に溶け去つた。

「なっ……!!?」

アーティーの空いた口が塞がらない。

そんなアーティーに構わずルリーズは、ホームズに目を向ける。

「私がこいつを引き受ける。君たちは早く逃げたまえ」

ホームズは、頷くとマールを背負って走り出した。

アーティーは、ホームズ達を追おうとしたがルリーズの威圧感に思わず躊躇った。

「この化け物め……」

アーティーの言葉を聞きながら子供達が放り込まれた桶をちらりと見て、そして、マナの欠片に視線を向ける。

ホームズより早くルリーズは、この村のからくりが気が付いていた。

それを確かめに行った時、うっかりとじこめられてしまったのだ。

「私が化け物なら、君は悪魔だねえ」

その言葉と同時にルリーズの拳が振り抜かれた。

ルリーズの問答無用の拳をアーティーは、受け切った。

ルリーズは、一步下がり、痺れる手を振る。

「確か、防御力を上げる精霊術があつたよね?」

アーティーは、パチパチと手を叩く。

正解のようだ。

「更に！」

そう言つてマナの欠片を二つ放り投げる。

「シャープネス!!」

アーティーの周りを赤いオーラがまとわりつく。

(マナの欠片で更に、つて奴だろうねえ)

考えている間にアーティーは、一歩でルリーズの前に現れた。

そして、そのまま腰を落とし正拳突きを放つ。

ルリーズは、派手に吹き飛ばされた。

「こんなのですか?」

そう言つてルリーズが立ち上がる隙にマナの欠片を更に使う。

すると黒い球体、ネガティブゲートが現れルリーズを引き寄せ拘束する。

それを眺めると落ちていた黒い機械を拾う。

先程、死んだ男の持っていたものだ。

アーティーは、そのままルリーズに向かって放った。

濛々と巻き上がる埃。

アーティーは、ようやく肩を下ろす。

「これで終わりですね」

「いやいや。カーテンコールには、まだ早いぜ」

いつの間にかアーティーの背後に移動していたルイーズは、振り返りながらそう返した。

「な!?!確かに捉えたはず……………」

「でも、手応えはないだろう?」

ルイーズは、何てことなさそうに返す。

そうルイーズは、拳をもらう瞬間後ろに下がって威力を消したのだ。

「くっ……………」

アーティーは、背後にいるルイーズに向かって機械を構え、引き金に指をかける。

引き金を引こうとした瞬間、アーティーの足元にネジが転がる。

「……………」

目の前には、ドライバーを持っているルイーズ。

（……………しまっ……………）

そう思った時には既に遅かった。

引き金は引かれマナが蓄積されていく。

その瞬間機械は、爆発をした。

巻き込まれたアーティイーの手は血みどろだ。

弾け飛ばなかったのは、バリアーのおかげと言ったところだろう。

「ああああ」あ「あ」あ「あ」

ルイズは、ドライバーもてあそびながらのたうちまわるアーティイーを見ていた。

アーティイーは、のたうちまわりながら、地面に落ちているネジを睨む。

「ネジ……………この一瞬で分解した……………のですか？」

ルイズは、パチパチと手を叩く。

重要なネジを取られたため、不具合を起こした黒い機械を無理に使おうとした結果爆発したのだ。

「私の前で黒匣^{ジン}を使おうだなんていい度胸だね」

「黒匣……………だと？あなた……………が何故それを知っている！」

「アルクノアから何も聞いていないのかい？」

アーティイーは、歯を食い縛ってマナの欠片を取り出そうとする。

それをしようとして、一瞬アーティイーの動きが止まる。

ルイズは、それを視界の端で捉える。

「まあ、いいか。それより、マナの欠片、あとどれくらいあるんだい？」

「お見通しのようにですね」

アーティーは、そう言うと手のひらに二つマナの欠片を乗せる。

「後、二つです。そして……………」

マナの欠片を輝かせる。

「フアーストエイド」

治療の呪文により、アーティーの両手から傷が消えていく。

そして代わりに一つ欠片が消える。

「これで残り一つ」

アーティーは、そう言うと手のひらにあるもう一つの欠片を輝かせる。

「クイツクネス」

アーティーの体は身体強化の重ねがけで体は虹色のオーラをまとっている。

「身体強化か……………賢い選択だねえ」

ルイーズは、そう言うとドライバーを投げる。

地面にドライバーが落ちる。

その瞬間、二人は踏み込んだ。

アーティーの拳に横から回し蹴りをぶつける。

態勢を崩したアーティーの顔面に向かってルイーズが拳を放つ。

だが、アーティーには響かない。

バリアーを超える力には、届かない。

拳を受けてニヤリと笑うとお返しとばかりに左手を握り締める。

ルイズは、拳が振るわれるより先にアーティーの襟首を掴み体を捻って投げ飛ばした。

壁に叩きつけられたアーティーに向かってルイズが、跳び蹴りをかます。

アーティーは、迫り来るルイズに足に向かって拳打を放つ。

ルイズは、思わず態勢を崩した。

アーティーの神父服の袖から紐が現れる。

現れた紐は、態勢を崩した手に巻きつく。

「これで、ボクの百パーセントが通じる」

アーティーの身体強化を乗せた拳がルイズの腹部にめり込む。

紐に結ばれたことにより先ほどのような受け身はもう取れない。

しかし、これだけではない。

ゆっくりと開かれる拳にはマナの欠片が握られていた。

「フォトン!!」

巨大な光球が弾けルイズにだけ襲いかかる。

ルイズは、ゆっくりと膝をつく。

紐で縛られたルーズは、右手だけ釣り上げられた状態になる。

「やれやれ、紙一重でした」

そう言つてアーティ―は、絡まつた紐をほどく。

「何とか、終わりました………」

「残念、マジックガード」

妙に語尾の上がつたルーズの言葉に思わず戸惑う。

勝つたと思つたのだ。

誰でも思う。

至近距離であの爆発の攻撃を受けて立っていられる人間などいないと誰もが思う。それは、油断でもなんでもない。

強いて言うのなら、運が悪かったとしか言いようがない。

ルイズと戦うことになったアーティの運が悪かったのだ。

ルイズは、ぺつと唾を吐くとゆらりと立ち上がり、アーティの顔面に拳を放った。その拳は、今までバリアーに阻まれ届かなかったことが嘘のようにアーティに響いた。

「——っ!!」

アーティは、そのまま地面を転がった。

確かにルイズの隙はついた筈なのだ。

残り二つしかないように見せかけ実は、最後の一つを隠し持っていた。

嘘と本当を織り交ぜた言葉にルイズを騙せたはずなのだ。

信じられないという顔で見るアーティに構わずルイズは、鼻で笑う。

「……………どうして君のことを信じられるって言うんだい？」

ルイズの拳に剛将来の赤い鬨気が集まっていく。

「人の命を金にし、村人たちを騙し、子供の未来を奪い、わたしの息子とそして、娘を傷つけた、そんな奴の言うことのなにを信じられるというんだい？」

垂れた幼げな印象を与える瞳は背筋が凍るほど涼やかだ。だが、その奥に灯る焰は信じられないほど熱い。

「まだるっこしいのは、もう抜きだ」

リリアル・オーブが爛々と輝く。

「ここからは、文字通り拳で語ってあげるよ」

舞台は、大詰め。

「さあ、幕を引こうか」

化け物、ルイーズの秘奥義だ。

「拍！」

右の拳を握り、殴りつける。

「手！」

今度は左の拳を握り、殴りつける。

「喝！」

蹴りを放ち、宙に少し浮かせる。

「采！」

そのまま追撃をして宙に完全に浮かせる。

ルイーズの両の拳には、剛将来が纏われていた。

「ダアアアらあああ！」

握られて拳を落ち行くアーティーに拳の乱打^{ラッシュ}。

放たれる拳は、アーティの急所という急所を的確に打ち抜いていく。

「あ あ あああああ あああああ あああああ あああああ あああああ あああああ あああああ あああああ あああああ あああああ
あああ あああ あああ あああ あ ああああああああああああああああああああああああああああああ
左の拳を打ち込み、反対の右の拳を握り締める。

その繰り返し。

単調でそして的確。

だからこそその威力。

左手で打つと剛将来の力を全て右の拳に集める。

舞台を終えた役者には、大事な大事な役目がある。

その名は、

「カーテン……………」

剛招来が集まりきった拳を真つ直ぐアーティーに打ち込む。

「……………コォー……ール!!!」

殴り飛ばされたアーティーは、壁に叩きつけられた。

アーティーは、そのままずるりと壁に背を預ける。

「どうだい？体の調子は？」

「見ての通りです……………もう、動けません」

アーティーは、ふっと笑う。

「本当に拳で否定しましたね」

そんなアーティーにトドメを刺そうと歩みを進める、ルイズ。

アーティーは、ニヤリと笑うと人差し指で軽く地面を叩いた。

その瞬間辺りを炎が包んだ。

あふれ返る熱に思わず顔を腕で庇う。

「……………どうせ、ボクにトドメを刺すつもりなのでしょう？」

アーティーは、口を開く。

「そんなのごめんです。そんなことになるぐらいだったら、ボクは自ら命を絶つ！」

ニヤリとアーティーは、笑う。

「自分の命は、自分だけのものだ……誰かに奪われるなんて絶対にそんなことさせない！」

ルイーズは、そんなアーティーの胸倉を掴みあげる。

「そう言う君は、人の命を一体いくつ奪ってきた？」

そう言つてルイーズは、人の泥の入った桶に放り込む。

「そんな君が、今更好きないように死ぬるとまさか本気で思っているのかい？」

その不穏な雰囲気にはアーティーの背筋に汗が流れ落ちる。

「待つ………」

「そんな虫のいい話があるわけないだろう？」

「まてー！」

「待たない」

動きたいがアーティーは、動けない。

ルイーズに骨と言う骨と関節という関節全てを壊されたアーティーには、どうすることもできない。

「お人好しと呼ばれるあなたがどうして!!」

「私はお人好しであつて、お人良しじゃあないんだ」

レバーを握る手に力を込める。

「だから気に入らない人間は、文字通り徹底的に叩き潰す」

ズブズブと泥に沈んでいくアーティールは、何とか動こうともがいていた。

「ま、待ってください!!あなたは、行商人だ!!だったら、何でも報酬をあげます!!です
から……………」

その言葉にルイーズのレバーを引く手を止める。

「なるほど……………」

ルイーズは、ふむと顎に手を当て考え込む。

ほっ、と胸を撫で下ろした。

幸いこの教会には、蓄えがある。

この目の前の行商人を満足させられる富がある。

「じゃあ、ここの子供たちを生き返らせてよ」

元凶は、ルイズの手によって葬り去られた。

ルイズは、ちゃんと機械が動いたの確認すると、潰れた地上への入り口を破壊し向かっていった。

其の拾貳

「……………ホー……………ムズ？」

「姉さん！起きたのかい!？」

ホームズは、背中から聞こえる弱々しい声に走りながら答える。

空は白み始め、アオイハナの畑を静かに照らす。

「待っていたまえ、今宿に向かっているから」

マープルを背負って走るホームズは、必死に考えないようにしていた。

さながら現実から逃げるように。

そんなホームズの背中でマープルは、ゆっくりと口を開く。

「……………ホームズ、話しません？あの広場で」

「後にしたまえ。元気になったら飽きるほど、嫌になるほど、喋ってあげるよ」

ホームズは、即座にマープルの言葉を切って捨てた。

「ホームズ。こいつに『後』はない。マナを食う俺が言うんだから間違いない」

ヨルは、ホームズの頭の上で言葉を返す。

マープルのマナは、あのマナの欠片を生み出す機械によって、すっかりなくなつてし

まったのだ。

酷使された霊力野^{ゲイト}、そして、尽きたマナ。

彼女は、もう長くない。

「お前も気付いてるだろ」

ホームズは、何も答えることが出来なかった。

分かっていたのだ。

だが、信じたくなかった。

その現実を否定したくて口を開くが、言葉が出ない。

「ホームズ」

マーブルに促されホームズは、ようやく絞り出すように口を開く。

「……………分かった。絶対寝かさないからね」

「……………ふふふ、随分な殺し文句ですわね」

「言っていたまえ」

ホームズとマーブルは、あのマーブルがいつも泣いていた広場へと歩いと行った。



広場に着くとホームズは、マーブルをベンチに降ろす。

マーブルは背もたれとホームズの肩にぐったりと体重を預けていた。

「姉さん、横になった方が……………」

「……………ベンチというのは、座るためにあるのでしょう？」

心配そうなホームズに弱々しく微笑んで返した。

その言葉を聞いたホームズは、遂に涙を堪えることが出来なくなつた。溢れる涙は、止まることを知らない。

「……………出会つた頃と逆ですわね」

「うるさいよ……………」

ホームズの言葉にマーブルは、薄っすらと笑う。

「……………あの時……………あなたが来てくれた時は驚きましたわ」

「……………驚いた顔してたねえ」

ホームズは、涙を拭いてそう答える。

「第一印象なんて、良くなかつたのですけれど、よく探しに来ましたね」

「母さんに言われたから探しに行ったんだよ」

マーブルは、呆れたようにため息を吐く。

「……そう言う事は……言わないものですよ」

それを言うときとマーブルは、笑う。

「……まあ、貴方は、きつとルイーズさんに言われなくても探しに来たと思いますわ」

「……何を根拠に……」

「お忘れですか？ 私はあなたのお姉さんですよ」

マーブルのその言葉にホームズは、二の句が続かない。

「……あなたは子供で、残念で、モテなくて料理が下手で」

「その言葉、そっくりそのまま返すよ」

「……そして、分かりづらいけど優しい、そんな自慢の弟ですわ」

「その言葉、そっくりそのまま返すよ」

ホームズは、目元をゴシゴシと拭いながら言葉を再び返した。

ホームズのその言葉にマーブルは、嬉しそうに頷く。

「……私には、物心ついた時から家族がいまませんでした。寂しかったし、そして、この気持ち誰にも打ち明けられなくて辛かった……」

そこで言葉を切る。

今まで一度も言わなかった。

こんな心の奥底に大事にしておきたい宝物は、内緒にしておきたかった。

それに何より本人いうのは何より気恥ずかしかった。

「そんな私をあなたは見つけてくれた。見つけて、私に一番かけて欲しい言葉をかけてくれた。

そして、私を姉と認めて、家族としてくれた……………」

だが、宝物は隠しては自慢出来ない。

今日の前にいるこの泣き虫な弟に自慢しなくては、伝えなくては、宝物の価値が消えてしまう。

「ありがとう、私を見つけてくれて。

ありがとう、話を聞いてくれて」

弱々しい声と絶対に聞かなかったマーブルからの『ありがとう』をホームズは、必死に聞いている。

自分の泣き声でマーブルの言葉をかき消さぬように。

「ありがとう、私を家族と認めてくれて」

マーブルの瞳から一筋の涙が流れる。

「私……………あなたのお姉さんで、良かった……………あなたが弟で本当に良かった」

ホームズの涙は、もう止まらない。

「姉さん……………」

マープルは、ポケットから小袋を取り出し、ホームズの手のひらに乗せる。その小袋は、小銭や少しのものをしまうのにちょうどいい大きさだった。

「饑別ですわ。弟の門出にプレゼントぐらいしなくては、ね」

「……………もしかして、今日、やらなくちゃいけなかったことって…………」
ホームズはその顔にマープルは、満足そうに頷く。

「……………どうせ、あなたは何も用意してないんでしょう？」

「……………ごめん……………」

震えながらいうホームズの頬にマープルは、ゆっくりと触れる。

「やれやれ、そんなんでは、先が思いやられますわね……………ねえ、ヨル」

「よく分かってるじゃないか、マープル・ヴォルマーノ」

ヨルの言葉にマープルは、目を丸くした後少しだけ誇らしげにする。

「……………当然ですわ。ホームズのお姉さんですもの」

マープルの視界は霞み最早ぼんやりとしか分からない。

それでも、マープルは笑みを浮かべる。

弟が泣いているのなら姉は逆に凜としていなくてはならない。

笑顔で別れを告げなくてはならない。

「……………じゃあね、ホームズ。楽しかったですわ」

マープルは、精一杯の笑顔でそう告げると、ゆつくりとホームズの頬から手を離れた。「おい、姉さん……………！姉さん！」

ホームズがどんなに呼びかけてもマープルは、もう二度と目を開くことはなかった。

薄暗かった村にはもう朝日が登り村に一日の始まりを告げていた。

ホームズは、声を殺して泣き続けた。

そんなホームズにルイーズが歩いてきた。

「……………こつちのカタはついたよ」

ルイーズの背後にある教会は、炎を上げて燃えていた。

「孤児院の子達は？」

「……………」

ルイーズは、静かに首を横に振る。

「そうか……………」

ホームズは、そう言うともう動かなくなったマープルを背負う。

「母さん、お墓を作ろう」

「……………場所は？教会なんてわけにいかないだろう？」

ルイーズに尋ねられるとホームズは、ゆっくりと口を開く。

「二つ心当たりがあるんだ」

「……………わかった」



「……………できた」

ホームズは、スコップを地面に置くと手をパンパンと払う。

ルイズとホームズとヨルは、いつもマープルと釣りをしていた池のほとりにいた。先ほど出来た墓標には、「マープル・ヴォルマーノ」と刻まれている。

ホームズは、埋葬する間ずっと泣いていた。

泣き続けたホームズの真っ赤になっていた。

「おれが、もっと早く気が付けば……………」

「……………それは、言いつこなしだよ」

俯くホームズズの頭をルイーズがポンと叩く。

結局ルイーズも気付いたが、手間取りあの現場にたどり着けなかったのだ。

「なんで………なんで………姉さんが死ななきやいけなかつたんだい……」

再び溢れる涙は、止めようがない。

ホームズズの脳裏には、釣りで話したことが蘇る。

他愛もない話、馬鹿な話、どれこれも再び語られることはない。

「おれが、もつと強ければ、変わったのかな………」

「それはないだろ。お前より強いルイーズでも無理だったんだ」

ヨルは、墓標を眺めながらそう返した。

ルイーズは、ホームズズの頭から手を離しポケットに手を入れる。

「誰かを守るとか助けるとか結構大変なことなんだよ。力があつたつて出来ないこと

の方が多い」

単純な話、誰かを守る為に力をつけてもそれ以上の暴力が敵に回ればそれだけで、全ては水の泡となる。

「だからね、ホームズ。今は、泣くといい。誰も止めないよ」

ホームズズは、しばらく黙った後ぐいっと目元を拭う。

「もう泣いた。これ以上ここでは泣かない」

唇を噛み締め墓標を見る。

「ここでの思い出は、おれにとつて宝物だ。だから、これ以上涙で濡らすものか」
小さな小袋を大事そうに握るホームズ。ルイーズは、やれやれといったふう

「……………つたく、この強情っ張り」

妙な意地を張るホームズを見てそう呟くと後ろに視線を向ける。

「それで何の用だい……………」

トーンの下がったルイーズの声で茂みや木の陰から、一人また一人と出てきた。

「お客様？」

お客様、アオイ村の住人たちは、ルイーズ達に敵意を剥き出しでそこにいた。

ルイーズは、軽く肩をすくめて見せる。

「何の用かと聞いているんだ。言っておくけど商品ならもうないよ」

「そんなものは、どうでもいい」

村人の男が手に持った鍬を構える。

「今朝、あの教会が火事になっていた」

その男が喋ったのを皮切りにもう一人女の村人が声を上げる。

「アンタ達があの教会に入ったのをアタシは、見たよ!!アンタ達が火をつけたんじゃないの?!」

「私があ？なんの為に？」

「確か、マナの欠片が欲しかったんだろ、それで断られてカツとなったという奴でないのか？」

村長とおぼしき老人が前歯にある金歯を反射させながらルリーズとホームズを責める。

「へえ、あの神父のこと君たちは、尊敬でもしているのかい？」

「当然だ！あの人が来てから毎年アオイハナは、作れるし、そのための肥料も用意してくれた!!」

肥料という言葉でホームズの肩がびくつと強張る。

「毎年……………？毎年、このアオイハナを同じ畑で作っているのかい？」
ルリーズは、ホームズと違い眉をひそめる。

「ああ。おかげでこの村も豊かな生活を送ることができた!!そんな人を尊敬しないほうがどうかしている!!」

「いや、そういう事言いたいんじゃないんだけど……………まあ、それでいいか」

村人達が口々にルリーズ達を攻め立てる。

仕方ないといえは仕方のない事だ。

村人達はあの神父の事を何も知らない。

自分たちを救ってくれた救世主にしか見えていないのだ。

いや、事実村の暮らしを豊かにした神父は、見方を変えれば救世主だ。

「……………だろう」

俯いたホームズからポツリと小さな声が漏れる。

そんなホームズに村人達は首をかしげる。

「いいわけないだろう!!何も知らないくせに好き勝手言いやがって!!」

ホームズは、遂に我慢が出来なくなった。

「知らないようだから教えてやる!!君たちの生活を支えているアオイハナもマナの欠片も全部君たちの捨てた子供達を犠牲に成り立っているんだよ!!」

ルイズは、ホームズの言葉を苦い顔をしながら聞く。

ホームズの「捨てた子供」というところで村人達は押し黙る。

ホームズは、マーブルの墓標を指差す。

そこに書かれたマーブルの名前にその場にいたユーフォは、息を飲む。

「君たちが村の掟に従い、捨てた性別の被った子供たち、教会に預けたから安心だとも思っていたのかい?そういうのは、預けたとは言わない。捨てたと言うんだ。どんな理由があろうと、どんな言い訳をしようとするは捨てたと言うんだ」

ホームズは、再び堪えていた涙が溢れる。

「おれは、あの教会で君たちが捨てた子供たちがマナの欠片を作るためにマナを絞られる様を見てきた！絞られ死体となった子供をすり潰し肥料にする様を見てきた!!」

あの時、理不尽に命を奪われていった子供たちの事がホームズの脳裏に蘇る。

「嘘だと思ふなら、あの教会に行つて見てくるといい！地下室の燃えカスの中から道具が出てくるはずだ！」

ホームズの言葉を聞き真つ先に動いたのは、村の女性たちだった。

自分が生み、そして捨てた子供たちが幸せだと信じていた事が今、目の前の男に崩されたのだ。

確かめなくてはならない。

そして、それに続くように男性が走った。

池のほとりから人が消え、しばらくすると泣き叫ぶような声が響いた。

ルイズは、ふうとため息を吐く。

「そろそろ行くよ、ホームズ」

「わかった」

ホームズは、墓標を軽くなでる。

「またね、姉さん」

ヨルは、ぴよんとホームズの肩に飛び乗り、二人について行った。



ホームズ達は村の出口へと向かっていた。

そこには、村人達が勢揃いしていた。

「……………何の用だい？」

突き放すように言うと村長とおぼしき男が頭を下げた。

「あなた達の言う通りだった。地下室には、肥料を作る機械もあつた、そして、死体が

入ったまま焼けた水槽の側にはマナの欠片があった」

村長は、更に言葉を続ける。

「何かおかしいと、こんな貧しい村がここまで盛り返したことは、何かおかしいとそう思つてあつたのに、皆見て見ぬフリを続けていた。気づかないフリを続けていた」

村長は、更に頭を下げる。

「あなた達に心ない言葉をいつたこと、申し訳なかつた」

「分かつてくれればいいよ………」

「これから、この村は今まで通りとはいかないだろう。だが、必ず盛り立て見せる！だから、いつか必ずこの村に来て欲しい！」

村長は、強い瞳でホームズとルイズを見る。

ルイズは、優しく笑う。

「その言葉忘れるんじゃないよ。それと、どう言い訳をしようと、君たちは子供達の命を犠牲にしているんだ。その事も忘れるんじゃないよ」

「もちろん」

ルイズは、軽く手を振って村の出口へと歩いて行つた。

「ホームズさん!!」

ユーフォがホームズに走り寄つてきた。

「マープルちゃんのお墓は、私がキレイにしておきますーだから安心して下さい!!」
ホームズは、にっこりと本当に嬉しそうに微笑む。

「ありがとう。頼むよ」

「……………はい！ホームズさんもまた来て下さい。きっと、マープルちゃんも喜びます!!」

ユーフォは、手をぎゅつと握りしめそう答えた。

「うん。わかった」

ホームズは、頷き村を振り返る。

「それじゃあ、いつてきますー!」

楽しい事、辛い事、全てを与えた村をこうしてホームズ達は後にした。

ようやく全てを振り切った、ホームズはしっかりとした足で歩いて行った。

T
h
e

m
a
d
n
e
s
s

d
o
e
s

n
o
t

e
n
d
:
:
:
:
:

其の拾参

「おい、ルイーズ」

月日は流れ早二年。

ホームズ達はイル・ファンにいた。

元々夜域のイル・ファンは、常に夜。

星を眺めるヨルの日課は充実していた。

まあ、毎度側にはルイーズがいるのだが。

しかし、今日に限ってルイーズが現れない。

不思議に思つてルイーズの部屋に行くが部屋はもぬけの殻だった。

「……………？珍しいな」

ヨルは、そう言いながら部屋の奥へと進む。

すると机の上に紙が一枚あつた。

「なんだこれ？『診断書』？」

ヨルは、診断書を読む。

『病名……………により、』

つらつらと、書かれている文章を読むヨルの頭が少しずつ冷えていく。
「これって……………」

「ごちゃごちゃと難しく書いてあるけど、要約すると……………」
いつの間にやらヨルの背後にいたルイーズが診断書を取り上げる。

「もうすぐ、死ぬってことらしいぜ、私」

霊力野ゲートのないルイーズの気配は辿れない。

背後に突然現れたルイーズをヨルは、しらっとした目で見る。

「お前、これ、いつからだ」

「割と前から言われてたんだよねえ……………」

ルイーズは、少し笑って椅子に座る。

「ホームズは？」

「とつくに知ってるよ」

「は？」

「何せ、この診断書最初に受け取ったのは、あの子だぜ。いい機会だから無理矢理吐かせた」

「お前、信じられないぐらい元気だな」

ヨルは、呆れたようにため息を吐く。

思い出せば何やら不自然に追い出された記憶がある。

その力ない吐息にルイーズは、首を傾げる。

「おや？その反応は、君ももしかして、私が死ぬの悲しいとか思ってるのかい？」

ニヤリといたずらっぽく尋ねるルイーズにヨルは、少し考え込む。

「前に、マープルが死んだ時の事覚えてるか？」

ヨルの口からマープルという言葉が出た時ルイーズは、大きく頷く。

「マープルがいるのが当たり前になつていたからな……それが突然消えたとなつた時、なんだかこう違和感というのか、ある筈のものが無い奇妙な感覚と言うものがあつた」

ヨル自身その気持ちが何なのかよく分かっていない。

ヨルは、そのまま言葉を続ける。

「きつと、また同じことを思うのだろうか」

ヨルの言葉を聞くとルイーズは、少しの間目を丸くするとそれから少しだけ優しく微笑む。

「君さ、自分のこと何だと思ってる？」

「化け物」

「だとしたら、君は少し優しいね。いや、人間臭いと言った方が正しいかな」
ルイーズは、不服そうな顔をするヨルの頭を軽く撫でる。

「よく分からんが、馬鹿にしてるのか？」

「いや、少しだけ嬉しくなったのさ」

ヨルは、よく分からず首を傾げる。

けれどもこれ以上これの答えはくれないと分かっている。
なので、別の事を尋ねる。

「まあ、それはともかく、お前大丈夫なのか？」

「何がだい？」

「何がって……………」

ヨルは、呆れながらも一度言い直す。

「マープルの墓参りの事だ。今年こそ行くんだろ」

ルイーズは、ヨルの言葉にポンと手を叩く。

「そうだったねえ、去年の一回忌は都合で行けなかったもんね」

ルイーズの言葉を聞きながらヨルは、眉をひそめる。

「行けなかった、ねえ……」

「何だい？」

「行かなかつたの間違いだろ？」

ヨルは、更に言葉を続ける。

「お前、何かに気付いてるな」

ルイーズは、ふうと背もたれに背中を預ける。

「……まあ推論だけどね。私としては外れてほしい推理なんだけど……」

ルイーズは、それだけ言うとう自分の布団に戻る。

「明日には立つから準備しておいた方がいいんじゃないのかい？」

「待て、最後に一つ」

「何だい？」

「お前の余命あとどれくらいだ？」

「後、三ヶ月だつてさ」

ヨルは、それを聞くと真剣な顔になる。

「直ぐだな」

「まあね」

ルイーズは、寝返り打つとヨルのほうを向く。

「なあ、ヨル。お願い事をしていいかい？」

「……………俺がやだと言つてお前が聞くのか？」

「よくわかつてるじゃあないか」

ルイーズは、ふふと微笑んでそれから口を開く。

「いつかでいいからさ、私と夫の出会いの話をしておくれよ」

「自分でしろ。それぐらい」

「無理なこと分かつてるくせに……………意地悪だねえ」

「当然だ。俺は優しくなんかないんだよ」

ヨルは、確かに断った。

しかし、目の前のルイーズは、にこにこしながらヨルを見ている。

ヨルは、ほほをひきつらせたため息を吐く。

「……………わかった。気が向いたらな」

「なら安心だ。ほら、今日のところは早くお休み」

ヨルは、不機嫌そうに舌打ちをして部屋から出て行く。

「ヨル」

出て行くこうとするヨルをルイーズが呼び止める。

「なんだ？」

「ありがとうね」

「当然だ。もつと感謝しろ」

ヨルは、そう言ってから今度こそ部屋から出て行った。

(不愉快だ………)

目の前の人間が近いうちに消えることも、それに心が揺れる自分も何もかもが気に入らない。

ヨルは、不機嫌さを隠すことなくそのまま部屋に戻ると星を見ると星を見る気分にもなれずそのまま瞳を閉じた。



「ふああ〜……………」

「珍しいね。君が眠そうにするなんて」

「やかましい。いろいろあつて大して眠れなかったんだよ」

アオイ村へと続く道すがら、欠伸を繰り返すヨルにホームズは、首を傾げる。

「おやおや、どうしたんだい？いつにも増して不機嫌そうじゃないか」
ルーズがニヤニヤと笑いながら尋ねてくる。

原因のくせにこの顔。

というより、余命幾ばくと言われたくせにこの能天気。

ヨルのこめかみに青筋が浮かぶのを感じていた。

しかし、どうせルーズに怒りをぶつけても所詮暖簾に腕押し糠に釘、疲れるだけだ。
「……………寝不足なだけだ。んなことより、見えたぞ」

そう言つてヨルは、尻尾で指し示す。

「お、本当だ。ユーフォちゃん、ちゃんと掃除してあるかねえ……………」

ホームズは、少しだけ楽しみのようだ。

辛いこともあったが、それでもこの村はホームズにとって幸せでもあった。それを思い出せると言うだけでホームズの心は軽くなるのだ。ホームズの歩みが少しだけ早くなったその瞬間ヨルの鼻にある臭いが流れる。顔をしかめるヨル。

そんなヨルに構わずホームズは、アオイ村に足を踏み入れた。

「え？」

広がっていたのは、ボロボロの小屋。
アオイハナの残骸とおぼしき枯れ草の広がった畑。

廃墟となったアオイ村だった。



「どういふことだい？これ……………」

ホームズは、想像もしていなかった景色に頭がついていかない。

「どういふことも何も、奴ら村を捨てたんだろ」

ヨルの言葉にホームズは、首を振る。

「ヨル、だつたら、この臭いはなんだい？」

ホームズの顔は険しい。

「おれは、この臭いのもつと酷いものを嗅いだことがある」

そうホームズはこれより酷い匂いをあの地下で嗅いでいる。

「これは……………死臭だ」

ホームズは、そう言つて手近な家の扉を開ける。

そこには、腐敗しきり、手足の形も分からなくなった死体があった。

「ヨル」

「餓死だろうな。元々貧しい村だつたんだろ」

そう元々は、貧しく農作物など何も生えない村だったのだ。

それを神父の小細工によつて見かけだけ豊かになっていたのだ。

ホームズは、手を合わせると部屋からいった。

家から出るとそこには、畔に腰掛け枯れた花を見ているルイーズがいた。その険しい顔をヨルは見逃さなかった。

だが、ホームズが家から出てきたのに気づくと直ぐにいつもの表情を戻し後ろについた土をパンパンと払って立ち上がる。

家の中にあるものが何かわからないルイーズではない。

「……………とりあえずマーブルちゃんのお墓に行くかい？」

「……………うん、そうする」

ルイーズの言葉に頷いてホームズは、マーブルの墓へと歩いて行った。



二人の思い出の場所である池のほとりにマーブルの墓は、あった。

枯れた花や腐ったお供え物がないところを見るとどうやらちゃんと掃除を

くれたらしい。

「ユーフォちゃん、しっかりやってくれたんだねえ……………」

ホームズは、そう言つて買ってきた花を置こうとしてピタリと動きを止める。

「どうした？」

「……………土の色が違う。だけれが、この墓を掘り返したんだ」

「なんのために？」

「そんなのおれが知りたいよ」

ホームズの言葉にルイズがスコップを投げてよこす。

「なら、掘つてみたまえ。それで多分答えが分かるはずだ」

ホームズは、渡されたスコップとルイズを見る。

まるでこうなることが分かっていたかのように渡してきたスコップにホームズは、一

つの考えがよぎる。

「母さん……………何かに気付いてる？」

「正直にいうなら、外れてほしいと思つている」

ルイズの答えを聞くとホームズは、一心不乱に墓を掘り返す。

しばらく掘り進めるとカッパと埋める時に使った棺桶代わりの木箱の感触に辿り着いた。

ホームズは、土を払い棺桶の蓋に手をかける。

そうホームズにもある考えがよぎっているのだ。

だからこそ、この考えだけは否定したい。

そういう思いを込めて棺桶に手をかける。

「……………開けるよ」

誰の返事も聞かずホームズは、棺桶の蓋を開いた。

そして、棺桶の中身を見てホームズは、唇をぎゅつと噛みしめる。

「最悪だ……………予想通りだ」

棺桶の中身は空っぽだった。

いや、正確にいうなら、封筒に入った手紙が一つだけ。

『ホームズさんへ』

ホームズは、震えた字でそう書かれた手紙を拾い裏返す。

『ユーフォより』

ホームズは、深呼吸をして手紙を開けた。

『まず最初にごめんなさい。私は、マープルちゃんのお墓を守れませんでした。マープルちゃん、村の人達の手によって掘り返され持ち去られてしまいました。発見したのはたまたまでした。』

お墓に忘れ物をした私が夜にこっそり行ったら彼らが一心不乱にマープルちゃんのお墓を掘り返していました。

仕方ない、これは、村のためだと言って掘り返すあの人たちを見てしまいました。

ホームズさんの言葉を聞いた私は、すぐに分かりました。

あの人たちは、マープルちゃんの死体を肥料に使うつもりです。

いや、使ったと言った方が正しいでしょう。

その村の人たちには、私のお父さんもいました。

その夜は眠れませんでした。

翌朝、教会の跡地の墓地にいくと、そこにはいくつも掘り返された跡がありました。

怖いのです。とても。普段生活の裏に何か取り返しのことか起こっている気がしてなりません。

あの朝の優しい笑顔の裏で夜に一体どんなことをやっているのか……

おはようと挨拶する村の人たちは、一体いつから、起きているのか？

頑張れ、わたしも頑張るからという村の人たちは一体何を頑張っているのか？
普段いつてきますと言つて出て行くお父さんは、一体どこに行っているのか？
食事まえに手を洗うお母さんの手は一体何で汚れているのか？

もう怖くて恐くて怖くて恐くて、誰も信じられません。

ホームズさん、ルイーズさん、あなたたち二人をお願いします。

どうかこの村の狂気を終わらせてください』

其の終

「……………あいつら、何も学ばないんだな」

ヨルは呆れたようにため息を吐く。

ホームズは、静かに手紙閉じる。

「お前らがどうこうする間もなく、終わってると思うがな」

ヨルは、首をひねる。

「つまり、村の奴らは、懲りもせずアオイハナを作ろうと思い、死体漁りをしていたというのか？」

ヨルの言葉にホームズは、なんの反応も示さない。

「微妙に違う」

ルイズが代わりに答える。

そして、ヨルに質問する。

「ヨル、さっきの家には死体があつたんだらう？」

「ああ」

「あの家、村長の家だ。私は商売の許可を取りに行つたから覚えてる」

そう言うのとルイーズは、ホームズのまえに立つ。

「戻るよ、ホームズ。原点こそ、答えだ」

ホームズは、静かに頷いてルイーズの後を追った。



ホームズ達は再び腐乱死体のある村長の家に入る。

ルイーズは、真つ先に入り死体の顔を確認する。

「前歯の金歯、それに右の奥歯の銀歯……間違いない。村長だ」

確認を済ませるとルイーズは、村長をどかす。

すると後ろに引き出しが出てきた。

片っぱしから引っ張り出すが何も無い。

残るは鍵のかかった引き出しのみだ。

「……そんな……鍵がないんじや……」

「いや、多分これはブラフだ。何せ、この鍵付きの引き出しだけ村長の背中になかった。隠していないものに用は無い」

ルイズは、そう言つて村長の背中の中の位置にあつた引き出しをもう一度引つ張り出す。

「見たまえ、ホームズ。側面と底面で色が違う」

確かに側面と底面とでは微妙に色が違つた。

ルイズは、すぐに引き出しを逆さまにひっくり返し、軽く叩く。

すると、板が一枚落ち、その後何かのノートのようなものが落ちた。

「二重底！」

「やれやれ、エロ本つてわけじゃあなさそうだ」

ルイズは、ホームズにノートを投げてよこす。

「外に出るよ。この臭いのところで長居をするつもりはないからね」

そう言ふとルイズは、外に出る。

ホームズも慌てて外に出る。

ホームズは、ノートを開いた。

とどこどころ塗り潰されていて読み辛いが何とか読み進めていく。

『これから語るのは、私たちの罪だ。私たちのやったことは許されることではない。忘れさせてもいいのだが、風化させ同じことの繰り返しでは始末が悪い。』

だから、ここに記そうと思う。

ヴォルマーノ一家によつて村のからくりは、露呈した。

その事実によくの者達は絶望し、そして、今度こそ誇れる村にしようと頑張った。

そう決意したその年、アオイハナが突然萎れるという事態に陥った。

水も十分に与えているのにだ。

村人たちは、追肥を毎年おこなうのだが、ヴォルマーノ一家によつて肥料の正体が分かつてから使わなかったのだ。

だが、元々土地に栄養のない土地だ。

今まで神父殿、いや、ティーアの用意した肥料でなんとか保っていたのに突然それをなくしてしまえば、こうなるのは当然と言えた。

村人たちは慌てた。なんとかしなくては、と。

だが、あの肥料は、正体が分かった時に全て捨ててしまった。

今更どこにもない。

その時、■■■■■が行った。

墓地から死体掘り返して肥料にすればいいと。

勿論皆反対した。

それは、死者に対する冒瀆だ。第一そんなことはしないようにと誓ったばかりだと。

しかし、■■■■■は、続ける。

それは、生きている子供達を殺し、肥料にしたからいけないのだと。

なら、殺されることなく最初から死んでいたものならいいではないかと。

妙に筋の通った言葉に我々は、言葉も出なかつた。

そんな我々に■■■■■は、さらに言葉を続ける。

死んだものに敬意を払うのも結構だが、生きているものの事を考えるべきだ。今の状

態は死者に敬意とか、そんな綺麗事で乗り切れる場合ではないと。

それに、死んだもの達の考えることは生きている我々の幸せだと。

私たちは、目から鱗の落ちる思いだつた。

私たちは、直ぐに教会の墓地に赴き死体を掘り返した。

幸いこの村は土葬だ。探せば死体などいくらでも出てくる。

しかし、死体を掘り返してから我々にもう一つ壁に直面した。

死体のままでは、肥料に出来ないのだ。

どうにかして、あの液化化したものにしないでならない。

しかし、死体をすり潰す機械はあの火災で使い物にならない。

すると今度は、▲▲▲が口を開いた。

細切れしてそれをすり潰せばいいのではないかと。

こうなるともう村人の総出だ。

男達が掘り返してぶつ切りにする。

女達がそれをすり潰していく。

流石にその間は、子供達を家に閉じ込めておく。こんな様を見せたくない。

そうして三日かけてなんとか肥料を作り上げた。

ところが、若干足りないことが判明した。

しかし、教会の墓地は、もう全て掘り返してしまった。

すると、■ ■ ■ が再び口を開いた。

池のほとりにもう一つだけお墓がある。

村人たちは夜にそれぞれスコップを携え池のほとりに向かった。

墓標には、マープル・ヴォルマーノと書かれていた。

皆、動きを止めた。

この名前を前に先ほどまでと同じことなど出来ない。

しかし、■■■■は、真っ先に掘り返した。

■■■■は、いう。

どうせバレない。

それに、彼女は、この村が好きだった。だったら村のためにと喜んでくれるはずだと。

皆は■■■■の言葉に頷いて掘り返した。

彼女の死体を取り出すとそのまま肥料に変えた。

何とか肥料は、揃い追肥を行った。

だが、アオイハナ達は盛り返すことなく枯れていった。

結局その年の村には、何も収入がなかった。

再び村人達が集まって現状を話し合った。

そう肥料がないというのは、やはり深刻な問題なのだ。

もう教会の墓地に死体はない。

来年以降どうやってもアオイハナを育てる手立てがないのだ。

困った私達が、■■■の方を見る。

打開策を今まででなんども出していた■■■なら、必ず答えを出してくれると。ゆっくりと■■■が口を開く。

誰か、人身御供を立ててはどうかと。

だれか、不治の病に侵された病人や罪人はいないかと。

その瞬間村人たちは再び大反対した。

そんなこと許されないと。

■■■は、それに真っ向から言い返す。

もう一度言うがこの村は綺麗事では乗り切れないと。

すると◆◆◆が言い返す。

なら、お前が誰か見つけてこいと。

すると■■■は、ゆっくりと口を開く。

その■■■から紡がれた名前に人々は、息を飲んだ。

その名前は■■■の娘の名前だったからだ。

皆の言葉が出ないなか、■■■は、言葉が続ける。

マーブルの死体を掘り返すところを見られた。このことを秘密にするなら、あいつを

どうにかしなくてはならないと。

握り締められる拳に村人たちは■■■の覚悟を受け取り、自分もと人の名前を挙げていった。そして、徐々に人身御供の人数も増えていった。

そして集まった人身御供を肥料にかえ、畑に植え、再びアオイハナの苗をまく。

だが、アオイハナ達は再び枯れ始めた。

肥料の栄養が足りないことが原因だということは、村人達誰もが思っていた。

そして、村人たちは再び選定をした。

そして肥料を作った。

しかし、アオイハナは、回復しない。

また村人たちは集まって肥料を選定する。

そして作り出す。

だが、まだ変わらない。

もう一度選定する。

だが、全く花は咲かない。

もう一度選定しようとした。

だが、

もう、村人は残っていなかった。

私一人だけだった。

そこでようやく自分達の過ちに気づいた。
何が間違っていたかなんて今更問うまでもない。

全てだ。

全てが間違っていたのだ。

死者を冒瀆したことも。

誰かを犠牲にすることも。

それをできないのは、綺麗事だと切り捨てることも。

もう食べるものもない。

おそらくこれが読まれているということは私はこの世にいないだろう。

だから記そうと思う。これは、私たちの罪の告白だ』

「そんな………そんなことって………」

ホームズは、膝から崩れ落ちた。

ルーズは、腕を組んで考える。

「たぶんアオイハナが育たなかったのは、肥料が足りないからじゃない」
ルーズは、そう言って組んでいた腕を解く。

「まあ、花じゃあまり聞かないけど、多分、連作障害だ」

「何だそれは？」

ヨルの言葉に頷くと質問に答える。

「同じ土地で同じ作物を続けて育てると病気に罹りやすくなるんだ」

ルーズは、そう言って枯れたアオイハナをむしる。

「例えるならキュウリにかかる病気がある。その病原菌が発生したところに翌年もキュウリを植えれば病原菌がまた発生する。

だから、翌年はキュウリはじゃなくて、別の作物を植えたり、土を消毒したりするんだだけ………」

ルーズは、畑に生えている枯れたアオイハナを一つだけ筆る。

「彼らは、こう言ったね。毎年このアオイハナを育ててるって」

「ああ、言っていたな」

「おまけに与えてる肥料は、過剰と言ってもいいぐらいの栄養の肥料だ」
そう言ううと草を捨てる。

「病気にならないほうがおかしい」

「なるほど」

「まあ、仮に連作障害が起きなくとも花は育たなかつたらうけどねえ」

「どういうことだ？」

「あの肥料は、死体を潰して腐らせたものだ。お墓から掘り起こしたのならまだしも、出来たばかりの死体じゃ無理だよ」

ルーズの説明が終わると風が一筋吹く。

「結局、滅ぶべくして滅んだということか……」

何かを犠牲に成り立つものなどない。

だが、それを仕方ないと何処までも許容して行ってしまうえば取り返しのつかないことになってしまう。

犠牲を認めるのが大人なのではない。

犠牲を出さないうよう努めるのが、大人なのだ。

安易に犠牲を生み出すことは仕方ないと諦めてしまうことは、犠牲という免罪符に逃げてしまうことは、

きつと間違いなのだろう。

彼らは結局、犠牲という免罪符に逃げたのだ。

これが、ことの顛末。

いつまでも変わらない人間にヨルは、大きくため息をついた。

しかし、対照的に崩れ落ちたままホームズは、動こうとしない。

ヨルは、不思議そうに首をかしげる。

「どうした？」

「……………彼らに肥料を使うという選択肢を与えたのは誰だ？」

絞り出される言葉にヨルはノートを見る。

「この■■■■じゃないのか？」

「違う」

ホームズの声は震えている。

恐れている。

慄いている。

一体何に？

ルイーズは、顔をしかめている。

「そいつだって、肥料が人間だって知らなければ、こんな事しなかった」

ホームズは、震えながら続きを言おうとする。

だが、代わりに出てくるのは吐瀉物だ。

「おい………」

ヨルの言葉に構わず、ホームズは声を絞り出す。

「おれが、あの時教えてしまったんだ……あの時、池のほとりで責められた時

………」

その言葉にルイーズは、顔を押しさえる。

ルイーズは、これに気付かない事を祈っていた。

そう直接的な原因は彼らだ。

だが、間接的な原因は目の前にいる崩れ落ちている自分の息子、ホームズだ。

どんなに言い訳しようと、ホームズがこの事実を教えなければこんな事は起きなかつ

た。

少なくとも殺し合いなんて事は絶対に起きなかった。

この虐殺の犯人が村人なら、文字通り真犯人は、間違いなくホームズだ。

「だって、仕方ないだろう！彼らは、人を犠牲にしていたんだ！！知らないなんてそんな事許されるわけない！！だから伝えたんだ！！言葉にしたんだ！！おれは、間違つてない！！正しい行いをした！！」

張り裂けんばかりのホームズは、言葉を吐き出した。

ホームズの言葉は、虚しく山にこだまする。

「……………うよね」

叫び終えたホームズは、ポツリと呟いた。

「ちゅー」

噛み締めた口からは、血が流れ、拳から血が流れるほど強く打ち付ける。両手はも血で真つ赤になっている。

「おいよせー」

ヨルの言葉で打ちつけられる拳が止まる。

俯かれたさきに、涙と血がシミを作る。

「……………こんな事もう起こさない……………」

静かにホームズから、響き渡るような声が紡がれる。

そのあまりに静かなホームズにヨルは、背筋が凍える。

「自分の為に、誰かを犠牲になんてさせない」

ゆつくりとホームズは立ち上がり、それを側でみていたルイーズの顔には影が出来る。

「例えば真実でも誰かが傷つくぐらいならおれが、背負う。罪も、傷も、人生さえも、背負ってやる」

廃墟となった村を睨みつける。

「いくらでも、恨まれてやる!!責められてやる!憎まれてやる!!」

それでこの光景を見なくて済むのなら、いくらでもっ!!」

ちよつとずつ狂っていくホームズにヨルは、言葉が出ない。

「おい、ホー……………」

呼びかけようとして、隣にいるルイーズを見る。

終始暗い顔をしているルイーズを見て、ヨルは、今までの態度が繋がった。

「お前、これ全部分かってたのか？」

ルイーズは、悲しそうに頷く。

「私は、母親失格だよ」

そう言つて凜と立つホームズを見る。

「ねえ、ヨル。もう一個お願い」

ヨルは答えない。

無言を肯定と捉えると言葉が続ける。

「ホームズが今ここで選んだ生き方は、いつか必ずホームズ自身を深く傷つける」

ヨルは尻尾を振りながらルイーズの言葉を聞く。

「だからね、その時が来たらあの子を支えてやってくれないかい？」

「やだね」

「即答だね。でもさ、」

そう言つてポンと頭を軽く撫でる。

「君たちは一連托生だろう？この先壊れた片割れと一緒に歩みを進めるつもりかい

「？」

ヨルは、顔を顰める。

「お前、それはお願いではなく、脅迫と言うんだ」

「交渉と呼んでほしいね」

ヨルは、覚悟を決めたホームズの背中を見つめる。

凜として立っっているながら何故か今にも崩れそうなほど脆いその立ち姿に、ヨルは舌打ちをする。

封印を解かれた時からずっと思っていたことだ。

とんだハズレくじを引いたと。

だが、その思いは変わった。

ハズレくじではない。

(大凶だ………)

ヨルは静かに頷く。

「分かった。受けてやる。その代わりその時が来ないよう忠告をしてやる」

「いいよ。寧ろ頼みたいぐらいだ。でもきつと、あの子は聞かないよ。そして、あの子方に傷つけられることがやってくる」

そう言ってゆっくりと立ち上がる。

「頼むよ、ヨル」

いつになく真剣な母親の瞳で射抜かれたヨルは頷く以外の選択肢はなかった。

死の香りが漂うこの村でホームズは、静かに決意を固め、そしてヨルもまた願いを聞き入れた。

ホームズの始まりの物語は、ここまでだ。

大切な家族のような人間は殺され、死体も残らず、挙句村人を結果的にとは言え、殺すこととなった。

今でもその傷は癒えることはなく、十字架は消えることなくホームズの生き方を縛り

続けるだろう。

ホームズとヨル

愚者の耳に念仏

「……………ホームズのその腰にある小袋は、マープルから貰ったものだったんですね……………」

ヨルから語られた長い話を全てを聞いたエリーゼは、ポツリと言った。

ホームズが大事に使っているその小袋は、大切な家族から譲り受けた大切なものなのだ。

エリーゼは、その後俯きながら聞き辛そうに口を開く。

「それで……………ホームズのお母さんは……………」

「死んだ。二年も前の話だ」

ヨルの言葉にエリーゼは、思わず息を飲む。

ローエンは、髭を触る。

「アオイハナの村の出来事は、何年前でしたっけ？」

「二年前だ」

「……………タイミングが悪いですね……………」

母親の死とアオイ村の壊滅の真実。

その両方は、十六の子供が背負うには重過ぎた。

そして、壊れるには十分過ぎた。

エリーゼは、ぎゅつとスカートを握り締める。

「……………アオイハナを作らないという選択肢は、なかったのでしょうか……………」

そう、そこで諦めればよかったのだ。

ホームズ達に誓ったように約束したように胸を張れるような村を作るためには、まず

アオイハナから切り捨てなければならなかったのだ。

だが、彼らはそれをやらなかった。

約束を破り、今で通りの生活を行おうとした。

エリーゼの言葉にヨルは頷かない。

「無いだろ。それが人間だろ？」

それどころかヨルは意地の悪い笑みを浮かべる。

ヨルの言葉にローエンは、静かに頷く。

「二度豊かな生活に慣れてしまえば、そこから元の貧しい生活に戻ることは困難です」

エリーゼは、ローエンの言葉に俯くしか無い。

そして、もう一つエリーゼが思ったことを口にする。

「……………ホームズが言っている事間違っていないと思います」

ヨルの耳がピクリと動いた。

「だって、悪い事をしたのに、酷い事をしていたのに、それを知らないなんて良くないです」

ヨルはこくりと頷く。

「その通りだが、問題はその言葉がそういう……………そうだなお前らの言葉を借りるなら、『良心』から出た言葉じゃない、という事だ。ホームズは、それを建前だと気付き自分を騙す事なく、受け入れた」

ヨルは、ベッドに横たわるホームズを見る。

「元々、本当の事を言わない奴だったが、この出来事以降更に悪化した。何度も止めろと言ったが結局このザマだ」

鼻を鳴らしてヨルは、牙を見せる。

「こういう自己犠牲ってのは、人間達の間では、美しいのか？好ましいのか？正しいのか？」

ヨルの言葉にエリーゼは、答えることができない。

「……………エリーゼさんに言っても仕方ありませんよ。それは、ホームズさんに言うべきです」

「それもそうか」

ローエンに静かに諫められヨルは、尻尾をくるりと丸める。

自己犠牲、払われる代価にこれ以上はないだろう。

それをやって報われればいい。

だが、報われるばかりではない。

恩を仇で返すなんて言葉が存在するのが、その証拠だ。

その犠牲の果てについてくるのが感謝だとは限らない。

「……………ホームズ……………」

ここまで頑張っていたホームズを待っていたのは、この結果だ。

エリーゼは、堪えきれなくなり思わず俯いた。

その時、ホームズが僅かに動いた。

『「ホームズ!!」』

「ホームズさん！」

二人は思わず立ち上がりホームズに呼びかける。

「……………エリーゼ？ローエン？」

ホームズは、ゆつくりと起き上がる。

起き上がったホームズは、すぐに自分の顔に巻かれた包帯を触る。

「……………そつか……………夢じゃ無いのか……………」

ホームズの瞳には、エリーゼの顔もローエンの顔ももう映らない。

先ほどからホームズに届くのは二人の声と、そして、

「……………起きたな」

「……………ヨルだね、この声は」

ヨルだけだ。

ホームズは、包帯の上から自分の目を触る。

「あの後、みんなどうなったんだい？エリーゼ達の声しか聞こえないけど。合流した

んじゃないのかい？」

「違う。合流してない。そもそも、ここは、ハ・ミルじゃない」

「ハ・ミルじゃない？じゃあ、ここは何処だい？」

「マープル・ヴォルマーノのいたあの廃村だ」

ホームズは、そこで動きを止める。

目の見えないホームズ相手なら幾らでも隠しようがある。

だが、ヨルはホームズにそれをしない。

ホームズの為に優しい嘘なんてつかない。

何も隠すことなく言ったヨルにエリーゼとローエンは、思わず息を飲む。

ホームズは、それを聞き逃さない。

辿り着いた可能性にホームズは、顔から血の気が引く。

ぎゅつと握り締められている布団は、シワになる。

「ヨル、君、まさか……………」

「ああ、話した。この村のことも母親のこともマープル・ヴォルマーノのことも

……………お前の罪のことも」

「何でだい…………止めろと言ったはずだよ、おれは」

震える声には、今のホームズの全てが詰まっていた。

「いつか話すからと!!そう言っ」

「だったら、いつ話すんだ」

声を荒げるホームズの言葉をヨルが間髪入れず遮る。

「答えてみる、ホームズ。お前はそれをいつ話すつもりなんだ」

ヨルの言葉にホームズは、答えられない。

その返答など最初から分かっていたようだ。

「本気に本気で返せないくせに何を偉そうに……」

「——っ!!」

一番触れて欲しくないことを現場にいたヨルに触れ回れてしまった。

しかもよりにもよってこのタイミングで。

ホームズは、ヨルに向かって手を伸ばそうとする。

だが、視界というものが存在していないホームズは、そのままベットから落ちてしまった。

「ホームズ!!」

慌ててエリーゼとローエンが駆け寄る。

「いつものようには、いかないみたいだな」

床に這いつくばるホームズをヨルは机の上から見下ろす。

「お前が選んだ生き方の結果だ。せいぜい嘔み締めてる」

「好き勝手言いやがって……」

「人の忠告無視して好き勝手生きてきた結果がこれだと言っているんだ」

ホームズとヨルの間に険悪な空気が流れる。

きっと瞳があればかつて無いほどの怒りを込めた目で睨まれていただろう。そんな彼らをローエンとエリーゼは、おろおろとしながら見ている。

ホームズは、何とかベツトにもどる。分かつているのだ。

ヨルは、何回も忠告していたのだ。

ミラだって、

レイアだって、

マールウだって、

だが、それでもホームズは、この生き方を選んだ。

人々の忠告を無視して今の状態になっているのだ。

「……………分かつてるよ、それぐらい」

ホームズは、弱々しく今にも掻き消えそうな声でそう告げる。

「……………じゃあ、おれは間違っていたのかい？」

「……………知るか。だが、少なくとも正解じゃないだろ」

ヨルはその金色の瞳で見下ろしながらそういった。

その言葉に先ほどまで険しくさせていたのとは、打って変わってホームズは、沈んだ表情で俯く。

「ホームズ……………」

エリーゼの心配そうな声にホームズは、慌てて顔を上げる。

「そ、それよりこれからどうしようか?」

無理矢理出されたホームズの、明るい声に二人は渋い顔をする。

だが、ホームズには見えない。

「とりあえず、ジュード達と合流しようか?レイア達がどうなったかもわからないし知りたいしそれにローズのこと心配だしアルヴィンも心配だし……………うん。とりあえず調べたいことがあるんだけどこの目じや無理だし君たち頼むことになるかな?」

まあローズと出会うと戦いになっちゃうだろうけど探さないといいわけにはいかないよね。

「どうだい?先ずは彼らと合流しないかい?そうすればきつと……………」

「ホームズさん」

端から見ていれば無理しているのが丸わकारいの喋りにローエンが我慢できなくなり、遮った。

「難しいことは、明日にしましょう」

「うん……………」

「ヨルさんもそれでよろしいですか?」

「問題ない」

彼らは、そう返事をすると部屋から出て行った。

「あ、ホームズさん。何かあつたら言ってくださいね」

部屋を出るまえにローエンが言うのとホームズは、少し微笑んで頷いた。とても寂しそうな笑顔で。



「……………ここが、今の村？」

ホームズは、村の中心にいた。

村には、人がいて皆意気揚々と働いている。

「あれ？何でみんな働いているんだろう……………」

そして、ホームズは更に自分の顔の変化に気づく。

「あれ？包帯がない……………目が見えてる」

驚いて自分の手のひらを見る。

確かに見えている。

「何で？」

手から村へと視線を移す。

すると先ほどまで元気に働いていた息絶えていた。

身体は黒い泥へと変化していく。

「そんな!!なんで!!」

「全部貴方のせいよ、ホームズ・ヴォルマーノ」

後ろを振り返るとそこには血だらけで二刀をだらりとぶら下げたローズがいた。

「ローズ……………!」

「この不幸の連鎖を断ち切る」

ローズの刀が真っ直ぐホームズに向かって振り抜かれた。



「つ!!」

ホームズは、跳ね起きた。

慌てて身体を触るが血は出ていない。

汗で身体に張り付く衣服が気持ち悪い。

息は荒く、心臓は早鐘を打っている。

「夢か………」

こここのところ見続けた悪夢とは、また別の展開にホームズは、ぎゅつと手を握る。

もうずっと見続けていたが、それでもこればかりはいくら数をこなしてもなれない。
い。

寝てるはずなのにホームズの身体から疲れが抜けない。

フラッシュバックする悪夢の景色にホームズは、くしゃくしゃと頭を抱える。

こうでもしていないと本当におかしくなってしまう。

「ホームズ」

突然声をかけられホームズは、肩をびくと動かす。

「えーっと、エリーゼの声だよね？どうしたんだい？こんな夜中に」

「阿呆。とつくに朝だ」

「え、だって……………」

そこまで言つて目元に巻かれた包帯を感じる。

ホームズの瞳に光がささなかつた為、全くわからないのだ。

「そうか……………そうだったねえ……………」

顔も知らない、記憶もない父親との唯一の繋がりが完全に消えてしまった。

しかも、それを消したのは瞳の色を褒めてくれたローズだ。

夢で見た景色も文字通り夢幻だ。

「ホームズさん、大丈夫ですか？だいぶうなされていたように見えました……………」

「え？ああ、だい……………」

返事をしようとするホームズの脳裏に先ほどの夢がフラッシュバックする。

「……………じょう……………」

次は、マープルとの別れ、そしてローズとの戦闘だ。

ないはずの両目が熱い。

「……………いふ……………」

『全然大丈夫に見えないぞー!!』

ティポの言葉にホームズは、困ったように弱々しく微笑む。

明らかにいつものホームズではない。

父親との唯一の繋がりである瞳が閉ざされ、視界が消えているくというのにいつものように振舞おうとしている。

一生懸命普通ないつも通りのフリをしている。

それが見えていて痛々しい。

見ている方が辛い。

「ヨル……………」

エリーゼは、思わずギュッとスカートを握り締める。

「私じゃ治せませんでした。ヨルなら出来ますか?」

エリーゼの精霊術を持ってしてもホームズの目は元にもどらなかつた。

心の傷は、治せない。

だが、身体の傷は治せるかもしれない。

実際、ローズに貫かれホームズで切り裂いた腹部の傷は治したのだ。

後、治すべきはホームズの目だ。

しかし、エリーゼでは治せなかつた。

だから、ヨルに聞いたのだ。

ヨルが規格外の存在は皆知っているし、封印を解く時に願いを叶えるという事を行っている。

そんなことありえないことぐらいわかっている。

しかし、期待を込めて尋ねるエリーゼにヨルは、返答する。

「出来るぞ。視力を戻すぐらい」

『「……………え？」』

場の空気が凍りついた。

ヨルの言葉をゆっくりと反芻する。

真つ先に反応したのは、エリーゼだった。

「どうしてそれを先に言わないんですか!？」

「先にアオイ村の話をしろと言ったのはエリーゼだろ」

ヨルは、欠伸をしながら言う。

「なら何で今まで黙っていたんですか!!」

「今まで聞かれなかったからだ」

ヨルは、詫びれもせず続ける。

エリーゼは、思わず目眩起こして倒れそうになった。

何が化け物だ。

何がシャドウもどきだ。

ホームズのそっくりさんではないか。

まあ、がくつと疲れたがこれで一件落着だ。

後はヨルに任せよう。

「大丈夫かい？エリーゼ？」

『自分の心配をしろー!!』

疲れ切ったエリーゼに代わりティポがホームズに注意する。

「まあ、戻すに当たっていつておくが、まず一つ、瞳の色までは戻らない」
ヨルは、そう言いながら自分の瞳を尻尾でさす。

「戻し方としては、俺の視力の分身を移すようなものだ。だから、瞳の色は俺と同じ金色だ」

つまり、視力は回復すれど、自分と父親の繋がりである瞳の色は、戻らないのだ。

ホームズは、僅かに顔を俯ける。

「でも……………」

「そして、もう一つ」

ホームズの決意を断ってヨルは言葉を続ける。

「お前の記憶から瞳が碧か、つたという記憶が消える」

原価交換

「どういふことですか？」

「言葉の通りの意味だ。視力が戻る代わりに瞳の色は、金色になり、瞳の色が碧かったという記憶が消える」

エリーゼの質問にヨルは、淡々と答える。

「少し説明してやる。まず、こいつの父親の瞳が碧かったという記憶は消えない。だが、ホームズの瞳の色が、碧かった、そしてそれが父親との繋がりだという記憶が消える」

ヨルはそう言つて尻尾を裂き二つにする。

「更にこいつの小ムスメがホームズをイジメから救つたと言う記憶は残る。だが、小ムスメが瞳の色を褒めたという記憶は消える」

さつきとは別の意味で凍りついた世界にヨルは、更に言葉が続ける。

「それでも視力を戻したいか？」

「それは……………」

ホームズは、答えられない。

ローエンは、相変わらず渋い顔をしている。

「私たちの記憶からホームズさんの瞳の色が碧かったという記憶は消えるのですか？」

「いや。ホームズだけだ」

それからヨルはすつと目を細める。

「だが、お前たちがいくらホームズズの瞳の色が碧かったと伝えてもホームズは、それを自覚することはない。」

例えるなら、小説の朗読を受けているようにしか感じない。

何せ、自分のこととして感じられないんだからな」

ローエンの疑問を先回りしてヨルは告げる。

エリーゼは、淡々と言葉続けるヨルを睨みつける。

「どうして、そんな意地悪を言うんですか!!」

エリーゼの言葉をヨルはつまらなさそうに聞いている。

「お前は、飯屋で出てくる料理にどうやって値段が付けられているか知っているか？」
ヨルは、尻尾を突きつけて話を進める。

「マーボーカレーなら、豆腐を買った時の金額、スパイスを買った時の金額、白飯を買った時の金額、そしてその他諸々の経費と儲けを出して金額を出す。これを意地悪と

「いうのか？」

ヨルは更に続ける。

「寧ろ、俺は優しいくらいだ。原価分の値段しか要求してないからな。ついでに言うなら最初からデメリットを提示しているだけありがたく思え」

そう言つて尻尾を元の長さに戻す

「大切なものは、目に映らない、だったか、昔どこかで聞いた」

ヨルはそう言うと言葉を続ける。

「思い出というのは、それだけで価値がある。今を生きる力になる」

ヨルは、そう言つてホームズに目を向ける。

「だからこそその代償だ。その意味をよく考えるんだな」

ホームズは、自分の両目を包帯の上から触ると動き止めた。

「少し………考えさせて……二人と、それとヨル。悪いけど席を外しておくれ」

ローエンとエリーゼは、静かに頷く。

「わかりました。ホームズさん、何かありましたら、声をかけて下さいね」

「うん、わかった」



「……………」

ホームズは、ここに来てからすっかり包帯を触るのがくせになっていた。

ホームズの碧眼は、顔も知らない、記憶にもない父親との繋がりであり、証拠だった。だが、ローズの手によって潰されその瞳に光はともることはない。

戻してしまえば、父親との繋がりであった碧眼という記憶も消されてしまう。

ローズの事を考えず、クリステイ一家の真実を伝えていたらこんな事には、ならなかったかもしれない。

だが、ホームズの選んだ生き方はそれを許さない。

『捨ててしまったらどうですか？そんな生き方？』

声のした方を振り返るとそこには泥にまみれたアーティーがいた。

「アーティー!!」

『恨んでしましましょうよ。憎んでしましましょうよ。恩に報いない、ローズ・クリステイーを』

「黙りたまえ！おれは……………」

身体を震わせ否定するホームズを泥にまみれたアーティは、高笑いをしている。そして、全身が黒い泥へと変わり消滅してしまった。

「幻覚……………」

ホームズは、ギユと布団を握りしめる。

いくらでも機会は、あった。

しかし、ホームズはそれら全てを潰して今の結果を選んだ。

結局誰のせいかと聞かれれば犯人は、ローズ、真犯人は、ホームズ。

結局ここでもホームズのせいなのだ。

当然と言えば当然だ。

ホームズは、こうなるように動いていたのだ。

だったら、思い通りなつたと手をあげて喜んでもいい。

ホームズは、熱い両目を静かに撫でる。

「……………恩をかえせと言うつもりはないけれど……………仇で返せと言った覚えもないんだけどなあ……………」

『やあやあ、それはやっぱり勝手というものだよ、バカ息子』

突然暗闇にぼんやりと浮かぶルイズの姿にホームズは、戸惑う。

「また、幻覚か……目が見えないのに幻覚を見るってのも変な話だなあ……」

『まあ、幻覚が見えるぐらいには、参っているんだらうねえ、そこぐらいは認めたまえよ。ローエンさんにエリーゼちゃんだっけ？も心配するぜ』

「そんなことより、勝手ってのはどういうことだい？」

幻覚ルイズの発言を無視して尋ねるホームズに肩をすくめる。

『やれやれ。君の生き方は、自己犠牲ってのは、文字通り自ら己を犠牲にすると書くんだよ』

肩をすくめる幻覚ルイズは、更に言葉を続ける。

『君は自分を犠牲にしてローズちゃんを傷付かないようにした。いいかい、その目は犠牲になったんだ。犠牲の先に望むのは結果のみ。結果としてローズちゃんは、傷付かずに済んだ。後の恩だの仇などは、ただの付属品さ』

「厳しい言い方……もしかして……」

『私は止めろと言った生き方を君は選んだんだ。それでこのザマ……そりゃあ怒りたくもなるよ』

「あ、やっぱり怒ってたんだ」

『多分みんな怒ってるぜ。いや、怒るぜと言った方が正しいかな?』
「ん?」

『いやいや、もしかしたらの話』

『そう言うところルイズは、フンと伸びをする。』

『まあ、それはともかくだ。ホームズ。君、論点をずらすんじやあないよ。君が考えるべきは、生き方じやあない。ヨルに視力の回復を願い碧い瞳の記憶を消すか?それとも記憶を残して視力を戻さないか?ということだ』

ルイズは、ホームズを指差す。

『要は、君にとつて何な大事か選べることさ』

ホームズは、再び押し黙った。

『さて、私はそろそろ行くよ』

「え?いや、もうちよつと………」

ホームズが慌てて止めようとするルイズは、ふふと笑ってそのまま消えていった。

「母さん!!」

しかし、全く反応はない。

どうやら完全に消えてしまったらしい。

「幻覚、ねえ……………」

何か答えを、自分望む答えをくれるかと思ったら全くそんなこともない。ただ現状だけの再確認をさせて去ってしまった。

「どこまでも勝手な話だねえ……………全く」

ホームズは、ため息をつく。

結局どちらを選んでも同じだけのデメリットがあり同じだけのメリットがある。迷うホームズの脳裏にヨルの言葉が蘇る。

『大切なものは目に見えない』か……………」
なら答えは決まっている。

後の問題は覚悟だけだ。

人と猫

「ホームズさん、辛いでしようね」

ローエンの言葉にエリーゼは、頷きヨルを睨む。

ヨルは、鬱陶しそうにため息を吐く。

「寧ろ、聞かれても無いのにちゃんとデメリットを話したんだ。文句を言われる筋合いこそないぞ」

エリーゼは、口をへの字にすると黙ってしまった。

『でもさあー、何とかしてあげたいな………このままじゃホームズ可哀想だよー』
ティポの言葉にローエンは、静かに頷く。

「ヨルさん、他の方法は？」

「ない。俺に頼るんだつたらそれしかやりようが無い」

即答をするヨルにローエンは、顎髭を触って考え込む。

その時、エリーゼがポンと手を叩く。

「そうです！イル・ファンです！イル・ファンなら、ホームズの目を治せるお医者さんがいるかも……です!!」

『さすが、エリーゼ!!』

ティポは、横で飛び跳ねている。

代わりにヨルは、洗面だ。

「阿保。切り裂かれた目をどうやって治すんだ」

「諦めるんだったら、全部やってからです!!」

何てこと無さそうにいうヨルにエリーゼは、詰め寄る。

その迫力に困ったヨルは、助けを求めるようにローエンを見る。

ローエンは、そんなヨルを面白そうに笑いながら見ている。

「そうですね。とりあえずは、それで行きましょう」

「……………はあ……………」

ヨルは、本当に疲れたようにため息を吐く。

そして、髭がピクリと動いた。

顔を険しくさせるヨルにローエンが怪訝な顔をする。

「ヨルさん？」

「おい……………来るぞ!!」

ヨルの鋭い声と共に壁が吹き飛んだ。

立ち上る砂埃の中から人影ゆらりと動く。

「ごきげんよう」

砂埃が晴れるとそこには、ミュゼが佇んでいた。

ミュゼは、断界殻シエルを知った者を始末する使命を持っている。

だから、いつきてもおかしくはなかった。

だが、問題は、よりにもよって今来たということだ。

「お前、空気が読めないって言われたことあるだろ」

「あなたほどじゃないわ」

ヨルが、憎まれ口を叩いている間にローエンとエリーゼが武器を構える。

そんな二人を見てミュゼは、薄っすらと微笑む。

「へえ、あなた達勝つつもりなの？」

「当然です」

ローエンが細剣を構える。

「これでも？」

そう言つてミュゼが見せた髪には、ティポが巻きついていた。

「ティポ!!」

『エリーゼー!!』

助けを求めようにも再び髪で締め上げられてしまう。

「確か、そこのお嬢さんはこのお人形がないと何も出来ないのよね？」
突然の出現、そして、的確な一手。

それにより一気に不利な形勢に追い込まれた。

ローエンは、今危惧するのは、ホームズだ。

幸い、ホームズの存在はバレているとしても視力を失っていることはバレていない。
バレてしまえばまず間違はなく真つ先にミュゼは、ホームズを狙う。

「エリーゼさん、ヨルさん、ホームズさんを連れて逃げて下さい」

ローエンから出された提案にエリーゼは、目を見開く。

「でもー！」

「大丈夫です。直ぐに私も後を追います。それに……」

そう言っただけ微笑む。

「ハ・ミルで私たちを助けてくれたのはホームズさんでした」

ローエンの言葉にエリーゼは、ハツとした顔をする。

「……………！いくぞ、エリーゼ」

ヨルに急かされエリーゼは、無理矢理領き走り出した。

「あら？ホームズに援軍を頼まないの？」

「あなた一人ぐらいどうってことありませんよ」

その言葉に僅かにミュゼの眉がピクリと動く。

そんなミュゼにローエンは、不敵な笑みを浮かべる。

「人間を舐めないことです」

ローエンの細剣がミュゼに向かって振るわれた。



「ホームズ!!」

肩にヨルを乗せたエリーゼがホームズの部屋に飛び込んできた。

目の見えないホームズは、突然のエリーゼの大声にビクッと肩を震わせる。

「どうしたんだい？エリーゼ？さっきからなんかえらい物音が聞こえるけど」

「ミュゼが来ました……………今、ローエンが戦闘中です」

「!?」

驚いている間にホームズの右手を掴む。

「急ぎますよ、ホームズ！」

「え? いや? うお!!」

ホームズの言い分など聞かずエリーゼは、そのまま走り出した。

エリーゼの手を頼りにホームズは、走り続ける。

目が見えないなりに何とかついて行こうとするが、どうしても上手くない。

空き家から出たところで転んでしまった。

「……………ぐっ…………」

「ホームズ!!」

エリーゼが慌てて助け起こす。

「エリーゼ、おれのことはいいから……」

「ダメです! 何も良くないです!」

エリーゼは、続きのセリフを言わせない。

ホームズが言いそうな台詞ぐらいもう分かる。

ファイザード沼野でもホームズは、同じことを言っていた。

「これから、ホームズには、イル・ファンに行ってもらいます!!そこで、ヨルの手を

借りずに目を治してもらうんです!!」

エリーゼは、ホームズの手を取って走り出す。

後ろで聞こえる戦闘音に歯を食い縛る。

「だから、言わせません!!今度は、私が友達を助ける番です!!」

ホームズの言いたいことなんて絶対に言わせない。

そんな強いエリーゼの剣幕にホームズは、何も言えないでいた。

「美しい友情ね、お嬢さん」

突然声が聞こえた。

思わずエリーゼが空を見上げるとそこには、ミュゼが頭上でにやにやと笑っていた。

「——っ!!」

エリーゼが慌てて杖を構える。

しかし、ミュゼの髪の方が速い。

伸びるミュゼの髪にエリーゼは、吹っ飛ばされた。

「エリーゼ!!」

突然消えた手の感触とドサリと倒れこむ音にホームズは、思わず呼びかける。

エリーゼは、飛ばされた廃墟の壁に背を預けながら、辺りを見回す。

「……………そんな……………ローエンは？」

「ああ、彼なら……」

そう言うとローエンを投げ出す。

精霊術で縛られているローエンは、身動きが取れない。

ヨルは、それを見つけるとローエンに駆け寄ろうとする。

しかし、それをミュゼの髪が阻む。

「逃がさないわよ」

その言葉と共に今度はホームズが吹き飛ばされた。

「ぐっ……………」

地面に投げ出されたホームズは、何とか立ち上がろうとする。

その時、ホームズの顔の包帯をミュゼは、見つけた。

「あら？ ホームズ、もしかして、目が見えないのかしら？」

その言葉にホームズは、身体が強張る。

「おかしいわね。私と対峙したときは、無事だったと思うけど、もしかして、アルヴィンにでもやられたのかしら？」

ホームズは、その言葉に反応する。

「どうして、アルヴィンがおれ達を襲ったことを知っているんだい？」

「簡単よ。私がアルヴィンに襲うように頼んだんだから。エレンピオスへ帰してあげることを交換条件にね」

ホームズは、ぎりつと歯を食い縛る。

「お前、やっていいことと悪いことがあるだろう……」

故郷に帰りたがっていたアルヴィンとその母。

母の方は死に、ミラを見殺しにエレンピオスに行こうとしたがその道は断られた。

そんなアルヴィンにこの大精霊は、あろう事かやってはならない交換条件を出してきただのだ。

「許せない、いや、許さない」

起き上がろうとするホームズをミュゼは、笑う。

「許さないですって?」

そう言つて再びホームズに向かつて髪を叩きつける。

「ガッ——っ!!」

「そんな状態で何が出来るのかしら?」

腹部に衝撃が走る。

治りかけていた傷が開きホームズの腹を血で染める。

「ホー………ムズ!!」

溢れ出る血を見てエリーゼが叫ぶ。

目は見えない。

だが、エリーゼもローエンも危ない事は分かる。

何とか立ち上がり声を頼りにミュゼに蹴りを放つが虚しく空振りをしてしまう。

そこをミュゼの髪が襲う。

「ぐっあ………!!」

「やれやれ、無様ね」

エレンピオスの血を引いているそして、目が見えないという理由から徹底的にホームズを攻撃するミュゼ。

その時、ヨルとローエンを隔てていた髪が少し間が空く。

ローエンは、その隙にヨルに呼びかける。

「ヨルさん、ホームズさんを運んだ形、今ならなれますか？」

「二応手段は、ないわけじゃない。だが、」

そう言つてローエンを見る。

「お前ら三人を背負つては、無理だ。せいぜい一人か、二人だ」

「なら、エリーゼさんとホームズさんをお願いします」

ヨルは、目を細める。

そんなヨルを見てローエンは、ふふふと微笑む。

「ジジイの役目は若者に未来を繋ぐ事なんですよ」

「……………わかった」

ヨルは、静かに頷くとホームズの元へと走る。

その瞬間、ホームズと共にヨルも吹き飛ばされた。

「がっ！」

「ぐっ!!」

ホームズとヨルは民家の壁に叩きつけられた。

そのまま壁を突き破り民家の中に投げ出される。

隣から聞こえたくぐもった声にホームズは、顔を向ける。

「その声、ヨルかい？」

「ああ、そうだ」

ヨルは苦しそうにそう言っていると、ホームズの方を見る。

「おい、提案があるんだが……」

「いや、君の提案を聞くつもりはない」

ホームズは、ヨルの声のする方に向かって手を出して押し黙らせる。

「代わりにおれの提案を聞きたまえ」

さつきまでの吹けば消えてしまいそうな弱々しさはなかった。

あるのは、いつものように厄介な覚悟を決めた時に聞く、あの声だ。

ホームズは、そう言って自分の包帯を触る。

「ヨル、おれに視力をよこしたまえ」

ヨルは、それを聞いた瞬間、目を見開いた。

「お前……………正気か？」

「勿論」

「言つたはずだぞ、瞳が碧かったという記憶が消えると」

「言われたね」

淡々と返すホームズにヨルは苛立った。

「お前より長く生きているから言つてやる!! 思い出つていうのは、それだけで宝だ！ それをお前は捨てるというのか！」

「そうだよ……………というか、珍しいねえ、おれの命が関わっていないのにそんなに君が必死なんて」

普段、殺されなければいい、という考え方のヨルにしては、よく喋る。

というより、説得をしている。

ホームズの軽口にヨルは複雑そうな顔をする。

「思い出つていうのは、俺たちぐらい長く生きてるととても重要なものなんだ。お前だつて目の前で金を燃やしてる奴がいたら流石に止めるだろ」

ルイズとの思い出、アオイ村の思い出、封印される前に眺めた星々の思い出、どれもヨルにとつて大切なものだ。

だから、それを目の前で捨てようとするホームズが信じられないのだ。

自分が大切にしているものをあつさり捨てようとするホームズが気に入らないのだ。『大切なものは目に見えない』俺はそう言つたはずだぞ」

ヨルの諭すような口調にホームズは、俯いたまま口を開く。

「馬鹿言え」

それから、いつものあの不敵な笑みを浮かべる。

「大切なものだから目で見たいんじゃないか」

ホームズにとって大切なもの。

得るたびに失ってきたものが、今、ホームズには確かにある。

見ていたいのだ。

レイアも、

ジュードも、

エリーゼも、

ローエンも、

不本意ながらヨルも、

叶うなら

ミラも、

ローズも、

アルヴィンも、

ホームズが命を賭けて戦う大切な人たちだ。

ホームズは、それが見たいのだ。

エレンピオスだつてホームズは、見たい。

見たい見たいというその欲望、好奇心。

そう立ち上がった理由は例え両親でもホームズの本質はそこにある。

ヨルは、それを聞くとため息を吐く。

こうなつてはもう無駄だ。

なら、やるしかない。

しかし、最後にもう一度だけ問う。

「いいのか？お前のその強欲は、いずれ身を滅ぼすぞ」

「何を言っているんだい？それが、人間てもんだらう？」

迷うことなく返したホームズにヨルは、思わず笑いが溢れる。

「フッフ、ハハハ、ハーハッハッハ!!」

高笑いにミュゼは、顔をかしげる。

「さっきまで思い悩んでいた自分が馬鹿みたいだ。ホームズというのは、こういう奴ではないか。」

だからこそ、あの時から名前で呼んでいるのだ。

「やっぱり、お前は最高だな。やっぱり、人間は、そうでなくちやなあ?」
そう言うのと尻尾を二つにわけ、ホームズの両目に当てる。

「いいぜ、叶えてやる。お前に視力を戻してやる」



「ふうん、あの子達まだ元気そうね」

ミュゼは、そう言う指先に球体を作り出す。

突然広がり中に閉じ込めるその球体は、ヨルに食す暇を与えない。

エリーゼは、何とか動こうとするが、ミュゼの精霊術に押さえつけられうまく動けない。

「ミュゼ………止めてください………」

ミュゼは、にっこりと笑う。

「嫌よ」

そう言つて精霊術をホームズ達のいる民家へ飛ばした。

「———っ!!」

エリーゼとローエンは、目の前で展開される。

民家は、潰され球体が大きく広がる。

「ホームズ———!!」

エリーゼの声などどこ吹く風。

球体は、やがて収束するとそこには崩れ去った骨組みだけがあった。

「あらあら?消えてしまったみたいね」

ミュゼは、何てこと無さそうに言う。

「そんな……………」

エリーゼの瞳から涙が流れ落ちる。

「そんな泣くことないじゃない。どうせすぐ会えるんだから」
そう言つて今度は両手を広げる。

相手を押しつぶす精霊術、エアプレッシャーだ。

エリーゼにその重圧が襲いかかる、そう思つた時、

生首のヨルがエアプレッシャーを全て食べきつた。

「え？」

ヨルは、食べ終わると元の姿に戻り民家へと戻っていく。

ヨルの側の地面がゆっくりと盛り上がっていく。最初から地面に隠れていたようだ。

土は骨組みを弾き飛ばし、一つ人影を表す。

土煙が徐々に晴れて行き、現れたのは、

「ホームズ？」

人影、ホームズは、目の包帯を掴み乱暴に外す。

包帯が乱暴にそして徐々に剥がされ、現れる閉じられた両目。

そして、完全に包帯が解かれると同時にホームズの両目が開かれる。

開かれたホームズの両目を見て、ローエンとエリーゼの目も同じように開かれていく。

「そんな……ホームズさん……」

「なんで……」

ホームズの両目は、金色に輝いていた。まるで何処かの化け物のように。

ミュゼは、それを見ると余裕を崩さず冷たい声で尋ねる。

「大した無茶をしたものね。あなた、一体何を犠牲にしたのかしら？」

「さてね。そこだけ、すっぽりと記憶がないんだ」

ホームズは、そう言ってミュゼを睨みつける。

「さて、ものは相談なんだけど、ローエンとエリーゼを解放して、おれ達に付きまとうのを止めてくれないかい？」

ホームズの声は、すっかりいつも通りだ。

若干の軽口とそして、分かりづらい敵意。

「断ると言ったら？」

「君と戦う」

ホームズの宣言にミュゼは、本当におかしそうに笑う。

「あなたが!?! 霊力野も^ゲないエレンピオス人風情がたつた1人で、大精霊の私をどうしようって言うの!?!」

「1人じゃあない」

「ああ、その通りだ。1人じゃない」

ヨルがホームズの肩に乗る。

ヨルは白い牙を見せニヤリと笑う。

ホームズも白い歯を見せニヤリと笑う。

「1人と1匹だ」

空中闊歩

「剛招来!!」

赤い闘気がホームズを覆う。

赤い闘気に金色の瞳が爛々と輝く。

「飛燕連脚!!」

ホームズは、身体を捻って飛び上がりミュゼに向かって蹴りを放った。

ミュゼは、薄く笑うと身体を浮かしてホームズの蹴りを躲し、そして、髪で地面に叩きつける。

「ホームズ!!」

エリーゼは、声が響く。

巻き上げる土煙が晴れるとホームズが大の字で倒れていた。

ミュゼは、満足そうに笑っている。

「随分とまあ、大きい口を叩いていた割に他愛ないわね」

ミュゼは、そう笑うとエリーゼの元へと近づいていく。

しかし、途中で動きがガクンと止まる。

「いやいや、叩くのはこれからだよ」

声に振り返るとホームズが立ち上がり拳を握っていた。

「!？」

動こうとするが、先ほどから何かに縛られたように動けない。

ミュゼが不思議に思ったその瞬間、黒い紐が表れる。

見覚えのある黒い紐、そう、

「俺の尻尾だ。結構いいところまで細く出来るだろう？」

そうヨルは、尻尾を限界まで細くして目立たなくし、それをミュゼに巻きつけて拘束していたのだ。

「そんな、聞いてないわよ!!」

「何でお前に言わなきゃならん」

ヨルは、馬鹿にしたように言う。

ホームズは、ニヤリと笑うとその尻尾掴む。

「せーのお!!」

ミュゼをそのままエリーゼとは反対側の地面に叩きつけた。

「ついでだ!!」

そして、また反対側に叩きつけ、そしてその勢いを殺さぬまま、足を踏み込む。

そして、

「おおおおおおおつ!!」

そのまま振り回し最後には、民家に向かってハンマー投げさながらに投げ飛ばした。民家の壁は、壊れガラガラと崩れ落ちる。

ホームズの頭上から紫色の塊が落ちてくる。

ホームズは、ポンと受け取る。

「やつほーティポ」

見事にキャッチしたティポにホームズが話しかけると、ティポはムツとした顔になる。

『ホームズのバホー!!』

「開口一番がそれかい……」

ホームズは、はあと深いため息を吐くとエリーゼにポンと投げ渡す。

「当然……です」

エリーゼは、拘束されながら不機嫌そうな顔でホームズを睨む。

「つたく……」

ホームズは、そう言つてヨルに目配せをする。

ヨルの術喰らいでエリーゼとローエンにかけられている精霊術を消すつもりだ。

だが、そうは問屋がおろさない。

爆音と共にミュゼが放り込まれた民家が吹き飛んだ。

「やってくれるじゃない……………」

ミュゼは、ゆらりと立ち上がる。

そこには、いつもの人を小馬鹿にした様子はない。

自分を傷付けた矮小な存在を潰すという殺気が感じられた。

「なるほど、これが大精霊の殺気か……………」

ホームズは、ふむと感慨深そうに頷く。

「ミラの怒気のほうが怖いね」

「こんなに早死にしたい人間がいるなんて驚きだわ」

ミュゼは、そう言うのと地面近くを飛びながらホームズに近づいた。

そして、その勢いと一緒に髪で薙ぎ払う。

「守護方陣!!」

ホームズの踏み込みと同時に青白い光の陣が表れ、ミュゼの髪を弾く。

「チツ……………」

舌打ちをするミュゼに合わせるようにホームズは、回し蹴りを放つ。

だが、ミュゼはホームズの脚が届くより前に空中に逃げる。

そして、髪がホームズを襲う。

ホームズは、迫り来る左手の盾で防いだ。

もうこのパターンは、何度も食らっているのだ。

いい加減防げる。

しかし、あともうひと押しが欲しい。

「おい、受け取れ」

そう思った時、ヨルから黒球が落とされた。

その黒球は、地面に当たり弾けると両脚に黒霞となってまとわりついた。

「……………これは？」

「まあ、お前風というなら、非常識改って奴だ」

「……………？」

「地面の基準は、お前つてことだ」

ホームズは、それを聞くと髪の猛攻に耐えながらニヤリと笑う。

「なるほど」

ホームズは、そう言うのと髪の攻撃を潜り抜け軽く飛び上がった。

そして、空中に着地した。

「え……………？」

呆気にと取られているミュゼにホームズの蹴りが襲う。

蹴りは、真つ直ぐミュゼの腹に減り込む。

「ぐっ………!!」

ミュゼは、堪らずに後ろに下がる。

だが、ホームズは、それを許さない。

空中を走りミュゼに飛び蹴りを放つ。

「瞬迅脚!!」

真つ直ぐに進んだホームズの蹴りは、そのままミュゼに更なるダメージを与えた。

「———っ」

ミュゼは、耐えるとホームズに向かって髪を振るう。

ホームズは、それをかわすと踵落としを放つ。

しかし、踵落としは虚しく空を切る。

空中で回り込んでミュゼは、ホームズの後ろに立つと、髪を振るった。

背後からの攻撃にホームズは、天高く吹き飛ばされる。

ミュゼよりも遙かに吹き飛ばされたホームズの頭は、地面に向かっていてる。

ホームズは、そのまま足を肩幅に広げ、踏ん張る。

「?!」

上下逆さまにそして、空中に普通に立っているホームズにミュゼは、思わず目を見開く。

ホームズは、膝を曲げ力を込めるとそのまま下にいるミュゼに向かって飛び上がった。

ミュゼが呆気にとられている隙にホームズの右手がミュゼの顔面を捉える。

「ぐっ……………」

「ジャンプの推進力……………」

そう言ってホームズは、ミュゼの顔面を掴む右手に力を込め、両脚にある黒霞を一旦引っ込める。

「そして、重力だっ!!」

ホームズは、そのまま地面に向かっていく。

ミュゼは、ありえないスピードで地面に叩きつけられた。

土煙を巻き上げ、響く轟音にエリーゼとローエンは、息を飲む。

地面は、砕けミュゼは地面にぐったりと倒れている。

(ここで決めなきや勝ちはない!!)

ホームズは、そのまま踵落としを放とうとする。

だが、ミュゼの髪がそれを阻む。

ミュゼの髪はホームズズの踵落としを受け切るとそのままホームズズを弾き飛ばした。

「——っ!!」

ホームズズは、地面に手をつけて宙返りをして着地する。

それからミュゼに視線を向ける。

ミュゼは、ゆつくりと体を反らしなが立ち上がる。

立ち上がったミュゼの顔は血だらけだ。

ミュゼは、無言で指をかざす。

その瞬間、ホームズズは、地面に押し付けられる。

「ぐっ………があっ!!」

「食べられるより前に潰せばいいだけよね」

ギリギリとホームズズを押しつぶす精霊術は、威力を増していく。

ポンチョの陰に隠れている猫のような陰を見ると目を細める。

(どうやら生首になれないようね)

ミュゼが精霊術を強めようとマナを込める。

「——っ!!」

その時、ミュゼの右の横腹に刺すような痛みが走る。

不思議思つて見てみると、ナイフがしっかりと刺さっていた。

「な、なによ、これ」

「私ですよ」

そう言うのとローエンが不敵な笑みを浮かべて立っていた。

「そんな……………」

ミュゼは、信じられないという顔つきだ。

『『ネガティブゲート！』』

そんな虚をつかれたミュゼにエリーゼが精霊術を食らわせる。

まともに食らったミュゼは、思わず後ろに下がる

「どういうこと……………あなた達は、私の精霊術で拘束していたはずよ……………」

「お忘れですか？こちらに誰がいるのかを？」

ゆらりと立ち上がるホームズ。

ホームズにかけられた精霊術は、ミュゼの動揺によりすっかり消えていた。

ホームズの顔は確認するまでもなく、ニヤリと笑っていた。

はつきり言えば、彼らだけでどうにかなる相手ではない。

だが、エリーゼとローエンを助けるなら彼ら一人と一匹でどうにかなるのだ。

「そんな、シャドウもどきは、そこに……………」

そう言って指を刺されるヨルは、シウルシウルと糸なつて、解けていく。

そして、最後は、ホームズの足下にいる真つ黒なヨルの尻尾へと集まっていった。

(尻尾で作った偽物……!!)

「だから言つたろう？一人と一匹だつて。おれにばかり気を取られるからこうなるんだよ」

ミュゼは、悔しげに睨む。

(そんな彼らは離れられないはずじゃ……そうか！)

「その伸ばした尻尾で、あなたとヨルの距離をあげる事を可能にしたつてことね……」

ホームズは、目を丸くするとくすりと笑う。

「それは君の想像に任せるよ」

その見透かしたような物言いにミュゼは、イラつきを隠そうともせず睨みつける。

「おいおい、化粧崩れてきたんじゃないのか？」

ヨルはぴよんと飛び乗ると馬鹿にしたように言った。

ホームズは、それと同時に土をえぐり踏み込むとそのままミュゼへの距離を一步で詰める。

そして、ナイフの刺さったミュゼの右横腹に蹴りを放つ為、左足を上げる。

ミュゼは、ガードの為、右に髪を全て集める。

だが、ホームズの左足は、直ぐに地面に降りる。

代わりに右足が上がり、ミュゼの左の脇腹に向かって蹴りが放たれた。

「ぐっ………っ！」

ミュゼは、まんまとホームズのエイメントに引つかかった。

態勢が崩れ、右横腹にも隙ができる。

ホームズは、もう一度軸足を入れ替え、そのまま今度は、左足で蹴りを放つ。

勿論、ナイフに向かって。

「があっ………っ！」

ナイフを楔にしたホームズの蹴りにミュゼは、よろめく。

ナイフは、深々と刺さりミュゼは、もう立つので精一杯だ。

「まだやるのかい？」

ホームズは、真つ直ぐにその金色の瞳で、ミュゼを見据える。

「大精霊どの？」

「——っ!!」

ホームズ一人なら、勝機はあった。

いや、もつと言うなら、負ける可能性の方がなかった。

だが、敵はホームズとヨルだったのだ。

そして、彼らだけではミュゼに勝てないことも分かっていた。だからこそその奇襲。

そして、この傷。

今や形勢は、完全に逆転してしまっている。

これでは、部が悪いにも程がある。

結局、ミュゼは、まんまとホームズの策にハマってしまったのだ。

ミュゼは、ようやくソレを自覚すると悔しそうにホームズ達を睨み、宙へと飛び上がって行った。

ミュゼが消えるとローエンのナイフだけが落ちてきた。

ホームズは、そのまま地面に突っ伏して倒れた。

「ホームズ!!」

エリーゼが慌てて駆け寄り、精霊術をかける。

「身体全身が痛い……………」

「そりゃあ、アレだけ押し潰されれば当然だろ」

ヨルはそう言って尻尾でちよんとつつく。

「い”っ!!」

ホームズの全身に痛みが走る。

「この、クソ猫……………」

「エリーゼ、精霊術適当でいいぞ。馬鹿には、もったいない」

「口には、気をつけたまえ」

バチバチと火花を散らす、ヨルとホームズ。

すつかりいつも通りだ。

ただ一点、ホームズの瞳の色が碧色ではなく、金色ということを除けばだが。

「ホームズ、その眼ですけど……………」

「ん？あ、まあ？おかげで見えるようになったよ」

ホームズは、そう言うてにつこりと目を指差す。

それから、ヨルの方を見る。

「こればかりは、君に感謝だね」

ヨルは、ホームズの顔を忌々しそうに睨む。

「やつぱり、記憶は無いのか？」

「ん？いやいや、あるじゃないか？君はヨルだろ？それにエリーゼ、ティポ、ローエン」

「そうじゃない」

話を通じない。

もうそれが何よりの証拠だ。

ホームズに碧い瞳だった記憶がどこにも無い。

瞳を取り戻したその代償は、確かに発生していた。

ホームズは不思議そうに首をかしげる。

エリーゼは、唇を強く噛む。

きつとホームズは、辛い。

だが、辛いことにホームズは、気付かない。

いや、気づけない。

「ホームズ」

「なんだい？」

エリーゼは、どう言おうか迷う。

だが、どんなに頑張って伝えようとしたところで、ホームズはそれを自覚することはない。

「……………治療終わりました」

エリーゼの言葉にホームズは、立ち上がる。

「ありがとう」

ホームズは、傷を確認する。

確かにどこにも痛みはない。

身体の傷は治った。

「さて、ローエン。これからどうしようか？」

ホームズの言葉にローエンは、少しだけ悲しそうに微笑むと直ぐに口を開く。

「ジュードさん達と合流しましょう」

「は？」

ヨルはさつきまでとは別の意味で嫌そうな顔をする。

「あそこには、あの小ムスメがいるんだぞ。また、襲われたらどうするんだ」

「その時は私たちが止めます」

エリーゼは、間髪入れずに口を開いた。

ローエンは、エリーゼに頷く。

「どちらにせよ、ミュゼさんが動いている以上、ジュードさん達も危険です。

合流するなら、手傷を負っている今がチャンスです」

「おれもそれがいいと思うよ。あの後どうなったか知りたいし、レイア達が無事かも知りたい」

ホームズも同じように頷き、ヨルはため息を吐いた。

「……どいつもこいつも馬鹿ばつかだな」

ヨルはそう言うのとホームズの肩に飛び乗る。

ホームズは、左腕の盾を確認する。

「よし、それじゃあ、目的地も決まったところで、とりあえず、ハ・ミルへ行こう！」

「ええ」

「はい」

ホームズにエリーゼとローエンも続いた。

村の出口へ行く時、ピタリと歩みを止める。

「そうだ。少し寄りたいたいところがあるんだけどいいかい？」



「ここは、変わらないねえ………」

ホームズたちは池のほとりでポツリとつぶやいた。

池のほとりにある墓標には、《マーブル・ヴォルマーノ》と書かれていた。墓標に添えられている花はすっかり枯れてしまっていた。

ホームズは、それを捨て、墓標の埃を払う。

墓の掃除をするホームズを見ながら、ローエンは一つだけ確認する。

「ホームズさんが、クルスニクの槍を憎むのはここでの出来事が原因ですか？」

ホームズは、掃除をする手を止めてそれから頷く。

「びつくりしたよ、イル・ファンでマナを吸い取る機械を見た時は」

そう言いながら掃除を再開する。

「この機械と同じ、いや、それ以上の性能だったからねえ……」

ホームズは再び手を止め、教会の方を向く。

「まあ、だけど全部繋がった」

そう言うのとローエンの方に視線を戻す。

「実験場だったんだよね、クルスニクの槍の」

「ええ。ナハティガルが自ら言っていた事を考えるとそうなのでしょう」

ホームズは、ポケットに手を入れると頭の上に広がる青空を見上げる。

「おれは、ここで理不尽に死んでいった子たちを見てきた。あんなの見たらさ

……………」

ホームズは、そう言ってエリーゼに視線を向ける。

「クルスニクの槍なんて好きになれないよ……」

「ホームズ……」

ホームズのその泣きそうな顔にエリーゼは、ギユとスカートを握りしめる。

ホームズもそれに気づいたのだろう。慌てたように目元をこすると、ここに来るまでに拾ったバケツに水を汲む。

そして、水をかける。

最後の仕上げとばかりにかけられた水によつて、墓は先ほどとは比べられないほど綺麗なつた。

墓はある、しかし、この墓の下には何も無い。

マープルの死体は文字通り村の礎となっている。

だが、そうは言ってもホームズにとって大切な家族の墓だ。

例え、何もなくともマープルという人間がここにいた確かな証拠だ。

「久しぶり。姉さん」

ホームズは、マープルの墓を見てポツリと語りかける。

《全くですわ！女の子を待たせるなんて！》

そんな声が今にも聞こえる気がして思わずホームズは、クスリと笑ってしまった。

「ホームズ？」

不思議そうなエリーゼにホームズは、肩をすくめる。

「いや、別に。ちよつとね」

ホームズは、そう言つて両手を合わせた。

ローエンとエリーゼもそれならう。

ホームズは、しばらくして目を開ける。

ずつとここに足を踏み入れるの躊躇っていた。

こんなことさえなければ絶対に来なかつた。

「ヨル」

「なんだ」

「ありがとね、ここに連れてきてくれて」

珍しく素直な言葉にヨルを含めたエリーゼ達は目を剥く。

そんな彼らに構わずホームズは、言葉を続ける。

「……………なんかさ、少しだけ元気が出た」

「思い出だからな」

ヨルの言葉にホームズは、頷く。

「幸せな思い出は、力によって奴だね」

ヨルはこくりと頷いた。

辛い思いをした場所だ。

だが、辛いだけではない。

ここはホームズにとって宝物のような日々を送った場所なのだ。

ホームズは、ポンチョを翻してエリーゼ達に向き直る。

「さて、先ずはジュード達だ。行こうぜ、エリーゼ、ローエン」

「ええ」

「はい」

エリーゼ達は、頷くとそのまま池を後にした。

失ったものは大きい。

だが、それでもホームズは歩いていく。

彼には譲れないものがあるのだから。

ホームズが踏み出すと一陣の風が吹く。

風は、一瞬だった。

直ぐに風は止み元の静寂が訪れる。

ホームズは、僅かに微笑み、マープルの墓標を見る。

—— 言ってらっしゃい ——

「うん。いってきます」

それつきりホームムズ達は振り返ることなく村を出て行つた。

スキット

《ところで》

マープル（以下マ）「あなたには、浮ついた話はないのですか？」

ホ「あっても教えるわけないだろ」

マ「素直に教えたほうが身のためだと思いますよ」

ホ「えっ？」

マ「てなわけで、ヨル」

ヨ「任せろ」

ホ「待った、僕が教える。だから待ってっ!!」

《興味深々》

マ「まあまあ。ファーストキスも済ませていたとは驚きですわ！」

ホ「ああ、そう。そりやあ良かった」

マ「モテないと言っていた割には随分と甘酸っぱい思い出もあるのですね」

ホ「うん。いや、まあ、どうだろ？」

マ「誤魔化してもムダですわ！どうせ、その女の子が初恋とでも言うのでしょうか？」

ホ「う……ま、まあ、そうなんだけど……」

マ「恋に落ちたのは、どのタイミングですか？瞳を褒められた時？友達になってほしいと言われた時？花の冠を貰った時？イジメから庇ってくれた時？それともお別れの時？」

ホ「うるさい！うるさい！うるさい！！誰が言うかバーカ！！」

ヨ「馬鹿丸出しだな」

《仕返し》

ホ「というか、姉さんは？ラブレターを勘違いしてただけじゃあないだろうか？」

マ「何故でしょう、その言い方にそこはかかない悪意を感じるの？」

ホ「被害妄想じゃない？」

マ「まあ、そういうことにしときますわ。そうですね、まず私の初恋の人は、」

ホ「足が速かったとか言わないよね？」

マ「……………」

ホ「……………」そう言えば、姉さんって八歳だったね…………ごめん」

マ「何のフォローですの!!」

《そう言えば》

マ「ヨルは、何かないのですの？」

ヨ「？」

マ「だから、恋バナですわ！何かないんですの？」

ヨ「……………ホームズの失恋エピソードでも聞かか？」

マ「是非！」

ホ「アレ!?何でこつちに飛び火したの!？」

《最後に》

マ「次いでですし、あなたの初恋も教えてくださいな」

ルイーズ（以下ル）「初恋ね……………初恋は、十四だったかな……………」

ホ「結構、遅いね」

ル「そりゃあ、君に比べればね」

ホ「……………」

ル「まあ、よくある私の一目惚れだったんだけど、なんと向こうから告白してくれて付き合うところまでいったよ」

マ「まあ!!」

ホ「なんで別れたんだい？」

ル「罰ゲームだったんだよ」

ホ「は？」

ル「私に告白して付き合う罰ゲーム。一週間もしないうちに、本物の彼女に教えてもらった」

ホ・マ「……………」

ル「次が、十六だっかな……優しくて話も面白くて運動もできる子だったよ」

ヨ「非の打ち所がない、という奴か？」

ル「まあね。で、私も自然とその子に惹かれて言って、告白までいったわけだ」

ホ「母さんから？」

ル「前回の事もあるしね。夕日に照らされる教室で二人っきりの中で告白したよ」

マ「結果は？」

ル「フラれた」

ホ「何で？」

ル「その子の目当ては、私の友達だったんだよ。私に色々とアピールをして、そして、その友達に自分の良いところが伝わることをあてにしていたんだって。ま、詰まるとこ

ろ、私なんて眼中になかったというわけだ」

ヨ「オチは？」

ル「何故か翌日、教室中の生徒が私が告白したことを知ってた。不思議だよ。夕日に照らされる教室で二人つきりだったはずなのに」

ヨ・ホ・マ「……………」

ル「後は、私が十八の時……………」

ホ「もういい!!聞きたく無い!!」

ヨ「ロクな話が無いな……………」

ル「自慢じゃ無いけど、私、男を見る目がないんだよね」

マ「本当に自慢になりませんわね……………」

再会

名は猫を表す

「さて、まあ、色々置いといて、決めようと思うんだ」

「何をだ？」

「君の名前」

君といわれた黒い猫は、不機嫌そうに尻尾を振る。

「化け物でいいだろ」

「良いわけないだろう？自分の飼った猫の事、化け物なんて呼ぶ商人から商品を買いたいなんて誰も思わないよ」

「猫じゃないんだが……」

黒い猫は不満そうに尻尾を振る。

そんな黒い猫に構わず早速名前を出す。

『『クロ』とかどうだい？』

「却下。マジで猫の名前みたいだな」

即答で名前を取り下げる。

「ええ……結構、自信あったんだけどなあ……」

そう言いながら紙に新たな名前の候補を書く。

『クロネコ』

「却下だ!!猫じゃないつつてんだろ!!」

全力で突っ込んだ後、じつとりとした目を向ける。

「というか、お前ネーミングセンスないな」

「シンプルでいいと思っただけだなあ……」

「シンプルの意味分かってんのか?」

黒い猫の言葉を右から左に聞き流し更にスケッチブックに名前を書き込んでいく。

「じゃあ、これ」

スケッチブックを机の上に出す。

『暗黒帝・ブラック・黒猫王三世』

「くどい!!」

黒い猫の爪が伸びスケッチブックを切り裂く。

「ああ……スケッチブックが……」

「くどい!!なんだ『暗黒帝・ブラック・黒猫王三世』って!どこまで真つ黒なんだよ!

後、『帝』なのか、『王』なのかはつきりしろよ!」

「分かった。じゃあ、間をとって『暗黒亭・武羅津駆』で」
「お前、絶対ふざけてるだろ!!」

黒猫の突っ込みなど素知らぬ顔で次のスケッチブックを取り出す。

「おい、もういい、化け物でいいからこれ以上俺に体力使わせんな」

「まあ、待ちたまえ。ネーミングセンスがないと思われるのはシヤクだ」

「事実ないだろ！頼むから身の丈にあつた事をやってくれ」

「何騒いでいるんだい？隣の部屋まできこえたけど」

スケッチブックをパタンと閉じると、その声のした方を向く。

「いいところに来た！ホームズ！聞いておくれよ。この黒猫に名前を付けてあげようとしたんだけど、どれもこれも断るんだよ」

「母さん、ネーミングセンスないからなあ……………」

「君も人のこと言えないと思うけどね」

ホームズは、ムツとしながらも頭をひねる。

「うーん……………」

それから、ポンと手を叩く。

「そうだ！『ヨル』とかどう？黒いし、目は星みたいに金色だしぴったりだと思うんだけど」

黒猫は、少し目を丸くした後、考え込む。

「ふむ……………」

そんな黒猫を見ながら、ルイーズはスケッチブックにスラスラと書き進める。

「やっぱり、不満だよな。だったら、私の案がいいと思うんだ」

そう言つてスケッチブックをドンと置く。

『ワトソン』

「ヨルにしよう」

黒猫は、即答で遮った。

ホームズも後ろでうんうんと頷いている。

対するルイーズは、不満そうだ。

「ええー……………息子の相棒になるんだったら、これ以外ないと思うんだけど……………」

「誰が、相棒だ。ふざけんな」

黒猫は、そう言つてホームズの肩にちよこんと乗る。

「俺の名前は、『ヨル』。これでいいだろ、人間」

ルイーズは、自分の名前が採用されなかったのが不満だったようだが、諦めたように

頷く。

「まあ、化け物よりはいいかな」

そうやってルイーズは、立ち上がると軽く黒猫、ヨルの頭を撫でる。

「それじゃあ、ヨル、」

「これからよろしく」

「腹パンしたクセに何言ってるんだか……」



「ホームズだったんですね、ヨルの名前つけたの」
エリーゼは、信じられないという顔をする。

「まあね」

「信じられませんね」

「声に出すんじゃない」

顔どころか声に出して驚いた。

ヨルは、ぶらぶらと尻尾を振りながら頷いている。

「こいつのネーミングセンスは、あの時がピークだったな……………」
しみじみというヨルにホームズは、不満そうに口を尖らせる。

「ええー……………そう？」

ローエンとエリーゼの方を見ると二人は、こくこくと頷いている。
ローエンは、ヨルに尋ねる。

「ヨルさんは、気に入っているんですか？その名前」

「割と」

ヨルは、頷いた。

「二文字だし、化け物だし、ホームズにしては、よく出来てる」

『珍しいねー。ヨルがホームズを褒めるの！』

ティポの言葉にホームズとヨルは、顔を見合わせる。

「言われてみれば……………」

「そうかもだねえ……………」

彼らは考え込んでしまった。

「タレ目だの、モテないだのしか言われた試しがないね」

「役立たずだの、トラブルメーカーだのしか言われた覚えがないな」

そう言うとお互いしばらく無言になり、掴み合いの喧嘩を始めた。

ローエンとエリーゼは、呆れたようにヨルとホームズを見る。それからどちらともなくクスリと笑う。

思い出すのは、出発間際のミュゼとの戦いだ。

「今となつては、『ワトソン』も捨てがたいですね」

「あんな悪態つく助手なんてヤですけどね」

『同感ー!』

ローエンは、面白そうに笑っている。

そんな話をしてる間に醜い争いは、終わっていた。

「ホームズ?」

手をパンパンと払うホームズにエリーゼは、怪訝そうな顔をする。

「見えてきたよ、ハ・ミルだ」

そんなエリーゼに構わず、ホームズは目の前を指差す。

「わあ……!」

見覚えのある風景とジュード達がいるかもしれない、という事を踏まえてエリーゼは、嬉しそうに駆けていった。

旅は道連れ余は情けない

『ジュードー!!』

ハ・ミルについたティポは、真つ先にジュードに噛り付いた。

「ティポ！会えて嬉しいよ」

ジュードは、ティポをぐいぐいと引つ張り、なんとか剥がす。

そして、エリーゼはレイア走って抱きついた。

レイアは、少し驚いたようだ。

「わざわざ会いに来てくれたの？」

エリーゼは、照れ臭そうに笑って肯定する。

「各地でミュゼさんがアルクノアやエレンピオス兵の残党を襲っていると聞いたので心配していました」

「二人は、大丈夫だったの？」

ジュードが尋ねる。

「二人じゃないよ」

ひよつこりとローエンの影がからホームズが現れた。

「ホームズ!!」

「やっほー」

ホームズは、ひらひらと手を振って挨拶する。

いつもの調子にレイアとジュードの顔がほころぶ。

しかし、レイアとジュードは直ぐに違和感に気付く。

「ホームズ、目が……………」

「ん? ああ、ヨルに直してもらったんだ。おかげで結構な猫目になっちゃってねえ

……………」

「いや、違うでしょ! 目の色、変わってるじゃん!」

レイアの言葉にホームズは、不思議そうに首を傾げる。

「何を言ってるんだい、君は? 元々この色だろう?」

ホームズの言葉にレイアは、思わず言葉を失う。

「ホームズ……………」

何かがかみ合わないホームズの会話にレイアは、言葉を失う。

エリーゼは、少し目を伏せてレイアにだけ聞こえる声で囁く。

「後で、説明します」

エリーゼの必死な顔にレイアは、小さく頷く。

「……うん、そうだったね、ホームズ」

「だろう？」

ホームズが納得したように頷く。

ジュードは、そんな彼らに首を傾げながら頷く。

「ローエン達は大丈夫だったの？その……ミユゼは？」

「一回襲われました」

ローエンの言葉にジュード達は息を飲む。

「なんとか撃退しましたが、恐らくまた来るでしょうね」

「だろうねえ……」

「煽ったお前が言うな」

『責任取れよーホームズ』

ティポとヨルに責められるがホームズは、耳を押さえて聞こえないフリをする。

「そんなことより」

咳払いをしてホームズは、話題を変える。

「あの子今どこにいるか分かるかい？ヨルが何も言っていないところをみるとここにはいないみたいだけれど……」

ホームズのいうあの子の意味がわからないジュードではない。

ジュードは、首を横に振る。

「ゴメン。あの後、どこに行つたか僕も分からないんだ……………」

「そつか……………」

ホームズは、少しだけ目を伏せる。

そして、もう一個の疑問に行き当たる。

「そうだ。アルヴィンは？あの後どうなつたんだい？」

ホームズの質問にジュードは、少し迷つてレイアを見る。

レイアは、静かに頷く。

ジュードは、それを見届けると話した。

ホームズと別れた後、レイアが撃たれそして、アルヴィンと戦いになったこと。

そして、負けたアルヴィンはそのままこのハ・ミルから消えてしまったこと。

「なるほど……………まあ、一応言っておくけど、ミュゼにそそのかせれたんだよ」

「知つてる言つてたから」

ホームズの言葉にジュードは、静かに頷く。

「なんだ？お前、チャラ男のこと庇うのか？」

ヨルの言葉にホームズは、肩をすくめる。

「まさか」

ヨルの言葉にそう返すとホームズは、ジュードの方を向く。

「ねえ、ジュード。君は、これからどうしようとかあるのかい？ないなら、おれから提案があるんだけど……」

ジュードは、ホームズの言葉が終わる前に首を振る。

「マクスウェルを探しに行こうと思うんだ」

ジュードの言葉にティポが反応する。

『ミラに会えるんだね！』

「ううん。そうじゃなくて、ジュードが言うには本物のマクスウェルがいるんじゃないかって」

嬉しそうなティポにレイアが少し心苦しそだ。

ローエンは、興味深そうに頷く。

「なるほど、それは考えつきませんでしたね……ですが、それなら色々と説明は、尽きますね」

「ありえないことでも他に可能性がないなら真実となりえるからね」

ジュードの言葉にホームズは、少し驚いた顔をする。

ローエンは、嬉しそうに笑う。

「しばらく見ない間に頼もしくなりましたね」

ジュードは、落ち着いたその表情を崩さない。いつもだったなら照れ臭そうにしているところだ。

「でね、まずは、イバルを探そうって話になったんだ」
レイアの言葉にホームズは、首をひねる。

「あの子、生きてるかなあ……いや、生きてるね」

ホームズの言葉に一行は頷く。

悪運の強さのイメージじゃない。

レイアは、少し苦笑いをする。

「まあ、ミュゼに会うのは怖いし」

「ホームズから離れた方が安全だぞ」

ヨルの言葉にホームズは、頬を引きつらせる。

「まだ引つ張るのかい……というか、君だって人のこと言えないよ」

ヨルとホームズは、ミュゼに嫌われてる最強タッグだ。

ローエンは、彼らがそんな話をしてると顎髭を触る。

「ジュードさん。ガイアスさんの話を聞きましたか？」

「ガイアス？ううん知らない」

「理由は分かりませんが、イル・ファンで大規模な動きを始めたらしいのです」

「おかげでミュゼは、そっちに大忙し」

ホームズは、煙管をくるくると回して後を引き継ぐ。

「まあ、だからこそ俺達は、出会わなかったわけだが」

ヨルの言葉にホームズは、うんうんと頷く。

「ガイアスさんは、そのたびに退けているとか」

ローエンの言葉を聞き、ジュードは、迷うことなく次の行動を決めた。

「レイア、危険だけど大丈夫？」

ホームズは、その選択にポカンと間抜けに口を開ける。

その意味が分からないホームズではない。

「いやいや、ミュゼに会うんじゃないのかい？」

「どこにいるのか、分かる方が早いでしょう？」

真つ直ぐに言葉が続けるジュードにホームズは、困った顔をする。

「私も行きますね」

エリーゼは、手を前で組んでそういった。

エリーゼとティポの言葉にローエンは、静かに頷いている。

ジュードは、驚いた顔をする。

ホームズもひらひらと手を振って頷いている。

「三人ともいいの？」

ジュードが尋ねるとティポが真つ先に口を開く。

『ミラが嘘なのか、ちゃんと知りたいもんねー』

「はい、友達ですから」

「私もガイアスさんには、直接お聞きしたいことがあります」

ローエンが続くとジュードがホームズの方を向く。

「ホームズは？他の提案って……」

「君と一緒に」

ホームズは煙管をぶかぶかと動かしている。

「まさか、同じこと考えてるなんて思わなかったよ」

ホームズは、そう言つて伸びをする。

「だから、断る理由はないんだよ」

そしてホームズは、少しだけ顔を伏せる。

「……………それに、今の彼女ならミュゼと一緒にいるかもしれないしね」

ホームズは、言い淀んだ後そう返した。

「彼女、今アンチエレンピオス状態だから」

ホームズの言葉にレイアは、あの時のローズを思い出す。

あの叫びを思い出すと思わず背筋が凍る。

「いいの？ホームズ……………戦うことになるかもよ？」

「その時はその時さ」

ホームズは、肩をすくめる。

その少し寂しそうに笑うホームズにレイアは、黙って頷く。

「よし、それじゃあ先ずはイル・ファンだね」

ホームズの言葉にジュードが頷く。

「よし、行こう！」



「ジュード、前と違う気がします……………なんか……………」

イル・ファンに向かう船の上でエリーゼがポツリと呟いた。

何が、と聞かれれば説明は難しい。

それでも確かにジュードは変わっていた。

もちろん好ましい方向に。

「うーん、ちよつとだけたくましくなったかな？」

レイアは、離れたところにいるジュードを見ながらそう言った。

「男子は、少し見ぬ間に驚くほど成長するものです」

ローエンもジュードに目をやる。

「ジュードさんは、辛い事実と向き合う覚悟を決めたのでしょうね」

「女子だって成長するよ！」

レイアは、そこまで言う顔と顔を伏せる。

「……………ううん。しなきやいけないんだ」

ローズのこともあるが、それ以上に自分だ。

自分の側で自分を置いて成長していくその様は、焦りやそして決意へと変わっていく。
く。

「です!!」

『いつか、エリーゼもミラに負けなくらいバリボーに成長しちゃうんだからー!』

「ああ！ティポ!!」

エリーゼが慌ててティポを押さえる。

ローエンは、そんなエリーゼ達を見てホッホッホと微笑む。

「それは、楽しみ。みなさんの成長、このローエンが見守らせて頂きますよ」

ヨルは、甲板の手摺りにちよこんと座りながら暗い顔をしているレイアを見る。
「焦るなよ」

ヨルの言葉にレイアは、少しだけ顔を上げてキョトンと首をかしげる。

「ヨル？」

「つり目のガキの成長に焦る必要はない。レイアには、レイアのペースがある」

「珍しいね、ヨルが励ますなんて」

「阿呆。お前まであの小ムスメみたいになられたらこつちが迷惑なんだよ」

「あははは………」

レイアは、思わず苦笑いをする。

「にしてもお前ら二人は、厄介な昔馴染みを持ったもんだな」

「まあ、わたしの場合は、幼馴染みの方が正しいかな……」

方や落ち込み人に当たると思えばあつという間に成長してしまうし、もう片方は殺しかけるほど狂ってしまった。

ヨルの呆れたような声にレイアは、おかしそうにクスクスと笑う。

「苦労が絶えないよ。白髪増えてるかも」

レイアは、空を見上げる。

「ねえ、ヨル。ホームズどうするつもりなんだろうね？」

「さてな。あいつ、小ムスメがああなったことに責任を感じているらしいしな」

ヨルは、欠伸混じりにレイアにそう答える。

そう言ってからヨルは、レイアに視線を戻す。

「とりあえず、お前は一步ずつ成長していけばいいんだよ。そうすりゃあ、あの小ムス

メみたいになることもないだろ」

ヨルの言葉にレイアは、こくりと頷く。

「やっぱり励ますなんて珍しいね」

「違うって言うってんだろ……」

ヨルは、呆れながら溜息を吐く。

「まあ、どつかの馬鹿みたいに一歩前に進んで一步下がってる奴もいるがな」

ヨルの視線の先をレイアたちが追う。

「ヴォエロロロロロロ」

その視線の先には洗面器にリバーズしているホームズがいた。

久々に見た光景にローエン達は頬を引きつらせている。

因みにレイア達から離れていたジュードが側で介抱していた。

「この前まで、平気じゃなかったけ？」

「酔い止めがあったからな」

レイアの疑問にヨルは、呆れたように答える。

アレだけ買い占めた酔い止めは、海に落ちた時に全て溶けてしまったのだ。

よってホームズは、絶賛船酔い中だ。

「まあ、これなら、あいつ止められないだろ」

ヨルは、そう言うのとレイアの肩にちょこんと乗る。

「いい機会だから、ホームズの過去の話をしてやる」

レイアは、ヨルの言葉に少しだけ目を丸くするとホームズの方へと歩いていく。

バケツを抱えたホームズは、突然よぎった人影に顔を上げる。

「ヨルがね、ホームズの過去にあったことを話してくれるんだって」

お腹にグツと力を入れる。

「聞いてもいい？」

ホームズは、黙ったままだ。

その代わりに、右手でOKサインを作る。

レイアは、驚く。

断られると思っていたのだ。

しかし、ホームズは迷うことなく許した。

船酔いで嘔ることは出来なかったが。

「いいの？ あんなに前まで嫌がってたのに」

ホームズは、何とか嘔ろうと深呼吸をしてそれから口を手で押さえる。

「……………辛いだけの話じゃないんだよ。ううん。辛いだけの記憶にしちやいけなかつた……………」

そこまで言うとうホームズは、再びバケツとにらめっこをしてしまった。

「……………それに覚悟している友人に……………」

どうやら限界がきたようだ。

続きの言葉は、リバース音でかき消された。

ハ・ミルとは違う反応のホームズにレイアは、思わずエリーゼを見る。

「まあ、ヨルのショック療法が聞いたんです」

「ショック療法？」

「意識失っている間に全部話した」

「……………」

レイアは、頬を引きつらせる。

「で、でもおかげで少しだけホームズの性格も改善されましたし……………」

「ついでに船酔いも治れば良かったのにな」

『うーん……成長つて難しいー!』

金色の瞳を濁らせたホームズに言い返す気力などない。

言いたいことは吐瀉物に乗せながら一行は、イル・ファンへと向かった。

捨てる神あれば。パクる神あり

「やっとおさまってきた……………」

イル・ファンについたホームズは、顔を青くしたままそうこぼす。

そう言うってから後ろを見る。

「なんでみんなおれから離れているんだい」

「おい、臭いからしやべんな」

ホームズは、ヨルの顔を思い切り握る。

『口をゆすげー!!』

ティポの言葉にカチンときたホームズは、ティポに向かってヨルを投げつけた。

エリーゼは、その光景に目を見張る。

そしてホームズを睨む。

「何するんですか!!」

エリーゼの文句を無視してホームズは、水を口に含んでゆすぐと街を流れる川に吐き捨てる。

「いや、ヨルを投げたくなったらたまたまその先にティポがいた」

ホームズは、そっぽを向きながら言い訳をする。

そんなホームズにテイポが口を広げて迫ってきた。

ホームズは、ギリギリでそれを止める。

「ふっふっふ、男子はしばらく見ない間に驚くほど成長するんだよ」

「うわあ、どこかで聞いたセリフを最悪な使い方してる……」

レイアが呆れているとホームズに向かって杖が飛んできた。

真つ直ぐにエリーゼから放たれた杖は、ホームズの額に当たった。

突然のことに驚いたホームズ。

その隙にテイポがホームズに齧りつく。

ジュードは、慌てて二人を止めに行った。

久々のその光景にレイアは、ため息を吐く。

「全く………あんなことがあったってのに変わらないね、ホームズは」

レイアは、そう言っただけを見る。

「まあ、いつものことだ」

そういつものやせ我慢だ。

ヨルは、髭を前足で整えながら答えた。

ローズには殺されかけ、そして行方不明だ。

アルヴィンも行方がわからない。

「それにしても、お姉さんか……もう少しまともな子だと思ってたよ」
レイアは、少しだけ面白そうにそして、寂しそうに笑う。

「辛かったよね、ホームズ。きつとその日々が楽しかったから余計に」
「だろうな」

そういうヨルの口調にも影がある。

「ヨル？」

ヨルは、イル・ファンの空を見上げる。

夜空に輝く星を見ながらヨルは、尻尾を揺らす。

「ちっぽけなくせに、残してくものはいつだつてデカイ……」

ヨルは、そういうとローエンの肩にぴよんと飛び乗る。

「厄介だよ。お前らは」

「ヨルさん……」

ヨルの言葉にローエンは、優しく微笑む。

ヨルは、犬歯を見せる。

「まあ、お話はここまでだ」

そう言って目の前を尻尾で示す。

ヨルの示す先には、逃げ惑う人々がいた。

「だ、誰か!!」

「エレンピオス兵よ!!」

ホームズは、無理矢理ティポを剥ぎ取り、エリーゼに放り投げる。

「やれやれ、ここでもかい……」

ホームズは、ゆつくりと足を肩幅に開き構える。

前にいたホームズ達に追いついたレイアが息を飲む。

「なんで、エレンピオス兵が!!」

「今や珍しくありません」

レイアの言葉にローエンは、静かに答える。

「各地で、エレンピオス兵やアルクノアを見かけます」

「ジランドがいなくなったから?」

「それもありませんが……」

ローエンは、そこで言葉を切る。

エレンピオス兵は、何かをわめきながら暴れている。

「許さんぞ、お前ら!!」

その震えるような声にレイアは、眉をひそめる。

「何かに、怯えてる?」

「ミュゼ、だね」

ジュードの言葉にエリーゼが頷く。

『あの人達、めっちゃ酷い目にあってるみたいだよー』

エレンピオス兵の振り回す鉤爪の武器は、腰を抜かしている少女に迫る。

兵は、何のためらいもなく少女に向かって振り下ろされた。

その瞬間鉄と鉄をぶつけた甲高い音が鳴り響く。

「……………間に合った」

ホームズが左手の盾でなんとか受け切っていた。

『走れー、女の子ー!』

ティポの言葉に少女は一目散に逃げ出した。

「ナイスホームズ!!そのまま頼むよ!!」

ジュードは、そう言うのと右足に力を込め一気に詰める。

そして、そのままエレンピオス兵を横から殴りつける。

的確に、そして確実に決めた鎧通しに兵は、そのまま膝をついた。

ホームズは、屈んでいた腰をあげると左手を振る。

「づー……………手がしびれた」

そう言いながら手をグーパーと開いたり閉じたりを繰り返す。

「ホームズ大丈夫？」

心配そうなジュードにホームズは、ひらひらと手を振る。

「まあね。ほら、いつものことだし」

「……………すごい説得力だね」

ジュードが呆れている間にホームズは、エレンピオス人の倒れた近くに何か落ちて
いるのに気づいた。

「なにそれ？」

「ん……………」

ホームズは、そう言いながら拾い上げる。

「ああ、これジッポーだ」

ホームズは、そう言って小さな四角形の塊の蓋を開け現れたつまみを親指で押す。
すると、ポツと言う音共に小さな炎が現れた。

見たことも無いその道具にジュード達は目を丸くする。

「それ……………黒匣^{ジッ}？」

「いやいや。しいていうなら油と火打石」

ホームズは、怪訝そうなジュードにそう短く返すとジッポーをポケットにしまう。

「泥棒だよ、ホームズ」

「拾ったものを返さないだけだよ」

ホームズは、悪びれもせずそう返した。

そんな会話をしているとラ・シユガル兵が走ってきた。

「お前達、そこを動くな!!」

突然の鋭い声にホームズ達は動きを止める。

ラ・シユガル兵は、そのまま倒れているエレンピオス兵の側まで進む。

「無事だったようだな」

背後から聞き覚えのある声が聞こえホームズ達は振り返る。

「ガイアス!?!」

そこには、ア・ジュールの王ガイアスがいた。

ジュールは、驚いた声を上げる。

ガイアスは、静かに頷いた後倒れているエレンピオス兵に目を向ける。

「この者を連れて行け。ジュール達はいい」

ガイアスは、そうラ・シユガル兵達に指示を飛ばす。

兵達が倒れているエレンピオス兵を連行する。

「このままじゃ、エレンピオスが死んじゃう……何が悪いんだ、何が……」

やりきれないようにつぶやくエレンピオス兵にジュードが顔を伏せる。

「ジラランドと同じ……………」

「……………まあ、だからと言ってリーゼ・マクシアを使つていい理由にはならないだろう？」

ホームズの言葉にジュードは、更に俯く。

「ガイアスすごい！ラ・シユガルの兵隊にも命令できるんだ」

驚いてるレイアに構わずガイアスは、静かに頷く。

「ラ・シユガルの兵も民もナハティガルの不在で混乱していた。だから、俺が導いたにすぎん」

『それがすごいんじゃないのー!!』

ティポの言葉にホームズは、うんうんと頷いている。

「ガイアスさん、あなたはイル・ファンで何をしているのですか？」

「ラ・シユガル兵と共同でクルスニクの槍の引き上げ作業を行っている」

ローエンの質問にガイアスは、静かに答える。

ホームズは、少しだけ目を鋭くする。

「どうして？今更クルスニクの槍をどうするつもり？」

ジュードが尋ねる。

「俺は異界炉計画を止める。アルクノアは、消えたが異界炉計画が消えたとは思えない」

「ま、だろうねえ……………」

ホームズは、そう答えながらジランドの最後を思い出す。

ジランドは、断殻界シエルが消えない限り異界炉計画は、終わらないと言っていた。

「お前達こそどうした？」

今度は、ガイアスからの質問だ。

「僕たち、ミュゼに会いたいんだ」

「ミュゼだと？」

レイアが大きく頷く。

「うん。ガイアスがミュゼと戦ったって聞いたから会いに来たの」

ガイアスは、腕を組んでしばらく考える。

すると兵がガイアスに伝令を持ってくる。

「ガイアス様、船の用意が出来ました」

「海停に來い」

「え、でも」

「ミュゼに会えるかもしれないぞ」

それだけ言い残すとガイアスは、そのまま海停へと向かっていった。
「……………どうする?」

ホームズの言葉にジュードは、首をひねる。

「行こう」

「信用するのかい?ガイアス王は、君の友達ってわけじゃあないんだよ」

「でも、やるしかないよ」

迷わずに言うジュードにホームズは、呆れたように肩をすくめる。

「言うねえ……………」

そう言いつつもホームズは、嬉しそうだ。

いつかの落ち込んでいたジュードは、もうここにはいない。

頼もしくなった仲間とやせ我慢を続けるホームズ。

そんなジュードとホームズを見てヨルは尻尾を振りながら口を開く。

「決まったならとつとといくぞ」



「げ、あの人は……………」

「…………お前達か」

ジュード達が海停に着くとそこには、ウインガルがいた。

露骨に嫌そうな顔をするホームズにウインガルは、関わらずジュードの方を向く。

「陛下なら、先に船に乗ったぞ」

淡々と言うウインガルにエリーゼは、意を決したように近づく。

「あ、あの……………」

「ジャオのこと聞きたいか？」

「…………はい」

エリーゼは、ティポ抱えながらも前を向く。

「あの時、ジャオさんがどうして私を助けたか分かりますか？」

エリーゼの言葉にウインガルは、ホームズをみてそれからイル・ファンの夜空を見上げる。

「過去に犯した過ちへのケジメだったのだろうか」

「ケジメ………ですか？」

ウインガルは、頷いてエリーゼを正面から見る。

「人は生きていなければ意味はないと言うが、それは個人の考えに過ぎない。人は社会の中でしか生きられない」

そう言つてジュードに視線を向ける。

「その中には、死んでもなおつけなければならぬケジメもある」
ジャオのそれがきつとそうなのだ。

「………よく分かりません」

だが、エリーゼには難しかったようだ。

「だからこそ今は子供らしく過ごせばいい」

「子供らしく？」

「ジャオがお前に望んだのは、子供らしい幸せだった」

エリーゼは、迷つた後笑顔で頷いた。

「分かりました。子供らしくですね。やってみます」

「それでジャオも浮かばれる」

それだけ言つとウインガルは、船に乗つた。

「そう言えばホームズは？ ジャオさんと何かあつたんですか？」

「んー……母さんのお墓を作ってもらおうとやりなしてくれただよ」
ホームズは、少し迷ったあとそう返した。

「そうだったんですか……」

「まあ、他にも落ち込んだ時とか世話になってねえ……だから、心配してくれただよ
うねえ……」

そんな中ジュードは、目を丸くする。

「お母さんのお墓？え？」

「ああ、お前は知らないのか」

ヨルは、すっかり忘れていたとでも言うふうには言葉を続ける。

「こいつの母親死んでるんだよ。二年前に」

そう、船の上でジュードは、船酔いしたホームズの世話をしていたためヨルの話を聞いていないのだ。

「何の躊躇いもなく話したね……」

ホームズは、露骨に嫌そうな顔しながらもヨルの話自体は、否定しない。

ジュードは、ホームズの今までの言葉を反すうしていく。

「……生きてるなんて一言も言っていないね」

ホームズは、パチパチと乾いた拍手を送る。

そんな二人に構わずレイアは、納得したようにぼんと手をつく。

「そっか、昔世話になったって、お母さんのことだったんだ……………」

「そゆこと」

ホームズは、ひらひらと振るとイル・ファンの夜空を見上げる。
ウインガルの言葉がホームズの頭を巡る。

「ケジメねえ……………」

ホームズは、臉を少しだけ触ると船に乗り込んだ。

レイアは、そんなホームズを見てため息を吐く。
何を考えているか丸分かりだ。

「やれやれ」

どうやらこの友人にはまだまだまだ手間をかけられそうだ。

船中覚悟

「なるほど、そんなことが……」

船に乗ったジュード達はガイアスにこれまでの経過、ミラのことを話した。

「しかし、エサとはな……」

ガイアスは、腕を組む。

「うん。だから、僕は本物のマクスウェルに会って真実が知りたい」

「マクスウェルの居場所、考えられるとしたら精霊界か……」

ガイアスの言葉にレイアは、ポンと手を叩く。

「あ、それ聞いたことある。確か、精霊達が住んでいるところって言われてるよね」

レイアの発言を聞きながらローエンは、考え込む。

「ですが、誰も見たものは、おりません」

「ここにいます」

ヨルが尻尾をうねうねと上げながら答える。

「昔行ったことがある」

思わぬ情報源にレイア達は目を丸くする。

「どうして言わないの!!」

「聞かれなかったからな」

「……………」

ジュード達は引きつり笑いをする。

「じ、じゃあ、今聞くけど、どうやっていくの?」

「さあ?」

レイア達の怒りのボルテージが上がる。

しかし、ヨルはそんなのどこ吹く風だ。

「昔、無理やり出入り口を作って入り込んだからな。正規のルートを知らないんだよ」

「……………あ、そう」

一気に疲れが来た。

そんな中、ティポが口を開く。

『そう言えば、ニアケリアはー? あそこは、精霊の里って言われてるんでしょー?』

ティポの言葉にガイアスは何かに思い当たったようだ。

「うむ。あそこには霊山があった。何かあってもおかしくない」

「ホント!?!」

レイアは、目を輝かせるがそれをウインガルが遮る。

「待て。船は槍の引き揚げ場所まで引き返せないぞ」

その言葉にレイアは、がっくりと肩を落とす。

「えく……クルスニクの槍なんてどうでもいいのに……」

「口は災いの門だぞ」

「ははは、ヨルが言うと言得力が違うね」

ヨルとレイアがそんな会話してる中、ローエンが一つの疑問を尋ねる。

「ガイアスさん。先ほどの異界炉計画を止めるといふ話。クルスニクの槍を使い、エレンピオスに侵攻するおつもりなのでは？」

「全てはリーゼ・マクシアのためだ」

クルスニクの槍の力は今更語るまでもない。

エレンピオス軍の作戦の要。そして、その威力は、実証済みだ。

アレなら確かに断殻界シエを打ち破りエレンピオスに行くことも可能だろう。

しかし……

「待って、クルスニクの槍にはたくさんのマナが必要だよ」

「無論、人と精霊が犠牲になることは本意ではない」

ガイアスは、そこで言葉を切ると遠くを見つめる。

明らかにガイアスは、進んで使いたいわけではない。

それを見たエリーゼが口を開く。

「迷ってるんですか……………なら」

「だが、誰かがやらねばならんのも事実だ」

その迷いのない口調にジュードは、思い当たるフシがある。

「ガイアスも思いを守ろうとしてくれてるの？」

この言葉にガイアスは、ジュードに視線を戻す。

「そうなのかもしれない、いやそうなのだろう……………」

ガイアスの脳裏にミラの姿が蘇る。

「俺の中でもあれだけ大きな存在となった女は初めてだったからな」

「だったら、エレンピオスのことも考えるべきだよ」

そんなガイアスにジュードは、真っ直ぐに反論した。

「エレンピオスのことだと？」

ウインガルが眉をひそめる。

「リーゼ・マクシアが危機にさらされているというこの現実ときに」

ウインガルが苛立ちを露わにしてジュードに詰め寄る。

だが、ジュードは、一歩も引かない

「どっちかが犠牲になるとかそういうことじゃないと思うんだ」

ヨルの耳がピクリと動く。

「きつと……………そういうよ……………」

そういうとジュードは、真っ直ぐにガイアスを見る。

その琥珀色の瞳には力強い光が灯っていた。

「断殻界^{シエ}をなくしてみんな助ける。」

僕はそうしたい」

ヨルはそれを聞いて大笑いをした。

「どつちもだど？これまた随分と欲の深い話だな」

ヨルは本当に面白そうに笑っている。

「お前、それがどれだけ大変なことか分かっているのか？」

ジュードの脳裏にアルヴィン、ジラント、エレンピオス兵、アルクノア、そしてホームズがよぎる。

「……………分かっている。それでも、僕はそうしたい」

ウインガルがそんなジュードを静かに見つめる。

ヨルはぴよんとジュードの肩に飛び乗る。

「いいだろ。その話乗ってやる、ジュード」

「ヨル……………」

思わぬ賛成にジュードは、目をパチクリさせる。

そんなジュードを見てガイアスは、尋ねる。

「報いたいのか？命を投げ打って、お前を守ったあいつに」

「うん」

ミラが言ったからではない。

何故ならミラはそんなことを言っていない。

だから、これはジュードが自分で選んだ答えだ。

誰かに報い成長するとは、こういうことなのだ。

（ま、それをどっかの馬鹿は取り違えてるんだろうが）

ヨルは尻尾を振りながらそんなことを思う。

「変わったな」

ガイアスは、そう言う腕を解く。

「ジュード、お前は俺と……」

「陛下、そろそろお時間です」

ガイアスの言葉を遮るようにウインガルが告げる。

ガイアスは、しばらく迷った後静かに頷いてウインガルの後を付いて奥へと消えていった。

「ということになってるが、聞いてるのか、ホームズ」

ヨルの言葉にホームズは、片手を振って答える。

相変わらずバケツとにらめっこだ。

そして時折液体の落ちる音が聞こえる。

「うー……………炭酸が船酔いにはいいって聞いたからサイダー飯食べたのに……………」

「馬鹿じゃないの」

目まぐるしい成長するジュードの側で残念な方向に走り続けているホームズにレイ

アは、ため息を吐く。

「……………レイアに言われた……………」

「どういう意味？」

レイアのこめかみがピクリと動く。

返答の代わりに再び吐瀉物の音が鳴り響く。

ジュードは、そんなホームズにため息を吐く。

「医学校で酔い止め買ってくればよかったね……………」

ジュードの言葉にエリーゼとローエンがうんうんと頷く。

ホームズは、バケツを抱えたままジュードの方に向き直る。

「でも、アレだね、ジュード。そこまで考えてくれてうエエエエエエエ」

「ごめんなんて？」

最後は、ホームズの嘔吐に巻き込まれジュードの耳に届くことはなかった。

「まあ……………おれに気にせずみんなは、景色でも見てなよ……………」

ホームズは、そう言うとそのまま立ち上がりふらふらと歩いて行く。

そして、甲板で思い切り滑った。

「申し訳ありません。ここ油で磨いたばかりでして……………」

尻もちをついたホームズに船員が謝る。

謝られたホームズは、船員の視線を追う。

そこには、桶に入った油があった。

「……………ああ、そう」

「おい、人間」

突然喋ったヨルに船員は、腰を抜かした。

「それより、何か甘い食べ物はないのか？腹が減った」

しかし、直ぐに持ち直すと立ち上がった。

「わ、分かりました!!倉庫に砂糖が大量にあるので大丈夫だと思います」

そう言ってダッシュで逃げ出してしまった。

ジュードは、その様を見て眩く。

「ヨル、またやるつもりだよ……………」

ローエンは、困ったように笑いながらジュード達の方を向く。

「まあ、取り敢えず、ここは、ホームズさんのご好意に甘えましょう」

ローエンの言葉にジュード達は頷くとそれぞれの場所に移動した。



ジュードとレイアは、クルスニクの槍の引き上げ作業を眺め、ローエンとエリーゼも別の場所からみる。

ジュードとレイアは、他愛のない話をしながら見ている。

正確にいうと一方的にレイアが喋っているだけなのだが。

「って聞いている？ジュード？」

「うん。きつとどこかで組み立て作業をやるんだと思うよ」

不機嫌そうなレイアにジュードは、淡々とかえしている。

その時、黒い球体が現れた。

「な!？」

その光景にレイアとジュードは、身を乗り出して確認する。

すると、視線の先には水しぶきを上げながら向かってくるミュゼがいた。

「一人残らずぶっ殺してあげるわ!!」

目を血走らせ殺意そのままにミュゼは、ジュード達を目指していた。

「みんな!!ミュゼだ!!」

ジュードの号令でレイア、エリーゼロ、ーエンが集まる。

「つてあれ? ホームズは?」

四人揃って後ろを向くと甲板で突っ伏しているホームズが、一人。

『あ……………』

ミュゼの目は血走らせながら迫ってくる。

容赦も遠慮もしないであろう大精霊のミュゼ相手に足手まとい（致命的なまでの）が、
一人。

『最悪だーーーーー!!』

こうして船上決戦が始まった。

何かが滴るいい男？

「剛……………しよ……………うえ……………」

ホームズは、腰を落とそうとして嗚咽を漏らした。

「ああ、もう！バリアー!!」

レイアが詠唱を省略してホームズに防御力強化の精霊術をかける。

「下がっててホームズ」

ジュードの言葉に船酔い真っ只中のホームズは、頷く。

「じゃあ、代わりに……………ヨル貸してあげる」

「ちようどいい。ゲロ酸っぱい臭いから解放されたいところだったんだ」

ホームズは、無言で船にあったバケツ（液体入り）をヨルに向かってひっくり返した。

そのうっとおしいドヤ顔にヨルは、苛立ちを隠そうともせず口を開く。

「水も滴るなんとやらというつもりか？」

「まさ……………か。そんなこと……………言うんもんか」

「いいから!!逃げてホームズ!!」

ジュードに言われホームズは、小袋を落としてふらふらと逃げる。

「あら？逃すと思ってるの？」

足取りのおぼつかないホームズにミュゼは、容赦なく遅いかかる。だが、それをレイアの棍が止める。

行く手を遮られたミュゼは、小さく舌打ちをする。

「どきなさい。邪魔をするならあなた達から殺すわ」

「随分釣れないことを言うじゃないか」

そう言うのとヨルの尻尾がミュゼを捉えようと伸びる。

ミュゼは、忌々しそうに髪で振り払う。

「まだ、ダンスの相手を帰る時間じゃないと思うが？」

ヨルはホームズが落とした小袋を啜えがらニヤリと笑う。

ミュゼは、顔を険しくさせる。

「いいわ望み通りあなた達から殺してあげる」

ミュゼは、一直線にレイアとヨルに向かって距離を詰め、髪を振るう。

「つつ!!」

レイアは、辛うじて捌き、ミュゼの懐に入り込む。

「はっ!!」

掛け声とともに棍をミュゼに向かって繰り出す。

ミュゼは、その棍を馬鹿にしたように鼻で笑うと僅かな動作でかわす。そこをジュードの拳が襲う。

「————っ!!」

ジュードは、物音たてずにミュゼが避けるであろう場所に近づいていたのだ。かわせたと油断していたミュゼをジュードの拳が捉えた。

確かな手応えとともにジュードは、ミュゼを船のマストに叩きつけた。

「————っハ!!」

「フリーズランサー!!」

『「ティポ戦哮」』

そこにエリーゼとローエンが畳み掛ける。

降り注がれる氷の矢とエリーゼとティポの攻撃。

手応えはある。

だが、それが信用できないことぐらい、彼らは分かっている。

大精霊と呼ばれる彼女がこの程度で、攻撃が全弾ヒットした程度で倒れないことぐらい分かっている。

ミュゼは、ゆらりと立ち上がる。

「本当に鬱陶しい……………」

ミュゼの髪がレイア達を襲う。

レイアは、バックステップでかわすと同時に棍を伸ばす。

ミュゼは、振るわれる棍を防ぐとそのままレイアを押し返す。

「邪魔なのよ！貴方達さえ、貴方達さえいなければ!!」

その取り乱した様子にレイアとジュードは、眉をひそめる。

「なんか、いつもと違う……」

「焦ってる?」

「だったら、そこを突くしかないだろ」

ヨルの言葉を合図にレイアとジュードが踏み込む。

ミュゼは、空中に浮いてかわそうとする。

(———っ?)

だが、そのミュゼの行方を防ぐ目に見えない何か。

思わず動きを止める。

「飛燕連脚!!」

そこをジュードの空中回し蹴りが捉える。

最後の蹴りでジュードは、ミュゼを叩きおとす。

落とされる時にミュゼは、視界の端で確かに捉えた。

ミュゼの動きを遮つたものの正体。

(糸…………いや違う!!)

「シャドウもどき、貴方の尻尾ね」

「正解。だが、シャドウもどきじゃない」

ヨルの否定に構わずミュゼは、顔を険しくさせる。

「いつの間にこんなものを……」

「お前の知らない間に決まってるだろ」

ヨルの小馬鹿にした口調が更にミュゼを煽る。

ミュゼと睨み合うヨルを肩に乗せレイアは、言いづらそうに口を開く。

「あのさ、煽るの止めてくれない？わたしまでターゲットになるんだから」

「物事は諦めが肝心だ」

自分の事を棚に上げどうでも良さそうに言うヨルにレイアは、ため息を吐く。

「全く、強い相手によくもまあそこまで言いたい放題言えるよね……」

隣で聞いていたジュードもため息を吐きながら、そうもらす。

「なんだ？お前は、自分より弱い奴じゃないと言いたい放題言えないのか？」

ヨルの言葉を聞いたジュードは、きよとんとした後ニヤリと笑う。

「なるほど、それはみつともないね」

ジュードは、拳を突き合わせてミュゼを睨み、すうつと息を吸う。

「ミュゼ、ミラの事を馬鹿にしたこと、謝ってもらうからね!」

ジュードから紡がれた言葉にレイアは、拳を突き合わせ構える。

「ニ・アケリアでしつかりとね」

「ええ。それと、ホームズさんを馬鹿にしたことも」

ローエンは、そう言つてナイフを投げる。

ミュゼは、髪で払う。

「あと、ヨルの事をシャドウもどきと呼んだこともです!!」

『土下座ー!!』

エリーゼとティポは、くるくるとエリーゼの周りを回りながら口を開く。

ヨルは、少し目を丸くしたあと、犬歯を見せる。

「大精霊?今ここで謝れば、許してやる」

それからヨルは、底意地の悪い顔をする。

「誠意を見せろ」

「殺す!!」

ミュゼの髪がレイアとその肩にいるヨルに襲いかかる。

文字通り怒髪天を衝く勢いで繰り出される髪。

そのひと束ひと束が凶器となり繰り出された。

「散沙雨!!」

無数とも言える攻撃をレイアの棍が弾いていく。

捌ききれない攻撃は、レイアの頬をかすめる。

「スプラッシュ!!」

レイア達への攻撃に気を取られているミュゼにローエンのスプラッシュが頭から降り注ぐ。

「ぐっ……………」

思わぬ攻撃にミュゼは、地面に落とされた。

「転泡!!」

地面にいるミュゼにジュードの下段回し蹴りが炸裂する。

思わぬ追撃にミュゼは甲板を転がる。

「(っ)の……………」

『『タイププレッシャー!!』』

そこに更に巨大化したタイプポがミュゼにのしかかる。

勢いと重さを持った一撃思わずミュゼの肺にある空気が漏れる。

「いい加減に……………」

ミュゼの身体からマナが溢れる。

「しなさい!!」

『うああ!!』

ミュゼから溢れたマナはティポを弾き飛ばした。

そしてそのまま海へと向かっていく。

それをヨルの尻尾が追いティポを掴む。

『ナイスキャッチ!!』

ヨルは、ティポをそのままエリーゼに投げる。

「礼の一つも言えないのが、流石だな」

『アリガトー』

棒読みの「ありがとう」がティポから聞こえている中、ミュゼの苛立ちは募るばかりだ。

大精霊という自分より遥かに劣る人間達に確実にミュゼは、押されている。

ニ・アケリアで、これより多い人間を虐殺した時はこんなことはなかった。

後からやってきたホームズ達も敵ではなかった。

しかし、今はどうだ？

間違いなくこのままでは負ける。

一体、何処からこんな事になってしまった？

何一つ自分の望むように、思い通りに動かない。

一体、何が原因だ？

「……………ホームズ」

ミュゼの口から漏れる名前にレイアが眉をひそめる。

「あいつが……………あいつがいたから!!あいつのせいだ!!」

激昂するミュゼにエリーゼは、思わず後ずさる。

その様は狂気そのものだ。

「あいつと戦ってからよ!!こんな事になってるのは！全部ホームズが悪いのよ!!」

怒りに顔を歪ませるミュゼ。

レイアは、口をキュツと結ぶ。

「ジュード」

「うん。今のミュゼをホームズに合わせちゃダメだ」

ジュードの言葉に頷きながらローエンは、ナイフを構える。

「踏ん張りどころですね」

「ここで食い止める……………です!!」

「つたく、とことん女に嫌われる奴だ」

「本当につ!!」

レイアは、それと同時に棍で突き進む。

レイアの棍がミュゼの髪の間をぬって届く、

はずだった。

「下がれ!レイア!!」

「え?」

レイアが棍を当てようと踏み込んだそこはミュゼの精霊術だった。

レイアの踏み込みとともに精霊術が展開しレイアを吹き飛ばした。

「ぐっ!!」

吹き飛ばすレイアと宙を舞うヨル。

「レイア!ヨル!!」

「——っ!!」

ジュードがそちらに気を取られている間にミュゼは、エアプレッシャーをかける。

上から突然現れた重圧にジュードは、動けない。

その間にミュゼは、ローエンとエリーゼに襲いかかる。

だが、その行く手をまた見えない何か、いや、極細のヨルの尻尾が遮る。

動きを止めるミュゼにローエンのナイフが突き刺さる。

「っちー」

『『ティポ戦時』』

迫り来る紫のマナをミュゼは、ナイフからの痛みを耐えながら髪でかき消す。

ミュゼは、乱暴にナイフを抜く。

そして地べたに倒れるヨルを見てミュゼは、思い出す。

「そういえば、あなた達は離れられないはずよね?」

「あ?」

ヨルは立ち上がりながら首をかしげる。

ホームズとヨルの情報は、アルヴィンかすでもらっている。

「なのになぜ離れているのかしら?」

「お前には関係のないことだ」

そういうヨルの後ろに光る一本の線が見える。

怒りに震えるミュゼに新たな選択肢が一つ現れる。

（離れたれない。けれども身体の一部でも触れていればそれは……）

ミュゼは、もう一度確認する。

見えづらいが、一本だけ光っているそれは遠くまで伸びている。

（離れたことにはならない!!）

しかし、問題はそれが本当にヨルの尻尾かどうかということだが、一つ状況証拠がある。

その一筋の紐が光っていることだ。

ミュゼが現れた時ホームズは、ヨルに怒りのままバケツの中身をぶちまけた。

その水分がまだ残っている。

「なるほど、自分で自分の首を絞めてバカそのものね」

もうやることは決まった。

ミュゼは、見るもの全てを凍えさせるような笑みを浮かべるとレイアたちを飛び越えて行く。

「先ずはホームズ!!その次に幾らでもあなた達の相手をしてあげるわ!!」

「ま、待て!!」

レイアの制止を振り切ってミュゼは、光るヨルの尻尾を追っていく。糸はどうかやら船の中へと続いているようだ。

船員達と出くわさずそのまま尻尾を追っていくと倉庫にたどり着いた。よく見ると鍵穴から中へと尻尾が続いている。

「……ね。覚悟なさいホームズ・ヴォルマーノ!!」

ミュゼは、扉を壊して中に飛び込んだ。



「マズイよー・ヨルー！今のミュゼにホームズが会ったら……………」

ただでさえ怒り狂っているミュゼに船酔い状態のホームズが出会ったらどうなるかなど火を見るよりも明らかだ。

ヨルは嫌そうにため息を吐くとホームズが落とした小袋からジッポーを取り出す。

レイアは、それを見た瞬間、先程の焦りは何処か遠いところに飛んで行った。

その小袋は、大切な形見だ。

それを落とすというのがそもそも不自然だ。

「……………まさか……………」

レイアの言葉に答えず、ヨルは、尻尾を使って器用に火をつける。

「つたく、この借りはデカイぞ」

ヨルはそう言うとき光る尻尾に向かってジッポーを落とした。

ジッポーの火はそのまま尻尾の光る方へと走り出した。



ミュゼが飛び込んだ部屋は真つ白だった。

中を確認するのが困難なくらいに白い粉が舞っている。

予想外の景色にミュゼは戸惑った。

「……………甘い匂い？これ、砂糖？」

しかし、戸惑うのもそこまでだ。

白い粉に薄つすらと浮かび上がる人影に向かってミュゼは、髪を伸ばす。

一思いには、殺さない。

先ずは拘束し、そしてじわじわと鬩り殺しだ。

「覚悟なさい。最初は、目よ」

ミュゼは、目に向かって髪を伸ばす。

「えっ……………」

白い霞に目が慣れた時にわかる景色に思わず間拔けな声が漏れる。

髪に拘束されていたのは、ホームズではない。

即席で作られた妙な人形だった。

ご丁寧にどこで見つけてきたのか、互い違いに猫の目のようなものまで貼られてい

る。

そして、張り紙が一つ。

《バーカ》

思考が正解にたどり着くより早く、ヨルの尻尾を走る炎が部屋にたどり着いた。

そして、轟音と同時に衝撃がミュゼの身体に襲いかかった。



ヨルの尻尾に炎が灯ってから数十秒後、爆発音が鳴り響いた。

爆発により甲板に穴が空きそこからボロボロのミュゼが現れた。

「な、なに?」

レイア達は突然のことに戸惑っている

ヨルは、尻尾の炎を消すと呆れながらため息を吐く。

「あの野郎覚えてろよ」

先ほど消えたばかりのミュゼが今度は、ズタボロになって現れている。

爆音を聞きつけガイアス達が現れる。

そして、ガイアスの指示のもとミュゼは拘束された。

全ての方が付くとレイアは、肩にいるヨルに目を向ける。

「種明かし、お願いしてもいい?」

「ホームズに聞けばいいだろ」

「いや、今いないし……」

そんなレイアをとんとんと叩く者が一人。

後ろを振り返るとそこには青い顔をしたホームズがいた。

「種明かし出来そう?」

ホームズは、青い顔のまま首を横に振る。

「だってヨル」

「……………はあ」

ヨルは、一つため息を吐く。

「最初から行くか。まず最初、俺に液体をかけたのはワザとだ」

「うん。まあ、それはなんとなくわかる。後、小袋落としたのもそうだよね」

「ついでに言うとかけたものは、水じゃない。油だ」

「油?」

ヨルは、甲板を尻尾で指差す。

レイアは、ヨルとホームズの会話を思い出す。

——「水も滴るなんとやらというつもりか？」

「まさ………か。そんなこと………言うんもんか」

——

（ああ、あの会話は、そういう意味だったんだ………）

滴っていたのは、水ではない油だ。

「全身にあった油を尻尾に移して後は導火線代わりにしといた」
話を聞いていたジュードが口を挟む。

「あのさ、ホームズとヨルってある程度の距離なら離れらるよね？」

「まあな。そこで、一つ罫。あいつは、歪んだ情報を持っていた。だから、それを利用した」

離れられないなら、どうやれば離れることが出来るか？

そこでミュゼは、ヨルの尻尾を利用した手に行き当たる。

そのためにわざわざヨルの尻尾を主張するような行為を何度も見せたのだ。

「後は簡単だ。気付いた奴は、ホームズを殺そうとその尻尾を、導火線となっている尻尾をまんまと追っていく」

尻尾が徐々に治っていく。

「そして尻尾の行く先は、ホームズのところではない。爆心地へとまっしぐらだ」

「それがよくわからないんだけど、何で爆発したの?」

レイアの質問にホームズが、破れた砂糖袋を見せる。

「砂糖?」

「粉塵爆発。一定の濃度以上の可燃性の粉塵があるところで着火されると爆発が起こる現象だ」

喋れないホームズに代わりヨルが説明する。

レイアが首を傾げる。

「えーつと、つまり?」

「閉じられた部屋で粉撒き散らして火をつけると爆発する」

「なるほど」

噛み砕いたざっくりとした説明にレイアは、納得する。

エリーゼも感心しながら聞いている。

「エリーゼさん。危ないので早々使わないで下さいね」
ローエンは、エリーゼにクギを刺す。

結局、今回の事は恐らくホームズだから出来たのだ。

普通、ジュードやローエンがヨルの尻尾が見えるなんてミスをするれば流石に罠だと疑う。

だが、普段間抜けな行動をするホームズがやるからミスに見えた。

だからこそ、ミュゼはまんまと引つかかったのだ。

今回、ホームズは足手まとい以外の何物でもないはずだった。

実際、リアル・オーブを使う事も叶わなかったのだ。

だからこそ、ミュゼはホームズを標的にしたし、ジュード達もそれを阻止しようとした。

だが、ホームズにとってはそんな不利な状況も利用して見せたのだ。

ありとあらゆる状況を整理し、利用、自分の思うように動かす。

「本当、食えない奴だ」

「……………褒めてくれて嬉しいよ……………」

ヨルの言葉にホームズ力無くそう返すのが精一杯だ。

「うう……………」

勝てたはずの戦いに連続で負けたミュゼは、俯いていた。

「……………ミュゼ、どうしてこんなことを？」

ジュードの質問にミュゼは、顔を上げる。

「私はリーゼ・マクシアを守っているだけよ!!」

「ミュゼの言う、リーゼ・マクシアを守るって何なの!？」

「私が知るわけないじゃない!!」

そう言つて更に目を険しくさせる。

「全てはマクスウエル様の意志よ!!」

ミュゼの言葉にウインガルは、眉をひそめる。

「本当に別にマクスウエルがいるのか……………」

そのウインガルの言葉にミュゼは、口を滑らせたことを悟つた。

マナを展開させ自分を拘束する兵たちを吹き飛ばす。

両手を空に掲げ天を仰ぐ。

「さあ！マクスウエル様！この者たちを裁く命を！」

ローエン達は油断なく構える。

しかし、幾ら警戒しても何も起きない。

「……………つ!!」

幾ら待っても来ない命にミュゼは、顔を歪ませ、そのまま空へと飛び上がった。

「ウインガル、追うぞ!!」

ガイアスは、そう言うのと空へと飛び上がる。

空にいるガイアスを拾うようにワイバーンが現れ、ガイアスを乗せてミュゼを追う。

「陛下を追う! 四象刃フォーエッジにも伝令しろ!!」

船はそのままガイアスを追って進んで行った。



港に着いた一行は急いで船から降りる。

ジュード達は急いで降りる。

相変わらずホームズの顔は青いままだ。

フラフラと歩くその様は、危なかつしいことこの上ない。

ジュードは、前を歩くウインガルに尋ねる。

「本当にこつちでいいの?」

ウインガルは、静かに振り返る。

その時、兵達がジュード達を取り囲む。

ジュードは、自分達を取り囲む兵に気を配りながらウインガルを睨む。

「どういうつもり?」

「危険だからだ」

「僕たちが?それともホームズが?」

「ちよつとジュードくん?」

ホームズは、不満顔だ。

だが、ウインガルは前にホームズを殺そうとしていた。

そう思うのも自然なことだ。

だが、ウインガルは、首を横に振る。

「違う、お前だジュード」

「僕が?どういうこと?」

ウインガルは、ジュードの質問に答ええない。

「ジュードさんをマクスウエルに合わせたくないのですね」

「……………絶対に逃がすな」

ローエンの言葉も無視してウインガルは、そのまま港から去った。

しかし、兵達は去らない。

(このままじゃ!!)

「えいや!!」

ローエンの掛け声と共に兵はそのまま気を失って倒れた。

「ローエンー!」

「うぎ、ー!」

兵がティポに弾き飛ばされていた。

『へーばーりーつーく』

そのままティポは、もう一人の兵へと向かっていき兜の上から顔を覆うように噛り付いた。

「息が……………」

窒息した兵は、そのまま倒れた。

レイアは、棍を大上段に構え、そしてそのまま叩きつけた。

残りの兵がホームズに襲いかかる。

ホームズは、青い顔しながら顔面を掴むと地面に叩きつける。そして、逆立ちをして後ろから来る兵の首を両足で挟む。

そこから、体を捻る兵を地面へと叩き落とした。

いわゆるフランケンシュナイダーだ。

兵達を全員倒すと、ローエンは、両手の埃を払うように叩く。

「さて、ガイアスさんを追いましよう、みなさん」

レイアが困ったように腕を組む。

「でも、どこに？」

「場所ならわかるはずですよ」

「ニ・アケリアの霊山ですね」

「そういうことです」

エリーゼの回答にローエンは、満面の笑みで答える。

ホームズは、ひらひらと力なく手を振りながら口を開く。

「ま、酔いなら歩いているうちに収まるだろうさ……………」

そう言いながらホームズは、青い顔をして座り込んだ。

動かない地面に降りて調子が良くなったとは言え、急に動いて平気なわけがない。

「ホームズ……………」

呆れたような半眼を向けるレイアから、ホームズは視線を逸らす。ピンチを脱したジュードは、思わず顔が綻んだ。

「みんな……………」

これは嬉しいことだ。嬉しい事なのだが……………

「やるならタイミング揃えようよ……………」

そういうジュードに皆はジトツとした湿度の高い半眼を向ける。

「僕が悪いの!？」

ジュードの素っ頓狂な声に皆は手を叩いて笑った。

一行の心を一つに目指すは、ニ・アケリア霊山だ。

男心と馬鹿の意地

『黒づくめめー！いきなり襲うなんてー!!』

道中、ティポは、不満げに唸っていた。

「油断も隙もないよね」

レイアも憤慨している。

ようやく酔いの引いたホームズは、ため息を吐く。

「ま、軍師だからね。油断なんてしてたら仕事にならないだろう？」

「そういう事を言ってるんじゃないよ」

レイアにピシヤリと言われてしまいホームズは、思わず泣きそうになる。

「ジャオさんの事を教えてくれたのにどうして……」

「彼にとつて行動は、全てガイアスさんだからです」

エリーゼの疑問にローエンが答える。

「ガイアス王の？」

ホームズは、訳も分からず首を傾げる。

「ええ。ガイアスさんのためになら何でもするし、ガイアスさんのためにならないも

のは、何でも排除する」

「それが、おれだつたり、ジュードだつたりするわけだ」

ローエンとホームズの言葉にレイアが納得をしたようだ。

「ふーん、そんなにガイアスが好きなんだ」

「それは、ちよつと違いますよ」

レイアの解釈にローエンは、少し困つたように答える。

ローエンの答えにエリーゼは、不思議そうに首を傾げる。

「二人は友達じゃないんですか？」

「友達です。同じ理想を持ち、同じ道を歩く………ね」

ローエンは、そこで言葉を区切ると遠くを見る。

「だからこそ、複雑なのです。最高の友であると同時に最大の敵なのですから」

「敵？」

聞きなれないフレーズにホームズは、首を傾げる。

「ええ。二人は対立する部族なんですよ」

「あれ？でも、ガイアス王がまとめたつて言つてなかつたかい？」

「はい。つまりは、そういうわけです」

そうつまりウインガルの一族は、ガイアスに負けたのだ。

「それは……………」

ホームズも思わず言葉を失う。

自分の最大の敵が自分の理想を持っている。

これは確かに複雑だ。

「難しいです……………レイア、分かりますか？」

「うーん……………男性版乙女心みたいなもんかな？」

「あ、それ結構正解ですよ」

「ハツハツハーって奴だね……………」

ホームズは、レイアの解釈に苦笑いを浮かべる。

「ところで、ジュード、ミラの社ってのは、まだ先なのかい？」

「うん、まあ、もう少しだよ。この階段登り切ればすぐかな」

ホームズの質問に答えるとジュードは、ホームズにジトツとした目を向ける。

「というか、ホームズ。あの爆発ってホームズのせいなんだよね」

船でのミュゼとの戦闘、ホームズは、船室を一つ吹き飛ばしている。

沈没しなかっただけでも儲けもんだ。

「どうするの？そのウインガルさんが、請求とかしてきたら」

「マクスウェル様で領収書切ってもらおうから大丈夫だよ」

「やばい、こんなに不安なの久々だ」

これから、未知の領域へ挑むということにとっても現実的な問題がのしかかり、ジュードの気持ちも暗くさせる。

船の修理費なんて考えたくもない。

「というか、今回、おれ無傷で終わらせたんだよ。誰か褒めくれないのかい？」

『エライエライ』

テイポのやる気もない棒読みの褒め言葉にホームズのこめかみがピクリと動く。

「エリーゼ、最近おれに冷たくない？」

「いつも通りです」

エリーゼは、そう答えるとふいと顔を背けた。

エリーゼなりにホームズを選択に怒りを覚えているのだ。

あの、記憶と引き換えに自分の視力を回復させるといふ選択肢を選んだ事に。

ドタバタとして忘れていたが、それでもホームズとその金色の瞳を見れば嫌でも思い出してしまう。

大切なもののハズなのにいつも通り、平然としているのが、気に食わないのだ。

素直にこの怒りをぶつけられればいいのだが、ホームズ自身、何を犠牲にしたか思い出せない。

よって行き場のないこの怒りが、今のホームズに対する態度に繋がるのだ。

だが、ホームズにはさっぱり伝わらないし、分からない。

訳のわからないホームズは、肩にいるヨルに話しかける。

「おれ、何かしたかな？」

「お前が、自分に原因を探す日が来るなんてな……コレが『成長』という奴か？」

「馬鹿にしてるだろう？」

ヨルとホームズが睨み合っているとエリーゼの方から大きなため息が聞こえた。

「エリーゼ？」

「……………分かりました。今回は私の方が大人になつておきます」

「凄く気になる言い回しだなあ……………」

「エリーゼさんの方が正しいですよ」

ローエンにすぱりと言われてしまいホームズは、二の句が続かない。

レイアとジュードは、そんな会話を遠くから聞いていた。

「相変わらずだね」

「本当に」

そんな事を話しているとついに一行はミラの社にたどり着いた。

「へえ、()がミラの社か……………結構趣きがあるね」

「見るべきは、そこじゃないだろ」

そう言つてヨルの尻尾の差す先には、イバルが腕を組んで佇んでいた。

『あー、うるさい奴だー!』

開口一番に的確な評価を口にするティポ。

「相変わらず、悪運の強い奴だねえ」

「お互いにな」

イバルは、ホームズに短く返す。

「イバルさん。ガイアスさんとミユゼさんがここを通りませんでした?」

ローエンの質問にイバルは、腕を組んだまま動かない。

「イバル?」

「二人だけではない。ウインガルも通つたぞ」

ホームズは、感心したように頷く。

「へえ………大当たりじゃないかい」

そう言つて歩みを進めようとするとイバルは、腕を解く。

「待て、こうも言つていたぞ。ジュードが来るかもしれないが好きにしている」と

ホームズは、ピタリと足を止める。

『黒づくめめー!!同じ黒づくめ同士大目に見てたのにー!!』

「ムラサキダルマが何を言っているんだい？」

ホームズは、言葉にムツとした顔をするティポ。

ホームズは、さっと目をそらす。

「ふふふ、ガイアスにも見放されたか？」

力なく小馬鹿にしたように笑うイバルにホームズは、片眉をピクリと上げる。

「それで？君はどうするつもりだい？」

「答えが必要か？」

イバルの言葉にホームズは、首を横に振る。

イバルの気持ちを察したジュードは、手をぎゅつと握り締める。

「イバル、分かってとはいわない。でも、今は争つてゐる場合じゃないんだ!!」

「黙れ!!」

自分の言葉が届かないイバル。

ジュードは、思わず俯く。

自分の心からの言葉が通じない事ほど苦しいことはない。

そんなジュードを見ていたレイアが一步前に入る。

「ジュードは………彼女の思いを遂げるためにここに来たんだよ！」

「そんな事、どうだっていい!!」

「おいおい、お前、マクスウエルの巫女だろ？」

ヨルは半ば呆れながら言う。

しかし、そんなヨルに構わずイバルは、俯いて肩を震わせている。

「ジュード、どうしてお前が……お前ばかりが!!」

イバルの両手には短剣が握られていた。

イバルにもイバルなりの思いがある。

それが、彼を突き動かしている。

例えそれが正しいと言えなくとも。

どうやら戦いは、避けられないようだ。

「みんな先に……」

ジュードが最後まで言わないうちにローエンとレイアが前に出る。

「みんな……」

「ハッ！サシの勝負も受けられないのか、腰抜け！」

イバルの言葉にエリーゼは、静かに目を閉じる。

「ジュードは、言いました。今は争ってる場合じゃないって!!」

開いた瞳で力強くイバルを見据えるエリーゼの手には杖が握られていた。

「悪いけど、君の都合は、二の次三の次だ」

ホームズは、煙管を小袋にしまうと左手の盾を構える。

「そうよ！ジュードには、やるべきことがあるんだから!!」
レイアが棍をくるくると回しながら取り出す。

「だとしたら、私達が力を貸すのは当然でしょう?」

ローエンは、細剣を取り出す。

「ふん。折角だ。お前も力を借りたらどうだ?」

ヨルは、ホームズの肩から社の奥を睨みつける。

「このうつとおしい殺気を感じるのいい加減面倒だ」

ヨルの言葉にイバルは、口に指を当てる。

「いいだろう!!」

パイッと高い口笛とともにワイバーンが社の裏から現れた。

それと同時にイバルは、二つの短剣を構えて迫ってくる。

「みんな！いくよ!」

ジュードの掛け声とともに一同は、踏み込んだ。

そこに靈山があるから

「うおらっ!!」

ホームズは、真つ直ぐにイバルに向かって回し蹴りを放つ。

イバルは、体を捻ってそれをかわす。

そして、そのまま回転を止めずホームズに向かって短剣を振るう。

ホームズは、左手の盾で防ぐ。

「はあっ!!」

その隙にジュードの拳がイバルに向かって放たれる。

だが、それが届くより前にワイバーンの翼がジュードを弾く。

「ジュード!!」

「今だ!ワイバーン!」

イバルの命令とともにワイバーンの口から緑の煙が溢れ出る。

緑の煙はホームズとジュードを包む。

「なんだい?こ………れ?」

そう言ったホームズの口から血が一筋流れる。

「これ、毒だ……」

ジュードは、思わず膝をつく。

「エリーゼ!!」

ヨルの声にエリーゼが杖を降り精霊術を発動させる。

『「デイスペル!!」』

精霊術は、清らかな水となってホームズとジュードの体から毒を消し去った。

毒が消え、体の軽くなつたホームズとジュードは、慌ててワイバーンから距離をとる。

ホームズは、口元の血を拭う。

「どうするんだい? あれ? かなり厄介だよ」

毒に侵されても早急に対応すればどうにかなる程度の毒だが、その度にイバル達に攻撃のチャンスを与えてしまう。

「こんなことなら、ポイズンチェックをもっと買っておけば良かった……」

今現在持っているのは、エリーゼだけだ。

「ホームズ!!」

歯噛みをするホームズにエリーゼが何かを投げつける。

慌ててキャッチしてゆっくりと手を開く。

「これ……!」

そこにはポイズンチェックがあった。

「ホームズがワイバーンを押さえてください」

「は？」

「それで、今回のことはチャラ……です！」

ホームズは、首を傾げながらも頷く。

「よし！何がなんだかよく分からないけど、チャラになるならやってあげよう！」

「あ、ついでに死にかけたりしたらその約束なしです」

「……………」

ホームズの顔に引きつり笑いが張り付く。

「そうですよ。ホームズさん。私も手伝うのですからね」

そう言つてローエンがにこにこしながらホームズの隣に立つ。

「本当、人使いが荒いぜ……君たちは」

ホームズは、息を大きく吐き出し、パンつと手を叩く。

「よし。それじゃあ行くとしますか」

ワイバーンが再びホームズ達に襲いかかる。

真つ直ぐに迫り来るワイバーンにホームズは、回し蹴りをぶつける。

「ぐがああ!!」

カウンターの要領で攻撃されたワイバーンは、思わず面食らう。

「もひとおーっ!!」

ホームズは、そのまま身体を捻って逆足を叩きおとす。

地面に落とされたワイバーンは、ギロリと睨むと翼を大きく広げ飛び上がった。思わずホームズは、転ぶ。

飛び上がったワイバーンをにらみながらホームズは、立ち上がる。

「やってくれるぜ……………」

ホームズは、そう言っただけで肩にいるヨルを見る。

「というか、君のことを怖がらないんだね」

「よく躡けられている。腐ってもマクスウェルの巫女つてことか……………」

ヨルは、フンつと鼻を鳴らすと上空にいるワイバーンを見る。

ホームズは、疲れ切ったため息を吐く。

「操れないし、戦うし、どうもワイバーンとは巡り合わせが悪いねえ……………」

「まあ、これも運命だ。諦めろ」

「君はどうも滅びを望まれる運命みたいだねえ……………」

勘弁してくれというふうにくびを振るホームズ。

「まずは、勝たなきゃなんだけど……………」

そう言つてホームズは、上空にいるワイバーンを見る。

「あれじゃ何もあたらなただけど……………」

「いえいえ。そんなこともありませんよ」

ローエンは、そう言つて精霊術を発動させる。

「フリーズランサー」

術の名とともに氷の矢が上空にいるワイバーンに向かつて放たれる。

ワイバーンは、旋回してかわす。

そして、そのまま急降下をする。

落下とほぼ変わらない速さのまま地面に真つ直ぐ落ちていく。

さながら獲物を見つけた鷲のように。

その風圧と威圧にホームズは、動けない。

(だつたら……………！)

ホームズは、右足を強く踏み込む。

「動かなきやいいだけの話だ!!」

ホームズの右足を中心として青白い光が広がる。

「守護方陣!!」

光の陣が、ワイバーンを捉える。

一瞬だけ、動きを止めるが直ぐに振り払うとホームズを吹き飛ばす。

「ぐっ!!」

思わず転がるホームズ。

そこに追撃を仕掛けようとするワイバーン。

「ファイアーボール!!」

ローエンの精霊術が発動しワイバーンは、堪らず上空へと舞い上がる。

その遙か上空にいるワイバーンを見ながらホームズは、考える。

「ふむ……ヒットアンドウエイか……厄介なことこの上ないねえ」

非常識・改（ヨル命名）で駆け上がるにしても、どう考えても相手の方が速い。

恐らくたどり着く前にまた攻撃を喰らうだろ。

ローエンは、髭を触りながらふと顔あげる。

「ホームズさん。一つ考えがあるのですが」

「奇遇だね。おれも一つ考えがあるんだ」

二人は顔を見合わせるとニヤリと笑う。

「どうです、ホームズさん。私に命を預けてみませんか？」

ホームズは、頬が引きつる。

「いや………死にかけるなって、おれエリーゼに言われてんだけど………」

「大丈夫ですよ」

ローエンは、そう言うのと細剣を振るう。

「賭けるのでは、ありません。預けるんですからね」

ホームズは、それを聞くと金色の瞳を輝かせる。

「分かった。エリーゼへの弁解は任せましたよ」

ホームズは、そう言うのとヨルを見る。

「さあ、頼んだよ」

「ハア……」

ヨルはため息もそこそこに黒球を吐き出すとホームズの両脚に黒霞となり纏わりつく。
く。

レイアは、イバルと戦いながらローエンとホームズを視界の端に捉える。

(何やってるんだろ……………)

「行きます！フリーズランサー!!」

氷の矢が現れる。

それにホームズが飛び乗った。

「つて、は?」

「行っけえええええ!!」

何が起こったかわからない面々を差し置いてホームズを乗せた氷の矢は真っ直ぐにワイバーンへと向かっていった。

突然のことに戸惑うワイバーンに構わずホームズは、氷の矢を足場に飛び上がると、ワイバーンの脳天に踵落としを喰らわせる。

「ぐがあー！」

そして、怯んだところに遅れて氷の矢が刺さる。

ホームズは、空中で一回転すると、そのまま両足で宙に着地する。

「っだあらっ!!」

ホームズの回し蹴りがワイバーンを襲う。

だが、それをワイバーンが尻尾で防ぐ。

吹き飛ばされホームズは、空中で体勢を立て直す。

その僅かな隙にワイバーンが襲いかかる。

眼前に迫るワイバーンに思わず身構えるホームズ。

そこにローエンのファイアーボールが襲う。

地上から離れたところにいるワイバーンに寸分違わず精霊術を当てるローエンに

ホームズは、舌を捲く。

「つとに流石、指揮者」
コンダクター

ホームズは、そう言ってもう一度蹴りを放つ。

ワイバーンは、火球を喰らい動きが鈍っている。

だが、それでもホームズの攻撃をかわす。

(……………制限時間……………どれくらいだったけ?)

内心歯齧みをしながら思い出す。

はつきり言つて空中戦は、もう終わらせないとならない。

ここで決めなければ勝ちはない。

「手は？」

「一つある」

「なら……………」

「だけど、隙がない。因みに聞くけど、制限時間あとどれくらいだい？」

「一分切った」

ヨルの淡々とした物言いを聞いてホームズ、三秒フリーズ。

そして、

「どうしてもっと早く言わないんだい!!」

「言ったって気にしない奴が何言ってもやがる!!」

醜い責任転嫁の罵り合いが上空で始まった隙にワイバーンが真っ直ぐに向かってきた。

「やれやれ、声は聞こえませんが状況だけは、何となく掴めました」

ローエンは、呆れたように言う。細剣を指揮棒のように振る。

要は隙を作ればいいのだ。

それも特大の。

だったら、食らわせればいい。

特大の精霊術を。

「ダイバイン……………」

ローエンの前に光が収束していく。

「…………ストリーク!!」

収束された光は大砲となって、ワイバーンに襲いかかった。

「うおっ!!」

目の前を横切る光の大砲にホームズは、思わず息を飲む。

そして、その光が消えるとボロボロになったワイバーンが現れた。

その姿をホームズの瞳は、チャンスと捉える。

「ヨル!!」

ホームズの言葉と共にヨルの尻尾がワイバーンに伸び、ワイバーンを拘束する。

翼が開かぬよう確実に。

「翼が開かぬや飛べないよねえ?」

身動きの取れないワイバーンを引き上げる。

「飛べない何ちやらはって、奴だ!!」

引き上げられるワイバーンにホームズの脚が迫る。

「断……………」

ワイバーンは、暴れるがヨルの拘束は、解けない。

「……………空……………」

そして遂にホームズの脚が届く。

「……………打ア!!」

安全靴のホームズの脚がワイバーンにめり込みそのまま地面に向かって真つ逆さまだ。

そして轟音と砂煙を撒き散らし地面に叩き落とされた。

地面に叩き落とされると同時にホームズの脚が更にめり込みワイバーンの視界は、暗

闇へと消えた。

砂煙が晴れるとホームズがいつものように煙管を啜えて佇んでいた。ホームズは、ポカンとしている面々を見るとひらひらっと手を振る。倒れているイバルを見る限りどうやらジュード達も勝ったようだ。

「やつほー」

そのお気楽な様子にレイアは、苦笑いをしながらエリーゼの方を見る。

「どう？ 死にかけてたわけじゃないし、許してあげたら？」

エリーゼは、苦い顔をした後渋々と言った手を挙げる。

ホームズはその手を叩きつけるようにハイタッチをする。

「……………おまけです」

「そりやあどうも」

ホームズは、肩をすくめて返す。

そして今度はローエんだ。

「ナイスアシスト」

「当然ですとも」

ローエンもにつこり笑ってホームズとハイタッチをする。

ハイタッチが終わるとホームズは、イバルに視線を向ける。

「勝ったみたいだねえ」

「うん。ホームズとローエンが抑えてくれたおかげだよ」

ジュードの言葉にホームズは、うんうんと頷いた後エリーゼを半眼で見る。

「君もこれぐらいいいたまえ」

「テイポ」

「ごめん。何でもない」

ホームズは、テイポが飛んでくるまえに謝る。

レイアは近くにいるローエンにコソコソと話す。

「余計なこと言わなきやいいのにな……」

「いつものことですよ」

「ハハハハハハ……」

そんなやり取りをしているとイバルがゆっくりと立ち上がる。

ホームズは、目を険しくさせると脚を構える。

そんなホームズの前にジュードが一步出る。

「どうして……どうして、お前ばかりが……」

「イバル……」

イバルは、怒りに震えながら言葉を紡いでいく。

「俺は、マクスウエルの正統な巫女なんだぞ!!特別なんだ!!」

ジュードは、静かに首を横に振る。

「僕もイバルも特別じゃないよ」

「黙れ!!ミラ様を見殺しにしたくせに!!」

ジュードは、静かに振り向く。

「あの時、僕が二人みたいに特別だったらミラを助けられたかもしれない」

ジュードから静かに紡がれる言葉にイバルは、呆気にとられたように聞いている。

「僕も特別になりたいんだ」

「お前……」

イバルは、ゆっくりと俯くと聞こえるか聞こえない声でポツリと呟く。

「霊山は、社の向こうだ」

イバルが答えてくれたことにジュードは、驚く。

イバルは、そんなジュードをきつと睨み付ける。

「消えろ!!俺のまえから消えろ!二度と現れるな!!」

息も切らさずまくしたてるとそのままイバルは、走り去ってしまった。

『自分から消えたー!!』

レイアは少しだけ呆れたように笑った。

「これに懲りたら、次会う時は、大分変わってるといいね」

レイアのこの言葉にジュードは、静かに首を横に振る。

「多分もう、会わないんじゃないかな」

「え？何で？」

レイアは、訳も分からず首をかしげる。

そんなレイアに構わずジュードは、歩みを進める。

答えてくれないジュードに変わりレイアは、隣を歩くホームズに尋ねる。

「ホームズは、何でだか分かる？」

「まあ、おおよそ」

ホームズは、肩をすくめる。

「何でなの？」

「うーん………なんて言えばいいのかなあ………」

ホームズは、困ったように腕を組む。

その間にジュードは、社の扉に手をかける。

「あのバカ巫女がジュードを認めたからだ」

ヨルがホームズの肩で＋＋を説明するような調子で言う。

「あのプライドの高いバカは、それに耐えられないんだろ」

ヨルの解説にレイアは、首をひねる。

「……………うーん、なんか、少しだけわかった」

「ならいいんじゃないかい？」

そう言つてホームズは、社の中を指差す。

レイアも頷くと社に入った。

そこは円を描いた家だった。

「ここにミラがいたのかい……………」

「うん。僕と……………アルヴィンも一回来たことがあるんだ」

ジュードは、言いづらそうにそうホームズに教えると真つ直ぐ歩いていく。

そして、目の前にある天幕をめくる。

天幕をめくるとそこには外に続く扉があつた。

ジュードは、迷わずその扉を開ける。

開けた途端外の空気が、風となつてホームズ達を撫でる。

思わず目を閉じそしてゆっくりと開けるホームズ。

「……………マジかい……………結構デカイねえ」

そこには、悠然とそびえるニアケリア霊山があつた。

広がる曇り空がホームズを更に身構えさせる。

山の天気はよく見ときたまえ。命にかかわるからね。

ルイズの言葉を思い出し、ホームズは、アホ毛を触る。

「うしー崩れるまえに早く行こう！」

「何言ってるの？山が早々崩れる訳ないじゃん」

気合を入れたホームズの横でレイアがすつとぼけた事を言っている。

ホームズは、迷った後もう一度口を開く。

「うしー！天気が崩れるまえに早く行こう！」

「そうだね。ホームズの言う通りだよ」

ホームズの言い直しとジュードのさり気ないフォローにレイアは、自分がおかしな事を言っただけとようやく気がついた。

「えーつと……あはははは」

気まずそうに頭をかきながら笑うレイアにホームズは、ジツトリと湿度の高い目を向

ける。

「大方、またおれのことバカにしたんだろう？」

「いや、その……いつものかと思って……」

「……………」

『まあ、ホームズだもん仕方ないよねー』

「君たちがおれのことをどう思ってるかよく分かった」

ホームズは、そう返すはずんと山を登り始めた。

「わあ！待ってよ」

慌てて追いかけるレイアとエリーゼにジュードは、ため息を吐いて隣にいるローエンを見る。

「どうしようか？」

「まあ、私たちは、私たちで行きましょう」

「だね」

「悪かったって、ホームズ!!」

「そうですよ。これからは、もっと信用しますって」
「気にしてないからいいですよーだ!!」

千里の道も一歩ずつ

「やれやれ、ずいぶん淋しい景色だねえ……」

ニアケリア靈山をホームズは、そう言いながら足を進める。

『ぶつくさ、言っていないで早く登れー!!』

「やだね」

先ほどから歩みの遅いホームズをティポを急かすが即座に断られた。

ホームズを先頭としているため、エリーゼ達も速さは変わらない。

「だったら、休憩をもう少し減らして欲しい……です」

「疲れる前にこまめに休まないと後で動けなくなるよ」

ピシヤリと言われてしまいエリーゼは、ぐっと押し黙る。

そして、ローエンの方を見る。

「残念ながら、今回は珍しくホームズさんが正しいですよ」

「すげえ、言い方が引つかかるんだけど」

「ホッホッホッホ」

からかうような笑顔にホームズは、頬を引きつらせる。

「にしても、レイアも急かしてくるかと思っただけけれど……こう、『競争だー!!』みたいな?」

「ホームズがわたしのことどう思ってるかよく分かった」

レイアの半眼にホームズは、肩をすくめる。

レイアは、ため息を吐く。

「お母さんに何回か山に放り込まれたからね。何をしたらダメかぐらいわかるよ」

ジュードも隣で頷いてから、不思議そうにホームズを見る。

「それにしてもホームズも大分慣れてるよね、どうして?」

ジュードの言葉にホームズが今度はため息を吐く。

「あのねえ、みんなお忘れかもしれないけど、おれ、行商人だぜ? 山をいくつ越えたと
思ってるんだい?」

呆れながら説明するホームズにジュードは、納得したようだ。

「ま、アオイ村に行く時も山だったしな」

ヨルの言葉にホームズは、うんうんと頷いている。

それからポツリと続ける。

「まあ、山に強くても船に弱いけどな」

「喧嘩売ってるなら買うよ」

ホームズとヨルは、睨み合う。

いつもの調子で言い合うヨルとホームズにジュードがため息を吐く。

「無駄な体力使うよ」

ジュードの言葉にホームズとヨルは、ピタリと口を閉じる。

しかし、ジュードの注意で黙ったにしては、目が険しい。

「……………ホームズ？」

ジュードの言葉にホームズは、無言で曲がり角の先を指差す。

そこには、ミュゼと戦っているガイアスがいた。

二人の戦いは、ガイアスの方が押していた。

ミュゼは、苦しそうに浮き上がると空を睨みつける。

「私がいこんなに苦しんでいるのに……………どうして何も言ってくれないのよ!! ずつと!

ずつと! ずつと!」

その取り乱した姿にガイアスは顔をしかめる。

「精霊のくせに、己のなすべきことも見出だせんのか」

「黙れ!!」

ミュゼは、そう言うのと視線を空からガイアスに移す。

「マクスウェル様のところには、行かせない! それが今の私の全て!!」

そう言うのと小さな精霊術の球体を次々と作り出し放っていく。

ガイアスは、それを身体を僅かにそらしてかわす。

「愚か……いや、哀れだな」

「——っ!!」

ガイアスのその抉るような言葉にミュゼは、頭を掻き筆るとそのまま空へと消えていった。

ガイアスは、それを追って消えていった。

それを見届けるとジュード達は岩陰から出る。

「やれやれ。以前とは、別人のようだね、彼女」

『別人じゃなくて、別精霊ー!』

ホームズという言葉にティポの訂正が入る。

「それもそうだね」

ティポの言葉にうんうんと頷いている。

「原因の一端が、何を言っているだけか」

ヨルは、呆れたように返す。

ホームズに二回も負けたと言うのも今のミュゼの状態に拍車をかけているのは、事実だ。

「見下して挑んでくる方が悪いんだよ」

ヨルの言葉にホームズは、淡白に返すと俯いているジュードを覗き込む。

「どうしたんだい、随分浮かない顔だね？」

ホームズの質問にジュードは、少し迷った後ゆっくりと口を開く。

「……ミューゼはさ、誰かに言われたことを必死に守ろうとしているように見えるんだ……」

黙って聞いている面々にジュードは、言葉が続ける。

「前の僕みたいに」

ホームズは、腕を組んで黙って聞いている。

「もちろん、だからって許せるわけじゃないよ、それでもさ……」

「相手のことを考えちゃうんだよね。ジュードらしいね」

レイアは、呆れたように笑う。

それから直ぐに目を険しくする。

「それでも」

「うん。決着はつける……ううん、つけなきゃいけないんだ」

力強く頷くジュードを見てホームズは、組んだ腕を解く。

「きつと、向こうもその気だろうね」

「ええ。というより、ミュゼさんは決着程度で済ますつもりはなさそうですが」
ローエンは、そう言いながらホームズを見る。

ホームズは、肩をすくめる。

「別に構わないさ。女の子に嫌われるなんていつものことさ」
ニヤリと言うホームズにローエンは面白そうに笑っている。

「こんなにこの言葉が、頼もしいと思える日が来るとは思いませんでした」
「だろう?」

ホームズは、そう言う少し考え込む。

「そういえば、あの子を見てないねえ……………」

ホームズの口から出た「あの子」という言葉にレイアは、顔を俯かせる。

あの鬼気迫るローズを見ているレイアは、胸が締め付けられるのだ。

「てつきり、エレンピオス人を襲いまくってるミュゼと一緒にいると思ったんだけど……………」

「もう、とつくに殺されてたりしてな」

どうでも良さそうに言うヨルをホームズは、睨みつける。

「あまりくだらないこと言うとな怒るよ」

「怖い怖い」

睨みつけるホームズの視線を涼しい顔してかわすとヨルは、ニヤリと底意地の悪い笑みを浮かべる。

そんな彼らのやり取りを見てレイアは、ぎゅつと手を握りしめる。

「ホームズは、さ、……もう一度会ってどうするつもりなの？」

レイアの質問にホームズは、頭を掻きながら考える。

「会ったら教えるよ」

ホームズは、そう言うのとポンチョを翻す。

翻るポンチョから覗くホームズの手が震えているのをレイアは、見逃さなかった。

思い出すあの時のこと。

人の悪意ならいくらでも目の当たりしてきた。

だが、掛け値なしの狂ったような憎悪を受けたのは初めてだった。

しかも最も受けたくない相手からだ。

心配そうなレイアにホームズは、少しだけぎこちなく笑う。

「……………大丈夫。力も貰った、覚悟も出来てる」

ホームズは、小袋をぎゅつと握りしめる。

そう言つてジュード達に視線を向ける。

「……………さて、そろそろ行くかい？」

体調を確認するホームズにジュード達はこくりと頷く。

「よし、それじゃあ行こう。山頂まで後少しだ」

そう言うのとホームズは、再びゆっくりとした足取りで歩き出した。

その歩みの速度にエリーゼは、半眼でホームズを睨みつける。

「……………」

「不満げだな」

「別に」

突然エリーゼの肩に乗ったヨルに少しだけ目を丸くするとそう言った。

言葉とは裏腹に明らかに不満そうだ。

「どうせ、私に合わせてのこと……………です」

エリーゼの言葉に今度はヨルが目を丸くする。

「ほう？ 気付いていたのか？」

エリーゼは、こくりと頷く。

ホームズの歩く速度は、エリーゼが疲れるか疲れないかのギリギリ速度なのだ。

「長い付き合いになりましたから」

エリーゼの半眼のまま大変不服そうに言った。

気遣いもありたいが、それを全く説明しないホームズに呆れているようだ。

ヨルは、そんなエリーゼを面白そうに笑う。

「八つ当たりしていた奴から、そんな言葉を聞くななんてな……」

何を言っているのか直ぐにわかったエリーゼは、ヨルを睨みつける。

「本当にいい性格してますね」

エリーゼは、げんなりとした調子でため息を吐く。

そんな会話をしていると山頂にジュード達は辿り着いた。

山頂には、黒い靄のようなものが広がっている。

しかし、ホームズは先に進まない。

そして、顔を上げると立ち止まっているホームズが目に入る。

「ホームズ？」

首かしげるエリーゼ。

立ち止まっていたホームズは、くるりと振り返ってエリーゼの肩にいるヨルを見る。

「ヨル、君、気付いてただろう？」

「まあな」

ヨルは短くそう答えるとぴよんとホームズの肩に飛び乗る。

「ハア……」

ホームズは、額を押さえる。

「なに? どうしたの?」

レイアは、ホームズの後ろから前へと歩みを進め不思議そうにその先へ目を向ける。

そこには、アグリアとプレザ、そして、

「ウソ……………」

アルヴィンとローズがいた。

ホームズは、彼らを見て苦笑いする。

「ははは………なにも今じゃなくても………」

揺れる声と震える手。

ホームズの覚悟が問われるのはこれからだ。

想い

鸚鵡返し

「お前達……………だったのか……………」

アルヴィンは、驚いたように目を丸くする。

「……………」

ローズは、無言でホームズを見る。

「二人とも……………そんなどうして!」

「ジュード……………」

ジュードの言葉にアルヴィンは、俯いてしまう。

プレザは、そんなジュードとアルヴィンに構わず手をひらひらとふる。

「また貴方達と敵同士になれるなんて喜んでいいのかしら?」

そう言いつつ本を取り出し準備は、万端だ。

「またあんた達をいたぶれるなんてサイコー」

アグリアは、天を仰いで大笑いしている。

そして、レイアを睨みつける。

「おいブス！お前この男に撃たれたんだって!？」

アルヴィンを指差しながら言うアグリアにレイアは、顔を俯かせる。

「おい、やめろ……」

アルヴィンが弱々しく止めるがアグリアは、止まらない。

「それとそこの裏切りもの！」

そう言つてホームズに向かって指をさす。

「お前も、この女に腹を刺されたらしいな？」

「……………よくご存知で」

ホームズは、動揺を見せないよう精一杯の虚勢を張つて笑つて返す。

あの時の辛さは、今更話すまでもない。

その虚勢を見抜けないアグリアではない。

アグリアは、いつものようにぐねぐねと動きながらホームズを馬鹿にする。

「モテない男は辛いな」

「いつかは、逆の台詞をいいたいもんだねえ」

ホームズは、そう言うとき大きく息を吐いて気持ちを整える。

「まあ、それはともかく、そこどいてくれないかい？」

そう言つてローズを見る。

ローズは、気まずそうに顔をそらす。
ホームズは、それに構わず口を開く。

「おれ達にはやらなきゃならないことがあるんだ」

「誰がどくか、バーカ!!」

「いえ、どいて頂きましょう。私達には、ジュードさんをマクスウェルに会わせなくてはならないのですから」

「ローエン………?」

ローエンは、そう言うとアグリア達を見る。

「ジュードさん、あなたがガイアスさん達を特別と感ずるのは、真の大人と言えるものがあるからでしょう」

「はっ! じーさん、あんたにもねーだろ」

「恥ずかしながらそうなのでしよう。しかし、アルヴィンさん、あなたもです
ローエンのピシヤリと諫められ思わず面食らう。」

「俺が………」

突きつけられたその言葉にアルヴィンは、言葉が出ない。

「もういいよ、じーさん! あんたは先にへブンリーしてな!」

アグリアは、そんな事面倒だとも言うように精霊術を展開させる。

アルヴェインは、拳を握りしめる二人の間に割って入る。

「アル……………」

プレザは、アルヴェインの行動を目の当たりにし、思わず言葉を失う。

「違う……………俺は……………」

弱々しく言葉を発しようとするが続きが出てこない。

いつものあの余裕な表情は、どこにもない。

「おいニイちゃん！どきな!!」

弱々しい姿だが、アルヴェインは、それでもその場所を動かなかった。

精霊術の完成したアグリアから、火の玉が射出された。

目の前に迫り来る火の玉、それをヨルが喰らい尽くす。

「まあ、頑張ったんじゃない？アルヴェイン」

ホームズは、そういうとヨルを肩に乗せ、一歩前に出る。

「ホームズ……………お前、どうして……………」

ホームズは、ふうとため息を吐く。

「君を許さない理由は、飽きるほどあるんだけど……………」

ホームズは、レイアの方をちらりと見る。

そしてローズの方を見る。

「君を許す理由は、腐るほどあるんだよ」

ホームズの言葉にアルヴィンは、目を見開く。

「チイツ!!」

アグリアは、舌打ちをすると、剣を構える。

あくまでもホームズ達とやり合うつもりだ。

「アグリアア！あなたは、どうして!!」

レイアが一歩前にでる。

「うるせえ!!あたしらにはガイアス様に従うしかねーんだよ!!」

アグリアは、ギロリと動揺しているプレザを睨む。

「ババア！テメエもそうだらろ！」

アグリアの言葉にプレザは、決意固めたようだ。

「そう……………だったわね」

プレザは、本のページをめくる。

「ガイアス様は私たちのようなゴミとされた人間にも居場所を与えてくれたわ」

「プレザ……………」

プレザの周りに精霊術が展開していく。

「ゴメン、アル……………やっぱりあなたは……………敵!!」

プレザの精霊術が展開される。

「おらー！お前はどうすんだ!!」

アグリアに言われローズは、刀を二つ引き抜く。

レイアは、棍を握りしめる。

声の震えていたホームズが、脳裏に蘇る。

辛くないわけがない。

(今のホームズに戦わせる訳には……………)

ホームズを庇うようにレイアが一步前にでる。

そんなレイアの肩にポンと手が置かれる。

思わず振り返った先には、もう碧い色の名残など何処にもない金色の瞳がレイアに向けられていた。

「ホームズ……………」

ホームズは、小さく頷いてレイアの前に出ながら、ローズに金色の瞳を移す。

「君は、そっちにつくんだね」

震える声で尋ねるホームズ。

ローズは、一瞬だけ、ビクリと体強張らせるが口を開く。

「ガイアス王は、エレンピオスを滅ぼすと言っていた……………だから」

「今度はガイアス王ってわけかい？」

ホームズから発せられる声は、全く震えていなかった。

平坦にそして、冷え切った声に変わった。

「ミラのために刀を振るっていた君が、今度はガイアスのために刀を振るうのかい？」
言い返せないローズにホームズは、ため息を吐く。

「やれやれ、随分と尻の軽い女だね、君は」

「……………なんですって」

ホームズのその言葉にローズの殺気がもう一段階膨れ上がる。

「ガイアス王の言うことは正しいのよ!!そのため刀を振るって何が悪いというのよ
！」

「馬鹿言え」

ホームズは、一蹴する。

「ミラにしろ、ガイアスにしろ、君は二人のために刀を振るうんじゃない。二人にすがって刀を振るっていただけだ」

ホームズのポンチョが風を受けてたなびく。

「周りが成長していくなか、自分だけ成長出来てない。そんな時の選択肢は、いくつもあるけれど、君は、その中で最も愚かなものを選んだ」

人の心を抉りだす、最も触れて欲しくない部分に土足で踏み込んでいく。

「目標としていたミラに君はすがりはじめた」

「なっ……………」

「そして、ミラがいなくなつてすぐる相手がいなくなつたから、次はガイアス王つてわけだ。全く尻が軽いつたらないよ」

「じゃあ、ガイアス王が間違つていっているというの!？」

「正しいさ。でも……………」

ホームズは、そこで言葉を区切るとローズを指差す。

「ガイアス王の真似をする君は正しくない」

静かな山にホームズの声だけが響き渡る。

「ガイアス王がどうして正しくて、どんな覚悟があるか、君はそれにこれっぽっちも気

付いてない」

金色の瞳は、ローズを捉えて離さない。

ローズは、もうホームズの瞳を見ていられない。

「なのにガイアス王が正しい、正しいと繰り返してれば、そんなのオウムが挨拶してるのと一緒だよ」

「うるさい！やかましい！黙れ!!」

一切の容赦も手加減も拭い去ったホームズの言葉にローズは、刀を握りしめる。

「正しさは、力よ」

ローズの鬼気迫る表情でホームズを睨見つける。

「構えなさい!!私が勝って証明してみせる!!」

ホームズは、静かに瞳を閉じる。

昔馴染みにこんなな憎悪の塊をぶつけられてしまえば、誰だって耐え続けられない。だが、それは、結局ホームズが選んだことだ。

そして、ローズが誰かにすがらないよう正す機会は、いくらでもあった。

それをホームズは、見過ごしてしまった。

ローズのためにと行動し、結局ローズをここまで追い込んでしまった。

(なら、やることは決まっている)

「ジュード」

そしてゆっくりと口を開く。

「ローエン」

続けてローエンを呼ぶ。

「エリーゼ」

エリーゼは、驚いた顔をする。

「アルヴィン」

アルヴィンは、腕を解く。

「レイア」

レイアは、棍を少しだけ握る。

「それと、ヨル」

「……………予想はつくが一応聞いてやる」

ヨルは、尻尾を振ってホームズを見る。

ホームズは、小さく頷く。

「ローズの相手、おれに預けてくれないかい？」

ジュードは、少しだけ俯く。

ホームズの気持ちは分かるのだ。

だが、それでも……

「ホームズ、今は……」

「争つてる場合じゃあない、だろう？」

ホームズは、ジュードに背を向けたまま続ける。

戦いは避けられない。

だが、確実に勝たなくてはならない。

だったら、一対一、しかもヨルなしで挑むなど了承出来ない。

イバルと戦った時もホームズ達はジュード一人に戦わせなかった。

「そう言えば、一回も使ったことなかったなあ……」

ホームズは、にっこりと笑って振り返る。

「頼むよ、ジュード。一生のお願いだ」

ホームズはその笑顔の下に一体、どれだけの思いがあるか、分からない。

ジュードは、拳を解くと確かに頷いた。

「悪いね」

「そう思うなら負けないでね」

ジュードは、そう言うとホームズに背を向ける。

ローズの目は険しくなる。

「貴方、馬鹿じゃないの？誰の手も借りず、ヨルの力も使わず、私に勝てると思ってるの？」

ホームズは、視線だけレイアに僅かに移す。

「『友達が馬鹿やらかしたら、馬鹿やらかしても止める、それが友情つてもんだよ』レイアは、思わず振り返る。

ホームズは、あの時のレイアの覚悟を身を以て味わっている。

だからこそ、この言葉に重みがある。

「一人きりだつて負けないよ」

金色の瞳に覚悟が宿る。

ローズは、ぎりつと歯ぎしりをして構える。

「来なさい……私が勝つて証明してみせる」

ホームズは、垂れ目を険しくさせ、ローズを睨みつける。

「フン……ピーチクパーチク、オウムがさえずるんじやあないよ」

ホームズは、一步前に足を出し、左手の盾を構える。

あの時とは違う。

あの時は、ローズに思わず構えを取らされた。

だが、今回は違う。

今回は、ホームズが自らの意思で取った。
思わず取らされた構えと自ら取った構えでは、その重みが違う。
ローズもそれを感じ取り構えに力が入る。

睨み合う二人は、そのまま同時に踏み込んだ。

予言耳に逆らう

「アルヴェイン!!」

レイアの声が轟く。

ホームズとローズの戦いが行われている中、アルヴェインには、プレザの氷の矢が迫っていた。

動けないでいたアルヴェインと氷の矢の距離が縮まっっていく。

「やれやれ、そんなに死にたいのか？」

呆れたような声とともにヨルが生首となって二人の間に割って入った。

ヨルは生首のまま氷の矢を丸呑みにすると、いつもの姿に戻ってレイアの頭に乗る。レイアと何やら喋っているが、アルヴィンの耳には入らない。

(戦えんのか……………俺……………)

今まで裏切るなんて何度もやってきた。

だが、それでもミラを見殺しにしてからアルヴィンの中に何かのスイッチが入ってしまった。

今まで見て見ぬフリを続けてきた、その行動の意味を考えてしまう。

そして、それを考えてしまうからこそ、目の前のプレザと戦えるのか、迷ってしまう。

「どうする？あの猫女と戦えないなら、誰かに代わってもらったらどうだ？」

そんなアルヴィンの考えなどお見通しとでも言うようにヨルが問いかける。

アルヴィンは、俯いている顔を上げ首を横に振る。

「いや、これは……………こればかりは……………俺がやらなきゃいけないことだ」

アルヴィンは、そう言うとお剣を担ぎ上げ、プレザに向かって走り出した。

プレザに向かって大剣を振るう。

プレザは、それを一步身を引いてかわし、回し蹴りを放つ。

プレザのヒールがアルヴィンの鼻をかすめる。

「くっー！」

何とかかわしたアルヴィンにプレザは、本にマナを込めて殴りつける。

思わぬ追撃にアルヴィンは、態勢を崩す。

その隙にプレザは、本をめくる。

アルヴィンは、それを見ると地面に落ちそうになる体を踏み込んで堪える。

（詠唱が完成するより早くー！）

「舐めないことね」

プレザは、冷たくそう告げるとアルヴィンが攻撃に転じるより早く地面をふみつける。
る。

光の陣が展開され、アルヴィン達を拘束する。

「ん……………んのー！」

せめて銃だけでも動かそうとするが、プレザの守護方陣は、それを許さない。

ヨルのいる方を見るが、レイアと共に拘束されていて生首になれそうもない。

全ての手が塞がれた、そう思った瞬間、アグリアを中心に炎が渦巻き一気に広がる。

目の前に迫り来る炎にアルヴィンは、身構える。

「ダイダルウェイブ!!」

しかし、その炎を遮るようにローエンの水の精霊術が炎を打ち消す。

液体から気体と変わり急速に増えた体積により、アルヴィン達は吹き飛ばされた。

衝撃に揺れる頭を押さえながら、アルヴィンはプレザを確認しようとする。

すると、プレザは、アグリアと戦っているレイアに精霊術を放とうと氷の矢を用意していた。

「——っ!!」

アルヴィンは、銃口をプレザの本に合わせる。

(外してたまるか!!)

引き金を引かれた銃は、プレザの本を弾き飛ばした。

本が手から離れたことにより、プレザの精霊術は、かき消えた。

プレザは、驚いたようにアルヴィンを見ると悲しそうに顔を伏せ、そして、本を拾おうとする。

「ハア!!」

そこをジュードの拳が襲いかかる。

突然の攻撃にプレザは、本で防ぐので手一杯だ。

「ファイアーボール!」

術後調律されたローエンのファイアーボールがプレザに襲いかかる。

プレザは、思わず吹き飛ばされた。

「お前ら……………」

「全部後だよ、アルヴィン」

「ええ。アルヴィンさん一人にまかせるには、荷が重そうですから」
ローエンとジュードに言われアルヴィンは、顔を伏せる。

「全部後、な」

「ええ。全部後です」

厳しい口調で返しながら、ローエンは細剣を構える。

「ふふふ、女一人に随分な布陣じゃない」

プレザは、所々火傷を負いながら立ち上がる。

「レイアには、ヨルがいるからね。アルヴィンにだって誰かいなきや」

ジュードの言葉にプレザは、寂しそうに笑う。

今のアルヴィンの居場所は、自分の隣ではない。

それがはつきりと分かってしまった。

（問題は、彼がそれに気付いているか、ね）

アルヴィンに視線を向けるとプレザは、本のページに指をかける。

その瞬間、ページがめくられるその前にジュードとローエンが踏み込んだ。

「掌底破！」

「マーシーワルツ！」

迫り来る剣と拳。

プレザは、ページをめくるのを諦めた。ただ本を両開きにする。

「ドラゴネスハンド！」

本から水の龍が現れ、ジュードを弾き飛ばす。

「ぶっ!!」

しかし、攻撃を防げたのはジュードだけだ。

ローエンの攻撃は、プレザに届く。

プレザは、痛みに顔を歪めると自分の尻尾を鞭のように振る。ローエンにぶつけた。

「く……………」

思わず後ろに下がるローエン。

「まずは、厄介な貴方からにするわ。コンダクター指揮者！」

プレザは、ローエンに狙いを定めた。

そのプレザの道を遮るようにローエンのナイフが地面に刺さる。

「これは……………」

「私をなめてもらっては困りますよ」

地面にあるナイフは、一つではない。

プレザを中心に三角形を描くようにそれぞれの頂点に三つのナイフが刺さっていた。ローエンが軽く手を振ると結界が発動する。

「ちっ!!」

プレザは、舌打ちをすると結界に閉じ込められるより前にその場から離れた。

下がった所をローエンのナイフがプレザの腕を貫く。

「くっ……………」

思わず痛みに顔をしかめながらもプレザは、本をめくる。

本当は、戦いたくない。

だが、ガイアスに仕えると決めた今、アルヴィンを助ける理由はない。

アルヴィンが、こちらを選んでくれればという期待がなかったと言えば嘘になる。

というより、二人の道が交わるのは、そこしかない。

しかし、アルヴィンはこちらを選ばなかった。

アルヴィンは、プレザを選ばなかったのだ。

裏切ることなどいつものことだ。

(気にしないかと思ってたんだけど……………)

プレザは、そのまま地面を踏みつけ、光の陣を出現させる。

「守護方陣」

追撃を仕掛けようとした、ローエン、ジュード、アルヴィンは拘束される。

「随分辛そうな顔をするようになったわね」

その切っ掛けを与えたのが自分ではないことぐらい分かる。

それが、アルヴィンの選択に繋がるのだ。

寂しい事だ。悔しい事だ。辛い事だ。

「さよなら、アル」

プレザは、そう言うのと精霊術を完成させた。

水瓶が現れ、水を吐き出しながら動けないアルヴィンへと迫る。

アルヴィンの後ろに広がるのは崖だ。

プレザは、アルヴィンをとらえた瞬間守護方陣を解除するつもりだ。

解除されれば、何ものにも拘束されなくなったアルヴィンは、そのまま崖下へと真っ

逆さまだ。

迫り来る水の奔流を見ながらアルヴィンの心は、冷え切っていた。

常に人を裏切ってきたアルヴィンだ。いつこうなってもおかしくなかった。

それがたまたま、今回だったと言うだけだ。

——賭けてもいい、お前の様な奴はろくな目に合わせないし、ろくな目にも合
わない。——

いつかのヨルの言葉がアルヴェインの脳裏に蘇る。

目の前で辛そうに精霊術を展開するプレザとそして、撃ってしまったレイア。

二人のことと、そして今の状況。

(あーあ、こんなもんだよな、そりゃあ)

アルヴェインは、弱々しくニヤリと笑った。

猫の手はいらない

「魔神剣……」

先に仕掛けたのは、ローズだ。

ローズの二刀が空へ向かって切り上げられる。

筈だった。

ホームズは、それを右脚で踏みつけるとそのままローズに向かって回し蹴りを放つ。

「——っ!!」

振り抜かれる蹴りにローズの息が止まる。

ローズは、響く衝撃を堪えると口を開く。

「フォトン!!」

光の球がホームズとローズの間で弾ける。

二人は、それぞれ反対方向に吹き飛ばされた。

「ぐっ!」

ホームズは、岩壁に叩きつけられた。

突然のローズ自身を巻き込んだ不意打ちをホームズは、なんとかして立て直す。

だが、ローズの方が一步早い。
当然と言えば当然だ。

ホームズにとつては不意打ちでもローズにとつては、不意打ちでもなんでもない。
唯の攻撃の一つだ。

来ると分かっている攻撃を耐えるなんて当然だ。

準備されていて当たり前だ。

二人がそれぞれ正反対に吹き飛ばされたため、距離が出来た。
つまり、

「ウインドカッター!!」

ここからは、ローズの間合いだ。

ローズから風の刃が、ホームズに向かって襲いかかる。

ホームズは、避ける。

そして、ローズに向かって走り出そうと一步踏み出す。

「省略！フリーズランサー!!」

しかし、それをローズが許さない。

氷の矢がホームズに向かって放たれた。

ホームズは、足を止める。

「獅子戦哮・焰！」

炎の獅子が氷の矢に喰らいつく。

だが、全てではない。

獅子から逃げ切った氷の矢が、ホームズに襲いかかる。

「っ！紅蓮脚！」

ホームズは、右脚に炎を纏って氷の矢を溶かす。

(ジリ貧だな……………)

ヨルはホームズとローズの戦いを眺めながら、そう考えた。

単純にホームズには、遠距離の技がない。

せいぜい石を投げるのが精一杯だ。

そんなホームズに対し、ローズは精霊術がある。

おまけに、成長したローズには、詠唱が極端に短い精霊術がいくつもある。

ホームズが距離を詰めるより早くにローズの精霊術の方が完成してしまう。

「省略！サンダーブレード!!」

「守護方陣!!」

振り下ろされる雷撃の剣を光の陣が受け止める。

迫り来る雷。

徐々に押されるホームズの陣。

「ふんぐおら!!」

ホームズは、さらに地面を強く踏み込み雷を打ち消す。

危機を脱したホームズは、肩で息をしている。

なんとか、ここで踏ん張らなくてはならない。

いつの間にか降っている雨に濡らされながら、ホームズは呼吸を整えようとする。

「ストーンブラスト!」

しかし、それを阻止するかのようにローズの精霊術が完成する。

足下から湧き出る礫にホームズは、吹き飛ばされ、岩壁に叩きつけられた。

「がっ!!」

ホームズの肺にある空気が押し出される。

ローズは、濁りきった黒い瞳でホームズを見下ろす。

「ヨルの力、使つてもいいわよ?」

「だ、そうだが?」

ヨルは、岩壁からホームズにそう返す。

「遠慮しとくよ。意地と障子は、張るものだからね」

ホームズは、そう言つてゆつくりと顔を上げる。

「それより、君はレイア達の方に行っておくれ」

「……………はあ」

ヨルは、呆れたようにため息を一つ吐くとレイアの方へと歩き出した。

いつもなら文句をタラタラ言うヨルが、ため息一つでホームズの側を離れたことにローズは、怪訝そうに眉をひそめる。

「安心したまえ。ヨルが、おれ達の戦いに関与することはないよ」

ローズの疑問を先回りするようにホームズが、答える。

ローズは、ホームズの事をその暗い瞳で睨みつける。

「……………どういうつもり？ 負けた時の言い訳なら聞かないわよ」

「君こそ、ヨルのいないおれに負けたらそれこそ言い訳出来ないよ」

ホームズは、馬鹿にしたように笑いながら返す。

ローズの刀を握る手に力が込められる。

（煽って、タイミングをずらす……）

ホームズは、呼吸を整える。

（そして、こつちのタイミングで仕掛ける）

そんなホームズの思惑を他所にローズは、雨粒を確認するように灰色の空を見上げる。

「雨、随分降ってきたわね」

「ん？」

意図が読めず首を傾げるとピキピキという音が、ホームズの足下から聞こえた。

「冷たっ!!」

思わず自分の足下を見るとホームズの足が凍りついていた。

「なっ!?!」

「時間稼ぎをしていたのは、貴方だけじゃないわ」

ローズは、刀を下段で十字に合わせる。

冷気は、どんどん強くなっていき、雨で湿った空気を、濡れた地面を凍らせていく。

「これを……狙って……」

冷たいを通り越して痛みを感じ始めた両足にホームズは、歯をくいしばる。

「ローズ・クリステイが命じる」

詠唱をしながらも冷気は、溢れ出る。

ホームズは、一度だけこの精霊術を見たことがある。

詠唱こそ違えど、この感じに覚えがある。

「紅蓮脚!!」

足を炎で纏うも溶けた端から凍り始める。

「あの馬鹿を凍らせ……………」

ホームズの周りの冷気は、震えるほど冷え切っていた。

「あの馬鹿を捕らえよ！」

ローズの精霊術が完成する。

「アブソリユート!!」

ローズの最後の一節と共にホームズに氷の牢獄が襲いかかる。

「……………つ 剛招来!!」

かつて母が使った手を使う。

だが、氷の勢いは、止まらない。

母のように、行かなかつた。

迫り来る氷の檻にホームズは、迫る敗北の予感を噛み潰す。

今の自分にこの状況を打開する方法は、ない。

(だつたら……………)

ホームズは、拳を握り締める。

「剛招来と紅蓮脚の応用編!!」

氷の檻が閉じる。

その瞬間、足を纏う炎が剛招来と混ざり合いホームズを包む。

「成長しろ……………」

炎の形が少しずつ変わっていく。

「命を賭けて！」

炎は、鳳凰となり羽ばたく。

「鳳凰天駆！」

氷の檻を壊し鳳凰を纏うホームズは、空に舞いがる。

「……………!?!」

ローズは、自分の技を再現したホームズに言葉が出ない。

だが、ローズは直ぐに刀を構え直しマナを集める。

経験を武器にホームズ下段で刀を構える。彼女の元に光が集まっていく。

刀の切っ先が、照準を合わせるようにホームズに合わせられる。

そこから、現れるのは光の大砲だ。

「進化しろ……………」

ローズに集まる光に対抗するようにホームズが纏う鳳凰も翼を羽ばたかせ、脚をローズにあわせる。

ローズの精霊術も準備が出来た。

「省略!!」

「全てを賭けて!!」

ホームズを纏う鳳凰が更に燃え上り、ローズの前に集まった光はホームズに狙いを定める。

「デイベインストリーク!」

「鳳凰天翔駆!!」

光と炎は、轟音を放ちながらぶつかり合う。

「ハアアアアアアアア!!」

「だああああああ!!」

二人の慟哭が霊山に響き渡る。

ローズからホームズに向かって真っ直ぐ伸びる光の大砲は、ホームズの鳳凰の片翼を

僅かに打ち消す。

(私が証明してみせる……！)

ホームズは、歯ぎしりをして更に鳳凰に力を込める。

(友人を救う……そのためにも……)

光におされ、消えかけていた鳳凰の両翼が大きく広がる。

ローズは、更にマナを込める。

(進む潰す勝つ)

(退かない負けない逃げない)

二人は、お互いを睨みつける。

(全力でねじ伏せてやる!!)

永遠に続くかのように見える、光と炎のぶつかり合い。

だが、それにもいずれ終わりは訪れる。

ローズの光とホームズの炎は、同時に消え去った。

ローズは、精霊術が破られたことに戸惑う事なく、宙にいるホームズに向かって刀を振るう。

「っー」

ホームズは、振るわれる刀を足場にして地面に降り立つ。

非常識を使っていないため、危なかつしいが、なんとか着地をした。

そして、ホームズとローズにあった邪魔な距離が消えた。

ローズは、慌てて精霊術を発動させようとする。

だが、ホームズは、ローズから声が出るより先に口ごと顔面を鷲掴みにする。

「壁……………」

ホームズは、身体を反転させ遠心力を乗せる。

「……………ドン!!」

ローズは、思い切り岩壁に叩きつけられた。

ドンと言う鈍い音が響きわたる。

「……………ッ」

ローズの肺にあつた空気が全て飛び出す。

再び距離が出来たとはいえ、詠唱している余裕など何処にもない。

ホームズは、泥濘む地面を踏みつけ、真っ直ぐにローズへと向かっていき、蹴りを放つ。

「ぐっ！」

ローズは、走る激痛を堪えなんとか、かわす。

ローズに交わされたホームズの蹴りは、ローズのギリギリ横に放たれた。

「こんのおー！」

ローズは、転がりそして再びホームズと一定の距離をとろうとする。

しかし、それより早くホームズの蹴りがローズに向かって放たれる。

ホームズの蹴りを何とか刀で受けるローズ。

ホームズは、攻撃が不発に終わった事を悟ると直ぐに脚を降ろす。

ローズは、精霊術を発動させようと口を開こうとする。

だが、ホームズは、直様ローズの口元に向かって手を伸ばす。

口に触るなんて表現など生ぬるい。

ホームズの掌をぶつける。

これは、もう張り手の領域だ。

ご丁寧指輪が当たらぬように気まで配っている。

(……………詠唱がっ!!)

ローズは、口元から襲い来る衝撃に目を丸くしながらホームズを見る。そんなローズに構わずホームズは、構える。

ホームズに精霊術はない。

残念ながらヨルのいないホームズでは、ローズの精霊術を全て打ち消す事は叶わな
い。

だったら、やるべき事は一つだ。

(精霊術を発動させない！)

ホームズの右手の張り手が再びローズに襲いかかる。

またしてもローズは、精霊術を発動できない。

(くそ……術さえ出来れば……)

ローズは、何とか隙を見てフォトンだけでも発動させようとする。

だが、それでも詠唱のために口を開こうものなら、ホームズの張り手が飛んでくる。

精霊術という遠距離の技があるローズの方が圧倒的に有利だ。

だからこそ、有利な状況に持って行こうとしていた。

対するホームズには霊力野ゲイトも、精霊術もない。

だが、ホームズにはそれを補って余りあるものがある。

経験という何物にも勝る武器がある。

全てのことにおいて化け物レベルの母といた十六年間。

精霊術を喰らう化け物といった十一年間。

それらの全てを血肉としてホームズは、ローズの精霊術を封じ続ける。

(そうか、ヨルといった経験が今ここで、よりもよつてこのタイミングで発動してるのね……)

そうか精霊術は発動出来なくとも、発動するタイミングなら掴めるのだ。

張り手にローズが怯んだ瞬間ホームズの蹴りが再び襲い来る。

ローズは、ギリつと歯を食い縛るとホームズに向かって刀を振るう。

ホームズは、左手の盾で受け止める。

精霊術を使うタイミングは、もう読まれている。

全てではないにしても、それを探ってる間にホームズの蹴りか張り手を何発ももらう羽目になる。

先ほどから一発一発に全てが乗っているその攻撃を何発も食らって、無事な補償などどこにもない。

「……………決めた。精霊術は使わない」

ローズは、弾かれた二刀をぐるりと回して構え直す。

「選択肢は、私の方が多い。だからその分出遅れる」

その暗い瞳のままホームズを睨みつける。

「だったら、私はその選択肢を狭める」

自分のアドバンテージを潰してまでローズは、ホームズに挑む。

「そうまでしておれに勝ちたいのかい？」

「忘れたようだからもう一度言っただけ」

ローズは、刀をホームズに突きつける。

「私が勝って証明してみせる、ガイアス王の正しさを」

ホームズは、左手の盾を構えながら、ローズの切っ先を睨みつける。

「ならば、おれは勝って君を否定しよう」

自分を濡らす雨ももう気にならない。

二人は再び強く踏み込んだ。

女は度胸

「ファイアーボール!!」

アグリアの火の玉がレイアに向かって放たれる。

レイアは、身体を捻ってかわすと棍の先を構える。

「兔迅衝!!」

棍と共にレイアが全力でかける。

アグリアは、それを大剣で受け止めた。

「喰らうかよ! ブース!!」

アグリアは、そのままレイアを押し返す。

思わず体勢を崩したレイアにアグリアの追撃が襲いかかる。

そこにアグリアが追撃を仕掛ける。

体勢の崩れたレイアに防ぐすべはない。

「レイア!」

そこにアルヴェインが割って入る。

「え?」

レイアが驚いた声を上げる。

アルヴィンは、それに応えることなくアグリアに向かって銃を放つ。アグリアは、身体をぐにやりと曲げてかわす。

「おいおい、お前らのところは裏切りものしかないのか?」

アグリアのその言葉にアルヴィンは、拳を握りしめる。

レイアの方をまともに見ることができない。

当然だ。

それだけのことをアルヴィンは、やって来た。

「アルヴィン!!」

レイアの声にはっと顔を上げる。

すると目の前には、プレザの氷の矢が迫っていた。

自責の念にかられていたアルヴィンは、とっさのことに反応出来ない。

「やれやれ、そんなに死にたいのか?」

呆れたような低い声と共に生首のヨルが、プレザの精霊術を飲み込む。

「ヨル！」

突然現れたヨルにアルヴィンだけでなく、ジュード達も驚いている。

「ホームズの所にいるもんだとばかり……」

「俺があそこにいたらイカサマを疑われるだろ」

ヨルは、そう言うといつもの黒猫に戻りレイアの頭の上に乗る。

レイアは、頭にいるヨルを見る。

「いいの？見なくて？」

「別に」

ヨルは、短く返すとチラリと後方支援に徹しているエリーゼを見た後、レイアの肩に移動する。

「あの馬鹿どものことより、自分の事をどうにかしたほうがいいぞ」

「だよね……」

レイアは、きゅつと棍を握りなおす。

ヨルは、レイアの頭でアルヴィンを眺める。

「どうする？あの猫女と戦えないなら、誰かに代わってもらったらどうだ？」

ヨルの言葉にアルヴィンは俯向いたゆつくりと首を横に振る。

「いや、これは……こればっかりは……俺がやらなきゃいけないことだ」

アルヴィンの言葉に頷くとヨルは、レイアの額をぺしぺしと叩く。

「おい、レイア」

「わかってるって！」

レイアは、そう言うのとアグリアに向かって駆け出す。

アグリアは、ニヤリと笑う。

「上等!!」

アグリアは、ニヤリと笑うと大剣をレイアに向かって振り下ろす。

レイアは、棍の先でそれをいなすとそのまま棍の柄に当たる部分をアグリアに向かっ

て放つ。

レイアの棍の柄はアグリアの横腹を捉える。

「ぐっ………！」

走る衝撃にアグリアは、顔をしかめる。

「調子に乗んなブス!!」

アグリアは、横腹にある棍など構わず、剣を振り抜く。

まさか、そんな反撃をしてくるとは思わなかったレイアは、無防備だ。そんなレイアに剣が迫る。

「ハアッ!」

その剣をジュードは、レイアに届く前に殴りつけた。

「ジュード!!」

「レイア、気を抜かないで!」

ジュードは、そう言いつつアグリアに拳を放つ。

「それは、あなたもね」

次の瞬間ジュードとレイアの足元に光の陣が現れる。

プレザの守護方陣だ。

現れた光の陣は、レイアとジュードを縛る。

「ぐっ……………」

近くにいたアルヴィンも拘束される。

プレザは、それを視界の端に捉えながらも精霊術を詠唱する。

「ヨル!早く!」

レイアの声にヨルは首を何とか横に振る。

「あの女……………」

ヨルは忌々しげにプレザを睨む。

レイアは、不思議そうにヨルを見る。

地面に足をついていないヨルなら拘束されていないはずだ。

だが、ヨルは動けない。

「アハハハハ……」

アグリアは、身体を仰け反りながら笑う。

それは、もう本当に面白そうに馬鹿にしながら笑っている。

そして笑い終わると、反らした身体を戻す。

その勢いを殺さず、そのまま剣を地面に突き立てる。

「バァーカ！」

剣が地面に突き立てられた瞬間、ヨルの顔が歪む。

「あたしたちが何度も同じ手を喰らうわけないだろ？」

守護方陣の光で反射するその中に黒い紐のようなものが、浮かび上がっていた。

ジュードは、それを見て理解する。

ヨルは、彼女らを捕らえるためにいつものように尻尾を地面に這わせていた。

だが、今回はそれが裏目に出た。

拘束されているため精霊術を喰えない。

アグリアは、ニヤリと笑うとリリアル・オーブを輝かせる。

「テメーら、丸焼きだ!!」

その瞬間アグリアを炎が囲む。

溢れるマナがただの術技ではない事を告げる。

「ヤバイ……秘奥儀だ!!」

レイアは、何とか動こうとするが動けない。

「焼き払え! ロギス・イーター!!」

アグリアが両手を広げると同時に炎が爆発的に広がった。

炎は、全てを飲む混む波となってレイア達に襲いかかる。

「ダイダルウェイブ!!」

その炎を抑えるようにローエンの精霊術が完成した。

真正正銘の水が渦を巻きながらアグリアの炎とぶつかり合う。

流水は、一瞬で水蒸気となる。

突然体積の大きくなった水が轟音とともに爆発する。

「っ!」

レイア達は、地面に叩きつけられた。

アグリア達も崖ギリギリまで追い詰められる。

アグリアは、忌々しそうにローエンを睨む。

「やってくれるじゃん、ジーさん」

「ええ。まだへぶりーするには、早すぎますからね」

ローエンは、そう返すと細剣を構える。

「なら、もう一押しかしら？」

プレザは、面白そうに笑うと本のページをめくる。

そう言ったプレザの前には、氷が現れる。

しかし、現れた氷がローエンに向かって放たれるより早く、アルヴェインの銃弾がプレ

ザの本を弾く。

精霊術が失敗したプレザに変わり、アグリアが火の玉を放つ。

ローエンは、慌てることなくゆったり構えている。

そんな火の玉とローエンの間を遮るように生首のヨルが現れた。

(うそだろ！確かに剣で指して拘束しといたはずだぞ)

アグリアが驚いて地面に視線を這わせるとそこには、千切れた尻尾があった。

生首となったヨルが、火の玉を丸呑みにする。

ヨルは、巨大生首から通常の黒猫の状態に戻る。

その瞬間、レイアがヨルの影から現れ、アグリアに向かって棍を突き出す。

「ハアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

しかし、

「残念だったな、ブス！」

アグリアの剣がそれを防いだ。

剣の腹でレイアの棍を受けるとアグリアは、思い切り振り抜く。

「うっ……………」

思わずタタラを踏むレイアにアグリアは、振り抜いた勢いをそのままに両手剣を振る

う。

レイアは、態勢を崩しながらも棍を横にして攻撃を防ぐ。

「アハハハ、残念だったな！千載一遇のチャンスを逃しちゃってよ！」

喋りながらも更に剣戟をアグリアは、重ねていく。

棍で剣を防いでいるレイアの腹をアグリアは、蹴りつける。

「……………」

思わず後ろに下がるレイア。

その隙にアグリアは、小さな火の玉を作り出し、ヨルにぶつける。

「ぐっ……………」

火の玉により吹き飛ばされたヨルは、地面に落ちる。

レイアとヨルから距離の出来たアグリアは、今度こそちゃんと精霊術を作り上げ、火の玉をレイアに向かって放った。

ヨルが生首になるより早く火の玉は、ヨルとレイアに襲いかかった。

「ぐっ……………」

「っあー！」

ヨルとレイアがそれぞれ苦悶の声を上げる。

そんな二人を見てアグリアは崖を背にして大笑いしている。

「ヤロ……………」

ヨルは、悔しそうに歯をくいしばる。

アグリアが一体どういうつもりで戦っているのか、丸分かりだ。

「アハハハ！その猫、対策さえ整えちまえば、どうってことないな!!」

ヨルが、精霊術を食べるのにどうしても若干の時間が必要だ。

アグリアは、その隙をついた。

ヨルの術喰らいを発動させないよう、極力発動まで時間のいらぬ精霊術を多用することによって、ヨルを封じている。

「どうだ、ブス！頑張って勝てそうか？」

「……………」

レイアは、棍を杖代わりに立ち上がる。

「その猫の力も使えず、お前一人じゃあたしには勝てない」

「……………」

「頑張ったってどうにもならないことがこの世にはあるんだよ!!」

その嘲るようにそして言い聞かせるように罵るアグリアを見て、レイアは、顔を伏せる。

確かにこのままでは勝てない。

(だけど……………)

レイアは、伏せた顔を上げアグリアを睨みつける。

「認めない！その考えだけは、絶対！」

「なっ……………」

もう完全に心が折れたかと思っていたレイアから思わぬ切り返しが飛んできて、アグリアは面食らう。

「わたしは、頑張ってここにいるんだ……」

ゆらりと杖を地面から離す。

「それが間違いだなんて思えない……」

地面から離れた棍は、くるりと円を書いて回るとアグリアに向けられる。

「頑張ったって勝てないっていうなら、わたしは頑張って頑張って勝つ！」

「——っ！世間を知らない甘ちゃんが！調子乗ってんじゃねーよ！ブス！」
アグリアは、憎悪を乗せレイアに斬りかかる。

レイアは、迫る剣をかくぐり、棍をアグリアの腹に向かって放つ。

響く衝撃に思わず後ろに下がる。

「コイツ……」

思わぬ反撃に顔をしかめるアグリア。

だがいつもの人を嘲る表情に戻ると、レイアに反撃を仕掛ける。

アグリアは、レイアの懐に入り込み剣を横薙ぎに振る。

後ろに下がってかわそうとするが、僅かに剣がレイアの腕をかする。

「っっ！」

レイアの腕から血が流れる。

レイアが痛みにひるんだ瞬間、アグリアは、地面に手をついて黒い紐、ヨルの尻尾を引つ張り上げる。

「うっとおしいんだよー！」

そう言つて尻尾ごと投げ飛ばす。

ヨルはくるりと宙返りし、尻尾を戻す。

ヨルに攻撃を仕掛けている間にレイアの棍がアグリアに襲いかかる。

舌打ちをして、アグリアは剣で受ける。

攻撃が通らなかつたことを悟るとレイアは、棍を逆方向から打ち込む。

「ぐっ……………」

アグリアの息が詰まるがすぐに持ち直し、剣を振るう。

今度は、レイアか棍でアグリアの剣を受ける。

一太刀目は防いだ。

だが、そこからアグリアは更に剣戟を繋げていく。

乱雑に見えて確実にレイアの反撃を潰している。

ヨルが尻尾を伸ばそうとすれば、すかさず、ヨルに向かつて攻撃をする。

それをレイアが防げば、アグリアは、容赦なくレイアの方に刃を向ける。

(……………これが、四像刃^{フホウブ}、無影のアグリアってわけか…………)

レイアは、攻撃が僅かに切れた隙に棍を振るう。

だが、アグリアにとつてそれは予想通りだったようだ。

体を曲げながら避けると更に攻撃を続ける。

「バレバレなんだよー」

アグリアは、レイアに足払いをかける。

「!!」

剣にばかり気を取られていたレイアは、態勢を崩す。

崩れ落ちそうになるのを踏み込んで堪える。

だが、その僅かな隙が命取りだ。

大上段に構えたアグリアはニヤリと笑う。

「あたしの勝ちだーブスー」

アグリアは、崖を背にして振りかぶる。

その瞬間アグリアの側頭部に衝撃が走る。

思わず痛みをした方を振り返ると、そこには、

ティポにぶら下がり、宙に浮きながら杖を振るうエリーゼの姿があった。

エリーゼは、そのままスカートを翻し詠唱しながらプレザとアルヴェインの間に割って入った。



レイアの頭から肩に移動する時、ヨルが一度だけ、たった一度だけ目配せをした。

その一度だけの目配せで、エリーゼにはヨルが何を企んでいるのか分かってしまっ

た。

ホームズとヨルと共にジャオと戦ったエリーゼにわかってしまうのは、気に入らないが、仕方のないことなのだろう。

エリーゼは、戦いが激しくなったところを見計らって崖から飛び降りる準備をする。下から吹き上げる風に思わずひるむ。

過去に何回かこの技を使ったことはある。だが、それは全て着地が保障されていた。今回は違う。

今回は、着地は保障されていない。

失敗すれば本当に助からない。

(だけど………)

あのヨルが、ホームズの作戦抜きでエリーゼに頼んだのだ。

ホームズの生死が賭かかっていない戦いだ。本来なら、ヨルに戦う必要などないのだ。だが、ヨルは、その戦い現れ、わざわざ攻撃を受けている。

エリーゼは、口をきゅつと結んで飛び降りる。

そして、ティポにぶら下がり、空中を進んでいく。

おおよその位置に付いた瞬間エリーゼは、崖から現れる。

エリーゼは、大きく杖を振りかぶる。

(ここで決めなきや……………!!)

そのままアグリアのこめかみを打つ。

(女じゃない……………です!!!)

アグリアに一撃を与えるとアルヴィンの所へ急ぐ。

「深淵の盟約を果たせ！」

詠唱をしながら距離を詰める。

ブレザの精霊術は、アルヴィンの眼前まで迫っている。

どちらが早いのか、均衡した勝負だ。

しかし、アルヴィンに届くより前に見覚えのある人影がスカートを翻して現れた。

(間に合った!!)

杖を向け最後に技の名を告げる。

その名は……………



『リバー・イグニッション!!』

エリーゼの術とプレザの精霊術がぶつかり合う。

アグリアは、不意打ちを食らい、クラクラとする頭を押さえながらエリーゼを睨む。

プレザは、精霊術を発動させながらも目を丸くする。

アグリアの後ろは崖、アルヴィンの後ろも崖だ。

そんな二人の後ろから現れた。

後ろを取ることなどありえない。

いや、一つだけ手がある。

(崖を飛んできた!?)

そう道が他にないならそれしかない。

崖から降り、一同の死角を通ってアルヴィンとアグリアの後ろから現れる。

だが、一歩間違えば、自分が崖から真つ逆さまにおちてしまう。

そんなリスクのある手を十二歳の少女がやりきったのだ。

(っ！なんで気づかなかった！あの猫からは、目を離さなかった………のに?)

アグリアは、はつとしたように思い返す。

そう、ずっとヨルにばかりアグリアは、気を取られていた。

如何に術喰らいだけでなく、尻尾を伸ばすという非常識な手段を平気で使ってくるこの化け物を封じることだけを考えていた。

だから、エリーゼから意識を外してしまった。

—— 『手品師が右手を見せたら左手を見る』 ——

ウインガルの言葉が脳裏に蘇る。

まんまと油断した。

全てヨルの思い描いた通りだったのだ。

どこからかは分からない。

どこまでがホームズの入れ知恵なのか？それともヨルの考えなのか？

だが、そんな事はどうでもいい。

それよりもエリーゼが詠唱を始めている。

何としても阻止しなくてはならない。

突然状況変化にアグリアは、一人忘れてしまう。

そのため、いつの間にか立ち上がっていることに気づかなかった。

「活伸棍・円舞!!」
ワルツ

アグリアをレイアの棍の舞が捉える。そして、彼女のリアル・オーブが光った。



「ぐっ……………!!」

エリーゼの最大出力は、プレザに押されていた。

これでは、ジリ貧だ。

いずれ、エリーゼの方が押し負ける。

おまけにこれだけのことをやりながら守護方陣が消える気配がない。

(このままじゃ……………!)

相手は四象刃^{フォーアップ}。

エリーゼ一人で、対抗出来るはずがない。

分かりきっていたことだ。

実力差なんて、最初から火を見るよりも明らかだ。

しかし、諦められないわけがある。

どうしたって、その実力差というものをひっくり返して来たあの男の顔がよぎる。

(考えなきや……………勝つにはどうしたらいいか……………)

エリーゼは、杖を握る手を強める。

(ホームズなら、どうするか!!)

「ローエン! ジュード!」

エリーゼは、考えに至ると同時に口にしていた。

勝てない相手への勝ち方。

それは、一人で戦わない、ということだ。

「お任せ下さい……………!」

守護方陣で拘束されながらローエンは、何とかナイフをプレザの足元に投げる。

そして、一瞬だけナイフで結界を作り出し、プレザを守護方陣から隔離する。プレザから離れた守護方陣は、掻き消える。

「ジュードさん!!」

ローエンの言葉とジュードが動き出したのは、同時だった。

ジュードは、プレザの本に狙いをつける。

(さつき、アルヴィンが本を弾き飛ばしたら精霊術が消えた……だったらい)

ジュードは、踏み込みそして、プレザの本を蹴り上げる。

「なっ!？」

宙を舞う本、そして消えるプレザの精霊術。

それが消えたことにより、エリーゼの精霊術は真つ直ぐに進み、遂にプレザをとらえた。

「——っ!!」

突如自分を襲うその衝撃にプレザは、声も出ない。

プレザを捉える精霊術。

だが、それだけではダメだ。

それだけでは倒せない。

「だったら……!!」

エリーゼのリリアル・オーブが輝いた。



”ぶっ飛べ!!”

レイアの棍がアグリアの顎をかち上げる。

”ぐるぐるぐるー!!”

そのまま棍を回す。

”ブンブン回して……………”

レイアは、棍を高々と宙に放り投げる。

”大ジャンプ!!”

宙を舞う棍をレイアは、ジャンプして掴む。

そして、アグリアに狙いを定める。

アグリアは、剣を構える。

狙いを定めたら、あとは振り下ろすだけだ。

”活伸棍——”



『”目標ロック!!”』

ティポが、プレザに狙いを定める。

”チャージ完了！発射！”

エリーゼは、杖の先でマナを集め、ティポを打ち出す。

『”覚悟しろー!!”』

エリーゼに打ち出されたティポは、くるくるとプレザの周りを回りながら筒状の魔法陣を描く。

その魔法陣の中にプレザは、閉じ込められる。

描き終わるとティポは、すつとエリーゼの元に戻る。

『ただいまー!!』

ティポの言葉にエリーゼは、頷いて杖を振り上げる。

そのゆつくりとした起動がプレザに終わりを告げる。

エリーゼの口が技の名を告げる。

名は、

「リベール——」

あげていた杖を振り下ろす。

構えていた棍を振り下ろす。

『——ゴ—ランド!!』

「——神樂!!」

エリーゼの精霊術は、魔法陣全てから紫色の闇の精霊術を発動しプレザを包み込んだ。
だ。

その闇の精霊術の奔流にプレザは、なす術がない。

レイアが棍とともにアグリアに向かって落下してきた。

剣で防ごうと構えたが、レイアの棍は、それすらも貫きアグリアへと注がれた。

「——っ!!」

「『ハアアアアアアアアアアアアアアアア!!』」

二人とぬいぐるみの慟哭が雨粒を弾きながら、山に響き渡る。

そして、水飛沫が晴れる頃そこに立っていたのは、

「……………ケホ」

「ふう……………」

レイアとエリーゼだ。

二人は、お互いがその場に立っているのを確認するとにつこりと笑ってハイタッチをした。

ヨルはそんな二人を遠目に見ながら溜息つく。

「やれやれ、ガラじゃないことはやるもんじゃないな」

そう言つて千切れた尻尾を元どおり直した。

蹴りをつけよう

「瞬迅剣！」

「瞬迅脚！」

真つ直ぐに突き出されたローズの刀とホームズの脚がぶつかり合う。

ギリギリと足と剣が押し合う。

「ちっ！」

ホームズは、舌打ちとともに足を下ろす。

ローズも刀を下げ、もう一刀をホームズに向かって振るう。

ホームズは、足を踏み替え、回し蹴りを迫り来る刀にぶつける。

ホームズは、ぶつけた蹴りの勢いをそのままに身体を捻つてもう一撃蹴りを放つ。

ローズは、迫るホームズの蹴りに刀を振るう。

ぶつかり合う刀と蹴り。

火花が散り、雨粒は刎ね飛ばされる。

無数に繰り返される攻撃の応酬に二人は、息つく暇もない。

ローズの刀がホームズの肩に振り下ろされる。

それと同時にホームズの蹴りがローズの腹に叩き込まれた。

「ぐっ！」

「くっ！」

ローズは後ろに飛ばされ、ホームズも無理な姿勢で蹴つたため仰け反るように転がった。

ホームズは、肩から流れる血を押さえながら立ち上がる。

ローズは、響く腹部を押さえながらなんとか立ち上がる。

「魔神剣……………」

刀を振るおうと瞬間、胃の中のもものがせり上がってきてローズは、膝について吐き出した。

ホームズは、目を険しくさせローズに向かって駆け出し、そして膝をついているローズに向かってトーキックを放つ。

いっぺんの慈悲もなく放たれる蹴り。

しかし、それ届くことはない。

がきんと鉄がぶつかり合う音と共にホームズの蹴りが止まった。

ローズが刀の柄でホームズの蹴りを受けたのだ。

「な……………めんなあ!!」

ローズは、立ち上がると共にホームズズの顔面を柄を握りこんだまま殴りつけた。思わぬ攻撃にホームズズは、地面に倒れこむ。

(口切った……………)

それでも仰向けになろうと態勢を直した瞬間、ローズが切っ先をホームズズに向けながら落ちてきた。

「っ!!」

起き上がる時間はない。

ホームズズは、首をひねってかわす。

ホームズズを捉えることの出来なかつた刀は、ホームズズの耳の真横に突き刺さつた。

起き上がろうとするとローズは、ホームズズにまたがり、動きを封じると共に刺さつた刀を引き抜く。

雨に濡れる黒髪がばさりとホームズズにかかる。

金色に輝く瞳を見下ろす、暗く濁つた黒い瞳。

ホームズズは、はつと鼻で笑う。

「地平線の君が、随分と色っぽい真似をするじゃあないか」

「本当、いつでも減らない口ね」

ローズは、ホームズズの喉に向かって突き立てる。

だが、刀の切っ先が届くより早くホームズがローズの背中を蹴りつける。
「っ……………」

態勢を崩したローズの顔面を掴み、立ち上がると同時に地面に叩きつけた。

「ハア……………ハア……………ハア……………ぐっ！」

広がる肩の傷にホームズは、顔をしかめながら立ち上がる。

ローズも泥にまみれながら、何とか立ち上がる。

長く黒い髪は、泥で所々濁った茶色に染まっている。

「……………まだやるの？」

「君が言ったんだろう？勝って証明すると」

ホームズは、肩から手を離す。

「そして、おれは言ったはずだ。勝って君を否定すると」

その言葉にローズは、ピクリと身体を動かす。

「認めないのね、ガイアス王のこと」

「そこで直ぐに『私のこと』と言えない君を否定するんだ」

ローズの刀を握る手が強まる。

「誤魔化すんじゃないわよ。貴方の両親の故郷を滅ぼそうとするから、ガイアス王を

認められないんでしょう？」

次の瞬間、ローズの刀がホームズに突き出された。

ホームズは、左手の盾で受け止める。

「違うと言っても信じないだろうねえ……………」

ホームズは、そう言つて盾で押し返す。

「ま、あながち間違いつてわけでもないしね」

押し返されたローズは、態勢を立て直すと両刀をホームズに向かって左右から振るつた。

ホームズは、地面に着いた両手を支えにして、両足を広げ、迫り来る両刀を掴むローズの手を止める。

そして、そのままの姿勢でローズの顎を蹴り上げようとホームズの安全靴が襲う。

ローズは、間一髪のところまで一步下がる。

「私は、許さない。家族を殺し、マーロウさんを殺し、ミラを追い詰めた、エレンピオス人を許さない！絶対！」

そう言うのと身体を回しながら、刀を繰り出す。

「その為の力が、強さが、今の私にはある！」

迫り来る白刃をホームズは、盾で受け止める。

「強さだつて……………」

ローズのもう一刀が迫る。

ホームズは、その振り下ろされる刀を握りしめて止める。

「馬鹿言え、君は力をつけただけだ」

ホームズは、右脚を下げる。

迫る蹴りをおろそうと握られている刀に力を込めるが、動かない。

諦めて刀から手を離し下がろうとする。

「強くない!!」

だが、下がるより早くホームズの蹴りがローズに届いた。

「ぐっ……!!」

ホームズは、握りしめている刀をローズに向かって放り投げる。

「死ぬ間にマールウさんに言われた」

ホームズは、そう言ってローズを指差す。

「君は、自分でも気づかない内に成長したフリをするそうだ」

蹴られた腹を押さえながらホームズを見る。

「黙れ……」

「どいういう意味か今やっとわかった。君は、今、成長したフリをしている」

「黙れ……」

「まだ、ついでに気づいていないようだからもう一個」

「黙れ」

「君、マーロウさんが死んだこともう認めてるだろう？」

「黙れと言っている!!」

ローズは、辺りの空気を震わせる程の慟哭と共にホームズに斬りかかった。

「貴方が、私を……マーロウさんを語るな！」

ローズの刀をホームズは、一歩引いてかわす。

「だったら、成長してみせたまえ!!」

ホームズの蹴りがローズの刀とぶつかり合う。

「マーロウさんの遺言は、これで全部じゃない」

ホームズに弾かれた刀とは、逆の刀をホームズの首に向かって振るう。

「黙れと言っ……」

『『頑張れ』だとさ』

ホームズの首に迫る刀がピタリと止まった。

「今、君は頑張ってるのかい？」

静かに紡がれる言葉にローズの刀は、前に進むことができない。

「逃げる」ことが悪いとは言わない。必要なことだし、おれなんてしよつちゅう逃げて

る」

ホームズは、首筋に当てられた刀には、目もくれずその金色の瞳でローズを見つめる。ローズの歯がガチガチと震える。

刀を振るわなければ、目の前の金色の瞳の男は、言つてはならないことを言う。そんな絶対とも言える予感があつた。

それを止めるには、この刀を振るうしかない。

だが、刀は、前に進まない。

(やめろー言うなー！)

「でも逃げることは、頑張つてるとはいえないだろうか？」

今まで自分を騙して誤魔化してきたその行いをホームズは、迷いもなく引きずりだした。

「これで終わりよ!!」

ローズのリリアル・オーブが輝く。

ここから、繰り出されるのは秘奥儀だ。

だか、輝き始めたリリアル・オーブは、オーバーリミッツ最高潮にたどり着くことなく、かき消えた。

リリアル・オーブに誰よりもローズが驚いていた。

「そんな………なんで!?!」

「リリアル・オーブは、確か成長するものだろう?」

動揺するローズに対し、ホームズは静かに告げる。

「成長しているフリをしている君が、使いこなせるわけないだろう」

ローズは、絶望した顔リリアル・オーブを見る。

技は使えている。

だが、それより上のことは出来そうにない。

「うるさい!! 貴方に何がわかる!!」

ローズは、刀を握りしめホームズに駆け出す。

ホームズは、迫り来るローズに向かって走り出す。

近づけば、刀だけの間合いにならない。ホームズの間合いにもなる。

ローズが二刀で繰り出すは乱撃。

無数に襲いかかる白刃にホームズは、蹴りと盾、それら全てを使って捌く。

だが、捌ききれなかった斬撃は、確実にホームズに傷を与えていく。

「つつ………！」

痛みでホームズが顔を歪めたその瞬間、ローズは、一瞬動きを止める。

攻撃の手を緩めたのではない。

右の刀を刃を外側にし水平に構え、力を込める。

繰り出される右の片手突き。

ホームズは、盾でいなして蹴りを叩き込む。

「ぐっ………！」

腹部から走る衝撃にローズは、思わず呻く。

だが、ローズはぎりつと歯を食いしばって耐えると、そのまま左手の片手突きをホー

ムズの肩に食らわせる。

「がっ………！」

ローズは、いなされた刀を握りしめ、鬪気を纏う。

「獅子戦哮……」

ホームズは、片足に鬪気を纏う。

「獅子戦哮……」

ローズは、ホームズをキツと睨みつける。

ホームズのその金色の瞳でローズを睨みつける。

「氷牙!!」

「焰!!」

雨で氷の強さを得た獅子と雨で弱った焰の獅子がぶつかり合う。

二匹の獅子はしばらく喰いあつた後、はじけた。

その衝撃で二人は地面に投げ出された。

「つが………!」

「ツガハ………!」

二人の身体に衝撃が走る。

口から出る血の量が二人の限界を物語っていた。

「ホームズ………」

戦いの終わったレイアは、そう呟くとホームズに駆け寄ろうとする。

だが、それをヨルが止める。

レイアが問い詰めるより早く、ヨルがホームズの方を顎で示す。示された方を見るとホームズの指が動いた。

動き始めた指はギユとぬかるんだ泥を握りこむ。

それに呼応するようにローズの手もギユと握られた。

ホームズは、肩に刺さっている刀を引き抜くと地面に突き立てる。

「ハア……………ハア……………ハア……………」

荒い息遣いと共にホームズは、身体を起こし始める。

ローズは、そんなホームズを見て目を丸くする。

「そんな……………どうして……………立とうするの……………」

ホームズは、突き立てた刀に力を込めながら立ち上がろうとする。

だが、倒れてしまう。

「どうして!」

「負けないためだ」

ホームズは、再び刀に手を伸ばす。

「見せかけの強さにハリボテの信念、そんなものを後生大事に持つてる君に負けないためだ」

「何ですって……………」

ホームズを睨みつけるローズの瞳に再び力が宿る。

「そんな君におれが負けたら、君は、もう戻ってこれない」

曲がった信念を否定されなければそれは、肯定と一緒だ。

肯定された楽な信念をローズは、信じ続ける。

ホームズは、今度は刀を支えにすることなく、刀に伸ばしていた左手の盾で倒すと拳を地面に叩きつける。

「そんなことさせない……………おれは……………ホームズ・ヴォルマーノは、昔馴染みにそんな道を歩ませない」

ホームズの身体がゆっくりと起き上がる。

途中何回も地面に戻りそうになるが、その度にホームズは、歯を食いしばって身体を上げる。

ローズもゆっくりと起き上がる。

このまま倒れていたら負ける。

その直感がローズを駆り立てる。

だが、それは、ホームズも同じだ。

全身に力を込めて立ち上がる。

目の前の濁った暗い瞳の昔馴染みを見るたびにここで寝ている場合ではないと決意を固め、それは力となる。

目の前の人間をここまで追い詰めた原因のほとんどは、ホームズだ。

友人に傷ついて欲しくないと、ありとあらゆる手を尽くした結果なのだ。

あの時、アオイ村の時とは違う。

全てホームズの善意から出た行動だ。

だが、それでもローズは救われなかった。

追い詰めてしまった。

(だから……救わなきゃいけないんだ！寝ている場合じゃあないんだよ!!)

「ぐっ……………ああ」

立ち上がろうとするたびにホームズの身体から血が、流れる。

呼吸が乱れる。

「ホー……………」

レイアがホームズの名を呼ぶ前にヨルが尻尾で口を塞いだ。

「これはやつらの戦いだ。手出しも口出しも声援もあつてならない」

ヨルは、そう言う尻尾を解く。

「やつらだけの力で蹴りをつけなくてはならない。その勝敗に一片の言い訳の余地も

二人は慟哭と共に雨粒と泥を飛ばして立ち上がった。

二人とも肩で大きく息をしている。

明らかに立つだけで精一杯だ。

「お互い……………限界だね」

「一緒にしないで……………まだ素振り一回なら出来るわ」

ホームズは、地面に落ちている刀を蹴る。

蹴られた刀はくるくるとゆつくりと円を描いてローズの足元に迫り着く。

ローズは、それを蹴飛ばし自分の進行方向から外す。

「奇遇だね……………おれも回し蹴り一回なら出来そうなんだ」

ホームズは、力なく笑ってそう言った。

ローズは、納刀しようとするが、せり上がる吐き気にそれを諦め、刀を担ぐ。

ホームズは、乱れる呼吸を無理矢理押さえる。

ローズは、せり上がる吐き気を無理矢理押さえこむ。

「これで、」

「うん、これで」

二人はじりつと前に進む。

「蹴りをつけよう」

二人は、踏み込むと同時に駆け出した。

雨を弾き、足元に纏わりつく泥を振り払い、目の前にいる相手をだけを見つめて。目の前にいる相手に自分の一撃を喰らわせるために。

「ハアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

「だあああああああああああああああああらっ!!」

二人の慟哭は、こだまし霊山中に響き渡る。

ローズの白刃が雨を切り裂き、輝きながらホームズの右脇腹に迫る。

ローズの右足が必殺に一撃を放つため勢い乗せ踏み込まれる。

ホームズは、ローズが間合いに入るのを確認すると右足に走る勢いを乗せ身体を回わし、左脚へと力を乗せていく。

その左脚は、ローズへと迫る。

白刃と黒い安全靴。

その二つは、互いの体に向かって突き進む。

そして、それらは、やがて辿り着く。

「ぐっ……………」が、

ローズの白刃がホームズの身体に届く。

白刃に切りつけられたホームズの右脇腹から、血が噴き出す。

「カハっ……………」

ローズの脇腹にホームズの踵がめり込んでいた。

ローズの口からは血が吐き出される。

二人の攻撃は、同時だった。

二人は、その姿勢のまま微動だにしない。

しばらくして、口を開く。

「……………負けた」

ホームズの身体がぐらりと傾く。

身体が傾いていく中ホームズは、地面を踏み込み、倒れるのを堪える。ローズは、そんなホームズを見て、やっと笑った。

「……………強いね、ホームズ」

ローズは、そう言って地面にゆっくりと倒れていった。

泥と雨にまみれながら倒れるローズ。

ホームズは、小袋から煙管を出して啜える。
「君もすぐに強くなるよ」

そう言うのとホームズもゆっくりと倒れた。

雨が降ったその後

「ホームズ！ローズ！」

ジュード達は慌ててホームズとローズに駆け寄った。

エリーゼとジュードが二人の治療をする。

するとホームズの方が先に目を覚ます。

「ありがたい？」

「呑気な声出してる場合じゃないよ」

ジュードは、淡々とホームズの治療を進めていく。

「プレザさん達は？」

ホームズの言葉にレイアが指をさす。

そこには、倒れているプレザとアグリアを見張るアルヴィンとローエンがいた。

「そ、倒せたんだ。やっぱり凄いね君たち」

「褒めてくれて嬉しいよ」

「出来ればにこやかな笑顔で言って欲しいなあ……………」

ホームズは、ジュードの冷め切った視線に耐えながら治療を受ける。

「まあ、こうなるって分かってたけどね」

ジュードは、そう言いながら治療をしていく。

するとエリーゼ達が治療をしているローズが目を覚ました。

「ん……？」

「起きたかい、ローズ？」

ローズは、ぼんやりとしながら治療をしているエリーゼ達を見る。

「……………私まで治療してくれるの？」

「あ、そうか」

レイアは、ポンと手を叩く。

そうホームズとは、本気でやり合っていた。

敵とを考えても何らおかしくはない。

「何も考えてませんでした」

エリーゼは、にっこりと笑ってローズの治療を続ける。

ローズは、首を動かしホームズの方を見る。

「見せかけの強さにハリボテの信念、か……………」

ローズは、ポツリと呟く。

ホームズの言うことは全ての的を得ていた。

(きつとホームズ達が来なければ、家族は消えることはなかった)

エレンピオスを憎む心、そして、それがエレンピオスを滅ぼそうとするガイアスの信念とあった。

だから、ガイアスの元に走った。

楽だったからだ。

信念を自分で持つよりも人の信念に同調するほうがはるかに楽なのだ。

例えその信念が崩れる日が来ても自分は傷つかない。

逆に信念が崩れなければ、自分は正しい道を歩み続ける事が出来る。

ホームズを殺しかけガイアスの信念に寄り添った時には、もうローズ自身戻れなくなっていた。

「でも、それでも助けてくれた……………」

——仲良くしてみたら？きつとその子は、友達思いだよ。断言してもいい——

今はいない姉の言葉が蘇る。

(本当、その通りね……どうして忘れてたんだろ)

ホームズに抱く感情は、憎悪だけではない。

少しだけ時間はかかったが、あの雪の降る夜なくした感情がローズの元へと戻ってきた。

視線の先のホームズは、ローズより先に目が覚めただけあって身体を起こせるところまで回復していた。

ジュードは、刀を掴んで血だらけになっているホームズの手を治療するため、盾を外していた。

そして外されて露わになった左手を見て、ローズは、目を丸くしてそれからポツリと呟く。

「ねえ、ホームズ、その指輪……」

ローズの言葉にホームズは、ハツとしたような顔をして隠そうとする。

だが、それより先にローズは言葉を続ける。

「どうして、右手と左手で同じデザインなの？」

言葉が出ないホームズに変わり、ローズは少しずつ言葉を繋いでいく。

辿り着くのを止めてはならない。

「言ったわよね。確か、ルイーズさんから貰ったって」
「……………」

「どうしてルイーズさんがくれたものと同じデザインなの？」

「……………えつと……………」

ホームズは、必死にこの場を切り抜ける言葉を探す。
気付かせるわけには、いかない。

だが、もう遅い。

ローズは、気づいてしまった。

なにせ、それは女の子なら誰もが憧れるものだから。

「それ、結婚指輪じゃないの？ 貴方の両親の」

ホームズは、言葉が続けようと口を開くが、答えることができずに小さく頷く。

ローズは、そこから更に辛そうに目を伏せる。

結婚指輪があることは問題ではない。

問題は、何故ホームズがそれを持っているかということだ。

この短い間に何度後悔したか分からない。

しかし、自分から言わなければホームズは、きっと永遠に教えてくれない。

「ねえ、どうして死んだ旦那さんとの結婚指輪を貴方が持っているの？ どうしてローズさんが持っていないの？」

ローズの言葉にホームズは、諦めたように笑っている。

「分かっているんじゃないのかい？」

ローズは、静かに頷く。

「ルローズさん……もう亡くなってるその二つの指輪は、形見、違う？」

涙を堪えながら紡がれたローズの言葉にホームズは、静かに頷いた。

そうホームズは、確かに嘘は言っていない。

指輪は、母親から貰ったものだ。

ただ、タイミングが死ぬ間際だったということだ。

それだけで、意味合いが変わってくる。

指輪を失くさないよう常に指にはめ、そして、壊さぬよう拳を使わないで戦う。

気付いてしまえば単純なことだ。

ホームズの一見無意味なことわりは、全てここに繋がる。

実を言うとミラは、あのナハティガルとの戦いの後、あの盾が砕け散った時、ホーム

ズの両手に同じデザインの指輪がある事に気付いた。

だが、人間とずれているミラには、不思議だなと思わなかった。

しかし、ホームズがポケットに手を入れて隠した時、それが違和感として残った。

幸か不幸か、それをレイア達に相談したため、レイアはホームズの母の真相に誰より

も早く辿り着いたのだ。

ローズは、腕で目を隠す。

——貴方には、母親が、ルーズさんがいるじゃない!!そんな貴方が知ったよ
うな口をきかないでよ!!——

「ごめん……………ホームズ、ごめんなさい」

震える声に涙を堪えようと我慢している様子が伺える。

だが、腕で隠したその隙間から水滴がいくつも伝って落ちていく。

「私……………私……………」

あの時、ホームズだっていっぱいいっぱいだったはずだ。

それでもローズの世話を一生懸命やってくれた。

そんな昔馴染みにかけた一言を思うとローズは、やりきれない。

もつと掛けるべき言葉があつたはずだ。

もつとやれることがあつたはずだ。

(なんで、なんで、私はいつも終わってから……………)

ローズの治療もホームズの治療もいつの間にか終わっていた。

ホームズは、声を押し殺して泣くことを堪えているローズの腕を退ける。

「我慢しなくてもいいだろう？」

覗き込むホームズの金色の瞳を見ると更にローズの目から涙が溢れる。

「泣いていいわけじゃないでしょ……私が、貴方に何をやったと思ってるのよ……」

必死に歯をくいしばるローズ。

「泣いて許しを請う真似なんて私が許さない……」

ローズは、そう言っ腕で顔を覆うとする。

それをホームズが抑える。

「ホームズ……」

「あのねえ、息をするのを止めろなんて言わないだろう？それと一緒にだよ」

ホームズは、そう言っ腕でハンカチをローズに渡す。

「ほら、使いたまえ」

ローズは、受け取ったハンカチで涙を拭いながら大声で泣き出した。

ホームズは、少しだけ微笑んでそのままアルヴィンとローエンの元へと歩いて行っ

た。

途中で振り返るとレイアとジュードとエリーゼを手招きして呼ぶ。

三人は顔を見合わせるが、直ぐにホームズを追った。

レイアは、ちらりとホームズを見る。

「ホームズ、いいの?」

「今のあの子は、泣いてる時に側にいない方がいいだろうか?」

ホームズは、何てことなきように返す。

基本的に泣き止むまでは側にいるホームズから出てきた言葉にレイアは、一瞬だけ首をひねるが直ぐに納得したように頷く。

「まあ、あれだよ。笑顔でいて欲しいけどさ、それ以上に泣くことを我慢して欲しくな
いんだよなぁ」

ホームズは、そう続けるとローエン達の元に辿り着く。

「そう言うことローズに言っただけだよ」

ジュードの言葉にレイアとエリーゼも頷いている。

「いいの。こんなただの感想なんだから。あの子は知らなくてもいいんだよ」

ホームズは、ひらひらと手を振る。

レイアは、そんなホームズを見てため息を吐いた後につこりと笑う。

「そんなんだからホームズは、モテないんだよ」

ホームズは、肩をすくめる。

プレザは、ホームズの気配を感じると顔を上げる。

「貴方の策かしら？」

「？何の話です？」

「俺の策だ」

ヨルは、ホームズの足元で欠伸をしながら返す。

「……………何したんだい？」

「したのは、エリーゼだ」

ホームズは、エリーゼに視線を送る。

エリーゼは、悪戯っぽく笑う。

「後で説明しますね」

そんなホームズ達とアルヴィンを見るとプレザは、力なく微笑む。

「アル、数日間だけだったけど、貴方の側にいられて幸せだった」

プレザの言葉にアルヴィンは、苦しそうな表情になる。

「プレザ……………俺は……………」

「よかった。貴方もいたいと思える場所があるわ」

プレザは、優しく、そして寂しそうな顔でアルヴィンを見る。

「アルヴィン、気付いて」

ローズは、ゆっくりと涙を拭きながらプレザ達に近づく。

「貴方もよ、お嬢さん。貴方の居場所は、こっちじゃないわ」

プレザに優しく言われローズの瞳から再び涙が溢れ出した。

「プレザさん……………」

次の瞬間、地響きが起こった。

思わぬ衝撃にホームズ達はよろけたが、何とか踏ん張った。

だが、プレザとアグリア、そしてローズの地面は、崩れ去った。

「なっ!!」

アルヴィンとレイア、そしてホームズは走り出した。

「ローズ!!」

ホームズは、手を伸ばすがローズには届かない。

ヨルの非常識も間に合わない。

迫るホームズの手が届かないことを悟ったローズは、寂しそうに笑う。

「バイバイ」

ローズは、それだけ言うとうっくりと崖下へと落ちていった。

ホームズの脳裏に巡るのは、別れてきた人たちの最後の顔だ。

（させるか！そんなこと!!もうあんな顔を見たくないと思いつながら生きてきたんだよ

!!
)

「くそつたれええええええええ!!」

ホームズは、ローズに向かって手を伸ばしながら落ちていった。

後もう少し、それを何度も繰り返しながらようやくローズの手を掴んだ。

ローズは、目の前で自分と同じように落ちていくホームズを見て目を見張る。

「貴方……………どうして!!」

ホームズは、その質問に答えずローズを地面から庇うように抱きかかえる。

「ハア……………」

ヨルは、ため息と共にマーロウから貰ったリリアル・オーブを取り出す。

結局ホームズは、改善されたとはいえ、生き方を曲げなかった。

その挙句がこれだ。

正直に言ってしまえば、助ける義理はない。

自分から飛び降りたのだから、殺害で死ぬわけではないのだ。

死んだところでヨルまで死ぬということはない。

寧ろ封印が解ける。

ヨルにとっては万々歳だ。

だが、そんなヨルの脳裏によぎるのは、あの雨の日とそしてもう一つ廃墟となった村だ。

「……………約束だからな」

ヨルはそう言うのがりつとりリアル・オーブを噛み砕いてホームズを追って落ちていく。

リアル・オーブに蓄積されたManaがヨルの中に集まっていく。

そして、黒霞がヨルを包む。

それが晴れるとそこには、いつかの黒虎の姿があった。

「ヨル……………」

エリーゼは、ポツリと眩く。

ヨルは、真っ直ぐに駆け下りていく。

ホームズは、そんなヨルを見つけるといつもの小憎らしい笑みを浮かべる。

「来るのが遅いぜ、ヨル」

「言ってる」

ヨルは、そう言うのとローズを抱きかかえるホームズを自分の背中に乗せ、そのまま空中へと飛び上がった。

ホームズは、つかまりながらヨルを見る。

「ねえ、ヨル」

「無理だ。お前とその小ムスメを乗せるのが限界だ。他の余裕は、ない」
遙か崖下へというプレザとアグリアを思うとホームズの瞳が少しだけ揺れるが直ぐに頭を振ってヨルの方を向く。

「ありがとう、ヨル」

ヨルはニヤリと笑う。

「約束したからな、マールウと」

分かった………元々一連托生の身だ。一回だけはどうかしてやる――

「……………そうだったね」

「まあ、もう一人とも約束しているんだが……………」

ヨルは、そう言つてぴよんと崖の上に飛び乗った。

その見覚えのない姿にレイアとジュードとアルヴィンは、目を剥いて驚く。

「ヨル……………なの？」

「当たり前だろ」

ヨルは、そう返すとホームズを下ろす。

ホームズは、抱きかかえていたローズを下ろす。

そして、いつもの黒猫の姿に戻った。

「プレザとアグリアは？」

アルヴィンの言葉にヨルは首を横に振る。

「……………そっか……………」

アルヴィンは、悲しそうに目を伏せた。

ローズは、顔を俯かせ再び泣く。

「どうして……………どうしてよ！どうして……………貴方は、私を……………」

ホームズは、俯向くローズの顔を両手で挟んで上げさせる。

「つまらないことは、言うもんじゃあないよ、ローズ」

ホームズは、そう言って少しいだけ拗ねたような顔で続ける。

「友人に生きて欲しいって思う理由は、腐るほどあるんだよ」

ホームズの言葉にローズは、再び涙が溢れる。

「ハンカチ一枚じゃ足りないそうだねえ……………」

「うるさい！やかましい！だまれ!!」

ポカポカと叩きながらローズは、大泣きした。

ホームズは、甘んじてそれを受けながら、ポツリと話しかける。

「……………ねえ、君もおれ達と来ないかい？」

ホームズの言葉にローズは、目を丸くする。

「いいの？だって、私は……………」

「NOじゃないってことなら、了承ととるよ」

ローズの言葉を遮ってホームズは、尋ねる。

目をそらすこと無く告げるホームズにローズは、とうとう泣き崩れた。

自分が何をやったか、何を言ったか、それが分からないローズではない。

「本当に……………いいの？私は……………貴方に一体どれだけのことを……………」

「なんだい？行きたくないのかい？」

ローズは、涙でぐしゃぐしゃになりながら言葉を続ける。

この言葉を言うことなど許されないと思っていた。

アレだけのことをやっておいてこんな我儘が許されるわけがない。

それでも叶うなら、という思いが口から溢れる。

「行きた……………い……………みんなと一緒にいたい……………」

ホームズは、につこりと笑った。

「おかえり、ローズ」

ホームズという言葉にローズは、涙を拭う。

「うん……遅くなってごめんなさい」

マクスウエル

虎穴に入らずんば何も得ず

「……………不思議だな」

ヨルは、ホームズとローズのやり取りを見ながらそう呟いた。自分を殺しかけたような相手をホームズは、受け入れている。

そんな光景がヨルには、信じられなかった。

瞳の色のことは、記憶が消えているからと納得出来るが、それでも自分だったら無理だ。

「二度壊れてしまえば、それまでじゃないのか？」

ヨルの言葉にローエンは、ヒゲを撫でる。

「それは、人によりますよ。壊れてしまえば、もう二度と会いたくないと切り捨てて生きていく、そういう人もいますし、ホームズさんみたいに直して繋ぎとめておこうとする人もいます」

「お前みたいにか？」

ヨルの言葉にローエンは、寂しそうに微笑む。

「私は……そうですわね……選べませんでした。逃げてしまった。その事に後悔がないといえは嘘になります」

「後悔、か……………」

「ええ。ヨルさんにもそういう方が？」

ヨルの脳裏に自分と対峙する炎を纏った精霊が蘇る。

ヨルの側にいて、そして、一番最初にヨルと戦ったものだ。

「微妙なところだな。まあ、俺というより、奴の方だろうな」

思い出すのだ。

あの時の感情を押し殺した奴の顔を。

ずっとその意味を考えていた。

「なるほど、ようやくわかった気がする」

ヨルは、そう答えながら俯いているレイアに気づく。

レイアの元にジュードが行くが、レイアは、大丈夫と首を振る。

「わたしは、いいからアルヴィンのところに行つてあげて。わたしが行つても、ね」

レイアは、アルヴィンに撃たれている。確かにそれは、お互いのためにならない。

ジュードは、頷くとアルヴィンの元に歩いて行つた。

「損な性格だな」

ヨルの言葉にレイアは、腰に手を当て胸を張る。

「じやなきや、ジュードなんか好きにならないよ」

その言葉にローエンとヨルは目を丸くする。

「いいますね……」

「まあね」

レイアの視線の先をヨルは追う。

「白髪女の手、掴めなかったのか？」

ヨルの言葉にレイアは、首を振る。

「掴めた。だけど、振り払われちゃった。『頑張ってもこの世にはどうにもならないこ

とがあるんだよ！』って」

レイアは、悲しそうにこう答える。

ヨルは、尻尾を揺らしながら、あの時の言葉を思い出す

—— 「わたしは、頑張ってここにいるんだ……」 ——

—— 「それが間違いだなんて思えない……」 ——

—— 「頑張ったって勝てないっていうなら、わたしは頑張って頑張って勝つ

！
—

「命を賭けて、お前を否定したわけか……………」

「うん……………」

「わたし、どうすれば良かったのかな？」

「俺の言葉が聞きたいのか？」

ヨルは、怪訝そうな顔をする。

レイアは、少しだけ頷く。

「レイアは、白髪女の手を掴んだ。それだけで十分だ。あれ以上はない」

「ホームズは、ローズを助けたよ」

「アレは、あいつがおかしいだけだ。おまけに俺のおかげで助かった」

ヨルは、バツサリ切り捨てる。

そして、レイアを見る。

「納得してないな」

ヨルの言葉にレイアは、慌てて手を振る。

「い、いや、そんなことは……………あるかな？」

「正直だな、お前も」

ヨルは、呆れたようにため息を吐く。

「だから、いうの嫌だったんだよ」

ヨルの言葉にレイアは、困ったように頭をかく。

それから、ヨルを真っ直ぐに見る。

「分かった。わたし、考えるよ。大事なことだもん、自分で考えるよ」

ヨルは、尻尾を揺らすと頷く。

「煮詰まったら、相談ぐらいには乗ってやる」

「ふふふ、ありがとう」

「ローエンが」

「いや、ヨルも乗ってよ」

ローエンは、ホッホッホと笑う。

「なら、レイアさんもヨルさんの相談に乗るといいですよ」

「そうだね」

ヨルは、大きくため息を吐く。

「気が向いたらな。ほら、ホームズが呼んでるからそろそろ行くぞ」

ヨルに促され、レイア達はホームズの元へと歩いて行った。

ヨルは、ホームズの肩にぴよんと飛び乗る。

「人間は、面倒くさいな」

「何、どうしたの？」

首を傾げるホームズにヨルは尻尾を揺らして答えに替える。

「さてと……………」

ホームズは、ヨルから視線を外して目の前に広がる黒い穴のようなものを見つめる。

「これ、精霊術かい？」

「ええ。今にも消えてしまいたいそうなほど、ひどく不安定ですけれど」

ホームズは、しばらく考えた後肩にいるヨルを見る。

「試しに入ってくれないかい？」

「今のさつきで、よくそんな言葉が出るな」

ヨルとホームズの醜い言い合いにジュードとレイアは、ため息を吐く。

「わたしから入るよ」

言い合うホームズとヨルを他所にレイアがそう宣言する。

するとアルヴィンが一步前に入る。

「いや、こういうのは、おれの役目だ」

アルヴィンの静かな物言いに一同は、少し迷う。

そんな中、言い合いをしていたはずのホームズとヨルはいつの間にか取っ組み合いへと発展していた。

そして、

「あ」

ホームズとヨルは薄暗い黒い穴へと落ちていった。

「ああああああああああ!!」

間抜けな声と共にホームズとヨルが一番手をとった。

「えーつと……………」

レイアが引きつった笑みを浮かべながら、アルヴィンを確認すると、なんとも言えない顔でうなずいた。

「じ、じゃあ、わたし行くね」

そう言ってレイアが有無言わず飛び込んだ。

それに続くようにアルヴィン、ジュード、ローエン、エリーゼ、ローズが入っていた。



穴を通つてたどり着いたその場所は、ひたすらに暗かった。

最後にたどり着いたローズは、辺りを見回すがジュード達の姿が見えない。

「……………ホームズ!!」

「呼んだ？」

ボツと言う音共に炎に照らされたホームズの顔が浮かび上がる。

「ぎやあつ!!」

『『ぎやあ』は、無いだろう……ま、いいや、みんなこの炎に集まっておくれ』

ホームズは、不服そうに言うとその呼びかける。

ジツポアの炎を灯台のように目印にするホームズにジュード達が集まる。

「こんなに暗いとは思いませんでしたね」

ローエンがそうこぼす。

「まあね」

ホームズはそう返しながらヨルを掴んで放り投げた。

放り投げた先には、緑色の光の球がある。

「貴様！」

それは、ヨルがぶつかると弾けて消えた。

それと同時に辺りを明るく照らし出した。

「……………わーお」

ホームズは、目を丸くする。

ローズ達も同じようなものだ。

光に照らし出される足元の立方体が繁雑に組み合わせられた道。

光の通らない暗い空が際立たせる。

道を作り上げる立方体は、虹色に輝き、より幻想的に存在し続ける。

「なるほど……………コレが世ノ精途ウルスカイラか……………初めて見たな」

ヨルは、むくりと起き上がりながら辺りを見回す。

若干ホームズを睨んでいるが、睨まれてる本人は、どこ吹く風だ。

「ここを抜ければ……………」

ジュードの言葉にヨルは、頷く。

「ああ、いるぞ。間違いなく」

ヨルの髭がビリビリと震える。

ヨルを纏う緊張感にホームズは、眉をピクリと動かす。

「二応、言っておくけどマクスウェルと戦いに来たわけじゃあないからね」

「勿論。だが……………」

ホームズ達の周りに魔物が集まる。

「向こうがそう思っていてくれるかは、また別の話だ」

ホームズ達は、それぞれ武器を出して構える。

「魔物とは少し違うような……………」

レイアは、首を傾げる。

ローエンが頷く。

「恐らく侵入者を阻む、言わば兵といったところでしよう」

エリーゼは、ちらりとヨルを見る。

「ヨル………これは食べれますか？」

イル・ファンでヨルは、精霊術で作り出された魔物を食い尽くしている。

「別に出来なくはない。マナみたいなものだろ」

ヨルはそう言つて生首になろうとする。

だが、それをホームズが手で制する。

「ヨル。君の力はここでは使わない」

ホームズの言葉にヨルは目を丸くする。

「別に、この場にお前が通すべき意地はないだろ」

「ないよ」

「だったら………」

「イバルと初めて会つた時のこと忘れたのかい？」

「あ？」

「まだ思い出せないなら、もう一個。ミラ達と初めて会つた時のこと、忘れたのかい？」

「？」

どちらもシャドウもどきの封印が解かれたと言つて襲いかかってきた。

「……………」

「分かるだろう？君が出て行けば間違いなく、話を聞くどころじゃなくなる」

ホームズは、そこまで言うとも目の前の魔物を顎で示す。

「今この場にマクスウエルは、いないみたいだけど、少しでもありそうな可能性は、潰しておくべきだろう？」

ホームズの言葉にヨルは不服そうに生首になるのを諦め、ホームズの肩に戻る。

「忌々しいな。制約が多いってのも」

「まあ、大丈夫だよ」

ホームズは、そういうと魔物を一匹蹴り飛ばす。蹴り飛ばされた魔物は、そのまま道の切れたところから真つ逆さまに落ちていった。

「猫の手を借りたいほど忙しいわけじゃないし」

不意打ちに魔物達は戸惑ったが、直ぐにホームズ達に襲いかかった。

ホームズに迫り来る魔物にローエンの投擲したナイフが刺さる。

「省略！サンダーブレード!!」

ローズの作り出した雷の剣が、刺さっているナイフを避雷針にして各魔物達の元へと避けていく。

ローズの放った雷の剣により動きを止めた魔物達。

そこにリンクしたジュードとレイアが現れる。

「巻空旋風!!」

ジュードとレイアの間には挟まれた魔物たちは、空中に巻き上げられ、そのまま崖下へと消えていった。

ホームズは、それを見届けると煙管を啜える。

「今ので全部みたいだねえ……」

「……そうみたいね。まあ、まだまだいるでしょうけど」

ローズは、辺りを見回して反応が見られないと刀をしまう。

ホームズは、そんなローズを不思議そうに見る。

「……………何よ?」

「いや、別に。なんかこう穏やかな会話って久々だなあって思ってたさ」

最後に怨嗟なく聞いた言葉は、ジルニトラが沈む直前。

悪気のないホームズの言葉にローズは、うつと言葉を詰まらせる。

ホームズは、そんなローズに気付かないフリをする。

「さて、奥を指指すとするかねえ。とりあえず、この光の球みたいなのを目印に進んでいけばいいんだろう?」

「そうだね」

ホームズの言葉にジュードは、そう返すと前に進んでいった。



水晶というには、煌びやかに光る立方体で出来た道をジュードたちは無言で歩いていった。

当然といえば当然だ。

今まで、アルヴィンは、レイアを撃ち、ローズは、ホームズの目を潰している。仲間に向かい入れて貰えたとはいえ、全てが良くなつたわけではない。

特にエリーゼは、二人を怪訝そうに見ているし、ジュードは目を合わせない。

レイアもなんとなく気まずそうだ。

何より当人達がなんと話しかけていいかわからず更に空気は悪い。

「あ、あー………とところで、一つ聞いていいか？ホームズそんな中、アルヴィンは、少しきこちなく話しかける。

「なんだい？」

ホームズは、キョトンとして首を傾げる。

「なんで、ヨルはシャドウもどきなんて呼ばれてるんだ？」

アルヴィンの質問にホームズは、目を丸くする。

「仲間に迎え入れてもらったばかりで随分とチャレンジジャーな質問だねえ」

瞬間、重かった空気が凍りついた。

「あ………わりい………」

アルヴィンは、気まずそうに俯く。

ホームズは、そんなアルヴィンを見て慌てる。

「いやいや、そこまで落ち込まないでくれよ。悪かったって、からかい過ぎたよ」

「(ホームズの冗談って結構ギリギリですよね)」

「(ああ。ギリギリアウトだ)」

ポンチヨにすっぽりと収まっているヨルとエリーゼがボゾボソと話していた。

ホームズは、少し考える。

「なんでだっけ？」

「俺に話を振るお前も相当だな」

ヨルは、怒り通り越して呆れていた。

フードの中でヨルは、ため息を吐く。

「そんなに気になるなら、全部含めて奴に聞けばいいだろ」

ヨルは、どうでも良さそうに返す。

奴が、誰を指すか今更考えるまでもない。

「そっか………マクスウエルがヨルを封印したんだっけ？」

「正確に言うなら、封印に関わっていたと言ったところだな」

ヨルは、ジュードの言葉にそう言っただけ尻尾を振る。

ホームズは、考え込みながら指を出していく。

「えーっと、無を司る大精霊オリジン、時を司る大精霊クロノス、それと五大元素を司

る大精霊マクスウエルだっけ？」

「そうだ。まあ、オリジンの馬鹿が他の奴らに秘密で仕掛けたもののおかげで、マナを

食うのに苦労してるわけなんだがな………」

ヨルの言葉の端々に怒りが滲み出ている。

「そりゃあ良かった。菓子折りの用意しとかなきゃ………」

ホームズの悪態は、だんだんと尻すぼみになり、そして、それに比例するようにホー

ムズの歩みが遅くなっていき、最後には、止まった。

「ホームズ？」

止まったホームズにローズが不思議そうな顔をする。

「ねえ、確かミラは、こう言ったよね『アメリカットを話さないと封印は解けないはずだ』って」

そんなローズを意に返さず、フードにいるヨルとの会話を続けるを

「言ってたな」

「……………だよね」

ホームズは、少し考えた後再び歩みを進める。

「ち、ちよつとホームズ!!」

ローズは、先に行くホームズの手を少しためらって掴んで止める。

「何に気づいたのよ!」

「少し、マクスウエルの企みについてかな」

ローズにそう短く返す。

「ねえ、ヨル。さっきの話の続きだけどき……………」

ローズに返した後、フードにいるヨルに話しかける。

「誰か、要件の変更に来なかったかい？」

ホームズから発せられた静かな追求にヨルは諦めたようにため息を吐く。

「ああ。来た」

ホームズは、追求の手を緩めない。

「マクスウェルだろう、それって」

ホームズから出た言葉に一同は、息を飲む。

「……………ああ。その通りだ」

ヨルは、少し迷った後頷いた。

ローズは、苦々しげな顔をしているホームズを見て思わず手を離す。

「……………どうということ？」

「……………利用されたのは、ミラだけじゃない。おれとヨルもだ」

ホームズは、ぎゅつと握りしめる。

「ま、待つて。何が何だかわからないわ！ちゃんと説明して」

混乱するローズを前にホームズは、話すべきか迷う。

しかし、ローズを追い詰めてしまったことを思い出すとゆつくりと口を開く。

「まだ、推論の段階だ。だから、これから確かめる。それから話すじゃダメかい？」

ホームズその真剣な顔に思わずたじろいだ後ローズは、頷いた。

そんなホームズを疑わしげに見る紫色の物体。

『本当に話すんだろーな!』

「おれが嘘言ったことあるかい?」

「隠し事は、たくさんしてたよね」

レイアの方から突然飛んできた援護射撃にホームズは、傷ついた顔をする。

「き、君……………言うじゃないかい……………」

「そりや言うよ。なんかんやで最初の質問には答えてないもん」

最初の質問、ヨルが何故シャドウもどきと呼ばれているかということだ。

「ホームズは、何か知ってるんでしょ?」

「もちろん。まあだから、それも含めてマクスウエル殿に聞けばいいのさ」

そう言つてホームズは、足を止める。

行き止まりだ。

そこから下は、崖になつている。

ホームズは、崖下を覗き込む。

下には、光の霽があつた。

「いるんだろう、ヨル?この先に」

「ああ。間違いないな」

ヨルは、ひげをピクリと動かす。

そしてホームズのポンチョのフードに入り込んでしまい完全に身を隠した。見つければ厄介なことこの上ない。

「……………大丈夫かな？」

「虎穴に入らずんば虎子を得ずって言葉知ってるか？」

ヨルの言葉にホームズは、ポカンとした後真剣な顔になり両頬を叩いて気合いを入れた。

「よし！まあもう入ってるようなもんだけど」

「一言多いなお前は、本当に」

ホームズは、ヨルの悪態を無視して真っ先に飛び降りる。

ジュード達それに続いた。



「客人か……………」

椅子に腰掛けながらポツリと呟く人影。

「歓迎せねばなるまい」

彼らの信念が試されるのは、もう直ぐだ。

ボールが取れる

「ああ、そうか。マクスウエルに聞けるのは、ミラやヨルの事だけじゃないね」
ホームズは、思い出したようにポンと手を叩く。

「それもそうだね。エレンピオスのことも聞けるね」

レイアもうむむと頷く。

そう、ここのところ忙しくて忘れがちだったが、ホームズはエレンピオスへの行き方を知りたくて仲間になったのだ。

レイアは、そんなホームズを見て首をかしげる。

「そう言えば、ホームズ」

「なんだい？」

「エレンピオスがどんなところか聞いてないの？」

レイアの質問にホームズは、首をかしげる。

「そう言えば聞いてないなあ………なんか色々エレンピオスに関することは本当に少ししか聞いてないんだよね………」

せいぜい両親達の故郷ということぐらいしか聞いていない。

「ヨルも?」

「俺は、後、スヴェント家とやらが名家だつてぐらいだな」

ヨルは、小声で話しながら頷いている。

「まあ、言う必要はないと思つていたんじゃないか。行けば分かることだし、関係のないことだから」

ヨルの言葉にホームズは、肩をすくめる。

「かもね」

そう言つて改めてホームズは、今いる場所を見る。

「変な場所です……」

エリーゼの言葉にローズは、頷く。

あたり一面に広がる青空。

所々にあるアーチ状の何か。

そして、極めつけは、足下に広がる鏡のような地面。

まったく濡れないところを見ると水面ではないようだが、それと見間違ふほど透き通つていた。

ホームズは、目を輝かせてあたりを見ている。

「凄いねえ……」

「ホームズ、ここに来た目的忘れてないでしょうね」

ローズが呆れながら言うとうとホームズは、肩をすくめる。

「当然だろう？ 忘れたくても忘れられないよ」

ホームズがそう言つて指差す。

指差すその先には、宙に浮く機械の椅子に座つてゐる老人がいた。

「私が作り出した人間界と精霊界を繋ぐ唯一の途^{みち}、世精^{ウルスカール}ノ途。それを通つてきたのが、

お前たちか……」

低くしわがれた声で紡がれる言葉。

ジュードは、一歩だけ前に出る。

「……………あなたが、マクスウエル？」

「いかにも。私が精霊の主マクスウエル……………まさか、ここまで来る人間がいるとは」

ようやく対面したマクスウエル。

ジュードは、拳をぎゅつと握りしめる。

「あなたに聞きたいことがあるんだ。

……………ミラのこと教えて欲しいんです」

「……………」

押し黙るマクスウエル。

そんなマクスウェルにレイアが尋ねる。

「ミラは、あなたの代わりに変わったと聞きました」

「その理由を聞かせてもらえませんか？」

エリーゼが最後にそう尋ねるとマクスウェルは、静かに瞼を閉じる。

「そうか、お前達がミラと供にした者たちか……」

ジュードは、静かに頷く。

「僕は、ミラと出会って、旅して色々考えた。力のこと、なすべきことの事……そして、

ミラが……ミラが……」

ホームズは、言葉を紡いでいくジュードを静かに見守る。

「ミラが死んでようやく分かった」

ジュードは、半歩体を前に出す。

「僕が本当にやりたいことに！」

「今やらなきゃいけないことに！」

「なんだそれは」

マクスウェルの問いかけにジュードの琥珀色の瞳に力がこもる。

「断界殻シエをなくして、リーゼ・マクシアもエレンピオスも助ける」

ローズは、思わず手をぎゅっと握りしめる。

マクスウエルは、ジュードの言葉に息を飲む。

「なんと愚かな！外には黒^{ジン}匣で溢れている！リーゼ・マクシアを滅ぼすつもりか!!」
ジュードから思いもなかった言葉を聞かされマクスウエルは、激昂した。
ホームズは、ため息を吐く。

ジュードも何か琴線に触れたことに気づく。

「そうか、あやつ^の死の意図が読めずにおつたが、今確信した」

マクスウエルは、ぎろりとジュード達を睨む。

「ミラが使命を忘れ、あのような真似をしたのは、お前達が原因だったのだな！」

「おいおい、ちよつと待つておくれよ」

「黙れ！」

ホームズの制止を一蹴するとマクスウエルは、さらに言葉が続ける。

「……………此度お前たちは、断^{シエ}界殻をなくし、世界を滅ぼそうとしている」

「マクスウエル！話を……………」

怒りに震えるマクスウエルにジュードの言葉、届かない。

「破壊者どもめこの世界より消えよ！」

膨れ上がる殺気と共に椅子に取り付けられた機械の盾が展開される。

「……………ジュード君、君は正直すぎるよ」

呆れたようにジュードを咎めるホームズ。

「でも……………」

「まあ……………」

ホームズは、迫り来る盾に回し蹴りをぶつける。

「嫌いじゃあないぜ、そう言うの！」

赤い剛招来のオーラを纏ったホームズの回し蹴りと盾がぶつかり、鈍い音が響く。ホームズの蹴りによって、弾かれる。

「貴様……………」

「まあまあ、話ぐらい聞いておくれよ、マクスウエル」

ホームズは、腰に手を当て右手を広げる。

「おぬしら、自分が何をやろうとしているのか分かっているのか？」

「分かっていますとも！だからです！」

マクスウエルの言葉にローエンが返す。

「あなたにミラのこと聞きたかったの！」

レイアが棍を突きつける。

「……………リーゼ・マクスシアの真実。どうしてミラがエサなんて言われたのかをな！」

アルヴィンは、肩に大剣を乗せる。

「知ってどうする？ 何かが変わるのか？」

「そんなのわからないよ！」

マクスウエルの言葉にジュードは、真っ先に言い返す。

「でも、知らないきや変わらないのは、分かる」

ジュードの言葉にマクスウエルは、考え込む。

「ねえ、マクスウエル。包み隠さず全部話しておくれよ。

この子のことも含めて」

ホームズは、そう言ってフードからヨルを引っ張り出す。

瞳を閉じているヨルの顔は真っ黒で何を考えているか分からない。

「ほう……………」

マクスウエルは、目を細める。

「ちよつ、ホームズ!!」

ローズは、ホームズの突飛な行動に思わず目を剥く。

先ほど、話を聞くどころではなくなるから出てくるなど言っただけだからなのだ。

しかし、今、ホームズの方からヨルを引っ張り出した。

火に油を注ぐことは簡単に予想できる。

「封印を解いたのか？」

だが、意外にもマクスウエルは、穏やかだった。

「まあね」

「何を願った？」

「平和かな？」

ホームズは、ニヤリと笑いが、黒猫をつまんでマクスウエルに見せる。

嘘は言っていない。

街を襲う魔物を退治してくれて頼んだのだ。

平和を望んだと言えばその通りだ。

「どうだろう？ せっかく連れてきたことだし、この子事も含めて全部話してくれないかい？」

「手土産というわけか？」

「どう取るかは、君次第だよ」

ホームズは、そう言っ下からジロリとマクスウエルを睨む。

マクスウエルは、ホームズとしばらく睨み合った後、口を開いた。

「……リーゼ・マクシアは、二度危機に陥った」

マクスウエルは、言葉が続ける。

「一つは、二千年前、黒匣が登場したこと」

マクスウエルの座る椅子の尾のようなものがゆらゆらと揺れる。

「そしてもう一つは、それより五百年前に起きている」

マクスウエルは、ジロリとヨルを睨みつける。

「そのシャドウもどきが我々に反旗を翻したのだ」

「反旗？……………」

ローズがゴクリと唾を飲みながら聞き返す。

「どういうこと？それじゃあ、まるで……………」

「そやつは本来、こちら側にいるものだ」

マクスウエルは、言葉を更に続ける。

「精霊は、世代交代をする。例えば、今の炎の大精霊イフリートが死ねば、次の炎の大精霊イフリートが生まれると言った具合にな……………だが……………」

目の前の黒猫をマクスウエルがジロリと睨みつける。

「二つだけ例外がいた」

ジュード達は息を飲んでヨルを見る。

「まさか……………」

「そう、そやつは例外中の例外、先代の闇の大精霊シャドウだ」

夜明け

「……………どういふこと？」

ローズは、マクスウエルの話聞き返した。

突然明かされたヨルの正体に一同は、頭がついていかない。

「手違いでヨルが残ったの？」

ジュードの質問にマクスウエルが首を横に振る。

「其奴が世代交代を拒んだのだ」

マクスウエルから紡がれる言葉に一同は、更に首をかしげる。

「拒んで拒めるものなの？」

「無論、そんなものは認められない」

マクスウエルは、そう言うと深いため息を吐く。

何から話すべきか迷っているようだ。

「最初から話して」

ジュードの言葉にマクスウエルは、頷く。

「いいだろう。事の始まりは、冥界への扉が開いてしまったことだ」

「冥界って……………死後の世界？」

ローズの言葉にマクスウェルは、頷いてホームズが持っている黒猫を指差す。

「そやつは、扉が開いた時にこちらの世界にやってきた冥界のものだ」

「……………そんな……………」

レイアは、息を飲む。

「ちょうどその時、シャドウの世代交代の時期だった。だから、冥界から来たというところで実力も十分なそやつをシャドウにした」

ローズは、混乱しそうな頭を必死に回す。

その時、ちらりとホームズを見るがとても涼しげな顔をしている。

「どうやらここまでは知っているようだ。」

「だが、其奴には我々が知らない力を持っていた」

「……………精霊術喰らいか……………」

アルヴィンの言葉にマクスウェルは、頷く。

前にアルヴィンは、ヨルに何故シャドウもどきと呼ばれているのか聞いたことがあった。

——「シャドウと同等の力を持つてたからだ」

「本当か？」

「どういう意味だ？」

「だって、シャドウは精霊術を食べないだろ……つか、精霊術を食う奴なんてお前くらいなものだ……それって、同等っていうのか？」

「いいところに気がついたな、ま、気が向いたら話してやるよ」——

何故シャドウにない力をヨルだけが持つていたか。

答えは単純。

この力は、シャドウに引き継がれる力ではない。

冥界から来た、ヨルだけが持つ力なのだ。

「それだけではない」

マクスウェルは、言葉を続ける。

「精霊術は、霊力野ゲイストから創り出されるマナを精霊に与えることで、発動する」

「へえ、それは知らなかった」

ホームズは、初めて聞く話に驚いている。

「だが、其奴は、人間がマナを創り出すのを待たず、強制的に霊力野ゲイストからマナを奪い取

ることか出来た」

「ああ、それは知ってる」

ホームズの余計な合いの手に構わず、マクスウェルは続ける。

「人と精霊の関係を根本から崩しかねないその存在は、あつてはならないのだ」
まるでヨルのことを認めないマクスウェルの発言にレイアが眉をひそめる。

「でも、ヨルがその力を使わなければ関係ないでしょ。そりゃあ、人間に襲われれば使
うだろうけどさ」

「甘いな」

レイアの言葉をマクスウェルは、即座に切り捨てる。

「精霊信仰なんてものが、なぜ人間達に存在するか分かるか？」
マクスウェルの問いかけにティポが口を開く。

『精霊に良くしてもらったからー、とか？』

ティポの言葉にマクスウェルではなくローエンが、首を横に振る。

「恩恵だけでは、足りません。もう一つ必要なものがあります」

「それって？」

「恐怖です」

ローエンの答えにジュードが目を丸くする。

「恐らく、あなた方が我々人間に恩恵を、ヨルさんが恐怖を与えたのでしょう」
ローエンの推理にローズの視線は、ホームズが掴んでいるヨルに向けられる。

「待つて………恐怖を与えたつてことは……」

「そう、其奴は人間達からマナを食らつていた。何の罪もない人間達から」
ジュード達は、マクスウエルから語られる言葉を黙つて聞くしかない。

「完全に我々は、してはいけないものをシャドウにしてしまった。そのせいで人間達に多大な被害を与えてしまった」

マクスウエルは、そう言いながら椅子の肘掛を指で軽く叩く。

「だから、我々は其奴を廃し新たなシャドウを生み出そうとした。だが、此奴は、首を縦に振らなかつた」

「そりやそうでしょ。死ぬと言われて死ぬ程殊勝なヤツじゃないだろう」

まあ、仮に殊勝なやつでもお前には、もう代わりがいるから死んでくれと言われて納得できるやつなどまづいない。

「そこから此奴との戦いが始まつた」

「戦い………」

その重々しい言い方にジュードは、唾を飲む。

「そう戦いだ。人間も精霊も関係なく、この世界の全てで、其奴に挑んだ」

「結果は？」

アルヴィンの問いかけにマクスウェルは、忌々しそうに口を開く。

「倒せなかった……誰も」

「まあ、マナを喰らうような奴が相手じゃあねえ……」

ホームズは、肩をすくめる。

精霊術が消されるといっただけではない。

改めてヨルという存在が如何に規格外なのかということを一回は、思い知った。

マクスウェルは、ホームズの言葉に静かに頷く。

「この世全てを持ってしても封印することが精一杯だった」

「条件付きの封印だっけ？ 確か……」

ホームズは、そう言いながら指を四つ出す。

「一つ、術喰らいは、封じない。

二つ、ヨルが要石に触れた人間の願いを叶えれば、封印が解ける。

三つ、取り付いた人間が殺害以外の方法で死んだ場合、完全に晴れて自由の身になる。

四つ、取り付いた人間の霊力野から好き放題マナを絞り取ることができる」

ホームズの上げた封印されたヨルに与えられた利点にマクスウェルは、頷く。

「その代わり、ヨルは願いを叶えられないとその場に縛られたままだし、仮に願いを叶

えても、叶えた人間が殺されない限り、その人間に縛られ続ける。
もう一つ付け加えるなら、ヨルの封印されていた場所は人間の靈力野ゲイトに作用して幻を見せる。

そもそも願いを叶える人間が来ない。

そして、無差別に靈力野ゲイトからマナを搾り取ることは封じられた。

更に、本来の姿に戻るには、大量のマナが必要となった……………」

そこまで言ってホームズは、考え込む。

「あれ？そう言えば、シャドウの力は？仮にも闇の大精霊だったなら、それなりの力があると思うんだけど」

「それは、奪って本来のシャドウに引き継がせたから今の奴にはない」

ホームズは、眉をひそめる。

「……………本来のシャドウ？ちよつと待つておくれ、世代交代をするならヨルは死んでなければおかしいだろう？」

ホームズの言葉にマクススウェルは、頷く。

「いかにも。だから、其奴を空間ごとこの世界から切り離したのだ」

「空間ごと……………切り離した？」

「そう。お前が訪れたあの場所は一種の異空間だったのだ」

マクスウェルは、そう言って説明を続ける。

「よって、この世界からシャドウは消えた。おかげで新たなシャドウを生み出し力を授けることが可能となった」

「そうか、だから……………」

ジュードは、ぎゅつと拳を握る。

「そうだ。シャドウの力を失った、かつてシャドウだったもの。だから、シャドウもどきなのだ」

あまりにも淡々と語られる言葉にジュード達は言葉が出ない。

「ホームズは、これ知ってたの?」

レイアの質問にホームズは、頷く。

「ある程度は。ここまで詳しくは知らなかったけど」

ジュード達に複雑な思いが渦巻く。

そんな思いなどマクスウェルは、気にせず更に言葉を続ける。

「……………その化け物を封じることによってようやく、平穩が訪れた。犠牲は、多かったが、それでも確かに皆が待ち望んだ平穩が訪れた」

マクスウェルは、話を続ける。

「だが、それから五百年……………人間達は黒匣《ジン》を創り出した」

「……………黒匣^{ジン}」

ジュードは、息を飲む。

「精霊が死に自然が絶え、人間も消えゆく運命^{さだめ}の道へと進み始めたのだ」
静かに語るマクスウエルの言葉に一同は、耳を傾ける。

「そこで、黒匣^{ジン}から逃れるため、救えるだけの精霊、動物……………そして、マナを創り出せる人間を集めて、私はリーゼ・マクシアを創り籠った」

「その時にヨルもリーゼ・マクシアから弾けば良かったんじゃないの？」

ローズの言葉にホームズが、首を横に振る。

「ヨルは、洞窟という場所に封じられていた。精霊信仰の厚いシャン・ドウ近く^のね」

「それは……………外すわけにはいきませぬね」

ホームズの言葉にローエンが頷く。

シャン・ドウまで外すことになってしまう。

「この世界は、エレンピオスが滅びるまで降りることの許されない箱舟だ」
アルヴィンは、しらっとした目で腕を組む。

「で、エレンピオスが滅びるのを待てど？」

エリーゼは、俯く。

「それが人と精霊さんにとって一番いいんですか？」

「そういうことだ」

エリーゼの戸惑いながら紡がれた言葉にマクスウエルは、考える間も無く頷く。

「でもそれじゃあ、エレンピオスの人が……」

「私はやがて黒^{ジン}匣^{ジン}が滅亡をもたらすと同胞であつた人間に伝えた。

だが、彼らは黒^{ジン}匣^{ジン}を捨てなかつた」

マクスウエルは、呆れたように言葉を続ける。

「結局、奴らの自業自得というやつだ」

マクスウエルの言葉を聞いたアルヴェインの拳が強く握られる。

そんなアルヴェインに構わずマクスウエルは、更に話を続ける。

「ここに籠りようやく訪れた平和。それを自覚するたびに思い出すのは、シャドウもどきの存在だ」

マクスウエルは、忌々しそうに唇を噛む。

「封印はした、完璧に。だが、不安になるのだ。果たして本当に完璧だつたか？ミスはなかつたか？」

当然と言えば当然だ。

リーゼ・マクシアを地獄に叩き落とした存在を決して消してはいないのだ。

閉じ込めただけで、箱舟に乗せてしまっている。

ヨルが、死んでいれば何も心配はない。

だが、生きている。

霊力野ゲイトに作用して幻を見せる仕掛けがある。

だが、何かの手違いでそれを突破してしまう人間がいたら？

そして、その人間がヨルを完全復活させてしまったら？

それはマクスウエルを不安にさせるには十分な考えだった。

「……………そこで、私は考えた。一つ、封印を解く条件を消そうと……………」

「それが、デメリットを話さなくては、封印が解けないというやつだろうか？」

ホームズの言葉にローズは、首を傾げる。

「それに何の意味があるの？そんな事になってしまえば、何の不都合もなく願いを叶えてもらえるんだったら、封印を解こうとする人がふえるじゃない？」

「それがいいんだよ」

ホームズは、そう言ってローズを見る。

「おれもレイアに言われて気づいたんだけど、ヨルが取り憑いた人間の霊力野ゲイトから死ぬまでマナを搾り取ったら、ヨルが殺した事になる」

「なるわね。それが……………」

ローズは、途中で言葉を飲み込む。

「そうか。ヨルが殺したから、結局ヨルも死んじゃうんだ」

「そういうこと。ヨルに絶対的な死を位置付けることができるんだよ」
ホームズと同じようにマクスウェルも頷く。

「そう言うことだ。私は万が一、幻を見せる仕掛けを突破されても必ずシャドウもどきが死ぬよう手筈を整えた」

マクスウェルは、そう言っただけで空を見上げる。

「ここを離れれば断殻界が維持できない。」

だが、それでも短期間なら弱まるだろうが消えはしない」

マクスウェルは、そう言っただけでヨルを睨む。

「私は、急いでシャドウもどきの元へと言った。そして、シャドウもどきに封印を解くための要件を外したと伝えた」

マクスウェルは、肘掛を握る。

「だが、その時、奴らが断殻界を打ち破り、リーゼ・マクシアに侵入した」

「二十年前の……………」

ローズの言葉にマクスウェルは、頷く。

「断殻界が弱くなった一瞬を突かれた。霊力野のない奴らに分かるはずもない。恐らく偶然じゃろ……………」

マクスウエルは、悔しさをかみ殺すように震えていた。

「私は、余計な心配をしてリーゼ・マクシアを危機に晒してしまった。

もうこれ以上、侵入されないよう私はここから離れず、断殻界^{シエル}を張り続けた。

そして、入り込んだ奴らを殺すためミュゼを作った」

マクスウエルは、忌々しそうにアルヴィンとホームズを見る。

「だが、奴らは巧みに私の追跡をかわし、潜伏した。

私は、この世界で黒匣^{ジン}が使われることを危惧した。

しかし、それ以上に危惧していたのは……」

「この子だろうか？」

ホームズは、そう言っただけで握っているヨルを見せる。

「私は恐れた。あの封印の場にエレンピオス人どもが訪れてしまえば、それだけで、奴

らに強力な武器を与えてしまう」

エレンピオス人に霊力野^{ゲート}はない。

よって、ヨルが取り憑いた人間を殺すことは出来ない。

そして、精霊術を打ち消す力をリーゼ・マクシア人に使うことができる。

精霊術を扱えるリーゼ・マクシア人にこれ以上に厄介な存在は、ない。

「何としても始末しておきたかった。シャドウもどきと手を組み、黒匣^{ジン}を使いリー

ゼ・マクシアに牙をむく前に」

「そのどこがミラに繋がるっていうのよ?」

ローズの言葉にマクスウエルは、頷く。

「奴らは、私が死ねば断殻界シエルが消えることを知っていた。

そこで、命をエサに奴らと立ち回らせる役目を作り出した」

「命をエサ……ですと?」

ローエンは、思わず息を飲む。

「それで……まさか!」

エリーゼの言葉にマクスウエルは、頷く。

「……………ミラ」

「左様」

「おい、待てよ!それじゃあミラはそれを知らなかったのか?!」

アルヴィンの震える声にマクスウエルは、静かに答える。

「抜かりはない。ミラには、生まれた時からマクスウエルとしての使命を植え付けてきた」

「おいおい、マジかい……………」

ホームズは、目の前にいるマクスウエルを信じられなかった。

「ミラがマクスウェルとして立ち回れば、それだけで、アルクノアを呼び寄せる。シャドウもどきを連れていても問題はない」

「……………なんで？」

不思議そうなレイアにマクスウェルが告げる。

「シャドウもどきの術喰らいには、僅かな隙がある。主に詠唱中に変化してそれから、喰らい尽くす。だが……………」

ホームズは、目を細める。

「『魔技』かい？」

ホームズの質問にマクスウェルが静かに頷く。

「そうだ。詠唱なしで発動する精霊術、魔技は、シャドウもどきにとって大敵」
策のためとはいえ、アグリアの詠唱を飛ばした精霊術でもヨルは、追い詰められていた。

更には言えば、ミラの魔技では、死にかけた。

「ミラは、アルクノアとシャドウもどきを釣り上げるために生み出されたのだ」
マクスウェルから語られる言葉にジュードは、呆然とする。

「つまるどころ、おれとミラが出会うのは……………」

ホームズは、忌々しそうに口を開く。

「必然、いや運命だったというわけだ」

ホームズ自身予想はついていた。

だが、それでも当の本人から悪びれもせず語られ、はらわたが煮えくり返っていた。

「それじゃあ……ミラはあなたにとつて何だったの!？」

「我が使命のための歯車、そしてシャドウもどきの封印を解いた者も同様だ」

ジュードの心からの叫びにマクスウェルは、淡々と答える。

あまりにも淡々語るマクスウェルにホームズ達はマクスウェルを睨みつけた。

その瞬間、ホームズの身体に切り傷が袈裟懸けに走った。

「ホームズ!!」

ローズの叫びと共にホームズは、マクスウェルの追撃の盾を喰らい宙をまっつて地面に落ちた。

「取り憑かれている人間さえ、消えてしまえばこちらのものだ」

マクスウェルの盾がゆっくりと戻っていく。

地面に落ちたホームズは、動かないそして手に持っていたヨルは、ふつと息を吹くかのように消えた。

ヨルが消えた。

「アルクノアも一人減り、シャドウもどきも倒せる。まさに一石二鳥というわけだ」

ローズは、その目の前で起こった出来事に息を飲む。

「そんな……………ホームズ……………」

ローズは、思わず膝をついて動かないホームズを見る。

「ふざけるなあ!!!」

ジュードは、そのまま走っていきマクスウエルに拳を振るう。

だが、拳は届かない。

マクスウエルは、がむしやらに拳を振るうジュードを見て忌々しそうに顔を歪める。

「ふん、知ったところでやはりお前たちは変わらない」

マクスウエルは、そう言っただけで自由に動き回る盾で、ジュードを弾き飛ばす。

「気に入らないものがあれば、感情に身を任せて消し去ろうとするのだ!!」

マクスウエルの盾が真っ直ぐにジュード達に襲いかかった。

泣きつ面に盾

「ホームズ!!ホームズ!!」

ローズの必死の叫びにも関わらず、ホームズが動く気配はない。

「そんな……………」

「……………」

自分のせいで壊滅的まで行ったホームズとの関係。

ようやく戻ったと思った矢先に起こった出来事にローズは、頭が真っ白になっていた。

「……………」

視界が狭まり何も聞こえない。

「ローズ!!」

突然ローズの両頬をレイアが両手で挟んだ。

狭まった視界が一気に開けた。

「レイア……………」

「立って!」

「ホームズが……ホームズが……!!」

「このままじゃローズが死んじゃうでしょ!!」

レイアに一喝され、ローズの瞳に光が灯る。

「全部後だよ、ローズ」

ローズは、涙を無理矢理拭き取ると小さく頷く。

「……………分かった」

ローズが刀を引き抜き、マクスウェルに斬りかかる。

だが、盾に阻まれ進まない。

「だったら!!」

距離を取り刀を交差させる。

「省略!・レイ!!」

光の雨がマクスウェルに降り注ぐ。

「……………フン」

マクスウェルは、鼻で笑うと光の雨を盾で吹き飛ばす。

「まだまだ!」

ローズは、再び刀を合わせる。

「省略!・デイバインストリーク!!」

放たれる光の大砲。

ホームズを苦しめたその術は、全てマクスウェルに降り注ぐ。だが、マクスウェルには傷一つつかない。

「嘘でしょ。盾だけじゃ防げないはずよ……」

マクスウェルの周りに何か透明な壁が張られている。

「何……あれ？」

「恐らくマナの障壁でしょう……」

つまり盾とマナの障壁によりローズの攻撃が、届いていないのだ。

「ヨルさえいれば……」

「無いものねだったしかたねーぞ、ローズ!!」

アルヴェインのリリアル・オーブから光が一筋伸び、ローズのリリアル・オーブと繋がった。

「なるほど。そういうことね」

「そういうこと!!」

アルヴェインは、大剣を振るう。

「ガードブレイカー!!」

アルヴェインのリンクサポートのガードブレイカーが発動する。

がんと激しい音が鳴り響く。

だが、アルヴィンの大剣は、マクスウエルのマナの障壁を壊せなかった。障壁を崩せなかった大剣は、刃こぼれを起こして弾き返された。

「嘘だろ……………」

アルヴィンが驚いていると盾が襲いかかる。

「蒼破・追連!!」

ローズから放たれた蒼い斬撃が盾を弾き飛ばす。

「ハアアア!!」

ジュードとレイアがアルヴィンとローズに気を取られているマクスウエルの後ろから攻撃を仕掛ける。

だが、それでも二人の攻撃は通らない。

「小賢しい!!」

そう言って二人の前に火の玉を用意する。

「レイア! ジュード!」

「フレアボム」

ローズの叫びを無視して火の玉は、破裂した。

「うああっ!」

「キヤアっ!!」

爆発に巻き込まれた二人は、地面に投げ出される。

「ブラッディタイム!!」

「ダイダルウェイブ!!」

エリーゼの精霊術とローエンの精霊が二つ同時にミュゼに放たれた。

ローエンは、僅かな期待を込めて目の前のマクスウェルを見る。

だが、マクスウェルには傷一つ付いていない。

「それが、お前たちの精霊術か?」

マクスウェルは、両手を広げ、両人差し指と両親指を合わせ、菱形を作る。

「ならば見せてやろう。精霊術とはこういうものだ」

込められるマナ。

温度は上がっていくがそれと同時にローズに寒気が走る。

「んなもの! 発動させるわけないでしょ!!」

ローズが、腰に刀を納め一気に駆け出し、勢いそのままに抜刀する。

抜刀された刀は、障壁とぶつかり合いキンという甲高い音共に真つ二つに折れ、空を

舞う。

「嘘でしょ……………」

ありえない光景にローズは、思わず息を飲む。

「レイジングガン」

マクスウェルの厳かな声と共に真つ赤に燃え盛る球体が現れた。それはまさに太陽と呼ぶに相応しい姿だ。

「ローズ!!」

ジュードがローズを抱えて後ろに下がる。

ローズがいた場所に落ちた太陽は、あたりに炎の波を広げていく。

「皆さん！私の周りに！」

ローエンの指示で皆はローエンの周りに集まる。

「ダイダルウェブ!!」

ローエンを中心に水が渦を巻く。

アルヴィンは、銃と大剣を合体させ、水に突っ込む。

「ちよつと冷たいけど我慢しろよ！」

その言葉と共に大剣が冷気を纏う。

「守護氷槍陣!!」

水を凍らせ炎を纏う盾とする。

氷と炎のぶつかり合い。

氷は一瞬で水蒸気となって消えた。

威力は、衰えた。

だが、炎まだ健在だ。

「守護方陣」

地面に刀を突き立てローズが光の陣を展開させる。

なんとか、五人を囲うことは出来た。

だが、炎は迫り来る。

「——んぐぐぐぐぐぐー！」

歯を食いしばり耐え続けるが、炎の勢いは、止まらない。

そして遂にローズの守護方陣が破られた。

「!!」

迫り来る炎に面々は、飲まれた。

マクスウエルは、鼻で笑うとその場をくるりと踵を返す。

「何がおかしいの?」

炎が消えて現れたのは、ローズ達だ。

マクスウエルは、振り返る。

「……………マジックガードか……………」

納得したようにマクスウェルは、呟く。

「ええ。ローズさんとアルヴィンさんの時間稼ぎのお陰でなんとか間に合いました」
ローエンの言葉と同時にエリーゼの精霊術が完成し、火傷を癒していく。

ローズは、その黒い瞳を鋭くすると両手を合わせる。

「獅子戦哮・氷牙!!」

ローズから放たれた氷の獅子が、マクスウェルに向かって齧りつく。

しかし、これも攻撃が通らない。

「いい加減に出てこいってのよ、この引きこもり……………」

ローズは、忌々しそうに睨みつける。

このマナの障壁もヨルが入ればどうということは、なかったのだろう。

ローズは、ホームズの方に向きそうな視線を堪える。

ジュードは、マクスウェルを見据える。

「まだやるのか……………」

「当然だよ」

「…………人間というのは、本当に愚かだな」

マクスウェルの言葉にジュードは、目を鋭くする。

「ミラとホームズを歯車と呼び、人の命を駒のように使うあなたなんか……………」

ジュードは、拳を固めマナの障壁を殴り付ける。

「人間を語る資格なんてない!!」

マナの障壁とジュードの拳がぶつかり合う。

響き渡る轟音。

だが、やはり障壁は通らない。

「みんな……悩んで、迷って、それでも前に進んでいるんだ!!それをあなたなんか馬鹿にする資格なんてない!!」

ジュードの言葉を聞いたマクスウエルは、フンと鼻で笑う。

「あれだけ長い期間シャドウもどきといながら殺せなかったお前達が、よく言う」

「もどきって言わないでください!!」

『ヨルはヨルだよー!!』

エリーゼの杖からマナの球が飛ばす。

だが、マナの障壁はそれを通さない。

マクスウエルは、エリーゼ達の言葉を鼻で笑うと両手の人差し指と親指を合わせてひし形ののぞき窓のような物を作る。

「実際に何度もお前たちは、あのエレンピオス人とシャドウもどきを追い詰めている」
展開されるマナの量にジュード達は思わず身構える。

「それだけのチャンスがおまへたちには、ありながら一度も有効に使えなかった」その言葉が出た瞬間、ローズの拳が握り締められる。

「そして、拳句私に勝てると思っている。これを愚かと呼ばずに何と呼ぶ！」マクスウェルから展開されるマナは、時計の文字盤と針をかたどる。

「アレは……………」

『最強の精霊術？んなもの一つしかねーよ』

ローズの脳裏にマーロウの言葉が蘇る。

『まあ、天才や秀才程度じゃ使えない代物だけだな』

天才や秀才程度では使えない精霊術。

だが、目の前にいるモノは、それら全てを超越した存在だ。

「ヤバイ！みんな！アレは……………」

ローズの言葉にマクスウエルは、淡々と口を開く。

「遅い」

時計の針がⅫの文字で止まる。

口八丁劍八丁

「ストッププロウ」

その言葉が響き渡ると同時に四色のマナの砲撃が、ジュード達に降り注いだ。突然のことに彼らは防ぐことが出来ない。

声を上げる間も無く、それはジュード達を蹴散らし無数に降り注ぐ。降り注ぐそれは、彼らを吹き飛ばし地面に叩きつける。

「……………何が……………」

エリーゼは、一体自分に何が起こったのか、不思議でしやうがなかった。

激痛に耐えながら思わず溢れた疑問にローズは、顔をしかめながら答える。

「時を……………止めたんだよ……………」

ローズは、身体中に走る激痛に耐えながら、睨みつける。

「昔、マーロウさんに聞いた……………反則級な強さの術だつて」

ローズ達にとって一秒にも満たないその間にマクスウェルは、二秒以上動いていたの

だ。

マクスウエルは、倒れている面々を見下ろす。

「わからんな。この者たちに齒車ミラが狂わされたのか！」

「何言ってるの!!」

マクスウエルの言葉にレイアが食ってかかる。

『ミラはずつとかわらなかつたよー!』

ティポの言葉が信じられないマクスウエルは、目を見開く。

「バカな！」

「分らないんですか!？」

エリーゼは、マクスウエルが信じられないのが、信じられないようだ。

「そうだ！あなたは、間違ってる!!」

ジュードは、膝立ちになりながらマクスウエルを睨む。

「何!？」

「見てたんじやないの？育てんじやないの？」

ローズは、拳を地面に叩きつけながら、身体を起こそうと力を込める。

「おたくさ、本当にミラの親?」

アルヴィンは、呆れたように言葉を投げかける。

そして、

「ガアああああああああア!!」

思いきり盾を弾き飛ばした。

ローズの刀は健在だ。

「バカな……………」

「省略! シャープネス!!」

ローズは、弾いた刀をそのままに思いきり叩きつけながら、声の限り叫んだ。

構えも取られずに飛び出した精霊術は、ローズを纏う。

剛招来・纏で武器を強化し、精霊術で自分を強化する。

その滅茶苦茶な精霊術にローエンは、思わず目を見開く。

「バカは、貴方の方だ!」

ローズは直ぐに刀を返すと再び斬りかかる。

「……………何故、お前が楯つく? エレンピオス人を恨むお前が!」

マクスウェルの言葉を聞いた瞬間ローズは、刀を更に強く握る。

「そんなのわかんないわよ!」

迫り来る盾をローズは、弾く。

「私が知りたいぐらいなのよ! でも!」

ローズの目が険しくなる。

「貴方は……お前だけは認められない!!理由なんてそれだけで十分だ!!」
紅く揺らめく剣とマクススウエルの操る盾がぶつかり合う。
何度も何度も。

だが、繰り返し返すたびにマクススウエルの顔が曇っていく。

「……………どういふことだ?」

「嘘……………」

レイアが驚いたように目を丸くする。

『全然当たってないー!!』

ローズは、先ほどから迫り来る盾を全て剣で弾いている。

「鶏足刃の如く!クイックネス!!」

レイアがジュードに精霊術をかける。

ジュードは、腰を落とし構える。

「鋭招来!!」

紅い蒸気がジュードを纏う。

「行くよ、レイア!!」

「任せて!」

二人は、マクスウエルの後ろに回り込み、棍と拳を振るう。

マナの障壁に阻まれるが、そんなことは関係ない。

ジュードとレイアは、次の一手を諦めない。

途切れることなく攻め続ける。

「鬱陶しい!!」

宙に浮く盾をローズではなく、後ろに二人に向かって移動させようとする。

「んぐあ!!」

それが進むもうとする方向とは、逆に向かって刀をフルスイングする。

「何!?!」

盾は、動くことが出来ずにその場に留まり続ける。

「レインバレット!!」

アルヴェインが放った銃弾が、マクスウエルに雨となって降り注ぐ。

「からの!ヴァリアブルトリガー!!」

アルヴェインは、狙いを定め通常より巨大な銃撃を放つ。

銃弾の雨に気を取られたマクスウエルの側面から襲い来る一撃。

マナの障壁が震える。

「ダイバインストリーク!!」

『リバーリーグニツション!!』

そこにティポとエリーゼ、そしてローエンの精霊術が混ざり合い、紫と光のが編まれた大砲がマクスウエルに向かって放たれた。

「無三華!!」

身動きの取れないマクスウエルにジュードとレイアが共鳴術技リンクアートを放つ。

マナの障壁を震わせながら、攻撃をやめない。

マクスウエルは、苛立ちを隠さず歯ぎしりすると、両手を合わせ菱形を作り出す。

再びマナが展開され時計の文字盤を作り出す。

現れた文字盤を進む時計の針。

「させるかー!!」

ローズは、盾を完全に弾きかえすとマクスウエルに向かって刀を投げつける。

しかし、

「ストップロウ」

マクスウエルの精霊術は、完成した。

その名を口にした瞬間全ての動きが静止した。

「時を止める精霊術、おまえ達には決して使えないものだ」

ただ一人マクスウエルだけは、例外だった。

彼だけがこの停止した世界で自由に動き回れた。

マクスウエルは、盾を使い、一瞬でジュード達を吹き飛ばし、一箇所に集める。

「……………？」

僅かに覚えた違和感に首をかしげるとマクスウエルは、両手で菱形を作る。

再びマクスウエルをマナが取り巻く。

「眠り踊れ地水火風」

マクスウエルの頭上に四色に光り輝く魔法陣が現れる。

「秦王に集いて我が鉄槌となせ！」

赤、黄、緑、青の魔法陣の輝きが最高潮に達する。

「エレメンタルメテオ！」

魔法陣から四色のマナの砲撃が流星となって降り注ぐ。

流星となってマナがジュード達に迫った瞬間、止まった時が動き出した。

ジュード達は、声を上げる間もなく、四色のマナの餌食となった。

「また……………時を……………」

皆、今度こそ立てない。

いや、一人だけ例外がいる。

ジュードだ。

震える膝を押さえながらジュードは、必死に倒れないよう耐える。

「何度立っても同じことだ。お前達は、もう終わったのだ！」

言葉こそ強い。

だが、圧倒的な差を見せられても立ち上がるジュードに思わず声が震える。

「何が終わりだ！あなたが決めることじゃない!!」

「黙れ！今のお主は、立っているのが、やつとで、私に抗う力などないではないか!!」
そう言つてマナの砲撃をジュードに食らわせる。

しかし、ジュードは、再び立ち上がる。

「あるよ。僕は知ってる」

静かにそして、確かな意思を持って語られる言葉にマクスウエルは、目を剥く。

「馬鹿な！理解出来ん！」

誰だつて怖いものが、ある。

その最たるものが、理解出来ない存在だ。

「ぎ、消えよ!!」

その恐怖を打ち消すかのように四色のマナを放ち続ける。

乱れ飛ぶマナの中、歩みを進めていく。

歩みは、やがて疾走へと変わっていく。

「お、おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

おおおおお！」

ジュードの疾走は、慟哭をあげるたびに速くなる。

そして、宙に飛び上がり拳を固める。

(そうだよね、ミラ)

ジュードは、そのまま全体重を乗せ、拳を放った。

マナの障壁が大きく歪む。

(後、もう少し!!)

その瞬間一筋の光が、マナの障壁に走った。

切られたマナの障壁は、ジュードの侵入を許す。

ジュードの想いも重いも乗せた拳が、遂にマクスウエルに届いた。

マクスウエルは、声もあげる間もなくそのまま吹き飛ばされ地面を転がった。

ジュードは、地面に降り立つ。

隣を見るとそこには、剣を持って凜と立つミラがいた。

「……………ミラ……なのか？」

アルヴィンは、目の前で起きたありえない事に呆然とする。

あの時、ジルニトラで確かに死んだ。

それが、今ここに立っている。

『ミラ!!』

エリーゼとティポは、とても嬉しそうに笑う。

「ミラさん……」

ローエンも驚きでそれ以上言葉が出ない。

「ミラ………う？」

レイアは、確認する。

確かにそこには、見覚えのある姿が凜として立っている。

「ミラ!!」

傷の痛みに顔しかめるが、そんなことどうだっていい。

「ミラだ………」

ローズも驚きで思わず涙が溢れそうになる。

「ミラ………」

ジュードが続きの言葉を告げようとすると、ミラが人指し指をジュードの口に当て、先を言わせない。

そして、倒れているホームズの方に視線を移す。

それから、起き上がるマクスウェルを睨みつける。

「全てのものを守るのがマクスウェルの使命ではないのか」
マクスウェルは、目の前で起こった出来事が信じられない。

「馬鹿な……四大が凶つたというのか?」

マクスウェルは、自分を裏切つた四大精霊たちが信じられなかった。

そんなマクスウェルにもう一度衝撃が走る。

ヨルが、マナの障壁を食い破りその穴からホームズが右足に黒霞を纏つてマクスウェルを蹴り飛ばした。

「何!?!」

「つたく、子供の反抗期ぐらいで狼狽えるんじゃないよ」

戸惑うマクスウェルに構わず、ホームズはそう言って踵落としを食らわせ、マクス

ウエルを地面に叩きつける。

「やつほー、ミラ」

ホームズは、いつものようにヨルを肩に乗せ、ひらひらと手を振る。

「そんな……ホームズ、何で？」

ローズは、ホームズの存在に更に目を丸くするばかりだ。

「喜んでくれてもいいじゃないか」

ホームズは、不満気だ。

「だって、精霊術で切り裂かれて……」

「切れたのは、鎧代わりに仕込んだいたヨルの尻尾だよ」

そう言ってマクスウエルを見下ろす。

「マクスウエルの封印の仕組みも仕掛けも意図することも読めてたからねえ。あの時、おれかアルヴェインか、どちらかがヨルに取り憑かれているのは、マクスウエルも気付いていたみたいだし」

ホームズは、起き上がるマクスウエルを金色の瞳で睨みつけながら話を続ける。

「だから、おれがヨルを見せれば、全部話してくれるだろうと思っただし、全部話したら殺しに来ることも分かった」

「貴様……」

「だから動けないぐらいギチギチに着込んで防御力を上げていたんだよ。まあ、気絶しちゃったけど……………」

「だが、シャドウもどきは確かに消えたぞ！」

マクスウェルが、ホームズズの肩にいるヨルを睨みつける。

「これのことか？」

ヨルは、そう言つて尻尾を伸ばし黒猫を作り出す。

そして、尻尾を徐々に細くしていき、完全に目に見えなくなつた。

さながら消えるように。

「……………つて、だったら貴方は起きなさいよ」

ローズの正当な突っ込みにヨルは、どこ吹く風だ。

「情報の少ない中で戦いたくないだろ」

「……………わたし達を使つていて悪いと思つてないところが、本当にらしいよね……………」

レイアは、完全にあきれ顔だ。

そんな彼らにマクスウェルの怒りは、増していく。

マクスウェルは、ホームズズとヨルを殺意を込めて睨みつける。

「騙したな！手土産と言つたではないか!!」

「そんなこと一言も言つてないぜ？」

「馬鹿な！確かに……………」

「違うね、君が言ったんだ」

激昂するマクスウェルに対してホームズは、ぴしやりと言い放つ。

「おれがヨルを見せたら君はこう言った。『手土産のつもりか』と」

そう言うのとホームズは、マクスウェルを指差す。

「そして、おれはこう言った。『どう取るかは、君次第だよ』って。ほら？」

ホームズは、指を差したまま底意地の悪い笑みを浮かべる。

「騙してないだろう？君が勝手に勘違いしただけだ」

「……………！貴様ア!!」

火に油を注ぐどころか、ぶちまけるホームズ。

「ま、そもそも不意打ちした奴からそんな言葉が出ること自体おかしいんだよな」

ヨルは、馬鹿にしたように犬歯を見せる。

「所謂、騙される方が悪いという奴だ」

「だから、騙してないって言ってるだろう」

ホームズの種明かしにマクスウェルは、頭を抱える。

確かにホームズは、一言も手土産と言っていない。

たかが人間と見下していた相手にまんまと一杯食わされてしまったのだ。

「馬鹿な……この私が……」

ミラは、目を鋭くして告げる。

「うろたえたな？それでは、本来の力が出せないぞ？」

ミラの言葉が響きわたったその瞬間、四色の光の球が離れ、ミラの側に着く。辿り着いた四色の光の球は、それぞれ実態を表す。

マクスウエルは、その光景を信じられないという目で見ると見る。

ミラも驚いたように四大を見る。

「いいのか？お前たち？」

四大は、ミラ達を魔法陣で囲み傷を全て癒す。

「馬鹿な……お前たち……分かっていいのか！それつらは、断界殻シエを壊そうとして
るんだぞ！それに……！」

そう言つてマクスウエルは、ヨルを指差す。

「そいつは、シャドウもどき！その意味が分からないお前たちじゃないだろ!!」
だが、四大達は、動かない。

「そんなことが……」

「だから、子離れぐらいで狼狽えるんじゃないよ」

ホームズは、やれやれと肩をすくめて、打ちひしがれるマクスウエルを見下ろす。

「君は運命を仕組んだ。ヨルを潰すため、アルクノアを潰すため、そのためにミラを齒車にし、おれを齒車にした」

ホームズは、そう言つて金色の瞳で睨みつける。

「だけど、ミラもおれも齒車なんかじゃあない！運命は、壊してやった！」
ホームズは、齒を見せにいつと笑つてみせる。

「ざまあみたまえ!!」

ミラは、フツと笑つて片手劍を構える。

「さあ、やるぞジュード！」

「うん。ミラ」

傷の治った面々が、彼らに追い付く。

一行は、マクスウェルに向かって走り出した。

無理を通して道理を蹴つ飛ばす

「まずは、一発!!」

ホームズの黒霞を纏った右足がマクスウエルに襲いかかる。
マクスウエルは、盾を操りそれを防ぐ。

鉄骨をぶつけ合う音が響き渡る。

「やっぱり、マナで守られてると厳しいねえ……………」

盾は碎けずに残り、ホームズの脚から黒霞が消える。

「当然だ。私を誰だと思っている」

その瞬間ホームズの前に火の玉が六つ現れる。

「フレアボム!!」

ホームズは、大きく打ち上げられる。

「ホームズ!!」

ローズが思わず叫ぶ。

対するホームズは、空中でニヤリと笑う。

「ヨル!」

ホームズの声にヨルは口を開けもう一度黒球を吐き出す。

吐き出された黒球は、宙返りをするホームズの周りを回って両脚にたどり着く。

辿り着いた黒球は、黒霞となってホームズの両脚に纏わりつく。

ホームズは、両脚で空を蹴り、マクスウェルに向かって勢いそのままに蹴りを放つ。

マクスウェルは、マナの障壁を張る。

だが、ヨルが生首となりそれを食い散らかす。

しまったと思った時には、もう遅い。

ホームズの蹴りがマクスウェルに届く。

「ぐおっ……………」

蹴りを食らったマクスウェルは、思わず唸るが直ぐにホームズへと狙いを合わせる。

着地をしたばかりのホームズにその対応は、出来ない。

迫り来る盾をアルヴェインが大剣で受け止める。

盾を受けたアルヴェインにホームズは、思わず口笛を吹く。

「やるじゃん、アルヴェイン」

「当然。これぐらい出来なくてどうするよ」

アルヴェインが押さえている間にローエンが精霊術を完成させる。

「フリーズランサー!!」

放たれる氷の矢は、無数。

マクスウェルが躲しても躲しても作られ放たれる。

「この！小賢しい！」

躲すことに煩わしくなったマクスウェルは、マナの障壁を張る。

「せーのお!!」

ホームズが肩にいるヨルを掴んで投げ飛ばした。

投げ飛ばされたヨルは、生首となりマクスウェルの張ったマナの障壁を喰らい尽くす。

ヨルに喰われたところからマナの障壁が崩れ去りローエンのフリーズランサーがマクスウェルに降り注ぐ。

「ぐおお！」

ヨルは、いつもの黒猫に戻り尻尾を振る。

「毫碌したか？俺にそんなのが通じるわけないだろ」

「調子に乗るな、シャドウもどきが!!」

マクスウェルの盾が1匹で立つヨルに襲いかかる。

「どこを見ている?」

後ろに立ったミラが手をかぎす。

「イフリート!!」

炎の大精霊が現れ、マクスウエルに炎の拳をぶつける。

マクスウエルは、ヨルに向かわせていた盾で、防ぐ。

拳を受けながらマクスウエルは、イフリートを睨みつける。

「貴様、正気か?」

イフリートは、静かに頷く。

ヨルの味方をするイフリートにマクスウエルは、驚きが隠せない。

そんなマクスウエルにレイアの棍が振り下ろされる。

マクスウエルは、すぐさまマナの障壁を張る。

それを見越したようにヨルが、生首となつて障壁を喰らい尽くす。

阻まれることのなくなった棍は、そのまま真っ直ぐにマクスウエルに振り下ろされ

る。

「よし！当たった！」

「だから、どうした！」

拳を受けている盾でイフリートを吹き飛ばすとレイアに向かって盾をぶつけた。盾は、レイアを吹き飛ばす。

飛んでくるレイアに向かってミラが手をかざす。

「シルフ!!」

風の大精霊シルフが現れ、レイアが地面に落ちないよう風を起こす。

レイアは、急降下することなく地面に降り立つ。

「ミラ!!」

「礼は、いい。それより来るぞ」

マクスウエルは、盾を緑に輝かせる。

そして、

「トリニティチェイサー!!」

緑の弾が、ホームズ達に襲いかかる。

その遅いスピードにホームズは、首をかしげて紙一重でかわす。

「阿呆！」

ヨルの言葉にホームズが、肩にいるヨルに言い返そうとするとそこには、眼前に迫る緑の弾があった。

「っ———！」

確かに避けたのだ。

だが、その弾は自動追尾をするものだった。

防御が間に合うわけもなく緑の弾は、ホームズとヨルを捉えた。

緑の弾に弾かれたヨルは、宙を舞う。

「ヨル！」

思わず叫んだホームズをマクスウエルの盾が弾き飛ばす。

「ぐっ………！」

ホームズに更に追撃しようとするマクスウエルにジュードとローズが迫る。

「こんのお!!」

ローズとジュードの刀と拳がそれぞれマクスウエルに放たれる。

マナの障壁が防ぐ。

動きを止められたジュード達に盾が襲いかかる。

盾は二人をまとめて弾き飛ばす。

「ネガティブゲート!!」

エリーゼの精霊術もマクスウエルは、マナの障壁で防いでしまう。マクスウエルは、マナの障壁を消すと両手を合わせて菱形を作り出す。

「結晶せよ！根源たる元素！」

マクスウエルの後ろに四色に輝く魔法陣は、ない。

代わりにあるのは、白く物憂げに輝く魔法陣だ。

「メテオストーン!!」

光り輝く球体がジュード達に迫る。

ヨルは痛む身体を押しして生首になろうとする。

だが、喰らうことは叶わず輝くマナの塊がジュード達に降り注ぐ。

ホームズは、忌々しそうに降り注ぐマナの塊を睨みつけると無理矢理立ち上がり地面を踏み鳴らした。

そんなホームズに構わずまなの塊が降り続ける。

降り終わった時、高みから見下ろしていたマクスウエルの目に映ったのは、ボロボロになりながらも佇む八人とそしてヨルだ。

「ほう、アレを耐えたか」

「ホームズのおかげだ」

ミラは、そう言ってホームズに目配せをする。

ホームズは、力無く笑って光り輝く陣を消した。

ギリギリのところまで守護方陣・改を作り出し、マナの塊の威力を殺していたのだ。マクスウエルは、ミラを見下ろす。

「大したものだ。だが、勝てるのか？」

「勝つんだよ。俺を封印したお前に負けるのは頭に来るからな」

ミラが答えるより早くヨルが口を挟む。

マクスウエルがそんなヨルに侮蔑を込めた目を向ける。

「貴様……自分が何をしたか忘れたわけではないだろう？封印されるのは、当然だ」「知ったことか！負けっぱなしほど、頭に来ることはない！」

暴言そのままの言葉にホームズは、呆れるばかりだ。

マクスウエルの言葉は、正論だ。

悪事を働けばそれ相応の代価は、付き物だ。

だが、そんなもの化け物には、通じない。

「ここできつちり憂さ晴らししてやる」

ヨルは金色の瞳を闘志で爛々と輝かせ、マクスウエルを睨みつける。

マクスウエルは、そんなヨルを馬鹿にしたように笑う。

「ならば、今のお前に何が出来るか見せてもらおう」

マクスウエルの盾がヨルに向かって進む。それをホームズとミラの脚とミラの剣が止める。

「お前は、本当に………」

「全く、ここまでするといつそ清々しいねえ………」

呆れる二人にヨルは、尻尾をゆらゆらと揺らしてどうでも良さそうにしている。

ホームズとミラは盾を弾き飛ばす。

飛ばされた盾は、マクスウエルの元へと戻っていった。

ホームズは、それを見ながら首を傾げる。

先ほどから一つの可能性が、頭から離れないのだ。

「ミラ、確認だけどここつてなに？ 精霊界？」

「と人間界を繋ぐ場所だ」

「どうやって作ったんだい？」

「精霊術以外にないだろ」

「だよね」

ホームズは、ニヤリと笑う。

「だ、そうだよヨル」

一瞬ヨルは、訳が分からず首をかしげるが直ぐにニヤリとホームズと同じ悪巧み満載

の笑みを浮かべる。

「なるほど」

ヨルは生首へと姿を変える。

「まさか……………」

ローズの眩きなど無視してホームズは、指をビシッと突き出す。

ヨルは口を大きく開ける。

「喰らいつくせ……………!!」

「言われなくても!」

ヨルは、大口を開けて息を大きく吸い込む。

ヨルの口を中心に世界が歪み始める。

「待て! やめろ!」

マクスウエルの盾が迫り来る。

それをジュードとミラが止める。

ごくんごくんという音が響き渡る。

文字通り世界に挑むその様は、まさに化け物と呼ぶにふさわしい。

あたり一面にあるマナは、全てヨルが喰らっていく。

マクスウエルは、慌てて止めようとするが、そんなことホームズ達が許さない。

妨害という妨害を繰り返し、マクスウェルをヨルに近づけさせない。

「貴様ら、いい加減に……………」

「して欲しいんだつたら止めてあげよ」

ホームズは、そう言つてマクスウェルから一步離れる。

ホームズは、肩幅分だけ身体をずらす。

そこには、黒い霧に包まれた何かがあつた。

霧だというのにその吸い込まれそうな見覚えのある黒にマクスウェルは、息をのむ。

「まさか……………」

黒い霧は、両後ろ脚の形に整えられ、二つの足だけが現れた。

「……………」

マクスウェルは、盾を思い切り黒い霧にぶつける。

だが、迫り来る盾を黒い霧が押さえる。

盾と霧がぶつかった瞬間前脚が現れる。

「それとも止めてあげた方がいいかい？」

黒い霧が、霧散し現れる。

「……………この姿を見るのは、何年振りだ？マクスウェル？」

白虎というのがあるなら、黒虎と表現するのがぴったりの本来の姿をしたヨルが。

「今の俺に何が出来るか見せてやる」

入れ替わり太刀替わり

「シャドウもどきー！」

マクスウエルの盾がヨルに迫る。

ヨルは、それを爪で弾きかえず。

「シャドウじゃない」

弾きかえされた盾は、弧を描いてヨルの背後から襲いかかる。

「もどきでもない」

ヨルは、それを尻尾で弾くとマクスウエルに向かって駆け出した。

「俺は、化け物。名前は、ヨルだ!!」

ヨルは、そう言つてマクスウエルを殴りつけた。

マクスウエルは、態勢を崩しながら火の玉をヨルの周りに無数に出現させる。

「フレアボム」

轟音が響き、ヨルを煙が覆う。

フレアボムは、決まった。

だが、マクスウエルの肩間にシワが寄る。

その瞬間、ヨルが煙を押しつけて現れた。

(なるほど、見極めてきたのか……)

無数にあれば大小はともかく、必ずそれぞれの精度に差が出る。

ヨルは、ファイザーバード沼野で靈勢を見抜いてきた。

今更、術の精度を見抜くなど、出来て当然だ。

「だが、甘く見るなよ。それは人間の話だ」

マクスウエルの盾が向かってくるヨルに横殴りに襲いかかる。

「マクスウエルの術の精度の差など、そこそ取るに足らん!!」

盾は、ヨルを殴り飛ばす。

ヨルは、殴り飛ばされる寸前に尻尾をマクスウエルに巻きつける。

「貴様も道連れだ、大精霊」

ヨルは殴り飛ばされながらも尻尾で地面に叩きつける。

「ぐっ……………!!」

ヨルはくるりと宙返りをして降り立つ。

黒い紐のような尻尾を自分の元へと回収する。

「すごい……………」

マクスウエルとヨルの戦いを見てローズは、思わず眩く。

「あいつだけで、勝てるんじゃないの？」

アルヴィンの言葉にミラが首を横に振る。

「いや、それはないな」

ミラは片手剣を構える。

「マクスウエルだけじゃ勝てない、そんな奴を世に出さないために封印したんだ」

ミラが喋っている間にもヨルに向かってマクスウエルから、トリニティチェイサーが放たれた。

ヨルは、避けようとするが、その瞬間黒霞が身体から漏れ動きを止める。

「だから必ず、制限がある」

「ヨル!!」

緑光に包まれたマナの弾は、ヨルに向かっていく。

「マズイ! ホームズ……………」

ローズがそう言ってホームズの方を振り返ると、いる筈の人間がどこにもいなかった。

「紅蓮脚・二ノ型!!」

炎で纏われたホームズの両脚が、マクスウエルの緑の銃弾を蹴り落とす。

「遅いぞ、ホームズ」

「そりゃあ、悪かったねえ。君がここまで考えなしとは、思わなかったからさ」
そう言つてヨルを指差す。

「大きさを落としたまえ。そうすりゃあ、もう少し持つだろう?」
ホームズの言葉にヨルは少しだけ大きさを落とす。

すると溢れ出ていた黒霞が消えた。

「捻り潰してやりたかったんだがなあ……」

ヨルの残念そうな言葉にホームズは、肩をすくめる。

「殴っただけで、満足しときゃあいいのに……欲張りだねえ」

「欲も意地も張るものだ」

ヨルは、そう返すとホームズにしらっとした目を向ける。

「とうか、お前にだけは言われたくない」

ホームズは、ヨルの言葉に肩をすくめるとピヨンとヨルの背中に飛び乗る。

「舌噛むなよ」

「はいはい」

ヨルは、ぐつと力を込め、マクスウエルに向かって駆け出した。

「愚か者め!!」

フレアボムがホームズの前に展開される。

ホームズは、ヨルの背中に両手をつけて両脚を広げる。

「転泡・逆巻き!!」

水を纏ったホームズの蹴りがフレアボムを端から消していく。

「何!?!」

ホームズの両脚から水が消え、ヨルは一直線に走り込む。

「ホームズ!用意してろ!!」

「言われなくても!」

ホームズは、ヨルの背中から飛び上がった。

ヨルは、ホームズを尻尾で掴むと走り込んだ勢いそのままにマクスウエルに向かって放った。

「瞬迅脚・改!!」

ホームズの飛び蹴りがマクスウエルに襲いかかる。

マクスウエルは、マナの障壁で防ごうとする。

だが、それより早くホームズの蹴りがマクスウエルの土手つ腹にめり込んだ。

「ぐっ……………!」

マクスウエルから苦悶の声漏れる。

ホームズは、食い込む右足を引くと間髪入れずに左足を繰り出す。

その後は右足、その次は左足と止めどなくホームズの両脚が繰り出される。

「だあああああああああああー!!」

無数に繰り出した後、最後の締めとばかりにホームズは、脚を後ろに下げる。

そして渾身の力を込めた一撃を放つ。

だが……

「調子に乗るなよ、エレンピオス人が!!」

マクスウエルがギリギリで張ったマナの障壁に遮られた。

マクスウエルは、マナの障壁を広げホームズを弾き飛ばす。

「とどめだ!!」

マクスウエルは、宙に浮くホームズに向かって緑の銃弾を放った。

緑の銃弾は、曲線を描きながらホームズとの距離を詰めていく。

後一步で届くというところで、紫の銃弾、チェイスバレットが撃ち落とした。

「何?」

マクスウエルが思わず振り返ると、そこには、ヨルに乗って武器を構えるアルヴィンとエリーゼがいた。

「貴様ら……………」

マクスウエルは、忌々しそうに睨むと緑の銃弾、トリニティチェイサーを連続で放つ。

「ヨル! 走れ!」

「当然だ!!」

ヨルは、アルヴィンたちを乗せ走る。

迫り来る銃弾。

アルヴィンは、銃を構え銃口を向ける。

そして、ヨルの揺れを物ともせず引き金を引いた。

連続で撃ち落とされる撃鉄。

放たれる弾は、全てを撃ち落としていく。

だが、アルヴェインの銃弾は有限だ。

いずれ終わりが来る。

かちんという音と共にアルヴェインの銃から、弾が出なくなった。

「終わりだ!!」

トリニティチェイサーが再び放たれる。

アルヴェインは、懐に手を入れるとリボルバータイプの拳銃、ジランドの持っていたアルヴェインの父親の銃を取り出す。

「残念」

アルヴェインは、そう言つて引き金を引いた。

トリニティチェイサーは、アルヴェインの銃弾によつて消えた。

『ナイスアルヴェイン!!』

アルヴェインが梅雨払いをしている間にエリーゼの精霊術が完成した。

『ブラックガイド!!』

堕天使の鎌が、マクスウェルの向かつて振り下ろされる。

ご丁寧にマナの障壁の中に出現させて。

「くっ!」

堕天使の鎌は、マクスウェルが座る椅子の左の肘掛を砕いた。

「貴様ら!!」

トリニティチェイサーでは、防がれると思ったマクスウエルは、盾を差し向けた。アルヴィンとエリーゼに向かって。

(待て……シヤドウもどきはどこだ?)

「探しもの?」

背後から聞こえる軽やかな声。

そこには、ヨルに乗ったレイアとローエンがいた。

レイアの棍がマクスウエルが防ぐより早く仕掛ける。

「たああつ!!」

マクスウエルのマナの障壁が張るより早くレイアの棍が捉える。

マクスウエルは、ギロリと睨むとアルヴィンに向けていた盾をレイアへと差し向ける。
る。

「こんの阿呆! せっかく背後取ったのに声を出す馬鹿がどこにいる!!」

迫り来る盾をレイアが受け、弾きかえす。

「うるさいな! 当たったからいいでしょ! それと馬鹿か阿呆かどっちかにしてよ!」
レイアの答えにヨルは、ため息をつきながら脚を早める。

回り込もうと走る中、弾き飛ばしたマクスウエルの盾が執拗に追いかけてくる。

「くっ………!!こんの!」

その度にくる盾をレイアは、棍をいいなし、そして、弾いていく。

「これ、どうにかしないと近づけない!!」

「だったら、私の出番ですね」

ローエンは、細剣を指揮棒のように軽やかに振るっている。

「どうやらとづくに準備は出来ていたようだ。」

「ソリッドコントラクシオン!」

光り輝く鎖が現れ、盾を拘束する。

「長くは、持ちません。今のうちです!」

「ナイスローエン!行くよヨル!」

「掴まっつろ!」

ヨルはスピードを上げる。

周りの景色が飛ぶように背後に流れていく。

マクスウェルとの距離は、過ぎ去る景色に比例して詰まっつていく。

レイアは、振りかぶる棍に力を込める。

狙いは、そこしかない。

何で操っているかなんて分からない。

だったら、狙えそうな場所から狙っていくしかない。

レイアは、棍を振りかぶった棍にヨルの勢いを乗せ、振り切る。

「たあああああああつ!!」

振るわれる棍がマクスウエルの椅子の右の肘掛を砕いた。

砕け散る自分の玉座の肘掛にマクスウエルは、驚いた後レイアたちを睨みつける。

「貴様らー!」

マクスウエルは、盾を縛る鎖を断ち切ると攻撃に移る。

だが、やはりそこにはヨルがいなかった。

(何なんなのださつきからー)

先ほどからマクスウエルが目を離した隙にヨルが消えている。

そのことに意識を奪われているとマクスウエルの顔面に鈍い痛みが走る。

それがジュードの拳だと気づくのにそう時間はかからなかった。

ヨルのスピードが乗った拳で殴られたマクスウエルは、椅子から振り落とされた。

通り過ぎたヨルは、そのままターンをして再びマクスウエルに向かって駆け出す。

「ハアアアつ!!」

ミラの震えるほどの気合いと共に片手剣を振るう。

マクスウエルは、椅子の背もたれでミラの攻撃を防ぐ。

攻撃は、防げた。

だが、代償として椅子の背もたれは無残に碎け散った。

マクスウエルは、椅子に座り直すと、盾を振るう。

ミラとジュードは、頷いてヨルの背中から飛び降りる。

行き場を失った盾は、ヨルに向かう。

盾は、真つ直ぐにヨルの頭を狙っていた。

ヨルはそんな盾を見ると不敵にニヤリと笑い、姿を消した。

「何だ?!」

マクスウエルは、慌てて辺りを見回すと直ぐに見つけられた。

ヨルは、ホームズの側に悠然と立っていた。

「馬鹿な！シャドウもどきに瞬間移動なんて能力は……」

「ないよ」

ホームズは、驚愕するマクスウエルを睨みつける。

「あるのは、おれがヨルを呼び出す力だ」

ホームズは、ポンチヨをはためかせる。

「お忘れかい？おれ達は一定の距離以上離れられない。そして、おれは、ヨルを呼び出すことができる」

レイアは、ロランドで風邪を引いた時のことを思い出した。

あの時、ホームズはレイアの熱を測るためにヨルを呼び出していた。

仕掛けは、単純だ。

マクスウエルが、ヨル達に気を取られている隙にホームズが次にヨルの背中に乗る面々のところへ移動し、ここぞという時に呼び出す。

それを何度も繰り返していたのだ。

「貴様ら」ときに……」

物の見事にマクスウエルは、翻弄されてしまったのだ。

ホームズは、そんなマクスウエルを鼻で笑う。

「詰めが甘いんだよ、君は」

ホームズは、リアルオーブを輝かせる。

マクスウエルは、溢れ出る感情を歯を食いしばって飲み込む。

「貴様こそ忘れてるんじゃないだろうか」

手で菱形を作り出す。

時計の文字盤が現れ、針が回り出す。

ヨルは、眉間にしわを寄せる。

「やせるもんか！」

ホームズが走り出す。

だが、それより早く針がXIIに辿り着く。

「ストッププロウ」

静かに響き渡るマクスウエルの声と共に時が止まる。

ホームズ達は走っている形そのままに動きが止まっている。

「ふん、所詮は靈力野も持たない愚かなエレンプイオス人だ」

そう言つて盾を振るおうとする。

その時、マクスウエルはありえない事に気づく。

（待て、先ほどまでここにいたシャドウもどきは、どこだ!?!）

ストッププロウが発動した時には、そこにいたヨルがいないのだ。

「一体どこに………」

最後までマクスウエルは、言い切ることが出来なかった。

「ここだ、阿呆」

ヨルの前足で思い切り殴られた事によって。

大きさを最大に戻した、最大の威力で。

宙に浮いていたマクスウエルは、椅子ごとヨルに叩き落とされた。

マクスウエルは、地面に落とされながら信じられないというふうヨルを見る。

「馬鹿な……………何故動ける……………」

大きさを最大に戻したヨルは、マクススウェルをそのまま踏みつける。

「ぐっ……………」

「ずっと不思議だった。ありとあらゆる物……………昔だったら放たれた弓、さつきだったら、小ムスメが投げた鞆、それも止まっていたのにお前の服も椅子も何故か動いていた」
ヨルは、そう言いながら脚に体重をかける。

「そこで思った。もしかして、お前の触れたもの、そしてお前がマナで操るものは、この止まった世界で動けるんじゃないかと」

ヨルはそう言うのとマクススウェルの手に目を向ける。

マクススウェルの手に、最初は糸が巻きついていく。

それは、やがて太くなり見覚えのある黒々とした紐になった。

「まさか……………」

「そう。そのまさかだ」

ヨルは犬歯を見せる。

ヨルの尻尾は二つに分かれていた。

「気付かないほど細い尻尾をお前に縛り付けていた」

「いつの間にも！」

「貴様が気付かない間に決まってるだろ」

ヨルは犬歯を見せ、更に力を込める。

だが、そこでヨルの体から黒霞が漏れ出した。

「ふん、時間切れだな。俺も……お前もな」

XIIを指している文字盤が消え、皆が動き出す。

ヨルの体を黒霞が包み込む。

マクスウエルは、黒霞に包まれたヨルを弾き飛ばして宙に浮く。

「ヨル！」

ホームズが慌ててキャッチする。

「切り札も消えた。今度こそ貴様らの負けだ」

ヨルは、黒霞に包まれたままだ。

「まだよ」

声と共に刀を地面に突き立てるローズ。

「ローズ？」

ホームズが首をかしげるとローズは、マナを込めて詠唱を始める。

「ローズ・クリステイが時に命ずる」

「おい、君……………」

「生まれ生まれ生まれ」

その溢れ出るマナにミラ達は、目を丸くする。

「まさか……………」

突き立てられた刀を中心として現れる見覚えのある文字盤。

「おい、嘘だろ……………」

アルヴィンが驚いていると今度は針が現れた。

「絶対生まれ」

ヨルはその光景を黒霞に包まれながら満足そうに見ていた。

（止まった時の中で動ける物に触れたものは、おそらく動けたんだろう……………だから、

あの盾で飛ばされた時、小ムスメは見たんだ、止まったあの世界を）

見たのは、ローズだけではないだろう。

だが、それを血肉にしようと無謀な賭けに打って出たのは、ローズだけだ。

——いや、だって、ナハティガルの戦いでローエンがぶつ放すのを見るまで知らなかったもの……

初めてローズがデイバインストリークを発動させた時の言葉だ。

あの時、ローズはローエンのデイバインストリークを見ただけで、見様見真似でやって見せた。

そんなローズにマクスウエルは、一体何回見せてきた？

「必ず止まれ!!」

詠唱をするローズからは、その負担を物語るように鼻血が流れ出ていた。

「ローズ!!」

ジュードの声などもう耳に入らない。

—— 『まあ、天才とか秀才程度じゃ使えない代物だけだな』 ——

(だったら……………)

ローズは、マナの込めすぎでクラクラする頭を押さえながら目の前のマクスウェルを睨みつける。

「天才で秀才ならどうだ!!」

針は文字盤を動き出す。

そして、XIIを指す。

「ストップ……………」

「くっ!! 結晶せよ……………」

「ロー……………ウ!!」

マクスウエルが精霊術を発動させるより早く、時を止めた。今この場で動けるのは、ローズだけだ。

ローズは、垂れる鼻血を手で拭うと、刀を引き抜く。

「剛招来・纏」

刀に紅い鬨気が纏われる。

ローズは、そのまま走り出す。

止まっているマクスウエルの操る盾に向かって振りかぶる。

「ガアああああああア!!」

裂帛の気合いと共に振り下ろされた刀は、マクスウエルの盾を見事砕いて見せた。

それと同時に止まっていた時が再び動き出した。

マクスウエルが、発動させるはずだった精霊術は発動することなく消え去った。

時が動き出した瞬間、ローズは糸の切れた操り人形のように倒れた。

「ローズ!!」

慌てて駆け寄るホームズ。

駆け寄ったホームズがローズの首元に手を当てる。

「脈はあるみたいだねえ……」

ホッとため息をつくのも束の間、

「貴様ら………」

マクスウエルからトリニティチエイサーが放たれた。
迫り来る紫の弾丸。

「——っ！」

思わずローズを庇うようにホームズが抱きかかえる。

「イフリート！」

ミラの声と共に現れたイフリートが、トリニティチエイサーを炎の拳で殴りつけた。
マクスウエルは、悔しそうに歯噛みをする。

「ホームズ、ローズを連れて離れろ」

ホームズは、何も聞かず頷いてその場から離れた。

ミラのリアルオーブが輝く。

「マクスウエル、決着だ」

リアルオーブは、オーバーリミッツ最高潮に辿り着いた。

「始まりの力、」

ミラの片手剣に炎が現れ、マクスウエルを火炎と共に切り上げる。

「手の内に!」

空中に打ち上げられたマクスウエルに水が立ち上り更に上に押し上げる。

「わが導となり」

風の刃をマクスウエルに放つ。

「っじ開ける!」

宙に浮き上がったミラは、土石の雨を降らせ、自分の背後に赤青緑黄の四色の魔法陣が現れる。

「スプリーム・エレメンツ!!」

響き渡るミラの声と共に四色の無数のマナが、雨となってマクスウエルに降り注いだ。

マナの障壁などそれこそ紙のように貫いていく。

「……………何故だ…………」

マナの雨はマクスウエルの玉座を砕く。

玉座の消えたマクスウエルは、ゆっくりと地面に落ちていった。

「これが、人と精霊の力だ」

ミラは、そう言つて地面に降り立った。

枕を固くして寝る

「ん……………」

「お！起きたね、ローズ」

ローズがゆっくりと開くとそこには、ホームズの姿があつた。

金色の瞳で覗き込むホームズを見て、ローズは、自分が今どんな状況かようやく分かつた。

「……………筋肉質の膝枕は、寝心地が悪いわね」

そうローズは、ホームズに膝枕をされていた。

「……………最近の枕は固いのが流行りなんだよ」

ホームズは、頬を引きつらせながらそう言い返す。

「そう」

ローズは、そう言つて首だけ動かす。

そこに映るのは、ミラに飛びつく二人と一つのぬいぐるみだ。

飛びつかれたミラは、少しよろめく。

「エリーゼ、レイア」

ミラも嬉しそうに三人の頭を撫でる。

ティポは、ぐりぐりと頭をミラに押し付けている。

『この感触ホンモノだー!』

ミラは呆れたように笑っている。

ローエンは、そんな彼女らを見て嬉しそうに微笑む。

「こんなに嬉しいことに出会えるなんて、長生きはしてみるものですね」

アルヴィンは、破顔しながら髪をかき上げる。

「信じられねえ。でも現実なんだよな」

「本当、これ以上はないね」

ホームズは、とても嬉しそうに笑う。

ミラは、そんなホームズを見て驚く。

「おお!初めて見たぞ、お前のその笑顔。いつもとは大違いだな」

「相変わらず一言多いね。というか、何回か見せた気がしなくもないけど……」

ホームズは、先程の笑顔を消し去って深くため息を吐く。

いつものように喋るミラを見てローズの瞳が潤む。

「ああ、こんなことって本当にあるのね」

「泣いてるのかい?」

「泣いてちや悪いの?」

不機嫌そうな声でローズが言い返す。

そんな二人を見ながらミラは、微笑む。

「元気そうだな、みんな」

そう言つてミラは、ジュードに視線を向ける。

ジュードは、静かに頷く。

「うん。おかえり、ミラ」

「ああ。ただいま」

ミラの言葉と共にヨルを包んでいた黒い靄が晴れた。

晴れたところから現れたのは、普段のヨルよりひと回りもふた回りも小さい黒い子猫だった。

その愛らしい姿に一行は言葉が出ない。

「……………ヨル?」

レイアが、疑問系で尋ねるとヨルは思い切り嫌そうな顔をする。

「ああ」

だが、そんな容姿から出た声はいつもの低音だ。

「……………えーつと」

レイアとエリーゼは、ミラから離れシゲシゲとヨルを見る。

「エリーゼ、見たことある?」

「はい。一回だけ」

「ヨル。普段からそれでいい?」

「あ、あ?」

「ごめん。嘘です」

その容姿からは信じられないドスの利いた声にレイアは、直ぐに謝る。

「まあ、封印がかかっている状態で無理をしたんだ。これぐらいの代償は当然だろ?」

ミラの言葉にヨルは、忌々しそうに鼻息をならす。

それぐらいは、覚悟の上だったようだ。

ミラは、そんなヨルを見ながら腕を組む。

「お前は、私がマクスウエルじゃないことに気づいていたのか?」

ミラの言葉をヨルは、尻尾をゆらゆらと揺らして答える。

「当然だな。お前、俺の封印の種類を知らない、セルシウスを知らない、それでマクス

ウエルだと俺が思うわけないだろ」

淡々と紡がれるヨルの言葉にミラは、反論出来ない。

「正直、人間が何を粋がっているのかと思っていた」

ヨルは、全てを知った上で面白がっていたのだ。

いつ、その正体に気づくのかと。

皆の視線が険しくなる。

そんな視線に構わずヨルは、続ける。

「だが、まあ、やはりミラの方がマクスウエルだな」

ヨルから思わぬ形で語られた名前に一行は目を丸くする。

ミラは少し驚いた後、優しく頬笑んだ。

「そう言ってもらえると嬉しいよ」

辺りを優しい空気が包む。

そんな中、ローズは、兼ねてからの疑問を口にする。

「あのさ、レイア」

「何？」

「もしかして、ホームズが死んだフリしてたの気付いてた？」

「うん」

即答だった。

レイア以外も皆頷いている。

ホームズは、そんな面々を見てため息を吐く。

「あーあ………せつかく復活したんだから、誰か涙を浮かべて喜んでくれると思ったのになあ………」

「ホームズとも長い付き合いになったからね」

ジュードの言葉を誰も訂正しない。

「殺してもしないもんね、ホームズ」

「殺されたら死ぬよ」

レイアに向かってジトつとした目を向ける。

レイアは、どこかの誰かさんのように肩をすくめる。

「まあ、ローズは心配してたよ」

「嘘は、感心しないよレイア。この子第一声『そんな、なんで？』だったからね。喜びの

笑顔なんてなかつつつつ

ローズが枕になつてゐるホームズの腿を力の限り抓つたのでホームズは、最後まで言えなかつた。

「ローズ……………」

「手が滑つた」

「滑るところか、全く離れなかつたけど」

ホームズは、そう言つてローズの頬をつねる。

ローズも負けじとつねり返す。

そんな二人を遠巻きに見ながらジュードは、ポツリと零す。

「というか、ローズ恥ずかしくないのかな？」

「いや恥ずかしいと思うよ、顔真っ赤だし」

レイアの言葉にジュードは、首をかしげる。

「……………だったら、退けばいいんじゃないの？」

ジュードの言葉にレイアとエリーゼは、ため息を吐く。

「……………ほんと、乙女心が分かつてないねジュード」

「え？」

レイアは、もう一度だけため息を吐いた後、説明する。

「動揺してゐるって思われたくないから、あのままなんだよ」
ジュードは、更に首をかしげる。

「まあ、ジュードには分からないよね……」

レイアは、呆れたようにため息を吐いた。

ジュードは、一瞬不満そうな顔をした後、ホームズに視線を向ける。

「なんだかよく分からないね」

ジュードの言葉にレイア達は苦笑いを浮かべる。

完全に子猫となったヨルは、尻尾を揺らしている。

そんなヨルの後ろに熱が巻き起こる。

「久しぶりだな、シャドウ」

「俺をその名で呼ぶなと言ったはずだ、イフ、フ、フ、フ」

ヨルは忌々しそうに返す。

「だいたい、ジルニトラで会ってるだろ」

「あの場で言い損ねたからな。だから、今言った。久しぶりだな」

あくまで久しぶりの挨拶を繰り返すイフ、フ、フ、フにヨルはうんざりしたようにため息を吐く。

「ああ、久しぶりだな。相変わらずの堅……」

「堅物とか言うんじやないだろうな」

イフリートは、先回りしてヨルの発言を潰す。

そんな彼らのやり取りを見てホームズは、何か思いついたようにポンと手を叩く。

「もしかして、カラハ・シャルルで言つてた堅物のイフリートつてこの子のことかい？」

「おい、シャドウ。お前、何話したんだ？」

問い詰めるイフリートにヨルは、素知らぬ顔で口笛を吹いている。

ジュードは、苦笑いだ。

「ああ、やっぱり、あれはホームズ達だったんだね」

「あれ？」

レイアが首をひねる。

するとミラがちらりとイフリートの方を見る。

「カラハ・シャルルで、偽イフリート紋様のカップを売っているのを見抜いたのだ。厳

格なイフリートが焼いたとは思えない紋様だったのだな」

そんなミラの後をジュードが引き継ぐ。

「ミラがそう言つたら、店の人、同じようなことを黒猫を連れた男に言われたつて言つててね……………」

「二応、言っておくけど言ったのは、おれじゃないよ」

ホームズズの言葉などジュード達にはどうでもいいようだ。

誰も反応しない。

ホームズは、悲しそうにため息を吐いた後、イフリートを見る。

「ヨルの事を敵視してないなんて珍しいね。仲良し？」

「……………まあそうと言えなくはないか」

「おい、嘘をつくな。監視役だったろ、お前」

「割と仲良くやっていたと思うが？」

大真面目にいうイフリートにヨルは、ため息を吐く。

「最後殺しあつたらうが」

「そんなもの些細なことだ」

ホームズズの頬が引きつる。

ミラの方に視線を向けると、ミラは肩をすくめる。

「堅物で豪快ねえ……………」

ヨルはともかくイフリートとしては、どうやら仲良くやっていたようだ。

「（なんか呆れてるけど、ホームズも人のこと言えないよね）」

「（似た者同士です）」

呆れているホームズを尻目にエリーゼとレイアがこそこそと話している。

「なんだい？」

「ホームズは、大人だなあつて話だよ」

「あれ？前、子供とか言つてなかったっけ？」

「やだなあ！」

あはははと乾いた笑いを浮かべながら不自然に目をそらす。

ヨルはそんな彼らに構わずイフリートに尋ねる。

「そう言えばあの人間、最後はどうなった？」

ヨルの質問にイフリートは、首を横に振る。

「我々も知らんのだ。あの後消息不明になったからな」

「そうか……………」

ヨルの寂しそうな顔にイフリートは、少し驚く。

ヨルは、そんなイフリートを睨みつける。

「なんだ？」

「いや、変わったな」

ヨルは、尻尾をゆらゆらと揺らす。

「……………色々あつたんだよ」

ヨルは、つまらなそうに返すと目の前にノームが現れる。

「それより、仲直りするでし！」

球体に乗りながら妙な語尾のノームにヨルは、うんざりした顔を浮かべる。

「元々、直すような仲がないだろ」

その言葉にイフリートは、黙って顔を伏せる。

最後、ヨルはこの世全てと戦った。

そして、敗北し、気の遠くなるほどの時間、あの洞窟に封じられていた。

自業自得とはいえ、自分をそんな目に合わせた四大精霊達にヨルがいい感情を持つわけがない。

ヨルは、イフリート達に背を向けホームズに向かって歩き出す。

「だが、まあ、ジルニトラでの一件ときっきの銃弾を防いだ一撃……」

ヨルは、そこまで行ってホームズの頭に飛び乗って振り返る。

「それで、二千と五百年前の事は、チャラにしてやる」

ヨルの言葉にイフリートは、軽く笑う。

「俺は、元々あの時にチャラにしてやったつもりだったんだがな」

「言ってる」

ヨルとイフリートは、そう言うどちちらともなく笑い出した。

レイアとエリーゼは、そんな彼らを見て首を傾げる。

「精霊ってよくわかんないね」

『ほんとにー!!』

「安心しろ、私にも分からん」

ミラも同じように首を傾げている。

ローエンは、優しく微笑んでいる。

「女性には、難しいかもしれないね」

その言葉にレイアは、少し呆れたように肩をすくめる。

「ああ、それじゃあ仕方ないね……………」

全てが終わったと、そう思ったとき、ゆらりと空気が動いた。

その気配に思わずミラが振り返るとマクスウエルが、浮かび上がっていた。

一行は、思わず武器を取る。

「ローズ」

「ダメ、さっきので空っぽ。立てそうにない」

ホームズは、それを聞くと有無言わさずにローズを背負う。

文句を言っている場合ではない。

構えた一行とは、対象的にマクスウエルは疲れ切っていた。

「分からん……何故だ。四大、どうつもりだ？」

マクスウエルの問いかけにウンディーネとシルフが現れる。

「すまぬ。だが、俺にはもう我慢が出来なかった」

イフリートの言葉にシルフが頷く。

「うん。だから僕たちミラを助けちゃった。精霊界に連れて行ってね」

マクスウエルは、ゆっくりとかぶりを振る。

「そのような指示……出してはおらん」

するとウンディーネが胸に手を当てる。

「盟主、私たちに心があるように誰しもそれを持っています」

「道具扱いはダメでし。いくら世界のためだとはいっても！」

四大達に口々に言われマクスウエルは、閉口する。

そんなマクスウエルにミラが口を開く。

「マクスウエル。私の使命は、貴方のものだった。だが、同時に私のものでもあった」

マクスウエルは、静かに瞳を閉じる。

「自らの意思……お前の心が決めたというのか？」

マクスウエルの問いかけにミラは、光の灯る瞳で答える。

ジュードが一步前に入る。

「貴方の言う世界は、ただ存在するだけの世界に感じた。でも、それは、生きるとは言わないんじゃないかな」

ジュードは、そこで言葉を切る。

「僕は……僕達は生きたいんだ！」

力強いジュードの言葉にミラは、少し驚いた後優しく微笑む。

マクスウェルは、そんな二人の言葉をただ静かに聞いていた。

「それもお前の行動が解せん理由か……」

マクスウェルは、宙に浮きながら物思いにふける。

「人の心は、時として難解よ……それを蔑ろにし、知らず知らずのうちに道を踏み外したということか……」

マクスウェルは、静かに空気を吐き出す。

「断殻界シエを解こう」

マクスウェルから告げられた思わぬ言葉にホームズとアルヴィンは、目を丸くする。

胡蝶の悪夢

「マジか………！」

アルヴェインの言葉にマクススウエルは、頷く。

「断殻界シエールを解けば、断殻界シエールを構成していた膨大なマナで精霊達を守ることができる」

「どれくらいの間だい？」

「数年、いや数十年の猶予は稼げるだろう」

ホームズの質問の回答にジュードは、拳を握る。

「ありがとう、マクススウエル。必ず見つけるよ、リーゼ・マクシアとエレンピオス、両方が生きられる道を」

ジュードの決意に一行は、力強く頷く。

そんな中、ヨルのヒゲがピクリと動く。

「神に等しいその座から降りようというのか？」

声のした方を振り返るとガイアスが歩みを進めていた。

「ガイアス……」

ミラが目を険しくする。

ガイアスは、ミラに少しだけ目を向けたあと、一行とマクスウエルの間に入りマクスウエルを睨みつける。

「答えろ、マクスウエル」

問われたマクスウエルは、静かに瞳を閉じる。

「人の心に振り回されるのにいい加減疲れたのだ」

「マクスウエル……」

少しだけ人に歩み寄ったマクスウエルにミラは、表情を柔らかくする。

反対にガイアスの表情は硬いままだ。

「お前がリーゼ・マクシアの神に等しい座から降りるといふなら、俺が代わりに座ろう」

静かにだが、力強く語られた信じられない言葉にホームズは、目を丸くする。

「正気……なんですか？」

「当然だ」

ガイアスの答えにマクスウエルは、嘲笑を浮かべる。

「お前にそんな資格があると思うのか？」

「資格の有無ではない！覚悟を持った者だけが認められる話だ！」

ガイアスは、目の前で拳を握る。

「お前がやらないのであれば俺がやる」

「その話、私も認めるわけにはいかないな」

ミラは鋭く言い放つ。

何時でも対応できるようミラは、武器を持つ手に力を込める。

「お前達に認めれる筋合いはない！」

ガイアスは、空中を指差す。

その瞬間空間にヒビが入った。

マクスウエルは、眉をひそめる。

「この力は……まさか!」

ヨルの髭がピクリと動く。

「野郎……しつこいな……」

ヒビは、やがて大きく広がり、そこから見覚えのある黒く巨大な物体が現れた。

「クルスニクの槍!!」

あまりに場にそぐわない武器。

そしてクルスニクに槍には、ミュゼが漂っていた。

「……ミュゼが、持ってきたのかい、これ……」

「仕方がなかったのです。だって、マクスウエルは導いてくれなかったのですもの」
もうそこには、取り乱した様子はない。

心の支えを取り戻したように静かに語りかける大精霊がいた。

ミュゼは、ゆっくりと辺りを見回しローズを見てからクスリと笑う。

「へえ。結局、そつちについたの」

「……………」

ローズは、疲れ切ってぼんやりしつつもミュゼを睨みつける。

「どっとういとうい……」

「ふふふ。本当に分かってないの？結局、貴方達は、アルクノアとお似合いなのよ」
ローズの顔から血の気が引く。

「ミュゼー！」

ホームズから怒気が飛ぶ。

「その口を閉じたまえ。出来ないんだったら今この場で、おれが縫い付ける」

金色の瞳で睨むホームズに冗談の色は、どこにも無い。

睨まれたミュゼは一瞬たじろぐ。

そんなミュゼにマクスウエルは、言葉を飛ばす。

「ミュゼ、気は確かか!？」

マクスウエルの言葉にミュゼは、顔を険しくさせる。

「断殻界シエを消すなんて酷い!!」

ミュゼは、そう言うのとマクスウエルをクルスニクの槍に向かって突き飛ばす。

突き飛ばされたマクスウエルは、紫色の光にと共にクルスニクの槍に磔にされた。

「私は、断殻界シエを守る使命が大事……大事……大事なの!!」

マクスウエルの拘束は更に増していく。

マクスウエルは、苦しそうに口を開く。

「……離せ！これは命令だ！」

「あなたは、いつも遅すぎる!!」

誰かの命令がなければ不安で仕方ないミュゼにとってマクスウエルなどもう用はない。

ホームズの額を冷や汗が流れ落ちる。

「来い！ミュゼ！」

ガイアスの命令にミュゼは、彼の元に降り立つ。

胸の前で腕を交差させる。

「御心のままに」

交差させていた腕を解くと黒い靄の精霊術がミュゼの胸に現れる。

ガイアスは、迷わずそこに手を入るとそこから長刀を引つ張り出す。

余りにも突然起こった出来事の連続にホームズは、呆気にとられていた。

「ヨル……夢なら覚めて欲しいんだけど」

「悪夢は覚めないのが、お約束だ」

ヨルは、ビリビリと髭を震わせながら、ガイアスとミュゼを睨みつける。

「まさか、次元刀まで引つ張りだしてくるとはな……」

「何だい、それ？」

名前からして嫌な予感しかしない。

「次元を切り裂く事のできる刀だ」

ホームズは、目を見開きその長刀を凝視する。

ガイアスは、その長刀の切っ先をミラ達に向ける。

「ガイアス、お前！」

「そんな……なんで!？」

ミラとジュードの言葉にガイアスは、刀を構える。

「俺は死んでいった者達の為にもエレンピオスに行く！お前達は、リーゼ・マクシアで待っている！」

ガイアスは、そう言つて次元刀を振る。

振るわれた斬撃は、空間を切り裂き裂け目を作り出す。

「空間を切りやがった!!」

アルヴィンは、その切り裂かれた場所を凝視する。

裂け目は、ジュード達を飲み込もうと引き寄せる。

「ううー……引つ張られます……」

『頑張れー！エリーゼ!!』

その勢いにエリーゼは、杖で身体を支える。

だが、杖がズレる。

「!!」

その拍子にエリーゼは、態勢を崩し、宙を舞いながら裂け目へと向かっていく。

「エリーゼ！捕まれ!!」

アルヴィンの差し出された腕にエリーゼは、何とかしがみつく。

「戻れ！四大！」

ミラの声に四大は、四色の光の球となって彼女の元に戻った。

「ぶぐぐ………！ローズしつかり捕まっていたまえ」

ホームズに背負われたローズは、何とか力を込める。

そんなローズの目にフードの中に逃げ込んだヨルが入る。

「ヨル、アレは食べれないのかしら？」

「刀で斬った切り株を食べるものか！」

ヨルは、吸い込まれないよう必死にフードにしがみつく。

「まあ、そのサイズじゃどっちみち無理だよねえ………」

ホームズの言葉にもうヨルは答えている余裕もない。

ホームズは、ガイアスを睨みつける。

「ガイアス王………あなたは………」

ホームズの言葉に頷きもせず視線で押し返す。

「ああ。俺はリーゼ・マクシアの王だ。民のためなら何だってやろう」
その瞳に迷いはない。

信念を貫くその強い意志。

だが、それはホームズ達との完全な決別を意味していた。

「ガイアスーーーーー!!」

ホームズは、慟哭と共にガイアスに向かって歩みを進める。

行かせてはならないとホームズの本能が叫んでいる。

だが、裂け目の力が強く進めない。

「このままじゃ!!」

ローズは、辺りを見回すが見渡す限りの空のような世界。

何もない。

時間を止めようにもマナが足りない。

仮に止められたとしても裂け目は、消せないのも何の解決にもならない。

するとマクスウェルは、僅かに動き、もう一つ空間の裂け目を作り出した。

その裂け目は、ガイアスが

「マクスウェル!?!」

「この者達にマクスウェルの座を渡してはならん! こちらの裂け目をくぐっていけ

!

入りみだれる裂け目の力。ジュード達一行はこらえながら何とかマクスウエルの作った裂け目に近づく。

「みんな！」

「わっ—たよ！」

ホームズは、何とか裂け目の元へと歩いていく。

ホームズは、視線を向けず背中にいるローズに話しかける。

「どうするんだい？今ならまだ、ガイアスの所に行けるよ」

ホームズの言葉にローズは、しっかりと首を振る。

「もう、楽な道を選ぶわけにはいかないわ」

ローズの言葉にホームズは、少しだけ笑うとローズを俵担ぎに直す。

「え、あの……」

「よく言った。流石、おれの友人だ」

そう言ってホームズは、マクスウエルの作った裂け目に放り込んだ。

「みんな！早く！」

ホームズの視線の先には、裂け目の引き込む力をくぐり抜けながら迫るミュゼの姿があった。

「わかった！お前も早く来い」

ミラは、そういうと裂け目へと皆を連れ立って飛び込んだ。

「さて、困ったなあ……」

『『しばうふらぐ』の説明聞きたいか？』

「聞きたいと思うのかい？」

ホームズは、ヨルの言葉をバツサリ切り捨てると目の前の現状を確認する。

苦しそうなマクスウエルが、裂け目を持続できないと言葉より雄弁に語っていた。

ミュゼの進行を止め、いち早く裂け目に飛び込むしかない。

（現状を確認しよう。）

一つ、目的は、裂け目に飛び込むこと。

二つ、その前に迫るミュゼをどうにかしないといけない。

三つ、ただし戦っている余裕はない（

出てきた現状をホームズは、もう一度考えた。

ホームズは、深呼吸をする。

やることは決まった。

「よしー」

そう言ってホームズは、ヨルを投げる構えを取る。

戦闘せずには相手の動きをとめるには、それしかない。

(予想通りね……………)

ミュゼは、そうほくそ笑むといつでもヨルをしとめられるよう髪を伸ばす。

(シャドウもどきなら、最悪置いていっても戻ってくる。これ以上の奴なんてないわ)
ホームズが振りかぶった。

(今！)

ミュゼが前に出る。

そんなミュゼの前に橙色に揺らめく炎を灯したジツポーが現れた。

「———っ!!」

予想外の出来事にミュゼの動きが止まる。

ミュゼの確認をするとヨルは、まだホームズの右手に掴まれたままだ。

ホームズは、ヨルを振りかぶった状態で左手でジツポーを投げたのだ。

炎というおまけ付きで。

誰だつてその熱を持つ存在を前にすれば身構える、考えるより先に。

特にヨルが来ると思っていたミュゼは予想外の事にコンマ一秒完全に止まってし

まった。

ホームズは、その隙に裂け目に飛び込んだ。

「今のうち!!」

ミュゼは、それに気づくがもうその頃には、裂け目の中にホームズは、飲み込まれていた。

「ペテン師の右手を素直に見るなんてな」

「せめて、手品師にしておくれ」

裂け目にのまれながらもホームズは、考えていた。

ガイアスという支えを手に入れたミュゼ。

今回は、逃げの一択をとったから戦わずに済んだ。

だが、戦ったら？

それを考えるとホームズの背筋は、寒くなる。

(きつと、無事では済まない)

長い戦いの果て、
彼らは世^{ウルス}ノ精^{スカー}途^ラを後にした。

エレンピオス

合縁血縁

「……………」

ホームズは、ゆっくりと目を開けるとそこには、見たことのない天井があった。

「って、どこだいここ!？」

「騒がしいな……………」

ヨルがちよこんと座っていた。

「エレンピオスだろ。どう考えたって」

「……………あ」

ホームズの脳裏に今までのことが蘇る。

マクスウェルのこと、ミュゼのこと、ガイアスのこと……

「ああああああああああああああああ!!」

ホームズは、叫びながらドアを開けて飛び出る。

「みんな!？」

「いるから、静かにしろ」

飛び込んだ部屋には、ミラ達が集合していた。どうやらホームズが最後だったようだ。

ホームズの顔を見るとミラは満足そうに頷く。

「どうやら『しばうふらぐ』は、回収しなかったようだな」

「……………君、大分余計な言葉覚えてきたよね」

ホームズの感想などミラにとってはどこ吹く風だ。

ホームズは、頬を引きつらせながらキョロキョロと辺りを見回す。

そんなホームズの疑問をローズな先回りする。

「バランさんの家よ」

「バランさん？」

ローズの答えにホームズは、首を傾げる。

「やあ、起きたみたいだね」

そんな会話をしていると眼鏡をかけた青年が現れた。

「あなたが、バランさんです？」

「そうだよ。アルフレドとは従兄弟だよ」

「アルフレド？」

「俺のこと」

アルヴィンがそう返すとホームズは、なるほど頷く。

「偽名だったのかい？」

「そゆこと」

アルヴィンは、そう言った後バランに視線を向ける。

「にしてもよく俺が分かったな。もうすっかり変わってたろ」

アルヴィンの言葉にバランは、机の上で何かを弄りながら答える。

「その銃、叔父さんのだろ？」

「……………ああ」

「叔父さんに感謝しとくんだね」

バランの言葉にアルヴィンは、寂しそうな顔をする。

「でも死んだんじゃないやあな……………」

「それもそうか」

バランは、軽くそう返すとあれ、ないなあと言いながらガチャガチャと物を探していた。

「ああ、あそこだ」

バランは、そう言うのと立ち上がって右足を引きずりながら歩き出した。

ジュードは、バランの引きずられている右足を見る。

「変わった人ですね」

「エレンピオス人全員がああつてわけじゃないぜ」

エリーゼの感想にアルヴィンが答える。

「足のこと？」

balan は、そう言つて右足を見ているジュードに問いかける。

「あ、いえ」

「ジュード」

引きずる足をずっと見ていたジュードをレイアが短く諫める。

balan は、そんな二人に手を振る。

「いいよ。子供の時の事故だね」

そう言つと器具を完成させる。

ジュードは、その器具を見て目を丸くする。

「それって……………」

「おや、向こうから来たんなら、馴染みはないと思つていただけど……………」

そう言つて balan は、器具、黒匣^{ジン}を足につける。

「黒匣^{ジン}!!」

ミラが武器に手をかける。

「待つてくれ、ミラ」

アルヴィンの言葉にミラが動きを止める。

そんな二人に構わずバランは、器具を装着し終える。

「これがないと歩けなくてね」

その言葉にミラは、自分の足についているジンテクスを見る。

「あ、あの、バランさん」

そんな中ホームズが、ギユツと手を握り意を決して尋ねる。

口が渴く、言葉が何度も詰まりそうになる。

「何?」

「…………ルイーズ・ヴォルマーノの名前に覚えはないですか?」

ようやく絞り出した名前。

その名前の意味が分からない一行ではない。

ホームズのこの旅の目的は、両親の故郷に行くことなのだ。

今その目的に手が伸びるのだ。

「知ってるよ」

バランの言葉に身体が震えるのを感じていた。

ようやくくだ。ようやくたどり着いたのだ。

「黒^{ジン}匣のスペシャリストだろ」

「……………え？」

ホームズの思考が止まった。

他の面子も同じように狐につままれたような顔をしている。

研究者どころではない、スペシャリストだ。

「ちよつと待つて……………だつて確か、軍にいたつて……………」

「そうだよ。彼女は、その黒^{ジン}匣を扱う技術を評価されて軍に入ったんだよ」

「憲兵みたいな仕事をしてたつて……………」

「軍の研究所を追い出されたんだよ。とはいえ、彼女、性格はともかくそれ以外も化け

物レベルで優秀だったから辞めされることなく、別の部署に飛ばされたんだ」

思わぬ母の経歴に思わずホームズは、頭を抱える。

「作り方から壊し方まで、あの人の右に出る人はいなかったよ」

ホームズ達は知らないが、ドライバー一つで黒匣^{ジン}を壊している。

「……………というか、何でバランさんそんなに詳しいんです？二十年は前の話ですよ」

アルヴィンと従兄弟のバランがそこまで年をとっているようには見えない。

どう考えてもその頃はまだ子供なはずだ。

「ああ、彼女語り草だから。伝説だよ伝説」

「……………」

二十年という月日を超えてなお語り継がれるルイーズにホームズは、もう何を次に聞いたらいいか分からない。

「(ヨル)」

「(いや、これは流石に知らなかった)」

フードにいるレイアとヨルが小声でそんな会話をしている。

「……………つと、そうだ！実家は!?実家は、どこなんです？」

ようやく次に聞くべき質問を思い出したホームズにバランは、首をひねる。

「うーん……………流石にそこまでは、分からないかな……………」

そう言った後ゴソゴソと机の上を漁り、紙を引つ張り出す。

「ああ、この人なら知ってるかも。なんか昔一緒に仕事したことあるとか言ってたから」

ホームズは、渡された紙を見る。

その紙を他の面々も覗き込む。

しかし、

「……………読めない……………」

レイアが代表して呟いた。

エレンピオスの文字で書いてあるため読めなかった。

「『研究者名簿』……………って、これ、内部書類じゃないですか!!おれに渡していいんです!?!」

「アレ? 読めるの?」

「そりやあそうですよ! 母さんに教えてもらったんですから!」

「……………母さん?」

バランは、首をかしげる。

ホームズは、しまったという顔をする。

「君名前は?」

「ホームズ」

「違う違う、フルネームだよ」

ホームズは、バランの言葉に少しずつためらってから答える。

「……………ホームズ・ヴォルマーノです」

「つていうことは、ルイーズさんとベイカーさんの息子さんか」

「嘘、どうしてホームズのお父さんの名前まで？」

驚いているレイアにホームズは、首をかしげる。

「そりゃあ、母さんのことを知ってるんだもの。父さんのことを知っていても不思議じゃないだろう？」

絶対とは言い切れないが、それでも別に不思議なことではない。

「ああ、まあ、それだけじゃないんだよ」

バランは、そう言つてホームズとアルヴィンを見る。

「ベイカーさんはね、スヴェント家の血を引いているんだ」

「……………へ？」

今度こそホームズの思考は停止した。

「まあ、あまり大きな声では言えないけど、ベイカーさんはスヴェント家のとある女性が浮気の果てに生んだ子供なんだ」

完全に止まったホームズを放置してバランは、言葉が続ける。

「大変だったんだよ。何せその女性と男性の瞳は黒、なのに碧い瞳の子供が生まれたんだもの。当時の当主の家族は大騒ぎさ」

「当主？」

ジュードが首を傾げながらたずねる。

「その女性って……………」

「うん、当主の女性だよ」

バランから語られる軽快に語られるスヴェント家のスキヤンダル、そしてホームズの血筋に一同は、開いた口が塞がらない。

そんな中、正気に戻ったアルヴィンがポンと手を叩く。

「つまり、俺とホームズは遠い親戚にあたるわけか」

「マジかアアアアアアアア!!」

ホームズは、ついに膝から崩れ落ちた。

そんなホームズを見ながらレイアは、頷いている。

「まあ、なんか、納得出来るところは、あるよね」

割と失礼なことを言っているレイアにホームズは、突っ込む気力もない。

「つーか、バラン、お前なんでそんなことまで知ってたんだよ」

「ああ。スヴェント家では、文字通り黒歴史となっていてね。喋られないようにと言われていたんだけど……………」

そう言ってからニヤリと笑う。

「まあ、ここだけの話ってのは、みんなが知っていることさ」

人の口に戸はかけられないということだ。

バランの解説を他所にホームズは、頭を抱えている。

「……………対応仕切れない……………ジャブにフックに右ストレートときて最後にデンプ
シーロールを食らった気分だよ」

「何を言っているかさっぱりわからんが、動揺していることは分かった」

ミラの言葉にホームズは、もう言い返す余裕もない。

「それで、名前は？」

アルヴィンが研究者名簿をホームズから受け取る。

「ご丁寧に丸まで付けてある。」

「えーつと……『エラリー』？」

「その人に話を聞くしかないね」

レイアの言葉にジュードは、頷く。

「とりあえず、やるが決まるまでは、ホームズの両親の手がかり探しをしようよ」

「良かったわね、ホームズ」

しかし、ホームズはそれどころではない。

頭を抱えてごろごろと床を転がっている。

よほど、自分の血筋がシヨックだったようだ。

「つーか、何？傷つくんだけど。俺と親戚なのがそんなに嫌なの？」

「誰だつてこうなるよ！アルヴィン、君だつて突然、シャル家の血を引いてるなんて

言われれば驚くだろう?!シヨックだろう!？」

「まあ、言いたいことは分かるけどよ……」

ホームズの言葉にアルヴィンは、苦笑いしながら頷く。

ジュードは、こめかみを指で押さえながら考え込む。

「まあ、でも言われてみれば、ヨルが『スヴェント家』という名家を知っているのがへんだよね……………」

ジュードは、そんなホームズを見ながらそう呟く。

「どいいうこと?」

首をかしげるレイアにジュードが説明する。

「黒^{ジン}匣のことは、教えてないのに『スヴェント家』なんて事を教えてるってことは、つまり……………」

「ホームズさんを語るうえで外せない、ベイカーさんの出自に関わるということですね」

ローエンの言葉にジュードは、頷く。

ジュードのそんな推理を他所にホームズは、床をのたうちまわっている。

balan は、面白そうに手を叩いて笑った後、ジュード達の方を向く。

「まあ、何をするにしても腹ごしらえが必要だろう? ご飯作るから、それまでこの辺を見てくださいよ」

ローズ達は顔を見合わせるで頷く。

「それじゃあ、お願いします」

「分かった。腕によりをかけて作るよ」

バランは、笑顔で頷く。

ローズは、床にいるホームズに目を向ける。

「ほら、エレンピオスを見に行くわよ。貴方の目的でしょ」

「……………それもそうだね」

ホームズは、むんつと起き上がり、頬を叩く。

「まあ、アレだ！せつかく目的地に着いたんだ！テンション上げてこう！！」
不自然にテンションを上げたホームズを先頭に部屋をで行った。

艱難辛苦を踏み越えて

「……………早速で、悪いんだけど、アルヴィン」

「本当に早速だな。なんだ？」

「これ、どうやるんだい？」

ホームズは、目の前にある扉の前に首をかしげていた。

先ほどから、取っ手を探すのだが全く見つからない。

「あ……………そうか」

アルヴィンは、納得したように扉の近くのボタンを押そうとする。

「それはね、ボタンを押すんだよ！」

驚いて足元を見ると、小さな女の子がいた。

ホームズは、首をかしげながら隣のボタンを指差す。

「これのことかい？」

「うん」

「爆発としない？」

戸惑っているホームズを他所にその女の子は、ボタンを押す。

すると機械音が足元から上がってきた。

そして、チンと言う音と共に扉が開く。

「おお……………」

開かれたそこには四角い部屋があった。

ホームズは、目を丸くしている。

いや、ホームズだけでなくジュード達も目を丸くしている。

「何も知らないの？もしかして、『イナカモノ』」

「……………」

純真無垢な視線で問われてしまいホームズは、言葉が出ない。

恐らく言葉の正確な意味もわかっていないのだろう。

「悪意がない分タチが悪いねえ……………」

ホームズは、そう言うのと再び部屋に視線を移す。

「それで、これに入ればいいのかい？」

「まあ、どっちかつつうと乗るって感じなんだけどな」

そう言つてアルヴィンが乗る。

ホームズ達もその後に続く。

女の子が最後に入ると2と書かれたボタンを押す。

「……………これが階数かい？」

「そうゆうこと」

ホームズは、1と書かれたボタンを押そうとすると、その女の子に止められた。

「あれ？あつてるよね？」

「どうせ黒^{ジン}匣も知らないんでしょ？わたしのうちで見せてあげるよ！」

「いや、あの……」

「多分、普通じゃないよ」

「いや、だからね……………」

そうこうしているうちにチンと言う音ともに二階に辿り着いた。

「さあさあ早く！」

女の子は、先頭をきつて歩いていく。

ホームズは、ミラの方を見る。

「まあ、いいではないか」

「……………ああ、そう」

ホームズも諦めたように後をついて行つた。



「ただいま！おばあちゃん!!」

「おかえり」

おばあちゃんと呼ばれた老齡の女性は、にっこりと笑って出迎えると後ろにいるホームズ達を見て目を丸くする。

「……………あの、えーっと」

「わたしが連れてきたの!」

「あらあら」

「すいません」

「いいのよ。この子結構強引だから」

「だったら気にしなくていいだろ」

ヨルがフードからそう言うのと女の子が首をかしげる。

「あれ？声が？」

「おほん！『気にしなくていいだろ』いや、そう言うわけには『それだから頭が硬いと
言われるんだ』失礼だな」

ホームズが慌てて低い声といつもの声を使い分けて一人二役を演じきる。
それを見て女の子は、目を輝かせる。

「すーい!!」

「そ、そう? あはははは……」

引きつり笑いを浮かべながらホームズは、目の前の女の子とその祖母に見えないよう
ヨルの髭を引っ張っていた。

レイアは、そんな彼女を見て一番最初にヨルとホームズに詰め寄ったことを思い出し
た。

「ああ……そう言えばあの時も似たようなこといつてたなあ……」

「あの時……?」

首をかしげるローズにミラがポンと手を叩く。

「おお、ホームズがレイアの家泊まっていた時か!」

「ミラ、お願いだからもう少し考えて喋って」

レイアは、ローズとミラの方を見ずにそう返す。

「レイアのウチの宿に泊まっていたんだよ」

「わざわざ解説しなくてもいいわよ、ジュード」

ローズの冷え切った声にジュードの背筋が凍りつく。

そんな三人の会話を他所にホームズは、

「それで珍しい黒匣^{ジン}ってなんだい？」

「わたしとおばあちゃんだよ」

そう言つて自分に手を置く。

「ま、まさか！黒匣^{ジン}で出来た人間……」

「なんでそうなるのよ」

頬を引きつらせているホームズにローズの突っ込みが入る。

すると祖母は笑いながら答える。

「私もその子も循環器の病気でね。代わりに黒匣^{ジン}を使っているの」

ホームズは、ポカンとした顔をする。

「……………マジ？そんなことが出来るのかい？」

ホームズは、振り返つてアルヴィンを見る。

アルヴィンは、頷いて返す。

「ミラの足に付いてるのと似たようなもんだ」

アルヴィンは、そう言つてミラの足についている医療ジンテクスを指差す。

ホームズは、眉をひそめる。

「ああ、そう言うことか」

納得しているホームズを他所に女の子は、ミラの方を見る。

「それつける時、すつこい痛かったでしょう？」

「……………ああ。痛かった」

そう言うミラに女の子は、頷く。

「でも、ガマンしなきゃダメなんだよー。黒匣^{ジン}のおかげでフツの生活ができるんだから」

「そう……………なのか？」

かなりしつかりした言葉にティポが首をかしげる。

「それ、自分で考えたのー？」

ティポの追求に目をそらす。

「つて、おばあちゃんが言ってた」

祖母は、優しく微笑む。

「黒匣^{ジン}の進歩のおかげで医療技術は飛躍的に進歩したわ

ローズは、驚いて目を丸くする。

「そんなことが……………」

「ええ。だからマテイス先生の方まで生きないとね」

マテイスという言葉に一行は、首をかしげる。

「マテイス？」

「ジュードと同じ名字ですね」

ローズとエリーゼが首をかしげる。

「うん……」

ジュードは、頷くと隣にいるホームズに視線を向ける。

「ホームズ、何か知ってるでしょ」

「内緒。男は秘密があつた方が格好いいからね」

ホームズは、人差し指を口を持って行き胡散臭く笑っている。

レイアは、頬を引きつらせる。

「久々に聞いたよ、そのセリフ」

レイアとエリーゼのジツトリとした目にホームズは、肩をすくませる。

「まあ、おれから話すのは筋違いだからねえ……：……：気になるならマテイス先生から聞くのが筋だと思うけれど？」

ホームズの言葉にジュードは、小さく頷く。

「うん。そうだね」

「それは、無理よ。この医療用黒匣ジンを開発したマティス先生は、前の船の事故で亡くなつてしまったもの」

「……………そうなんですネ」

ジュードは、こめかみに指を当てる。

すると祖母の方が時計を見る。

「あらあら、もうこんな時間。そろそろ医療用黒匣ジンの検査に行かなくちやね」

「ええー……………もう?」

祖母の言葉に女の子は、不満そうだ。

するとホームズは、口到人差し指を当てる。

「それおかげでフツアの生活が出来るんだろう? だったら、それぐらい我慢したまえ」

ホームズは、そう言うのと踵を返す。

「それじゃあ、お邪魔しました」

「ごめんなさいね。結局なんのおもてなしもできないで」

老婦人の言葉にローズが首を振る。

「いえ。興味深い話でした。有難うございます」

そう言つて一行は、部屋から出た。

ミラは、物思いにふけている。

「黒^{ジン}匣のおかげ、か………リーゼ・マクシアにいた時は、考えもしなかったな……」
「見聞が広がるって奴だねえ」

ホームズは、隣で頷いている。

ホームズ自身も黒^{ジン}匣について、人の部を超えた力だと思っていた。
そう言つてエレベーターへと歩いていく。

ローズも慌てて後を追う。

そんな二人を見ながら首をかしげる。

「聞き損ねていたんだが………」

そう言つてレイアの方を振り返る。

「ホームズの瞳、どうして金色なんだ？ 碧色だったろう？」

レイアは、思わず言葉に詰まる。

「………わたしも詳しくは、知らないんだ」

結局、レイアもホームズの過去しか聞けていない。予想はつくがそれ以上は解らないのだ。

レイアの言いづらそうな様子にミラは、腕を組む。

「どうやら、私がない間に色々あったようだな」

「そりゃあもう、盛大に」

いつの間にかレイアの頭にいるヨルが、そう返した。

ヨルの言葉にレイアとアルヴィンとジュードは、ぎこちなく視線を逸らす。

「おおい！なんか来たけど、これ、乗っていいのかい？」

そんな空気をぶち壊すホームズの能天気な声が届く。

アルヴィンが、慌ててエレベーターのところへ向かい、ボタンを押す。

「これしとかないと、エレベーター動いちまうんだよ」

「へえー……」

ホームズは、興味深そうに話を聞きながらエレベーターに乗り込む。

そしていつの間にか、レイアの頭にいるヨルを見て首をかしげる。

「なんの話をしてたんかい？」

「お前の友人は、大変だという話だ」

「……………どういう意味だい……………ってレイア目をそらすんじゃないよ」

「ははは、いや、まあ、それはともかく！」

その言葉と同時にエレベーターの扉が開く。

「ほら！着いたよ!!」

「なーんか、釈然としないなあ……………」

ホームズは、ブツブツと呟きながらエレベーターを降りてエントランスを抜ける。

ホームズは、きよろきよろと辺りを見回しながらだが。

そして、出入り口の扉。

ホームズは、扉の周りを何かを探すように視線を彷徨わせている。

「ホームズ？」

「いや、取っ手が無いのは、わかったからボタンはどこかなあって思って」
アルヴィンは、疲れたようにため息を吐く。

「アルヴィン？」

「いいから、一歩前に出ろ」

ホームズは、首をかしげながら一歩前に出る。

すると閉じられていた扉がゆっくりと開いた。

「ふおおお!!」

「やめろ阿呆」

驚きの声を上げるホームズをヨルが尻尾で叩く。

「元気ですねえ……ホームズさん」

ローエンは、ホッホッホと面白そうに笑っている。

そんなローエンの言葉を振り切ってホームズは、外に出る。

外には見たことのない景色が広がっていた。

リーゼ・マクシアとは違う石造りの建物が並び、見たこともない明かりを灯す道具。違和感として残るのは、全く緑がないこと。

確かに黒^{ジン}匣の弊害は、エレンピオスを終わりへと導いていた。

リーゼ・マクシアと違い目をみはる美しさがあるわけではない。

散々見たいと言っていたエレンピオスの景色を見たというのにホームズは、静かだ。

「ホームズ？」

不思議に思ったレイアがホームズの顔を覗き込むとホームズの金色の瞳が揺らいでいた。

「これが、エレンピオス……父さんと母さんの故郷……！」

ホームズは、こぼれ落ちそうになる涙を堪える。

何度来たいと思ったか。

何度死にかけたか。

何度諦めかけたか。

それら全てを乗り換えてようやくここに立てた。

「来たぞ………来てやったぞ………ここまで、確かに手放しで素敵な世界なんて言えやしない………でも、それでも………」

ホームズは、袖でゴシゴシと目元を拭う。

「これで良かった………！ありがとう、みんな」

ホームズの心からの笑顔に皆は頷いて返した。

貯金箱

「来れたのは嬉しいけれど、本当に草一本生えてないねえ……」
涙も引つ込みホームズは、あたりを見回す。

「精霊がないせいだろうな」

ミラの言葉にアルヴィンが頷く。

「その通り。精霊が減ったせいで、自然がどんどんなくなってるんだ」
アルヴィンは、ため息を吐く。

「本当、なんでこんな終わった世界に戻ってきたかったんだろうな……」

「そりゃあ、君の故郷だからだろう？」

ホームズは、何てことなさそうに返す。

「故郷なんてものは、理屈とか抜きでそういうもんだらう？」

ホームズの言葉にアルヴィンは、ふっと笑う。

「そうかもな」

「行商人のお前が何を言ってるんだという感じだな」

「一言も二言も多いよ、君」

ホームズは、肩にいる子猫バージヨンのヨルに返す。

「とうか、君、いつまでその姿なんだい？」

ヨルは、欠伸をする。

「散々無茶したからな……しばらくは、こんなもんだぞ」

「生首にもなれないんだよね……その状態だと……」

ホームズが、ため息を吐いているとローエンが建物に貼られているポスターを見つめる。

「アルヴィンさん、アレは？」

『私達は、異界炉計画に賛同します』……黒^{ジン}匣の商人たちだろうな」

ホームズは、馬鹿にしたようにポスターを見る。

「この人たちは、人を犠牲にするって言うことがどういうことか、分かってるのかねえ」

ホームズは、腰にある小袋を撫でる。

「よくわかってるじゃないか、にいちゃん」

突然聞こえた声に振り返ると顔の赤い老人が、千鳥足で歩いてきた。

「だれ？」

ホームズが首を傾げると老人は、へらへらと笑いながら口を開く。

「異界炉計画中止の為に募金を〜」
ちやちな募金箱と書かれた箱は、見るからに貯金箱だ。

あまりにも胡散臭い言葉にローズは、頬が引きつるを感じていた。

「ジイさん。異界炉計画中止の為にどうして金がいるんだ？」

「何をするにも金は必要じゃろう」

ふよふよと老人の近くを漂っていたティポは、顔をしかめる。

『酒くさジジイ〜』

「何じゃと!？」

ティポに食ってかかろうとする老人にジュードが、300ガルドを持っていく。

アルヴェインが顔をしかめる。

「おい、」

アルヴェインが止めるのもジュードは、聞かず、金を入れる。

「僕も異界炉計画を止めたいんだ」

「へっへっへ。ありがとうよ」

ホームズは、懐をあさって1000ガルドの札を引つ張り出す。

ホームズは、それをひらひらと見せながら老人に話す。

「ジイさん。300ガルドおくれ」

老人は、嫌そうに顔をしかめる。

「札ごと入れんか！」

「あつそう」

ホームズは、老人にそっけなく返すと1000ガルドを財布に入れようとする。今、目の前で700ガルドの金が自分の手元から離れていくと思ったのだろう。

「ま、待て、300ガルドだな？」

老人は慌てて貯金箱、もとい募金箱の下の蓋を開け、300ガルド取り出した。

ホームズは、それを受け取ってから貯金箱の中に入れた。

「それじゃあ、よろしく頼むよ」

「おお。任せておけ」

老人は、胸をドンと叩いてふらふらと歩きながらホームズ達から離れていった。

「いいのかよ」

アルヴィンは、老人が見えなくなってからジュードとホームズに言う。

ジュードは、頷く。

「うん。別に。だって、異界炉計画は、止めたいからね」

「流石、ジュード君！」

ホームズは、そう言ってジュードと肩を組む。

「そんな君にお兄さんがお小遣いをあげよう!!」

ホームズは、そう言つてジュードに300ガルドを渡す。

「これつてホームズの……………」

「ん?」

ホームズは、首を傾げながら1000ガルドの札を見せる。

「……………ホームズ、まさか……………そのお金……………」

レイアの頬が引きつる。

「別にこれをあげるなんて言つてないよ。おれはちやんと言つたよ『300ガルドおくれ』と。そして、300ガルドくれたんだよ」

確かに700ガルドあげるなんて言つてない。

1000ガルドの札を見せて300ガルドを手に入れただけだ。

「待つて、じゃああの中には何を入れたの?」

「その辺に落ちてた紙」

「詐欺じゃん!!」

「まあ、騙される方が悪いというやつだ」

ヨルは、欠伸をしながらレイアに返す。

「別に騙してないけどね」

しれつと言うホームズに一行は、あきれ顔だ。

「それにおれが得したわけじゃあないし、いいだろう?」

「まあ、仕方ないね……………」

レイアは、げんなりとした顔になる。

先程までの殊勝なホームズは、どうやら何処かへ去ってしまったようだ。

その瞬間レイアとエリーゼのお腹がなった。

レイアとエリーゼは、恥ずかしそうにしている。

「バランが飯を用意してる、そろそろ戻るか」

アルヴィンの言葉に一行は、頷いて来た道を引き返した。



「アルヴィン、プレザって本名じゃないですよね」

「ん、まあな」

前を歩く面々から少し離れたところでアルヴィンとエリーゼは、靈山でのことを思い

出していた。

ローズとジュードも隣で会話を聞いている。

「どうして最後に名前で呼んであげなかつたんですか?」

「どうしても何も昔の事だから忘れちまつたよ」

アルヴィンは、何てことなさそうに返す。

エリーゼは、そんなアルヴィンの態度に頬を膨らませる。

「アルヴィン、ヒドイです!」

『サイテー!』

言うだけ言うのとエリーゼとティポは、歩いて行つてしまつた。

ジュードは、ため息を吐く。

「本当は、覚えてるんですよ? どうしてそんなこと言うの?」

アルヴィンは、少し寂しそうに目を伏せる。

「あいつ、昔親に捨てられててき、だから親につけられた名前が嫌いだったんだと」

ローズは、隣で聞いていてため息を吐く。

「そう言えばいいじゃない。でなければ、サイテーなんて……」

「いいんだよ。あの時、プレザの手を掴めなかつた時点で最低なのは、変わらねーんだから」

「アルヴェイン……」

アルヴェインは、ローズに目を向ける。

「ま、だからあの時のホームズは、素直に凄いと思ったよ」

アルヴェインは、そう言つて目の前を歩くホームズを見る。

ホームズは、やはり先程の件が納得いかないレイアに責められている。

そんなレイアにホームズは、どこ吹く風だ。

「そうよね……」

逆だったら、手を伸ばせたかも怪しい。

それをホームズは、一切の躊躇なく飛び込んだ。

「返しても返しきれないわ……」

それ程までに大きな恩と言つてもいい。

ジュードは、二人になんと言葉をかけたらいいか分からない。

「でも、少しずつでも返していく。きっと、ホームズに恩を着せたつもりなんてないだ

ろうけど……」

ローズは、ぎゅつと手を握りしめる。

「それでも私が納得できないもの」

「……………くくく、羨ましいね」

アルヴィンは、面白そうに笑うと前を行く面々に合流した。
ローズもその後を追う。

ジュードは、精一杯前を向く二人を見て考える。

—— ホームズには、もう…… ——

船でホームズが、酔っている間にエリーゼは話そうとした。

だが、あまりに辛そうなので、ジュードがまたの機会でいいと言ったのだ。

だから、ジュード達は知らない。

ホームズが何を失ってここにいるのか。

ただ、何となく分かるのは、きっとこのまま何も知らぬままに終えることは、出来な

いということだ。

しかし、同時に予感もある。

「……………このままってわけにはいかないよね、きつと」

何にせよ、今のホームズの状態にローズが係わっているのは、明白だ。しかしながら、ローズは知らない。

今のこの状態を。

何も知らないことも分からないこと幸せだ。

だが、それは、許されない。

「……………きつと、その時誰かは傷付くんだろうなあ……………」

その誰かは果たして、ローズか、ホームズか？

ジュードは、ぎゅつと拳を握ってローズ達に向かって歩き出した。

憎さ余って愛しさ割増

「あれ？ バランさん？」

マンシヨンに戻ったホームズ達の前からバランが歩いてやってきた。

「やあ、君たちか」

バランは、立ち止まる。

「どうしたんです？」

「新しい黒匣ジッの研究結果が出たみたいだから、これから研究所に行くところなんだ」
そう言うのと部屋の方を指差す。

「机の上に食事があるから、食べて」

「やったー!!」

エリーゼが両手を握って喜ぶ。

それをアルヴィンがじつと見る。

しばらく喜んでいたエリーゼだったが、アルヴィンの視線に気付くと顔を両手で隠してしまった。

「おお！あのエリーゼが照れてる」

もの珍しそうに言うホームズにローズの頬が引きつる。

「貴方、普段エリーゼの事どう思ってたのよ」

「ええー……正直に言っているのかい？」

「迷うなら止めた方が身のためだと思うよ」

横からレイアが忠告をする。

ティポは、口をパクパクとして準備をしている。

ホームズは、スツと視線を逸らす。

そんなホームズ達に構わずジュードは、バランに尋ねる。

「バランさん。僕達がいた場所ってどこですか？」

「研究所の向こうの丘だよ。そこで君達を見つけたんだ」

「ありがとうございます」

バランは、手を振ってその場を後にした。

ホームズ達は、それを見送るとバランの部屋へと向かった。



一行は、食事を終わると完全に手持ち無沙汰になってしまった。

「皆はこれからどうする？ バランさんの言っていた場所に行けばリーゼ・マクシアに戻れると思うけど」

ジュードの言葉にレイアは、納得する。

「だから、バランさんに聞いたんだね。ジュードは、どうするの？」

レイアの言葉にジュードは、手を握る。

「エレンピオスとリーゼ・マクシア両方を救う方法を見つけるまで帰らない」

人に帰る方法を見せながら自分は、残ると言っている。

これは、つまり一行を巻き込みたくないということだと。

「ジュード、私たちじゃ役に立ちませんか？」

エリーゼが立ち上がって尋ねる。

するとジュードは、首を横に振る。

「もちろん。みんなのやりたい事が、僕と一緒に残って欲しい。役に立つとか立たないとか、それ以前に心強いよ」

ジュードの言葉にローエンが腕を後ろで組む。

「しかし、黒匣^{ジン}や異界炉計画、ガイアスさんのことを考えると危険でしょう」
ミラが頷く。

「だからこそ、今一度これからの行動を自分で決めて欲しいのだな？」
ミラの言葉にレイアは、目を伏せる。

「本気……なんだね。今までみたいに一緒にいたいってだけじゃダメなんだね」
重苦しい沈黙の中、ジュードが言葉が続ける。

「僕、エレンピオスに来て改めて思った事があるんだ」
ジュードは、そう言つてホームズとアルヴィンを見る。

「エレンピオスから黒匣^{ジン}を無くせないよ」

ジュードの言葉にローズは、迷いながら頷く。

「あの女の子達から黒匣^{ジン}がなくなったら………」

その先は言うまでもない。

「うん。でも断殻^{シエル}界は、無くさなくちゃいけない」

ジュードの琥珀色の瞳に力が入る。

「僕は僕なりの答えを見つけないといけない」

旅の理由、答え、それぞれを自分自身で見つけなくてはならない。

沈黙の中アルヴィンが口を開く。

「俺はエレンピオスの人間が困るような答えを出すつもりはねーぜ」
ホームズは、頷いている。

「せっかく来たのにお別れつてのもおれはやだなあ」

ホームズとアルヴィンは、さっさと答えを出していた。

まあ、当然と言えば当然だ。

対照的にエリーゼ達、特にローズは決まっていなかった。

「こうして悩んでいる間にも精霊さん達は、消えているんですよ」

エリーゼの言葉が辺りに響く。

エレンピオス人には、黒匣が必要だが、それは精霊を滅ぼす。

両方を助けるために断殻界を解けば、最悪リーゼ・マクシアとエレンピオスが共倒れになることだって考えられる。

「みんな聞いてくれ」

そんな中、ミラが口を開く。

「もし、黒匣がなくならないのであれば、私は精霊が減らないよう新たな精霊の誕生を

見守る」

「でも、それじゃあ……」

「精霊も世界を巡る一部、人間も精霊も私が支えてみせる」

「ミラ……………」

ミラの凜とした言葉にジュードは、呆気に取られていた。

「ずっと考えていたことだ。ジュードが、黒匣^{ジン}を無くせないと思ったのならそれでいい」

そう言うとミラは、立ち上がる。

「迷っている時間が惜しい。ヘリオボグへ向かおう」

ミラの言葉にホームズは、目を輝かせる。

「黒匣^{ジン}の研究をやっていると、ころなら異界炉計画について何か分かるかもな」
アルヴィンは、立ち上がって言う。ミラは頷く。

「それもあるが、ホームズの両親の手がかりもどうやらあるみたいだしな」

ホームズは、ミラの言葉に目を輝かせていた。

「いいのかい!? 後で、おれ一人で聞いてこいとか言わないよね?」

ホームズの言葉にミラ以外微妙な顔をする。

しかし、ミラは首を横に振る。

「そんなことはない。私もお前のような奴の親がどんな人間なのか知りたい」

「凄く引つかかる言い方だけど、この際にしなないよ!」

二人の微妙な会話に遂にジュードは、苦笑いだ。

「とりあえず、四人は着くまでに答えを出してくれないかな」

ジュードの言葉にレイア達は、頷くしかなかった。

ローエンは、それを見守りながら後ろで腕を組む。

「私の役目は見守り導くこと、か……………」

先頭切って出て行くホームズとそれを慌てて追うレイア。

呆れたようにため息を吐くジュードとミラがその後続き、アルヴィンとエリーゼは、微妙に視線を交わして後続く。

そして、最後に残ったのは、

「ローズさん。行きますよ」

「……………ええ」

ローズは、折れた刀をどうしようか迷った後持つていくことに決めて立ち上がった。

「……………迷っていますか？」

「……………まあね」

ローエンの言葉にローズは、素直に頷く。

「アルクノアなんて嫌いだし、そいつらが使ってる黒匣^{ジン}だって嫌い。それは、変わらな
いわ」

ローズは、そう言いつつも柄の頭をを叩く。

「でも、それがなくちゃこの人は生きていけない……………」
ローズは、ホームズの背中を見つめる。

「憎みきれたら…………憎み続けられたら楽なのよね……………」
寂しそうにそして愛おしそうに呟くローズは、そう言っただけ息を吐いた後寂しそ
うに笑う。

「人間って難しいね」

「……………そういうものですよ、人間なんてものは」

ローエンの言葉にローズは、頷いて返した。



「どうしたんだい？レイア？」

ホームズは、隣を歩く元気のないレイアを見て首を傾げる。

「……………霊山でさ、わたしアグリアの手を掴んだよ。でも振り払われちゃった。『頑張ってもこの世には、どうにもならないことがあるんだよ！』って」

ホームズは、歩くスピードを少し落としレイアの歩幅に合わせる。

「ずっと考えててさ、どうすれば良かったのかな……………って」

「そっか……………」

ホームズは腕を組んで歩く。

「腕を掴んだのが、わたしじゃなかったら結果は違ったのかな……………」

「そもそも、そんな前提が存在しないよ」

レイアの言葉をホームズは、何てことなさそうに否定する。

その言葉にレイアは、目を丸くする。

「おれはホームズを、アルヴィンはプレザを、それぞれ助けようとしていた。あの時、アグリアの手を掴めたのは、君だけだよ」

「ローエンやジュードやエリーゼじゃ間に合わなかったからな、位置的に」

ヨルがひよこりと顔を出して言う。

「…………レイア、お前はよくやったと思うぞ。頑張った」

ヨルの言葉にレイアは、顔を伏せる。

「頑張ったってさ……………」

うつむくレイアの肩をポンと叩く。

彼らの言葉もレイアには届かない。

そんなレイアにホームズは、もう一つ言葉を続ける。

「少なくともおれは、あの雪の降る夜、君の頑張りに救われたよ」

そう言つてピンク色の指輪を見せる。

レイアは、ホームズが何を言おうとしているかわかった。

「結構あの時は、限界だったんだよね。だけど、君が頑張つて踏み込んでくれて助かった」

ホームズは、そう言つて優しく笑う。

ホームズの言葉を聞いた瞬間、レイアの瞳が揺らぐ。

ホームズは、レイアにハンカチを差し出す。

「あの時の事を考えるのはいいけれど、頑張ったことまで否定しないでくれ」

「……………うん」

ゴシゴシとハンカチで拭く。

そんな二人を見ていたヨルは、尻尾を揺らして前に視線を向ける。

「さて、話すのもいいが、どうやら動きがあつたようだ」

ヨルが尻尾で指し示すその先には、逃げ惑う人々の姿があつた。

ジュード達は、逃げ惑う男の一人に慌てて駆け寄る。

「何があつたんですか!？」

「ヘリオボーグが襲われた!」

ホームズが目を丸くする。

「信じられない! 仮にも軍の研究施設だぞ!」

「軍の……」

ローズは、ポツリと呟く。

「しかも、奴ら黒匣なしにジンテクスを使うんだ! ありえない!!」

信じられないことを体験し口を荒げる男性の言葉にホームズは、首を傾げる。

「ジンテクス?」

「黒匣を使う精霊術の事だ」

アルヴィンが説明する。

ホームズは、途中まで頷いて顎に手を当てる。

「黒匣を使わないジンテクス……それって、ただの精霊術じゃ……」

そこまで言つて言葉を失う。

このエレンピオスで、精霊術が使われた。

精霊術を使えるのは、リーゼ・マクシア人のみだ。

「まさか、ガイアスがもう!？」

ジュードの言葉にミラは、頷く。

「あり得るな」

「バランが心配だ、早く行くぞ」

アルヴェインが言うのと頷く。

ホームズは、男性に尋ねる。

「馬車とかがあります?」

「あるにはあるが、六人乗りだ」

一行は、全部で八人。

二人は、余ってしまう。

ホームズは、一つの可能性に気づくが黙り込む。

「ホームズ、お前何考えたか当ててやろう」

ヨルの言葉にホームズは、すぐ頷く。

「うん。六人が先行して、二人が追うのがいいと思うよ」

「違うだろ」

「……………」

「ホームズ、何を思いついた」

ミラの有無言わせぬ口調にホームズは、ため息をついて説明する。

「六人乗りだろうか？ だったら、ミラカレイアの膝にエリーゼを座らせれば七人乗れるだろうか？」

「だが、もう一人は？」

「馬車の屋根に乗ればいいんだよ」

ホームズの言葉にミラは、頷く。

「現状その手しかないな。それでいこう」

ホームズの提案を二つ返事で了承するミラにホームズが慌てる。

「待って！ 誰か馬車の屋根に乗らないといけないんだよ！」

そんなホームズの言葉にミラは、きよとんとした顔をする。

「お前が乗るのではないのか？」

ミラの顔にあるのは、素直な疑問だけだ。

ホームズの顔から血の気が引いていく。

「絶対言うと思った!! だから、言いたくなかったんだよ!! どうしておれなんだい!？」

「お前がこのメンバーの中で、一番バランス感覚がいいからだ」

ミラは、そう言っ指をさす。

「カン・バルクの闘技大会の時あんなところで、飛んだり跳ねたりしていたお前以上の

奴はここにいない」

ホームズの頬をたらりと汗が落ちる。

理不尽ではあるが、ミラはホームズのことを信用しているのだ。

商人としては、信用には答えなくてはならない。

「~~~~~っ！ああ、もう分かった！それで行くよ」

ホームズは、そう言うのと案内された馬車の屋根に飛び乗った。

ホームズが乗ったのを見届けるとミラ達が乗り込む。

全員乗り込むと、ミラは行者に声をかける。

「至急、ヘリオボーグの研究所まで行ってくれ」

「……………わかりました。飛ばしますのですしっかかりつかまっていますか………」

行者は、静かにそう言うのと馬に鞭を入れて走らせた。

ガタガタと揺れる馬車にホームズは、必死に振り落とされないようつかまっていた。

「だから、言いたくなかったんだよ………」

窮地の仲

「や、やつと着いた……………」

「お疲れ、ホームズ」

レイアの労いをホームズは、弱々しく笑って返す。

目的地に着くと一行は、急いで馬車から降りると研究所に乗り込んだ。

「お前、酔わなかったな」

ヨルの言葉にホームズは、青白いままの顔を向ける。

「まあ、振り落とされないように必死だったからねえ……………」

他にやることがあつてそれどころではなかったのだ。

そんななかジュードが、落ちているものを拾う。

「これ、黒匣ジッの外装だ」

「中身は？」

ホームズの質問にジュードは、首を横に振る。

「いや、それより、それ！」

レイアが指さした荷物には、斜めに切り込みが入っており中身が外から見える。

「……………なんだい？これ？」

そう言つてちらりとヨルをちらりと見る。

ヨルも首を傾げる。

「さてな」

そんな彼らに構わずローエンは、荷の中身を考える。

「恐らく黒匣ジンでしょう」

「黒匣ジン？」

ホームズは、首を傾げる。

そう言つてから積荷を見る。

「そつか、ここは研究所、黒匣ジンを作つてもいるつてわけか……………」

だが、そうなるとまた問題が出てくる。

「これやつたのつて、まさか……………」

「まあ、あの王と大精霊だろうな」

ヨルの言葉にアルヴィンは、ぎゅつと拳を握る。

エリーゼは、それを見るとミラ達の方を向く。

「バランさんが心配です」

「そうだね。早く行こう」

ジュード達は扉に向かって歩く。

ホームズは、振り返って馬車の行者に向き直る。

「そうだ。誰かが乗せてくれと頼んだらその人を乗せて移動していいです」

そう言いつつミラ達に目線で尋ねるとミラ達も頷いて返す。

「……わかりました。みなさんもお気をつけて」

ホームズは、ひらひらと手を振って返事に変えた。

ローズは、少し後ろを歩きながら落ちている黒匣ジンの外装を手取る。

黒く、そして、少しだけ重いそれは手にびったりと収まった。

ローズが今まで見てきた黒匣ジンは、人の命を奪い続けていた。

だが、ここに来て黒匣ジンに救われた人もいた。

どちらかが誤りというわけではない。

きっとどちらも正解なのだろう。

ただ、そんな感傷とは別にローズには、先ほどから気になっていることがある。

「どこかで、見たことがあるのよね……これと似たの」

だが、肝心のどこで見たかをローズは、思い出せていない。

(忘れちゃったか………随分小さかったものね……)

ローズは、ため息を吐く。

どんなに小さなことでも思い出して伝えたい。

自分が殺されかけたというのにそれでもローズを守ろうとするホームズ。そんな中にいれば何としても役に立ちたいと思ってしまうのが、人情だ。

そこに正解、不正解は、存在しない。

ローズは、いつか思い出す時のきっかけになればと懐にしまった。



「暗いわね……」

ローズは、そう言いながら辺りを見回す。

明かりは一つとしてない。

明かりが灯るであろう道具は全て沈黙している。

見えないわけではないが、この薄暗い中を歩くのは大変だ。

「そう？ 結構見えるよ。君、鍛え方が足りないんじゃない？」

鍛え方が足りないという言葉にローズの眉がぴくりと動く。

ホームズは、構わずそう言いながら歩く。

「いや、僕らも見えづらいよ」

そんなホームズにジュードが、言う。

ホームズは、驚いたようにジュードを見る。

すると、他の面子も頷いていた。

「えーつと……」

ホームズが、状況を掴めず首を傾げているとヨルがフードからひよっこりと顔を出

す。

「説明してやろうか？」

「お願い」

ヨルは、フードから出てホームズの肩に乗る。

「俺の視力を移した時に夜目が効くようになったんだよ」

ヨルはそう言つて自分の目を尻尾で示す。

ヨルの目は、猫そのものだ。

ジュードは、ポンと手を叩く。

「そうか。猫は暗いところでも見えるもんね」

「というか、お前、世ウルスカーラノ精途で気づかなかつたのか？」

明かされたホームズの能力に当の本人は、不満げだ。

「なんか、新能力にしては大分地味なだけど……もつと、こう相手の動きが先読み出来るとか、幻覚を見せるとか、相手の視界を支配するとかそういうの無いのかい？」

「欲しかったら、寿命を九十八年払え」

「手に入れた瞬間死ぬだけだ」

地味にリアルな数字にホームズは、頬を引きつらせる。

ヨルは、そんなホームズに呆れたようにため息を吐く。

「視力戻っただけで、よしとしておけ」

ヨルの言葉にホームズは、思案顔だ。

そして、ポンと手を叩く。

「もしかして、非常識・改が出来るようになったのって、これが原因かい？」

「今更だな……………」

ヨルは呆れている。

もう訂正するつもりもないようだ。

改めて発覚するなんとも微妙な特殊能力にホームズは、ため息を吐く。

「もつとかっこいいのが良かったなあ……………」

「まあまあ」

気落ちするホームズの肩をレイアがポンと叩く。

そして話題を変えるようにレイアは、辺りを見回す。

「それにしても何にもないように見えるけど、ホームズどうなの？」

「うん。実際何もないね。何かあつて欲しいのかい？」

一行は遂に曲がり角に差し掛かっていた。

ホームズの言葉にレイアは、首を横に振る。

「いや、そうじゃなくてさ。オルダ宮に入った時はいろんな仕掛けがあつたじゃん。

だから、ここはそんなことないのかなあって………」

「まあ、ここはオルダ宮じゃないし大丈夫だろう？」

ホームズののんびりとした言葉にヨルは、ため息を吐く。

「そう言うのをな」

曲がり角を曲がった先には

「ふらぐというんだ」

エレンピオスの空中戦艦で見た機械がずらりと並んでいた。

緑色に光る機械の光を見ればホームズなど頼らなくても危機的状况なのが一目瞭然
だった。

ホームズは、構える。

「やるしかないねえ……」

「自爆装置がないといいな」

子猫バージヨンのヨルの言葉にホームズは、固まる。

この狭い所で爆発などされたらたまったものではない。

「……心を込めれば通じるよね」

「奴らに心があればな」

ヨルの無情な言葉と共に機械は、銃口を体から取り出す。

冷や汗が落ちる。

ローエンは、頷く。

「手は一つしかなさそうですね」

「そう……ですね」

「ははは……ハア……」

レイアのため息と共にローズは、頬を引きつらせる。

「つまり……」

ジュードの言葉と共に一行は、回れ右をする。

「戦力的撤退!!」

そして、そのまま全速力で走り出した。

当然のように機械が追いかける。

「どうしておれのふらぐは、こんなのばかりなんだー!!もつときやつきやうふふな
ふらぐがあつたっていいじゃないか!!」

「頭の悪いこと言つてないでどうにかしろ、阿呆」

「んなこと言つたつて壊すことも出来ないし、逃げるしかないだろう!!」

「もうヤダこの厄病神!!」

「ふらぐ建てるのに協力した君が何言つてるんだい!？」

ぎやあぎやあ騒ぎながら来た道を逆走一行。

ホームズは、迫り来る機械を睨む。

「アルヴィン!あいつらなんで薄暗い中あんなに迷いなくおれたちを追つてこれるんだい!？」

アルヴィンは、走りながら指をさす。

「あの緑の光。あれが多分暗視スコープの役割を果たしてんだろ」

「あんしすこーぶ?」

「暗い所でも明るいとこのように見える眼鏡みたいなもんだ」

ホームズは、アルヴィンの言葉を反芻する。

それから一つの可能性に辿り着く。

(ものは試しだ!)

「ローズ!! 詠唱の短い光属性の精霊術……なんだっけ? あの光の球で、なんか弾けるやつ」

「フォトン?」

「そうそれ! ダメージなくていいから一瞬で光らせておくれ!! いいかい? 一瞬で光らせるんだよ? 弱い光の球なんて間違ってもだすんじゃないよ」

「注文がくどい」

ローズは、そう言うと刀を構えず手をかざす。

「お願いします。光球、現れてください」

丁寧にそして静かに語りかけるローズ。

「フォトン!」

その瞬間迫り来る機械を光が包んだ。

機械たちから緑の光が消え、動きが止まった。

「今のうち!!」

言うが早いかホームズ達は、そのまま近くの部屋に飛び込んだ。

全員入ったのを確認するとホームズは、直ぐに鍵をかけた。

肩で息をしながらホームズは、扉を殴る。

「くそーこれじゃあ、バランさんを探すどころじゃあないぜ！どうすればいいんだい？」

「ほう、バランか………」

突然背後からした声にホームズ達は思わず振り返る。

するとそこには、拳銃を構えた男が佇んでいた。

白衣に身を包み黒縁眼鏡をかけた黒髪短髪の男。

「もう後数秒その名前が出てくるのが遅かったら、僕はこの引き金を引いていた」

男は、そう言いつつ拳銃をおろそうとしない。

まだ警戒は、解いていないようだ。

「さて、質問しよう」

銃口は、ホームズにピタリと合ったいる。

「お前達は何者だ？ バランと一体どういう関係だ？ 外で起こっていることはなんだ

？」

男は眼鏡を直す。

「因みに嘘を言っていると僕が判断したら、問答無用でこの引き金を引く」
その殺気に思わずローズは、一步下がる。

だが、ホームズは対照的に鼻で笑う。

「嘘か本当かどうやって判断するつもりだい？」

「技師にかかれば、お前らの嘘を見抜くぐらいわけないさ」

「？」

「人は嘘をつくとき、無意識にやってしまうことがいくつもある。それを少しでも行ったらお前らを僕は、嘘つきと決定する」

ホームズは、頬を引きつらせる。

「自信満々じゃあないか。己の知識に随分と自信があるようで」

「当然。でなければ、研究など出来ない」

そういつてホームズの目を睨みつける。

「自信を持って挑んで、そしてその自信を壊されて、研究なんてその繰り返し。何千の敗北と何万の失敗を繰り返して成功を目指す。それが、研究というものだ」

銃口は、ホームズに向けたままだ。

「そんな僕にちんけな嘘は通じない」

ホームズは、ため息を吐いた。

少しからかってやろうかと思ったが、やめた。
そもそもそんな時間がない。

「おれの名前は、ホームズ。ホームズ・ヴォルマーノ。 balan さんとは……………」
続きを言おうとした瞬間、男の手から銃が落ちた。

「あの……………落ちましたけど？」

「いま、なんと言った？」

「あの……………落ちましたけど？」

「違う。前だ」

「balan さんとは……………」

「違う。もっと前だ」

「ホームズ・ヴォルマーノ」

その言葉に男は、上を向く。

「母親と父親は誰だ？」

「ベイカーとルイーズ」

男は、ため息を吐く。

「あの……………大丈夫です？」

「もいい」

男はそう言うのと落とした拳銃をポケットにしまう。

男は椅子に腰を下ろす。

そんな男を見てホームズは、眉をひそめる。

「人に銃突きつけて、名前名乗らせて、自分は名乗らないつもりかい？」

ホームズの言葉に男はため息を吐く。

「そっくりだな……その物言い。どっち似でも面倒臭いが、その中でも最上級の方と瓜二つだ……」

男はもう何度目か分からないため息を吐く。

「名前、名乗らないと失礼だな」

そう言うのと男は胸の前に手を置く。

「僕の名前は、エ、ラ、リ、イ。お前の父親と同期でお前の母親とは知り合いだ」

ホームズのポンチョがズルっと肩からずれる。

整理整沌

「嘘だ!!」

「いや、信じてあげようよ」

ホームズの言葉にレイアが、頬を引きつらせながらやんわりといなす。

「母さんの知り合いがこんなまともそうな人の訳がないだろう!!」

「お前は、自分の親をなんだと思っっているんだ……」

エラリーは、隣で聞いて呆れている。

ただ、否定しないところを見ると彼なりに思うところはあるようだ。

「そんなことより人間、答えろ」

ヨルは、そんな二人に構わず姿を現し尋ねる。

突然現れた喋る猫にエラリーは、目を丸くする。

「い、今、猫が喋ったのか?」

「あゝ、えーつと……」

ホームズが困っている中、ヨルは、我関せずを決め込んで質問を続ける。

「外の機械、アレに侵入者対策で爆薬とか仕込まれていないだろうか?」

子猫の容姿からは信じられない低い声にエラリイは、困惑しつつも疑問を飲み込んで答える。

「あ、ああ。そう言う意見もないわけじゃなかったが、軍の一人が反対してその案は消えた」

「二人の意見で……………」

「まあ、そいつも大概だからな……………」

「まさか、母さんの知り合いとか言いませんよね？」

「知り合いどころか唯一無二の親友だ」

「……………」

ホームズは、鈍く響く頭痛を堪える。

脳裏に浮かぶ馬鹿笑いしている母親が鬱陶しい。

「とりあえずあの機械は、ここの研究所の関係者は襲わないようになっていた」

エラリイは、そう言ってアルヴィン達を見る。

「確認するが、お前達はバランを助けに来た、それでいいな？」

一行は、頷く。

「なるほど、ならどうするかが、問題だな」

「おたくと一緒にに行けば襲われずに進めるんじゃないのか？」

アルヴィンの最もな質問に二つ返事で答えるかと思いきや、エラリイは目を伏せる。「エラリイさん？」

その動きを不審に思ったジュードが、首をかしげる。

「いや、その………研究所の関係者には、共通のカードが渡されていてな、それを元に外の機械が攻撃対象かどうかを判断している」

ローエンが顎髭を触る。

「つまり、カードを持っている私たちは依然あの機械達の攻撃対象というわけですか……」

「いや、カードを持っていない私たちは依然あの機械達の攻撃対象から除外されるはずだ」

「どこに問題があるの？」

レイアは、腕を組んで尋ねるとエラリイの視線が泳ぎ始める。

息継ぎの暇などないくらいせわしなく。

「なくしたんだ………実は」

一斉に空気が凍った。

「盗られたんですか？」

エリーゼの質問にエラリイは、首をゆっくりと振る。

「いや、机の上に置いたことは確かだし、カードの位置はこれでわかる」
そう言つてエラリーは、画面のついた機械をスライドさせ電源を入れる。
表示された画面には、エレンピオスの言葉でこの研究所が示されていた。
確かに盗られたらというわけではなさそうだ。
この研究所にカードはある。

もつと詳しくエラリーは、見せてくれた。

研究所の中でも更にこの部屋を機械は、指し示していた。

そうなると当然の疑問が出てくる。

「机つて、どこにあるんです？」

ホームズの質問にエラリーは、指をさす。

そこには、ありとあらゆるものがごちゃごちゃに積み重ねられた板のようなものが
合った。

「……………机？」

気のせいではなければ軋んでいる。

ローズの疑問にエラリーは、肩をすくめる。

「何一つ捨てていないから、あるはずだ」

わびれもせずに言うエラリー。

面々は、頬が引きつるのを感じた。

ミラは、呆れたようにため息を吐く。

「疑うまでもなく、ホームズの母親の知人だな」

そう言つて机の上に目を向ける。

机の上にあるのは、本、書類、何かの工具、なぜか虫かごと虫取り網、そして水槽。

よくもまあ、これだけ集めたものだと思ひに感心してしまう。

「……………とりあえず、探せばあるのだろうか？その机の上をどうにかするぞ」

「いや、無駄だよ、ミラ」

ジュードは、ため息を吐く。

「僕、これと同じような机を小さい頃何度も見たんだ」

ちらりとレイアに視線を向ける。

レイアは、気まずそうに視線をそらして頭をかか。

「あ、あははは。何度も片付けて貰つたよね……」

「本人すらどこにあるか分かつていない机なんて他人が、手を付けてもいいことなんかないんだよ」

力強く語るジュードにホームズ達は、ため息を吐く。

「じゃあ、どうするんだい？」

ホームズの質問にエラリーは、首をかしげる。

「別に自爆機能もないし、壊していけばいいだろ」

何処かの誰かに負けないほど物騒な言葉に一行は、目を丸くする。

「い、いや、それは……………」

「何だったら、許可取ってやるぞ」

そう言うとおもむろに先ほどの画面付きの機械を取り出す。

それに幾つかボタンを入力して、耳に当てる。

「やしやし」

エラリーが尋ねるとその機械から大音量の女性の声が響き渡った。

「《もしもし！エラリー！大丈夫ですか?!》」

狼狽した様子でまくし立てる女性の声にエラリーは、少し機械から耳を離す。

それから、現状を説明する。

「そんなわけで、バランスを助けるのに対侵入者用の機械が邪魔だ」

「《…………?別にエラリーに襲いかかるはずないので、真っ直ぐ普通に助けに行けばいいんじゃないですか?》」

ホームズ達の先ほどの質問を再びかけられる。

「カード無くしたから、襲われる」

「《アレ？電波の調子がおかしいです……ごめんなさいもう一回言つて欲しいんですけど……》」

「何で二度も言わねばならないんだ？」

「《信じられないからに決まつてるからじゃないですか!!》」

再びつん裂くような声が響き渡る。

「《無くしたつていうんですか!?アレ、凄い大事なものだつて何度も説明しましたよね?!》」

「命とどつちが大事だ？」

エラリーがムツとした声で尋ねると電話の向こうでブチッと何か切れる音がした。

「《命を守るために大事なんです!!そう説明したはずですよね!?エラリーがどう思つてるか知らないですけど、自爆装置の案、あつさり却下させたわけじゃないですからね!!研究員を守る利点を何度も説明してその上で、研究者と侵入者を見分けるシステムを作れば効率的に守れると、そう説明したからやつと、通つた案なんですよ!》」

電話から漏れ聞こえる女性の叫びは、止まらない。

「《だいたい、いつも片付けをするよう言つてるじゃないですか!!その度にああ、とか、また今度とか、来週までにとかばつかり答えて全然片付けないからそう言うことになるんです!!私、忘れてないですからね、エラリーの机片付けしようとしたらカサカサ動く茶

「エラリイは、頷いて返す。

「じゃあ、あの機械壊して進むから。壊された機械は、侵入者に壊されたことにする」
「《えっ？ちよつ、そんな……》」

「おお、許してくれるか！因みにこれからこの機械に電波は入らない」
そう言うのとブチつと機械の電源を切った。

無言の面々を見回してからゆっくりと口を開く。

「そんなわけで許可降りたぞ」

「どんなわけ？」

ホームズの質問にエラリイは、肩をすくめる。

「……………やっぱり少しだけ探さない？」

そう言うってローズは、机の上の上のものを退かす。

目の前には、何故あるのかわからない虫取り網。

しかし、あの会話の流れから察するに茶色の例のアレを捕獲するためだったのだらう。

どう考えても不適切だが。

(虫取り網……………?)

ローズの動きが止まる。

何てことのないどこにでもある虫取り網だ。

だが、それはローズの記憶を揺り起こすのに充分だった。

(そうだ、あの時……ホームズと友達になった翌日……)

『虫取り網どこだろ?』

ローズは、虫取り網を探していた。

何処かにしまったのは、覚えていたのだが、どこにしまったかは思い出せないでいた。

そんな時、半開きになった倉庫の扉だ。

『いつも鍵がかけてあるのに……』

ローズは、不思議に思いながらももう探す場所も見つからなかったで、倉庫に入り込んだ。

薄暗く見えづらかった。

けれども奥に白い、影が見えた。

『あ。あれだ！』

ローズは、思わず駆け出した。

しかし、暗かったのが災いし、うっかり荷物に当たってしまいその中身をひっくり返してしまった。

そう、ひっくり返したのだ。

商品の箱に入っていたものをひっくり返した。

だが、大事なものは、商品をひっくり返したことはない。

商品の中に入っていたものだ。

(そうだ………入ってた………あの時だ！あの時に見たんだ！)

ローズは、拾ったソレを懐から取り出す。

「ローズ？」

動きの止まってしまったローズを見てホームズは、不思議そうに首を傾げる。

そんなホームズの言葉など今のローズの耳には入らない。

「黒匣ジの外装………！」

大事な商品、それが黒匣ジの外装だった。

ローズの頭の中が真っ白になっていく。

『貴方達は、アルクノアとお似合いよね』

ミュゼの言葉が蘇る。

「貴方………達………」

ミュゼの言葉。

何故か、両親の商品の倉庫から出てきた黒匣ジの外装。

そして、アルクノアに殺された両親。

これだけ揃えば誰でも分かる。

「ローズ、片付けるんじゃない……」

「ねえ、ホームズ、？偽り隠し事なく正直に答えて」

ホームズの言葉を遮ってローズは、震える声で尋ねる。

ずっと自分の信じていたものが、今、目の前で崩れ去ろうとしている。

「私の両親、それと姉さんは黒^{ジン}匣の売買をしていたの？」

ホームズは、ピタリと動きを止める。

「それは……」

「私、これと同じもの実家の倉庫で見たことがあるの」

「……………」

「貴方と一番最初に一緒に虫取りをしたでしょう？その時、倉庫の虫取り網を探そうとしてうっかり見つけたの」

ホームズは、沈黙してしまった。

別に隠そうとしているわけでは無い。

ただ、突然訪れたことに対処出来ていないのだ。

事情を知っているレイアとミラは、固唾を飲んで見守っている。

ホームズは、言っていた。

自分で辿り着いた答えを信じてしまうと。

ヨルは言っていた。

自分で辿り着かない限り、ローズの誤解は解けないだろうと。

「ねえ、ホームズ。だとすると、おかしいところが出てくるの」

だからこそ、ホームズは大丈夫だと踏んでいた。

自分という分かりやすく、そして近くに原因が居れば、ローズは決して辿り着くことは無いと。

「私の家族は、貴方のお母さんに会うとか会わないとか関係なしにアルクノアと繋がってたってことになるの」

だが、ローズは辿り着いてしまった。

ホームズの予想を上回って、真実に辿り着いてしまった。

「私の家族は、黒匣ジンを売っていた。家族が殺されたのは、貴方達のせいじゃない。黒匣ジンを売っていた家族の口を封じることためだっただった」

ローズの瞳には、確信の光が満ちていた。

きっと、ここでどんな事を言ってもローズは、揺るがないだろう。

そして、何よりホームズは、嘘が苦手だ。

ことの成り行きを見守っていたエラリーが口を開く。

「つまり、こういうことか？そこのお嬢さんは、ホームズの事を逆恨みし続けていたと

いうことか？」

「それだけじゃないわ」

ローズは、自分の手が震えているのを感じていた。

視界がどんどん狭くなる。

「私、貴方を殺しかけたわ」

ミラは、眉をひそめる。

自分のいない間にどういう事が起こっていたか、少しずつ理解し始めていた。

ローズは、うつむく。

どうして言ってくれなかったのか？その言葉が喉まで出かかった。

だが、それを言うのはお門違いだ。

何故ならホームズの言い分なんて、あの時の自分が、聞くわけがない。

対するホームズも一生懸命言葉を探すがでてこない。

そんなホームズを見て、エラリーはため息を吐く。

「やり方が、お前の両親そっくりだ。その人にとって不利益になる事は自分が背負っ

て黙りとはね」

エラリーは、そう言って席を立って、言葉を探しているホームズを見る。

「さて、お前は、九十九パーセントあの二人の息子だ。だがな、一パーセント、だけど

うしても引つかかるところがある」

そう言つてエラリーは、二本指を立てピースサインを作つてホームズの両目に向ける。

目潰しを喰らうのかと勘違したホームズは、思わず後ろに下がる。

「ルーズ教官の瞳は茶色、ベイカーの瞳は碧色、だが、お前はそのどちらでもない。何でだ？」

尋ねられたホームズは、困つたように笑う。

「そう言われても困るよ………生まれ、た、時、から、こ、う、な、ん、だ、も、の、」

「え？」

罪と罪

「……………何を言ってるの？」

ホームズの言葉にローズは、呆然としている。

エリーゼとヨルとローエン以外、皆同じような顔だ。

そんな空気に構わずホームズは、首を傾げる。

「何って、おれの瞳の色だろう？生まれ時からこんな色だよ」

「いや、お前の瞳の色は、確かに碧色だったぞ」

ホームズの答えにミラは、そう返す。

「言っていたらどう？お前は、瞳の色が碧色だったせいで虐められていたと」

ミラの言葉にホームズは、首を傾げる。

「そんなこと言っていないぜ。おれがいじめられた原因は、ゲート霊力野がなかったからだよ」
決定的に会話がかみ合わない。

ホームズに嘘をついている様子はない。

隠し事をしている様子もない。

だからこそ、気味が悪い。

だからこそ、痛々しい。
ジュードは、拳を握る。

「とうか、みんなどうしたんだい？ たか、瞳の色だろう？ どうして、そんなに騒ぐんだい？」

レイアは、目を丸くする。

「……………どうしちゃったの、ホームズ？」

レイアは、ホームズにとってその瞳の色が、どれだけ大事なものか知っている。

とても大事そうにしているホームズを見ている。

そんなホームズから紡がれたを聞いた瞬間レイアは、言葉を発した本人に詰め寄る。

「言ったじゃん、ホームズ。瞳の色だけが、顔も覚えていないホームズのお父さんとの目に見える唯一の繋がりだって！」

必死の呼びかけにもホームズは、首を傾げるばかりだ。

「言ったけ？」

本気でホームズには、思いたる節がない。

エリーゼが、起こっていることを告げようと口を開く。

だが、それよりも前にヨルが口を開いた。

「ホームズ、お前の瞳の色は碧かった。それは揺るぎのない事実だ」

淡々とヨルは、何の感情も込めずに言い放った。

込められなかった感情の代わりにヨルの伝えたい意図が手に取るように分かる。

ローズが、ヨルに目を向ける。

一步詰め寄る。

瞳の色を褒められて嬉しそうだったホームズの顔は、今でも覚えている。

「その言い方、ヨルあなた、何か知ってるわね？」

ローズの顔には、怒りの表情がありありと浮かんでいた。

「ローズに、ヨルを責める資格は無いです」

そんなローズをエリーゼは、目険しくさせて睨みつける。

「……………ローズに潰された目をヨルが治したんです。代償は、ホームズの瞳が碧かっ

たという記憶です」

エリーゼから語られた事実にはローズは、今度こそ固まった。

「え……………？」

駆け巡るハミルでの戦いの記憶。

あの時、確かにローズは、ホームズの瞳を切った。

ホームズと再会した時、瞳が金色になっていた事に確かに違和感を覚えた。

だが、それ以上に自分が潰してしまった瞳が戻っていた事に対する安堵の方が大き

かった。

だが、そこで安心してはいけなかったのだ。

ミラは、腕を組んでヨルを見る。

「だったら、記憶を無くさず治せばよかったのではないのか？」

「お前、言っている意味わかってんのか？ それ、黒匣ジンと一緒にだぞ？」

ヨルはため息を吐く。

「精霊術を使うのにマナが必要なように潰された目を戻すには、それ相応の代価が必

要なんだよ」

ヨルは、そう言っただけ尻尾を揺らめかせる。

「それが、今回はその記憶だっただけの話だ」

ヨルの言葉にレイアは、ホームズに詰め寄る。

「……………本当に覚えてないの？」

「うん」

「ローズに碧色の瞳を褒めてもらって嬉しかったことも?！」

「?おれ、ローズに瞳の色を褒められた事なんてないよ」

自分の瞳が碧色だったという事に関する記憶は、全てホームズから消えている。

だから、瞳の色を褒められたという記憶もホームズには、ないのだ。

ローズは、それを聞いた瞬間遂に崩れ落ちた。

「全部……全部、私の………」

『せい』という言葉は、出てこなかった。

否、口に出すまでもない。

それほどまでにローズが奪ったものは、大きすぎた。

いつそ全ての感情を込めて罵ってくれた方がまだ楽だったかもしれない。

だが、ホームズには碧色の瞳だったという記憶がない。

だから、それに関わる怨嗟の感情がないのだ。

事の成り行きを見守っていたエラリーは、ヨルの方を向く。

「これは、僕のせいか？」

「いいや。こいつら二人が揃って自滅したただけだ」

ヨルの言葉にエラリーは、何となく察したようだ。

ヨルは、そう言って俯くローズと彼女にかける言葉を探すホームズに視線を向ける。

「お互いに向き合わなければならぬ事だった。それが今で、切っ掛けがお前だっただけだ」

エラリーは、ため息を吐く。

「隠し事をする奴は、どうしてバレないと思うんだろうな」

そう言つてエラリイは、ローズの前に立つ。

「さて、お前、ローズと言つたか」

エラリイの言葉にローズは、顔を上げる様子もない。

そんな事もエラリイにとつては想定通りだったようだ。

エラリイは、ごそごそと白衣を探してホーリーボトルを取り出す。

「僕の調合した特別製だ。それを使えば、対侵入者用機械に見つかる事もない。もちろん制限時間付きだがな。今回みたいにカードを無くした事も想定して念のため作つておいた」

ローズは、それを見て首を傾げる。

意図が読めないのだ。

そんないいものがあるなら、みんなで作つてバランを助けに行けばいいのだ。

エラリイは、ローズが戸惑うのも予想の範囲内だったようだ。

「それを使つて元来た道を帰れ」

余りにも淡々と言われローズは、一瞬自分が何を言われたか分からなかった。

「……………え？ どういう事、ですか？」

ローズは、震える声を何とか抑えようとしていた。

だが、それは残念ながら結果に現れる事はなかった。

「聞いた通りの意味だ。お前は、バランスの元へ連れて行かない」

「ちよつと、それは!!」

詰め寄るホームズをエラリーは、ギロリと一瞥する。

「誰も言わないようだから他人の僕が言つてやる。ローズ、今のお前は足手まといだ」
遠慮などない。公平に見て、純粋に戦力外通告をしたのだ。

「自分の犯した過ちに押し潰されているお前に力が出せるとは思えん。そんなお荷物抱えて、バランスを助けるなんて無理な話だ」

どこまでも現状を把握したその言葉にローズは、何も反論出来なかつた。

「ローズ……………」

ホームズの呼びかけにローズは、答えることなく、黙つてホーリーボトルを受け取つた。

それがローズの答えだ。

足手まといという言葉にも反論せず、お荷物という評価にも言い返さなかつた、ローズの答えだつた。

ミラは、そんな成り行きを見守ると思いを振り切るように腕を解いた。

「……………エラリー、案内を頼めるか?」

「ああ。問題ない」

「ちよつと、本当に置いてくつもりかい!？」

ホームズの言葉には、焦りが見え隠れしていた。

「視力は、戻ったんだ!だから……………」

「ごめん、ホームズ」

そんな必死のホームズの言葉をローズが遮る。

「それ以上は、耐えられない……………」

そう言った後ローズは、俯いたまま言葉を続ける。

「……………行つてきて、ホームズ。そして、 balan さんを助けて来て。そのために私たちは……………貴方達は、来たんだもの」

俯くと黒い長髪がカーテンとなりホームズとローズの間を仕切る。

「おい、行くぞ。早くしないと手遅れになる」

ヨルに言われ、ホームズは、ぎゅつと拳を握りしめて扉のボタンをおして外に出た。

そんなホームズに続くように一人二人と、部屋を出て行った。

最初は聞こえていた足音も時間と共に遠ざかっていった。

今なら、聞かれることはない。

「う、う……………」

最初は耳を澄まさねば聞こえないほど小さかった嗚咽は、やがて声へと変わっていつ

た。

今なら誰もローズを見ていない。

泣いていても気を使わせることもない。

ローズは、声を上げて泣き出していた。

「何が……恩を返さなきゃいけないだ！ホームズにアレだけの不幸を背負わせて、大事なものを奪い去って置いて、どの面下げてそんな言葉が出せたのよ!!」

ローズの涙は、止まらない。

自分がずっとホームズを見当違いの事で恨み続けていたこと。

そして、ホームズの瞳を潰してしまったこと。

恩を感じている場合ではなかったのだ。

——貴方と出会わなければ良かったわ——

ローズの脳裏に蘇る言葉。

それを思い出した時、ローズは更に泣き出した。

「出会わなければ良かったのは、ホームズの方じゃない……………」

自分のせいでホームズは、大切なものをなくしてしまった。

思い出を全てなくしてしまった。

ローズと出会わなければ、再会しななければこんな事には、ならなかった。

ミラが死んでローズが、落ち込んでいた時、ローズは何をやった？

スープを投げつけ、母親がいると思いきや暴言を吐き、殺しかけ、視力を奪い、思い出を奪った。

ローズは、自分の刀を睨みつける。

亡き師のマールロウから教えてもらった刀でローズは、大切な人の大切な、それこそ宝物のようなものを奪ってしまった。

これを愚かと呼ばずに何とよぶ。

「私の……………馬鹿……………」

ローズは、そう言って刀を壁に投げつけた。

刀は乾いた音を立てて床に転がった。

ローズは、それに見向きしないでひとしきり泣き続けた。

地獄への道は善意で築かれる

「ここを抜けていくしかないぞ」

部屋を抜けたエラリイに案内されたホームズ達は、早速行き詰まっていた。

目の前には、対侵入者用の機械が行き交っている。

エラリイをホームズは、不満そうに見ている。

「何か、不満そうだな」

「色々。まあ、それは兎も角、エラリイさんは、後ろに下がっておくれよ。足手まといだから」

ホームズの言葉にエラリイは、肩をすくめる。

「何故そう思う?」

エラリイは、そう言つて白衣に隠したエモノを取り出した。

取り出されたそれは、金槌だった。

ジャオの持っていたモノよりも小さい。

どちらかと言うと柄えが長い。

「この、狭い廊下で使うんです? アルヴェインも大剣使わないのに?」

ホームズの言葉を聞くとエラリーは、肩にハンマーを担ぐ。

そして、そのまま廊下の曲がり角を破壊して機械に打ち付けた。粉々に砕け散る機械。

エラリーは、廊下の壁を砕きながら機械に躍りかかる。

ただ、啞然とするホームズ達。

「単純な話、邪魔だったら全部壊せばいいんだ」

目の前の機械を全て叩き潰すとエラリーは、ハンマーを担ぐ。

「……………エラリーさんって、研究者であつてたっけ？ 戦闘員とかじゃないよね？」
レイアの言葉にエラリーは、肩をすくめる。

「研究には体力が必要なんだ」

「その通りだけど、なんか納得出来ないな…………」

ジュードは、渋い顔をしている。

ミラは、片手剣を構える。

「そんな常識外の男はほっておけ、来るぞ！」

ミラの言葉にエラリーは、酷く不服そうだ。

そんなエラリーに構わず機械達は迫ってくる。

犬のような形をした機械がホームズに飛びかかる。

ホームズは、回し蹴りで機械を壁に打ち付ける。

そして、動きを止めた機械を掴むとそのまま機械に投げつけて粉々にした。投げつけられた機械が、他の機械を巻き込んで動きを止める。

ローエンが、精霊術を発動させようとして動きを止める。

ここには、エレンピオス人のエラリイもいるのだ。

精霊術を見せていいものか、迷う。

「……………エラリイさん、後で説明します」

ローエンは、一言そう言うと、そのまま光の大砲を撃ち抜いた。

光の大砲は、そのまま纏まった機械達を粉々に打ち砕いた。

エラリイは、そんなローエンを見てポカンとしている。

「おいおい、黒匣^{ジン}なしで精霊術やるのか……………凄いな、何者だお前？」

「しがないジジイですよ」

ローエンは、ほっほっほと笑った後、眉をひそめる。

(思ったより、威力が弱い……………精霊が少ないというのは、どうやら本当のようですね)

ローエンが考え込んでいるとエラリイが、先の扉を指差す。

「とりあえず一旦この建物から出るぞ。その方が近道だ」

そう言つてエラリイは、扉を開ける。

外の道を移動しながらもホームズの顔は険しいままだ。

レイアが、そんなホームズの隣を歩く。

「なんか、機嫌悪い?」

「いいと思うかい?」

ホームズは、ため息を吐きながらそう返す。

「エラリイさんのこと?」

エラリイが、ローズを戦力外通告してから、ずっとこの調子だ。

レイアの言葉にホームズは、首を横に振る。

「エラリイさんの言ったことは正しい。だけど、それを正しいと納得した自分に腹が立つ」

正論と認めてしまい、昔馴染みを庇えなかった自分が、ホームズは許せなかったのだ。ホームズは、静かに瞳の下を触る。

「色々、頑張ったけど上手くいかなかったね……」

寂しそうに言うホームズ。

ローズが傷つかないようにとありとあらゆる手段を使ってきた。

だが、それでもローズは立ち上がれない程傷付けてしまった。

「何してたんだろうなあ……………」

レイアは、そんなホームズを見ながら手をポンと叩く。

「覚えてる？わたしが、ハ・ミルで落ち込んでいた時、ホームズはスープを頑張つて飲んでくれたこと」

「うん。まあ」

「ホームズが、頑張ってくれたおかげでとても元気付けられたよ」

レイアは、そう言うとき更に言葉を続ける。

「ローズの事を考えるのもいいけどさ、頑張ったことまで否定しないでよ」

レイアの言葉を聞いてホームズは、沈んでいた表情を消して負けた、という風に笑う。

「どこかで聞いたような台詞だね」

「気のせいじゃない？」

レイアは、ふふふと笑いながら外に出る。

「まあ、肝に銘じておくよ」

そう言うことからニヤリと笑う。

「友人からの忠告だからね」

ホームズの言葉にレイアは、満足そうに頷く。

頑張ったから上手くいくなんて事は幻想だ。

頑張ったってどうにもならないことが山ほどある。

だが、ホームズやレイアのように頑張ったおかげで救われた人がいるのも事実だ。

だから、努力とは、きつとやれば叶うとか、やっても叶わないとかそんな単純なものではないのだろう。

ヨルは、そんな二人を見て封印される前のことを思い出す。

(おまじないより、強力。それがきつと、頑張るってことだと思ふなあ……)

「……………フン」

「何、どうしたの?」

子猫ヨルが笑ったのに首をかしげるホームズ。

ヨルはため息を吐いて返す。

「別に。ただ少し昔のことを思い出したただけだ」

そう言うってから尻尾で先を示す。

「昔の()と?」

「そんなことより、見ろ」

不思議そうなホームズを遮ってヨルがよろよろと歩いている女軍人を示す。

「どうやら、戦局が動いたようだぞ」

よく見るとその女軍人は、全身ボロボロになっていた。

ヨルのヒゲがピクリと動く。

「大丈夫ですか!？」

ジュードとレイアが慌てて駆け寄り、治療を始める。

精霊術を使う二人を見てエラリーは、驚く。

「お前らもか!どうなっているんだ、一体?」

そう言っただけホームズ達の方を振り返る。

「まさか、お前らも?」

ホームズとアルヴィンは、首を振った後ホームズはミラをアルヴィンはエリーゼを指さす。

「後はこの二人」

ホームズの言葉にエラリーは、感慨深げに頷く。

「なるほど。お前達は、精霊術を使えないのだな」

「……………まあね」

ホームズは、そう言つて肩をすくめる。

レイアは、治療を終えると女軍人に話しかける。

「研究所の人達、どこにいるか分かりますか？ エラリイさん以外見なくて……」

レイアの言葉に女軍人は、首を横に振る。

「早くに逃げ出したものもいるが、何せ連中のせいでひどい様だったからな」

連中の言葉でローエンは、眉をひそめる。

「襲撃した人物を見たのですか？」

ローエンの言葉に女軍人は、頷く。

「長刀を持った男に宙に浮く女がやってきて、その後、大勢の兵隊が波のようにやって

きた」

女軍人の言葉を聞くとジュードが静かに頷く。

「間違いないよ」

「ミュゼも来ているようだな」

女軍人は、ぎゅつと拳を握る。

「あいつら、黒匣を一切破壊するとか言つて我々に退去を命じてきた」

ジュードは、こめかみ指を当てて考え込む。

「まさか、ガイアスは、世界から黒匣を全て消すつもりじゃっ!!」

ジュードの言葉に一行は息を飲む。

「異界炉計画を潰すためにか……極端過ぎだろ……」

アルヴィンは、呆然という。

しかし、ミラは首を横に振る。

「いや、黒匣^{ジン}がある限りエレンピオスの状況は、変化しない。異界炉計画は、何度でも

立ち上がるだろう」

「ガイアスは、黒匣^{ジン}をなくすことで問題を根本から解決するつもりなんだよ」

ジュードの言葉にアルヴィンは、苦虫を噛み潰したような顔をする。

「正直しんどい話だが、ヤローならありえるか、くそー!」

悪態をついた後、アルヴィンは、目を伏せる。

「なら、バランは……」

アルヴィンのポツリと呟いた言葉にエリーゼが両手を握る。

「あ、あの、バランさんという黒匣^{ジン}の技術者さんは、どうなったか知りませんか？」

エリーゼの言葉に女軍人は、首をかしげる。

エラリイは、更に言葉が続ける。

「源^{オリジン}霊匣の研究棟から出たのを見たか？」

エラリイから出た思わぬ言葉にミラが目を丸くする。

「源^{オリジン}霊匣だど!？」

ミラの言葉にエラリイが頷く。

「兵装研究棟が正式名称なんだが、まあ、それはこの際どうでもいい」
そんなわけないのだが、ホームズは黙って話に耳を傾ける。

「そこから出た所は見えていないのだな？」

「私もそこまで手が回っていない。だから、分からない。だが、奴らの話を聞く限り、
今頃は……………」

女軍人の言葉に一同は、黙り込む。

腕を組み渋い顔をするアルヴィンにジュードが近寄る。

「アルヴィン」

「……………大丈夫だ。お前はガイアスのことだけ考えてろ」

「でも……………」

尚も食いさがるジュードにアルヴィンが、口を開く。

「そうじゃねーだろ。お前は前に進むんだろ」

そう言つてジュードを見据える。

「正しいとか、人に優しくとか……………今は、そんな場合じゃないだろ」

静かに紡がれたアルヴィンの言葉にジュードは、少し迷つた後頷いた。

「ありがとう、アルヴィン」

エラリイは、腕を組んで考えこむ。

「エラリイさん？」

ホームズが首を傾げているとエラリイが、白衣のポケットをひっくり返して、紙を取り出す。

そして、ペンで何かを書き込んで、その紙をホームズに渡した。

「これは？」

「地図だ。今言った源^{オリジン}霊匣の研究棟は、丸く囲ったところだ。この先の道を行けばつく」

エラリイは、そう言うのと女軍人の肩を持つ。

「何を?!」

目を白黒させる女軍人には、見向きもせずホームズ達に顔を向ける。

「僕は、こいつを医務室に連れて行く。悪いがお前達は、そこへ自力で行ってくれ」
エラリイの宣言にホームズは、しばらく固まった後、ため息を吐く。

「まあ、仕方ないですね。軍人さんなら認証されるでしょうし」

ホームズ達の行く手を阻んだ機械達も襲ってはこない。

「お別れの前に一つ聞いてもいいですか？」

いつの間にかエラリイに対してホームズは、敬語になっていた。

「なんだ？」

「どうして、精、靈、術なんて知ってたんです？」

ホームズの質問に女軍人の肩を担いだエラリイがピタリと止まる。

「気付いたか？」

ニヤリと笑っているところを見るとどうやらワザと言ったようだ。

「当然。ジンテクスでしょ、ここは。なのに普通に精霊術なんて、言葉が出てくるです

から、不思議に思いますよ」

ホームズの言葉にエラリイは、満足そうに微笑む。

隠し事がばれたと言うのにこの笑顔だ。

ホームズは、不思議そうだ。

エラリイは、そんなホームズの顔を見ると肩をすくめる。

「ま、これが片付いたら話してやるよ」

そう言つてエラリイは、女軍人に肩を貸しながらその場を後にした。

衝撃的な出会いと共にあっさりと去つたエラリイを見てホームズは、ため息を吐く。

「どうにも、母さんの知り合いにまともな人はいないみたいだねえ……」

ため息を吐くホームズに対し、ヨルは険しい顔だ。

「おい、ホームズ、あいつ……」

「分かってるよ。気付いてるさ、おれをだれだと思ってるんだい？」
ホームズは、肩をすくめて源^{オリジン}霊匣の研究棟へと歩き出した。

「あの人なら大丈夫だろう」

ホームズの言葉にヨルは、頷く。

「まあ、だろうな」

そう言ってヨルは、静かに物思いに沈むアルヴィンに視線を向ける。
すると、ミラが歩みを進める

「アルヴィン」

ミラの声にアルヴィンは、少し驚いた顔をした後、静かに頷く。

「大丈夫だ」

アルヴィンの言葉をヨルは、鼻で笑う。

「信用していいのか？アルヴィン」

ヨルの言葉にアルヴィンは、押し黙る。

それから、頷く。

「ああ」

アルヴィンの言葉にヨルは、ニヤリと笑みを浮かべた。



エラリイは、女軍人に肩を貸しながら歩いていった。

「つたく、ハンマー持って鎧着込んだ女に肩を貸すなんて無理難題だな」
エラリイの愚痴に女軍人は、申し訳なさそうにする。

「すまない……早く医務室に着くとよう私も出来るだけの事をする」

「ああ、その必要はない」

エラリイは、そう言うのと女軍人を突き飛ばす。

女軍人は、よろけながらなんとか持ち直す。

「何を……」

「よくもまあ、色々ここまで調べたもんだ」

エラリイは、そう言つてハンマーを構える。

「源^{オリジン}靈匣の研究棟、バランに関して言えば、まあ適当に言つただろうが……」

「何を言つてい……」

「ここではな、精靈術のことをジンテクスというんだ。あのタレ目の男が言つてただらう」

女軍人の言葉をエラリイが遮る。

そして、女軍人が口を開く間もなく、エラリイは言葉を続ける。

「いいか、ジンテクスは黒匣^{ジン}がないと発動しないんだ。なのに奴らはそれなしで、ジンテクスをやつてのけた。それを見て全く驚かないエレンピオス人なんていないのだ」

エラリイの言葉に女軍人は、ぎゅつと拳を握る。

「一応、義務として聞いてやる。何故お前は驚かない？」

女軍人は、答えない。否、答えられない。

「不運だな。僕と会つたことが、お前の失敗だ。リーゼ・マクシアの軍人さんよ」
「不運？」

その言葉と共に女軍人は、両手の短剣で、エラリイに切り掛かった。

エラリイは、ハンマーを横にし柄で受ける。

柄で防がれた短剣は、ギチギチと火花を散らす。

「違うな、幸運だ。黒匣ジンの研究者を一人殺せるんだからな」

「ふん……」

エリリイは、柄でいなすとそのまま女軍人を蹴り飛ばす。

「やれるもんならやつてみる！」

無理なんだい？

「あの軍人さんが、リーゼ・マクシア人!？」

驚いているレイアにヨルが頷く。

「奴からは、^{ゲート}靈力野の気配を感じた」

淡々というヨルにエリーゼが慌てる。

「待つてください! だったら、戻らないと……」

「阿呆。あいつも分かっている。分かっただうえで、あいつが引き受けたんだ」

「そうそう。拳銃も持つてるだろうし、大丈夫さ」

「いや、あいつ。俺に銃弾すべて渡しちまったぞ」

ホームズの言葉にアルヴィンが弾倉を見せる。

そう、アルヴィンの銃弾はマクスウエル戦でとつくに底を尽きていたのだ。

ホームズの笑顔が引きつる。

「ヨル……」

心配そうなエリーゼとは対照的にやりと笑っている

ヨルは、エラリイが消えた方を見る。

「まあ、お手並み拝見といこうか」



「でえいりやつ!!」

エラリイのハンマーが女軍人に打ち下ろされる。

女軍人は、それを半歩ずれることによりかわす。

女軍人に当たらなかつたハンマーは、地面に叩き落とされた。

地面に落ちたハンマーは、石造りの床を砕く。

床には、ヒビが入り砕かれた石が散る。

女軍人は、エラリイがハンマーを構え直すより早く短剣で斬りつける。

ハンマーの柄で受け止めようとするが、両手で無数に振るわれる剣を全てを防ぐことは出来ない。

エラリイの白衣に赤い染みが少し広がる。

エラリイは、柄だけで女軍人を突き、距離をとる。

しかし、距離を取った瞬間女軍人は、目の前に火球を作り出す。

「まさか……………」

「ファイアーボール!!」

火球は、女軍人の間にある空気を燃料にエラリイをめざす。

エラリイは、ハンマーを抱えて前転してかわす。

「側で見ると驚きだけだが、自分に向けられるとアレだな、恐怖すら覚えるな」

エラリイは、ハンマーを地面でする。

「リーゼ・マクシアの軍人、名前は？」

「これから死ぬのに必要か？」

「研究者は、知りたがりなんだ」

女軍人は、諦めたようにため息を吐く。

「カベルネだ」

名乗ったカベルネにエラリイは、思わず吹き出す。

「マジで名乗りやがった。お前、名前を名乗るリスク分かっているのか？」

エラリイの言葉に女軍人は、短刀で斬りかかる。

「お前をここで殺せばノーリスクだ!!」

斬りかかって来た女軍人をかわし、ぐるりと身体ごとハンマーを回し遠心力を乗せて打ちおろす。

だが、攻撃直後だというのに身体をひねってかわす。

(くそっ！当たらん!!)

「おお振りだな」

そう言うとかベルネは、一歩で間合いを詰める。

ハンマーを振るおうにもここまで内側に入られては、やりようがない。

「お前らが考える事のプロなら……」

両手の剣がそれぞれ二連繰り出す。

「私達は闘う事のプロだ」

迫り来る合計四つの刃がエラリイの

白衣を、皮を、肉を切り裂く。

「ぐっ……」

そして、ダメ押し。

「燃えろ、ファイアーボール！」

精霊術が放たれた。

エラリイは、慌ててまだ形を残している白衣を翻し、火球を行く手に広げる。火球は、エラリイの白衣に当たるとそのまま何も燃やす事なく掻き消えた。

その光景にカベルネは、目を見開く。

「防災素材……………ようは、そう簡単に燃えないという事だ」

「バカな……………っ!!」

信じられない光景に呆然としているカベルネにエラリイは、ハンマーを横薙ぎに振るう。

カベルネは、慌てて一歩引く。

カベルネに当たらなかつたハンマーは、近くの壁を打ち崩す。

「お前が言ったんだ、僕の事を考える事のプロだと」

エラリイは、焦げ目一つない白衣を摘んで見せる。

「これは、プロの僕が作ったものだ。お前如きの火力で燃えるかよ」

「だが、刃物には弱いようだな」

カベルネは、しっかりと切り刻まれた白衣を指差す。

エラリイは、赤く染まる白衣に目を向ける。

「だったら、次は刃にも耐えられるものを作るか」

気軽に今日の晩御飯を決めるかのような口調にカベルネは、背筋に寒気が走る。

「……お前、一体何者だ？」

「だから、研究者だと……」

「研究者が血まみれでどうして平気なんだ」

忘れがちだが、本来研究者は、荒事をやる存在ではない。

頭を使うプロだ。

だが、そのハンマーを使う腕はどう見ても素人ではない。

(短刀使い相手にハンマーで挑むところは、まあ、素人だが……)

「血まみれになったことがあるからだ」

カベルネが黙っているとエラリイが口を開いた。

「………研究者だよな？」

「研究者だ」

カベルネは、溜息を吐く。

「まあ、いい。それより、もう一つ聞かせろ。何故、黒匣ジンを使うという選択肢しかないんだ？」

カベルネは、エラリイを睨みつける。

フルフェイス越しでも体がすぐむよような迫力にも構わず、エラリイは、ふんと鼻で笑う。

「なんだ、何も知らないんだな、お前」

「なんだと!？」

激昂するカベルネに構わずエラリイは、続ける、

「悪いが、答えるつもりはない」

「何故？」

「逆に聞くが、僕の答えをお前は信じられるのか？」

エラリイの質問にカベルネは、答えを詰まらせる。

「だって、そうだろう？ お前は拳を振り上げた状態だ。そんなお前が、今更拳を解けるのか？」

カベルネは、ここを潰しに来ている。

今更、どんな理由を聞いたところでそれは揺るがない。

答えないカベルネにエラリイは、言葉を続ける。

「お前の自己満足に付き合うつもりはない。武器を構えろ」

カベルネは、ナイフを構える。

「そうだったな。私達は、話し合いの為に来たのではなかったな」

「それはそれは、残念なことだ」

エラリイは、小馬鹿にしたようにため息を吐くと問答無用とでも言わんばかりにハン

マーを振り下ろす。

「だが、ハイそうですかと頷くと思っっているのか!？」
迫るハンマー。

カベルネは、それをかわすと右の短刀で斬りつける。

エラリイは、ハンマーの柄で防ぐ。

だが、左の短刀が、ハンマーの柄をぬってエラリイに振り下ろされる。

「ぐあつ……………」

「ハンマーの一撃は、確かに脅威だが、その重さ故にどうしても攻撃が限られる。それにくらべて」

カベルネは、流れるように連続切りを繰り返す。

途切れることのない斬撃にエラリイの身体は、赤く染まっていく。

「っそ!!」

斬撃の中、エラリイは何とかハンマーを振るう。

カベルネは、大きく後ろに下がる。

「短刀は、多彩な攻撃で相手を追い詰める事ができる」

「何が言いたい?」

そう言って血だらけのエラリイに短刀を向ける。

「研究者はな、『不可能』を『可能』にするためにいるんだ」
そう言つてハンマーを掴む手に力を込める。

「そんな僕の前に今、『不可能』とやらがある！これで、熱くならなきや研究者じやないー！」

「……………理解に苦しむな」

「当然！天才とは常に理解されないものだ」

面白そうに笑うエラリイ。

やけくそとも違う。

逆鱗ともまた違う。

どうやら、カベルネはエラリイのスイッチを押ししてしまったようだ。

（何かは、分からないがマズイ！）

直感で危険を感じたカベルネは、ファイアーボールを作り出して放った。

だが、それは真つ直ぐ向かつてくる破片と相殺され掻き消えた。

「何!?!」

カベルネが戸惑っている間にエラリイから、無言の種明かしを見せられる。

エラリイは、砕けているレンガを足ですくい上げるように真上に放つ。

そして、落ちてくるレンガをハンマーで打ったのだ。

打たれたレンガは、簡易的な大砲となってカベルネに放たれる。

余りに素早く放たれたレンガをかわせなかった。

レンガは、フルフェイスの兜を粉々に砕いた。

（そうか……このために、散々地面に打ちつけていたのか！）

外しているように見えて実は、このレンガ砲の砲弾を作っていたのだ。

もし、レンガ砲が一発で決まらなかつた時用に何回も打ちつけていた。

例え、ハンマーがカベルネに当たらなくともエラリイは、勝利の下準備をしていたのだ。

エラリイから放たれたレンガ砲は、不幸中の幸いと言うべきか、レンガと一緒にヘルメットも砕けたので頭には、衝撃はあれど傷はない。

しかし、

「そちらが手数で勝負なら……」

チカチカする目を開ける。

瞼を開けて目に入ったのは、ハンマーの間合いまで入ったエラリイだった。

「こっちは、一撃で勝負だ!!」

そう言つてハンマーをカベルネの腹に打ち込んだ。

「——ツ、ハ！」

打ち込まれたハンマーから、広がる衝撃にカベルネの肺にある空気が全て吐き出される。

「つでえいりやあー——っ!!」

エラリイは、打ち込んだハンマーをそのまま振り切るとカベルネを壁に叩きつけた。

「——ツ!!」

カベルネが叩きつけられた壁は、凹みヒビが蜘蛛の巣のように広がる。

カベルネは、ゆっくりと前のめりに壁から落ちて、動かなかつた。

それを見届けるとエラリイは、ドスンと腰を下ろす。

「あぁー……しんど」

そう言つてエラリイは、倒れているカベルネに近づき脈を図る。

「……やれやれ、死んでればこっちも楽だったんだがな」

そう言つてエラリイは、倒れているカベルネの肩を持ちながら立ち上がる。

「……医務室に連れてくといつてしまったからな」

そう言つて医務室へと歩き出した。

「ま、約束は約束だ」

門を叩く

「エラリイさんに渡された地図だどこの辺に何か部屋があるはずだけど……」

ホームズは、そう呟きながら廊下を走っていた。

目の前には、行く手を阻む機械が現れる。

「ホームズ！脚！」

ジュードの言葉にホームズは、脚を構える。

そして、ジュードが飛び上がったと同時に脚を振り抜く。

「飛天翔星駆!!」

ホームズは、ジュードを大砲の様に機械に向かって蹴り飛ばした。

大砲となったジュードは、機械達を蹴散らす。

目の前の機械は破壊したが、耳を澄ませると別の機械の音が聞こえる。

「つーキリが無い！」

「ホームズ、その地図の部屋で態勢を整えるぞ！」

「だよねえ」

ホームズは、そう言って辺りを見回す。

この近くにあるはずなのに見つからない。
すると壊れた機械の陰になって扉が隠れていた。

「あつた！」

ホームズは、機械を蹴つてどかすと部屋に飛び込んだ。

一行も後を追つて部屋に入った。

機械は、キョロキョロと辺りを見回して部屋の前にくる。

近く機械音にホームズ達は、息を殺して通り過ぎるのを待つ。

待っていると機械は、ゆっくりと遠ざかっていった。

「はあ……………」

ホームズが安堵してため息を吐く。

その部屋には、機器が所狭しと並んでいた。

「なんだい、これ？」

ホームズから出た質問にアルヴィンが機器を簡単にいじる。

「源^{オリジン}霊匣の研究データみたいだな……………」

そう言つて更にアルヴィンは、機器をいじる。

「間違いない……………アルクノアから送られたデータで、源^{オリジン}霊匣、ヴォルトつてのを作つて

いたらしいぜ」

「ヴォルト……」

ミラがポツリと呟く。

「ヨル、知ってるかい？」

「雷の大精霊だ……なるほど、雷を何らかのエネルギーにしようとしたわけか……」
ヨルの言葉にジュードが俯く。

「ジランド、本気で源^{オリジン}霊匣でエレンピオスを救おうとしてたんだ……」

ホームズも複雑そうに腕組みをしている。

アルヴィンは、機器を弄りながら眉をひそめる。

「……ん？源^{オリジン}霊匣のやろう、半刻前に起動された記録があるな……」

ローエンが、顎髭を触りながら考え込む。

「誰かが、起動させたのでしょうか？」

「それは、分からねーが、どうやらこの階の上にいるらしいぜ。追うか？」
アルヴィンに尋ねられたジュードは、頷く。

「そうしよう。もしかしたら、動かしたのは、ガイアスかもしれない」
ジュードの言葉にミラが振り返る。

「何か、心当たりでもあるのか？」

「確証はないけど、ガイアスはジランドと同じ事を考えたのかもしれない」

ミラが考え込む。

「源^{オリジン}霊匣の可能性か……」

ホームズは、組んでいた腕を解く。

「まあ、確かに精霊を殺す黒匣^{ジン}に代わるものがあれば、エレンピオスだって滅ぼさなくてもいいもよねえ」

ホームズの言葉にジュードが頷く。

「僕、ガイアスと会って話したい」

ジュードの言葉に辺りは水を打ったように静まり返った。

沈黙を破る様にレイアが、口を開く。

「行くのはいいけど、ガイアスが黒匣^{ジン}を壊そうとしてたら戦うことになるんじゃないの?」

レイアの心配を他所にジュードは、力強く頷く。

「その時はその時だよ」

ジュードの言葉にローエンが尋ねる。

「いいのですか? ジュードさんは、ガイアスさんを尊敬しているのでしょうか?」
そう言っつてミラに目を向ける。

「ミラさんを信用するのと同じ様に」

ミラは、それを聞いて驚いた表情になる。

「……………私と同じ」

小さく呟かれたそれは、誰にも拾われることはなかった。

アルヴィンが腕を組む。

「そんなんで、本気でやりあえんのかよ」

そんな事を言ったアルヴィンにエリーゼが怒ったように頬を膨らませる。

「アルヴィンは、どうしてそんなことばかり言うんですか!!」

『さっきの説教もそうだぞー!!』

エリーゼとティポに責められてたじたじとなるアルヴィン。

アルヴィンを責めるエリーゼにジュードは、優しく諭す。

「いいんだ。エリーゼ」

ジュードは、そこで言葉を区切ると再び続ける。

「僕はガイアスを尊敬している。でも、だからってガイアスと同じ道を歩く必要はな

いんだよ」

ジュードの言葉にエリーゼは、ホームズの方を向く。

エリーゼの視線に気付いたホームズは、肩をすくめる。

「別にいいだろう?というか、おれも尊敬する人と戦ったことぐらいあるし」

さらりと言ったホームズにエリーゼは、目を丸くする。

「だ、誰と？」

「マーロウさん」

間髪入れずに答える。

ホームズの答えにエリーゼは、一瞬間を伏せる。

ホームズは、それに構わず続ける。

「マーロウさんも言っただろう？何が大事かって」

自分の胸にホームズは、手を当てる。

「おれは、マーロウさんのことを尊敬している。母さんと何やかんやで渡り合った人

だからねえ」

ホームズは、そう言っただけでエリーゼに視線を向ける。

「それでもおれは、マーロウさんと戦った。結局、それより大事なものがあつたから

ねえ」

そう言っただけでエリーゼに視線を向ける。

「だから、ジュードも尊敬よりも大事なものがあるんだつたら、そつちを取るといい

よ」

ホームズの言葉にジュードは、頷く。

「うん。そうじゃなきや、ミラやガイアスみたいな大人になれない」

「……………ジュード」

ミラが静かに頷く。

そんな中、ヨルが口を開く。

「それで、結局これからどうするんだ？」

ヨルの言葉にホームズがアルヴィンの方を向く。

「とりあえず、起動された源^{オリジン}霊匣のところ行けば？ どうせ、何にも手掛かりないし、も

しかしたらガイアスがいるかもしれないぜ？」

「なるほどな」

アルヴィンは、そういつて機械をいじる。

「ヴォルトの源^{オリジン}霊匣を屋上で起動したみたいだぜ」

アルヴィンの返答にジュードは、頷いて扉をそつと開けて部屋の外を確認する。

そして、何も無い事を確認すると部屋から出るよう指示を出し、一行もそれに従って

外に出た。



屋上に向かう階段を上りながらエリーゼは、ホームズの方を見ている。

「何だい？」

視線に気付いたホームズが振り返ると、エリーゼは言いづらそうに口を開く。

「あの、ローズを待たないんですか？」

「……………待ったって仕方ないだろう？」

ホームズは、そう返す。

「……………あの子は、自分の意思で残ったんだもの」

続けられたホームズの言葉にエリーゼは、かける言葉が見つからない。

そんな沈黙を破るようにヨルが口を開く。

「何よりあの豆腐メンタルに期待するだけ無駄だろ」

ヨルの言葉にホームズが掴みかかる。

ヨルは、ホームズの手が届く前にレイアの頭に避難する。

レイアは、じとつとした目を頭にいるヨルに向けたあとホームズの方を見る。

ローズの事を気にかけているのが手に取るように分かる。

「誰かが背中を押してあげられるといいんだけどね」

「そうだねえ………」

残念ながらホームズには、出来ない。

ホームズなら、こう言うだろう。

別に瞳の色ぐらい気にしないと。

だが、ローズはその言葉を一番聞きたくないのだ。

ホームズは、俯きかけるが頭を振って切り替える。

「まずは、源^{オリジン}霊^{ソウル}匣^{ボックス}だ。きつとロクなことになってないだろうしねえ」

ホームズは、そう言つてジュードに続いて屋上に出る。

そこには濃く暗い紫色の球体があつた。

「なに？これ？」

ホームズは、自分の顔が引きつるのを感じていた。

「ヴォルト、雷を司る大精霊だ」

ヨルがそう言つた瞬間球体は、軽く弾む。

弾んで地面に着いた瞬間轟音と共に電撃が走る。

「きゃあー！」

『ビリビリするー』

エリーゼとティポの言葉と共にレイアは、棍を構える。

「まさか、暴走している?」

ヴォルトは、見るからにまともではない。

ホームズは、子猫ヨルを半眼で見る。

「まだ、元に戻らない?」

「こいつを喰えれば戻れるが……」

「そもそも喰える状態じゃないと?」

「そういう事だ」

しれつと言い放つヨルにホームズは、ため息を吐く。

「ジュード、来た道戻らない? ガイアスもないしさ」

「こんなの残して帰れないでしょ!」

「ですよねえ……」

ホームズは、脚を一步前に出した。

セルシウス戦は、ヨルのおかげでどうになった。

だが、源^{オリジン}霊匣相手なら文句なしの切り札のヨルが今回は、完全にお荷物なのだ。

「まあいい。不利なのはいつもの事だ」

「何事も諦めが肝心だ」

「切り替えと言って欲しいねえ」

ホームズは、そのまま暴走する源^{オリジン}霊匣、ヴォルトに向かつていった。



轟音が鳴り響く。

どうやらこここの棟ではないようだが、何かが起こっているようだ。

あれからひとしきり泣いた後ローズには、何も残らなかつた。

ここににいる意味も、ここまで来た意味も、これからついて行く意味さえも。

自分が投げ捨てた刀に憎しみを向けられればまだ楽だったが、ローズにとつての刀はマール口さんとの絆でもある。

それを自ら汚してしまった事も分かっている。

そんな堂々めぐりを繰り返していてローズは、動く事が出来なかった。

「でも……………いい加減でなきや……………」

そう言つて立ち上がろうとするとドアをノックする音が聞こえる。

「ちよつと！ 鍵かけて行つたんですか!!」

ガチャガチャと散々ドアを確かめる音が響く。

そして、しばらく無音になる。

去つたのかと思ひローズが今度こそ立ち上がろうとした時、ノックとは思えない轟音と共に扉がローズの鼻先をかすめて後ろの壁に叩きつけられた。

「やつと、空いた……………これで何もなかったら……………どうしてくれようか……………」

ドアを吹き飛ばした衝撃のせいで埃が舞いがり誰がそこにいるか分からない。

誰がやってきたにせよ、ローズの命が危ない事に変わりはないが、それでも気になつてしまう。

あの扉を壊した腕力を持った人物は、誰なのか？

声を聞く限りは、女性なのだが、身長が高い。

埃がゆっくりと晴れて行くとそこには、すらっとした長身そして、長髪の金髪を無造作にまとめた女性が、疲れたように立っていた。

しかし、ローズの姿を確認した瞬間、エメラルド色の瞳を輝かせた。

「黒髪の女の子ー!! いいですねー! 羨ましいですね!! あなた、お名前は? あ、名前を名乗るなら、先に貴方が名乗るのが礼儀じゃないの? とか、そんな台詞は受け付けていないですから。本名は……私の本名恥ずかしいので、当分名乗る気はないのです!!」

出会って数秒でべらべらと好き勝手な事を喋る女にローズは、困惑しながら口を開く。

「ローズ・クリステイです……………」

ローズは、そう言うのが精一杯だった。

疾走迅雷

「ローズちゃんというんですね」

金髪の女性は、うんうんと頷いている。

「どうしてこんなところに？」

女性の質問にローズは、何とというのが正解か考える。

その間に女性は、もう一つ質問する。

「それから、目元真っ赤ですけど、何かあったんですか？」

女性の優しい口調にローズは、再び目元に涙を浮かべ、ポツリポツリと話し始めた。



「だあらっ!!」

ホームズが回し蹴りを放つ。

ヴォルトは、自分を覆う球体で受ける。

(くそ！蹴りが！)

ホームズにヴォルトは、電撃を流す。

「がっ!!」

身体に襲い来る痺れと痛みにホームズは、動きを止める。

動きを止めたホームズをヴォルトは、球体の殻のままぶつかり弾き飛ばす。

吹き飛ばされたホームズは、屋上の手すりに打ち付けた。

「ホームズ!!」

レイアは、ぎゅつと棍を握り締めるとそのままジュードと二人で同時に攻撃をぶつける。

だが、それもヴォルトの殻に阻まれる。

ヴォルトは、そのまま回転して二人を吹き飛ばした。

「ジュード！レイア！」

エリーゼが慌てて治療に駆け寄る。

アルヴィンが、その間に引き鉄を引くが、放たれた弾は、やはり阻まれる。

「チツ……ミラ、精霊は使えないのか？」

アルヴィンの言葉にミラは首を横に振る。

「黒匣^{ジン}に溢れた場所で使うのは、避けたい」
下手をすれば四大達の命に関わる。

まだ、ミラの中にいた方がマシだ。

「そもそも、現界でできるのですか？」

「それも怪しい所だな。こんなにマナが枯渇した世界で……」

ミラは、更に顔をしかめる。

「ないもの嘆いたって仕方ないか……」

ホームズは、そう言っただけでゆらりと立ち上がる。

ジュードとレイアの治療を終えたエリーゼが、ホームズの治療をしている。

焦げ目がついてずれたポンチョを直してホームズは、目の前のヴォルトを見据える。

「取り敢えず、あの殻をぶち壊せばまだやりようがあるだろう？」

『まだ動くなー!!火傷が残ってるんだぞー!!』

エリーゼは、ムツとしながら治療をしている。

ホームズは、諦めたようにため息を吐く。

その一瞬の隙にヴォルト距離を詰めていた。

「っー」

ホームズは、エリーゼを突き飛ばしてその場から遠ざける。

エリーゼという標的を失ってもヴォルトは、止まらない。
ホームズに体当たりをかます。

ホームズは両脚に力を入れると盾で受け止める。

両者一步も引かない一騎打ちとなった。

一見、両者は拮抗しているように見える。

だが、そうは言っても大精霊の方が何枚も上だ。

このまま続けばいずれ競り負ける。

「ローエン!!」

ヨルの声と共にローエンが精霊術を放つ。

「ダイバインストリーク!!」

光の大砲は、ヴォルトの側面に命中した。

それによりヴォルトは、僅かに態勢を崩した。

「だあつらつ!!」

ホームズは、その隙にボルトを籠っている殻ごと蹴り飛ばした。

ヴォルトは、そのまま転がるが持ち直して再びホームズに向かう。

ホームズは、にやりと笑ってリリアルオーブを輝かせる。

「やるのか? お前一人で?」

「当然」

ヨルの力は、借りられない。

となればここから放たれるのは、正真正銘のホームズ単体の秘奥義だ。

「やるしかない!!」

右脚でどんつと地面を踏み鳴らす。

「炎より熱く!」

ホームズを中心に炎が渦を巻く。

「灼熱より熱く!!」

その炎を足に纏う。

「藍よりも碧く!」

纏う炎は、碧色に変わっていく。

「失恋より苦い!」

向かってくるボルトを睨みつけるとそのまま飛び上がった。

「エスプレッソ……………」

ホームズは、炎を纏った右脚を高々と掲げ、

「インパクトーっ!!!」

向かってくるボルトに自分の体重全てを乗せた踵落としを放った。

碧い炎の踵落としは、殻を粉々に砕くとそのままヴォルト本体を踏付けた。

「ジ、ジ……………」

「マズイ！脚を離せ、ホームズ！」

ヨルの言葉にホームズは、慌てて脚をどかす。

その瞬間、ヴォルトが電撃を放つ。

間一髪でホームズに電気が流れるのは、防げた。

「……………やっぱり、倒せないか……………」

ホームズは、ゆっくりと起き上がるヴォルトを見ながら忌々しそうに舌打ちをする。

「どうしたって威力が出ないよなあ……………」

ホームズは、トントンとつま先で軽く地面を叩く。

「マローウに放ったのに比べればな」

ミラは、そう言って目の前にいるヴォルトを指差す。

ヴォルトを覆っていた殻は治る様子を見せない。

ホームズは、にやりと笑う。

「だけどもあ、狙いは悪くないだろう?」

「ああ。珍しく文句なしだ!」

ミラはそう言うと同時にヴォルトに向かって踏み込んだ。

ミラの剣が振るわれるその瞬間、ヴォルトは、その場から消えた。

「何!?!」

「上だ!」

アルヴィンは、そう言ってミラの上空にいるヴォルトに向かって引き鉄を引く。

放たれた銃弾は、ミラに振り下ろそうとしているヴォルトの手を撃ち抜いた。

「ジ……………ガ……………?」

ボルトは、撃ち抜かれた手を見る。

その隙にミラが剣を振るう。

振るわれた剣は、ヴォルトに当たる。

(くっ……………浅い!!)

だが、届くよりも早くヴォルトは、後ろに避けた。

「ギギ……………」

ヴォルトは、傷つけられ己の身体に僅かに戸惑った後、姿を消した。

「そんな!また!?!」

レイアが辺りを見回す。

一行がヴォルトを探しているとアルヴィンの目の前に現れた。

大剣は、マクスウエル戦で使い物にならない。

「くっ!」

銃を構える。

だが、それよりも速く、ヴォルトの拳がアルヴィンを殴り飛ばした。

「アルヴィン!!」

思わず声を上げるホームズ。

ヴォルトは、そんなホームズの後ろに現れ、電撃を放つ。

「がっ!」

ホームズは、膝をつく。

身体全身に走る痺れに立っていられない。

「くそ……マジかい……」

動けなくなったホームズにヴォルトは、トドメを刺そうと右手を振り上げる。

「えいっ!!」

そんなヴォルトにレイアが棍を打ち付ける。

ボルトは、突然の攻撃に戸惑う。

その隙にジュードのレストアでホームズを助け出す。レイアは、構わず攻撃を続ける。

だが、すぐにヴォルトは、消えてしまった。

戸惑うレイアの後ろにヴォルトは、現れる。

そこに向かってローエンがナイフを投げる。

ヴォルトはゆっくりとローエンの方を向く。

その隙にレイアが棍で横殴りにする。

ヴォルトはレイアの棍に当たるより早く姿を消す。

「ああ、もう……またこれ？」

苛立つレイアの背中にローエンが背中を合わせる。

「ローエン？」

ローエンは、頷いて指示を出す。

「皆さん、お互いに背中を合わせ、背後の死角を無くして下さい！」

ローエンの指示通り、アルヴィンとエリーゼ、ジュードとミラが背中を合わせる。

ホームズは、ヨルに自分の後ろを見るように指示を出す。

今、ホームズ達の背後に死角はない。

「なるほど、こうすれば選択肢を絞れるねえ……」

ホームズの言葉にローエンが頷く。

「でも、どこにもいない……」

「来たぞ」

レイアの言葉を遮ってヨルが口を開く。

その瞬間、ホームズが飛び上がる。

「飛燕連脚!!」

ホームズは、空中に回し蹴りを放つ。

放たれたホームズの蹴りとヴォルトの拳がぶつかり合う。

「押し切ってやる!!」

ホームズは、踏ん張りの効かない空中で、脚だけの力で押し返す。

ヴォルトの拳は、ホームズに弾かれた。

その一連の流れでジュードが気づく。

「そうか、背後に死角がないなら……」

「そうです。上しかありません」

ローエンは、そう言ってナイフを投げ、アルヴィンが引き鉄を引く。

銃弾はヴォルトの肩を撃ち抜き、ナイフは、ホームズにもう一度ぶつけようとしていた、

拳に刺さった。

「ジュード、ミラ！」

「分かってるよ、ホームズ！」

ジュードは、そう答えるとミラと共鳴する。

ミラが出した光の剣をジュードが持つ。

「カタラクトレイ！！」

光の剣は、ヴォルトを貫いた。

「ジジ……………」

ヴォルトは、苦しそうに呻く。

「やったか？」

「いや……………」

アルヴィンの言葉にミラが首を横に振る。

ヨルは、髭をピクリと動かす。

「マズイ！」

ヨルの鋭い声が飛んだ瞬間、ヴォルトは、雷撃を放った。

それは、同時にホームズ達に襲い掛かった。

雷撃は、眩い光を放ちながら屋上を包んでいた。

しばらくして、眩い光が消えるとそこには、倒れている七人と一匹の姿があった。

幸いなことに全員息はある。

「……………つたく」

ホームズの身体が僅かに動く。

そして、地面に手を付いてゆっくり起き上がる。

「規格外だねえ、本当」

そう言つて地面を踏む。

すると、青白い光の円陣がジュード達全てを囲む。

光の円陣により、ジュード達の傷が癒える。

それに伴つて他の面々も何とか意識を戻す。

ホームズは、それを見届けると守護方陣を解く。

「ホームズ、逃げる?」

ジュードの言葉に肩をすくめる。

「逃げられるなら、ね。逃げられると思うかい?」

今度はジュードが肩をすくめる番だ。

「なら…………」

ミラは、片手剣を構える。

「やるぞ!!」

ミラの号令に頷くと一行は、再びヴォルトに向かって踏み込んだ。

女は度胸

「なるほど、そんな事が……」

女性は、ローズの長い話を聞き終わるとそう答える。

ローズ自身まさかこんなに話してしまうとは、思わなかった。だが、何となく話してしまったのだ。

女性は、ローズの話を聞き終わってため息を吐く。

「本当、親子そっくりですね」

「？」

「いえ、こつちの話です」

女性は、そう言うとローズと向きなおる。

「ローズちゃんは、ホームズに踊らされていたんですよ」
「？」

首をかしげるローズ。

それを見て女性は、大きいため息を吐く。

「不幸なすれ違いが重なって起こったことだと思っっているんですか？ 違いますよ。不

幸なすれ違いは、ローズちゃんがホームズを殺しにかかって目を潰したことで、碧色の瞳の記憶が消えたことだけです」

そう言うときキャスト付きの椅子に腰掛ける。

「その事実は、全部ローズちゃんに知って欲しくないから黙っていたと思っ
ていますか？違いますよ。ホームズは、ローズちゃんが勘違いするように黙っていたん
です」

レイアもミラも知っていることだ。

だが、ローズは知らない。

「人は、自分の力で辿り着いた結論を何よりも信じてしまいます。だから、ホームズ
は、ローズちゃんに結論を出させたんです」

「どうして……………」

「だって、ホームズが全ての元凶なら、ローズちゃんの両親が原因ということまで考え
ないじゃないですか」

自分が被害者だということに辿り着けば、加害者だという結論を考えない。

「ホームズのせいだとローズちゃんに信じさせることによつて真実に気づかせないよ
うにしていたんですよ」

「でも……………なんで……………」

女性は、頷く。

「考えられるのは、三つです。

一つは、ローズちゃんに両親のやっていたことを知って欲しくなかったから。

自分の両親が非合法の連中とつるんでいたなんて聞きたい情報じゃないでしょう？」

ローズは、頷く。

「二つ目は、ローズちゃんの両親を庇うため。

いい加減気付いていると思うのですが、その時のサプライズパーティーは、確実にローズちゃんを逃がすための策ですよ。

そして、ローズちゃんを逃したということは、連中が来ることをローズちゃんの家族は知っていた。

それでもローズちゃんを救うために命を賭けた両親の思いを受けて、ホームズが庇おうとした」

「三つ目は？」

「その両方です」

女性は、そう言った後、ため息を吐く。

「これ以外にも例えば、過去のトラウマから、なんてこともあるかもしれないですけど」

女性は、そう言つてローズに向きなおる。

「どちらにせよ、ホームズはローズちゃんのことを大切に想つていらっしゃるということです。それが、女性としてなのか、友人としてなのかは、分からないですけどね」

対して思い入れのない人間の家族のことなら別に特に肩入れしない。

勿論、こんな手段を簡単に選んだのは、あの村での出来事が起因している。

ローズは、唇を噛み締める。

「私は、ホームズに……」

ここまで大切にしてくれた人間にローズのやった事は、なんだ？

外道と言われても文句は言えない。

俯いてしまったローズに女性は、かける言葉を探す。

そんな時視界の片隅に転がっている二つの刀を見つける。

「おや？」

不思議そう首をかしげながら、刀に近づくと手に取る。

そして、刀を鞘から抜く。

もう一つは、完全に折れていた。

「ああ、だからですか……」

女性は、ため息を吐いて自分の持つてきた刀を見る。

（全く、面倒くさい役を人に押し付けてくれたものですね……）
女性は、優しい声で尋ねる。

「さて、ローズちゃん。これからどうするんですか？」

「どうするって……いい加減ここから出ようと思っていたところですけど……」
ローズがポツリとこぼした瞬間、部屋がドンという音ともに震える。

「今は……」

「何だか、もりあがっているようですね」

女性は、そう言いながら、ローズを見る。

ローズは、懸命に堪えるように唇を噛み締めていた。

何を堪えているのか？ 悔しさか？

違う。

ローズが堪えるのは、悔しさなんていうものではない。

ホームズ達の戦いに向かいたいという気持ちを持ってない。

なにせ、今の自分が行ったところで、後悔と罪の意識に潰された状態では足手まといでしかないのだ。

ローズは、それが分かっている。

そして、納得しているため動けないのだ。

「辛そうですね」

女性は、どうやらそんなローズを見抜いているようだ。

ローズは、こくりと頷くと何かを振り払うかのように立ち上がろうとする。そんなローズを女性が止める。

「ダメですよ、ローズちゃん。立ち上がるのは、答えを出してからです」

「でも、悩んでいる暇があったら、行動した方が………」

「悩む暇があるなら悩まなくていけないんです」

女性は、そう言ってくるりと椅子を回す。

「よく人は、

『悩む暇があったら行動しろ！』

『考える暇があったら行動しろ！』

『迷う暇があったら行動しろ！』と、悩むことや考えることや迷うことが間違いみたいに言うものです」

そう言つて女性は、ローズを見据える。

「でもね、ローズちゃん。だったら、人間は何のために頭なんて場所があるんですか？」

女性は、更に続ける。

「大事な事は、考えなくてはいけないのです。迷わなくてはいけないのです。悩まなければならぬのです」

そう言うとき女性は、優しくそしてはつきりと告げる。

「ローズちゃん、答えを出さない。ローズちゃんが立ち上がる答えを、刀を手にする答えを」

「……………悩みながら、行動するのは……………」

「今のローズちゃんがその結果じゃないのですか？」

女性の言葉にローズは、返す言葉もない。

悩みながら進み答えを出したものもある。

だが、ローズは、行動することに重きを置き考えることを放棄した。

結果がこれだ。

ホームズのこと、今の状況のこと、ローズは、考え込むが暗闇を進んでいるような感覚に陥る。

その間に時間が過ぎていくのを焦るばかりだ。

女性は、椅子の車輪を転がして近づくとポンと肩を叩く。

「ローズちゃん、ヒントをあげましょう」

女性は、そう言うとき指を一本立てる。

「まずは、立ち上がる答えと刀を手取る答えを出すのです。そして、これが片付いたら、今度は、ホームズのことを考えなさい」

女性の言葉にローズは、こくりと頷く。

ローズは、まず、立ち上がれない理由を考える。

それは、自分が足手まといになってしまうのが分かっているからだ。

助けに行った結果、ホームズ達の足を引っ張り取り返しのつかないことが起こるのが怖い。

だが、それは助けに行かなくても同じことが言える。

助けに行かず、取り返しのつかないことになる可能性だけである。

どちらの選択肢を選んだところで等しく後悔する可能性があるのだ。

でしゃばって後悔するか、

尻尾を巻いて後悔するか、

ローズの中にあるのは、この二択だ。

ローズは、それを選べずにいる。

確かにこの女性の言う通りだ。

今、無理矢理に全てを振り払って、助けに行ってもホームズを見た瞬間に刀を持つ手に力が入らなくなる自信がある。

だが、この場所で全てをやり過ぎてしまったら、もう二度とローズは彼らの顔を見る事は出来ないだろう。

(ダメだ……立ち上がる理由が見つからない……)

なら、もう一つを考えるしかない。

(刀を手に持つ答え……)

それを考えた時、花畑でのホームズが蘇った。

あの時、ホームズは、ローズがイジメの対象とならないようワザとローズを突き放した。

突き放された時は、理不尽に起こった出来事に呆然とするしかなかった。

だが、別れる間際に姉から語られたホームズの真意を聞いた時、感じたのは自分の惨めさだ。

それを感じた時、ローズは思ったのだ。

何を？

刀を握ることを決めた理由だ。

その理由とは、かけ離れた使い方をしてしまった。

ローズは、弾かれたように顔を上げる。

(そうだ……忘れてた。ううん、忘れちゃいけなかった！)

ローズは、拳を握り締める。

そして、女性を真つ直ぐに見据える。

そのローズの瞳には、決意の炎が灯っていた。

涙で濡れた瞳は、もう何処にもなかった。

「答えは、出たのですか？」

「はい」

そう言つてローズは、口を開く。

「私は、自分に力がないばかりに自分の傷を人に押し付けるような事はしたくない、そう思つて刀を取りました」

だが、それとは、かけ離れた理由で刀を振るつてしまった、結果不幸を振りまいてしまった。

「だから、私は、刀を取ります。でしやばつても後悔する、尻尾を巻いて逃げてても後悔する。だったら、でしやばります。尻尾を巻いて逃げて自分の傷を人に押し付けたくないから」

思い出は力に、過去は希望に、過ちには贖罪を。

「それが、答えですか？」

「はい」

「六十点ですね」

「へ？」

まさかの返答に戸惑うローズに女性は、拾った刀の折れていない方を投げて渡す。

「今のローズちゃんの答案には、空欄があります」

「……………ホームズのこと」

「はい。でも、今の答えは満点ですよ。だから、残りの空欄も埋めてくださいね」

女性の言葉にローズは、確かにそして、力を込めて頷いた。

それを満足そうに見ると女性は、ゴソゴソと懐を探して、もう一つの刀を取り出す。

「それは……………」

「見た所、ローズちゃんは二刀流ですからね。持つて行つてください」

「え、でも？」

「一応、業物らしいのでちゃんと手入れしてありますよ」

「いや、そうじゃなくて！それじゃあ、貴方の武器が……………」

女性は、にっこり笑うと立ち上がり、自分の座っていた椅子を人差し指の上に軽々と乗せる。

そして、少し弾いて宙に浮かせるとそのまま拳骨で殴りつけた。

殴られた椅子は、そのまま壁に激突し粉々に砕け散った。

唾然とするローズに女性は、笑いかける。

「私は身体を武器にして戦うんです。何と言っても軍人ですからね」

ローズは、この時になって女性が扉を壊して入ってきたことを思い出した。

「……………心配は、いらぬということですか？」

「そういうことです」

ローズは、ため息をつくとき髪をまとめる。

そして、髪を止める紐が無いことに気付く。

そんなローズに女性が髪留めを投げてよこす。

ローズは、慌てて片手で受け止める。

「これは？」

「シユシユと言うんですよ。可愛かったので買いましたが、ローズちゃんの方が似合

いそうなのであげます」

ローズは、シユシユを使って髪をまとめる。

後ろで髪をまとめる気合が入る。

「よしー」

ローズは、軽くジャンプをしてそして腰にある二つの刀を確認した後女性の方を振り

返る。

「あの、その、ありがとうございますごさいました」

「どういたしまして」

女性は、穏やかに笑って頷く。

「色々言いたいことや聞きたいこともあるんですが、一つだけ」

「何ですか？」

「お名前教えてくれませんか」

「嫌です。恥ずかしいので」

即答されてしまいローズは、立つ瀬も無い。

そして、そのままの笑顔で続ける。

「ローズちゃんが全部に答えを出して、私が満足して、そして気が向いたら教えてあげる、というのでどうです？」

「……………というか、会いに行くには、どうすればいいんですか？」

「巡り合わせ、運に任せましょう」

いけしゃあしゃあと言うその金髪の女性にローズは、苦笑いを浮かべるとそのままホーリーボトルを浴びて部屋から出て行った。

それを見届けると女性は、大きくため息をついて床に腰を下ろす。

「やれやれ、本当に面倒くさいこと押し付けてくれたものです」

そうやって開く女性のGHSには、事の顛末とそれに伴うフォローと刀を持ってくることの指示が書かれていたメールがあった。

差出人は、エラリイ。

「……………はあ……………全く、女の子泣かしたならそのフォローぐらい自分でして欲しいものです」



女性と別れてローズは、音のする方に走っていた。
足を進めるたびに轟音が近づく。

そして、最も音が大きい建物にたどり着いた。

たどり着いた時、また轟音が鳴り響く。

音は、真上から聞こえる。

「この、屋上？」

階段を登っていたら間に合うか分からない。

そんなローズに一つの案が浮かび上がる。

(こりゃあ、ホームズのことの無茶だとか言えないわね……)

ローズは、腰の二刀を引き抜き目の前でばつ印を作りだす。

「登れ、トラクタービーム！」

ローズの身体が屋上を目指して上がっていく。

ローズは、上がりながらも一つ詠唱を始める。

「飛べ、アリーヴェデルチ!!」

途中まで上がったところから更に風の陣が現れローズを勢いよく、上空に飛ばした。

空中に放たれたローズの瞳には屋上でホームズに襲いかかろうとしている雷を纏つ

た人型が、飛び込んできた。

ローズは、一つに括られた髪をなびかせ、そのまま宙返りをするとそのまま人型、ヴォ

ルトを二刀で切りつけた。

両肩から袈裟懸けにボルトは、切り裂かれた。

ホームズ達は、突然現れたローズにポカンとしている。

「えっ？そんな、どうして？」

「話せば長いわ」

ローズは、そういうと自身に敵意を向けるヴォルトに目を向ける。

「ローズ、そいつはとんでもない速さで動く、だから……」

そう言った瞬間ヴォルトの姿が消えた。

そして、ローズの背後に現れる。

だが、それよりも早く、ローズのリリアル・オーブが輝いた。

かつて輝けなかったリリアル・オーブはローズの思いに応えるように燦然と輝き、彼女を包み込む。

「女の覚悟を見せてやる!!」

ローズは、刀を鞘に収め、マナを込める。

「技!」

すると、コンマ一秒時が止まった。

「体!」

その隙にローズは、前から使っていた刀を抜刀する。

刀が鞘を走る甲高い音が響く。

それを時の止まった中で聞けるのは、ローズだけだ。

白銀の刃は、ヴォルトを切り裂く。

切り裂いた刀は、宙を舞う。

刀がくるくると回っている時に切り裂かれたヴォルトが動き出し、ローズの背後に回ろうとする。

ローズは、それを睨みつけながらももう一刀に手をかける。

「心!!」

ローズは、そう言って先ほど貫ったばかりの刀を引き抜く。

刀は、ヴォルトが移動するより速くヴォルトを捉えた。

「やっと揃った、心技体！」

ローズは、飛び上がって宙にある刀を掴む。

「とくと味わえ私の全力……」

二つの刀をローズは、高々と振りかぶる。

ローズの二刀にマナが収束していく。

「崩襲剣・極!!」

二刀は、ヴォルトに叩きつけられた。

辺りに衝撃が走り屋上には、ひびが広がっていく。

砂煙が舞い上がり何も見えなくなる。

しばらくして、それが晴れるとそこには、凜として立ちながら風に髪をたなびかせる

ローズの姿があった。

「ローズ……」

ホームズの声にローズは、振り返りながら二つの刀を鞘に収める。

「どんなもんよー！」

無い胸を張るローズを見て、ホームズはくすりと笑う。

「大したもんだよ、君は」

みんなといっぴきはひとりのために

「何かは、分からないけど向き合ったみたいだねえ」

ホームズは、そう言って一旦役目を終え、光が消えていくリリアル・オーブを指差す。ホームズと戦ったあの時、リリアル・オーブは、輝かなかった。

「まあね。後で、百点もらいに行かないといけないんだけど」

「？」

「こつちの話」

何かを振り切ったローズに一行は、優しく微笑む。

何もかもが良い訳ではないが、それでも駆けつけてくれた事は嬉しいのだ。

「……………まあ、何はともあれやつと大人しくなったな」

ローズの秘奥義で叩きつけられたヴォルトは、地面に倒れたまま動かない。

「セルシウスといい、源^{オリジン}霊匣つてのは、面倒だな」

「はい、大精霊も復活させてしまえますからね……」

「何とか有効な利用法が欲しいところだねえ。でなければ、潰すとか」

「ぶっそうだね……」

ホームズの言葉にジュードは、呆れている。

そんな会話をしていると目の前に黒い穴が現れ、ガイアスとミュゼが現れた。

ミラは、突然の事に目を丸くする。

「ガイアス、ミュゼ」

ガイアスは、ホームズ達を見据える。

「こんなところで出会うとは、意外なこともあるものだ」

「やっぱり、エレンピオスに来ていたのね」

「お陰様で」

ホームズは、肩をすくめてみせる。

（こんな状態でやり合いたくないなあ……）

ホームズは、何時でも対応出来るように全身に力を込める。

そんなホームズの前にジュードが一步前に入る。

「ガイアスも源^{オリジン}霊匣の可能性に気付いてるんでしょ？」

「可能性？そんなものの上で民を生かすつもりはない」

ガイアスは、そう言つて腕を組む。

「俺が、源^{オリジン}霊匣を起動させたのは、ジュード、お前の考えそうなことだからだ」

「え？」

ジュードがポカンとしてしているとガイアスが言葉を続ける。

「だが、ダメだった。とうてい人に御しきれるものではない」

「だったら、どうするんだい？」

ホームズが尋ねると、ガイアスは言葉を続ける。

「やはり、この世界から黒^{ジン}匣を一掃するよりないようだ」

ガイアスから放たれた予想通りの言葉にアルヴィンは、舌打ちをする。

「やっぱり、そんなこと考えてやがったか………」

「でも、そんなことしたら！」

レイアスは、声を荒げる。

「だが、それで異界炉計画は確実に終わらせることができる。

異論は、あるだろうか？」

「当然だろうか？」

ホームズは、ガイアスを睨みつける。

ガイアスは、真つ向からホームズを睨み返す。

「断^{シエ}界殻は、どうする？」

ミラの質問にガイアスではなく、ミュゼが答える。

「断界殻^{シエ}は、無くさないわ。黒匣^{ジン}がある限り」

そう言つてミュゼは、ホームズとアルヴィンに視線を向ける。

「リーゼ・マクシアが、エレンピオスに蹂躪^{シエ}されては堪らないもの」

ミュゼの言葉にミラがもう一言質問する。

「マクスウエルもあのままか？」

「弱き者を死なせないのも強きものの義務だ」

「間違つてるよ、ガイアス!!」

ジュードは、ガイアスの言葉を真つ向から否定する。

ジュードの言葉にガイアスは、齒噛みする。

「何が間違つているといふのだ!!断界殻^{シエ}を維持し、黒匣^{ジン}を全て滅ぼしたのちに世界を

一つにすればいいだろ」

「黒匣^{ジン}をなくせば苦しむ人間が出る。お前は、それを無視するといふのか？」

ミラは、真つ直ぐにガイアスに問いかける。

「苦しむ弱い人間は、ガイアスが救つてくれるわ」

ミュゼの答えにホームズは、鼻で笑つて返す。

「お前は何かもしないのか、大精霊？」

ヨルの馬鹿にした物言いにミュゼの眉がピクリと動く。

「おれの理想がわからぬお前たちではないだろう!？」

ガイアスが激昂しながら問い詰める。

「別に、わかるよ。リーゼ・マクシアの為にエレンピオスを犠牲にするというんだろう?」

ホームズは、肩をすくめてみせる。

「正しい判断だよ。リーゼ・マクシアの王、ガイアス。王が民のことを考えるのは、当然だ」

でも、と言ってホームズは、言葉を区切る。

「それが、おれや、ジュード、ミラやアルヴィンの理想と一緒に聞かればそうじゃない。ガイアス、これは、そういう話なんだ」

ホームズは、そう言ってガイアスを真っ直ぐに見据える。

「君には君の、おれ達にはおれ達の理想があり、信念がある」

ホームズは、ガイアス相手に一步も引かない。

「ガイアス、どんなに立派な理想も人に押し付けちゃダメだよ!」

今度は、ジュードが口を開く。

「なら、お前の理想は何だ!」

「黒匣だよ」

ジュードは、にべもなく言い放つ。

「黒匣ジンが必要なんだ。自分らしく生きるために」

「……………お前の言葉は、可能性だけを述べている恣意的なものにすぎんぞ」

「そうかもしれない。でも止めるわけにはいかない」

二人に歩み寄る気配はない。

ミュゼは、ため息を一つ吐く。

「行きましょう。ここにいても時間の無駄です」

ガイアスは、頷く。

「……………そのはないのいいようだな」

そう言って二人は、黒い穴の中へ消えていった。

穴が完全に消えるとホームズは、安堵したようにため息を吐く。

「ふう、助かった。あのまま襲ってくるじゃないかと思つたよ」

「まあ、奴らにも奴らなりの事情があるってことだろ」

ヨルは、子猫のまま欠伸をしながら返す。

ヨルとホームズが安堵している中、ジュードが俯く。

「僕は、また……………うん。まだ、何かあるはずだよ」

ジュードの決意を横目で見届けるとヨルは、辺りを見回す。

「さて、後は、メガネ男だが……」

「ヨル、探せるかい？」

「どいつもこいつも靈力野の気配がないからわからんな……」

「君、ここに来て何の役にも立ってないね」

子猫状態のヨルに誰もは何となく思っていたことをサラリというホームズ。

流石、ホームズ……

「ああ？」

ドスの効いた声に対しホームズは、肩をすくめてみせる。

「マクスウェル戦で活躍したからいいだろ、代休だ代休。お前に至っては、死んだフリしてただけだろ。そのまま永眠してろ」

「他にも色々やってみましたあ!!ヨルの事聞き出したり、ヨル呼び出して翻弄したり!!」
喚き散らしながら、騒ぐホームズとヨルに一行はため息をつく。

「ダメだ。とりあえず、ホームズとヨルは当てにしないでどうにかするか」

ミラの言葉に頷き、アルヴィンは、ふと辺りを見回す。

すると、一台の止まった昇降機とそこに乗っている人間が目に入る。

「……………バラン？」

間違いなくアルヴィンの従兄弟のバランだ。

「バラン!!」

アルヴェインの呼びかけにバランも気付いたようだ。

ホームズ達のいる場所は、この棟の屋上だ。

その屋上より、遙かに高いところにバランは、いた。

「アルフレド!!」

バランも慌ててアルヴェインに呼びかける。

ホームズとヨルも睨み合うのを止めて昇降機を見る。

「ん? 止まってる?」

「どうやら、動力がなくなったせいであのような場所で止まってしまったようですね」

アルヴェインは、ヨルの方を見る。

「おい、非常識は………無理か」

「まあね」

ホームズは、そう言つて顎に手を当てて考える。

「まあ、無いものねだつても仕方ない」

そう言つてホームズは、屋上への出入り口を指差す。

「そうだな。下に一度降りてたすけだすぞ」

ミラの提案に一行が頷いた時、ジュードが、こめかみから指を離す。

「待つて。無いものをねだつても仕方ないならあるものを使おうよ」

ジュードは、そう言つて源^{オリジン}霊匣ヴオルトに近づく。

源^{オリジン}霊匣ヴオルトを使うつもりだ。

「おいおい、マジかい。ジランダの最後を忘れたわけじゃあないだろう?」

「…………でも、やるしかないよ。下から助け出すには、高さがあり過ぎる」

ジュードは、そう言つて落ちてゐる精霊の化石を源^{オリジン}霊匣の機械にはめる。

「お願い、ヴオルト。力を貸して!」

するとヴオルトは、ゆっくりと動き出した。

「ジジ……………」

ヴオルトは、そう言つてゆっくりと起き上がり雷撃を避雷針のようなものに放つ。

「行けるかしら……………」

ローズがそう呟いた瞬間、ジュードに黒い電撃のようなものが纏わりつく。

「ぐ、あああ!」

ジュードの苦しそうな声が響き渡る。

「ジュード!!」

「ジランダの時と同じ反応だ、もうよせ!」

一行の脳裏には、ジランダのあの無残な姿が蘇る。

だが、ジュードは止めない。

「まだ……だよ！」

踏ん張って更に続ける。

ジュードは、源^{オリジン}霊匣を手放そうとしない。

すると、ミラの手が源^{オリジン}霊匣の上に重ねられた。

するとミラの手にも反動の黒い電撃が纏わりつく。

「何故、一人で無茶をする」

「はは、ミラがそれを言う？」

少し呆れたように笑うジュード。

そして、そこにホームズの手が重ねられる。

手には、肩身の指輪が付けられたままだ。

「全くだねえ、もつと言ってあげたまえ」

ホームズの手にも反動が現れる。

「いや、ホームズもあんまり変わんないよ」

「おれは、割と人に頼ってるよ」

指輪のしたままの手で何てことなさそうに返すホームズ。

「頼ってるにしては、怪我が重いし多いよ、ホームズ」

そう言ってレイアが手を重ね、ジュードに視線を向ける。

「ジュード。わたし達にだって出来ることがあるんだからね」
ローエンの手が重ねられる。

「二人で出来ないことはみんなでやればいいのです」

次は、アルヴィンだ。

「それで、可能性って奴があがりやあ儲けもんだろ」

「大丈夫よ、今の私なら力になるわ」

そう言ってローズが手を重ねる。

「わたしたちに任せてください」

『うんしょー!!』

エリーゼとティポが手を重ねる。

これで、全員？

いや、後もう一匹いる。

ヨルは、ホームズの腕を伝って降りてくると自分の前足を重ねた。

「ヨル……………」

驚いているジュードにヨルは、ニヤリと犬歯を見せる。

「俺は、お前の話に乗ったんだ。乗ったからには、賭けてやる。何だってな」

ジュードは目を丸くして見回す。

そして、力強く頷く。

「みんな……ありがとう」

皆の力が加わり紫の雷光は、次第に勢いを増していく。

「みんな、もう少しだ！意識を集中しろ！」

雷光の勢いは、更に増していく。

「行っけー!!」

ジュードは声の限り叫ぶ。

雷光は、更に輝き建物に照明を灯していく。

そして、昇降機が、ゆっくりと下に降りて行った。

ゆっくりとしかし、確実に昇降機は、地面に降りていく。

そして、ガコンという音が響く。

地面に降りたった音だ。

それを聞いた瞬間、一行は、急いで源^{オリジン}霊匣から離れ、確認しに行った。

「バラン!!」

アルヴィンが慌てて屋上の手すりに駆け寄るとバランは、大きく手を振って応えた。

アルヴィンは、それを見るとハハハと笑ってどっかりと地面に腰を下ろした。

「良かったよ、ほんと」

「全くもってその通り……とはいえ、やってみるもんだねえ」

ホームズもぐつたりと腰を下ろす。

ジュードが慌ててホームズの左手の指輪を見る。

「指輪、壊れてない？」

「大丈夫だよ。何といたって誓いの指輪だからねえ、君の誓いにぐらい力を貸してくれるさ」

ホームズは、そう言つてピンクに輝く指輪を見せる。

ジュードは、胸を撫で下ろす。

「まあ、でもこれで殴るのはやらないよ」

「いや、当たり前だよ」

ジュードは呆れたように言う。

ホームズは、くくくと笑つた後立ち上がる。

ポンチョがふわりと風に棚引く。

ホームズは、つかつかと歩きアルヴィンを引つ張り上げる。

「ほら、立ってアルヴィン。バランスさんの様子を見に行くよ」

突然引つ張り上げられたアルヴィンは、目を白黒させたが直ぐに笑う。

「そうだな」

朱に集まる赤色達

「助かったよ、ありがとう」

バランは、下に降りた一行にそう声をかけた。

対侵入者用機械は、完全に停止させたようだ。

「あれ？敵兵は？」

「なんか、撤退していったよ」

バランの言葉にホームズは、安堵の溜息を吐いて辺りを見回す。

「エラリーさんは？」

「医務室に行つたみたいだよ」

戦いの結果無事では済まなかつたようだ。

思わずキュツと拳を握る。

「今、敵兵と一緒に治療されてるよ」

「ごめん、今なんて？」

ホームズは、バランの言葉に首を傾げる。

「だから、エラリーの奴、自分も傷だらけのくせに敵兵背負つて医務室行つたらしい

よ

「……………」

ホームズは、首を更に傾げる。

バランは、面白そうに笑っている。

「まあ、彼、結構お人好しだから」

「おれの周りにいるのは、そんなのばかりだねえ……」

ホームズは、溜息を吐いた後、バランの後ろにいる面々を見る。

一瞬、ここの職員かと思っただが、子供たちもいる。

「この子達は？」

「ああ、みんな黒^{ジン}匣^{ジン}では普通に生活するのが難しい人達だよ」

「黒^{ジン}匣^{ジン}では？じゃあ、何で生活しているんです？」

「そこにいるだろ？」

バランがそう言つて指で示した先には、淡く光る小さな動物たちがいた。

「これって、まさか……」

ローズの言葉にバランが頷く。

「源^{オリジン}霊^{ジン}匣^{ジン}だよ」

「源^{オリジン}霊^{ジン}匣^{ジン}!？」

ホームズの脳裏には、セルシウスやヴォルトが現れる。

それらに比べればえらく可愛らしい。

エリーゼも驚きながら見ている。

「力は、微精霊ぐらいに感じます……」

「そりゃあ、そうさ。微精霊の源霊匣だからね」

バランの言葉にホームズ以外も驚いた顔をする。

そんな面々を見てバランは、逆に驚いたようだ。

「もしかして、源霊匣がどうやって出来ているのか知らないのかい？」

バランの質問に一行は、首を傾げる。

「そう言えば……」

「増霊極ブースターを使うってことしか知らないねえ……」

「へえ、増霊極ブースターを使うことは知っているんだね。だったら、話は早い」

そう言うのと白衣のポケットから青色の石、精霊の化石を取り出す。

「精霊の化石に君達リーゼ・マクシアの人がマナを注ぐと源霊匣オリジンが生まれるんだ」

「おかしな話だ……」

ミラは、ポカンとしている。

「そうだよ。ミラの足も精霊の化石を使ってるもんね」

だったら、ミラ達は、もつと早くに源靈匣オリジンを見ていないとおかしい。

「ただし、ホームズが言ったように増靈極ブースターが必要になる」

『増靈極《ブースター》』

「ですか？」

エリーゼとティポの言葉に balan が頷く。

「それを使ってマナを注ぎ込んで、初めて精靈の化石に宿っている術が実体化する、それが源靈匣オリジンだ」

「術……」

ホームズは、そこでようやくエラリイが精靈術なんてものを知っていたのか分かった。

ここには、マナを注ぐエリーゼ・マクシア人がいる。

だから、精靈術なんてものを知っていたのだ。

「やれやれ……」

ホームズは、溜息を吐いた。

ホームズの考えにレイアも気付いたようだ。

素直に言えばいいものをワザとぼかして伝えたその性格に若干疲れた。

レイアは、隣で苦笑いをしている。

そんな二人に構わずアルヴェインが尋ねる。

「それで、黒匣ジンと何が違うんだ？」

「術の精度が雲泥の差。昔あった医療算譜法ジンテクスと同じくらいの精度が出るんだ」

「医療算譜法……！」

ミラは思わず自分の足を見る。

そんなミラに構わずバランは、続ける。

「算譜法ジンテクスじゃ、精霊を殺しちゃうしね」

バランの言葉にずっと考えていたジュードが思いつく。

「それって、つまり、源霊匣オリジンは、精霊を殺さないってことですか？」

「まあね、精霊の化石に込められているマナを使っているからね」

ミラは首を傾げる。

「しかし、妙だ。ヴォルトを制御するのにあんなに苦労したと言うのに、ここにいる者達は普通に源霊匣オリジンを使っているようだぞ」

「大精霊クラスは、別物だよ。どうやら、力が大きくなるほど成功率は下がっていくよ
うなんだ。ここの成功率は、まだ五分五分かな」

バランの言葉にレイアは、目を輝かせる。

「でも、それだけあれば」

「うん、源^{オリ}霊^{ジン}匣^{ジン}が黒匣^{ジン}の代わりになる日もくる」

「そうすれば、みんな黒匣^{ジン}を失わない！精霊もしにません!!」

エリーゼは、ティポと向かい合う。

「やりました！ティポがみんなの助けになりました！」

『僕^僕つてやつぱりすごい！』

アルヴィンは、目を丸くする。

「つてことは、エレンピオスにも自然が戻る日が来るかもしれないのか？」

「だろうな」

ミラが頷く。

ジュードは、感激のあまりバランスの手を持ってぶんぶん振り回す。

「ありがとう、バランスさん！この研究のおかげで僕たち……」

「ハハハ、何でそんなに喜んでいいのか知らないけどさ、俺達だけじゃないよ。君達が

この研究を守ってくれたんだよ」

「僕^僕たちが……」

「そう、君達が守ってくれなかったらこの研究は潰えていた。おかげで、ここの人達もまた社会に戻っていきける」

ジュードは、静かに頷く。

「源^{オリジン}霊匣の研究、もつと必要になるね」

そんなジュードとホームズが肩を組む。

「頼むよ、ジュード！」

「うん、任せて」

力強く言うジュードを見てミラは、優しく微笑む。

「目指す道が決まったな」

少しだけ混ぜられた寂しさにジュードは、眉をひそめる。

「また、その感じ……」

ホームズは、ジュードから離れると伸びをする。

「さてと……とりあえず……」

ホームズは、首を傾げる。

「あれ？何しに来たんだっけ」

ホームズは、今まで経緯をおさらいする。

「えーつと……エラリーさんに母さんの話を聞く……これは、無理だね。治療中だし、 balan さんを助けに行くのは、……もう助けたね、あれ？これから何しよう？」
思考の迷路に陥ってしまったホームズをほつといて、アルヴィンが balan に尋ねる。

「俺たちが落ちてた崖つてどこだ？」

「この研究所の先だよ。ここから出ればすぐだよ」

アルヴィンの質問に一行は、頷く。そして、ホームズは、ポンと手を叩いている。

「呑気なものだな……………」

「うるさいなあ、どうせ君だつて忘れてたくせに」

ホームズは、淡々と返す。

レイアは、足下にいる源^{オリジン}霊匣を見ながらジュードに話しかける。

「ねえ、源^{オリジン}霊匣のことを話せばガイアスだつて、分かってくれるんじゃないよ……………」

レイアの言葉にジュードは、首を横に振る。

「無理だよ。ガイアスも多分、あれがギリギリだつたんだよ」

「そんな！だつて、源^{オリジン}霊匣は……………」

「成功率は、五分五分だろう？」

ホームズは、ヨルと睨み合うことをやめてレイアにそう告げる。

「そうだよ、半分は成功するんだよ」

「半分しか成功していない」

ホームズは、そう告げる。

「ガイアスは、さつき言つたらう？可能性で民を生かすつもりはないって。ガイアスが来た今の時点で九割を超えてなきや認められないよ」

ホームズの言葉にレイアは、目を伏せる。

「まあ、おれは、その五割の可能性に賭けるけどねえ」

ホームズは、そう言つてジュードに視線を向ける。

「出来るんだろうねえ？」

「出来る出来ないじゃない、やるかやらないかだよ」

ジュードの言葉にホームズは、目を丸くし、そしてヨルは楽しそうに笑う。

「いいな。それでこそ、賭けたかいがあるつてもものだ」

ホームズも頷く。

そんな面々を見た後、ミラが組んでいた腕を解く。

「さて、とりあえず、私達が落ちていた場所へ向かうとしよう」

「了解！」

ホームズは、そう返事をした後、ポンと手を叩く。

「あ、そうだ、バランさん。入り口にまだ馬車がいたら……」

「ああ、君達が無事だったことを伝えておくよ」

バランの返事に頷くとヨルがホームズにニヤニヤしながら尋ねる。

「馬車で向かわなくていいのか？」

「屋根に乗るなんて一回やれば十分だよ」

ホームズは、吐き捨てるようにそう返す。

そんなやり取りを尻目に一行は、崖を目指して歩き出した。



ジュードが先を歩いている。

ローズは、ジュードの隣を歩きながら方向を確認している。

そんなジュードを見ながらレイアは、嬉しそうだ。

「嬉しそうですね、レイア」

エリーゼの言葉にレイアは、力強く頷く。

「そりゃあね、ジュードが諦めなかったおかげで源^{オリジン}霊匣の可能性に辿り着けたんだもん！なんか、もー、やったー！って感じ！」

「ジュードは、やる時はやる人です」

『僕は前からそう思ってたー』

「まるで、自分のことのように」

ミラは、優しく笑っている。

ローエンは、それを聞きながら頷く。

「気持ちちは、分かります。以前のジュードさんは、先頭を切って進むようなタイプでありませんでしたか」

ローエンは、そこで言葉を切る。

「今回は、見事に自分の意思を貫きました」

「うむ。人は変わるものだ」

アルヴィンは、肩をすくめる。

「そりゃあ、誰かさんの影響だろうさ」

「アルヴィンとホームズの影響ではないことは、確かだな」

「……………何さりげなくおれのこと話題にしてるの？」

ホームズの頬が引きつる。

「あれ？ 反面教師って言葉知らない？」

「ほっほっほ、自分で言っちゃいますか」

「おい、アルヴィン。さりげなくおれを反面の教師にしないで」

ホームズは、不満げだ。

「お前がまともな教師になれるわけないだろ、どうせロクでもない嘘をつくんだから」

ヨルの言葉にホームズがムツとする。

「失礼な！おれは基本嘘はつかない。本当の事を言わないだけだ！」

「反省しなよ……」

レイアは、呆れる。

しかし、そこに張り詰めた様子はない。

レイアは、笑みを浮かべる。

「みんなも嬉しそう」

「ですよね」

エリーゼも笑っている。

「あ、おれが反面教師なのは、決定なんですネ」

ホームズの発言に一行は頷く。

『『そりゃあね』』

「わー傷つく」

ホームズは、溜息を吐く。

エリーゼは、そんなホームズを見ながら、プレザと戦った時との事を思い出す。

あの時、ホームズならどうするかと考えていた。

「大丈夫ですよ、ホームズ。ホームズから貰うのは悪影響だけじゃ、ないですから」

エリーゼの言葉にホームズは、首を傾げる。

「悪影響もあるの?」

「あ、そこは、真似しないので大丈夫です」

「ああ、そう………」

ホームズは、そう言つて歩みを進める。

前を見ると二人が止まって待っていてくれた。

一行は二人に追いつく。

追いついた後、再び八人揃つて歩き出した。

「悪影響、ね」

「まだ、考えてたの?」

レイアの呆れた調子にホームズは、肩をすくめる。

「いや、まあ、さっきの会話でふと思つただけど、母さんの知り合いがみんな変なのは、母さんの悪影響なのかなあつて思つて」

ヨルは、欠伸をする。

「元々、変なのがあいつの周りに集まって更に変になつただけだ。ホームズの母は、変人収集器にして、変人製造器つてことだ」

「うわあ……我が母ながらやだなあ……」

ホームズは、露骨に嫌そうだ。

そして、先ほどから頭に引つかかっていたことを考える。

「そう言えば、母さんで思い出したけど、エラリーさん何でわざわざおれの前で、精霊術なんて言葉を使ったんだろう?」

普通にジンテクスと言えば良かったのにわざわざ、精霊術という言葉を使った。

その意図が分からないのだ。

「別に使う必要ないよね。うっかり口を滑らせる、にしちゃあ、おかしな言い方だったし」

「おかしな言い方?」

レイアとエリーゼが首を傾げている。

因みにローズは、この事を全く知らない。

その頃は、長身の女性から話を聞いていた。

ジュードは、頷く。

「うん。エラリーさん、こう言っただよ。『おお! 黒匣^{ジン}なしで精霊術をやるなんて、

お前たち何者だ?』って」

「確かに変だな。普通に黒匣^{ジン}なしでジンテクスをやるなんてと言えばいい。わざわざわざ、ジンテクスのところだけ精霊術に言い直す意味がわからないな」

アルヴェインの言葉にホームズは、頷く。

「だろう？なんであんな中途半端な言い間違えをしたんだろ？しかもワザとやったみたいだし……」

ホームズは、うーんと唸っている。

「きつと、ホームズさんを試していたんですよ」

ローエンが顎髭から手を離して答える。

ホームズは、わけが分からず首を傾げる。

「おれを？なんで？」

「断片的な話を聞く限り、ホームズさんのお母さん、ルイーズさんは大分破天荒な人だったようですね」

「大分オブラートに包んでるね。性格に大分難のある人だよ」

「ホームズも大分辛辣だよね」

ジュードは、あきれ顔だ。

ローエンは、それに構わず続ける。

「そして、理想を貫く人だった。より、正確にいうなら、『綺麗事』と言われて切つて捨てるような理想を貫き通そうとする、そんな人だったようです」

ローエンは、そう言って更に言葉が続ける。

「恐らく、エラリイさんにしろ、ルイズさんの親友にしろ、ホームズさんのお父さんにしろ、そんなルイズさんを尊敬していて憧れていたのでしょうか。性格はともかく」

「尊敬？憧れ？本当に？」

「ホームズさんは、人の気持ちに少し鈍いところがありますね……」

ローエンは、呆れている。

「悪意には、敏感だよ」

しれっと言うホームズにレイアがじとつとした目を向ける。

「よりダメじゃん」

「お前、母親にも言われただろ、『馬鹿まっしぐら』だぞ」

ヨルとレイアのコンビにホームズは、たじろぐ。

ローエンは、ため息吐く。

「でなければ、こんな悪戯を仕掛ける必要がないですよ」

そして、論ずように続ける。

「ルイズさんの息子、自分達の常識からかけ離れていてそれでいて、憧れの方の息子がどんな風に育ったのか、エラリイさんは、きつと確かめてみたくなつたんですよ。だから、ホームズさんを試した。あんな間違いをして、ホームズさんが気付くかどうか。もちろん、気付くと確信していたでしょうけどね」

ホームズは、ふむと頷く。

「つまり、母さんの息子にあつてテンションが上がつちやつたから、悪戯したつてこと？」

「そういうことです」

「ということは、知り合いというより、仲間と表現した方が近いつてことかい？」

「そうですね。きつと、仲間なんて言葉を使うのが照れくさかつたのかもしれないね」

ローエンの言葉にホームズは、頷いたあと少しだけ笑う。

「そつか……」

「ホームズ？」

ローズが不思議そうに首を傾げる。

「いやね、ジルニトラでさ、ビネガーだつて、その人がさ、母さんの事を散々に言つていたから、てつきりエレンピオスでは嫌われているのかと思つたけど、そんな人だけじゃなかつたんだね」

ホームズは、嬉しそうだ。

「味方がいた、仲間がいた、親友がいた、それだけでも嬉しいことだ」

「まあ、それ以上に敵もいただろうがな」

ヨルの言葉にホームズがニヤリと笑う。

「そうでなくちゃ、母さんじゃないさ」

そう言つてホームズは、指を立てる。

『万人に受けない信念なんだ。万人が敵になるのは当然だろう？』昔、母さんが酔つた拍子に故郷じゃ嫌われてるつて言つてたからその理由を聞いたんだ。そしたらこう答えた」

ホームズの言葉に一行は少し目を丸くしたあと笑う。

「なんか、本当に変わった人ですね」

エリーゼの言葉にホームズは、肩をすくめる。

「結局、母さんは何と戦つたんだらうねえ」

「それもそのうちわかるだらう」

ミラの言葉にホームズは、頷く。

エレンピオスを巡ればそれもきつとわかる。

ホームズは、目の前を指差す。

「さて、そんなことを話してる間に着いたよ」

ホームズが指差すその先には、マクスウェルが作り出した空間の穴があった。

だが、それはホームズ達が想像していたよりずっと小さかった。

「うーん……………」

ホームズが首を傾げる。

ローエンが顎髭を触る。

「大分不安定になつていますね」

『これじゃあ、戻るのは無理だねー!!』

ティポの言葉にヨルが首を振る。

「いや、戻るだけならどうにでもなる。ただし、リーゼ・マクシアからこちらに来ることとは不可能に近いな」

ヨルの回答に一行は押し黙る。

「とりあえず、バランさんのところに一旦戻ろうよ」

レイアの提案に一行が同意しようとした時、

「待つて、みんな」

ジュードがそれを止める。

「リーゼ・マクシアに帰るつもりなら僕たちここで別れたほうがいいと思うんだ」
ホームズが目を細める。

「別れたら、戻れないよ」

「それでもだよ」

ジュードは、そう言って言葉を続ける。

「みんな、源^{オリジン}霊匣を使役できて嬉しかった。でも、もうガイアスは戦うしか止めることができないと思うんだ」

ジュードは、立ち止まって聞いている面々を見回す。

「だから、一時の感情に任せて本当の気持ちを誤魔化さないで欲しいんだ」

ジュードの言葉にミラが頷く。

「私も同感だ。気持ちに誤魔化すような戦いなら意味はない」

「己のことは己で決める、ですね」

ローエンの言葉にアルヴィンが頷く。

「そりゃあ、そうだ。でなきゃ、マクスウェルにミラを認めさせたのも嘘になっちゃう」

う

ホームズも頷く。

「その時点で誤魔化してるようなものだものね」

「自分を誤魔化せばそれだけで勝てない」

ヨルの言葉にローズとレイア、エリーゼは俯く。

「もう少しだけ考えさせて、ジュード達が出発するまででいいの」

「うん、わかった」

ホームズが首を傾げる。

「出発って、ガイアスの行く先分かるのかい？」

「きつと、また研究所を襲撃すると思うんだ」

「なるほど、ありえるねえ……」

ホームズはポンチョを翻す。

「さて、それじゃあとりあえず街に戻るとしようよ。ここで考えても答えなんか出ないよ」

「そうだね」

ホームズに促されるようにして一行は、その場をあとにした。

「一時の感情に流されるな、か……」

ミラは、手をぎゅっと握りしめる。

「今の私、まるで人間じゃないか……」

「ミラ？」

ジュードがミラに駆け寄る。

「済まない、直ぐに行く」

そう言っつてミラは歩き出した。

その時、かちやりという音がして精霊の化石が外れた。

ミラは、それに気付かず歩き続けている。

ジュードは、驚いてミラを見る。

「ミラ、まさか……」

ジュードは、ぐっと言葉を飲み込んで精霊の化石をポケットにしまいこんだ。

決戦前夜

「ふう、やれやれ……」

街に戻つてくると辺りはすっかり暗くなっていた。

そこで、一行は、一旦解散となり皆、好きなように街の好きな場所に移動していた。

そんな中、ホームズはマンシヨンの屋上にいた。

高いところにいる訳だからみんなの様子が見えるかと思っていたがどうもみんなは死角に入っているらしく見えない。

そんな訳でホームズは屋上で星空を眺めていた。

眺めていたのだが、

「よりよつて満月とはね、あんまり星が見えないや」

ホームズは、そう言つて夜空を見上げる。

月明かりに隠れて星々も僅かにしか見えない。

「星空が見えないと君は不満だろう？」

「それでもない。俺は、夜空を見上げるのが好きだ」

ヨルは、そう言つて伸びをするとそのまま子猫からいつもの姿に戻った。

「お、戻ったね」

「とは言っても姿を戻すので精一杯だ。生首状態にはなれない」

ヨルは、そう言つてホームズを見る。

「それで、お前は何やつているんだ？」

ホームズは、持ち運びサイズのコンロに火を付けてその上に小さな鍋を乗せている。

「んー、夜食作り？」

「状態異常にするつもりか」

「どういう意味だい」

そう言いながら、鍋に牛乳を注ぐ。

ホームズは、それを焦げ付かないように混ぜる。

「ホットミルクか。なるほど、それならお前も失敗しないな」

「色々突っ込みみたいけど、まあ、スルーしとくよ」

「どこで、そんなもの手に入れたんだ？」

「外でホットミルクを飲みたいって言ったら、 balan さんが貸してくれた」

ホームズは、少し湯気立ったのを見計らうと、二つのマグカップに注いでいく。

「凄いいね。これ、黒匣ジンを使わずに火を起こせるんだって」

ホームズは注ぎ終わったカップを見て少しだけ考える。

「君も飲むかい、ローズ？」

ホームズは、ホットミルクから目を逸らさず尋ねる。

静かに近づいたローズは、少しだけ微笑んで頷く。

「ええ。もちろかわ」

ホームズは、その返事を聞くとマグカップをもう一つ取り出してホットミルクを注いで、ローズに渡した。

「熱いから、気を付けて」

「ありがとう」

ローズは、そうお礼を言っ受けて取った。

ヨルは、尻尾を使って器用にマグカップを掴むとそのままこぼさないように器用に歩き出す。

「ヨル？」

「寝る。少しでも回復しとくに限るからな」

「そう」

ホームズは、そう返して自分の分のホットミルクを手に取る。

ヨルは、そのまま物陰に消えた。

「隣いい？」

「コンロあるから、気を付けてね」

ホームズは、そう言いながら、懐から蜂蜜とスプーンを取り出す。

蜂蜜のビンのフタを開けるとスプーンで蜂蜜を一杯すくって、ホットミルクに入れる。

「ローズもいる？」

「いいわ。私は、ホットミルクには何も入れないの」

「そう」

ホームズは、そう言って蜂蜜をすくってスプーンをホットミルクに入れて混ぜる。

ある程度混ぜたあと、牛乳のついた蜂蜜付きスプーンを口に運ぶ。

「どうするんだい、ローズ」

ホームズの質問にローズは、マグカップを両手で握る。

「理由が、あるにしろ、君は、エレンピオス人に家族を殺されている。筋から行けばガ

イアス王に着くのが、正しいと思うけど？」

湯気の立つコップを見つめる。

「……………私が、剣を持った理由は知ってる？」

「おおよそは。おれの為ではないにしろ、おれがきっかけだってミラから聞いてる」
ローズは、頷いて牛乳に口をつける。

「私が、いじめられないように貴方が大嘘ついたこと覚えてる？」

「勿論」

ホームズは、そう返しながらホットミルクに口をつける。

その話を持ち出すと最後の別れまで一緒に思い出すのでどうしても恥ずかしいのだ。
だが、ローズはそれに構わず続ける。

「あの時、本当に悔しかったの。庇ってもらうほど私が弱かったから、ホームズにあんな最悪な手を打たせてしまったんだもの」

ホームズは、黙って聞いている。

「だからね、私は、決めたの。もう二度と自分が弱いばかりに、自分の傷を誰かに押し付けることがないようにしようって」

ホットミルクに口をつけながらホームズは、耳を傾ける。

「そう思って、剣をとった。強くなればそんなことはなくなるって」

ホームズは、蜂蜜の入った甘いホットミルクを飲み進める。

「私が憎いのは、アルクノアよ」

ローズは、ホットミルクを飲む。

「家族を奪われた悔しさも悲しさも、与えたのは、エレンピオス人じゃない、アルクノアよ。だから、エレンピオス人を憎むのは、筋違いよ」

ローズの言葉にホームズは、ふふふと笑う。

「見やすい現実とは、見ないのかい？」

ローズは、首を振る。

「それは、弱い考えよ。言ったでしょう、私はもう自分が弱いばかりに自分の傷を押し付けるような事はしたくないの」

ローズを選んだのは、見やすい現実ではなく、見やすい現実で霞んでしまった真実だ。

「だから、黒匣ジッを滅ぼそうとするガイアスと敵対するってことかい？」

ホームズの質問にローズは頷く。

「感情で選んじやってまあ、ジュードの忠告は無視かい？」

ローズは、胸を張る。

「違うわ。だって、これを選ばなかったら私は、一生後悔する。

だから、一時の感情じゃないわ。一生分の感情よ」

ホームズは、とても優しく笑う。

「かつこいいね、ローズ」

そんなホームズの顔を見てローズは、一瞬間を赤くするが直ぐにコホンと咳払いをして尋ねる。

「やっぱりホームズは、故郷を守るために戦うの?」

「んー……………」

ホームズは、そう言ってホットミルクに蜂蜜を追加する。

「アルヴィンと違っておれは、リーゼ・マクシアが故郷だから、リーゼ・マクシアに滅んでほしくないんだ」

「ん?それじゃあ……………」

「そう、ガイアスに着いた方が選択としては正しいんだよ」

でもね、とホームズは続ける。

「見たいんだ、エレンピオスを」

ホームズは、マグカップから立ち上る湯気を見ている。

「両親の故郷つてのは、勿論ある。あの人達がどう育って来たのか、その場所を見たいと思うし探したいと思う。でも、それだけじゃない」

ホームズは、そこで言葉を区切ると目の前に広がるエレンピオスの夜景を見る。

リーゼ・マクシアとは、また違った景色で、そして、リーゼ・マクシアでは見られない景色だ。

「未知のものは、何よりも心を躍らせる。今のおれにとってのエレンピオスは、まさにそれだ」

ホームズは、嬉しそうに語る。

「両親の故郷を見る、それを目的に立ち上がった。でも、おれの本質は、ずっと昔からそこだった」

ホームズは、ヨルと取引したことを思い出す。

「ずっと、気づかなかったんだけどね」

「そっか……………」

ローズは、そう言って微笑む。

「貴方の原動力だものね」

そこで沈黙が降りる。

マグカップから伝わる、温もりに癒されるようなそんな優しく心地のいい沈黙だ。

しかし、それをホームズが打ち破る。

「ねえ、一つ酷い事を聞いていいかい？」

「何？」

「おれの碧い瞳って綺麗だった？」

余りにも残酷な質問だ。

だが、ローズは答えなくてはならない。

それが、彼女の義務だ。

ローズは、口に運ぼうとしていたホットミルクを下ろす。

それから静かに頷く。

「ええ。とても綺麗だったわ」

「そっか……………」

ホームズは、答えを聞くと暫く頭に手を当てるが、瞳閉じて頭を横に振る。

「やつぱりダメだねえ。人から聞けば思い出すと思っただけど」

ヨルとの取引は、碧い瞳に関する記憶だ。

そして、それを人から聞かされたところで自覚することはない。

己の記憶にない体験など、ただの創作物と変わりないのだ。

「謝つても謝りきれものじゃないわよね……」

マールウから、学んだ剣を自分の弱さを押し付けるために振るってしまった果ての姿だ。

ホームズの顔を見ることが出来ない。

「まあ、全部が君のせいってわけじゃないけどねえ」

ホームズは、そう言いつつ夜空を見上げる。

「戦闘では、感情につけ込むことをよくやるから、それを応用すれば、上手くいくと思つたんだ」

ホームズは、マグカップに残った牛乳を見つめる。

「君の感情を利用すれば、君が傷付かずに済むと思つた。でも、君は、いつだつておれの想像を超えてきた、悪い意味でも、良い意味でも」

残ったホットミルクを飲み干すとホームズは、鍋にもう一度火をかける。

「きつと、感情つてのは、そんなものなんだろうねえ。人の予想や推測を軽々と超えてくる」

感情を扱える、傲慢にもそう思つてしまつたが故にホームズは、光を失い、そして、思ひ出を失つた。

「ホームズ……」

辛そうなローズには、目もくれず、ホームズは、ローズのカップにホットミルクを注ぐ。

ローズは、お礼を言つて口をつける。

ホームズは、そんなローズをチラリと見ると口を開く。

「償いのために命なんか賭けないでよ」

ホームズの言葉にローズは、顔を上げる。

ローズは、何も言わないが顔を見れば何を考えていたか丸わかりだ。

ホームズは、溜息をつく。

「やっぱりそんなこと考えてたんだねえ。良かった、先に釘刺しといて」

「だって……………」

「だってじゃない」

ホームズは、ピシヤリと言ひ放つ。

ほいほい命を賭ける自分のことは棚に上げて。

「でも、ホームズは私を助けようとして崖から飛び降りたわよね？」

「おれはいいんだよ。君はダメだ」

暴論そのままの発言にローズは、言葉が出ない。

「償いたいなら、相手の嫌がることやっちゃあダメだろう？」

自分の立場を理解した上でそれを利用した発言にローズは、溜息をつく。

「貴方って人は……………」

卑怯だが、それを糾弾する資格はローズにはない。

ローズは、残ったホットミルクを飲み干す。

「おわかりいるかい？」

「いいわ。そろそろ寝ないと明日に響きそうだし」

「そうかい」

「貴方は寝ないの？」

「うーん……………もう少し。月が綺麗だからね、もう少し見ていたい」

「そう。それじゃあ、おやすみ。ミルクごちそうさま」

ローズは、立ち上がって屋上の扉に向かって歩いていく。

ローズは、屋上の扉に手をかけると思い出したようにホームズの方を振り返る。

「ホームズ。マーロウさんの煙管貰える？」

ホームズは、嬉しそうに笑って頷くと煙管をローズに向かって投げる。

ローズは、それを受け取る。

「ありがとう」

「死なないでね。死んだりしたら、殺すから」

ホームズは、煙管と一緒にそんな言葉を投げかける。

ローズは、優しく笑う。

「肝に銘じておくわ」

そう言うのと今度こそ、屋上を後にした。



「おや、ヨル？起きてたのかい？」

ローズと入れ替わりにヨルが屋上にやってきた。

その能天気な言葉にヨルは、露骨に嫌そうな顔をする。

「気を利かせたんだがな、俺にしては珍しく」

「自分で言うんだ」

ホームズは、引きつり笑いを浮かべる。

ヨルは、空になったカップを渡す。
ホームズは、ホットミルクを注ぐ。

「聞き耳を立てていたんだが」

「どの辺に気を使っていたんだい？」

早速先程のことをぶつ壊す発言をするヨルにホームズは、半眼で返す。

しかし、ヨルはそれに構わず続ける。

「お前、小ムスメに慰めの言葉一つかけなかったな」

ホームズは、首をかしげる。自覚がないようだ。

「全部が小ムスメのせいじゃない、と言ったが、それは裏を返せば一部は小ムスメのせいということだろ？」

「まあ、潰したのは事実だしね」

「そういうところなんだろうな」

ヨルは、そうやってホットミルクを受け取る。

「お前は、そうやって慰めない。弱っているのにな」

「そう？ レイアを慰めた気がしなくもないけど？」

「あんな事実が慰めに入るものか」

ヨルは、そうやってホットミルクを尻尾で器用に飲む。

「ま、そんなんだから、お前はモテないんだらうな」

「喧嘩売ってる？」

ヨルは、首を横に振る。

「いいや。評価している」

そう言つてヨルは、言葉が続ける。

「それでもお前は、側にしようとする。それに気付いた奴は、お前の事を大切にしようとするんだらうな。マープルみたいに」

マープルの言葉にホームズは、少しだけ悲しそうに笑う。

「生きていけば、ちやうどエリーゼぐらいだよねえ……」

ヨルは、湯気が立ち上るカップを見る。

「きつと更に手をつけられない奴になっていただらうな」

「だらうねえ」

ホームズは、面白そうに笑う。

それから、指輪を見る。

「姉さんが死んで、母さんが死んで、マールロウさんが死んで、こんなに辛いことはないと思つた、立ち上がれないと思つた」

ホームズは、ぎゅつと胸の前で拳を握り締める。

「でも、立ち上がった。辛い事を思い出して歩き始めた」

「それが、人間の強さだろ」

「前にも言われたね。でもさ、それはとても寂しい、ううん。残酷な事だよ。大切な人たちを過去にして自分は、歩き出しちゃうんだもの」

ヨルは、ホットミルクに口をつける。

「それは、仕方のない事だ。死んでいった人間はそこで止まってしまふんだからな」
そう言つて言葉を続ける。

「逆に生きている奴らは進み続けなくてはならない。寂しかろうが、残酷だろうが、それが生きるという事だ」

ヨルの言葉にホームズは、笑みを浮かべる。

「本当に生きるつてのは、難しいねえ」

ホームズは、そう言つてホットミルクを全て飲む。

「最後に聞いていいかい？」

「なんだ？」

「昔、魔物から街を救つてくれと君に願つただらう？」

「それが、俺の封印を解く願いだったな」

ヨルの封印は、誰かの願いを叶える事で解けたのだ。

自分をいじめていた連中の村を助けてほしいと言った時、ヨルは露骨に嫌そうな顔をしたのだ。

聖人君子にでもなるつもりかと、言われたのだ。

それをホームズは、否定した。

「あの時、おれ、なんて言っただい？君が大笑いした事は覚えてるんだけど、何を言っただから覚えていないんだ」

ヨルは、楽しそうに笑うとゆつくり口を開く。

『彼らは確かにやな奴らだよ。だからこそ、奴らが殺されてもザマミ口程度の感情しか抱けない。』

でも、それは絶対にヤダ。

自分にそんなドス黒い感情があるなんて自覚したくない！認めたくない！

だからこそ君に頼むんだ。そんな気持ちを僕が自覚しなくて済むように彼らを助けておくれ……ううん、助ける！化け物!!』

ホームズは、目を丸くする。

「ぷっー」

そして、ゲラゲラと笑いだした。

ヨルも同じように大笑いする。

ひとしきり大笑いするとホームズは、目元を拭う。

笑い過ぎて涙が出てきたようだ。

「自己中な良い子ちゃんだねえ」

「あの頃の方がだいぶ人間らしかったがな」

ヨルの言葉にホームズは、コップの水分をきる。

「みんなに言われるね。おれも正しい事ではないんだなって、最近自覚してきた」

ホームズは、そう言うと言葉を続ける。

「でも今更変えられないよ。折り合いつけるのがいいところさ」

「……………その生き方を変えれば全く違う人生を歩めるかもしれないのか？」

「だからだよ。おれは、この人生を気に入ってる。別れた人も多いけど、出会えた人も

いる」

それにと言葉を続ける。

「どんな生き方を選んだところで、結局、辛い目にあう。辛い目に会うたびに、この生き方は間違っていた。だから、やめようなんて繰り返してたらキリがない」

ホームズは、夜空を見上げる。

「失敗は参考に、それでも生き方を曲げない。それがおれなりの信念だよ」

ヨルは、ため息吐く。

「全く、これからも苦勞しそうだな……」

「よろしくね」

ヨルは、尻尾をゆらゆらと揺らして返事に変える。

「さて、そろそろおれは、戻りたいんだけど？」

「俺も直ぐに行く」

ヨルは、立ち上がったホームズにコップを投げてよこす。

コップを投げたヨルを一睨みすると屋上を後にした。

ヨルは夜空を見上げる。

『しっかりね!』

ルイーズのそんな声が聞こえた気がしてヨルは、ニヤリと笑う。

「ああ。お前は、そこで見てろよ」

ヨルは、
そう言う
と屋上を
後にした。

盆に戻る覆水

「みんな、眠れた？」

翌朝、一行が起きて外に出るとジュードが開口一番に尋ねた。

ホームズは、OKサインを出す。

アルヴェインも頷く。

「こんなにぐっすり寝たのは初めてかもってくらい眠れたよ」

アルヴェインの隣にいるホームズの肩にはいつもの姿のヨルがいた。

「ヨルも戻ったみたいだね」

「おかげさまで。生首になるには、もう少し時間があるがな」

ヨルは、そう言つて欠伸を一つする。

レイアが一步前に入る。

「ジュード、ミラ、わたし一緒に行くよ。ああつと、理由は、いちいち言わないからね」

最後は、少し照れながらレイアが言うのとエリーゼも頷く。

「私も行きます」

『もちろん。ぼくもねー！』

ティポがふよふよ浮かんでいる。

「私もご一緒しますよ」

ローエンは、柔らかく微笑む。

「唯一のエレンピオス出身者としては、傍観決め込む訳にはいかないってね」
アルヴィンは、手袋をはめ直しながらそう答える。

「私も行くわ」

ローズは、マールウの煙管を咥えて胸を張る。

皆がホームズの方を向く。

「行くに決まってるだろう?」

「ヨルは?」

ジュードの問いにヨルは、尻尾を揺らす。

「ホームズから離れられない俺に選択権は、ない」

ヨルは、そう答えてからジュードを見据える。

「だが、俺も行くぞ」

だからとは言わない。

だかと言う。

制約でついて行くのではない。

ヨルの意思でこの道を選んだ。

「いいんだな」

一行の意思を確認するとジュードとミラが頷きあう。

「それなら、話しておいたほうがいいよね」

ジュードが一振りの短刀を見せた。

刃の部分が仄かに青い。

「なんだいこれ？」

ホームズが首をかしげるとヨルがヒゲをピクリと動かす。

「次元刀と同じものを感じるが？」

「察しがいいな」

ミラが頷く。

「昨晚、ガイアスが持つて来た。ミュゼの力の一部だそうだ」

エリーゼが、首をかしげる。

「つまり、これで裂け目を開けられるんですか？」

「そうみたい」

わざわざ自分のところへの鍵を渡しに来たガイアスにローエンはあごひげを触る。

「全く、計り知れない方ですね」

「俺達をナメてんだよ」

アルヴィンは、つまらなそうに吐きすてる。

するとレイアがムツとした顔をしてアルヴィンに食ってかかる。

「そんなことない！あれで、ガイアス結構いい人だもん!!」

アルヴィンは、目を丸くする。

「口、聞いてくれるのか？」

アルヴィンの言葉にずっと冷戦状態だったのを思い出したレイアは、気恥ずかしそうに目をそらす。

「あ、えつと……」

「嬉しいよ、レイア」

「どう………いたしまして」

ホームズは、そんな二人を満足そうに見ている。

レイアの視界に満足そうな顔をするホームズが入り、思わず突っ込みそうになるがぐつと堪える。

「まあ、きつとガイアスなりの礼儀なんだろうねえ。これは、いわゆる挑戦状ってわけだ」

ホームズの言葉に一行は、ジュードの手に収まる次元刀の一部を見る。

一行の心は、決まった。

あとは、出発するだけだ。

『でもさー、誰の見送りもないのが、寂しいねー』

ティポの言葉にジュードは、ふふつと笑う。

「別にいいんじゃないの?」

「ああ、私たちがらしいと言えば私たちがらしい」

「友達少ないからねえ……」

「ホームズにだけは言われたくないなー」

だが、まあ否定出来ないのが悲しいところだ。

ジュード、エリーゼ、アルヴィンは苦笑いしている。

レイアは、パンと手を叩く。

「さ。それじゃあ、ジュード出発前の掛け声よろしく」

「お、いいねえ」

「なんやかんやで掛け声なんてやったことなかったな、そう言えば」

同意するホームズとヨル。

「外すなよ」

とミラ。

「よろしくお願いします」

エリーゼも続く。

「頼むぜ」

アルヴィンがいつもの軽い調子で言う。

「さあ、大きな声で」

「気合い入れてね」

ローエンとローズの言葉にジュードは、頷くと拳を握る。

「それじゃあ……」

そう言って拳を突き上げる。

「みんな、絶対にやり遂げよう!!」

『『おお!!』』

一行は、拳を突き合わせた。

気合いを入れた一行は、そのままエレンピオスとリーゼ・マクシアを繋ぐ裂け目の丘へと歩き出した。



「ローズ、それって？」

道すがらレイアがローズが啜えている煙管を指差す。

ローズは、決まり悪そうな顔をする。

「ああこれ？ 恥ずかしい話、ようやく整理がついたからホームズから譲り受けたのよ」
あの時、ホームズが手渡そうとした時、ローズはマーロウの死を受け入れられず拒んだ。

昨晚、ようやくホームズからそれを受け取ることができたのだ。

「そっか、よかったね」

レイアが嬉しそうに笑うとローズは、少しだけ目をそらす。

「その、さ、レイア。ごめんなさい。貴方には、随分迷惑かけたわ」

「ローズがつて言うより、ローズのために動いていたホームズがつて感じただけだね」
レイアは、苦笑いをする。

まあ、確かに気苦労はかなりのものだった。

ホームズの秘密を知ってからは、特に。

全ての事情を知っているレイアは、何度もやり切れない思いをした。

「まあ、これでいつもの二人に戻ってくれと嬉しいよ」

「そうね。そうなるといいわね」

ローズがにっこりと微笑むとミラがじーつとこちらを見る。

「な、何？」

「いや、その煙管、確かホームズが散々啜えていたなと思ってな」

「それって……」

『わぁーお、間接キスー？』

「ぶっ!!」

エリーゼとテイポの追撃に思わずローズは、吹き出した。

吹き出された煙管は、前を歩いていたホームズの頭に当たる。

煙管は地面に落ちる前にヨルが、尻尾でキャッチする。

「何してるんだい、君たち？」

ホームズは、露骨に呆れた顔をしている。

『その煙管ってホームズ使ってたんでしょー？』

「まあね」

『今、ローズが使ってるんだよー!』

「ティポ!!」

ローズが慌ててティポに掴みかかる。

ホームズは、そんな様子を見ながら首をかしげる。

すると、アルヴィンとローエンが面白そうな顔をして、ホームズの後ろに立つ。

「ほほう?それは、アレだなローエン」

「ええ、全く。甘酸っぱいですね。私にもそんな思い出がありますね」

「二人とも……………」

完全に面白がっている二人にジュードがため息をつく。

「?」

首をなおもかしげるホームズにヨルが止めの一言を告げる。

「間接キスだな」

ヨルは、煙管を尻尾で弄びながら言うのとローズの顔は遂に真っ赤になってしまった。

「ん?ああ、そうだね。おれとはそうだし、マーロウさんともだね」

ホームズの言葉に場が凍りついた。

「いや、だって、それ、元々はマーロウさんのだよ」

そして、よせばいいのに更に続ける。

「というか、何回か言ってるけど、君別れ際に直接やってるだろう？今更、間接ごときで何言ってるんだい？」

氷点下を超えて絶対零度となった。

ローズは、無言でヨルから煙管を受け取るとホームズにあの一言を告げる。

「貴方は、そんなんだからモテないのよ」

そう言つてスタスタと歩き出した。

ホームズは、呆然とその姿を見送りながらアルヴィンに尋ねる。

「アルヴィン、おれ何か間違つた事言つた？」

アルヴィンは首を横に振る。

「いいや。でも、お前が悪い」

「ええ………」

「アルヴィンさんのほうが正しいですよ」

「もう少し、言葉選ぼうよ、ホームズ」

ローエンとジュードからそつと言われる。

巻き込まれる前にさつさとレイアの方に逃げたヨルが、欠伸をする。

「な？馬鹿一直線だろ？」

「ホームズって、本当、デリカシーないですね」

『さいあくー!!』

レイアは、先ほど言った言葉を早速後悔していた。

「いつもの二人に戻られても困るかもなあ……」

ハア、とレイアの大きなため息が響いた。

サブイベント！

急いでは事を仕損ずる

「お、ついたついた」

ホームズは、呑気な声を出す。

例の丘にたどり着くと空間に空けられた穴は、少しだけ小さくなっていた。

「ジュード、頼む」

ミラの言葉にジュードは頷いて次元刀を取り出し切る。

すると、見覚えのある裂け目が現れた。

アルヴィンは、それを見て考え込む。

「アルヴィン？」

ホームズが首を傾げる。

「俺達、このままでガイアスとミュゼに勝てるのか、って思ってたね」

「弱腰でどうする？」

アルヴィンの発言にミラが言うどレイアとエリーゼが頷く。

「たぶん、アルヴィンが言いたいのは、そういうことじゃないよ」

アルヴェインが頷く。

「リーゼ・マクシアに戻ってやれることがあるんじゃないの？」

『リーゼ・マクシアに戻れるのー!?!』

ティポが声を上げる。

ミラは、考え込む。

「ふむ……世ノ精途ウルスカーラを通じてリーゼ・マクシアに行くことは可能だろうな」

ローエンは、厳しい面持で頷く。

「そうですね。我々は、誰の助けも期待できません」

「準備は、万全にといいわけか」

「ちゃんと、考えようぜ。俺達しかないんだ」

「そうだね」

レイアは、伸びをしながら答える。

「アルヴェイン、立派になって……おれは嬉しいよ」

「否定する気はないけど、お前にだけは、言われたくないな……」

嘘泣きをするホームズを半眼で睨むアルヴェイン。

ホームズは、嘘泣きはほどほどに懐ろから鍵を取り出す。

「それは？」

「マールロウさんに渡されたんだ。マールロウさんの家に行けば使う場所が分かるみたいだけど……」

「マールロウさん」の言葉にローズは、少し俯くが直ぐに頷く。

「行つてみる価値はあると思うわ」

ジュードは、頷く。

「じゃあ、とりあえず、シヤン・ドウを直指そうか？」

ジュードの提案に一行は、同意した。

そして、問題になるのがこの穴だ。

「わたし、一番」

レイアは、そういうが早いか軽やかに飛んで穴に飛び込んだ。

さらつとやってのけたレイアにホームズは、開いた口がふさがらない。

「確か、前回は、貴方とヨルが醜い争い繰り広げて一番最初に入ったわよね」

ほぼ、落下だった。

「なんだい、そのまるでレイアがすごいみたいない草は!!」

「お前らがダメだという話だろ」

「ミラ………」

ど直球の言葉のデッドボールにホームズは、膝をつく。

「エリーゼ」

そんなホームズに構わずアルヴィンは、エリーゼを呼ぶ。

エリーゼは、素直にアルヴィンの隣に立つとそのままアルヴィンの腰に抱きついた。

アルヴィンは、それを軽く支えるとそのまま穴に飛び込んだ。

「……………あの子達、いつの間に仲良くなったんだい？」

「お前が気付かない間だろ」

ホームズは、肩をすくめる。

「さて、虎穴入らずんば虎兇を得ずってね」

「虎穴の方が幾分もマシだがな」

「一言多い!!」

そう言つてヨルを肩に乗せて次元の穴に飛び込んだ。

ローズが残り、無言で穴を見つめる。

(……………今の流れで、ローズと飛び込まないんだ)

「言いたいことがあるなら、口にしたほうがいいわよ、ジュード」

ローズの冷え切った声がジュードの背後から響く。

ジュードは、ビクツと体を震わせる。

ローズは、刀を見ると気合をいれる。

「よし！」

掛け声もそこそこにローズは、飛び込んだ。

「いずれにせよ、行き先は、一つ。なるようになりますか」

ローエンも年齢を感じさせない軽やかな動きで穴に飛び込んだ。

ジュードは、それを見て苦笑いを浮かべる。

「なんだか、僕たち前よりバラバラじゃない？」

「いいじゃないか、別に」

「そっか」

ジュードとミラはどちらともなく笑う。

「それじゃあ、いくよ」

「ああ」

二人は、同時に穴に飛び込んだ。



「来たね、二人とも」

ホームズは、やって来たミラとジュードにひらひらと手を振る。

「あれ？こんなところだっけ？」

以前に来た時とは、様子を変えた世ウルスカラノ精途にジュードは、首を傾げる。

「どうやら、前回とは違う場所に出ちまったようだぜ」

アルヴィンは、腕を組みながらそう答える。

「恐らく、ミュゼの力でこの世界を作り変えているのだろう」

「……なんでもありだねえ」

ホームズは、溜息をつく。

「ところで、レイアは？」

「あー……………」

先ほどから確認するがレイアの姿だけが見えないのだ。

ジュードの質問にホームズは、目を反らす。

すると、レイアが走って戻ってきた。

「レイア、どこ行ってたの？」

ジュードの質問にレイアは、自分の来た方向を指差す。

「あっちの方に似たような裂け目があったよ。なんか、リーゼ・マクシアに繋がってるみたい」

「まさか、入ったの!?!」

「うん」

ジュードは、痛む頭を抱える。

ヨルは、欠伸を一つする。

「とりあえず、その穴に入るってもんだろ」

「そうだね」

一行は、その穴を目指して歩き出した。

レイアに案内されながら穴を通るとミラの社に出た。

「おつどろきー!!」

ホームズがすつとんきような声を上げる。

ジュードたちも後から出てくる。

「本当に戻ってきちゃった……」

半信半疑といった気持ちで滲み出ている。

ホームズは、考え込む。

「さて、とりあえず、シャン・ドウを目指すかい？」

「気軽に言うな、阿呆。何日かかるか分からんぞ」

「阿呆は、君だ。今、おれ達の手元には、次元刀の欠片があるんだよ」
ヨルの言葉をびしやりと遮ると、ジュードの方を向く。

「それじゃあジュード、もう一回よろしく」

ジュードは、頷いて小刀の次元刀を振るう。

空を切り裂き同じ切れ目を作り出した。

「なんか、直ぐに閉じそうだし早くした方がいいかも」

ジュードの言葉に一行は、次元の裂け目に飛び込んだ。

二度目の裂け目を超えた先は、シャン・ドウだった。

突然現れた一行を道を行く人々は、怪訝そうな顔でこちらを見ている。

ホームズは、それを気にする様子も見せずに頷く。

「よし、それじゃあ先ずはマールロウさんの家に……」

「悪い。その前に俺の家行つていいか？」

ホームズの言葉を遮つてアルヴィンが言う。

ホームズの脳裏にあの教会の夜の出来事が蘇る。

あの時、ホームズは、アルヴィンから聞いた。

アルヴィンの母親は、亡くなっている。

「……………いいよ。何かと人手がいるだろう？おれも行くよ」
遺品の整理をするのに一人は辛い。

精神的にも物理的にも。

「人手？…なんで？」

レイアが首を傾げる。

レイア達は知らないのだ。

アルヴィンは、気まずそうに頭をかく。

「あー……………ホームズの次いでだ。みんなにも来てもらっていいか」

「……………いいけど」

その少しだけ悲しそうな言い方に一行は、頷くしかなかった。

住めば居場所

「……………」

アルヴェインは、自分の家を無言で見上げていた。

「アルヴェイン」

ホームズと呼びかけにアルヴェインは、首を横に振る。

「いつまでもこうしても仕方ないよな」

アルヴェインは、そう言うのと扉に手をかけようとする。

「アル……………」

聞き覚えのある声にホームズ達は振り返る。

そこには、イスラが驚いた顔をして立ちすくんでいた。

ローズの顔がキュツと強張る。

「よう、イスラ。手紙届いたよ」

アルヴェインは、そこで言葉を切ると目を伏せる。

「母さん、死んだんだってな」

その言葉に事情を知らない一行は、目を丸くする。

「……………」

俯くイスラに構わずアルヴィンは、扉に手をかけて、家に入る。家の前で立ちすくんでいるイスラにホームズが声を掛ける。

「君も来たまえ。遺族に最後を伝えるのも君の役目だろう？」
静かだが有無を言わさないホームズにイスラは黙って従った。



「もう、埋葬しちまったか……………」

もぬけの殻となったベッドを見ながらアルヴィンがポツリと呟く。

「…………仕方ないだろう。死体ってのは腐ってしまうんだから」

「ホームズ……………」

ホームズのその淡々とした言葉にエリーゼの声漏れる。

ホームズは、小袋を触って自分の気持ち切り替える。

今は、ホームズが感傷に浸る時ではない。

もぬけの殻となったベッドに胃が締め付けられるような思いをしようと、それは今優先すべき感情ではない。

「ごめんなさい。私が来た時には、もう息を引き取っていて……………」

俯くイスラにホームズは、一瞥をくれると布団を見る。

「……………慣れないな、この光景は」

ヨルがポツリと言う。

それにホームズは、寂しそうに笑って返す。

「母さん……………馬鹿だな……………」

「アルヴィン……………」

アルヴィンを慮るようにジュードが声をかける。

するとアルヴィンは、やりきりないという顔で笑ってみせる。

「大丈夫だよ。むしろ、こうなってホツとしている自分がいる……………なんて言ったら、優等生は怒るか」

アルヴィンの言葉にジュードは、俯くことしかできない。

医学生であるジュードは、否定しなければならぬところだ。だが、それを否定する資格はジュードにはない。

アルヴィンの苦勞も辛さも断片的では、あるが触れているのだから。

「人の一人の人生は、重い。それを母の分まで背負っていたのなら、それは仕方のないことだ」

「まさか、おたくに慰められる時が来るとはねー」

穏やかに言ったイスラに視線を向ける。

「そーゆーわけだから、正直に答えてくれよ、イスラ先生」

アルヴィンの有無を言わせない迫力にイスラは、たじろぐ。

「なんのこと？ 死因は、急な発作で……………」

「嘘だろ。母さん気付いてぜ。お前が食事に毒薬を混ぜてることを」

アルヴィンの言葉に一行は、目を丸くする。

「毒って……………」

エリーゼが息を飲む。

「……………それ、本当なのかい？」

ホームズの問いにアルヴィンが頷く。

「母さん、時々正気に戻る時があったんだよ。その時手紙で知らせてくれた」

「嘘よ！ 気付いてたら、なんで食べ………！」

イスラは、完全に墓穴を掘った。

それに気づいたイスラは、口を覆う。

「語るに落ちるとは、このことか？」

ヨルが侮蔑の視線を向ける。

「無理するなつて、お前、嘘つくの下手なんだよ」

アルヴィンは、イスラにそう言葉をかけた。

ホームズは、イスラを冷たく見つめる。

「君、腐つても医者だろう。何してるんだい」

イスラは、口から手を離し握りしめる。

「あんたが、あんた達が、私を縛り付けるから悪いんじゃない!!」

「人のせいにはしないで！ 貴女が悪いに決まってるでしょ、イスラー！」

ローズの怒号を受けるとイスラは、ギリツと歯を食いしばって走り出した。

レイアとローエンは、ホームズ達を見つめている。

「追った方がいいんじゃない？」

「ええ。今のイスラさんは、何をするか分かりませんよ」

レイアとローエンの言葉にホームズは、アルヴィンを見る。

「決めるのは、君だよ。アルヴィン。おれもローズもイスラには少なからず関わりがある。とはいえ、今回の当事者は君だ」

家族を売られたローズ。

自身を売られたマープルと出会ったホームズ。

だが、その因縁は今とは関係ない。

今は、アルヴィンだ。

「追うぞ」

「了解。ヨル、イスラさんは？」

ヨルはヒゲをピクリと動かす。

「俺の感知できる範囲にはいないな……」

「立派な逃げ足だねえ……」

ホームズは、溜息を吐く。

「とりあえず手分けして探しましょう。皆さん、三十分後にまたここに」
ローエンの提案に頷くと一行は、方々に走り出した。



三十分たったが、イスラは街のどこにもいなかった。

ヨルの探知範囲に引つかからないのだ。

一行は、アルヴィンの家で腕を組む。

「とりあえず、街にはいないな」

ヨルの言葉が真実として、問題は次だ。

「どこに行ったんだろう……」

レイアの言葉にホームズは、状況を整理するように口を開く。

「えーっと、イスラが知っていて、隠れられそうな場所か……」

ホームズの言葉を聞きながら、ジュードは考えを纏める。

(イスラさんが、知っている場所……)

ジュードの視界にエリーゼが入る。

瞬間、ジュードの頭にかかっていた靄が晴れる。

「そうだ……リーベリー岩孔だよー」

一行は、少し驚いた後に頷く。

「それだねえ。彼女にとつても馴染みの深い場所だろうしねえ」

ホームズの言葉にジュードは、頷くと懐にある次元刀の小刀を取り出し空間を切り裂く。

「よし！逃げられる前に行くわよ」

ローズは、そう言つて真つ先に飛び込み、他の面子もその後を追つた。



「いたわ！」

突然現れた一行にイスラは、吊り橋の上で声も出ない。

「そんな……さつきまで居なかつたのに……」

「鬼ごっこをやるには、分が悪いということだ」

ヨルは、馬鹿にする。

ジュードが顔を険しくさせ、イスラに詰め寄る。

「イスラさん………なんで、アルヴィンのお母さんを!？」

イスラは、視線をそらす。

「邪魔だったんだよな。ユルゲンスと一緒に暮らすのに………」

ローズが息を飲む。

「……冗談でしょ？人の命よ？そんなことのために殺したの？」

ローズのかすれ声を打ち消すようにイスラが叫ぶ。

「そうよ！裏の世界と関わるのはもうたくさん！私は、ただ普通に幸せに暮らしたい

だけなのに！そのための努力もしているのに!!」

「君の言う努力ってのは、殺人のことかい？」

ホームズは、心底呆れたように溜息を吐く。

「そんなことを平気で詫びれもせずによつてるようじゃあ、君の言う普通の幸せなん

て訪れやしないだろうねえ」

「………あなたに何が分かるっていうのよ」

「肉親を失う辛さ」

ミラとアルヴィンが目を見開く。

「お前、父親の記憶はないと言っていないかったか？」
ミラが首を傾げる。

それを聞いてホームズは、ああ、と思い出したように呟いた。

「そっか、二人には言つてなかったけ？おれの母親ももういないんだ。二年前の……ううん、二年も話だけどね」

アルヴィンは、あの夜の教会のことを思い出す。

「じゃあ、あの時の言葉は……」

「心の底からの言葉さ。経験者だからね」

アルヴィンは、目を伏せる。

あの時投げかけた言葉が如何に無遠慮だったのか、今ならわかる。

「悪い。あんなこと言つて……」

「仕方ないよ。隠してたんだから」

ゆつくりとかぶりを振るホームズ。

それから、イスラに視線を戻す。

「……彼女のこと、君はどうするんだい？」

アルヴィンは、銃を握る手に力を込める。

「イスラ、一つ聞かせてくれ」

「……………な、何よ?」

「お袋は、苦しんだのか?」

アルヴェインの質問にイスラは、ゆっくりと首を横に振る。

「そうか……それだけが心残りだったんだ」

そう言つて銃を握る手を緩める。

「イスラを許すのか?」

ミラの質問にアルヴェインは、頷く。

エリーゼは、驚いて詰め寄る。

「お母さんをころされたんですよ!!」

穏やかな顔でアルヴェインは、頷く。

「母さんは、もう長くないことが分かっていたんだ」

そう言つて寂しそうに笑う。

「最後の手紙にも書いてあった。自分が死んだらイスラを自由にしてやってくれ
な」

「そんな……………レティシャさんは、全部分かつて……………」

「死んだんだ。あんなに帰りがつた故郷に帰れないまま……………な」

アルヴェインの言葉の端々には、やりきれない思いが滲み出ている。

イスラは、齒を食いしばって首を横に振る。

「嘘よ！どうせ、後で揺するんでしよう!？」

「あ?」

突然叫んだイスラにヨルは、不機嫌さを隠そうともせず、声を発する。

「証拠を全部消さなきゃ……昔の私を全部きれない……」

ブツブツとうわ言のように繰り返すイスラに一行は、眉をひそめる。

「おい、君……」

「私は、幸せになれないの!!」

慟哭に一行は、思わずたじろぐ。

「おい、落ち着け、イスラ……」

ここは、吊り橋の上。

もう長い年月放置されており、あっちこちが崩れかかっている。

アルヴェインが慌てて声をかけた。

だが、その甲斐なく、イスラは足を滑らせそのまま真つ逆さまに地面に落ちて行った。



「容態は？」

一行は、イスラをアルヴェインの家に運び込みレティシヤが使っていたベッドに寝かせた。

ミラの質問にユルゲンスは、頷く。

「怪我の方は大丈夫だよ。みんなの応急処置が適切だったおかげだ……ただ……」

ユルゲンスは、言いづらそう口ごもる。

するとイスラがゆっくりと目を開く。

その目は、涙で溢れていた。

「お母さん……どこにいくの？……捨てないで……何でも言うこと聞くから……」

ご飯もいらさないから……だから、売らないで！お母さん！」

目は開いている。

だが、焦点は合わず、そのうわ言を言い続ける。

ユルゲンスが優しくイスラの手を握る。

「大丈夫。ずっと側にいるよ。例え、君が一生このままでも」
ミラは、そんな二人を見て静かに呟く。

「幸せ者だな、イスラは」

エリーゼは、ぎゅつとティポを抱きしめる。

「…………でも、こんなの悲しいです」

ヨルは尻尾をゆらしながら答える。

「逃げられないんだよ、過去からは」

静かな声のはずなのに皆に響く。

「そうなんだろうな……………」

ユルゲンスは、頷く。

「ユルゲンスさん？」

「イスラがうわ言でずっと言っていた」

「…………そう」

ぎゅつと拳を握ってローズは、目を伏せた。

「アルヴィンさん。本当にここを使っているのか？」

尋ねるユルゲンスにアルヴィンは、頷く。

「構わないよ。ここなら、奴らに知られてないしな」

アルヴィンは、そう言つてガンベルトを取り出す。

「ただ、このガンベルトだけは持つていくよ。我が家に代々伝わるものでね、故郷に持つて帰るよう、お袋に言われていたんだ」

「無事に帰れるよう祈つてるよ」

ユルゲンスの言葉にアルヴィンは、頷いて返す。

「せめてこれぐらいは、してやらないとな」

アルヴィンは、そう言つてガンベルトをしまった。

「いいのかい？それだけで？」

「いいさ。引き取り手がいるんなら、整理もしなくてちようどいいぐらいだ」

ホームズは、少しだけ釈然としな顔をするが直ぐに思い直す。

「わかった」

暗い雰囲気の中、アルヴィンがパンと手を叩く。

「さ、次は、マーロウのうちだろ。ほら、とつとと行くぞ」

「……………そうね」

ローズが頷き、ドアから外に出た。

そして、それに続くように一行がバラバラと外に出る。

エリーゼも出ようとするが、ふと、コルクボードに貼つてある一枚の紙が目止まる。

エリーゼは、首を傾げた。



「アルヴィン」

マールロウの家に行く途中、エリーゼが呼び止めた。

「これ……」

そう言つてコルクボードに貼つてあつた先ほどの紙を渡す。

アルヴィンは、エリーゼから渡された紙を見ると目を丸くする。

「気になつたので持つてきました。これ、なんですか？」

『絵とは違ふみたーい』

アルヴィンは、とても嬉しそうに笑うとエリーゼの頭を撫でた。

「さきゆな」

エリーゼは、顔を赤くしながら少しだけふくれっ面になる。

アルヴィンは、エリーゼから手を離すと一枚の紙を見つめる。

「これは、写真つていうんだ。風景をカメラつてのを使つて紙に焼き付けたものつて
言えばまあ、近いかな」

「写真？」

「そ。それで、これは、俺と母さんと父さんの集合写真だ。ジルニトラに乗る前にとつ
たんだよ」

まだ、あつたんだなあとアルヴィンは、嬉しそうだ。

一行もその写真を覗き込む。

幼いアルヴィンが身なりのいい格好して満面の笑みで笑っている。

そして、その隣にはアルヴィンの父と母。

とても幸せな家族がそこにいた。

幸せだった象徴のようなその一枚の写真をアルヴィンは、嬉しそうな顔に少しだけ別の感情混ぜて見ている。

ホームズは、そんなアルヴィンに言葉をかける。

「結末が悲しくても、幸せな思い出がゼロになるわけじゃないつてことだよ」

「……………そうだな」

アルヴィンは、頷く。

覗き込んでいたレイアが首を傾げる。

「それよりさ、この後ろでピースしてる女の人誰？」

そう言つて指を指された女の人を一行は、見る。

眠そうなタレ目で、ピースをしている。

そのくせしつかりカメラ目線だ。

「なんか、手を引つ張られてますけど……」

「お連れの方に怒られたのかも知れませんか」

「連れの方はマトモなようだな」

ローエンたちの物言いにアルヴィンは、苦笑いをしている。

「人の写真に写りこもうとする子供は、よくいたけどな……………」

「子供って感じじゃないよね……………僕らと同年ぐらいに見えるけど……………」

家族写真、ある意味記念写真とも言えるものにいけしやあしやあと写っている自分より少し上に見える女性にジュードは、呆れていた。

口々に感想を漏らす一行とは、対照的に、ローズ、ヨル、ホームズは黙り込んでいる。

その沈黙をローズが打ち破る。

「ねえ、ホームズ」

「なんだい？」

「私、この人に見覚えがあるんだけど」

「奇遇だね、おれもだよ。ねえ、ヨル？」

「ああ」

ホームズ達の発言にレイアが尋ねる。

「誰？」

ローズとヨルは、ホームズに言うよう視線で促す。

ホームズは、溜息をつけて目をそらす。

「おれの母さん」

「はっ？」

一行は、慌ててホームズとその女性を見比べる。
見覚えのある茶髪、タレ目、そして、お調子者。

「ええつー……!!?」

レイアがホームズに詰め寄る。

「本当に!?!」

「本当に」

「じゃあ、この見えないけど手を引っ張ってる人つて……」

「多分、父さんじゃない?」

アルヴェインも驚いている。

「思わぬところに繋がりがあつたな……」

「なにやつてんだらうね、あの人」

ちやつかり人の家族の記念写真に写り込んでいる自分の母親。

ホームズは、すつかり脱力していた。

「………つて、いやいやちよつと待って」

ジュードが止める。

「ホームズのお母さんこの時、いくつ?どう見ても僕と同年ぐらいにしか見えないけど……」

「えーつと……」

ホームズは、断片的な情報を繋ぎ合わせようと頭をひねる。

「ホームズの両親が出会ったとき、母親のは二十二歳だったから、二十三、四どつかその辺だろ」

ヨルの言葉に改めて一行は、ホームズの母、ルイーズを見る。

「……………?」

頭の上にはてなが飛び交う。

見た目は、どう頑張ってもジュードぐらいが限界だ。

「だから、言ったらろう? 若作りだって」

「んなレベルじゃないでしょ!! 年齢詐称レベルだよ!!」

「レイア、珍しく難しい言葉使うじゃあないか」

「どういう意味!」

ぎやあぎやあど騒ぎ合う面々。

そんな面々を見てアルヴィンの顔は自然と綻ぶ。

ずっと探してた、

ずっと手に入らない諦めた、
ずっと手に入れないと決めた、
そんな居場所が目の前にある。

「頑張らねーとな」

そうポツリと呟いてアルヴェインも輪の中に入っていった。

いつかの敵も今日の敵

「さて、ついたけれど……………」

所変わってマーロウの家。

中に入った一行は、鍵の使い所を考えていた。

扉らしい扉に鍵を差し込むのだが、どの鍵穴もうんともすんとも言わない。

ホームズは、溜息を吐く。

「ローズ、どこか思い当たるところないかい？」

「そんなこと言ったって、扉はそこが最後よ」

「ふーむ……………」

ホームズは、頭をひねる。

ここまで来れば考えられることは一つだ。

「隠し扉かな？」

ホームズの言葉にアルヴィンとローエン、それとレイアが目を輝かせる。

「ロマンだね」

「ロマンだな」

「ロマンですね」

「だよね！」

四人の上がったテンションについていけない、残りの四人。

「うーん、そう？」

「そうだよ！」

乗り切れないジュードを差し置いてレイアは、拳を固める。

「さてと、あの人の性格を推理してみようか！」

テンションの上がるホームズ。

「どこかな、本棚？ 食器棚？ それとも……」

「本棚だ」

ヨルがホームズの言葉を遮る。

「……なんで？」

「精霊術の気配を感じる。正解かは、分からんが取り敢えず試してみろ」

ほぼ正解の手掛かりにローエン、アルヴィン、レイア、ホームズは、言葉がない。

取り敢えず本棚に鍵穴がないかを探す。

そして、すぐに見つかった。

ワクワクは、五秒と経たずに終わってしまった。

「……とりあえず入れるかなあ……」

カチンと小気味のいい音が響くと、本棚は、ゆっくりと部屋へ向かって開いていく。ホームズは、その様子を見ながら一言。

「君って空気読めないよね」

「お前にだけは言われたくない」

一行は、扉の向こうへと入っていった。



取り敢えず明かりを確保するためにも扉を固定し開けっ放しにしておいた。

「何かしら、ハハハ？」

その埃っぽい部屋にローズは、顔を顰めている。

部屋の中には、何もないのだ。

意味深に隠されていたにしては、妙な風景に一行は、首をかしげるばかりだ。ホームズも辺りを見回し手掛かりを探す。

「ヨル、何か気配は感じないのか？」

ミラの言葉にヨルは、欠伸を一つ。

「それを言うならこの部屋中から感じる。だが、それが何なのか分からない」ヨルは、まだ生首になれるほど回復していない。

よって精霊術を食べることが出来ないのだ。

「手詰まりですか……………」

ローエンは、顎髭を触る。

そんな中、ホームズは作業の手を止めてローズに近づく。どンドン迫ってくるホームズにローズは、後ずさりする。

「待つて、動かないでおくれ」

止まったローズにホームズが手を伸ばす。

ローズは、自分の顔が赤くなるのを感じていた。

ホームズの手は、ローズの髪を優しく触って離れた。

その様子を一部始終見守っていたレイア達は、ニヤニヤ笑っている。

ローズは、顔を真っ赤にしたまま、ホームズをもう一度見る。ゴミでも取ってくれたのら感謝しなくてはならない。できるだけ素直に。

「……………それ、何？」

ホームズの手元には、動く節足動物。

何となく続きは分かっている。

ホームズは、コホンと咳をしてウインクしてみせる。

「女郎蜘蛛、ついてたぜ☆」

「うっわあー！！」

ローズは、思わずホームズを殴り飛ばした。

殴り飛ばされたホームズは、そのまま扉にぶつかった。

扉は、ゆっくりとしまった。

「ご、ごめんなさい……………その驚いてしまつて……………」

慌てて謝るローズ。

ホームズは、そんなローズを見て驚いている。

「そんな……………ローズが暴力ふるつて謝つてるよ……………どういうことだい？」

その瞬間ローズの動きが止まる。

「あ、嘘嘘！気にしてないよ！いつも謝ってくれるよね」

「いや、そんなことより……」

扉が閉まった瞬間真っ暗になるかと思われた部屋に明かりが灯った。

そして、部屋が突然広がり、辺りに武器という武器が現れた。

「……………何これ」

『そう、部屋に入ったら扉を閉める。当然のマナーだな』

マーロウの声が響き渡った。

「マーロウさん……………」

ローズが慌てて声の在り処を探す。

ヨルは、首を横に振る。

「精霊術で声だけをこの空間に留めたんだろう」

ヨルの言葉にローズ唇を噛み締める。

『この声を聞いてるってことは、俺はドジって死んじまったってことだろうな。鍵を託したのは、ホームズかローズか……』

ホームズは、ぎゅつと鍵を握る。

『ローズに託したなら、ホームズはいないな。ホームズに託したんならローズもいるだろ』

師匠というだけあってローズの事も読み切っている。

『出来ればお前ら二人の生き様とかをもう少し見守っておきたがったが、どうにも無理ってことだな』

マールロウの声に二人は思わず涙が溢れそうになる。

『ローズ』

マールロウの声にローズは、顔を上げる。

『師匠らしいことが出来たかは、不安だが、俺はお前の師匠でよかった』

「マールロウさん……私も貴方の弟子でよかった……」

それからしばらく間の後、また名前を呼ばれる。

『ホームズ』

ホームズもまさか自分が呼ばれると思っていなかったらしく驚いて顔を上げる。

『楽しかったぜ』

「こちらこそ」

ホームズは、ニヤリと笑う。

『それとヨル』

ヨルは、耳の動きだけで答える。

『ホームズのこと頼むぞ』

「前も聞いたし、約束も果たした」

ヨルは、つまらなそうにそう答えた。

『さて、大方予想もついでるだが、ここにある武器は俺が、精霊術で引つ張り出した奴らだ』

壁には確かに見覚えのある武器から全く見たことのない武器まで様々だ。

『もう、俺には必要ないしお前たちにやる。好きなものを持つていくといい。どれもこれも一級品通り越して特級品だ』

「ほんとう!?!」

レイアは、驚きの声を上げる。

自分達を散々苦しめたあの武器たちが今、ここにあるのだ。

『ただまあ、代わりと言っちゃあ何だが、お前達頼みたいことがある』

「……………頼みたいこと？」

ジュードが首を傾げる。

『闘技大会に出てくれないか？』

一行にあの時の出来事が蘇る。

『お前らには、酷い目に合わせたが本来ならシャン・ドウの大切な祭りなんだ。だから、出来ればお前達に出演して盛り上げてもらいたい。もちろん強制じゃない断つてくられても別に構わない。ただ、出来たら出て欲しい』

マーロウの言葉はそこで区切れると再び響き渡る。

『さて、色々言っちゃったが、取り敢えず最後に言っとく』

「……………」

『しつかりな』

マーロウの言葉はそれつきり聞こえなくなつた。



「どうする?」

アルヴェインの言葉にホームズは、だんまりだ。

ホームズ自身としては、出てあげたい。

だが、ジュード達が嫌だと言ってしまうばそれまでだ。

「いいんじゃないか? 出てしまえば」

ミラの言葉にホームズ達は振り返る。

「え? てつきり反対するかと思っただけど………」

「まあ、あまり私も好きではないが、そうだな………」

ミラは、そう言つて片手剣を手を取つて軽く素振りをする。

「お前風というなら、義理と人情という奴だ」

手に持った片手剣を見てホームズは、なるほど納得する。

「まあ、それに武器を試しに使用しておいて悪いことは無いだろう」
ヨルの提案にローエンが頷く。

「武器は、使い慣れておくに限りです」

アルヴィンは、大剣を選んでいる。

「俺もマクスウェル戦で壊れちゃったしな……いい機会だ」

「私も」

「僕も」

ジュードもレイアも大分無茶な戦い方をした。

エリーゼもローエンも折角なので選んでいる。

「サイズ合うかな……」

ホームズは、不安になりながら探している。

ジュードの籠手にしろ、ホームズの靴にしろ身につけるものは、やはりサイズの合うものに限る。

「うーん……マーロウさんの方がデカイからなあ……おれたちは、諦めるしかないかも……」

そんなことを言った矢先に二人は、ありとあらゆるサイズの揃えられた籠手と靴を発

見した。

「……………やばい、ツツコミたい」

「……………ツツコんだら負けだよ」

何のために自分が身につけられないサイズまで用意しているのか、マーロウが生きていたら是非とも問い詰めたところだ。

「単純に投擲用だろ」

「一級品を超える特級品を!?!」

ヨルの解説にホームズは、目を剥く。

「と言うか、マーロウさん一体どうしてこんなに持つてるんだろう……………」

ジュードの疑問にヨルが答える。

「ホームズの母の話によると、昔、賭けに大勝ちして大金を手に入れたらしい。人生を10回遊んでお釣りが返ってくるほどのな」

「……………それ、私も聞いたことあるわ。まさか……………」

ローズの頬が引きつる。

「そう。その金をありつたけ使ってこの武器達を揃えたらしい。手に入らないものは、一流の職人を使って作らせたんだと」

ローズは、お目当の刀を見つげながらため息をつく。

「ずっと不思議だったのよね……そんな大金があるにしていれば、質素な生活だったから……」

長年の疑問が氷解したローズだが、微妙に納得がいかない。

「少しぐらい残しとけば良かったんじゃないの？」

「会ったことのない友人と親戚が増えて、とても覚えてらんないから、消し去りたかったんだとさ」

「ハハハ………」

ジュードは、引きつり笑いをしながら籠手を嵌めてみる。

それは、今まで使っていたんじゃないかと思うほど馴染んだ。

「凄い………」

ホームズも試しに安全靴を履いた。

「お、いい感じ」

辺りを見回すとみんなも頷き合っていた。

「よし、それではエントリーと行こう」



【さあ！では第1ステージお次の組は、こいつらだ!!】

朗々と響く実況と共にミラ、アルヴィン、ジュードが入ってきた。

まだ出番ではないその他の面子は、観客席から、会場を見下ろしていた。

【さて、もう一度ルールを説明しよう!!】

今回は、第3ステージまでである。

それぞれ、第1ステージの成績上位者が第2ステージに、そして第2ステージの成績上位者が更に第3ステージに進める！ここまではいいか野郎共!!】

おおー!!という歓声が答える。

ホームズは、眉を顰めながらその様子を眺めている。

もう既にミラ達の前に別の組が同じルールにのつとつて、試合をしていた。

その内容は中々に、

「エグいんだよねえ………」

【やってきたな三人組！お前達には、とある精霊術で作り出した仮想敵を倒してもら

うー！それを倒したスピードの速さを競うってわけだ!?単純だろう!?分かりやすいだろ
!?!

ミラは腕を組みながら聞いている。

「なんだか、前と実況のテンションが違うな?」

「そこじゃないよ、ミラ」

見当外れの方向に首を傾げているミラにジュードがやんわりとツッコむ。
そうこうしているうちに精霊術が発動し、仮想敵が光で形を成していく。

「ルールは、簡単！癖なんかない！だったら何に癖がある？何が難しい？」
ミラ達の前に仮想敵が纏っていた光が弾け飛んだ。

「そう！チームメンバー共通して闘いたくない敵が現れる！」

個人に限定すれば他のメンバーが倒せばいいという話になるがメンバーが共通に闘いたくない相手となると話は、簡単に進まない。

ホームズ達が観客席から見ていた他のチームもとても戦い辛そうだった。

だからこそ、倒すまでに掛かった時間というのが競われる要素なのだ。

「さあ！お前らの闘いたくない相手は、誰だー!!」

そこにいたのは、アホ毛をびよこんと立てたたれ目の碧い目をしたホームズがいた。肩にはお約束のようにヨルを乗せている。

「……………おれ？」

ホームズは、観客席で目を丸くしている。

【おーっと！突然現れた多分男性！これは、誰だ!?お前らのなんなんだ!?!】

「多分って何だい……………疑うまでもなく男性だよ」

【それじゃあ、行くぞ試合開始だ!!】

その号令と共に三人は、躊躇なんてものを捨て去り真っ直ぐにホームズに突撃した。

そして、風よりも速く仮想敵ホームズを消し去った。



「ぶっちぎりで一位だな」

「第1ステージ突破おめでとうございます」

試合が終わると各チームの結果が発表されていた。

ジュード達は、どのチームよりも更に速かった。

「本当すごいよ、ジュード達」

「ええ、驚いたわ」

『流石、ジュード！ミラー！』

「アルヴァインも」

各々それぞれジュード達を讃えている。

「なんか、すつげえ、納得いかない!!」

約一名を除いて。

ホームズは、膝から崩れ落ち四つん這いになりながら叫んでいた。

「戦いたくない相手だよね!?何であんなに躊躇わずに倒せるんだい?!」

「いや、だってホームズ相手なら時間を伸ばせば伸ばすだけ不利になるだけだし

……」

「先手必勝なんて生ぬるいことは言わない。先手必殺だ」

ミラが胸張って言う。

「というか、揃いも揃ってどうしてホームズなんだ?」

ヨルは、首を傾げている。

「ミラならジュードだろ、ジュードならミラ……ああ、そうかそういうことか」

ヨルは、尻尾を揺らす。

そう、この時点でジュードとミラは、共通の戦いたくない敵のカテゴリーから外れるのだ。

となれば、三人が戦ったことがあり、勝てそうな相手のくせに勝てなかったホームズが出てきてしまうのは、仕方ないことだ。

「勝てる要素があんなにあってもなんか、毎度毎度楽勝ついていかないもんな……」

「ちよつと、毎度毎度戦ってるみたいない言い方止めて」

ホームズの指摘にエリーゼがコホンと咳払いをする。

「ホームズと戦ったことのある人」

全員手を挙げた。

「自業自得だな」

「ちくしょー!!」

ヨルの言葉がトドメとなりホームズは、そのまま走り去った。

「第2ステージに出場の組そろそろ控え室の方をお願いします」

会場係の声にジュードは、ため息を吐く。

「次の出場するはずだったのってだれだっけ？」

「私とホームズ」

ローズは、答えを最後に一行に沈黙が降りる。

ホームズは、走り去ってしまった。

探している時間はない。

幸い、どのステージにどのメンバーが出るのかはその都度選べる。

勿論、重複しないことが条件だ。

「誰が出ましようか……」

ローエンの言葉に、一人心を決めた。

「私が出ます」

『いつもフォロローさせるのがレイアじゃかわいそうだもんねー！』

エリーゼの言葉レイアは、感激していた。

「ありがとう、エリーゼ！」

ローエンは、あのカン・バルクでのことを思い出し優しく微笑んでいた。

「さて。じゃあ、誰がホームズを探しに行く？」

ミラの言葉にレイアは、全ての結末を理解した。

「だよねー……………はあ……………」

舌の根も乾かぬうちにやってきたオチにレイアは、溜息と共にホームズを探しに行った。

きれいな花には気を付けろ

「エリーゼ、リリアル・オーブは？」

「はい、大丈夫です。ローズは？」

大会の舞台裏でローズとエリーゼは、互いに今の状況を確認していた。

「そう言えばエリーゼと二人で一緒に戦うのって初めてかしら？」

エリーゼは、今までのことを思い出す。

ローエンがいたりという事はあるが確かに二人で戦った事はない。

「ホームズと戦ったことは、ありますね」

『二つの意味でねー』

「ハハハ」

ローズは、渴いた笑みを浮かべている。

それから少しだけ真面目な顔になる。

「私とでいいの？ 私は……」

「ホームズの瞳を潰した……ですか？」

ローズは、静かに頷いた。

「友達の大切なものを奪った……それは、許せないです」
でも、と言葉を続ける。

「私は、ローズも大好きですよ。だから、これは仲直りです」
ローズは、静かに頷く。

「ありがとう」

『どういたしましてー!』

エリーゼは、舞台に向かって歩いていく。

その後ろをローズが付いていく。

「私より、ずっと大人よね……」

情けない気分になりながらもなんとか気持ちを持ち直してローズは、会場に足を踏み入れた。



【さあお待ちかね！オオトリは、こいつらだ!!】

実況の声と共にローズとエリーゼが入場した。

【第1ステージを瞬きする間に終わらせた最強チームからの女コンビだ！きてきてどうなる?!】

「間に合った！」

レイアが何とかホームズを観客席まで連れてきた。

「お前が出たいと言ったんだからな、次のステージでは出てもらうぞ」

ミラから厳しい言葉がホームズに飛ぶ。

何か言い訳が来るかとミラが次の言葉を用意しているが、ホームズから返答は、一切

ない。

「……………ホームズ？」

ミラが首を傾げる。

しかし、何処か虚ろな瞳に反応はない。

「ホームズ！」

ミラが肩を強めに叩くとホームズは、ハッとしたようにミラを見る。

「何だい？」

「次のステージは、お前に出てもらうという話だ」

「ん、ああ。いいよ」

二つ返事で了承したホームズにミラは、眉をひそめる。

「おい、ホームズ……………」

「いくぜ、第2ステージ!!種目は、タイムアタックだ!!」

ミラの言葉は、実況でかき消された。

【制限時間は、十分間!その間に敵を倒せるだけ倒せ!!その数で競うからな!お嬢ちゃん達、覚悟しろよ!】

その言葉と共に精霊術が発動する。

【んじゃ、スタート!!】

現れた魔物達は一斉にローズ達に襲いかかった。観客達は息を飲む。

誰もが彼女達の無残な姿を想像する。

しかし、それは裏切られることとなった。

魔物達は爆音と共に空に舞い上がった。

空に打ち上げられた魔物達は、順番に消えていく。

地上には、刀を抜いたローズと杖を構えるエリーゼ。

「やるからには、勝つわよ。エリーゼ！」

「当然です！」

『任せろー!!』

ローズは、刀を膝下で交差させて詠唱を始める。

「だんだん速く♪どんどん速く♪」

魔物達がローズに向かっていく。

しかし、後半歩足りない。

マナは、ローズに収束する。

「アツチエランドクイックネス!!」

纏ったマナと共にローズの白刃が魔物を切り裂く。

その様子を観客席から見ていたホームズは、考え込む。

「なるほど。クイックネスよりはいいよねえ」

先ほどのぼんやりした様子を消し去ってホームズが分析する。

レイアが隣で頷く。

「まあ、クイックネスじゃ途中で切れちゃうもんね」

「その点あのクイックネスならだんだんと速くなってく。通常より速い状態を保つことが出来るからね」

ホームズは、そう言つてローズの戦いに目を向ける。

刀を振るう程ローズは、少しずつ速くなっていく。

目の前の敵を斬り伏せるローズ。

その後ろで魔物が掴みかかる。

『ネガティブゲート!!』

瞬間、エリーゼの精霊術が発動した。

無数影の腕が、魔物を蹴散らす。

他の魔物達は、それを見ると今度はエリーゼに狙いを定める。

しかし、それをローズの剣戟が阻む。

「お姫様に何するかしらっ？」

ローズは、刀を振り上げ、思いきり打ち下ろした。魔物達は地面に叩きつけられる。

「頭が高いってんのよ!!」

魔物達は、かき消えていく。

ローズは、そのまま地面を打ち鳴らして前方には飛び出す。

その勢いを乗せたまま身体を捻って切り崩す。

回転を加えた斬撃によって魔物達は宙を舞う。

魔物を蹴散らしたローズは、地面に足をつける。

動きの止まったローズに再び魔物達が襲いかかろうとする。

「『ティポプレッシャー!!』」

巨大化したティポがそれを押しつぶす。

ローズに切り崩されている間にエリーゼの精霊術が完成する。

そして、ローズの攻撃の手が緩まったところにエリーゼの精霊術が襲いかかる。

その隙のない連携に魔物達は、なす術がない。

すると出てくる魔物が重量級へと変わりだした。

鈍い鉄の音と共にローズの刀が弾かれる。

「っ!!」

弾かれたローズは、別の魔物に切り替える。

だが、切り替えた先も同じ魔物だ。

「きゃあー！」

「エリーゼ!!」

手間取っている間に詠唱中のエリーゼに魔物が襲いかかっていた。

何とか杖で防いだが詠唱は、途切れてしまった。

その様子を観客席で見ていたレイアが声を荒げる。

「ちよつと!!魔物を変えないでよ！」

卑怯じゃん!!」

ホームズは、溜息をつく。

「単純にそれぞれの魔物の量がきまっているんだらうね。ローズとエリーゼで倒しきつちゃったから、別のを出したみたいだねえ」

ヨルは、そんな話を聞きながら首を傾げる。

「だったら、おかしくないか?倒しきつたなら、そこで終わりだ。あいつらがトツプつてことでいいだろ」

ヨルの疑問にジュードが首を横に振って答える。

「ローズ達の他にも何組かいたからここで終わらせるわけにいかないんだよ」

亀のような甲羅を持つ魔物がローズにその重量を武器に飛びかかる。

「心配か？」

ホームズは、肩をすくめる。

「前にも言ったはずだけど、あの子の師匠誰だと思ってるんだい？」
魔物達でローズが見えない。

代わりに赤い闘気が少しずつ溢れてくる。

「剛招来——」

赤い闘気がローズから吹き出て近くにいる魔物を弾き飛ばす。

「纏!!」

赤い闘気は、ローズの両刀に纏わりつく。

「ハアア!!」

ローズの両刀が、魔物達を切り裂く。

自分の周りの魔物を切り裂くと、今度はエリーゼの周りの連中だ。

「蒼刃追蓮!!」

蒼い斬撃がエリーゼに向かって駆け抜ける。

切り裂かれる魔物達と、その間に詠唱を完成させるエリーゼ。

先ほどのパターンに見事に戻った。こうなればもう後は、先ほどの繰り返しだ。

二人の快進撃は、見事十分間続いた。



「コンコンかな？」

一行は、二人の控え室の前にいた。

ホームズは、コンコンとノックをする。

「はいるよ」

「どうぞー……………」

ホームズの言葉に何だか元気のないローズの声が返ってくる。

一応了承を得た為、一行が入るとそこにはぐったりと椅子で寝ているローズがいた。

「大丈夫……………には見えないねえ」

「大丈夫よ。少し寝てれば治るわ」

ローズは、そう言ってミックスグミを口に放り込む。

「それで？ 労いだけじゃないでしょう？」

ローエンが頷く。

「はい。一応、報告しておきますね。ローズさんとエリーゼさんのおかげで見事我々は、決勝の第3ステージに進めます」

「種目は？」

「『小細工なしのガチンコ勝負！』だそうです」

ミラは腕を組んで考える。

「後出ていないのは、ホームズ、ローエン、レイアか」

「全員でれるのかい？」

「ええ。というより、そういう指示です。三人がそれぞれ個人で戦いその勝ち数で優勝を決めるそうですよ」

今までに比べると随分わかりやすい。

しかし、そうなるともう一個別の問題が出てくる。

「順番、どうするんだ？」

「後腐れなしにする為にもジャンケンにしましょう」

ローエンの提案にホームズとレイアが頷く。
「それではいきますよ！ジャンケン……………」

順番は、レイア、ローエン、ホームズになった。

ホームズがボロ負けだった。

「何でみんな先やりたがるんだい？」

「緊張の時間を減らしたいからに決まってるじゃん!!」

レイアがムンと胸を張って答える。

ホームズは、うんざりしたように溜息をつく。

ホームズ自身も同じことを考えていたので、一番にやりたかったのだ。

そんなホームズをジュードが、元氣付ける。

「大丈夫だよ。前の二人が勝てばホームズは、負けたって大丈夫なんだから」

「うん。気楽に行けつてことだよな？負けるって確信があったわけじゃないよね？」

ホームズは、怪訝な顔をしている。

そんなホームズにレイアが耳打ちをする。

「（ホームズ、何かあった？さつきから……いや、いつも変だけど、それにしたって変だよ）」

「（失礼千万だよな、君は）」

ホームズは、そう言つて溜息をつく。

「（言うとは本当になりそうだから言いたくない）」

「二人ともどうした？」

アルヴィンに尋ねられ、レイアは言葉に詰まる。

「レイアが失礼だつて話」

「安心しろ。お前ほどじゃない」

ミラの返しにホームズは、鼻で笑つて返す。

「おれだつて君ほどじゃないよ。部屋に入つてきた瞬間にナイフ投げたの忘れてないからね」

「いつの話をしてるんだ、お前は」

ミラは呆れている。

「いや、そんな話初耳なんだけど。それいつのこと?」

ジュードが頬を引きつらせている。

「また、後で話してあげるよ」

ホームズは、盾と靴を確認する。

「準備は、出来た! んじゃあ、行くとしよう!!」

レイアとローエンは、頷く。

ローズは、起き上がって手を振る。

「ほどほどにね」

「……頑張れって言っておくれよ」

ホームズの引きつった顔を見てローズは咳払いをする。

「頑張れ」

「任せたまえ」

そう言っただけ控え室を後にした。

出て行った三人を見送るとローズは、ジュード達に観客席に戻るよう言う。

「私たちも回復したら行くから、場所とついてもらっても良い?」

「分かった。任せて」

その言葉と共に一行は、控え室を後にした。

ホームズの正念場は、ここからだ。

油断ダメ!ゼツタイ!

【さて第3ステージは、ガチンコ三本勝負!ルールは、場外に落ちるか、死ぬ以外の戦闘不能に陥ること!】

会場は、円形のステージに唯一入場用の架け橋が掛けられていた。

【トップバッターは、この子だ!!】

レイアが棍を持って入場する。

【対する相手は、こいつだ!!】

促されて入ってきたのは、薙刀の男だ。

二人が入ると架け橋がゆっくりと上っていく。

レイアは、相手の男を見据える。

見るかに筋骨隆々とした男にレイアは、冷や汗が流れる。

レイアを見るなり溜息をつく。

「な、何?」

「別に不満はない。勝てばいいんだからな」

思い切り不満そうな声で言う男にレイアは、自分がナメられていると分かった。

自分の相手が華奢な女性ということが納得がいかないのだ。

観客席に無事戻ったローズとエリーゼは、苦笑いをしている。

「女子供相手でも手加減は、しない」

「安心して。わたしもしないから」

その言葉に今度は男の額に青筋が浮かぶ。

【さあ、得物は両方かなりの長さ……さあ、勝利の女神は、どちらに微笑む!?】
レイアと男が構える。

【それじゃあ、始め!!】

男は、開始の合図と同時にレイアに向かって突撃する。

薙刀は、空を切り裂きレイアへと最短距離を走る。

その銀色に輝く刃は、禁止されている死を連想させた。

刃は、レイアの目前まで迫る。

「馬鹿ね」

ローズは、観客席でポツリと眩く。

「シャープネス!!」

術名を告げるとレイアに力が宿る。

そして、それと共にレイアは、半身になって、迫る薙刀を避けた。標的を失い、止まれなくなった男。

「あの子はホームズ相手に真つ向勝負で勝ったのよ」

レイアは、その男の顔面に棍の先を使ってカウンターを入れた。

「——っ!!」

自分の勢いが上乘せされ、更にシャープネスで力の上がったレイアの一撃を食らった男は意識と共に派手に飛ばされた。

その一瞬の出来事に会場は、ポカンとしている。

【えーつと……】

実況が審判に目配せをすると、審判は首を横に振る。

【気絶により、勝負あり!!】

それと同時に会場が湧いた。

架け橋がゆつくりと降りてくる。

レイアは、苦笑いしながらそれを使って試合場を後にした。

舞台袖に戻るとローエンとホームズが待っていた。ホームズが手を挙げるとレイアも手を挙げ、ハイタッチをする。

「瞬殺とはね、驚いたよ」

「いや、殺してないよ」

レイアは、肩をすくめる。

「多分、あのの方がわたしより強いと思うんだけど……」

レイアは、申し訳なきように言うとローエンが微笑む。

「いいんですよ、レイアさん。勝った方が勝者なんですから」

「当たり前じゃん」

「ええ。当たり前前のことですよ」

ローエンの言葉にレイアは、納得したようだ。

力強くうんと頷くと腰に両手を当てる。

「じゃあ、次はローエンだよ」

「ええ。お任せください」



【さあ!お次は、ご老人の登場だ!!】

「齒に絹せぬにも程がありますね」

ローエンは、ホッホッホと笑っている。

【お前らのチームどうなってるんだ!?!メンバーが多種多様だぞ!!そんなお前らの敵はこいつだ!!】

相手は、二つの短刀を構えた男だった。

ローエンは、細剣を取り出す。

「ここは、腕に自信のある奴らが来る場だ。自慢の知恵は役に立たねーぜ」
「おや？私のことを知っているのですか？」

「ああ。指揮者コンダクターイルベルトだ。軍師様が来るようなところじゃない」
「そうですか」

ローエンは、相変わらず含笑いだ。

【さあ！ルールは、変わらず！いくぜ……………】

二人は全身に力を込める。

【始め!!】

二刀の男が仕掛ける。

ローエンは、細剣で受け流す。

しかし、受け流したところから直ぐに剣戟が襲ってくる。

(なるほど…………詠唱している暇はなさそうですね)

短刀は、後一步のところまで迫る。

だが、その後一步が届かない。

格下相手に一向に勝負がつかない。

そんな状態に男は苛立つ。

(これで決めてやる!!)

男は渾身の突きを放とうと踏み込もうと右脚に力を込める。

ローエンは、身を翻して躲すと足払いをかける。

踏み込もうとした足を払われた男は、態勢を崩す。

ローエンは、その隙に背後に回る。

その時、男の視界には、場外の暗い穴が広がっていた。

ここに落ちれば、場外。

そこで負けは確定する。

(まさか……ここに誘導されていたのか!?)

「気付いたようですね」

ローエンは、そう言うと言の背中をトンッと押す。

「少し、遅かったようですけど」

態勢の崩れていた男は、なす術もなく穴の中へと落ちて行つた。

【おーっと!場外だ!!これにより、勝負ありってヤツだ!!まさかの展開!!】

ローエンは、静かに笑みを浮かべて

架かった橋を渡ってレイア達の元へと戻る。

レイアとホームズがローエンに駆け寄る。

「流石だよ、ローエン」

「年寄りということ随分、侮っていらつしやつたので利用させてもらいました」
ローエンは、そう言つてホームズと静かにハイタッチする。

「年とは取るのではなく、重ねるのです。積み重ねればそれだけで財産なんですよ」
「今の試合の後だと大分重みが違うよねえ……」

ホームズは、そう言つて伸びをする。

ヨルは、ホームズの肩で尻尾をぐねぐねと渦巻かせる。

「さて、これで二勝したことだし、俺達の勝ちつてところか？」

ホームズは、指を折つて数える。

「そうだねえ……これで、おれは戦わなくていいよねえ？」

そう言つて試合会場を見ると相手が仁王立ちしていた。

どうやら、そうは問屋がおろさないようだ。

ホームズは、その男の顔を見て目を丸くする。

「おーっと！負けは決まつたがそれでも自分の勝負は、やる！その心意氣買つてやるぜ!!もうひと試合許可してやろう!!」

解説の声が朗々と響き、観客が湧く。

「ホームズ、出るしかなさそうだよ」

レイアの言葉にホームズは、無言のままだ。

レイアは、眉をひそめてホームズの前に立つ。

「ホームズ！」

レイアの言葉にハッと我に帰るホームズ。

「……………何だい？」

「隠し事は無しだよ。ホームズ、なんか変だよ。何があつたの？」

ホームズは、しばらく迷つた末口を開く。

ホームズから語られる事柄にレイアとローエンが息を飲む。

話し終わるとホームズは、顔を上げる。

「ほんじゃあ、行つてくるよ」

「待つてー！行かなくてもいいよーそんな事情ならー！」

レイアの言葉にホームズは、ひらひらっと手を振つてそのまま控え室を後にした。



「あれ？レイアにローエン、舞台袖で見てるんじゃないの？」

「もう片付けたいから追いつけませんでした」

レイアとローエンは、ジュード達のいる観客席に戻っていた。

「試合は!？」

「まだ、始まってないけど……どうしたの？」

「ホームズの対戦相手、ホームズをイジメてた張本人なんだよ!」

レイアの言葉にミラは、首を傾げる。

「別に問題ないだろ。一番最初の時に今までの憂さ晴らしとばかりに踏みつけていたでないか」

「違うんだよ。あれは、立場が、違うからやり返せなかった相手。だから、別に今なら

どうってことない、らしい」

レイアは、最後は尻すぼみになる。

ホームズの言っていた言葉なのだ。

自分のことではないため、どうしても言葉に力が伴わない。

「でも、今度は幼いホームズじゃ敵わなかった相手、つまり、」

「年の離れたイジメっ子ってところか？」

アルヴェインの言葉にレイアが頷く。

ジュードがこめかみに指を当てる。

ホームズの話の思い出す。

ホームズをいじめていた人間には、二種類いた。

一つは、石を投げるなどして直接行動に移した者。

そして、もう一つは……

「それって、ホームズに^{ゲイト}靈力野がないって見抜いて、イジメを扇動した……」

「そう、張本人」

ジュードの言葉にレイアが頷く。

「でも、ホームズならそれぐらい……」

エリーゼの言葉にローエンが首を横に振る。

「幼いホームズさんにとって、あの方は、何より怖い存在だったのでしよう。立場上敵対出来ない。なら、一緒に寄ってたかって何かやって来るかと思えばそんなことはしない。自分の手は汚さず、ホームズさんを追い詰める、その汚さがホームズさんには恐ろしかった」

ローエンは、そう言ってイジメをしていた男と相對しているホームズに視線を向ける。

「幼い頃の恐怖は、呪いとなって自身を縛る。今のホームズさんにあの相手は、いくら何でも……………」

ローエンの解説にローズが息を飲む。

「そんな、止めな……………」

【それじゃあ、最終試合、泣いても笑ってもこれで最後だ!!勝負、始め!!】

ローズの制止も空しく会場から合図が飛んだ。

負けて失うものなどなく、勝っても何も手に入らない、ホームズの勝負が始まった。

愉断大敵

「お前やつぱり、あの時のガキだよな？」

踏み込もうとしたホームズの足が止まる。

向かい合う男は、ホームズのことを覚えていた。

「な………んで？他の奴らは覚えてもいなかったのに」

呆然とするホームズに男は、ニヤリと笑う。

「お前は、一番楽しかった遊びを覚えてるか？」

男は、そう言つてホームズを殴る。

ホームズは、そのまま殴り飛ばされる。

ホームズは、ゆっくりと立ち上がる。

「覚えているだろ？あの頃は、良かったと思ひ出すだろ？」

そう言つてマナを展開させる。

「俺にとつてのそれが、お前を追い込むことだった。ただそれだけのシンプルな理由だ」

そう言つてホームズに向かって火の玉を放つ。

かわそうとするも足が竦んで動かない。
左手の盾で何とか防ぐ。

「ほう？防いだか……」

「このゲス野郎が……」

「名前で呼べよ。俺は、カーボロ。お前は？」

ホームズは、ぺつと唾を吐き捨てる。

イジメてはいたが、名前は知らなかったようだ。

「君に名乗るくらいなら、便所コオロギに名乗った方がよっぽど有意義だね」
ホームズの口振りにカーボロは、面白そうに笑う。

「お前、自分の立場分かってんのか？」

カーボロは、そう言うのとホームズの腹を殴りつける。

「——っ!!」

口から息だけが漏れる。

その衝撃にホームズは、膝をつく。

「そこで這いつくばってろ」

そう言うのとホームズの顔を蹴り飛ばした。

仰け反るようにホームズは、地面に投げ出される。

痛みを堪えながら立ち上がろうとするホームズ。

そんなホームズにカーボロは、更に追い討ちをかけるように詠唱を始める。

「マナから察するに風属性か……だが、まあ……」

ヨルは、相手の精霊術を分析する。

(下級精霊術にアレだけ詠唱していると大したことはない)

「ホームズ、突っ込め。詠唱が長いから止められるし、向かっていった方がダメージも少ない」

だが、ホームズの足は動かない。

「……………ホームズ？」

ヨルが首を傾げる。

その隙に相手の精霊術が完成する。

「ウインドカッター!!」

迫る風の刃にホームズは、まるで縫い付けられたようにその場から動かない。

「ホームズ!!」

ヨルの呼び掛けに慌てて左手の盾で防ぐ。

だが、いつもと違い防ぎきけることは出来ず、傷を負う。

「もう一つおまけだ」

カーボロは、そう言つて再び詠唱を始める。

「ホームズ！今度こそ避ける！」

ホームズは、首を横に振る。

「無理だよ。さつきから、足が動かないんだ」

幼い頃の恐怖は、呪いとなつてホームズを縛り付ける。

体に刻まれた勝てないという記憶が、普段の動きをさせない。

ヨルは、舌打ちをする。

「しつかりしろ、ホームズ!!負けるような相手じゃない！」

動かない脚を必死に動かそうと何度も叩くが、それでも言うことを聞いてくれない。

そんなことをしているうちにホームズに火の玉が放たれる。

放たれた火の玉は、ヨルを巻き飲んでホームズに当たる。

ヨルは、焦げた身体を忌々しそうに見ている。

ダメージは、思っていたより少ない。

だが、こんなものを何発も食らっていたらそれこそただでは、済まない。

カーボロは、ニヤニヤしながら近づくとホームズの胸ぐらを掴みあげる。

そして、ホームズの顔を横から思い切り殴りつけた。

「……………うぐっ！」

地面に地面に投げ出されたホームズは、血を吐き出す。

口の中を切ったようだ。

「いい加減にしろ、ホームズ！こいつには、実力もない！信念もない！技術もない！今まで戦ったどの相手よりも弱いんだ！」

「んなこと、言われなくなつて分かつてるよ……」

ホームズは、ヨルにそう返すとゆっくり立ち上がる。

「でも、足が動かない。過去の恐怖が、鎖のように絡みついてくるんだ」
声を震わせるホームズにヨルは、齒齶みをした。



「ホームズ……もういいよ」

観客席でレイアがつぶやく。

ローズは、今にも観客席から会場に飛び降りそうだ。

「ねえ、ローエン！止めよう！別にこの勝負勝つ必要なんかないんだよ」

3試合中、レイアとローエンが勝っている。

もう勝ちも確定しているのだ。

だが、ローエンは、首を横に振る。

「だからこそ、止める訳にはいきませんよ」

ローエンの言葉にエリーゼが身を乗り出す。

「どうしてですか？このままじゃ、ホームズ………」

「エリーゼ達の言う通りだ。いくらなんでもホームズの分が悪い」

ミラの言葉にアルヴィンが伸びをする。

「でも、負けたくないんだろ、ホームズは」

アルヴィンの言葉にジュードが頷く。

「棄権するならもつと早くに出来た。でもホームズは、しなかった。それってつまり、どうしたって勝ちたかったんだよ」

「だからって……」

歯を食い縛って俯くローズの頭をアルヴィンが上げさせる。

「まあ、見守ってやろうぜ。あのホームズが珍しく自分の為に戦ってるんだから」

アルヴェインの言葉に一行は、頷くしかなかった。



「がつ、」

もうこれで何度目か分からない精霊術がホームズを捉える。

「おい、何とかしろ」

歯を食い縛るヨルを見てホームズは、肩をすくめる。

「死なない程度におれは、苦しんでいるわけだけど、君は、喜ばないのかい？」

ヨルは、更に嫌そうな顔をする。

「お前の避け損ねた攻撃が、俺にも当たってるんだよ」

火傷や切り傷がヨルに刻まれていた。

「勝って得るもんがあるわけじゃないし、ここらが潮時だろ」

ヨルの的を射た言葉にホームズは、首を横に振る。

「いいや、あるよ。勝って得るもの」

「ほう、それは？」

「勝利」

迷いなく言い放った言葉にヨルは、ため息を吐く。

「つまり、勝つまで勝負を降りないわけだ」

ヨルの言葉にホームズは、頷いて返す。

ボロボロのままホームズは、カーボロを指差す。

「勝つてやるぞ」

カーボロは、こめかみをひくつかせるとホームズに狙いを定めて詠唱を始めた。

ホームズは、深呼吸をする。

（現状を整理しろ！）

一、あいつは今まで戦った誰よりも弱い。

二、おれは、足がすくんで動かない）

「ホームズ!!」

ヨルの言葉と同時にホームズに向かって火の玉が襲いかかった。

ホームズは、左手の盾でなんとか防ぐ。

考えを中断させられてしまったが、もう一度頭を回す。

（勝つには、攻撃を当てないと……）

カーボロは、再び詠唱を始めた。

（瞬迅脚？ダメだ足が動かない。

獅子戦哮？ダメだ足が動かない。

転泡？ダメだ足が動かない！！）

カーボロの詠唱は、終盤までさしかかっていた。

ホームズは、選択肢を絞っていく。

そして、カーボロの詠唱が完成する。

形成された火の玉は、ホームズへ向かって真つ直ぐに放たれる。

「ありとあらゆる可能性は、潰した。だから………！！」

ホームズは、深く息を吐き出し、そして地面を強く踏み込んだ。

「これしかない！！」

「守護方陣・改!!」

巨大な円陣が二人を囲んで煌々と輝きだした。

放たれた火の玉は、ホームズにたどり着くことなくかき消えた。

「ぐっ……………」

カーボロは、何とか動こうとするが何一つ動かない。

「いやあ、忘れてたよ……単純な話だった」

ホームズは、ニヤリといつも笑みを浮かべる。

「動けないなら動かなければいいだけの話だった」

「ワイバーン戦でも似たようなことを言ってたな」

ヨルの言葉にホームズは、頷く。

「まあ、前は、あつという間に打ち消されちゃったけどさ……」

ヨルの言葉が思い出される。

「君は、ことう言つたね。彼は、おれが戦つた誰よりも弱いと」

「まあな」

「だから、ワイバーンには無理でも彼相手なら打ち消されないよね」

ホームズの言葉にヨルは、ニヤリと犬歯を見せて答える。

「だろうな」

ヨルの視線の先には、守護方陣の拘束を解こうと必死なカーボロがいた。

カーボロは、拘束を解こうとしながらもホームズを馬鹿にした笑みを浮かべる。

「雑魚の分際で見下すなよ。拘束するだけで精一杯のくせに」

それから、それこそ吐き気を催すような人を馬鹿にした笑みを浮かべる。

「拘束した分だけ、お前を痛めつけてやる」

だが、底意地の悪い笑みならホームズも負けていない。

「君、何も知らないのかい？ 守護方陣はね、拘束するものでも、回復技でもない」

勿論、回復することもできる。

だが、メインはそこではない。

「守護方陣はね、攻撃技だよ」

カーボロが膝をつく。

獅子戦哮などにくらべれば、一撃の威力は、弱い。

一撃一撃が弱くとも守護方陣は、拘束している間、拘束した敵にダメージを与え続ける。

そして、精霊術には及ばないが、回復作用もある。

アレだけあつた火傷や切り傷は、ホームズから消えていた。

とはいえ、制限がないわけではない。

ホームズの技を出す気力が持つ限りという制限がつく。

相手を倒すまで拘束するなど、普通の敵ならまず、ホームズの方がもたない。

だが、相手は普通の敵とは違う。

「何回だつて言つてあげるよ。君は、おれが戦つた誰よりも弱い」

ホームズは、更に力を込める。

額には汗がにじむ。

「どつちが、先に音をあげるか、勝負といこうじゃないか」



「無茶苦茶だ………」

ローズは、思わず顔を押しさえる。

ホームズの試合場を囲む程の守護方陣・改を見ながらそう呟いた。

「こんなのほとんど手が無いのと同じじゃない………」

まあ、確かに殆どやけくその一手だ。

『なんで、そうまでして勝ちたいのかなー?』

「理由なんて単純ですよ」

ローエンは、踏ん張っているホームズに目を向ける。

「男だから、これにつきます」



ホームズは、脂汗を流しながらカーボロを拘束し続ける。

カーボロも歯を食いしばりながら睨みつける。

「っ！こんな悪足掻きやってないで、とつとと諦めろ!! 霊力野ゲイのないお前は、何をやって勝てないんだよ!!」

ホームズは、鼻で笑う。

「その悪足掻きから抜け出せないくせに何を粋がっているんだい？」

そう言つて踏み込む脚に力を込める。

だが、ホームズにも限界が来ている。

徐々にカーボロは、動けるようになってきた。

動けるようになった足を無理矢理動かし、ホームズへの距離を詰める。

詠唱をするには、じわじわとやってくるダメージがカーボロの集中を乱す。

例え、放つても守護方陣でかき消されてしまう。

だったら、直接拳を叩き込むしかない。

ゆつくりとしかし、着実に距離を詰める。

だが、カーボロにも限界が近づいていた。

身体に蓄積されるダメージが、カーボロを追い詰めていた。

(あと、もう少し………！)

先に音をあげたのは、ホームズだった。

守護方陣が消えカーボロの拘束が解かれた。

「ホームズ!!」

観客席でローズは、声を上げる。

ジュード達は身を乗り出して試合場を見つめる。

そこには、先ほどまで煌々と輝いていた光の陣が消えていた。

ホームズは、肩で息をしている。

「ククク……先に音をあげたのは、お前の方だったな」

カーボロは、勝利を確信する。

そして、そのままホームズへと向かって駆け出した。

この距離なら、詠唱するより殴ったほうが早い。

距離詰めたカーボロは、拳を固め振りかぶる。

「だから、言っただろ! 悪足掻きだ!!」

ホームズは、荒い息遣いをするばかりで何も答えない。

「ここからは、俺のお仕置きタイムだ!!」

振りかぶった拳は、真っ直ぐ放たれた。

だが、それは届くことはなかった。

「守護水槍陣」

ホームズは、もう一度地面を踏み鳴らした。

氷の柱がホームズを中心に現れる。

放たれた拳は氷の柱に阻まれ、自身の骨を砕く。

「……………!!」

そして、他の氷の柱がカーボロの腹を突き上げる。

突然現れた氷の柱に突き上げられ、カーボロは、堪らず胃の中のを吐き出した。

「キ……………キ……………」

最後まで言葉を発することできずにカーボロは、意識を手放した。

ホームズよりも高い視点で意識を手放したカーボロと視線を合わせる。

「どんな気分だい？人を見下す気分は？」って、まあ、答えは聞けそうにないねえ」
役目を終えた氷の柱が消え、水に戻る。

カーボロは、地面に叩きつけられた。
会場が静寂に包まれる。

それを打ち破るのは、実況の役目だ。

【まさかの大逆転だ!!勝負あり!!】

その大番狂わせの結果に会場が歓声に包まれる。

ホームズは、目を丸くしながらも手を振って返す。

「やれやれ、乗り越えられたかねえ？」

「踏み越えたといった感じだがな」

ヨルは、そう言っただけで気を失っているカーボロを見下ろす。

「……………リーゼ・マクシアは、ゲート靈力野の大きさに左右される」

「うん。きつと、彼は、おれがいることで安心出来たんだろうね」

ホームズは、憐れむようにカーボロを見る。

『自分よりも下がいる』この世にこれほど安心できることはないからね」

「同情したか？」

「まさか。おれは、そんなに心は広くないんだ」

会場に吊り橋がかかる。

その音に振り返るとローズ達が吊り橋を渡つてホームズの元へと駆け寄つてきた。

「ホームズ!!」

いつもの面々を見ると緊張の糸が緩み膝から崩れ落ちそうになる。

アルヴィンとローエンがそんなホームズの支え、崩れ落ちないようにする。

「意地を見せたな、ホームズ」

「まあね」

ホームズは、疲れ切った、でも満足げな笑みを浮かべる。

アルヴィンとローエンは、ジュードにホームズの治療を任せる。

「無茶をしたね」

「ははは、まあ大分余裕はなかったかな」

その間にヨルは、レイアの肩に飛び乗る。

「どうだった？横で見てる」

レイアの言葉にヨルは、ため息をついた。

「イライラした」

「辛辣だね」

レイアは、乾いた笑みを浮かべる。

そして、ヨルに聞く。

「ねえ、最後の奴って……」

「まあ、狙ってただろうな」

「だよね」

ミラは、腕を組む。

「しかし、レイアには効かなかったがな」

「そうですね」

エリーゼが頷いている。

ガイアス城から逃げ出す時のホームズとレイアの戦いを思い出す。

あの時、レイアはすべて打ち砕いてホームズを打ち倒した。

レイアは、うーんと首をひねる。

「まあ、必死だったからね」

そう言つて腰に手を当てる。

「ホームズと戦う時は、『勝てる』と思つちやダメなんだよ。『勝つ』つて思わないと」
『それは、疲れるな』

ティポの言葉にミラ達は、呆れたようにため息をついて頷く。

「それにしても、今回はアルヴィン達の方がホームズのことを理解していたな」

『いつもだったら、レイアが一番だもんね』

「ティポ、考えて喋つて」

レイアは、そう言つたと楽しそうにはしゃいでいる男面子に視線を向ける。

「男の子の事は男の子が一番理解してるんだよ」

レイアの言葉にローズ達は、呆れたようにでもとても優しく笑った。

お色直し？

「こんな時で、皆さんには、大変言いづらいのですが……」

闘技大会終え、ローエンの希望によりカラハ・シャールに来た面々は、ドロツセルに頼まれごとをされていた。

「頼まれごとって……この前、ガンダラ要塞の他にまだあるんです？」
首を傾げるホームズにドロツセルは、言いづらそうに目をそらす。

「ええ。まあ……封鎖されたガンダラ要塞を解いてもらつて、更にこんなお願いをするなんて図々しいことは百も承知なのですが……」

ドロツセルは、本当に申し訳なきそうにしている。

そんなドロツセルにホームズが、慌てて手を振る。

「いや、大丈夫ですよ！ここにいる面々に遠慮なんてしないでください」

「本当ですか!!確かに聞きましたよ！」

ドロツセルは、両手を組んで身を乗り出した。

「う、うん」

その態度の変わりようにホームズは、ついて行けない。

「実はですね、皆さんには私と一緒に社交会に出て欲しいんです!! 私一人で出るのは、心細くて……」

『え?』

ドロツセルからの提案に一行は、目を丸くする。

「それって……まさか、」

「ええ。ダンスもありますので、皆さんにはドレスアップしてもらいますよ!」
トントン拍子で決まっていく。

迂闊なことを言ったホームズは、後ろを振り向けない。

「いや、あの、それは……」

ローズが何とか断ろうとするとエリーゼが、クイツと袖を引っ張る。

『ドロツセルを助けてくれないの?』

確かに多少強引だったとは言え、困っているのは、本当だ。

とはいえ、素直に領けない。

何故なら……

「で、でも……ダンスなんて踊れないし……」

「私が教えますよ」

ドロツセルが胸を張る。

ジュードが、ポンつと手を叩く。

「でも、ほら、僕達には、教えられませんよね? 確か、女性と男性でステップが違うつて聞いてますけど」

「ジュードさん。私が教えますよ」

ローエンが胸に手を当ててにこやかに答える。

「アルヴィンは、踊れるの?」

「まあ、昔散々見たからな……」

忘れがちだが、エレンピオスの良家の出だ。

「ホームズは?」

「母さんに仕込まれたから一応。何だったら、男のステップも女のステップも出来るよ」

「ホームズは、お母さんに何を仕込まれているんですか……」

「何だろうね」

エリーゼからの返しにホームズは、遠くを見つめる。

レイアは、意を決して頷く。

「よし、出よう!! こんな機会滅多にないしね」

「それもそうだな」

ミラも同意している。

女性陣が着々と決意を固めている中、ローズだけが斜め下を向いている。

「ローズ！ドレスを着る機会なんて早々ないんだし、やろうよ!!」

レイアの言葉にローズは、更に俯く。

ホームズは、首を傾げる。

「もしかして、スカートが嫌なのかい？」

思わずむせるローズ。

「どうやら当たりのようだ。」

「袴だつて似たようなものだろう？」

「違うわよ！これは、限りなくスカートに近いズボンよ!!」

「じゃあ、タキシード着るかい？」

「その二択しかないの!？」

「そりゃあ、そうだろ」

ヨルが呆れたように返す。

ローズは、ドロツセルの願いを聞いてあげたいという思いと、ドレスを着たくない

という間で悶々としていた。

「別に、ドレスのスカート下すぐに下着つてわけじゃないから大丈夫だよ」

ホームズは、そう言つて助け舟を出す。

「下にズボンみたいなタイツをを履くから」

「うーん……………それなら……………」

ローズは、そう言つて渋々了承した。

(「なんで、ホームズ知ってるんだろ……………」)

一行にしこりを残して。



そんなわけで付け焼き刃で、訓練してダンスをマスターした面々は、社交会の会場に来ていた。

「う、ちよつと苦しいね」

ジュードは、ちよつとだけネクタイを緩める。

「あんまり緩めすぎるとだらしなから程々にな」

「アルヴィンさんが言いますか……」

「ローエン、どういう意味だ？」

「内緒です。男は、秘密があつたほうが格好いいですから」

何処かで聞いたような台詞を吐きながら二人は、話している。

ジュードは、ため息を吐く。

三人ともタキシードに身を包んでいる。

「ミラ達、遅いね」

「女性を待つのも男の嗜みですよ」

そんなことを話していると、女性陣三人が現れた。

ミラが、水色のドレス、エリーゼがいつもの紫色を少し淡くしたドレス、レイアが薄

い黄色のドレス、ローズが赤を基調としたドレスだ。

ジュードは、ポーっとしている。

「む?どうしたジュード」

「ううん。似合ってるよミラ」

ジュードの褒め言葉にミラは、満足そうに頷く。

『どうだー!アルヴィン!』

「見違えたな、エリーゼ」

アルヴィンの褒め言葉に若干喜んだ後、直ぐに咳払いをして、ジトつと見る。

「普段は、ダメみたいに聞こえます」

「ホームズみたいなこと言うなよ……」

そんな会話をしている面々に一人レイアが不満げだ。

「まあ、分かってたけど……」

ジュードは、ミラの方を見ている。

「レイアさんもお似合いですよ。ご自分で選ばれたのですか?」

ローエンの質問にレイアは、笑って答える。

「うん。何となく、これかなー?って」

「自分に似合うものを選ぶという事は大事なことですよ」

「上手いね、ローエン」

「ほっほっほ」

ローエンは、愉快そうに笑う。

「なら、私は、大事なことも出来てないのかしら……」

その横でローズは、顔に影を作っている。

ローエンは、首をかしげる。

「いえ、お似合いですよ」

レイアが、言いづらそうに説明する。

「わたしが選んだんだよ……」

ローズ自身が、自分に合った服を選んだ訳ではないのだ。

「赤を選ぶとは中々思い切ったことをしましたね」

「まあ、ローズっぽくない？」

情熱の赤だ。

感情で動き、激情をぶつけるローズには、ある意味ぴったりだ。

「さて、これで全員揃ったな」

「ドロツセルさんは？」

「何かやる事があるとかで後で合流だ」

ジュードが尋ねるとミラがそう返す。

そして、ドロツセル以外の面々を確認してレイアが首を傾げる。

「あれ? ホームズがいらないよ」

そう、先ほどから全く見ていない。

ジュード達も困った顔をしている。

「僕達も見えないんだよ」

ミラが首を傾げる。

「何故、いないんだ?」

「ホームズの服だけなかったとか?」

エリーゼが、思いついたようにそう言う。

「いや、あるには、あったけど服の丈のが長すぎて困つてるとか?」

これは、アルヴェインだ。

確かにそんなに身長の高い方ではないホームズなら、十分にあり得る。

「着方が分からないんじゃないの?」

ローズが投げやりにそう返す。

「慣れて無さそうだもんね」

ジュードは、頷いている。

そんな面々にレイアは、チツチツチと指を振る。

「分かんないよー、案外超着こなしてるかもしれないよ」

「何で、こつち見るのよ、レイア」

ローズが頬を引きつらせながら返すとレイアが顔を近付ける。

「いい？例え、どんな状態でも似合ってるねって褒めるんだよ！いい!?!」

「え、ええ」

レイアの圧力に気圧されていると、扉の向こうからホームズとドロツセルの会話が聞こえてくる。

「ドロツセルさん、何でおれの服だけないんです?」

「まあまあ、代わりの服があったからいいでしょう?」

その会話に一行がエリーゼを見る。

「予想通りです」

『読みやすいねー』

「というか、これ、大分丈が長い気がするんですが……」

「こんなものですよ」

「大変ですね」

今度は、アルヴィンを見る。

「まあ、期待を裏切らないよな」

「というか、着方分からなかったら大分時間がかかったんですけど……」

「私がいなかったらどうなっていたんでしょうね」

「逃げましたけど」

この会話に今度は、ローズが一行の注目を浴びる。

「え？というか、ドロツセルさんに自分の着替え手伝わせたの？」

「ちよと、引くな……」

アルヴィンが呆れているとガチャとドアノブが回される音がする。

そして、ゆつくりとドアが開かれ、ピンクのドレスに身を包んだドロツセルと、

真つ黒なドレスに身を包んだホームズが現れた。

その姿は、誰も予想を裏切っていた。

いや、正確に言うならレイアの予想の若干斜め上をいった姿だ。

つまるところ、

『『超着こなしてるー!!』』

一部の隙もない程にホームズは、ドレスを着こなしていた。

踊れ！踊れ！踊れ！

「引くわー……………」

アルヴィンが一行の気持ちを代弁する。

ホームズは、黒いドレスに身を包み肩にはヨルを乗せていた。

その黒いドレスにホームズの茶髪も上手に溶け込んでいる。

「仕方ないだろう、何故かおれのタキシードだけないんだもの」

そして、これまたヨルもドレスに似合っている。

「そしたら、ドロツセルさんが、『ホームズさんには、これが似合うと思います!!』つて、言つて何処からとも無くこのドレス持ってきたんだよ」

憂いを帯びたその表情も様になっている。

「いや、黒猫のヨルさんもいるからミステリアスな女性を演出出来るんじゃないかとおもったんですけど……………」

「まず、女性じゃないです」

ドロツセルの考察にノータイムで返す。

ホームズは、自分の裾を掴む。

「本当に丈が長いんですね。初めて履いたんで着方もわからなかったんですけど、ドロツセルさんのおかげ?で助かりました」

あの扉のごしの会話に何一つ間違いは、なかった。

まあ、間違いがないのが問題なのだが。

「……………似合ってるわね、ホームズ」

「喧嘩売ってる?」

ホームズは、ジロリとローズを睨む。

「断ればいいのに……………」

エリーゼの言葉にホームズは、人差し指と親指で丸を作る。

「特別料金を払ってくれるんだってさ」

ドレスに身を包んだその淑女の姿からはかけ離れたハンドサインに一行は、頬を引きつらせる。

「ホームズさん。お願いですから、淑女として振舞ってくださいね。」

途中で男とバレたら特別料金は、なしですよ」

ドロツセルの言葉に嫌そうな顔をするホームズ。

「いいから、言う通りにしとけ。お前の羞恥心なんか、金の前では何の役にも立たんぞ」

ヨルに促されるとホームズは、掴み掛かろうとするが、スカートの裾を踏んでこけてしまった。

転んだ拍子にティアラが落ちる。

ヨルは、その隙にレイアへと飛び移る。

ホームズは、ティラを拾うとゆつくりと立ち上がりスカートの裾をパンパンと叩く。

「ホ、ホームズ?」

俯いたままのホームズにジュードが声をかける。

よく見るとふるふると震えていた。

寒いから? そんな訳はない。

ホームズの身体を突き動かすのは、怒りだ。

するとホームズから、震えが消える。

「あのー……………」

レイアが恐る恐る話しかけるがホームズは、それを取り合わず、スカートの裾を持って軽くお辞儀をする。

上げられた顔には、満面の作り笑いが浮かべられていた。

「それじゃあ、皆様、会場に行きましよう! 素敵な殿方が待っていますわ!」

完璧な女性ボイスを披露すると一行の先頭を切ってダンス会場に入って行った。

その変貌ぶりに、一行は、声が出ない。

アルヴィンがローズの隣に立つ。

「なあ、ローズ。アレ、お前の好きな人？」

「最近自信なくなりそうよ………」



「一曲よろしいですか？」

「ええ、もちろん」

そう言うとホームズは、ヨルを椅子に置き、ダンスを始めた。

レイアとエリーゼは、二人でジュースを口に運ぶ。

「レイア、何回踊りました？」

「二回。そして、二回とも人の足踏んだ。エリーゼは？」

「三回。久々に同い年の男の子を見ました」

二人は、ジュースを飲み干す。

「ローズは？」

「今踊ってます」

不器用ながらに精一杯踊ろうとしているのが分かる。

「ミラは？」

「食事を理由に全て断ってます」

ミラは、黙々と食べ物を皿に運んで食べている。

「ホームズは？」

『途中から数えるのやめたー』

ティポがふよふよ浮きながら返す。

そんな二人の元へダンスを終わらせたローズが戻ってくる。

「私だつてこれが一回目よ……」

ぐつたりとしながら返すローズにエリーゼは、ジュースを渡す。

「ありがとう。エリーゼ」

ジュースを飲みながらローズは、踊っているホームズを見る。

軽やかに女性のステップをこなすホームズ。

自分達はあれ程苦勞しても付け焼き刃かどうかも怪しいというのに、女装男が完璧にこなしている。

そんな様がローズに徐々に顔に暗い影を落とす。

「私たちより、ホームズが淑女ってどういう事よ」

「あ、それ言っちゃうの? みんな思うだけで留めといたのに」
レイアも辛気臭い顔になる。

「何故でしょう……負けてはいけない戦いに負けた気分です」

エリーゼも暗い顔のままだ。

そんな三人の元へドロツセルが、駆け寄る。

「三人ともどうですか?」

「ええ。まあ……」

レイアが目の前で先ほど別の男と踊っているのが目に入る。

相変わらず軽やかなステップだ。

「ホームズがタキシード着てたら楽しかったかも……」

「ローズ、正直すぎるよ……」

もうすつかり意気消沈している。

何が悲しくて自分より上手い女性ステップを見なくてはならないのだ。

「そういうドロツセルさんは、ダンスどうですか？」

ローズの言葉にドロツセルは、微笑んで答える。

「全部ホームズさんにとられちゃって……………」

「「ああ……………」」

見た目は淑やかなホームズは、先ほどから引つ張りだこだ。

「知らないって幸せだよね」

「夜の世界は、騙し合いだからな」

いつの間にか後ろにいたアルヴィンにローズ達は驚く。

エリーゼは、ジトツとした目でアルヴィンを見る。

「アルヴィンも……………騙してたんですか……………」

『サイテー』

「昔の話だよ」

そう言ってアルヴィンは、肩をすくませる。

「それより、ローエン。いつまでドロツセルの側にいるつもりだ?」
ドロツセルの三步後ろに常にいるローエンにアルヴェインが尋ねる。

「そうですね……………」

ローエンは、しばらく思案するとミラとジュードを呼ぶ。

ミラは、食事の皿ごと持って行こうとしたが、ジュードがやんわりと止めた。

ミラは、寂しそうな顔をした後食事をテーブルに置き、ローエンの元へと歩く。

全員（ホームズとヨルを除く）揃うとローエンは、会場の扉を指差す。

「少し外に出ませんか?」



「ヤッ………」

アルヴィンは、ローエン、ドロツセルを見据える。

「どういふことか説明してもらえぬ？」

ドロツセルは、ぐつと拳を握る。

「実は、ですね……今回のパーティー、私を妻として迎えたい人達が結構来ているんです」

その言葉にローズが驚いてローエンを見る。

ローエンは、静かに頷く。

「別に珍しいことではありません。社交会なのですから。そこで出会い、素敵な家庭を築いた方も沢山おられます」

ですが、とドロツセルが引き継ぐ。

「私は領主です。そして、家督を継いでまだ日が浅い。そんな私を妻にしたいなんて、考えられるのは、一つです」

ジュードがこめかみから指を外す。

「シャール家の乗っ取り……」

ドロツセルが頷く。

「何としてもそれは、阻止しなくてはなりません。そこで、思いついたのが……」
ミラが腕を組む。

「私たちか………」

「ええ。でも、皆さんに頼むのは、大変心苦しいので、ホームズさんにも頼んだんです」
「心苦しい?なんで?」

ローズが尋ねるとドロツセルは、更に言いづらそうに口ごもらせる。
レイアもミラもエリーゼもその通りだとばかりに頷く。

それを見てドロツセルのこめかみがピクリと動く。
気を使っているのにこの無神経な反応。

ドロツセルは、もう遠慮することをやめた。

「皆さんそれぞれに思い人がいるようでしたから。そんな人達を生贄みたいに扱うのは、いやだったんです」

その言葉に女性陣（ミラを除く）は、咳き込んだ。

「だ、誰が!」

「待つてローズ!ローズが口を開くとドツボにハマるから黙って!!」

レイアが慌ててローズの口を押さえる。

ローエンは、見事に自爆した女性陣にため息をつく。

ドロツセルは、更に続ける。

「まあ、そんなわけで思い人が絶対に男性ではないホームズさんに女装して貰って私

から目をそらそうとしたんです」

確かにこれなら、踊りたくもない相手をと踊る回数も減らすことが出来る。合理的だ。

「その事ってホームズには？」

「言ってません。断られてしまうと困るので……」

そう言ってドロツセルは、拳を握る。

「ごめんなさい！私の我儘で皆さんを振り回してしまつて……」

ドロツセルが改めて頭を下げるとミラは、首を横に振る。

「気にするな、ドロツセル。そんなことで咎める者はここにいない」

ジュード達は頷いて答える。

「でも、ホームズさんは……」

「事情を説明すればわかつてくれますよ」

ローズが優しく言うともミラが首を横に振る。

「いや、あいつは多分全部分かっているだろう」

ミラの言葉にレイアが首を傾げる。

「え？なんで」

「今のあいつが報酬で動く必要は、ないからだ」

そうホームズは、借金をミラ達からとりたてる立場なのだ。

武器も特級品。

いずれ金も帰ってくる。

そんな状態で特別報酬の為にホームズが、身体を張る必要はない。

「じゃあ、ホームズさんは……」

「全部分かった上でドロツセルに騙されたフリをしているのだろうか」
ドロツセルは、思わず口を両手で覆う。

「そんな……」

息を飲んでいるドロツセルに構わず、ローエンは、指を一本立てる。

「皆さんに参加して貰ったのはそれだけではありません」

そう言つて懐から一通の手紙を取り出す。

ジュードは、受け取ると手紙を黙読する。

読みながら徐々に目を見開く。

「これって脅迫状!?!」

「ええ。今日、この会場で起こすようですよ。」

逃げた場合は、沢山の人をこの場で殺すと」

ローズは、腕を組む。

「なんか、きな臭くなってきたわね」

アルヴィンは、頭をかく。

「まったく、良家つてのは、どこも変わんないな」

「スヴェント家も大変だったの？」

ジュードの質問にアルヴィンは、肩をすくめる。

「それより、ドロツセル何故黙っていた？」

ミラの言葉にドロツセルは、少しだけバツが悪そうだ。

「その、怒られるかもしれませんが皆さんにも羽根を伸ばしてもらおうと思ったんです」

そう言つて自分のドレスの裾を持つ。

「オシヤレして、身体を軽く動かして、美味しいものを食べる」

ドロツセルは、そう言つて一行を見回す。

「皆さんは、何か大きな事をやろうとしている。それに私は、加われません。だからせめて、皆さんに安らぎを渡したかったんです」

ドロツセルなりの気遣いだったわけだ。

「もちろん、事が起こればお願ひしようと思いましたが、起こるまでは、皆さんに楽しんで欲しかったんです」

ドロツセルの言葉を聞いたローズは、スカートの裾を持つて丁寧にお辞儀をする。「ありがとう、ドロツセルさん。疲れたけど楽しくなかったと言えば嘘になるわ」あんなにドレスを着る事を嫌がっていたローズの満面の笑みの礼にドロツセルは、嬉しそうに頷いて返す。

その瞬間ダンス会場から叫び声が響き渡った。

『な、なんだー!!』

しばらくしないうちに扉が開かれた。

開かれた扉から人が濁流のように溢れ出す。

ジュードは、逃げる人の腕を掴む。

「何があつたんですか!？」

「なんか、突然男が、人質とつて詠唱なしで精霊術後をぶつ放したんだ!!」
言うだけ言うと男は走り去った。

「詠唱なしの精霊術って……………」

黒匣だ。

「急ぎましょう!!」

ローエンの言葉に頷くと一行は、駆け出す。

「つたく、人質って！ホームズは、何してるの!!」

ローズは、悪態をついてダンス会場に飛び込んだ。

ローズに続いてジュード達も入る。

入ってすぐ、目に飛び込んだのは、

人質に取られた真つ黒なドレスに身を包んだホームズだった。

((何してんの……あいつ))

一行は、心の中で呟いた。

パーティーは、まだまだ続きそうだ。

舌先慘寸

「おーっと、てめーら動くなよ」

ホームズを人質に取った男は、会場に飛び込んだ面々にそう言う。

「この可愛いお嬢さんの死ぬところなんて見たくないだろう？」

「可愛いお嬢さんだって」

「知らないって幸せだよな」

「夜の世界は、騙し合いですから」

アルヴィンとレイアとエリーゼがボソボソと喋っている。

よく見るとダンス会場には、男達が各々武器を構えて立っている。

どうやら、逃げ出したのは、客だけで、使用人達は逃げ遅れたようだ。

「俺たちが要求するのは、ただ一つ！そうそれは！「女物のドレス」だ！って違う！誰だいらない言葉被せたのは」

ヨルである。

ちやつかり、テーブルの上に逃げていた。

突然の変態宣言に一行は、引いている。

「なんだ、その目は!!俺は男だ!そんなものを着る変態なんているわけないだろ!!」
(目の前にいるんだけど……………)

呆れてものも言えない面々を自分に恐れたと思ったのか、男は、咳払いをして脅迫を続ける。

「ともかく、ドロツセルとかいう女領主がいるはずだ!そいつを出せ!」

ローエンが髭を触る。

「ローエン、やっぱり私が……………」

前に出ようとするドロツセルをローエンが制する。

「下手に貴方が出て仕舞えば、ここにいる方達が巻き添えを食います」

ローエンの指摘にぐっ、ドロツセルは堪える。

「というか、ホームズは何で捕まったままなんだ?」

アルヴィンの疑問にレイアが解答案を一つ提示する。

「案外、警戒してるんじゃない?」

「いやでも、さつきから口に手を当てて欠伸を見えないようにしてるよ」

ジュードの指摘にエリーゼとローズの額に青筋が浮かぶ。

「精霊術の用意は?」

「出来てます」

「いや、まって！」

慌てて二人を止めるレイア。

「とりあえず、使用人の方達を逃しましょう」

ローエンが、そう提案すると、ジュードとアルヴィンが動き出す。

ドレスを着た女性陣は、動くだけで目を引く。

よって、影の仕事は男性陣が行う。

代わりに女性陣は、敵の目を出来るだけ、引きつける。

「何故、ドロツセルを狙う？」

ミラがその時間を稼ぐ。

その質問に男は、鼻で笑う。

「年若い領主、利用しない手はないと、俺の雇い主は、考えているようだぜ」

「年下の女性にしか強気に出れないなんて、器の大きさが分かるわね」

ローズは、馬鹿にしたように返す。

「まあ、そういうな。世の中色々なんだよ」

そう言つてホームズにナイフを突きつける。

「さて、いいからドロツセルとやらを出しな」

もう一度男は、同じ要求をする。

「さもなければ『きゃー!』、この可愛『いやー!』お『たすけてー!』んか『私は、関係ないですわー!』ぞ」

合間にいちいちホームズの声（女声）が入って何を言っているか分からない。

ローズが、耳に手を当てる。

「ごめんなさい、もう一度。大きな声で」

「チツ! だから! 『きゃあー!!』れば、『いやあー!!』いお嬢『たすけてー!!』ら殺『私
は関係ないですわあー!!』……つてうるせえつ!! お前が大声だしてどうすんだよ!!」

「仕方ないでしょう!? こんな状況でニコニコ笑えるわけないじゃないですか!!」
（さつき、欠伸してたよね?）

ニコニコは、無理でも欠伸は余裕だ。

「ごめんなさい、もう一度」

「ドロツセルを出せ!!」

今度は、簡潔にまとめてきた。

ドロツセルがローエンの袖を引っ張る。

ローエンが止める間もなくドロツセルが前に出る。

「貴方は、自分が捕まえてる人間も分からないのですか?」

それよりも早く捕まっているホームズが意味深に笑う。

男は、驚いて目を丸くする。

「まさか……お前が？」

「いきなり大当たりを引くから驚きましたわ」
ホームズは、そう言つて微笑んでいる。

(いや、それは流石に無理があるだろ………)

一行の声にならない言葉が会場に降りてくる。

「お前だったのか？」

(嘘！信じるの?!)

レイアは、思わず目を丸くする。

「違います！私が、ドロツセルです！その方は、ホームズさんです!!」
ドロツセルの言葉に男は、ホームズを見る。

「お前じゃないのか!？」

「騙されてはいけませんわ！世の中には女装の一環でドレスを着てダンスパーティーに参加する変態だっているのです!!」

((それお前だろ))

一行の心が一致した瞬間だった。

男は、信じられないような顔でドロツセルを見る。

「マジか……どう見ても女にしか見えなはず」

((いや、実際女だし……))

「私がドロツセルです!!」

「あなたは、私の言うことが信じられないんですの!?!」

「何で俺が女同士の勝敗を決める男みたいになつてんの!?!」

ホームズのせいで更に事態は混迷を極めた。

何がタチが悪いと言えば、ホームズは相変わらず嘘一つ付いていないのだ。

「もうヤダ。頭痛い……」

ローズは、ズキズキする頭を押さえる。

「もう、ホームズ諸共吹っ飛ばした方が早くないか?」

ミラは、疲れて雑な提案をしてきた。

「二人とも堪えて!!」

まだ避難が終わってないのだ。

レイアは、そう言うのとヨルに小声で話しかける。

「ねえ、生首には、なれなくても尻尾を伸ばすのは？」

「まだ無理だ」

つまり、こつそり男を拘束することは出来ないというわけだ。

「というか、あいつ、女領主の顔知らないんじゃないのか？でなければ、ホームズの事、女領主かどうかで判断に迷わないだろ？」

ヨルの言葉にレイアが今までの会話を思い出す。

「言われてみれば………じゃあ、あの人何にも下調べしないでこんなことしたの？」

「無計画ってのがピツタリだな」

そうこうしているうちに男がしびれを切らした。

「ああー、もう!!メンドくさい!!お前も来い!!女二人ぐらい人質にしてやる!!」

男は、そう言つてドロツセルを呼びつける。

「ヤバイ!!」

レイア達の身体が緊張で強張る。

「(避難まであと少しだ。どうにかしろ)」

ヨルが、レイアに耳打ちする。

「どうにかって………!」

元々、こつと言うのはレイアよりローエンの方が得意だ。

だが、ヨルに耳打ちをされた事でレイアは、焦りだしてしまった。
そして、

「待って！本物のドロツセルは、わたしだよ!!」

ドロツセルがまた増えた。

一行は、狐につままれたような顔をしている。

「お前まで、何を言ってるんだ!!」

「(だって！だって!)」

ヨルの言葉にレイアは、半泣き小声で答える。

「お前ら、一体、ドロツセル何人いるんだ!!」

男からの突っ込みに返す言葉もない、普通なら。

だが、今は普通の時ではない。

一時のノリとテンションとパニックで出た言葉に乗っかるしかない。

「一人に決まってるじゃん!!それを見抜くのが、あなたの仕事だよ」

「(仕事にしたらダメだろ)」

「(ヨル、うるさい)」

軽く咳払いして精一杯の憎たらしい笑みを浮かべる。

「それも出来ないんじゃないよ」

ホームズの真似をしているのだろうが、完全に引きつっている。

「んなまどろっこしい真似は、しない!!ドロツセルが出ないなら、この黒ドレスの女を殺す!!」

「いいの?その人がドロツセルかもしれないよ?」

レイアの言葉に男は、動きを止める。

その時、ミラが一步前に出る。

「因みに言っておくと私が本物のドロツセルだ」

「(貴女も乗るの!?)」

ローズは、あんぐりと口を開ける。

だが、その口は直ぐに閉じる羽目になる。

何故なら、ミラが目配せをしているのだ。

「えー……………私も……………」

ごほん、と咳払いをする。

「何を言っているの？私がドロツセルよ？」

ドロツセル、大増殖だ。

もう混沌カオスと化している。

男は混乱し始めた。

本物だという証拠は、ない。

だが、偽物という証拠もない。

「待てよ……」

そう一人だけ、名乗っていない人間がいる。

「そのガキ、人質交代だ」

エリーゼだけは、違う。

領主と名乗るには、少し無理がある。

だが、

『え？いいのー？ホー……ムグムグ』

エリーゼが慌ててティポの口を塞ぐ。

「いいんですか？ドロツセルかも知れない人を手放しても？」

そう、まだ疑惑は完全に晴れたわけではない。

男の動きは、再び止まった。

「ツチ！いいからとりあえず武器を捨てろ!!」

男は、舌打ちと共に怒号を吐く。

今までの流れで男の怒りのキャパは、限界だ。

俗に言う堪忍袋の緒が切れそうというところだ。

「分かった」

アルヴェインは、静かに頷く。

「鉛玉から捨ててやるよ」

そう言つてアルヴェインは、銃弾を放った。

だが、放たれた銃弾は、男に当たることはなかった。

男ではなく、その真上にあるシャンデリアの留め具に当たった。

それは、碎け散るとそのまま二人に向かつて落下した。

男は、ホームズを放置して逃げ出した。

そう、人質を手放させるには、これしかない。

人質ごと命の危険に巻き込む。

ホームズは、男が逃げると同時に自分もテーブルの上に逃げ出した。

「おとり、ご苦労さん」

「いやー……大変でしたわ」

若干いつもの調子に戻りそうになったが、慌てて淑女モードになり不敵に微笑む。

「では、ダンスの続きと洒落込みましょう！」

指をビシツと立てる。

「いっつあ、しょーたいむっ！ですわ!!」

（発音悪っ!!）

ホームズの発音は、さておき、パーティーは、まだまだ終わらない。

人を呪ったらさようなら

「待つて、ホームズ。あなたもしかして……」

ローズが皆まで言い切る前に軽くウインクする。

「そ。みんなを逃すまでの時間稼ぎ。私に目が行けば、皆様の行動にも気付きづらいでしょう?」

ホームズなりに考えていたのだ。

だが、忘れてはならない。

「ホームズさん。私のことを女装男扱いしましたね」

ドロツセルからじつとりとした視線を向けられる。

「何のことか忘れましたわ」

そっぽ向いて口笛を吹いている。

人質に逃げられた男は、黒匣ジンを構える。

「くそ!」

「やめたほうがいいですわ」

ホームズは、そう言つて男を指差す。

「それを使えば、私たちから手加減の三文字は、消えてしまいます」
その言葉に一瞬たじろぐが直ぐに勝ち誇つた笑みを浮かべる。

「いいのか？俺から依頼主の情報に聞けなくなるぜ？」

「貴方に依頼主なていませんわ」

ホームズは、にべもなく言い放つ。

男は、言葉を無くす。

「何故………そう思う？」

「理由は簡単」

そう言つてホームズは、自分を指差す。

「貴方は、ドロツセルさんが誰だか分かつていなかった」

「それが……」

『『どうした』なんて言わせませんわ。雇い主にドロツセルさんを始末、誘拐、脅迫そのどれかを依頼されていたのなら、ドロツセルさんがどんな人か教えて貰つていなければ不可能です」

男は、冷や汗を滲ませる。

「年齢しか聞いていなかったんだ」

「こんなにバラバラの年齢がドロツセルを名乗っているのにわからなかったんですの？」

ミラが最年長、そして、ホームズ、ローズ、レイアと続く。

「まあ、流石にエリーゼは、違うと分かったようですが、それにしたってねえ……」
男は、確実に追い詰められていた。

「いや、口でしか聞いていない!!年齢なんて見た目で分かるわけないだろ!!」

「だったら、貴方の雇い主は、大切なことを伝えていませんわ」

そう言ってホームズは、自分の瞳を指差す。

「口でしか伝えられないならこれだけは伝えていたはずですよ」

自分の金色の瞳を指差しながら。

「瞳の色、これは最低でも口頭ならなおさら伝えておかなければならない情報ですよ」

口頭で伝えた場合どうしても主観が出てきてしまう。

例えば細身の女性と言われても人によって細いの定義は、若干異なってしまう。

それだったら色を伝えた方がいい。

ホームズの瞳は、金色。

ドロツセルの瞳は、翡翠色。

事前に知っていれば、まず混乱などするはずがない。

ホームズは、淑女というより、悪女の笑みを浮かべる。

「確実に仕事をこなして欲しいのにこんな大切なことを依頼主は、教えないでしようか？ そんなわけありませんよね。だって、貴方からバレたらそれこそ自分の身が危ないんですもの」

ホームズは、更に言葉を続ける。

「黒^{ジン}匣を使った時、貴方をアルクノアと疑いましたが、直ぐにそれはないと判断しました。何故なら」

そう言つてレイアの肩にいるヨルを指差す。

「ヨルが喋ることを知らなかった」

『女物のドレス』と言つたのは、俺だ」

あの時の悪ふぎけの犯人（？）の声の出所がわかつていなかった。

ホームズとヨルは、アルクノア中から恨まれている。

喋る猫の情報知らない奴などいない。

「というわけで、貴方はアルクノアですらない」

ヨルは、黒いドレスに身を包んだホームズの肩に飛び乗る。

「大方、アルクノアからの横流しの黒^{ジン}匣を手に入れた荒くれ者といったところだろ」
八方塞がりだ。

「ホームズの頭が良いみたいに見えます……………」

「二応、ホームズ頭は悪くないよ。発言が頭悪いただけ」
華麗に犯人を論破する。

確かにその行動は、様になっているし、賞賛にあたいするのだが、

「「格好がな……………」」

「聞こえてますわよ」

華麗というより可憐と言った感じだ。

ホームズは、咳払いをすると犯人を睨みつける。

「さあ、どうするんですの？」

男は、カチツとスイッチを入れる。

「決まってる！全員皆殺しだ!!」

黒匣ジンを起動させる。

使用人達を逃す時に倒しきれなかった犯人達も現れてホームズに襲いかかる。

「やれやれ、ダンスのお相手が随分多いですわね」

ホームズは、そう言って椅子を掴むとスカートを広げるほどの遠心力を乗せて放り投

げた。

「うあああああ!!」

椅子に巻き込まれて男達は、たたらを踏む。

その隙に一行は、机の下に隠してあつた武器を取り出す。

「無茶苦茶だよね、ホームズ」

ジュードの言葉にホームズは、肩をすくめる。

「こういう女の子をフォロワーするのが、男性の嗜みですわ」

「女の子ならね……………」

ジュードは、大きくため息をつく。

ホームズは、振り返る

「さて、ドロツセルさん。ダンスパーティーは、まだまだ続きそうですわ」

スカートを広げ一礼をする。

「テンポは、如何致しましょう?」

完璧な淑女の姿にドロツセルは、くすりと笑つた後、高らかに告げる。

「プレスト（急速に）でいきましょう」

「承知しましたわ!」

ホームズは、目の前のテーブルクロスを引っ張つて向かつてくる敵に広げる。

突然視界を遮られて動揺する連中にテーブルクロスの上から思い切り蹴りの連打を

叩き込む。

「んー………ヒールって思ったよりも歩きづらいですわ」

一通り終わるとホームズは、むーっと唸る。

「あ、そう」

アルヴィンは、どうでも良さそうに返すと後ろからやってきた連中を倒していく。その時、男の黒匣ジンが発動した。

小型とは言え抜群の威力でミラ達に襲いかかる。

「ノーム!!」

ミラは、ノームを使って土の壁を出現させ、襲い来る炎を防いだ。

「あーもう！動きづらいー！」

レイアは、そう言うときスカートを縛って膝までの丈にする。

そして、軽快に敵をなぎ倒していく。

男はしびれを切らしてホームズを指差す。

自分をあそこまでコケにしたのだ、絶対に許すわけにはいかない。

「あの女を倒せ!!」

男の下知にホームズに敵が群がる。

ホームズは、ひよいとかわしてテーブルの上に降り立つ。

ホームズを目指して群がる敵。

このままでは、身動きも取れないし、敵から黒匣ジンを打ち込ませる事を許してしまう。「ふむ……ならば、これしかありませんわね」

そう呟くとホームズは、机を飛び石代わりにして、軽やかに飛んでいく。スカートを翻ししながら舞踏会で踊るように軽やかに。

予想外の動きに敵は、対応できない。

そして、ホームズは、最後のテーブルに辿り着く。

男は、慌てて黒匣ジンを操作する。

その間にホームズは、最後のテーブルから飛び上がった。

「全く、その面構えで、壁の花を気取ろうとは」

そう言つてホームズの空中回し蹴りが、男の顔面に炸裂する。

「ぐっは……………」

情けない声と共に男は、ステージの楽器に叩き込まれた。

「身の程知らずというやつですわ」

男は、がっくりとうなだれそのまま意識を飛ばし、御用となった。



男は、その後憲兵に引き渡されズルズルと引きづられていった。残りの面子もリーダー格の男が倒されたことにより、すっかり戦意を失ってしまった。

そんなわけで無事全員御用となった。

ホームズ達も今ではすっかりいつもの服装に戻っていた。

居間にあるテーブルを囲んで一行は、ローエンの入れてくれた紅茶を飲んでいた。

「疲れた……………」

ホームズは、ぐてーつとテーブルに突っ伏していた。

女装して、人質になって、ヒールのまま蹴りを入れての大騒ぎだ。

「ま、俺から言えるのは、ザマミロってところだな」

「半殺しならおれも死なないよね？」

そう言ってホームズは、ヨルに掴みかかるが、ヨルはスルリとかわす。

そんな彼らのいつもの様子にレイアは、苦笑いをしている。

「お疲れ様でした。ホームズさん。これは、特別報酬です」

そう言つてドロツセルから今回の礼金を渡される。

「ヤツホー!! やつたね!! 恥をさらした甲斐があつたつてもものだよー!!」

「私のこと女装男扱いしたこと忘れてませんかからね」

「女装男にした張本人に言われたくありません」

ホームズは、そう返すと金を返せと言われる前に小躍りでその場を後にする。

そして、扉の前でくるとポンチョを広げてドロツセルの方を振り返る。

『人を呪わば穴二つ』つてやつです。いい機会だから覚えておいてくださいね」

ホームズは、ニヤリと笑つてその場を後にした。

「……………まあ、ホームズなりの照れ隠しなんですよ」

エリーゼが、珍しくフオローする。

ドロツセルは、それに笑つて答える。

「俺だけ残したな」

ヨルは、ため息をつくと紅茶をカップから器用に飲む。

アルヴィンとジュードは、欠伸をして伸びをする。

「そんじゃあ、俺はもう疲れたから寝るわ」

「僕も」

そう言つて二人は、そのままその場を後にした。

残されたローエンと女性陣は、紅茶を飲む。

ローズは、紅茶を飲みながらふと浮かんだ疑問をドロツセルに尋ねる。

「そう言えば、完全に婚約を断るためにホームズを使いましたけど、本当に良かったんですか？何もみんながみんな、ドロツセルを利用しようとする人ばかりじゃないでしょう？」

ローズの質問にドロツセルは、頷く。

「そうなんですけど、そんな人がほとんどなんです。残念ながら今の私には、それを見

抜くの力は、ないんです」

ドロツセルは、微笑みながら紅茶を飲む。

「私も出来れば、ルイーズさんみたいになりたいですから」

その瞬間、女性陣は、紅茶を吹き出した。

「ルイーズさん!! 考え直そう!! ドロツセルさんみたいになっちゃダメよ!!」

「ローズ落ち着いて、逆だよ逆」

「私がドロツセルですよ」

レイアとドロツセルの言葉にローズは、我に帰る。

「いやでも、ドロツセルさん、ルリーズさんみたいになりたいなんて言ったらローエン昇天しちゃいますよ」

「ローズさん、聞こえていますよ」

ローエンから突っ込みが入る。

ドロツセルは、クスクスと笑っている。

「言葉が足りませんでしたね。私もルリーズさんみたいに素敵な男性と家庭を築きたいんです」

「言葉が足りないどころか原型がないんですけど」

ローズは、困惑している。

「お前、こうなるって分かってて言っただろ」

「フフフフ」

ヨルの突っ込みにもドロツセルは、笑って動じない。

「ルリーズさんの旦那さんって言うのと、ベイカーさん？そんなにかっこいいだったの？」

レイアの疑問にドロツセルが、頷く。

「そんな事はなかったそうです」

そう言ってドロツセルは、軽く縁をなぞる。

「昔は、ホームズさんとルイーダさんが二人で来てくださって……もちろん、会話の流れで旦那さんが亡くなっていた事を話してくれたのですが、その時不思議に思ったんで聞いたんです」

ドロツセルの空のカップにローエンが紅茶を注ぐ。

『もう一度結婚しないんですか』と」

「それは……」

「ええ。今考えると何て事を聞いたんだらうって思います。幼かったとは言えね」

「領主ですからね、どうしてもそれが当たり前の世界なんです」

ローエンの言葉にドロツセルは、悲しそうに頷く。

「それで、ルイーダさんはなんて答えたんですか？」

エリーゼの質問にドロツセルは、咳払いをする。

『するに決まってるだろう？』

思わぬ回答に一行は、きよとんとする。

ドロツセルは、更に続ける。

『死んだ人間にこんなことで義理立てしたって仕方ないからねえ。ベイカーよりも

魅力的な奴がいればそいつと再婚するさ』

「あれ？でも、ホームズのお父さんは……」

『ただまあ、いないんだけどね、そんな奴』
ドロツセルは、そう言つて菓子に手を伸ばす。

『いないんだ、そういう奴が。だから、私にとつての旦那は、あの人で、私はいつまで経つてもあの人の人のお嫁さんなんだ』

ドロツセルは、にっこりと笑つて続ける。

「こんな話を聞いて仕舞えば、そんな風に思える男性に出会いたいと思つてしまひますよ」

ドロツセルは、そう言つて紅茶に手をつける。

「ホームズの母は、囚われていたということなのか？」

「違うよ。きつと、想つてるのよ」

ミラの言葉にローズは、そう言つて微笑む。

「一途とも違うね。なんかそう言うの悲しいけど、でも素敵だね」
「そうですね」

エリーゼも頷く。

ローエンは、優しく微笑むと、ティーポットを軽く持ち上げる。
「どうですか、皆さんもう一杯」

その提案に女性陣とヨルは、賛成して最後の一杯を楽しんだ。

「ま、パーティーは、しばらくいいかなあ」

レイアの言葉に一行は、笑いあいながら幸せなひと時を過ごした。

こうして長い長い夜は更けていった。



後日談。

「お嬢様、またですよ」

「みなさん本当に熱心ですね……」

ドロツセルは、ため息を吐く。

目の前に広がる手紙の山、山、山。

「ドロツセル様、返事は……」

お手伝いが、手紙をドロツセルに持って行きながらたずねる。

「変わらず、『素性不明の方なので、こちらでも分かりかねます』で済ましましょう」

そうあの後、ホームズ（女装だと知らない）を紹介して欲しい、または、こちらのパーティーに呼びたいと言った手紙が山のようにドロツセルのところに届いたのだ。

「何が、モテないですか……十分じゃないですか」

ドロツセルは、げんなりしながら封書を開いていく。

もうこの所の所ずつとその返事を返しているのだ。

通常業務に加え、この生産性のない後始末。

なんだか、白髪が増えた気がする。

「いえ、ホームズさんの望む形とはきつと違うと思いますよ」

「そんなこと分かっていますよ」

お手伝いの言葉にため息を吐きながら案の定の中身に再び大きくため息を吐く。

「もう、いつそのこと、女装した男だつて伝えた方がよくありませんか？」

「ダメです。ホームズさんがかわいそうですし、カラハシヤール家の名にも傷が付き
ます」

「どこの世界に社交界の場に女装男をだす領主がいるのだ。」

『人を呪わば穴二つです。いい機会だから、よく覚えておいてください』

「ええ、二度と忘れません」

ドロツセルは、最後にもう一度大きなため息を吐いた。

日進月歩でGO!GO!

「さて、次はどこへ？」

ホームズの質問にジュードが提案する。

「ル・ロンドは？ちよつと僕、父さんに聞きたいことがあるし……」

ジュードの言葉にホームズは、頷く。

「へえ、いいんじゃないの」

特にどうつて事なさそうに言う。

「……一応言っておくけど、ホームズだつて無関係じゃないよ」

「え？」

他人事のように言っているホームズにぴしゃりと告げるとジュードは、空間を切り裂いた。



「ねえ、おれなんかした？心当たりないんだけど……………」

ル・ロンドの港に着くと一行はマティス医院を指して歩き始める。

尋ねられたジュードは、ホームズにジトツとした目を向ける。

「ホームズが父さんに会いに来た理由は？」

「両親の生まれ故郷への行き方の手掛かりを掴むため」

「両親の生まれ故郷って？」

「エレンピオス」

「何で、父さんに聞きに言ったの？」

「……………あー……………そういう事……………」

ホームズは、気まずそうに目をそらす。

「うーん……………まあ、おれが言ってもいいんだけど……………」

「いいよ。家族の問題だし、僕が聞くよ。父さんに」

「まあ、それがいいだろうねえ」

そうこうしているうちにマティス医院に着いた。

「ただいま」

ジュードは、そう言つて家に入る。

ドアの開いた音を聞いてジュードの母、エリンがやつてくる。

「ジュード！帰つてきたの？」

「うん。ちよつと……」

そう言つて辺りを見回す。

「父さんは？」

「鉱員の方とフェルガナ鉱山に行つてゐるわ」

「フェルガナ鉱山？」

ホームズが首を傾げるとジュードの母は、頷く。

「ええ。何でも手術に必要らしくて」

レイアとミラが眉をひそめる。

フェルガナ鉱山に手術に必要なものを取りに行くとしたら、一つしかない。

「足が動かない患者さん、いるんですか？」

レイアの質問にエリンが頷いて待合室を示す。

そこには、小さな女の子とその女の子に水を運んでいる男の子がいた。

「妹のために一生懸命なのよ」

エリンの言葉にホームズは、目を向ける。

「そっか……」

ホームズは、頷くとジュードに向き直る。

「どうだい？フェルガナ鉱山でマティス先生を助けに行くつてのは？」

「そうだね」

ジュードが頷く。

「ホームズにしては、珍しく建設的な意見じゃないか」

「一言多い」

ミラの言葉にホームズは、そう返す。

エリーゼも付いて行こうするが、女の子の視線がティポに向いていることに気がつく。

「あの、触りますか？」

「いいの？」

「はい」

ティポを触る女の子を見てエリーゼは、満足そうだ。

それから、ホームズ達の方を向き直る。

「私は、残ります。ティポを見せてあげたいです」

エリーゼの言葉にアルヴィンとローエンが頷く。

「そんなじゃあ、俺たちもここに残るか？」

「ええ。そうですね。行き違いになってもよくありませんし」

二人は、残るようだ。

「君は、どうするんだい？ ローズ？」

「私は、残るわ」

そう言つてニヤリと笑う。

「貴方のここでの日々を聞かないと」

そう言つてエリンの方を見る。

「確か、聞いた話だとここでバイトをしていたとか？」

ローズの質問にエリンは、頷く。

「幸い、患者さんも今は、あの兄妹しかいないし、支障のない範囲でお答えするわ
ホームズの顔から血の気が引く。

「ちよつと、待つて」

「はいはい、行くよホームズ」

「いや、ちよつ、離してレイア！」

「何、話していいの？」

「字違う!!」

ぎやあぎやあ喚くホームズを引きずってレイア達は、フェルガナ鉱山へと向かった。

◇◇◇◇◇

「何もやらかした覚えはないけど、なんだろうこの胸騒ぎは……」

フェルガナ鉱山に辿りついたホームズは、マティス医院を出た時のことを思い出してげんなりする。

「何にも根拠はないけど大丈夫だから、安心して」

「どの辺に安心があるんだい!？」

「やかましいな……」

ホームズの突っ込みを肩で聞いていたヨルは、前足で器用に耳を押さえている。

「何を話していたかは、私も後で聞くとしよう」

「いや、止めて」

ミラの言葉にホームズが制止をかける。

そんなことを言いながら歩くミラを見て、ジュードは、笑み浮かべる。それに気付いたミラは、首を傾げる。

「どうかしたか？ジュード」

「いや、懐かしいなと思つてさ。精霊の化石を取りに行ったのも確か、このメンバーだったよね」

ジュードに言われてホームズは、考え込む。

「そっか、言われてみればそうだねえ。最初は、敵対していた君達と和解して直ぐの冒険だったね」

頷くホームズにミラとジュードは、ジトつとした目を向ける。

「いや、和解というより休戦だったな」

「え？」

「あれだけミラを揺さぶつてたクセによく言うよ」

「あれえっ!?!」

ホームズは、冗談ぬきで驚いている。

「うん、まあ、ジュード結構不信感丸出しだったよね」

「嘘!? てつきり和解したもんだとばかり………」

「いや、逆に何でそう思えたの？」

「だって、ヨルの件の誤解も解けたし……………」

「それを差し引いても大分胡散臭かったよ、ホームズ」

「ジュードは、淡々と返す。」

その返しに真剣に驚いているホームズを見てジュードは、ため息を吐く。

「逆に聞くけど、ホームズは、あの時、僕らのことどう思ってたの？」

「うーん……………」

ホームズは、腕を組んで考え込む。

レイアとは、あの時既に友達だ。

だが、ジュードやミラは、と聞かれると答えに困る。

「商売相手とか情報源？」

「ホームズも人のこと言えないじゃん」

近くで成り行きを見守っていたレイアもため息を吐く。

「いやあ、まあ、アハハハ……………うん……………」

ホームズは、気まずそうに乾いた笑いをした後目を伏せる。

「……………よく持ったよね」

「いや、崩壊したろ」

ヨルが、冷静な突っ込みに全員目をそらす。
ホームズは、それからため息を吐く。

「よく乗り越えたよね、おれ達」

ホームズの言葉にジュード達は大きく頷いた。

「お前が言うな感が凄いな」

「おれが言わないと説得力がないだろう?」

「はい、ストップストップ」

睨み合うホームズとヨルをレイアが止める。

レイアに止められ、ホームズは、前を向く。

その瞬間眉をひそめる。

「ん?あれって……………」

ホームズが指差す先には、倒れている人影があつた。

ジュード達は、すぐに人影に駆け寄る。

倒れているのは、二人、デイラックと鉱員だ。

「父さん!何があつたの!?!」

「…………ジュードか?」

デイラックは、呻きながら返す。

「目をやられたの?」

「大したことはない。粉塵に少しやられたただけだ……ただ」

デイラックの言葉に鉱員に目をやる。

レイアが首を横に振る。

「意識がないよ!岩で頭を打ったかも」

ホームズは、腕を組む。

「とりあえず、ここでこうしてて仕方ないし、病院まで運ぶしかないだろう」

そう言って鉱員を背負おうとするホームズをジュードが止める。

「待って!脳内出血を起こしてる!動かしちゃダメだ」

「ならどうする?」

ヨルの言葉にジュードが頷く。

「治療功で応急処置して動かせるようにする。レイアは、病院に戻ってこの人の受け入れの準備をしておいて」

「分かった」

「治療功で応急処置だと?」

デイラックが倒れたまま声を上げる。

「出血箇所を見誤れば即命取りだぞ!」

デイラックの忠告に対し、ジュードは力強く頷く。

「分かつてる。でも、やらなきや」

「くそ！私の目が見えれば……」

「大丈夫、まかせて」

ジュードの言葉にデイラックは、息を飲む。

「ジュード……お前」

様子を見守っていたミラは、頷いてレイアに話しかける。

「ここは、ジュードに任せよう。レイアは、街に急いで戻ってくれ」

レイアは、頷くと来た道を引き返した。

「ホームズは……」

「二人を運ぶのにも手が必要だろうか？」

ホームズの提案にジュードは、微笑む。

「信じてくれるの？」

「そりやあね。何度おれの怪我を治してくれたと思っっているんだい？」

ジュードは、息を大きく吐く。

「そうだったね」

そう言ってジュードは、治療を始めた。

その行動に迷いはなく、確かな自信に裏打ちされていた。



「患者さんの容態落ち着いたわ。ジュードの処置のおかげね。鍼員さんもお礼を言っていたわ」

無事応急処置も終わり、マテイス院に戻ってきたジュード達は、その言葉を待っていた。

「やれやれ、良かったねえ」

「本当、一時は、どうなるかと思ったよ……………」

レイアは、待合室の椅子に深く腰掛ける。

「私は、別の患者の容態を見てくる」

そう言ってデリラックは、奥の診察室へ、入っていく。

それと入れ違いで、アルヴィン達が出てきた。

「大変だったみたいだな」

「まあねえ」

ホームズは、肩をすくめて返す。

エリンは、そんな面々を見ると優しく微笑む。

「それじゃあ、私は仕事に戻るわ。ホームズの話はまた今度ね」

「はい……………ん？」

エリンの言葉にホームズは、首をかしげる。

「って、あゝっ!？」

そして、思い出す。

ホームズは、ローズに詰め寄る。

「何も聞いてないだろうねえ!？」

「別に。ただ、猫相手によく話しかけてたって」

ホームズの動きがピタリと止まる。

「事情を知らなければ、ただの変な人だよね」

レイアの言葉にホームズは、錆びた歯車のような音を立てて首を動かす。

「結構名物だったってよ、おたく」

「名物？」

「黒猫を肩に乗せて歩き回る、無類の猫好きだった」

「違うのにー!!」

ホームズの心からの叫びが炸裂した。

「ははは………」

レイアは、側で聞いていて苦笑いしている。

そんな事をしていると扉の開き、ガタイのいい男が、可愛いエプロンをして入ってきた。

「マティスいるか……ってレイアじゃないか!？」

「お父さん!？」

「お父さん?」

ローズが驚いて首をかしげる。

「あ、そうか。ローズは、初対面だったね。レイアのお父さんでウォーロックさん。とても料理が美味しいんだよ」

ジュードの紹介にローズは、ふむふむと頷く。

「レイア、お母さん心配していたぞ。後で顔を出して行きなさい」

ウォーロックは、そう言ってホームズの方を見る。

「おや？ ホームズじゃないか、どうしたんだ？」

「いえ、少し不名誉な噂を言われたもので……」

「おかしいな……港で寝る羽目になったことは、誰にも言っていないはずだが……」

「何してるんですか、ホームズ」

エリーゼの言葉にホームズは、深いため息を吐く。

事の顛末を話そうとするホームズを見てレイアは、目を丸くする。

「ちよつと待つ……」

「別に。騒いでるレイアを煽ったらソニアさんに放り出されて、外に締め出されたか

ら、そのまま港で一晩越したんだ」

「ホームズだけ？」

「まさか。騒いだレイアも一緒に放り出されたよ」

「つまりアレだな。一晩一緒に過ごしたわけか」

「ミラ、言い方」

ジュードがやんわりと止める。

だんだんとローズに引きつった笑顔が張り付いていく。

「俺との）内緒話もあつたな」

ヨルのあえて省いた台詞にレイアの頬に冷や汗が流れる。
決してやましいことはない。

だが、何を話したと問いつめられれば、ホームズの初恋の話題にも届くだろう。
いや、それだけならまだいい。

問題は自分の話題にも火の粉が飛ぶことだ。

正直にあの場で喋ったこと全て話せと言われれば、そのことも出てきてしまう。
それは避けなくてはならない。

なら、やらなければならぬ手は一つだ。

「えーつと……じゃあ、わたし、お母さんに会いに行ってくるね!!」
三十六計逃げるに如かず。

踵を返してマティス院を出て行こうとする。

そんなレイアの肩をガシツとローズが掴む。

「レイア。詳しく聞きたいわ」

「……………は……………ハハ、いいよ。答えられる範囲でね」

ネコを被る

「とういわけだから、何も無いよ」

「女の子と二人で過ごして何も無いってどういうことよ」

「いや、風邪ひいたから何も無いってわけじゃあないよ」

「貴方でも風邪ひけるのね」

「ねえ、何が言いたいんだい？」

レイアとローズとホームズのなんとも言えない会話にヨルは、ため息を吐く。

「おい、そろそろ移動しないか？ここにいと一生やつてるぞあいつら」

「ああ、うん」

ジュードは、そう言つて少し迷うが次元刀を取り出す。

「どうなんですか、先生？妹は、歩けるようになりますよね」

そんなことをしていると診察室の方から、幼い男の子の必死な声が聞こえてきた。

好奇心に負けたホームズは、扉を少しだけ開けて、様子を伺う。

「落ち着け、ソラン。結論から言うともアムは、手術をすれば歩けるようになる」

「ほんとうに？」

「ああ」

ディラックの肯定の言葉にソランと呼ばれた少年は、嬉しそうだ。

「だが」

ディラックは、続ける。

「手術の後は、数節に渡る辛いリハビリが必要になる」

その言葉にマムは、顔を俯かせる。

「痛いのか？」

「大人でも泣き出すほどだ」

マムは、言葉が出ない。

ディラックの言葉に食ってかかるのは、ソランだ。

「話が違うじゃないか!!ル・ロンドのマティス先生は、機械を使って歩けるようにし

たつて聞いたのに！」

ディラックは、眉をひそめる。

「……………誰に聞いたか知らないが、そんな便利なものはない」

「大丈夫！リハビリなんて耐えられるよ！」

冷たく言い放ったデイラックの後にレイアが、診察室に入ってそう言った。因みにホームズは、突き飛ばされた。

「わたしも小さい頃大ケガしちゃったけど、この先生にリハビリしてもらったの」胸を張って言うレイアにマームは、顔を上げる。

「お姉ちゃんも？」

「うん。おかげで今は、こんなに元気」

「本当、無駄に元気だよ」

アルヴィンは、肩をすくめて言う。

「無駄ってどういうこと？」

「そういう事」

アルヴィンに食ってかかるレイアにホームズは、起き上がりながら返す。

騒ぐ面々を見ながらミラは、記憶の紐を辿る。

「そう言えば、レイアは、昔怪我をしたと聞いたが？」

「うん。本当にリハビリもやりきって凄かったんだよ」

ミラは、ジュードの言葉に首をかしげる。

（確か、レイアは、ジュードのおかげだと言っていたが……）

レイアは、ホームズ達との言い合いを切り上げると、マームの方を向く。

「だから、先生を信じて頑張るんだよ。目つきは悪いけど名医だから」
「……………」

デリラックは、何か言いたげだが、レイアは、どこ吹く風だ。
デリラックは、ため息を吐く。

「ジュード、来たなら休んで行きなさい。母さんも喜ぶ」
ジュードは、目を丸くした後頷いた。

「それじゃあ、おれ達は、レイアの宿にでも泊まるかい？」

そう、レイアの実家は、宿なのだ。
部屋さえ空いていれば泊まる事も出来るを

ホームズの提案にアルヴィンが頷く。

「親子水入らずの邪魔をしても悪いしな」

「いいよ！それじゃあ、お母さんに伝えてくるね！」

レイアは、意気揚々とロランドの宿に戻っていった。

「あの子、家出娘の自覚あるのかい？」

ホームズが首を傾げたのとソニアの怒鳴り声が聞こえたのは同時だった。



「うう、こつてりしぼられた……………」

「なんで、おれまで……………」

翌朝、レイアとホームズは、ぐったりしていた。

「下手に庇うからだろ」

ヨルの言葉にホームズは、ため息を吐く。

「やっぱりほっとけば良かったなあ……………」

「あのさあ、わたし達友達だよね。なんでそんなにしみじみと言うの？」

「君にだけは、言われたくない」

レイアの言葉にホームズは、そう返すと立ち上がる。

言い切ったホームズとは、対照的にレイアは、まだ何か言いたげだ。

「さて、レイア、挨拶は、済ませたかい？」

そんなレイアに構わず尋ねるとレイアは、ため息を吐いて立ち上がる。

「昨日たつぷりと」

「んじゃあ、ジュード達を呼びに行くとしようかねえ」



マティス医院に行くことと出入口のところ騒がしかった。

「?どうしたんです?」

不思議に思ったホームズが慌てているディラックに尋ねる。

「ああ、ホームズか」

驚いて振り返ったディラックは、ホームズを見て少し落ち着く。

「……昨日きた、兄妹覚えてるか?」

「ええ。まあ」

「兄のソランが行方不明なんだ。見ていないか?」

「いや、見てないです」

ホームズは、首を横に振る。

「そうか………わかった、ありがとう」

そう言つてディラックは、駆け出していつてしまった。

「何だか、大騒ぎだねえ」

ホームズは、腕を組んでジュードを見る。

見るとジュードは、こめかみに指を当てて考え込んでいる。

ホームズは、少し眼を細める。

「何か、心当たりでもあるのかい？」

「……うん。多分、バイカール廃坑だと思ふんだ」

「何でまた？」

「昨日の夜、父さんとウォーロックさんが、何かの機械をそこに捨てたつて話してたんだ。それをソランも聞いてたから」

「なら、行くしかないだろ」

アルヴィンの言葉に頷くとジュードは、ローエンとエリーゼの方を向く。

「二人は、残つて帰りを待つてもらつていい？特にエリーゼは、マアムを元氣付けてあげて」

「分かりました」

『まかせろー』

「皆さん、お気を付けて」

ローエンの言葉に頷くと一行は、駆け出した。



「それで、来たはいいが俺に探せというんだろ？」

「流石、ヨル。察しがいいねえ」

ホームズの言葉にヨルは盛大にため息をつきながら髭を動かしてマアムを探す。しばらくして尻尾で方向を示す。

その方向に夜目が利くホームズを先頭にして走り出す。

ホームズは、走りながら考え込む。

「それで、ソランって子は、デイラックさんが言っていた都合のいい機械とやらを探しに来たってことかねえ？」

「まあ、それ以外に理由はないよね」

ホームズの考えに頷くジュード。

（前にレイアが言っていた事を考える限り、多分その機械つてのは……………）

「恐らくそれだろう」

「おわっ！人の頭の中読まないでおくれよ、ミラ!!」

「別に。私も似たような事を考えていただけだ」

ミラは、そう答えると足を速める。

「だったら、なおさら急がないと」

「…………ねえ、さつきから話が読めないんだけれど」

「安心しろ、直ぐに分かる」

そう言つてヨルが尻尾で示す。

そこには、マアムが何かの前で立っていた。

「やつと見つけた。これが、先生の隠した機械だな。これがあればマアムも」

ソランの前にある、機械。それを見た瞬間、ローズは、眉をひそめる。

「あれって……………」

見間違える筈もない。

今まで散々見てきたのだから。

「早く離れて！黒匣^{ジン}が暴発する!!」

レイアの血相変えた言葉にソランは、思わず縮こまる。

「早く!!」

「でも、これがあれば……」

「でももへちまもない!!」

ホームズのその言葉と同時にヨルの尻尾が伸びた。

伸びた尻尾は、ソランに巻き付く。

巻きついたので確認するとホームズが思い切り引つ張る。

引つ張られたソランは、宙を舞ってホームズに落ちる。

ホームズは、何とかキャッチする。

それと同時に黒匣^{ジン}は、爆発した。

「ふう、間に合った」

ホームズは、ソランをそつと下ろすと、ヨルに視線を向ける。

「尻尾戻ってたねえ、やっぱり」

「やっぱりってお前……気付いてやがったな」

「当然」

いつの間にやら、本来の姿に戻った時の副作用は、全て解けていたようだ。

「それにしてもヨルが人間を助けようとするとはね……………」

ホームズは、ヨヨつと泣き真似をしているとヨルは、ニヤリと笑う。

「当然だ」

「本音は？」

「助けにいったホームズに巻き込まれたくない」

アルヴィンは、質問した自分に嫌気がさした。

ローズは、そんなホームズ達に構わずレイアに尋ねる。

「それにしてもよく、アレが黒匣だつて分かったわね」

「うん…………昔、わたし、大先生がしまいこんであつた黒匣を弄つて暴発させて大怪我し

ちやつたから……………」

「黒匣の暴発……………」

ジュードは、考え込むとアルヴィンとホームズの方を向く。

「やっぱり、父さんは」

アルヴィンは、首を横に振る。

「俺の口からは言えないな」

ホームズは、肩をすくめる。

「そのために聞くために来たんだろう？ ジュード」

二人の言葉にジュードは、頷く。

「分かった。取り敢えず帰ろう」

這えば立て立てば歩めば進めの親心

「ただいま」

ジュード達が帰るとデイラックは、診察室で待つていた。

ジュード達と入ってきたソランに目を向ける。

「自分が何をやったか分かつているな？」

静かだが、有無を言わせないその迫力にソランは、黙って頷く。

二人のやりとりが終わるとジュードは、デイラックに尋ねる。

「バイカール廃坑にあった黒匣ジンを隠したのって父さんだよね？」

「……………ああ」

「一応、聞いてもいい？」

「なんだ？」

「何で父さんは、そんなものを持つていたの？」

「私が、二十年前にやって来たエレンピオス人だからだ」

デイラックの言葉にエリーゼは、目を丸くする。

『そうだったのー!?!』

テイポの言葉に頷くディラック。

「ディラックは、二十年前にジルニトラに乗っていたんだ」

アルヴィンが補足した説明を聞くとジュードは、ホームズに視線を向ける。

「……だから、ホームズはジルニトラの乗客名簿で僕の父さんに会いに来たんだね。故郷への行き方を知るために」

「まあねえ。まあ、欲しい情報は、手に入らなかったけど……」

ホームズは、そう言つてアルヴィンとミラに視線を向ける。

「おかげで断殻界やら、黒匣やらの存在を知つたわけさ」

ディラックは、ホームズの言葉が終わるのを待つて話を続ける。

「リーゼ・マクシアを彷徨つてエリンと出会つて私は、この世界で生きる決意をした」
「ということとは……」

エリーゼが、ポツリとこぼした言葉にディラックが頷く。

「ああ。ジュードは、エレン・ピオス人とリーゼ・マクシア人のハーフという事になる」
自分の出自を知つたジュードにアルヴィンが心配そうに尋ねる。

「シヨック……だよな？」

ジュードは、困つたように頭をかかす。

「うーん………そうでも？」

「ありや？そんな反応？ホームズとえらい違いだな？」

「我慢しないでいいんだよ、ジュード」

「いや、だって何となく分かってたし」

そう言つてホームズに目を向ける。

「エレンピオスに行きたいホームズが、父さんにわざわざ会いに来たんだもの」

ホームズは、目を丸くするとバツが悪そうに頭をかく。

「あははは……言われてみればそうだねえ……」

「でしょ」

ジュード達がそんな会話をしているのに構わずデリラックに尋ねる。

「医療ジンテクスも黒匣^{ジン}なのか？」

「似て非なるものだ。君の靈力野^{ゲート}が発するマナで動くよう改造してある。精霊を犠牲

にすることはないが、その代わり……」

「使いこなすのが困難^ツってわけか」

デリラックの言葉をミラが引き継ぐ。

デリラックは、静かに頷く。

「私は、リーゼ・マクシアに来て、初めて黒匣^{ジン}が精霊を消滅させることを知った。

真実を知った手前、黒匣^{ジン}を使うことはできない」

「でも、父さん、僕達は可能性を見つけたんだ」

ジュードは、そう言って言葉が続ける。

「源^{オリジン}霊^ン匣^ンを生み出せれば、精霊を消さなくて済むんだ」

「源^{オリジン}霊^ン匣^ン？」

訝しげなディラックにジュードが、説明する。

説明を聞いたディラックは、静かに頷く。

「なるほど……確かに源^{オリジン}霊^ン匣^ンが普及すれば黒^{ジン}匣^ンの欠点は、解消出来る」

そう言いながら目を険しくする。

「だが、それにはリーゼ・マクシアとエレンピオス、両世界の理解し合わなければならぬ。相当な時間と努力が必要だろう」

ディラックは、ジュード達を見渡す。

「リハビリの苦痛、理解を得るための努力、厳しいのは、どちらも同じだ」

ジュードを真つ直ぐに見据える。

「何かを得ようとするならば、それに見合う代償を払う必要がある。それは、どんな世界でも変わらない」

ホームズは、ヨルに目を向ける。

ヨルは、フンと馬鹿にしたように笑う。

そんな中、マアムは自分の足を見つめる。

「私、リハビリ頑張つてみる！」

その言葉に一番驚いたのは、兄のソランだ。

驚いているソランの背中をレイアがポンと高く。

「お兄ちゃんとしてちゃんと、支えてあげるんだよ」

「うん」

ソランは、元気に頷いた。

その様子を見ていたデイラックは、申し訳なさそうに口を開く。

「すまなかつた、レイア。あの時、私がちゃんと黒匣ジンを管理していなかつたせいで、君

に大怪我を負わせてしまった」

レイアは、首を横に振る。

「いいよ。その代わりジュードの事が知れたんだもん」

「メモが書ける程にな」

ミラにしては、珍しくイタズラっぽく笑いながら言う。

「ミラ!!」

レイアは、顔を真っ赤にしてミラに詰め寄る。

当のジュードは、首を傾げている。

「何のこと？」

ジュードの質問にミラは、笑みを浮かべる。

「女騎士の秘密という奴だ」

残念ながらホームズとヨルも知っている。

ローズがホームズに尋ねる。

「何のこと？」

「ああ、そっか。君は、まだおれ達と合流してなかったね」

ローズが合流したのは、シャン・ドウなのだ。

そう言った後ホームズは、ウインクする。

「でも内緒。男は、秘密があったほうが格好いいからねえ」

「貴方の秘密じゃないでしょう」

ハアとため息を吐きながら返答がないことぐらい分かっていたようだ。

ミラは、デイラックを見る。

「さて、デイラック。そういうわけだ。もう暫くジュードを借りるぞ」

デイラックは、首を横に振る。

「私の断りなど必要ない。そいつは、もう一人前だ」

デイラックは、そう言うどジュードに背を向ける。

「それと、ジュード。言い損ねていたが、鉱山でのお前の判断は、的確だった」
その賞賛の言葉にジュードは、目を丸くした後力強く頷く。

「いつてきます」

そう言った後、ジュードは、マティス医院を後にした。

それに続くようにホームズ達も後を追った。



ホームズは、前を歩くジュードの背中を見ている。

「羨ましい、ですか？」

そんなホームズの隣を歩くエリーゼが、ホームズに尋ねる。

「まあねえ………両親にあんなふうに言ってもらうことは、やっぱりないからねえ」

その少し寂しそうな物言いにエリーゼは、頷いて返す。

「気持ち、分かります」

ホームズは、柔らかく微笑むとむんと伸びをする。

それからいつもの意地の悪い笑みを浮かべる。

「何だったら、褒めてあげようか、エリーゼ？」

『ホームズの胡散臭い褒め言葉よりも聞きたいことがあるな』

「へえ……なんだい？」

ティポからの思わぬ返答にホームズは、興味深そうに聞き返す。

『レイアのメモにはなんて書いてあったの？』

「ああ、それ」

「因みにホームズ、それ言ったら初恋の人バラすよ」

いつの間にやら後ろにいたレイアにホームズは、びくりと肩を震わせてからため息を吐く。

「そんな脅ししなくても、友人の秘密は言わないよ」

レイアは、ホームズの発言の裏を探すが何もなさそうなのでとりあえず信じることにした。

だが、話はそれで終わらない。

「へえ、それって誰？」

本日二度目の肩を震わせるほどの衝撃。

ローズがいつの間にかやら、会話に参加してきた。

「ほほう。私も興味があるぞ」

とても楽しそうにミラも続く。

レイアは、やってしまったという顔だ。

「別にいいでしょ？ そんなに隠すようなことじゃないわけだし」

「ホームズにもそんな甘酸っぱい瞬間があったのだな」

「ミラ、それどういう意味だい」

「ほろ苦い思い出の方が多そうだと思っただけだ」

「ほろ苦いどころか、ガチで苦い思い出もあるぞ」

「ヨル、余計なこと言うんじゃない」

ホームズがジロリと睨みつける。

ローズとミラは、ホームズの話を待っている。

「〜!!君達にだけは絶対言わない!!」

そう言うときホームズは、走り出した。

「ちよ、逃げるなんてなしよ!」

慌ててローズがホームズを追いかけた。

「つて、ミラは追いかけていないの？」

ミラは、肩をすくめる。

「別に。だって、ローズだろ。ホームズの初恋は」

さらっと言ったその言葉にレイアは、ポカンと口を開く。

「分かってて聞いたの？」

ミラは、頷く。

「どうして？」

「あそこでローズにだけ話すのを渋ったら、ローズがそうだと言っているようなものじゃないか」

ミラの意外な心遣いにエリーゼとレイアは、素直に感心している。

側で聞いていたローエンが不思議そうに尋ねる。

「しかし、ミラさんも知っていたのですね。」

てつきり気付いていないかと思っていました」

「何かの本で読んだのだ。幼い頃の思い出を共有した異性は、初恋の相手の可能性が高いと」

「アルヴィン、こつちを見ない」

レイアがぴしやりと言う。

そこでジュードが首を傾げる。

「あれ？でも、ローズが瞳の色を褒めた記憶は、今のホームズにはないんだよね？」
そう、ヨルが治したその代償として、ホームズには瞳の色に関する記憶がない。

「ま、ホームズの恋に落ちたきっかけは、そこじゃないってことだろ？」

『キザなセリフー！』

ティポとエリーゼがアルヴィンにジトつとした湿度の高い視線を送る。

アルヴィンは、軽い笑みを浮かべて返事に変える。

ジュードは、ため息を吐く。

目の前には、ローズに詰め寄られて困っているホームズ。

「ハハハ……………」

乾いた笑いを浮かべるとジュードは、二人の元へ歩き出した。



「あの子……変わったわね」

ジュード達が去り、少し寂しくなったマティス医院でエリンがそう言う。

デイラックは、首を横に振る。

「なに、当たり前のことが出るようになっただけだ」

デイラックの言葉にエリンは、面白そうに笑っている。

「あなた、ジュードが初めてしゃべった時も初めて歩いた時も同じことを言っていたわ」
そう言って歩み寄る。

「同じくらい嬉しそうな顔で」

デイラックは、優しく微笑む。

「当たり前前だろう。子供の成長が嬉しくない親がいるものか」

始まりの日

「……………よう」

「やあ。珍しいね、君がわざわざ来るなんて」

ヨルの言葉にルイーズは、ベッドから半身を起こした状態で答える。

このころルイーズは、一日の殆どをベッドの上で過ごすようになっていた。

「風呂にいるホームズからも離れられる距離が、ここぐらいしかなかったんだよ」
ヨルは、そう言ってルイーズを見る。

肌は白く、かつてヨルに腹パンを食らわせた拳は見る影もない。

「今なら、君でも勝てるかもよ？」

「勝つても得るものが無い。ボロ雑巾引き裂いたって、何にもないだろ」
ルイーズは、面白そうに笑う。

「そりゃあ、そうだねえ……………くくく」

笑った後、ふうとため息を吐く。

「ルイーズ、お前、あとどれぐらいだ？」

「余命宣告された日から半年ぐらい生きただから、マイナス百八十日ぐらいかねえ」

「そんな人間が、よくこんな寒いところに来たよな」

「だって、雪が見たかつたんだもの仕方ないだろう？」

いけしやあしやあというルイズにヨルは、ため息を吐く。

「お前、本当に人間かよ」

ルイズは、ニヤリと笑う。

「悪魔に魂を売った人間さ」

「冗談に聞こえないな」

ヨルは、心の底から疲れた表情をする。

「せつかくだし、何か話したいことはないのかい？」

ルイズの言葉にヨルは、悩む。

それから、長年の疑問を口にする。

「青い花の村を覚えているか？」

「……………まあね」

「お前は、あの時、ああなる事が分かっているようだった。

可能性の一つとして考えていたのではない。

ああなると、確証を持っていた、違うか？」

「どうしてそう思うんだい？」

「あの場で、お前は一言も信じてるなんて言わなかったからだ。可能性の一つとして考えていたのなら、あの場でそんな言葉の一つや二つ出てきてもいいもんだろ？」

ルイーズは、少し考えてから口を開く。

「あの村の連中はね、自分達が生きるために自分の子供を捨てるような連中だった。だから、ホームズがあんなことを言ってしまったえば、それに食いついてしまうことぐらい簡単に想像出来たさ」

ルイーズは、そう言つて髪をいじる。

「私はね、別に犠牲つてのは、仕方ないと思つている。

そりゃあ、あるよりないに越したことはない。でも、どうしたつて出てしまうものだ。だけれども、」

ルイーズは、ヨルを真つ直ぐに見据える。

「それは、全部『筋の通つた犠牲』ならつてことに限る」

そう言つて言葉を続ける。

「自分達で産んでおいて、それをいらなからと言つて殺してしまうなんて、そんな筋の通らないことは認められない」

拳を握り締める。

「清廉潔白でなくたっていい。ただ、筋の通らないことだけは認めることはできない」

ルイーズは、ヨルに笑いかける。

「それが、ルイーズ・ヴォルマーンという女だよ」

黙ってルイーズの話聞いていたヨルは、その重い口を開く。

「だから、ルイーズ、お前はあの後、ホームズをあつた村に連れて行つたんだな」

ルイーズは、辛そうに顔を俯かせるが、それでも頷いた。

「自分の犯した罪を知らずにそのままだなんて、そんな筋の通らないことは認められない。ルイーズとして、そんなことは認められない」

ルイーズは、両手に力を込める。

「今でも、その判断は百点満点だと思ってる。折れることなく曲がることなく、ルイーズの信念を貫き通せたんだもの」

でもねえ、と言葉を続ける。

「ホームズの母親としては零点だよ」

ルイーズは、俯いたまま言葉続ける。

「私は、あの時ホームズの生き方が歪むことも全て分かつた上で連れて行つたんだ……ルイーズの信念を貫き通すために」

ヨルは口を挟まずにルイーズの告白を聞いている。

「母親なら、ホームズを庇わなければならぬ時に私は、自分の信念を優先したんだ」

……」

今のルイーズに叫ぶだけの力はない。

それでも、その言葉には鬼気迫るものがあつた。

彼女の信念を理解することの出来るものがない中、それを貫き通し、そして死んでいく。

間違ひなく誰だつて彼女を素晴らしいと讃えるだろう。

最後まで貫いた彼女を美しいとさえ、評価するだろう。

だが、彼女自身、ルイーズだけが、それをしない。

いや、出来ない。

ルイーズとしてなら、そんなことはなかつただろう。

だが、彼女はルイーズ・ヴォルマーノであると同時にホームズの母親なのだ。

だからこそ、彼女は、この生き様決して誇りにしない。

忌むべきものとして生きていた。

「どこかで、破綻を起こすことぐらい想像は、出来ていたさ。だから、覚悟もしていた。今更、その生き方を否定するつもりもない。でも………それでも………」

ルイーズは、自分の指にあるピンクの指輪を見る。

「ホームズの母親を名乗る気にはなれないねえ………」

ルイーズは、とても寂しそうに笑みを浮かべた。

長いルイーズの告白を聞いたヨルは、静かに口を開く。

「……………子どもの犯した罪を隠すのが母親の仕事じゃないだろ」

「え？」

「子どもが悪さをしたら、そして、それに気づいていないなら、それに気付かせ、二度とやらないように導くのが親の役目だろ」

ヨルは、そう言つてルイーズを真つ直ぐに正面から見据える。

「その点でいけば、間違いなく、お前はその役目を果たした。二度とホームズは、あんな光景作り出すことはしないだろ」

暗く静かな部屋でヨルは、言葉を紡ぐ。

「お前は、間違いなくルイーズである前にホームズの母親だ。誰が何と言おうとな」

ヨルのその言葉を聞いた瞬間、ルイーズは、本当に驚いたように目を丸くする。

「慰めてくれるのかい？」

「俺は、人間を慰めるほど人間が好きじゃない」

そう告げるとため息を吐く。

「だいたい、事の発端はあの神父だ。生き方歪めたとしたら、彼奴らがだろ」

「……のかな？」

ヨルの現状を分析する言葉をルイーズが遮る。

「あ？」

「私がホームズの母親で、いいのかな？」

「お前以外誰がいるんだ」

ヨルのその言葉にルイーズの瞳から大粒の涙が溢れた。

ヨルは、ぎよつとしたがルイーズは、それに構わず嬉しそうに言葉が続ける。

「ふふ、ありがとうねえ、ヨル。今日は良く眠れそうだよ」

ルイーズは、そう言うと言と何かを放り投げる。

「なんだこれ？」

「まあ、時が来れば分かるさ」

そんなことを話しているとがちやりとドアノブが周り、風呂から出たホームズが部屋に入ってきた。

ルイーズは、慌てて瞳の涙を拭う。

「あ、やつぱりここにいた」

椅子にちよこんと座っているヨルを見てホームズがそう言うと言は、つまらなそうにあくびをする。

「どうやらルイーズの涙には、気付いていないようだ。」

「何だ、もう上がったのか？」

「そういうこと。ほら、もうこんな時間だし、おれたちの部屋に戻るよ」

ホームズは、そう言ってヨルを部屋から連れて行く。

ルイーズは、そんな彼らに優しく微笑む。

「おやすみ。また明日ね」

「うん。おやすみ」

「またな」



ヨルは、扉を尻尾で開けると忌々しそうに毒突く。

「おい、ルリーズ。ホームズどこだ。あの野郎自分で決めた出発時間に現れな

………」

そう言つて目に入つてきた光景にヨルは、言葉を飲む。

それからため息を吐いて、一言だけ呟く。

「……………そうだったな」

そこにはあるのは、もぬけの殻となったベッドだけだ。

ルリーズの姿はどこにも無い。

この世のどこにも。

あの翌日、ルイズは目をさます事はなかった。

翌朝、ルイズはそれこそ付き物でも落ちような安らかな笑顔で眠りについていた。そこから数日は、あつという間だった。

幸い、墓の場所を元々ガイアス王に用意してもらった為、葬儀は滞りなくすんだ。

葬儀を済ますとホームズは、そのまま黙々と部屋の片付けを済まし、今やこの部屋には何もなかった。

ある筈のものが無い。

いる筈の人間がいない。

聞こえる筈の声がかえらない。

ヨルは、少しだけうつむくと小さく、本当に小さく鼻で笑う。

「フン……人間の女の言葉なんて信じるもんじゃやないな」

また明日という小さな約束を守れなかった人間にヨルは、小さな声で悪態を付くとその部屋から出た。



「ここにいたのか」

屋上についたヨルは、ようやくホームズを見つけた。

「んー？」

ホームズは、屋上の手すりに体を預けながら気だるそうに振り返る。

その目元にはうつすらと涙が浮かんでいた。

「お前から提案された出発時間は、過ぎてるぞ」

「あれ？もうそんなに時間経ってたっけ？」

ホームズは、そう言って再びカン・バルクの街並みを見下ろす。

視界に広がるのは、白銀の世界だ。

雪の好きな母親に連れられてここには何度か足も運んだ。

だが、もうここに留まる理由はない。

「……聞き損ねたが、これからどうするつもりだ？」

ヨルの質問にホームズが、指輪を見せる。

それは、ルイズがいつもはめていあの指輪だった。

「父さんと母さんの故郷に行く」

「エリンピオスにか？でも、どうやって？」

「それを探そうと思う」

ホームズは、迷いなくそう答えた。

「探す？」

ホームズは、紙を見せる。

「ジルニトラの乗員名簿だつてさ。これに乗ってる人に聞くが一番だと思うけどねえ」

ホームズは、そう言つて指輪をはめる。

こんなところでそれを行うのが危険な行為である事を知るのは、もう少し後の話だ。

「両親の親戚や知り合いにここでの事を伝えたいし、二人の故郷を息子として見たいし、見たことのないものを見たいし、行った事のないところに行きたい」

理由を並べるホームズ。

きつと、どの言葉にも嘘はないが、言っていない言葉もある。

ヨルは、ふうと、白い息を吐き出す。

「まあ、この景色も飽きたし、それがいいかもな」

ヨルは、そう言つてホームズの肩に飛び乗る。

ホームズは、屋上から飛び降り、屋根から屋根へと飛び移りながら地面に着地した。その瞬間ポンチヨが、ふわりと広がる。

「さて、それじゃあ、行つてきます」

ホームズは、そう言うのと二度と振り返る事なくカンバルクを後にした。



「やれやれ、思えば遠くに来たものだ」

ヨルは、ルイズの墓前でそう呟く。

最後のリクエストは、ヨルだった。

ルイズの墓前に行きたいとジュードに言った。

誰の返答もないが、それでもヨルは、そう言わずにはいられなかった。

「……………やつぱり、お前は、ルイズと呼ぶより、ホームズの母親と呼んだ方が相応しいんだろうな」

最後まで、母親であろうと悩み抜いていたその姿をヨルは、あの夜から一度だって忘れたことはない。

「ヨル」

ホームズが離れたところから呼ぶ。

「そろそろ行くよ」

「……………ああ」

ヨルは、そう言うのとホームズの肩に飛び乗る。

「お前は、いいのか？」

「別に。ついさつき済ましたし」

「いつの間に……………」

ヨルが驚いていると、ホームズは悪戯つぽく笑う。

「内緒。男は秘密があつた方が格好いいからね」

「そんな男になれるといいいな」

ヨルの思わぬ返しにホームズが目を白黒させていると風が吹き抜ける。
ニヤリとホームズは、笑う。

「なるさ。おれを誰の息子だと思っているんだい？」

ヨルは、その言葉を聞くと楽しそうに笑った。

最終章

三度目の正直は狙うもの

「ふう、また、ここに来たねえ」

辺り一面に広がる水晶。

一行は、再び世ノ精途ウルスカールに来ていた。

ありとあらゆる事にケリをつけ、やって来たホームズは、息を吐き出す。

「まあ、ヨルも復活したし、一応万全であるよ」

「一応とか言わないでよ、ホームズ」

ジュードはジトツとした視線をホームズに送る。

ホームズが弁解しようとするミラが手で制し、目配せをする。

ミラの視線の先には、今やただ一人の四象刃フォーブ、ウインガルがいた。

「一応、言っておきたいんだけど」

「必要ない。お前たちを陛下の元には行かせない」

ウインガルは、ホームズの発言をにべもなく切り捨てる。

「そうはいかない！僕は、ガイアスを止めて、断殻界シエルを解放するために来たんだ」

ウインガルは、呆れたようにため息を吐く。

「改めて言おう。陛下の元へは、行かせない。お前たちは、陛下の重みになるからだ」
ウインガルの言葉に一行は、眉をひそめる。

「……………我々が重みですと？」

ローエンの疑問にウインガルが頷く。

「陛下は、目指す世界のため、お前達のような強き者を求めている」

「では、何故貴方がその邪魔を？」

ローエンの質問にウインガルは、刀を引き抜き構える。

「お前達が、理想の脅威となろうと殺しはしないからだ。

ならば、陛下の重みとなる者を排除することこそ、私が為さねばならないことだろう

！」

そう言うのと増霊極ブリスターを起動させ、髪の白いあの姿になる。

「だったら、僕は貴方と戦うだけだ！」

ジュードが、拳を構える。

その瞬間、ウインガルは、ニヤリと笑って床を刀で叩く。

キーンという高い音が響き渡る。

その突然の行動の意図がわからず、一行は、首を傾げた。

先に気づいたのはヨルだった。

「野郎、やりやがった！構えろ！魔物が来る！」

その言葉と同時に魔物達が、押し寄せてきた。

あの音は、魔物を呼び寄せるための行動だったのだ。

合図さえなく、魔物は、一行に襲いかかった。

「ウインガルには、襲いかからない……何で？」

レイアが戸惑いながら棍を振るう。

《俺が、何もせずにここでお前達を待っていたと思うか!?!》

「なんて？」

「魔物を手懐けたそうだ」

ヨルは、そう言つて尻尾を伸ばす。

尻尾が、魔物に絡まるとホームズは、尻尾ごと掴んでそのまま魔物を叩きつけた。

それぞれ、戸惑いながらも何とか対象する。

しかし、忘れてはいけない。

敵は魔物ではない。

ウインガルだ。

対処している間にウインガルの白刃が迫る。

まず初めに捉えたのは、ホームズだ。

ホームズが魔物を蹴り飛ばしたと同時に、ウインガルの刃が、首に向かって薙ぎ払われる。

「あつぶないわね……………」

その刀を割り込んで二刀で受けるものが、一人。

「ローズ!!」

「むん!!」

ホームズの驚嘆など構わず、気合いと共にウインガルを弾き飛ばした。

ローズは、刀を振り下ろすと構え直す。

「貴方達は、魔物の対処してなさい。ウインガルは、私がどうにかするわ」

「どうにかって……………」

ホームズは、そう言って向かってきた魔物を蹴り飛ばす。

「君一人じゃあ、無理だろう?」

「なら、二人いればどうですか？」

そうやってローズの隣にローエンが、立つ。

ホームズは、ため息を吐く。

「分かった。その代わり魔物は、そっちにやらないよ」

「ええ。頼みますよ」

ホームズは、それっきりローズ達の方を振り返らなかつた。

「一勝一敗、つてところね、ウインガルとの勝負は」

ローズは、ウインガルを真正面から見据える。

カン・バルク戦で一敗。

ファイザバード沼野で、一勝。

「ええ。そうですね。ついでに一敗目は、私とのコンビでしたね」

そう言うとお互いのリアルオーブが繋がる。

「では、最後の一勝を取りに行きましょう！」

「当然！」

ローズは、そうやって地面を踏み込んだ。

ローズの振りかぶった刀とウインガルの刀がぶつかり合う。

二人の刀は、お互いの力によって弾かれる。

「こんつのお!!」

ローズの二刀の同時攻撃が繰り出される。

ウインガルは、それを受けてローズを先程お返しとばかりに飛ばす。

思わず宙に浮いたローズにウインガルの追撃が襲う。

ローズは、宙返りしながら刀を受ける。

羽織を翻して着地すると、ウインガルは、間髪入れずに襲いかかる。

「マーシーワルツ!」

ローエンの舞うような剣戟が、それを防ぐ。

「ナイス、ローエン!!」

ローズは、そう言うとローエンを飛び越えて刀を打ち下ろす。

ウインガルは、慌てて下がるが、僅かにローズの刀をもらってしまう。

《ナメるなっ!!》

しかし、歯を噛み締め直ぐに刀を振りかぶってローズに斬りつける。

「つぐー!」

相手を斬ったという隙を突いた攻撃にローズの対処がワンテンポ遅れる。

ローズの肩から血が噴き出す。

「ローズさん!!」

ウインガルが、続けて攻撃を仕掛ける。

「何のこれしき!!」

ローズは、そう言つて刀の柄でウインガルの刀を殴りつけてその攻撃を防いだ。刃同士とはまた違う音が響き渡る。

ウインガルは、殴りつけられて発生した衝撃を利用して、後ろに下がる。

「蒼刃追蓮!!」

しかし、ローズの蒼い刃の二連撃がウインガルを追う。

《チイツ!!》

ウインガルは、刀で防ぐ。

だが、下がりながら無理やり防いだせいでウインガルの態勢は、まだ崩れたままだ。むしろ悪くなった。

「ファイアボール!!」

ローエンの火球が、そこに襲いかかる。

それと同時にローズが走り出した。

ローエンの火球を防いだと同時に、ローズが、間合いに入る。

《!!》

ウインガルの刀は、ローエンの火球を防いだばかりでまだ、こちらに反応出来るよう

な状態ではない。

(とつた!!)

その確信と共にローズは、振るう刀に全ての神経を注ぐ。

白刃は、風を切りうねりを上げてウインガルに迫る。

「な……………!?!」

刀で防ぐことは、不可能と見切りをつけたウインガルは、自分の右手でローズの刀の根元を掴んで止めていた。

根元が、一番刃の切れ味が鈍い。

だから、多少の痛みさえ覚悟して仕舞えば、どうってことないのだ。

《何を驚く？そつちの得意戦法だろうが!!》

ウインガルは、そう言つてローズの腹を蹴り飛ばす。

ウインガルの足は、ローズの胃に衝撃を伝える。

衝撃で震える胃は、中身を全て逆流させる。

「——っか、ゲエっ!!」

ローズは、溜まらず吐き出した。

ウインガルは、嘔吐し手の内の緩んだ刀を奪い、崖下に投げ捨てる。

「ブライトベル!!」

ローエンの金色に輝く鐘が現れ、更に追撃しようとする、ウインガルを弾き飛ばした。

「ローズさん!」

ローエンが、その隙にローズに駆け寄る。

「立てますか?」

「当然。あれ以上の蹴りをどっかの誰かさんから受けたもの」

ローズは、口元を拭って立ち上がる。

ウインガルも同じように立ち上がる。

傷ついたぐらいで歩みを止めるような二人ではない。

繰り返されるその一撃をローズは、残った一刀で何とか防ぐとそのまま普段は、刀を持つている左手を握りしめ、ウインガルを殴る。

予想外の攻撃にウインガルが戸惑っている間にローズは、頭にかかる霞を振り払うために唇を噛んで意識を戻す。

「フン、刀一本になったからって別に変わらないわ」

そして再び刀をウインガルに向かつて振り抜く。

ウインガルは、それを弾いて真っ直ぐにローズの首に迫る。

ローズは、腰にある鞆で弾き返す。

僅かに距離ができる。

「いくわよ、剛招来・纏!!」

紅い鬨気が、ローズの刀にまとわりつく。

ローズの刃は、赤々と輝く轟音と共にウインガルの刀にぶつかる。

《ぐっ！重い!!》

その重みにウインガルは、思わず息を飲む。

だが、それだけだ。息を飲むだけなのだ。負けを確信するほどではない。

何故なら、ウインガルの力だって負けてはいないからだ。

ウインガルは、すぐさま距離を詰めた。

そして、ローズと同等かそれ以上の力で鏝迫り合いに持ち込んだ。

そして、僅かに力を緩める。

ローズの態勢が崩れる。

《(変わらないな)》

そこをウインガルがいつかのように押し返し、完全に態勢を崩す。

ただ一つ違うのは、今回のウインガルに手加減などないということだ。
リリアル・オーブが、爛々と輝く。

ここから、繰り出される技はただ一つ、

《覚悟は良いか？》

秘奥義だ。

光輝く鎖が、ローズを縛る。

ウインガルの刃が目にも止まらぬ早さで、ローズを斬り刻む。

《喰らえ雷！》

ウインガルは、最後の一刀に力を込める。

《ライトニングノヴァー!!》

鎖は弾け、ローズは、空を舞う。

「ローズ!!」

ホームズが、その惨状を視界の端で捉える。

「阿呆、こつちをどうにかしろ」

ヨルの忠告通り、魔物は、真っ直ぐホームズに襲いかかってきた。

「この……………」

迫り来る魔物のせいで、宙を舞うローズに間に合わない。

次の瞬間、ウインガルの後ろでドサツという音が響く。

《次はお前だ》

ウインガルは、そう言うのとローエンに向かつて踏み込む右足を強く打ち鳴らす。だが、それ以上は進めなかった。

ウインガルの後ろで気配が現れる。

思わず後ろを振り返ると、そこには血だらけになりながらゆらりと立つローズがいた。

《馬鹿な、即死のはずだぞ》

「何言ってるか分からないけど、想像は付くわ」

ローズは、そう言うのと懐から、ハチマキを出す。

そのハチマキをキュツと額のあたりで縛る。

新たに巻いたハチマキのおかげで血が目まで落ちてこなくなった。

ローズは、既にある顔の血を羽織でふく。

「ローエンのおかげよ。貴方の出した鎖に紛れてローエンの精霊術が紛れ込んでいたのよ」

ローエンのソリッドコントロール鎖クションにより、ウインガルの刀は、致命傷には至らなかったのだ。

ローズは、大きく深呼吸をする。

そして、リリアル・オーブが輝く。

二刀あるに越したことはない。

だが、一刀で戦えないかと問われればそうではない。

一刀で秘奥義が出せないかと問われれば、そんな訳はない。

「ローエン、頼むわ」

「ええ。お任せを」

ローエンは、そう答えるとウインガルに細剣で挑む。

しいて言うなら、隙がデカすぎるので、あまり使わないのだ。

「乙女の雷覚悟しなさい！」

ローズは、そう言つて刀を鞘に八割納める。

鞘と柄の間から現れる二割の白刃が眩しい。

それを目の前に掲げ、口を開く。

「天光満る所我はあり」

ローズの足元に精霊術の陣が現れる。

詠唱に気付いたウインガルは、ローエンの脇を抜けて走りだそうとする。

だが、それを許すローエンではない。

細剣が、襲いかかる。

「黄泉の門開く所汝あり」

その陣から雷が徐々に現れる。

それは、まるで今にも破裂しそうな水風船を必死に押さえているようだった。

この技は、一度だけホームズに放ったことがある。
だが、それは、正しい形ではない。

いや、正確にいうなら、ローズにとって正しい形ではない。

「出でよ、神の雷!!」

轟音と共に押さえられていた雷が眩いばかりの青い光を放ちながら現れる。

そして、その雷光は、鞘から僅かばかり現れている刃に収束していく。

全てが刀に収まった瞬間。

パチンという小気味よい音と共に鞘の中に収まる。

ウインガルは、ローエンを飛び越え、自身の刀に先ほどローズに放ったのと同じ力を
結集させる。

そのまま落下のスピードと共にローズに向かって振り下ろす。

ローズは、身体の反転と共に刀の柄に右手がかかる。

「これでおしまい!!」

左手の親指が鯉口を切る。

「インディグ……………」

引き抜かれる刃と共に現れたのは、先ほど現れた雷、いや、無理矢理鞘に納められたせいで、まるで神の怒りのように猛り狂うそれが、現れた。

「……………ネイション!!」

ローズの雄叫びと共に、増幅された神の雷が、全容を表した。

その雷は、ローズの抜刀に乗せられ、落下と共に迫るウインガルの刀と真正面からぶつかった。

次の瞬間、爆音と共に目を開けていられないほどの光が放たれた。

「……………何が……………」

ようやく目が慣れてきたホームズが目を開けて、真っ先に飛び込んできたのは、自分達を苦しめていた魔物消えた光景、そして、柄のない刀の刃がくるくると宙を舞っている様だった。

その刃は、そのまま切っ先から地面に刺さった。

「馬鹿な……………」

増^{ブリスター}霊極の効果の切れたウインガルは、柄だけの刀を握りしめたまま膝をついて眩いた。

雷の影響でウインガルの身体は、痺れて思うように動けない。

ローズは、抜刀から姿勢を戻すと納刀する。

「二勝一敗、私の……ううん。私達の勝ちよ、ウインガル」

ローズの言葉が静かに響いた。



「……………イルベルト、クリステイ、お前達なら分かるはずだ」

ローズは、エリーゼとレイアそして、ジュードのフルメンバーから治療を受けながら耳を傾ける。

「陛下は正しい。黒^{ジン}匪を壊せば世界は変わる……」

ウインガルの言葉にローエンは、首を横に振る。

「自分で決めた道でなくては、世界は変わらない。」

わたしは、やっとそれに気付きました」

ローエンは、静かにそう告げた。

この旅で学んだことだ。

世界を変えるのは、当たり前のことだが簡単なことではない。

なら、どうするか？

ウインガルは、目を丸くするとそのまま俯く。

「今になって最前列に乗り出すか……全く、恐れ入る」

それは、ウインガルから初めて聞く、ローエンに対する賞賛だった。

「生涯現役だからね、ローエンは」

ローズは、まるで自分のことのように言った後ウインガルを見据える。

「貴方の言う事も分かる。それでも、世界を変えるのは私達よ」

ローズの言葉にウインガルは、下を向いて首を横に振る。

「私は……まだ……陛下の理想を成し遂げなければ……」

麻痺する体を押し殺してウインガルは、立ち上がる。

「どうして、そこまでして……！」

「黙れ!!」

レイアの言葉にウインガルは、一喝する。

「ウインガルさん」

そんなウインガルにローエンは、優しい声音で話しかける。

「ガイアスさんが、私達を手にかけないのと同じ理由であなたを側に置いているのですよ」

ローエンは、更に続ける。

「ウインガルさん、ここで死ぬのは、ガイアスさんの理想を」

「イルベルト！」

そんなローエンの言葉をウインガルが遮る。

「それ以上は……！」

そう言うのと再びあの白髪姿に変わる。

再び臨戦態勢に入ってしまった。

「ちよつと！それって連発していいものなの？」

治療を終えたローズが声を上げるのと同時にウインガルは、刃だけとなった刀を掴む。

《う……………グア!!》

ウインガルは、刃を持ちながら苦しみ始めた。

増霊極ブースターが頭に埋め込まれ、しかも連発までして無事に済むわけがない。

「しつかりしてください!!」

駆け寄るローエンに目を血走らせたウインガルが刀を振りかざす。慌てて下がるローエン。

「早く解きなさい!!それ以上は、どうみたって持たないわ!!」

ローズも止めるが、ウインガルはその状態を解かない。

《違う……俺はこんなものに……殺されるんじゃ………ない》

ウインガルは、そう言うど柄のない刀を地面に思い切り突き刺した。

暴走した霊力野^{ゲート}から発生したマナをそのまま込めた一撃は、一行の足元を崩した。

「ヨル!非常識・改を!!」

「無理だ!間に合わん!!」

地面の崩壊に巻き込まれた一行は、ウインガルから遠ざかっていった。

ただ一人、ローエンだけが、彼から目を離さなかった。



マクスウェル一行が見えなくなるとウインガルは、ようやく増霊極ブースターを止める。

夜叉を思わせる白い髪は、いつもの黒髪に戻った。

《イルベルト………ガイアスが世界の王たる人間だ》

もう、ウインガルの目は霞始めている。

《俺の思い………今のお前なら………》

柄のない刀は、パキンという音と共に砕け散った。

ウインガルは、ばたきと仰向けに倒れ、それつきりもう二度と立ち上がる事はなかった。

こうして、最後の四象刃フォーブは、その生涯の幕を閉じた。

先のことを言えば猫が笑いころげる

「物の見事に落とされたねえ………」

ホームズは、上を見上げて思わずため息を吐く。

ウインガルの最後の一撃によって一行は、それぞれ一人ずつ離れた足場にいた。

「どうするんだ？ 飛ぶには無理があるぜ」

アルヴィンの視線の先には、一行がいる。

確かに飛んで、合流するには無理がある。

『アルヴィンなら、大丈夫だよー！ 嘘つきなんだから！』

「あん？」

ティポの言葉に不機嫌そうに聞き返すとエリーゼがにこしながら現れる。

「アルヴィンなら、届きますよ。ムリっていうのは、嘘です」

その言葉に微妙にショックを受けたアルヴィンは、遠くを見つめる。

「だんだん、俺の扱いが酷くなってるな」

「自業自得ー!!」

「うるせえ、ホームズ!! お前に言われたくねーよ」

「言われたくないなら、努力したまえよ」

「減らず口を……………」

アルヴィンが拳を握り締める。

「あ、私の刀あつたわ、ラッキー」

ローズは、アルヴィンとホームズの罵り合いには、構わず先ほどウィンガルに落とされた刀を拾っていた。

「それで、どうするのかしら？」

ローズの言葉を聞きながらレイアは、自分達のいた場所を見上げる。

「上に戻る道もないよ。ホームズ非常識・改できそう？」

レイアの言葉にホームズは、首を横に振る。

「無理だねえ。多分、登ってる途中で時間切れだ」

そう言つて一行の場所をぎつと把握する。

「みんなのところに飛び移つてもいいけど、おれ一人が合流してもねえ……」

「二箇所に集めようにもその時点で時間切れだ」

つまり、肝心のガイアス戦で手札を一枚失つてしまう。

レイア達が頭を捻っている。

そんな中、ローエンが上空を見つめる。

「ローエン、ウインガルが無事だとは思えない」

ミラが離れた足場から尋ねる。

「はい。ただ、最後にウインガルさんの声が聞こえた気がしたのです」

「なんて言ってたの？」

ジュードの言葉にローエンは、少しだけ言葉に詰まる。

「よく……………聞き取れませんでした……………」

そして、首を横に振る。

「ジュードさんが、気にしても仕方のないことですよ」

そう言つて鼓舞するように口を開く。

「それよりも、この状況からどうやって先に進むか考えましょう。

ホームズさんに一箇所に集めてもらい、その後、ヨルさんが補給すると言うのも手で

ですが……………」

「時間がかかるな」

ミラの言葉にこくこくホームズとヨルが頷く。

「だったら、方法は一つ、別々に進もう」

「どのみち、私達の目的は、一つか」

ジュードの提案にミラが頷く。

「ヨル、ガイアスとミュゼはどこにいる」
ヨルは髭をピクリと動かす。

「この最深部にいる。ま、何処からでもいけるだろ」
そう言いつつヨルは、ニヤリと笑う。

「ま、途中で移動してたら知らんがな」

「保険のかけ方がカッコ悪いわ……」

隣で聞いていたホームズは、ため息を吐いた。

「俺が一番にガイアスの所にたどり着くぜ！」

そんな中、アルヴィンが立ち上がって宣言する。

「その嘘もお守り代わりに受け取っておきましょうか」

「あんたまで………つたく」

ローエンから辛辣な返しにアルヴィンは、思わずたじろぐ。

ローエンは、そんなアルヴィンに構わず先に進む。

「よーし！わたしが一番乗りするからね」

レイアがむんと胸を張る。

「みなさん、ガイアスのところで会いましょう！」

『エリーゼかっこいいー！』

「それじゃあ私も一番乗りを目指すわ」

ローズは、腰に刀を納め、髪を結び直して、気合を入れる。

ホームズは、そんなローズを見ながら首をかしげる。

「そんな、髪留め持ってたってけ？」

ローズは、大きくため息を吐く。

「今更……………？まあ、仕方ないわよね……………」

ホームズから貰った髪留めの紐を壊してしまったため、あまり強く出れない。

「似合ってるね」

ホームズは、そう言うのと背を向けてガイアス達の元へ走り出した。

「……………へ？」

不意打ちの言葉にローズは、理解が追いつかない。

レイア達も目を丸くしている。

「んじゃあ、また後で！」

ホームズは、そう言うのと軽やかに下の足場へと飛び降りた。

「さらつと言ったね」

「もつと聞きたいなら、合流しかないなローズ」

「ミラも言うようになったわね……………」

ローズは、大きく息を吐き出すと熱くなる頬をパンと叩く。

「よしー！」

ローズは、そう言つて走り出した。

「みんな、また後で」

ジュードがそう言うのとローズは、後ろで手を振つて返した。



「邪魔!!」

ローズは、目の前の魔物を切り裂く。

迫る魔物をローズは、最小の動きで斬り伏せていく。

周りには、もう魔物がいなことを確認するとローズは、歩き出した。

コツコツとなる足音がやけに大きく聞こえる。

いつもは、自分の足音など気にならないぐらい賑やかなのだ。

そんな中を歩むローズは、思いを巡らせていた。

ローズには、考える事が山ほどある。

中でも重要なものは、あの女性からの宿題だ。

ホームズの事だ。

どう償おうか悩んでいたところ、ホームズに釘を刺されてしまった。

「……………まあ、大体答えは出てるんだけれども」

ローズは、そう呟きながら歩みを進める。

「にしても……………これ、終わったらどうしようかしら……………」

ローズには、ホームズのような目標もない。

ジュードの源^{オリジン}霊匣の研究は、もちろん協力するつもりだが、それでもローズの力では限界がある。

（戦いに挑む前から、戦いの後のことを考えている自分が馬鹿みたいね）

だが、考えずにはいられない。

そして、分かっている。

今、この場が出る答えではない。

ローズは、自分の刀を見る。

誰かに自分の傷を押し付けたくはない、そう思い強くなろうと力を得た。

だが、それは結局、傷付けてはならない人を傷つけた。

力は、あれど強くはない。

ならば、強くなろう。

それは、この刀を取ること決める時に誓ったことだ。

ローズは、大きく深呼吸をする。

「結局のところ、これしかないわ」

刀の位置を整える。

「勝ち取る。目標も未来も。今は悩む時間はないけれど、これが終われば好きだけ悩めるもの」

ローズは、そう言う決意を新たに歩みを進めた。



「ガラにもないことは、言うもんじゃないぞ。しぼうふらぐになるからな」

「ヨル、それってどういう意味だい？」

ホームズは、小走りで道を進んでいた。

目の前にあの魔物が現れる。

精霊術で出来た魔物は、あつという間にヨルに丸呑みされた。

「ある行動やある言葉の後に死ぬ奴だ。具体的に言えば……」

「そつちじゃあない！誰がしぼうふらぐの説明しろつて言つたよ!?!ガラにもないのほうだよ！」

「なんだ、そつちか」

「こつちだよ！あれ？あつちだっけ？」

「どつちだ」

「こそあど言葉で混乱しているホームズを放置してヨルは、続ける。

「似合つてるとか言わないだろ、お前」

ヨルに言われホームズは、首をひねる。

「そつち？」

どうやら心当たりがないようだ。

また一つ、モテない理由を見つけたヨルは、馬鹿にするように鼻で笑つて会話を終わらせる。

会話が終わり静寂が訪れる。

隣には、誰もいない。

その道を鳴らす足音は、ホームズだけ。

最初は、軽快に進んでいた足音もだんだんと歩くスピードに変わっていった。

「……………なんか、静かだねえ」

「あれから二年は、こんなもんだつたら」

ヨルは、そう言つて返す。

「……最近が賑やかだったただけだ。静かになったわけじゃない」

ヨルの言葉にホームズは、微笑む。

「そっか……」

無遠慮なことを言うミラ、

少々、胡散臭かったアルヴィン（ホームズが言えた義理ではないが）、

何故か同レベルの喧嘩をしたエリーゼ、

優しく、時に厳しく皆を見守っていたローエン、

数少ない友人のレイア、

迷い、傷つきながら、それでも前を向いて進むジュード、

そして、色々、本当に色々あつたローズ、

ここまでの多人数で旅をしたことは、ホームズにとって初めての経験だ。

「それも、もう直ぐ終わりだねえ……」

「あの王に勝とうが負けようがな」

「負けるつもりもないけど……でも、そうなんだよね」

皆それぞれ、この戦いのあとに思い描く、未来がある。

それに向けて歩き始めれば、一緒にはいられない。

「寂しくなるねえ」

「始まったものには、いつか終わりが来る。それは、仕方のないことだ」

ホームズの言葉にヨルは、そう返す。

ホームズは、頷いて言葉を聞く。

「立ち上がるフリで始めた旅がこんな事になるなんて、あのときは、思いもしなかった
なあ」

「……まあな」

ヨルは、あの雪の日の消えそうなホームズの背中を思い出す。

「まだ、フリか？」

ヨルの質問にホームズは、苦笑いを浮かべる。

「分かっているくせに」

「……レイアの言った通り、エレンピオスについて、整理がついたのか、やっぱり」

「まあねえ」

そう言って指輪を見る。

「あとは、母さんと父さんの両親を探して報告すれば、おれの旅は、終わるね」
「その後は？」

「さてね。また、別の目的で旅でもしようかねえ」
ホームズは、そう答える。

その言葉には、過去に押し潰されないように誤魔化す儂さは、ない。

前に進む意思が、込められていた。

ヨルの目を見たホームズは、肩をすくめる。

「前に進めるよ、おれは。大切な人達を思い出に、大切だった人達にしてね」
前向きなのに何処か暗い調子のホームズにヨルは、尻尾を揺らす。

「それが、人間の強さだ」

ホームズは、ヨルの言葉に寂しそうに笑う。

「別れた人間を思い出にして進むんだから、やっぱり前に進むって言うのは、残酷なことなんだよね」

結局、過去は寄り添わない。

かつて寄り添っていたという思い出だけを与えるのだ。

ヨルは、欠伸を一つする。

「思い出は、力だ。背負うものでも忘れるものでもない。奴らと過ごした日々は、思い

出としてお前の力になる」

ヨルの言葉にホームズは、目を丸くした後頷く。

「そうだねえ……無かつたことにはならないものね」

ホームズは、そう言つて肩を回して気合を入れる。

「んじゃあ、蹴りをつけに行こうか。思い出を力にしてね」

進むも地獄負けても地獄

「っー」

ウルスカ₁ラ

世ノ精途を抜け、踏み入れたそこは、戦いの場だった。

次元刀を振りかぶりジュードに斬りかかるガイアス。

ジュードは、集中回避を使いその後ろを取る。

そのジュードに向かっていくミュゼ。

それを止めようとする、アルヴィンとレイア。

後ろに気を取られたガイアスに斬りかかるミラとローエン。

ガイアスは、無理矢理長刀を振るい後ろにいるジュードを含めて一行を押し飛ばす。

その隙にエリーゼが術を打ち込む。

ガイアスは、それを防ぐと長刀をエリーゼに向かって振り下ろす。

「エリーゼ!!」

ジュードの叫びが響く。

「叫ぶ名前が違うわ」

ウルスカール
世ノ精を抜け、戦いの場に現れたローズはそう言うのと、ガイアスの振り下ろされる刀とエリーゼの間に入る。

そして、二刀を交差させ、受け止めた。

「んぐっ!!」

「ローズ!？」

「それよ……それよ……」

ローズは、そう言いながら斬撃を受け止めている。

想像以上の思い斬撃に膝をつきそうになる。

だが、ローズの意地がそれを許さない。

「っ 剛招来・纏!!」

ローズは、剛招来の闘気を両腕にのみ纏う。

力の上があったローズは、そのまま腕の筋肉を膨らませ、

「んぐあ!!」

ガイアスの次元刀を押し返した。
思わぬ反撃に仰け反るガイアス。

その隙に刀を持ったまま両拳を合わせる。

「獅子戦哮!!」

鬨気の獅子はガイアスに喰らいつく。

「ぬうつ!」

一瞬の隙をついたその攻撃にガイアスを飛ばす。

ガイアスは、宙返りして、着地する。

『ありがとー!助かったよ!!』

ティポの礼にローズは、にこやかに笑う。

だが、そんな時間も一瞬だ。

ガイアスと入れ替わるようにミュゼが襲いかかる。

ローズは、ミュゼの髪の毛の攻撃を防ぐ。

「何故、貴女は、そちらに着くの!?!アルクノアに家族を殺された貴女なら、エレンピオスを滅ぼす方に着くのが普通じゃないの!?!」

ローズは、アルクノアに、エレンピオス人に家族を殺された。

確かにミュゼの言うとおりだ。

滅ぼす側に回る理由はあるが、守る側に回る理由など、普通に考えればない。

「私の信念だからよ」

ローズは、そう言つて刀の切っ先を繰り出す。

ミュゼは、紙一重でかわす。

ローズは、それに構わず更にもう一步踏み込み連撃を放つ。

「私は、自分の傷を誰かに押し付けたくない!!そう思つて刀を取つた!!」

貴女の言う行為は、まさにそれだ!!自分の家族が殺されたという傷を別のエレンピオス人に押しつけようとしている!!そんなもの絶対に認められない!!」

ローズの連撃は、続く。

ミュゼは、連撃を凌ぐと髪で思い切りローズの腹を叩いた。

「ぐうっ……!!」

「よく言うわ、貴女がホームズにした行為は、まさにそれでしよう?まさか忘れたの?」

ローズは、地面に投げ出される。

地面の感覚味わいながら脳裏に蘇るのは、あの光景だ。

「忘れるものか……」

自分が一体、何を奪つたのか、何をしてしまったのか。

一度だつて忘れたことはない。

ローズは、刀を地面に突き刺し、杖代わりにして身体を起こす。

「忘れられるわけないでしょ」

ローズは、杖代わりにした刀で自分の身体を支える。

「だから、私は絶対に償う。私の未熟さでホームズの思い出を奪ってしまったのだから」

立ち上がったローズは、地面に刺さった刀を引き抜く。

逃げるのは、もう終わりだ。

「何？命でも懸けるの？」

ミュゼの質問にローズは、フンと鼻で馬鹿にしたように笑う。

「命？そんなもの懸けるわけないでしょ」

ローズのリリアル・オーブが煌々と輝く。

「私が賭けるのは、人生よ」

ローズは、そういつて二刀を鞘に収める。

「信じられないなら見せてやる」

リリアル・オーブは、オーバーリミッツに達した。

「女の覚悟を見せてやる!!」

ローズからマナが溢れる。

「技ー！」

その言葉と同時に一瞬だけ、時間が停止する。

ローズのその技をミュゼは、知っている。

こればかりは、一撃を覚悟しなければならぬ。

急所を髪でガードする。

だが、ローズの目的はミュゼではなかった。
時間停止を解いてローズが現れた先は……

「俺が狙いか……いいだろう!!」

ガイアスだ。

突然目の前に出現したローズにガイアスは、慌てることなく次元刀を振り下ろす。

「体!」

本当だったら抜刀まで時を止めておきたかったが、これ以上止めればローズは、何も出来なくなる。

ローズの刀が鞘を走る甲高い音が鳴り響く。

抜刀の一撃とガイアスの振り下ろしがぶつかり合う。

「ぬうん!!」

ガイアスがローズの刀を巻き上げる。

刀は、くるくると宙を舞う。

「心!!」

ローズは、もう一刀を引き抜く。

間髪入れずに放つ抜刀術にガイアスは、一步後ろに下がって、かわしてみせた。

しかし、これは、二連撃の技ではない。

「!!」

ローズは、抜刀の勢いそのままに飛び上がり、宙にある刀を掴む。

「やっと揃った心技体！とくと味わえ……」

天高く振り上げる二刀にマナが収束していく。

「覚めよ！黄昏の地より呼びし流転の狼王！」

ガイアスは、その間に脇差の構えを取り、次元刀に闘気を集める。闘気を纏った次元刀をガイアスが振り切る。

「闘・魔神王剣!!」

「崩襲剣・極!!」

ローズの両刀がガイアスの次元刀とぶつかり合う。

「ハアアアアアアアア!!」

「おおおおおおおお!!」

二人の雄叫びが響き渡る。

交じることのないぶつかり合う闘気は、やがてお互いを拒絶し弾けた。

「ぐっ!!」

「ぬうん!」

爆音と共にローズは、思い切り飛ばされ地面に投げ出される。

ガイアスは、両足で踏ん張ると刀を再び構えようとして、腹部の皮が微かに切れ血が流れているのに気づく。

「あの時か……」

二発目の抜刀術は、確かにガイアスを捉えていたのだ。

「ローズも立ち上がり両刀を構える。

「ローズ!!」

ジュードの呼びかけにローズは、周りを見渡す。

ホームズ以外全員揃っている。

「待たせたわね」

『ぜんぜん!!ぼくたちも今来たところー!!』

「わあ……デートに遅れたみたいない気分だわ……」

「ホームズもいないけどね」

レイアがため息をつきながら言うのとミラは、真顔で口を開く。

「安心しろ。彼奴が来るのは、いつだって一番最後だ」

ミラの言葉にアルヴィンは、苦笑いだ。

「ま、いない奴愚痴つても仕方ない。今は……」

「ええ。お二人をどうにかしなくてはなりませんね」

アルヴィンとローエンの視線の先には、迫るミュゼとガイアスがいた。

「レイア!!」

「任せて!シャープネス!!」

ローズの要求通りレイアは、彼女に攻撃力強化の精霊術をかける。

「もう一個、バリアー!!」

レイアの精霊術を受けてローズの防御力も強化された。

ローズは、右足を踏み鳴らし二刀をぶつける。

二刀と長刀がぶつかり合い、歯車が噛み合ったような音が広がる。

身動きの取れないローズにミュゼが精霊術を作り出す。

「衝波十文字!!」

そこにレイアとアルヴィンの共鳴術技リンク・エアーツが襲いかかる。

二人の攻撃にミュゼは、精霊術をキャンセルし、攻撃を防ぐ。

「このっ!」

ミュゼは、髪で切り返す。

アルヴィンは、迫る髪を銃で撃ち落としていく。

だが、撃ち漏らした髪がアルヴィンへと襲いかかる。

「うっ!!」

髪でアルヴィンは、後ろに押し戻された。

その隙にミュゼは、精霊術を完成させる。

アルヴィンの前に無数の黒い腕が蠢きながら現れる。

「ネガティブゲート!!」

『ネガティブゲート!!』

それにエリーゼとティポの精霊術がぶつかる。

「うろう………っ!」

『がんばれー!エリーゼ!!』

無数の黒い腕は、お互いにお互いを飲み込もうと激しくぶつかり合う。

だが、どう考えてもエリーゼの方が分が悪い。

何せ、大精霊の精霊術とのぶつかり合いだ。

おまけにマナの溢れたこの場所、そして、迷いのなくなったミュゼ。

実力差は、火を見るよりも明らかだ。

「でも………それは、理由になりません!!」

エリーゼは、杖をぎゅうっと握り締める。

「調子に乗らないで!!」

ミュゼも負けていない。

ミュゼの黒い腕達は、勢いを増しエリーゼの黒い腕達を掴み動きを封じ込める。

動けるエリーゼの黒い腕達は、数えるほどしかない。

「ティポ!!フルパワーです!!」

『まかせろー!!』

エリーゼは、そう言うもありったけのマナを込める。

『「ハアアアアアアアアアアアアアアア!!」』

裂帛の気合いに呼応するようにエリーゼは、自分の黒い腕達を更に出現させた。蠢くその大量の腕達の様子は、正に地獄絵図だ。

腕達は、ミュゼの腕達とぶつかり合いミュゼの腕達を巻き込んで消えた。

「っのっ!!」

『「ティポ戦哮!!」』

ティポから紫のマナの球が複数発射される。

「ぐっ!!」

ミュゼの髪がエリーゼの腹部を捉える。

「かっ……………!!」

「エリーゼ!!」

吹き飛ばされるエリーゼを地面に落ちる寸前でアルヴェインがキャッチする。

「余所見している場合か?」

その一連の流れに気を取られたローズ。

ガイアスが力を込める。

ローズは、慌てて力を込め、ガイアスと競り合う。

「つつ!!」

僅かにではあるがローズは、押されている。

徐々に次元刀がローズの首に迫る。

(このままじゃ……文字どおり首が飛ぶ)

幸い態勢は、まだ崩れていない。

何とか持ち直そうとこれ以上下がらぬように気を張るが、それでもガイアスの前では意味がない。

リーゼ・マクシアの王。

信念も力も経験も、その全てがローズを凌駕する。

一枚上手？

違う。

桁が上だ。

だが、

(諦めるな……！探せ、今までの私の全てから……)

ローズは、歯を食いしばりながら頭を回す。

(最善の一手を!!)

今まで、ありとあらゆるモノと戦ってきた。

その記憶から、これを打開する手を探し出す。

ローズは、踏ん張ったまま僅かに重心を後ろに下げる。

ガイアスは、それに連れられて態勢が前のめりになる。

ローズは、前のめりになったガイアスを腕の力だけでなく全身を使って押し返す。

ガイアスは、今度こそ態勢を崩した。

「喰らえ！獅子戦哮!!」

鬨気の獅子がガイアスを捉える。

「追撃！」

おかげで刀の間合いが出来た。

「散沙雨!!」

無数の突きをガイアスに放つ。

「秋沙雨!!」

足を踏み替え、更に両刀を使って放つ。

刀の雨の中、ガイアスは、右手に鬨気を集める。

「獅子戦哮!!」

片手で放たれた獅子は、刀の雨を弾き飛ばしてローズに食らいついた。

(片手でこの威力って……!!)

獅子に弾き飛ばされたローズは、地面に刀を突き刺し、これ以上飛ばされないように堪える。

「今のは、ウインガルのか？」

「まあね。しつかり決まったと思ったのに……」

「悪くはなかった。だが、」

その瞬間ローズの背筋に寒気が走る。

(このマナの量!?)

「俺に気を取られすぎたな」

ミュゼが、巨大な精霊術を展開させようとしていた。

アルヴィン達は、その精霊術の余波で、地面に押さえつけられていた。

「——っ!!」

ローズは、慌ててミュゼの方へ走り出す。

だが、その前にガイアスが立ち塞がった。

「行かすと思うか？」

次元刀を振りかぶるガイアス。

ローズは、二刀で受けようと構える。

そこにジュードとミラが、剣と拳を振り降ろす。

ガイアスは、振り降ろすはずの次元刀で二人の攻撃を受け止める。

「貴様ら……!」

「任せていいんだな、ローズ?」

突然のことに目を丸くしていたローズは、ミラの言葉で我に返ると頷く。

「ええ!」

それだけ言うのとローズは、ミュゼの前に立つ。

「うぐつ」

ローズにも精霊術の重力がかかる。

だが、レイアの精霊術のおかげで這い蹲らずにすんだ。

「貴女、何するつもり?」

「貴女の想像通りよ」

ローズは、そう言うのと腰の一刀を構える。

リリアルオーブが再び輝く。

ミュゼは、目を険しくさせると人差し指を立てる。

”全てを飲み込み”

”天光満ところ我はあり”

二人を中心にマナが渦巻く。

「乾きの地へ誘え」

「黄泉の門開く所汝あり」

ミュゼの周りには闇が、
ローズの周りには雷が、

それぞれ現れ、お互いにぶつかり合う。

「虚数の牢獄！」

「出でよ神の雷！」

現れた雷光が刀に集まるとローズは、鞘に納める。
ミュゼの闇は、球体を作り出す。

「これで終わり!!」

二人の慟哭が響く。

「イベントホライズン!!」

「インディグネイション!」

ミュゼは、巨大な漆黒の球体を撃ち下ろす。

ローズの雷を纏った刀が、鞘を走り、そのスピードと破壊力を乗せた一撃が迎え討つ。

ぶつかり合う光と闇。

「つ!!」

想像を遙かに超えたその重さにローズは、声も出ない。

大精霊の秘奥義とは、そう言うものだ。

以前のミュゼならいざ知らず、良いか悪いかは別として今のミュゼに迷いはない。その心の持ちように呼応するような精度の技。

遙かな高みとは、こういう事を言うのだろう。

(だけど……!)

ローズの脳裏にエリーゼが現れる、そして、もう一人の男も。

「自分よりも強い、そんな理由に負けてたまるかー!!」

ローズは、絶叫とともに刀を振り切り、ミュゼの秘奥義を斬り裂いた。

その光景にミュゼは、目を丸くしている。

「嘘……」

信じられないのだ。

大精霊の秘奥義を打ち破ったローズの事を。

もちろん、それだけの離れ業をやったローズも無事では済まない。

元々、ウインガル、ガイアスにすでに秘奥義を放っている。

そのうえ、このとどめの三回目。

こちら辺で回復しないと身体が持たない。

「……まあ、そうは問屋が降ろさないわよね」

ガイアスがジュードとミラを振り切って、ローズへ向かって駆け出していた。

ローズは、呼吸を整えて迎え撃つ用意を整える。

(やるしかない!!)

向かってくるミュゼを睨みつけながら、二刀を構える。

「ローズ、どいて!!」

そんなローズに後ろからレイアの指示が飛ぶ。

言われるがまま避けたローズが、思わず振り返ると、棍を大上段に構えたレイアがいた。

「……………つて、ん？」

眉をひそめるローズに構わずレイアは、棍を力の限り振り降ろす。

「爆砕ロツク!!」

直感で止まったガイアスの目の前に棍が振り下ろされた。

ガイアスに当たらなかつたそれは、地面を爆破させた。

もうもう上がる土煙が晴れると、ポンチヨをはためかせた、金色の瞳の男、ホームズがいつものようにヨルを肩に乗せて佇んでいた。

ホームズは、ローズの方を振り返る。

「やつほー、待った？」

「ええ。首が飛びそうなくらいね」

ローズは、ため息をつきながらそう返すとパイニングミを頬張った。

両友並び立ち

「遅い」

「別にわざとじゃないんだから許しておくれよ」

そう言つてホームズは、右脚に力を込める。

そして、そのまま走り出した。

「ヨル！」

ホームズは、走りながら指示を出す。

「やかましい、命令するな」

ヨルは、そう言つと口から黒球を吐き出した。

宙に浮かぶ黒球をホームズは、回し蹴りの要領で蹴る。

蹴られた黒球は、弾けて黒霞となり、ホームズの脚にまとわりついた。

ホームズは、勢いを殺さずガイアスにそのまま回し蹴りを放つ。

迎え撃つガイアスは、先程爆砕ロックで現れた目の前の煙と一緒に次元刀で斬り払う。

ぶつかり合うホームズの黒い脚と、ガイアスの次元刀。

鈍い音ともに二人は、弾かれた。

ガイアスは、次元刀を持ち直すと振り下ろす。

ホームズは、態勢を崩しながら、弾かれた右足を軸足にして、迫る白刃を踵から蹴り上げた。

「む、!?!」

一瞬現れた隙にホームズは、後方宙返りで、ガイアスの背後に立つ。

そして、再び黒霞の脚で蹴りを放つ。

ガイアスは、それを振り向きざまの一刀で弾き返す。

ホームズは、忌々しそうに肩にいるヨルを睨む。

「ねえ、さつきから弾き返されてるんだけど……」

「まあ、文字どおり次元が違うというやつだ」

「当然よ。私の力なのだから」

そう言つてミュゼは、ガイアスの隣に並び立つ。

「へえ、それはそれは」

ホームズは、つまらなそうにそう返す。

「ホームズ」

「?」

ガイアスの言葉にホームズは、首をかしげる。

「俺に協力する気はないのか？」

「当然」

ホームズは、そう言つてガイアスを指差す。

「君の目指す未来は、おれの欲しい未来じゃあない」

ミラの方に視線を向ける。

「忘れられがちだけど、おれは商人だ。だから……」

そして、ニヤリといつもの意地の悪い笑みを浮かべる。

「おれを雇いたければそれ相應の報酬を用意したまえ、ガイアス!!」

ホームズの左脚に炎が纏わりつく。

「紅蓮脚!!」

紅に染まるホームズの左脚がガイアスに向かって放たれた。

ミュゼが二人の間に入りガイアスに届くまえにそれを止めた。

「いい加減にしなさい!!」

ミュゼは、髪を巻きつけるとそのままホームズを投げ飛ばした。

宙に舞い上がったホームズは、そのまま重力に引つ張られるように下に向かう。

「シルフ!!」

ミラの声とともに風が巻き上がりホームズの落下の勢いを殺した。

勢いの落ちたホームズは、そのままなんとか着地する。

「助かった……ありがとう、ミラ」

「礼はいい!!来るぞ!!」

ミラの言う通りミュゼは、目前まで迫っていた。

黒霞はまだ脚にある。

ホームズは、脚を踏み鳴らす。

「守護氷槍陣!!」

ホームズとミラを囲って氷の槍が現れる。

だが、そんなものミュゼの前では壁にすらならなかった。

あっさりと砕くと髪を伸ばす。

ホームズは、ミラを突き飛ばし、盾で受ける。

「ぐっ!!」

「貴方は、貴方だけは!!」

ミュゼは、そう言って髪をホームズに向かって伸ばす。

ホームズは、盾と脚でそらしていく。

「シャドウもどきの封印を解き、エレンピオスを滅ぼすのを止める、ガイアスには協力

しない!! 貴方は、この世界を滅ぼしたいの!?

「そんなこと……」

ホームズは、迫る髪を掻い潜って回し蹴りを叩き込む。

「言っていないだろう!!」

黒霞の右脚の攻撃にミュゼは、息がつまる。

「このっ!!」

だが、飛ばされると同時にミュゼの髪がホームズの肩を貫いた。

「うぐっ!!」

「貴方のやっていることは、そう言うことよ! 大精霊として認められないわ!!」

ホームズは、目を丸くした後下を向く。

「自分の欲望で世界を振り回さないで!」

ミュゼの叫びにホームズは、

「くくく………」

「?」

「あーっはっはっはっはっはっはっ!!」

心底面白そうに笑っていた。

耳に残る笑い声にミュゼは、一瞬だけ固まった。

ホームズは、その隙にそのまま髪を掴むと肩から引き抜き振り回してガイアスにぶん投げた。

「欲望で世界を振り回すな？馬鹿を言うんじゃない！欲望が世界を回すんだ！」
リリアル・オーブが輝きだす。

「おれは、両親の故郷を探し出す！その邪魔は、誰にもさせない！！」
ヨルは、くくくつと面白そうに笑う。

「だよな。欲望それがなくちゃ、お前じゃない」
「君に言われたくないねえ」

ヨルは、ニヤリと笑い返すとそう言うのとミュゼを睨みつける。

「だいたい、お前は、何を世界のためみたいな顔してるんだ。その王に依存しているだけだろ」

「なん……ですって?」

明らかに殺気の増したミュゼに構わず、ホームズが言葉を引き継ぐ。

「君は、正しい行いをしているつもりかい? 君のやっていることは、人の信念に寄生して甘い汁吸ってただけだ」

ホームズの言葉は、完全にミュゼの逆鱗に触れた。

「殺す!!」

ミュゼは、真つ直ぐにホームズに向かっていく。

ホームズとヨルは、目を険しくさせ、迎え撃つ。

「甘い汁を吸るのはここまでだ」

その瞬間、ホームズのリリアル・オーブが輝いた。

「辛酸を舐めろ」

オーバリーリミッツ
最高潮に達した輝きから繰り出されるのは、ただ一つ、秘奥義だ。

「地獄の様に熱くっ!!」

ホームズの踏み鳴らした脚を中心に青い炎の陣が出現する。

赤より高温の青い炎は、ミュゼを焼く。

ミュゼは、何とか炎獄から抜けようとする。

「悪魔の様に黒くっ!!」

黒霞を纏った脚にホームズは、更に闘気を混ぜ、ミュゼの腹部へと蹴りを放った。

「——っ!!」

その衝撃は、今までとは比べものにならない。

だが、この技は、それで終わりではない。

「化^天け物^使のように純粹で？」

ヨルの尻尾がミュゼの関節、髪、全てを拘束する。

「人生の様に苦い!!」

ホームズは、黒霞の脚で炎の陣を踏む。

炎は渦を巻く様に黒霞の脚へと吸い寄せられて行き、黒霞と混ざり合う。

混ざったそれは、新月を思わせる程真っ黒だ。

ホームズは、拘束されているミュゼに背を向けるほど身体を回して遠心力を乗せる。

「” エスプレッソ・ラプソディー”!!」

動くことの出来ないミュゼにホームズの秘奥義が炸裂した。

丸太をぶつけた様な鈍い音が響き渡る。

ミュゼは、腹部に走る衝撃と熱に堪らず膝をついて倒れた。

「……やったか？」

ホームズの蹴りは一つ残らず叩き込まれた。

それを見たヨルの眩きにホームズは、首を振る。

「だったら、苦労はないけどね」

ホームズは、ミュゼを指差す。

「見たまえ」

ホームズに促されて視線を移す。

視線の先のミュゼの指がピクリと動く。

確かにダメージは、あるだろう。

だが、行動不能かと言われればそうではない。

「氣い抜くんじゃあないよ。相手は……」

ミュゼの髪が伸び、ホームズに襲いかかる。

「大精霊だ」

ホームズは、そう言いながら左手の盾で刺突を防ぐ。

だが、今回は刺突ではなかった。

髪は広がり、盾を避け、ホームズを拘束した。

「ぐっ!!」

「へえ……やるじゃない。間一髪で、首を守るなんて」

自分の予想が外れたことに気付いたホームズは、空いている右腕を髪と首の間に挟んだのだ。

おかげで、窒息は免れた。

だが、身体に巻かれた髪は、ホームズを締め付け続ける。

「がっ……!!」

締め付ける力が上がり、響いてはいけない音が響き渡る。

(やばい…………!)

「剛招来・纏!!」

颯爽と現れたローズが、紅い鬪気を纏った刀でミュゼの髪を斬り裂いた。

「ホームズ!!」

駆け寄るエリーゼとレイアが、精霊術で治療する。

「ゴホッ……ゴホッゴホ」

拘束から解かれたホームズは、何度も咳き込む。

「ホームズ、立てる?」

ホームズは、頷いて返すと何とか立ち上がる。

「もう少し、休んでいてもいいのよ?」

「馬鹿言いたまえ。繁忙期に休む商人がどこにいるんだい?」

ローズの言葉にそう返すとホームズは、レイアとエリーゼの肩をポンと叩く。

「助かったよ。ありがとう」

『どういたしましてー』

ホームズのお礼にティポが答える。

ホームズは、その返しに頷くとミュゼに視線を移す。

「それじゃあ、二人はガイアスをよろしく。ジュード達と協力してどうにかしてくれ」

「ちよつと待つて、ホームズ、まさか」

血相を変えるレイアに構わずホームズは、頷く。

「当然。おれ達は、ミュゼとだ」

ホームズとヨルは、もうミュゼの方しか見ていない。

「無茶だよ!!さっきだってかなり危なかったじゃん!!」

「なら、私達ならどう?」

そう言つてローズが髪を全ていなしでホームズの隣に立つ。

ホームズは、目を丸している。

「えーつと……」

「迷つてゐる暇はないぞ」

ヨルの忠告通り、ミュゼが髪を繰り出してきた。

「つく!・守護方陣!!」

ホームズは、足を踏み鳴らして光の陣を発動させる。

集まる髪は、光の陣に立ち入れない。

「分かつた!!任せる!!」

事態を飲み込んだホームズは、ローズにそう言うのとニヤリと笑う。

「待つてました!!そうこなくっちゃ!!」

そう言うのとエリーゼとレイアの背中を押す。

「ホームズの事は任せて!二人は、ジュード達と協力してガイアスを」

「……分かりました!!」

「頼んだよ!!」

二人は、言いたいことを飲む込むとローズに託してガイアスの元へと向かった。

「させない!!」

ミュゼの髪が二人に向かって伸びる。

「それは、こっちのセリフだよ!!」

ホームズの回し蹴りがミュゼの顔を捉える。

若干動きの鈍いミュゼにホームズは、ニヤリと意地の悪い笑みを浮かべる。

「やつぱり、ダメーτζゼ口ってわけじゃあないみたいだねえ」

「そりやそうでしょ、あのマールロウさんを戦闘不能に追い込んだじゃない、あの技」

「一時的にな」

ローズとヨルの言葉にホームズは、肩をすくめる。

ホームズの隣には、二刀を構え力強い意地を宿した目でミュゼを捉えるローズがい

る。

すれ違つてばかりで、拳句に殺されかけた相手だ。

そんなローズがホームズの隣にいる。

ヨルは、ようやく揃つた足並みをいつもの様にホームズの肩から眺めていた。

「ホームズ、こんな時は、なんて言うんだ？」

ヨルの言葉にホームズは、頷き不敵に笑つてみせる。

「さあて、仕切り直しだ」

能ある猫が爪を剥く

「剛招来!!」

「剛招来・纏!!」

ホームズの身体を紅い鬨気が包む。

紅い鬨気がローズの刀を包む。

二人は、地面を強く踏み鳴らし、ミュゼに向かっていった。

真正面から向かってくる二人にミュゼの髪が伸びる。

その瞬間、ローズがホームズの前に立ち、迫る髪を斬りつける。

(先ほど切れたのだから出来ない筈がない!)

だが、ローズの予想に反して、髪は刀を弾いた。

「刃物が切れるわけではないですよ」

「だったら、いなすまで!!」

ローズは、刀を返して迫る髪の軌道を変える。

「ナイス、ローズ!!」

ホームズは、そう言うとローズの肩に足を乗せ飛び上がる。

「馬鹿ね。髪が何本あると思ってるの？」
宙にいるホームズに向かって髪を伸ばす。

「馬鹿は君だ」

そう言うとうホームズの両脚に黒霞が現れ、宙に着地した。
ホームズの落下を予想していた髪は、虚しく空を切った。

ミュゼは、それを見て悔しそうに歯噛みをする。

そう、ミュゼはこの技を見ているのだ。

引つかかってしまった自分が情けない。

空中に注意を取られた隙にローズが、髪をいなして斬りこむ。

「つく！ネガティブゲイト!!」

「ヨル!!」

ヨルが生首状態となって落下してその闇の腕を飲み込む。

ローズは、ヨルの頭を踏み台にして、宙返りをする。

その遠心力を乗せ二刀を振り下ろす。

「崩襲剣!!」

二刀をミュゼが髪で受ける。

その隙にホームズは、ミュゼの後ろに降り立ち蹴りを放つ。

ローズに気を取られていたミュゼは、ワントンポ遅れて髪で防ぐ。

「こんのっ!!」

ホームズは、防がれた髪ごと蹴り飛ばした。

「ローズ!!」

ホームズがそう言うとりリアル・オーブから一筋の光が伸びて繋がる。

その意味することは一つしかない。

リンク・アーツ
共鳴術技。

(そう言えば、ホームズとするのは、初めてね)

ローズは、不敵に笑ってみせる。

「よしっ！任せなさい!!」

そう言うところをフオトンを用意する。

ホームズは、右脚を大きく後ろに下げる。

「フオトンシユート!!」

そのままホームズは、ミュゼに向かって蹴り飛ばした。

光球は、ミュゼに当たり弾けた。

「うぐっ!!」

ミュゼが、大きく仰け反る。

「畳み掛ける!!」

「言われなくても!!」

ヨルの怒鳴り声に二人は、負けじと言い返す。

「発射用意っ!」

ホームズが足を上げるとローズが、飛び上がる。

「飛天翔星駆!!」

そしてそのままローズを前方に蹴り飛ばした。

勢いそのままに刀を振るうローズ。

ミュゼは、舌打ちする。

反撃をしようにもこの勢いにカウンターを合わせるのは、無理だ。

「だけど、防げるわ」

そう言おうと髪で防ぐ。

ぶつかり合う二刀と髪。

別のものの筈なのにそれらは、まるで鉄同士をぶつけた様な音を響かせる。

二人とも一步も引かずに押し合う。

その隙にホームズが回りこむ。

動けないミュゼの視界の片隅に飛び込んでくるホームズにミュゼは、舌打ちをする。

「調子に……………」

ミュゼは、ギリつと歯を噛み締めて髪を傘の様に広げる。

「乗らないで!!」

勢いよく開かれた髪のかげにホームズとローズは、吹っ飛ばされた。

「うっ!」

「ぐっ!!」

二人が地面に投げ出されるとミュゼは、容赦なく髪を伸ばした。

ヨルに向かって。

その髪をホームズの盾が遮る。

「邪魔をしないで」

「やだね。おれも死んじやうもの」

そう言ってむくりと立ち上がる。

「貴方、世界を滅ぼすつもりはないと言ったわね?」

「言ったよ」

「だったら、そこにシャドウもどきがいるのは、おかしいじゃない!」

ホームズは、肩にいるヨルを見る。

「だってさ」

「いない方がおかしいんだがな」

いつもの調子で微妙にピントのずれた言い合いをする彼らにミュゼが業を煮やす。

「そいつは、リーゼ・マクシアの敵よ!! 過去に一体何人の人間と精霊を殺したと思ってるの?」

「忘れた」

即答するヨルにホームズは、頬を引きつらせる。

そんなホームズに構わずヨルは、尻尾を伸ばす。

「とりあえず十は、超えるな」

「百の間違いだろう?」

呆れた様のため息を吐くホームズにミュゼの髪が伸びる。

「そんな奴をこの世に再び放った、貴方の罪は重い!!」

ホームズに伸びる髪をヨルの尻尾がまとめて止める。

「間違うなよ、大精霊。人を殺したのも精霊を殺したのも俺の行いだ。こいつが背負う罪は別にある」

「……………庇うの? この人間を?」

ヨルは、目を丸くすると愉快そうに笑う。

「阿保。問うべき相手を間違えるなど言っているんだ」

ホームズの蹴りがミュゼの腹に当たる。

ミュゼは、大きく後方に飛んだ。

「……なら、貴方に問うわ。人間と精霊を殺したこと、世界に仇なしたことを悔やんでいないの？」

「お前がそれを聞くのか？」

ヨルは、愉快そうに笑っている。

「ニ・アケリアだっけか？の人間を殺し、精霊の主をクルスニクの槍に閉じ込めた、そんなお前が化け物俺にそれを聞くのか？」

「黙れ!!」

その瞬間、ホームズとローズに重圧がかかり地面に押し付けられた。

ミュゼは、会話に気を取られているフリをして精霊術を発動させていたのだ。

この状態では、ヨルも生首になれない。

「私は、リーゼ・マクシアを救う、その信念に基づいて動いているの！ニ・アケリアもマクスウェルもそのため犠牲よ!!貴方と一緒にしないで！」

ミュゼは、更に術を強める。

「犠牲………か………くくく、便利な言葉だ」

馬鹿にしたようなヨルの笑い。

ホームズとローズにかかる重圧は、更に威力を増し、ホームズとローズの身体を軋ませる。

「貴方には、あるの？信念に基づいて行動したことが？」

ミュゼは、鬼気迫る表情で問い詰める。

それに比例するように身体にかかる重力は増していく。

ヨルは、そんな中馬鹿にした様に笑う。

「そんなものあるわけないだろ。俺は、化け物だぞ」

ヨルの火に油を注ぐ一言に重力はさらに増していく。

(ヤバイ……………！)

ローズも身動き一つ取れない。

「俺を突き動かすのは、欲望と…………」

開かれたヨルの口から一筋の光が伸びる。

光は、ホームズのリアル・オーブと繋がる。

「約束だけだ」

その瞬間、ホームズ達押さえつけていた精霊術が消えた。

「ツカハ!!」

突然消えた重圧から解放された身体が、動き出す。

それと同時に口から血が溢れる。

「そんな………生首になつていないの!?!」

ミュゼは、突然のことに目を丸くするしかない。

だが、ホームズは、血を吐き出しながらも自分のリアル・オーブを結ぶ光の筋を見て眉をひそめていた。

「おい、これって………」

ヨルは、それに構わず口から光のもと、リアル・オーブを吐き出すと尻尾を使つて器用に首にかけた。

一行は、思いもしない展開に息を飲む。

「忌々しいことだが、」

ヨルは、言葉を区切るとミュゼを睨む。

「俺なりの固有サポートのようだ」

「何で……君がそんなものを持っているんだい？」

ホームズも知らなかったようだ。

「お前の母親に渡された。元々、お前のために用意したが勝手に調達したから余ったと言っていた」

「勝手に調達……？あ、そうか」

そう、ホームズはあの村でリリアル・オーブを奪っている。

それが現在、使っているリリアル・オーブだ。

その様を見ていたミラは、ガイアスの長刀を押し返し、エリーゼとレイアに指示を出す。

「エリーゼ！レイア！ホームズとローズのところへ!!」

「分かりました！」

『まかせろー!!』

駆けつけたエリーゼが、ホームズ達の治療のため、精霊術をかける。

しかし、

「あれ？」

『うーん？おかしいなー？』

「どうしたんだい……エリーゼ？」

辛そうな顔でホームズは、エリーゼに尋ねるとエリーゼは、困ったように手をかざす。「精霊術が発動しないんです！」

血を吐くホームズのためにも何としても精霊術をかけようとするものの発動する気配など微塵もない。

原因など一つしかない。

「ヨル……君の固有サポートって………」

ホームズは、ジロリと睨むとヨルは、尻尾を揺らす。

「精霊術の禁止。味方敵問わずな」

ホームズの額に血管が浮かび上がった。

「こんの、クソ猫！どうして、そんなハタ迷惑なサポートを出すんだい！！」

「お前に言われたくないな」

「つーか、こんなことが出来るんなら、もつと別の時に使いたまえよ！！例えば、ジルニ

ヨルは、そう言うのとニヤリと笑う。

「俺は化け物だ。約束を破るような人間とはワケが違う」

「にしては、事態は好転してないんだけど」

「いいことじゃないか、俺は約束を守った。お前は苦しんでる。みんな幸せだ」
「幸せなの君だけゴボツア」

「だから、静かにしてよホームズ!!」

また、血を吐き出したホームズをレイアが再び叱りつけている。

ヨルの出した固有サポートは、かなり厄介だ。(敵味方問わず)

しかし、攻撃の手段がないわけではない。

ミュゼの髪がホームズに向かって伸びる。

ホームズの治療に気を取られていたレイアとエリーゼは、対応できない。

「別に精霊術が無くてもどうってことないわ!!」

髪が二人の目の前まで迫ったその瞬間、背後に回ったローズが、ミュゼに向かって刀を振るった。

刀の空気を切り裂く音で、ようやくローズの存在に気づいたミュゼは、攻撃をやめ、防御に髪を回す。

刀を髪で阻まれたローズは、こくりと頷く。

「ええ。貴女の言うとおりよ。ミュゼ。精霊術が無くてもどうってことないわ」
ローズの刀を振り払うとミュゼは、次の攻撃を繰り出す。

「私たちは、みんな精霊術を使えない戦いを経験済みなの」

ヨルというジョーカーを持ったホームズと皆、一度は戦っている。

ローズは、喋りながら刀だけで髪を裁ききった。

「何事も経験とはよく言ったものだわ」

「守護方陣!!」

それは、もちろんホームズも例外ではない。

ここ最近が特別だっただけで、精霊術の援護のない戦いなど、本来ならいつものことなのだ。

僅かに回復したホームズは、ミュゼに向かって駆け出した。

ヨルのリアル・オーブとホームズのリアル・オーブは、繋がったままだ。

ホームズは、消えていた黒霞を再び脚に纏う。

空中を駆け、ミュゼへの距離を詰める。

「因みに言っておくとそろそろ時間切れだ」

「だと思つたよ」

ホームズの右脚を炎が包む。

「紅蓮脚!!」

炎に包まれたその足は、真っ直ぐにミュゼに向かって落ちていった。

ミュゼは、一歩引いて炎の脚をかわす。

「ごんの!!」

着地したホームズは、そのまま回し蹴りを叩き込む。

だが、蹴りが届く前にミュゼの髪がホームズの腹に襲いかかった。

鞭のようにしなる髪。

攻撃を外したばかりの無防備なホームズにかわすことは出来ない。

めりめりという音が響く。

傷は、癒えていない。

そんなところに文字どおり間髪入れずに入る攻撃。

「カハッ!!」

ホームズの口から再び血が噴き出す。

「ホームズ!!」

ローズの声を遠くで聞きながらホームズは、髪を掴む。

「だあああああら!!」

掴んだ髪を振り回してミュゼを地面に叩きつけた。

「ッハー………ハー………」

ホームズは、荒い呼吸を繰り返しながら地面に伏せるミュゼを睨む。相手は大精霊、そう易々とやられない。

いつ動き出すのか分からないのだ。

次の瞬間、案の定というべきか、ミュゼの髪が動き出した。

「くっ!!」

ホームズは、何とか躲そうとする。

だが、先程の攻撃が、膝に来ていたのだろう。

ホームズは、膝から崩れ落ちた。

「ホームズ!!」

ローズが慌てて駆け寄る。

「ヤバイ!!」

レイアとエリーゼは、地面を飛ぶように走る。

ホームズは、倒れながら口を少しだけ動かす。

「まだかい？」

「丁度良い頃合いだ」

ヨルの低い声が響くと同時に身体が淡く光り、迫る髪を弾き飛ばした。

その輝きは見間違うことなく、

「あれって……」

「オーバー……リミッツ」

思わず足を止めたレイアとエリーゼは、息を飲んだ。

淡い光は、やがてヨルに飲まれるように真っ黒に染まっていった。

「貴方、まさか最初からこれが狙いで、ずっと精霊術禁止状態だったの？」

「当然。でなきや、共鳴^{リンク}なんてするわけないだろ」

共鳴^{リンク}を続け、何とかこの状態まで持つて行つたのだ。

「おかげでおれは、また時間稼ぎ……本当、いい加減にして欲しいんだけど」
「いつものことだ。気にするな」

「それ、おれが言うセリフだからね」

ヨルは、半眼のホームズ（吐血済み）を無視すると倒すべき敵と向き直る。

ヨルは犬歯を見せ、獰猛な笑みを浮かべる。

その笑みの先にいるのは、ただ一人。

「よう、覚悟はいいか？大精霊」

真つ黒な光は、徐々に広がっていく。

「月夜ばかりと思うなよ」

ヨルの秘奥義が発動した瞬間だった。

「降りろ、夜の帳!!」

辺りは闇に包まれる。

一寸先も見えないその中、ミュゼは、ヨルの気配を探してキョロキョロと辺りを見回す。

「ベガ」

戸惑うミュゼにヨルの攻撃が、襲いかかる。

ミュゼは、なすすべなく一直線に吹き飛ばされる。

「アルタイル」

吹き飛ばされたミュゼの先回りをしたヨルが再び、ミュゼを横薙ぎに弾き飛ばす。

何とか態勢を立て直そうとするが勢いが、落ちず移動を続けているため、それも叶わない。

そして、気づく。

ここは一番最初に弾き飛ばされた場所だ。

ミュゼは、三角形を描いて始まりの地に戻ってきたのだ。

「デネブ!!」

先回りしていたヨルがミュゼを打ち上げる。

ミュゼは、打ち上げられ瞬間、自分を攻撃していたものの正体を知った。

（尻尾を編み込んで、拳に!?)

勿論、普段の状態では無理だっただろう。

だが、今のヨルはオーバースペックだ。

多少の無理など関係ない。

「瞬け、夏の夜空を彩る星々よ!!」

描かれた三角形が輝きだすと、それは、空中に陣となつて浮かび上がる。

ヨルは、そこに自分の右前脚を通す。

すると、そこだけ、元の姿を取り戻した。

「サマートライアングル!!」

ヨルは、ミユゼに向かって、右前脚を振り下ろした。
それと同時にリアル・オーブも碎け散った。

詰みの……？

「よし、今のうち」

エリーゼとレイアが精霊術で二人を治す。

ヨルの固有サポートが消えた今、再び精霊術を使うことが可能になったのだ。

ヨルは、砕けたリリアル・オーブを見ながら、フンと笑う。

「やはり、俺では使いこなせないようだな」

「人間の力を底上げするものだからね。君相手は、流石に想定外だったと思うよ」
治療を受けながらホームズは、目の前のミュゼを見る。

ミュゼは、ゆらりと立ち上がった。

決して、ダメージが軽かったわけではない。

「軽くはないが耐えられないほどのダメージではなかったってところか」
だが、それは、耐えなくてはならないダメージだったということだ。

それでもミュゼは、立つのだ。

「まだ、立つのかい？」

「貴方なら諦めるの？」

ミュゼの言葉にホームズは、感心したように頷く。

「へえ……言うじゃないか」

ホームズは、そう言うのと後ろにいるエリーゼとレイアの方を振り返る。

「二人ともありがとう。助かったよ」

「後は、私達に任せなさい」

ローズも刀を構えてミュゼを見据える。

エリーゼとレイアは、少し迷った後、頷いて走り出した。

勿論、それを許すミュゼではない。

髪が広がり、二人の行く手を阻む。

「蒼破追蓮!!」

ローズの二連撃が髪を弾く。

二人のそばを駆け抜けるレイアとエリーゼ。

ローズとのすれ違い様にエリーゼがポツリと眩く。

「任せましたからね、ホームズを……友達を」

「ええ。友達にお願いされたら百人力よ」

エリーゼは、にっこりと頷いて元いた戦場に走っていく。

レイアもそれに続く様に走り出す。

レイアがホームズとすれ違う時、彼は申し訳なきように笑う。

「ごめんね。最後まで迷惑をかけて」

「わたしに迷惑をかけないホームズなんてホームズじゃないよ」

思わぬ即答にホームズは、苦笑いを浮かべた。

それに応える様にレイアは、悪戯っぽく笑い返した。

蒼破追蓮で空いた隙間をぬって二人は、元いた戦場に戻った。

レイアとエリーゼを止められなかったミュゼは、ため息を吐くとホームズ達と向かい合う。

ヨルは、びよんとホームズの肩に乗る。

「あれ？いつまで経っても子猫モードにならないねえ？」

それを見て不思議そうなホームズにヨルは小馬鹿にしたように鼻を鳴らす。

「戻したのは一瞬だったし、何より一部だけ。おまけにリアル・オーブの力も借りてたしな。副作用は無しだ」

「なるほど」

ホームズは、頷くと右脚を前に出す。

ヨルとの共鳴リソニックの切れたホームズのリアル・オーブは、ローズのリアル・オーブと繋がった。

ローズは、離れたところからそれを確認する。

二人は、同時に踏み込んだ。

「紅蓮脚！」

「紅蓮剣！」

二人は、ミュゼに左右それぞれから攻撃を仕掛けた。

「エアプレッシャー！」

ミュゼは、ホームズとヨルに向かってエアプレッシャーをかける。

脚を纏った炎は、ミュゼに届くことなく地面に押しつけられ掻き消えた。

精霊術を喰らえず、ホームズ達にかかる重圧は、増していく。

そう、重圧をかけているのは、ホームズとヨルだけだ。

「つつはあ!!」

ローズの二刀がミュゼに迫る。

下手に髪で受ければ炎がこちらに燃え移る。

「つく!!」

ミュゼは、一步引いてかわす。

行き先を失った二刀は、地面に落ちる。

その瞬間、刀から炎が消える。

ミュゼは、炎が消えた瞬間、ローズに髪を振るう。しなる髪が的確にローズの腹部を捉える。

「——っか！」

胃の中の物が口から溢れる。

白黒する景色を見失わないようローズは、唇を噛んで堪える。

ミュゼが追撃をしようとした、背中にホームズの蹴りが炸裂した。

(しまった!!)

ローズに気を取られたミュゼの精霊術をホームズは、抜け出してきたのだ。

「獅子戦哮・氷牙!!」

ホームズに視線が移ったミュゼを後ろからローズの氷の獅子が襲う。

「ネガティブゲイト!!」

ミュゼは、即座に精霊術を作って打ち消す。

「獅子戦哮・焰!!」

「しっしっしっ！」

迫る炎の獅子をミュゼは、紙一重でかわすとホームズに髪で攻撃する。

「蒼破迫蓮!!」

蒼い斬撃が、空を走りミュゼに襲いかかる。

ミュゼは、攻撃の手を止め、自分の身を守るしかない。

「なるほど、最初からこれが狙いつてわけ」

ミュゼは、忌々しげに舌打ちをする。

二人一緒にエアプレッシャーをかけられてしまえば、それこそ終わりだ。

だからこそ、二人は同時に精霊術をかけられないようミュゼを挟み撃ちする形をとつた。

(ジルニトラの時ののは、時間がかかり過ぎて無理。それに出来たとしても私を中心にしたら、私も動けなくなる)

単純だが、とても効果的な布陣だ。

更にヨルの存在が精霊術の牽制となる。

「だつたら!!」

ミュゼは髪を傘のように広げ、ホームズとローズを弾き飛ばす。

ホームズとローズは、飛ばされた後、直ぐに宙返りをして態勢を立て直す。

先程食らったのだ。対策ぐらい直ぐに立てられる。

「こんの!!」

ミュゼの髪がホームズに巻きつく。

ホームズは、地面を踏み鳴らす。

「守護方陣!!」

光の陣は、ミュゼの髪を弾く。

「二度も三度も食らいたくはないさ」

「——っ!」

ミュゼは、悔しそうに歯噛みをする。髪を引いた。

そのミュゼの後ろには、ローズが迫る。

ミュゼは、ローズの右の一刀を髪で受け、そのまま髪で攻撃を仕掛けた。

ローズは、左の一刀で受けながすと、そのまま刀を振り下ろした。

ふわりと浮かんでミュゼは、かわす。

ミュゼは、上空でマナを込める。

(こっこなら!!)

そう思った瞬間背中に衝撃が走る。

「とか思ってるんじゃないだろうねえ?」

再び黒霞を纏いミュゼの背後にたつたホームズは、ミュゼに向かつて一撃を放った。ミュゼは、宙返りをして飛ばされる勢いを殺し、ホームズを睨むと髪を素早く伸ばした。

攻撃をしたばかりのホームズに避ける余裕はない。

何とか盾で防ぐ。

その隙にミュゼは、ホームズとの距離を詰める。

迫る刃と化した髪を前にホームズは、盾でミュゼを殴りつける。

「……………ちっ！」

ミュゼは、仰け反りながらも髪を振るう。

その髪は、ホームズの肩を捉える。

肩からは血が噴き出しミュゼの髪を真っ赤に染める。

「ホームズ、血が！」

「んなもの、いつものことだ!!」

ローズの心配そうな声にそう返すと、ホームズは、距離を詰め、頭突きを食らわせる。まさかの攻撃にミュゼは、脳を揺らす。

「鳳凰天駆!!」

身体に炎を纏い更にホームズは、頭を揺らしているミュゼを巻き込んで高く舞い上が

る。

「かぁーらぁーの!!」

ミュゼの上を取ったホームズは、黒霞が消えることを察して、先に宙返りをして消す。

「鳳凰天翔駆!!」

火の鳥となったホームズは、そのままミュゼを地面に叩き落とした。

だが、ミュゼも負けてはいない。

仰向けのまま髪を操り、ホームズを吹き飛ばす。

「となれば、次は……」

案の定、後ろに迫っているローズ

ミュゼは、振り返りながらホームズと同じように髪で弾き飛ばす。

「うぐ……」

飛ばされたローズは、全身に走る衝撃を呑み込む。

ミュゼは、そんなローズに追撃を仕掛けようと距離を詰める。

満身創痍のホームズではフォローに向かうことは出来ない。

そう思いローズへと向かったミュゼの身体が、急にがくと止まった。

「これは……」

「覚えがあるだろ?」

ホームズの肩でヨルがニヤリと白い歯を見せて笑う。

今まで何度もミュゼに仕掛けていた手だ。

ローズに向かおうとしているミュゼをヨルの尻尾ががんにがらめに縛り上げていた。

「二本釣りじゃあ!!」

ホームズは、ミュゼを思い切り引つ張った。

ローズに迫っていたミュゼは、一気にホームズの元まで引き寄せられる。

引き寄せる勢いを利用しホームズは、蹴りを叩き込もうとする。

「グラビティ！」

ホームズの目前まで迫ったその瞬間、ミュゼは精霊術を発動させた。

生首状態になる前に術を発動させる。

ヨルの術喰らいを封じるのにこれ以上の策はない。

現れた闇の球体は、ホームズの身体を軋ませる。

「くそ!!」

ヨルは、ワntenポ遅れて生首になり、術を喰らおうとする。

ヨルが生首になったその瞬間、がんにがらめのミュゼの拘束が解けた。

ミュゼは、これを狙っていた。

もちろん、ヨルだって分かっていた。分かっているが乗るしかなかった。

ミュゼは、指を鳴らす。

するとホームズの身体を軋ませていた球体は、弾けた。

突然の爆発にホームズは、地面を転がる。

「グラヴィティ!!」

先程より更に大きい球体が、ホームズとヨルの上に現れ、彼らを地面に抑えつける。

その重圧は、今までと比べ物にならない。

「レイ!!」

「!？」

術を発動させたばかりのミュゼの上に光の雨が降り注ぐ。

思いもしないところから現れた攻撃をミュゼは何とかかわそうとするが、いかんせん余りにも不意打ちだった為、いくつか受けてしまった。

ミュゼの肩を焼いた光の雨を放った張本人、ローズは、真っ直ぐに標的に向かって走り出していた。

目の前には迫るローズ。

そして、先の一瞬でグラヴィティは、解けた。

となれば、次に来るのは決まっている。

「ワンパターンにもほどがあるわ!!」

後ろで第二撃を用意しているホームズだ。

ミュゼは、背後にいるはずであろうホームズを狙って髪を振るう。

「ぎあんねん、俺だ」

ヨルは、ミュゼの髪に着地しながらそう返す。

着地したヨルは、ミュゼから見て右の方向に視線を移す。

「今だ！ホームズ!!」

ミュゼは、ヨルの目の動きを見逃さなかった。

視界の端にポンチヨが微かに映る。

自分の右に向かって鋭く尖った髪を放つ。

ミュゼの髪は、

ポンチョだけを貫いた。

ホームズは、ミュゼの左から現れ、そのまま蹴り上げた。

ミュゼは、飛びそうになる意識を堪えるとヨルを睨みつける。

「やっつけてくれたわね！」

「何のことだか分からんな」

ヨルは、馬鹿にしたように笑いながら、尻尾を使ってポンチョを回収する。

ヨルの視線は、ただのダミーだ。

だが、それだけでは、ミュゼは引つかからない。

逆に深読みするかもしれない。

ワザと反対方向を見てみると。

そこでポンチョだ。

あらかじめ脱いでおいたポンチョをヨルが尻尾使って視界に映るか映らないかのギリギリのところではためかせたのだ。

二つ揃った状況証拠のせいでミュゼは、まんまと騙されてしまったのだ。

「よくも……！」

彼らは、人を出し抜くことにかけては、他の追隨を許さない。

「おいおい、どこ見てるんだい？」

ポンチヨを羽織ったホームズは、ヨルに気を取られたミュゼにアイアンクロウを決めると顔面から地面に叩きつけた。

「——!!」

顔面に走る激痛にミュゼは、言葉が出ない。

そのミュゼにホームズが追撃を仕掛ける。

「……ヴゲイト」

弱々しい声と共に足を振りかぶったホームズの目の前に闇の腕が、現れた。

「つくそ!!」

ミュゼの精霊術に気を取られたホームズをしなつた髪が弾き飛ばす。

「次!!」

タタラを踏んで堪えたホームズにミュゼは、更にもう一撃を加えようと距離を詰める。

「ソリッドコントラクション」

ローズは、刀でミュゼに標準を合わせると精霊術を発動させた。

突如現れた光の鎖は、ミュゼを拘束する。

ローエンの発動させたものを見たローズは、いつものように見様見真似で使ったのだ。

恐らく本来なら、テクニクが必要になるのだろう。

ローズは、それを全て力だけでどうにかしている。

「くっ……………」

ミュゼは、動こうと身をよじる。

鎖がギチリギチリと軋み始める。

「ホー……ムズ、早く!!」

ホームズは、ローズの言葉に答えるように足を速め、走り続ける。

「おおおおおおおおお!!」

走りながらホームズの脚が徐々に燃え上がる。

燃え上がると同時にミュゼへの距離を徐々に詰める。

その距離、

(後、
五歩!!
)

1人と1匹

(後、五歩!!)

ミュゼまでの距離は、ホームズの歩幅で残り五歩だ。

(四歩!!)

脚を踏み出す。

鎖に繋がれたミュゼは、何とか拘束から抜け出そうとする。

「こんの!!」

ローズは、もう一つ光の鎖を作り出す。

すると彼女の鼻から血がたらりと流れる。

初めて使ったこの術をいつものように思いつきの力技で行ったためだろう。

体には、いつも以上に大きな負荷がかかっていた。

「でも……だからって、逃すわけじゃないじゃない。こんなチャンス二度もないんだもの」

ローズが増やした鎖を見てホームズは、更に一步詰める。

(残り、三步!!)

ここでローズの頑張りを無駄にしないためにもホームズは、脚を進める。

(後は、二歩!!)

ホームズが三歩目の脚を地面につけようとしたその時だ。

腹部に激痛が走ったのは。

「…………カハッ」

何が起こったか理解できないホームズ。

そんなホームズを差し置いて、口の中は鉄の味でいっぱいになる。

激痛の先を見るとそこには、腹部を背中から貫いたミュゼの髪があった。

「後ろ…………から?」

「何を驚くことがあるの？ 手品師が右手を見せたら左手を見るのが常識、なんでしょ？」

ミュゼは、ローズに掴まりながら髪をホームズの後ろに回し、死角から貫いたのだ。

「だからって……………近付ければ……………」

ホームズは、血を吐きながらも近付こうとする。

「よく見なさいよ。貴方の脚」

言われてホームズは、ようやく炎が消えていることに気が付いた。

「まさか……………？」

もう一度、自分の傷口を貫く髪を見る。

髪の前には、貫かれたホームズのリアル・オーブがあった。

「……………嘘……………だろう……………ここにきて？」

「これで貴方は、戦力外」

ミュゼは、鎖を引きちぎりホームズに髪を振るった。

「ホームズ!!」

かわすことも出来ないホームズの腹の傷口にミュゼの髪が放たれた。

「———っ!!」

声にならない叫びと血を吐き出しホームズは、膝から崩れ落ちた。

倒れたホームズへ追撃しようとするミュゼにローズの刀が襲いかかる。

ミュゼは、髪を使って防ぐ。

「行かせない!!」

「まあ、そう来るわよね?」

ミュゼは、そう言うのとローズに攻撃を仕掛けてきた。

今度は、ローズが受ける。

(ヨルが消えていないところを見ると、まだ、ホームズは死んでない)

ローズの刀がミュゼの顔面に迫る。

ミュゼは、一歩引いてかわすと先程まで眼前迫った刀を持つローズの手を髪で激しく

打つ。

「っ痛ー!」

一瞬刀を持つ手が緩む。

ミュゼは、その一瞬を逃さない。

「はあっ!!」

ミュゼは、ローズの刀を叩き落とし、それを自分の後ろに飛ばした。

倒れるホームズより更に後ろで光るローズの刀。

(マズイ……………!)

ローズは、歯噛みをする。

刀が一つ減ったことではない。

この状態がマズイのだ。

まずは、ホームズの安否。

ヨルが生きている限り、まだホームズも生きているだろう。

だが、怪我也決して軽いものではない。

何より、リアル・オーブが壊れている。

ローズもホームズもこれがあるから魔物達と戦えているのだ。

特にホームズは、^{ゲート}霊力野がない。

自分でマナを操作することができないため、どうしてもリアル・オーブに頼らざるをえない。

現にリアル・オーブが壊れたホームズの炎を纏った脚は、普通の足に戻ってしまっ
た。

これでは、例えば傷を治しても戦線には、復帰出来ない。

そして、更にそのホームズへは、ミュゼが一番近いところにいる。

これが一番マズイ。

何せ、人質に取られているようなものだ。

ミュゼとしては、ホームズを殺せるに越したことはない。何しろヨルがいれば精霊術を使えないのだ。

だが、精霊術が使えなくても、ローズ一人が相手なら別にどうだっていい。

しかし、ローズにとってはそうではない。

ミュゼにとっては殺しても殺さなくてもどっちでもいい相手でもローズにとっては殺させてはいけない人物だ。

何としても、守らなくてはならない。

ミュゼの行動に最大の注意を払わなくてはならない。

にもかかわらず、ローズの刀がホームズの近くにある。

これが視界にあるせいで、ローズの中に刀を拾う選択肢が追加されてしまう。

(考えることもやることも多すぎる!!)

ローズは、一つだけの刀を握りしめる。

その瞬間、ミュゼの髪が迫る。

ローズは、刀で受け止める。

すると、ミュゼは、後ろにいるホームズに向けて髪を伸ばす。

「っ!!」

ローズは、防御から攻撃へと転じる。

だが、それは、ミュゼの攻撃を身体で受けることを意味する。刀で阻まれていた髪がローズへと襲い掛かる。

ローズは、腕の皮膚を切り裂く髪など構わずミュゼへと距離を詰め、刀の柄で腹部を殴りつける。

ローズの捨て身の攻撃にミュゼは、態勢を崩した。

態勢を崩したミュゼの髪は、ホームズから外れた。

「やるわね」

ミュゼは、そう言うとニヤリと笑う。

「でも、残念」

腹部を殴りつけたはずの攻撃は、ミュゼの髪に阻まれていた。

ミュゼにとってこの展開は、容易に想像できていたのだ。

想像以上だったのは、威力だけだ。

思わず態勢を崩すほどだった。

だが、ただ、それだけだ。

ミュゼの髪が紫色の光と共にローズを頭から叩きつける。

「ぐっつ!」

頭を揺らす衝撃にローズは、意識が飛びそうになる。

そんな意識を繋ぎ止めるようにローズは、唇を噛む。たらりと血が流れる。

鋭く走る痛みで何とか意識を繋ぎ止める。

地面に落とされた視線をミュゼに戻すとローズは、刀を構える。

「瞬迅……」

「そうはいかないわ」

ローズの足元には紫色に輝く陣。

その陣は、辺りの空気を巻き込んで弾けた。

ローズももれなくそれに巻き込まれた。

辺りに立ち込める煙。

「爪竜連牙斬!!」

それを切り裂いてローズが現れた。

額から血が流れ、顔の半分は、血まみれだ。

煙を切り裂いた刀は、そのままミュゼに迫る。

「くっ!!」

ミュゼの髪がローズの腹を激しく打つ。

「が……………！」

ローズは、後ろに仰け反る。

「……………ナメんなアア!!」

ローズは、仰け反った身体を戻しながらミュゼに頭突きをかました。

「ぐっ！」

「がっ!!」

二人は、堪らず後ろに下がる。

ローズの顔は変わらず血まみれだ。

ミュゼは、衝撃が響く頭を押しさえながら、ローズを睨む。

押さえた手からは、血が流れる。

よく見ると腕からも血が流れている。

さっきの刀は、しっかりと届いていたようだ。

「貴女、正気なの？そんな状態で、頭突きなんて…………」

ミュゼの言葉にローズは、べっと血が混ざった唾を吐く。

「生憎、メンタルは弱くても身体は丈夫なの」

ローズは、そう言うとうィンガル戦で使った鉢巻を再び巻きつけ、目に血が入るのを

防ぐ。

(まだ、諦めないのね)

この状況で、ミュゼを倒すことを目指し続けるローズにミュゼは、齒齧みをする。諦めない人間ほど厄介なものはない。

なら、やるのは一つだ。

「ねえ、なんでそうまでしてこの人間を庇うの？今のこの人間は、完全に足手まといよ」

ミュゼは、言葉が続ける。

「貴女がこの短期間に傷だらけになった理由なんて火を見るよりも明らかじゃない」
何故、こんな話をするのか？

決まっている動揺させるためだ。

諦めないのなら、心を折ればいい。

「……………そうね」

「だったら見捨てたら？足手まといを切り捨てるなんて、よくあることで…………」

「足手まといぐらい何よ、私なんて足引っ張ったわ」

ローズは、ミュゼに被せて言い放つ。

「危うく飛び込み心中させるところだったわ。それに比べればこんなの可愛いものよ」
ローズは、一歩踏み込む。

その瞬間ローズは、ミュゼの前から消えた。

一瞬のことで動揺するミュゼの右から風を切る音が聞こえる。

音につられて右に視線を向けるとやはり、そこにローズがいた。

「心を折ろうと思った？お生憎様！」

ローズの横薙ぎの刀がミュゼに迫る。

ミュゼは、髪で防ぐ。

「私の心なんて、とつくの昔にバッキバッキよ!!」

ローズは、防がれることも構わずそのまま刀を振り切った。

ミュゼは、そのまま地面に叩きつけられた。

「うぐー！」

ローズの肩から血が噴き出す。

どうやらミュゼは、叩きつけられながらも一矢報いていたようだ。

ローズは、溢れる血を押さえながらミュゼを睨む。

「さあ、まだまだ続けようじゃない」

(とはいえ、ヤバイわ……血を出し過ぎた)

クラクラする頭を支えようとするが、そんな事をして仕舞えば、ミュゼに弱点を教え

てしまうようなものだ。

必死に堪える。

だが、ミュゼは、その場を動こうとしない。

「どうしたの？ 動かないならここっちから行くわよ」

ローズは、刀を担ぎ腰を落として低く構える。

ミュゼは、それに構わずローズを指差し震える声で尋ねる。

「ねえ、貴女のその光、誰と繋がっているの？」

ミュゼの言葉に驚いたようにローズは、自分のリリアル・オーブを見る。すると確かに誰かと光で繋がっている。

その光の先を目で追うと、そこには、

ミュゼに空中回し蹴りを放つホームズがいた。

「黒い安全靴は、振り返るミュゼの肩に打ち込まれた。めりめりとなつてはいけない音を立てながら。」

「ホームズ……」

「待たせて悪かったねえ、ローズ」

ホームズは、ヨルを肩に乗せポンチヨをはためかせる。

ミュゼは、僅かに下がりながら、肩を押しえて、ホームズを睨みつける。

「貴方、それ……」

「勿論、リリアル・オーブさ」

「なんで、それは貴重品よ！何でそんなに持っているの!？」

ミュゼの言葉にホームズは、指を三つ立てる。

「リリアル・オーブは、最初から三つあった」

ホームズは、そう言うのと三本立てた指を一つに切り替える。

「二つは、おれが奪ったリリアル・オーブ」

そう言うのと二本目を立てる。

「もう一つは、ヨルが母さんから貰った本来おれが使う予定だったリリアル・オーブ」

そして、更にもう一本指を立てる。

「そして、最後の一つこれは、母さんのリリアル・オーブだ」

最後の夜、ヨルと話す前、ホームズはルイーズの元にいた。

その時、渡されたのだ。

『まあ、理論上は使えるはずだからどうしても時は使いたまえ』

ホームズは、胡散臭そうにそれを見る。

『本当に使えるのかい？』

『君がちゃんとマナを溜めてればね。二つ持つてる君は、その分成長も遅いだろうね。くくくく』

『笑うんだ………』

イラつときたのでぶつ飛ばしたくなつたが何とか堪える。

『何らかの不具合は、あるかもだけど使えるよ』

『なんで、そんな自信満々なんだい？』

『君だつて人のリリアル・オーブ使つてるじゃあないか』

ルイーズの言葉にホームズは、思わず納得してしまう。

『まあ、それもそうだねえ………』

『だろう？それと、何よりもう一つ』

「より正確に言うなら父さんから母さんが引き継いだリアル・オーブだ！」

『私達の想いがこもっているんだ。使えないわけがない』

ミュゼは、目を丸くしていた。

ヨルは、肩でため息をつく。

「ま、立ち上がりは遅かったがな」

「本当にね。あの世で会ったら絶対文句言ってやる」

ホームズは、恨めしそうに言う。と地面を踏み鳴らした。

それと同時に守護方陣が現れ、ミュゼを拘束する。

ミュゼは、ホームズを睨みつける。

「貴方、まさか最初からこれを狙って？」

「いや、使わずに済めばいいなと思ってた」

ホームズは、陣を更に強める。

だが、拘束はしても回復しない。

恐らくこれが不具合なのだろう。

「なんで俺がわざわざホームズと共鳴していたと思う？」

ヨルがホームズの肩でニヤリと笑う。

「印象に残るからだ。絶対に使うはずのない俺がリアル・オーブを使ってホームズと共鳴していければもれなく、お前の頭の中にホームズのリアル・オーブの存在を刷り込める。そして、壊した油断したところに一手打って誤だ」

「……………そうやって、人を囮にするのを思いつくところは、流石だよな」

「いつだって自分から囿になつてゐるからいいだろ」

「……………なんだろう。何一つ間違つていないはずなのにこの釈然としない感じ」

ホームズは、ため息を吐く。

ホームズがローズと共鳴したのは、リアル・オーブを壊すと言う選択肢を植え付けるためだったが、ヨルが更に上乗せしたのだ。

「だからつて、私が最後のもう一つの存在に気付くとは思わなかつたの？」

「ぜんぜん」

ホームズは、そう言うと言葉を続ける。

「いいかい？これは、おれのことを知つていればもう一つのリアル・オーブが誰の分かる。

更に頭が回ればもう一つを隠し持つていることぐらい分かるんだよ。

でも、君はそのどちらでもない。

おれのことを人間如き、エレンピオス風情と見下し理解しない、知ろうともしない、そして、自分で考え行動も出来ない君は、どちらにも当てはまらない」

「だからお前は、ホームズが仕込み、俺が更に上乗せした策にまんまとハマつたわけ

だ。ザミアミロ」

ヨルは、白い牙をむき出しにして笑う。

ミュゼは、ギリつと齒軋りをしてホームズとヨルを睨む。

「そんな、この私が……エレンピオス人なんか………シヤドウもどきなんかに出しぬかれるなんて」

ホームズは、ミュゼの言葉にやれやれと肩をすくめる。

「勘違いしないで欲しいねえ……」

ホームズのポンチョがふわりとたなびく。

「君は、おれに出し抜かれたんじゃあない」

「お前は、俺に出し抜かれたわけじゃない」

ホームズとヨルが口を開く。

「一人と一匹に出し抜かれたんだよ」

ミュゼは、悔っていた。

彼ら一人と一匹は、人を出し抜く事に關しては他の追隨を許さない。

騙し合いを挑むには、經驗値が足りなかった。

ミュゼは、そんな考えを悟らせないように精一杯の笑顔を浮かべる。

「それで、得意げにペラペラと喋って何のつもり？ 言つとくけど、拘束といった瞬間に貴方の心臓を貫くわよ」

「何のつもりだと思ふ？」

ホームズの質問にミュゼは、眉をひそめる。

答えが返つてこないと判断したホームズは、ニヤリと笑う。

「正解は、ただの時間稼ぎでした！」

ミュゼは、その言葉にハツとし、ホームズのリアル・オーブの結ばれた先を見る。

そこには、どきくさにまぎれて拾ったもう一つの日本刀を持って二刀流となったローズが立っていた。

「行くぞ、オーバリーミッツ!!」

ホームズとローズの身体を光が包む。

「私にも事前に教えておいて欲しかったわ」

ローズは、刀を構える。

「敵を騙すにはまず味方からって言うだろう？」

「貴方、遂に騙してること認めたわね」

ホームズは、守護方陣を解く。

ミュゼの髪が真つ直ぐに伸びる。

「省略！ストップロウ!!」

次の瞬間、時が止まった。

ローズは、止まった時の中でホームズを引っ張ると、髪の直線から外した。

「解除!!」

再び時が動き出すとミュゼの髪は虚しく空を切った。

「ヨル!!」

ホームズの脚に非常識・改が纏わりつく。

ローズは、二刀に自分の血を塗り付ける。

ここから繰り出されるのは、ただの技ではない。

秘奥義でもない。

共鳴リソク秘奥義だ。

「蹴りをつけてやる!!」

「拔刀!!」

ローズは、刀に手をかけたままミュゼに向かって低い姿勢で走り出す。

ミュゼの前に迫った瞬間ローズは、踏み込み、助走の勢いそのままに刀を引き抜く。助走の勢いを下から力チ上げる力に変換する。

当然ながら、右膝にかかる負担は尋常ではない。

オーバーリミッツの状態だからこそ、ギリギリ耐えられるのだ。

真つ赤に輝く抜刀されたそれは、ミュゼに放たれた。

だが、髪で阻まれ、刃が届くことはなかった。

しかし、助走の勢いがそのままカチ上げる力に変わっている抜刀術は、ミュゼを天高く打ち上げた。

「続いて行くわ！来なさい！ホームズ!!」

「もう向かつてるよ！」

ローズは、一刀目を放り投げると踏み込んだ右脚を軸にくるりと一回転した。

遠心力を乗せ、抜刀するローズ。

ホームズは、駆け寄ると飛び上がった。

呼吸あわせる。

「二刀目!!」

血で身を固めた刀は、抜刀の勢いを一切殺さず、今度は、ホームズを打ち上げた。

飛び上がったホームズは、そのままに非常識・改を使って駆け上っていく。

ローズは、そんなホームズ見ながらため息を吐く。

(やっと思いついたと思ったらもう先に行くのね)

そんなことを思いながらも次の攻撃の用意をする。

離れたならまた追いつけば、いや、追い越せばいいだけの話だ。

(だから、今やれる精一杯をやるしかない)

ヨルは、そんなホームズの先に黒球を吐き出した。

今までにない巨大な黒球は、ホームズに向かって落ちてくる。

ホームズは、一切立ち止まることなく歩みを進める。

「後悔も」

ホームズは、歩みを進める。

ローズは、二つの刀の柄を合わせる。

すると、刃を纏っていた血が姿を変えていった。

「罪も」

ローズの手にもう二刀は、ない。

代わりにあるのは、弓だ。

宙に浮かぶミュゼにローズは、マナで矢を作り出し、狙いを合わせる。

「欲望も」

黒球が、ホームズに落ちた。

弾けた黒球は、ホームズを飲み込んで陽炎のように揺らめき続ける。

「信念も!」

ローズが構えた弓の先には、上空にいるミュゼに照準を合わせるように魔法陣が次々と展開されていく。

そして、その魔法陣は、照準合わせだけでなく、ミュゼを上空に拘束した。

「思い出も!!」

揺らぐ黒霞が、中心へと渦巻いていく。

そして、それは徐々に形を変え安全靴をさらに黒くそして、ポンチヨへと姿を変えた。真つ暗なポンチヨを羽織ったホームズは、ミュゼの上空に現れた。

「約束も」

ヨルが静かに口にする。

「全部背負って」

ホームズは、身体を捻りながらミュゼとの目測を測る。

「打ち勝ってみせる!」

ローズの引き絞る矢が煌々と光り輝く。

後は、それぞれ一撃を放つだけだ。

しかし、矢を放とうとした瞬間、照準を合わせていた魔法陣が揺らぎ始めた。

(……にきて……………！)

ローズは、舌打ちをした。

元々、今日だけで秘奥義を三回放っている。

グミで回復したとはいえ、別に全回復というわけではない。

そんな状態で無茶な精霊術を二回も放っている。

これだけでも、限界なのにローズは、戦闘において先ほど血を流しすぎてふらふらしていた。

目の前が霞む。

このままでは、失敗する。

だが、ここで失敗しても誰もローズを責めない。

ローエンと一緒にウインガルに勝った。

ガイアスに一太刀浴びせた。

ミュゼの秘奥義を打ち消して見せた。

ホームズが復活するまで時間を稼いで見せた。
この功績を前に誰が彼女を責めるといふのだ。
きっとよくやったと言ってくれよう。

後は任せたまえと言ってくれよう。

ローズは、歯を食いしばって前を見つめる。

(私は、そんな言葉が聞きたくて頑張ってるんじゃない!!私が聞きたいのは、そんな言葉じゃない!!)

「気張れ!ローズ!!」

霞がかかった意識の中、ヨルの声が響く。

「女の覚悟を見せてみろ!!」

その瞬間、ほんの一瞬だけ世界に輪郭が戻った。
揺らいでいた魔法陣が元の形を取り戻す。

「まさか貴方に言われる日が来るなんてね……」

ローズから自然に笑みがこぼれる。

「ええ。見せてあげるわ!!」

ローズの矢は先程より更に輝きを増していく。

対するホームズは、吸い込まれたまま戻ってこれないよう黒い揺らめきに身を包んでいた。

「」朔の……………」

ローズは、ミュゼに照準を合わせ切った。

ホームズは、身体を捻りながら霞に纏われた右脚をミュゼに振り下ろす。

「「」終撃!!」

ローズは、矢を放った。

ホームズは、振り下ろした規格外の一撃をミュゼに叩き込んだ。

ミュゼは、展開された魔法陣を次々と通過しながら地面に向かって打ち落とされて行った。

そして、地面に向かうミュゼにローズの放ったマナの矢が魔法陣を通過しながら、ミュゼに打ち込まれた。

二人の攻撃により、もうもうと煙が立ち上る。

ローズは、思わず着きそうになる膝を何とかふるいたたせ、ミュゼがいるであろう煙を睨む。

その隣にホームズは、宙返りをしてローズの隣に立つ。

黒霞は、静かに消えていった。

ホームズも目の前の煙から目をはなさない。

煙の中にゆらりと立ち上がる人影見えた。

「!?!」

次の瞬間、ミュゼの髪が二人に向かって真っ直ぐに伸びてきた。

二人とも立つのが精一杯だ。

避ける余裕も防ぐ余裕もない。

二人は、次に来る一撃を覚悟した。

ところがいつまでたつても攻撃が来ない。

恐る恐る目を開けると髪は二人の目の前でピタリと止まった。

「え?！」

ホームズがキョトンとしているとミュゼは、悔しそうに笑う。

「認めたくないけど、認めるしかないさそうね」

ミュゼは、今にも泣き出しそうなのだ。

「貴方達の勝ちよ」

そう言つてミュゼは、ゆっくりと倒れていった。

猫も喋れば

「勝った……………」

「みたいだねえ……………」

そう呟くと刃が甲高い音を立ててホームズ達の目の前に折れた刀が落ちてきた。

青みがかったそれには、見覚えがある。

「これって、次元刀か？」

ヨルが不思議そうにそれを見ている。

ガイアスの次元刀。

折れたそれがあるという事は？

その問いは、考えるまでもない。

「ぐっ……………」

ガイアスは、膝をついていた。

勝敗は、決した。

「マクスウエル!!」

ミラの声が響く。

四大が現れ、クルスニクの槍に精霊術をかける。

ゆつくりとクルスニクの槍は展開されていき、マクスウエルが現れた。ジュード達の勝利だ。

それを見たローズは、気が抜けたのだろう。

ふらつと力が抜け身体が傾く。

それに気付いたホームズが支えようとするが、ホームズも限界まで身体を酷使した為、力が入らない。

「あー……………だよね」

そのまま二人とも折り重なるようにうつ伏せで倒れた。

「……………お」

「重いかいうんじゃないわよ」

ホームズという言葉を先回りして、ローズが封じる。

「じゃあ、早く退いておくれよ。さっきから、肋骨が当たって痛いんだけど」

「貴方のデリカシーのなさは、ヘビー級よね」

ローズは、ジトつとした目をしながら忌々しそうに言う。

「二人とも、大丈夫……………じゃなさそうだね」

「君もね、レイア」

治療しにやって来たレイアにホームズは、そう言葉をかける。

レイアもホームズ達に負けず劣らずボロボロだった。

「私だけじゃないよ」

そう言つて指差す先には、傷だらけの面々がいた。

「まあ、当然だよね」

「今回ばかりは、ホームズのことを責められないなあ……」

そうぼやきながら、レイアは先ずホームズの背中にいるローズに精霊術をかける。

なんとか動けるようにまで回復するとローズは、立ち上がる。

回復したローズを見届けるとレイアは、ホームズにも精霊術をかける。

少しずつ身体が軽くなっていき、ホームズも何とか立ち上がった。

「……………レイア?」

いつまでも立ち上がらないレイアにホームズは、首をかしげる。

「ごめん。今ので使い切っちゃった」

マナを使い、立ち上がる体力も無くなったようだ。

「君ねえ……………」

ホームズは、呆れて溜息をつく。

「いやあ……………あはははは」

気まずそうに笑うレイアの口にホームズは、ミックスグミを放り込んだ。

「……………!?!」

目を白黒させながらレイアは、ミックスグミを飲み込む。

「ファイザバード沼野では、助けてもらったからね」

「アレは別に私のも無いけどね」

レイアは、そう言っただけで足を力を入れる。

力が少しばかり戻ったレイアは、立ち上がった。

「おっとと……………」

まだ、すこしばかり力が入らずよろけるレイア。

そんなレイアをローズが支える。

「ありがとう」

「別に。貴女にかけて迷惑に比べれば大したことないわ」

「……………ハハハ」

乾いた笑いを浮かべるレイアにローズは、溜息を吐く。

「否定しないのね」

「レイアは、嘘が苦手だからね。おれと同じく」

「貴方と違って隠し事も苦手よ」

そんなことを言い合いながら彼らは、ジュード達の元へと歩いて行った。

「お前達の望む未来など、所詮民を苦しめるだけ。例え源^{オリジン}霊匣があるとな」
ガイアスは、ゆっくりと立ち上がる。

「ましてや、二つの世界を一つにしたところで互いが手を取り合うことなど幻想に過ぎない」

間違つてはいない。それが現実ならリーゼ・マクシアで戦争そのものが起こっていない。

「……僕の信じた未来は、甘くて馬鹿なのかもしれない」

そう言つてジュードは、ミラを見る。

「でもミラは、僕を信じてくれた」

「言葉が正しくないよ、ジュード。そこは、ミラ達は、だろうか？」

ホームズの言葉にジュードは、笑顔で頷く。

「ミラ達は、信じてくれた。それにガイアス、貴方も」

「それが何だというんだ？」

ジュードは、少しだけ目を伏せる。

「どれだけ強気なことを言つても、僕はここまで来ることがずっと怖かった。僕はまだ弱くてちつぽけな人間だよ」

「ただ、と言葉を続け、ガイアスを真っ直ぐ見る。

「僕はいつか強くなる。だから、僕を信じて欲しいんだ」

その言葉を放つジュードの瞳には、かつてのような頼りなさは、ない。

優しい顔つきは変わらず、それでも強い意志が、信念が宿っていた。

「人は強くなるうとするから、誰かのために成長しようともがくから、私たちの未来は想像も出来ない可能性に満ちていると、信じている」

ミラの言葉を聞いてレイアがチラリとローズを見る。

ローズは、目をそらしそうになるがぐつとこらえる。

「ガイアス、お前なら分かっているはずだ」

「認めぬ。お前達の可能性が挫かれた時、俺は再び立ち上がるぞ」
ぐんつと、殺気が再び膨れ上がる。

そんなガイアスにジュードは、ゆつくりと近づき、手を差し出す。

「そうはさせないよ」

柔らかい口調のままはつきりと宣言したジュード。

ガイアスは、認めるしかなかった。

ミラは、ゆつくりとミュゼに近づく。

「立てるか？」

ミラの言葉にゆつくりと目を開けたミュゼは、首を横に振った。

「無理よ。私は、また何も無くなった、また、一人……」

ミラは、そんなミュゼに手を差し出す。

「二人で生きていくのが辛いなら、共に生きよう」

静かに語りかけられたミュゼは、瞳を潤ませながら起き上がり、頷いた。

「決心はついたようだな」

「ああ」

解放されたマクスウエルにミラは頷く。

ホームズが首をかしげる。

「決心？」

ミラは、ふりむき力強く宣言した。

「私は、マクスウエルになる」

ミラのその宣言に一行は、息を飲む。

ホームズが首をかしげながらは、マクスウエルを指差す。

「マクスウエルなら、そこにいるじゃあないか」

ヨルは、ホームズの肩で溜息を吐く。

「阿呆。断殻界シエを無くすには、マクスウエルが消えるしかない。

だが、この世界からマクスウエルが消えるわけにはいかないんだよ」

「その代わりが、ミラってことかい？でも、ミラって人間だろう？精霊になんてなれるのかい？」

ホームズの質問にヨルは、ミラの太ももを尻尾で示す。

そこには、歩くのに必要なジンテクスがなかった。

「ミラは、もう人間ではない。ジンテクスなしで歩いているのが、何よりの証拠だ」
更にヨルは、言葉を続ける。

「あの復活した時だろうな。あの時、人として死んだミラは、精霊として復活した。そんなところだろう」

ホームズは、ヨルの解説を聞きつつ、更に尋ねる。

「断殻界シエが消えても世ウルスノ精途カーラつて持つのかい？」

「持たないだろ。このジジイが柱なんだ。両方消えていく」

それから、呆れたようにヨルは、ホームズを見る。

「後な、全部わかりきつてることをわざわざ俺に尋ねるな阿呆。現実シエは変わらん」
ヨルに言われホームズは、ぐつと押し黙る。

「断殻界シエのマナを使えば、再び人間として生きることシエも可能だぞ」
マクスウエルの提案にミラは首を横に振る。

「そうか……………精霊達を見守ってくれるか」

ミラは頷いた。

「ミラ!!」

ジュードの叫びが響く。

ミラは、優しく微笑みながら振り返る。

「ジュード。これでお別れだ。思えば私たちは、奇妙な縁だったな。これまでありがとう」

「待つて…僕……………」

ジュードは、泣きそうになりながら言葉を続けようとする。

だが、ぐつとこらえて真つ直ぐミラを見据える。

「……ずっと頼りなくてごめんね。でも、これからは大丈夫だから」
ジュードの言葉に頷いてミラは、答える。

「ミラ!!」

エリーゼが普段出さないような大声で、ミラに呼びかける。
だが、胸がいつぱいになってしまい言葉が続かない。

『エリーゼは、ミラが大好きだつてさ! もちろん、僕もね』
エリーゼが伝えられない思いは、ティポが伝えた。

「また、会えるんだよね?!」

レイアは、手を握りしめながら尋ねる。

「大丈夫よ。そのための源霊オリジンなんだから」

ローズは、そう言うともミラを見据える。

「貴女みたいになりたかったけど、もうやめるわ」

ローズは、そう言うともミラを見る。

「私らしく貴女を超えてみせる。だから、またね」

手をひらひらと振った。

「ミラさん。楽しかったですよ、またお会いしましょう」

ローエン、エリーゼ、レイア、ジュードが爽やかに別れを告げる。

「なんだよ、それ！聞いてないぞ!!」

「ま、今回ばかりは、アルヴィンに同意だね」

微妙にみぐさい、アルヴィンとホームズ。ヨルは、肩で溜息を吐く。

「おれはね、君を犠牲にしない方法でエレンピオスに行くと言ったはずだよ。なのに君から犠牲になること選んじやあ、ダメだろう?」

「いいや。そんなことは言っていない。お前はあの時、こう言った『ただし、君を殺さない方法に限るよ』と」

ホームズは、記憶の紐を手繰り寄せる。

確かにミラには、『犠牲にしないで』とは言っていない。

ホームズは、不機嫌さを隠そうともせずミラを睨む。

「騙したね?」

「嘘は言っていないぞ。お前が勝手に勘違いしただけだ」

悪戯つぽく笑うミラにホームズは、溜息を吐く。

「……………分かったよ。納得してあげる。女の子に嫌われるのも騙されるのもいつものことだ」

別れは辛い。

だが、それでもミラがどうしてもその道を選んだか分からないホームズでは、ない。

なら、その顔は間違っている。

仏頂面では、ダメだ。

「ありがたい。時間をくれて。大切に使うよ」

ホームズは、にっこりと優しく笑ってそう言った。

ホームズの言葉にミラは、頷いてヨルの方を向く。

「お前からは、何かないのか、ヨル？」

「俺にそれを期待するのか……」

ヨルは、溜息を吐く。

ジュードに負けず劣らずヨルとミラの巡り合わせもだいぶ奇妙なものだ。

仕組まれた運命とは言え、いつの間にやら行動を共にするようになっていたのだ。

敵対した者とここまで旅をしたのは、ヨルにとっても初めてだった。

「基本死に別れしか経験したことないから分からないんだが、お休みとでも言っておけばいいのか？」

「それ以外だ」

ミラに即答されたヨルは、何かないかと今までの人の言葉を思い出す。

ヨルは、ホームズの方を見る。

「ホームズ、お前の母親の教えの一つ旅立ち編ってあったよな。確か……」

『いつてきますと気合いを入れることを忘れるな』だよ。でもそれがどうしたんだい？』

ヨルは、それを聞くとホームズの肩から飛び降りる。

そして、ミラの前まで行き、お座りの姿勢でミラの目を真っ直ぐ見る。

「ミラ」

ミラは、目の前の黒猫から目を逸らさない。

「いつてらっしやい」

旅を続けるホームズとヨルには、この言葉を使う機会は、ほとんどない。

最初で最後かもしれないその言葉にミラは、目を丸くする。

色々な意味でヨルらしくない。

だが、これ以上はないだろう。

「ああ。いつてきます」

ヨルは、優しく微笑んで頷いた。

事の成り行きを見守っていたマクスウェルは、別れが済んだのを見届けるとスウと光の粒子となつて消えていった。

それに答えるように断殻界シエウルスカールが消えて行く。

世ノ精途にも光が差し込んでくる。

一行は、その光景を見逃す事のないようただただ息を飲んで見つめていた。

いや、一人だけ俯いていた。

ジュードがその一人に近づき手を握る。

「泣かないで、ミラ」

「……………私は、マクスウェルだ」

そう言つて顔を上げる

別れは辛い、それでもこれは、ミラが選んだ道だ。

自分の道に誇りも持てる。

だから、これはきつと気のせいだ。

視界が歪むのも、

なぜか頬を伝う水があるのも、

きつときつと気のせいだ。

「泣いてなんかいない」

ミラは、ぎゅつとジュードの手を握り返した。

断殻界は消え、リーゼ・マクシアとエレンピオスは、繋がった。

リーゼ・マクシアとエレンピオスを巡る物語は、今ここで幕を下ろした。

エピローグ

「よし」

ローズは、決意をして扉を開ける。

「何年ぶりかしら」

そう言つて入つたところは、ローズの実家、家族が暮らしていた家だ。

家族が惨殺されて以来一切足を踏み入れてなかつた。

だが、今回、あの旅を経験したローズは、そこに踏み入れた。

勿論、ここで暮らすつもりはない。

というより、今は、この街に住んではない。

家族が殺された場所で暮らすほど、狂つてはいない。

今日ここに來たのは、過去と向き合うためだ。

「にしても、血の跡がないのは、放つて置くにしても」

そう言つて辺りを見回す。

「えらく綺麗ね」

きつと何処かのお人好しの師匠があの日まで掃除をしていてくれたのだろう。

「さてと」

ローズは、適当な椅子に腰掛けて懐から手紙を取り出す。差出人は、ジュード、アルヴィン、エリーゼ、ローエン、レイア。

「ホームズのが未だに届かないんだけど……」

どこをほつつき歩いているのか、ホームズから一切手紙が来ない。

「まあ、先に読んでおくか」

あの日々を思い出しながら、ローズは、一通一通読んでいく。

アルヴィンは、商売を始めたらしい。

エリーゼは、学校に通っているようだ。

レイアは、驚いたことに看護師を止めてしまったらしい。現在無職だが、いずれ素晴らしい家庭を築くことが夢だとか。

ローエンは、ガイアスの元で指揮者の腕を存分に振るっている。

そして、ジュードは、源^{オリジン}霊^{コンダクター}匣の開発に大忙らしい。

まだ、上手くはいっていないが、少しずつ理解者も増えてきているようだ。

「みんな、前を向いているわね」

最後の一通を読み終わるとローズは、大きく息を吐き出す。

手紙を読んだらやるべきことがある。

ローズは、手紙取り出し、ペンを持つ。

「さてと」

『手紙読んだわ。みんな元気そうで何より。まあ、ホームズだけ、全然分らないんだけど。』

私？私ハね、聞いて驚きなさい。

イル・ファンで学校に通ってるわ。

うんまあ、ジュードには、申し訳ないんだけど、タリム医学校じゃないの。

精霊術を教えている学校。

ほら、色々と適当に精霊術発動させてきたから、もう少し理論を学ぼうと思ったの。

私は、まだまだ出来ないことの方が多い。

だったらまあ、その出来ないことを潰しておくに越したことはないかな？と思っ
ね。て

それなりに高い志と運で入ったつもりだけど、先生が何を言っているか、よくわから

なくて困るわ。

……うん。本当、全然分らないから、ジュードいつか教えてもらってもいい？

まあ、そんなこんなでこっちは楽しくやってる。

まだ、未来の自分は、思い描けないけど、少しずつ探して行くわ。

だいたいね、超えなきゃいけない背中が多すぎるのよ。

ローズ・クリステイより』

ローズは、書き上げた六通の手紙を鳥の背中にある鞆に放り込んだ。
真っ白な鳥は、空高く飛び上がった。

「ホームズ、最後の一通が来たぞ」

「嘘！おれがドベじやあないか!!」

窓から入ってきた鳥がホームズは、ため息をつく。

目の前には、可笑しそうに笑っているドロツセルがいた。

「突然来るんですもの。驚きました」

ホームズは、カラハ・シャールにいた。

「紅茶を届ける約束でしたからね」

ドロツセルは、紅茶を一口飲む。

「エリーゼに会っていかればいいのに」

「会わないようにこのタイミングで売りに来たんですよ」

ホームズは、気まずそうに視線を逸らす。

あのメンバーの中でホームズだけ手紙を書いていないのだ。

「会ったら何を言われるか……」

「とつとつと書けばよかった話だろ」

ヨルの言葉にムツとしながらもその通りなので反論しない。

ホームズは、黙々と最後の一通、ローズの手紙を読み進める。

そして、手紙を読み終えると立ち上がった。

「ドロツセルさん、机借りてもいいですか。もうここで返事を書きます」

ホームズの宣言にドロツセルは、クスクスと笑う。

「ええ。どうぞ。ホームズさんが手紙を書いている間に私も仕事を済ませますから」

ドロツセルの了承を得たホームズは、机に向き直る。

そして、インクの瓶を見て首を傾げる。

「あれ？インクだだいぶ少なくなってますよ」

「……………まあ、ここ最近の手紙をよく書きましたから」

「?とりあえず、おれの置いておきますので自由に使ってください」

「そうですね……………まあ、ありがとうございます」

「……………こんなに疲れ切ったありがとうございます初めて聞きました」

ホームズは、そう言って手紙を書き始めた。

『やつほー。みんなの手紙読んだよ。』

……いやね、本当は、もつと早くに書くつもりだったんだよ……本当だよ。ねえ、本当なんだって。

コホン、それはまあともかく。

みんなの近況も知れたし、良かったよ。

おれは、特に報告することもないなあ……

父さんと母さんの友人のエラリーさんに会おうとしたんだけど、今は忙しいからもう少し待って欲しいって言われちゃった。

まあ、源^{オリジン}霊匣の開発が軌道に乗ってきたところだもんねえ。

そんな訳で、特にやる事もなく商売やりながらあっちこっち回ってる………』

「ダメだ〜!!いつもこゝまでは書けるんだよ、その後!その後が思いつかないんだよ
ねえ………」

ホームズはペンを置いて頭を掻き毟る。

基本的に途中までは書けるのだが、ホームズは最後まで書けないのだ。そんなこんなでモタクサやっていたのが、手紙の遅れた一番の原因だ。

ヨルは、ため息を吐く。

「手紙っていうのは、口で言いづらいことを伝えるのに向いているらしいぞ」
ヨルからのアドバイスに対して興味深そうな顔をする。

「へえ。君がそんなこと言うなんて珍しいね。母さんが言ってたの？」

ヨルは、ゆっくりと首を横に振る。

「いいや。昔、とある人間に教えてもらった」

その何処かで懐かしさを楽しむような声にホームズは、口元を少しだけ上げる。

「いつか、その人間についても聞きたいところだねえ」

ホームズは、そう言っただけで考え込む。

「というか、命が懸かかっていないおれにアドバイスなんて珍しいね」

「毎晩『あー』だの、『うー』だの言っただけの俺の安眠を妨害しなければ、アドバイスするつもりもなかったんだがな」

ヨルは、疲れ切った表情で答える。

いい加減安眠が欲しかったようだ。

ホームズは、肩を竦めてから再び筆を走らせた。

『それはさて置き、こんなに大勢で旅をしたのは、初めてだった。成り行きで同行したおれだけれど、君達との旅は、きつと……いや、絶対にこの先忘れることはないよ。

まあ、忘れろという方が無茶だけどね。

本当にそれぐらい色々なことがあった。

勿論、楽しいことだけじゃなかった。

辛かったこともあったし、

悲しい別れもあった。

それでもおれは、君達と旅が出来て良かった。

だから、ありがとう。

おれに宝物のような時間をくれて。

今度は、世界の命運とか背負わずに旅をしたいね。

まあ、でもきつと、そんなことになってもまた乗り越えられる気がするけどね。

ホームズ・ヴォルマーノより……………」

ホームズは、ペンを置くと肩にヨルの方を振り返る。

「君も書きたまえよ。せっかくだし」

投げて渡されたペンをヨルは、尻尾でキャッチする。

そして、別の紙に試し書きをする。

「君、これが初めてじゃあないだろうか？」

鮮やかに書かれた文字にホームズは、驚いたように尋ねる。

「その質問に答えるつもりはない」

ヨルは、そう言いながらホームズの手紙の内容を目で追う。

「随分、ガラでもないことを書いたな。思っていたことは知っているが、お前なら絶対に伝えないだろ」

「手紙つてのは、口では言いづらいことを伝えるのに向いているんだらう？」

ホームズの言葉にヨルは、ニヤリと笑うとペンをくるくると回す。

「にしても、君がこんなことするなんて思わなかったよ。普段なら『何で俺がんなことやらきやならん』とか言つて断るところだらう？」

「お前、声真似だけは上手いよな……」

ヨルは、呆れながらもペンを走らせる。

「ちよつと、伝え忘れたことがあつてな」

そう言つて、ホームズの書いた手紙の空白に書き込んでいく。

書き込まれるその言葉を見たホームズは、儂く笑う。

「そつか、前は守つてもらえなかつたもんね」

「この前と違つて期限も作つてないんだ。あいつらには、守つてもららうぞ」

ヨルは、ニヤリと笑って最後に自分の名前を書き込んで完成させた。

ホームズは、書き上げた六通の封を閉じ、白い鳥の背中の手紙用の鞆に入れる。

「エリーゼの分は、私が渡しませようか？」

ドロツセルの提案にホームズは、首を横に振る。

「……それだと、ここに来たことがバレるので、勘弁してください」

そう返すと、鳥を外に放した。

「それじゃあ、頼んだよ！」

鳥は空高く飛び上がった。

それから数日後、手紙がそれぞれのところに届いた。

ようやく届いたホームズの手紙にため息を吐いて一行は、封を開けて読み進める。

「あつははは」

「ふふふ」

「うん」

「ホツホツホ」

「こちらこそ」

「ええ」

一行は、ホームズのらしくない感謝の言葉に笑みを浮かべ、そして、ヨルの言葉に頷いた。

『またな。約束だ』

——ヨルより』

登場人物紹介&後書き

皆さん、ここまで、1人と1匹を読んでくださり有難うございます。

一年で終わるとか思ってたのが、二年過ぎ、いつても百話ぐらいだろ、と思っていたのが、最終的に二百話を優に超え、もう、酷い騒ぎです。

評価では、長すぎ、終わりが見えないと言われてしまいました。

ええ、全くとってその通りです。反論の余地もありません!!

いや、色々と削ったんですよ?

イル・ファンでジュードの勤めてた病院に行く話とか、後は………うん。そんなに削ってねーな。

自分が読者でも同じことを言うと思います。いや、言います。

まあ、それはともかく本当に遠くまで来たものです。

二次創作というものを知り、オリ主ものというものを知り、しばらく読み専でした。

しかし、探せども探せども読みたい話が出てこない!

特に書き始めた頃は、まだテイルズオブなんてタグもないほど、二次創作も少なかつたんです。

そこで特に何もすることのなかった、春休みに思い至るわけです。ならば書けばいいじゃないかと。

私の読みたい話を書けばいいじゃないか!!

というわけで、まあ、他にも色々理由はありますが、やっぱり一番は、『自分の読みたい話』を書いてやろうと思って書き始めました。

まあ最終的に書きたくて読みたい話が出来ましたが……

さて、愚痴に近い制作話はここまで!

約束通りここからは、登場人物紹介と行きます!!

大まかな設定とコメントをつけながら行きます!

そして、メインのメンバーほど後ろに行きますのでその点は、ご了承ください。

カーボロ

「お前やつぱり、あの時のガキだよな?」

プロフィール：特に考えてません。

コメント：

名前のあるモブ。サブイベントでホームズ相手に調子に乗って負けました。

ビネガー

「お前……何も知らないのか!!」

プロフィール：特に考えてません。

コメント：

せっかくだからなんか名前をつけてあげようと思つてつけました。

それまでは、男としか書いていませんでした。

え？何処に出てきたかって？ジルニトラ戦です。

ホームズに負けてます。

カベルネ

「私達は、闘うことのプロだ」

プロフィール：秘密。

コメント：

冗談抜きでモブです。

原作では、本当にそんなもんなんです。でもせっかくなので、名前も付けてバトルシーンも用意してみました。

エラリイに負けたけどな！

アーティアー（ティアーア）

「正論ですね。けれども、それだけでは人は生きていきません。綺麗事だけではやっていけないのですよ」

容姿：金髪長身

プロフィール

身長：175ぐらい？

体重：70ぐらい？

好きなもの：アオイハナ

嫌いなもの：子ども

コメント：

正真正銘のクズです。

吐き気を催す邪悪を目指して書きましたが、どうしても上手くないかない。

世の作り手さんが、悪役作りで苦勞する気持ちをほんの少しですが、わかった気がします。

名前の由来は、モリアーティーからとりました。

シャーロック・ホームズの仇敵ですね。

というわけで、用意していたのですが、名前そのままだとバレるよなと思いもじりましました。

私の中のクズな悪役というのは、自分が悪いことをしているという自覚がない奴を指します。

ジョジョでも言ってますね。

でもまあ、その通りだと思っただけですよ。

悪いと思っていないから改心もしない。

罪の意識なんて最初から存在しない。

そんな悪役像を注ぎ込んで作り上げたのが、アーティーです。

アーティーの台詞は、「主人公がいいような台詞」を幾つか使用しました。

そのチグハグ感が不気味に写ってくれば幸いです。
退場シーンも悩みました。

こういう悪役は、大体最後はみつともなく命乞いをして死んでいきます。
でないと、こちらの溜飲も下がりませんからね。

とはいえ、そんな退場は嫌だなと、

最後まで自分勝手に退場しようとしてこそそのクズだよな、と。

でも、それだとこちらの気持ちがおさまりません。

そして、悩んだ結果、安らかな死ではなく激痛の中、退場してもらいました。

まあ、今まで好き勝手やってきた奴が最後まで好き勝手出来るわけがないんです。

ユーフォ

「マープルちゃんのお墓は、私がキレイにしておきます!!だから、安心してください!!」
プロフィール

身長：普通の子どもぐらい

体重：普通の子どもぐらい

好きなもの：お父さんとお母さんと弟とマープル

嫌いなもの：大人の内緒話

コメント：

名前は、吹部の友達がやっていた楽器から。今やアニメにまでなつて大分有名になりましたね。あそこの制作会社の青春物は、やっぱりいいですね。

話が逸れました。

ヒントはありましたし、気付いた人がほとんどだと思いますが、ホームズ達が去つた後の一番最初の被害者です。

付き合いが深いか浅いかまでは、書ききれませんが、きっと二人とも無事だったなら、マーブルに振り回されながらも色々な面倒ごとにつき合わされていたでしょう。

マーブル・ヴォルマーノ

「良かったですわ。だったらこれからは……………」

私の事をお姉ちゃんと呼んでくださいいな」

プロフィール：

身長：ユーフォより少し大きい。

体重：ユーフォより少し重い

年齢：8歳（当時）

容姿：赤毛の若干ズレたポニーテール。

くるみのように大きな鳶色の瞳。

好きなもの：ホームズ、ヨル、ルイーズ、ユーフォ

嫌いなもの：身だしなみにうるさいホームズ。

コメント：

変な子ランキング、一位と僅差のマーブル姉さん。満を持して登場です。

最初考えた時は、もう少し性格もエリーゼみたいに大人しくて、そしてよく泣く女の子の予定でした。それがいつの間になら……

いや、嘘はいけませんね分かってます。

上記のセリフを考えました時です。

この手の年下の女の子は、主人公のことを兄呼ばわりするのがお約束です。

ですが、個人的にそれがあまり好きではないので、そういうのは無しにして話を考えていました。

そんな時、ふとあるアイディアが降りてきます。

いっそ逆に見ようかと。

ホームズのことを弟扱いして自分を姉扱いしろというふうに見ようか、と。

するとどうでしょう。

慣れないお嬢様言葉は、インチキくさいお嬢様言葉へと。

お淑やかさを出すために考えたお嬢様言葉は、ハイテンションなお嬢様言葉へと変貌を遂げていきました。

そして、テイルズの特典にもあったセリフ（作中にもあります）ですが、年下の女の子に兄呼ばわりをさせる変態。（確か、とある主人公が言われていました）

なるほど、なら逆だつて変態だよな。

と、相成りまして、

泣き虫、

ハイテンション、

お嬢様口調、

自称姉、

変態、

頭の中がお花畑、

そこに更にモテたがりまで加わりとんでもないキャラクターが出来上がりました。なんだろう、こうして並べてみると本当に変な子ですね。

ヒロイン押さえて、新ヒロインとか言われてましたし、結構好評で嬉しかったです。書いていてすごく楽しかったので、本当に退場させたくなくなかったです。

ですが、退場させなければならぬ話です。これは。

一時の感情に流されて話の根幹を崩しては元も子もない!!

と、強く思ったのですが、まあ、甘やかしてしまいあのような退場の形になりました。

あの時は、マープル退場と当初の思い通りに退場させられなかったことで、二重に落ち込んでいましたが、今にして思えば、当初の予定通りにしなくてよかったですと心から思えます。

名前に関して言えば、探偵、ミス・マープルからいただきました。そして、ファミリーネームは、プレゼントです。

マーロウ

「撃つていいのは撃たれる覚悟のある奴だけだ……よく、肝に命じておくんだな、ジジイ共」

身長：180ぐらい

体重：80ぐらい

年齢：50ぐらい

容姿：浅黒い肌、白髪の長髪をひとつ縛り。

好きなもの：紅茶、酒

嫌いなもの：とある人間との勝負（勝てないから）

コメント：

一番最初の退場者です。

名前はとあるハードボイルド探偵から。

テイルズのパーティーお約束のおっさんポジションです。

今回のオリキャラの中では、凄くまともな人です。（強さを抜かせば）

まあ、周りにまともじゃない奴が多すぎるんですよね。

それは、ともかく、元からホームズ達の裏事情を全て知っている人がいるべきだろう
と思ひ、この通りに出てもらいました。

カツコいい！とも言つて貰えて嬉しかったです。

唯一まともじゃない、強さですが、書いてて楽しかったですね。

そりゃあ、チートだつてやりたくなるよ。

ま、そんなわけで主人公サイドには、死ぬほど苦勞してもらいました。

あの勝利は、奇跡的に噛み合つただけです。ホームズでは、まだまだ勝てやしません。

それぐらいに強いはずです。

まあ、それを優に超えたルイーズがいるわけですから……

退場シーンは、悩みました。

誰かを庇つて死ぬ。

ぐつとくるシーンです。そして、やりきれなくなるシーンです。

でも、それはマールウじゃないと。

マールウが戦場で死ぬと言えは？

と、悩みある結論に至ります。

庇おうとするホームズを拒むんじゃないかと。

そう思ひあんな風なラストになりました。

キャラクターの退場シーンを書いたのは、彼が初めてでした。本当に苦しかったです。

そして、まだ、後もう一人書かなきゃいけないのかと思うと、気が重くなりました。結局、こういうことに慣れが来る日は来ないんでしょうね。

日々精進です!!

ルイズ・ヴォルマーノ

身長：言わない

体重：女性に聞くものじゃない

年齢：自分で計算しておくれ

容姿：眠そうなたれ目。茶髪。年齢不詳の見た目

好きなもの：家族、甘いもの

嫌いなもの：コーヒー、というか苦いもの全般

コメント：

謎に満ちた人です。

実は、最初から死んでいることは決まっていました。

そして、それが一つ見せ場なので、それを用意した時、『ああ、そう言えばいたね、そんなキャラ』なんて言われないうようにどうしようか悩んでいました。

そんな時、都会のトム&○ーヤを思い出しまして（小説です。図書館に絶対あると思うので是非！）

『そうだ！回想アドバイザーとして出てきてもらおう!!』

となり、ああ言う風になりました。

感想欄を読みながらもシメシメと書いていました。

彼女達の外伝は、現在制作中なので詳しいことは、そちらで!!

ローズ・クリステイ

「私の心なんてとつくの昔にバツキバツキよ!!」

身長：160ぐらい

体重：秘密

年齢：17歳

容姿：黒髪の長髪、瞳の色は黒。羽織と袴

一人称：私

二人称：貴方、貴女、お前

好きなもの：食べ物、後は……ゲフンゲフン

嫌いなもの：未熟な自分

テーマソング：The Everlasting Guilty Crown

コメント：

ツンデレ？ヤンデレ？いいえ違います。

ヤンギレです。

喜べ！黒髪ロングだぞ！！

と、まあ、それはともかく、ここからメインですよ！

ええ、そうですねよ！！メインなんです！メインヒロインですよ！！出るまでに三十話以上かかっても、主人公と口を利かない期間が十話を優に超えても、主人公殺しかけても！誰も羨まないけれども！胸がキュンキンどころか、胃がキリキリするような子ですが、メインヒロインですよ！！

そんな子でしたが、予想以上に嫌われてないみたいで良かったです。

うん、大丈夫だよね？

名前は、アガサ・クリステイからとりました。

後は、バラです。

テーマソングは、初めて聞いた時、ローズにぴったりと思ひまして、基本彼女がメイ
ンの戦闘はこれを始めにかけています。

毎回言いますが、もう少し大人しい子の予定だったんですよ。でも、飛び蹴りした辺
りからどんどんおかしくなっていつてしまいました。

原作キャラがオリ主に惚れるというのが個人的には、あまりこう、受け入れられない
んです。

原作キャラは、原作の登場人物のことが好きだから素敵なんだ!!

というのが、まあ、私の主張なんですけど……ええ、まあ、書きたいものと読みたい
ものがズレてきますよね。

おかげで、レイアがヒロインしてるなんて言われてました。

まあ、別にこの中では、ちゃんとジュードことが好きだから問題ないな!!

まあ、そんな葛藤はともかく、ちゃんと作ろう、主人公のことが好きなヒロインを作
ろう!というわけで、オリジナルヒロインを作りました。

出すことは決まっていたのですが、どう絡めようか考えていた時、ちょうど主人公を
どう辛い目に合わせようか考えていました。

ええ、もう詳しく説明しなくていいですね。

そこを第一のゴールにしてローズというキャラクターを作り上げていきました。

最初は、テンプレの塊のような賑やかな子、そして、どんどんおかしくなっていく、そして、最後はこの状態。

出来上がった話は、考えた以上に暗くなってしまいました。

ここからどうやって仲直りするかまでは、考えていたました。なので、そこは問題なかったんです。

問題だったのは、復活です。

全然思いつかない（笑）

2のイベントに回そうかなと思いましたが、後書きで書いたような理由でやめました。

マジでどうしよう状態でした。

何せ、落ち込むヒロイン元気づけイベントお約束の主人公に助けってもらうことはできません。

一応お助けキャラとしてとある人を出してはいますが、それにしたって自分で立ち上がるしかないのです。

無茶ぶりですが立ち上がってもらいました。

無事立ち上がり、最終章で活躍した時は、もう本当に胸がいっぱいでした。

自分の作ったキャラクターは、分身とか理想じゃなくて子供という人達の気持ちによ

くわかりました。

未熟な成長系ヒロイン！頑張ってくれて何よりです！！

我が子よ、よく頑張った！

2もあるからね！

ヨル

「なんだ、お前は自分より弱い奴にしか、言いたい放題言えないのか？」

身長：体長の方が正しいな

体重：いくらでも変化出来るぞ

一人称：俺

二人称：お前、貴様

好きなもの：星空、綺麗な景色

嫌いなもの：人間、精霊

テーマソング：名前のない怪物（とりあえず仮で）

コメント：

作中では、ぶつちぎりの弱さを誇る彼の登場だ！！

ええ、まあ、本来の姿ならかなり強いんですけどね……。

上記の台詞は、口は達者でよく負けるキャラがネタになっていた時、でも、負けると分かっているのにこれだけ言えるのは、すごいよな、と思いきやなりました。

ヨルのいいところとしてあげるのなら、この辺でしょう。

もちろん、側において欲しくないです。

良くも悪くもそこが、トラブルの原因八割を担う所以です。

ポジションとしては、うしおととらのとら、

仮面ライダーオーズのアंकとといったところですよ。

信頼してんだか仲悪いんだかわからないコンビというのがすごく好きで、自分の作品でも登場させたいと考えていました。

そんなわけで作りました。

当初は目玉だけの怪物がプカプカ浮いている予定でしたが、今後の事を考えてボツにしました。

精霊術を食べるのに巨大な生首になるのは、その名残です。

名前は、すごく悩みました。

当初は、こつちがホームズの予定でした。だって猫ですし、猫だったらホームズだろ

!!

と思ったのですが、いやいくらなんでもそれはまんま過ぎるなというわけでボツにしました。

そこから悩みます。

スバル↓イマイチ。ボツ。

ワトソン↓こんな悪態つく奴にその名前はありえない。

黒だし、ヤミとかどうだ↓どこの暗殺者だ。

夜空は？↓そういうヒロインいたな

シンプルにクロ↓悪魔の使い魔でそういう奴がいた。

じゃあいつそ、クロネコ！↓宅急便じゃん!!

という具合に難航しました。

そんな時、ふと降りてくるわけです。

黒↓クロ↓夜空↓夜↓ヨル！

これだあー!!となりまして、名前が決定しました。
多分ネーミングセンスはここで使い果たしました。

精霊術喰らいとそれを使った強化は、なんかの拍子に思いついた気がします。

特殊能力ですが、何回も破られていますね（笑）

悪態を吐く。ホームズでは言いづらい事を言う、中々役立ってくれました。

こういう人間嫌いのキャラは「別にお前のためじゃない」系の台詞がマジでツンデレにしか聞こえないので、地の文で苦労しました。

認める時は、しっかりと認めてくれます。

しっかりと認めないのは、ホームズです。

素直じゃ無いツンデレというより、最初ツン後デレタイプツンデレですね。

パーティーへの対応も大分柔らかくなってくれました。

当初は、結構どうでも良さそうな時が多かったですもんね……………

特にいう機会もなかったので、ここで言いますが、ヨルが名前を呼ぶのは、認めた相手だけです。

ヨルにとって名前呼ぶというのは、ある種大切な儀式なのです。

呼ばれる順番は、何となくレイアが一番最初、最後はローズと言ったところだけ決まっていました。

そして、例外はルリーズです。

ホームズの母として認めているので、名前ではなくそちらで呼ぶことが多いのです。因みにレイアではなく、歳上のローズの方を小ムスメと呼んでいたのは、ローズの方が未熟だったからです。

さあ、君は、あともうひと頑張りだ。

君は、今回そこまで酷い目にあつてないもんね？

ホームズ・ヴォルマーノ

「内緒。男は秘密があつたほうが格好いいからね」

身長：167ぐらい

体重：60ぐらい

年齢：18歳

容姿：茶髪、碧い瞳↓茶髪、金色の瞳、ポンチョ

一人称：おれ

二人称：君、貴方、貴様、お前

好きなもの：甘いもの

嫌いなもの：苦いもの（主にコーヒー）

テーマソング：don't cry anymore

コメント：

さあ、最後のとり、我らが主人公にして問題児！友達にしたいくない男、ホームズ・ヴォルマーノです!!

一人称は、おれのくせに喋り方は、『僕』タイプを目指して頑張りました。すっごい書きづらかったです。

テーマソングは、ああ、こういう風に歩いていく子だなと思いい決めました。

名前の由来は、超有名な名探偵から！

なのになまさかの謎を解かれる側！

いやあ、本当、作中でトップクラスの困ったちゃん。

裏切ってますからね。

おまけにナチュラルに病んでいます。

裏のヤンデレヒロインです。

ホームズの作り方は、まず、皆が思い描く主人公を作ります。

そして、それを項目ごと削っていきます。

まず、チートじゃない。

次にモテない、

料理ができない

デリカシー………はないのがお約束だ。これは削れない。

頭なでなでは、禁止で。

ぼんぼんもなしで、

女装が似合うのも削れない!!

という形で大まかな基盤を作りました。

後は、コーヒー嫌い、モテたがり、船酔い、精神年齢が子供と弱点を追加していきま
した。

そして、個人的に主人公は、何処かしろ歪んでないといけないというのがポリシーな
ので、彼にもバッチリ歪んでもらいました。

自分を犠牲にして誰かの為に頑張りすぎてしまう。

そして、本当のことを話さない。

そんな歪みを抱えてもらいました。

さて、お次は、主人公をどう不幸のどん底に叩き落とそうか考えます。で、まあ、ヒントを得ます。

一つは、目の前の人を救えないこと。

そして、もう一つは仲違いしてしまうこと。

二つ目の方は、朝8時からの果物の話から思いつきました。

当初から○○○とは仲違いするんじゃないか？と言われてましたしね。

じゃあ、仲違いの相手は、ヒロインでいいなとなりました。

ただし、それだけだと弱い。どうするかな、と思い今度は自分の中で辛い記憶を探し出します。

その中で一つ出てきたのが、自分の気遣いが一切通じず、その相手に怒られることです。

気遣いなのだから、気付かなこともありません。

だから、気付けよと主張するのも筋違いです。

でも、相手の事を想つての行動を怒られてしまうと悲しいです。

特に自分の思い描いた通りになっていればなっているほど、悔しくて悲しくてやりきれません。

じゃあ、これをヒロインとの関係に当てはめようと、相成りました。

誰かの為にやって憎まれても大抵は、どうにかなる、取り返しがつく段階で仲直りします。

じゃあ、取り返しがつかなくなるまでやってしまおう!!

………突き抜けた結果、頭で練っていたものより、遥かな地獄が出来上がりました。

まあ、手加減してはいけませんからね。

こうしてローズ戦、過去話、と繋げホームズの性格は作られました。

最初の頃は、何回も話をリセットして、書き直そうと思っていました。

でも、それは、よくないと何度も思い直してここまできました。

弱点だらけで、かなり情けない、戦闘だつて何度も負けて、理想の主人公とは言えないけれど、それでも頑張つてこの物語を一緒に走つてこれに本当に良かったです。

頑張つてね! 2もあるんだからね!!

最後に余談ですが、ホームズは、地味に女子との距離が近いのが特徴です。

ボディタッチも多いですし、結構抱きしめたりとかしてますからね。

暇だつたら探してみてください。

まあ、一切女性陣が照れてないのでフラグは立たないけどな!!

さて、登場人物の紹介は、これで終わりです。

我が子達には、大変な思いをさせてしまい申し訳ないなあと思っています。オリキヤラ

でも、冷静に考えると一番大変だったのは、ホームズ達のフォローに回ったエクシリアメンバーですね。

頭が上がりません!!

2でも大分迷惑をかけますので、今後もよろしくお願いします。

てなわけで、また!!

番外編！

おいしい？鍋パーティー！

「……どうしたんだろう、突然」

とある街、ホームズは首を傾げている。

「さてな」

ヨルも首を傾げている。

彼らの頭を悩ませているのが、この紙だ。

《今日の夜までにそれぞれ食べ物を持って集合！

レイア・ロランド》

「朝から見てないんだけど、彼女……」

「……何を企んでいるんだか……」

紙を読み直した彼らは、もう一度ため息を吐いた。

「食べ物って事は、料理でも持っていけば良いのかねえ？」
ホームズは、そう言って料理屋に入っていく。

「……みんないないな……もう買ったのかな？」

店には、店員を除けばホームズとヨルしかいなかった。
ホームズは、メニューを眺めて考える。

「ふむ……さて、どうしたものか」

マーボーカレーが目に入る。

ホームズの好物である。

まず、これが嫌いな人間はいない。

しかし、

「レイアが好きだから……彼女が買ってきそうだ」

「かぶるのは避けたいところだな……」

ヨルもホームズに同意する。

「あ、豆腐の味噌汁」

「……それ持ち寄って食べたいか？」

「微妙だね……普通に作れるし……」

「お前が言うと言説力が違うな」

「君、馬鹿にしてるだろう」

ホームズとヨルは、しばらく視線で喧嘩をする。

「さて、他は……」

ホームズは、メニューを見るが、何だか、どれも被りそうで選べない。

「あ、これでいいんじゃない？」

「うん……まあ……うーん……」

ヨルの微妙な返事をよそにホームズは、購入しようとする。

「なあ、ミネストローネとかは……」

「君はトラウマ決めて楽しいのかい？」

「いや、それはお前が作ったからで……」

ヨルの正論を無視し、ホームズは決定した料理を購入する。

「まあ、いつか」

そう言つてヨルは、ホームズの購入した料理を見つめながら、ポツリと呟いた。



「みんな、食べ物持ってきた?」

「持ってきたけど……」

レイアの言葉にジュードは、料理を持ち出す。

「どうして、突然こんなものを?」

そう言つて、レイアからの手紙を見せる。

「まあまあ、いいからいいから」

「とうか、まだホームズとヨルがないんだけど……」

「いいのいいの」

レイアは、そう言つてジュードを促す。

ジュードは、釈然としないながらも自分の持つてきた料理を見せる。

「……僕は豆腐の味噌汁。好物だし……」

ヨルとホームズがいたら文句たらたらな物を出した。

「うわあ、流石、地味だね」

「どういう意味、レイア?」

ジュードの文句を聞き流し、次はローエんだ。

「私は、オレンジスープです」

そう言つてオレンジ色のスープを見せる。

「そう言えば、ローエンは好きだったね……次は？」

「私だ」

ミラが手を挙げる。

そうやって出したは、

「ミネストローネだ。料理と言ったらこいつが出てきた」

それを見たレイアは、頬を引きつらせる。

「あの時は、ロクな目に遭わなかったよね……」

ホームズが作り上げた兵器の数々を思い出す。

ホームズ自身も若干トラウマになってるものを平気で用意する、ミラ・マクスウエル。

「とかかさ、汁物ばっかなんだけど……誰かそろそろ、何か固形物はないの？」

「なら、俺だな」

そう言つてアルヴィンが料理を取り出す。

「チキン南蛮だ」

レイアは、ぐつとサムズアップをする。

「いいね！そういうの待ってた！」

テンションの上がるレイアを尻目にローズが段々と半眼になっていく。

「ねえ、ジュード？レイア一体何を企んでるの？」

「僕が知りたいぐらいだよ……」

ジュードは、ため息が止まらない。

「さあ!次は……エリーゼ!」

レイアの言葉に、エリーゼは、おずおずと料理を出す。

「クリーム牛丼です」

「わあ!エリーゼ、好きなの?」

エリーゼは、少し恥ずかしそうに俯く。

『エリーゼは、お肉が好きなんだよ』

「ティポ!」

慌ててティポを押さえるエリーゼ。

そんなエリーゼを尻目にローズの方を向く。

「ローズは?」

「えーつと……」

期待満面の顔で聞かれ、目を逸らしながら、出す料理、それは……

「はい……サンドイッチ……」

ローズは、おずおずと出す。

「なんとも言えないな……」

アルヴィンの言葉が全てを物語っていた。

ジュード程地味でもなく、かと言ってエリーゼやアルヴィン程の、驚きもない。そして、ローズがそれを好きだと言う話も聞いたことがない。

なんともコメントのしづらい料理を引っ張りだしてきた。

「うるっさい!!何も言うな!」

ローズは、気まぎれになって叫ぶ。

「いや、わたし何も言っていないけど……」

レイアは、引きつり気味ローズを落ち着かせる。

料理が出揃ったのを見るとジュードは再度レイアに尋ねる。

「ねえ、どうしてこんなことを考えたの?」

ジュードの言葉にレイアは、よくぞ聞いてくれたと言わんばかりに胸を張る。

「前にね、ホームズが言ってたの……」

レイアは、そこで言葉を切りたつぷり溜める。

「『闇鍋』というものがあるって！」

アルヴィンとローズとは、それを聞いた瞬間、血の気が引く。

そして、胸の内で叫ぶ。

《あんの……馬鹿野郎！ !!》

ジュードは、開いた口が塞がらない。

レイアのこの提案を防げなかった事に後悔が止まらない。

エリーゼとミラは闇鍋がどんなものか分からない。

ローエンは、分かっており渋い顔をする。

「闇鍋をすると、親睦が深まるって、ホームズのお母さんが言ってたヨルが言ってたってホームズが言ってた!」

「……何だって?」

ローズが思わず聞き返す。

「だから、闇鍋をすると親睦が深まるってホームズのお母さんが言ってたってヨルが言ってた!」

「又聞きメンドくさっ! レイア! 自分が何かやらかしたことに気づいてるでしょ!!」
ローズの心からの叫びが炸裂する。

「そ、そ、そんな訳ないでしょ」

そう言いながらもレイアの泳いだ目は落ち着かない。

誰々から聞いたというのは、責任転嫁の常套句だ。

しかし、ミラは生真面目に頷く。

「ふむ……そういう事ならやるべきだろう」

「え?」

「だから、親睦を深めるのだろう? だったら、やるべきだ。裏切り者が二人もいるんだ、やって損はないだろう?」

アルヴィンの逃げ道は封じられた。

戸惑うレイアに構わず、ミラは着々と準備を始める。

「鍋と言うぐらいだ、食材を入れればいいのだろう?」

そういつてジュードの持ってきた豆腐の味噌汁に手を伸ばす。

「レイア、鍋だ」

「え、あ、うん」

レイアが差し出した鍋にミラが、豆腐の味噌汁を注ぐ。

用意されていた出し汁と豆腐の味噌汁が混ざる。

「次だ」

オレンジスープを注ぐ。

ミラを除いた一同は、鍋を覗き込む。

「まだ、大丈夫そうだな」

「そうね」

そんな事をローズとアルヴィンが言っているとミラがミネストローネを注ぐ。

トマトの匂いとオレンジの匂いと味噌の匂いが混じる。

「う、うーん……ギリギリ食べれるかな……」

ジュードが自信なさげに首を傾げる。

「いや、問題は次からだろ……」

そうお次は、アルヴィンのチキン南蛮だ。

普通に食べれば、絶品であろうものを訳のわからないスープの中に放り込む。

そして、次は……

「クリーム牛丼が……」

エリーゼの悲壮な嘆きを他所にミラは容赦なくぶち込む。

クリーム牛丼のクリームがスープの上を漂う。

「コレは……」

ローエンは、息を飲む。

「おかしい……鍋ってこんなにどろつととしてたつてけ？」

ローズは、引きつり気味に喋る。

「さて、次はローズのだ」

場の空気を微妙にさせたサンドイッチを全てぶち込む。

パンと間の具材が綺麗に分かれ、一気に鍋の具が増える。

「これ……厳しいでしょ……」

ローズは、戦慄を覚える。

「どうすんの、パンが毒スープを吸ってるんだけど……」

「ふむ……後はホームズだけか？なら、しばらく煮込むとしよう」

ミラはそう言ってグツグツと鍋に火をかける。

異臭を放ちながら。

「もう、ダメだ……」

ジュードは、絶望に打ちひしがれている。

「し、しつかりしろ! 優等生!」

「そうです! ジュードさん! まだ、ホームズさんがいます! きっと最高の食材を持っていますよ!」

ローエンは、不安を振り払うように声を上げる。

その時、扉を開ける音が聞こえる。

「ただいま……て、うわ！」

《《来た!!》》

一同がホームズの方を振り向く。

「何?!この匂い?」

「む?ホームズか、いいところに来た。お前の食材だけまだだ」

「は?まあ、いいけど……」

そう言つて料理を渡す。

ミラはそれを受け取る。

ジュードとレイアとローズは、ホームズに詰め寄る。

「何?何持ってきたの!?!」

「何って……」

「凄い食材だよね!」

「最高の食材だよね!」

「何でそんなに求めるハードルが高いんだい!」

「何せ命がかかっている。」

しかし事情の知らないホームズは、訳が分からない。

「いいから、答えなさい!」

ホームズは、戸惑いながら答える。

「クリームコロッケパフエ」

三人の顔から血の気が引く音がする。

『ミラ！ストップ！』

しかし、時すでに遅し。

ミラは、ホームズの持ってきたクリームコロツケパフエを全て鍋にぶち込んでいた。

甘いクリームの広がる鍋が闇へ誘おうとしていた。



「つまり、要約すると闇鍋をやっているとアルヴィンとジュードは、頷く。

「で、それをやる為に料理を集めたんだね」

「ま、まあね」

レイアは、頭を掻く。

ホームズは、嫌悪感を隠さず半眼で睨む。

そんなホームズにレイアは、慌てて言葉を繋ぐ。

「ほら、前に言ってたじゃん!闇鍋したって!」

「そうだね。ついでにその後おれと母さん、二人共吐いたって言ったはずだけどね」
そう言つてホームズは、扉に手をかける。

「待つて！ホームズ！」

「何？」

「どこ行こうとしてるの！」

「どこじゃない何処か」

逃げようとするホームズをレイアが、手を掴んで止める。

しかし、構わずホームズは、外に出ようとする。

「冗談じゃない！ホームズだけ逃げるなんて許さないよ！」

手を引っ張る力が強くなるがホームズは、それに構わず扉を開けようと踏ん張る。

「あのね！君達は何処でどんな地獄を味わおうと勝手だけど！おれを巻き込むのはだ

けは止めてくれ！」

なおも逃げようとするホームズを今度はエリーゼがポンチヨを掴んで引き止める。

『参加するよね〜ホームズ？』

「話聞いてた?!」

しかし、エリーゼはポンチヨを離さず、ホームズに屈むよう指示を出す。

不審に思いながらも指示を従う。

屈んだホームズに耳打ちする。

「ホームズの初恋の相手って誰でしたっけ？」

「レイア、おれ実は闇鍋大好きだったんだ」

ホームズは爽やかな笑顔で颯爽と扉から手を離し、食卓に着く。

そして、扉に向かって猫のように足音を殺して向かっているヨルの頭を掴む。

「君だけ逃がすわけないだろう」

「お前が何処でどんな地獄を味わおうと勝手だが！俺を巻き込むのだけは止めてくれ」

「おれだけが、地獄を味わって君だけ無傷なんて許さない！」

「ぎげんな！このアホ毛！」

「諦めが悪いんだよ！クソ猫！」

鍋の前で喧嘩を続けるホームズとヨル。

それに続くように、エリーゼとアルヴィンとジュードが席に着く。

「エリーゼ……」

レイアの目にエリーゼは、気まずそうに目を反らす。

「奥の手、です」

「気をつけなよ。ホームズ結構根に持つから」

「つーか、レイアも知ってんだろ」

「まあね」

そう言っつて、一同は食器を持つ。

ミラはそれを見ると頷く。

「全員揃ったな、それでは開けるぞ」

そう言っつて蓋を開ける。

むわつと立ち上がる臭気。

「ぐっ！」

ホームズは、早速後悔しそうになった。

最早何色なのか表現するのも難しい色を放っているスープ。

強いて言うなら薄いオレンジ色の何かと言ったところだろうか

更にもそのスープに浮いている原型を留めていない具材がちらほら。

「これが本当の地獄の釜の蓋は開かれたって奴ね」

「誰が上手いこと言えって言ったよ……」

ローズの呟きにアルヴィンが突っ込む。

「……おかしいですね、私の知ってる鍋の匂いとは随分違うのですが……」

ローエンは、既に引いている。

「トマトと味噌とオレンジの匂いに混じって、パフェの甘い匂いが……」

ジュードは、こめかみが引きつるのを感じる。

「私のクリーム牛丼が……」

『元氣出して、エリーゼ……』

エリーゼは、泣きそうな目でホームズを睨む。

「おれのせいじゃないだろう……企画した隣の天然娘に言っておくれよ」

「天然娘って私のこと？」

「他に誰がいるんだい？」

静かに火花を散らすレイアとホームズ。

「前にも言っただろう、君はもうちよつと頭を使った方がいいって」

ミラは、鍋を見ながら不審そうに首を傾げる。

「おい、ホームズ。本当にこれを食べれば親睦が深まるのか？」

「……………母さんはそう言って、提案してきた」

「結果は？」

「聞きたいかい？」

ホームズの言葉にミラは首を振る。

ホームズは、鍋の具材を一つお椀に盛ろうとする。

「……………何これ？」

そう言って謎のブヨブヨとしたもの掴む。

「あ、それ私の持ってきたサンドイッチのパンだ」

ローズが手を挙げる。

「……………外はカリッと中はふんわりがサンドイッチのパンの特徴じゃなかったけ？外

も中もブヨブヨのヒタヒタなんだけど」

「ホームズ、もう一つも取れ」

ミラの命令にホームズは、頷くと取る。

しかし、ボロボロと崩れる。

そして、中から白い何かが顔を覗かせる。

「……………これ、おれのクリームコロッケパフェだ……………」
引きつりながら盛る。

外はサクツと中はトロツとと言うのが基本のクリームコロッケが、中も外もドロドロになって現れた。

後は肉っぽい何かを取る。

そしてスープを掬う。

「……………甘い匂いと酸っぱい匂いとしょっぱい匂いが……………」

もう既に吐きそうなホームズ。

そして、一言。

「誰が食べるんだい?一発目」

皆いつせいに顔をそらす。

「いつもの如くおれが食うなんてやだよ……………提案者のレイアが食べれば?」

「やだよ!絶対に!そうだ!ジュードどう?」

「僕だつてやだよ!アルヴィンは?!鍋好きでしょ?」

「いつ俺がそんなこと言った!!勝手なこと言っつてんじやねーぞ!優等生!……………そうだ

!エリーゼ、お前にやるよ!ガキはたくさん食って育だねーとな!」

「私は……………その……………そうだ!ローエン?どう……………ですか?」

「ジジイに甘いものは厳しいです……ローズさんどうですか？」

「私は、ホラ、お腹いっぱいだから……ミラは？ 貴方が育てた鍋なんだし」

「いや、私も命が惜しい……というわけで、ヨル。お前が食え」

「はあ?!」

我関せずで見守っていたヨルに突然話題を振るミラ。

「ざけんな！ その残飯！ テメーらの招いた災いだろ！ テメーらでどうにかしろ！」

「うるさい！ 君以外これを食える奴なんていないんだよ！ とつとと食え化け物！」

そう言つてヨルを締め上げ、口をこじ開ける。

「あがつ！」

「レイア！ 今だ突つ込みたまえ」

「分かった！ ローズお椀取つて」

三人の連携により、ヨルは鍋料理を口にする。

放り込まれたヨルは、モグモグと口を動かして一言。

「意外に行けるぞ、これ」

「は?」

あり得ない一言に場の空気が凍りつく。

「う、嘘だよね、ヨル?」

「いや、結構マジ」

そう言つてヨルは、パクパクと食材を口に放り込む。

とても美味しそうに。

それを見ていたミラは、唾を飲み込む。

「ふむ、ヨルが食べているところを見ると大丈夫そうだな」

「だね」

レイアは、そう言つて盛る。

ミラもそれに続きジュード、ローエン、アルヴィン、エリーゼ、ローズと続く。

ホームズは、ヨルの方をもう一度見る。

確かに何もごもごと確かに口を動かしている。

「まあ、大丈夫だよね」

そう言つてホームズもみんなに習つてお椀に盛大に盛る。

皆が器に鍋の具材を盛り付けるを見届けるとミラは口を開く。

「では、食べるでしょう」

「そうだね」

「お腹も減つたし」

「ヨルも美味しそうに食べてますし」

「なんだか心なしか美味そうに見えてきたな」

「食材自体は、美味しいものですしね」

「たまには、鍋を囲むのもいいわね」

「なんだか、ヨルに真つ先に食べさせたのが惜しくなつてきたねえ」

「確かに」

ホームズの言葉にレイアが同意し、食卓は笑いに包まれる。

各々が各々の感想を言つてお椀の食材を一気に平らげた。



「馬鹿だな、アレで美味しいわけないだろ」

ヨルは、そう言つて口の中の物を灰状にして吐き出し視線を向ける。

視線の先には、テーブルには机に突つ伏したミラ、ジュード、アルヴィン、エリーゼ、ローエン、レイア、ローズ、ホームズがいる。

この世のものとは思えない味にどうやら気絶したようだ。

当たり前の事だが、あれだけ甘いものとしよっぱいものとは酸っぱいものを合わせたものが美味い訳がない。

そう。ヨルは、味覚を消してモグモグと動かしていただけなのだ。

決して飲み込んではいない。

「う……嘘つき……」

辛うじて意識のあつたレイアが死にかけの目でヨルを睨む。

ヨルは、フンと鼻で馬鹿にする。

「確かにホームズは、嘘はつかない」
そう言つて口角を上げ白い牙を見せる。

「だが、俺が嘘をつかないと誰がいつ言つたんだ？」
そう言つて半開きの扉に向かう。

「それ、片付けとけよ」

ヨルは、そう言つて半分程減つた鍋を尻尾で指し、ギリギリの行動範囲内の中に消えた。

「あ……………」

ホームズが、消えゆく意識の中で言葉を絞り出す。

「あんの……クソ猫おオ……!!」

※鍋は、この後マクスウエル一行が命懸けで頂きました

ぶらり湯けむり旅事情……？

「温泉に行こう」

「は？」

突然のミラの言葉にホームズが首を傾げる。

「イバルから手紙が来てな、ニアケリアで温泉が湧き出たので、是非来て欲しいと言われたのだ」

「イバルって？」

ローズは、首を傾げる。

「ミラの巫女、ジュードを敵視してるだよねえ」

ホームズは、嫌な顔をしながら言う。

何せ初対面で殴られたのだ。

楽しそうな顔で話せる訳がない。

「温泉ね……」

ローズは、考え込む。

「うん、悪くないんじゃない？」

ジュードとレイアも頷く。

「ええ、ジジイも楽しみです」

ローエンも楽しそうだ。

「よし、行こう」



「……か……」

ホームズは、ニ・アケリアを見渡しながら呟く。

丸い建物に変わった模様がかたどられている。

流れる空気も心なしかゆったりとしている。

ローズも伸びをする。

「のどかなところね……」

「のどかな時間ももうすぐ終わりだな」

そう言つてヨルは、尻尾で前を指す。

「ミラ様ー!!!」

イバルが全力疾走でやつて来た。

ホームズは、深いため息を吐く。

「お久しぶりです！ミラ様！」

「うむ」

「里に來ると聞いて今か今かとお待ちしておりました！」

大変嬉しそうに言つた後ジロリとジュードを睨む。

「やはり、貴様も来たか偽物!!」

「偽物？」

ローズは、首を傾げる。

「……ミラの巫女でもないのにジュード、ミラの手伝いをしてるだろう
ホームズがそつと耳打ちする。

「ああ、なるほど？」

ローズは、納得したのかしてないのか首を傾げたままだ。

それから、今度はホームズを見ると舌打ちをする。

「やはり、まだ生きていたか……」

「随分と嬉しそうで何よりだよ」

ホームズは、ため息を吐く。

「それより、イバル。温泉は何処だ？」

「は、ミラ様こちらです」

先ほど不機嫌を何処かに消し飛ばし大変にこやかな笑顔で言うイバル。

「あれね……えーつと、なんだか、テンションの落差の激しい人ね」

「言葉を選んでるな、小娘」

ヨルは、呆れているローズを流し見る。

「ほら来い！と・く・ベ・つ・に、案内してやる」

そんなローズとヨルの会話に構わず、イバルは声を張り上げる。

「そりゃあ、どうも。涙が出るほど嬉しいね」

悪態で返すホームズをレイアとジュードが苦笑いで見て続いていく。それに伴う様に一行も歩き出した。



「……だぞー！」

イバルは、建物を指差す。

建物の後ろからは、湯気が登っている。

どうやら、ここが温泉宿のようだ。

イバルは、そう自慢気に言った後、ローズの方をいかぶしむように見る。

「……それで、さつきからお前は何だ？」

ローズは、ずっとこの建物に行く間中イバルを観察していたのだ。

ホームズは、首を傾げ、隣にいるレイアに耳打ちする。

「もしかして、イバルにホの字かな？」

「馬鹿も休み休み言いなよ」

レイアは、半眼でホームズを睨む。

「馬鹿に馬鹿って言われた……」

本気で落ち込むホームズに一発入れようとするが何とか理性の力で堪えるレイア。

そんな二人を他所にローズは、イバルに質問をする。

「貴方って、二刀使いなの？」

「は？まあな」

突然の言葉に戸惑うもイバルは、頷く。

それを見たローズは、満足そうに頷くと腰にある刀を見せる。

「手合わせしない？私と」

「はあ?!何で俺がお前なんかと!」

嫌そうな顔をするイバルにローズは、言葉が続ける。

「ほら、二刀使いって中々いないのよ。私以外にあまり知らないし……だからね?」

「『ね?』じゃない!ごめんだ!そんな事!だいたい俺にはマクスウエルの巫女として

の仕事が……」

「イバル、私は大丈夫だ。存分にローズと手合わせするといい」

横で聞いていたミラにあっさりと言可を出させれる。

それを見るとローズは、満足そうに頷く。

「ほら、マクスウエル殿もこう言ってることだし、ね？」

そこで区切るとローズは、ニヤリと底意地の悪い笑みを浮かべる。

「まあ、負けるのが怖いなら、止めてあげてもいいけど？ マクスウエルの巫女殿？」

「上等だ!! 見てろ俺の強さにギャフンと言わせてやる! 付いて来い！」

ローズの挑発にあっさりに乗ったイバルは、ローズを連れてミラの社へと向かっていく。

「ギャフン？」

聞き覚えのない言葉にジュードが首を傾げる。

「気にしたら負けだよ、ジュード君」

ホームズがそう言うといバルがくるりと振り返る。

「ああ、ヌイグルミのガキ！」

突然呼ばれたエリーゼは、驚く。

「お前は、入れないぞ。十五歳未満は、入浴禁止なんだ」

「ええ！」

『差別すんなー!!』

「絶対入るなよ！」

そう言つて、最後にそう言い残すとイバルは、ローズを連れて行つた。

落ち込むエリーゼの肩をポンと叩くアルヴィン。

「まあ、気落とすなよ、エリーゼ……」

「何の為にここまで……」

「げ、元氣出して、エリーゼ」

ジュードは、励ましながらホームズの方を見る。

ホームズにも慰めて貰おうと思つたのだが……

「そっか、君は入れないのか……」

ニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべるホームズ。

「残念だつたねえ、代わりにおれが入つてたつぷり感想を聞かせてあげるよ」

とても楽しそうだ。

ジュードが隣にいるレイアに話しかける。

「あれ、絶対この前の鍋での事を根に持つてるよね」

「だね。あんな事ばかりやってるからモテないんだろうね」

ボソボソと話す幼馴染みコンビ。

ホームズの言葉にエリーゼは、むつと顔を膨らませるとティポを飛ばす。

ホームズは、ひらりとティポをかわす。

驚くエリーゼに、ホームズはドヤ顔で語る。

「ふ、甘いね、エリーゼ。一体何回ティポと闘っていると思ってるんだいっ?!」

しかし、語っている間に後ろから囁まれた。

全てを見ていたレイアは、半眼だ。

「……ホームズっていくつだっけ?」

「確か十八歳だった筈ですね」

ローエンは、淡々と返す。

「さて、精神年齢の低い男はほっというて……」

ミラはパンと手を叩く。

「入るか」

「そうだね」

そうやって一行は、温泉へと向かって行った。

「痛たたたた！ちよつ、取れない！禿げる！毛が消える！
ねえ、誰か取って！外して！」



「はあ……傷に染み渡る……」

ティポを引き剥がしたホームズは、のんびりと温泉に浸かっていた。

「五臓六腑に染み渡るって奴だね」

「随分とジジくさいですね、ジュードさん」

ジュードの言葉にローエンは、戸惑い気味だ。

「まあ、疲れを取るにはもってこいだな」

「ああ、やはり温泉はいいもんだな」

珍しくご機嫌なヨルがスイスイと温泉を泳いでいる。

「で、それはともかく……アルヴェイン、君は何をやってるんだい？」

ホームズは、そう言っつて壁の隙間を懸命探しているアルヴェインを見る。

「バカヤロウ！ ロマンの探求だ！」

「あ、覗きね」

「何で一発で分かるの？」

即時に理解したホームズにジュードは、呆れ顔だ。

「止めときたまえ、アルヴェイン」

ホームズは、そんなアルヴェインを止める。

珍しい年上の対応にジュードは、ホームズを少し尊敬する。

「地平線を見たっつてしようがないだろう」

「………なんの話？」

突然の事にジュードは、分からず頭を捻る。

「馬鹿、今あつちにはローズもエリーゼもないんだぞ！」

「アルヴェイン、おれが間違っつていた」

ホームズは、きりつと顔を引き締めてアルヴェインに続く。

ようやく何を言っつているのか理解したジュードは、汚物を見るような目でホームズとアルヴェインを見る。

どう見ても止まりそうにない。

そんな二人を見た後ジュードは、ため息を吐く。

「ローエン、ヨル……」

ジュードは、止めてもらおうと彼らの方を見るが、温泉を楽しんでいてそれどころではない。

「ま、ほっとけほっとけ」

「それに限ります」

ヨルは、欠伸を一つ。

「どうせ、直ぐに痛い目に合うんだから」

「アリーヴェデルチ！」

「ギャアアあああ!!」

ミラの詠唱と共に空を舞う、ホームズとアルヴィン。

どぼん、と派手な音を立てて二人は、温泉に叩き落された。

それにより舞い上がったお湯が時間差で雨のように降り注ぐ。

「マクスウェルに、その様な蛮行を働こうとは……」

壁越しで見えないはずなのに、般若の顔が何故か想像出来る。

「次はないと思え」

「…………ふぁーい」

お湯に浮かびながら、ホームズとアルヴィンは返事をする。

「自業自得です」

「な、ほつといて正解だったろ？」

「分かってたなら止めて上げればいいのに……」

ジュードは、ため息を一つ。

「ほら、二人とも後は大人しくしようね」

「それに限るねえ、ほらアルヴィンも」

「ああ」

そう言つて二人は、静かに温泉に浸かる。

しかし、ここで問題が生じる。

静かに入ると聞こえるのだ。

女湯の声が全部。



「やっぱり、大きいよね……いいなあ、羨ましい……」

「ん？ああ、これか？」

「他に何が……」

「羨ましい、か……しかし、大きければ大きいで大変なんだが」

「どうせ肩がこるとか言うんでしょ」

「何故分かった?!」

◇◇◇◇

「……彼女ら、聞こえてることに気づいてないよね？」

「……うん」

呆れ顔のホームズと若干顔の赤いジュード。

「精霊のまさまも随分と無防備なこって」

アルヴィンは、そう言つてニヤリと笑う。

「僕、のぼせそうだから出るね」

「馬鹿、入つてなよ！」

出ようとするジュードをホームズが止める。

「みなさん、お若いですね」

ホッホッホとローエンは、愉快そうに笑っている。

◇◇◇◇

「この温泉は、肩こりに効くな。心なしか身体が軽くなって来た」

「そう、よかったね……って、ミラ!!」

「何だ？」

「何だ、じゃないよ！縮んでない?!」



「なんか、向こう……大騒ぎだけど……」

「縮んでるとか、何とか……」

そう言ってホームズは、手を見る。

「ジュード君……」

「どうしたの？」

「おれの手ってこんなに小さかったけ？」

ホームズがそう言って見せる手は、子どもの手だった。

「な?!」

アルヴィンとジュードは、声を上げる。

そして、御多分に洩れず、ジュードも……

「僕も小さくなってる!!!」

「ちよっ……やべーぞ、この温泉！早く出るぞ！」

全員が慌てて風呂から上がった。



「さて、確かここね」

イバルとの手合わせを終えたローズは、テクテクと温泉宿に戻ってきた。

ローズは、場所を確認すると扉を開け固まる。

ロビーに入つてすぐに、ローエンとアルヴェインが目に入る。

「ローエン？」

「ええ、そうですよ」

「ローズ」

「気づかなかつた……なんか、若くなつた？」

「ローズ……」

そうローエンからシワが減り、髪が少し黒くなっているのだ。

「どうやら、この温泉には若返りの効果があるらしいぜ」

「ねえ、ローズ」

そう言つてちよいと手を振るアルヴィン……みたいな人物。

青年と少年の中間のような姿になっている。

「嘘！そんなに変わるものなの?！」

「……ローズつてば!」

「なんか、えらい若返つちまつてなあ……」

「へえー」

感心するローズ。

決して彼らの隣に視線を合わせないしかし……

「いいから、こつちをむきたまえ、ローズ!!げんじつをみたまえ!」

この言葉に動かされ、首を横に向ける。

そこには、気まずそうに目を逸らしたエリーゼと、

子供が三人いた。

それぞれ子供服に身を包んでいる。

「ええつと……どちら様？」

変な汗が流れるのを感じながら、尋ねるローズ。

「ジュードだよ」

小さな少年は、ジュードと名乗った。

よく見るとつり目が印象的だ。

黒い羽織ものをしている。

「ミラだ」

力強く小さな身体を凜として張る少女は、ミラと名乗る。いつもと違い普通の服に身を包んでいる。

「……レイアだよ」

少し落ち込んだ少女は、俯き加減に手を挙げ答える。

背中のひらひらは、健在だ。

「ホームズ」

碧い目を半眼にしてブスツとした表情で答える、ホームズと名乗る少年。着ているポンチョは、いつもより少し小さい。

「ツツコミきれるか————!!!」

ローズの絶叫が響き渡った。

温泉でパニック!

「で、なに? ようするに若返りの湯(ガチ)だったと……そういう事?」

「そうだ」

温泉宿の休憩所でローズ達は座っている。

それぞれの席には食事が置いてある。

ぱっと見は、親戚一同での食事会だ。

和やかに見える。

しかし、

「どうすんのよ……これ」

漂う空気は、お通夜そのものだ。

お子様ランチを呑気に食べている三人を見て深くため息を吐く。

「まあ、そう、きをおとさないでくれ、ローズ」

そう言いながら、目の前のローズの食事に手を伸ばす。

ローズは、それを叩いて止める。

「いた!? いたいけな、こどもになんてことするんだい?」

「貴方が、幼気だった事なんて一度もないわ」

「レイア、きいたかい?! ローズが、ひどいこといつてるんだけど!」

「まあ、ローズがただしね」

「ひていはしない」

「じゃなくて、はなしもどそうよ」

ジュードの言葉にもう一度現状と向き合う。

子供三人、どう考えてもナハティガルに挑むには、戦力不足。

「……ローエンは、そんなことなさそうね」

「ええ、身体が軽いくらいです」

そう言つてローエンは、黒くなった顎髭を触る。

「大体、十年ぐらいみなさん若返つていようですね……」

「あれ? 何でヨルは何も変わつてなかつたの?」

ローズが不思議そうに首を傾げる。

「今更変わるか。二千年以上生きてるんだぞ、俺は」

机の下に隠れながら呟くヨル。

一応猫の姿をしてる手前、食事処で堂々としていられない。

「ああ、成る程」

ローズは、納得してもう一度見たくもない現実を目を向ける。

子供三人が黙々とお子様ランチを頬張つてい……

「問題は、幾つかあるんだけど……貴方達似合い過ぎよ」

「ほめてくれて、どうも」

ホームズは、適当に返すとケチャップライスにスプーンを入れる。

「ローズ、イバルはどうした? あいつならなにかしつているだろう?」

「なんか、リスの人生相談されて山の中」

「あいつ、本当に使えないな」

ヨルの眩きが机の下から聞こえる。

そんな事を話している間に、ホームズ達は食事を終える。

それを見計らったかのように、コーヒーが並べられる。

皆はそれに手をつける。

「具体的に、どうやったら戻るのか考えましょう」

「そうだな」

ミラは、そう眩く。

すると、レイアが真っ先に手をあげる。

「おゆのせいどころなっただから、みずをかければいいんじゃない？」

「ばかもやすみやすみいいなよ」

ホームズは、半眼で返す。

「ふむ、ありだな」

「なわけないだろう！」

賛成しているミラに全力のツツコミを入れる。

何せ次の展開の予想が出来ないホームズではない。

「てなわけで、ホームズ、ためしにやってみろ」

「ほら、みるきたよ！ぜっりたいにくるとおもった!!だいたい、なんでいつもいつもおれ

なんだい!？」

ホームズは、こめかみをヒクつかせながら尋ねる。

「なんとなくだ」

「きみ、いいかげんにしたまえよ!! ぜったいやだ!」

ぎやあぎやあど喧嘩をする二人を見ていたエリーゼが首を傾げる。

「ところで、ホームズ? どうしてコーヒーに手をつけないんですか?」

その瞬間、ホームズの動きがピタリと止まり、全員から目をそらす。

「コーヒー……きらいなんだよ……」

基本的に苦い物が嫌いなホームズは、コーヒーが大の苦手だ。

事実、過去に吹き出したこともある。

「好き嫌いは、よくありませんよ、ホームズ」

エリーゼは、珍しくホームズに説教をする。

年齢と身長が逆転したのが効いているのだろう。偉くぐいぐい来る。

「いや、そうはいつでものめないものは、のめないし……」

渋るホームズの頭をがしつとローズが掴む。

「さて、好き嫌いがある子には、しつけが必要よね?」

「ちよ、いた! いた! たた! たた!」

「とりあえず、冷水から始めましょ」

「ばかいつてんじやないよ！」

ローズは、悪態を吐くホームズを外へと連れだす。

「ローエン、精霊術お願いね」

「了解しました。弱めでやらせてもらいますね」



「……………やっぱり無理だったか……………」

「あたりまえだろう!!」

全く姿が変わらないホームズは、びしょ濡れになった服をぎゅつと強く絞りながら声を荒げる。

「てきとうなかんがえで、てきとうにこうどうするんじゃないよ!!」

怒っているのは分かるのだが、子供姿で言われても大して迫力はない。

「つーか、わかりづらいだろうけど、すごいえづらだったからね!」

ホームズが、ずびしつとローエンに指を向ける。

アルヴィンは、隣で苦笑いをする。

「まあ、いい年こいた中年がガキに精霊術ぶつけてたからな……」

指摘されたローエンは、ホッホッホと笑っている。

ホームズは、思わず握りこぶしを固める。

そんなホームズの頭をエリーゼがタオルでゴシゴシとふく。

「……エリーゼ、きみなにやってるんだい?」

『年下の世話をするのは当たり前でしょ』

ティポの言葉にホームズは、タオルをむしり取る。

そして、怒りを押し殺した目で睨む。

「……エリーゼ……いいかげんにしたまえよ……ガキのくせに……」

「今のホームズが言うんですか……」

エリーゼは、呆れながらホームズ（ガキ）を見る。

もちろん怒っているのは分かる。

しかし、子供の姿の上に元々の垂れ目も相まって可愛らしいことこの上ない。

「きいてないだろ、きみ！そんなじゃね、ろくなやつにならないよー！」

「なんか、今ならホームズのどんな暴言でも許せる気がする……」

ローズは、可愛らしく地団駄をふんでいるホームズを見てそう言う。

「分かります。普段のホームズからは、想像も出来ません」

エリーゼもそれに同調する。

普段からホームズの精神年齢の低さに呆れることが多いが、今のホームズは、普段の精神年齢にびつたりだ。

「いやあ、子供のころはこの喋り口調にイライラしたけど、こっちの方が年上になっちゃえば、何てことないわね」

ローズは、うんうんと頷く。

「としようって……きみ、17さいだろ！なにいつてるんだい!!」

ホームズの言葉にも二人は動じない。

「少し生意気な感じがするだけです」

『背伸びしてる感じが可愛らしいー』

エリーゼもローズに同調する。

ホームズのこめかみに青筋が浮かぶ。

「んだと！このぼーか！ぼーか！」

ついにボキヤブラリーが消えたホームズは、単調な言葉を言い始める。

「おお、普段の私なら我慢の限界なのに……」

『寛容になれるよねー』

「まないた！ぺったんこ！ちへいせん！」

拳骨の音が二発響き渡った。



「エリーゼ」

「はい」

「とりあえず、頭に刺激を与えても治らなかつたわね」

「そうですね」

『二回も当てたのに効果なしだもんねー』

二人とぬいぐるみが話している傍でホームズは、頭から煙を出して倒れている。

「ホームズ、だいじょうぶ？」

「なんとかか……というかふたりともてかげんぬきだったんだけど……」
むくりと起き上がるホームズにレイアは、冷たい視線を送る。

その視線は、思わず背筋が凍傷になる程冷ややかだ。

「まあ、いまのは、ホームズがわるいとおもうけどね」

「ねえ、そのめはゆうじんにやるものじゃないとおもうんだけど……」

「わたしは、ホームズのともだちのまえに、おとめのみかただから」

「……ああ、そう」

げんなりとしながらホームズは、皆を見る。

相変わらず対策をみんなで考えている。

「こういうのは、どうかしら」

ローズが手を叩く。

「小さい子って苦いものが苦手でしょ」

ホームズは、ぴくりと耳を動かす。

「だからさ……」

次の言葉が予想出来たホームズは、耳を塞ぐ。

「苦いものを克服すればいいと思うのよ」

「名案……ですね」

ローズの提案にエリーゼが楽しそうに乗っかり、ちらりとホームズを見る。

「……ホームズ、呼ばれてるぞ」

「しらない、つーかおもいからおりておくれ」

ホームズは、頭の上にいるヨルに悪態を吐く。

そして、そのまま、そろそろと逃げようとする。

しかし、そんなホームズの手をがしつと掴み話さないミラ。

「……おんなのこに、てをにぎられるなんて、こーえーだなあー」

ホームズは、頬を引きつらさながら手を振りほどこうと力を入れる。

「かくほしたぞ、ローズ、エリーゼ」

「でかした」

ローズは、そう言うのとホームズを抱き上げる。

「はなせー！ー!!」

「ローエン」

「はい」

「もう、目的忘れてるよな、あいつら」

「……多分、きつと、恐らく、覚えていると思いますよ」

「説得力無いことこの上ないな」



「さあ、さあ、ホームズ寒かったでしょう？ぐいっと、どうぞ」

そんなホームズの机にあるのは、湯気の立った温かいコーヒーだ。

「……………コーヒーのかおりは、すきなんだよねえ……」

ホームズは、目の前の黒い液体から目をそらす。

当たり前だが、ブラックだ。砂糖もミルクも何にもない。

ホームズは、尚も勧めてくる二人に口を開く。

「このかおりには、リラックスこうかが、あつてココロにもいいんだよね。かあさんもしょうばいがいきづまつたときは、よくのんでいたし……そのおかげで、とりひきが、うまくいったときとのほうが、およかったんだよ。あと、コーヒーのいれかたにもコツがあるらしいね。そのコツをしってるかしらないかで、だいぶデキがちがうんだつて。このコーヒーは、それをちゃんとそれをおさえてるのかな？コツといえばさ、このコツつてゴゲンは、なんなんだろうね？コツコツやるからだつてどこかのキセルオトコは、

いってたけど、コツコツやらなくてもコツをつかんだら、できるようになったちやうよね？ だったら、どうもちがうとおもうんだけど、みんなは、どうおもう？ ああ、そうそう コーヒーついでにいうならコーヒーのおかしてオイシイよね。なんでだろう？ やっぱりかおりがきいてるのかなあ？ コーヒーのいいところは、あとは、しょーしゅーかな？ それがあるかないかでへやのにおいがだいぶちがうもんね、あとは……」

「御託はいいわ、簡潔に述べなさい」

「……コーヒー……のみたくないです」

ホームズは、さつきまでペラペラと動いていた口を止めてポツリとこぼす。

「却下」

しかし、ローズから告げられた答えは残酷だった。

「じゃあ、せめて、さとうか、ミルクだけでも……」

「却下」

「おに！ あくま！ ずんどう！」

「エリーゼ、このコーヒーの温度っていくつ？」

「のむ！のみます！のみますから、おれのあたまのうえで、コーヒーをかたむけないで！」

ホームズは、必死にそう言うのと嫌そうな顔をしながらコーヒーを全て飲んだ。

「にがい……」

顔を歪めながら全て飲んだホームズ。

当たり前だが、体に変化はない。

「……やっぱりか」

ローズは、そう言っつて次の手を考える。

「きみ、いま、やっぱりっつていったらう？」

「気のせいよ」

ホームズは、こめかみを引きつらせる。

ジュードは、成り行きをずっと見守っていたが、遂に口を開く。

「あのさ、おんさんのセイブンをしらべようよ」

ローズ達は一瞬何を言われているか分かっていなかったが、おおつと手を叩く。

代わりにジュードは、ため息を一つ。

「ぼくのわかるはんいで、しらべるから、だれかおんさんのおゆをとってきて」

ジュードの出したコップを真つ先に掴むホームズ。

「ふふふ……すつかり、わすれていた」

ホームズは、不敵な笑みを浮かべている。

「おれは、いま、こども！……ほーてきにおんなゆにはいれるぜ！」

「は……う？つて、待て待て待てまで！」

「だれがまつか！ばーか！」

ローズの制止も聞かずホームズは、走り出した。

「エリーゼ！」

「はい！」

二人も急いで駆け出した。

嵐の過ぎ去った光景を呆然と見つめるジュード達。

「……なにやっつてんだか……」



女湯まで来たホームズは、看板を乗り越えて入る。

それに続くように、ローズとエリーゼも後を追う。そして、最後に離れられないヨルが後を追う。

全ダツシユのホームズは、そのまま風呂場のドアを開ける。

しかし、そこにはだれもいなかった。

若干遅れたヨルは立ち止まって看板を読み上げる。

「《清掃中……………》」

ホームズは、誰もいない目の前の光景にため息を吐く。

「はあ。まあ、しかたないか……」

もう諦めてゆつくりとした足で風呂場に踏み出す。

「見つけた!!」

「待ちなさい! ホームズ!」

「うお!」

しかし、ホームズに安らぎを許さない二人が襲い来る。

ホームズは、思わず逃げようとして走ろうとする。

しかし、踏み出す筈の右足は、大きく宙を舞う。

そのままもんどり打ってコケ、洗面器の山に突っ込んだ。

「……滑るので気をつけてね☆

私は「ご飯を食べてます」か……頭の悪そうな文章だな……」
遠くから派手な音が響き渡った。



「そこでおとなしくしてなさい」

「はい……」

ローズは、そう言って温泉のお湯を汲むため湯船に歩みを進める。

倒れたホームズは、コップをローズに取りられて惨めに正座させられていた。エリーゼは、隣でホームズが足を崩さないよう見張っている。

「なんだ？結局滑ってコケたのか？」

遅れてやってきたヨルは、正座をしているホームズを呆れ顔で見ている。

「やっぱりって……わかってたならおしえておくれよ……」

「言う前に走り去つたろお前。ま、知つたところで教えなかつたがな」
意地の悪い顔でそういうヨルにホームズは、洗面器を投げつける。

かんつと音が鳴りヨルにヒットする。

「てめー……」

「ふん」

鼻で笑うホームズにヨルは洗面器を投げ返す。

放たれた洗面器は、吸い込まれるようにホームズの顔にヒットする。

「このやろう……」

そこからは、醜い応酬の合戦だった。

ローズは、頼まれたお湯を掬おうとするが音が気になる。

「あのね、ホームズ！もっと大人し……くっ!!」

ヨルが弾いたホームズから放たれた洗面器がローズの顔面を襲う。

空を舞う洗面器。

立ち上る湯柱。

ローズは、洗面器がぶつかった拍子に足を滑らせ湯船に、若返りの湯（ガチ）に落ちていった。



「なにしてんの、ローズ……」

「なんでしようね……」

子供の姿になったローズは、ジュードの言葉に顔を背ける。

背けた先には、笑いを堪えるホームズがいるのが若干、いや、かなり目障りだ。

ミラはそんなローズを見て、ふむと考え込む。

「はいったじかんにかぎらず、10ねんわかかえるのだな」

「よかつたわね、かしこくなつて」

ぶすつとした顔で返し今度は、ホームズのほつぺたをつねる。

「いたたたた！なにをするんだい!？」

「あなたのせいで、こうなつたのよどうしてくれるのよ!」

「べつにくびからしたと、はらからうえは、たいしてかわらないんだから、いいじやないか」

「……どうやら、ほんかくてきにいたいめにあいたいみたいね」

ローズは、殺気を込めてホームズの頬をつねる手を強める。

「いままでも、てかげんしてなかつただろう!!」

「いまさら、なにをいつてるんだい!」

「せっかく、せいちようしたのにぜんぶパー！どうしてくれんのよ！」

嘆くローズにホームズは、優しい顔で口を開く。

「ああ、だいじょーぶ。いまのきみもじゅーぶんすてきだよ」

思いがけずにホームズから飛び出た爆弾に思わずうつむくローズ。

「あ……ありがとう……」

そんなローズに周りが思わずニヤニヤと見つめ、次の言葉を待っていると

「……なんて、いうとおもつか！こんのクソたれめ!!」

ローズは、直ぐに顔を上げ、ホームズの顔面に一発食らわせ、高らかに告げる。

「そんなんで、てれるとおもつか！むしろさついがわいたわ！」

「いや、てれられたら、きみのことほんきでしんぱいするところだった」

「……あんしんして、いまのあなたのほうがじゆうぶんかわいいわ、ホームズちゃん？」

ホームズの額に青筋が立つ。

しかし、出来るだけ冷静さを保ちながらホームズは、返す。

「そうだね。へたすりゃ、きみよりかわいいもの、おんなのこのローズちゃん」

ローズは、ふつと軽く笑う。

ホームズもそれに答えるようにふつと笑う。

そして、二人はお互いに掴みかかる。

ついに、取っ組み合いの喧嘩が始まった。

座布団が飛び、埃が舞い上がる。

「だいたいね、さっきまで、おれをオモチャにしてただろう?! そんなこととして、じぶんだけぶじでいようなんて、そんなことできるわけないだろう! じごくじとくだよ! ばーか!」

「ばかがばかかっていうな! ばか!」

「ならきみも、ばかかっていわないほうがいいだろうね! ばか!」

「なんですって?!」

「きみのあたまがさえわたってってるのみたことないもの!」

「あなたにいわれたくないわ！ばか！」

「だったら、おれにそういわれないようにそのはいいろののーさいぼーをかつようせ
るんだね、ばか！」

「あーあ……」

醜く争う二人を見て、ジュードは、ため息を吐く。

「所で、ジュードさん成分の調査の結果は？」

そんなジュードにローエンが尋ねる。

「まあ、やつぱり、ぼくのしらないものだった……」

「どうすんだよ、優等生。俺のいまの身体、若いけど筋力が足りねーんだけど……」
結局この方法もダメだった。

ローエン以外この身体は、はっきり言ってハンデ以外の何者でもない。

八方ふさがりもいいところだ。

すると、ジュード達の元へ見覚えのある人影がやってくる。

「ここにいらっしゃいましたか!」

イバルだった。

相変わらずのハイテンションだ。

ヨルは、尻尾でイバルの足を縛り転ばせる。

『『ここにおられましたか!』じゃねーんだよ!ぎげんな!なんだこの温泉は!』

そう言つて小さくなったジュード、レイア、ミラに視線を向ける。

その中で佇むミラに睨まれたイバルは、なんとか起き上がる。

「ええつと……」

「はなせ、このおんせんはなんだ?」

イバルは、戸惑いながら説明をする。

「この温泉は、若返つた気分を堪能するものです。

時間にしておよそ十年。それ以上は、若返りません。

しかし、念のため、十二歳未満は立ち入り禁止にしているのです」

本来なら、九歳が危ないのだが、一応の安全策をイバルなりに嵩じていたのだろう。

だから、エリーゼは入ることができなかったのだ。

「ですので、旅に疲れたミラ様に童心に返つて休んでいただこうつと思ひまして……」

イバルの言葉にミラは頷く。

「なるほど。そのこころづかい、かんしゃする。しかし、それもありがたいのだが……」

ミラはそう言って醜い掴み合いしているホームズとローズに視線を向ける。

「それよりもどうやったら戻るんだ？」

ミラの質問にイバルは、普通に当たり前のように返す。

「時間が経てば勝手に戻りますよ。」

温泉の効果は、せいぜい三時間ぐらいです」

ミラ達の時が止まった。

「イバル……」

レイアは、呆れながらイバルを見る。

「もうちよつと、はやく知りたかったなあ……」
そう言って目を向ける。

そこには、お互いに頬をつねり、罵り合う二人がいた。

「どうすんのよ、アレ」

容姿通りの低レベルな喧嘩を繰り広げる二人を前にレイアは、大きいため息をついた。

「ま、ほっとけほっとけ」

「それに限ります」

ヨルとローエンは、そう返した。

一行は、それ従ってその場を後にした。

入れ替わり大騒動!!

「……なんか、リリアルオーブが妙だねえ……」

とある戦闘後ホームズは、不思議そうにリリアルオーブを見ながら首を傾げる。

「あ、ホームズも？ 僕も変なんだよね」

ホームズとジュードは、揃って首を傾げる。

「どうしたんだろ？」

「さてな」

ヨルは、そう言つて、くあつと欠伸を一つ。

「……まあ、いつか」

ホームズは、そう頷くとリリアルオーブを仕舞い、今晚の宿へと歩き出した。

後に、これがとんでも無く面倒な事を引き起こすのだが、彼らはまだ知らなかった。



翌朝。

「ん……もう朝かあ……」

ベッドから起き出すと、辺りをキョロキョロと見回す。

「アレ？ヨルがない……珍しいこともあるもんだねえ……」

そうやって眩くと腹をボリボリと書きながら、1人しかいない部屋から出る。

今回泊まった宿はベッドが一部屋に付き一つしかないため、それぞれがバラバラに泊まったのだ。

今日の朝食は、何かと考えていると、前からレイアが歩いてくる。

「……おはよう」

「なんだか、はつきりしない挨拶だなあ」

そして、廊下にある鏡が目に入る。

そこに映っていたのは、ホームズ・ヴォルマーノではない。

そこに映っていたのは……………

「ジュード!?!」

黒髪、琥珀色のつり目と、ホームズの特徴が全てないジュードが居た。

「ハアアアアアア!?何これ!!」

「ジュード、煩い!」

レイアの言葉を見殺して、ジュード（ホームズ）は、ダッシュで本来の自分の部屋に行った。

そして、扉を勢いよく開ける。

「ジュード!!」

しかし、そこには、誰もいなかった。

「まさか……」

ジュード（ホームズ）は、急いで食堂へと降りて行った。



「お、やっときた、寝坊助だねえ。普段の優等生とはおもえないわ、こりや」

アルヴェインは、呆れて溜息をついている。

そこには、ローズとレイアを除く全ての面子が居た。
そう、勿論ホームズもいる。

「君はまさか……」

ジュード（ホームズ）は、恐る恐る指を指す。

「……僕だよ、ジュード・マティスだよ」

先に現実を知った分ホームズ（ジュード）は、落ち着いていた。

「どうなつての!?!これ!?!」

「ヨルが説明してくれるよ」

ホームズ（ジュード）は、溜息を吐く。

話題を振られたヨルは、欠伸を一つする。

「二度手間だが、まあ、いいだろ……」

ヨルは、尻尾を揺らして話をする。

「簡単な話、お前らはリリアルオーブの不具合で……そのアレだ……ぷつ」

「おい、君今笑つたろう」

「入れ替わったんだ、中身がな」

「あんだって?」

信じられない、いや、信じたくないという顔をするジュード（ホームズ）。そんな、ジュード（ホームズ）に溜息を一つ吐いて説明を続ける。

「あのなあ……他に何て説明すんだよ。」

今のその状況、何か別の説明をつけられるか？」

ヨルの言葉にうつと言葉を詰まらせてしまい、ジュード（ホームズ）は、何も言えなくなる。

「……確か『不可能を消去して、残ったものが如何に奇妙な物であっても、それが真実となりえる』だったか？」

ますますグウの音も出ない。

ジュードは、諦めたように溜息を吐くと席に着いて朝食を食べ始めた。

「つーか、君、リアルオーブに詳しくあったんだね、知らなかったよ」

「当たり前だ。お前より何年長く生きてると思ってるんだ」

「殆ど封印されてた癖に何を言ってるんだか」

「知ってるか、猫の爪でも鼻フックとやらが出来るらしいぞ」

その言葉を合図にヨルは、爪を、ジュード（ホームズ）は、フォークを構える。

「やめて！それ、僕の身体だから!!」

雲行きの怪しくなった彼らをホームズ（ジュード）が必死に止める。

ホームズ（ジュード）の言葉にジュード（ホームズ）は、フォークをサラダに刺す。

「で、ローエン。このクソ猫の言ってることは本当なのかい？」

「……え、ええ。私も戦場で偶にそういう人間を見ました」

「なんだい、その容量を得ない返事は？」

ジュード（ホームズ）は、いかぶしむようにローエンを睨みつける。

「いや、ジュードさんの口からクソ猫なんて言葉が出るとは……」

『違和感たつぷりー』

「同じく……です」

ジュード（ホームズ）は、頬引きつらせると無言でサラダを口にほうばる。

「ふおれでふおうやったら……」

「飲み込んでから、喋れ。エセ優等生」

アルヴィンの言葉に不満気に眉をしかめると飲み込む。

「それで、どうやったら戻るんだい？」

「別に今日一日だけの話だ。明日の朝日が登れば普通に元通りだ」

ジュード（ホームズ）は、ポカンとした後安堵したように溜息を吐く。

「なんだ、そうだったのか……なら、大したことないじゃん！先に言っておくれよ」

テンションの上がったジュード（ホームズ）に代わりホームズ（ジュード）は、暗い

顔をする。

「ところで、唐突だが、今朝一番最初に会話したのは誰だ？」

ヨルの質問の意図が読めずホームズは、首を傾げる。

「……レイアだけ……それがどうしたんだい？」

「なら、レイアには、入れ替わりがバレないようにしろ」

「なんでだい？」

ますます不思議そうに首を傾げながら、紅茶に口を付けるジュード（ホームズ）。

「入れ替わった後、一番最初に会話した奴にこの事がバレると……」

「バレると?」

「一生元に戻らない」

ジュード（ホームズ）は、盛大に紅茶を吹き出す。

「はあっ?!なにそれ!どういうことだい!!」

「おい、俺の朝飯が紅茶まみれなんだが……」

アルヴィンは、こめかみを引きつらせながら、ジュード（ホームズ）に抗議する。
しかし、ジュード（ホームズ）は、それどころではない。

「言葉のまんまの意味だ」

「待った……」

ジュード（ホームズ）は、顎に手を当てて考える。

その話を聞くと一つの疑問に答えが出る。

すなわち、何故、ローズがこの場にいないのかということだ。

「まさか……ジュード、君が最初に言葉を交わしたのって……」

ホームズ（ジュード）は、目を逸らしながら、答える。

「……うん、ローズ」

ジュード（ホームズ）は、ホームズ（ジュード）の答えを聞くと頭をボリボリとかく。「つまり、レイアとローズ。この二人には入れ替わりの事はバレちゃいけないんだね」ジュード（ホームズ）は、それから思い出したように継ぎ足す。

「そう言えばヨルは？君は、おれから離れられないのかい？それとも、おれの皮を被ったジュードから離れられないのかい？」

「後者だ。俺は、ホームズの霊力野からマナを搾り取る契約をしてる。

つまり、ホームズの肉体の方に拘束力があるんだよ」

「なるへそ」

ジュード（ホームズ）は、ため息とともに現状を確認する。

「まあ、別にそれなら、大丈夫だろう。おれら二人は部屋にでもこもって、ワイ談でもしてると言っとけば女の子は、入ってこないだろう?」

ジュード（ホームズ）は、今現在出来ることを並べていく。
対して他の面子は、頬が引きつるのが止まらない。

「おい、ジュードの口からワイ談なんて言葉が飛び出たぞ」

「違和感ありまくりですね」

「……? ワイ談って何ですか……」

「前に本で読んだ。確か……」

「ミラー! 教えなくていいから!」

「……まあ、やるだけやってみたらどうだ」

「そうするよ。さ、ジュード! ワイ談だ!」

「はあ……やるしかないんだね」

自分の顔から聞きたくない言葉が連呼され、ホームズ（ジュード）の精神は大分すり減っていた。

もうどうにでもなれつという顔でジュード（ホームズ）に連れて行かれた。

アルヴィンは、二人が上がっていくのを見送ると、自分のがダメになった為ホームズの食べかけの朝食に手をつけた。

その後しばらくして、階段を下りる二つの足音が聞こえてきた。

ジュード（ホームズ）の作戦を伝えることになると考えただけで気が重くなる一同だった。



「……で、さつきから無言で考え込んでるんだけど、どうしたのホームズ?」

ホームズ(ジュード)は、ベッドに腰掛けながらジュード(ホームズ)に話しかける。
ジュード(ホームズ)は、組んでいた腕を解く。

「いやね、冷静に考えてみると何かこの作戦、無理があると思ってね」

「まあ、一日中、ワイ談をやるなんて事自体が無理だからね」

ホームズ(ジュード)は呆れ顔だ。

ジュード(ホームズ)は、頷く。

「それに少しぐらいは、何か話そうかと思っただけど……君乗ってきそうにないし……」

「当然だよ」

ホームズ(ジュード)の半眼にジュード(ホームズ)は肩をすくめると窓を指差す。

「そこ・こ・で!おれたちが部屋にいると思われてるうちにここから出ようと思うんだけ

ど……どう?」

「……まあ、そっちの方がいいね」

ホームズ（ジュード）の賛同を得ると、ジュード（ホームズ）は、窓の鍵を開けにか
かる。

その時、ドアノブの回る音がした。

その時、ジュード（ホームズ）は、思い出した。

鍵をかけ忘れたことに。

「ホームズ!!」

憤怒の表情のレイアとローズがなだれ込んできた。

驚いたジュード（ホームズ）は、身構えるが二人が襲いかかったのは……

ホームズ（ジュード）だった。



「上手くいくのかね……」

アルヴェインは、朝食を黙々食べながら、そう呟く。

「上手くいくわけないだろ」

ヨルは、バカにしたように言う。

「あいつの母親に言わせれば、あいつは女心というものが分かっていないらしい……」

「ああ、まあな」

「否定は、しない……です」

割りと側からその光景を見ていたアルヴェインと、自分もよく言われたエリーゼは納得する。

「つまりだ、女心の分からん阿保が、女心を利用した作戦を立てたんだ。上手くいくわ

けないだろ」



ヨルの予想通り作戦は失敗し、大騒ぎになっていた。

「あのね！男だからそんな話をするなどは、言わないけど、年下に何しよーもないこと
教え込もうとしてんのよー！」

「え、いや、あの」

ローズに襟首を締め上げられ苦しそうにホームズ（ジュード）は、ジュード（ホームズ）は、目を背ける。

（薄情者！）

「おまけに、エリーゼにまで変な言葉覚えさせて！」

これは、レイアだ。

男二人は知らなかったのだが、実はワイ談の事を教えたのはエリーゼだったのだ。勿論意味は知らない。

「レイア、この馬鹿は私がキツク叱っておくわ。貴方はジュードに言つて聞かせておきなさい」

「そうする、おいで、ジュード」

「え？」

「なんで、ホームズが返事するの！ジュードも変な納得してないで、こっちに来る！」
そう言つてレイアは、ジュード（ホームズ）を連れて行つた。

「貴方も来なさい！」

「痛い痛い!!」

時間差でホームズ（ジュード）も引つ張られていった。

ローズに耳を掴まれながら……

「……思ったよりも面倒な事になったぞ」

「……どうでしょう……」

「……俺もあいつがまさかここまで、大外れを当てるとは思わなかった……」

隠れて様子を伺っていたアルヴィン、エリーゼ、ヨルは、ホームズの立てた作戦の失敗加減に戦慄していた。

「まあ、アレだ。取り敢えず俺は、元つり目のガキの所に行ってるから」

そう言って、ヨルはホームズ（ジュード）の方へ歩いていった。



ヨルが付いて行かなかつた、こちら、ジュード（ホームズ）とレイア。

二人は近くの喫茶店にいた。

テーブル席に二人は、向かい合うように座っている。

ジュード（ホームズ）の方からは、カウンターがよく見える。

カウンターには、所狭しと道具が並べられている。

これでもジュード（ホームズ）は、行商人。そのカウンターに並べられている道具を見れば、一体どれだけ、ここがコーヒーに力を入れているのかが一目瞭然なのだ。

仕事にこだわる人間は、嫌いではないのだが、コーヒーが飲めないのジュード（ホームズ）には、あまり関係がない。

「まったく、ホームズにも困つたもんだよ」

ジュード（ホームズ）が、そんな思考に沈んでいると、レイアは、少し怒りながらメニューを開いた。

「そうだね」

白々しく言うジュード（ホームズ）。

（……ゴメン、ジュード。後で屋台のりんご飴奢るから）

ジュード（ホームズ）は、随分と勝手な等価交換を心の中で誓うと、レイアの方を向く。

「ところで、き……ゴホン、レイアどうしたんだい？こんな所に連れてきて？」
危うくいつもの癖で、『君』と言いかけて慌てて誤魔化し話を進める。

レイアは、面白そうにクスリと笑った後、口を開く。

『くだい』って、なんかホームズみたいだね」

その言葉に危うくジュード（ホームズ）は、手にしたメニューを落としそうになる。

「は、ははは、そ、そう?」

（動揺するな！落ち着け！まだ、バレた訳じゃないんだ！）

心の中でそう言い聞かせると、ホームズは深呼吸する。

「はあ、それにしても」

レイアは、ため息を吐く。

「何、どうしたの」

（よし！今の上手くいった）

ジュード（ホームズ）の仮想全世界が、今の演技力に拍手を送っていた。

「いや、ホームズもタイミングが悪いなど思ってる」

「タイミング？」

「そう、タイミング」

レイアは、そう言ってメニューを机に置く。

「今日はローズからの申し出だね、ホームズにプレゼントを上げようって思ってたんだよ。勿論サプライズだね」

（サップライイズウウー！！）

心の中で思わず叫ぶジュード（ホームズ）。

(最悪だ……こんなに聞かなきや良かったと思つた話は久々だ……)

ジュード(ホームズ)は、決死の精神力でこの絶望を押さえつけるとレイアに焦点を合わせる。

「ふーん。それで、何で、お……僕を呼んだの。まさか、ホームズから引き離す為だけつてわけじゃないでしょ」

「当然。ジュードにプレゼントの意見を聞こうと思つて。同じ男同士だし、ホームズとも年齢が近いしちよいどいいかな? つて」

「なるほど」

ジュード(ホームズ)は、うんうんと頷くとレイアと同じようにメニューを机に置く。

レイアは、少しジュード(ホームズ)から目をそらして手をもじもじと動かす。

「……も、もしかして、デートかと思つた?」

「まさか。すいませーん、注文お願いします」

レイアの答えにジュード(ホームズ)は、心底どうでも良さそうに返すと、自分の注文をする為店員を呼んだ。

レイアは、そのホームズの言葉にかちんときたようで、ムツとした顔のままケーキを三つ頼んでいた。

「飲み物頼まないと後で後悔すると思うけどね」

そういうと、ジュード（ホームズ）は、ケーキを二つに紅茶を注文した。

レイアは、素直にホームズ従って、紅茶を頼んだ。

「ジュードって、本当にそっけないよね」

「そう？」

（まあ、あの子結構そういう所あるよねえ……）

口では、そう言いつつレイアの意見に納得する。

「まあ、いいか……それでプレゼントの話なんだけど、計画はね」

（え？まだ続きあるの）

「まず、わたしがジュードの意見を参考にしてそれをローズに伝える。

そのの中からデザインとか、色とか、そう言うのをローズのセンスで選んでもらうの。

どう？中々粋な計らいでしょ！」

「本当だね」

（本当に聞きたくなかった……）

顔は笑って心で泣くジュード（ホームズ）。

「……と思つてたんだけど、どうして、ああも出鼻を見事に挫くのかな？」

レイアは、ため息を吐く。

ジュード（ホームズ）は、さあと適当に言いながら、何となくカウンターを見る。

そこには、帽子を被りサングラスをかけている大きめな男と小さな女の子がいた。髪を一つに縛りカバンを背負っている。

どうやら、いつの間にか来ていたようだ。

女の子の方はカウンター席に乘ろうとするのに必死でよじ登っている。

決して帽子の男の力は借りようとしなない。

(アレ、降りる方が苦勞しそうだなあ)

そんな事を考えながら、ジュード(ホームズ)は、暇つぶしにメニューに目を通す。

レイアは、文句を一頻り言った後お手洗いに席を立った。



「バレてない……ですよね？」

「堂々としてろつて。こう言うのは堂々としていた方がバレねーんだから」

そう言いながら、帽子の男と、長い髪の女の子、アルヴィンとエリーゼはカウンターでこそそそと喋っていた。

余りにも、ジュード（ホームズ）が華麗なるオンゴールを決めたので、心配三割、からかい七割で見に来たのだ。

「後は、ローエンお墨付きのこの盗聴機能のつけられた石を……」

レイアがお手洗いから帰ってくる。

アルヴィンは、音もなくそれをレイアに投げつける。

見事にくつつき、下準備は全て整った。

「よしー！」

成功の具合にアルヴィンは指をパチンとすると耳に石をはめる。

エリーゼもそれに習う。

「さてさて、どうなるやら……」

「多分ろくな事にならないと、思います」



「お、きてるね！注文したものが」

レイアは、喜んで席に着く。

ジュード（ホームズ）は、メニューを戻す。

「ちようどさつき来たところだよ」

「では、頂きますー！」

レイアは、ケーキをフォークで切って食べる。

そして口にもごもごと入れながら喋る。

「ふおれで」

「は？」

ジュード（ホームズ）が首を傾げるとレイアは無理やり飲み込む。

「思うんだけど、ホームズがモテるようになれば、色々変わるとおもうんだよね」

「は？」

更に首を傾げる。

◇
◇
◇

「……アルヴェイン」

「やばい雲行きだな……取り敢えず、エリーゼいつでもいけるように準備しとけ」

アルヴェインは、そう言ってコーヒーに口をつける。

そして盗聴石から聞こえてくる会話に耳を傾ける。

◇
◇
◇
◇

ホームズとローズ

「二人 人へ関係が中々変わらないのは、やっぱりホームズがモテないせいで、ヘローズのライバルがない事だと思うんだよね」

ジュード（ホームズ）は眉を潜めるが、自分の気にしていることなので真剣に考える。

（二人?）

心当たりにないジュード（ホームズ）は、必死に頭を悩ませ、レイアの質問に答える。

「二人つてのは、ホームズと、やっぱりあの子へジュード?」

レイアは、ホームズの言葉に頷く。

「そうだよ、その子へローズ」だよ」

（ジュードか……）

自分が今ジュードの姿だという事をすっかり忘れて、分かりづらい言い回しをしたため、検討違いの場所に着陸してしまった。

（レイアは、ジュードにもっとモテて欲しいのかな? まあ、それはジュードがいい男だつて証拠にもなるのか……）

「なるほど……でもさ、ホームズは、ともかくもう片方へジュードの方はモテそうなもんだけどね」

「まあ、可愛いしねへローズ」。モテても不思議じゃないと思うけど」

「うん……うん? 可愛い?」

自分がジュードだという事を思い出し、頷きかけて止める。

そして、自分が何かミスをした気がするのだが、思い出せない。

（まあ、思い出せないなら、たいしたことじゃないんだろうな）

「どうしたの？ジュード？」

「いや。まあ、褒められれば嬉しいよね」

「うん、ホームズもよく言ってるんだけどね」

（おれがいつそんなこと言った!!）

ジュード（ホームズ）は、思わずフォークを曲げそうになるが驚異の精神力で抑える。

男に可愛い何て絶対言いたくない。

「へ、へえ……それは知らなかった」

「いや、偶に面と向かって言う時もあるんだけど、全部嫌味っぽいんだよね」

（だから、いつ言ったんだよ!）

「あれだよ、ホームズも結構素直じゃないよね。」

多分モテない原因の一つだと思っただけ、どう思う？」

「本人いないのいい事に言いたい放題だね」

（この子、普段おれの事そんな風に思ってたのか）



「アルヴェイン……これって会話成立してるんですか？」

「……二人ともが違うボールを同時に投げて奇跡的にキャッチ出来てるって感じだな」

「……お腹痛くなってきました……」



「後さ、ホームズがモテない原因ってさ」

(すげえ、本人前にしてまだやるんだ……姿はジュードだからしかないんだけど……)

「性格のタチの悪さだよ。結構平気で人の事騙すもん。」

しかも何がタチ悪いって、騙す時ホームズ嘘つかないんだよね。

『全部君が勘違いしたんだろう』ってさ」

「……まあ、彼なりの誠意なんじゃない」

「人を騙すのに誠意もクソもないじゃん！」

そう言いながら、レイアはケーキをほうばる。

「色々と注意する様にはなっただけど、多分なにか騙されてるんだろうな」

レイアの話が少しそれた。

(……よし！そのまま、モテない話題に戻ってこないでくれ！)

「後さ、あの根にもつ性格どうにかした方がいいよね」

(話題が戻ったー！)

「……」

「それを直せば、もう少しホームズも違うと思うだけだな……」

「……そろそろ、プレゼントの話をしようか」

「それもそうだね……ってどうしたの？顔暗いよ？」

「…………まあ、色々？」

(…………天然って怖いわ)



「アルヴィン、戻りませんか…………」

「…………賛成。暇を潰すどころか心が潰されそうだった…………」

アルヴィンがエリーゼに手を貸しエリーゼは、安全に椅子から降りた。会計をすませると、深いため息と共に喫茶店を後にした。



「……えーっと、ローズ悪かったよ……許して」

こちらホームズ（ジュード）とローズは、宿から移動してペット連れ込みOKの料理屋にいた。

少しでも機嫌を直して貰おうと思ったのだが、ローズに変化はない。

ゴミを見るような目で先程からホームズ（ジュード）を見ている。

「（ヨル、アドバイスとかない？）」

「（あるわけないだろ、阿呆）」

「（ホームズ、いつもこんな状態のローズ相手にしてたのか……）」

「（より正確にいうなら、レイアだな）」

そんな会話をボソボソと続けていると、トントンと机を叩かれる。

ビクツとしてローズの方を見る。

「……今後は、年下に変な事教えないようにね」

「はい」

ホームズ（ジュード）は、頷く。

不本意ながら。

（ホームズの提案なのになあ……）

心の中で悪態を吐くと、ため息混じりにローズを見る。

「ところで、ローズ？朝ご飯食べたばかりなのにどうしてこんな所に？」

「……宿のご飯足りなくて……」

ローズは、顔を真っ赤にしてうつむく。

そして、どんとテーブルを叩く。

『女性用のメニューがありますのでどうぞこちらを』とかいってさ、パッと見華やかなんだけど、量が全然足りないのよ！

あんなんじや、力なんか出ないわ！

「……まあ、ローズ、武道家だもんね」

「てなわけで、食べます。」

スミマセーン、注文お願いします」

ローズは、店員を呼ぶ。

ホームズ（ジュード）が決まったとは一言も言っていないのだ。

店員が来ると着々と自分の注文をするローズ。

「……えっと、私は以上で。」

ほら、ホームズも」

「えっ!? えーっと、じゃあ、鮭茶漬で」

慌ててホームズ（ジュード）も注文する。

そして、注文を終えると話題が見つからず、降りる沈黙。

ホームズ（ジュード）ととしては、このまま黙って時間が過ぎた方がボロが出ずに済

むのでありがたいのだが……

（ど、どうしよう……）

ローズは、必死に話題を探していた。

（プレゼント……レイアに任せてはあるけど……一応私も聞いておいた方がいいのよね……）

そして、こっちの方が更にそれより重要だ。

（髪留めの事もあるし、ホームズにはプレゼントを上げたいんだけど……

いや、サプライズだし気づかれないようにしないと）

実は全てホームズが知っているのだが、ローズはそんな事を知る由も無い。

(せめて、平常心でなくては)

「ヨル、ローズがさつきからずっとおかしいんだけど……」

「(……気づかないふりしろ)」

ローズは、平常心でいるつもりなのだが、はたから見れば明らかに異常なのがわかる。

「……あ、あのさ」

「何？」

ローズは、顔を赤くしながら目をそらし尋ねる。

(欲しいものは？じゃあストレートすぎるわ……)

頭を何とか働かせて考える。

「何かいらぬものない？」

「は？」

出てきたのは、残念ながら何処まで微妙なセリフだった。

「えーつと……パナシアボトルの空容器」

「ゴミじゃない！」

ローズに見せたパナシアボトルをホームズ(ジュード)に投げつける。

かんつといい音がする。

(こんなのホームズとレイアは、いつも相手にしてるの!?)

パナシアボトルをぶつけられたでこを抑えながらホームズ(ジュード)は、何とかローズを見る。

ローズは、しまったという顔をしているところを見ると自分の方が悪いことはわかっているようだ。

「ああ、ええつと……」

言葉に詰まっていると、料理が届く。

机の上には、サンドイッチが3皿ほど並んでいた。

お皿には、ボリユームの有りそうなサンドイッチが三つずつあり、それぞれ二つのパンで挟んであったり、三つのパンだったり様々な種類がある。

対するホームズ(ジュード)の所に来たのは、至って普通の鮭茶漬だ。

「……ローズ、取り敢えず落ち着いて、食べようか」

「そ、そうね」

もそもそと二人は、食事をする。

ヨルは、そんな二人をじっと見つめるとローズの方を向く。

「おい、小ムスメ、俺にも寄越せ」

「ん？ああ、いいわよ。でも、サンドイッチなんて上手に食べられるの？くずれない？」

ヨルは、返事の代わりに鼻で笑うと尻尾をサンドイッチに巻きつけると口を開けモグモグと食べていく。

ローズは、サンドイッチを食べるともう一度ホームズ（ジュード）の方を見る。

「……あのさ、ホームズは何か欲しいものとかある？」

「え、どうしたの突然？」

「いいから!!」

さて、ホームズ（ジュード）は、完全に固まってしまった。

勿論、ジュード自身の欲しいものは、本で決まりなのだが、ホームズの欲しいものというと、特に心当たりがない。

（会話を伸ばして考えなきや!）

「もしかして、ぼ……おれにプレゼントでもくれるの……かい？」

ローズは、さっとホームズ（ジュード）は目をそらす。

「違うわ。貴方にあげるわけないじゃない」

「ああ、そうなんだ」

ホームズ（ジュード）は、そう言つて会話を続けながらなんと答えるのが、正解かを考える。

対するローズは、あつさり納得したホームズに焦りを隠せないでいた。

（いやいや、せめて悲しそうな顔するとかあるでしょ！何で眉一つ動かさ……あ、動いた、何かを閃いた顔してる）

「おれは、ね……」

「待った」

ローズは、もう計画を全て投げ捨てる覚悟を決める。

「プレゼントあげるわ。何が欲しい？」

「え……？」

ホームズ（ジュード）は、うーんと首をひねる。

「ローズに任せるよ」

「面倒くさがつてるわね……」

ローズは、半眼でじとつとホームズ（ジュード）を睨む。

ホームズ（ジュード）は、慌てることなく、にっこりと笑つて言った

「違うよ。ローズ（女の子）からのプレゼントだったら何でも嬉しいよ」

ホームズ（ジュード）のホームズを分析した一言により空気が凍りつく。

ヨルもローズも食いかけのサンドイッチを落とす。

ローズの顔がどんどん赤く染まっていく。

「ろ、ロ、ローズ?」

ホームズ（ジュード）が、恐る恐る様子を伺うとローズは、何かを喋っている。

「なに?」

「だ、だ、だったたら、これがプレゼントよ！ハイ！あーん！」

「ちよっ！その大ききのサンドイッチは、無理無理」

「うるっさい！やかましい！だまれっ！」

そう言つて、ホームズ（ジュード）の口に一口では決して入らないサンドイッチを無理矢理押し込みはじめた。

「ふ、ふ（お!!）」

ヨルに助けを求めるが、ヨルは明後日の方向を見ている。

因みに、ヨルにはホームズならどういふ対応をするかは、はつきりと分かっていたのだが……

（面白そうだから黙ってたたら、とんでもない地獄絵図になりやがった……）

鮭茶漬けがひっくり返りホームズ（ジュード）は、頭から被り、ローズは机の上に乗つて女子が食べるには、そして、一口で食べるには、デカイサンドイッチを年下の男に押し込んでゐる。

(えーっと、状況を整理すると……)

もう一度醜い人間達を見る。

(あのホームズが実はつり目のガキで、小ムスメは、それに気づいていなくて、で、ホームズの皮を被ったつり目のガキは、何とかホームズらしい事を言おうとして大事な言葉が抜けていた為、小ムスメがホームズの皮を被ったつり目のガキに照れていつもの事をホームズの皮を被ったつり目のガキにやってるわけか……)

「……………メンドクセ」

ヨルはぼつりと眩いた。



翌朝、めでたく戻った二人は机に突っ伏していた。

全ての事情を聞かされた、レイアとローズは、その二人に向かい合うように座っている。

女性二人は、気まずそうに机に突っ伏している男二人から目をそらしている。

因みにサプライズプレゼントは、延期になった。

中止ではないので、まあ望みはあるのだろう。

一番最初に口を開いたのは、ミラだった。

「どうだったんだ、二人とも？昨日は、それを聞く前に寝てしまったし、盗聴していたアルヴィンとエリーゼも気まずそうな顔をして話してくれなかったので、何があったのか、私は知らないのだが……」

ローズとレイアがアルヴィンを睨む。

「やっぱり、あれ君達だったのかあ……」

ホームズは、顔を上げて左側にいるエリーゼを見る。

エリーゼは、頷く。

「聞き耳は、よくないことだっということがよく分かりました」

「よかつたねえ、賢くなつて」

そう言った後、アルヴィンを睨む。

「助けてくれても良かったのに……」

「いや、会話が噛み合わなかつたら、止めに行こうとおもつただけだよ……なんか、会話が奇跡的に噛み合つててよ、止めるに止めらんなかつた……」

その言葉でレイアがそらしていた目をアルヴィンに合わせる。

「奇跡的に噛み合つてたつてどういう事？」

「別の人物の話してんのに、会話が成立してただろ？」

「待つて……」

レイアは、ギギギと古く錆びた扉が開く音を立てながら顔をホームズに向ける。

「……ホームズは、さ……誰だと思つて話してた？」

「え？ ジュード」

レイアは、それを聞いてあの時の会話を思い出す。

冷や汗が止まらない。

「レイア?」

ホームズは、不思議そうに首を傾げる。

「い、いや、会話の内容が酷くて……そうだね、ホームズはジュードに可愛いなんて言つてなかったもんね!アハハハハ」

ソロソロと席を立とうとする。

ホームズは、首を傾げる。

そして、ローズも同じ様に首を傾げ、隣にいるアルヴィンの方を向く。

「ねえ?何を話してたの?」

「あー……ん、まあ、実はよ……」

アルヴィンとしても、エリーゼとしても、胃痛の種はさっさと処理してしまいたかったので話す。

全てを聞いた時、ローズはいつの間にか隣にいないレイアに気づく。

宿の出入り口を見るとそこにいた。

「レイアツ!!!」

ダッシュで逃げるレイアとそれを顔を赤くしながら全力で追うローズ。

「朝から賑やかですね……」

女子二名が宿の外に消えるとローエンは、ホッホッと笑っている。

ホームズは、肩にいるヨルに半眼を向ける。

「なんだ?」

「レイアとローズに話すと戻れなくなるって言ってたけど、アレ……嘘だろう」
その言葉でジュードは、顔をかばつとあげる。

ヨルは目を丸くした後ニヤリと笑う。

「どうしてそう思う?」

「別に。4分の3は、勘」

そう言つてホームズは、トーストにバターを塗る。

「あの時おれは、体が入れ替わった事がヨルの言った通りか、ローエンに確認した。そして、ローエンはその通りだって言ってた」

「言ってたな」

「でもさ、おれ、その後のレイアとローズと会話しちゃいけないって条件は、確認を取ってないんだよ。だから、もしかして……って、思ったわけ」

ヨルはホームズズの言葉を聞くと面白そうに笑う。

「ククク……その通り、正解だ。全部嘘より、真実の中にちいっとばかし、嘘を入れておくと騙しやすいのはお約束だぜ」

「やれやれ、本当に君はいい性格してるよ。昨日の時点で気づきや良かった」

ホームズは、ため息を吐きながらそう言ってトーストに齧り付く。

ヒントがあったのに見抜けなかったというのは、ホームズの中では負けに相当する。

今回は、鍋の時と違い身体的ダメージは、ないので吐き出す息とともに水に流した。

ジュードは、ヨルに怒りたいのだが、全ては過ぎた事今更何を言っても、という奴だ。

「うーん……でもこの行き場のない感情何処にぶつけよう……」

ホームズは、そんなジュードを見るとトーストを皿に置く。

「さて、問題です。実はここにマスタードがあります」

そう言つて机の上のマスタードを指差す。

「まあ、ヨルに無理矢理ねじ込むというのも手ですが、それよりも、ローズの食卓をこ
覧下さい」

そう言つて指す誰もいないローズの食卓には、ホットドッグがあつた。

「えーつと、……僕は遠慮しておくよ」

「なら、おれが友人と昔馴染みにプレゼントしておこう」

心を傷つけられたり、体を傷つけられたりとホームズも地味に根に持っていた。

運のいいことにレイアは、サンドイッチだった。

ホームズは、トーストを食べながら、もくもくとマスタードをそれぞれの朝食にたっ
ぷりつと見えないように塗りつけた。

「ま、たまにはいいよね？」

ニヤリと笑うホームズを見ると、一行は、ため息を吐く。

『『いい性格してるよ()ます()』』

乙女達の疑問

「……ヨルってさ、謎よね」

「……………どうしたの、突然？」

ローズは、クリームコロッケパフェを食べながら、そんな事をポツリと呟いた。

対するレイアは、不思議そうに首を傾げる。

「自分の事を化け物って呼んだり、するけど、じゃあ具体的に何かって聞かれると困るじゃない？」

「言われてみれば、そうです」

エリーゼもケーキにフォークを入れながら頷く。

「その所は、ホームズも話題をそらすから多分教えてくれないでしょうね」

『なら、せめて、弱点ぐらい知りたいよねー』

「確かに……」

ティポとエリーゼは、こくりと頷く。

日頃失礼な口を利きかれ、ジャリやヌイグルミなど馬鹿にされまくっているエリーゼとしては、是非とも押さえておきたい部分だ。

「確か、強い光属性の精霊術が喰えないっていつてたから、それが弱点じゃないの？」
側で話を聞いていた、ジュードは、口を挟む。

すると、ローズ、レイア、エリーゼは、露骨に嫌そうな顔をする。

「……わかってないなあ、ジュードは」

「野暮を絵で描いたような回答ね」

「そういう話をしてるんじゃない……です」

『ジュードー！バホー！』

女性陣の余りの言い草にジュードは、こめかみを引きつらせると、自分の食事に戻る。

「僕、なんか、変な事を言ったかな？」

「いやあ、正しかったと思うぜ」

「間違つてはいませんよ」

アルヴィンとローエンは、そう言つて、フォローをする。

「……そう言えば、話題の中心のヨルは？」

「……確か、ミラと一緒にじゃないか？ほら、この前ホームズとミラが、賭け事してただろ？あの時の、負け分をホームズが払っているはずだ」

「ああ、あのイカサマがばれた奴」

ジュードは、ため息を吐く。

ホームズが調子に乗ってとんでも無く無茶なイカサマをやったのだが、側で見ているローズが気付いき、ミラに忠告したのだ。

ローズの姉がよくイカサマ勝負をやっていたので、それを見破るのは、慣れっこなのだ。

「……ホームズ、大丈夫かな？」

「財布が軽くなっているに、1000ガルド」

「財布が空になっているに、3000ガルド」

ジュードの心配にアルヴィンとローエンは、金を賭けていた。

「二人とも……」

「ホームズの弱点なら、それこそたくさん出てくるのにね」

レイアは、紅茶を一口飲みながらそう呟く。

「コーヒーが飲めない、料理が下手、あと船酔いをする……」

「頭は悪くないんだけど……アレね、頭のいい馬鹿つて奴ね」

「小さい子の泣き顔が苦手……です」

スラスラと出てくるホームズの弱点。

というか、欠点。

本人がここにいたら、一時間程口を利かないレベルだ。

「……じゃあ、今出たホームズの弱点をヨルに当てはめて考えてみようか」

レイアの提案にローズとエリーゼは、頷く。

「じゃあ、ヨルってコーヒー飲めるのかな？」

「……さあ？」

ローズは、首を傾げる。

「飲んでるところをまず、見たことないわ」

「じ、じゃあ、ヨルって料理が出来るんでしょうか？」

エリーゼの提案にローズとレイアは、ヨルがフライパンを尻尾で器用に掴み、何かを

炒めている姿を想像する。

「……ないわ」

「ないね」

レイアとローズは、こくりと頷く。

「じゃあ、これが弱点……」

エリーゼは、そう言っただんだと尻すぼみになって行く。

「……には、ならないですね……」

「……正直だから、何？って話よ」

ヨルが料理が出来ないなど、考えてみれば当たり前だ。

どうと言うことはない。

「じゃあ、船酔い！」

「そう言えばどうなのかしら？」

「しないですよ、ヨルは。」

船酔いで苦しんでるホームズの耳元でご飯食べてた……です」

ヨルのタチの悪さに改めて血の気が引くレイアとローズ。

「ホームズも大変だね」

「初めてホームズに同情したわ」

ローズとレイアは、うんうんと頷いている。

そして、注文したスコーンを口に運ぶ。

「後は……頭がいいかどうか、か……」

ローズは、スコーンをモグモグと頬張りながら、思索する。

「長く生きてるだけあって、知識は豊富だよ」

レイアは、クリームコロッケ。パフエを突きながらそう返す。

「それで、馬鹿かどうかって話だけど……」

ローズは、うーんと唸る。

言動を見る限り決して、馬鹿とは言えない。

「むしろ、ホームズへの突っ込み役だと思っ……です」

「ああ。まあ、あいつらは両方が突っ込みで、両方がボケみたいなものだからなあ

……」

そう言っつて、ローズは、更にスコーンを口に運ぶ。

「でも、馬鹿な的外れな事は、余り言わないわね」

「余りどころか、全く言わないよ」

レイアの言葉に三人は、この弱点案を破棄すると事にした。

「後、ホームズの苦手な事って何だけっけ？」

レイアは、最後の生クリームを食べながら、首を傾げる。

するとエリーゼがおずおずと手を挙げる。

「小さい子のめそめそだっつて言っつてました」

それを聞いた瞬間、レイアとローズは、食べ物と思わずポロつと落としてしまった。

「うっそ……そうなの？」

「エリーゼ、それホームズが言ってたの？」

「そうですよ。とうか、さつきも言った筈……です」

驚く二人にエリーゼは、呆れながらそう返す。

「……ホームズにそんな紳士的な一面があつたなんて……」

「エリーゼ、何か騙されてない？」

「……二人がホームズの事をどう思つてるかよく分かりました」

真剣な顔をする二人にエリーゼは、半眼で呆れる。

まあ、二人は、顔を蹴られたり、腹を蹴られたりとロクな目にあつていない。

仕方ないと言えば仕方ないのだが、そうは言つても昔馴染みと、友人の散々な言い草にエリーゼは、僅かばかりとは言え同情を禁じ得ない。

「ま、まあ、ホームズの事は放つておいて、それがヨルに当てはまるかつて問題だけど

……」

「ないね」

「ない……です」

『あり得ない』

「そうよね……」

満場一致だった。

まあ、分かりきった事ではある。

「どつちかかっていうと、小さい子が泣いてたら鬱陶しそうに顔を顰めるタイプよ」
因みにホームズもヨルとは違う意味で凄く嫌そうな顔をするのだが、これ以上ホームズの可哀想な評価を引き出さない為にもエリーゼは、黙っておく事にした。

そんな時間が過ぎるとローズは、伸びをする。

「にしても、ホームズにしろヨルにしろ、秘密が多いよね」

「まあ、ホームズはそれがデフォみたいなもんだし……」

「ヨルは……」

エリーゼは、そう言っ言葉を止める。

そうヨルは、別にはぐらかすことはない。

「そう言えば、余りこういう事を聞いてない気がする……」

半ばヨルは、謎なのが当たり前になっているのだ。

「……ねえ、もうさ、直接聞いてみない？」

レイアの提案にローズとエリーゼは、顔を引きつらせる。

その余りに思い切った手段に二人は、呆れている。

「いや、それは……」

「というか、教えてくれないでしょ……」

そんな事を話していると、ガチャという音がして扉が開かれる。

「帰ったぞ」

その声に振り向くと、そこにはホクホクとした顔のミラとげんなりとした顔で財布の中身を確認するホームズがいた。

「……おかえり」

そんなホームズを見てジュードは、同情の目で声を掛ける。

「……ただいま」

ホームズは、財布から顔を上げると泣きそうな顔で返事をする。

「それでホームズ、財布の中身は？」

アルヴィンの質問にホームズは、遠い目をする。

「料理と言う料理を奢らされて、全部なくなつた……」

「そうか……大変だつたな……」

「アルヴィン……」

アルヴィンのその真剣な物言いにホームズは、涙を滲ませる。

しみりとした物言いに今までにない真剣さをアルヴィンから感じる。

「つーわけで、ジイさん。賭けは、俺の勝ちだからな」
「ええ。悔しいですが、仕方ないですね」

その会話にホームズは、涙を引つ込め半眼で賭け金の配分をしている二人を無言で睨む。

「ホームズ……お疲れ」

哀れなホームズにローズが声をかける。

「ローズ……」

「まあ、自業自得だから、当然と言えば当然よね」

「……………」

ローズのその余りに冷たい物言いにホームズの頬を涙が一筋流れる。

イカサマをしてまで勝とうとしていたのだから当然と言えば当然である。

「ちよつとお茶目なイタズラじゃないか……」

「それを10回連続でやって金を巻き上げてれば、それは犯罪のレベルよ」
ホームズズのうじうじとした言い訳にローズは、絶対零度の視線を向ける。

「……決めた。おれ、今後デートをする機会があっても決して奢らない」
「決意の方向が明後日すぎるんだけど……」

レイアは、ため息を吐く。

それから、少し経って首を傾げる。

「……デート？」

「今後その機会があったらね」

ホームズズは、どうでも良さそうに言う。

(ミラと食事に行ったんだよね……これ、考えようによっちゃあ……)

レイアは、頭をフル回転させる。

「ある意味、デートだよね」

「デートってーか、デッドだったけどな」

「誰が上手い事言えって言ったんだい、ヨル」

ホームズズは、そう言っただかと椅子に座る。

その様子を見ていて、レイアは納得する。

「……ローズ」

「その目を止めなさい、レイア」

ローズは、レイアにピシヤリと言う。

レイアは、思わず肩を竦める。

その時、ヨルが目に入る。

「ああ！ヨル」

突然の大声にヨルは面倒くさそうに顔を顰める。

「……やかましいな……さつきから居ただろ」

「聞きたい事があったんだよ！」

「……なんだ？」

「ヨルの苦手な事ってなに？」

エリーゼとローズは、飲んでいる紅茶を吹き出した。

それは全てホームズに降りかかる。

「……君達」

ホームズは、ハンカチを出して拭く。

しかし、二人はホームズの文句を聞いている場合ではない。

(あの……馬鹿!)

ストレートに、そして馬鹿正直に尋ねるレイアにローズは、額を押さえる。

「なんだ、突然藪から棒に……」

レイアの質問に心底嫌そうな顔をするヨル。

「さっきまで、ヨルに弱点はないかって話をしてたんだよ」

「ほう」

「とりあえず、試しにホームズの弱点とか欠点とかを当てはめてみたんだけど、ヨルには当てはまらなかったんだよ」

「なるほど……」

「すっげえ……本人の前でそんなこと言うんだ」

呆れるのを通り越して、半ば感心するホームズ。

「そこで、ヨルに直接聞こうと思ったわけなんだよ」

「そこがおかしい」

ヨルは、我慢の限界だった。

黙ってレイアの言い分を聞いていたのだが、ついに我慢出来なくなつた。

「お前、頭おかしいんじゃないか」

「いいから、教えてよ」

「断る。何で自ら進んで自分の弱点を披露しなければならんのだ」

「いいじゃん別に………て、やっぱりあるんだね、弱点」

「前にも言つたろう、強い光属性の精霊術だ。アレは喰えないんだよ」

「そうじゃなくて、なんかこう……ホームズみたいに、コーヒーが飲めないとか、これが怖いとか、なんかあるでしょ」

「ない」

「嘘だ！絶対あるよ」

「どつから、その根拠が出て来るんだ！」

「勘」

「じゃあ、ハズレだな」

「そんなことないでしょ、ホームズなんか知らない？」

「えー……確か、この前ガイアス饅頭が怖いとか言つてなかったかい？」

「……ああ、言つたなそう言えば」

「……次に怖いのは、熱いお茶とか言うんじゃないよね？」

「……」

「凶星!?!」

「くそ！まさか、お前がこの話を知ってるとは……」

「ヨル！それどういう意味!？」

「言葉通りだ」

「カチンと来た……でも、誤魔化すってことは、やっぱりあるよね」

「ないと言ったららない」

「嘘つき！」

「やかましい！」

「絶対教えてもらうから！」

「ああ、もうよるな」

「教えてよ！減るもんじゃないし！」

「やだっつてんだろ！」

「いいでしょ！誰にも言わないから！ほら、わたしたちも友達になった事だし、秘密の共有ぐらい……」

「いっお前と友達になったんだよ！」

「つい最近。わたしのこと名前で呼ぶようになったじゃん」

「くっそ……こんな事になるんなら呼ぶんじゃないかった……」

「ローズ」

「なに？エリーゼ」

うんざりしているヨルとぐいぐい来るレイアの会話を眺めていたエリーゼは、ローズに話しかける。

「ヨルの苦手なモノ、少し分かった気がする……です」

「同感」

「ねえ、ヨルってば！」

「ええい、やかましい！いい加減黙れ！レイア」

間が遠なりや契りが薄い？

「さてと……」

ローズは、買い物袋の中を確認する。

「こんなもんかしらね」

とある街での買い出しの帰り道、ローズはジュードとミラとアルヴェインと共に歩いていた。

「まあ、グミもライフボトルもあつて困るもんじゃないしな」

「……特にホームズ」

アルヴェインがそう頷くとジュードは、げんなりした様に言う。

「どうでもいいけど、戦う度に死にかけるのやめて欲しいんだけど」

ローズは、ハアとため息を一つ吐く。

そんな事を話していると、先頭を歩いているジュードがピタリと歩みを止める。

「……ジュード？」

不思議そうにローズは、首を傾げる。

「……ねえ、こっちの道から帰らない？」

そう言つて脇の道をジュードが指をさす。

「何馬鹿なこと言つてるの。この道が一番の近道なのよ」
対するローズは、呆れながら歩みを進めようとする。

「いや、でも……」

「いいから、ほらー！」

ローズは、ジュードの顔の前で両手をパン！と叩く。

びっくりして思わず目を閉じたジュードの隙をついてジュードの前に出る。
するとそこには、

二人で買い物をしているレイアとホームズがいた。

「えーっ……とこれは……」

ローズは、目の前の光景に完全にフリーズする。

二人はニコニコとしながら、店に入っていく。

「随分と楽しそうだね〜」

アルヴェインは、ニマニマと笑いながら言う。

ローズは、振り返らないが耳をピクリと動かす。

「や、あの……アルヴェイン……」

ジュードは慌てる。

「ふむ、これが俗に言うアートの言う奴か」

ローズの耳がピクピクと動く。

「ミラー！」

ミラの言葉にジュードは、更に慌てる。

ジュードは、直ぐにローズの方を向く。

「……ほら、あのさ……ヨルもいるから、二人つきりつて事は無いと思うんだけど……」

「呼んだか？」

ひよっこりとジュードの足元からヨルが現れた。

「……………なんているの？」

「ああ……………」

ヨルはどうしてもよさそうに欠伸をすると更に言葉を繋ぐ。

「何でも、二人にして欲しいんだと」

ジュードは、空気が凍りつくのを感じた。

ローズは、先程からピクリとも動かない。

「……………よ」

「な、なに？」

「尾行よ！跡をつけるわ！」

ぐつという音が聞こえそうなほど拳を強く握ると、ローズはそう宣言した。

「と言うわけで、みんな行くわよ！」

「なんで、僕たちまで!？」

「決まってるじゃない。一人でこんなことをしていたら……」

「していたら？」

「ストーリーよ」

「……………そこは、嘘でも心細かいからって言って欲しかったよ……」

そのあまりに堂々とした物言いに、ジュードは、ため息を吐く。

予想していた可愛らしい感じの理由からはかけ離れている。

「ついでに言うなら、メンタルがもつ自信がないわ」

「言い方ツ!!」

「……………おたく、もう少し可愛げのある言い方をしなうぜ」

アルヴィンは、大きいため息を吐く。

ローズは、そんな二人の突っ込みを無視するとヨルに顔を向ける。

「さあ、ヨル。二人を捕捉、そして、バレないようにつけるわよ！」

「……………ハア……………まあ、俺も大して離れられないからいいけどよ……………」

こうして、言い出しつべのローズ、呆れるアルヴィンと、見つけてしまったことを後悔しているジュードと、何も状況が掴めていないミラと、巻き込まれたヨルは、ホームズとレイアのデートを尾行、もとい、観察することにした。



「で、ここなのね、別れた店は」

「そうだ」

ヨルに確認を取ったローズは、恐る恐るといふ感じに店の中を覗く。

動きは不審者。

行いは、ストーカー。

何か聞かれた場合、弁明のしようがない。

「……………アルヴェイン」

「言うな」

二人はそう言いながら、ローズの後をついて行く。

「ふむ、それにしても楽しそうだな」

ミラは、そう言つて二人を見る。

二人は確かに先程からとても楽しそうに食材の買い物をしている。

「……………そんな、あんなに楽しそうなのホームズを見るなんて…………」

ローズは、とても悲しそうに呟く。

落ち込むローズにジュードは、なんて声をかけていいか分からずオロオロしている。

「普通に記念日に出来るレベルよ」

「気持ち悪い！」

しかし、直ぐにかける言葉は見つかった。

「何考えてるの！そんな事でいちいち記念日作らないですよ！」

「当たり前でしょ！そんなんで、記念日をつくるわけないじゃない！物の例えよ！」

ローズは、ジュードの突っ込みに負けじと言い返す。

そして、更に言葉が続ける。

「私の前であんなに楽しそうなホームズを見るなんて、記念日にするぐらいレアって

ことよ!!」

「……そんなに珍しいの？」

ジュードは、引きつり笑いと共に尋ねる。

ローズは、コクリと頷いた。

アルヴィンは、ため息を吐く。

「……ま、七割程おたくが悪いんだがな」

「……うるっさいわね……分かってるわよ……それぐらい」

アルヴィンの評価にそう悪態で返すとローズは、更に観察を続ける。

相変わらずホームズは、たのしそうである。

同じようにレイアもとても楽しそうだ。

対するローズは、言葉もなくそんな二人を見ている。

「……………いいなあ……………」

ポツリと呟くローズに思わず目頭が熱くなるジュードとアルヴィン。

「ふむ……………もしかして、羨ましいのか？」

ようやく状況が飲み込めたミラが当たり前の事を聞く。

ローズは、ミラの言葉に顔を真っ赤にすると手を振りながら必死に否定する。

「ばばばばばばか言ってるんじゃないわよ！」

「違うのか？ てつきりホームズがデートしているのが羨ましいと思ったんだが……………」

「だから！ 違うって……………ん？」

ローズは、もう一度否定しようとして、首を傾げる。

「……………ホームズ『が』？」

ローズの不思議そうに小首を傾げる。

そんなローズにミラはうむと頷く。

「要はアレだろう？ 自分もデートがしたことが無いのに、ホームズがデートをしている……………これが気に食わないんだろう？」

トンチンカンに捻くれた解釈を披露するミラにローズは、空いた口が塞がらない。

「……何言ってるの？」

「違うのか？」

「ちつがうわよ！なに、人をさりげなく最悪な人間にしているのよ!!」

「ふむ……ならば、ホームズ『と』デートをしているレイアが羨ましいのか？」

「な———っ!!」

ストレートなミラの物言いに顔を真っ赤にする。

今まで誰もが理解はしていたが触れなかった事に何のためらなもなく切り込んだミラにジュードとアルヴェインは、血の気が引く。

「そんな訳ないでしょ!!か、か、勝手なこと言わないで!!」

「ふむならば……やはり、ホームズ『が』自分を差し置いてデートをしたことが気に食わないのだな？」

「え……いや……その」

ローズとしては、そんな性格の悪い理解は、やめて欲しいのだが、それを否定すれば確実に先ほどの話に戻る。

悪気がないところが誰よりもタチが悪い。

と言うことは？

「……そうです……」

ローズは、そう答えるしかなかった。

ミラは、満足そうに頷く。

そんな彼女達をジュードとアルヴィンは、離れた所から見ると。

「ねえ、アルヴィン」

「なに？」

「僕、もうホームズ関係でローズにミラを絡ませるの止めようと思うけど」
「名案だな」

そう言つて、二人はローズの側に近づく。

「……………ジュード、アルヴェイン……………」

「どうした？」

「メンタルがもたないので帰りたいです」

「……………そうだね」

「……………帰るか」

そう言つてアルヴェインは、ヨルの方を見る。

「つーわけだから、俺ら帰るわ」

「ああ、勝手にしろ」

ヨルに手を振ろうとしてアルヴェインは、もう一度ホームズとレイアのいる店を見る。

「ああ……なるほど」

アルヴィンは、最後に誰ともなくそう呟いた。



「ハア………」

ローズは、机に突っ伏したまま動かない。

「……やっぱり、楽しそうだったな」

そのまま思い出す様にポツリと呟く。

「何があつたんですか？」

「どんよりと沈んだ空気を宿に帰ってきてからずっと発しているローズを遠巻きに見ながら、ローエンがジュードに尋ねる。

「実は……………」

そう言つて、今日あつた事を説明する。

するとローエンは、何とも言えない顔をしてエリーゼをと顔をあわせる。

「……………どうしたの？」

ジュードは、不思議そうに尋ねる。

何と言おうか悩み、そしてローエンが口を開く。

「実はですね……………」

「ただいま」

ローエンが説明しようとした瞬間レイアとホームズ、それとヨルが買い物袋を持って帰ってくる。

その重々しい空気に二人はとても気まずそうにする。

「ナニコレ？」

「さ、さあ？」

二人はとても戸惑うが、ホームズは買い物袋を抱え直す。

「とりあえず……始めてるよ」

ホームズは、そう言っけてキッチンに消えていった。

取り残されたレイアは、ため息を一つ。

「で、何があったの？」

「……まあ、奥で暗い空気を出してるローズを見ればだいたい分かるけどね」
レイアは、ホームズが聞こえないのを確認して話を聞く事にした。



「つまり、わたしとホームズがデートをしてるって、そうおもったわけね、ジュード？」
「な、何で僕だけ？というか、怒ってる？」

「べつにいいー」

レイアは、頬を膨らませてそつぽを向く。

「それで、何が聞きたいの？」

顔を背けたままレイアは、尋ねる。

そんなレイアにジュードは、おずおずと尋ねる。

「二人はデートをしてた訳じゃ………ないんだよね、うん」

「次、その質問をしたら怒るよ」

「しかし、ヨルは言っていたぞ『二人にして欲しいと言われた』と」

今度は、ミラが尋ねる。

するとレイアは、きよんとする。

「そりゃあそうだよ。だってペット立ち入り禁止だったんだもん」

「ま、食料品を売つてるところだったからな」

アルヴィンは、二人の話を聞いてそう言う。

そう、アルヴィンは、先ほどヨルの方を振り返った時、扉に『ペット立ち入り禁止』の張り紙が貼つてあつたのを発見したのだ。

その時にだいたいのカラクリにも察しがついていた。

「じゃあ、何でそんな場所に二人で入つたのよ？」

ローズが机に顎を乗せながら尋ねる。

「何でって……」

そこで言葉を区切ってキッチンに目を向ける。

「ホームズが料理するからだよ」

「……」

悲劇を知っているミラとジュードは、この世の終わりのような顔をしている。

そんな二人に構わずレイアは、キッチンの方を振り返る。

「ホームズ！ちゃんとレシピ通りにね」

「わーってるよ」

「塩と砂糖間違えないでね」

「分かってるって」

「火加減間違えないでね」

「分かってるって!!」

二人はそう言い合う。

一頻り注意をすると一行の方を振り返る。

「……………てことだから」

そういったレイアに今度は、ジュードが詰め寄る。

「ちよつと、何考えてるの！ホームズに料理させるなんて！レイアもいたでしょ！あの時の現場に！」

「ま、まあ、言いたいことは分かるけど……………」

自信を持って大丈夫と言えないところがレイアの正直なところだ。

「待って、レイア。」

『二人』で買い物に行った理由を聞いてないわ」

ローズのしつこい追及にレイアは、何とも言えない顔で口ごもる。

「えーつと……大した理由じゃないんだけど……何て言おう……」

「私が説明する……です」

そう言つてエリーゼが口を開く。

勿論、大げさない理由などない。

実に下らない理由だ。



「あつー……しまった……」

レイアは、ジュードとアルヴィンとミラが買い物に出て行った後、自分も欲しいものがある事に気付いた。

しかし、頼むのを忘れてしまったのはしょうがない。

「仕方ないな……自分で買いに行くか……」

レイアは、そう言つて下に降りていく。

下に降りるとそこには、トランプをやっているローエンとエリーゼとホームズがいた。

どうやら、ババ抜きをやっていたようで、ローエンが一抜け、残りのワースト一位をかけた熾烈な争いをホームズとエリーゼが繰り広げていた。

「……………あのさ」

「何？」

「これから、買い物に行くんだけど……何か欲しいものある？」

「私は別にないですよ」

ローエンは、そう答える。

「私も……です」

そう言つてエリーゼは、ババではないカードを引く。

最後までババを持つていたのは、ホームズだった。

ホームズは、がつくりと肩を落とすとレイアの方を見る。

「……じゃあさ、食材買つてきてよ」

「食材?!」

「えーっと……トマトとマカロニ……。パスタつて言つてもいいのかな……後は……」

「待つて待つて待つて!」

レイアは、急いで止める。

「そんなに沢山人に買わせようつていうの?」

「だつて欲しいものある? つていうから」

ホームズは、ジョーカーのカードを見つめながらそう言う。

「だからつて限度があるでしょ!!」

ホームズの勝手な言い分に声を荒げるレイア。

「ホームズさん……そんなに欲しいんだつたら、一緒に行つてきたらどうですか?」

「ええ、めんどくさいなあ……」

「女の子をパシらせるなんて……」

『サイテー』

エリーゼとティポの言葉にホームズは、ため息を一つ吐く。

「分かったよ……行きやあいいでしょ」

「そんなことばっかりやってるから、モテないんだよ」

「君、おれにそれを言っとけばいいと思ってるだろう？」

レイアとホームズは、そう言っただけで宿から出て行った。



「……というわけです」

「すつげえ。本当に大した理由じゃない」

アルヴィンは、半ば感心しているし、ローズは、呆れかえって脱力している。

「どこまでいっても、ホームズは、ホームズね……」

ローズは、多少元気になりため息を吐く。

そして、ちらりとキッチンに目を向ける。

「それで、ホームズは何を作っているのよ」

「ミネストローネ」

その言葉を聞いた瞬間、ジュードとミラは、思いつきり顔をしかめる。

何せホームズのミネストローネには、いい思い出がない。

薄かったり、甘かったり、濃かったりと、何一つとして、まともなりや物は出てこな

かった。

「どごうなることやら……」

ジュードは、ノリノリで料理をするホームズを見てポツリとこぼした。



「さあ、出来たよ」

ホームズは、鍋を持ってきてローズの皿にミネストローネを注ぐ。

他の面子は手を出さない。

「どうぞ。食べて」

ローズは、自分にだけ盛られたミネストローネを見て眉間に皺を寄せる。

「あのさ、最後に一つ聞いていい？」

「どうぞ」

「何で、私だけに料理を作ったの？」

その質問に向かいに座ったホームズは、ピタリと止まる。

そして、頬をぼりぼりとかく。

「うーんと、あのさ……ほら、君に髪留めを上げたことがあつたらう？」

ローズは、髪留めを触る。

「うん。ちゃんとつけてるわよ」

「ああ、うん……でもさ、なんか怒らせちゃつたらう？」

「なんかじゃないでしょ」

ローズは、ギロリと睨む。

ホームズは、少し面食らつたが説明を続ける。

「まあ、だからさ、折角だしプレゼントを買い直そうと思つてね……髪留めだとそれを

見るたびに怒りを思い出すわけじゃん。

だったらさ、料理だったら食べたからお終いかな？って思ってた……」

「料理を買ってきてきてローズにあげようとしたから、私が止めたの」
レイアが横から口を挟む。

得てしてそう言うものは、手作りだと相場が決まっている。

買ってきてあげるといふのは、少し違う。

さらに言うなら、男女が逆でお菓子が相場だ。

「てなわけで、料理が苦手なホームズの為に私が色々を選んでいたわけ」

「じゃあ、あんなに楽しそうだったのは……」

「今回はうまく行きそうだと思っただけからに決まってるだろう？」

ホームズの答えにローズは、安堵と疲労のため息を吐く。

そんなローズを見てミラは口を開く。

「良かったな、ローズ。ホームズがデートをしていたわけではなくて」

「ちよっ！ミラ!!」

ローズは、顔を真っ赤にして詰め寄った後ホームズの方を向く。

不思議そうに首を傾げているホームズにローズは、更に慌てて何か言おうとするが何も出てこない。

「これで、お前が先を越されたというわけでは無さそうだな」

慌てるローズに構わず、ミラは爆弾をもう一つ放り込む。

「はっ。」

ホームズは、訳がわからないという風に首を傾げる。

「うむ。つまりな、ローズは、友人であるホームズが、自分より先にデートをした事に落ち込んでいたのだ。自分を差し置いて、デートを体験したお前に」

「……はあ!？」

ローズは、今度は顔を青くしてミラに詰め寄る。

このままでは、性格の悪い女、一直線だ。

何とか弁明しようとするが、上手い言葉が出てこない。

そんなローズを見てホームズは、頬を引きつらせる。

「いい性格してるよ……君」

ホームズは、ため息と共にローズを半眼で睨む。

（（あーあ……））

全てを知っているジュードとアルヴィンとヨルは心の中でため息を吐く。

いたたまれないローズは、キョロキョロと目を泳がせる。

ホームズは、パンと手を叩いてミネストローネを手で示す。

「まあ、それはそれ。取り敢えず食べておくれよ」

ホームズは、そう言つてミネストローネを勧める。

ミラとレイアとジュードは、固唾を飲んで見守る。

アルヴィン、エリーゼ、ローエンは、そこまで緊迫していない。

ローズは、泳がせていた目をミネストローネに戻すと勧められるままにスプーンですくって飲む。

「ふーん……良くできるんじゃない？」

ローズは、そう感想を漏らした。

何とも微妙な感想だがホームズは、目を輝かせる。

「まあ、私の方が上手いけど」

「君ね……」

ホームズは、瞳の輝きを消し去り半眼で睨む。

そんなホームズをローズは、面白そうにクスクスと笑うとにつこりとホームズに笑いかける。

「冗談よ。おいしいわ、ありがとう」

ローズにしては、物凄く素直なお礼に一同は、驚く。

ホームズも面食らったようで頬をぼりぼりも人差し指でかく。

「お、おう……良かった……よ」

ホームズの答えが聞こえているのかいないのか、ローズは、あつという間に飲み終わると次のスープを盛る。

「馬鹿に素直だな。変なものでも食ったのか？」

「ヨル……喧嘩売ってる？」

ホームズとヨルは罵り合う。

そんな二人に構わずローズは、鍋の中身を確認する。

「……それにしても多いわね……何人分作ったのよ」

「四人分」

「はあ?!私その他にも食べる人いるの?」

ローズは、少しがっかりしたように言う。

しかし、ホームズは首を横に振る。

「いや、その、ローズなら食べれるかなって思ったんだけど……いや、無理だったら、

おれが……」

食べるよつと言って鍋に手を触れた瞬間ローズの拳骨がホームズの頭に落ちた。

ホームズは、そのまま意識を飛ばす。

白目を剥いて机に突っ伏したホームズを見てアルヴィン達は、呆れながら見ていた。

「食事中の犬の食べ物に触れちゃいけないのよ」

「ローズ……その例えは、女の子としてどうなんだろ……」

呆れるレイアを無視してローズは、ぐびぐびとミネストローネを全て一人で飲んだ。

「ゴ馳走様」

そう言つて席を立つ。

「それじゃあ、私は先に部屋に戻つてるわ」

そう言つて自分の部屋へと歩いて行つた。

それを見送るとジュードは、不思議そうに首を傾げる。

「それにしても、ホームズは何で四人分も作つたんだろ？」

そんなジュードにヨルがある本を開いてみせる。

「何？」

「ここだ。ここを読んでみろ」

ジュードは、ヨルに言われて渋々読み始める。

「えーつと……なになに『ミネストローネの作り方（四人前）』つて……まさか……」

ジュードの脳裏に先ほどのホームズの料理風景が思い出される。

『ホームズ！ちゃんとレシピ通りにね』

『わーってるよ』

「そういう事だ。この馬鹿はレシピ通りに作ったんだよ」

そう四人分の作り方しか載ってなかったのでホームズは、一人分に計算するよりも『レシピ通り』を守るため、メニューをまんま採用する方を選んだのだ。

「……………ホームズ」

エリーゼは、呆れ顔だ。

この器用な様で不器用な男には、ため息しかでない。

「まあ、よっぽど美味しいモノを食べさせたかったんだよ」

レイアは、そうフォローして気付く。

「あのさ、ヨル、この前なんて言ったけ？確か十回に一回は、絶品ができる……だっけ？」

「そうだな」

ヨルは淡々とレイアの質問に答える。

「……………おい、少し残っているぞ」

そんな会話をしているとミラが鍋の底の方にミネストローネが皿の半分あるかないかの量が鍋底にあった。

「……………食べちゃおっか」

悪魔の囁きがレイアに聞こえる。

「そうだね」

「私も興味ある……です」

「私もいただきますよう」

「んじゃあ、おれも」

「私も是非」

「俺は、パス」

「ええ、何で？」

「腹一杯なんだよ……お前らがさつき散々物を食わせただろうが」
「ああ、そうだったね……」

こうして、ヨル以外の面子も悪魔の囁きに耳を傾けた。

みんなで小皿に上手に分けると、一気にぐびつと飲む。

そして、感想を一言。

「「「「あまつ!!!」」」」

ホームズのミネストローネは、信じられないぐらい甘かった。

「ホームズ……あんなに言ったのにまた、間違えてる……」

レイアは、そう言つて拳をワナワナと握る。

ホームズの料理の残念さがアルヴィン、ローエン、エリーゼにも知れ渡つた。
そんな中、エリーゼがポツリと呟く。

「でも、ローズ、これを四人分飲んだんですよね……」

一同は、血の気が引く。

このミネストローネとは、思えないものをローズは、在ろう事か四人分平らげただのだ。

「まさか……………」

レイアは、勢いよく扉を開け、走ってローズの部屋を開ける。

部屋の中には、ベッドに横になり、苦しそうに呻いているローズがいた。

「ローズ!!」

驚いたレイアの声にローズは、ゆっくりと寝返りを打つ。

「レイアあ……お腹痛いよお……痛いよお……苦しいよお……苦しいよお」

青白い顔をして、うーんうーんと苦しそうに呻くローズを見て、レイアはため息を吐く。

詰まる所、ホームズを気絶させたのも、残さず食べたのも、全部ホームズに料理が失敗したことを悟らせないためだったのだ。

あの素直の感想は、文字通り変な物を食べたせいだったようだ。

呻くローズを見てレイアは、考える。

ローズの為に、注意を払い過ぎて作りすぎたホームズ。
ホームズの為に自分の体調を犠牲にしたローズ。

「ハア……………」

レイアは、ため息を吐く

(こんの……不器用バカップル!!!)

レイアは、心の中で叫んだ。

怪談

『私綺麗?』とマスクを付けた女性が突然訪ねるんだよ。

唐突にそんな事を聞かれた、少年は戸惑ったよ、勿論。

まあ、突然で驚いたとはいえ、綺麗だったので、少年は、『うん』と頷いたそうだと、その女は、嬉しそうに頷いた後マスクに手をかけ、外したらしい。

『これでも?』

そう言つて現れた口は、マスクの下まで避けていたんだとさ」

ふつと息を吐く音と共に蠟燭の火が消え、そしてからんと何かが倒れる音鳴り響く。

「ぎゃあー!!」

「うわあ!!」

突然響き渡った声にレイアとエリーゼは、肩を抱き合つて叫んでいた。明かりをつけジュードは、呆れたように笑いながらアルヴィンを見る。

「中々、演出家だねアルヴィン」

「当然」

アルヴィンは、にっと笑つて白い歯を見せる。

「まあ、怖がつてくれればそれはそれで楽しいけどね」

ジュードもクスリと面白そうに笑う。

ようやく落ち着いたレイアは、キツとホームズを睨む。

「ホームズ!!」

「仕方ないだろう!!怖いんだもの!!というか、音を鳴らしたアルヴィンにも文句言つてよ!!」

早鐘を打つ心臓を押さえながらホームズは、喚く。

その言葉に二人は椅子の上に座っているアルヴィンを睨む。

そんな二人の視線にアルヴィンは、肩をすくめてみせる。

「盛り上がる演出を中々、盛り上がる演出だろ?」

そう、只今、ジュード、アルヴィン、レイア、エリーゼ、ホームズの面々は、怪談の真つ最中なのだ。

とある宿に泊まった時、何かしようとレイアの提案で始まった。

ここまでは、良かった。ここまでは。

失敗だったのは、ホームズとアルヴィンを引つ張り込んだことだ。

怪談のオチを邪魔するなんて無粋なことこそしないものの、怪談のオチを数倍にも上げるような演出を先程からアルヴィンが仕掛けてくるのだ。

そして、それにホームズが大声を上げてビビる。

このコンボのおかげで、想像以上のスリルを味わう羽目になり、エリーゼとレイアは、ホームズとアルヴィンを誘った事を後悔していた。

因みにジュードは、怪談に対してはとことんドライなので、大して気にしていない。

そんなジュードとアルヴィンを見るとレイアは、不満そうに口を尖らせる。

「というか、ホームズもなんか話してよ」

「……怖い話嫌いなんだよ」

『でも後話してないのホームズだけだよー!!このビビり』

「……………エリーゼ」

「ティポです、言ったのは」

エリーゼは、ティポの口を押さえながらそつぽを向く。

「というか、怖い話嫌いなのか？」

レイアの言葉にホームズは、フツと笑うと遠い目をする。

「母さんに散々聞かされたからねえ……………」

ホームズは、心底嫌そうにそう返しながら、首をひねって考える。

「あれとか、どう？夜中の12時になると一段増える階段とか」

「それは怪談話じゃなくて、階段話じゃん」

ジュードは、やれやれとため息を吐く。

「他って言うと、夜中に一人で演奏されるピアノとか、笑う理科室の骸骨とか、左から三番目のトイレにいる女の霊とか、そんな感じとか？」

「全部学校の怪談だね……………」というか、オチから喋っちゃだめじゃん」

色々と上げる微妙な話にレイアは、頬を引きつらせる。

ホームズは、そう言いながら考える。

「特に何も思いつかないし、ここらで終わりにしないかい？」

やる気のないホームズの発言に一同は、こめかみをピクリと動かす。

そして、テイポは、真っ直ぐホームズに噛み付いた。

「いだだだだだだ!!」

「くだらない事言つてないで話した方がいいよ、ホームズ」

「分かった！話す！話すから、離して!!」

ティポは、ずっとホームズから離れる。

とは言え、あまり思い出せない。

沈黙がしばらく続く。

「あ。あつたあつた」

ホームズは、蠟燭を持ち、明かりを消す。

ボウつと蠟燭の明かりでぼんやりと面々を映し出す。

雰囲気は出来上がった。

「これは、本当にあつた話だよ」

「ベタだね、その出だし。まあ、いいよ続けて」

レイアの言葉を見殺してホームズは、続ける。

「これは、知り合いの女の人から聞いたんだけど」

「はい、ダウト」

「それどういう意味だい？アルヴィン」

ホームズは、こめかみをピクリと動かし、睨みつける。

『いいから話せー!!』

ティポのその言葉に言い返そうとするが直ぐに思い直すともう一度話し始めた。



これは、その女性、仮にRさんとしておくか。

Rさんが、まだ学生をやっていた頃の話だ。

年の頃は大体十三歳。

ちようど、学校が一つ上上がった頃だね。

Rさんは、学校に入ると四人グループの一員になった。

ほら、女子って何個かグループごとに分かれるだろう？

えーつと、ほら、連れション仲間というか、ランチ仲間というか、なんかそんなの作るだろう？

それだよ。

Rさんは、そんな数あるグループの中の四人の仲良しグループに入ったんだ。

まあでも、しかしというか、やっぱりというか、そのグループの中でも合う合わないがあつてね、一人の女の子が若干ハブられていた。

その女の子は、まあ、目立たない女の子を言えばそれが丸々当てはまるような子だったんだよ。

その女の子がグループの輪から外れるとその子の悪口大会に花が咲く。

ところが、その女の子が戻ってくるといつものように仲良しの会話が続く。

帰るときもそのグループは、一緒だったんだけど、その女の子の家が一番学校に近くてね、いつも一番最初に別れ道をみんなと逆を選んでいたんだって。

その女の子と別れた瞬間、いつものように悪口大会が繰り広げられていたんだってさ。

そんな日々が続いたとある夕暮れの帰り道。

西の空は、怪しい色をした夕焼けが、空を染め上げ、まるでその後の出来事を暗示しているようだった。

その日もRさんの所属するとグループは、いつもの面子で帰っていた。

そしていつものように地味な女の子が真っ先に分かれ、その子が見えなくなった瞬間、またいつものようにその子の悪口に花が咲く。

そんな中、Rさんは、ふと、財布を落とした事に気が付いた。

そのお金で帰りにお菓子を買いおうと考えていたRさんは、グループの人等に先に帰っていきと伝えると急いで来た道を引き返した。

Rさんが財布を見つけて戻る途中、目当てのお菓子屋までたどり着いた。

帰っていいと言ったのに待っていてくれたのか、Rさんは、胸にグツとくるものを感じて駆け足で近づく。

するとそこには、地味な女の子を含めたいつものグループがいた。

三人は、とても楽しそうに話していた。

一体何の話をしているんだろう？

不思議に思っただけ、彼女達にバレないように、姿を隠しながら近づき、聞き耳を立てた。

三人は、Rさんの悪口で盛り上がっていた。



「ふっ」

ホームズは、蠟燭を吹き消した。

『ふっ』「じゃねーよ!! 誰がんな話しろっつた!!」

アルヴィンは、演出そつちのけで突っ込みを入れた。

そんなアルヴィンを他所にホームズは、澄まし顔だ。

「結局、怖いのは、幽霊でも化け物でもなく女子なんだよ」

「お前の価値観に興味はねーんだよ!」

「うるさいなあ、怖いんだってこの話。見たまえ、普段元気なレイアの静かな事
レイアは、斜め下をうつむいて頭に黒い影を作っている。

エリーゼも若干静かになっていた。
心当たりがないでもないようだ。

「いや、だからって……」

ジュードは、頬を引きつらせる。

「困みにネタばらししとくとRさんって、おれの母さんだよ」

「マジで実話かよ!!」

アルヴィンは、ハアとため息を一つ。

何だか肩落としている面子を見てホームズは、流石に決まり悪くなったようだ。

「じゃあ、もう一個話してあげるよ」

ホームズは、そう言うのと再び蠟燭に火をつける。

「君達は、並行世界って知ってるかい？」

「何それ？」

ジュードの言葉にホームズは、指を二本出す。

「もう一つの世界と言えればいいかな？」

文字通り並行している世界の事。分かりやすく言うなら、そうだなあ………」

ホームズは、そう言つてエリーゼに目を向ける。

「エリーゼ、手を上げておくれ」

突然の事にエリーゼは、驚いて右手を上げる。

「そうエリーゼは、今、右手を挙げたね。

でも、左手を挙げた可能性もあるだろう？」

そう言うのを並行世界つて思つてもらつて結構だよ」

ホームズは、そう言つてニヤリと笑う。

「そんな世界があると思うと怖くない？」

『別にー』

ティポは、ふよふよと浮かびながらそう答えた。

「どこも怖くないよ、ホームズ。なんだつたらさつきの話の方が倍くらい怖かったよ」

レイアとティポの言葉をホームズは、取り合わない。

蠟燭の火はまだ消えていない。

「エリーゼの挙げる手の選択肢は、二つ………右手か、左手か、そのどちらにも本物

や偽物はない」

「まあね」

ジュードは、頷く。

「もしあつたら?」

「え?」

ジュードは、戸惑うようにホームズを見る。

ホームズは、顔の表情を消してそう言葉を続けた。

「エリーゼの手を上げた手が右手の世界が本物だつていうなら、問題はない。

ただ、エリーゼの手を上げた手が左手の世界の方が本物だった場合は、おれ達が偽物になる」

信じて、過ごしてきた日々偽物と呼ばれたら、その可能性は、ホームズの声に込められ静かに響き渡る。

「別に本物偽物に意味はないだろ。なんせ結局何かデメリットがあるわけないから、いいんじゃないね?」

アルヴィンの言葉にホームズは、先ほどと同じ、言葉を続ける。

「もし、あつたら、偽物の世界はどうなるんだろうね？」



ホームズは、パンと手を打って話を終わらせた。

「どうだい？今回の話は？」

「三十点」

アルヴィンの辛口の評価にホームズは、思わずたじろぐ。

「え？なんかダメだったかい？」

「なんか、全体的につまらない」

点数を伝えたアルヴィンにジュードが発言する。

その言葉は、ホームズの胸を刺す。

「なんか、話が難しいよ」

「そっかあ、レイアには、難しいよねえ」

「暗に馬鹿にしてる」

「(暗に) 馬鹿にしてるつもりなんてないよ」

「その微妙な空白が気になるんだけど………と、というか、蝋燭消したら?」
レイアのジト目をホームズは、流し、エリーゼを見る。

「エリーゼは、分かったろう?」

「ええーつと………」

エリーゼは、小首を傾げながら、確認するように口を開く。

ホームズは、その間に蝋燭に手を伸ばす。今この部屋にある明かりは、蝋燭の灯火だけだ。

「つまり、ホームズの目が、碧いバージョンの世界もあるって事ですよね？」

「その通り」

ホームズは、黒い瞳を輝かせながら頷いた。



《分子世界破壊報告書》

深度140

偏差0・34

時歪の因子は、ホームズ・ヴォルマーノ。

時は一年前のジルニトラ戦前。

瞳が黒いというのが正史世界との違いのようだ。

瞳の色が黒い為、イジメに耐えたホームズ・ヴォルマーノは、本来の世界で
会うべきものに会っていない。

尚、今回もカナンの道標は、確認出来ず。

今後も搜索していききたい。

「こんなところか」

メツシユの入った青年は、報告書を書き上げ、うーんと伸びをする。

やはり、いくらこの世界とは別とはいえ、顔見知りに武器を突き立てるのは、あまり気分のいいものではない。

「疲れたな……………」

青年は、部屋の明かりを消し、布団に潜り込んだ。

部屋には、ようやく夜の帳降ろされた。